

【改稿中】 銀髪幼女にTS  
したニートな僕が過ご  
した1年間

あずももも

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「20万PVありがとうございますー」僕はある朝に銀髪幼女になった。TSして女の子になった。困ったけども身寄りもないし「独身男性の家に銀髪幼女がいる」って知られたら通報される。怖い。だから僕はこれまで通りに自堕落なニートを満喫するって決めた。時間だけはあるから女の子になった体を観察してみたり恥ずかしがってみたい、普段は男の格好をしてみたりときどき無理やり女の子の格好をさせられたり。肉体的には年上になったJCたちや「魔法さん」から追われてなんとか逃げ切りたかった。でも結局男には戻れなさそうだし、なにより世界は変わったらしい。——だから僕は幼女になってようやく、ひとりこもつてのニートを止めるって決めたんだ。

◆響ちゃんと同じことをぐるぐる考えるめんどくさい子です。癖が強い子です。適度に読み飛ばしてください。本編は2話〜50話(の1/2まで)、全部で111万文字あります。長いです。それ以外はお好みで雰囲気をお楽しみください。

◆3部作のうちの1部目。幼女な女の子になったTS初期の嬉し恥ずかしと年下(肉体的には年上)のヒロインたちを落とすまでと、ニートから脱ニート(働くとは言っていない)までの1年間を描きます。1部のお家を出るまでの物語としては完結。2部では響ちゃんの知らなかった色々を別の視点から追い直し、3部でTSの原因その他色々を終えて……幼女のままハーレムを築いてのTS百合なハッピーエンドを迎えます。特に生えたり大きくなったりしません。徹頭徹尾幼女です。

◆小説として書いた作品を2019年にやる夫スレでAA付きで投稿&同年に小説として「幼女にTSしたけどニートだし……どうしよう」のタイトルで投稿して完結↓22年12月〜23年8月にかけてなるべく元の形を維持しつつ大幅に改稿↓23年7月から漫画化。他小説サイト様へも投稿しています。

◆各話のブックマや★評価が励みです。ご感想はツイッターにくださると気が付けます。

◆セルフコミカライズ中。ツイッター&ニコニコで1Pずつ週2更新です。

表紙絵：

# 目次

75	3 話	現状把握と今後の模索	2 / 2	42
60	3 話	現状把握と今後の模索	1 / 2	23
	もなし			42
	2 話	姿が変わっても、頼れるものは、何		23
	もなし			11
	2 / 2			11
	1 話	「あの日」と「		1
	1 / 2			1
	1 話	「あの日」と「		1
	7 話	ハサミ事件	1 / 2	198
	2 / 2			174
	6 話	出会い未満の出会い	その 2	2
	2 / 2			153
	6 話	出会い未満の出会い	その 2	1
	2 / 2			136
	5 話	出会い未満の出会い	その 1	2
	2 / 2			116
	5 話	出会い未満の出会い	その 1	1
102	4 話	敵情視察と偽装工作	2 / 2	
88	4 話	敵情視察と偽装工作	1 / 2	

1	1	1	1	9	9	8	8	7
1	1	0	0	話	話	話	話	話
話	話	話	話	小さい者同士↓同志	小さい者同士↓同志	動揺に次ぐ動揺	動揺に次ぐ動揺	ハサミ事件
虎穴(車)	虎穴(車)	危機感と必要性	危機感と必要性					
2	1	2	1	2	2	2	1	2
/	/	/	/	/	/	/	/	/
3	3	2	2	2	2	2	2	2
367	349					251	230	214
3	1	3	1	1	1	401	1	1
	3		3	2	2	話	2	1
	話		話	話	話	苦手は、やはり、苦手	話	話
	取り戻した(非/否)日常		取り戻した(非/否)日常	443	422		苦手は、やはり、苦手	虎穴(車)
	3		2	3	3	2	3	3
	/		/	/	/	/	/	/
500	481		462					382

3	1 7話	学生たちの、夏休み(2)	1	673
3	1 6話	学生たちの、夏休み(1)	3	650
3	1 6話	学生たちの、夏休み(1)	2	634
3	1 6話	学生たちの、夏休み(1)	1	616
1 5話	困惑：「勘」	2/2	—	595
1 5話	困惑：「勘」	1/2	—	577
1 4話	春↓夏	3/3	—	554
1 4話	春↓夏	2/3	—	535
1 4話	春↓夏	1/3	—	515

1 9話	学生たちの、夏休み(4)	2	802
1 9話	学生たちの、夏休み(4)	1	781
1 8話	学生たちの、夏休み(3)	3	761
1 8話	学生たちの、夏休み(3)	2	741
1 8話	学生たちの、夏休み(3)	1	716
1 7話	学生たちの、夏休み(2)	3	694
1 7話	学生たちの、夏休み(2)	2	—

946	2 0 話	927	2 0 話	909	2 0 話	888	2 0 話	864	2 0 話	845	2 0 話	2
	下条 かがり (1)		下条 かがり (1)		下条 かがり (1)		下条 かがり (1)		下条 かがり (1)		下条 かがり (1)	—
	6 / 6		5 / 6		4 / 6		3 / 6		2 / 6		1 / 6	823

2 2 話	1 / 4	1032	2 1 話	1019	2 1 話	1004	2 1 話	986	2 1 話	967	2 1 話
夏休みの、 最後の日(まだ8月)	—	夏休みの、 最後の日(まだ8月)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)	関澤 ゆりか (1)
1048			5 / 5	4 / 5	3 / 5	2 / 5	1 / 5				

1200	2 4 話	疑念と助言と発覚	2 ／ 3	1186	2 4 話	疑念と助言と発覚	1 ／ 3	1169	2 3 話	山／山	4 ／ 4	1153	2 3 話	山／山	3 ／ 4	1138	2 3 話	山／山	2 ／ 4	1121	2 3 話	山／山	1 ／ 4	1102	4 ／ 4	—	2 2 話	夏休みの、最後の日（まだ8月）	3 ／ 4	1086	2 2 話	夏休みの、最後の日（まだ8月）	2 ／ 4	1066
------	-------------	----------	-------------	------	-------------	----------	-------------	------	-------------	-----	-------------	------	-------------	-----	-------------	------	-------------	-----	-------------	------	-------------	-----	-------------	------	-------------	---	-------------	-----------------	-------------	------	-------------	-----------------	-------------	------

1341	2 7 話	回想・又は過去・	2 ／ 4	1327	2 7 話	回想・又は過去・	1 ／ 4	1313	2 6 話	検証	3 ／ 3	1301	2 6 話	検証	2 ／ 3	1288	2 5 話	検証	1 ／ 3	1272	2 5 話	発覚と発覚	4 ／ 4	1259	2 5 話	発覚と発覚	3 ／ 4	1247	2 5 話	発覚と発覚	2 ／ 4	1234	2 5 話	発覚と発覚	1 ／ 4	1218	2 4 話	疑念と助言と発覚	3 ／ 3
------	-------------	----------	-------------	------	-------------	----------	-------------	------	-------------	----	-------------	------	-------------	----	-------------	------	-------------	----	-------------	------	-------------	-------	-------------	------	-------------	-------	-------------	------	-------------	-------	-------------	------	-------------	-------	-------------	------	-------------	----------	-------------



29話	「お姉ちゃん／姉さん」	3／3	1445	29話	「お姉ちゃん／姉さん」	2／3	1433	29話	「お姉ちゃん／姉さん」	1／3	1419	28話	「」	4／4	1406	28話	「」	3／4	1393	28話	「」	2／4	1380	28話	「」	1／4	1366	27話	回想・又は過去・	4／4	1351	27話	回想・又は過去・	3／4
1551	32話	クリスマスと騒動と	3／3	1538	32話	クリスマスと騒動と	2／3	1525	32話	クリスマスと騒動と	1／3	1512	31話	秋は何処に	2／2	1499	31話	秋は何処に	1／2	1484	30話	跳躍、あるいは冬眠	2／2	1473	30話	跳躍、あるいは冬眠	1／2	1459						

3 5 話	「ねこみみ病」	1 / 7		1665
4				1650
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	4	/	1639
4				1630
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	3	/	1630
4				1621
3 4 話	魔法と抵抗と「NEKO」	2	/	1621
4				1607
3 3 話	猫と17歳	4 / 4		1597
3 3 話	猫と17歳	3 / 4		1583
3 3 話	猫と17歳	2 / 4		1571
3 3 話	猫と17歳	1 / 4		1571

3 7 話	別れはもう少しあとで	1 / 2		1812
3 6 話	準備	6 / 6		1800
3 6 話	準備	5 / 6		1788
3 6 話	準備	4 / 6		1774
3 6 話	準備	3 / 6		1763
3 6 話	準備	2 / 6		1754
3 5 話	準備	1 / 6		1742
3 5 話	「ねこみみ病」	7 / 7		1728
3 5 話	「ねこみみ病」	6 / 7		1716
3 5 話	「ねこみみ病」	5 / 7		1702
3 5 話	「ねこみみ病」	4 / 7		1689
3 5 話	「ねこみみ病」	3 / 7		1680
3 5 話	「ねこみみ病」	2 / 7		1680

3 9 話	1923	3 9 話	1911	3 9 話	3 8 話	3 8 話	3 8 話	3 8 話	3 8 話	3 8 話	3 7 話	
去る年と、 来る年		去る年と、 来る年		去る年と、 来る年	「魔法」 5 / 5	「魔法」 4 / 5	「魔法」 3 / 5	「魔法」 2 / 5	「魔法」 1 / 5		別れはもう少しあとで	
3 / 6		2 / 6		1 / 6							2 / 2	1827
					1901	1890	1877	1865	1853	1839		

2017	4 0 話	2004	4 0 話	1991	4 0 話	1977	3 9 話	1961	3 9 話	1948	3 9 話	1935
	「男の子」 / 「女の子」		「男の子」 / 「女の子」		「男の子」 / 「女の子」		去る年と、 来る年		去る年と、 来る年		去る年と、 来る年	
	3 / 7		2 / 7		1 / 7		6 / 6		5 / 6		4 / 6	

4 1 話	2089	4 1 話	2079	4 1 話	2067	4 0 話	2054	4 0 話	2042	4 0 話	2029	4 0 話	2098
「勇気と告白と」		「勇気と告白と」		「勇気と告白と」		「男の子」／「女の子」		「男の子」／「女の子」		「男の子」／「女の子」		「男の子」／「女の子」	
3 ／ 5		2 ／ 5		1 ／ 5		7 ／ 7		6 ／ 7		5 ／ 7		4 ／ 7	
予定（不）調和	4 2 話	予定（不）調和	4 2 話	予定（不）調和	4 2 話	予定（不）調和	4 2 話	2115	4 1 話	2108	4 1 話	2108	4 1 話
4 ／ 6	予定されていた／いなかった	3 ／ 6	予定されていた／いなかった	2 ／ 6	予定されていた／いなかった	1 ／ 6	予定されていた／いなかった		「勇気と告白と」		「勇気と告白と」		「勇気と告白と」
2158		2149		2139		2128			5 ／ 5		4 ／ 5		

4 2 話	予定されていた／いなかった、			
予定(不)	調和	5 / 6	—	2167
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして			
1 / 6	—			2181
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして			
2 / 6	—			2192
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして			
3 / 6	—			2201
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして			
4 / 6	—			2212
4 3 話	「魔法」と「変異」と、そして			
5 / 6	—			2229
4 4 話	彼女からの、告白	1	1 / 4	

4 5 話	彼女からの、告白	2	3 / 7	2297
4 5 話	彼女からの、告白	2	2 / 7	2286
4 5 話	彼女からの、告白	2	1 / 7	2276
4 4 話	彼女からの、告白	1	4 / 4	2268
4 4 話	彼女からの、告白	1	3 / 4	2258
4 4 話	彼女からの、告白	1	2 / 4	2249
4 4 話	彼女からの、告白	1	2 / 4	2239

4 6 話	2356	4 6 話	2347	4 6 話	2337	4 6 話	2326	4 6 話	2317	4 5 話	2305	4 5 話
彼の、 準備		彼の、 準備		彼の、 準備		彼の、 準備		彼の、 準備		彼女からの、 告白		彼女からの、 告白
1		1		1		1		1		2		2
6 ／ 6		4 ／ 6		3 ／ 6		2 ／ 6		1 ／ 6		2 ／ 7		4 ／ 7

2434	4 8 話	2426	4 7 話	2414	4 7 話	2400	4 7 話	2389	4 7 話	2380	4 7 話	2367
	彼の、 準備		0 1 ／ 0 1 ↓ 0 6 ↓		0 1 ／ 0 1 ↓ 0 6 ↓		0 1 ／ 0 1 ↓ 0 6 ↓		0 1 ／ 0 1 ↓ 0 6 ↓		0 1 ／ 0 1 ↓ 0 6 ↓	
	2		6		6		6		6		6	
	1 ／ 7		6 ／ 6		5 ／ 6		3 ／ 6		2 ／ 6		1 ／ 6	



4 6.	X 3 話	偽乳と牛乳	1 / 2	2631
4 6.	X 2 話	警戒心	—	2616
4 6.	X 話	—	—	2603
5 0 話	少女にTSしたけど、ニートだ	—	—	2591
し……	どうしよう	1. 9 - 2 / 2	—	—
5 0 話	少女にTSしたけど、ニートだ	—	—	2578
し……	どうしよう	1. 1 - 1. 8 / 2	—	—
4 9 話	「あの日」と、彼が、「響」になつた日 / 春	10 / 10 (終)	—	2566

4 6.	X 6 話	教訓：女性を怒らせては	—	2706
4 6.	X 5 話	女装……	その 3	2695
4 6.	X 5 話	女装……	その 2	2683
4 6.	X 5 話	女装……	その 1	—
4 6.	X 4 話	女装？	その 2	—
4 6.	X 4 話	女装？	その 1	—
4 6.	X 3 話	偽乳と牛乳	2 / 2	2656
4 6.	X 3 話	偽乳と牛乳	—	2645
ならない	その 1	—	—	2715

26742664



4 6. X 6 話	教訓：女性を怒らせては	ならない	その 2	2725
4 6. X 6 話	教訓：女性を怒らせては	ならない	その 3	2735
4 6. X 7 話	犯罪か否か（少女たち視	点で）	その 1	2745
4 6. X 7 話	犯罪か否か（少女たち視	点で）	その 2	2756
4 6. X 7 話	犯罪か否か（少女たち視	点で）	その 3	2767
4 6. X 8 話	響    ロリ o r ショタ ??	その 1	2778	
4 6. X 8 話	響    ロリ o r ショタ ??	その 3	2835	
4 6. X 9 話	怒りと女性 / 女子	その 2	2825	
4 6. X 9 話	怒りと女性 / 女子	その 1	2815	
4 6. X 9 話	怒りと女性 / 女子	その 4	2804	
4 6. X 8 話	響    ロリ o r ショタ ??	その 3	2794	
4 6. X 8 話	響    ロリ o r ショタ ??	その 2	2787	
4 6. X 10 話	さよと本と感傷と	その 1	2844	

2891	4 6 .	の 3	X 1 3 話 (終)	苦手と好きと	2882
	4 6 .	の 2	X 1 2 話	さよと本と感傷と	2874
	4 6 .	の 2	X 1 1 話	さよと本と感傷と	2866
	4 6 .	の 1	X 1 1 話	さよと本と感傷と	2855
	4 6 .	の 1	X 1 0 話	さよと本と感傷と	そ

1話 「あの日」と「————」 1/2

僕は、長いあいだ……物心ついた頃からこの歳までに歩き慣れた町を。

今となつては僕自身のものだとしか感じない、この小さい体の低すぎる視界から見上げて歩きながら。

いつものように、けれど今日ばかりは少しだけ感傷的に考える。

だって、今日はここから————。



——学ばず、働かず、ただ生きているだけを生きる。

「ニート」って呼ばれる生き方は、言われているほど悪いものじゃないって僕は思う。

ゴミとかひどいことを言う人もたくさんいるけど、そんなのは気にしなくていいんだ。

だって、僕たちは毎日毎日をただ生きたいように生きているだけなんだからさ。

イメージと評判は底辺に近いけど、その生活は年を取っていけば「充実した老後」と

か「晴耕雨読」とか、時代が違えば「隠居」だったり、あるいはもう少し贅沢に過ごすなら「貴族の暮らし」って言っても過言ではないもののはずだし。

最近は一リーリータイアとか言っただけ目指す人も出てきたくらい。

時代が迫いついて来たんだ。

「高等遊民」……そんな言葉で呼ばれることもあつたらしいし。

他人に振り回されない生活っていうのはそんな感じにいいもので、あこがれで、理想。世間体さえなくて「働きたい人だけ働けばいいよ」っていう世界なら、きっと多くの人が選ぶはずの素敵な生活。

僕はそう思う。

誰かにひどい迷惑をかけない限りにはしても良いんじゃないかなって。

何かから逃げるんじゃないかって、本当にその人がそうしたいんだつたらって。

ちよつとの迷惑は……勘弁してもらおうとしてき。



……今日はあの日みたいに陽の光がほかほかと体を温めて、緑の香りがして、気持ち

いい風が吹いて、とても気持ちいい——春の穏やかな日。

小さくなったからなのか体質なのか前に比べると冷えやすくなった体も、この天気とあの子にもらったマフラーとでちょうどいい感じに温められている。

ふだんは青白い印象の今の僕の顔も、きつとほのかに色づいているはず。

ぼんやりと、元の体での今までのことと、今の体での今までのこと……そしてこれから先のことを考えて思い出しているうちに、いつの間にか家の前まで来ていた。

……………早いな。

本当に、時間が過ぎるのは、早い。

いざとなると本当に時間が過ぎるのが、早い。

十数分の距離があつという間に感じてしまう。

きつといつも通り、半分以上はまた思考に沈んでいたんだろうけど。

……そんなのは二トトをしていたこの数年でしつかりと味わってきたことだ。



「二トト」の毎日の朝は早い。

目覚ましを使わないから多少前後はするけど、目が覚めて起きるのは、世間が起きる

のと同じくらいの時間。

身支度を調えたらジョギングで体に少しだけの負荷をかけ、帰ってきたらシャワーを浴びてテレビを見ながら朝食を取って、ふつうの人と同じような朝を過ごす。

生活リズムを安定させて世捨て人になりすぎるのを避けて、ふつうの人の精神状態を偽装するために。



前とは違って息を吸って、腕を高く上げないと開け閉めすらできないドアを開けて、ずっと住み続けた僕の家へ——最後に足を踏み入れてみる。

外の明るさから一転して真っ暗。

暗い玄関からの廊下に目が慣れてくると、ほとんど物が何もなくなった……心なしか寂しい光景が見えてくる。

少し前からどこかよそよそしさを感じさせるようになった、僕が生まれてからずっと住んできた家。

いなくなつた父さんと母さんとの記憶がこびりついている家。

今となつてはどこか他人の家のような感じさえ受けてしまう。



家事を済ませたら、昼までは読書をすることが多い。

それも趣味の読書ではなく、新書だったり、外国語だったり学術的な本だったり、硬い本を選ぶようにしている。

なるべく。

いくらニートをしているといっても、なにも新しいものを頭に入れない生活を続けていると、だんだんと知識が追いつかなくなってくる。

頭が凝り固まるっていうか、気がつくとも知識が数年前からアップデートされていなかったりして、ふとしたときにびっくりする。

そういう意味ではSNSは、見る専だったけど便利なツールだな。

特に友だちって言うのが皆無だからこそ気軽に見ることができると。

……それに、頭に負荷を全くかけない生活を長期間続けていると、頭の回転が自覚できくらいい落ちる……っていうのを経験したこともあるな。

アルコールや不規則な生活と合わせると、自覚するのにも時間がかかるくらいには酷い有様になる。

お酒は止められないし止めたくないから、それ以外のところでなんとかしないと。

学生時代には、人より少しだけ頭の回転が速いという自負を持っていた僕にとって、信じられなかったくらいにひどくなつてからががんばったんだ。

肉体とは違つて脳みそはただ維持するだけではだめらしい。

いや、しばらく引きこもつたりしたあとの体力の衰えとか声が出ないとかと同じなのかもしれないな。

だつて、この幼い体でもそうなるんだから。



……通知、こんなにたくさん。

歩いているあいだわざと見ないようにしていたスマホ。

今の僕のちっちゃな手には大きいそのの通知欄に何人もの会話が最初の行だけ映っている。

別れてきた「友人」からのそれらは、きつと長いんだろう。

まあ後でいいんだけど、かんたんなものなら返しておこう。

またいつできなくなるか分からないんだから。



この1年で……10年近いブランクを経て、たったの1年で増えた人たちから来るメッセージへ、返事を返していく。

いつも通りに簡潔に、でも、ていねいに。

◇◇◇

午前に知的好奇心を満たしつつ本を読んだあとは、お昼。

お昼は外に出る日もあるけどたいていは家で食べる。

インスタントで済ませることは少なく、そのときの気分で簡単だったり凝ったりしたものをやることにしている。

もちろん節約もあるけど、ゆっくりとだけど料理のレパートリーを増やして少しでも昨日より進む感覚を得たいのと、薄目の味付けが好きなきなこともある。

——ちなみにあの日は、たしか—— だったはずだ。

……たぶん。

僕の記憶はあてにならないけど、たぶん、きつと。

◇◇◇

午後は趣味の時間。

流行りの本を読んだり映画やドラマを見たり、ゲームをしたり、アニメやマンガを見たり……何をするかは全く決めないでそのときに熱中していることをする。

一時期は現実逃避の手段としてこうした娯楽にのめり込んでいたけど、今ではあくまで好きなことをすることを意識している。

「好きだからする」のは大事。

「好き」が分からないほど悲しい時間はないもんな。

特に悠久の時間を孤独に過ごすニートには必要なことだって思う。

——今思えば、このおかげで健康を維持できたけど、このせいで安定してしまったのかもしれないから諸刃の剣なんだろう。

けど、趣味が高じてって言うのは何度となく体験してきたから無駄じゃないはずだ。



夕方になってきたら1、2時間の散歩だ。

この散歩が、僕が長年ニートをしていてもまずまず健康でいられた一番の理由だった

思ってる。

適度に頭を空っぽにして適度に疲れるというのが心身にとつていちばん良い……つていうのを何かの本で読んで試してみたら、もつと前に引きこもつていたときによくあつた、もやもやした感情とか動悸とか不眠などとは無縁になつたから。

やつぱり人も動物、動かなきゃダメなんだろうな。

たとえ幼い子供になつちやつたとしても、それはきつと同じはず。



片づけ切つて物の少ない居間や台所を見ながら、とんとんと軽い足音で廊下を歩いて洗面所へたどり着いた僕は、すっかり慣れた手つきでパーツは多いけど脱ぐのは楽な、女の子……女児向けか、の服をしゆるしゆると解いていく。

男のときは決まり切つた組み合わせだけだつたけど、今はもう、そうじゃない。

下着を解いて初めてわかる、かすかだけど男じゃないって分かる胸のあたり……いや、この時期の子なら体脂肪で誤差なんだし胸らしくなつてないのは当然なんだろうけど……と、なくなつてからずいぶん経つた、さびしい股のあいだ。

ふだんは服装でいくらかはごまかせても、こうして裸になると……どう見ても、元成

人男性な僕からすると「幼女」にしか見えない。

今だって口を開かなければ、初対面の人からはそういう扱いだし。

この体になってからは中性的だって言われるし、髪の毛さえもう少し短くしてタオルで隠したら、男湯女湯どちらでも気づかれずに入れるだろうし。

隠さないで男湯に行っても父親か誰かと来ているだけだと思われる程度だろうな。

……まあ、目立つことはまちがいないから行かないけど。

それにしても……この体型、いくら食べても結局は何も変わらなかったのが少し悲しい。

どうせ女の子になるんだっいたらちよつとでも胸の膨らみがほしかった気がする。

けど、やっぱり僕なんだ。

無くて良かったんだろう。

意気地のない僕にはちよつと良い体なんだ。

鏡の前の裸の幼女は、そんな目をしていた。

## 1話 「あの日」と「—————」 2/2



——歩き疲れたくらいに帰って来て溜めておいたお湯に浸かって汗を流す。

いろいろな理由で、シャワーよりもお風呂の方がいいらしいし気持ちいい。

肌の汚れや体臭が取れるとか芯から温まるとかで、運動と同じように心拍が適度に上がってぼーっとできるのも良いらしいし。

かといって朝晩と入るのはやりすぎで、湯船に浸かるのは1回だけにした方がいいらしいとか。

とにかく、そういうものらしい。

シャワーだけって言うのは物足りないし、朝晩入るのはよつぽど寒いとか温泉にいるときくらいだし、入らないなんてのは気持ち悪いし。

そういうものなんだ。

体が小さすぎるせいで大きすぎる、この湯船も見納め。

サイズの気を抜くとすぐに浮いちゃうのが玉にキズ。

だつて子供だもんなあ。

前は小さいって感じたけど今は大きすぎるし。

同じように広いお風呂場。

天井がとつても高く感じる。

初めのころは他人の体だからって感じてお風呂場では違和感も申し訳なさも気恥ずかしさもあつたつけ。

もう慣れ切つちやつたけど。

でも……欠けてテープで補強しただけのタイルの跡がそのままなのが悲しい気がする。

まあ直すにしても人を入れないといけないしな。

この見た目じゃ誰も家に呼べないし。

なによりただ面倒なだけだったし。

うん。

あとは、誰かに任せちゃおう。

ぜんぶ任せるんだ、これくらいはいいよね。



「……いふっ」

声って出さないのでも誰かって意外と分かる。

そんなわけで、ただのため息もなんとなく子供っぽいように感じる。

口も喉も物理的にちっこいんだからしようがない。

そうして温かくなつて汗を流してさっぱりして。

ちよつと早いけど今から出るからしようがない。

これでたとえ今夜からお風呂に入れなくてもなんとかなりそうだ。

汗はほとんどかかないけど……それでもこの腰まで伸びている長い髪の毛を洗わないで寝るといふのには抵抗あるし。

習慣って言うのは恐ろしいな。

お風呂だけは……引きこもりの時期のごく一時期しかサボらなかつたくらいだ。

子供になろうと女の子になろうとお風呂だけは欠かせない。

夏でも平気でお湯に浸かるんだ。

……さて。

これからは忙しくなるだろうし緊張もするだろう。

というわけで、これまた最後になるだろうお気に入りのお気入りのコーヒーも飲み納め。

少なくとも好きな豆の種類で好きな量で好きな時間に、って言うのとは。

それくらい自由は欲しいけど……どうなることやら、だ。

コーヒー飲む自由すら奪われる可能性も、無くはない。

そこは怖いところだけど今考えても落ち込むだけだしな。

さすがにこの後が控えているからだめだけど、どうせなら昨日のうちに残っていたお酒も高い方から順に飲んでおけばよかったかも。

ああ、もったいない。

……いや、もう飲めないとは限らない訳だし帰ってきたあとの楽しみに取っておこう。

希望という未来は大切だ。

もう帰って来られないわけじゃない……かもしれないんだから。



夜は軽く野菜を中心に食べる。

運動量が少ないからそこまで多く食べなくてもいいし、自然と量も減ってくるもの。

大人になっても成長期のような食事をしていたら体重と体型がまずいことになった苦しい経験から生まれた習慣。



代謝が落ちるといえるのは本当に恐ろしいことだってあのときに初めて知ったなあ……本当に恐ろしい。

何が恐ろしいって、何も考えなくて普通の量を食べるだけなのに気がつけばっていうのが下手なホラーを越えている。

さらに恐ろしかったのは元の体重に戻るまでに、なった時の倍以上の時間と労力が必要だったことか。

食欲を落として、夜はあんまり食べないって言うこのスタイルに落ちつくすまでにどれだけ苦労したことか……。

あれは改めて成長期の終わりを感じた、つらい事件だった。

まあ大学生辺りで薄々感じてたんだけど。

でも学生のとときは通学って言う重労働してたんだ、学生じゃなくなればこうなるのは当たり前なのかも。

会社に通ってるわけでもなしだからな。

あと……徹夜が辛くなったりそもそも眠くてできなくなったり、無茶が効かなくなったりを感じたのとほぼ同時期だったことも、なおさらに悲しかった。

「お兄さん」から「おじさん」になっていくのは、恐ろしいことなんだって恐怖を味わった。

……30になるまでは「お兄さん」でいたいこの気持ち。  
きつと30を超えてもそう思っているんだろう。

ある歳を境に諦めがつくんだろうか？

.....

もつとも。

今となつては「おじさん」って呼ばれるどころか「お嬢ちゃん」な幼女なだけけど。

これもまた、悲しいんだ。

せめて「お坊ちゃん」で……いや、それは嫌だな、なんか。

でも、年を取るって言う実感を得たあの絶望感も今となつては懐かしい気がする。

あと15年したら、もしかしたら「また」体験することになるんじゃないかな。

そうだといいけど。

……だけど、欲を言うんだつたら。

できることなら、それを今度は友人たちと同じ時期に同じように感じたい。

年を取るってそういうことみたいだし。



夕食のあとには眠くなるまでお酒を飲みながらテレビや映画を見て、少しだけ良い気分になって眠くなってきたら寝る。

酒は悪いものなんだけど適量なら問題ないって信じてるし、突き詰めれば酔いを自覚して適量にコントロールできることが鍵だから。

一時期は溺れていたせいでだいぶ体がやられたけど、翌日に響かない程度を維持できるように becoming するから問題は無いよね。

呑まないって言うのは無理な以上うまく付き合うしかないんだ。

大丈夫、アル中にはまだまだ遠い。

まだ大丈夫。

……大丈夫だよね？

そんな生活をこの体でやってるのは相当まずいかもだけど、止められないんだからしょうがない。

止めようって考えるだけでストレスなんだから止めない方が良いに決まっているんだ。

で、翌日に響かないとは二日酔いしないということじゃなくて、眠りが浅くなりすぎなくて翌朝の体が重くなっていないことで、内臓がちよつとでも違和感を発しない程度のこと、わりとその時の体調とか夕飯の内容とか呑むお酒とか酔う時間の過ごし方で

変わる。

結局は「酒は飲んでも飲まれるな」というような、小さいころから知っているような簡単なことわざとか言い回しにたどり着くのは不思議な気がする。

どうせみんな……ずっと昔からみんな同じ目にあつて同じことを自覚して伝えて、なのに自分の体で体験するまではその言葉の意味を正しくは理解できないだろう。

僕のように。

人間なんてそういうものだ。

言葉ができたときからなんにも変わってないんだ。

——そういうものをひつくるめたすべてが、ずっと続いてきた「僕」の毎日だ／＼  
た。



そういうえば、朝は忙しかったからカーテンも閉まりっぱなしだし、空気も籠もっているな。

だからなんとなく落ち着かなかつたのか。

習慣ってすっぱかすと気持ち悪いものだもんな。

僕はリビングを突っ切って窓の下に置いた踏み台に載って、今の僕にとっては重いカーテンを開けて、踏み台の上でかかとを浮かせて背伸びびして高いハンドルをよしよつと回して、窓を開けた。

さつきまで歩くときに嗅いでいた、春の気持ちいい風が家の中に入ってくる。

このあとはどうせ、たくさんの人が入ってくることになるだろうし、閉めることは……考えなくてもいいか。

家じゆうに新鮮な空気が流れ込んでいく感覚ですつきりした僕は、未だにめり込んだままの床を避けて、毎段脚を大きく上げないと上れない階段を大股で上って僕の部屋へ。

いちいち消すのもめんどくさくて付けっぱなしのパソコンの画面が気になった。

……よく考えたら、どうせパソコンから何までみんな持ち出されるだろうし、閉じておくか。

今の僕にとっては大きすぎて重すぎるしもう移動させられないサイズになった、今までもずつと使ってきたパソコンを閉じて……ついでに机の上の日記帳にも今日のことを簡単に書き留めておく。



健康を維持して多少は前に進むという錯覚を得ながら、ただ生きているだけの毎日。僕と僕を守る家の中だけでほとんど完結して僕自身以外の誰も必要としないで、同時に誰からも必要とされない毎日。

僕という人間を維持するだけならそれでもよかったのかもしれないけど、時間は過ぎるもので、有限だった。

本来は経験するだろう人生にとって重要な時期を何のイベントも経験せずに、ただ年齢だけを重ね、やがては老いていき、そして……。

—— 毎日の健康のためという名目の儀式を設け、その事実からあえて目をそらし、考えないようにして過ごしていたその毎日は。

貴重で楽しかったけど、そろそろ終わりにしないといけないもの。

僕の夏休みは、終わったんだから。

◇◇◇

時計。

あの朝、この体になって最初に見た時計は、あのときと同じようにぴったり3時を指している。

偶然だろうけども僕はこの体になってからその偶然に助けられもしたし、苦勞もした。

人や物事との「縁」というやつは、大切にしないと。

そういうのもまた、この体になってからの1年で知ったこと。

やり直しているようなものなんだから、今度こそはきちんとしてほしいものな。

◇◇◇

あの日の前の夜はいつもどおりに寝て、あの日の朝に目が覚めることで強制的に「日常」っていうのが終わらされた。

言いかえればあの日の前の夜に「僕」は一度死んで。

あの日の朝に「僕」が生き返った／生まれ変わった。

今となってはそう感じる、あの朝。

男から女へ、黒髪から銀髪へ、20代から10……歳、未満へ変わった朝。

……だから僕は最後のメッセージを、彼女たちに送った。

お別れの儀式。

そうして深呼吸しても緊張でじつとりした指で操作した画面には、ある番号が表示さ

れるプツツという音がして、ワントンポ置いて。

『はい、——です』

『お電話は、——ですか？』

電話の反対側で女の人が言う。

……僕はもう、止まったままじゃない。

「……はい、そうです」

電話のこつち側で、僕は言う。

「僕は——」

「——です」

「——を、お願いします」

「……ああ、急いでいないので、ゆっくりで大丈夫です」

僕が、女の子になっちゃったんだって。

大丈夫。

僕は、元の体での10年以上という長い時間を、この体でのたった1年ぼつちの間で——もう、乗り越えたんだから。



## 2話 姿が変わっても、頼れるものは、何もなし 1/2

「……………なるほどね、だいたい分かったよ」

僕は言う。

「それで、僕はどうしたらいいんだ？ どうしたら——できる？」

僕は問う。

「……………たったそれだけなんだ。 ならいいよ、すぐにやってくれても」

僕は答える。

「……………？ ——なんだろう？ 遠慮はいらないよ、さあ」

僕は任せる。

「それに、僕のことはどうだっていいんだ。 だけど、むしろ——」

僕は応える。

「だからもう、何度も言わなくてもいいんだって……………そう、じゃあ始めてよ」

僕は催促する。

「——あ、終わったらでいいんだけど、できたら、僕の体が——……………」

僕は、付け加えた。



目が覚める瞬間ってというのは、いきなり意識が戻って……外の情報と今までの思考とこれからの意識とがいつぺんに頭の中に流れ込んでくるから、いつも混乱する。

さらに目が覚める前に夢を見ていたとしたなら、なおさらだ。

というわけで、なにやら壮大な夢を見ていたらしい僕の無意識のせいで、僕は目が覚めたらしいのを知ってからしばらくは身じろぎもしないで、ぼーっとしていた。

ぼーっとしながら意識だけで体の感覚を確かめてみる。

んー……まだ眠いけど二度寝するほどではないかも……？

何度か寝返りをうってたらだららとしていると髪の毛がやたらと顔にかかってきてものすごくうっとうしい。

そろそろまた切りに行かないとか。

面倒くさい……けど、こればかりはなあ。

ぼさぼさの髪の毛はめんどくさいからなあ。

……つていうか。

耳を澄ませなくても分かる騒がしさ。

外がうるさい。

あと部屋が暑くてまぶしい。

.....

……あれ、ほんとうに今朝はずいぶん外の音、聞こえるような？

寝過ごした？

これじゃまるで昼間みたいな……。

よく見てみると部屋に入って来ている光の方向が朝じゃない。

お昼から夕方のもそれだ。

なにより……よく寝た爽快感がすごい。

やつぱり寝過ぎたんだな。

なんだかだるかったから僕は上半身だけを起こして、すぐ上の窓のカーテンを半分だけ開けて鍵を開けてガラスを開いて空気を入れ換える。

……強い日差しが南から来ているらしいのと生暖かい風が流れ込んできたので、だいぶ時間が遅いらしいのが確定した。

外を行き交う人や車も、どう見ても通勤時間のそれとはだいぶ違うし。

えっと、それで……今の時間は。

大切な朝の時間をすつぽかした悲しさに打ちひしがれながら、のろのろと視線を室内に。

.....。

けど。

.....んん？

……見たものが信じられなくて目をこすつたところで、今まで眼鏡をしていなかったのに気がついた。

眼鏡をかけていないのに、手元だけじゃなくて50センチより先も見えている。

手のひらのシワがひとつひとつ不気味なくらいはつきりと見える。

よく考えたら窓を開けるのはともかく、窓の外の光景なんて普段なら眼鏡無しじゃぼんやりとしか見えないはずなのに普通に見えていて……おかしいって思えなかった。

とりあえずもういちど、寝過ぎすのを避けるためにベッドから数歩の机に置いてある目覚まし時計に目を向けてみると……やっぱり秒針まではつきりと見えるし、机の周りのものもくつきり見えている。

そして時刻は3時を指している。

3時。

15時。

……午後の、だよな、もちろん。

外の雰囲氣的に。

くらくらする頭で考える。

……見間違えじゃなかったみたいだ。

いったい何時間寝ていたんだろうか。

確か寝たのはいつもの時間からそう外れていないはずだから、だいたい……17時間とか寝ちやつてたのか。

病気をしているときとか徹夜した翌日とか以外じゃ、犬とか猫とか幼い子どもとかじゃないと到底寝ていられないくらいの長時間、僕は寝ていたらしい。

……おかしいな。

特に体調も悪くなかったし最近寝不足とかもしてないし。

昨日だって大してアルコールも入っていなかったと思うんだけど……うーん。

二度寝どころか三度寝四度寝した疑惑。

覚えていないという時点で結構おかしい。

それに、体の感じとか感覚もなんだか変だ。

頭が重くて重いのに軽いつていうか、妙な感じ。

お酒が残っているときのあのイヤな感覚もないから……もしかして実は風邪を引いていて長めに寝ちやつたとか？

あるいは最近夜更かし……って訳じゃなさそうだな、そんな不規則なのは最近してな

いし体もむしろ元気だし。

けど……それじゃ17時間の説明がつかない。

考えが行ったり来たりしてくるくる回るだけ。

んん……？

肌の感覚も、体の感覚さえも何となく違うっていうか違和感があるっていうか。

違和感って言えばなんとなく物が大きく感じる気がする。

……部屋ごと大きく見えるってことは自覚がないだけで熱があるのかも……？

なんだか致命的な何かがずれちやつてる感覚を頭で反芻してもどうにもならない。

……ひとまずお水でも飲んできてさっぱりしてからにしよう。

頭痛もないし吐き気とか目眩とかの症状もないからそこまでひどくはないと思うん

だけど……ずっと寝ていたし、喉が渴いているし。

まずはお水だな、お水。

そのあとご飯食べてコーヒー飲みながらゆっくり考えよう。

よつと……、あれ。

そう決めた僕は……また別の違和感。

ベッドから脚を下ろして立ち上がるとまた変な感じ。

何かが下に数十センチずれたような、割と大きい違和感。

……この感覚……もしや昔はよくなった、手が異常に大きく感じるのなあれ？あれすつごく怖くて大っ嫌いだったんだけど……何となく似てる気がする。

でもあれは感じなくなっただけからもうずいぶんになるし、大人になった今さらになんて。

何秒かフリーズした僕は再起動して、どうせ寝起きだしって割り切る。

とにかく、このぶんだと寝汗もかいていそうだしシャワーと着替えもして。

……おつと。

ぶわつと汗が体じゅうの毛穴を広げる感覚。

バランスを崩しそうになっただけから気がつく。

同時にばさって音がして足先が温かくなって……脚がすーすーする感覚が。

脚に何かが絡まっている……パジャマのズボン？

ズボンがお風呂のときみたいに真下にすんとって落ちていてふとももが映る。

なんでずり落ちて……あ、ゴムでも切れたのな。

……って、あれ？

ズボンを腰にあげようとしていたけど手を離すともう一回落ちるズボン。

まるで、サイズが全然合っていないような雑さ。

それに違和感を覚えて……今度はやたらと長く感じるシャツの裾を持ち上げてみる。

なんで僕の太ももがこんなに細くて白くて……毛がなくてすべすべなんだ？  
確かに邪魔だから気になったときに剃ってるけど……つるつるですべすべ？

しかも膝やスネに残ってるはずの昔からある自転車とかで転んだ傷とかもないよう  
な……。

……

ばさり。

ズボンの上がちっちゃな布きれがもう1枚。

あれ？

……え？

今度はパンツまで。

これはさすがにおかしい。

一体何が起きて——。

とっさの反応で顔を上げて……開いたままの部屋のドアの先の、廊下の先に起きつば  
なしにしちやつてた、遠くの鏡が視界に入る。

捨てるまでは行かないけど置く場所に困つてた、前からある全身鏡。

びつたり僕の部屋から僕の全身を捉えるようになってるのは、昨日足を引っかけて  
場所がずれたからだっけ……なんて思考が自動的に流れてるけど、それどころじゃな



くつて。

眼鏡もなしで、はつきりと。

見間違えることもなくらいに、鮮やかに。

暗がりでも昼間だからか廊下にもそこそこの光が入っていて、見えてしまう。

…パジャマのシャツを太ももの半分くらいまでだぶつと着ていて、隠れてはいるけど下になんにも履いていなくつて、薄い色の髪の毛がシャツの裾くらいまでたくさん垂れていて……そして。

見たこともない顔をした女の子……いや、下手をすると女兒、巷でいう幼女つて言ってもおかしくない顔をした子どもが僕を、その薄い色の瞳で見つめていた。

この子は誰かとか、どうして僕の家にいるのかとかいう疑問は、一瞬で消えた。

これは、………僕なのか？

そう考える僕と、その子が立っている位置的に僕しかいないじゃんつて考える僕がいて……僕はしばらくぼけーっと立ち尽くしていた。



「……で、本日新たに発表されたのは……」

「……発見後すぐに……したおかげで……」

「警視庁は先ほどの記者会見で、次の……」

つけっぱなしのテレビからはなんにも情報が入ってこない。

僕の耳を素通りしていく。

あのあと、履くもの……いや、履けるものがないから冷たい風に当たる下半身を意識しながらいろいろ見て回って、他にはなんにも変わってないって分かって少しだけ落ちついてきた僕。

もうちょっと現実感を得ようといつもみたいに適当にテレビをつけて……足の裏がつかないほど高くなっているイスに腰掛けて……乗っかっている。

そのイスに座るにも両腕を使わないといけなかったから文字通りの意味で乗っかって。

あれだ、バスの運転者さんのすぐ隣の高いところ。

あんな感じによいしょって、わりと全身を使う運動になっていた。

もつとも、今の僕だったら間違いない登り切れずに諦めるだろうけど。

——家にあるものはみんな昨日の夜から変わっていないように見える。

それでもまだ現実感はないけど、僕はさつき鏡で見たまんまな子どもになっているらしい。

着ていた服もベッドも昨日寝たときと変わっていないと思うし……パソコンやスマホで開いていたページとかアプリも昨日のままっぽい。

ざっと見てみたけど、ニュースなんかを見ても特別な情報……たとえば何か変なものが現れたとか人の姿が変わったとか……そういったものは特にないらしい。

けど、昨日の夜とか今朝に起きたばかりの事件なんかは初耳だから、今僕が座ってるこの状態は夢じゃなさそう。

つていうかここまでリアルだと明晰夢でも無理だろうし。

そもそも僕は明晰夢なんて見たこともないしな。

僕の体が変わっていること以外は昨日までと何も変わっていない。

世界は何にも変わっていない。

変わったのは……僕の体だけ。

ただ……半日以上ワープしちゃって、体が変わっちゃっただけだ。

「……………」

……にしても、指紋まで変わっているとは。

いや、幼いころの僕になったならまだしも見知らぬ北国出身なDNAの入っていきそうな子なんだ、当たり前か。

骨格から色素から何から何までみんな変わっているんだからな。

変わってないのは僕の意識だけ。  
僕の記憶だけ。

「……………ふう」

めんどくさい。

けど、いちいちつてのもまためんどくさいから指紋認証……………やり直しておこう。

……………ああ、めんどくさい。

◇◇◇

……………。

ふむ。

なるほど。

洗面所の大きい鏡の前には、シャツ一枚になった童女……………幼女？

が、しげしげと自分の全身を観察している。

真ん前から腰に手を当てて、横向きになってだぶだぶのシャツを眺めて、体をひねって  
転びそうになって。

心持ちバランスの悪い感じがする幼い体を……………まあ僕自身なんだけど。

シャツ一枚とはいってもぶかぶかすぎるし、そもそも出るところも出てすらもないからやましいところは何も無い。

下になんにも履いてないっていうので罪悪感がありそうだったけど、そういうの以前の幼さだからか特に思うところもないからかな。

しかしほんとうになんにもないな。

お股からも何も出てないし。

見た目はものすごくすつきりしているけどお股のあいだがとても寂しい気がする。

ふだんは感じなかったけど、それだけ温かくて存在感のあるものだったのか？

……よく考えたらそれなりの大きさだもんな。

邪魔なだけだったけど無くしてから分かる寂しさ。

まあお股のことは今は置いておいて問題は体の方だ。

正直それがなくなっただころでどうでもいい。

いや、どうでもよくはないけど今はそれどころじゃない。

ちよつと心配になるくらい痩せすぎているから、そっちの方が気になる。

子どもつてもつと丸つこいイメージだったんだけど違うのか……分らない。

手首は骨がくつきり分かって脇とかも形がばきばき？している気がする。

脚だつてよくよく見たら骨張ってるし……女の子っていうののイメージからは、かな

り遠い。

やっぱり所詮は幼女か。

けど、脂が乗って来そうなのを毎日の食事と運動でどうにか抑えていた程度の青年を過ぎた成年だったから違和感があるだけで、あばらが浮くつていうのは僕が小さいころも……確か中学生くらいまでは続いていた気がするし、こんなものだったのかもしれない。

もう相当前のことだからよく思い出せないけど……あとは人種的な体格差もあるかもしれないしな、考えてもしょうがないのかも。

……けど。

ぱつと見て「かわいい」って感じるんだ。

それも暗い廊下の先でぬぼーって座敷童的に立っているように見えても、怖いよりもそれが先に来た。

顔が整っていて、けどほっぺが丸っこくて……髪の毛が長くて体はちっちゃくて。

僕のストライクゾーンの下限があと10歳下だったらあるいは、だけど僕はそうじゃないからただだ子猫の写真とかを見たときの反応しかない。

でも……成長していないからこそこうやって冷静にしていられるけど、もうちよつと……あと数年も成長した状態だったらきつと動揺していただろうな。

免疫もない僕だ、きっとそうなっていただろう。

たぶん。

そんな今の僕はまさしく……少女未満の童女とか女兒とか幼女とかいう表現がぴつたり。

それ以外の存在じゃない気がする。

……………。

どうせ女の子になるんだっいたら同じ年くらいの人になったら……いや。

女性に耐性のない僕だから下手に高校生くらいだったり大人だったりしたら……それこそ寝起きのトイレすら困ることになっていただろうから、これはまだマシな方なのかもな。

自宅でのトイレすらいちいち恥ずかしくてたらおちおちニートもできやしないもんな。

◇◇◇

変化した体を観察するのもそこそこに、履けるものはないからまだ温かいパジャマのシャツだけを上に着直す。

こういうの……僕自身のだとしても人の体って感覚だし、あまり見ない方がいいんだろう。

なんとなく見ることで自体に抵抗があるし。

確かめてみた結果として、今の僕の体はどう見ても昨日までに使い慣れて見慣れていた僕の体じゃないことが確定になった。

分かつてはいたけど確定したわけだ。

まあ……飛び出ていたはずのものがなくなるどころか根こそぎ欠片もなければ……ねえ？

人生って言うのは摩訶不思議。

で、今の僕は紛れもなく子どもだ。

子どもだと言っても……これって、いくつくらいになるんだろうか？

とりあえず高校生はないとして発育次第で中学生……小学生くらい？

学生時代の全校集会とかでは幼く見える子とかいたし、がんばれば高校生でも行けるかもしれない……いや無理か。

風格って言うか顔つきからして無理だな。

逆に言うと、がんばらないと服装次第では大人びた年長さんって見られても文句は言えない感じだ。



その辺はがんばろう。

何をがんばるのかはさっぱりだけど。

……身長とか、何センチなんだろう？

けど、幼く見えるのはシャツ一枚というヤバイ格好のせいもあるんだけど……つていうかこれのせいもかなりあるかも。

で、今の僕は子どもつて言っても僕の幼いころのそれじゃなくて、髪の毛からまっげまでびっくりするくらいに色が薄くて線も細いし瞳の色だって違う。

顔つきもどこかの映画で見たような「北国のいいところのお嬢様」って感じの趣だし。どこかで見たことがあるような、知らないはずなのに知っているような気がしなくもないっていう感覚があるのはなんだか変な感じだけど。

体はつていうと明らかに幼い子どもだけど、辛うじて胸と腰が……記憶にある子どもころの記憶よりは大きい……？

いや、錯覚か。

出るとこなんてなさそうだしな、明らかに。

けど子供つてのは個人差が大きいもんだし、2、3年分程度なら発育が遅いだけつて言い張ることはできるかもしれない。

男女の骨格の差つてやつも、まだそこまで感じなかったし。

……でも、毛すら生えていなかったのはまだ第二次性徴を迎えていないからなんだろうけど違和感がすごい。

なんていうか、つるつるだ。

うぶ毛がほとんど見えないのも不思議。

生えない体質なのか、毛の色が薄いからかは分からないけど。

肌の見え目がすつきりしすぎているから、毛があるのがふつうだった僕にとっては「ない」っていうだけでなんだか目を背けたくなるっていうか目が吸い寄せられるというか……なんとも言いがたい感覚に襲われるもの。

これが背徳感っていうものか。

あれだ、出かけた先で薄着の女の子とか女の人が目に入ったときの気まずさって感じ。

……けど。

「……………はあ……………」

たった、これだけ。

ただ僕自身の体のはずのものを見ただけなのにとっても悪いことをしたような感じがするのは……僕の理性とか良識とかそういうもののせいなのかもしれない。

僕は打たれ弱いんだ。

この程度で3日はふさぎ込む自信がある。

でも、ため息ばかりついでるわけにもいかないよなあ。  
.....さて、これからどうしたもんか。

## 2話 姿が変わっても、頼れるものは、何もなし 2/2

「けほっ。……うえ……」

あ——……古くさい臭いがする。

2年以上着ていなかった服を出したときのあの独特の臭い。

物置にして長い、昔のものをしまつてある部屋に来てわざわざ探し出したのはタンスの奥にギチギチに詰められていた、かつて……最低でも10年くらい以上前から着ていない、僕が子どものころに着ていた服。

これより小さい、というより古い服がなかったからしようがないんだけど……たぶん小学校高学年のときくらいに着ていた服は、今の僕にとつてもまだ大きい。

やつぱりこの体は10歳未満……？

いや、でも、なんとか10歳は超えていたっていう謎の気持ちこそそれを否定するんだ。

ぶかぶかでだぼつとしているけどとりあえず着ているぶんには邪魔にならない程度で、家の中で歩くくらいなら脱げる心配もなさそう。

最悪ズボンとパンツさえ落ちなければ上はなんとかなるもんな。

もつともパンツまでは残してなかったからズボンで押し上げてる感覚だけど。  
たまにずれるから気持ち悪い。

今は居ない母さんが「お気に入り綺麗なものだけは記念にいくつか残しておきたい」って言って聞かなくてうっとうしいと思っただけ……今になってはありがたい。

これがなければ僕は家の中をシャツ一枚で過ごすことになっていたからな。

女の子になっていきなりそれはないだろう。

誰もいないとは言っても僕自身の抵抗はある。

いくら家の中だからとはいえ下半身すっぽんぽんで過ごすのは……いくらひとり暮らしでニートしているからって言っても、いくらなんでもアウトだろう。

そう、僕の中の常識が言うんだ。

だって下半身丸出しだぞ？

やばいじゃん。

ほこりを被っていた鏡にぼんやりと映る「兄のお下がりを着ています」的な女の子になっっている僕がぼんやりとした表情で立っているのを見る。

……顔も雰囲気も、これは昨日までと変わらなずにぼーっとしているけど頭の中はいちおうまともに働いている、ように感じる。

たぶん。

少なくともお酒が入っていないことがはつきりと分かるくらいには細かく考えられるし、五感もしつかりとしている……と思う。

たぶん。

……

さて。

目が覚めてから一時間ほど、うろろうとしながら考えていたことと調べたことをまとめてみると。

——この姿が変わって幼い女の子になっちゃったっていう状況は熱や昨夜のアルコールのせいではないらしくって、現実みたいで。

でも、家の中の様子も外の状況も昨日からは特に変わっているようではなくって。

変わっているのは僕の体だけ。

たった、それだけ。

それ以外にはなんにも、ない。

ただの現状確認に過ぎないけど家の中に変なものがあったりしないから、今すぐどうこうって話にならないのは助かる。

家の中はセーフゾーンだ。

引きこもりにとってはここがクリアされていないと抛り所がないんだ。

そんなことを引きこもっていた時期に実感した。

.....

……けどこの状況、僕の頭が狂っているって考える方がまだマシかもしれない。

だって現実で、空想の世界でない僕のいる現実で僕自身があとかたもなく……全く違うものになってしまうなんて。

とりあえずですることがなくなっちゃって、手持ち無沙汰になった途端に力が抜けていく。

..... どうしよう。

いや、どうしようもないんだけど……。

埃を被ってる鏡に小学生のときのシャツとズボンを着て座り込んで、ぼけーとしてる僕が映る。

パンツルツク……って言うんだっけ、そんな格好をしている薄い色の女の子な僕が。

これが夢とかだったらいんだけど、夢だったらこんなに考えられるはずもないしな。

とつても、非常にとつてもこの上なくめんどくさいけど……考えない訳にはいかないよなあ、これ。

現実を見ないと行けない。

お酒に逃げたいけど無理。

.....。

さつきからお腹も鳴っているし、とりあえず朝……じゃなくてももうおやつ時間も過ぎていくけど、何かをお腹に入れよう……。

体のサイズにはやけに大きな音がもういちど、ぐうつと鳴った。

◇

夕方を過ぎて夜に。

世界はなんにも変わっていないかった。

あ——……疲れた——……。

もうだるだるだ。

もうやだ。

何もをするにしてもいちいち体を大きく動かさないといけなかったから、とにかく疲れた。

お湯に浸かったら一気に疲れも襲ってきたし今日は早く寝よう……。



下手すると今日起きてる時間が6時間にもならないけどしょうがない。

僕は疲れたんだ。

シャワーの音と立ちこめる湯気に満ちているお風呂場で体を洗う。

シャワーヘッドが重すぎる。

お風呂のイスが高すぎる。

……結局調べて考えてを繰り返しているうちに、すっかり夜になっていた。

起きたのがとても遅かったというのもあるけど。

だって3時ってことは普段より6時間以上遅いつてことで、起きてる時間の半分くらい無くなったわけで。

はじめこそこの体に戸惑いもしたけど……いちど受け入れてしまえばただ体が小さくなっただけなんだし、そこまで違和感もなかったからじっとしていると忘れるくらいだったしな。

おかげで、こんな目にあっているのにわりとふつうに過ごせちゃった。

むしろそっちの方が非現実的まである。

……慣れって怖いものだなあ……。

ま、誰かと一緒にいたり外に出なきゃいけないなかったりすれば話は別なんだろうけど僕はひとり暮らしのニートだしな、僕自身が何かに集中して気にならなければ問題が存在

しないんだから。

……にしても毛がないと、本当に洗いやすい。

どこを洗つてもまるで抵抗がないからきちんと洗えているか心配になるくらいだ。

その分が髪の毛に集まっている気がする。

……この量、どんだけシャンプー使うんだろ。

1日じやたいして汚れないだろうし、そもそも外に出ないんだから夏じゃなければ大して気にしなくてもいいんだろうけど、なんとなく習慣で洗いたくなる。

お風呂に入らないなんて……そんなことはできない。

肌が薄すぎて静脈が見えるくらいだからこするのなんだか怖くって、軽く手のひらで洗う。

くすぐったくて困るけどしょうがないよね。

……あの後調べてわかったことといえば、テレビもネットもどこを見ても僕みたいにとかが変わったとか、そういう騒ぎはひとつも起きていないってことだけ。

小さくなって顔が変わっただけならともかく性別まで変わって不安だった体の方も、着替えと今とで裸を見てトイレに何回か行ってしまえばすぐに慣れる。

他人の体ならともかく僕自身の体だしな。

女の子らしい女の子ならともかく、幼児だし。

仮にこれくらいの年の女の子の親戚とかの面倒を見ることになってお風呂に入れてあげるとしたって、悪いことはしていかないのに悪いことをしている感じはするだろうけど……それ以上の感情が湧かないのと同じだろうか？

そんな親戚はいないけれども、もしそうだったら、だ。

庇護欲しか浮かばないだろう、僕なら。

ま、何をしても気にならないというのはいいこと。

まだ家の中の鏡やガラスが視界に入るたびに知らない子がいるって思っ、びくってはなるけど。

強いて言えば、この長すぎる髪の毛がうっとうしいことくらいか。

む、なかなかシャンプー落としきれない……。

振り向いたり横になったりするたびに邪魔だしシャンプーもふだんの何倍も使ったし、洗ったら毛がキシキシする感じがするけどリンスとか持ってないからどうしようもないし。

髪の毛が長いほどに魅力は増すけど、同じくらい維持するだけでの苦労があるんだなあ……女性って。

僕が想像もしていなかった種類の苦労だ。

あと、髪の毛って結構重いんだな。

重力をものすごく感じる気がする。

このままでと首が太くなりそう。

細すぎて折れそうだからもうちよつと頑丈になってほしいところ。

◇

ちよつと高くなったお風呂のイスから立ち上がって腕を上げてシャワーを止め、とても重くなったフタを必死な思いをして湯船にかぶせてタオルを何枚も使って髪の毛を乾かして、ようやくお風呂から出ることができた。

お風呂に入るだけで重労働。

疲れを取ろうと思って入っても出てくる頃にはまた疲れるという。

……あ、よく考えたらもう、わざわざフタとか閉めなくてもよかつたんじゃない。

どうせ毎日入れるんだし入るのは僕ひとりだしでいちいちフタする意味がない気がする。

今日までなんとなくやってた……けど、この体にとってはお風呂のフタは重すぎるしでかすぎる。

……明日からはそうしよう。

仮にこのままだったらだけで。

戻っていてほしいけど。

火照った体を包むちようどいい冷たさの空気を感じつつ全然乾く心配のない髪の毛にドライヤーの風を当てながら、さっきの続きを考えてみる。

ドライヤーがすつごく重いのもどうかしたところだけ。

……目が覚めてからずっと、見た目以外にこの体の感覚で違和感を覚えなかったりパランスを崩したりしない。

僕の意識はこの体を僕自身のものとして認識しているということ……なのかな。だって、すべてのサイズが違うんだから転ぶくらいはしそうだし。

自分のじゃない自転車を借りるときみたいなの？

……………それだと、少し乗ったら慣れるか。

まちがっているようで合ってる気がする例え。

転びそうになったのだって両足がズボンで絡まっていたあの1回だけだし、利き手とか箸の使い方とか普段は何も考えないでしている家電の操作も……踏み台を使わないと届かなかつたりしたにしても特に考えなくてもできたし。

いちいち体を伸ばさないと何もできないのは不便だけど、不便なだけだしなあ。

本気で不便じゃないってのもまた困る。

絶妙な加減の不便さだ。

……ここまでの結論として、考えられる事態としてはとりあえずみつ。

まずは、僕の脳か頭か……今朝からおかしくなって狂っていて、僕がこの姿のこの子になつていてと思ひ込んでいる。

こうしてドライヤーを重いつて感じてるのも髪の毛がなかなか乾かないのも、イスの上立たないと鏡が見えないちっこい体になつてるのも、ゼーんぶ僕の錯覚的な感じ、だ。

それとも実は元から僕はこの姿で昨日までの僕は男だったと思ひ込んでいるか。

無いとは思うけどいきなり女の子になるよりは現実的だ。

記憶なんて言うのは形もないものだし、最初の考えが「今」狂つてることだったから「昨日まで」狂つてた感じ。

こうしていちいち疑問に思えてるあたり、少なくとも今狂つてるとは考えたくないなあ。

.....

……最後は、このどちらでもなくつて。

現実には、本当に、リアルで、冷静に僕だけが、僕の体だけが変わってしまったという、こと。

僕の意識のエラーじゃなくてこの世界のエラーか何かで僕が小さい女の子になっちゃった。

エラー。

呪い。

魔法。

あとは何か。

上のふたつは僕自身を疑うことになるからこつちのほうが精神的にはだいぶマシなんだけど、逆にいちばん面倒くさいことになるという。

だって、姿が変わるなんて。

なんでこの姿になっているのかも、元の体との体積の差はどうなったのかとかいろいろとだ。

そもそも体が変わるなんてひどく非現実的なことなんだけど……なっているもんな、現実に。

今僕の五感が感じていることと思考は正常だって思いたい。

思うと、僕にはどうしようもないって言う現実が襲ってくるんだ。

.....

.....にしても。

もうドライヤーをかけて3、4分は経っているのに髪の毛がまだほとんど乾かない。いくらぶわーってしてもちよつとずつしか乾く気配がない。

もつとタオルで絞っておけばよかったかもな。

そういうば女の人って温泉とかで頭にタオル巻いてるし、ああするもんなのか……？

◇

あのあと10分ほどかけて髪の毛を乾かし切って、……嘘は良くないな、乾いたって言える程度になって重くなった腕を抱えながら戻ってきた僕は……クツションをおいてようやく使えるようになったイスに正座して乗っていて、机の上で動かしていたペンを置いた。

柔らかすぎて時々落ちそうになるし、今の背丈に合ったイス、用意した方がいいかも。いや、それを言ったら床に座った方が早い気がするな。

不釣り合いに大きくなったペンを持っていた手をひらくと、ぷにゅとして印象の指がじんじんしている。

最後の日付が数ヶ月前の、いつも気まぐれで書き始めて何日かでまた忘れる日記帳の見開きをまるまる文字で埋めてばたんと閉じる。



長文を書くのが久しぶりすぎた。

長文って言うほどじゃないけど。

書くこと自体にはそれほど変な感覚もなかったし、書き方がわからないってこともなかったからよかったけど、とにかく疲れた。

書くだけで……なんて言ったらさすがにまずい気がしてきた。

けど、これでいいだろう。

とりあえず記録は取れたんだ。

起きてから今までのことを思い出せる限り細かく書いておいたし、明日どうなっても思い出せるか分かってもらえるかと思う。

これ以上のことなんて起きないとは思いたいけど……起きたとしても、明日の僕か他の誰かが読んだら今日僕に何が起きたのかだけは分かるはず。

理想は、今日1日……いや半日か、まるまる寝ぼけていたとかこれが夢だったという方が楽なだけだ。

理想は理想だ。

だけど、念のためとはいってもさすがにデジタルとアナログの両方で残すのには疲れた。

心配しすぎじゃないかと書きながら思ったけど、頭がおかしくなったんだとしたらっ

て考えたらずさずにいるのは不安になったしなあ。

あと漢字を思い出せなすぎたからってのもある。

読めるし頭にぽやって浮かぶけど書けないもどかしさだった。

明日になって読んでみて、訳がわからないことを書いたなって笑えればいいんだけど。

明日読んでみて「昨日は1日中酔っ払ってたのか」って思えた方が嬉しい。

……しつかし、まさかこれだけを書くので1時間をずっと過ぎるのには驚いた。

どれだけのろろ字を書いて……普段書く習慣がなかったかっという。

学生が終わったらくうなるんだな。

そう考えると学生って偉いもんだ。

キーボードが大きくて打ちにくかったけどタイプした方は10分そこらだったし、

やっぱりパソコンは偉大だ。

今となつてはスマホの方が早いかも知れないけど……。

日記くらい、手書きでつけた方がいいかもな。

せめて、これからは。

将来、仮にただどこかで働くときとかには必要に……、いや、ないな、きつと。

やっぱり必要ないな、うん。

まあいいや。

細かいことを考えるのは。

「……………くあ」

さつきからペンを持っていたところは痛いし、あくびは止まらないし。

寝よう。

ベッドに身を投げ出すようにして飛び乗ると思ったよりも弾んで落ちそうになってひやつてなる。

……………あー、体重も見た目に比例して軽いのか。

こんなことで床に落ちこちてケガでもしたらどうしようもない、気をつけないとな。

……………それにしても眠い。

体が変わるなんていう一大事でただでさえ普段使わない神経を使ったのに、さらにずっと考え続けたせいで頭が疲れ切っている感じ。

面倒なことなんてずっと考えないようにしてきたのに……………まさかこうなるなんてな。

……………

……………お……………

目をつぶってちよつと、ぐるぐる回ってる感覚になる。

頭がぼーっとして芯から痺れたようになって。

お酒を飲んでいる訳でもないのにこんなに自然な感じで眠くなってきた辺り……、  
やっぱり、本当に、僕は………。

そこで意識がぷつぷり切れた。

◇◇◇

そうして急に戻る意識。

かすかに鳥の声、ときどき車の音。

………朝か。

なんだか体が軽い。

まぶたを閉じたままでも分かる、今はきつと早朝だ。

昨日と違って早く起きられたのは、よく寝たから………って。

まだぼんやりと眠くて体がだるいから腕だけを持ち上げてみる。

………目に映るのは天井の隅までよく見える視界と、肌から浮き出していた血管も関節も  
見えないくらいにすべてで小さくて柔らかい印象の、静脈が透けて見えるくらいに薄  
い肌の子どもの手。

丸っこい手のひら。

昨日と同じように小さいままの、今の僕の、手。

じゃあやっぱり……昨日のことって。

のそり、と体を起こす僕の視界に長い髪の毛が映る。

透明に近い髪の毛が。

……………。

夢じゃなくて、少なくとも昨日一日のことじゃなくて……現実かあ。

とつてもめんどくさすぎることになったなあ。

あー。

……あ——……。

そう思ってた僕のため息は、声なんか出してないのに……どう聞いても小さな子どもの口から漏れてきたものだった。

## 3話 現状把握と今後の模索 1 / 2

両手で胸を揉んでみる。

……………。

これが胸っていうもの？

否、ただの脂肪だ。

それも男とおんなじ。

だって幼女だしな……けども、人種的な差異と個人差とで決めつけも行けない。

ひよつとしたらこの見た目で実は中学生くらいかも知れないんだし。

10歳を過ぎているんだったら、可能性はある。

だから揉んでみた。

もちろん肌越しに。

つまりは直接にだ。

今の僕はこの体に入っている意識なんだから事案とかじゃない。

だけど残念なのか安心なのか……弾力は確かにあるけど元の体のそれと違うのかど

うか分からない。

昨日まで男だったんだから昨日までの僕の男の胸なんて当然に揉んだことがない。だから分からない。

言うまでもないけど僕以外のは男女問わずに触ったことすらないからもちろん分からない。

.....

胸。

あると言えばあるって言えなくもない感じ。

逆もまた然り。

見た目相応に服を着てしまえば傍目にはわからないくらい小ささだけど、脱いで触ってみれば男だったときは違う感触が手のひらに伝わってくる……気がする。

辛うじてあると言いつ張ればあるけど無いと言われれば無い……気がする。

ぜんぶがぜんぶ経験値が足りなさすぎて判定不可能……そんな感じだ。

まあそもそもこの体に第二次性徴が来ているのかどうか微妙だけどな。

見た目的に……だけど特に女の子の成長は個人差があるって言うから。

いやいや。

でもやっぱり。

そうして堂々巡りだ。

どうせなら手のひらに吸い付く……とまではいかなくても手のひらに収まって揉み応えのあるサイズは欲しかった気がするな。

どうせ女の子になったのなら実感してみたい。

その願いは贅沢なのかどうか。

失った分の体積を胸部に欲しかった。

そんなことを思いながら僕は風呂場ですっぱだかになりながら僕自身の胸を揉んでいた。

目の前の鏡には……全裸で胸を揉もうと努力している、銀色に近い長髪と眠そうな目を向けている幼女が映っていた。



さて。

体が変わってしまっから一夜明けて逃げ道がなくなっちゃった。

昨日と違って早く起きたけども昨日と状況は変わっていない様子。

ぺたぺたともちもちになったほっぺたを揉んだり撫でたりしながら考えてみる。



……戻ってない。

とりあえず夢じやなかったのは分かった。

目の前のものみんな大きいままだしな。

もう慣れたけど。

慣れつつすごい。

昨日からさらに状況が悪化……たとえば角とか尻尾とかが生えていたりして人間の枠を超えたり、誰か知らない人や生物が目の前にいたり、そういうった空想の世界でしかありえないことが起きていないのかさらに幼くなったりしていないのは喜ぶべきなんだと思うけど。

体が変わったことに変わりはないさそうだし、少なくとも今日はこのままだろうことを嘆くべきだろうか。

にしても顔の油が浮いてない。

寝起きなのにな。

不思議な気分だ。

ほっぺをつまんでみてもむにーっとしてるだけだし、おでこに至っては……さらさらだと……!!?

そういうば子供のころは顔もすべすべだったなって思い出す。

中学までは顔を洗わないでいたってお風呂の1回だけで済んでいた気もする。

若さ……この場合は幼さか、っていうのはすごいな。

おとといまでの僕の幼いころがそういう体質だったのかどうかは分からないけど、今の体は洗わなくていいらしいのが分かった。

楽なのは良いな。

楽なのは良いことだ。

と、いつまでも顔を触っていたって仕方がないから体を起こしてもういちどだけ全身が戻っていないかチェックして、見間違えてたとかいう都合のいいことが起きていないっていうのを再確認。

ふうつとひと息で気持ちの切り替えだ。

さてさて。

変身してから2日目にして改めてこう……心にずっしりとくるといなか結構こたえるものがある気がする。

なにしろ昨日のは夢じゃなくって完全に現実のことだと分かっちゃって。

僕は使い慣れた体を失って代わりに見知らぬ少女の体を与えられて……元に戻っていない。

ベッドでごろ寝しながら見た限り、スマホ越しのネットでもやつぱり世間では何も起

きていない。

当たり前か。

.....

今さら科学的とか考えてもしょうがないからとりあえずで浮かんだ考えに任せる。

僕だけか、あるいはごく少数……何人かの人間だけがこんな目に遭っているかも分からない。

それとも何だろうか、曰くありげな人形とか山とか神社とかそういう伝奇物であり  
そんな厄ネタが……創作ではなく実際に起きるものが僕に憑いたりしているのか。

そういうのつてだいたいは無自覚なのがまた恐怖を誘う。

……怖いのは嫌だなあ。

ホラー耐性はないからせめて洋風に魔法とかいった雰囲気のものの方がいい  
んだけど。

なんでポルターガイストって聞くとそこまで怖くないのに幽霊って字を見るだけで  
怖いんだろうな。

こういうことを考えているとどんどん気持ち沈んできて親戚のおじさんに「仕事  
はまだ決まらないのか」って聞かれるときくらいの重い感じが体の内で広がっていく。

知り合いに聞かれても知らない人に聞かれても嫌な「お仕事は？」だ。

あ、想像しただけで胃がきゅってなる。

ニートは精神力がないと務まらない。

耐えよう。

耐えた。

昨日考えたときは驚いていたというのもあるけど……起きていたって言ってもたったの数時間だったし。

やっぱり寝るまでは頭の隅っつていうより意識のほとんどでこれは現実じゃないって考えていたんだろう。

「寝て起きたら元の体に戻っているかも」とか「そもそも全部がよくできた夢とか明晰夢」とかそういう風に……さながら映画を見ているときのような気持ちで思っていたんだろう。

現実感がなかったとも言える。

すぐに適応できる便利な精神構造はしてないもんな。

僕の心は限りなくめんどくさい自負がある。

こんな、あの有名な「変身」みたいな超常現象……いや、アレと比べると天国過ぎるけど……に遭遇したとは言っても、いくら急がないといけなかった理由がなかったとは言っても……ちよつと楽観的すぎたかもなあ。

仕方ないんだけど、これはいわゆる正常性バイアスというもの？

自分だけは大丈夫、何とかなるって根拠もなしに無意識に思い込んじゃう、あれ。

まあ、虫とかにならなかつただけマシか。

虫と幼女とじゃ周りの目も僕自身の気持ちも果てしなく変わるもんな。

物理的にも生物的にも存在的にも。

肉体、見た目も……おとといまでのどこにでもいそうな平均的な男からは考えられな

いほどに良いものになってるんだし。

僕自身は美醜にさほどこだわらないとは言っても悪いのと良いのと選べるなら。

そういうことだ。

……ちつこくて不便だけだな。

「はぁ……」

せめて幼くなっていただけならだいぶマシだったんだけどなあ。

男で昔の僕の顔、つまりは父さんと母さんが程よくブレンドされた顔つきだったら弟

とでも親戚とでも言い張つてもおかしくはない。

けど、今の僕は……。

……。

どーしたもんかなあ本当に。

突然のピンチに襲われたときに冷静に対処できる人とパニックになる人と現実逃避する人って感じでいろんなタイプの人がいるとは知っていたけど、僕はどうやら冷静に現実逃避するタイプだったらしい。

「変身」とかいふ差し迫った危機とかじゃないものだったけど、ともかくそういうのに遭遇して一晩寝てから改めて考えてみるとそうなんだと思う。

知らなかった。

知るわけないか。

まあ命の危険とかもこの社会じゃめったにないし、強いて言えばあのときも……いや、それはどうでもいいか。

あれはもう相当前のことだし、こういう想定外なことってずっとなかったからすっかり忘れてた。

じゃあ、僕がこれから取るべき行動は……。

……………ん。

尿意。

そうか、確か女性は男よりもトイレが近いんだっけ？

ましてや子どもだし。

昨日はそれどころじゃなかったから気にしなかったけどそういえば昨日もそうだった

た気がするし。

……ついてないから、短いもんなあ……。

昨日トイレで何度となく目にした、消失しちやつて目にできなくなつたあそこを思い浮かべる。

つるつるのあそこを。

……嫌だけど、やらかさないうちに起きてさつさと済ませておくか。

違和感がないとはいってもまだ少ししか使っていないやいやいやや語弊と誤解がある。まだ半日しか過ごしていません体だからどんな間違いが起きてしまうのか未知数だし。すつきりしたら今日からはまじめに今後の対策を考えないとだなあ……。

「はあ………」

凄く。

とても非常に、めんどくさい。

◇

よし。

必要はなさそうだったけどいつもの調子で顔も洗つてご飯も食べて洗濯も軽い掃除

もして、普段通りの朝が来た。

体の動きっぷりは激しかったけどやったことは変わらない。

習慣ってそういうもんだ。

さて、僕はこれからこの姿で動く必要があるみたいだ。

少なくとも、なったときと同じように突然に戻ったりするまでは。

変わった原因はまだだって言うか分からないままかもしれないけど、まずは長期戦になるって想定で動いた方がいいだろうな。

今日明日あさつてに戻れる保証もないし。

最悪を想定しておくに越したことはないもんな。

いつも通りに、ほっとひと息つくためのコーヒーを煎れる。

冷凍で常備してある豆をゴリゴリと引いて専用のヤカンでお湯を回しながら蒸しつ  
つ煎れるやり方が好きだ。

……足元に引きずってきたイスがないとこれすらもできないけど。

軽くて倒れない踏み台に使えそうなもの家にないかな……？

別の体になったからちよつと不安だったけどいい匂いって感じるコーヒーの香りに  
ほっこり。

……けど、意識だけがそのまま体だけが変わるっていう非現実的な現象の変身。



この元凶が魔法か超能力か……隠された何かが目覚めたとかそういうものかはわからないけど、仮にそういうものだった場合には僕にはどうしようもないし対策なんてできないから保留。

今できるのはあくまで僕が思いつける、現実的な受け身な行動しかない。

それに、映画やマンガとかの受け売りでこう考えてみるけど、もしそういうものだったとしたらそういうもの……ややこしいな。

うん、とりあえずで「魔法」でいいか……魔法に縁のある何かしらからアプローチとかがあると思う。

だって僕の身に起きているのは性別が変わると美形化……そして、若返り。

若返りだ、若返り。

それも十数年の。

もし他にも何か魔法の力的なものに目覚めているんだとしたら、なおさら放つてはおれないだろう。

それがいいことか悪いことかは分からないけど、それは僕にはどうしようもないこと。

気にするだけムダなことだ。

ともかくそういうのが一般人のただの男に起きたんだ、きつと発見され次第に我先に

と押し寄せてくるだろう。

昨日の夜はぐっすり眠れて本当に良かった次第。

ま、こういう特別な力つて力を使ったときに感知されるって相場だし現実的に考えてみても実際にそうだろうから、僕が使えるようになるまでに多少時間がかかるかもしれない。

……けど、どちらにしても僕はそれまで待てばいい。

つていうよりは待つしかないからただこうして家の中で待つていればいい……つて思う。

僕はただ適当に、いきなりびつくりさせられるのだけを我慢すれば良いんだ。

……

……映画とかだとシリアスさを出すために連れて行かれてひどいめにあったりする可能性も充分にあるんだけど……今考えてもしようがないし怖いだけだし、なにやり避けようがない。

なんかじくじくする。

あー、やだやだ。

嫌なことを思いついちゃった。

だから暴力描写のある小説とか映画は苦手なんだ。

そこだけカットしておいてほしいっていつも思う。

砂糖とミルクをいつもよりも少なめにして少し苦くしたコーヒーをすすりながらしばらく、ぼんやりとテレビを流し見る。

……テレビの向こうはいつも楽しそうでいいな。

もちろん僕には想像もできないような過酷な世界ではあるんだろうけど。

人気商売の弱肉強食とか僕からはいちばんに遠い世界だからな。

ちかちかとする光と音で、だんだんと落ちついてくる。

するとさつき考えていたことが映画や小説とかの空想上のもので、そんなものが一切ないっていう可能性のほろがずつと高いつていう……ある意味でもつと恐ろしい可能性にたどり着いてしまう。

——つまり。

こうなっているのはこの世界で僕、ひとり。

同じ目に遭っている人が誰ひとりとしていないんだから誰にも理解されないし、たとえ理解されたとしてもどうしようもないということ。

そうなる僕がこのまま一生戻れない。

そんな可能性もかなり大きい。

現実小説より……って言うんだし。

こんなに幼くても、幼いからこそ逆に数年待てば成長して大人にはなれるだろう。

大人の女性っていうことにはなるけどこのまま小さいままってことは……さすがにないよな。

さすがに。

ないよね？

……。

……不老不死系統の話ってものすごく嫌な感じしか……これ以上は止めておこう。

もっと現実的で、今考えておかないといけないことについて考えよう。

そう思っても僕の思考はすぐに映画とか漫画とかの展開の方向に引つ張られがちだった。

そう思わないと、そういうご都合がなんにもないっていう悲惨な未来しか浮かばなかったから。

## 3話 現状把握と今後の模索 2/2

個人情報、マイナンバー、戸籍、権利関係、銀行口座……そのほかいろいろなもの。今後僕がこの姿のままだと仮定した上で障害となり得る「僕という人間のデータ上の要素」。

昨日までの僕にはきちんとしたそれらがあつて、一応だけど大学卒業とそのあとの時々のバイトの経歴くらいはあつて。

血縁金融関係も履歴もなんの変哲もない……普通の、今の時代によくいる成人男性としてみるのが揃っていたんだ。

まあこの経歴だと「きちんとしたもの」って言えないかもしれないけど。  
ニートだし。

いや、ときどきバイトするからフリーターかな……聞こえはそっちの方が良いし。

夢を追ってますって感じがするし。

夢なんて寝てるときしか見ないけど。

「働くのがだるかったの」とか言えば特に不審には思われなくて理解だけはしてもら

える、そういう情報。

このご時世だしひとり暮らしの男ならその辺にいくらでもいるだろう情報。

その辺にいる目立たない男だったからそれで良かったんだ。

いざというときの切り札「両親が亡くなったショックで鬱になっていたので……」っていう嘘だとは言えない言い訳があるしな。

実際そうとしか見えない経歴だし、これ言う空気は重くなるけど誰でも一発で黙る僕のとっておきだ。

死んじゃった人たちをダシにするのもどうかって思うけど、これくらいはいいよね。

悪いことを言っているわけじゃないんだから、……だよな？

ともかく父さんたちのおかげでそれなりの貯金とか引き継いだ土地という資産もある。

ニートには過ぎた遺産だ。

鍛えてはいないどころかモヤシもいいところだけど引きこもりではないレベルには健康で、病気も何もない健康に近い成人男性としての体も持っていた。

これだけあったから、たとえ急に何かがあってもつぶしはいくらでもきいた。

僕だってバカじゃないし、いちおうその程度は考えた末にニートになったんだから。

この世界はお金があれば生きて行けない。

無かったらニートしてないでどっかの会社員してただろう。

あったからこそ、こうして立派にニートやってた訳だけど。

……だけどそれから一夜にして一転して困ったことになった。

この幼女の姿の僕は……この顔的にも親類縁者はなしだし、もちろん戸籍も学校に通った経歴や通院記録、その他もろもろ一切合切なし。

名前も考えたけどめんどくさいから止めた。

呼ばれてとつさに反応できなかったら疑われるだろうし。

……そういえば、いくつか虫歯を埋めたあとのある歯はどうなっているんだろうか？

あとで確認しておこうかな。

いやいや、それはあとでだ。

それは今はどうでもいいんだ。

とにかく、どこの記録にも書類上でもデータ上でも町の監視カメラ上にも、すべての記録の上で存在していなくて存在するはずのない人間ということになってしまおう。

ましてやこの見た目、確実に目立つしいちど見られたらまず忘れられないだろうし。

このまま警察や病院に行くか電話してすべて正直に話しても、子どものいたずらか嘘つきな子どもか、それとも家出少女……幼女の戯れ言としか思ってもらえない。

この歳じゃ家出つてならなくて「早く帰りなさい」だろうけど。

どれだけ僕の言うことを信じてくれたとしたって、間違っても以前の僕と同じ人物だとは認めてくれるはずもない。

普通に考えるならそうなる。

常識的に人は別人にならないもの。

マンガとかじゃないんだしな。

悪い方向に転がると……そのまま身元不明ってことで保護されちゃって帰れなくなっ

あちこちをたらい回しにされて、親がいなくて……孤児院的な施設とか精神病院に預けられるだけ。

正直そこまで悪い扱いじゃないだろうけど、まず間違いなくここには戻って来られない。

だって僕がいたっていう証拠がどこにもないんだし、僕が嘘をついていなくて嘘をつかされていないなんていう証拠は、僕以外に誰にも持てないんだから。

これが情報化社会か。

いや、昔でも身寄りを保証してくれる人がいなければこんなものだろう。

——と、いうことは。

よほどのことがない限り公的機関からの支援は受けられないだろうし、そもそも見つ



かっいたらアウト。

だつて家出か捨て子扱いだもんな。

子供には親がいるのが当たり前。

その親が物理的にいないんだからどうしようもない。

せめて数年は年上の外見ならつて何度も思う。

本当に、切実に。

せめて普通のどこにでもいる女の子つて感じならごまかしようもあるつて言うのにな。

欲を言えばおとといまでの僕と同じ成人女性なら「性転換手術しました」も通せそうだし。

……………。

……………一応、念のため、万が一に考えておく。

今ばつと思いつける最悪のシナリオは、こうだ。

どうにかして警察に見つかつて保護されて、拉致監禁の被害者とか不法入国の捨て子だとかネグレクトつて決めつけられて。

しかも住んでたつて主張するのはここだから……これまで住んでいたこの家から突然に姿を消した元の成人男性の僕が、犯罪がバレて逃げたつて決めつけられて。

今の僕はこれまでのすべてを手放すことになって、おとといまでの元の僕の風評的には最悪の「幼女拉致監禁事件の犯人」としてすべてを取り上げられて……僕と母さんたちとか親戚や卒業はしたはずの学校にまで汚名だけを広げて残して消える、ということ。

絶対卒業アルバムとか誰かから入手するんだ。

それでそんな風に見えなかつたって言われるんだ。

普段はあまり話さなくて友だちがいなかつたって。

お昼の時間帯にテレビをつけっぱなしにする僕は詳しいんだ。

……………

……これは考えすぎだって思うけど、もしそうなたとしたら今の僕は不便になるし元の僕は不都合になるし……なにより僕を育ててくれて残してくれた父さん母さんに申し訳が立たない。

あと親戚のおじさんとかにもすつごく迷惑かけちゃうよなあ。

だって、まず連絡が行つちやうのがそこだし……………ああ。

「はあ……………」

こんな状況なのに、なんでため息は無駄にかわいく感じてしまうんだろう。

僕の口から漏れてきた声に少しだけ癒やされたけど、でもどうせ考えておくなら今の

うちって……思いつく限りの最悪のケースを想定してみたせいで思いつきり落ち込む。

凹む。

めり込む。

季節のイベントのたびに「これはテレビとネットの外だけの話で僕にはまったく関係がない」って実感するときくらいに凹む。

同世代が出世したとか結婚したとか子どもが何歳になったとか、そういうことを耳にしたときくらいにやけ酒を飲みたくなる。

「あ——……」

……ため息しか出ないな、ほんと。

……

……数年。

何年か。

数年だ。

10年には届かないけども長い時間。

いくら今の肉体年齢が幼いからといっても、これだけの時間が経てばさすがにどれだけ幼い顔つきだって成人しているとみられるくらいの年齢になるはず。

最低でも成人……いや、大学生くらいで充分だよね、そんな姿になるまでの時間が必

要だ。

それまでのあいだ、どうにかして人目につかないようにして生きていく必要がある。もし元の体だったらあと10年くらいは余裕だし、もともとニートのままのつもりだった。

今まで通りにほとんど家にいて、気が向いたら外出をする生活をすればいいだけだったから。

読みたい本とかマンガ、見たい映画やしたいゲームなんか探せばいくらでもあるし、現に消化できないものが山積みだし。

最低限のものがあれば手にあるものだけでも余裕だった。

それで満足できるからこそこういう生活してきたんだし。

大学卒業後の引きこもりを除けば何年間のニート生活よりも、ほんの少し長い時間なだけ。

だけど、この体だと行動がかなり制限されることになる。

今の僕はどう見ても小学生の外見だから、服装や口調でがんばってもせいぜいが中学生。

近所づきあいほとんどないけど会ったらあいさつくらいはする顔見知りは何人もいる。

お隣さんなんかは僕の昔のこととかまで知っているし。

長年一人暮らしだと分かっている男の家に……高く見積もっても女子中学生が出入りするようになるのが目に入って、ちよつとでも不審に思われるようなことがあった時点で、たぶん、終わり。

最初にお隣さんからのお巡りさんでおしまいだ。

最近は何にそういうのに敏感な世の中だしこればかりは考えすぎということもないだろう。

もしかしたら「親戚です」であつさり通るかもしれないけど、これは希望的すぎる。そんなにあつさり解決できたら苦労はしないんだ。

……今僕にできるのは、とにかく慎重に行動してなるべく興味を持たれないように過ごすこと。

あとのことは、そのうちに思いつくだろう……たぶん。

「……………ふう」

真剣に長時間考え続けるなんて慣れないことをすると、とつても疲れる。

しかも思いつきりネガティブなことだし。

ここ最近は何単位で同じようなことしかしてこなくて同じようなことしか考えてこ

なかったから、脳にもものすごく負荷がかかっている感じがするし。

……そういうえば、脳みそはどうなっているんだろう？

サイズのどう考えても縮んでいるはずだけど……すでに記憶とか知識とかが欠けていたりなんてするはずないよな、まさか。

そのせいで何かに気がついていなかったり、忘れていることにさえ気がつけなくなっていたり……？

……………。

席を立……下りてもう一度さつきと同じ動作をして2杯目のコーヒーを煎れて落ちつこうとした。

だめだった。

僕は僕自身をだませなかった。

煎れる両手は冷たく震えているし、コーヒーは苦いだけで口の中に渋い感じが広がるだけでどうしようもない。

血の気が引くつてのはこんな感じだったか。

つらい。

テレビの、CMのあいだの1、2秒の黒い画面にぱつと映る僕がしている顔も心底嫌そうな表情だ。

幼くてちよつと眠そうな顔がうげーって顔をしてる。

……子どもは顔に比べてパーツが大きいから表情がはつきりと出るんだな。気をつけておこう。

本気で嫌そうなのが誰にでも分かるくらいだし。

……

さて。

このまま考え続けていたら頭も心も……引きこもっていたときの終盤みたいにおかしくなっちゃいそうだ。

もうおかしくなっている可能性も多分にあるんだけど、それを確かめるすべは。

……

それを、僕がおかしいかどうかを確かめるために、まず始めにしないといけなさそうなのは……。

思いついた「最初の確認」と、それができたらご近所に見られたとしても女の子ではなくせめて男の子供だつて見せかけるための服装。

理想は髪の毛も隠して黒髪黒目の少年つて錯覚させたい。

そのためには外に出なきやならない。

なんてことだ。

メジャーとかないから身長も分からないし、子どもの服のサイズなんて分からないし。

服だつて普段から適当な店で店員の人に勧められるままに買っているから見当もつかないし。

理想は通販なんだけど……返品交換を繰り返すのは出かけるだけよりも面倒だし。

あと時間もかかるし。

いや、時間は無限に近くあるからいいんだけど今は急ぎだし。

そもそも受け取りはともかく返品が積んでいる。

この世界は対人恐怖症にはつらい仕組みなんだ。

昔の服でとりあえず形にはなってるけど違和感がすごいし。

だから外に出なきゃならないんだけど。

「……………むー」

この状態。

お下がりを着た小学生つて感じの姿で外に出なきゃならないのかあ。

あー。

はあ……だるい。

このまま何も考えないで二度寝したい。



でも、出たくないけど出ないと手詰まりなんだよなあ……。

それが分からないわけじゃないし無視して平気でいられるほど図太い神経をしていない。

だってニートだもん。

……生きるって、めんどくさいこと。

この上ないんだな。

## 4話 敵情視察と偽装工作 1 / 2

僕は踏ん張る。

絶妙な開閉のバランスを意識するのがポイントだ。

まだ開かないらしい。

もうちよつと。

……結構緩めたつもりなんだけど……そろそろかな？

……あつ。

緊張がほぐれて温かくなる快感とともに、しやあああつと……勢いのある水の音がお股の下から響いてくる。

男のときとは明らかにちがう放尿の感覚だ。

……慣れないなあ、この感じ。

なんでトイレのたびにこんな緊張感があるんだろ。

何かと戦うような壮大な緊張感。

我慢するのは今まで通りの感覚なんだけど……いざ出そうとするときと出しているあいだの感覚。

あと終わりの感覚も違う気がする。

なんていうか体の内側から出すような、後ろと同じよう……でもない不思議な感覚だ。

我慢しているときの締める感覚は同じなのに、開くっていうか緩める感じが違うからかな？

前は特に意識してたわけじゃないってのもあるけどいまいちこの感覚が掴みきれないんだ。

あと………音がやばい。

なにがやばいってものすごく響く。

かといって水圧を落とそうとしても落とし方が分からない。

オンかオフしかできないとかダメじゃんか。

男のときは途中で止めたり弱くしたりできたのになあ。

だから男だったときには想像も出来ない激しい音がトイレ中に響き渡る。

水面にトイレトッパーをけっこう敷いてもこれだ。

勢いのすごさがすごい。

敷かなかつたらもつとひどかった。

わざとしてているのかと思うくらい。

女性用トイレには音姫なるものがあるらしいけど……その存在理由を実感するハメになるとは。

神経質すぎるだろうって思っていたのが懐かしいくらいだ。

小学生じゃないんだし何もトイレでそこまで……って思ってたけどそうじゃない。

この音がつつぬけて考えたら誰もトイレしたくなくなるよなあ。

そんなどうでもいいことが何度も頭の中を行き交う。

女体の神秘をこんなところで感じるなんてっていう気持ちと一緒に。

勢いが収まって、しんとするトイレ。

終わったらしい。

……分かりやすすぎる。

からからと少なめにちぎって、そつと当てる。

「……っ、……」

あと……拭く感覚だけは他のほとんどで違和感がない中で音の次に、どうしても慣れ

ない。

ちりつてするからびくつてなっちゃう。

敏感すぎない？

女の子のお股つて。

「……………」

トイレから、足の着かない地面に上手に飛び降りてパンツを穿く。

びつたりしっくりこないけどしょうがない。

そうして僕にとって大きすぎる便器を眺めながら思う。

……飛び出ていたのつて、よくできたしくみだったんだなあ……。

もう失った貴重な存在へ、すーすーする感覚と一緒に想いを馳せた。



今着ている子どものころの服をしまっていた周りは、とつくに空気が入り込んで引つ張り出すしなくなっている、ただのビニール袋と化した圧縮袋たちに囲まれている。

奥に引つかかかったりして出すのがものすごく大変だったから、こんなことになるならはじめからふつうにしまっておけばよかったと思ったけど……押し込んだ当時はこう

なるって予想できなかったからしょうがない。

全身を使って全身の装備を調べたら後片付けも大変になっていた。

なんていうことだ。

けど、この惨状。

大掃除……もう何年もしていないし、今年はしたほうがいいかもしれないな。

……あ。

でも、この体で？

このリーチも低いし力もない体で？

……。

両手はホコリと汗で黒くなっているし、周りにふあさつと広がっている髪の毛は服の繊維やらほこりやらにまみれてるし結構きれいに光っていた銀髪って感じだったのがすすけたねずみ色になっているし。

ちよつと動いたときに息が上がるから座り込んだし。

脚立とかイスとかをたくさん使うとしてもかなり大変そうだし……なによりもめん

どくさいし。

やっぱいいや。

必要になったときにしよう。

僕はそのりと起き上がると目当てのそれを漁る。

……こうしてもう1回、めつたに入らないから古い臭いしかしいこの部屋に1時間ほど籠もっていたのには理由がある。

さつき思いついちゃった、公権力に身バレしてからの保護というシナリオを回避するには、できるだけ家から一步も出ないでカーテンも開けずに引きこもるっていうのが確実。

だから不要な外出はなるべく避けるべきではあるんだけど、確認しておかないといけないことがある。

……ん、体が小さいって便利かも。

タンスの奥だっかがめば入り込めるしやたらと暗くてもよく見える……というかメガネすらいらなかった……だし、かなり細かいすき間にでも腕が入るから小さいことをするのはこの上なく便利だ。

もつとも、何をするにしても髪の毛が引っかけたりして邪魔だし、こういうこと以外ではやっぱり元の背と腕と脚のサイズが理想的なのには変わらないけど。

あと、とにかく力が足りない。

ちよつと動くとすぐ頭痛がする。

やっぱり不便だ。

「けほ」

む、埃。

……それはいいとして。

僕が本当に見た目通りになっているのか……つまりは本当は体が変わってなんかなくて体が変わったんだって僕の頭が勝手に思い込んでいるのかって僕の問題。

ややこしいことこの上ないけど、僕が今この目で見ているものと耳で聞いているものが正しいもので信用できるのか……その最後の確認が必要なんだ。

こればかりは僕ひとりで、この家にひとりでいるだけじゃ確かめようがない。

だって、ひよっとしたら僕の体は元のまま、僕の目と感覚が子どもになっているんだっていう思い込みっていうか認識のずれっていうか、そういうものがおきているだけなのかもしれないから。

そうなるも今の僕は昔の服を着ようとしてたぶん着られなくなって、成人男性のシャツ一枚とかになっている可能性まで出てきちゃうんだけど……さすがにそこまで疑うと身動きが取れなくなるから、まあ、諦めよう。

想像しただけでひどい姿になるしな。

もさい成人男性のそんな姿は誰にも求められていない。



だからこそ外に出れば一発で分かるんだ。

……仮にそうだとしたら外に出てちよつと歩いていたら通報されて警察行き……？

……………。

ま、まあ、幼女誘拐監禁っていうのに比べたら露出なんてささいな問題だろう。

お説教されて頭の心配されるだけで済むんだから……きつと。

普段の素行は悪くはなかつたはずだし、お隣さんもきつと「お仕事を探して疲れちやつたんだ」って言ってくれるはずだし。

たぶん。

そんなわけで、僕の頭がまちがっているのか体がまちがっているのか……どちらにしても救いはないんだけど、だからといって家の中にいるだけだとずつと僕の認識を疑い続けることになって堂々巡りになるから、これは半分賭けだ。

念のために成人男性でも羽織れるサイズの服を着て、ズボンの下にも運動のときに履くスパッツと短パンを揃えておけば逮捕まではされる格好にはならないだろう、きつと。

……しつかり腰で縛らないと、この姿が本当だった場合には歩いていたらずり落ちて丸出しになつちやいそう。

気をつけないとな。

ご近所さんにひそひそされるのは悲しいから。  
引越してできる余裕なんてニートにはない。

噂されるようになってもなんとか根性で居座る必要があるんだから。

と、そんなことより確かこの辺にあるはずなだけだ……って、あつたあつた。  
ボロボロのランドセルなんかと一緒に出てきたのはかつて着ていた、なんの変哲もないシャツとズボン。

「……………」

それにしてもこのランドセル。

黒だし古いけどぼろぼろでもないから今の僕にぴったり……いやいやそれは犯罪だからダメだ。

ランドセルをぺってして本命に。

昔気に入っていた服はぼろぼろで捨てちゃったからあんまり着た覚えのないものが多いけど、今着るのには……ちよつとだぼつとしているけど都心の繁華街の映像とか写真とかで見たことのある、いわゆるストリート系……いや、小学生なのに髪を染めてチャラそうな感じの少年みたいな格好になれるかもしれない。

さすがにシャツ一枚じゃ外に出られないもんな。

だからって思ったけど……ああいう格好は好みじゃないけど、考えてみたらあまり人

から話しかけられたりしなさそうだしいいのかも知らない。

いずれにしても外見が成人男性なのか子どもなのかを判断するだけだから「見たものと聞いたものがすべて都合よく変換されて意識に届く」なんてもうどうしようもない状態になってさえないければ、すぐに分かるはず。

そこまでいつていたら、それこそ正気を失っている訳だから何があっても僕には分かるものじゃないし、どうしようもないし。

胡蝶の夢、だっけ？

そんな感じ。

違うかな？

あまり考えすぎると普段の読み物の傾向的に哲学とか量子学みたいな領域に踏み込んじやうからほどほどのところで、とりあえずの結論を出さないとな。

仮定と検証は大事。

ともかく外に出て周りの人の反応を見て探るなんてことが、はたして中学以来ろくに……していないわけではないけどしてこなかった僕に出来るのかどうかは分からないし、自信もないけどやるしかない。

ノートだつていざというときには働けるんだ。

ただ意志を持って働いてないだけなんだ。

だから今日僕はこうやって動こうとして。

「……………よしっ」

出てきた服たちを抱えて居間に戻り、換気扇の下で軽くはたいて着られる状態にする。

すんすんと直接嗅いでみたらホコリで咳き込むハメになったけど臭いは大丈夫そう。

口が小さいから「けへけへ」って感じの声になっていたけど。

鼻をつけて嗅げばタンスの消臭剤の臭いと古い臭いが感じられるけど、そこまで近くで人と話すことは想定していない。

部屋に戻ってシャツ以外全部脱いで、ずっとすーすーしていたお股をタイツと短パンとその上のズボンで覆って温まって、上にはもう一枚大きめのシャツと元の体だとぴちぴちにはなっても着られるだろうサイズのパーカー。

前を閉じれば……………うん。

うん、いい。

股の安心感と温かさが全然違う。

もつと早く気がつけばよかった。

なにが悲しくてノーパンで過ごさなきゃならないんだ、20にもなつて。

おかげでふとももの感覚がこそばゆくてクセになりかけたけど、それよりも寒かった

んだから。

パーカーの下に被る帽子はふうの野球帽だけど、サイズが大きめだから特に大人からは直接顔を見られないだろうし、髪の毛はパーカーの下に隠した上でフードを帽子の上にかぶせればどこからどう見ても。

.....

どう見ても.....

鏡に映ったのは目深の帽子で目元まで隠れて、ぶかぶかで態度の悪そうな子供。

ちよつと腕を組んでみる。

.....不良少年にしか見えないな、これ。

補導だけには気をつけよう。

けど、まあいっか。

この格好は予定通りなら片道だけだし。

と。

ここまで勢いのまま、考えるのが嫌だから手と体を動かしてきたけど.....すでに疲れをかなり感じている。

この2日間ですごい何日分脳と体の労力を使ったんだろう。

ニートは1日1ターンの1回行動だつて言うのに働き過ぎた。

どのくらいがんばったか、それすらも考えたくもないくらいに疲れているんだけど……でも、行くしかないよなあ、状況的に。

今日を逃したら確実に面倒くさくなって月単位で後回しにするのが目に見えているし。

どうせなら僕のこのめんどくさがりな性格まで変わっていたらよかったのに。

いや、そこまでいったらもはや僕は僕ではないのでは………？

アイデンティティの崩壊。

自己矛盾。

見た目の通りに他人に。

「……………」

いいや、さっさと行こう。

ふだんは1日1ターンのワンタスクって決めているから昨日からもう余裕でオーバーしているんだけど、今日ががんばっておかないと手遅れになるかもしれない。帰ってくるまでがんばって帰ってきたら……1か月ぐらいのんびりしよう。

春休みだし良いよね。

料理なんかもみんな当分はできあいのものでいいや。

なんならお腹が空いていないときにムリに食べなくなっても良いぐらいの食欲かもだ

し  
.....  
。

## 4話 敵情視察と偽装工作 2 / 2

すぐに出られる準備をしておいて3階の窓からずっとスキをうかがい続けて10分くらい。

日の光がまぶしいし暑かったけどカーテンのすき間からぐるっと見渡せるのがこ  
しくないから仕方ないんだ。

人通りって、途切れて欲しいときには途切れないものらしい。

小さくなった手の甲にヒゲが生えてなくなっってすべすべのあごを当てて外を見ている  
僕。

朝起きてヒゲを剃らなくて良いのは地味に便利だった。

あんな無駄な毛は早くなくなればいいのに。

まだかなまだかなって、明らかに近所の人じゃない人をカウントしなくてもどこかし  
らからタイミングよく……いや悪くか、次の人が歩いてくるっていうものの繰り返しを  
じりじりと待っていた。

「……………っ！」



けど、ようやく。

ようやく家の前の通りの左右どちらからも人が近づいてこないタイミングが訪れた。急いで階段を駆け下り、……ものすごく大股で、さらにはカニのように横を向いて手すりを掴まっつてのつたりとした全身運動をしてサンダルを履いて外に出る。

ドアノブの高さとか鍵を回すのとかもいちいち腕を上げなきゃだっただけど急いでたから気にならない。

……どれだけ急いでも脚の長さに対して階段が高すぎるから元の体基準だと急いでも急いだことにはならないんだけど、今の僕的にはだいぶ急いだ最速で。

まちがって踏み外してケガでもしたらそれこそどうしようもないし。

病院に行つて虐待とかで通報されなかったとしても実費は痛い。

……つていうかどう考えても親がいないと怪しまれるしな、大きなケガはできない。

サンダルは当然ながらに大きすぎるけど不良ならファッションつて言い張れる気がする。

無理かな？

ゴミ出し用の安いやつだけど、さすがに昔の靴までは取つておかなかつたから仕方がない。

歩けないことはないみたいだし。

……かかとを引きずりながらさらに不良っぽい感じになるけど、しようがない。

ちよつとガラの悪い地域に行けばこういう小中学生はよく見かけるんだろうけど、そんなところへいったらこの見た目で絡まれそうだ。

なんてことを思いながら僕は道の隅っこを急いだ。

階段を今の僕基準で急いで下りただけで息切れしたのには驚いたけどそんなことで止まる訳にもいなくなつて、息を押し殺しながら早歩きをすること2、3分。

そこで疲れたからだるんつてしてとぼとぼ歩いた。

哀愁漂う少年のような姿に見える気がする。

ふだん歩き慣れているはずの道が広いし遠い。

いつもなら10分な感じが体感で30分くらい。

ご近所さんに見つかつたらまずいエリアを過ぎて大通りに出て……駅やビルを往復するスーツ姿の人たちがちらほらと見えるようになってきてからようやく気が休まつてきた。

ここまで来れば大丈夫だよね。

人が多ければ小学生でも目立たないはず。

子供が1人で歩いていても気にされないはず……たぶん。

けど……あ……。

無い胸を押さえる。

いや、男のときもおんなじだったけど。  
どきどきしてる。

人目を忍んで駆け抜けるっていうスニーキングって映画とかでちよつと演技が大げさじゃないのかって思ってたけど、実際にしてみるとどきどきが半端じゃない。

僕はそんなに強くないんだ。

精神的にも肉体的にも。

普段から人目を意識しないで知り合いとすれ違っても気がつかないくらいにはぼーっとして歩いているから余計に堪える気がする。

外出するときは用事と考えごとだけで頭が埋まっちゃうから体がオートで動くんだもん。

便利と言えば便利だけどうっかり買い物忘れちゃったりするから考えものだ。

けど今はちがう。

顔をじっくり見られちゃいけないってのと話しかけられないようにしなきゃいけないって意識しているのに加えて、慣れない体で慣れない服装だから普段以上に疲れる。

ものすごくどきどきしてる。

.....心臓が悪い。

家の前の道から一本抜けて人が増えてくる広めの道、そして駅前  
の繁華街とビル群に近づくとつれて人はますますと増えてくるわけだけ  
ど……それにしても人、多くない？

……あ、今日つて確か。

……………。

土曜日？

それとも日曜日？

……どっちかだ。

たぶん。

まあ学生はみんな春休みなんだ、その程度は誤差だからいいよね。

だからか学生っぽい子たちの姿も目立つし紛れられてほつとする。

ま、僕は彼らよりもっと幼く見えるはずなんだけども。

◇

突然だけど不審者っていうのは見れば分かる。

なぜなら彼らは視線と首が落ちつかなくつて何かに怯えているか何かを意識しすぎているのがひと目でわかるから。

だから僕は、いや、ほとんどの人はそういう不審者を見たら見なかったフリをしてさっさと離れようとするわけだ。

……何が言いたいかっていうと。

心を落ち着けて堂々と……視線は遠くを見て目的地を見るかスマホの画面と交互にチラチラと見るかしておいて歩く速度はふつうからゆっくりで脱力して、なにより他人からの視線を気にしないように演技するとわりと目立つ格好をしても注目されない。

だてに何年も仕事をしないで昼間から適当なところをうろろしたりしてはいない。今ここを歩いているのはあなたたちとおんなじで目的地のある普通の人ですよって顔をするのは慣れてるんだ。

徘徊というわけではない。

「要は自分はここにいるのが当たり前だ、文句ある？」っていうふてぶてしさが大切なんだ。

普通の人ならそれが普通にできるんだけど、1回でも普通から外れると普通を意識しないと普通の人になれないっていうのが難しい。

これを知ったのは引きこもったあとのことで、一時期の人間不信っていうか視線恐怖症的なのに見舞われていた時期には相当に不審者に近い感じだったんだろうけど……

過去のことは振り返らない。

そんな状況じゃないな。

春休みの真つ昼間っていう繁華街、この辺ではあまり見ないような変なファッションをしている僕と目が合う人たちも多少珍しいものを見たという程度みたいだしひと安心。

目が合う率と感じる視線の数は元の体のときよりもいくらかは多いんだけど……倍程度で済んでいる印象だし問題ないだろう。

僕だってなんとなくで目立つ人を視線に入れながら歩いてるはずだしな。

声をかけられたりしないんだから安心しても良いはず。

……ただ、そうなんだけどなんていうか……こう。

視点が低いから仕方がないんだけど、こう、かなりというかもものすごく見下されてい  
る感がすごい。

背が低いってこういうこと？

急に身長が伸びる中学の頃まではいつもこんな感じだったんだろうか。

まったく覚えていないけどちよつと不快だ。

でも物理的な現象はしようがないから諦めよう。

気にしても無駄なんだから気にするだけ無駄なんだ。

けど、元の……平均とはいっても今よりははるかに大きい体は本当に都合がよかったんだなあ。

何をするにしてもなんにも感じなかった前の体と何をするにしても何もかも感じるこの体。

世の中は平均を基準に作られているんだから、しょうがない。

◇

ビルのガラスとかでも時々確認するけど、やっぱりそれほどの注目はされていないみたい。

視察の結果はこうだった。

とりあえずは成功……かな？

この、ぱつと見で小学生男子だと思われるだろうと思つて用意した服装。

中学生は……まあムリだよなあ身長的に。

ズボンだし顔も髪も隠れているしダサイと思つていたけど、ぜんぶセットで着てみると案外そういうファッションで自然に見えるかもない……かも？

帽子の上から被っているだぶだぶのパーカーとスパッツに膝までの短パンだったも

の、それにサンダル。

それが今の僕だ。

フアツションとは縁がなかったからさっぱりだけど、そう思い込んでおけば気が楽になるからこれが似合ってるって思い込んでおこう。

唯一の欠点は足。

歩くたびに擦れるし、つま先はずっと力を入れっぱなしじゃないとすっぱ抜けるし……すっごく疲れる。

指先に力を入れなくても別に外れないみたいだけど、ずるずる引きずるのは気持ち悪いから結局結構力を入れるハメになる。

僕自身がそういうのダメだからなあ。

前からルーズな服装でさえなんとなくて嫌だったんだから合わないだろう。

ともかくこの歩き方は神経を使うからとつても疲れる。

それにただでさえ小さいのにこのせいで歩幅がずっと短くなるし、1歩1歩がゆつくりになるから演技しなくてもぶらぶらのろのろ歩いているようにしか見えないだろう。

しかも背の高い……といっても幼女の身としては中校生くらい子の背丈でもそうなるんだけど……僕よりも頭ひとつふたつ背が高い人の先がまったく見えないせいで視界が極めて悪い。



そうしてほとんどの人は僕よりも背が高いことになっている。

こういう視界に慣れていないっていうのもあるんだろうけど、それにしても見えな  
い。

まさしく人垣だ。

なんにも見えやしない。

男でも女性でもある程度の慎重だと……ちょうど股やおしりのあたりが視界にアツ  
プで入ってきてすぐく嫌な気持ちとちよつと嬉しい気持ちとが交互に来て、これもまた  
心臓によくない。

意識しなければって思ったけど真ん前に来るんだからどうしようもない。

目の前にぼんぼんって来られたら誰だつて意識するもんだ。

あと、背の高い人の持つカバンが凶器なものもこうして出歩くまでは気がつかなかっ  
た。

カバンの下がちやうど僕の顔くらいの高さだからなあ。

僕の方から気をつけないと痛い目に遭いそう。

いろいろと気をつけないとな。

特に今日は初めてなわけだし。

………まーこういうのはこの体で過ごすうちに慣れるんだとは思うけどさ。

慣れないうちに戻りたいけどなった理由が分からないんだからしょうがない。

.....

それにしても昔……子どものころは、ずいぶん。

.....上を。

見上げていたんだな。

こうして頭を上げて。

信号を待ったために立ち止まったりするたびに顔を上げて、ビルの上のほうの看板を見たりその先にある春の暖かい空を眺めながら、そう、ぼんやりと考えた。

◇◇

「ふう」

疲れた……。

繁華街を歩いているあいだの春の日差しと着ている厚着と、演技はしていてもやつぱり不安で仕方がないのが続いたせいで……駅ビルの軽い冷房がかかっている空間に入ると汗が首筋ににじんでいたのに気がついた。

エスカレーター前のスペースに空いているイスを見つけて座ろうとして半ばよじ登

るようにしないと座れないのにも気がついて、そこはかかないダメージを受けてし  
し。

……まさか元の体基準で急いで10分くらいの駅前に来るまでで倍以上の時間が  
かって、肉体的にはもちろん精神的にもここまで疲れ切るなんて思ってもみなかつた。  
体感はまだがついていなかったらしい。

けどなんかもう足の皮と一緒に緊張と気苦労とで心までがすり減った感じがする。

この感じ………引きこもりから脱出するためにがんばっていたあの頃の感じか？

っていうかよくこんな状態でがんばれたな、数年前の僕。

それだけ必死だったんだろう。

まあ、あのときはあのままだとまずいつていう強い危機感があったのもあるし今は  
靴が合っていないせいもあるんだけど、この体で初めての外出ではあるんだけど……そ  
れにしたって、なあ……。

「はあ……」

ため息が止まらない。

乾いてきた汗とともにようやく整ってきた息を感じながら改めて人の多い光景を  
観察してみる。

大人と学生と子どもの割合が大体同じという休日特有の家族連れの多い光景。

騒がしいことこの上ないしどこかの子どもが泣き始めたら結構響く響く。

あと素の声大きい人たちの声も。

……イヤホン持ってくればよかったな。

いつもならこういう人混みや電車に乗るときは必ず持ってくるのに。

機械音とかもそうだけど地味にアナウンスの声とかがキツイからな。

それどころじゃなかったからしょうがないんだけど。

……………あ。

そういえば耳の穴のサイズだつて相当違うだろうからこのままだと使えないかも。

覚えておかないとな。

替えのパーツあつたかな。

子供用つてのもあるはず……たぶん。

なければ素直に子供用のを買つておこう。

いずれにしても人混みはうるさいしぶつかるしぶつかつてくるしストレスが溜まるから嫌いだ。

もう少しだけここで休んで体力を回復したら早いところ用事を済ませて、さつさと帰ろう。

こういう活気に溢れているっていうか、たくさんの人が思い思いに楽しんでいるよう

な場所ってというのは僕にはもともと合わないんだ。

外でこうしてわいわいして楽しめる人たちは僕たち部屋でじっとして静かにしていて楽しめるタイプの人間と……種類っていうか種族が違うんだし。

きつと、男と女以上に深い溝があるんだろう。

こういうの、もつと早いうちから分かかっていれば学生のとときみたいにムリして知り合  
いたちと出かけたたりしなかつたのにな。

おつと、またネガティブが。

いけないいけない。

今は気を抜けないんだ。

あと少しだけ休んだら、いつもシーズン毎に来ている服の店の女性服売り場。

ものすごく嫌なただけど確認のためもあるし……なにより早くサイズに合って着られる服を揃えないとだから。

## 5話 出会い未満の出会い その1 1/2

2日目の朝。

ちっこい女の子になったって確定した以上遠慮がなくなった気がする朝。

僕は何なんとなくですっぱだかになった。

小学生女子のすっぱだか。

なんか言葉だけで逮捕されそうな雰囲気。

だけど今は僕自身がそれなんだから大丈夫。

それでお風呂の鏡の前でいろいろなポーズを取ってみる。

「.....」

.....ふむ。

鏡の前にはすっぱだかの幼女っぽい何か。

前の僕がいる状態でこの子がこんな姿をしているのを見られたら1発で社会的制裁だな。

そんなことばかりが頭に浮かぶ。

現代の男って言うのは何かにつけて犯罪者になるんだからしょうがない。

そうは思うけどこの体は僕のものになってるし、それを見たからと言って僕が欲情とかするわけないから割と抵抗はない。

たぶん変なテンションになってるんだろうな。

ぼーっとしてる普段の精神状態の下はきつとあたふたしてるんだ。

だけど目の前の女の子は眠そうな目をしながら凹凸のない体を露わにしている。

目の保養にもならないただの子供だ。

シャツでシルエツトが隠れていたら分からなかったけど、裸になって髪の毛を適切に除けてそれっぽいポーズを取ってみるとこれだけ幼い見た目でも多少は色気……のようなものが出てくる、気がする。

少なくとも男じゃこうはならない感じの。

……髪の毛が体に適当にかかっているほうがそれっぽく見えるか……？

「……………」

……髪の毛がくすぐったいな、やっぱり止めよう。

肌にくちくちく当たるところがこそばゆすぎて笑っちゃいそうだから止めた。

それにしても色気か。

こんなに幼いのに。

ないはずなのにそんな感じの何かを感じる。

って言うことはやっぱり発育不良の小学校高学年くらいの肉体年齢なんだろうか。顔つきも体つきもどう見てもずつと幼いんだけど。

でも小学校低学年くらいで……いや、女の子は成長が早いって言うし、もしかしたらやっぱり体から何かが出てくるのかもしれない。

僕はそういうのに興味がなかったからさっぱりだけど。

ともあれ……なるほど。

起伏のほとんどない体だって、ひねりを加えて横から見れば。

見たことのあるそれっぽいポーズでわき腹がつりそうになったりしながらがんばってみる。

なかでも腰のひねり具合がカギみたいだ。

ふむ。

意外となかなかどうして……。



それから数時間後。

僕は地獄のフタを開けちゃったみたいだって気づいてる。

気がついてから後悔している時間を過ごしてる。



……知っていたじゃないか。

女の人の買い物はやたらといろいろ大変らしいんだって。

だから僕は孤立無援で女性服売り場……と子供服売り場のあいだの試着室。

そこで精いっぱい戦っているんだ。

「お客さま！ こちらの服もとってもお似合いですよっ！」

「よかった、じゃあこれを」

「では次はこちらです！ これまでとは違って少し大人っぽい服装もきつとお似合いだ

と思うんですよ私！ さあ！」

「でも」

「さあ！」

「いえ」

「!!」

「……わかりました、じゃあ着てみます」

「はーいっ！ 今サイズ用意しますねっ」

きんきんとした声が鼓膜を破ろうとしてる。

◇

仕切りを隔てただけのところから声が止まらない。

「お手伝いは本当にいりませんか？」

「いらないます」

「本当に？」

「ほんとうに」

お着替えのたびに何度も聞かれる。

しつこい。



何回か着直したあと。

正直疲れてきたし汗もかいてきたしもうどうだって良くなってきた。

「サイズとか、きちんと測ったほうが」

「合っているので大丈夫です」

「おひとりでも」

「着替えくらいできるので結構です」

「でも」

「結構です」

入って来ようとして手がわきわきしてるのが分かる店員さんからデイフェンス中。



「……………」

僕はいかにも小学生の女の子が着ていそうな服装を何着も次々と手渡されて「着ろ」と言われたから仕方なく着た。

いや、実際にはもつと優しい感じ……じゃなくてきやびきやびした女の子らしい言い方で「これもいい」「あれもいい」って言葉で包んだ脅迫だった。

僕は弱いんだ。

ニートは保護されるべきなんだ。

幼女になったニートはさらに大切にされるべきなんだ。

最初に渡されたままに来て見せて「どれでも合ってる」って言われたから、もうめんどくさいし疲れたし、「着ているのでいいや、これにします」「あとめんどくさいので着て帰ります」って言おうとした。

けど当たり前なんだけど僕は話すのが得意じゃない。

ひとりじつと本でも読んで数日経つことも珍しくない存在。

だから「あ」とか「え」とかをやつと言ったところで次の服を持ってこられるのループに陥っている。

ひどいハメ技だ。

けども必死に「結構です」を連発して妨害中。

どさりとカゴが置かれてカーテンの下から滑り込んでくる。

「こちら、置きますねっ」

「……………」

こんもりとした服を見るに、なんでも今度はこちら系からオシャレ系らしい。

女兒向けの服ばかりだったのに文句を言ったからかちゃんと言った女の人の……レディースが混じってきたのはいいんだけど。

やっぱり服屋は疲れるな。

めんどくさい。

あとうるさい。

いちいち服を脱いで苦勞してどうにか着て、見せて……なぜかひとしきりいろんな店員に見られて感想を聞かされてから次を催促される。

どうだっついていいのに「どうだっついていい」って言う前に「もちろん次のを試すよね？」っ  
て女性特有の圧力で押し潰されそうになって言うことを聞くがまだ。

僕は弱い。

幼女だし。

男だったら……この勢いじゃ絶対ムリだな。

僕だから分かるんだ。

とにかくその繰り返し。

時計を見るともう30分は経っている。

なんていうことだ。

お酒を呑むよりも無駄な時間を過ごしている。

こんなことならお酒を呑んでいたかった。

何回大げさに「はあ——……」っつため息をついて「もううんざりしているアピール」  
をして、もういいですって分かってももらいたくても一向に気がつく気配のない店員の人  
にまたどっさりと服を手渡されて……半分諦めながら僕は何回目かに試着室のなるべ  
く奥に引っ込んだ。

僕は5センチでも良いから他人とは距離を取りたいんだ。

うげ、つて……鏡の向こうの僕はほんとうに嫌そうな顔をしている。

顔が整ってる幼女がすると、それはそれはすごいことになるんだな。

嫌そうな顔をしてる女の子が好き、っていう性癖の人をちよつと理解できた気がする。

あ、けど僕がするのは勘弁だ。

「お客さまー、さっきのがガーリーでもお似合いですので……」

止まらない店員さんの声。

カゴのおかわりが来てしまった。

せめて着替えているあいだだけは口を閉じておいてほしい。

僕は女の子じゃないし、女の子だって寡黙な人はいるだろう。

ああいや、こういうところで働きたい人はきつと話すのが生きがいなんだ。

話していないと死んじゃうんだろうな、この人たち。

しゆるしゆる。

僕はこの煉獄から解放されたい一心で着させられた服を脱いで、畳んである服を開いた。

◇

さて。

時間は遡ること、この地獄から30分くらい前。

駅ビルの1階の広いところで涼んでいた僕。

体力が回復するまですることもないからなんとなく脚をぶらぶらさせている途中で気がついた。

……子供みたいなことしてる。

手持ちぶさたなのを脚でぶらぶらしているだなんて。

確かに肉体は子供になってるけど心は一応は大人の僕は勝手に傷ついて鬱々として……そのうちに元気になると思いますと大きすぎるエスカレーターに恐々として乗って、ようやく何年もお世話になっている服の店に来ていた。

お世話になっているといっても僕が勝手に服を買ってお店にお金が行くだけの関係。ものすごくドライで割り切った関係だ。

わざわざ雑誌を買ってまで服を考えるのもいちいち調べるのも面倒だから、服が欲しくなったときにそこそこに安くてサイズが合いやすくて何より安い有名チェーン店のこの店に来て、マネキンをコピーしたり店員さんに流行りを聞いて適当にセットで買うだけ。

でも意外とこれだけでそれっぽく見える格好になったからお気に入りで入りだ。

そのときの体に合ってるサイズと流行りの色さえ用意すれば半年くらい戦える。

もう高校生くらいから続けているし、これまでの人生でそこそこのお金は落としているはずだ。

まあお得意さんなんだけどチェーン店だし思い入れはない。

ほとんど会話もしないしすぐに店員さんも変わるから気が楽っていうのはとっても大きい。

相手もどこにでもいる普通の男なんていちいち覚えたりしないしな。

話しかけられるのは服屋の宿命だから諦めているけど、事務的なそれは助かるんだ。できたら毎回初対面がベストだ。

世間話も初対面用のセットを使い回せてとっても楽。

もし店員さんが絶対に話しかけてこなくて目も合わせてこない服屋が登場すればすぐに乗り換えるけど……まあないだろうな。

それじゃ服屋のアイデンティティに関わるだろうし。

それに軽く勧められるのを期待してる節もあつたりする。

押し切られるようにして買うことってわりとあるし。

断れないとも言う。

さて、だいたいどの辺を見ればいいのかまで分かっているなじみの服屋だけど今日は



違う。

なにしろ男物……メンズだな、そこへ一直線だったのが女物……レディースとかキツズの間くらいに服しか着られなくなってるから。

よって、まったくこれっぽっちも分からない。

このお店はもう僕の行きつけじゃなくなった顔をしている。

僕はもうダメだ。

そうしよげるくらいに……来る前は適当に合いそうな服をばばって選んでばって帰ろうって思っていたのに、その合いそうな服の見当がまるでつかなくなつた。

どうせ子どもの服だからって甘く見ていたのかもしれない。

よく考えたら当たり前だった。

だって売り場の面積どころかフロアの数まで違うんだから、よくよく考えていたら分かったはずなのに。

僕は途方に暮れるって思いを、旅行先のバスで2時間くらいの僻地に行つて帰りのバスを乗り過ごしてあと2時間くらいなんにもないところまでぼーっとしなきゃならなくて気がついたときくらいに絶望した。

今までなら売り場に行けばすぐにマネキンとかで流行りがセットでそろえてあつて、その中から適当に好きなものを選んだりあるいは勧められたのを試着したりして

「これ買います」で済んでいたのに……マネキンの数自体がそもそも違うし着せてある服の種類も何もかも。

僕が目から見ても何がどう違うのかぜんぜんよくまったくこれっぽっちも分からない。

なんで女の人の服ってこう似てるようでぜんぜん違うんだ。

かといって棚を直接見てみても男の服のに比べて何倍もあるし。

服の呼び方もなんだかよく分からないカタカナ用語で満ちあふれているし。

ここ、僕が知ってる文化圏だよな……？

そう思って見回してみる。

値段とかを見ても安くはあるけど知ってるような単語が書いてあって、でもその見当が皆目つかない。

これはあれだ、単語が分かってても文章になると分からないって言うあの感覚に近いんだ。

ニートの傍ら余りある時間で意味もないのに無駄に時間だけは費やしたから語学力はそこそこあるつもりなんだけど、どう見ても単語は知っているけど意味が類推できないカタカナばかり。

おかげで手に取って広げてみるまでそれがどういふものなのか分からない。

広げてみてもそれがどんなパーツなのかしからない。

……………これとこれは名前も形もちよつとだけしか違わないけど、何がどう違うものなんだ……………?

謎だ。

謎しかない。

この世界にこんなエリアが存在したなんて。

僕は女の子になって初めてばつかりだな。

こんなことなら来る前にネットで軽く調べたらよかつたのかも。

けど出かける前には外に出るためのこの服を探したりするの精いっぱいと思いつきもしなかつたからなあ。

家を出るための服を探すのを諦めて素直に通販を選んだ方が絶対に楽だったって気がついたけど、来ちゃったからには買わずには帰れまい。

「……………」

じとつとした汗がこめかみから垂れる。

女の子でもこういう汗かくんだな。

当たり前か、人間なんだから。

それにしても居心地が悪い。

完全にアウエーだ。

ここは僕のような人間とは真逆の空間なんだ。

服を探してうろうろしているだけで何人もの店員さんたちから見られているのをひしひしと感じる。

ガン見してくる人までいるし。

男のときは眼鏡のフレームで上手に遮れたけど今は裸眼だ。

そんな逃げ場はない。

なんてことだ。

もう帰りたい。

僕の口元はちよつとだけへの字になる。

でもなんでこんなに見られるんだろう。

外じゃそんなんじゃないやなかったはずなのに。

ダサいからか？

やっぱり服屋で働く人的にはアウトなのか？

オーラの的な何かで分かるんだろうか？

女の人の第六感とかなんとかで。

この格好はNGだったのか。

……まあよつてたかつて話しかけてこないだけマシだけど。

出てけとか言われたら3ヶ月くらい引きこもる自信が出てきたぞ。

マイナスな自信が出て来たから気がついたけど……服のお店なんだからあたりまえなんだけどもんだかふだん来るときとは違う雰囲気。

なんだろう、この空気。

話しかけてくるわけでもなく買わせようと迫ってくるわけでもなく、ただ遠巻きに見てくるだけのな。

「むー？」

そこまで変な格好じゃないはずなんだけどな。

チャライ感じだしダサいけど。

でもぶかぶかだったりぴちぴちすぎる服を着てる人とかに比べたらのはず。

いや、確かにぶかぶかだけどおかしいほどじゃないようにがんばってきたし。

うーん。

分からない。

うつとうしくなってきたからツバを下げた帽子で視線を弾くけど、それにしても不快だ。

僕は人に見られたくないのになあ。

なんなんだろうかこの状況。

ひそひそと居心地がとても悪い。

ひよつとして買いに来ていると思われていないんだろうか？

あるいは……………つて。

「あ」

あ……………。

僕は気がついた。

僕が自分でやったことなのにすっかり忘れていた。

やっぱり僕の頭は家の中でもアレなのに外に出たらさらにダメだ。

ご近所対策で変装、男装していたんだから一緒に来ている母親を探しているとかあるいは間違つて入ってきてしまった少年とも思われていたんじゃないだろうか。

なにしろここは女の人と子連れの間なんだ、そこに男……子供でも、がいたらそりゃあ反応に困る。

迷子と決めつけられなかっただけありがたいがとうつてものだ。

男として見られていたのなら、ひとまずこの格好なら家からすぐのところでも通報はされにくいってことで成功。

ひとり暮らしの男の家から少年が出てくるか少女が出てくるかで想像される内容が

著しく変わるんだから。

それが人つてものだしな。

フードに帽子を入れたまま外して髪の毛を肩あたりまで出してしゆるしゆるって口元を隠していたストールも解いていく。

フード付きパーカー+帽子+マフラーじゃなくてストールっていう完璧な擬装で来たのをすっかり忘れてたんだ。

どおりで暑かったわけだな。

春になったばっかり特有の一回夏みたいな暑さに感じる時期なんだ、そりゃあ暑いだろう。

「…………ふうっ」

息が涼しい。

うん。

さわやかだし圧迫感がなくなった。

近場にある鏡を見てみれば、さつきまでのチャライ格好をした怪しい少年からどう見ても女の子な印象になった。

手にはストールがこんもりでパーカーとズボンとサンダルは変わらずにぶかぶかだ  
けど。

……髪の毛、肩くらいまでしか出さないと男でも通用するような……？

前よりも眉間から鼻筋がはつきりしているせいだろうか。

うーん？

そんなわけでもないような……。

ちよつとじつくり顔を眺めるけどすぐに飽きた。

まあいいか。

男か女かなんてのはどうでもいい。

この状態なら大丈夫だろうしさつきと適当な人に話しかけて見繕ってもらおう。

◇

「お客さまー？」

……そう思つて適当な店員さんに話しかけてしまったのが僕の運の尽き。

僕はもう終わったんだ。

女の子になつて2日目にして終わりを迎えている。

こうして、まだ地獄でなかつたころを思い出して浸っているくらいしか心の安寧を保

てそうにないんだ。



外からはすぐそばで待ち構えている気配が漂ってくるし。

早く着替えて見せろって言うすさまじい重圧が。

……もう、お家に帰りた。

だれか助けて。

家の中で虫が出たときくらいの絶望感のせいで心なしか、女の子な僕が余計にちつちやくなつて見えた。

## 5話 出会い未満の出会い その1 2/2

時間が巻き戻れば良いのに。

そう思いながら現在進行形で着せ替え人形な僕は、後悔し始めるほんの少しだけ前に意識を飛ばす。

僕は現実逃避だけは得意なんだ。

変装を解いてどうからどう見ても女の子、女兒じゃなくて女子って言う存在に格上げしたように見えるようになったら僕。

もんもんとどうしようかって思ってたけどさつきと終わらせようってことで、遠巻きにしていた店員さんの中でもわりとまじめにもくもくと作業をしている人に目をつけた。

接客をしているわけでもないし特別に忙しそうでもなく……ときどきこつちを見ている程度の控えめさが気に入った。

あと、ガワの年齢がいちばん近そうな人っていうのも大きなポイントだ。

今ちようど目のあったその人……子は高校生のバイトって印象。

大学生にしては化粧っ気がないし研修中の札もつけているし。

慣れていなくてもいいんだ、遠慮があるってだけで会話が減るから安心なんだ。

身長もわりと高めで、ウエーブのかかった……かけたのかな、そんな毛先だから髪の毛は縦に長いし、あと体つきも結構凄いがど静かに越したことはない。

他人の見た目なんてちよつと前までだったらこんなな意識することもなかったけど、なまじ視点が低いから近づくにつれて頭上にせり出してくる球体がどうしても意識せざるを得ないものになっている。

普通の男なら喜ぶんだろうな、こういうの。

醒めた目で頭上の双丘を眺める。

普段の僕なら別になんとも思わなくて視線を素通りしているはずなんだけど、目線に近いんだからしょうがない。

JKって年頃、属性は男なら誰でも好きらしいけど僕はそういうの興味ないしな。

年上にしか興味がないんじゃないかなかったら危なかったかも。

もちろん今の僕だから精神年齢的な意味で、だけでも。

……この体だと大半の人が年上になるのか。

さらに見下されるな。

そんな悲しい現実を察知した僕は悲しくなったから、それを忘れようとしてその人にさつさと近づいて適当に声をかける。

「えっと、すみません。服を探しているんですけど」

「ひゃいつ!？」

びくってなる。

汗がぶわってなる。

……………僕の方が。

想像していたよりもずっと若い……幼い感じの声、あと、びくってなる程度に大きい声が上から降ってきた。

出会い頭にお互いでびくくり。

なんにも考えないで歩いているとよくそういうのに出会う。

そのたびに僕もびくってなる。

ちなみに今の僕は上を向いて話さなきゃならない。

よって胸と顔が一緒に視界に入ってしまうのは仕方がないこと。

しようがないことなんだ。

わざと見ているわけじゃないんだ、本当に。

やましいところはないんだ。

……………。

おんなじ人間なのに、どうして女性の胸ってこうなるんだろう。

原理は理解していてもやっぱり不思議だ。

「あ、あれ……？ 女の子……？ さっきまでは……」

ぼつりとその子が首をかしげながら僕を見る。

「……ち、ちよつと、接客よ接客！」

ささつと別の店員さん。

「すみません……あれ、えつと、え、私ですか……？」

「できるわよね？ 早くしてあげて！」

「ひっ、分かりました！」

あわあわしてるJK店員さんにこそそそしているようにいってけっこう大きな声で入  
れ知恵してる20代の店員さん。

けどJKさんのあわあわは止まらない。

すでに顔が真っ赤だ。

対人恐怖症的な親近感を覚える。

「……………」

……けど、どうしてそこまであわあわしてるんだろう。

たかが子供に話しかけられただけだろうに。

いくら僕でも小中学生相手なら平気だぞ？

20代さんがひそひそを抑えない。

こういう風に接客するの、っていうアドバイスがぜんぶ丸聞こえだ。

けど僕は大人だからじつと待つ。

スーパリーのレジの新人さんとかを優しく見守るのは得意なんだ。

他人に期待しないからっていうのもあるんだろうけども。

「……あ、はい、ど……どのようなのを、おしやがし……ですか……あうう……」  
囁んだ。

かみかみだ。

服屋の店員としてはちよつとメンタル弱いんじゃないかこの子？

驚きすぎだろう。

見た感じでいちばん接しやすいからと思つて声をかけたんだけど。

人選まちがえたかな。

さつきまで変装していた僕もまあ悪いんだけど、服屋でお客に声かけられてそこまで驚くものなのかな、普通。

顔、真つ赤にしてぶるぶると震えているし。

子どもから話しかけられてここまで緊張しているのを見ていたらなんだかちよつと親近感が湧いてきた。

どうやらこの子は僕サイドの子らしい。

……親近感はいいんだけど大丈夫かなこの子で。

子供相手にここまでつてのは大変な気がする。

まあこんなに驚いているつてことはさっきの変装で完全に今の僕だとは思えないつてことだから、男装自体は成功してるのが分かって嬉しいんだけど。

まあいいか、さつさと済ませてしまおう。

汗だくになってきているのを見ているだけつていうのも忍びないし。

同じサイドのよしみだ、気がつかない振りをしておこう。

僕は大人だからその程度の気遣いはできる。

ガワはギリツギリ少女な中身幼児だけど。

で、さつさと注文を言つておこう。

こういう人相手には具体的が良いから……。

「あの、とりあえずで今着ているような男っぽい感じのもの……サイズ感は普通で良いです……と、僕に合いそうな流行りの、ちよつとだけ女の子っぽい服を2、3着選んでほしいと思つて。あと来たついでなので下着とか靴とか帽子なんかもみんなまとめ揃えたいんですけど。せつかく来たのでついでです」

こくこくこくともものすごい勢いで首を……頭を振つているのを見ながら考えていた

セリフを吐き出す。

ふだんはひと月で、長くても合計で10分未満しか人と話さない僕でもきちんと用意しておけば言いよどむことはない。

少なくとも、この子よりは。

みんなはどうしてあんなにべらべらと何十分でも考えないで話せるんだろうな。

この子とか僕にはその技能が欠けているのかもしれない。

「は、はいっ……分かりました。……あの、好きなデザインや、あと、その、サイズ、などは……」

ちらつとでかすぎるサンダルを見て「下着まで？」って顔をしながら聞かれるけど、こは勢いで押し切る。

そのための人選だし。

ちよつと怪しいけどな。

ともあれ堂々しよう。

おどおどしてない体面だけは得意なんだ。

「ふだんは家にあるものか兄のお下がりしか着ないのでよくわかりませんし、最近背も伸びてきたので春のものをまとめて揃えたいんです。必要だったらサイズも測って

もらえますか？」



まくしたてる。

それっぽいいいわけとそれっぽい感じの話しかたで、ついでに分からなかったサイズとかもまとめて知ることができて楽ができる。

もちろん想定通りだ。

「……分かりました！ お持ちするのに少々時間がかきや、かかりますので、こちらの更衣室で、少し、お待ちください！ ……急いで探してき、ます……」

噛み噛みでそう言い切ってどこかへと走って行く店員さん。

ついでにいつの間にかさらに3人ほど寄ってきていた他の店員の人も聞くなりささつと離れていく。

走って行くことはないのに……。

特におかしいことは口にしなかったから大丈夫だと思っただけ。

あ、他の店員さんに聞いているっていうか話しかけられているな。

やっぱり新人さんだったのか。

たぶん働き始めて数日ってレベルの。

それにしても一気に何人かの店員さんが動き出している。

この人たちそんなにやる気あつたつけ。

ないからこそわざわざここへ来ていたっていうのもあるんだけど……。

ぼつんと取り残される幸せに浸る僕。

こういうのは人に任せてこそしあわせ。

「あ」

そもそもいつも、ここでもイヤホンとかして必要なときだけ僕から話しかけていたんだった。

それで普段と違うように感じるのか。

あとは僕がちっこいからってのもあるんだろう。

女の人は子供に弱いらしいからな。

そうしてしばし。

「……………」

すぐに来るかと思っただらせんぜん戻ってこなくて待ちぼうけを食っている感じになつてきたから適当なカーテンの前に腰を下ろしてぼんやりする。

ちらりと後ろを振り返るとそびえるような高さの全身を映す鏡には……今のところは僕が「入っている」らしい、とにかく色素の薄い外見の幼い女の子。

首を傾げるだけでフードに隠していた髪の毛が少しずつぱらぱらと外に流れ出てくる。

それをしまう。

……さらさらしてるな。

それにしても、やっぱり顔と髪の毛だけ隠して下をズボンにしてさらにパーカーで上半身の細さを隠したら背丈以外の情報は隠し通せるんだな。

思いつきでも案外うまくいくもんだ。

……逆に言うとな今ののように顔と髪の毛をばっちりで見られたらさすがに少年だとは思ってもらえなさそうなんだけども。

まあそれは気をつけていけばいいし。

フードを被っていけば良いんだからむしろ気が楽まであるしな。

……これからの季節はちよつとだけ大変そうだけど、まあなんとかなるだろう。

理想はサングラスとかマスクまでして完璧に隠れることだけどさすがに怪しすぎるな。

秋とか冬ならまだしも、さらには大人ならまだしも子供だし。

今なら花粉症だということで行けるか……？

いや、さっきので隠し通せていたんだからいいか。

めんどくさいし、マスクは暑くて息苦しいから苦手だし、めんどくさいし。

ともかくこれが年の近い女性から見てもそうだと分かっただけで収穫だし、同時に隠さなければ僕の目に映るとおりの女の子だと……他人からでも認識されるらしいこと

も実証できた。

女性服エリアで女の子の服を頼んで「えっ？」ってならなかったんだから大丈夫なんだろう。

たぶん。

ようやく、この体になってからようやくと目で見たとおりの外見になっていることが確定したわけで、残念なようなほつとしたようなものによもよするような複雑な感情が渦巻く。

「男性用の売り場はこちらですよ」ってさりげないフォローで移動させられるのをどこかで期待していたんだけどな。

そう考えると女の子だと確定してしまったという表現のほう正しいのか。

うーん。

嬉しいような悲しいような。

「……………お待たせしました！」

お、ようやく来たか。

考えに沈んでいた意識を戻すと鏡を見たままで固まっていた僕の髪の毛は結構……  
というかほとんど落ちて手の甲にまでかかっていた。

くすぐったい。

……声と一緒に、また走っている音がする。

別に急いでいるとはひと言も言っていないなかつたんだけどな。

仕事熱心なのか生真面目なのかその両方か。

まあ新人さんのバイトなら大半がそうなるのかな？

さてさて、それじゃあ他人から見ても僕に合いそうな服はどんなもの。

「……………う？」

「とりあえずは、こちらですっ！」

首を戻した僕の目の前にどつさりと置かれたのは、服を持っていたらどうぞといつも渡される布でできた大きい袋の中にみっちりちりの服。

みっちりみち。

それが、みつつ。

……とりあえず？

これが？

えつと、僕、そんなに頼んでない。

「他の者と手分けしてお客さまに似合いそうな服を集めてきました！ サイズも大きかった場合と小さかった場合と両方揃えましたし色のパターンも揃えました！ さあつ、まずはどれにしましょうかっ！」

頼んでない。

近い近い。

頼んでない。

目の前いっぱいには広がる店員さんの顔と胸で強烈な圧を感じてのけ反ると、さらに詰め寄せられた。

この子……さつきとぜんぜん違う？

別人じゃないのか？

「着慣れていらつしやると見受けられる男の子っぽいファッションにしましょうか？

あるいは中性的で、それとも大人びた服装ですか？ それともまずはかわいらしい服を

試してみますか？ さあ、いかがなさいますか!？」

「……………」

離れて。

だから近いって。

ぐいつとアツプになるその子の顔は、なにかとても素敵なものを見つけたみたいなお表情になっていて、走っていたからか少し紅くなっている。

けど、違う。

そうじゃないんだ。

そこまで気合入れて欲しいって言ってない。

適当なものをセレクトして欲しいのに全部持ってこられても困る。

いきなり過ぎる展開で僕の口も頭も追いつかなくてフリーズしている。

いくら準備すれば人と問題なく会話できる僕だって準備していなければムリなんだって。

あと、やっぱり近すぎるから離れて欲しい。

近づかれすぎると考えるどころじゃないんだって。

パーソナルエリア的なそれに入って来ないで。

僕は弱いんだ。

……………でもこの感じ。

どこかであつたような？

……………。

……………ああ。

この強引な感じは昔、母さんが服を着せてきたときと同じパターンなんだ。

……………だったら、きつと。

一切の抵抗は無駄なんだ。

だから。

「予算に収まるなら何でもいいです。 ぜんぶお任せします……………」  
「お任せください！」

……………迫ってくるのから逃れたい一心でどうにか返事をした。  
してしまった。

けどしようがない。

もう駄目なんだ。

暑苦しい。

こういうタイプの人は苦手だ。

なんでさつきまで擬態してたんだ、隠さないで欲しかった。

ずるずると更衣室へ。

「……………」

やっぱり親を待つとか言えば……………いやいや、それだと帰りもこの格好だしせつかく来た意味がなくなってたただ疲れただけになって損した気になるし。

諦めよう。

真横に張り付いている……………正確には斜め上だけど、その子が何かを言うたびに会話がムダに膨らんでいくから下手に口出ししたりしないで、黙ってハイハイいつておくのがいちばん楽で正解なやつだって分かった。



だから僕はb o tになるんだ。

相槌さえまちがわなければ言はずなんだ。

きつと。

店員さんがごそごそと出していく服の感じは、どう見てもちよつとませた小学校の女の子がよく来ているようなドのつくピンクとかラメでキラッキラしているやつが多い。

……今着ているこういう服や「ちよつとだけ」女の子らしい服装が見当たらないんだけど？

ちよつと？

これで？

……女性の価値観は分らない。

それにこの子、さつきと違ってものすごくはきはき生き生きしているっていうか待ってそもそもさつきまでのどもりっぷりと緊張っぷりはいったいどこへ？

やはり擬態か。

同情して損した。

僕はしよげた。

だるんつてなった。

嫌な予感しかないけど……とりあえずこれだけはわかる。

人選、絶対まちがった。

素直に慣れてそうな人を選んでおけば良かったんだ。

後の祭り。

後悔とはなんとやら。

もう、さつさと選んでもらって帰りたいってしか考えられない。

そうして回想が着せ替え人形 *bot* になっている僕の中で追いついちやって、僕はもう1回思考を今朝まで飛ばした。

早く終わりますように祈りながら。

## 6話 出会い未満の出会い その2 1/2

僕は脱いでトイレに座って……登って落ちないように坐って、ふと下に視線を向けて思う。

膝をつけて太ももにぐつと力を入れて、どれだけ内側に締めてもやっぱりすき間ができる。

男のときにはなかった……あるいは邪魔されて見えなくなっていたすき間。

こういうひとつひとつが違うんだよね、男と女って。

ないからってだけじゃなくて確か骨盤からして違うんだっけ、男と女。

痩せているからっていうわけだけじゃなさそうだし。

数秒で疲れたから力を抜くと、しっかりとしたすき間が広がる。

三角形に。

……お股のあいだのデルタゾーン。

適当に呼んでみたけど不思議。

男のときにはそもそも上が塞がれていたから、あつたとしても物理的に見えなかった

空間。

それが今は僕のお股のあいだにある。

いや、なくなっているからこそ出現したとも言える？

なんだか不思議な言い回しだけど実際にそうなんだ。

けどこういうの……そういう特別な誇張とかじゃなくて本物だったか。

……やっぱり男と女は子どものころから元の造りが違うんだな。

「ふむ……」

女の子の体のことをこの歳になってこんな形で知るなんてな。

興味深い。



「はあ——……………」

バランスを取って立っているためだけに開いている目をこすりつつ、でつかいため息をひとつ。

いったい何着を着させられたんだろう。

5着から先はもう覚えていない。

でも確実に10は超えているはず。

だってこんなにもずつと店員さんたちのおもちやなんだもん。

人によってはJKからJD、良い感じの歳のお姉さんたちに囲まれるって言うのはご褒美なんだろうけど残念ながら僕にその適性はない。

手取り足取り従ってたけど断固として拒否した。

僕は世話を焼かれないんじゃないかなんか。

だから僕はこうして嫌そうな顔をするしかないんだ。

次から次へと渡されて断るヒマも断ろうと口を開けるヒマもなくて、心配だから着替えすら手伝ってあげるって雰囲気から逃げるだけで精いっぱいだった。

いろいろな服を着せられすぎたおかげで途中で諦めがついて、ぼーっと着替えては見るのを繰り返しているうちにゲームとかでアバターを着せ替える感覚になってきたのは収穫だったけど。

やけにリアルすぎるけどそこは数年後か十数年後の体感型VRとでも思えばいいしな。

けどもあのときに鏡に映っていた僕の目は綺麗だったけど死んでいた気がする。

……ちよつとだけあった気がする遠慮が綺麗さっぱりになったのはありがたいつて思っておこう。

そのための犠牲は僕のおもちやにされたメンタルだ。

けどもとにかく体力を消耗した。

来るときのものとはまた別の種類の疲労を感じる。

つまりは精神的な疲労だ。

疲れたぶんだけまともな服は手に入ったわけだけど……たぶん通販のほうがつと楽だった。

僕はまた間違えたんだ。

この先1歩も家から出ないってわけにはいかなから近所で女ということを隠すための服と、出先でも人に紛れるための女物の服。

着せ替えされるのは大変だったし途中までは気恥ずかしかったけど、この体に合いそうなものを選んでもらえたのはよかった。

新しい扉を死んだ目で開けたんだ。

いや、こじ開けられた？

ほぼ総当たりって感じだったけど、まあその組み合わせを自分で選んで自分で取りに行つてを繰り返すよりは早かったんだろう、たぶん。

……そんな必要はなくて、ただちよつとだけ合うのが欲しかったんだけどなあ。

女の子になって早々に女の子は別の生きものなんだって思い知らされたんだ。

僕がひとりで選んでいたら男物はともかくこの先の夏という暑い季節、髪を出して人

混みに紛れられそうな女の子の服を選ぶなんてできない。

スカート系なんかはどれほど勇気を出したってこうして目の前に置かれないと履く気がしないし、いい機会だったんだって思い込んでおこう。

ネットでも用語が分からなくて変えなかったかもしかなくって、結局こうなる運命は変わらなかったかもだし。

あと、いくら子どもものものとはいえ女の子の下着を手にとって選ぶっていうのはちよつとだし。

悪いことをしているわけではないんだけどやっぱり悪いことをしているとしか感じられないし。

……しかしこれだけ買ってもまさか予定の半分以下のお金で収まるなんてな。

僕は目の前を歩く店員さんのおつきなおしりの横で揺れている、服が詰まったふたつのビニール袋を見つめながら価格差に改めて驚愕していた。

女性服が安いっていうのは本当だったみたいだ。

子供服が混じっているせいだとは思うけど……適当な靴とかまで何着かを一式揃えてこのお値段。

もともとこの系列が安いというのもあるしセール品とか結構混ぜてくれていたみたいだし。

それと今がセール期間中というのもあってさらにトータルで割引がかかるから安い。春休みだしな。

そう考えるとこの見た目はなにかと物を買うことについては都合がいいのかもしれない。

……そもそもこの体にならなければこの出費自体もなかったという事実は置いておくとして。

ただ、こうして現実逃避してる問題がここでひとつ。

おしりが……おっと、店員さんが立ち止まって振り返ると心配そうな顔でのぞき込んでくる。

上から胸と一緒に。

たゆんと圧が。

「お買い上げいただき、ありがとうございます……えっと、その」「重さはなるべく同じくらいになるようにしましたけど……」

がさりと手渡される、ずっしりとした感覚。

「……本当に大丈夫ですか？」

さつきまではみんな店員の人たちが持つていてくれたから分らなかったけど、どうやら筋力も年相応に落ちてきている様子。



なんという計算ミス。

体力がないのは分かってただろうにな。

……これだけ重い物なんて軽く家事をするくらいでは持たないもんな。

洗濯物だつてまとめないで毎日洗うし。

お風呂場で疲れたようなのはあのとときだけじゃなくて、これからしばらくは続くのか。

ちよつとは体力をつけないとまずいかも。

とにかく、ここに来る前は元の体基準で「たぶんちよつと重いくらいだろうし大丈夫だろう」って思っていたけど今だと両手が、いや、両腕が指先どころか肩まで痛い。

持っただけなのに。

「うぐ」

地面に貼り付けられる感覚。

僕はもうダメだ。

やつぱりまとめて買ったのは失敗だったか……。

でもでもできるだけ外出も人と接するのも最小限にしたいし、なにより必要だったんだ。

店の出口まで持ってきてもらっただけでありがたいんだ。

あととはがんばろう。

男は根性。

今は女だけだ。

「はい、大丈夫で……す」

なんとか返事をするも頭の中には重いと痛い以外に浮かばない。

なんなら体ごとぶるぶるしている。

さっきの擬態したこの子みたい。

かといって今さらやっぱりムリとか言い出せないし……。

ほら、そういうのって恥ずかしいし。

「かわいい……コホン、ほ、本当に大丈夫ですか？ 重かったら私がお父さんかお母さん

……とか、その、お付きの人……？ とががいるところまで、一緒に持つていきましょ

うか？」

また顔が紅潮してくるJKさん。

接客が終わりそうになったからまた人見知りか復活したのだろうか？

あとなんだお付きって。

……ああ、一緒に来た大人ってことか。

変わった言い回し。

今時の流行りなんだろうか。

けど……：そうだな、こんな格好できたんだしこれだけ買ったしカード払いだったし。ひとりで買いに来たんだとは思わない、か。

ちよつと背伸びをして初めてのお使いとかお買い物的な目で見られていたんだろ  
うか。

中身はガワの倍の年齢なのに。

悲しい。

僕はしよげる。

けども着替えている途中でも雑談的な感じで止まらなかつたトークの内容的にやっ  
ぱり今の僕は見た目は小学生止まりだということが分かつた。

そのへんはなんとかごまかしたけど。

聞かれたことを全部「そんな感じ」とかで乗り切つたのは日頃の成果だ。

だけどカード、使えてよかつた。

ほんとうに。

これが使えなければ少し面倒だったからなあ、ATMの機械の高さと僕の身長的に。  
あと警備員の人とかに止められないかという不安的に。

カードつて子供が持つても良いものなんだっけって思ったけど良いらしい。

ついでに使っても不審がられなかったから助かったけど。

「あの……」

おつといけない、踏ん張るのに夢中でつい意識が飛んでた。

「いえ、大丈夫です……、少し、重いけど……」

「……そうですか、分かりました。あ、どうしても重かったら、1階の出口のところ

送ったりもできますからね！ ……それではまたのご来店をお待ちしています、お

客さま！」

「はい、どうも……」

もう行かない。

来てやるもんか。

そう思うけど僕が唯一に通ってるんだ、きっとまた夏とかに来ることになるんだらう。

「……………」

振り返ると手を振っている女子高生さん。

……年下、それも女の子に心配された。

見た目的に仕方ないことなんだけど、でもやっぱり中身男としてはなあ。

こう、面倒を見られるって言うのはこう。

なんか来るものがあるんだ。



僕は絶賛寄り道中。

普段なら絶対しない無駄な時間を過ごしてる。

家の中に居た時点でこの体は不便だって分かった。

家から出て普段10分のところをのたのた歩いてこの疲労だって分かった。

けど、どうしても思う。

何でもかんでもかすぎ。

ちよつとはちっこい人のことを考えてほしいって。

……そんなわけで目の前にあるテーブルが高い。

イスも高いし、なのにテーブルに対しては低い。

そしてプレートの上の食べものすべてがでかい。

相対的に。

まあ体重からして大人の半分だししょうがない。

買ってきた服を何枚か敷いてもやっぱり変わらないしな。

荷物と体と食べものを載せるような感じにした僕はようやく落ちついて見回す。

ずいぶんと久しぶりに……：……：……：そういえば年単位で来ていないなあ……：……：来たバーガー的なファストフードの店内。

服屋っていう地獄から生還した僕はそのまま家へ寄り道せずには帰る予定だったんだけど、服のかたまりを持つ手が限界になりそうになってきて体力もつきそうになってきたから、完全にバテる前にジャンクな店に入ってしまった。

雑な感じにうるさくってイヤホンしてたら快適だっただろうし、カウンターで子供用のメニューを屈みながら見せられたときは心臓が痛くなったけど、なんとか切り抜けたんだ。

そうして低い視点で人にぶつかられないようにして気をつけながらトレーを運んできてここに落ち着く。

初っぱなからまた無駄金を使っちゃった感じがするけど、道ばたで力尽きて動けなくなつてありがた迷惑にも親切な人の興味を引いてしまうのもいただけなかつたし必要経費だと割り切ろう。

まちがってお巡りさんと遭遇したらおしまいだしな。

かと言ってタクシーまで使うようじゃ末期だしなあ……。

それに外食って言ったってたいした額じゃないし、たかが数百円だし。

ガチャ2回分だつて思えば安い安い。

.....

金銭感覚がいけない気がする。

だけどいくら重い荷物を持つているからとはいってもここまで疲れるとは思わなかった。

動けなくなるほど重いものを持つたりして疲労しきつたりしたのはいつ以来だろうか？

結構重めな風邪を引いたときみたいに立つてるだけで体が重くなって目の前が暗くなる感覚。

思い出してみても……少なくとも高校に入ったころにはこうして全力を出し切る感覚っていうのは経験しなくなっていたようにも思えてくる。

とすると10年くらいか。

もはや昔だな。

さっきのJKさんが今の僕の肉体年齢くらいなんだ、そりゃあ昔だろう。

小さな体に大きな荷物を抱えて駅前の人混みを苦労して抜けたのとぶつからないようにして気を張りながら歩いてきたせいもあるんだらうけど、ここまで体力と筋力がないのは……少し、いや、だいぶまずい気がする。

重いとはいっても冬物でもない服を持ってここまで疲労したんだからな。幼女とはかくも弱い存在か。

鍛えないと。

疲れているのにテーブルに肘を置いたりする楽な姿勢ができない。

だつて買った服をおしりに敷いて20、30センチかさ上げしてようやくなんでもん。

だからずっと背中を伸ばして身を乗り出すようにして食べないとこぼしちゃうだろうし、なんなら落ちちゃうだろう。

背が低いってことは胴も短いってことだもんな。

これの対策はいちど考える必要があるそうさ。

足も宙に浮いてるし、とにかく不安定この上ない。

とはいえ家を出てすでに2時間ほどが経ったし、半ばではあるけど往復の長い道のりとあの地獄を経験した僕のお腹は結構空いている。

ちようどお昼時でもあるしな。

途中でバテてきたのも空腹だったというのもあるのかもしれない。

確か血中の糖分が少なくなると力が出なくなってくるんだっけ。

お腹が空いて力が入らないってだけかもしれないけどな。



これだけ小さい体だしガリツガリだし、きつと溜めておけるエネルギーが少ないんだろう。

ちよつとは肥えさせないと。

色気とか以前の問題だ。

もつともこの年齢で色気を発したらいろいろまずい気がするけど。

……前の、男の体基準で物事を考えるクセもいずれば治さないといけなくなるかもしれないなあ。

中身まで女にはなりたくないけど。

ならないよね？

「……………」

まあいい、ともかくエネルギー補給だ。

両手で包み紙をなんとか持ちって紙の中でぐちよつとはみ出してくるくらいに上下をぐーっと押しつぶすようにした上で口を大きく開けてバーガーを頬張る。

盛大にほっぺたにぐにゅってはみ出る感覚。

口の大きさがバーガーに負けたらしい。

……でかいんだ。

ナイフとかフォーク使えば行けるかな？

ほつぺたと両手についちゃったソースを拭きながらそろそろと見回すけどそれらしきものはないらしい。

……高めの店じやないかないか、さすがに。

いや、言えばあるかも？

……。

……めんどくさいからいいや。

めんどくさいのは全てに優る。

そうしてがんばって外から食べていくも一向に小麦粉の味しかない。

まだ中身に届かない。

あふれたソースでバンズを食べている感覚。

これだけでお腹がいっぱいになりそう。

それにこうして食べていると唇が千切れそう。

冬場はいつつ痛いからなあ。

……次からはバーガーは止めよう。

体にも良くはないんだし。

「……………もむもむ」

いや、でも。

この独特の匂いと味はたまに食べるとクセに……。

◇

もさもさと口を動かす。

はじめの数口はただの味のないパンの味しかしなかったけど、にじみ出てきたケチャップとか中身まで届き始めてようやく懐かしいジャンキーな味が口に広がってきた。

こういう学生時代に食べ飽きたジャンクは1回食べたらしばらくいいやつて感じになるんだけど、何ヶ月かするとふと食べたくなるんだよなあ。

カツ丼麺とかもそうだけどなんだろう？

ニート生活を1日でも長続きさせるためについて節約を意識して普段はほとんど自炊しているけど、時たま外に出たりするとこうした味が無性に食べたくなるんだ。

ポテトとかスナック菓子とかそういういったものとおんなじ部類？

中毒性とか依存性とかありそう。

あるんだっけ？

そういう記事とか本とかを読んだ覚えが。

ジャンキーでおおざっぱで中身を食べ出して数口でもうすでに飽き始めてきた味を咀嚼しながら、見るともなしに周りを眺めつつこの体について考える。

……このひ弱な体について。

重い思いをしているうちに思いついたのは、この体力のなさは元の僕の体の体力とかが反映されているのかもしれないということ。

だって仮に小学生だとしたって、荷物が多い日の学校への往復とかで歩けなくなるほどにバテるっていうのはあまりにも貧弱だから。

荷物が重いといってもたかが服、それも春服だし……あつて2、3キロだろう。

小学生だって少ない体力でも学校への行き帰りくらいはできるんだ。

今の僕はそれ未満。

園児だつて言われてもぐうとも言えない。

こうして力尽きようとしているのが証拠。

子どものころは学校まで片道20分くらい歩いてた覚えがあるけど、いくら歩きにくかったりしたって……たとえ体育があつて走り回ったりしたとしても、帰り道でここまで疲れ切るなんてことはなかったと思うし。

しかも確か小学生くらいまでって、女の子のほうが全体的に体も大きくて体力も力もあつた気がするし。

っていうことは。

この体が見た目以上にひ弱なのはこの体が弱いからだけじゃなくって、変わる前の僕の筋力とかが影響しているかもしれないという仮説が立てられる。

立ててみただけでも。

だつて暇だしな。

そもそも男が女になって若返っちゃつてさらに別人になるだなんて摩訶不思議なことに理由なんてあるはずがないもん。

けど何かにつけて理由を見出したいのは人の本能。

だから良いんだ、適当に考えておけば。

そういうわけでどれだけひ弱なのかを考察中。

最後にまともな運動したのは思い出せないくらい前。

普段もたいした運動なんかしちゃあいないし。

帰り道はこれでも随分軽くなったのにこれなんだ。

帰り道の前にビルのトイレで着替えて、そのときにもうて古いのは捨ててきて、多少軽くなったはずの荷物でこれだからな。

ようやくまともな下着で……タイツのおかげで余計にすーすーするとう未知の感覚が止まらなかつたお股を保護できてひと安心だ。

女子高生さんからキャラクターものを断り続けてつかんだワゴンの無地の白パンツ3枚で5000円の安心感。

視線をバーガーより小さい両手から足元に移すと驚くくらいに小さな新品のスニーカー。

まだ硬いけど、それでも足に合って歩きやすい靴でもそれほど変わらないってことはやっぱり素の体力が足りないんだと思う。

まあこの体歴2日目だしな。

まだまだよく分かっていないからあれこれ考えるのが楽しかったりする。

こういう考察系って好き。

……わりと大切っぽいし。

元の体で体力的なことが気にならなかったのはきつと、単純に成人男性という恵まれた体格のおかげ。

そのまま幼くなればこうなるよな。

いろいろともどかしいけどしょうがないものはしょうがない。

男ってだけで身体的に有利だったのは知識としては知ってたけど、こうして実感するとすごかったんだって分かる。

失って分かるってのは定番。

失ったものが多すぎるけど。

とにかくインドアとは言ってもやっぱり成人の男と子どもの体力の差は大きいって  
いう当たり前のことを肌で実感したわけだ。

「もむもむ」

このぶんだとスーパーでの買い物とかのささいな外出まで苦勞しそう。

トレーニング……したほうがいいかも。

たぶん物置部屋には買って何度かしか使わなかったダンベルとか腹筋ローラーとか  
あつたはずだし。

ああいうの捨てるのも大変そうだからって取っておいてあるけど使ってみようかな。

「……………」

……この貧弱さだとまずは自重トレーニングしかないか。

下手をすると筋肉痛で動けなくなりそうだし。

幼女は辛いよ。

## 6話 出会い未満の出会い その2 2/2

ちよつとだけ意識を思考から現実に戻すと、とたんにざわざわとしか表現できないよ  
うなたくさんの人たちが食べたり話したり動いたりしている音と声。

やつぱりイヤホンでシャットアウトしたかった。

けど諦めたら案外に慣れるもの。

しつかしとにかくに混んでいるなあ。

長いこと休日とか夕方とかの混みそうな時間帯の外出を控えていたから忘れていた  
けど、こういう店つてここまで混むものだったか。

春休みとはいってもやつぱり土日は無謀だった？

せめて平日まで待てばもつと楽だったかもな。

だけどそれだと今度は今日ほどには人混みに紛れられないな。

補導とか怖いし。

家に連絡が取れない子供とかどう考えてもお巡りさんの保護対象だ。

それよりなによりこの体になった危機感がある内じゃないとだんだん外に出るのが



めんどくさくなって、気がついたら秋になっていたとかまであり得るしな、僕の性格的に。

僕のことは僕がいちばんに分かっている。

自堕落な自信があるからこそそのプロのニートだ。

なんのプロかは分からないけど。

でも……うーむ。

「……………」

レジからお店の外までの列が並んでいて席は全部埋まっているように見える。

トレーを持った人がうろうろして食べるタイミングを逃してるのも見える。

……それにしても多くない？

来たときだって空いているテーブルを探すのに苦労するほどだったし。

タイミングよく空いたおかげですぐに座れたけど、そうじゃなかったら重い体と荷物を引きずったまま帰るハメになったかも。

ぐるって回って座れるところがなかったら「やっぱテイクアウトで」って包み直してもらって……その辺のベンチで一人悲しくもそもそしていたに違いはない。

外から見ても混んでいるって分かっていたし本当はもつと空いている店を選びたかったんだけど、駅前少し離れたこの辺りで知っている店は他にないからしょうがな

い。

なんだかんだこういう気楽さが良いんだよね。

せめてどつかで荷物を下ろして探せたらよかつたんだけど……めんどくさかつたし、なにより1回下ろしちやつたら持ち上げるのが嫌になりそうだったし。

1回休んじやうと立ち直る元気がなくなつちやうっていうの、けつこうあるしな。

だからこそ旅行とかしても休みなしで歩き続けたりしちやう。

……この体じゃ絶対に無理だな。

下手をしたらばたんきゅーしちやいそうだし、この体の体力を見極めないと。

まあとにかく座れはしたんだから、食べながらゆつくりしているうちに体力も回復して無事に家までたどり着けるだろう。

ここからだとなつた10分の道のりでも慣れていない体だとどうしても悲壮感を感じてくるくらいに遠いイメージになる。

「けへっ」

思わずむせて涙が。

……炭酸がきつい。

のどがいがいがする。

しゅわしゅわが辛い。

ここまで軟弱になったのか僕は。

いや、単純に炭酸が苦手な体質になっていただけなのかも？

◇

「ん」

バーガーを4分の1ほど、他は少しだけを口にしたくらいから店員の人があちこちに声をかけて回っている。

……なにかと思えば食べ終わっている人を追い出すのと、あとは相席。

こんな光景学生のころのこういう店でしか見ない気がする。

積極的に人混みを避けてきた結果だ。

だけど今日に限ってはうまくは行かない。

テーブルはみんな埋まっているからそれでも空いているイスがあれば声をかけられているし……たまたま前の人たちが抜けたところに滑り込んだ、4人掛けを占領している僕のところにも来そうだ。

こういうのはタイミングだよね。

大荷物と怪しげな格好のおかげで大目に見られていたんだろうけどもうダメっぽい。

僕はもう終わりらしい。

できればこうなる前に食べ切っちゃかったけど絶対にムリだろうし。

というかたぶん食べきれない。

すでにお腹はいっぱいになり始めているしな。

たったこれだけしか食べていないのに。

……意地を張らずにお子様セットとかにしたほうが、ムダに捨てることになるよりは  
ずつとよかったかも。

けど、いくらなんでもこの年で頼むのは……。

いや、見かけ上は子どもなんだけどさ一応。

男としての、というか大人としてのプライドをどうするかという問題について考えて  
いるうちに……とうとう僕のところにも。

「ごめんなさい、混んできたので空いているイスのあるテーブルのみなさんにはご相席  
をお願いしているんですけど、いいですか？」

ほらきた。

どうせNOって言えないって分かっているんだからもっと強気で言っただけなのにね、こ  
ういうの。

「……はい、いいですよ」

「ありがとうございます。……1名様こちらです、どうぞ」  
嫌だったけどしょうがない。

席を移動してまで笑顔でにつきり答えている人がいる中で僕だけが「嫌です」なんて  
言えるはずもないしな。

って言うか断れる人って居るんだろうか、こういうの。

……結構居そう。

でも僕はそういう人間じゃ無いから無理だな。

人には適性があるんだ。

次からはやっぱり、どれだけ疲れていたとしたってきつさと帰ることにしよう。

なんならコンビニで適当に買って休んでもいいんだし。

そもそも疲れ切る前に帰る量の荷物と行動範囲を知っておきたいところ。

それは今後の課題。

今後があるかわからないけど。

外に出るかどうかって言う意味で。

そんなことを思いながらプレートをずっとこちら側に寄せる。

それにしてもフードを被った帽子というこの格好は最強だな。

視界を遮るっていうのがこんなに楽だとは知らなかったし思いつかなかった。

前からしておけば良かったなあ。

特に男ならそういうのは気にされにくいんだから……サングラスとかしたら人と視線も合わないだろうし。

それもこれも無難に見られようってしてきた結果だ。

良くも悪くも溶け込んでいたんだ、いってことにしよう。

おかげで元の体ではたいして目立たなかったし視線を気にするっていうことがなかったからこういう格好はしたことがなかったけど、これからはお世話になりそう。

少なくとも真夏以外はこうしていよう。

真夏でもできるだけツバの広い帽子とかで、あるいは……？

買わされた荷物の中の帽子の周りをぐるっとツバがある帽子をちらり。

……リボンとかついてるけど色を気にしてる状況じゃないな。

僕が僕だつて知られないことの方が大切だ。

多少の恥ずかしさは乗り越えよう。

スカートとかワンピースとかもそういう系統だし。

……キャラクターものとキラキラしているものは辛うじて回避したからどうとでもなる。

辛うじて。

きやびきやびしている女の子の感性は良く分からない。

多分僕には一生涯理解できることはないだろう。

がががと席を引く音。

僕は気持ち下を向く角度を鋭くした。

「相席助かりましたー。 やーあのままでと持ち帰りとか大人のひとと一緒に食べることになっちゃいそうだったからありがたかったですー」

「いえ」

どうやらきやびきやびさんと同じ気配の人種。

僕は警戒を厳にする。

でもムシするなんてのは僕にはできないから斜め前に座る気配と音と声へ適当に返しておく。

なんでも無難が大事だ。

「普通」なら「普通」な範囲でしか絡まれないんだから。

目の前に人が座ってもプロのぼっち生活をしている僕だ、顔を上げなければ気にならないんだし軽く会釈だけしておいてあとは手元だけ見よう。

フードと帽子効果で顔は見えないだろうけども僕がちっこい子供だっというのはひと目でわかるだろうし。

……ちっこい。

自分で自分を表現してみても自分の表現に落ち込んだ。

ま、まあ、今は大人でもスマホとしか目を合わさない人もいるんだし珍しくもないだろう。

うん。

よっぽどの話し好きじゃない限りこんなお店で初対面の人と話したがる人はいない。

……いないんだけど女の子っていう性別な生物は話し好きっていうのがさっきのJ Kさんで理解できた、油断はしないでいたい。

「……………」

ずっと飲んでいたジュースのストローから唇を離す。

どうでもいいけどストローって唇が張り付くよね。

最近は紙製それもあるって聞くけど、間違いなく張り付く。しつこく張り付かれるだろう。

どうでもいいことを考えて意識をそらせようとしたけど満腹感は消えてくれない。

今まではショックでまともに食べるどころじゃなかったからストレスとかでお腹が空かないのかって思ってたけど、時間がだいぶ経って体を動かして疲れてもこれらしい。



胃も見た目以上に小さくなってきているらしいな。

まあ胃の容積って握りこぶしくらいだって言うし、今のちっこい手を見たらどれだけ入るのかって分かるもの。

「……………」

ちっこい手。

バーガーにすら負けている。

あとは炭酸も失敗だったな。

なんかこうダメなんだ。

喉の粘膜が刺激に負けるんだ。

喉にしゅわしゅわする感覚が来るだけで辛いつていうのに近い感覚までしてくるし。

我慢して飲んだら咳き込むし涙までにじんでくるし。

子供は大人に比べて味覚が鋭いつていうけどそのせい？

……いや僕が小さいころはお菓子と炭酸なんて定番だったし違うか。

女性……というか女の子が炭酸苦手つていうのもそこまで聞いたことはないし。

コーヒーとかで特に感じなかったけど、やっぱりこういうところも少しだけ変わつて

いるんだろうか。

うーん。

体が変わるとここまでいろいろ変わるんだな。

当然だって言えば当然だけど、やっぱりフシギな感じ。

「……………」

……ところで、ついさつきからたった数十センチという近距離からときどき漂ってくるのは……誤解を招きそうな表現だけど若い女の子の匂い。

シャンプーとかその辺のやつ。

さつきの……髪の毛がくるんくるんしていたJKさんともまた違う匂い。

前は気にならなかったっていうかそもそも人に近づかないようにしていたから忘れていたけど、そういうえば男女とも子供のころと学生のところ、社会人になったばかりと中年に入ったくらいのも年でずいぶんとおいが変わるんだよな。

香水とか整髪料とはまた違う体臭っていうのか？

表現は嫌がられそうだけどそういうもの。

僕は微妙に匂いに敏感だからそういうのが気になってたんだよな。

だから今の僕のハチミツとミルク系統の甘い体からの匂いも気になるんだ。

あと髪の毛に残っているシャンプーの匂いも。

……変態チツクだから止めておこう。

でも相手がおひとりさんな女の子……珍しい気がするな、学生さんの女の子がひとり

でつて……で助かった。

いくら混んでいるからつていつてもその辺は配慮してくれていたんだな。

……僕的には別に男でもいいっていうかそのほうが楽なんだけど2人3人で来られたりしたらうるさくてうんざりしていたところだしお互いに気まずかっただろうから、よかった。

「……………」

「もむもむ」

とりあえずがんばって食べよう。

あとちよつとだけ。

お肉だけでも食べて体力を……うぶ。

あ、限界に近いかも。

「……………あの——……………」

「んく……なんででしょうか？」

……食べている途中で話しかけないでほしかった。

思わず変な声が出てこれじゃ子供みたいじゃないか。

もちろん子供なんだけど、せめて態度だけでも大人で居たい。

ささやかな僕の抵抗だ。

「わあ……………」

「うわっ……………」みたいなニュアンスじゃないからよかったけど、なんか顔を上げたら反応された。

言われたことはないけど「うわあ……………」みたいなのを年頃の女の子に言われたら、いくら僕でも1週間くらいはダメーじを後から後から受け続ける自信がある。

せめて平均でありたい。

そう思う今日のごろだ。

「あ、いえ……………っ、せ、席っ。 ……聞こえてない、と思っ  
た、から……………」

「いえ、お互いさまですから」

「……………」

なんだ、ただ礼儀正しい子だったただけか。

変に疑ってごめんね。

友達すらいなくて機微が分からない僕を許して？

そう心の中だけで謝っておく。

今初めて目が合ったっていうより合わせたんだけど……………斜め前に座った子は今の僕よりも3つ4つ上くらいの……………中学生くらい。

つまりはJCさん。

若いつていうか幼いな。

今の僕の方が幼い体なんだけど、おとといまでの価値観は20代の男なんだからしようがない。

その子は髪の毛は肩くらいまでで特に何もしていない普通の女子中学生って感じ。

けばけばしくない時点で僕的には安心できる感じ。

さっきのJKさんと対称的なJCさんだ。

顔は幼い感じだけど細かいところはきれいにしているし小学生じゃない気がする。

なんていうか感覚だけど、小学生と中学生のあいだにははつきりと分かる雰囲気の違いがあるし。

ときどきやってるバイトでの経験が活きる。

子供の相手はそこそこに得意なんだ。

大人相手はまるで駄目だけでも。

「……………」

「……………」

目が合って10秒を超えている。

それにしても見つめられている。

すごく。

長く。

なんで？

「……………あの、なにか？」

「あつ、……………い、いえなんでもつ」

「…………………………？」

何を言いたいんだろうか。

さっきの店でもここまでは見つめられなかった……………いやどうだろうかあのくるりんさん……………けど、知り合いか何かにでも似ているんだろうか。

この体にはなつたばかりだから誰かと会ったこともないしな、そうじゃなければあれだ、珍しい色の目だからつてのがあるのかも。

……………口を開きかけてなにかを言いたさそうにしているんだけど話そうとしては閉じるその子。

「…………………………」

「…………………………」

妙な緊張感を僕から解すように視線を落とす。

まあいいよな、見られるだけなら。

着替え終わったときみたいに間近で見られているわけではないしお人形さんにされるでもないし。

あれは地獄だったからここは天国。

目と髪の色が珍しいだけかもしれないしそのうちに興味もなくなるだろうし。

それよりも両手で持っている、まだ相当残っているバーガーとプレートの上に残っている外側から冷えて固まり始めているポテトを……どう考えても食べ切れなさそうなのが問題。

ジュースはまあいいとしても食べものを食べないでそのまま捨てるのは情的に嫌だけど、かといって持ち帰って食べるほどではないしなあ。

しなびてまぶしくなっているだろうし、なによりもゴミ捨てるの日まで台所からそこはかとなこの臭いが漂うようになるのは困る。

こういうのの臭いって結構しつこいからなあ。

けど捨てるのももつたいないからがんばって食べるか？

いやいや満腹すぎて帰り道でダウンしたら意味がない。

どうしたもんか。

「……………」

じーっと前から届く視線。

やめて。

僕は視線に弱いんだ。

きつと第六感的なのが発達してて他人の視線がダイレクトに脳に届くんだ。

だから止めてほしい。

やめて？

そう思うけど帽子越しにでも届く視線。

なんだ？

何がそんなにこの子の興味を引いているんだ？

……やっぱりこの髪と目と肌の色の組み合わせは珍しいんだろうか。

でもこの辺だつて今は見た目が明らかに外の人つていっぱいいるしな。

なんならハーフとかクォーターとかの人も……僕の時代で学年に何人かいるくらいだつたし。

うーん。

「……………」

視線が嫌だな。

わずらわしい。

いや、ヤな感じのじゃないって分かるんだけど……好奇心のもそれはそれで嫌だ。



観光地で寂れた博物館とかに行つて案内の人に絡まれるときくらいに。

「じ——……」

口に出しているような幻聴が聞こえるほどの視線。

………こうなつたら仕返しだ。

「あの」

「うつひやああああ——!? ごめんなさい! じろじろ見て! もう見ません!」

声の主はがたんつて席ごと飛び跳ねるようにしてのけぞつて叫んで慌てて下を向く。

一瞬周りが静かになる。

「あ。 ごめんなさい、ごめんなさい……」

ぺこぺこ頭を下げているらしいびっくりJCさん。

もう、僕までびっくりしたじゃないか。

ほら、手にじわつて汗がにじんでるし。

だからびっくりは苦手なんだ。

ついでに周りの人たちが「なんだなんだ」って見てきてるのが分かるのもまた嫌だ。

一瞬だったけどその一瞬が僕には永遠。

僕はその辺の石ころになりたい。

考えるだけで良い存在になって、そのうち考えるのを止めたいんだ。

なんてネガティブになったりもしたけど立ち直る。

それにしてもうるさい声。

こういう声って頭に響く。

だから苦手。

嫌いよりは苦手なんだ。

だからさっさと言ってみよう。

言うだけならタダなんだ。

「残ったんですけど食べます？　これ」

「……………うえ？」

変な声。

ちよつとおかしくってやな気持ちになったのがどつかに行つた。

「もう食べきれないので残すところだったんです。　これなら指も口もついていないの

で、よければ」

「食べます!!」

耳がキーンつてする。

うるさい。

つていうか元気だなこの子、なんとなく察してたけど。

テンションが高いつていうか素のエネルギーが高いつて感じ。

僕が苦手なタイプだ。

JKさんに続いてそういうタイプとしか遭遇しないのか。

……今日だけでやたらと構ってくるのと元氣すぎるのと。

僕との相性が悪い順に遭遇している気がする。

厄日だな。

いやそれをいうんだつたらこの姿になったあの朝が大元の原因なんだけども。

「でも、ほ、ほんとに……？」

その子の目は僕の食べ残し……さすがにバーガーじゃないだろうけど……にくぎ付け。

自分のほかほかの目が目の前にあるのにな。

そんなにお腹が空いていたのか？

いやしんぼなのか？

まあこの年ごろはいくらでも食べられるんだ、不思議じゃない。

ダメ元だったし初対面だし要らないって言われるって思っていたんだけどすつごく欲しそう。

僕だつたら初対面の人からなんて絶対にNOだけどこの辺は学生特有の距離感だろ

うか。

まあ今の僕は子供だしな、抵抗感がないのかも。

こういう子って男女も歳も関係なくクラスとかにいたしな。

そう思うとちよつと懐かしいくらい。

いずれにしろ僕にはさつぱり分からない感覚だ。

「ではどうぞ」

それあげるから静かにしてね。

っていうか僕はおかげで食べ残しもしないで食べ過ぎもしないで出られるから助かる。

目と口を中途半端に開けているその子にポテトをほぼ手つかずのまま手渡してさつさと荷物をまとめる。

……………ぐ、重い。

イスから降りてさつきの重さがまた肩と腕と手のひらにかかる。けどもうちよつとがんばろう。

くいしんぼに餌やりして気を引いているところこそそくさと。

これ以上会話しないで済むのがあるがたいところ。

……バーガーはもつたないけどごみ箱へ。

食べきれなくてごめんなさいって。

ごみ箱に落とした音で罪悪感。

ずしんとした心と荷物を引きずりながらのたのたと出口に向かう。

……にしてもやっぱり重い、重すぎる。

この調子だと買い物ときはリュックとかじやないと厳しいかもな……。

店の出口に近づくに従ってますます増えてくる人たちにぶつからないようにしつつ日向へ。

他の人たちはそこまで僕のことを見て来ない。

身長差が効いているらしい。

……うん。

少し休んで食べたからいくぶんは楽になっているみたい。

これなら家までの残りもなんとかなりそう。

ふと思つてパーカーの袖を掴むようにして袋を持つと地味に手の痛みがなくなることに驚きつつ、ジャンキーな臭いのする建物を後にして一路家へ。

それにしても驚くほどの少食ぶり。

これからの食費、だいぶ浮くかもしれないな。

帰ったらこの先の生活費のこと計算し直してみよう。

食べる量がこれだけ減るんだつたらムリして激安食材と節約料理に頼る生活でなくともけつこう持つかもしれないし。

……あと、このぶんだと呑めるお酒の量も減っていそうだし。つていうか呑めるんだろうか、そもそも。

僕は生命線のお酒のことを思う。

うん、大丈夫。

僕の喉がごくりって鳴ったから体は受け付けるらしい。

もちろん確実に法律的には大問題だけど僕ひとりしか知らないんだしなにより中身は成人しているしセーフセーフ。

いやまあアウトなんだけど家によつてはこつそり子供にも……つてあるみたいだし。悪いことだけだと人に迷惑かけるわけじゃないから良いよね？

そんな言い訳を頭でしながらかさかさ音を立てるビニール袋ととぼとぼと。

☆☆☆☆

「彼」が先ほどまで居た店内。

先ほどの少女は席を立ち「彼」の座っていた場所へ移動していた。

目の前に居た小さな「彼」の座っていた席に腰を落ち着けた少女はしばらくのあいだ……よろよろと出て行ったフード姿の消えて行った店の出口を眺めていた。

「うーん？」

手渡された冷えているポテトを口にしながらなにかを考えているのか、うなづたり口元を緩ませたりきつくさせたりしながらちらちらとスマホの画面を見ながら考え込む。

そうして数分かけてもらった分と自身の分とを胃に収めきつてひと息。

周りの席が空いた一瞬を狙い通話画面に切り替える。

「あ、もしもし？ あのさあー実はね、たった今のことなんだけどね？」  
そんな話をしだした。

## 7話 ハサミ事件 1 / 2

僕は膝をつけたまま座っている。

なのに足がおしりより外に出ている。

おしりと足の甲と膝で体重を分散している形。

つまりこれは……。

「……………できた」

ベッドの上でごろごろしていたときに、ふと思いついて試してみたらできちゃった。

正座を外に崩したようなマンガやアニメでよく見るこの座り方……通称女の子座り。

なんか女の子が当たり前にしているのがたまたま目に入ったからマネしてみた。

そうしたらなんかできた。

実際にこの目で見たことはないけど検索したらこうしてる女性の写真とかあったし、する人はするんだろうな。

膝がすごい方向に曲がってる気がするのに痛くない。

頭がバグってる感覚がする。

なんて言うか曲がっちゃいけない方向に関節が曲がってる感じ。



女の子座りは膝を外側にねじれるように回すし正座よりもずっと痛そうだっていう感想しか持てなかったけど、実際にこうしてやってみると別に痛くはないし膝とふとももで思いのほかバランスがいい気がする。

新感覚だ。

もちろんあぐらのほうが慣れていることもあつて楽なんだけど、スカートを履いている状態で地べたに座るなら脚を広げるのは確かに抵抗あるしなあ。

誰かに見られるとかじゃなくて寒いから。

だって布一枚だもんな、スカートの下って。

そう考えると正座よりも楽でだけど「はしたない」っていうのじゃなくなるっていう、わりと合理的な座り方なのかもしれない。

おまけにスカートだったり下に穿いていない状態でこうするとふともも全体がべつたりと下に触れる。

ベッドや絨毯の上ですると結構柔らかくて気持ちいい。

「……………」

ぼーっとする。

クセになりそう、この感覚。

あとふとももの上に直に手を置いたり股のあいだに挟んだりすると……………なんていう

かこう、とつても落ちつく。

……………女の子としての本能なんだろうか。

頭の中以外は女の子になつてゐるわけだし、そういうことかも。



顔に朝日の当たる感覚で目が覚めると外はもう明るくなつてきている。

最近は何の出てくるのが早くなつてきたから日の光で起こされるのも早い。

だけどカーテンを少し開けておいて日の出の光が顔にかかるつていうのがいちばん目が覚めやすいし、まぶしくて寝ていられないから二度寝を防ぎやすいので都合が良いしな。

寝ぼけてカーテンを閉めちゃったら……まあ、無意味なんだけど。

でもこれのおかげで冬以外は目覚ましいらすだ。

けどもともかく眠い。

昨日は寝るのちよつとだけ遅かつたからか。

「くあ」

遅いつて言つても9時台だったし以前と比べれば睡眠時間はかなり延びているんだ

けどなあ。

たぐさん寝ないとダメらしい。

SNSの盛り上がりはこれからだっという時間なのに僕の体は盛り下がる。

やっぱり成長期だからなんだろうか。

まあこの体で生きる以上にはちよつとは成長してもらわないと困るわけだけでも。

目だけを閉じないようにしてぼーつと考えているうちに体が温かくなってきて、目が覚めてくる。

指先がじんわりしてくるこの感覚が好き。

体を起こして朝日から顔だけ逃れてベッドの上でまたしばらく、ぼーつとする。

……この体になってから寝起きがどうもだるい。

前はそんなことなかったのに。

意識ははっきりしているんだけどそれに体が追いつかないっていうか、なんというか。

……こういうところは見た目相応なんだろう。

成人と幼児を比べるのが間違いないんだもんな。

「……で」

今朝はどうだろう。

何か変わったりしたかな。

僕はのろのろずりずりとベッドの隅まで這いずって行って枕元に置くようになった鏡をのぞき込む。

廊下にあつた鏡は布をかけた。

なんて言うか、こうして不思議なことが起きている以上見えちゃ行けないものが見えるとかゼロじゃなくなつたつて考えちゃうと怖くなつたから。

僕はホラーに弱いんだ。

で、枕元の鏡の中には……もう僕自身の顔だつて感じられるようになってから久しい……寝起きでまぶたとほつぺたが腫れて普段の何割か増して幼さの感じられる、静脈が透けて見えるくらい薄い肌を持っていて眼球の奥までがくつきりと見える、大きな目。

寝起きで眠気が残っていて厚ぼつたくて髪があつちへこつちへとぼさぼさの状態、しかもパジャマはあのとときに買わされたガラこそないものの明らかに子ども用のもので、袖とかのふりふりした余計なものが邪魔なやつ。

鏡に映っている今の僕に関しては幼女だつて呼ばれても文句が言えない。いつものように服装を整えてどうにか数年はサバを読まないとな。

さすがに幼女扱いは勘弁だ。

あのときの地獄が再現されるのな。

「……………はあ……………」

けど、戻っていなさそうなのは分かった。

そもそも視力が違うんだし分かってたけど、それでもこの目で見ない限りには、だ。

……………もう諦めてきているんだけどな、起きたら元に戻ってるっていう素敵な展開を。

僕は鏡を置くと、暑くなってきたから横着をし始めたせいで上だけしか着ていないパジャマ姿のままベッドからずりずりと下りてのろろと机に向かって、適当な雑誌を詰めた即席の踏み台を使ってクッションで高くしたイスに座ってペンを挟んだノートを広げる。

「……………ふう」

おしりが冷たくて気持ちがいい。

じゃなくて……………今日の日付。

天気は……………たぶん晴れだろう。

朝から暑い。

ちっこい手で大きくて重くなったみたいを感じるペンを動かしてゆつくりと字を書いてみる。

——僕がこの体へと「変身」してから今日でちょうどひと月。外見、感覚……変わらず。

これ以上変わるという変化も、異常も、なし。

僕はまだ、いまだに。

この少女の体から——逃れられないでいる。

そんな現状確認を、ここ最近の定型句となりつつあるそれをちよつとだけ書いた。



「……いよいよ大型連休初日です！ 観光地はどこも人であふれかえっていて……」

「ふうん」

テレビはどこも朝からこんな感じ。

もう飽きるくらいに見た光景だな。

そんなテレビを見ながら朝食後の洗濯物待ちの手持ち無沙汰な時間を過ごす。

……………結局なんにも。

本当に何もなかったんだ。

この体になるってこと以上の何かが起きることも……戻ることにも。

なんにもまったくこれっぽっちも、その気配さえもない。

初めのうちは次はどうなるんだろうって不安で仕方なかったし、逆に次に目が覚めたときには戻っているんじゃないかって毎晩寝るときに躁鬱を繰り返しながら寝付いたものだけど、そのどちらも起きることはないらしい。

だってもう春休みは終わって新年度が始まってからの初夏の大型連休なんだから。

ニートにとつては毎日が変わらないからこそ季節感は大変にしたいところ。

つまり僕は3月に幼女になってから4月も終わりだっけって言うのにまだ幼女してるんだ。

「この連休中はお天気が続くということ、どこも……」

まさしく人混みってしか表せない光景が画面の向こうから流れてくる。

人のいない時期に来ればそんなに並んだりしなくても済むのになあ。

まあ働いていたりしたら到底ムリなんだろうけど。

家族とか友人とか恋人なんかと一緒にならなおさらだ。

でもそれが良いつて言う人もそれしか無いって人も多いんだろう。

僕ならこういうときは家で過ごして別の時期に行くけどな。

ひとりぐらしでぼっちのニートだからこそできる発想だ。

「……………」

このひと月、念のために引きこもってみた。

おかげでこの体に馴染んじやったんだ。

慣れっていうのは恐ろしい。

もはや写真を見ないと「僕だった顔」を細かくは思い浮かべられないくらい。

その写真でさえ……確か免許だったかの更新で撮った数年前という体たらく。

ちよつとホラーにも思えるけど人の記憶力なんてこんなもんかって納得もしたなあ。

代わりに今の顔にも馴染んだから案外人って言うのはちよろいもん。

写真を撮るのは好きだし旅行のときにはたくさん撮るけど自撮りはしないで風景とか建物とか物とかだけ。

そのおかげで今や前の僕の、男の僕の最新画像は身分証でしかない免許証だ。

そういうえばこの体になったばかりのころに買った服とかを元に調べてみたら、今の僕の体は身長体重ともに小学生の中ほどから……がんばって高学年の範囲でしかなかった。

がんばっても。

さばを読んでとも言う。

あくまで平均、それも数あるサイトの中から恣意的に選んだ数字で小学3、4年生。

……うん、分かっている。



でもまだ認めたくないんだ。

時間が経ったら認められるんだろうけど、あと1、2歳は低いのもかもしれない。

本当はもつと年は上のはずっていう根拠のない直感があるのが気になるけど、たぶんただの願望。

ともあれ個人差の範囲でがんばって2年くらいはサバを読んでおきたいところ。

数字のマジックで小学校高学年ってことにして、内面の充実でさらに2年で中学生って言い張っておく。

いくらなんでも小学生扱いは嫌だし。

大の男が子供扱いは嫌なんだ。

……せめて身長さえあればなあ。

「ご覧ください！……この美しい景色！……これは遠くまでよく晴れていないと見ることにできない……」

「おお……」

すごい景色が画面に映る。

なんて言うか綺麗な風景って「きれい」とか「すごい」っていうひと言で片付けちゃうよね。

こうなる前には年に2、3回くらい行っていた旅行先を選びたいくらいの、どこかの

山の上から町と海を一望にするパノラマ。

ロープウェイがあるほどじゃないけど女性でも楽に登れるらしい。

乗り継いで2時間程度の日帰り圏内だしな。

意外と近いところには行かないもんだ。

旅行中だと2時間なら往復でも移動できるのに家からだと嫌になっちゃう。

どうしてなんだろうな。

……もつとも、当分は行けそうにないけども。

物理的に行くことはできるけどこの見た目でひとりで行動していたら絶対に見とがめられそうなのと、あと体力的な面で無理なんだ。

体力といえば体のサイズが根本的な原因だとも思う。

小さい体のせいで家の中でさえ生活すること自体に苦勞したしな。

小さいころはよく感じる事があった手や部屋がやたらと大きく感じる現象……アリス症候群だっけ……が最初の数日はよく起きて戸惑ったのを覚えている。

この体のせいで起きたのか、それともこの体が変わったことで起きたのかは不明だけど、とにかく空間の認識がおかしなことになっているあいだは強烈な不安感に駆られていた。

家具や手すりなんかが高いのは数日で慣れたけど、僕の部屋とか台所とか毎日使うけ

どうしても背と足の長さが足りないところ。

そういう場所には小さいころ使っていたような踏み台を置いてようやく前に近い感覚で暮らせるようになったんだ。

今では家じゅうの至る所が10個くらいの踏み台に守られている。

踏み台さんたちがいなければ僕は何にもできない。

幼女ってこんなにもか弱い存在なんだ。

こんな状態で観光地なんて行ったらダンジョンってしか感じないだろう。

足のうらが下に着かないから落ち着かないせいでイスから足をプラプラさせていたのや、背伸びをしても高いところには手が届かなかったのを今さらながら思い出す。

っていうかこの体になってから無意識にしょっちゅうしているのに気がつくし、直らないし。

とつくに忘れていたと思ってたのに記憶にはきちんと残っているっていうのに感動したけど、できれば二度と経験したくなかったなあ。

あんまりにも子供っぽいって、ふとした瞬間に自覚してめげるから。



## 女物の服。

僕には一生涯縁がないって思ってたそれら。

スカートやワンピースっていうものにも……家に籠もっているあいだ2日に1回くらの頻度で着てみたらさすがに慣れてきた感じ。

ふともも周りに空気が来て涼しく感じるのも股ぐらがすーすーするのも、慣れてみたら清涼感と解放感があつて過ごしやすいものだ。

とりあえず気温が高い季節はありがたい。

冬は寒くなるのかもしれないけど、そんならズボンにすれば良いしな。

そう考えると女性を使い分けできて良いよな、便利で。

なつてみてから思う。

本物の女性からは怒られるかもしれないけど僕も一応肉体的には女だ、文句は言わないでほしい。

でも心は男つて言う都合のいいところ取り。

視線を少し落とせばスカートとふとももが見えて何となく嬉しくなる。

こういう視覚的な要素で気分がよくなるっていうことは、少なくとも体は見た目通りでも精神、心のほうはまだまだ元の「男」のまままでいられている様子。

中身まで幼女化……女の子になつて幼くなるなんて勘弁だし。

そうだったらもはや僕は僕じゃなくなる。

僕って思い込んでいる幼女って言う最初に思い浮かんでいたやつだ。

アイデンティティの喪失。

できたら回避したいところ。

……どうせなら僕好みに女の子らしい特徴がある体型だったらもうちよつとだけよかつたかもしれないけど贅沢だな。

うん、贅沢だ。

こうして女の子の格好をしても楽しめるのはあの地獄で着せ替え人形になっていたときに感じたゲームのアバターを着せ替える感覚、あれのおかげもあるかもしれない。

つまり僕は元の体のままで一時的にこの子の体に幽霊みたいに憑依しているんだって、あるいは体感型VRゲームをしているんだって思える実感があればよかったんだ。

僕は幽体離脱なんて信じていないし最新型のVR機器でもここまでリアルなものはないけど、どうせ不思議なことなんだから不思議で返そう。

僕はあくまで僕のままであって、この体は借り物っていうか使っているだけっていうか、そういう感じで過ごすことで心の安寧を図っているともいえる。

そういうのを自覚はしているけど、まだ精神的には安定している感じ。

……スカートだとちよつと油断したら太ももまでまくれたりパンツが覗いたりするけど、まあ家の中だし僕しか見ないんだし少女未満だし、あまり気にならない。

それどころか気にならなすぎるのとエアコンをなるべく使わないようにしているのにカーテンごと開けられないっていう制約のせいで、外の暑さがダイレクトに入ってくるようになったから、しようがなく……しようがなくパンツの上を履かないことが多くなってきた。

つまり上はシャツ、下はパンツだけという格好だ。

シンプリズベスト。

この体になった朝にブカブカシャツ一枚だったときのインパクトが根強い。

幼い女の子の下着姿とかは僕の趣味じゃないけどとにかく楽だし、そんな格好でも前の男の体のように視界に入る毛で嫌気が差したりしないからしようがないよね？

どうせ楽にするなら履かないのが一番だしなにより目の保養だし。

ふともも属性はなかったはずだけど、この体にはそれしかないっていうのもあるかも。

胸も尻もない寸胴だし、女らしいところといえればそれくらいしかないからなあ、今の僕は。

それが良いのか悪いのかは……今の僕にはよく分からない。

けどとりあえず、このラフすぎる格好で夏を乗り切ろう。

……これは、僕の中身が男のままだつて言う確認にもなるんだ。

もし、まぶしいふとももを見てもなんとも思わなくなつたら……そのときは正真正銘の幼女になつたつてこと、かもしれない。

## 7話 ハサミ事件 2/2

「さて」

せつかく女の子になつたのに色氣の欠片もないって悲しい事實は置いておいて現実の話をしないと。

僕が女の子——幼女じゃないって信じたい——1ヶ月が経つたことになる。

正確には40日くらいだけ毎日日曜日な僕にとつては誤差の範囲だ。

外は春休みから春を通り越してもう初夏へと季節まで変わってきている。

貴重な4月っていう春まつさを引きこもって過ごしてしまつたことになる。

普段だつたら食材の買い物と散歩とで季節感くらいはあるもんだけど……今は完全な引きこもりだから実感がすごく薄い。

月単位の引きこもりはもう何度かやらかしたしこれといつてたいしたダメージはないんだけど、氣分のいい春を逃すっていうのは僕にしても珍しいこと。

寒すぎる冬と暑すぎる夏とじめじめし過ぎる梅雨くらいな良くあるんだけどな。

けど良い季節なんだし、そろそろいい加減に外に出ないとおかしくなりそうし。

窓際でひなたぼっこをしたり筋トレとかで体を動かしたりしてのいできたけど、さ



すがに体も心も悲鳴を上げているのがわかるようになってきているもん。

僕の家に幼女な僕が居るって知られたらおしまいだからカーテンも窓も開けられないのに家から出ないんだもん、そりゃあそうだ。

洗濯物を干すときだけ道に面していなくて狭いベランダでさきつとだけど、そんなのは全然足りない。

日照時間が少ない地域の人って鬱々しやすいらしいし、しょうがなかつたとしても体にも心にも良くない気がする。

……とんでもなく弱い負荷の運動しかできないうえにすぐバテるから筋肉痛すら起きないして当然のように筋肉もつかない体らしい。

なんてことだ。

もやしよりも下のランク……鶏ガラかなにかか今の僕は。

体が上げる悲鳴っていうのは体がにぶるとかなまるとかそう言ったのとはまた別の感覚、引きこもっていたとき良く感じてた感覚。

……前によく数ヶ月単位で引きこもれたなあ。

克服しちやつた今となつては絶対にムリだし絶対やりたくもない。

完全に引きこもるっていうのは若いからできたことで、大人になつた今じゃムリな耐久レースなんだ。

心にとって大切だからこぞできたこと、今の僕には必要ないもんな。

引きこもる才能を失った代わりに社会に適応できたとも言おう。

どっちが良いのかは分からないけども。

さてさて。

いい加減に外に出たいけど……最近はずよくちよく真夏日も出てきたし、今日も多分暑くなる。

あのときみたいにフードの中に髪の毛をぎっしり詰め込んで出歩くのにはかなり難しそうだ。

汗だくになって気持ち悪くなりそうだし。

あのときだって帰ってきたときには結構背中までじっとりとしていたし。

かといつていくら男の格好をしたとしても、さすがに腰まで伸びている髪を出しちゃうとご近所の目がなあ……。

万が一にでも見られちゃったらお散歩中のご老人とかママさんネットワークを通じて数日後にはみんな知っているということにもなりかねない。

お隣にまで届いてしまったら……僕を母さんたちごと知っているあの人が、絶対に突撃してくる。

それほどまでに口コミとは恐ろしいもの。

用心しすぎてもしすぎることは決してない。

ご近所への聞き込みは捜査の定番だって探偵ものでもやってるしな。

◇

「ん………？」

首をひねる。

そんなクセはないんだけど、してみたら髪の毛が首筋をさらさらつてくすぐったくて気持ちいいって知ってからはクセになっただけらしい。

それならどうしたものか。

コーヒーをすすりながら考えるも都合のいい方法が思いつかない。

番組はつまらないしCMも興味がないからなんとなく手元に視線を落とす。

僕がテレビをつけっぱなしなのは単純にBGM兼時報が欲しいから。

ネットだとおもしろくて1日が終わっちゃうから考えごとには向かない。

……コーヒーの香りは変わらずに良い。

味覚と嗅覚はそこまで変わってない証拠。

ただ炭酸だけが苦手になったんだ。

そのコーヒーはなんとなくてブラック。

黒い液体の上に浮いている僕の薄い色の瞳と目が合う。

下を向くとぱらぱらと前へと流れてくる髪の毛。

きれいではあるし僕は長い髪の毛のほうが好きだけど……それにしても長すぎるよな。

そんなことを毎日のように思っていたんだけど、今日の僕はひと味ちがったらしい。

「あ」

そっか。

なんで今まで思いつかなかったんだろう。

思いつきつて不思議で、その瞬間までは分からなくて当たり前なのにその瞬間からは

なんで思いつけなかったのかが不思議になる、あれ。

その思いつきつてのは散髪だ。

もちろんセルフで。

毎朝毎晩の手入れに外出のときにどうするかって、そもそもが邪魔な存在なんだ。

それならいつそのこと思い切つてばつさり切つちやえばいいじゃないかって。

ようやく慣れてきたって言っても毎朝寝ぐせと一緒にほつれを梳かさなきゃだし、お風呂じゃ今までの倍以上の量のシャンプーを倍以上の時間をかけてしなきゃいけないってリンスとかまで使わないといけないって。

ドライヤーに10分くらいかかるし、その後にもた梳かさないといけない。調べたら本当はもっとめんどくさいらしいんだけど、めんどくさいことは長続きしないからって適当なところで妥協した結果だ。

特にベッドでごろごろしているときは意識しておかないと髪の毛を手や体で引っ張ってしまつて痛い思いまでするし、そんな髪の毛は短くしちやえば良いんだ。

ほんと、どうしてこんなにも簡単なことを僕は……。

男のときの短さにするのはさすがにやりすぎだけど、肩くらいの長さ……ミディアム何とかとかいうんだっけ、くらいならいけるだろう。

それなら男でも女でも通用するしな、むしろちようど良い。

自力で伸ばしたわけでもないし、そこまで未練もないんだし。

むしろ邪魔すぎて持て余してたんだ。

ちよつと合いそうな髪型をネットで調べてみて……と。

「……………よし」

そうと決まれば早速だ。

残りのコーヒーをがっつと飲んでむせそうになつて、両手でテーブルとイスを掴みながら踏み台というワンクッションを置いてすたつと着地。

すつかり慣れた一連の動作は華麗だ。

はじめのころはバランスを崩してよく転んでいたけど今は平気。  
油断さえしなければ大丈夫だ。

油断さえしなければ。

引きこもりすぎて対人恐怖症を患っていたときに自分で髪を切るために使っていたハサミとかの道具を軽い足取りで探しに行くことにする僕。

捨てた覚えはないし、どこかに一式でまとめてあつたはず。

後ろを見る用の折りたたみの鏡とか梳きばさみとか髪を留めるやつとか便利グッズをぜんぶまとめとめてどっかに。

洗面所の下のほうかな。

思い出しながら歩く。

切ったあとの涼しさと軽さを想像して心なしか体も軽い。

ささっとさっぱりしてさつと外に出てさつと歩いてこよう。

残念ながらまたしても特別な休日な連休だからきつとこの前よりも混んでいるだろうけど、外で食べるのもいいかもな。

さすがに今回はあんなことにはならないだろうし。

この、長いあいだずっと日の光の下を歩かないでくさくさしているこの感じも疲れるまで歩けばなくなっているだろう。

日の光に当たって運動をすれば大抵のやなこととはなくなるんだ。

……………ひと月ぶりの外。

買い物もしたいしぶらつきたい。

ビジュアルは思い浮かぶけど名前は思い出せない小物とかオンラインでは探しにくいものなんかも買いたいし、あとは……………。

そうやって僕はご機嫌だった。

◇

◇◇◇≡≡↑

そんな僕を悲劇が襲う。

襲われた僕は情けない悲鳴を上げて縮こまる。

「びいっ!」

どっから出たのか分からないようなもはや電子音にも近いような叫び声。

それが僕の口から出たものだって気がつくまでに時間がかかったほど。

長期間声を出さないと声が出なくなるあの現象を避けるために適当にひとり言をぶつぶつしていたときで聞き慣れているような…………高めだけど落ちついている柔らかい

印象の、この体の喉からの声。

それとは違う金切り声に近い声。

それを僕のだつて認識してから「こんな声出るんだ」つて思った。

そうしてちよつとして落ち着いてくると頭も動くようになる。

「……………」

現実逃避は止めにして目の前の現実を見る。

現実だつて信じたくない現実を。

いつだつて僕は引きこもり体質なんだ。

うるさいくらいに頭の中でまだばくんばくんと響いている心拍の音を聞きながら目をそろそろと開けてこわごわきよろきよろしてみる。

肌から感じる感覚的に……無意識でお風呂場の隅に縮こまるように張り付いていたらしい僕の反対側の壁に刺さる、さつきまで持っていたハサミ。

僕の指から抜け出て水平飛行してタイルに衝突してそれを割つて奥の壁にまで刺さつたそのハサミは、まだびいいいんつて音を発しながら動いている。

動いたんだ。

飛んだんだ。

刺さつたんだ。



ハサミが。

無機物が。

刃物が。

落つこととしたとかさう言うわけじゃなくてよく分からない力で。

びっくりした。

どれだけかかっていうとここ10年ほどでいちばんの衝撃つてくらいに。

……今のはなんだったんだろう。

そろそろと床に着いたひざがお風呂場のタイルで冷たいけどそんなのはどうでもいい。

さつき僕は、外の気分を想像して浮かれたままでお風呂場に着くと同時に服を。

シャツとパンツだけだったそれを取ってすっぱだかになって、鏡をセットして髪の毛を思いつきりすつきりさせようっていい感じのところ差し込んだんだ。

つい30秒くらい前のことなんだ。

切ろうとして指に力を込めて、でもなんでか切れなくて、なんでだろってさびていないことを確認して……きつと今の僕は指の力までが衰えているんだって思ってた力をか  
なり込めて切ろうとしたんだ。

そうしたらハサミが生き物のようにならねえと動き出してもがき出して指から抜け

たかと思つたら、見えなかつたけどたぶん……飛んで刺さつた。  
壁に。

タイルに。

しかも薄いとはいつてもタイルっていう石を粉々にして深々と。

あんな力、どれだけびびつても今の僕からは絶対に出ない。

「……………」

頭の中は疑問だらけ、体はそうそうない驚きと恐怖に縮こまっていて考えがまったく  
まとまらない。

頭がががんとくるし指先まで震えている。

そうしているうちにハサミが発射しているなにかはゆっくりになって行つて、がしや  
んって嫌な金属音を立てながら床に落ちた。

「……………」

警戒する。

「……………」

今度はいつたいうことになるんだって。

「……………」

……………。

「……………さすがにもう動いたりしないみたいだな。

壊れちゃったそれはどう見てもメタリックな金属なのに、今の僕にはこれが得体の知れない未知のなにかにしか見えない。

動きを止めたように見えるその物体を見つめながらじりじりと警戒を続ける。

「……………もう大丈夫……だよな？

ぜんぜん動かないし。

でも万が一のことはあり得る。

というかたった今起きたところだし。

野生動物とぼったりこんにちはしたときの知識が浮かんだから刃物に背中を向けな  
いようにしながらドアまでたどり着いて、刺激しないように音を立てずに体を滑り込  
ませて……ぱたんと閉める。

「……………動きはないみたい。

終わったのかな……？

浴室の外に敷いてあるタオルに座り込む、というよりは崩れ落ちる。

脚ががくがくしてる。

……本当に怖いときはこうなるんだ。

僕は今までこうなったことなかったから知らなかった。

「……………」

あの瞬間はあまり覚えていないけど、髪を切ろうとした瞬間のすごい音と風を感じるほどの相当な威力、速さ。

そうして深々とタイルに突き刺さっていた光景。

単純に驚いたし今になって「刃物が勝手に動いた」っていう事実には恐怖がこみ上げてくる。

心臓が悪い。

まだばくばくしてる。

あれがもし僕の腕とかに当たったりしたら……とか考えちゃったとたんつぶわつと毛穴から冷たいものが吹き出る感覚。

「……………ふうっ」

髪の毛が落ちるだろうからとすっぱだかになっていたけど、刺さったあとに跳ね返ってきたり衝撃でタイルの破片とかが飛んできたりしなくてケガをしなかったのが幸いだな。

この薄すぎる肌だからちよつと当たっただけでもただじゃ済まないだろう。  
いや、刃物の前には男の肌だつて簡単に切れちゃうだろう。

「……………」  
少しだけ震えが収まってきて手足に力が入るようになる。

僕は意を決してもうしばらく耳をそばだてて警戒して……そつと、そつとドアを開けてお風呂場を覗く。

そこにはさつきの状態のまま転がるハサミとタイルの破片たち。

壁はハサミの先端の形にえぐれて中の土……漆喰が覗いている。

「……………」  
もう動きはない……みたい。

「……………」  
ただどここにきて予想外の出来事が起きたことで、今さらながら分かったことが最低でもひとつ。

——僕の姿が変わったこと。

これは紛れもなく超常現象の類い。

ただどどつちかつていうとこれは呪術とか魔法に近いもの。

でもそれは僕をこの姿にしただけで終わったわけではなかったらしい。

その効力はまだ僕にかかり続けているらしい。

そんな嫌な事実を知った。

理解せざるを得なかった。

「……………さむ」

体はすっかり冷え切っている。

かいた汗で冷え冷えだ。

もそもそと服を身につけて……パンツがすーすーして寒くつて、今でもまだなんとなく怖い感じのする風呂場から離れる。

別にそこまで暗くはないからって電気をつけていない廊下。

さっきまでは何も感じなかったのに、今こうして歩いていると後ろからあのハサミが狙っているんじゃないかって不安で仕方がない。

なんども振り返る。

けど、さすがに映画みたいにホーミングしてきたりはしないらしい。

……ホラー映画を見たあとと同じでそう感じているだけだって知ってはいても、怖いものは怖いんだ。

………なんで今さら。

なんで、今さらなんだ。

なんで今さら新しいことが起きるんだ。

勘弁してよ。

僕が何か悪いことしたのか。

「……………ぐす」

くしくしって腕で目じりを拭う。

…………泣いてなんかない。

泣いてなんかないんだ、びつくりして出ただけなんだ。

20にもなった男が怖くて泣くはずなんかないんだから。

僕はとぼとぼと廊下を歩く。

…………僕はただ誰にも迷惑をかけないでひとりで静かに生きていただけなのに。

どうしてこんなことになるんだ。

女の子になったこともハサミが飛んだりすることもある。

…………生きるのって本当にとつても面倒。

ただ生きるだけなのにな。

## 8話 動揺に次ぐ動揺 1/2

ハサミが襲ってくるなんていう、姿が変わること以上に恐ろしい現象。

無機物に襲われるっていうポルターガイストどころじゃないハプニングだ、ホラーもスリルものも大の苦手な僕はたまらずにばばっと身支度を済ませてさっさと家を出た。

普段みたいに気をつけるなんてムリだからとにかく急いで逃げた。

だってあのままだとなんか怖いし。

ああ言うのって追い打ちがあるって……創作上の世界では相場が決まっているから、無いつて分かつていても不安でしょうがなかったんだ。

僕以外のなにかが勝手に動くなんて状態の家の中に留まっていられる神経は存在しない。

家の中に何かがいるって時点でムリなんだ。

「……………」

荒い息を抑えながら不自然じやないようにつて周りをきよろきよろ。

とっさだったから家を出るときよく見ていなかったんだけど……運がよかったみたいで周りには誰もいなかった。



……今のはしようがないんだけど気をつけないと危なかったな、今の。

こういうのでばれたりするもんだから気をつけよう。

反省はあとでするって決めて目立たないようにすみっこを歩きながら、できるだけ家を離れることにした。

考えごとがあると周りが見えなくなるのは僕の悪いクセ。

普段以上に気をつけながら歩く。

全裸っていう完全に無防備な状態の僕に刃物が……自分の意思かなにかで牙を剥いたっていう異常事態からほんの少し。

世界はあいかわらずに静かで変わりが無いみたい。

むしっとしてて真っ青な空を眺めながら、僕っていう物理的にちっぽけな存在が実感される。

……いちおう僕としてはがんばったんだ。

僕はあの後すぐに逃げ出したりはしない。「どうせマイルもハサミもダメになったから」っていうのと「あれは一回限りのものなのか」って確認するために、とつても怖かったけどもう一回……今度は梳きばさみで試してみようってしたんだ。

怖かったからもちろん服を着たり首元にタオルって最低限過ぎる防備くらいはして。けど、やっぱりおんなじだった。

梳きばさみも……偶然なのか指を痛めないようにって配慮があったのかは分からないけど明らかに普通じゃない力がかかって、まるで生き物みたいなうねうねって動きをしながら器用に指をすり抜けて僕から離れるように飛んで行って、後はおんなじ。別のタイルを破壊して壁に刺さって落ちてはさみ自体も壊れていた。

そりやそうだよな、お風呂場のタイルなんて相当硬いはずだし。

……ハサミを入れたところとかいろいろ変えたのに刺さった場所はほとんどおんなじだった。

どうせ刺さるなら同じところだったらよかったとかいうどうしようもない感想。

刺さっているのを間近で見たらなんでわざわざこれが僕に刺さる可能性があるのにやったのかとかいうわりと真剣な反省。

せめてちやんと厚着をしてからにすればよかったのにか。

こういうときって案外に冷静で意識はちやんと別のことを考えてるんだよなとか、そういうことを数秒で考えてからやっぱりするんじゃないかってダメージを受けつつ、この現象が髪の毛を切ろうとするだけで起きることを再確認したんだ。

……これはどういうことなんだろう。

まず、こんな危ないのはこの体になつてから初めてつてことと、その前にももちろんなかつたつてこと。

前、つまりは元の体で刃物が飛ぶなんていうこの不思議な力を体験したらすぐに神社でもお寺でも教会でもどこでも良いから駆け込んで良さそうな人にお祓いを頼むはずで、そうすれば気が楽になったはずなんだ。

だから逆にこんなことが起きたのは……封筒を開けるときのハサミとかカッターとかじゃならなかつたことで、つまりは髪の毛を自分で切る、それも今の体のもつて言うのが推測できる。

ただの状況からの推測だけどなんにもしないでただ怯えるよりは良いだろう。

人はよく分からないものでも理由があればわりと平気になる生きものらしいし。

で、日常生活で行う範囲の飲食だったり入浴だったり髪を纏めるとかそういったものはトリガーにはなりえない。

じゃないととつくにこんな目に遭っているはずだから。

だってもう1ヶ月なんだし。

でも髪の毛を切るってことが日常の範囲から外れるかどうかという疑問がある。

いくら僕がだめなニートだって人間である以上新陳代謝はする。

事実今までだってトイレにも行ったり涙や鼻水も出たり爪も伸びた。

その爪を切ったり紙で指を切ったりしてケガをしたりしたからただ体を傷つける行為とか傷つける刃物が原因だとは考えにくい……はず。

料理だつてして包丁も使つたしな。

……料理で反応されたらそれはそれでこんなもんじゃなかつただろうな。

空飛ぶ包丁とか怖すぎるもん。

「……………」

それなら髪を短くするっていう、この見た目を大きく変えるつてことに反応したのかな。

そんなんでハサミをすつ飛ばすなんてバカじゃないのつて思うけど、それ以外の深い理由が無ければこの思いつきくらいの原因しかない。

だつてそもそも僕を女の子にして小さくしてそっくり変えちやつたつて言う「変身」つていう最初にかかった力は、他ならぬ「僕の見た目を変える」ものなんだ。

不思議な力が2回つてあつたらまずは関連性を疑う。

そうすると僕の見た目のことしか思い浮かばないんだ。

なんでこうなるのかとかそもそもどうしてこの幼女になつてるのかとかいう理由にはまったく見当がつかないけど、この力は僕の見た目をこの少女にすることが目的で、爪とおんなじように要らないはずなんだけど見た目をはつきり変える役割がある髪の毛を……短くするのに反応したとしたら。

ぐるぐるつて回つてた僕の意識がびつたり止まる。

——時間が経ってもこの見た目を変えないようにするんだったら。

こんな子供の姿から成長するっていう当たり前のことも……………？

……………」

通りを走る車の音とか遠くのサイレンの音とかが聞こえる。

汗がぶわつとにじんでくる。

今日だけで2度目の感覚。

気がついたら立ち止まっていたからそろそろと歩き始める。

なんだかすぐ後ろから追いかけられてる気がしてちよつとだけ早歩きで。

……とつてもイヤなことを思いついちゃった。

なんで僕はこう悪い方向へだけは思いつきがいいっていか勘が働くんだろう。

生来がネガティブだからか。

あるいは推理小説を推理しながら読む派だから、なんだろうか。

……この幼い姿。

身長体重は小学校低学年の全国平均で薄い色の髪の毛は腰まであって、おんなじ色の目は夏が近づいて来た日光で痛くなって、肌がとつても薄くて白くつて……知らない顔の「幼女」って呼ばれる存在の姿。

手のひらはスマホの操作もキーボードもちよつと困る程度にはちつちやくて丸っこ

くて。

成長して大人になるという前提で考えて動いているわけだけど、もしこれがまちがっていて「そもそもこの姿から変われない」んだとしたら。

そこまで思い至る。

思い至ってお腹と胸が痛くなる。

ストレスに弱いのは相変わらず。

それが救いになる程度に「前の僕」と「今の僕」はかけ離れていて。

「……………」

保留しておこう。

今すぐに結論を出しても意味がないしまちがってるかもしれない。

また何かが起きるかもしれない。

さっきのことでまだ動揺しているんだ。

こんな状態で考えても悪い方ばかりに考えが向くだろうし、現に今もイヤな考えを振り払うのだけで精いっぱい。

真後ろから怖い何かがひたひた着いてくるって言うホラー映画みたいな感覚が離れてくれないんだ。

適当に人の多くて忙しいところをぶらぶらして気を紛らわせよう。

心細いときは目も合わせなくて良いから人が多いところが良いんだ。

僕はむりやりに頭の中に湧いてくる考えを押しとどめながら、まだお昼になっていないのに真夏日な炎天下を……この前揃えた春の服装に。パーカーという服装で日光にじりじりと焼かれながら繁華街へと向かった。



ぱんつ。

僕が怖い目に遭うなんて想像もしてなかったあるときの僕の手には真っ白いぱんつがある。

ぱんつでもパンツでもいいけどニュアンスが違いそうな一枚の布きれ。

男の僕が現物を現実で目にしたことがないそれは、よりにもよって僕が男じゃなくなつてから初めて目の前に広がっている。

お風呂上がりで全身の肌が火照っていてしっとりしていてうっすらと水分が光っていて、タオルで拭いただけの重い髪の毛が体に巻きついている状態。

すつかり慣れた女性用というよりは女の子用の……キャラクターがプリントされてる女兒用じゃないやつだ……パンツを手にとって、ふと思うところがあつて掲げてみる

ている。

母さんが生きていたころは洗濯なんて畳むのすら手伝ったことなんてなかったし、母さんたちが居なくなるその前にも後にも女の人と交際したことも……この布きれを見て触るって言う機会も、当然ながらなかった。

だから先月苦勞して手に入れたささやかなりボンが前についているだけの真つ白で小さいこれが、僕が初めて見て手にする女性用の下着。

悲しいけど実物を目の前にするだけでちよつと嬉しくなるのが悲しい。

男なんて所詮はそんな生きものだ。

プログラムされた本能には抗えないんだ。

つまり僕の脳みそ、意識は男……少なくとも女の子を気にする作りのままつてことでちよつと安心できる。

これで嬉しいって思えてる内は。

女の人でも女の子が好きなのは居るし男でも女の人が好きじゃない人も居るけど、僕はごくごく一般的な感性しか持ってないからこれでいいんだ。

パンツ。

ぱんつ。

男物のブリーフともトランクスとも違ってボクサーなんかともまた違うすつきりと



した三角形の布。

下着属性はもともなかったしそもそも子供は対象外だったんだけど、それにしてもあいかわらず視覚的なインパクトはすごい。

ただの布なのにな。

いかにあふれかえってる娯楽コンテンツで刷り込まれてきたかっていうものだ。

見たこともないのに好きでたまらないっていうよく考えたらなんか恐ろしい現象。

その純白を手にとってよく観察してから脚を通していく。

まだ新しいから洗えば綺麗になるけど、きつとそのうち男物とおんなじでだんだん汚くなるだろうから買い替え続けるもの。

人間だから当たり前のこと。

それは穿く前に内側か外側を確かめてからじゃないと前と後ろを間違えやすいもの。

左右が分かれてる靴下とかシャツの表裏とかと似た感じに。

物理的に飛び出しているのをしまうための膨らみとか穿いたまま出すっていうすつごく便利な機能のための切れ込みがないんだから、とにかく間違えやすい。

男がぶらぶらさせずに隠すためだけに穿くただのパンツと女性が穿くぱんつとの一番の違いだろう。

イメージ的にも機能的にも。

まあきちんと見れば広げなくても前後は分かるしタグみたい目印がついているんだけど、ぼーっとしていると今でもときどき間違える。

これなら手に取っただけではつきり見えるリボンとか刺繍がついているものを選べばよかつたか。

いやいや、あのままだとどう考えてもピンク系かキャラクター系になっていたからこれだよかつたんだろう。

さすがにそういうのは勘弁だ。

僕の成人男性としての自尊心が穿くたびにごりつと削れていくだろう。

ばんつの前と後ろを間違えるとお股がゴワゴワしておしりが柔らかくなるし、なによりに穿いたときの感覚が違うから一発で分かる。

違和感はそのほどないんだけどそれでもなんか違うっていう感じになるんだ。

こんなものでもちゃんと細かく考えて作ってあるんだなって感激だ。

あとパンツってすごくぴっちりしている。

それはもうぴっちりとお股全体を包むようにフィットしているんだ。

感覚的には水泳教室に通っていたときの水着くらい？

昔過ぎてよく覚えてないけど多分そんな感じ。

なんていうかお股全体を締め付けられるっていうか守られているっていうか、なんて

いうか……慣れるまではきつくてイヤだったけど慣れると温かみがあるっていうか安心するっていうか？

不思議な感覚。

念のために調べてみたり店員さんが合っていないって言わなかった通りにサイズは合っているみたいだけど、まだこの感覚に違和感がある。

特にいちばん大切なぶんと太もものつけ根が。

幼児とは言っても構造上は立派に女の子らしい。



「はあ——……………」

そんなどうでもいいことを思い出しながら僕はわざとらしくため息をつく。

クーラーが効いて涼しい屋内、人がたくさんいる場所で——顔も髪の毛も出して。

何十回めかの拒絶をこれ以上わかりやすい形はないくらいに。

僕の全力を尽くして。

言葉にできないこの気持ちを届かせたくって。

だけど僕の大切なこの気持ちは伝わらないっていうよりは無視されている。

なんてことだ。

やっぱり世界は幼女に厳しい。

「ですから是非一度スタジオの方まで来てみてください！ きつと気が変わりますからっ！ 響さんと同じくらいの年の子もいますしお友だちにも自慢できますし！ 今でもテレビや雑誌って言うのは全国の女の子たちの憧れなんですよ！ もちろんネットでもっ」

僕は女の子じゃないし憧れなんかしない。

そうは思うけど口が動かないんだからじつとするしかない。

高い声の女の子の人が今みたいなセリフを微妙に変えるだけでリピートしながらまくし立てる。

「ですから今井さん、落ちついてください……断られましたけど名刺は受け取っていただけじゃないですか。今はそれで満足しましょう。ご興味があまりないようですし、しつこいと悪い印象しか持つてもらえません。いつも言っているでしょう、強引な勧誘は逆効果だつて」

もうひとりの男の人は僕の味方をしてくれる。

いや、この人がそもそもその発端なんだけどな。

さらに言えば僕は知っている。

こういう飴と鞭って言うペアの組み合わせはうさんくさい人たちの常套手段なんだ。

「……………」

だから僕はシャツを両手で掴んだままじっとこらえる。

「いいえ萩村さん！ 私の勘がささやいているんです！ ここで最低でもスタジオ見学のOKをもらわないとこの子が……響さんが私たちの元に来ることはもう無いんだと！ そう！ そうなんですよ！ 萩村さんほどじゃありませんが私にだってわかるんですよ！ 直感なんですっ！ この前スタジオに来たあの子のときだってそうだったじゃないですか！ 今、このタイミシングが命なんです！ 袖触る縁ですよ！」

僕の右側でそう断罪する女の人。

「まあそれは分かりますけど……響さんは今のところご興味がないようですし、今井さんの説得を受けてもその気にはなっていないし……私としてはあくまでご本人がご自身からという意思を尊重したいんです。 学業や部活、親御さんの意向もあるでしょうし……」

僕の左側でそう弁護してくれる男の人。

ヒートアップしていく今井さんというらしい女の人とそれをなだめる萩村っていうらしい男の人。

あとはその真つ正面で耐えている僕。

まるで裁判所にいるみたいな感覚だ。

この組み合わせも会話も人の注目を引くには充分だったみたいで、とにかくまあ見られる見られる。

やめて見ないで。

僕は目立ちたくないんだ。

……人の多いデパートの1階、それも大型連休中のとあつてごみごみしているところに居る僕と来ちやつたふたり。

しかも座って休める中央のスペースで騒いでいるんだからそりゃあ誰だつて見るだろう。

僕だつて他人事だつたら立ち止まつてのぞき込むくらいはするかもしれないだし。

警備員さんはどこだ。

困つてる幼女がいるつていうのに頼れる人たちが来る気配がない。

「……………」

しかもスマホを向けられて——明らかに撮られている気がしてさらに嫌な気持ちになる。

立ち止まつて見なくてもいいだろうし見るのならもつと離れるかしてほしいし、なにより無断撮影も録画も止めてほしい。

肖像権とかどうなってるんだ。

かつてないほどに大量の人から注目されて……まあ注目されているのは主にこのふたりだけなんだけど。

だって僕はだんまりだし、そもそも背が低いから人垣の最前列の人からしか物理的に見えないし。

けど僕が見える10人くらいの人からは僕が見えるわけで見られるわけで。

すつごく勘弁してほしいけど逃げるに逃げられない状況でふたりの口論は続く。

ついでに、つい教えちゃって後悔してるけど僕の名前を大声で連呼しないでほしい。やめて。

「そうなんですけど、そうなんですけど……——っ！　今じゃないとダメなんですよ。萩村さんそこをなんとかか！　なんとか抑えて一緒に説得を!!　なんなら他の子たちを応援に」

「今井さん声、声！　声を抑えてください」

「今はそんなことを言っている場合じゃないんですっ」

そんなこと言ってる場合だよ。

頭の中だけで反論。

そういうのだけが得意。

こつそり男の人……萩村っていう名前を応援するも今井っていう人はへこたれない。  
「……………」

たぶん大人に叱られた子供みたいに見えるだろう僕はうつむくしかない。

こういうところで大声で堂々と発言する元気があればニートはしていない。

ニートをなめないでほしい。

なめられた結果がこれなんだけでも。

——その騒ぎは収まるどころかますますせわしなくなっていく。

いつになったら終わるんだろうな、この茶番。

そう思いながら僕は帽子のつばをギリギリまで下げながら諦めずに逃げる方法を模

索していた。

……いざとなつて全力で走つてもあつさり捕まえられる前に転びそうな程度には自

身の無い体力を思い出して僕はしよげた。



うんざりする目に遭うって知らなかった……ハサミに襲われたって言うのをすっかり忘れるくらいの悲劇に見舞われたのは偶然。



こんな偶然があつてたまるかつて思うけど実際に偶然なんだ。

そんな僕は日陰を選んで歩いていたらいつの間にか駅前に来てしまつていた。

せめてもつとマイルドなワンクッションがほしかったとか未知の力に対して意味の

ない要望を頭でぐるぐるさせながらハサミのことばかり考えていた僕。

そのせいで完全に油断していたんだ。

とうか少女になるって言う……半ば魔法みたいな力がかかつているなんてすっかり忘れるくらいには慣れていたのもあつて、あんなのは予想もしていなかつたしそもそもできないものだったからしようがない面もあるんだけども。

「ふう」

暑かつた。

暑かつたんだ。

それもあつたから絶対に僕の髪の毛と顔を見られないようにっていう意識がちよつとだけなら……つて気が抜けてたんだ。

家の目の前じゃないしつていう油断もあつたかもしれない。

急いで服を着て飛び出して来ちゃつたから結局この前来たときと同じような格好で

同じ場所に来ることになつた僕。

春用の服装だったから歩いてくるだけで日差しと熱気で首筋が蒸れていた。

頭の後ろから肩がむしむししていた。

新鮮な不快感。

知りたくはなかったその感覚。

あまりに多い人で嫌気が差しつつも暑さにはあらがえなくつて、人の波に乗って手近なデパートへしぶしぶと入っていくと入り口を通り抜けた瞬間から一気に清涼感で……僕の警戒心はゼロになった。

ああ……涼しい。

僕はもうなんにも考えてなかった。

涼しくなったことで今度は汗が気持ち悪いって気づいてちよつとだけフード取っちゃってもいいよなって思っちゃって。

ハサミがちらついて落ち着かなかった緊張が解れたのと久しぶりに外に出て満足しているのと涼しさとでぼーつとしていた僕は、なんにも考えずにフードと帽子を外して涼をとる愚策をおかした。

「……………ふああ」

変な声が漏れるけどしようがない。

天国だつて思った。

実際には地獄の入り口だった。

首より下の髪の毛は服の下のままだけどそれでもぜんぜん違う感覚が嬉しくて。

これからはもうエアコンなしでは厳しいな。

梅雨まではずっとこんな感じみたいだし家でもクーラーかけよう。

これまでは室外機の音とかを気にしてたけど熱中症とか怖いしとかどうでもいいことを考えながら素顔をさらし続けて。

でも髪の毛が長いと耳周りや首が暑苦しいな、特に夏は。

髪を切れないなら後ろで纏めるしかないか。

この見た目ならどんな纏め方でも行けそうだけでもつと幼く見えたらアレだしな。

「うーん」

そんな、ほんつとうにどうしようもないことをしながら僕は歩いてた。

とりあえずはこのままロビーの空いているソファとかに座って体が充分に冷えてから考えよう。

そうしていつものクセで、ただ人の波に乗ってぶつからないように目的地にオートで行く機能を有効にしていたのがとどめだった。

「……あの、すみません。……すみませんそちらの方。あの、美しい髪の毛の……そう、あなたです。少しだけおはなしの方よろしいでしょうか？」

そうして僕は目の前の猛獣に気がつかずに頂かれにこのこ歩いて行っていた。

ここで「よろしくないです」って言って素通りできたら最悪は防げたのに、僕はそれに気がつかなかつたんだ。

だから僕は今でも左右からの弁論をじっと耐えているんだ。

## 8話 動揺に次ぐ動揺 2/2

僕は普段ぼーっとしているように見えるらしい。

外に居ようと頭の中は家の中だからだろうな。

興味のあること以外に関心を一切に向けていないって言うのが分かる。

それが僕って言う生物の生態だからしょうがない。

だからと言って話しかけやすい雰囲気を出したりはしていないらしくって、お店とかでも基本的に話しかけられたりはしない。

間違っても、お店とかじゃない普通の道で……場所とかを尋ねられることす二十数年の人生でも数える程度だ。

だから声をかけられた相手が僕なんだって最初は気づけなかった。

だって僕に声をかけてくる人なんて居ないって思ってたらそうなるよね。

実際学校だって電車でそこそここのところだったしで地元に知り合いも居ないし。

あと、単純に声かものすごく遠く……高いところからだったってのもあるかな。

身長差は劇的だ。

「そこの方」とか「あの……」とか「お忙しいところを」とか一生懸命誰かに声をかけよ

うとしてる人がいるんだなって思ってたらまさかの僕だっただなんて思うはずもないんだし。

見知らぬ人から声をかけられたって、それが僕だったらしいって気がつくまでかかったのはしょうがないこと。

だからやつとのことで顔を上げてその人と目が合って僕らしいって分かったけど、だから何だって思う。

僕？

雰囲気的に僕だよな。

けど何で僕？

最初に浮かんだのはそういうハテナだけ。

邪魔にならない良い感じのところに立っている僕の目の前にその人は居るんだし、声をかける相手を間違えたとかいうわけじゃなさそう。

目は合い続けているし。

けど……なんで？

いや、ほんと。

ていうか誰。

今の僕は子供だから知り合いなんて……それにしてもでかいなあこの人。

目が合う、つまりは僕が伏せていたらしい目を上げてから首を上に向けて行って照明とかがちかちかするって感じるくらいになってようやくの角度。

この体になってから慣れた上を向くっていう動作のまま固まる。

……そこまで近くないのにしっかりと上を向かないと目が合わない。

深刻な身長差だ。

普通のイスにも座るんじゃないやなくてクッション敷いた上で正座とか女の子座りで乗るって感じなんでもんな。

うん、知ってた。

けどもその人を見て思う。

……黒いスーツって暑そう。

こんなに暑くなってきたのに……制服とかとおんなじで夏服とかあるんだろうか。

大変だなあ社会人は。

そんなことをスーツに袖を通したこともないニートな現幼女が思う。

学校が制服だったからスーツ要らなかつたもんなあ。

「改めてお忙しいところを……いきなりで済みません。私は萩村と言って……こういう

う者です。芸能活動。……ご興味は、おありでしょうか」

とつとつと話す人って僕は好き。

だつて僕自身も台詞を考えないと発音できないタイプだからその気持ち分かるし、嘘についてなさそうって思うから。

あとなによりもそういう人って話すのがゆっくりだから楽って言うのもある。

聞き取るのだつて集中力が要る僕みたいな人にとつて、おしゃべりな女の人……お隣さんみたいな人は天敵なんだ。

で、僕が一方的に好印象を持ったその人。

元の僕よりもずつと背が高くって体格がよくって、元の僕くらいの年齢と見る。

普通の人は社会人って言うものだからもしかしたら僕より若いのかもな。

ほら、苦労が少ないと若く見えるっていうし。

その、萩村と名乗る彼はかがむようにして……それもわざわざにひぎを下ろして僕と無理なく視線を合わせられる高さまで下がってきて名刺らしきものを渡してくる。

ふむ、真摯で紳士な人だな。

確かに上からのぞき込まれる感覚は好きじゃないから嬉しい。

背が縮んでから分かった気持ち。

……けど、芸能活動。

これっぽっちも興味ないけど？

反射でそう思ったけどもちろん口にできるわけはなくて……とつさに頭の中だけ



で反応しているうちに名刺を受け取っちゃったけど、これって勧誘っていうものなんだよな？

そう言ってるし。

いわゆるスカウトってやつ。

怪しい系のしか思い浮かばないけど……さすがに子供にそんなことを白昼堂々としてくるわけはないから純粋なそれだと思う。

けど本当に町中でするんだな。

今時はネットで応募って印象だったけど。

「……………」

「その他大勢」っていう素通りされるはずのグループに属してきた僕。

こんな風に知らない人からアプローチを受けたのなんて初めてだから、どう対処すればいいのか分からない。

「……………」

……どうしよう。

こういう場合にどう反応すれば良いのか、さらつと断るシチュエーションはいろいろあるんだけど、肝心のその知識が全て人からの借りものだから実戦なんてできない。

ほけーつと名刺を受け取ったままで口も開けたまま、ただその人の顔を見るしかない

僕は年相応に見えたんじゃないかな。

◇

でも僕はNOって言えた。

偉い。

相手が男の人で、それも歳が近いからだだろうけども。

不幸中の幸いっていうやつだな。

「ご興味は」

「ないです」

「歌とダンスとトーク……どれかだけでも」

「だからありません」

「ええと、こちらに載っているような、あなたのような若い世代にも人気の」

「まったく知りませんし興味もありません」

「しかし」

「僕に構っても時間の無駄ですよ？」

「こういう営業や勧誘に慣れている手合いには感情的にならずとことんセメントで

ばつさりの応対が鉄則。

知識としては知っていたけど実践するのは初めて。

インターホンとか電話越しで経験をちよつとだけ積んだ記憶で無理やりに口を動かす。

けど初めてにしてはなかなか良い感じなんじゃないかな？

みじんも希望を持たせない口調できつぱり断ってるしな。

「どうか一度だけ」

「残念ですが」

「.....」

「.....」

勧誘には申し訳ないって思わない気持ちが必要。

あっちもお仕事だから見込みゼロならかえってありがたいはずなんだ。

利害が一致しないんだったらお互いに無駄な時間は使いたくないもんな。

そう思つてのインターホン越しとおんなじ感じでさっくりお断り。

子供にここまでではつきり言われるのは初めてなのか固まる彼。

ふむ、良い感じの空白ができた。

後はさつさときさよならするだけだ。

——そう思ったのは判断が甘かったんだろう。

ちよつと前の僕と入れ替わりたいて思う。

時間なんて戻るはずがないのにな。

夜寝る前の妄想もほどほどに、だ。

……初めに勧誘してきたこの萩村さんっていう人は常識的でまともで言葉が通じたから、こんな感じでつつがなくお断りができそうだった。

諦めた雰囲気だったからお付き合いしたちよつとだけの話によると、この人たちはどこぞの事務所で、いわゆるアイドルとか呼ばれる人たちを育成しているらしい。

名刺通りでわりと有名どころだったたりするみたいだし、だからこそがつついてなくてお別れできるってほつとしちやつてたから適当に聞いてたのが命取り。

今日用事があつて駅ビルなんかに通るかかったところであつたまたま僕を見かけたつてことらしくて、たまたま移籍つていうのがあつたから新しく人を探していたところにタイミング悪く顔を出した僕がいたつて形だとか。

これは声をかけなくちやつて思つた次第なんだつて。

……僕にとつてはタイミング悪すぎる偶然だな。

悪いことには悪いことが重なるんだ。

あと1分でも僕がこの人がズレていれば見つからなかつたはずなのに……まさかこ

んなことになるなんて。

やっぱり、気、緩んでたのかな。

そうとしか思えない状況なんだ。

朝のことがあったからどうしようもなかったかもしれないんだけど、気をつければ良かっただけのことだもんな。

このときはまだ彼、萩村さんからの軽い自己紹介とアイドル活動の説明を簡単にされて、最近お世話してるという子たちの写真や動画を見せられたりしただけ。

「じゃあそろそろ」って言ったたらさっさと身を引こうとしてくれていたし、悪い人じゃない。

声をかけられた当初こそ「やだなあ……」って思ってたけど、こういうのに慣れていくのか説明が簡潔で分かりやすいし勧誘特有のねちっこさがなかった。

だから終わるころには好印象でばいばいしようとした。

……これを狙ってやったんだとしたらとんでもないやり手か、さもなければ僕がちよっただけだな。

どっちなんだろうな。

人と接する機会が極端に少ないからちよつと良くされただけで好感を抱くんだ。

内気な人間特有のあるあるらしい。

「分かりました、非常に残念です。間違いなく少ない準備期間でのデビューを確信しているのですが……今回はこれでお暇します。……その名刺だけ受け取っていただけるでしょうか」

「いいですよ、受け取るだけなら」

すぐ捨てるチラシとおんなじ扱いで良いんだったら。

「ありがとうございます……親御さんにも、ぜひ。時間が経っても構いません、私たちはお待ちしていますのでご興味が湧きましたら……」

「そうですね」

湧かないって断言できるけどな、親もいないし判断するのは僕だけだし。

成人しているからこそその強気だ。

肉体的にはともかく法律的に。

けどとりあえず突っ返したりはしないで素直に受け取っておく僕。

会話を円満に終わらせるためについていうのとなにかに使えるかもしれないって打算だ。

現状手元にある連絡先が権利とお金と血縁関係しかないからな。

どれも僕って人間相手じゃなくって死んじやった親のって始末なんだ。

……改めて自覚して寂しくなった。

ネガりはじめてきたところでさっさと離れておこう……。

——そうやって適当に相槌を打ちながら別れようって瞬間。

「では」

「わあっ！ 萩村さんすごいじゃないですか！」

「!?」

変な声出さなかつた僕は偉いって思う。

「こんなにオーラある子を見つけるなんて！ それに今はいないタイプの子ですし……

しかもこんなに幼くてぴつたりじゃないですか！ 次期のユニットの件いけますよ！」

そうまくし立てながら無理やりに割り込んできたのが今井っていう悪魔さん。

萩村さんと知り合いみたいだし、この人がたまたま来たのかそれとも見計らっていたのかは分からない。

だって服装は萩村さんの目立つびっしてしたスーツ姿とは違ってふつうの私服だしな。

私服って言っても……どう表現したら良いのか分からないけど、買い物とか食事だけが目的でぶらつくような女の人の格好じゃなくて、社員証をぶら下げているおかしくない感じに派手なところが無いオフィスビルから出てきそうって印象の私服を着た女の子の人。

ものすごく曖昧だけど元引きこもりなんだからしようがない。

社会に出てないニートの精いっぱいの観察力と理解力だ。

この人の歳も、たぶん元の僕と同じくらい……だと思っただけ化粧つてすごいから確かじゃない。

まあ話し方はまだ大学生が抜けていないって感じで僕より子供っぽいつて感じるあたりきつと若いんだろう。

見た目だけならまともな人……だけどいきなり大声で割ってきたから僕の印象は最悪だ。

思いつ切りマイナスに振り切っている。

ものすごくまともな事務所だつて印象を持った萩村つていう人のいろいろをぶち壊しな今井つて人。

……うるさい女の人は嫌いなんだ。

「アイドルしましょう！」

「しません」

「同級生の女の子にも……男の人たちからも、みんなからモテモテですよ！」

「興味ないです」

「みんなの憧れになりますよ！　あなたならきつと輝けますっ！」



「僕は憧れていませんし輝きたくもないです」

「僕っ子なんですね!! 良いです! 属性いっぱいですね! 話し方も雰囲気もクール系ですし将来有望ですっ! ……ああその目つき、表情! いいです!! そういう子は満遍ない人気が……!」

「……………」

相手をすればするほどに切り口を見つけてきて同じような会話を何度も何度も。

食い下がるっていうか、僕がYESっていうまでは絶対に諦めないというのが見えてくる。

今どきこんなに強引で問題は起きないんだろうか、いろいろと。

まあ見た目は確かに子供だし、大学生どころか社会人になってもこういう断る経験を何度かしていないと押しに負けて「話だけでも……」って押し負けるのを狙っているだろう。

狡猾だな。

僕から今井って人への好感度はダダ下がりだ。

芸能界なんてブラックオブラック、しかも仕事自体が「人に見られて覚えられる」っていう僕にとっては相性が最悪のもの。

絶対にやらないっていう意思と事情がなければ「めんどくさいから見学だけでも」っ

てずるずる行きそうだし実際に有効そうな方法だな。  
しないけど。

……しそうにはなっているけど、しないんだから。

けどもそうはいっても悪魔な今井さんは引き下がらないから、同じように勧誘されて同じように断るっていう無限ループに入る。

反射でああ言えばこう言うを繰り返す中思う。

……それにしても今の僕はそんなに目立つんだろうか。

確かに長くてさらさらで色素の薄いこの髪の毛は、黒髪が大半の社会では何もしてなくても目に留まる。

目鼻立ちも地味だった前の僕に比べればダントツではあるんだろう。

それは分かった。

けども……その髪の毛は短くできないってのがつい先ほどに証明済み。

つまりは被って誤魔化すしかなかつただけだけどそれを忘れて涼んでいたって言う  
……。

つまりはポカミスだな。

ああ、学生のころ試験でどの科目でもささいなミスをしてもつたいなかった記憶が。

今井って人とは絶対に目を合わせないように背けながら思う。

……でも、ここまで熱心に勧誘するほどじゃないって思うんだけどなあ。

ただの青田買いか人手不足なのか。

それとも単純にこの人の押しが強いだけか。

……絶対にこの人の性格だな。

同僚っぽい萩村さんは引いたら引くいい人だったんだから。

だんだん人目についてきたからもうフードは被り直してるけど……こんなことになるなら取らなければよかった。

つくづくついさっきの油断が命取りだったと身にしみる。

後悔は必ずあとからやってくるもの。

僕はいつもこうだな。

けど、ほんとどうしよう。

「というわけで響さん！ 私、自分でもわかるくらい強引で本当に申し訳ないんですけど」

分かっているならご遠慮して？

「でも一回！ たった一回で良いから来てください！ 来て、現場を見てください！

どうしてもイヤなら近くでやっているロケとかコンサートをお客として見るのでも構いません！ ぜひ、ぜひぜひ、どうか、なにとぞ……」

どうしてつて思うくらいの食いつきな今井さん。

強引すぎるとかえって引かれるって分からないだろうか。

「今井さんいい加減にしましょう……………ほら、行きますよ」

「でも」

「でも、ではありません。響さんにぐい迷惑になっています」

そうして途中からは僕はほとんど置いてきぼりになって会話は別のループへ。

……………もう僕、逃げてもいいよね？

最低限の義理は果たしたよね？

意識は今にたどり着いちやってそう結論づける。

ぎやあぎやあ甲高い声が降ってくる中、僕は決心する。

悪いと思つて付き合っただけど途中から僕そっちのけだしテーマは僕についてだけど

別に頼んでいないし。

むしろ文句を言つても良いくらいだよな。

めんどくさいし丸め込まれそうだから言わないけど。

ただ僕から会話を割り込んだり無理やりに切るのは苦手だからどうやって離れるベ

きか悩む。

勧誘の電話とかまくしたてられるとなかなか切ることすらできないしな。

本当は「失礼します」で切っちゃえばいいんだけど……それができないのが難しいところ。

ちよつと僕が我慢すればって思っちゃうのが駄目なんだろうか。

でもだつて逆恨みとか怖いしな。

まして今は対人ですぐそばだし。

……うーん。

つていうか自分がものすごく強引だつて自覚あつたんだ、悪魔さん……おつと、今井さん。

勧誘なんて向いてないから止めた方が良いって思うよ？

「それなら響さん、それならせめて今ここでこの前のライブの映像を見ていただくだけでも！ ちよつと待つてくださいいね、今すぐにご用意を」

萩村さんが片方の腕を……やっぱり女の人に触れるのって抵抗あるよね、おずおずと掴むも明らかに抑えられていない今井さんはおもむろにスマホを取り出す。

……さて、強引に来る以上はこつちも強引にしても怒りはしないだろうし適当な理由を言つて逃げないと僕の時間が吸われ続ける。

……そうか、名前を連呼されるから断りにくいのか。

こうなるつて分かつていたら最初に教えなければ良かったなあ。

でも、まさか一人目でさえ抑えられない伏兵が奇襲を仕掛けて来るだなんて想像もできないからしょうがない。

けどやっぱり個人情報教えちゃったのは致命的だ。

さてさてそれならどうするか。

——じり、と脚に力を入れて全力逃走を思いつく。

大丈夫、転びさえしなければむしろこの姿は味方だ。

背が低いからこそ人垣の中を通り抜けられる……かもしれない。

一応はまともなお仕事みたいだし、さすがにこんな子供を追いかけ回したりはしないだろうって言う希望的観測からの思いつき。

「……あ、あー、おまたせ、ひびき！ 遅くなっちゃってごめんねー」

それを試していた僕はいきなり声をかけられてびくつてなる。

「え、あの」

そんな馴れ馴れしい声が横から聞こえてきても僕は反応できないけど、今井さんもフリーズしてる。

「でもなんで連絡出てくれないのさー遅れるって伝えたかったのにー。メッセージも既読つかないしさって、よく見たら何ごとっ!? どういう状況なのこれひびき!?!」

なんか僕の名前を連呼される。

けど名乗った覚えがなくなつて困る。

「……………え」

突然何かをされるつて言うのは人の行動をキャンセルするらしい。

そんなのをどこかで読んだ覚えがある。

そんなことを思い浮かべるしかない僕の目の前に……………今の僕よりちよつとだけ年上、

中学生くらいの女の子の背中と髪の毛が割り込んできた。

……………何故かは分からないけどいきなり人が増えた。

なんで？

理解が追いつかない。

僕に友だちは……………この姿はもちろんだしその前からいないし名前を教えた相手だつて数えるほど。

ましてやこんな子供な女の子には覚えが全くない。

話も合わないし話しかけると事案だからそんなこと……………あ、今の僕も被事案な見た目になつてるか。

何が何やつて分からなくなつてぼんやりする。

あとこの子の声が大きいいせいでさらに人目が……………

「あ。あ……………この感じ。もしかしてまたお誘いなの？ ほんつといつ見てもモ

テてるけどどこ行っても大変そうだねえ」

「あ、あなたは響さんのお友だちの方でしょうか？ それに、またって」

「そーですよ？ しよっちゆう声かけられたり写真撮られたりしてて大変そうでー。

あ、でもあなたたちはちゃんとしてますし、まともそうでよかったですけど。でもひ

びきはそういうの興味ないどころか」

僕は背中に隠されて安全圏。

蚊帳の外って言っても良い。

この子が前に出てくれたおかげで視線が気にならなくなって落ちつく僕。

ふう……ひと安心。

……………。

………いやいや年齢が半分くらいの子供に守られて何ほつとしてるんだ僕は。

男としてのプライド………そういえば女になってたんだっけ。

身長も負けてるしなにひとつ勝つところがなくなってるし、僕はやっぱりダメだ。

「だいつきらいなんですよ」

じわって汗がにじむ。

………女の子も女の人も唐突に声が低くなるから怖い。

「もったいないことに周りにどんだけ勧められても乗り気にならなくて。ま、私も



性格に合っていないとは思いますがね」

「でしたら、あなたからもぜひ」

「でも」

……怖いって感じてるのはきつとあれだ、今の僕が幼い体だからだ。

間違っても中学生……いや小学生かもしれない女の子の声でびびったりなんかしないもん。

さすがに僕だつてそこまでやばくはない。

「あんまりしつこいとケーサツ。呼びますよ？ ひびきのお母さんに頼まれてよく追いかけているんでそのへん慣れてるんです、私。いいんですか？ このボタン押して。困るんじゃないんですか？」

やっぱり怖かった。

子供だつて分かっているのに凄みがあるんだ。

どうして女の人も女の子もこんな風にいきなり声が変わるんだろうか。

そういう生物なんだろうか。

けど、そんな末恐ろしい小学生な彼女の顔を……僕からは見えないけどそれを見ていいらしい萩村さんと今井さんの顔色が変わる。

良い大人が本気で困ってる感じ。

僕からは見えないけどスマホでも見せてるのかな。

僕からは見えないけどな。

向きと、あと身長的にも。

……このちつこい肉体が悲しい。

「……ほら今井さん、もう諦めましょう。無理強いはよくありませんって。ご友人

にもご迷惑をかけてしまっていますし」

「うー……でも、ここでお願いできなければ……あ——……」

目の前の肩までのまつすぐな黒髪をぼんやりと見上げていたら、斜め前から見える今井さんと、その奥でそびえる萩村さんの顔。

頭を抱えて「あー」と「うー」で唸っている。

たいそう残念なことになっている。

僕はちよつとだけ嬉しくなった。

今日のことは許してあげよう。

「……わかりましたあ……響さん、しつこくしてほんとうに申し訳ありませんでした」

年下の子供に負けた憐れな今井さんは頭を下げる。

「その手逸材を見つけた興奮と衝動でいつになく舞い上がってしまいました……。響さん、それにお友達の方、ご迷惑をおかけしました。……もし少しでも気になってい

ただけたらご連絡ください……ぐすん」

涙ぐむほどじゃないだろうって思うけど、とにかく諦めてくれた様子。

「あい、わっかりましたーじゃあ私たちはこれで……ひびき、行く？」

「……………ん？」

その子に急に振り向かれて近距離で目が合って反応も出来ないうちに手を握られて引つ張られて、どこかへと連れて行かれる僕。

……………ん？

「ジャマが入っちゃって遅くなっただけどとりあえず上の階に行こっかー。まだお腹は空かないしカフェにでも入ってお茶しよお茶ー」

「……………ん??」

ずりずりと引きずられるイメージ。

僕はドナドナされている。

実際にはたぶん年上の、姉かなにかに先導される妹的な存在に見えるだろう感じでぐいぐい連れて行かれる。

いや、顔と髪の毛はもうフードで隠しているしズボンだし、弟って見られるか？

……じゃなくて、中学生くらいの女の子に手を繋がれている年下の子供っていう姿には変わらない。

「……………???」  
わけがわからないままにエスカレーター。

……え、ちよつと。

そう言いたいけどさっきの声を思い出して声をかけられないダメな僕。  
君のこと、僕、ぜんっぜん知らないんだけど？

え、これ、どういうこと？

……もしかしてこれ、連れて行かれる先が変わったただけなんじゃ……。

NOって言えたはずの僕は何にも言えずに連行されて行った。

## 9話 小さい者同士↓同志 1/2

男のときの僕は髪の毛を短くしていた。

上とか後ろは別にどうだっていいから適当だったけど、前髪だけは絶対に。

……だからそうじゃなくなった僕は苦勞するんだ。

「……………」

すつと、下を向いているとするすると下がってくる髪の毛をかき上げる。

さらさらとした感覚が指をくすぐる。

くすぐったいって感覚は随分と久しぶりだ。

ぼーっとテレビや映画を見ているときの手持ち無沙汰になるシーンとか。

髪の毛がもさつとしていているうなじの後ろに両手を指を広げて差し込んで指の股で梳

くように撫でるのを何回も何回も、腕が疲れてくるまで繰り返す。

柔らかくてくすぐったい感覚が指とそのあいだから伝わってきて、そのあいだにヒマ

なシーンは終わっている。

便利な暇つぶしだ。

ベッドでごろごろしているときとかイスに座っているとき。

片方でも手が空いていると、気がついたら手が勝手に動いて絡まったりしやすい横とか肩の上に乗っかっている髪の毛をていねいに梳かしている。

絡まっている毛や折れている毛を見つけるとささやかに嬉しい。

その部分を触っているとなんとなく癒やされる気がする。

ただ……それだけ。

ただそれだけのこと。

それ以上のことはない。

「……………」

それなのになんだか最近いつも髪の毛を触っているような気がする。

変なクセがついたもんだな。

なんでだろう。

髪の毛の量そのものも多いし、なにより長いから自然と触れることが多いのもあるけど……触ると純粋に気持ちいいっていうか心地いいっていうか、なんだか不思議な感覚が浮かんでくるからかな。

あと地味に髪の毛を軽く梳くときに指が地肌に触れるのや軽く引っ張るときの毛根の感覚もまたいいんだ。

だからしょうがないよね。

別に悪いことじゃないし。

ペットとか飼ったことないけどモフるっていうのはこういうことなんだろうか。グルーミングとかいったっけ。

そんなことを適当に見ている動画の前で考える。

もちろん両手は髪のをいじいじしている。

自己モフリ……あるいはセルフグルーミング？

うーん、いまいちしくりこない。

けど女の人が髪のを頻繁に触っている理由は分かったわけだ。

単純に邪魔になるって言うのと言い表せない心地良さで安心するからで。

そう思えば……いやいや、せめて前だけでも短くしたい。

ハサミさんに怒られるから無理だけどな。



「さつきはありがとう……ごぎいます。 助かりました、ああいうのは本当に苦手で」

強気すぎる勧誘をしてきた人たち——特に女の人。

だけどほつとしたついでで名前はもう忘れたし別にどうでもいいか。

もう2度と会わないんだしな。

その人たちから救い出してもらってエスカレーターで数フロア上がった先の奥まったところにある喫茶店で口を開く。

そのの、奥の方の落ちつく席を選ぶという気の利きようをもつ小学生から中学生くらいの女の子を対面にして再度きちんとお礼。

お礼は大事だ。

特に僕としては絶賛大ピンチだったんだから。

あの場面で警備員さんが来てくれたら助かっただろうけど、保護者……親がいないことを聞かれたら困る。

……ただの駅前なんだし休日だしで別にひとりでも来ても不思議じゃないだろうけど、親にも謝りたいってあの事務所の人が出てきたら断れないもんな。

本当に幼女ボディは困ったもの。

だから僕を助けてくれたこの子には感謝も感謝だ。

何の変哲もない肩まで気ストレートな髪型……なにかをつけているわけでもないし、なんていうかこう……地味な子って印象なのが良。

ささくれだった心が癒やされる気がする。

いやいや恩人をそんな風に言っちゃダメか。



保守的……いや、清楚って言ったほうが聞き心地が良い？

いいか、ケバくない無難な感じってことで悪い意味じゃないんだから。

ともかく、ああいった強引で理詰めでなんとかならないタイプと数年ぶりに対面で接したから対処の仕方が分からなかったし、すつごく助かった。

女の子や女性は繁華街でよく声かけやつきまといがあるとは聞いていたけど、それを自分で体験してみるとそのやつかいさが身に染みて分かる。

背が低いだけで抵抗しづらいつて感じるもんな、なんとなくでも。

その何となくが僕の場合は致命的なんだけど、とにかく困ったんだ。

……帰ったら対処方法とかをひととおり学んでおく必要があるそうだな。

次もこの子みたいに颯爽と助けてくれる人が現れる保証は無いし。

やつぱりブザーが楽で効果的かな。

小学生のマストアイテムらしいしな。

「いやいやあー、たいしたことはしてないよー？ 人の多いところに行くとなまーに

あーいうことがあるから慣れてるしつ。……しかもこのお店って飲み物だけでも結

構するじゃん！ 具体的には私がふんぱつするときのお昼代くらい!! 入ったことな

いグレードだし！ ……おごってもらっちゃって本当によかった？ 私の分払うよ？」

「お世話になりましたし手持ちはありますから」

「おー、お大尽じゃのー」

朝のハサミがあつた上にたくさんの人に見られて正直参つてきていたから、あのままだと「じゃあ30分だけ……」とか言つてもう少しで流されちゃいそうだったしな。

頭の中ではそろそろ脱兎しようつてしてたけど、じゃあ体が思った通りに動くかなんてのはちつこい僕に期待ができないもん。

でも、今回ののでこれまでは遭遇したことがなかった「引く気がない相手」つていうののいなし方のコツが少しだけ分かつた気がする。

こちらもある程度強引でないといけないとかいろいろと。

強引にしたところで移動の遅いこの体だから回り込まれたらどうしようもないんだけどなあ……そうならない立ち回りかな。

やはり目立たないことこそがカギだ。

………ブザーは帰りに買おう。

そういうアプリも探せばありそうだし。

「あーいゝのは適当な理由をつけて抜け出すのがいちばんのセオリーだからさ？ 真面目に相手しちやダメなんだよ。……私の友だちにもそういうタイプがいるからわかるけどさー、おかげで私が声がけされてもらくーに撒けるんだけどね。滅多に無いけど。………んー、しっかしこの前もそう思ったけどやっぱりすごいビジュアルだ

ねえ。でも断り慣れてないってことは、もしかしてあんまりひとりで外とか出ない感じっ？」

「ええ……まあ、はい、そうですね………う？」

会話のテンポが速いっていうよりは口がものすごい勢いで動くし、息継ぎが短い。追いつくって言うか返事をひねり出そうって努力するだけで精いっぱいだ。

よくこんなスピードで話せるな。

僕なら絶対に噛むし、それ以前にそんなに話す内容がないけども。

………あと、この前って何だろう。

「あ、敬語いらなくてータメでいいよ、同じ学校の先輩後輩じゃないんだし。………なによりもうー回ただけけど一緒に食べた仲だしー？ これはもう「友だち」ってことでもいいんじゃないかやー？ なんちやってー……えへへえ………」

「？」  
僕は首をひねる。

へ？

一緒って何のこと？

覚えが全くないんだけど？

僕は元の体でも今の体でもこのくらいの年の子に会ったこともないし。

とはいえ真ん前を見て歩いていても、あいさつを相手からされるまで気がつかないことがほとんどなのが僕だ。

それは多分子供のころから変わってない悪いクセ。

だからひよつとしたらどこかで会った……いや、落としたものを拾ったりしてついでにオートで済ませてた動きのどこかで接したのかも？

でも食事って言ってるしなあ……………。

うーん。

いいや、こういうときはちゃんと説いた方がお互いのため。

知ったかぶりすると後から困るってのは少ない経験上知ってるし。

「あの。もしかしてどこかで会ったことありますか？」

「あ……………。」

露骨にテンションが落ちるって言うかショック受けてる。

なんていうか声も体も下へ下へ沈んでいく感じで。

「やっぱ覚えられてなかったかー、なーんか反応がおとなしすぎると思ったら……………がっくりだよ」

突っ伏すくらいにしての落ち込む演技をする恩人の子。

いや、わざとらしくくらいに上半身と顔を使ったジェスチャーしてるしな。

なるほど、分かってももらうために演技をするならこれくらいしなないとダメなのか。

「ひと月くらい前にさ。この近くのお店でなーんか余つてたポテトくれたじゃん？」

私が君の顔見てたらいきなりさ。そういうつもりじゃなかったんだけどもらっちゃったから食べたけどね。その時の相手、私なんだー。……私視点ではいろいろと強烈な出会いだったんだけどなー……そっかー、いつもあんな感じなのね……どおりで」

「……………?」

ポテト？

なんのこと？

というか、そんなこと会ったっけ？

「……………??」

僕を見ながらそう言うってことはこの体になってからだろうだし……うーん、ひと月前？

1ヶ月前……1月前。

僕がこの体になったころ。

「……………」

「……………」

記憶を掘り起こしてみる。

ダメだ。

朝のインパクトが大きすぎて記憶が閉じてる。

今日より前を振り返ろうとしても、最近見た映画とかやったゲームとか読んだ本だとか、下着の種類について調べたりだとかオンラインでこのサイズのコスプレ衣装があるってことにびつくりした記憶しか出てこない。

いやいや、なんでそんなこと……今はそうじゃなくって外に出た記憶を……って。

「……………あ」

思い出した。

「ああ、あのとときのくい……」

おっと。

思わず「食いしんぼさん」っていう本音が漏れかけた、危ない危ない。

何年かぶりのテイクアウトとかデリバリーじゃないバーガーを外で食べて、でもほとんど食べきれなくて。

手元しか見てなかったから顔は覚えてなかったけど、なんかタイミングがよかった

し、なにかに腹が立って適当に言ってみたら本当に食いついた、あの子か。

……まああの店から近いわけだしご近所さんだったら会うこともあるか。

「ひどくない!? まー、ほんの数分だったし目もほとんど合わなかったから、もしかしたらそうかもしれないとは思っていたけどさあ……」

「えっと」

「そこまで思い出してもらうのに時間かかるなんてさ、ぐっさりときたよもう……」

「……………すみません……僕、人の顔を覚えるのが苦手で……」

とりあえず謝る。

明らかに悪いのは僕……いやいや相席した程度の関係の相手を覚えてる方がすごいのか。

それにしてもまたしても演技過剰。

これが今どきな女の子の基準なのか？

っていうか突つ伏したときにカップに髪の毛入りそうになったけど大丈夫？

髪の毛からいい匂いしない？

あのとときは疲れていてそれどころじゃなかったのもあるし、そもそも僕は他人の顔と名前なんて覚えようとしてもすぐには覚えられないし、なんら不思議なことはないんだけど当然ながらこの子は知らない。

小説とか映画とかでさえ最後までよく分からない登場人物がいることがあるくらいなんだ、甘く見ないで欲しい。

メインパーティーとかの一員だったりするのになんとなくで主人公サイドってことしか分からないまま非業の死を遂げるとか良くあることだし。

「あー、いーのいーの気にしてないからーそんなに真剣になんなくても。大げさにしてみただけ!」

「……はあ」

けろりとしている。

切り替えも早いな。

将来的に他人に混じって女子中学生や高校生、大学生を経て大人になるには、こういう女子特有のテンションとか会話にも慣れなきゃいけないんだろうか。

仮にこのまんまだったとしてだけでも。

……。

うん、厳しいな。

ていうかムリ。

どうにかして人と話さなくても大丈夫なポジションを確立したいところ。

「ところでさー君歳いくつ? 最初は2年生とか3年生くらいかと思ってただけど話



してるともうちよい上そうだしー。……新6年生とかと見た!」

自信たっぷりに断言する演技派JCさん……いや、小学校の歳で表すつてことはJSさんかもしれない。

けど大切な情報が手に入ったな。

ふむ、同世代からでもそのくらいに見えるぞ。

ふむ。

なるほど。

けどさすがに小学生はいろいろとやりづらい気がする。

だって小学生はなあ……ぼくの自尊心的にも、こう……。

「それは、えつと……、あ。ところで、えつと」

「あ、名前は関澤ゆりかですーっす! ゆりかでもゆりでもユーリカでもゆかりんでもなんでもいいよ? そういえばさつき聞いちゃったけど君は響っていうんだよね? 私も呼んでいい? 響ってさ! イヤじゃなかったら!」

「はあ、いいですけど……、じゃあ、関澤さん、は、いま何年生ですか?」

ため口苦手だし肉体的には年上なんだ、敬語とか丁寧語でも問題あるまい。

その辺は大人相手は楽だな。

「おお……ガード堅いですな……先は長い。んで私は今年で2年だよ、もち中学

の。……いい？ 中学のだからね？ 確かに私背え低いけど」

「……」

「ホントよ？」

「あ、はい」

「んでここからだど電車で20分で改札の、いちお有名大学の一貫校。いやー去年までは勉強漬けだったなーおかげで今は遊んでばかりだけど。んでんで響くんはいつたいおいくつ？ 学校この近く？」

情報量が多かったから数秒かけて咀嚼して理解して考えてみる。

……よくよく考えたら学生ってことは通っている学校があるわけで、当然同級生も先輩も卒業生もいるわけだ。

ニートって言うのはものすごく特殊で高尚で特別な立場なんだ、普通はそうじゃない。

だからって言うて僕の出身の学校とか、あるいは適当に知らないだろうと思っただけでなく知っている学校の名前とかを出しちゃうと……思わぬ繋がりで知り合いとかがいるかもしれない。

このコミュ力だもんな、初対面……いや2回目でこれだけなんだから可能性は高い。そうすると自然クラスや学年まで細かく聞かれることになるわけで嘘はすぐにバレ

ること間違いなし。

バレるとそれまでに言ったことがぜんぶ疑わしくなつて何が嘘で何が本当かを言うハメにもなるし信用も失うし……なによりすごく気まずい。

それは避けたい。

気まずいのつて嫌いだし。

一応は恩人なんだ、今相手してるあいだからいはい。

「……ど、どしたの？ 急に考え込んでんじやつて……私、なんかまずいこと言っちゃつたり？」

おっと、どうやらこの子に気まずい思いをさせてしまったみたいだ。

いけないいけない、仮にも恩人にそんな思いをさせては。

しかし、それならどうしよう。

「……………」

……よし、できるかぎり情報は出さないで突っ込まれたら適当な理由を作ろう。

その方がよっぽどマシだな。

「いえ、ちよつと。……それで僕も、たぶん、同い年です。 中2になります」

「……………うえ？」

せつかくだしこの子の設定……じゃない、個人情報……でもない、ただの情報を借り

よう。

そう決めた。



「……ぶっふ」——「っ!？」

しぶきで目をつぶってちよつと。

……汚い。

恩人だった子が勢いよく吹き出したのを見て「漫画みたいだな」って思う。

同い年だつて言ったタイミングが悪かったのかな。

僕が考え込んでいるあいだにお茶、口に含んでいたしな。

半分は僕のせいかも。

だけど汚い。

9割以上はただのお茶だつて分かつてはいるけど、でも顔にちよつとかかったじゃないか。

というか漫画的表現じゃなくて現実に吹くっていうのは、はじめて見た気がする。

実在したのか。

僕は一緒に食べて帰る友人とかいかなかったからな、経験の無さが大人になっても響いている気がする。

顔をおしぼりで……おじさんのように脂をじゃなくってこの子の口から飛びだしたものを拭くためにとんとんと拭う。

「……………え、マジ？ マジで同い年？」

「マジです」

「ホント？」

「本当です」

マジで本当にデタラメだけだな。

でも今の僕が通うとしたらそのくらいっていう意味では嘘じゃない。

僕の心の中ではせて中学生なんだ。

それも新しい人ばかりじゃない2年生あたり。

一応サバを読むギリギリの線を攻めてみているところだけどいかがだろうか。

「えへっ、えへっ。 ……ちよ、ちよい待ち……」

げほげほとむせているのを見るとちよつと罪悪感がある。

だけど僕の顔にかけたのは絶対に忘れない。

「けほっ……え……ちよ、ま、えと、ほんとに!? うっそお!? 私もときどき小学生に間

違われるくらいだけでもそれってほとんど大人の人からだし、それに響はそれどころじゃなくない!? え、その見た目で同学年!？」

「やっぱりサバ読み過ぎた？」

「無難に小5とか言っておけば良かった？」

「いや、でも小学生扱いはなんかむかつくし。」

「都合のいい平均で小4を中2と言い張るのって無謀だった？」

「……：そういうや思いつ切りひいき目で見て10歳くらいを14歳くらいだって言っているわけか、そりゃあ無謀だな。」

「とはいえ今さら気がついてもう遅い。」

「でもあんまり幼……小さいと思われても面倒だし、せめて中学生という設定にはしておきたいところなんだけどなあ。」

「でもでも初手で嘘だとばれるとそれもまた面倒か。」

「……：……：やっぱり小6くらいにしておけばよかったかも。」

「「……：……：えつとごめんね?」　へんな風になって。私、つい最近ロリっぽいつてコンプレックス刺激されたばかりだからつい思わずで言っちゃったんだけど、よく考えたら響は私以上……：以下だもんね。　ふだんからコンプレックス刺さりまくりだよな。　……：つまりは小さいもの同志というわけか……：!」

「……同志？」

「同志よ！ おんなじ志の!!」

「はあ」

なぜか、わざわざスマホで「同志」って字を見せてくる。

本当に何故だ。

毎年よく分からない言葉が女子学生の中で流行るみたいだし、そののひとつかな。

流行り言葉……調べておいた方がよさそうだな。

僕はそういうのにとことん疎いからな。

これを機にちよつとだけ社会復帰を狙いたいところ。

モチベーションが続いている限りには。

……何日持つか分からないけども。

## 9話 小さい者同士↓同志 2/2

今どきの女の子……J SとかJ CとかJ Kとか言う存在たちの流行り言葉っていうやつ。最新版は何だったか。

正直クラスの子とかが使ってるのなんてそこまで聞いた覚えはないけど、流行ったんだったら使うっていう程度のものなんだろうし知っておいた方が良いかもな。

男の僕は良く分からないけど使うものらしいし。

僕の中では相当古い「チョベリバ」とかも平気で浮かぶし数年分は遡って目には入れておいたほうがいいのかもしれない。

……っていうかものすごく古いのとかかなり新しいのだけはヘンな時間に見る番組でやってたりするんだよなあ……：……どうでもいいから見ても「ふーん」って思っただけで忘れるけど。

どんなのがあるのかって適当に考えてみたけどよくわからないで終わる。

そんなわけで目の前の現役な女の子に対して披露しようとして断念。

ついでに僕の年齢詐欺について疑惑が核心になりそうな雰囲気だ。

しょうがないから今浮かんだいいわけを並べておこう。

「僕の場合は小さいころから最近までずっと病気で入院していて、ろくに体を動かさな



かったことでの発育不良ということもあるので気にしないでいいです。慣れていますし、子ども扱い」

「お、おおう」

すらすらとそういうことばかりは口から出てくる。

どうでもいいことばっかり出てきて肝心なことは思いつかないのが僕。

だから初対面の人と適当に雑談をするのだけはこうして得意なんだ。

新しい設定が出てきたけど、こういうことにしたら聞かれたくない学校の話とか避けられそうだな。

それでも聞かれたら「籍だけ置いているからほとんど通ってない」とか「学校……行きたかったです……」とでも低いトーンで言えばいいだろうし。

さすがに嘘泣きはできないけどな、したことないし。

演技の上手な女の人じゃあるまいし。

肉体は女でも脳が男だからそういうのは無理だ。

よつぽど悲しいことを考えなければ……そもそも涙すら出なさそうだからいいや。

「……………」

あ、昨日お風呂上がり小指ぶつけたときのことを思い出せばいいけど。しないけど。

それにこの言い訳、引きこもりと二一ト歴的にありがち完全な嘘というわけでもない。

僕の薄暗い学生生活のことを思い出せばむしろ本当だし。

2、3割の真実と残りの嘘。

やつぱり嘘になる？

でもそれくらいしか学校の話題を回避できそうなのはないしなあ……ごめんね、嘘ついで。

この場限りの関係だから許して。

「お……おおう、これはまたさらつと重いこと言うねえ。響、茶化してごめんね？」

「初めて会うと必ずと言っていいほど言われますし本当に気にしていませんから」

真つ赤に嘘だしな。

……どうしてこういうときはほんと、すらすら出てくるんだろう。

この調子で話ができたら僕も自分から人の輪に……めんどくさいからつて入らなさそう。

「天は二物を与えず美人薄命かあ……。せつかくの美形なのにそれを使えないとはもつたないね？ その気ならどんな子が相手でもちぎっては投げてとつかえひつかえ好き放題できるのにさ。私ならそうする！ 青春だし!!」

わりと疑っている感じはない様子だしひとまずは成功かな。

それにしても顔の話題はちよつとこう、もやつてする。

この1ヶ月ですつかり馴染んだし隅から隅まで知り尽くしたとはいっても、そもそも僕のものじゃないし褒められても一切何も感じない。

年の離れた人から「イケメンだね」って言われるときくらいの感じか？

他に褒めるところがないからとりあえず褒めておこう的な定型句の。

……………あ、涙腺の感覚。

こんなどうでもいいことで。

「えーつと……………ところでさ響さんや、それって響としては実質的に初めて会った私に対して話していい話題なの？ 慣れてるっていつてもそういうのって、こう……………キツいものじゃ？ ………………なーんか、いきなりさあ……………ううん、何でもない……………」

「？ はい、退院してからそこそこ経っているので別に平気ですし、それが僕ですから。知り合った人と同じようなことを聞かれて同じように返すのも慣れていきますし。

今は体とは別に日常生活に馴染むためのリハビリをしているので、むしろ経験値を増やしたい感じです」

最後の方が聞き取れなかったけど言葉が出て来たからたまたみかける形になつちやつたけど、そういうことにおこう。

うむ、合理的な嘘ならすらすらと出るな。

なんらかの病気で今までずっと入院していて最近に退院したという設定。

嘘は嘘だけどこのほかに余計な嘘が入ってくる余地はないし、僕が動きやすくなるだけで他人を傷つけるたぐいのものじゃないし、ただの思いつきにしてはいいものだったかも。

ところでこの子……えつと……そうだ、関澤なんとかさんだっけ、この子はときどきボソツとつぶやくクセがあるみたい。

返事を考える数秒のあいだに何回かぼそぼそ口にしてたけど……まあただのひとり言だろうししたいしたことじゃないだろう、きつと。

女の人は……っていうかサンプルが昔の母さんとかお隣さんだけなんだけど、結構考えてることがそのまま口から出てくるからな。

別に聞かせるつもりじゃないらしいから聞かなかったことにしてあげるのが男としてのマナーだって思う。

これでも男なんだ、そういう心配りを忘れたくはない。

忘れたら僕は僕じゃなくなって、ただの女の子だもん。

なにしろ男たる証明はこの世界から消え去ったんだから。



「病院ですーつとねえー……深窓のナントカとか憧れるけど実際には大変そうだなあ。 退屈すぎてダメになりそう。 ……けど、あー。 それでこの前もやけにしんどそうだったのね？ 何か面白い物した帰りっぽかったけど。 今は平気なの？」

「……さっきのもあつたので少しだけ疲れが。 飲み物で先ほどのお礼ができたのならそろそろ………」

朝はハサミが襲ってくるし、ここでは悪魔の手先とその仲間にも襲われたし、ほぼひと月ぶりの会話だし。

疲れたのにはまちがいないし。

なによりこういう早口な会話はもともと苦手だし。

あの強引な勧誘にも結構疲れたし。

本当はもっと適当にぶらつく予定だったんだけどもう肉体的にも精神的にも疲れたし……だし。

まだ下の階でうろついているかもしれないと思うと今日はもう、周りをよく見ながらさっさと帰ったほうがいいのかもしれないもんなあ。

この子への義理だけ通したらさっさと帰ろう。

この前みたいにだるーんってなりながら帰るのは疲れるもん。けど、さっきのお礼の対価がいまいち分からない。

たったの数百円で良いのかって思うけどこの子は小……中学生だからあんまり高いのだと困りそうだし引かれそうだし。

大人な僕的には数千円なら良いんじゃないかなーって思うけどどうなんだろう。

金銭感覚が独身貴族のそれってのもあるから分からない。

「そうだったの!? ダメじゃん、二元……かもしれないけど病人がそんなことじゃ! そういうことは早く言わなきゃダメ! 病氣って病み上がりがいちばん肝心だつて言うしさ! お礼とか言つて一緒にお茶しておごつてもらっちゃったけど、それで悪くなっちゃったら私が困るよ……大丈夫? ひとりで帰れそ? 送ったりタクシー呼んだりする!」

がたんとカツプが揺れて倒れるんじゃないかって不安になる。

本当に動作がいちいち大きい子だな。

けどもセリフが長い。

どうやったたらそこまで考え……なくても自然に出てくるんだろうなあ女の子だし。

けどもうちよつとゆつくり細切れで言つてくれないと理解できないんだつて、僕は男だから。

分かりやすくするには最大で40字が鉄則なんだぞ。

本の受け売りだけど。

……とりあえず純粋に心配してくれていることだけは分かるからちよつと罪悪感があるけどしょうがない。

このくらいじゃないとこの調子でいつまでもまくし立てられそうだし、こういう牽制用の話題があつたほうがいいのかもな。

ともあれ一気に会話が終わりそうな雰囲気だなによりだ。

「いえ、帰るだけなら平気です。いざとなつたら……家の者呼びますし。今日は助けていただいてありがとうございます」

ちようど良いからつて頭を下げておいて帰るモード。

女子中学生つていう気分も考えもころころと変わりやすい生きものであるこの子……えーつと……ああ、関澤さんだっけ。

やつぱり頭の中でもいいから名前を連呼すると覚えていやすいな。

といつてもどうせすぐに忘れちゃうんだろうけどな、人の名前なんて。

けど病弱設定は良さそうだな、その場をしのぐだけなら使えるし。

とにかくこの子の気分が変わらないうちにさっさと離れたほうがいいだろう。

「やつぱり心配だから」つて着いてこられても困るし、なるべく変なルートで帰ろう。

「……あ、うん。またね、気をつけてね」

「いえ、それでは」

……お店の外まで着いてくるかって思ったけどそうでもないらしくぼーっと座ったまんまだ。

なぜか急におとなしくなった気がする。

席を立つ気配もないし。

まあいいか、僕にとつては都合がいいんだし。

……さつきは学校のこと設定しないほうがって思ったけど、やっぱり作っておいたほうがいいのかも。

だって、よく考えたら学生同士の会話だったら絶対に出てくるものだし。

あの子は……ここから電車で20分だつて行つてたから近場の学校だろう。

それならいつそのこと1時間以上かかるところとか、いつそのこと今は療養先だから元は通えないくらいに離れたところに通つていたつてことにすればどうだろう。

遠くの県のさらに山奥とかそういう感じの。

そうすれば名前を出してもばれる心配は………いやいや、嘘はいけないし。

うーん。

迷うな。



リアリティと嘘バレとの差かあ。

……とりあえず調べるだけは調べておこう。

それならいつそのこと偽名も仕立てたほうがもつと都合がよかつた気がしないでもないけどもう名乗つてしまったからには遅いし、これは諦めよう。

まずはお会計を済ませて……つと。

……む。

さりげなく持つて来た伝票を差し出そうとするも固まる。

……お会計の台に背伸びして腕だけ上げるしかないだと……!?

僕は愕然としている。

「あの子、響ー！」

「……………何?」

ようやくとの思いでかたんつて伝票を置けた音がしたら後ろからあの子の声。

まだ何か用が?

……着いてきたいとかだつたらどうしよう。

あとやっぱり声がうるさい。

そんな感想が巡る。

「あの子……んと、響が。もし響がよかつたらなんだけどき。

番号とか交換しない

？ 名前もお互いに知らなかったのにこうして2回も偶然会えたんだしき、私的には響はもう友達だしき、ときどきでいいからまた会えたらなー、なーんて思つて。 ほんら、もう私たち友達同志じゃん？」

早口ではあつたけど僕も身構えていたし……なんかつかえつつかえだつたから今度はちゃんと聞き取れた。

連絡先が聞きたいつてことだよな。

なんでそんなに回りに回りとく話すんだ。

文字数を節約した方が良いつて思う。

ほんら、早口すぎて酸欠になつて顔真っ赤になつてるじゃん。

けど……同い年で同性になる子の連絡先。

ただの設定だし全部合つていないんだけど状況的には全部同じことになっている子の。

中身に比べて見た目が幼いという特徴まで同じだしな、スケールは全く違うけど。とにかくあつて損はない、か。

要らなければフェードアウトするだろうし適当な時期に消しちゃえばいいんだし。

どうせ最初の何回かやりとりしたらだんだん減つていくパターン。

僕はそういうのに慣れてるからもはやダメージは通用しないんだ。

「いいですよ、少し待ってください」

「やたっ」

もそもそとポケット……に入れていたら重かったスマホを出す。

アプリのインストールから始めて、と。

名前は「響」でいいか、もう知られているんだし。

「……………」

「……………」

そこではちくりした感じのその子と一瞬間の間。

「……………」

……さて、準備はできたんだけど。

「……すみません、スマホを持ったのもアドレスを交換するのも初めてなので、どうやっ

て交換したらいいのかわかりません」

スマホは持ってたけど連絡先を交換するのは数年ぶりだから嘘じゃない。

「マジですか!?! んじゃちよつと貸して貰ってもいいかい?」

「どうぞで」

最後に誰かとかんやとりしたのなんてもうはるか昔だからさっぱりだ。

いや、こういうソフト……今はアプリだっけ、その存在も知っていたし前のスマホに

は入れていたんだけど実践するのは初めてなのは本当。

ほぼメールだけだったしな。

赤外線通信とか思い出すだけでもはや懐かしい過去だ。

「よし、おっけー。登録したよ」

「ん、……ありがとう、ごさいます」

「んじゃヒマなときテキストに送るね？ ムリに返事する必要ないよ、いつつムダに送るなって友だちから言われるし！ なんなら既読無視続いてもいいから！ だから見てね!! それで満足するから！」

「……家ではこういうのをあまり触らないので返事は遅くなるかもしれませんが」

なんかこの子、話しているうちにヒートアップしていくクセがあるな。

そして近い。

じりじりと詰め寄ってくる。

もうちよつと距離を……。

「りようかーいっ。 あ、お家まで送ったりしなくて本当に平気なの？ 辛いならムリして」

「いえ、平気です。 それではまた。 お茶、まだ残っていますし、ゆっくりしていつてください」

スマホを返すどさくさにながちりと握られていた手をほどいて顔を上げるとなんだか優しい顔をした店員さん。

よく分かんないけど良いことあったんだろうか。

けど待たせたのに怒られなさそうだからお金を出してさっさとお会計を済ませて逃げる僕。

「……………」

ちらつと振り返ったけど、釘を刺したおかげかその子が席に戻って行っているのが確認できた。

よかった、ようやく静かになって。

「まったねー響——、じゃーね——」

……………と思ったらまたでかい声。

あの子は……周りの人に迷惑でしょ。

たまらず早足で距離を取る。

「……………ふう」

着いてこないだけでほつとするしきつさと帰ろう。

段差がキツすぎて家の中でもたまーに転ぶ今の僕の体だと万が一が怖いから、足元と頭上に気をつけながら。

エスカレーターを歩いて下りるのが厳しいことに気がついてまたまたダメージを受けつつ乗っついていき、しっかりとフードを深めに被り直しつつ視界を確保しながら慎重にビルの外へ。

……………ふー、ようやく本当に落ち着ける。

代わりにじりじりむしつと来たけど。

これで夏じゃないって言うんだからなあ。

……にしても、とにかく元気な子だったな。

あれが若さか。

精神的な若さが僕には欠けている気がする。

とぼとぼと歩きながらさっきの会話の反省。

ガワ的には僕のほうがもっと幼な……若いんだから若さじゃなくて性格の問題だな、

もともとの。

うん。

ていうかあんな調子だから余計に子供っぽくなつて、それでさらに小学生っぽさが出

るんじゃない？

どう見ても中学生には見えなかったし……まあ僕には関係ないか。

もうすぐ忘れられる存在なんだから。

「あ」  
だけど今日は口を使いすぎたし帰ったらごろごろして……。

ハサミ。

あと壁。

……今夜のお風呂、どうしよう。

「……………」

……もう飛んでこないことを祈るしかなさそうだ。

☆☆☆☆☆

店の入り口をずっと見ていた少女は、小さい声でもう一度だけ名前を呼んでから席に戻ると残った紅茶と水をぐいっと飲み切り、ふと「彼」のいた席に……少しだけ残っているコーヒーらしき液体を目にする。

「……………」

それを見つめて伸びそうになった手を途中で止めて、そうしたのに気づいて頬を染めながら慌ててスマホの画面に目を落とす。

——そこには新しく登録したばかりの名前。

まだトークの履歴はゼロで真っ白なものの、さっとさりげなく字まで合っているかと確認した「響」という名前。

念のためにアプリを落としてから立ち上げてもしつかりと残っているその名前は、先ほどの小さな銀髪が確かにそこについて話をしたという証拠だった。

それを実感した少女はだんだんと口角が上がっていき、人前だからと両手で抑えようとして……やがて抑えられないと諦めるとにまにまとしたままに別のアドレスに電話をかける。

そんな少女へは温かい視線が集まっていたが当の彼女は知る由もなく。

店の中のためか、先ほどまでとは違ってとても静かで落ちついた声音に切り替わり。

「……………送ったの見た？ ………………うん本当。この前の……………」

ぼそぼそと、ささやくように話しかける。

「リアルじゃありえないような、まるで……………みたいな……………でしょ？」

……………うんうん、もちろんだよ。連絡先も名前も。自然な感じにゲットしたから

さ、今度さ……………」

店員に見とがめられない程度の時間、彼女は小さな声で会話をしていた。



## 10話 危機感と必要性 1/2

のんびりとお湯に浸かっている状態で、あることをふと思いついた。

お風呂つてとりとめもないことを考えているからヘンなことを思いつくな。

見るともなしに見上げていた水が滴っている天井から水面へと、そしてその下の僕の体へと視線を落としてみる。

体が軽くてすぐに浮いちやうし気を抜くとつるんとして頭がお湯に沈んじやうしで、かなり低く張っているお湯。

その下にはつるつるな今の僕の幼児体型が光の屈折でさらにちっこくなくなって見える。

足が反対側に届かないってだけで怖いんだよなあ……！回くるんって頭から沈んだときはパニックになっちゃったし。

そのトラウマでお湯の量は今の僕の肩くらいまでだ。

元の体基準だと……腰辺り？

いや、さすがにもうちよつとは上かな。

そんな今の僕の幼女な体。

一部の特殊な人たちを除いて普通の人的には思うところのない普通の幼児な体。

元の体での子ども時の記憶に近い感じにいろんな意味で凹凸が少なくて、無いなりにも少しはついていた筋肉やわさわさと生えていた黒々としていた毛とか、便利だったけど今となっては邪魔でしかなかったお股でぶらぶらと浮いていたモノたちがどつかに消えちゃつてて。

これくらいしか感想が持てないくらい、裸だと胸があるはずの女の子の体だつていうのが確認もできないし意識もできない始末だ。

じゃなければわざわざここまで言わない。

がっかりした分くらい文句は言つて良いだろう。

けど、ないわけじゃない……と思わなくもない。

曖昧なのは僕が実物を見たことがないから。

男にも胸はあるわけで……乗っかっているのが比較すると厚い筋肉なのか脂肪なのかって違いだけ。

だから多少は膨らんでた記憶もある……だから今の微妙な膨らみが微妙なんだ。

でもこれくらいならよく通っていた温泉とかで一緒に浸かる太つていない大人たちや子供ですらあるくらい脂肪しかないから、これをはたして「おっぱい」と言えるのかどうかはなはだ疑問なところ。

そんなこと言ったら太ってる男はみんな巨乳つてことに……そういう表現もあったな、そういうや。

ともかくそう言うことになってうげーってなるし。

全体的に肉付きが悪すぎて浮き出たあばらの方が気になるし、腰骨とか手首とか足首とかじつくり見ていると怖いくらいだしで色気っていうものの発生する前の体だ。

もつと肥えさせなければ。

女の子以前の問題だ。

胸がぺたんとしていてというよりはみぞおちがえぐれている感じだし僕の理想からはほど遠いんだ。

いっぱい食べさせてあげたいって思う気持ちの方が強く芽生えるんだ。

だけど本当の幼児体型よりはかろうじて女の子らしい体つきに見えないこともないから、こんな見た目でも第二次性徴は迎え始めている可能性もゼロじゃない。

女の子は個人差が大きいからな。

僕には縁がなさ過ぎてさっぱりな話だけど。

肝心の実年齢が全くの不明だからどうしようもない。

よーく手に集中して揉もうと努力をしてみれば……たぶんだけど男のものとは違う感触を感じられるようなそでないような感じも得られる。

そう思っているからあるように感じるのかもしれない。  
思い込みって大きいからなあ。

あと……元の体で試したこともなかったから男のでもなるのかは確かじゃないけど……揉むと胸の形が変化するのは新鮮な感覚。

両腕全体を使って前に肉を集めるようにすると胸が盛り上がる。

すると寄せて上げた状態になって、ちよつとだけ盛り上がっていた脂肪が小さいお腕状になって柔らかさが出るんだ。

逆に背中を反らして肩甲骨を近づけるようにすると……さらに薄べったくはなるけど代わりに胸が強調されて、すごく薄いながらも骨の上に乗っているわずかな脂肪が浮き出たような形になるみたい。

そんなことを下をのぞき込んだり鏡を見たりしてやってみた。

だってお風呂ですることないし。

というわけで上半身をがんばって使うことで普段は真下を見てもよくわからない「おっぱい」というものが確認できるみたい。

できるみたいだけどそうとは言っていない。

できてなくて思い込みかもしれない。

妄想だったら悲しいけどこれは現実で、それもまた悲しい。

とりあえずいろいろ駆使すると女の子っぽくなるだけけど……それでも「ある」と「ない」、1と0、有と無は違うんだからやっぱりなんていうか精神的な満足度が違う。

この感じは……そう、しばらく筋トレをがんばっているうちに腕が太くなったような気がして嬉しくなったり、僕が今失っているものの大きさを測って平均値と照らし合わせるときに感じるような自己満足的なもの。

それが例え使う前に消失してしまっただとしても。

まあ無いなら無いで割とすぐに慣れるもの。

体験済みだ。

人って意外と柔軟にできてるんだな。

けども、上に育つはずのものが「ある」って信じれば「ある」って思える程度のものだとしたら失ったものとの対価として釣り合っているんだろうか？

「……………」

のぼせてきた。

おでこから汗が垂れてくるし、思ったより入ってたらしい。

そう思ってお風呂の温度表示のパネルを見てみたらそれなりにお湯に浸かっていたらしい。

ふやけそうだ。

……こんな子供の体をじろじろ見ながら何をやっているんだか、僕は。

つまらないことに時間を使っちゃってふと我に返ってだるんってなつた僕は……それでも気になって立ち上がって、曇り始めた鏡に向かってお湯を時々かけながらあちこち観察して格闘してみる。

それにも飽きた僕は体がすっかり冷えているのに気がついて、ちゃぽんとアゴまでお湯に浸かり直して温め直す。

温泉に行くときによくやるやつだ。

寒い冬に露天風呂でやると1時間でも2時間でも退屈しなければやれる自信がある。

……ちなみに今お湯に浸かっているけど長い髪の毛はお湯につけないで洗面器に乗せて浮かせてみている。

ヒマなときはそれが微妙に移動しながら浮くの眺めたりするのが最近のマイブーム。

だつてお湯から上がるときに体じゆうに張り付いて取るのが大変だし。

本当は結つたりするのが正解なんだろうけど毎回するのは面倒だし。

やっぱり今のように適当にぐるんと丸めて浮かせておくのが楽だから。

めんどくさいから切りたいんだけどそれができないのは経験した通りで。

「……………」

それにしても改めて思う。

お風呂に入り直すたびに、この凹凸のない体を見るたびに。

どうせ女の子になるんだったら、もう少し全体的に成長してお湯に浮くなんて大層な、富豪なぜいたくは言わないから……せめて、せめて。

最低でも腕で抱きしめられるくらいの「おっぱい」は欲しいところだった。かなり切実な悲しみ。

だって、あんまりにも子供過ぎてなあ。

どうせならって思っちゃうじゃん。

悲しい現実をかみしめるしかない。

胸のない女性は守備範囲外だから……とつてもとつても、悲しいんだ。



天井からシャワーの先からぴちゃんぴちゃんと水が落ちる。

お湯を張ってからそこそこ時間が経ってきて湯気でいっぱいになってきた浴室がぼんやりしてきた。

女性的魅力について深く考えていた僕はもう一回ばかしくなってきた、応急処置

的にマスキングテープで塞いだだけの……ダメになった壁を眺めながら考えるべきことへと舵を切り直す。

無いものは何をどうあがいたってどう言い訳したって無いんだからな。  
考えるだけ空しいんだ。

……さてさてとにかく、朝は精神的に、そのあとは精神的にも肉体的にも疲れた1日が終わる。

やっぱり人の会話は週1くらいで充分すぎるな。

10日に1回くらいでちょうどいいくらいだ。

半月くらい話していないとちよつともやつとしてくる感じ。

精神的に……なんていうか魂が疲れる気がしてくる。

ほどほどが良いんだろう、きつと。

ハサミのことを忘れていられたし帰ってきたら朝のような恐怖感はもうなくなっていたから、破壊されたお風呂場もハサミの残骸もちゃんと片づけられたしで良かったけど。

とどめにじっくり体を観察するっていう究極に無駄な時間を過ごしたおかげで僕は立ち直ってる気がする。

どうでもいいことほど癒やされることはないもんな。



けど……壁。

ひびが入ったりちよっとかけたりしたのを含めるとそれなりの数のタイルとその奥の壁の土台が被害を受けていたし、補修しないとカビちやいそう。

ホームセンターとかで適当に買ってきたもので間を埋めるだけでいいんだろうか。こういうことはやったことないから分からないな。

普通はないだろうけども。

あとで調べよう。

忘れないうちに。

僕はどうでも良くないことほどすぐに忘れちゃうからな。

……外に出て疲れた代わりに気も紛れたし本腰を入れて考えよう。

いろいろと大変だったぶんの収穫もあったし。

本当にのぼせる前に上がろう。

………さてさて改めて僕に働いている力……とりあえず怖くない表現で「魔法」ってことにしているそれについてだ。

ひとくちに魔法と言ってもいろいろな種類があるけど、ここは無難にオーソドックスで想像しやすい西洋風のものでいいだろう。

魔方阵を書いたりそれが空中に浮かんだりするやつ。

つまりは漫画とかで目にするあれ。

和風のはどうしても怖いイメージがあつてなんか好きじゃないし、僕はバトルものとかあまり見ないし詳しいことはさっぱりだしな。

僕にはどうもネーミングのセンスとかバトルもののロマンとかも欠けているらしいしな。

その魔法だけど、今確認できているのは……この体になったこと以外では髪の毛を短くしようとしたときだけ。

帰りに買ってきた小さなハサミで折れたり絡まってどうしようもない毛を切ったり、くせつ毛過ぎて困っていたひと房をちよつと短くする程度の散髪に挑戦してみたところなんにも起きなかったのは確認済みだ。

今度はちゃんど厚着をして試したから怖かつたっていうよりはまたハサミが飛んでまたタイルがおしやかになつたらどうしようつて気持ちのほうが大きかつただけ、いざ試してみたら何も起きなくて肩透かし。

まあ調子に乗つてぎくぎく切るうちにいきなり飛び出したら怖いしびっくりするか、本当に毛先を整えるのに留めたけど。

……ホラーの何が怖いって、幽霊とかゾンビ以前にそもそも脅かしてくる演出のほうだし。

この魔法がオートでかかっているのかそれとも誰かに見られているのか………  
おっとやめよう。

僕は怖いのが苦手なんだから。

髪の毛を洗っているときにぞくぞくしちゃうじゃないか。

で、ということはやっぱり僕にかかっている魔法は今の……属性で表すなら青寄りの銀色で長いストレートな髪の毛と同じ色の体毛……目の上しか生えてないけど……に幼女と少女の間くらいいの体を持っているこの姿。

長ったらしいからもう銀髪幼女でいいか……今の姿を大きく変えようとする力に對して反応するものだとか推測できるかもしれない。

できないかもしれない。

状況から勝手に思ってるだけだけど他に判断材料がなんにもないから、こうしてなにかが起こつてから推測するしかないからしょうがない。

「……………」

石を砕いて金属の留め具を壊して、刃自体も曲がるほどの力。

いったいどのくらいのエネルギーが込められているのかは定かではない。

魔法だし質量保存の法則とかは無視しているんだろうか。

魔法だしな。

魔法って言えば大抵のことは納得できる気がする。  
ある意味科学的根拠があるとかそういうのと似てるかも。



考えているうちに温まりすぎてきてもう1回汗がぼたぼたとお湯に跳ね始めてくる。  
煮詰まってきた感があつたから髪の毛と体を洗ってさっぱりした。

髪の毛を洗ってすすぐのには何倍もの時間がかかるようになったわりに、体のほうは  
細かいところまで泡で洗ってさっと流すだけという手軽さ。

表面積が狭くなっているし体が柔らかいからすつごく楽。

髪の毛の手間を考えたらやっぱり男の方が楽だったけど。

肌が弱すぎてスポンジを使っただけで全身ひりひりと真つ赤になった思い出から前  
みたいにごしごしできなくて洗った感がないけどしようがない。

貧弱にもほどがあるけど幼女だからしようがない。  
で。

この魔法がいつ解けるのか——そもそも解けるものなのか。

そんなことは非常識的で超常的な何かな被害者の僕が分かるはずないし、原因が「誰

が」なのか「何が」なのかなんて僕自身には今のところ推測のしようがないから、ひとまずおいておくとして。

今問題になるのは魔法が発動する条件……かつこよく言ってみれば「容姿の大きい変更」がどの範囲を指すのかということだ。

帰りに買ってきたばかりの髪ゴムで後ろのほうを縛ってみたりしてもなんともなかったから髪型を変える程度はセーフ。

つていうかそれでアウトなら寝返り打っただけでハサミが乱舞するもんな。

夜中に飛び回って破壊の限りを尽くすハサミとか物理的なホラーだ。

それじゃあ服屋っていうなじみの空間から地獄へと大幅にランクダウンした、あのJK店員さんががしていたような毛先だけのパーマ……ウェーブとかはどうなんだろう。

世の中の今は男でも美容院に通う時代。

テレビでも雑誌でもネットの記事でもそう言っているからそうなんだろう。

僕だって誰に会う予定も無いのに律儀に静かな美容師の人を捜し当てて通ってたんだ、女なんだから床屋は難しいだろうしやっぱり美容院だな。

いずれ通うことになるだろうそこで髪の毛を切らないそういうのを試してみるのもちよつとだけ考えてみたけど……店内で魔法が発動して機械や人に被害が出たりする危険があるからNG。

たとえ名前は知らないけど「頭の上にかぶせるようなあの機械」が派手に壊れたとしてもまさか僕のせいだとは思われもしないだろうし賠償とかいう話にもならないだろうけど、高そうだし悪いし確実に迷惑になるから行けないんだ。

誰かがケガをしたりでもしたら後味悪いしな。

謝つてもしょうがないし謝りようもないんだし。

だからパーマとかはできない以上分からないから状況証拠で推測するしかないわけ  
で。

ハサミさんが荒ぶったおかげで服装とか髪型とかじゃなくて素の姿を変えることだと推測できる気がしていた……んだけど今朝思いついちゃったように、その範囲に「自然な成長」が含まれてしまうと話が根底から覆されるわけで。

無いとは思うし考えすぎだとは思うけど、今朝みたいに知らないで地雷を踏むような真似は少なくとも外では避けたいところ。

騒ぎになったり人様に迷惑をかけたりますとそれだけ公権力から目をつけられやすくなるし、だからトリガーになり得る行動は考えても考えすぎることはないはずだ。

だからハサミのことだけを考えたら良いんだけど……一回思いついちゃったら思いつく前には戻れないわけで、その考えが頭の中をぐるぐるんぐるんぐるんしてしている。

「……………」

一般的な、女性らしい体つきをした女の子の姿を……この見た目をそのまま成長させる感じで想像してみる。

胸はおっぱいというだけあって日常生活でちよつとジャマになる程度の大ききで、触るとむにゅんとしておしりがもつと大きくなつて太ももも太くなつて、きちんとした女性らしいくびれができている感じ。

……うん、このまま順調に成長したとしたらどこからどう見ても女の子だと思える見た目になるだろうな。

外人は発育が良いって言うし、この体も早いはずだ。

現状だと服装次第で完璧に男の姿に見える程度。

子供だからな、髪型と服装でどうとでもなる。

僕にとつてはとつても便利だけど実はとつても悲しい事実なのは置いておく。

この体は高く見積もると小学生の……体つきが変わりはじめるくらいのものだし、この体のまま引きこもつて食つちや寝のニート生活をしていれば2、3年後にはだいぶ成長すると見込んでいた。

しつかりと肥えさせて。

もちろん肥えてきたら引き締めるけど。

僕の好み的には是が非でも成長してほしいんだけど、実用的なところを考えるに胸や

腰はできるだけ大きくならない方がいい。

男なアイデンティティがどうにかなっちゃいそうだしなあ。

ムダに大きくなりすぎてもそれはそれで注意を引くようになるし不便そうだし。

男からの視線とか今考えるだけでも鳥肌が立ちそうっていうか立ったし。

うげーって。

僕自身の体として扱うならスレンダー体型のほうが望ましいことになる。

いくらなんでもこの低身長は生きるのにとでも不便だし、戻れなかったとしてもせめて成人女性の平均値くらいまでは伸びて欲しい。

家の中では踏み台の乗り降りとかでストレスを感じるくらいで済むけど、これが外に出たうえに人混みだと周りが見えなくて苦労するし。

毎度の子ども扱いが嫌だしいちいち上を見上げないとならないし……目と首がすごく疲れるし。

この幼い体は普段通りになるべく落ちついた話し方をして、そう言い張ってギリギリ中学生で通らない……こともないっていう感じだったのは確認済み。

ものすごく驚かれはしたからサンプルがまだまだ足りないけど、ギリギリ個人差には入る程度？

学年の中で飛び抜けて小さいとかそのくらいで納得してもらえそうな感じ……だった



たっけ？

それを補うようなとっさの病弱設定は僕にしてはいいアイデアだった。

恩人だったサンプル……あ、名前忘れた……なJCさん自身が幼い外見だったから他の人相手でも中学生と言ひ張れるかどうかはまだ分からない。

あの子も話し方と態度のせいもあってひいき目に見ても中学生にはほど遠い感じだったし、裏を返せば彼女みたいに幼く見られる子というのも確かにいることはいるんだ、言い張れば通るだろう。

希少種だろうけど……レアだろうがなんだろうが実在するんだからいいだろう。

合法ロリとかマンガ的な存在だろうって思ってたけど実際にいるみたいだし、すつごく珍しいけど言い張れば……どうにか身分証を作っちゃえば何とかかなりそうな気がする。

……できたら育ってくれたら良いんだけど、ただでさえ幼女になってハサミが襲ってくる身になっちゃったんだ。

どうなるかなんてまるで想像もできないな。

## 10話 危機感と必要性 2/2

僕はお風呂が好き。

どのくらいかって言うとな年に2、3回まとめてどこかの温泉に籠もる程度には好き。  
家のお風呂も夏は2回入るときもあるくらい。

理由は分からない。

ちっちゃいころはそうでもなかったはずだけど気がついたらそうだった。

そんなわけでせっかくのお風呂だしもうちよつとだけ考えておく。

どうせ上がったらご飯を食べたり映画を観たりしているうちにすっかり忘れちゃう  
だろうし、なんだか真面目な気持ちになっている今のうちだ。

さて。

姿を変えたりハサミを飛ばしたりする魔法がはたして現実の物理現象の範囲に入っているのかはひとまずおいておき。

僕の見え目がここまで変わっちゃっているのもとりあえずはおいておいて。

仮にこの魔法が、時間が経てば自然に来るはずの「自然な成長」にまで干渉する……  
成長できないとかいうものになると何年経ったとしても大人の姿になれない可能性が

出てくる。

可能性なんだけどそんなわけないって考えないでおくなんてできないもんな。

今の僕は子供って言う不都合極まりない存在。

どこへ出かけて何をしても人の印象に残りやすいし1人でいると心配される存在。

加えて肉体的な制限でろくに遠出もできないし何かあったときに振り切って走るなんてできない。

つまりは親切な大人だけじゃなくて年上の全ての人に興味を持たれたらおしまいなんだ。

だから大人になるまで何年か引きこもるっていう選択肢を思いついて実際に1ヶ月くらいやってみただけど辛かった。

けど、辛いだけならがんばれる。

生きていくために大人……最低でも高校生くらいになるまでがんばってじっとしてようって思ってた。

——でも、もしそうならなかったら。

そもそも身分を証明するものがないんだから普通の仕事には就けない。

だけど世の中には軽い仕事……バイト程度っていう身元がはつきりしていなくてもはつきりしてるって言い張ればできるお仕事もあるんだ。

ここで大人になれないとなると……そういう身分がなくても働けるような仕事できえムリになる。

もちろん働きたくはない。

プロのニートやつてるくらいだからその意志は固い。

でもお金があるっていつても、どれだけ節約し続けたとしても普通の人が定年になるくらいには貯金が尽きる程度しかない。

現代の社会で生きるにはお金がとにかくかかるんだ。

あと10年くらいしてもどうしても働きたくない決意が変わらなければ物価の安い国にとも考えていたくらいには絶妙な足りなさなんだ。

そういうわけだから20代のうちにいやいやしぶしぶに働くつもりだった。

それがこうなっちゃって、ついでに肉体的に寿命がプラスで10年くらいで生活費も10年くらいプラスな今の状況なわけで。

「……………」

どうしようもないからこそ浮かんでくる世界最古の職業っていう選択肢。

もちろんしたくはない。

だって僕、男だし。

少なくとも心は。

けど将来路頭に迷うくらいならしようがない。

飢え死になんてこの社会じゃ限られているけど、それはきつととても辛いこと。

肝心の社会保障にもお世話になれない身だ、そうなる可能性もあるんだからせすには  
いられない。

水商売っていう……程度の差はあっても「この体を使う」っていうのは本当に本当で  
最後で最後のどうしようもなくなつたときの手段だけど、選択肢としてはないわけじゃ  
ないし、どうしようもなければしなきゃいけないんだ。

だつて身分がないんだから。

この見た目だから僕の名前と戸籍は通用しないしな。

身分がないっていうのはそれだけ現代においては特大の厄ネタなんだ。

バレたら終わりっていう厄いやつ。

元・男としてのプライドと尊厳っていうものと、全部正直に訴えて相手任せにするつ  
ていうのと。

いろんなリスクを考えると……悩む。

ついでに持つてるお金も大半が定期になつてる。

つまりは銀行に行つて手続きしないと数年後ですら危うい。

定期預金以外の普通に引き出せる貯金が尽きると実質的にゲームオーバー。

これはとてもまずい状況だ。  
それが今朝ではつきりした。

これまではいつか大きくなれることを前提に待っていていればいいって考えていた。

だからこそなるべく節約しながら隠れ続けて少しでも長くこの家に留まることだけを考えてきたわけだけど、もしそうじゃないのならなんとかしてお金を手にできる手段を……貯金が尽きるまでに確保しないと詰みだ。

……定期預金、去年に更新したばかりだったんだよなあ。

更新したっていうよりは手紙を放置したからそうされたっていうことなだけけど。少しばかりの利息と手続きの面倒さのために解約しなかったのが実に惜しい限り。惜しすぎる。

タイミングが悪すぎるんだ。

いやまあこんなことは想定できるはずもなかったんだから。

それでも何年かは耐えられるから無いよりはマシだろうけど。

……でも、なあ。

この「くちおしい」っていう表現がぴったりの感じ、年を取ると古い表現のほうがしっくりくるのは何故だろう。

そんな歳ってほどでもないけど。

とまあ相当にとことんこれでもかって悪い方へばっかり思考を傾けてみはしたけど、この考えが証明されてしまうとしたら……3年後くらい？

このくらいの年の子は成長にばらつきがかなりあるから、それくらいかもうちよつとくらいの猶予はあるはず。

だけどそれまでにまったく背が伸びなかったとしたなら、もう成長は見込めないって考えて良いだろう。

女性的な魅力以前の問題だ。

さつきは本当にどうでもいいこと考えてたんだな。

いや、ある意味繋がっているか。

考えたくないから裸とか真面目に観察してたんだろう。

「……………ふう」

何年か後に状況が分かってから改めてでも遅くはない……………かな。

人の脳みそって1回考えたことは結構勝手に考え続けてくれるって聞くし、今こうして分かる範囲で考えておくってだけで何かの役には立つはず。

それに、どうにかして定期を解約する手段を見つけたら余裕で持つんだしな。

詳しくは親戚の叔父さんに丸投げだから分からないけど、もしかしたら2、3年後にもう1回自然に解約できるチャンスが来るかもしれないんだし。

今のは考えすぎで普通に成長するかもしれないし。  
あるいはある日起きたら戻ってるかもしれないって希望もあるんだし。

「……………あ——」

頭の中がごちゃごちゃしたからって何となく出した声がお風呂に広がる。

小さい子だつて分かる声。

正直男か女か分からないくらいに幼さが勝っている感じ。

声変わりする前の男だつてこれくらいの子もいるしな。

くらくらする。

のぼせてきたらしい。

あがるか。

幼くなつたことで浮力をつかみにくいせいで何回かすつ転んだ苦い経験から、湯船の底に敷いているマットをしつかりと踏みしめて湯船の内と外に置いている踏み台を使つて、慎重に慎重につてそろそろとお湯から這い上がる。

……僕が中学生に入つて背が伸び始めたからつて言つてリフォームのときについでつてムダに大きくなつちやつた湯船。

前の体のときは脚を伸ばせていいなつてしか感じなかつたけど今となつては憎いことこの上ない。



ムダに大きいこれがそれはもう毎日憎々しい気持ち。

あのときの父さんを止めたかった。

……こうなるだなんて誰も分らないんだからしょうがないか。

もわつとした湯気と一緒に洗面所へ出て髪の毛を、そして体を拭いているときにお股のところにさしかかる。

何となく悪い気がするから汚れがたまらない程度に拭うようにして洗って拭くその場所をじつと見てみて、ふと思う。

……成長。

したほうが僕の好みの的にも今後の生活的にもそりゃあいんだけど……女の子、いや、女性になるんだったら生理っていうものとか。

……来るんだろうか？

……来るよなあ……。

普通の女の子の体なら早ければこれくらいの年から……小学校高学年から遅くても高校生までには来るはずだし。

……人によってはとつても辛いっていうよな。

それこそその期間だけでもすごく機嫌が悪くなるくらいに。

「……………」

まーたイヤなことを思いついたな。

僕はホラーもスプラッタも苦手なのに。

憂鬱だ。

うつうつする。

単純で便利で都合がよくって使い慣れていた男の体のほうがずっとよかつたのにな。

本当、つくづく男って単純だから楽だったんだって思う。

そう思って僕はまた凹んだ。

弾力性には定評があるからそのうち元気になるだろう。



落ち込んだまま数日を籠もって過ごしてみただけどとうとうに連続ドラマとかで気を紛らわせられなくなってきたから、今度はちゃんと人の少ない平日に家を出た。

またしても晴天。

しかも今日は雲ひとつない青空。

おかげで以前にも増してじりじりする。

暑い。

暑すぎる。

太陽光で死ぬっていいいにしえの吸血鬼のような気分を味わいながらとぼとぼと炎天下を歩き続ける。

ちつこくても暑いんだな。

そりやそうだ、人間だもんな。

……そういうえば結局この体になったばかりのときに買った女物の服。

外で1回も着る機会と勇気がないまま夏が近づいてきたんだな。

一応はこのあとの梅雨っていうクツションまで耐えたならあと2ヶ月くらいは余裕があるんだけど……そのあとはさすがに夏服じゃないと着ぶくれてたら吸血鬼じゃなくても死んじゃう。

あの服は買ったっていうよりも半ば買わされた感がすごかったんだけど。

レシートを見てみたらセールじゃないのまで割引になっていたから嬉しかった。

だけどなんでだろう。

間違いじゃないといいんだけどな。

理由が無いのにおつりが多かつたりすると言わずにはいられない僕の性格だ。

得をするのにも理由が無いと本気で困るあたりめんどくさいなって僕でも思う。

あのときの服。

家の中でならスカートとかワンピースとか短パンとか下が。パンツのことも多いけど……それでも慣れるためなのと目が楽しいのから結構な割合で着ているけど……しょせんは春物。

生地は厚いし汗は吸わないしで空調の効かない真夏日にはキツそうだ。

まあ先は長いんだし女物を外で着るのはその気になってからでいいか。

女物を着なきやいけない理由がないもんな。

少年って見てもらえるって分かったんだしな、いいことだ。

なんなら女の子らしい体つきになるまでは……なれるとして……どうせだしなれるといいな……なつてからスカートデビューしてもいいんだし。

スカートっていうのはハードルが高いんだ。

だって破廉恥な格好だもん。

下からまる見えなんだぞ？

強い風に煽られたら見えるんだぞ？

なんでこんなのが普通の格好として成立してるんだ。

スカートとかを着ることを想像するだけで恥ずかしくて顔が火照ってきたり着ているとむずむずして脱ぎたくなってくる。

そんな状態は……家の中じゃとつくになくなっていくけど、きつと外だったらそうは

いかない。

慣れてきた家の中でさえ女装してる感がすさまじいから嫌なものは嫌だ。

そこまで嫌じゃないけどなんていうか僕の常識がおかしいっていちいち言うんだ。

肉体的には正常なんだけど精神的には完全な女装。

女装。

創作で楽しむのと実際に体験するのでは全然違う。

空想と現実とは別物なんだ。

「……………」

暑い。

さっそく汗がじわつとにじんでくる。

それにしても暑いし熱い。

まだ真夏でもないのにどうしていつもこの時期はこうなんだろう。

今と同じような男装をするにしたって、そろそろ夏物をそろえないと出かけるたびに

汗だくになりそう。

通い慣れて来た店だったいつもの店が魔界になっちゃったから別のところを探さないと

いけないのがまためんどくさい。

あのビルのフロアに同じような店もあるけどあのときの店員の人のうちの誰かがい

たら見つかりそうだって気づいて止めた。

近くにも2、3軒ああいいう安い店があるからそこを狙って……いやダメだ。

つい最近タイミングに見放されたばかりじゃないか。

油断しちやいけない。

僕は運が悪いのは分かってるんだ。

こんな体になってる時点で幸運じゃない。

だからあのフロアに行つてあのとときの誰かがたまたま通りがかってアウトになるんだ、きつと。

少し離れた駅の同じようなところを調べよう。

いくらなんでも数駅離れば大丈夫だろう。

そこまで運が悪い覚えはない。

運の悪さにも限界はあるはずだ。

◇

「ん」

もうちよつとで駅に着きそうになってきたからスマホでよさそうな店を探しながら

日陰をぬいぬいしつつ歩いていたらと、前のほうの大きなビルの前を見るからに高級車な黒塗りが2台すらりと止まった。

なんか熱い日差しの中で真っ黒って言う非現実的な光景。

その片方からはこんな暑いのにスーツをがっちりと着た人たちが一斉に降りてきて止まったままの方の車のドアを開ける。

興味深いけどこのまま歩いてるとニアミスしそうだし、ちよつと歩幅と速度を落とすつつ様子見。

だってなんかああいうのってこう、危ない人たちっていう気がするし。

現実にもそういうのを見たことはないからアクション映画の見過ぎか？

なんてどうでもいいことを考えながらのたのたと歩く。

目立っちゃいけないことには変わらないから用心するに越したことはないんだし。

ドアの中からは女性……学生くらいの女の子がふたり。

パツと見てきれいだって印象で動き方もなんだかふつうじゃない感じ。

ひとりは学生服でもうひとりは私服。

学生服のメガネな子と私服な……ポニーテールみたいな子は車の中の運転手かなにかと会話をしたあと、ドアの前で待っていた男の人たちに囲まれつつビルの中へ入っていく。

ふたりとも高校生か大学生くらいだと思っけどなにかの送迎？

顔は全然違うし家族というわけでもない……仕事かなにかだろうか。

学生なのに仕事………家業とか？

あ、ファッション関係というのもありうるか。

見当がつかないけどなんとなく守られている感がある気がする。

ボディガードとかSPとかそんな感じ。

これまで生きてきてこういうのを見たことがないもんだからなんかじろじろ見ちゃっているいろいろ考えちやう。

僕にも野次馬根性があったらしい。

なんらかの重要人物なんだろうけどああいうのを見るのは現実では初めて。

ちよつと嬉しい。

口がちよつとにまにまにましているのが分かってなんとか真顔に戻す。

まるでドラマみたいなのできごとが目の前で起きているような感覚。

因果関係は逆なんだろうけど、そうだって分かっていてもちよつとだけワクワクしてしまうのはしょうがないよな。

いくら僕でも人並みの好奇心くらいはある。

にしてもでかいな、このビル。



見上げるとあごの下と首筋がぐっと伸びる感覚。

この体の目は近視とは縁がないらしくって眼鏡のフレームを気にせずにはつきりと細かく見えるのが嬉しい。

上目づかいができるっていうこれもまた今までにない感覚。

……………なんとかプロダクション？

そのビルがまるまるその会社らしい。

カタカナ英語をつぎはぎしたような会社名ばかり出ているからいまいちピンとこないけどどういったところなんだか。

日陰を追い求めていたせいで普段は選ばない大通りを歩いていたら、家から徒歩圏内なのに初めて目にした気がする。

こんなことがなければいつものように素通りしていただろうしな。

ま、ちよっとおもしろいものを見ることができて満足したしもう黒塗りも動くみたいだし、ふつうに歩いてもいいだろう。

たった1、2分のろのろしただけでもう脚が重くなっているのを感じつつ駅へ向かうのを再開。

お祭りが終わったみたい寂しい感覚だ。

暗くなっていたスマホを付け直して見ていると良い感じの情報が入る。

……ふむ、ここなら同じようなランクのチェーン店だしここから電車で15……20分くらいだし、ほどほどに離れていていいかもしれない。

「ん」

電車で20分？

最近聞いたような？

「……………」

気のせいか。

ならここにしよう。

そう思いながらスマホをポケットにしまおうとして、落としたら困るからちよつとだけ立ち止まって丁寧にしまっていると近くで車の止まる音。

顔を上げてみるとさっきのつやつとした車が前のほうで止まっていて、すぐにそのままバックでそろそろと戻ってくる。

なんだろう？

なんか怖い。

少し不安になったから車道側から離れようとするあいだにその車は僕の近くまで下がって来ちゃう。

今の僕は鈍足だもんな。

車には大の男も負けるけど。

ななめに避けようとしたところで運転席のドアが開く気配。

……じつと見ていたからなにかを言われたりするんだろうか？

危ない人たち？

カツアゲ？

子供に？

いやいや見た目幼……子供な僕に向かってそんなことがあるはずが。

ぐるぐるする頭を抱えていると、出てきたのは背が高く、ガタイが良いスーツ姿の男の人。

だけど……あれ？

この顔、どっかで見た覚えが。

「……………」

ちよつと見ているとちよつと前のことが思い浮かんでくる。

ああ、誰かと思ったら。

警戒する必要がないって分かってほつとしているとその人は会釈しながら近づいて来る。

「あなたは先日……響さん、でしたか？ 名前間違いはないでしょうか。……よ

かった、失礼にならなくて。　こんにちは、ご無沙汰しております」

相変わらずに全体的にでかいこの人には見覚えがある。

悪い人じゃないんだ。

今日はこの前に比べてちよつと離れたところで立っていてくれるから前ほどの  
圧迫感というか重圧も感じない。

それにしても名前を思い出せない。

あれだけ連呼していたんだけどやっぱり忘れるか。

僕は人の顔と名前と特徴を忘れるのが得意だからな。

もらった名刺もあのときのパーカーの中だろうしな。

けど困った、挨拶するにしても返事ができない。

僕は名前を呼ばれて僕からは呼ばないとか……いやいや、普通だから良いか。

けど、みんなどうしてすぐに人の名前とか覚えられるんだろう。

「えつと、どうも………、お久しぶり、です。……あの女の人は」

とつきに話すときってなんか変な返事をしちやつて寝る前に悶える。

ご無沙汰ですつてこの人も言つてたのにな。

そんなことよりも警戒すべきはあの人。

あの人をのせいで僕は1週間くらいぐてつてしてたんだから。

女の人……今井さんだっけ。

悪い方の名前を先に思い出してあわてて周囲を見回してみる。

後ろから来られたらアウトだもんな。

髪の毛がばさばさつてする感覚。

「……………」

いない。

車の中じゃないよな？

いきなり出てきて引きずり込まれたりしないよな？

僕は警戒を解かないで……どうせ逃げられないって分かっている腰を落としてい

つでも動けるようにする。

あの人だったら僕を見たらあのとときみたいに飛び出してくるだろう。

そう思っつて。

……けど、居ないみたいだ。

そう認識したら気が抜ける。

……この人だけならあのとときのようなことにはならないだろうし二言三言話したら

おしまいだろうし、心配は要らないよな。

あのとときのことはどうやらトラウマになったらしくつて、僕はすっかり怯えきつて

ほつとして気が抜けた。

## 11話 虎穴(車) 1/3

「……………」  
ちらちらとでつかい肩を見上げたりしながら車の窓を覗き……込めなかった。

あの恐ろしい悪魔さんみたいな女の人がいなかったのかどうか黒塗りのガラス越しに確かめようとしたけど、どうやらスモークの様子でまたしても真つ黒。

今から飛び出てきて脅かすのとか止めてよ……?」

僕は怖い苦手なから。

そう思うけど思わないフリを試してみる。

にしても悪魔さんがいないのはよかつたんだけど、いまだにこの人の名前が出てこない。  
い。

他人の顔と名前を記憶する能力って使わないとレベル1になっちゃうもんだししようがないか。

ああいうのは才能だっけと思うけどな。

どうせ持たざる者の気持ちは持つ者には分からないんだ。

「ああ、今井ですか。今日は一緒ではありません、今は私だけです。頼まれてうちの

所属の者を送っただけですからご心配なく。……あと、先日は本当に失礼しました」  
ぺこりとしたらしいけど僕からしたら上空からでかい何かが降ってくる感じ。

1メートルくらい離れてくれるから……あ、つむじ。

あの人のこと……今井って人のこと察されたけどいないらしくってほっとする。  
ほんとによかった。

本当に。

あの強引さはもう勘弁だしできれば2度と会いたくないし。

僕の人生で遭遇してこなかったタイプの人は対処法が分からないんだよなあ。

遭遇してきても大抵はエンカウントしないようにしてしてきたから経験値なんてゼロ  
口だけどな。

ニートだし。

「私は今井とは違って響さんからご連絡をいただくまで勧誘は一切しません。今日も  
ただお見かけしたからごあいさつをしたままで」

ふーん。

やっぱりこの人はいい人だな。

押しが強くないって言うだけで僕の好感度はまた上がる。

上がってもこの人の名前が思い出せないけど。



「こういうのはご本人の興味や意欲が一番大切だと思つていますから。 ですがこれもまたなにかの縁……と言うとうさんくさいですか。 ええと、運転していたらお知り合……になつた響さんと久しぶりに会いましたから駅までお送りしようかと思つただけです。 ここから……響さんの足ですと少しありますし、よろしければと」  
ふむ。

男のときの僕も旅行先で駅とかまで送つてもらつたりしたことあつたしな。  
話しかけにくいようにしている僕だつてバス停で座つてたり暗い中歩いて帰ろうとしたら、時間が余つてる親切なおじさんとかおじいさんが乗せてくれるんだ。

田舎つて良いよね。

虫が苦手だから住めないけど。

けどまあ、この人なら大丈夫だろう。

今井さんのような何が何でもつて感じはないし、なによりあのあとに名刺に乗つてたのは調べたし。

でたらめしか書いていないんじゃないやなければ信用はできる人たちだろう。

僕はそう判断した。

人と話す疲れるから本当はすぐにさよならしたいし、この前までの僕なら断固として拒否していたけど……今は事情が変わつて言うのもある。

魔法っていう未知の力でちよつと困っているとところだし、ここは少し情報が欲しい。引きこもっているだけじゃなんにも分からないのは幼女歴1ヶ月半くらいで外出3回目な今が保証しているんだしな。

……準備もできているし、ちよつとだけ探ってみよう。

リスクを取らないと何も手に入らない。

RPGの基本だ。

「ではお願いしてもいいでしょうか。今日は暑くて」

「もちろんです。ではこちらへ」

そう言つて大きい背中を屈めて黒塗りの後ろのドアを開けてくれるこの人。

元の僕と同一年くらいの彼。

……………。

どうがんばつても名前が出てこなくてごめんね、多分同い年ぐらゐの君。けど、つるりとした黒塗りだしスーツだしがつしりしてゐるし。

端から見たら僕のお迎えに見えなくもないかもしれない……かれしれないな。

怖いけど、少しだけ……少しだけ勇気を出してみないと。

なに、フライングシザーズに襲われるよりはずっとマシだ。

今井さんに襲われるよりはもっとマシだもんな。



この体の肌は……薄いつていうこともあるんだけど、それにしたつてすべつとしてい  
る。

陶磁器みたいなつて表現のこと、どんだけ病的なんだつて思つてたけど実際に目にし  
てみるとびつたりだなつて思う。

いつもお風呂呂じゃ長湯する僕。

はじめはいろいろなことを考えたりして時間をつぶすけど、次第に頭がぼーつとして  
きて汗でいっぱいになる。

こういうときはどうでもいいことをああでもないこうでもないつて考える思考つて  
いう暇つぶしができなくなるんだ。

髪の毛が濡れていなければ考える代わりに髪の毛とかを触つても楽しいんだけど、濡  
れているときにしてもたいしておもしろくもない。

だからその代わりのに代わりにつるつとして肌を撫でるんだ。

このもち肌を。

特に脚に顕著なんだけど、この体になつてから外でいちども肌をさらしてないから

日焼けはもちろんのこと……ケガをしたあととかキズとか虫さされのあとの芯みみたいなものさえない。

ていうかなくなっている。

完全にきれいさっぱり。

さらに言えば薄い産毛さえ、よく目を近づけないと……体がものすごく柔らかくて余裕で膝の裏までのぞき込めるのがすごいんだ……見えないくらいにほとんど生えていなくてすべすべだし、細胞ひとつひとつ……肌のキメもものすごく細かい気がする。

中学生くらいまではなんとなくて手のひらの細胞とかを見た記憶があったっていうのを今さらながらに思い出す程度には懐かしい、四角形っぽいランダムな細胞のテクスチャ。

細胞分裂的な、テロメア的な感覚。

けど、本当に肌がきれい。

僕の小さいころもこうだったんだらうか。

あたりまえ過ぎると意識しないもんなあ。

気がついたらすね毛とかも生えてきていたし、そもそも普段はズボンと靴下とで隠れているところだからな、運動をしていなければ気がつかないものだらうし。

僕みたいにならぶ遊ぶ楽しみを理解できなかった男には余計に。

女性なら身だしなみに気を遣うからまた違うんだろうけどなあ。

いやしかし、とにかく毛がない。

つるつるのつるつるなんだ。

せつかくだからぐつと目を近づけて、しげしげと観察してみる。

……ふむ、毛というよりは毛穴自体がないのか。

毛穴ケアという言葉もあるくらいだしやっぱり毛以前の問題だったか。

おかげでつるつるの肌に包まれている感じ。

脱ぐたびにきれいだって感じて性的じゃなくても見惚れるくらいだし。

僕の体なのにな。

さらに言えば、幼……子どもなのに。

いや、僕の体になっているからこそこうして悪いとか恥ずかしいとかそこまで感じず

に、じっくりと観察できるんだけど。

ただきれいだからぼーっと見るのって女の人が綺麗な女の人を眺める感じなのかな

？

男の僕でも筋肉がついている男の人とかには見惚れるしな。

まあこの体は痩せすぎていて骨張っているから、そんな人にはまだまだだ。

もうちよつと肉付きがよくないと女性というものを感じない。

ただのもやしな子供だ。

いや、幼児なんだけど。

あと地味に変わったこととしては肌が敏感なこと。

皮膚感覚だ。

1ヶ月前までの男な僕の体と違って体毛に邪魔されないからってつま先から太ももまですると撫でることができるとだけ……上から下はそこまでもないけど下から上へ撫で上げると、こう、背筋までぞくぞくする感じがして「ふうふうう」ってなる。

映画とかで感情移入してとても感動したときのあのジーンとくる感じに近いのが撫で上げたところから首筋までぞわぞわするみたいなレアな感覚。

前はそもそもこんな風に体を撫で回すなんていうのは思いつきもしなかったから試していないし確かじゃないけど、多分この肌はそうとうにセンシティブな様子。

超の着く敏感肌らしい。

体毛っていう摩擦軽減の機能がゼロになって肌の細胞が細かくてその上に皮膚そのものが薄いついていうのがセットになっているからか？

特に太ももの裏がわとかわきをつうつと撫で上げるのが毎日のささやかな楽しみ。

この体になってもあんまり感覚の違いとかは意識しないけど、これだけは完全に未知

の領域で新感覚だ。

これが女の子になったからなのか、それともこういう体質の男の体でも起きるのかは検証できないけど。

もし男に戻れたら試してみよう。

ともあれ撫ですぎるとなぜか息が上がってくるからほどほどにして、湯船の中で丸まるようにしていた体勢から一気に脱力。

なんか走った後みたいになるんだよな。

のぼせてるんだろうか。

体の力を抜くと体がおしりを起点に浮き上がろうとしてくるから両手でしっかりと湯船のふちをつかむ。

もう鼻に水が入る痛みもパニックも経験したくないもん。

「……………ふう……………」

触觉に集中していた意識を現実に戻すと、どうしてもマスキングテープで雑に塞いだ穴が目に入る。

結構雑にやつちやつた跡が目を引く。

………そういえば、元の体じゃあこのくらいの歳から近視な乱視になってきていたから、こうしてお風呂場ではつきりとクリアな視界は長いことお目にかかっていないん

だ。

コンタクトして入ると目に張り付くからなあ……温泉とかだと足元が見えないと痛い目見るからしようがなく、ただけど普段はほんやりな裸眼だし。

毎日の長湯で見慣れていたはずの下半身の具合ってどうか状態をよく覚えていないのって、このせいもあるんだろうな。

だからこうして腰を浮かせておへそから股から太ももからをじっくりと見る機会はなかったわけ。

「……………」  
両手でバランスを取るのが意外と難しい。

「……………」  
それにしても。

僕は遅めだったけど、それでも中学の後半から……もう10年くらいはずっと黒い毛で彩られていたから下半身のイメージが完全に固定されていたけど、今は完全に無毛で白なネイキッド。

成長するしたらそのうちに生えてくるんだろうか？

確か体毛は男性ホルモンの量でかなり変わるはずだからまだ分からない。

毛が薄い感じの体質だったら生えたとしてもほんの少しかもしれないし。



女の人の毛がほんとうはどのくらい生えるかなんて普通の男が知るはずはないもんな。

姉か妹がいればあるいは……ってところか。

けど、生えたとしたって……髪の毛と同じで限りなく薄い色になるはずだから、生えてもビジュアルはたいして変わらないかもしれない。



こんな感じに最後に車に乗ったのは相当に前のこと。

電車とかバスとかロープウエーとかなら結構乗るけど、こう小さい車内は久しぶり。

二トを続けるためのけちっぷりが魂にまで染みついていいるからタクシーですらよっぽどのことがない限りは乗らないし、利便性のために免許だけは取ったけどペーパーだしな。

車なんていう税金やらなんやらでそこそこのお金を食べるものは家にはない。

父さんのこだわりだったらしい外車も相続のときにお金にしちやっしたしな。

叔父さんについて言っただけどさすがに悪いってなって、結局はお金にして預けておこうってことで。

売り払ったお金はこれまでの生活で僕の血と肉に……なったけどどっか行っちゃったから虚空へ？

まあこの体に少しは受け継がれているって信じよう。

せめて最低でも脳みそだけは維持したい。

いや、したいって言ってももうなってるけど。

頭の大きさにどう考えたって小さくなっているみたいだけど本当どうなっているんだろうな、今の僕の体って。

シナプスだけ良い感じにコピーされてるんだろうか。

魔法だしな。

仮称だけど。

「……………なので、最近は外に出ることが多くて」

「そうですか」

おっと。

無意識のスイッチを切り替える。

会話をオートでしていたら気がついていたら何やらの話が終わったらしい。

とりあえず無難に返しておこう。

なんだったのかはさっぱりだけど。

……この癖、いつかは来るはずの社会復帰までには治しておかないとな。

僕と話をした相手にとってはちゃんと相づちとかの返事をしてそれなりの返事をしていると思ってるのに、実はひとつも頭には入っていないとかいうやつ。

あれだ、多分人にいちばん信用されないタイプのだよね、これって。

うんうん分かる分かるーって言った次の日になにひとつ覚えてないんだもん。

僕だったら静かに距離を置く。

間違いない。

……

必死に記憶を掘り出したら……確かダンスのレッスンがどうだとか？

事務所にいる人たち……子たちの話題で。

歌って踊って話して笑って。

アイドルって肉体労働も甚だしいお仕事って話題だったはず。

たぶんそんな感じ。

僕の周りは革張りのシートで、斜め前には運転席の……えっと、あ、思い出した、萩村さん。

彼とバックミラー越しに会話をしているところだった。

それにしても乗り心地がいいなこの車。

サイズがあれだけ。

……シートベルトが首に掛かっているのはどうしてくれよう。

「彼女たちはうちで……もう3年ほどがんばっています。来月あたりから忙しくなりそうなので、その前に時間のかかるトレーニングなどはまとめて今のうちにと。人手が足りないのもあつて私も送り迎えをするために良くこうして運転していますね」

「そうだったんですか」

「ここにも人手不足の波か。」

世知辛いな。

「でも送り迎えとか本当にするんですね。 こういうのは初めて見ました」

体験もしてるな。

こんな黒塗りつてのも。

幼女になったから人生初めてばかりだ。

そういうえば乗ったときから気になっていたけど、至る所に小さなマスコットのぬいぐるみが置いてあったり充電ケーブルとかペットボトルとかとにかく高級車に見合わないものが散見している。

荘厳な雰囲気だけが台なしだけど安心する。

おまけに僕の使っているのとは違う匂いのシャンプーとか香水とか……つまりは女

の子の香りが充満している気もする。

考えて変態っぽく思ったけど、なんだか匂いがやけに鼻に残るんだからしょうがないよね。

今の僕は男じゃないからセーフだろう。

……シャンプー。

男のときから適当に買ってあるいつものじやなくて、同じくらいの値段でもいいから女性用のにしたらこんな匂いになるんだろうか。

今度試してみよう。

香水の方は個人的に好きじゃないからしないけど。

そもそも必要がないんだし。

汗をかいてもまったく臭いがしないのもそれはそれでまた気になるものだけ。

それにしても冷房が涼しい。

顔にかかるとしばしばするからちよつとだけずれよう。

……ずれてもだめだった。

どうやら風の設定が子供向けじゃないらしい。

当たり前か。

と、また頭の中にいるうちに信号で止まったのかなにやらを差し出される。

「それで、これがこの先のスケジュールです。ご覧のとおりいろいろと重なってぎつしりが入ってしまつて、こうして手分けをしないと間に合わないものまであるんです」

「……僕がそれ、見てもいいんでしょうか」

「大丈夫です。略称だらけですし見ただけでは詳しくは分かりませんから」

「そうですか」

この人も随分脇が甘いなつて思いながらそれを受け取る。

今どきはちよつとしたことですーぐ燃えるつてのにな。

………うわぁ。

ノートくらいの大きさのホワイトボードみたいなものには、いろんな筆跡と色で埋め尽くされた来週の日付の下の空欄だった空間が。

ここなんて分単位に小さい字でびっしり書かれているし……大変そうだなあこういう業界で働くつて、としか思えない。

改めて実感するけど、あのまま押されて見学したりしなくてほんつとうによかつた。

あの剣幕と押しでずるずるといつて「そのままお試しで」とかいつて入らされたりでもしていたら、おつそろしいことになつていた。

ニート失格になつてたな。

世間一般的には社会復帰だけど僕からしたらデスマーチ突入だ。

ちよつと離して眺めると、なにかのすかし文字があると云われても納得できそうな密度。

ホワイトなのにブラックになっている板を見ながらそんな未来を見そうになった。

まあそうなったらなったで忙しくなって僕がイヤな思いをする代わりに、僕のこの魔法についてぜんぶぶちまけて丸投げにするだろうけど。

ある意味楽かも知れない。

誘つてきたのは向こうだし、貴重な僕のノート生活を邪魔するんだからそれくらいは押しつけないと気が済まないだろうし。

ついでに戸籍とか権利とかなにからなまでにまでお世話になると。

「……………」

そんな都合の良い妄想が広がりかけたのを消す。

やっぱ無理だしな。

こんなの、身内でもなければ信じちやくれないだろう。

とつくに成人したはずの男がこんな格好になっているなんて僕だって信じないもん  
な。

寝る前のご都合主義なら良いけど、ここは現実。

もしかしたら……なーんて調子の良いこと考えると痛い目を見る。

僕はそれを知っているから誰も頼ってこなかったんだから。



## 11話 虎穴(車) 2/3

高校生くらいまではそうでもなかったんだけど、大人になってからなんだか興味の無い文章を読むと理解できなくなる。

これは退化なんだろうか。

僕は試験の問題文とかもわりと飽きずに読めたタイプなんだけどな。

それともやっぱりお酒のせいなんだろうか。

こうなってきたのってちょうどそのくらいからだしな。

お酒は脳みそをちっちゃくするって言うし呑まない方が良いんだろう。

知っていても呑むけど。

なんならこの体でも……おっと、内緒だ内緒。

とりあえずで略語だらけで記号にしか見えないホワイトボードから目を背ける。

今でもおんなじように読むのがやだつてなるんだから多分気持ちの問題なんだろうって結論づける。

お酒のせいじゃないって援護しながら両手で微妙に重く感じるそれを前に出す。

なんだかこういうスケジュールを見ていると僕まで働いているような気がしてきてイヤだしさつきと返しちやおう。

そう思ったけど優しい感じのブレーキで車が止まる。

「ところで響さん、私から誘っておいて今さらですが少しよろしいでしょうか」

「あ、はい」

赤信号だったらしく振り向いてきた彼にホワイトボードを差し出す形になっていて「気がつかずに済みません」って言いながら受け取ってくれて腕が楽になった。

微妙に重くってぶるぶるしてきてたもんな。

この体は貧弱なんだから重いものを持たせちゃいけない。

そういうのにも慣れてるのかは分からないけどすぐに返せたのはありがたいな。

えっと……………萩村さんに。

振り向いてきた彼を見た印象は……やっぱり肩幅があるなああって感じ。

どれだけ鍛えようとしてしても僕は筋肉がつかなければ太りもしない感じの体質だったらしくって、ジムとかでがんばってみてもなんにも変わらなかつたから萩村さんみたいな体質は羨ましい限り。

この体だどうなんだろうか。

見た感じはどう見ても筋肉質とはほど遠い幼女なんだけど。

……もつと成長してこないときすがに分からないか。

幼児だもんな。

マツチヨな幼児なんて見たことないもんな。

「以前お会いしてはいますし、こちらの身分を明かしている顔見知り……と言うことはなりません。ですが深くは知らない人間……しかも私のような男性の車に少しのたぬらにもなく乗るというのは避けたほうがよろしいかと。後ろに他の人間が乗っていないとも限りませんし。もつとも送ると言ったのは私の方ですし、本当にご説明した通りに私のついでで駅前にお連れするだけなのですが」

「あ、はい。言いたいことはなんとなく」

なんだかぼつの悪そうな声の調子になったから分かってますよアピール。

ドのつく正論だしな。

実際この体じゃ成人男性に連れ込まれたらどうしようもない。

ああ、だから女性は普段から歩くだけでも気をつけなきゃって話になるんだな。

実際誘拐とかの事件は女の方が巻き込まれやすいんだし。

僕とは全く縁がなかったからこれっぽっちも意識しなかったけど……たしかにやばいよな。

なにがやばいって、いざとなつて全力で振り切つて走つて声出せば何とかなるってい

う自信が完全にないってことが。

……そう思うと本当にやばいな。

女で子供ってすつごくやばいんだ。

「あと、おかげで響さんに気づくことができましたが……不審者に突然に連れ込まれたりしないよう車道からは少し離れて歩くのをおすすすめします。あの道は大通りではありますが、普段は車しか走っていません。この辺りで犯罪があつたとは聞きませんが万が一です。……親御さんや学校などでこういうことについて注意はされていますがご存じでしょうし、差し出がましい……ええと、聞き飽きているだろう話だとは思いますが、ふと心配に感じてしまいました」

長い信号待ちで、ちらちら前を見ながらゆつくりと語りかけてくるように言ってくれている。

……いい人なんだな。

2回しか会ってない僕みたいな子供に対してわざわざ送ったりしようって思ったり、この状況でこんな話したらまるで萩村さん自身が危ない人って思われてもしようがないのに言ってくれている。

子供を心配する良い大人だな。

……問題は僕が大人だって言うことだ。

同世代に本気で心配される、元男って。

お説教……ちよつと前まではする側だったのに今ではされる側か。

僕はなんだか少し悲しくなった。

車の中での同世代からのお説教は続いているらしい。

微妙に凹んでいる僕を置いてきぼりにして。

「信用されているとしたら私としてはうれしいのですが、それでももう少し警戒心をお持ちになったほうがと思います。事務所に所属しています中高生の方にも言うたびにうるさいと言われてしまうのですが、どうしても心配になつてしまいました……性分なんです。すみません。あの場所ではありませんでしたが、以前私の知り合いも危ない目に遭いそうになつたと思ひ出してしまいました」

あ、やっぱり言われるんだ、うざいって。

しょうがないだろうけどそうだろうなつて思う。

だって、学校の先生たちが長期休みの前とかに話していたようなはるか昔のことを思い出させる程度には熱の入つたお説教だもんな。

子供は注意されると反抗したくなる存在。

けど僕は大人だから素直に聞いておこう。

実際この体で生きるんじや犯罪に巻き込まれたら助けてもらえないもんな。

誘拐されても親がいないんだから心配されようがないんだし。

そんな彼のお説教は車が動き出してからでも続く続く。

話しぶりからしてもこういう注意をするのには慣れている様子。

頭ごなしではなく諭すような感じの口調。

この人教師とかにも向いていそうだな。

こういうガタイがいいのに優しい雰囲気の先生って子供から好かれそうだし。

なんて言うか……守ってくれそうな感じがする。

僕が小さくなってるから余計にそう感じるのかもな。

「考えなしに乗ったわけじゃないので平気です。心配していただいてありがとうございます」

まだまだ続いているお小言の文言とまだまだ続きそうな気配を、良い感じにお礼を言うことで断ち切ってみる。

こういうのは息継ぎのタイミングを見計らうと上手くいく。

対セールスで身につけた特技だ。

……いや、普通なら社会ですぐに身につけるものか。

口うるさい上司の愚痴とかはネットであふれているもんな。

まあ経験値が極端に少ない中でなんとか獲得した最低限の知恵には変わらない。

存分に使わないと。

でも……そもそも子供ってそんなに警戒心がないんだろうか。

親や教師の言うことをなんとなくでも聞いていれば赤の他人の車に乗ったりなんてするはずもないし、今どきお菓子をあげるからおいでとかそんな手に引つかかるものか？

……いや、ありうるのか。

子供の中には人を疑うって発想をまだ持っていない子っているだろうし。

大きくなってくれば疑わないなりに「おかしい」って思いつくだけの情報があるから「避けよう」って思えるかもしれないけど、人と話をするのが大好きだったり気が弱かったりしてなんとなくでついでいくついでというのもありそう。

僕がそう見えてもしょうがないんだろう。

悲しいかな幼い見た目だしな。

この人には素顔を見られてるんだから女の子だって知られてもいるんだし。

ちよつとしたことで簡単に事案になつちやうこのご時世だ、いかに萩村さんが良い人かって。

「しかし、これから少しばかり物騒になりそうですから」

「萩村さん」

なんだかまだ言いたいらしいけど僕的にはもう充分だからって、ちよつと強引に止めてすつと息を吸ってひと息に言う。

「先日いただいた名刺を検索して……ホームページやSNSで写真付きで萩村さんたちや会社が本物だったかどうかの確認もしましたし、電話とストリートビューでも確かめました。載っていた担当の芸能……ええとアイドルの方たちも実在していて、とりあえずは黒い噂とか見かけませんでしたから信用したんです」

「つまりに言えただけだたみかける。」

「それにあの悪……えつと、女の人……」

「……………今井ですか？」

「うっかり悪魔さんって言いそうになったのもまたしょうがない。」

「彼女が一緒でないにしても、萩村さんは力尽くでという感じではありませんでしたし……さつき実際に女性たちを他の護衛の方たちと送迎していたのを見ていたので、僕みたいなただの子供をさらってどうこうするような人ではないと考えました。いくらなんでも僕ひとりを連れ去るために、来るかどうかも分かっていたのに今日あの時間のあの場所であれだけのエキストラを用意するとも考えにくいです。無意味です」

「実際そうだしな。」



この1ヶ月外に出ていなかったんだから僕があそこを歩くなんてのは想像もできないはずだし。

引きこもっていたからこそ断言できる。

悲しいけど。

もし仮にそうだったとしてもそこまでする悪い人ならもはや何をしたっていつかは捕まってドナドナされるんだろうし、考えても無駄だしな。

……ちよつと酸欠気味だ。

ついでに脳みそがオーバーヒートしそう。

すでに普段の1ヶ月分以上の会話をしている気がする。

だけど、もうちよつと言っておこう。

なんだか言わないと気が済まなくなつたから。

「それに万が一のことを考えてスマホを押しだけで通報できるようにしておきましたし、目くらましも持っています」

と、ここでポケットの中で握つたまま忘れていたスマホと催涙スプレーをちらり。

……反応を見ようとしたら運転中だったから無意味な演出だったらしい。

そりやそうだ、今は車だもんな。

話すのに夢中でって言うよりは話す内容を頭の中で文章にするので必死だったか

ら、あとはちゃんと発音するのに夢中だったから全然気がつかなかった。  
無念だ。

縁がなかったもんだからなんだかわくわくしちゃう防犯グッズって言うアイテムを  
いそいそとしよう。

にしてもネットって本当にすごい。

なんでもそろそろな……………つて。

あ。

ブザーの方を買うの忘れてた。

あとスタンガンもあつたらいいなって思ってたのに忘れてた。

届いたあとで考えてみたら催涙スプレーなんかこういう狭い場所で使ったら僕自身  
も動けなくなるって分かったからとりあえずでポケットに突っ込んでおいたんだつた。

一気に話しすぎて酸欠になったのか目の前が砂嵐になってちかちかする現象をこら  
えて少し。

後ろからクラクションが聞こえてびくつてなる。

「……………あの」

「あ、いえ」

どうやら信号が青なのにぼんやりしてたらしい。

いや、僕の方を向いてたからなにか話しかけてたんだろうか。

酸欠だったからさっぱりだ。

「失礼しました……先ほども今も。その、そこまで考えていらつしやるとは思っていませんでしたので……その。よく知り合いをこうして送ったりしてつい先ほどのようなことを言ってしまうのですが、今のようには真正面から返されたのは初めてです」「そうなんですか」

「はい。自分は平気だとかそんなことはしないだとか、またお説教かだとか……それとも話題をそらされるか……響さんにとつては余計なお節介でしたね。響さんご自身もご両親もご立派です」

「いえ、むしろ想像通り誠実な人というのが分かったので安心しました」

安心しきりはしないけど悪いことをする人じゃないって分かっただけで充分だ。

親切は受け取っておこう。

ありがた迷惑なことも多いけど。

◇

せっかくだからってさつき調べた店のある駅ビルに行きたいって伝えたら、この後そ

の方向に用事があつたとかで、さつきまで向かっていた地元の駅から十数分乗せてもらうことに。

まあさすがにあの後はお説教もされなかつたしどうせ乗せてもらったんだからつてわがままで。

確かにネットに載せている事務所のひとつがそつちにあるしGPSはちゃんとほぼ最短距離を進んでいるようだし、疑う必要もないもんな。

疑うのつて一回疑いだしたらなんでもかんでも疑わしくなるものだしキリがない。疑念が疑念を呼ぶ。

人間関係メインのドラマで修羅場が起きる元凶だ。

みんな、ちよつとは人を信用したほうがいい気がする。

まあ、誰も信用していない僕が言うのもアレだけでも。

それにしてもシートの絶妙な柔らかさとクーラーの冷氣と匂いが気持ちいい。もう帰つてこのままごろごろしてたい気持ちになつた。

「そういえば先日もうそう感じたのですが、響さんは……その、悪い意味ではなく見た目よりも大人びて見えますね。響さんくらい歳の方……失礼、あくまで見た目の話ですが……と接するときはもう少し語彙……話し方を変えているんです。響さんにも最初はそうしようとしていたのですが、そうしたら失礼だと感じる程度に大人びてい

らっしやるので。女性に尋ねるのは失礼ですが、歳はおいくつでしょうか？」

子供扱い。

女の子扱い。

……どっちも間違ってるのにどっちも正解なのが悲しい。

「まだ幼いのに受け答えがはつきりしていて、とても低学年……違ったら済みません、の方には見えず将来有望だ……と、今井もあれ以後何度も言っていたのですが。それもあつて余計に断られたのが残念だったと」

低学年とか連呼しないでほしい。

こう、心にぐつときてしまうじゃないか。

僕を幼女扱いして失礼極まりないのはさておいて……あのときのJCさん、中学生ならなんとかだませてもさすがに大人に対しては無理かな？

余りに幼すぎて初対面の印象で10歳を超えているとは思わせられないらしい。

うーん。

僕とはぜんぜん関係ないと思っていた小さいとか幼いっていうのに対するコンプレックスを僕自身が発症してしまうなんてな。

人生とは複雑怪奇だ。

幼く見える原因はもちろん1に低身長で2に顔つきだろうけども。

でも前の年齢からしたら数歳なんて誤差の範囲だしやっぱりどうでもいいか。でもなあ。

.....

.....そうだ。

せつかくだしここでも反応を見てみよう。

意見が多いほうがいいし、この前の子はちよつと.....例外だろうしなあ。

同じような境遇っていうフィルターがかかっていたみたいだし。

言ってみてあまりにも疑われたりするんだったら.....とても、とっても不本意だけど次からはギリギリ小学生ということにするしかない。

けど、とりあえずこの前とおんなじ感じで言ってみる。

「.....あの、ひとつだけ。いいでしょうか」

「はっ」

一応据えかねたって感じで拗ねた感じで言ってみる。

「僕は低学年でも小学生でもありません。今年で中学2年、歳は.....」

3です。子供じゃありません」

大人扱いは望まないまでもせめて子供扱いは勘弁って意味を込めて。

中2だったら13歳くらいだったはず。

身長体重の表で目にしたから覚えてる。

.....。

あ。

14歳の方が良かったかも。

けど、今は春だから多分大丈夫なはず。

.....大丈夫だよね？

## 11話 虎穴(車) 3/3

13歳。

僕が今から10年くらい前の年齢。

そんなはるか昔の年齢を言ってみて「やっぱりないなあ」って思った。

気持ち的にはそれよりずっと上なんだけど肉体年齢はそれよりずっと下って言う難しい状況。

ちようど良い感じの妥協点が見つからないんだ。

さばを読むって案外と難しい。

これで13だって言い張るんだたらよつほど強い精神がないとやってられなさそう。

だつてもう無理あるよなあって思うし。

……それにしても。

とつさに口にしてから考えなきや行けなくなつて背筋が冷たくなつたけど、学生の年齢つとつさに出ないもんだな。

がんばつて年を数え直してなんとか間に合わせたけど。



中学卒業で15くらいだから、13、4……で間違つてはいないはず。

間違つた嘘を言うどぶわつてこう、お腹から血の気が引くあのイヤな感覚がするけど数秒前の僕もそれに襲われてて気持ち悪かった。

やっぱり嘘つて苦手。

しょうがないんだけど苦手は苦手だ。

見栄つて張るとろくでもないんだな。

そんなことを思つてる苦労しているんだけど、お返事がない。

ついでに軽いブレーキがかかったかかって思うとまた加速して元の速度に戻つてつてなる。

また僕の指先に汗がにじむ。

……この人……萩村さん、運転は苦手なのかな。

いや、今のはドライバーを驚かせた僕がいけないのか。

慣れているとも言っていたし普通の運転なら平気なんだろう。

止まっているときに言えばよかったかもな。

もちろん驚かせるつもりはなかったんだけど結果としてびっくりさせたことには変わらなくて悪い気がする。

僕はこんなどうでもいいことまで頭の中でぐるぐるしちゃうんだ。

「済みませんでした……大丈夫でしたか？」

「はい、平気です」

平気じゃなかったけど僕のせいだから我慢する。

そうして後ろにぐつと押しつけられる感覚。

車は今度こそ流れに乗った様子でほつとする僕。

「……改めて失礼しました。 職業柄、見かけよりも歳が上だったり下だったりする方

をたくさん見てきましたが、それほど……外見と年齢が離れている方を見るのは久しぶ

りだったので。 いえ、今までに何名かそのような方を存じていますので疑うとか言う

わけではないのですが……まさかそれほどお若いとは思っていませんでしたので。

……そうですね、中学生の方に小学生に見えるとお伝えしたら気分を害されるのは当

然ですわね」

「え、いや別に良いです」

なんかすつごく申し訳なさそうな声になったから良いですって言うておいてあげる。

ほんとどうでもいいことだしな。

けど……ふむ。

変な運転しちゃうほどにはびっくりする感じ？

だったら……この萩村さんの場合も驚きはするんだけど、僕の話し方とかこの前のJ

Cさんみたいな年齢詐欺な人と会ったことがあるからこそ信じるっていう感じなのかな。

今回もまたサンプルとしては微妙なところだったか。

なかなかサンプルにふさわしい人が見つからない。

いや、単純に僕が人見知りできっかけがないから誰にも聞けないだけけど。

そういう意味じゃ今日この人に会えて良かったんだろう。

うそっぱちを信じてくれる大人がゼロじゃないっていうところは結構な収穫。

「中2です」って言い張れば「学生証見せて」とか言われない程度にはあり得るって感じ

……で良いんだろうか？

でもやっぱり無理のある設定だったみたいだなあ……この見た目で中学2年っての。

今だってシートに座るっていうよりは乗っているっていう感じの大きさだしな。

脚が短すぎて、座るところを膝に合わせれば腰が浮くし腰に合わせればふくらはぎの

微妙なところがこの原理になって気持ち悪いって言う始末だし。

どう見ても一般的な人間のサイズ未満だ。

10歳くらいまでは何かと不自由な世の中らしい。

……子供のとき父さんの運転する車じゃ僕、どうやって乗っていたんだろう。

まったく記憶に残っていない。

あまりにも昔過ぎるもんなあ。

「……………」  
しんと静まる車内。

なんだか気ままずくなって外を見ようとしてしても窓の外がよく見えない。視点が低すぎてビルの上の方とか空しか見えない。

……乗り物に乗っていて真横がよく見えないのってちよつとイヤだな。何かにつけて不便でしかない幼女ボディがにくらしい。

◇

静かで快適だなんてご機嫌になってる僕だけど視線を感じてちよつと残念。運転に集中しているように見えるけど、ちらちらって僕をミラー越しに見てくるのが分かるんだもん。

人の視線ってなんで分かるんだろうな。

……けど。

やっぱり無難に小5とか小6くらいにしてもよかったかもしれない。

意味のない意地を張るんじゃない。

無駄に疑われるくらいなら……って何回目かの後悔をしても遅いんだ。

1回言っちゃったことって撤回できないもんな。

沈黙は雄弁よりつてのは良く言ったもの。

今から思えば何歳くらいに見えるのかって上限を見極めてからでも良かったかも。でももう遅いからこのまま乗り切ろう。

間違えたつてのは言えないんだもん。

大人ならともかく子供……学生が、たかだか10回くらいしか誕生日を経験していないのに自分の年と学年を間違えることつて滅多にないはずだからな。

それも1歳ならともかく何歳もだなんて、自分から嘘言ってますつて言ってるようなもん。

自分の歳とか、誕生日が20回を超えてくるとだんだんどうでも良くなってくるんだけど、それまでは僕自身が何歳かって言うのが何かにつけて大切だもんな。

とは言えなんだか気まずいままなのもヤだからもつかい言っておこう。

萩村さんも大人だから流してくれるだろう、きつと。

案外繊細な人だったりするかもだし、全然気にしてないよつて教えてあげないと。

「自己紹介で必ずそのように驚かれるので慣れていきますから気にしなくても結構です。下に見られるのは……今のように虫の居所が悪くなければ普段はスルーするので。」

歳を分かってもらえたので機嫌も直ったので大丈夫です」

「そ、そうですか……」

「はっ」

年齢については帰ってから要再検討の様子。

「……………」

「……………」

信号いくつか分の静寂が心地よい。

そういえば僕は車とか電車とか乗っていると振動と音でだんだんと眠くなってくる体質だった。

今はどうなっているんだろう？

車はともかくバスとか電車とかで今でも眠くなるのだろうか。

この見たくで眠りこけたら心配されちゃうから気をつけないとな。

あ、でも、バスとか電車とか……この見たくだと子供料金で行ける……？

そんな素晴らしい考えがよぎる。

本当はいけないことだけど肉体年齢的には何一つまちがってないわけだし、なにより半額っていう言葉には何か重大な意味がこもってる気がするし。

「……………」ええと、それでしたらついでにもうひとつだけよろしいで

しようか」

「はい」

「……身長や……その、失礼ですが……体重など。 ……その、……以前から変わつては  
いないのでしょうか……」

こんどは何言いだしてゐるんだらうこの人。

頭の中が???つてなつちやつたじゃないか。

この人にしては珍しくつかみにくいふわつとした質問だし。

でも……ええ?

どういうこと?

……ああ、きっと萩村さん、最近背が伸びたかとかの世間話にすり替えようとしてみ  
たけど僕の顔を見て、僕が女の子に見えるもんだから困つたんだ。

最近ハラスメントの判定がものすごく厳しいから異性に身長とか体重とか言い  
にくいんだな。

うんうん分かる。

今つてなんかものすごくめんどくさい世の中だもんね。

芸能事務所つて言う立場の男だから気軽に聞けないんだろう。

大変だね。

「はい、小学校の途中から伸びなくて。体重も……あまり食べられませんが、飯に本当に中2で小学校低学年な身長ならこんな感じだろうって言っておいてあげる。」

「……そうですか。いえ、何でも……失礼なことを聞いてしまいました」「別に構いませんけど。こうして送ってもらっていますし」

車内の雑談にしてはなんだかお互いに緊張感あふれるものになっちゃったけど、おかげでヒマじゃなかったからな。

なにより楽しってるんだ、実は話し好きかも知れない萩村さんの相手くらいはしらないな。

女の人じゃないから飛び飛びすぎなくて楽し。

……いや、単純に他人と沈黙な時間を過ごすのが苦手って可能性もあるのか。

うーむ。



「途中の運転や話題で失礼しました」

「いえ。僕のせいもありますから」



そうしているうちにまた雑談チックな話を振ってくるようになったらしくってぼんやりしているあいだに着いた様子。

身を乗り出……せないからシートベルトを引つ張りながら外を見てみると、そこそこに大きい駅ビルにぎゅつと詰まった広告の看板。

乗り換えするおつきい駅。

送迎のロータリーやら僕でも知っているいろいろな店やら平日の昼間だっていうのにたくさん行き交ういろんな格好の人たちやらでせわしい空間。

この辺久しぶりに来たなあ。

普段は用事がなくて来ないから……多分前に来たのは数年前とかいうレベル。

本当にひとり暮らしだと行動範囲が限られるよなあ。

インドアだから余計に。

インドアで根暗で引きこもり経験者なニートを継続している子供の肉体だからこそ、電車代と人混みの苦労と疲労を回避できたのがとてもありがたい限り。

いや、電車代なんてどうでもいいんだけど……ほんと体力のない身としては楽こそが命だって実感する。

「済みません、こちらでよろしいでしょうか。これ以上近くには止められないようなので」

「はい、ありがとうございます。歩かずに済んで助かりました。おはなしも聞けましたし」

普通に電車で来ても同じくらいで着いたんだらうけど……まあ、駅まで歩く分もシヨートカットでできたし、ロータリーからの数十メートルなんて誤差だしな。

「ちようど行きがけでしたし時間にも余裕がありましたから。それに移動中に私たちの活動を紹介できましたし響さんのことも教えていただきました。……これであのときに勧誘を止めたこと、今井にしつこく言われないうちになると思いますので……私もすごく、ありがたいんです」

すごくつていう単語に力がこもっている。

一瞬だけ顔が曇るかわいそうな萩村さん。

あれだけ激しい人が同僚だと大変そうだな。

ぐいぐい来る女の人は怖いよね。

うんうん、分かる分かる。

つくづく社会は厳しいらしい。

やっぱりニートでよかった。

そんな誇らしさでどやっしてしそうになる。

「すぐには言いませんので」

「……………」

「この前の通りに何年後でも構いませんので、ご興味が湧くのをお待ちしています。私たちと一緒にたくさんの人を元気にするお仕事……少し気になる程度でも結構です。でも、もし何かありましたらお気軽にご連絡ください」

「そうですか」

ここで「分かりました」とか「はい」とか「はあ」とかのニュアンス次第で肯定にも取られかねない返事は厳禁だ。

萩村さんはまじめでも悪……今井さんとか、その上の人とかに「そう言ったよね？」って言われると困るもん。

さすがは慣れているだけあって最後までご苦労様だな。

聞き流しても頭に残る程度にはいろいろと聞かされたし……やりおる。

ビジネスライクに分かりやすく簡潔にどんな仕事があつてどんな生活になつてとか、お仕事のメリットとかデメリットとか、どれだけの人気でいたいどれくらいのお金が入るのかとかも頭に入っちゃつてるもんな。

まあ軽く聞いただけでも「まずは数曲歌つて踊れるようになって」とか「演技指導」つて言葉が出てきた時点でハードすぎるから僕には絶対ムリだつて悟ることになつて興味はこれっぽっちも湧かなかつたけど。

むしろマイナスだ。

ニートを選ぶような人間に労働の美しさを説かれても効果はいまひとつなんだから。僕だって楽だったら考えたかもしれない。

座ったまま用意された原稿を読むだけだったりするならまあなんとか……つて気はしなくもないけど……いやいや、やっぱりイヤだな。

注目されたくないんだから何したつてヤなんだ。

いちど高いハードルを掲げられてから下げられると「それならいいかな……」つて思っちゃう心理そのままじゃないか。

いけないいけない。

危ない危ない。

話術が危険だ。

適当にお礼を言いつつ車を降り……ようとして、さっきは閉めてもらったドアが予想よりずっと重くて、あと地面までの段差が大きくてよろけたりしつつ苦勞して降りて慎重にドアを閉める。

「……………」

へえこつて感じの気の抜けた音。

半ドアだ。

「……………」

ばたんって顔に吹き付ける風。

「では失礼します、響さん。また機会がありましたらいつでもご連絡ください。

メールでもメッセージでもお電話でもその週にはお返事できますので」

「はい、送っていただいて本当にありがとうございます」

連絡する気はないけどありがとね。

運転席から窓を下ろして僕に挨拶もそこそこに、後ろから来た車からの無言の圧力で

高級車は走り去っていった。

「……………ふう」

話し疲れたって気がついて脱力。

車の振動の感じが体に残っていたから、なんとなくぼんやりと萩村さんが見えなくなるまで突っ立っていたけど気がつくとき日差しが真上に来ていて熱気が戻ってきた。

やっぱり外は暑い。

タクシーをいつも使う人とかマイカー通勤の人の気持ちがよく分かる。

僕ももつとお金があればそういう生活をしたい。

贅沢すぎる気がするけど思うだけなら良いよね。

楽できた上に情報も手に入ったし、一般人……の範囲だろう常識的な大人。

今の僕に対して多少の興味と好意を持っているみたいで、いざというときに使えるかもしれないツテができたっていうのは大きい。

年齢で思いつ切り嘘ついちゃったけど、何かあれば叔父さんとかお隣さん以外に頼れる人が出来たのは大きいよな。

まだ誰にも幼女になつたつて言つてないから唯一の連絡先とも言える気がするし。

今井さんだつて悪魔的に強引だけど……裏を返すと強引だからこそ一緒に働く見返りになにかを要求すれば飲まざるを得ない状態に持つていけそうだし、ほんとうにいざつて言うときの当てができたのは安心する。

契約書とかのうち本人がしないといけないものにゼーんぶサインして期待させておいて「じゃあ親御さんにもお話を……」つていうタイミングでまとめて暴露つてすれば断れまい。

騙して悪いけどお互いに利用する関係なら僕も遠慮なく丸投げできるんだ。

もらった名刺にも連絡先があつたし、忘れられない程度に連絡を取つておいたほうがいいかもしれないな。

うまく乗せられて気がついたらステージとかは絶対に避けないといけないけど。

絶対に。

けど、いざつて言うとき……そう、ずっと考えているように成長できないとか、成長

できてもやつぱり仕事とかめんどいつてなったときには……。

じりじり焼かれるのは勘弁だから日の光を避けるために帽子とフードを深く被り直して、目の前のモールへと急ぐ。

さつさと薄着を調達したい暑さで熱さ。

サイズとかはこの前でもう分かっているし、どの辺に行けばどの服があるのか……は分からないか、あのときは全部持って来てもらっちゃったしな。

まあサイズは分かっているしなとかなるだろう。

いざとなれば今のような格好だけでもいいしな。

はじめてつて言うのは不安でしょうがないものだけど、なんとか1回でも経験しちやえば次からは楽だ。

とりあえずは服を3セットくらい買う。

それだけでたぶん疲れるから適当なところで涼んでから帰ることにしよう。

あんな思いはしたくないから重そうだったら送ってもらおう。

変な顔されるかもだけど……そこもなんとか適当に言つて。

「……………」

1ヶ月ぶりの外出。

連休とは言つても平日だしお昼は微妙に外れているしそこまで混まないだろうし、外

に出た記念になにかを食べて帰ってもいいかも。

どうしても残しちゃうのはご愛敬だな。

物理的に胃がちっこいんだもんな。

この前みたいに残飯処理を任せられるJCさんがいるわけじゃない、しょうがないって思っておこう。

……そんなことを考えつつ急いでいたせいか周囲の索敵がおろそかになっていたらしくって、気がつくとすぐ目の前……上に誰かがぬつと出てきて危うくぶつかりそうになる。

今の僕、視点が低すぎて正面を見ているだけだと見える範囲が狭いからなあ……。

ひやっとしてむっとするけどぶつからなくてよかった。

体重的にも体積的にもぶつかつたら僕がたじやすまないもん。

ほとんどの人は僕よりも背が高いはずなんだからちゃん和前を見て歩いて、できれば僕に気を遣って避けて歩いてほしいところだ。

僕と違って遠くから見えているはずだな。

でも歩きスマホとか多いし、相手が変な人だったりしたらそれはムリな相談か。

やっぱりどれだけ首が疲れようともちよつとは上を向いて歩くクセをつけないとな。

とまあ頭の中でひととおりの文句を言いながらその人を迂回。



ぶつかりそうになったからってこんな子供に怒ってくる人はいないって思うけど気  
まずいしな。

「あの、えっと。 すみません」

女の人だったか。

怒って無さそうで良かった。

「あの……その。 えーつと……」

「……はい？」

あとからもたもたって感じで声をかけてきているらしい。

僕の方を向いて話しかけようとしているらしいからってとっさに返してたけど……  
あ、これ、めんどくさいアンケートとか地域の子どもの見回り隊とかだったらやばいん  
じやって気づく。

思わず足を止めちゃって背筋がひやっとしたけど一応はその人の顔を確認だ。

なんとか隊の人だったら全力で逃げよう。

そう、思ったけど……その人の顔、いや、その子の顔を……僕は知ってしまっていた。

「……わあっ、やつぱりっ！ 先日私が服を選ぶのをお手伝いさせてもらいましたあ  
のときのきれいなお客さまですよねっ!! こんなところでまた会えるなんて！ まあ  
!! お久しぶりですっ！ あっ、あのときの服！ 着てくれているんですねっ！」

きーんと耳がして頭がぐわんぐわんする。

言葉の暴力で足がすくむ。

……近くで見上げるとでっかい胸と顔が同じくらいの大きさに見える、髪の毛の先がくるくる回っていて体に見合わない童顔で、でも子供相手でも上がりやすくて噛み噛みだったあのときの……服のお店の店員さん。

今日は噛んでいないし制服だし、話すスピードもまあまあで留まってはいるけどあの恐怖は忘れない。

蘇る恐怖。

「……………」

黙るしかない僕に向かって再会の喜びをこれでもかかってまくしたててくる。

……なんでこの子がかんなどころにいるんだ。

僕は他でもない君を避けるためにあえてこんなところまで来たっていうのに。

……こんなことなら何も考えないであの店でまた人形になっておけばよかった。それなら……少なくともいちばんの強引なこの子には会わなかっただろうにな。

ああ、終わった。

僕の貴重な外出が。

ぼんやりとその子のJKさんらしい格好を眺めるしかない僕だった。

12話 苦手は、やはり、苦手 1/3



やばい。

「……………」

やばい。

やっちゃった感じがやばい。

心臓がどつどつどつどつてなってる。

やばい。

けどやっちゃったものはしょうがない。

手を出しちや行けないものにノリで手を出しちやったんだ。

後悔はなんとやら。

「……………」

体が熱い。

気持ちひとつでこうもなるなんて知らなかった。

だってお風呂場の鏡に映っているのは……あろうことか女兒もとい女子用のスクール水着を着て突っ立っている僕なんだから。

銀の長髪と眠そうな目、凹凸がなくて幼い体が紺色のナイロンな手触りと新品のゴムの臭いとうつすらと囲まれて似合いすぎている僕だもん。

胸とお股のところの気持ちいい肌触りの柔らかいパッドなのか裏地なのが入っているせいでほんのり強調されているのも、こう……やばい。

やばいがやばいんだ。

語彙力がなくなるくらいにはやばいんだ。

なにせびつちりすぎる。

これはさすがにまずい。

いくらなんでもまずい。

罪を犯した気分って言うのはこういうのなんだろうな。

凹凸がないからこそやばいって感じる。

「……………」

せめて女装してスク水を着ているって思い込もうとしたけど、それはそれでやばいことに気がつく。

そんな通称スク水を買ったのはほんの少しの好奇心と冗談と……いつものうっかり

のせいだった。

ネットで着られる服を探して物色してら「おすすめ商品があります」とかなんとかで表示されたこの水着。

たぶんこれは下着とかを探していていろいろなワードで検索していたせいで……小学校低学年くらいの子の服を買いたいんだなって思われたんだ。

それとも僕の購入履歴とごっちゃになってだったのかな。

それはもう分からない。

……まさか買っただけで目、つけられたりしていないよね？

「……………ふ……………」

ばたばたって顔を仰ぎながら熱くなつた顔を冷まそうつてする。

ネットって言うのは基本的にゼーンぶ見られているらしい。

って言うても人がいちいち見るんじゃないかって……今だとAIみたいなのが特定のワードとか画像とかを通信から見つけて、怪しい人のがそういう機関とかに行く……らしい。

映画とかの受け売りだけど嘘でも大げさってわけでもないらしいのはネットの書き込みとか買い物とかで逮捕される人があるので分かるし。

ということは、この家からアクセスしているのは男だつてのが分かって、最近やた

らと女の子……それも小さな子のを頻繁に調べて買っているって言うのが分かったやうわけで。

女児用水着とか言う犯罪臭しかないワードなんてやばいだろう。

やばい。

そうは思うけど、これを買っていたのは結構前だ。

それから時間が経っても何もないし大丈夫だろう……たぶん。

気にしないことにしよう。

お家にお巡りさんが来ちゃったらそのときはそのときだ。

いくらなんでもスク水で監禁の疑いからの……って言うのは悲しすぎる結末だから勘弁だけ。

カートに入れたのは興味本位だった。

犯罪者の供述みただけど本当だからしようがない。

けど想像していたよりはずっと安かったのとサイズが分かりやすかったのとで選びやすかったし、こんなの買ったらやばいよな……って思ったからやっぱりやばい。

「やばいって思ってた手を出したんだな？」って聞かれたら全面降伏だ。

やばいからやっぱり後で止めようって思ってた忘れちゃって……忘れたまま他のものとまとめて買っちゃって、開けてみたらあまりにも強烈な印象で僕自身がやらかしたこ

となのにドン引きして「あ、これムリだ」って思っただけで忘れようとしてしまいで忘れていたスク水。

……しまい込んでいたんだけど暑さのあまり頭がおかしくなっていたのか、それともこんな見た目なのに呑めるんだって気がついたお酒がまだ頭に残っていたのかは分からないけど、その場の勢いという僕にしては珍しい動機で着ちやっただ。

スク水を。

アルコールで汗ばんでたからすつごく着にくかったけど着ちやっただ。

やっぱりアルコールは危険なんだな。

「……………」

女物には慣れたと思っただけこれはずがにとつてもすつごく恥ずかしい。

ここには僕しかいないのに何秒置きかに周りをきよるきよるしちやうくらいだ。

鏡の向こうの僕も普段とは違ってゆだつた顔をしているし全身の肌も汗でうっすらとにじんでいて、それがさらにまずいことになっている。

非常になんというかいかわしいというか……恥じらいが色気とは言ったものだよなあって思う程度には。

……汗、滅多にかかない体だと思っただけで、ここまで恥ずかしかったりするとは出てくるんだな。

暑いとき以外でこんなにも止まらないんだもんな。

「……………」

鼻の中がすんつてなる。

体がぶるつてする。

着てから数分くらいは悶えていたけど峠を越したらそこまですりたててきた。

慣れたとも言う。

慣れつてすごいな。

びたつて止まるんだもん。

というか予想以上に寒い。

体が震えている。

気化熱とかいうののせいとかそれとも……いや、単純に冷えただけか。

そりゃそうだ、家の中とは言え水着で汗かいたんだもんな。

そうして僕は恥ずかしくてたまらない湯だった状態から一瞬で冷静で冴えきつてい

る。  
感情をすぐに抑えられるのは僕の特技だ。

イラツとしてもすぐに収められるしな。

その代わりにささいなことですぐにびっくりするけど。



さて。

恥ずかしさを失ってから観察してみると、まずは感覚がまるで違う。

お股だけじゃなくて体じゅうを強く締めつけられていて着ているのもわりと苦しい感じだ。

着た感じサイズはそこまで小さくはないようだけど特にお腹の締めつけが辛い。

あと太もものつけ根。

いや、わきの下とかお腹とかお尻とかお股とか脚のつけ根とか言うすべすべに包まれている範囲全部だな。

やつぱり小さかったんだなうか。

いや、けど身長と体重はびったりだしなあ。

うーん。

でもどうして水着はこうも体のラインを際立たせるように作られているんだらうか。

上半身丸出しの男のに比べれば何倍もましなんだらうけど下着と変わらないじゃないかないか。

何が違うんだらうか。

水に濡れていいて言うの以外で。

鏡の前でぐるぐる回りながら銀髪スク水幼女っていう劇物と化した僕を観察する。

この姿で通りがかりのサラリーマンさんに抱きついた瞬間にその人が逮捕されるレベルのやばいやつ。

くるって回って浮いた髪の毛がばさって落ちるときに水着にすれて「しゅる」って音がするのがなんだか新鮮。

これで髪をツインテールとかにしたら……いやいや犯罪臭が加速する。

着ていると窮屈だけどさすがに運動用な子供用として作られているだけあって体にフィットする感じで動きやすいらしい。

しかもアニメとかで子ども体型のキャラクターがよく着ているのを見れば分かるとおりにいか実感しているとおり、視覚的なインパクトは下手をすれば裸以上。

なんでアニメとかマンガが浮かぶんだろうって思ったら、僕の学校じゃ中学になる前には男女別々だったって気がついてなるほどって思う。

学園もとい学校生活とか灰色だった僕にとってはああいう創作上の世界の方が馴染み深いものであるもんな。

たかがアニメだマンガだって言うけど侮れない。

妄想とはいえわずかながらに人生経験がたまっていてくれると嬉しいけどどうなんだろうな。

しかしやばいなあ……どうしよ。

いや、ほんとに。

裸は視覚的にきつすぎるからこそその裸一步前の水着でもある。

裸に限りなく近いけど見ちゃっても大丈夫っていう布に包まれてるからこそ安心感もある。

不思議な感覚。

鶏ガラなはずの今の僕のこの体なのに、あちこちが締め付けられていることで裸のときよりも体の形というか肉感がくつきりと凹凸で映っていて……その手の人たちにとつてはたまらなそうな状態になっている。

あばらとかごつごつしたところがすべすべしているからやばいのかもかもしれない。

僕的にはあと10年は成長してほしいところだけどたまらない人はいるんだろうな。僕的には成長して欲しいところだけど。

……でもなるほど。

締めつけることであえて強弱をつけて幼い体に欠けている女性らしいフォルムを演出しているのか。

そんなことを思ったりして、ふと手元のタブレットで水着の写真を眺めながらポーズを取ってみる。

「……………ふうむ」

これはこれで裸とはまた違った良さがある。

どうせ幼女の身なんだ、遠慮無しに観察しておこう。

これもまた人生だ。

いや、違うだろうけど。



「やっぱり、ここのケーキは絶品ですねー。お家からも学校からも離れているし定期券でも来られないからなかなか機会がないんだけど……久しぶりに食べたらやっぱりおいしいわーっ」

「そうですか」

「いつもは並ぶのに今日はすぐに座ることもできたし品切れもなかったし。タイミングがよかったから嬉しいです！」

「そうですか」

「ん——！　おいしい……このためにおこづかいを貯めてきてほんつとうによかったわっ！」

「そうですか」

僕のいい加減な相槌に満足しているらしい目の前の大きい子は、それはもうおいしいような顔をしてケーキとお菓子のセットをむさぼる。

子供が一生懸命食べている姿は見ていてほほえましいけれど僕が巻き込まれてるからほほえましくない。

なんでかスク水を着たときのことを思い出しちゃってトリップしてた程度にはほほえましくないんだ。

僕は目の前の、その子のものよりずっとちっちゃくていちばん安いやつを眺める。

お店に入っちゃった以上には頼まないと思いきや……で頼んだやつだ。

僕が普段お店の前を通るときに目にするこうしたお菓子……スイーツって言うんだっけ、と比べると元のサイズがだいぶ小さいみたい。

だから思っていたよりはまし……だけど飲み物とセットで、これで千円かあってげんなりした。

悲しい。

こんなものを食べるくらいならコンビニのお菓子を選んだほうが何倍もマシな気がする。

あれで充分だろうって思うけど連れ込まれちゃったんだからしょうがない。スイーツの園っていう魔境に。

そもそも僕は甘いもの好きじゃないからいちばんに縁遠い場所だ。

なんて思いつつ「早く目の前のおつきな子が食べ終わらないかな」って願いながらちみちみとフォークと口を動かしている僕。

……ここは駅ビルの最上階にあつたカフェ。

萩村さんを送つてもらつて片道とはいえ人混みと暑さをしのげて楽ができたつて喜んでいたのはつかの間の奇跡だったらしくつて、その奇跡が終わつた瞬間にこの子に連れ去られ「再会した記念に！」とか「あのときの服の感想を聞きたい！」とか……僕が良いよだなんてひと言も言つてないのに勝手に解釈して連れて来られたのがここだ。

あれよあれよという表現がびつたりで、手を引くこの子の性別が違つていたなら事案となつてもおかしくはないものだったに違いない。

「えつと」とか「あの」とかしか反抗できなかつた僕も悪いかも知れないけど。

端から見るとどうしても姉と弟な感じになるんだろうからむしろ生ぬるい視線と笑顔が注がれていた気がするけど……あれは気のせいだったということにしよう。

逆ならまだしも僕がこの子の弟とか……ないない。

「……………」

けど……見渡す限りに女の人しかないない。

いや、一応はいるのか。

一応に男もいるけどそのうちのひとりまたはただの幼女でもうひとりまたはただのウエイターさんで、あとはみんな女子で女性だ。

こんな異質な世界、これまで生きてきたのに存在すら知らなかった。

いや知ってはいたけど本当に実在するとは思っていなかったという意味で。

テレビとかのスイーツ特集って本物だったんだって今日初めて知った次第だ。

長生きもするもんだな。

たかが二十数年だし今は数歳だけでも。

しかもひとつひとつの値段がやたらと高いのも驚きだ。

ケーキと飲み物の基本のセットだけでそのへんのランチセットを軽く上回るお値段。

つまりここにいる女性たちは少なくとも男の倍の値段を使って腹と舌を満たしているというわけになる。

お金持ちだな。

女性に対して甘味の影響力は計り知れないらしい。

そんなわけで……ほぼ満席近いお店の真ん中あたりの席に案内されてしまった僕は、全方位から飛んでくる甲高くてうるさいキンキン声に包まれることとなる。

それだけでも頭が痛くてこれっぽっちのケーキでさえ味わうこともできない。

まことにストレスフルな環境だ。

まさに地獄。

早くお家に帰りた。

帰らせて。

帰して……。

◇

「……ふう、ああ……おいしいわかぐわしいわ……。それにしてもあのとき私たちが選んだ服を着てくれていて嬉しいわあ。……あ、私たち今はお客さまと店員という関係ではないのだし普通に話してもいいのかしら？」

「どうぞ」

さつきから微妙に丁寧だったり砕けたりしてたし今さらだもんな。

変だなーって思ってたけど子供ががんばってる好感はあつたから気づかなかつたことにしてあげてたけど流石に気づいたらしい。

砕けた感じになっっているけど考えてみたら相手は高校生でこちらは……詐称でも中学生。

上下関係は明らかだ。



もちろん僕が下になる。

悲しいけどそれが現実。

子供にとつての1年は大きいって言うからな、精神的にも肉体的にも。

それに年下に向かってさつきみたいな話し方こそおかしいんだし、僕は別にため口とかされるぶんには一切気にしないからどうでもいいしなあ。

僕から年上には絶対にいねいに話さないと気が済まないけど僕がそうされる分にはどうでもいい。

萩村さんとか今井さんは、きっと僕みたいな子ども相手でも対等なビジネスパートナーとして考えていたからこそその話し方だったんだろうし。

いわゆる大人の関係……む、ちよつとちがう気がするけど大体そんな感じだ。

敬語って距離感とか細かいニュアンスとかを丸投げできるから実はとつても便利なんだけどな……距離感とか無視できるし。

僕的には楽だけど高校生的にはめんどくさそうだもんな。

「それにしてもそれにしてもつ、あのときに最初男の子だつてみんなが思っていたくらい本当にボーイッシュな服装も似合うのねつ。男の子の服も女の子の服も楽しめるなんてうらやましいわー」

「そうですか」

まあその胸とおしりじやあな。

絶対に口にしないけど頭の中じや好き放題。

でもその発言、同級生の同性にしてしまったらタダじや済まない気がするけど大丈夫なんだろうか？

同級生相手でもおつきいだろうし……肩こりそう。

あとこの服は別に好きだから着ているわけじやないんだけどなあ。

単にこれ以外の選択肢がないからというだけでしようがなくだし。

結局サイズは分かってても自力で選ばなかったからやつぱりどこか服の表記がわかりにくかったし、なにより一応は服が揃ってしまったせいであれから1着も買っていないせいでヘビーローテーションだもんな。

日常の95%以上は家の中にいるし、汁物を食べるときは古い服かシャツ1枚にしているし……この体だとたいして汗かかないから2日くらい着たきりでもぜんぜん臭わないし。

なんとなく気持ち悪いから毎日洗いはするけどそれでも不便なことはないしなあ。

着るものにはもともとこだわらないし、そもそも洗濯したものを着回すっていうのは前からずっとやっていることだし。

服のローテーションの中には古い服がまだ混じったままだっというのも僕のことだわ

らなさを的確に表している気がする。

ぶかぶかになるけどシャツとかなら男のときのも着て平気だしな。

外はともかく中はただの男だしぜんぜん平気だ。

汗をほとんどかかないし臭くならないし年中家の中でごろごろしていて滅多に服なんて汚さない。

だから着回しで事足りたせいで今日になるまでちよつと厚手の春物で済ませられたんだ。

あとはパンツとシャツだけの格好も割と良くする。

だつて楽だし。

男のひとり暮らしなんてそんなものだ。

とにかく、どうにかしてやつとの思いで外に出て新しいものを調達しようとした矢先にこれだ。

幸先が悪すぎる。

なんで、よりにもよつていちばんイヤな相手を避けようとして会うことになっているんだらう。

運が悪いにもほどがある。

やはりこれは呪いなのか。

僕、なんか悪いことしたんだろうか……。

そんなことをぼんやりと考えながら見ていたらいつの間にか会話が途切れていたらしく、不思議そうな顔つきをしてのぞき込んでくるJKさん。

圧がすごい。

身長……座高も低いもんだから上空から迫ってくる感じ。

どうやら体は大きくても顔と中身は年相応と見えて、僕みたいな相づちしか打たないタイプに対する経験値はまだない様子。

まあこの子が友達に選びそうな女子はおんなじような子ばかりだろうしなあ。

これで会話を諦めてくれたらいいんだけどなあ……諦めてくれなさそうだなあ。

憂鬱だ。

「……あ！　そういえば、これだけおはなししたのに自己紹介がまだだったわね！　も  
うずっと知っている気がするから忘れていたのだけどよく考えたらまだ名前も！

あ、すみません、私このケーキを」

さらつとおかわりを頼んでいるしまだまだ続いてしまいそうだ。

今の僕の目はどんな感じになってるんだろう。

「私は下条かがりっていうの。　改めてよろしくね？　……えっと、あなたは？」

「……………」

響です」

言いたくなかったから一瞬偽名にしようかって思ったけど反応できないから止めておいた。

嘘って言うのは頭が良くなきやつき続けられないもの。

僕には無理だもんな。

「響ちゃんね！ やつとお名前を聞けて嬉しいわっ」

僕の名前を知ったことがそんなに嬉しかったのか、ぱんつと合わせた手のひらに合わせ肩と一緒に髪の毛の先もぴよんと跳ねる。

そうとうに嬉しいらしい。

名前を聞いただけでここまで喜べるなんて……JKつてお得な生き物だな。

男ならふーんでおしまいなのに。

せいぜいが呼ぶのに便利程度の価値しかないものだしなあ。

「でも、またこうして会うことができるなんて！ 先輩たちに自慢できそうだわあっ」

「……………お知り合いのことですか？」

唐突に知らない人を挙げるのは止めてほしい。

こーやって話が膨らんじやうじやないか。

聞かないのも変だし聞かざるを得ないし。

「あ！先輩っていうのはね、あのときに響ちゃんのコーディネートをした人のうちのひとりのことだね？私の部活の先輩たちなのよー。先輩たちはもう高校生だしうちの学校はバイトOKだから去年から働いているんだけどね、人手がどうしても足りないっていうから私までこっそり働いていたのよ。本当は私はダメだったんだけど言わなければバレないって先輩たちが言うものだから」

速い速い。

頭の回転をあげる前だったからぜんぜん追いつけない。

最近はやけに話し好きな人に絡まれるからちよつとだけなら慣れてきたけど僕にとつてべらべらしゃべる人の相手はまだまだ難しい。

意識しないと早々に聞くのを諦めるクセ……ほんと、どうにかしないとなあ……。

「……………そうだったんですか」

とりあえずの返事をしてつつ時間を稼いでようやく追いついてきた。

処理オチしながらゲームをしているときのような感覚だ。

ラグを逆手に取るあの感じ。

ただどこの言い方、どうやらあのととき感じたように接客自体に慣れていなかったみたいだな。

そりゃあ友達と好きなようにしゃべると接客とじゃ全然違うもんな。

ああいう仕事って外から見ると楽そうなんだけどいざ働いてみたら絶対に大変だろうしなあ。

話すのが好きで仕方ない人ならともかく。

そういう意味ではこの子にとっては天職なんじゃないかな？

もう慣れてるだろうから転職になってるんだらう。

僕とは真逆の存在だもんな、JKさん……じゃなくて下条さん。

……だけど気になる。

あのときはあんなに親近感わく噛み噛みさんだったのにどうしてこう残念になっちゃってるのかって。

「……えっと、それにしても。あのときと比べると、その……雰囲気、だいぶ違うように感じるんですけど。何かあったんですか」

どうせ食べ終わるまで話してくれないだろうしってそう聞いてみた。

## 12話 苦手は、やはり、苦手 2/3

「……へ？ 私の雰囲気か……？」

「なんだか同一人物とは思えなくて」

あのとときJKさんもとい下条さんの態度とかがいきなりまるっと変わったのが気になつてた。

ずっと話してたからどうしてかなーって思ってたただけけど、この子の顔と胸を交互に見ていたらなんとなくそのままするつと。

だつて気になるもん。

いくらめんどくさがるの僕だつて……最初に会ったときだつていきなりがらつと人格が変わつたような豹変するよ。

気になるでしょ。

僕みたいに人とのコミュニケーションに難を抱えてる仲間つて気持ち裏切られたんだもん。

ひどい裏切りもあつたもんだ。

あ、僕は別に好きで人と話さないんじゃないんだ。



ただ会話をすると何日も尾を引くくらいに疲れるから話さないだけなんだ。

そんな自己擁護はいいとしても、最初はそういう感じの僕と同類かと思つて安心していたのに別の生き物みたいになつていたのが気になると言えば気になる。

や、別にムリに離してもらおうとは思わないけど。

あと話が長くなりそうなら別に良いけど。

「あ………あれはね………。響ちゃん覚えていたのね、恥ずかしいわあ………」

おや予想外の反応だ。

下条という名前の子は髪の毛のくるくるしているところに指を巻きつけながら、あのとさほどじゃないけど少しだけ顔を赤くしていた。

あ、その仕草つて結構落ちつくよね。

分かる分かる。

僕もこんな体になつて髪の毛触るようになったから。

……なるほど。

これが女性同士の「わかるー！」なのか……！

またひとつ知らなかったことを知ることになった。

まあどうでもいいことだけど。

「……………」

「……………」  
とまあ聞いてみたけどしばしの沈黙。

そのうちにやっぱり本気でどうでもよくなってきたて帰りがたかったことを思い出した。けどこの雰囲気で「じゃ、帰るので」っていうのはさすがにないってのは僕でも分かる。

けど帰りたくって気を抜くとそわそわして来ちゃう。

この小さくて軽い体を押さえるので精いっぱいだ。

初対面じゃない人との会話はつらい。

強引な人との会話はつらい。

明確な目的のないこういう会話もつらい。

苦行ではない。

質問をしたのは僕なんだけどもう興味が薄れてきたし、なんにも言わないであいづちだけ打っておいて終わるのを待つべきだったかも。

……「もう帰ります」って言えば、適当な理由つけければ帰ることができるだろうって  
いうのもつらい。

ずっと年下相手なのに「でもいきなりは悪いし……」って思っちゃう情けない僕の心  
もまたつらい。

優柔不断すぎる僕自身がっらい。

「……………」

……………なんで年下の子と話をしているだけでこうなるんだろう。

10くらいは歳、離れているはずなのに僕の方が子供じやないか。

僕の人生経験が標準的なJKさんたちに満たない疑惑。

……………いや、男って会話の頻度は低いものだから……………低いよね？

周りのきやびきやびする感じの声がわずらわしい。

……………あとなんか知らないけどやたら僕に対して好意的なのはなんで？

あのときとは違ってテール越しだから僕に对して好意的なのはなんで、そうじゃなければお金だけ置いて全力で走って逃げたい。

今の僕は肉食獣に迫られた草食動物の危機感って言うものを誰よりも味わっている。

「……………あのときはね」

あ、これ長くなりそうな気配。

やっぱ聞かなきゃよかった。

「先輩たちもそうだったのだけれど、それ以上に社員の人のプレッシャーがすごかったのよ。 眼光というか思念というか迫力というか」

「……………プレッシャーですか？」

たかがバイトだろうに思っただけで女社会は分からないからなあ。

「ええ。響ちゃんがお店に近づいてきたときから働いていた人たちがみーんな騒いでいてね？ まだ顔も見えないのにどこか普通ではない雰囲気というだけでね、ある人がね、響ちゃんのこと芸能関係とかどこぞのお嬢さまとか、とにかくそういう普通ではない子が来るのって言い出してね？」

「……………は？」

変な声が出たけど下条さん（JKさん）は気にする気配もない。

なに言ってるんだろう。

この子もその人も。

下条さんはがたと身を乗り出してくる。

どうやら熱が入ってきたらしい。

僕はもうダメだ。

胸が迫ってきて視界が苦しい。

視線も苦しい。

押しつぶされる幻覚が生命の危機を訴えかけてくる。

「何十年も毎日人の服を選ぶ仕事をしているとその人がどんなところで働いているのか

ふだんどういう服を着ているかが分かるんですって！　すごいわよね！　私は離れたところから聞いただけなのだけれどあのときにもっと聞いておけばよかったって……ええと何の話だったかしら？　あ、そうそうそれでねそれでね？　中でも私みたいに臨時でたまたま応援に来ていた……あ、あのときに人手が足りなかったのは何故かは分からないのだけれど働いていた人たちの半分近くが一気に熱を出して休んでしまったんですって、変よねえ？　あ、えつと……あ、そうだわ、その不思議な人……って言うても、もうおばあさんに近いくらいのお年なのにハキハキしてとてもそうは見えないくらいに若く見えたのだけれどね？」

「……………」

「……………」

よくそれだけ口が回るなーって見てたら急に動きが止まって、何だろうって思ったら座り直して圧迫感が引いていく。

一気にまくし立てて疲れたしい。

そりやそうだ。

イスにすんとって座った下条さんは紅茶を少しだけ飲んで「ほへえ」ってため息をついている。

……話がぶつ切りっていうか横に逸れたりしていて気になるけどうるさくなるより

は静かなほうがいいし、このまま適当な話題に戻ってほしいな。

本当に何となくで聞いただけだな。

さつさと食べてさつさと解散って流れにどうにかして持っていきたいところ。

そう思った矢先にウエーブの子はとんととカップを置くと、さつきみたいに腰を浮かせては来ないけど上半身だけでぐぐぐと近づいてくる。

僕も合わせて引こうとしたけど背もたれに邪魔されて無理だった。

……ここのイス、肩までもないはずなのになあ……つくづくの小ささよ。

またまたの圧迫感で「あ、逃げるのも逸らすのもムリそう」って悟る僕。

「それでね、その人はオーラっていうのが見えるらしいの！ テレビでたまに見る超能力みたいなものかしらね！ よく分からないんだけどその人がね、響ちゃん聞いている？」

「……はあ」

目を逸らした一瞬を目ざとく指摘されて目線すら避けられない様子。

「良かったわ、でね？ その人がね？ 響ちゃんが入って来ようとしているときから

ひと目で！ たったのひと目でよ？ 『あの子は普段からずっと相当の人の視線を集めて

いる子だ』って言い出したの。それも、店の外でフードを被っていたときからよ

!? すごいわよね!? それだったから途中までは半信半疑だったみんなも、響ちゃんの

顔と髪が見えた瞬間から他の人もはしやぎだしちゃってもう大変な騒ぎだったのよ！

……あ、もちろんお客さんたちに気がつかれないように静かに騒いでいたのよ？」

聞かないと終わらなさそうだから話を斜め聞きするのは得意だ。

……ええと？

つまり？

どういうこと？

……

そのとんでもなくとんちんかんなことを抜かしおった人があのフロアを地獄に変えた元凶と。

よし、それだけ分かれば充分だ。

それだけのためにこんなにも熱心なんだな。

どれだけ話し好きなんだろう。

けどその元凶さんがいる可能性があるんだし、今日あっちに行つたとしたら地獄を見たかもしれない。

だとするとたつたひとりを相手にしている今のほうがマシなのかも？

……いや、甘味地獄だからどつちも変わらないか。

空間全体が甘さで包まれてるもんな。

男な僕にとっては完全にアウエーだ。

「そんな中で響ちゃんから私に声をかけてくれたじゃない？ 私てつきりそのオーラの人とか社員の人が相手をするものだと思うっていたからぜんっぜん意識していなくて！」

「オーラの人」

「あ、ちゃんと言ちゃんの子でも女の子でもどちらでもきれいなお顔と手入れの届いた立派な髪の毛は見ていたわよ？」

「そうですか」

「とにかくだから響ちゃんの相手をしているあいだずっとずっとみんなから嫉妬されちゃってていて！ あの視線はそれはもう怖かったわー」

「そうですか」

「部活の試合で、あ、部活って小学校でいうクラブ活動のことよ？」

「知っています」

「あら知ってた？」

「はい」

「そう。でね？ それの大きな試合で私がポカしちゃったときとそのときの仲間たちの視線よりもずっと怖くって。……ああ、今思い出してもあの体の芯から冷えるよう

な感じが蘇ってくるくらいよ！」



「そうですか」

「ええ！」

「そうですか」

僕はたたみかけてくる言葉にぐらぐらしながらbot役を務めた。

話の速度も話数も1対100くらいだろうしな。

加えて理解度もケタ違いだ。

だつて速いし速いし早いし早いもん。

「……………」

「……………」

つてというか話はそこでおしまいなのかあ……。

聞いていたつていうか半ば放心していた僕はこれだけのダメージを受けているのに、  
当の話していた彼女は「言い切った……！」つていう顔をしながらケーキを頬張つてい  
る。

つまりはどやっているんだ。

そのほつぺを両側からギユツと押してやりたい気持ちをこらえる。

でも僕は子どもじゃないんだし寛容になろう。

……それにしてもあれだけまあよく口が回るもんだ。

男女で口げんかをしてはならないとか言う感じの言葉の意味を魂から理解した。

これは僕でなくても勝てない。

彼女いたことないけど絶対そうだ。

間違いない。

もつとも彼女ができるなんて機会は少なくとも当面は失われているしどうでもいいか。

もともと欠片もその気がなかったのもどうでもいいし。

「彼女が絶対にできない」と「万が一にもできるかもしれない……けどしない」というのには天地の差がある。

将来的に元の体に戻ったとしても……万が一にもその気になったとしたら相手はきつと婚活つてやつで選ぶしかないだろうし選ばれないだろうし、そうなると彼女つて感じでもなくなるのか。

相手が好きじゃなくていろいろ考えた上でのそういう関係。  
両方が納得済みなら良いはずだ。

「……………」

……いや。

僕は両親もない職歴もないとてつもない地雷案件だから、どうかしてお節介な人

を探してのお見合いしかないのか……？

自分をアピールするのなんて苦手だし相手の話題について行くとか無理だし。

甘酸っぱい恋愛っていうのに興味は無いでもなかったけど……そもそも初恋すらま  
だだしなあこの歳で。

そんなものは僕の人生において来ないのかもしれない。

いくら恋愛マンガや心理学の本を読み漁ってもその気持ちがいまいちよく分からな  
いしな。

静かになったからかそんなどうでもいいことがぼんぼん浮かんでくるかと思ったら、  
JK下条さんはまたメニューを眺めはじめ、ひとつひとつを指しながら味について語  
る。

そんな口元を見ながら僕はぼんやりと思う。

たいしたことは言っていないみたいだし語尾が上がってから思考を戻しても間に合  
いそうだな。

口と頭が直結しているんだろうか、女性っていうものは。

もしかして僕もそうならないといけない……？

今のだけで普段の僕の会話量の1ヶ月ぶんにはなるんじゃないだろうか。

すると同じようなおしゃべりの人と丸一日話していれば、すぐに1年ぶん。

「……………」  
早く男に戻りたい決意が固くなっただけだった。

◇

飛び飛びでしか理解できなかったけど、要するにそのば……おばあさんがとち狂ったことを言い出したせいで、僕があの場合限定でものすごく目立っていたらしいのは分かった。

そのおばあさんのせいで。

……絶対にヒマつぶしで適当なノリで適当なこと言っただけに違いない。

そのせいで同じくヒマだった店員の人たちの悪ノリが過ぎたんだろう。

で、バイトの初日だったこの子がそれに乗せられてしまったと。

なんだか天然っぽい雰囲気だもんな、この子。

からかいたくなるのはよくわかる。

胸でかいしな。

けどその場の雰囲気ってバカにできない影響力があるからしょうがないかも。

だからお店に並んだりするサクラっていう古典的な手がいまだに通用するんだし。

静かなこの瞬間を少しでも長引かせるため、僕も残っているケーキとすっかり冷えているコーヒーをちみちみと胃に収める。

甘ったるさと苦さが交互に来る。

飲まなきややつていられない。

しかし苦みは甘みに負けてきている。

まずい。

この先が厳しそうだ。

あ、今度コーヒーリキュール飲もうつと。

……しかし女性はおーラとか運命とかそういう非科学的なもの本当に好きだな。

さつきちらつと目にしたただけだけど、こんな賃料の高そうなところにも大きな占い屋みたいなのがあったくらいだし。

あそこにだけは連れ込まれないように気をつけよう。

でも、おーラとか占いか……普段静かすぎるのが嫌いだからテレビをつけっぱなしにしていることが多いけど、朝とお昼と夕方のおいだの時間はそういう系の番組とかCMとかが多いもんな。

ターゲットが完全に分かるってものだ。

だけど僕は普通の感性的な普通の男。

そういうのが完全に外れているって知ってる。

そんなの僕だつて適当に言えるもん。

なーにが人目を引くだ、フード被つてて分からなかったくせに。

とりあえずで元凶のその人に向けて邪念をありつたけ飛ばしておこう。

こちとら少なくとも丸2年ほぼ完全に引きこもつてからの半引きこもりなニートをやっているんだぞ？

偉くないんだぞ？

僕に負ける人間なんてそうそう居ないんだぞ？

今の容姿ならともかく普段からずつとつていうのは完全なデマでしかないんだぞ？

そもそもほとんど見られてなんていないんだからな。

そのためのカーテン締め切りひきこもり生活で苦労したんだ。

まったく、すがすがしいほどに真逆のことを言う人だな。

けどニートつて言うのはいささか評判が悪い。

ニートじゃなくつてその人が言うみたいにとこそのお嬢さまとか芸能人とか……いや、見方を変えたなら……ダメだな、あまりにも、あまりにもしよぼすぎる。

僕はしよげた。

僕の価値の余りの低さを考えると男に戻ったあとの人生が悲惨でしかないって分か

るから。

「それで？ あのときは店員という立場があつて聞けなかったけれど響ちゃんの正体は何かしら？ 私は多数派のお嬢さま派だったんだけど」

「多数派」

多数派とは？

「そうよ！ だつて自分からお店に服を選びに来るような子が、どう見てもサイズが合っていない変な服を着ていて！」

「うぐ」

「なのに妙にそれが似合っていて」

「……？」

「しかも普通の女の子の服を自分で着るっていうのに慣れていなかったもの」

「む」

「試着のときもシャツがはみ出していたり髪の毛を挟み込んでしまっていたりリボンがほどけていても気にしていなかったし」

「ほう」

「おまけに……下着だつて！ あんなに安いのが買っちゃダメよ！」

「おおう」

「あらごめんなさい、こんなところでつい大声を」

大丈夫だ、他の女の人たち全く聞こえてないから。

耳がぴりぴりするくらいにうるさいからな、ここ。

けどよく観察されていたらしい。

こうしてまた会うつて思つてたら絶対あんなことしなかつた。

女物初挑戦だったんだからしょうがないんだけど……もやつてする。

ちなみにあのときの激安ばんつは全然よれてこないからまだまだ現役だ。

パンツなんて何年かに一回まとめ買い替えるものだし。

あの激安ばんつ、僕的にはトランク스에比べて柔らかくて守られている感がお気に入

り。

なかなかの掘り出し物だった。

やはりワゴンはチエツクすべきだな。

この子には不評みたいだけでも。

それにしてもそこまでよく覚えているな？

僕なんか今言われても「そうだったっけ？」ってなるのがあるのに。

まあ僕の記憶力は対人でなく対物特化だからつてもあるんだけど。

「そんな感じで着たつて言つて出てきて……そのまま私たちに整えられるのを待つてい



たのも証拠のひとつよ！ 両手を広げてじっと待っていたもの！」

え？

服屋つてそういうものじゃ？

「……………」

……違ったな、そういえば。

最近観たなにかの映画に影響されていたか……？

「おまけにカジュアルなものよりも綺麗系の服がぱつと見てとつても似合っていたし？  
 なんとというかしっくりくるというかそんな感じだったわっ！ だから響ちゃんが  
 帰ったあとで『あれはマネージャーの人とかメイドさんとかに毎日着せ替えさせても  
 らつてる』つて言い合っていたの。 あれは盛り上がったわー」

お、おう。

妄想たくましい。

「……………そうよ！ さつきも響ちゃん、車で送ってもらっていたじゃない？ あれ、お付き  
 の運転手の方だったりして！ そうよ、もしそうなら響ちゃんをひとりで歩かせるわけ  
 にはいかなから今でもすぐそばでSPの人とかが響ちゃんを守っていたりして

……………！」

「……………あ……………」

その話の流れからだと思事な推理になっている気がするな。  
こじつけもここまで華麗だとそれはそれでお見事。

「つー、やっぱりそうなのね!？」

どういうこと？

「どの人なのかしら護衛の方たち……」

いや、居ないって。

妄想は飛躍したらしくあたりをキョロキョロしだすおっぱいさんもとい下条さん。  
いやだってさつきまで視界の半分くらいに広がっていたし。

子供だから見ちゃ悪いんだけど占有率の高かったもんだからしょうがない。

おお、左右に体を動かすと本当に立体的。

目線のちようど正面で動く以上自然に焦点が合っちゃうのはしょうがないこと。

うん、しょうがない。

見ちゃうけど下心はこれっぽっちもないから安心して。

でも確かに状況的には……結果的に推理を重ねて状況だけを見るとそう思ってもお

かしくはない……のかも？

……探偵ものでも読んだらどうか。

たまたまな偶然な状況をどうにかこじつける辺りは才能がありそう。

中高生ってそういうのに一時的にはまるよね。

そう思うと生暖かい目になる僕。

かつて僕が通った道だつて思えば優しくなれるんだ。

でもやっぱりこの子の発想は飛躍しすぎている気がする。

よくもまあたつた1回だけ……いや、今日で2回か、不運なことに……しか会っていない人間にそこまでよく熱心になれるなあ。

さすがにほへへって感心する。

今日の僕はほへへってしてばっかだな。

この他人への興味の強さが将来的にママ友とやらや井戸端会議で発揮されることになるのだろうか。

そういえば学生のと きも噂とかつてまず女子に広がりきつて、そのあとに僕たちにも流れてきていたような気がするしな。

男と女、ここまで違うか。

けどこう思うつてことは、少なくとも今のところ僕の脳みそだけはまだ立派に男のまのの様子。

甘いもの苦手なものも変わらないしな。

そうしてまた、ちみつとビターな味と香りを楽しみながら時間が過ぎるのを待つ僕

だ  
っ  
た。

# 12話 苦手は、やはり、苦手 3/3

「お嬢様……憧れるわあ——……」

「……………」

僕が「そうだよ」とも「違うよ」とも言っていないし「勘違いもはなはだしいよ」とか「妄想癖あるの?」とか言おうとしそうになるくらいに勝手に結論づけてトリップしたらしい下条さん。

なんかこの子……いや、うん。

悪い子じゃないのは分かる。

無害そうなのも分かる。

なんにも考えていなさそうでもんな。

アパレルショップとかいう場所に生息していたんだから当然か。

勝手に決めつけられてちよつとだけささくれだった僕は心の中で軽く罵ってみてから考えてみる。

この子に捕捉されてからって言うものほとんどずっと話しっぱなしで疲れたんだ、静かに見守ろう。

さて、この子の中で僕は「お嬢さま」らしい。

そんな存在今どきいるんだろうか。

いたとしてもどうせ僕たちみたいな人間は一生見ることもないだろうけども。

それにしても「お嬢さま」かあ。

単純にお金持ちで古い家系とかだったたりしたらそう呼べる人たちもいるのかもな。

いるって思えないけどいいないとも言い切れないからいるって言うことにしてみよう。

「……………」

ちよつと地価の高い場所を散歩するとやたらと広い敷地に植物をこれでもかかって植えてあって、車も2、3台あって家も横に広がったりする「いわゆるお屋敷」っていうものは結構見かける気がする。

古い造りのものもあるし、今風の上手く言葉にできないスタイリッシュさを表すような家もある。

近づくとすぐに感熱式らしいライトがついて監視カメラがいくつもあって目の前の道路が明らかにきれいな、ああいうの。

お金持ちは近所もお金持ちなのが安心するのかその近くにはたいてい同じような家が並んでいるし。

そういうところはなんとなく綺麗な感じだからなんとなくぶらつくのが好きだっ

たりする。

「ふむ」

……そういうお屋敷を持つお金持ちの家って大抵お家の事情とやらを抱えているよな？

もちろん創作とか、現実であるとしても僕たちとは縁のない階級の人たちの世界の話限定だろうけど、そういう家に生まれた女の子なら「お嬢さま」でもおかしくないかもしれない。

せつかくそう思い込んでくれているんだし多少細かいことに突っ込まれて答えられなくても「そういう家だから言えない事情がある」って言えばなんとかなりそうなお嬢さま」。

そういうのは「じいやから言っちゃダメって言われてるの………」みたいな？  
うーん、想像力が足りない。

そういえば「じいや」って本当に言うんだらうか？

外国ならなぜかセバスチャンって決まりがあるらしいけど。

それでもない？

「響ちゃんはお嬢様……深淵の令嬢……」

……この子が頼んだケーキに入っていたアルコールで酔っ払ってるのか？

そう思うほどのだらしな顔つきだ。

まあ相手しなくてよくって楽だしどうでもいいか。

体が変わっているっていうやんごとなき事情があるっていうのは事実だし簡単には人に言えないっていうのも本場で、お金が……今は使えないけど、どうにかすれば使えるお金が普通の人よりはあるのもウソじゃない。

おこづかいって言えばおこづかいなんだからな。

そう思えばあながち嘘でもない気がしてきた。

僕が中学のときに両親がうつかり死んじやったんだけど、そのときにワケのわからぬ額の見舞金<sup>みまひき</sup>が誰か分からないけど合法的らしいところから振り込まれたりしたとかいういわく付きのお金だしな。

その原因の事故が一切報道されなくて、そのことを言ったりしないって紙に書いただけで金額が倍になっていたりとかしたしな。

あとついででいろいろめんどくさくなつて引きこもっていたこととかも含めたら「人に言えない事情」ってことになるのかも。

家の事情＋僕自身の事情。

グレーではあるけどウソじゃない。

嘘じゃないならそこまで気に病むこともない。



じゃあ使っておこうかな。

……この子、答え聞くまで解放してくれなさそうだしなあ……。  
へんなうめき声が聞こえなくなったから顔を上げると合う視線。

「……………」

僕が答えを口にするのを待ち望んでいる様子のじーつと見てくる探偵下条さんを見返す。

「えっと『そんな感じ』です。 普段は制服と、……限られた服しか着られないので」  
男のときのそばだぼシャツかあのととき買った服をヘビーローションしてるだけで。

「でもお仕着せの服は嫌いなので自分で選びたいと言って無理やり出てきたところ……  
だったのだから」

お、なんかそれっぽいのがするって出てきた。

煮え切らない感じになったけどどうまくごまかせたはず。

きちんと名詞を使わないでふわっとした感じでごまかすのは得意だ。

よく行く旅行先とかでどのくらい滞在するか答えたり年齢を答えたあとで「ところで  
お仕事は？」って聞かれたときの返事をさつと返すために鍛えた話術。

それを元に適当な話しについていくのも含めて虚飾が得意になったって言う悲しい僕だ。

「やっぱりそうなのっ！ ……でも、あら？ この前はお兄さんの服を着ているって言うっていたわよね……？」

「む」

おっと、早くもほころびが。

あのときそんなこと……言ったっけ？

覚えていないけどこの子が言うのなら言ったんだろう。

まずいな。

というかなんでそこまで詳しく覚えているんだ。

どうしよう？

……………。

「あれは……。普段は汚せない服だけしか。しかも決まり切ったものしか着られないので、好きにしているときはああいった楽な格好にしているんです。だから『綺麗』とは真逆の兄が昔着ていた古い格好を……あの……」

あつという間にしどろもどろになってなにがなんだか分からなくなってきた。

困ったな。

綿密な設定がないからこうしてあいまいこの上ない答えしか出てこない。

僕がお嬢さまだとしたらその兄はお坊ちやまなわけで、そうなるとそのお坊ちやまなお兄ちやまもまた相応の服をふだんから着ているはずで。

……ちよつと時間があつたならそれなりの設定を練っておけたんだけどなあ。

やつぱり僕に嘘は似合わないらしい。

けど言わなきゃ行けなさそうだったんだからしょうがないよね。

「……よく分からないのだけどお嬢さまも大変なのね？ いいことばかりじゃないのかしら」

どんな反応が返ってきて突っ込まれるのかびくびくしながら前を向くと……ケーキを熱心に頬張る髪の毛くるんさんが。

「……………」

もむもむと口元だけが動いている。

「……………」

………今の僕の苦勞は一体。

お兄ちやま設定を考える手間が省けたから助かったけど、できたら興味を抱かないで欲しかった次第だ。

どう聞いても苦しい答えだったはずなのに途中からケーキに興味に戻っていた様子。

さつき話しているときもケーキ、ちらちら見ていたしなあ……好奇心も強いけどそれ以上に食欲が強いらしい。

いや、いいんだけどさ。

さつき以上の興味なくなっているみたいだし。

もくもくもくもくと食べ続けるくるんJKさん。

せっかく静かになったんだし、今のうちにさつきと食べ切つて帰りたいアピールをはじめよう。

通じるかは分からないけどな。



「おいしかったわね——……はふ」

「……………」

「久しぶりだったけど味がぜんぜん変わっていなくて嬉しかったわ。 おこづかいが足りるのなら毎日でも来たいくらいよ」

カロリーと食費が大変そうになるんだけど大丈夫なんだろうか？

「でもさすがお嬢さまなのね！ ブラックカードなんて私初めて見たわ!!」

お腹をなでさせる、心なしかもつと全体的に大きくなった子が心配事のなさそうな声を発する。

太りそうとか言ったら絶対に怒るだろうけど、でもこうして視線が低いとどうしても他人のお腹と胸あたりがいちばん目に入りやすいもんだから……その、わりとぴっちり目に着ている服のお腹周りがどうしても気になるんだ。

でもさすがの僕もそれを言わない程度には常識を持っている。

ニートだからとは言っても成人男性なんだからな。

肉体は幼女になっているけども。

今の身長差は頭2個ぶんに迫る勢いで胸や腰は小数点以下との比較だからかなりのもの。

脱がなくてもすごいってやつだ。

学校で男から人気だろうな。

顔も整ってるから同性からの嫉妬はすごそうだけど……脳天気だから平気そう。

体重も倍近いだろう。

何かあつたら押し潰されそうだ。

まあ僕が小さすぎるんだし、別に太っているわけでもなくって単純に身長に釣り合っている感じ。

僕としても女の子はこの子くらいはしつかりした体じゃないと興味すら湧かないもんな。

興味が湧くには10年くらいは幼すぎるけども。

理想を言えば僕より年上で頭がよくて回転が良い人が好みだ。

ちようどこの子とは頭の中身が逆方向のタイプってこと。

つまりこの子は完全な対象外ってことで安心する。

それにしてもさつきからブラックカードを連呼して幸せそうだ。

これ、ただの黒いデザインなだけの無職でも作れるようなカードなんだけど……幸せのままにしてあげよう。

ほぼ無地に金の印字とか言うカードを滅多に目にするのがない学生にとってはマングとかでよく出てくるブラックカードといっても差し支えないかもだしな。

まあ僕はなにひとつ言っていないんだし勝手に勘違いするぶんには心にも来ないからいいや。

カードとか学生にとつては大学に入るまでは縁のないものだし。

「でも響ちゃんの残っていたケーキ、けっこう分けてもらってごめんなさいね？ とつてもおいしかったけど……無理に誘ってしまったかしら？」

「いえ、僕は少食なので」

お昼を食べるつもりでいたのに期待していたのとは違う方向の食べものが来てしまったせいとか、どうやら僕の小さくてもっと繊細になった胃はケーキとかいう砂糖のかたまりを受け付けなかったみたい。

それを見つめていた彼女に「いる？」って聞いたたら「いる！」っていうから餌付けし  
ておいたんだ。

なんだかデジャヴだけど最近の学生はこういうノリなのかなって納得しておいた。

……けど甘かった。

まだ口の中できどき残っていた砂糖成分が出てきて「じやり」ってする感じがする。  
口そのものが甘くて困るって言うわりとレアな感覚でわりと困ってるんだけど？

ほっぺの内側に妙な感覚が残り続けているんだけど？

どうしてくれるんだろう？

僕とスイーツとやらは壊滅的に相性が悪いらしい。

……あとで無糖の缶コーヒー、自販機でも買って適当に飲んでから帰ろう。

いつそのことエスプレッソをぐつとやってリフレッシュしたいまでである。

ちらりとワガママポディって感じの発育が脳の発達を追い越してる系の幸せそうな

彼女を見上げる。

ほぼ初対面な話が終わって食べ終わって満足して気が緩んでいるのを確認。

甘味で顔がとろけたままだしちよつとアレな子にも見える。

けども人つてのは見た目で決めちゃうクセがあるもんだから、雑誌の表紙に出てもおかしくなさそうな体にくつついて顔がとろけていても通報されるには至らなさそう。

世の中つて不平等だな。

そんなのは男だった僕がよく知っている。

「……………」

理不尽に拘束されていた不条理でちよつとだけささくれだつている気がする。

ここまででき下ろさなくても思つて思うし、幸せな子つて思つておくだけにしよう。

でもこのまま話が続くとさらに疲れそうだし、そろそろ逃げよう。

店から出たばっかりつていう良いタイミングだしな。

この機を逃したら……例えばまた服屋で着せ替え人形にされたりしかねないもん。

「それでは。これから行くところがあるので僕はこれで失礼しま」

「あら、これから何か用事？」

「はい、これから夏物を見る。……………あ」

何かがきらりつて光つたつて思つたら目の前に胸が迫つてきてぽよんと押しつけられてぽよんと離れて、次にはかがんで来たらしくつて僕の目からほんの20センチほど



のところに胸さんもとい下条さんの、顔だけ見れば中学生にも見える童顔がどアップに。

シャンプーの匂いがする。

あと両肩もしっかりとつかまれている。

もはや逃れられないらしい。

きつと今の僕の目は曇っているだろう。

「……………じゃあ今日も、いえ、今日は私が！ 服を……………響ちゃんにお似合いのお洋服を選んであげるわ！ 今年の流行はかわいいデザインが多いのよ！」

「………………………………………??」

「この前は先輩たちのオススメを優先して試着してもらったせいで私がいいなーって思ったデザインのもののはあんまり試してもらえなかったのよ！ なによりあのときは たったの1軒でしか試せなかったでしょう？」

「………………………………………??」

1軒でしか？

普通服は1軒のお店で買うものでしょ……………？

違うの……………？

「あのときはあのお店の店員だったんだから仕方がないのだけど……………でも別のお店のプ

ランドだったらもつと似合いそうなデザインが合ったのにーって、ずっと気になっていたのよ!!」

「いや別に僕は」

「だから今日は私がプロデュースして綺麗過ぎなくてお洒落で可愛い服を探してあげるわー」

話を聞いて。

そう思う僕にNOを突きつけるようにして至近距離にある口からケーキと紅茶の匂いがまとめて飛んでくる。

あとびっぴってつばも。

きちやない……。

でも、まずい。

つばのことじゃなくって、この状況が。

この流れはまずい。

とても非常に極めてよろしくない。

口を滑らせたシヨックから復帰した僕でさえ分かる。

なんとかしたい。

なんとかしないと……!

僕は鈍い頭を懸命に回転させる。

「……いい、いえ。時間もかかるでしょうし、あのおときもご迷惑をおかけしましたし、これ以上は」

「迷惑だなんて！ むしろかわいい子の着せ替えができていろいろな洋服を着ている姿を眺められて選ぶことができるんだから私にとってはご褒美なのよ！」

どうやって息継ぎしているんだろう。

「そうよ！ さつきもケーキ、結局半分近く分けてもらっちゃったしそのお礼にもなるし！ あのとときには私も楽しかったのだしそもそも店員としてのお仕事だったのだから、なにも気にしなくてもいいのよ!？」

「いえ、でも」

「私、今日は学校の……えっと何だったかしら……とにかくくなにかの記念日でお休みだったから、通学路を歩いていても空いているなって思ったら校門が閉まっていてがっかりしたし、せっかくお外に出たのになにもすることがなくなってしまうてぶらぶらしようって思っていたところだし、だけどおはなしする相手もないからつまらないしこのあとは帰るしかなくてーって思っていたから予定がないの！」

どうやって呼吸してるんだろうこの子。

生命の神秘だ。

それに重い。

肩に加わる力と体重が僕を抑えに掛かっている。

なんとかして逃げる口実を考えようとするけどまくし立てられるとその処理で頭が追いつかなくなつてなんにも思いつかない。

ラグつてる。

おかげで今の僕はちよこんつて固まっていることしかできない。

「服を選ぶのつてとつても楽しいもの！ 私はその、体型的に似合わないものが多いし、これいいなつて思ったものがあつても諦めることが多いの。だけど響ちゃんならちよつと子どもつぽいものが多くなるのは仕方ないけどそれでもいろいろなデザインが合いそうだし！ 今から楽しみね!!」

「あ……ちよつと待つ」

いつの間にか肩から腕へとつかまれている場所が変わつていて連れて行かれはじめている。

なんとかしてほど……けない。

痛くはないけど絶対に離れなさそうなそんなホールドをされている。

なんか武術でもやつてるんだらうか？

絶妙な力加減を……じゃなくなつて。

「……………はなして……………」

なんとか勇気を振り絞って伝えようとしてみてそつと目線を合わせようつてした。

……………けどそのあいだにもひとり言が続いている着せ替え魔さんの耳には届かないよ  
うで、すでに目の前にはエスカレーターが迫つていて引き返せなくなつていた。

つて言うか僕の声……………小さすぎてアナウンスとかの環境音にかき消されているな、こ  
れ。

だつて焦ると声が出なくなるのは昔からだもん。

「早速行きましょう？　まずはフロアをぐるつと回つて響ちゃんに合いそうなデザイン  
のお店を確かめてそれからひととおり試着よね？　そのあとに……………」

あ、ダメだやつだこれ。

またしてもデジャヴな感覚。

どうあがいても何を言つても、もうムリな段階に入つているやつ。

……………なるほど。

これがダメな「オーラ」つてやつか。

僕はひとつかしくくなった。

対価は僕の尊厳だ。

エスカレーターで下に運ばれ始め、振り返つて話しかけてきている下条さんの目線の

方が高くって……つまりはエスカレーターの段ひとつぶんよりも身長的に負けているのを知って、確信する。

体格差は圧倒的だ。

もう逃れられない。

「……………」

やっぱり外は恐ろしいところだ。

引きこもるのは僕の本能だったんだ。

だって、この体で外出するとほぼ100%、こうしてひどい目に遭うんだから。

「次のフロアよー… 楽しみね響ちゃん!!」

「はい……………」

僕はずるずるとどなどなされていく。

もはや抵抗する気はなくなった。

もうどうにでもなーれ。

そうして限りなく抵抗を失った僕はされるがままの人形だ。

「……………」

今日もまたお人形さんをするだけで僕に合う服を選んでくれるんだ。

悪いことじゃない。

頼んでもいないし迷惑だけだな。

かといって、このまま振り切って逃げるほどの気力も残っていないし……たぶん体的にもムリだろうし。

……………断れないっていうの、本当に早く治さなきゃなあ。

高校生相手にNOってはつきり言えないとか恥ずかしすぎるもんな。

## 13話 取り戻した（非／否） 日常 1／3

「……………んむ」

一瞬で目が覚めた系の目覚めを感じる。

昨日の夜からワープしてきた僕は嫌でも子供な肉体に吸い込まれた。

……そんなことを考える程度には楽しい夢を見ていたらしい。

けど夢ってのは儂いものだから内容はぜんっぜんかけからも覚えてはいない。

でも目が覚めたのに気がついたときには鼻からぴすぴす言ってたし、きつと楽しかったんだらう。

なんで夢って覚えていられないんだらうな。

「びす？」

……………。

カゼかかって思ったけど鼻づまりじゃないらしい。

ただ鼻息が荒いだけだった。

良かった。

良かったんだけど良かったないようだったみたいなだけにその内容が散逸したのが



悔やまれるところ。

眠気を払うために体をもぞもぞとさせると腕や太ももからシーツや毛布とすれる感覚が伝わってくる。

……気持ちいいなあ。

適当に体を伸ばしながら「うー」とか「あー」とか本能のままに出るままにうなつているうちに目が覚めてきた。

こんなの男だった頃には間違つてもしなかつたけど今じゃ抵抗感ゼロでやってのけている。

だつて幼女だもん。

精神は肉体に引つ張られるんだからしょうがないんだもん。

そんな言い訳。

もぞもぞしているだけで気持ちがいいのは触覚が鋭いこの体ならではものだろう。

暗いけど周りにははつきりと見えるっていう近視になつてない視力の特権をかみしめながらベッドの横の時計のスイッチを切つて、今日も目覚ましに勝つたつていうちよつとした嬉しさを感じながらベッドでごろごろする。

「あ……………」

こういうのつて幸せ。



髪の毛を自分で切ろうとしたすっぱだかの僕に向かつて……いや僕にじやなくて壁に向けてハサミがすつ飛んでみじんになった、あのときのあの怖いのに。

そのときに読んでいた本のどこかに似た言葉があったから僕は勝手に「ハサミ事件」とかものすごく適当なネーミングで呼んでいるけど、あの魔法の力を再確認することになったあの時期は大変だった。

家に引きこもれば刃物が襲うわ外に出たら強引な人たちに付きまとわれるわ。

ニートに無茶な難題だったって思う。

でも、そんないろいろがあつてすっかり疲れていたけど季節はもう梅雨。

じとじとと静かな空気でこれだけじとつと休んでいれば充分にエネルギーも戻ってくるというもの。

雨って良いよね。

きのこが生えそうなくらいの湿度で静かな雨の音を聞いて雨の匂いを嗅ぐのが好き。

そんなわけで僕は元気になった。

だっているいろいろ吸われてたんだもん。

口と体が動く人と一緒にいると……なんというか生命エネルギー的な何か吸われる感じしない？

エネルギーっていうか気力とかMPとかそんな感じのもの。

目には見えないけど確かにある感じのそんなもの。

ああ言う人たちに言っても意味分かんないだろうけど僕の仲間には分かるだろう。

僕は今までけっこうな科学信仰で不思議な力とか幽霊とかはまともに取り合ったこともなかったんだけど、実際にこんな目に遭っているわけだ。

僕の中で見て肌で感じている以上には信じないわけには行かない。

昔の偉い哲学者の人もそう言っていたもんな。

でも、そういう吸ったり吸われたりするエネルギー。

魔法を使える人たち……いるのか分からないけど、そういう人たちならはっきり分かるんじゃないかな。

魔力とかSPとか行動力とかそういう概念で表現される何か。

ゲーム脳に支配されている気がしなくもないけど存在するのは間違いないって思う。

完全なフィクションだったらゲームだってあんなに熱中できないわけだしな。

そう思うと僕的な人間はきつとターン制ゲームで生きていて、JCさんとかJKさんとか勧誘悪魔さんとかはリアルタイム制ゲーム。

つまりは人種が違うんだ。

ゲームシステムが違うんだっつらしようがない。

うん。

そんなどうでもいいことは置いておくとして、とにかく「人に会う」っていう僕にとっては極めて辛い目に遭って苦労したのは外に出たせいだ。

夏服をいっぱい買わされてへとへとになって帰ってきて歯も磨かずに泥になって眠ったんだから僕にとっては大変なことだったんだ。

きつとあの人たちには分かるまいこの苦労。

魔法でこの体が変わってからの9割以上の時間は今まで通りに平和なんだけど、家から出ると必ずと言って良いくらいに何かしらに巻き込まれるのが分かる。

僕にとつて他人に構われるって言うのはこの上ないストレスなのに。

実際にあれからちよこちよこ外に出てみたけどみんな無視してくれないしな。

やっぱ子供の子供の見た目っていうのは興味を引きやすいらしい。

当然か。

その辺を歩いているだけでもしよつちゆう誰かに声をかけられるもんな。

男だったときは勝手がぜんぜん違うんだ。

なるべく子供がうろついても不審じゃないタイミングと場所を狙ってちよこつ

と出歩いていても……特に女性からは頻繁に話しかけられる気がするし。

女性といっても子供が居そうな母親とかおばさんとかおばあさんだけ。

意外でもなく当然だけど男は目が合っても話しかけてこないことが多い。

くるのはたいてい通学路での見守りの人とか同じく子どもがいるらしい人とか、そのくらいだ。

あと公園のおじさんとかおじいさんはフレンドリー。

なぜかは分からないけどジュースとかお菓子をくれようとすることもある。

赤の他人から何かをもらった経験なんてそうそうないし「親からダメって言われてる」って断るけども。

犯罪の臭いはしないけど……なにしろこの体だ、悪いことしようとしてる人に近づかれても困るしな。

ずーっと家にいると神経がおかしくなるから、そうならない程度に散歩とか買い物程度に……こそこそ出る感じに人目を忍ぶ生活を続けたおかげで季節は過ぎて梅雨。

「……………」

……やっぱりニートしていても幼児になっても時間が過ぎるのは速いよなあ。

まあ本が読み切れないほどにあつて映画が観きれないほどにあつてゲームもネットもあるんだ、よっぽどのことがなきゃ退屈で死にそうとかないよな。

でも梅雨はいい。

低い雲と暗い空と雨のための傘やカッパとかで自然な形で姿をぼんやりさせられるから。

おかげでわりと軽装でも女だってばれないからいちいち気にせずに出られる。

そんなわけで最近の僕の生活は結局は普段通りだ。

幼児になろうがハサミが乱舞しようが僕って人間が変わらないんだからな。

おかげで今日も快適だ。

「……………ん……………」

……………そうして現実逃避してたけどそろそろ現実を見なきゃいけない。

そう決心した僕はごろごろしながら見ていたスマホの通信アプリを起動する。

びこびこびこびこつて音が鳴る。

僕はびくつてなる。

「……………」

見たくないから普段は落としているそのアプリの画面には20ばかりの新作。

……………やだなあ。

見たくないなあ。

けど見るって言っちゃったからなあ。

やだなあ。

めんどくさいなあ。

とことん現代社会の情報交換密度に不適応な僕はしぶしぶでチャットなアプリを開く。

教えてしまったアドレスからどぼつと来るメッセージたち。

まるでスパムだ。

けど現実で知り合いになっちゃった相手からだから無下にもできない。

僕には知り合いを無視する度胸なんてないんだ。

スパムな方がマシなまである。

一晩でこれだけ増えるのはいつものことだけど「本当にヒマなんだなー」って思いながら目を通していく。

まあ学生っていう会話をしたくてしようがない生き物相手だからな……しかもJ Cっていう存在。

どうでもいいことばっかりだけどとにかく送ってくる送ってくる。

しかも自分から「メッセージが多すぎるから流し見で！」とか言うだけあってとにかく雑多でどうでもいい感じに会話にもなっていないひとことだらけだ。

たまに長文もあるのが困ったところ。

どう返事すればいいか分からないから2、3日に1回、それもものすつごく適当な返事しかしないけど、それでも量が減ってきたりしない。

知り合いみんなに同じような事をしているのかもしれないな。

SNSとかで間違つて学生らしき子のアカウントからフォロワーされたときみたいなライブ実況的なとりとめもないことしか言っていない。

昔のメールだと1通送るたびにわずかながらもお金がかかっていたけど今や何でも無料な世界だ、そのへんのハードルは下がりに下がっているんだろう。

すつすつと読んで行つてすいすいってしておしまい。

終わつちやええ何てことはなくても終える前の始めるのが大変つて言うあれ。

「ふう」

スマホの音をオフにする必要ができたけど、それ以外には特に変わらない……平和な素晴らしい僕の家のなかだけで完結する生活。

生活リズムもすつかりと元通り。

素晴らしい毎日。

「……くあ」

ああ、この。

外ははじめじめじとじとで蒸し暑い中、こうして家の中でエアコンを強めにして除湿



でからからにして暖かい毛布を被ってごろごろする。

最高の生活だな。

できればこのまま平和な感じで成長するまでの数年を過ごしたいものだ。

お金の心配さえなければ老後までお願いしたいところ。

やっぱりニートになるには素質が必要なんだ。

幸運にも僕にはその素質があつたからこうしている。

何も不安のない素敵な時間。

あとはただ、男に戻れたらってだけだ。

◇

最近になってようやく取り戻した最高の1日はいつもこんな感じ。

朝はできるだけだけ日の出の少し前に起きるようにして夜早く寝付けるようにする超健康的なやつだ。

かつての引きこもりな時代みたいに昼夜逆転な生活で自律神経と頭と体がおかしくなるのは勘弁だし、普通の人とかけ離れちゃった結果に世間っていうものを理解できなくなるのを防ぐためのルーチーン。

興味ないからってニュースとかまったく見ないで映画とかドラマとか本ばかり読んだりゲームばかりしていると、ふと僕だけが世界から取り残されたような感覚になるもんな。

さすがの僕もあれには困る。

知らないあいだに大きな事件が起きていたり知らない造語が流行っていたときの衝撃といったら……それはもう計り知れない。

もう何年かで「お兄さん」って呼ばれるのから「おじさん」って呼ばれるようになる僕でも、一回でもそう呼ばれるまでは「お兄さん」で居たいんだ。

……今は「お嬢ちゃん」って言うのは……うん、しょうがない。

で、規則正しい生活っていうの、学生時代は強制的にあつて当たり前のものであったから気にも留めなかつたけど、いざ好き勝手にできるようになって好き勝手にするとそれはもう恐ろしいことになる。

普通の人なら長くたつて4年の大学生活でおしまいなそれは……僕にとってはこれから死ぬまで永遠に続く時間。

ニートをするには自制した生活が不可欠なんだ。

その辺を普通の人は理解できないんだもんな。

ある意味こっちの方が大変だつてのになあ。

ニートをちよつとでいいから尊敬して欲しい次第。

あと戸建てなもんだから朝早くのゴミ出しも地味に大切。

回つてくる回覧板も町内会費も僕は文句も言わずに受け入れている優等生。

言うこと「はいはい」つて聞いてれば注目されにくいもんな。

前からニートつて言う負い目があつたから続けてたそれも、今となつては立派な隠れ  
蓑。

どれだけめんどくさくて意味のないものだったとしても守つておかないと目をつけ  
られる。

いちどでも疑惑の目が向くとたちまちにして注目的になるのが悲しい事実。

ご近所は怖いもの。

町内会はもつと怖いもの。

「ねえお兄さんちよつとジャンプしてみてよ」みたいな感じのカツアゲみたいって思  
けど、たかだか年に数千円だ、きちんと払うに限るもんな。

「……………」

……次の集金はどうしよう。

ああ言う人たちつて日曜日の早朝とかに予告無しで来るからなあ。

「町内会のです」とか封筒に書いておいてお金置いとくしかないよなあ……。

今の僕が出るわけには行かないしなあ。

こんなにかんばって隠れてるのに素直に家から出て「お巡りさんとこ行こつか？」って言われるとか悲しすぎるもん。

だからゴミ出しもかんばってるんだしな。

前日に出してもダメ夜中もダメなもんだからかんばって早起きしてるんだから。

まあ早起きって習慣だし慣れたらどうってことないからいいけど。

で、早くに起きて……ぜんぜん汚れはしないけどなんとなく気が済まないから顔をじゃぶつと洗って、長くなってしまう髪を時間をかけて梳いたりして整えて、服を選び。

そういえば地味に乾燥しやすくなっているらしいもんだから、こんなはじめつとしていても化粧水というものトリップクリームがないと肌がひりひりしてくる。

さぼると途端にひりひりするわばりばりしてくるわけではつきりと分かるから手が抜けないめんどくささ。

これが男女の肌の差なんだろうか。

それとも個人差の範囲で収まるものなんだろうか。

よくわからない。

「「うーうめんどくささと毎朝のひげそりとどっち？」って聞かれたら断然ひげそりを

選ぶところだ。

もともとそんなに生えなかったし2日に1回くらいで済んでいたしな。まあ鏡を見たときのきれいさで言えばもちろんこっただけど。やっぱり僕は男だから幼女と言えども女の子の方が良いに決まってる。

◇

さて今日の服はどれにしよう。

中身がごつそりと入れ替わったクローゼットの前で僕は考え込む。

予報だと重い梅雨にしては今日は珍しく晴れて気温は高め。

それなら白系統の……せっかくだしワンピースにしておくか？

男だった頃には迷うことのなかった服選び。

それに少しばかりうんうん悩む手間が加わった今日このごろ。

ほとんど外に出ることはないから別に気にしなくてもいいんだけど……最近は服を選ぶのがなんとなく楽しくなって来たしな。

名前は忘れたJKさんに連れ回されながら教わった服のコーディネートという概念を習得した僕は無敵だ。

完全な未知を既知にしてくれたからあの子には感謝……やっぱりそれ以上にひどい目に遭ったから無し無し。

要らない感謝をするところだった。

基本的な組み合わせっていうものを知っておいて飽きてきたらそれを自己流アレンジって方法がいちばんの基礎で、慣れてきたら流行りを取り入れるといいらしい。

服を脱いでは着てを繰り返すだけで2時間ほど付き合わされたおかげで「定番の着こなし」的なものを教え込まれてしまった以上、凝り性の僕にとつて毎日2、3着をただ洗って乾いたら着るっていう楽だった生活には戻れなくなつたとも言える。

世の中には知らなくてもいいものがいっぱいあるというのに。

ほら、知らぬがなんとやらとか言うし。

そのせいであのときに買ったものの他に通販で買い始めたせいで、春になってから買った女物の服がかつての男物の量をとくに越えている現象が起きている。

つまりは結構散財したんだ。

ひとつひとつは安くてもちりつも。

服って自分で選んで買うのがこんなに楽しかったのかって知れたのは大きいかもだ  
けど……ちよつと買いきすぎた気がする。

でもあのとき疲れ切ってたってしてたけどどうにかカウンターから買ったのを送

る機転を働かせられた僕はえらい。

ものすごくえらい。

「私が持つていってあげるから」「お家にご招待して」「ダメでもせめてお家を外からでも眺めたいの」なんていうのだけはどうかして抑えたからな。

あんな子が家に来たら一発でアウトだ。

ご近所的に。

ひとり暮らしの男の家に少女とJKが入るとどうなるかなんてその辺の子供だって分かるもんな。

しかもなんかすぐそような事情に見合わないただの一軒家だつてというのがバレるし。

いくらなんでも即日でついた嘘がバレるのは悲惨すぎる。

失望のまなざしとそのフォローこそ耐えがたいものはないんだ。

……む、今日はこれでいいか。

鏡の下半分に映っているのは、ケアをしているおかげでつやつと伸びる銀の長髪と前髪をそろそろ切ろうとして忘れていたのを思い出した眠そうな顔に、白のワンピースに黒のタイツ。

「うむ」

今日の僕は「お嬢さま」に見えなくもない。

タイツって暑そうだと思っていたけど、いざ履いてみると風がいい具合に抜けるから1枚多く着ているのに涼しく感じるんだよなあ……不思議だ。

ぱんつを履いているはずの股とお尻まですーすーと実に気持ちが良い。すべすべするから動いても気持ちいいし手で触っても気持ちいい。

とりあえずで春から秋までは快適な気がする。

材質が合わないものを履くとかゆくてかゆい地獄だけど合ったものを履くと快適なタイツ。

こういうところは女の方が良いなって思う。

男だところというのは無理だもんな。

ポーズを取っているときに理解した「しな」を作る感じにしてみる。

まるで僕じゃないかわいらしい子供がいるような錯覚を覚える。

……似合っているなあ。

JKさんが着せ替え好きなの、ちよつと分かった気がする。

この格好で外に出られないことがもつたいたくないくらいにはかわいいもんな。

幼いのもこれはこれで悪くないって思うし。

僕もなかなかにかわ

「……………」



僕はおもむろに頭を振りかぶって「ごんっ」と鏡に……ちよつとだけ痛い程度に打ち付ける。

……やばい。

ごんっごんっ。

最近思考が……今みたいになるもんだから、ちよつとまずい気がする。

頭をぶんぶんと振るのに合わせて髪の毛が傘のようにふわつと広がってぱさりと落ちるのを感じて目を開くと、細くなつた脚とちっちゃくなつた足の甲が黒いタイツに包まれている手前にワンピースの裾がひらひらしているのが見える。

ごんっごんっ。

……こんな格好で外に出て誰かに褒めてもらいたいなんてバカげたことをちよつとだけでも思うだなんて。

ごんっごんっ。

……こうして服を選ぶことでこれからカムフラージュしなきゃいけない女の子とか女の人な生活をちよつとだけでも理解できるようになってきたのは良いことなんだとは思う。

でも、それはそれ。

僕は男なんだ。

男だからスカートとかタイツに惹かれるのはしょうがないんだけど、それを自分で着ている姿を見せたいって思うのはやばいんだ。

しばらくのあいだ、僕の頭からはごんつごんつと音が響いていた。

## 13話 取り戻した（非／否）日常 2／3

もぐもぐもぐもぐとちっこい口を懸命に動かす。

だって口がちっこいんだからしょうがない。

「ひとくちサイズ」ですら見た目どおりなんだもん。

そうして僕はいつも通りに見るともなしのBGM代わりなテレビをお供にご飯中。

動画だと見るのに夢中になっちゃうから適当なのがちようど良いんだよなあ。

『先日からネット上で噂になっていた……………が』

『……………実だと、公式に発表されました』

『……………これは、ほとんど……………ないために』

『……………付かないことも多い、ということもありますので』

『実際には、……………だけで、もつと……………』

悲しいことに今の僕は幼女で、だから腰から上も腰から下も短い。

イスに座つてご飯を食べるにはクッションでかさ増ししなきゃいけないくつて、だから

座高は補える代償として足の裏は完全に宙ぶらりんだ。

子供用の高いイスは僕自身の男たるプライドで退けた。

だから脚を重力に引つ張られた感覚のままご飯を食べるのにもとづくに慣れていく。

気がつけば脚を交互に振つてしまうのだけはどうにかしたいクセだけど、まあそこまでのことじゃない。

貧乏揺すりとかイスを後ろに傾けてバランスを取りながらぼーつとする的なささいなものだもん。

他に誰が見てるわけじゃなしで僕は気にしないことにした。

「ちそうさま」

そんな感じで適当にテレビの画面を見ながら朝食を済ませる。

子供のころはこうして食べる前と後とかにお行儀良く教わったとおりにやつてた気がして、ひとり暮らしになったらめんどくさくなくなって止めていて……もういつかい子供になつたらまた出した。

だって前とは違つて本気で誰とも話さない生活だし。

そう思うと毎日の散歩とか食材の買い物とかで随分気が紛れていたんだな。

そんなことに気がついたのは全てを失つてからの話。

人間つてそういうもんらしいね。

「やっつ」

食べ終わってちよつとすると血糖値が上がってぼんやりしてくる。

何もかもがめんどくさがりでほつとくと何日もじつとり座り込む性質があるもんだから、さつさと家事を済ませちゃう。

家事って言っても生きるために必要最小限の身の回りのことだけだけだな。

凝ったことなんかしないし興味もないしなにより手が届かないし体力が尽きるし。

で、幼女だつて人間だ。

だから……まあ、その。

男のときほどじゃないけどでもやっぱりきちやないものとかが服に着いちやう。

洗つてない犬の臭いとかがして来ないように毎日洗濯しておくことにしてる。

けど今までみたいに洗濯物をベランダに干してもしたら近所の家からは干して取り込む姿が見えるんだし、それを運良く見られなかったとしても干している服は見られることになる。

……見た目はいつもの変装でまだどうにかならない気がしないでもないけど、風に吹かれる小児用ぱんつはアウトだろう。

特にお隣やお向かいからはよく見えちゃうんだし、しっかりと見ればぱんつが子供用のものだっていうのにも他の服もみーんなそれ用のものだってすぐに分かっちゃうに決まってる。

だって僕の方からお隣の奥さんとかお父さんとか娘さんの下着まで見えちゃうんだから。

いや、もちろんちゃんと見ないようにしてるけど。

いやいや見ようとしているんじゃない。

見ようとしているんじゃないよって、ほら、戸建てのベランダなんてみんなおんなじ高さなもんだから……それも5メートルは離れていないんだからどうしても視界に入るんだからしょうがない。

文句があるなら一軒家同士なのにベランダを向かい合うように建てた施工業者に言っつてほしい。

もつとも、こっちのほうが1メートル……50センチくらいかな……くらい高いから、かがんで干せばどうにかなりそうではあるんだけどな……油断は禁物だ。

そもそも年頃の娘さんがいるんだから……お隣の奥さんにはせめて見えないように隠していほしいところなんだけど、それを僕から伝えたら「あなたたちの下着、いつも見えていますよ……」ってやばいこと言うようなものだから言うに言えなくて早10年以上。

つまりはもう慣れっこだ。

僕も思春期は終わって余生を過ごす段階だもんな、目に入ってもどきどきすらしな

い。

でも、いくら家の前の通りからは直接見えないからってさあ……普通男、しかもひとり暮らしって言う属性付きの何するか分かんない僕に気を遣って見せないようにするでしょ……？

娘さんも娘さんで、中学か高校っていう敏感なお年ごろなんだから見られたら嫌とか言つてよ……？

天然っぽいお母さんだから君が気をつけなきゃいけないんだよ……？

……信用されているのか、そもそも男として捉えられていないのか。

きつと後者だろうな。

まあ僕もぎらぎらしたところとか無いって自覚してるし、そもそもとして僕自身がちつちやい頃からの知り合いって関係だからガードが緩いんだろう。

いつも見ているわけじゃないし大丈夫大丈夫。

干すときごくたまに視界に入っちゃうことがあるだけだ。

大丈夫。

最近は特に……いや、ほら、僕の真つ白なお子さまぱんつと比べちゃったりするしさ。

たまにうつかり派手なのを見ちやうと罪悪感で死にそうになるから、そういうときにはお父さんの下着を見て中和することでなんとかしている日常。

まー梅雨じゃそもそも外干しなんてできないから部屋干しだけどね。乾きが悪いと服がみんなじめっと臭くなるのが困る。

下手をすると洗わないほうがマシなときすらあるし……うーん。



「♪」

家事とかをしたらお昼までは読書とか勉強。

午前中はなんだかやる気に満ちているから意外とがんばれる気がする。

そんな中にびろんって鳴ったスマホ。

「……………」

しょうがなく画面を開く。

もう10回以上びろびろびろ来てるからな、既読にしとかないとしつこいんだ。

『こっちは中間試験が終わったばかりで、もう期末だよ……ほーんとめんどいよね』

『?』

『学生はなぜ勉強をしなければならないのか』

『社会の授業やるよりかストラテジーゲー配るほうがよほどためになると思う。ね』



？』

『あ。 私平均越えした！ ほめてほめて！』

JCさんからの学生らしいチャットに癒やされる。

しつこいけど。

「これ分かんないんだけど。 響はここ分かったりするん？」

「……………」

……………こういうのが困るんだよなあ。

『うーん。 僕は退院したばかりで中学の勉強がまだ追いついていないから、ちよつ

と』

『そっかー』

『じゃーしかたないね』

『あ、これそもそもチャレンジ問題だからできなくていいやつだ。 難関校のだって』

『ごめんごめん』

メッセージの割合はいつもだいたい1対10くらい。

もちろんあの子から10を投げつけられて僕が1を返すって言う感じ。

モチベーションにはなるからこうして勉強に関することだけは返しているけど基本

的には既読だけだ。

それでいいって言ってたもんな。

……にしてもここまで忘れているとはなー。

ぱらぱらと問題集をめくってたため息が出る。

いちど復習すれば思い出せはするんだけど……にしたって中2の内容だぞ……？

いくらなんでも受験も経験したしちよつと前までは学習塾とかでバイトをしていた

のに中2の内容をここまで忘れているのはまずい気がする。

成績も当時はよかったはずなのになあ……体育以外。

概要や大筋は分かっているけど細かい名前とかがさっぱり出てこないというあれが悩

ましい。

問題の形式は分かっているのに答え方も分かっているのに、その途中式とか公式

とかがすぐには浮かばないというあれ。

あとは細かい暗記系が壊滅だ。

って言うかさらつと僕が習っていない内容にすり替えられたりしてるもんだから余計

ややこしい。

知能指数の低下が著しい気がして危機感を覚える次第。

「……………」

脚をばたばたして気を紛らわせた。

僕はいつも午前をこうして過ごすんだ。

今までは、そのときにしたいことをするだけで時間とかで特にすることを決めていなかったんだけど……だって毎日が日曜日の生活が年単位だもんなあ……こういったJ Cさんの授業中に送られてくるメッセージを毎日眺めていたら「で簡単なものでもいいからなにか勉強しないといけないんじゃないかな？」って思ったから、最近はこうして懐かしい内容を見直して試している。

まあ社会人ってみんなすっごく資格取らされたりして毎日遅くまで勉強してるって言うってたもんな、僕もニートだから一応がんばってみようってことで一念発起。

……思い至るのが遠回りすぎだし、そもそも勉強するにしたって中学生のときの復習からっていうのもどうかとも思うけど……他にぱつとやりたいことが浮かばないんだからしょうがない。

やるだけマシだ。

うん。

子供になって指の筋力まで落ちているのと、そもそも手が小さくて感覚が馴染まないのとかから最近ゲームとかもあんまりしなくなってきたしな。

まあそのうち飽きるだろうけど、なんだか妙に物覚えが良いみたいだしちよつとがんばる。

子供の脳みそってすごいよね。



「ふう」

ひと仕事終えた僕は熱くなっていたコンロの近くから離れる。

お昼は2、3日に1回くらい料理して残りは作り置きのレストラン。

だから今日は作っていた。

もちろん3カ所に置いた踏み台を駆使しての昇降運動をしながらの料理だ。

これで体力がついてくれたら御の字。

はじめのころは料理の途中からふくらはぎが泣いていた。

多分泣きべそもかいてた。

今は平気。

冷蔵庫と洗い場とコンロの前に常備している踏み台が心強い。

本当はあと2個くらい置きたいんだけど、さすがに足の踏み場がなくなるっていうかその前に料理中につまずいてひどい目にあいそうな気がするから、ほどほどにしておこう。

ちなみに作ったのはぱらぱらなチャーハン。

こういう単純かつ飽きにくくて栄養もそこそこの料理はいい。

意外とバリエーションあるしな。

冷蔵庫で余っている食材をベースにぶち込んでもたいていはおいしくいただけるというのも強みだ。

いわゆる男料理なんだから大抵そんな感じ。

僕は基本的になんでも美味しく感じるしなあ。

でも、それにしたって不便すぎる。

踏み台使うにしても腕を肩から上に上げることが多くって筋肉ついちゃいそうだな。

もう慣れたし諦めてはいるけど、それでもやつぱりこの背丈の低さだけは何とかしてほしかった。

せめて元の体に戻ることは諦める代わりに身長だけは……なんて魔法さんのものに願ってみたりもしたけど変わらないうちこいまままだ。

まあ祈るくらいで戻れるんなら1ヶ月くらい拝み倒すし。

「うーん」

でもなあ。

ほら、僕は男だから思っちゃうんだ。

「せっかく魔法があることは分かっているんだからせめて少しくらい自分で使えるようにならないの？」って。

手を上げないで物を運べたら楽なのになあ。

寝そべったまま家事掃除洗濯料理ができたらいいのかなあ。

「ふんっ」

.....

まあお腹に力込めたくらいで無理だつてのは小中学生で漫画を読むたびに実践して失敗した経験から知ってた。

しょうがないから床のタイルに足をつけたままキッチンをじとつと恨めしく見上げる。

リフォームのときに母さんの希望で海外メーカーのシステムキッチンな台所。

だから今の僕としてはとでもいだけない高さになっている。

なにかに乗らないと背伸びをしても水もひねることができないなんてな。

成人男性の平均身長をちよつと上回る感じの背丈だとちよつと良かったんだけどな。

ほんつとうにとにかく小さすぎるのだけは本当にほんつとうになんとかしてほし

かった。

切実だ。

いや、慣れればそういうものだって思って諦めもついたけどさ。

幼女になっちゃったもんだから日常生活においての利点がひとつもないのは悲しい。

でも、意外と何とかなるもの。

踏み台さえ使うなら、調理器具を小さいものにまとめて変えたなら……どうにかして

前とそこまで変わらない感じで料理までできているから人間ってすごい。

まあ食材だけはどうにもならないんだけど。

筋力がマイナスに振り切れそうなくらいに弱いのと1度に運べる量が少ないのとそもそも買ひ物のためにいちいち外に出るとそれだけ幼女拉致監禁な冤罪リスクが上がるっていうのもあつて、今まではあたりまえだったスーパーでの買ひ物も控えるしかないもんな。

だからほとんどは週1回玄関先の発泡スチロール箱に配達してもらおうのとネット頼み。

前みたいになんともなく思いついた料理をぱつと買ってきてぱつと作るなんていう贅沢だとも思わなかった贅沢もできなくなったし、家にある材料をうまくやりくりしながら過ごすと感じる。

昔とは違ってネットで頼んでも即日で届けてくれるし、今は配達の人と顔を合わせな

くても受け取れるから意外となんとかなるものだ。

あと重たいものを運んでくれるサービスというものにこれほどの価値があるんだって、というの、しみじみと感じる。

置き配は二トの心強い味方だな。

結構割高な気はする……けど食べる量が少ないのとで相殺されているから思ったほどじゃない……？

健康な普通の男だったころには知ってはいても想像できなかつたけど、筋力がないとヘタをすれば普通のサイズのペットボトルですら重くてしよすがなくて、持っているだけで体力を消耗するし手首とかが後で痛くなるんだよなあ。

貧弱すぎる。

今なら同世代よりもお年寄りとのほうが話が合うのかも。

野菜とかお肉は手に取って選びたいのかな。

「……………」

……とりあえず、男に戻れたら子供やお年寄りがなんか困ってたらすぐに助けようって思う。





食べたらずららずらするくらいに眠くなってから、お昼のあとはたいい昼寝。

病気じゃないよ？

普通の眠気。

で、ちよつと寝てすつきりしたらメッセージの合間に聞き出した今どきの中学生とやらが読んでいる雑誌とか流行っているゲームとかテレビ番組の録画を何かのついでに観たりしてる。

適当に言ったら案外受け入れられた中学生を演じようと思いついたのはいいけど、話をしようとしてみると共通事項がほとんどゼロ。

JCさんの会話も初めのころは……いったい何について語っているのかを探るところから始めないといけなかったくらい。

まさに外国語だ。

今ではわりと分かるようになってきたからちよつぴりアップデートできた感じ。

「……………」

だけど疲れていたからとは言っても。

さよならしたい気持ちでいっぱいだったとは言っても。

……おつきいほうの子にもアドレスを教えってしまったのはまずかった気がする。ちっこいほうほどじやないけどやっぱりよこしてくるメッセージの量が多いし、話している内容がさらに難解だ。

というか流行りのエンタメについて話すならまだしも友だちとか知り合いとかやらについて熱く語られても「僕がなんて返せば良いの……？」って気がつかないのかな。気がつかないんだろなあ……。

あの脳天気さなJKさんだもんなあ……。

典型的な中身のない……って言ってもちよつと怒るだけって気がするあの子だもんなあ……。

深く考えないで適当な相づちをするだけで満足してくれるから楽ではあるけど。

「……………くあ」

僕って意外と努力家だったらしい。

中学生をやるうってする努力が実りつつあることもあって、いまだきの中学生としての感覚を少しは習得できたし……：それなりに、あくまでも気を遣ってくれるとき限定だけど彼女たちと話を合わせることはできるようになっていくような気がする。

海外で外人相手が慣れてる人となら会話が成立するのを思い出す。

さすがに10年も違うと文化そのものが違うって感じて隔世の感があるものだ。

今はほんとハイテクだよなあ……やってることは大して変わらないけど。  
アナログな感覚の混じった初期の白黒でギザギザなデジタルの感覚が懐かしい。



「……………」  
夕方になってきたから散歩。

散歩といっても少しでも体力をつけるためのものだから走ったりして汗をかいてい  
やな気持ちになつたりしたくないし、本当にただただ歩くだけのもの。

もっと体力がついて体が大きくなつてきて気が乗ったらジョギングくらいはしても  
いいかもしれないけどな。

夕方といっても日が陰ってくる時間帯になると学生とか犬の散歩とか買い物とかで  
通りが賑やかになって来すぎるか、それよりもうちよつと前に帰らなきゃいけない。

出かける前と帰ってくる前には必ず家の前の人通りがゼロになる瞬間を探らないと  
いけないから、この時間は結構ずれることもある。

まあさすがに毎日1時間以上外に出ている体力も気力もないからさぼることも多い  
のはしかたない。

続けるモチベーションを維持し続けることのほうが大事。

完璧主義はイコールで三日坊主だ。

なにもしないのに比べれば相当な運動になっていると思うし。

あくまで引きこもり基準だけだ。

今の僕は幼女だしそこまでムリする必要はないしな。

最悪は家の中での筋トレとかだけでも運動自体は足りるはず。

足りるよね……？



帰ったら作り置きのご飯を食べてお風呂浴って決めてるから脱ぐ。

女の子になったばかりのころの羞恥心とか抵抗感なんてものはとつくにどこかへ消えていて、こうして服を脱いでいっても特に何も感じないし。

「あいかわらずにきれいな肌だなー」とか「でもやっぱりないと物足りないなー」とか「ちよつとは育つていけないかなー」とか「やっぱりお股がさっぱりしすぎてるなー」とか、そんなことをぼんやり考えるくらいだ。

まあこの年齢の女の子で嬉しくなったら嬉しくなったらでロリコンを通り越したペド

フィリアって存在になっちゃうれしいから安心するけどな。

せいぜいが見下ろしたり触ったり鏡を見たりしたらちよつと嬉しくなるくらいのもの。

「…………お？」

……………ちよつと、ちよつとだけ胸大きくなってきたんじや？

そう錯覚して思わず両手を吸い寄せてみる。

揉んでみ……………揉めなかつた。

「……………」

気のせいか。

知つてた。

そもそもこの体だとそういうところが大きくなる前にまず身長だしな。

僕も、銀髪で肩から胸からおへそあたりまでを毛先でくすぐるように覆われている、少女にもなれていない鏡の向こうの僕も……………非常に残念そうな顔をしていた。

## 13話 取り戻した（非／否） 日常 3／3

お風呂場の壁。

「……………」

ふと気が向いてマスキングテープを何種類か貼ったらなんかいい感じになって……  
もはや新しい装飾となった壁を見ながらシャワーを浴びる。

僕は昔から髪の毛洗つてるときも目を開けている派だ。

なんでかは分からない。

でも目にシャンプー入るわけじゃないし目を閉じるのはなんか怖いしでこの体になつても続けている。

眼鏡いらずの視界にあるのは雑な模様になった壁。

現代アートって言い張ればそれっぽくなりそう。

初めのうちはカビとかいろいろと心配したけどめんどくさくなつてきて放置しているうちにどうでもよくなつてきて今に至る感じの壁だ。

なんかやる気出ないんだよねあつて放置するのって良くあるよね。

それよりも中学生っぽいことをしているだけで忙しいんだ、しょうがないししょうがな

い。

僕は壁のオブジェをちらちら見ながら髪の毛を洗って流してリンスをつけてっという作業を無心でこなし、髪の毛に染みこむまでの時間を体を素手で洗うことで稼ぐ。

本当にリンスとかコンディショナーっていうの効果あるのかなって思ってたけど確かにつけないと髪の毛がきしきしするし、ざっとつけただけでもなんとなくきしつとするから本当だったらしい。

男だった頃には知る必要も無かった知識だな。

短かったんだから当然か。

ただ、髪の毛をしている……しているっていうのも変だけどこの表現がしっくりくる気がする……だけでこんな夏場なのに体が冷えてくるんだから冬になったらどうしようなんて今から考えちゃう。

冬なんてお湯に浸かってあつたまつてるうちにささって洗ってさつと出たのにこれだからなあ。

それもこれもこの長すぎる髪の毛が悪いんだ。

だけど切らせてもらえないし体に張り付くしで迷惑すぎることにこの上ない。

まだ夏になってないからお風呂場はすっぱだかだと寒い。

1回暑くなった後に秋とか冬になってきたらお湯で汗をかくくらいにあつたまつて

から体と髪の毛を洗うっていう風にしないといけなさそう。

しかもこの体は体温が低いらしくって朝は低血圧で眠いし汗も滅多にかかない、手足の先は冷えるし寝ようと思えばすぐに寝付ける、そして皮下脂肪が悲しいくらいに少ないって感じでとにかく筋肉以前の状態。

どれだけ肥えようと思ってもがんばって半人前しか胃が受け付けない食欲。

もつとがんばって食べようとしたら食べているうちにうつらうつらしてきちやうっていう本物の幼女らしき状態になる始末だ。

腹八分目どころか五分目じゃないといけならしい。

手っ取り早く太るためには甘いものだけ僕が苦手だからなあ、甘いの……。

「……………んしよ」

そんな、ちっちゃいけど僕のものだっていう認識が定着している女の子の体をぼーつと眺めながら、ちよつとだけぬるくなったお湯にちやぶんと浸かり直す。

もちろん両手で湯船をつかんで踏み心地のいい踏み台とマットを踏みしめながらゆつくりと。

髪の毛をたらいに乗せて浮かせて温まってきたところで最近はじめたバストアップ体操……要は乳揉みを試みる。

当然だけどやらしいのじゃない。



幼女のだしな。

まあ年齢不詳だから実際のところ何歳かは分からない。

調べたら大人になってもすつごく背の低い人って結構居るみたいだしなー、特に女の。

そもそも乳って系統の言葉で呼べるものが存在しているのかしていないのか分からない以上この名称が正しいものなのかは疑問だけど、まあしないよりはましだろうというところで始めたもみもみ。

まだ完全に子供だったなら意味なさそうだけど発育がものすごく遅い中学生くらいだったとしたら効果は見込める気がする。

もともとはメッセージのやりとりのなかでふと出てきた名前の雑誌を買って見たところからだっただけけど、ちよくちよく過激なことが書いてあって中高生がターゲットなのにつてびっくりした記憶がある。

もつとも「そういうの」に目覚めるのが遅かった僕だからこそ分かるんだけど、いくらそういうことがたくさん書いてあるうが目立っていいようがまったく興味がなければスルーするからあれを読んだ子がみんな真に受けるといえるのはないんだろうけども。

……でも。

その、なあ。

つい最近知り合った子どもたちがそういう大人に片足突っ込んだような内容を読んでいるかと思うと……なんかこう、もやもやするものがある。

……これはまさか、娘がそういう雑誌を持っていた父親のそれに近い感覚……？

「うーん」

だつてなあ。

同窓会の手紙とかに紛れて結婚したとかいうのつてごくたまーに来るしな。

行ったこと1度もないけど……学生を終えてしばらくするとそういうのが気になつてくるんだ。

◇

ノスタルジックになつていたら胸まわりの肌がじんじんしてきたからおしまい。

ひりひりする。

たかが数分揉んでいただけ、それもほとんど力を入れていないしそもそも揉めているかも怪しいくらいでむしろぐにぐにって押すだけなんだけど、とにかくそれだけの刺激で両方の胸が円形に真っ赤になっている。

なんでこんなにも肌が柔いんだろうか。

これだと病弱設定もまんざらウソではなくなつてくるかもしれない。

女の子はみんな肌が弱いんだったら普通なのかな？

女の子とそこまで親しい仲になったことがない僕にはさっぱりだ。

先っぽまでじんじんしひりひりてきたから収まるまで天井の水滴を眺める。

……こんなことをしても効果があるのかは極めて疑問っていうかたぶんほとんどないんだろけれど、せつかく胸が育つ女性の体になりはした以上育てる義務がある気がする。

だって、成長しても胸がないだなんて……そんなのは悲しすぎるじゃないか。

いやその前に元の男に戻るのが先決だけど僕にはどうしようもないから育てておくに越したことはないんだ。

せめて。

せめてもの慰めに自前のおっぱいというものがないと泣くに泣けない。

僕はふにふにと胸を触ってみる。

ひりひりするだけ。

それにしても元の、男だったときのようにな。

……やつぱり、そうならないよなあ。

幼すぎるというのも十二分にあるとは思うんだけどなあ。

みんなが知っていて僕だけが知らないって言うのは、ちよつと寂しい。



かちんってボールペンの先を戻して日記帳に挟んだまま閉じ込める。

「ふ………」

ずーつとカリカリと書いていて凝つてきた肩をほぐしつつ背もたれに体重を乗せてほつとひと息。

今日はなんだかやる気がこれっぽっちも出なかったから今日もがんばったかのように書いた夕方の散歩も実はサボってなんとなく部屋でだらーつとしていたら、つけようと決心してからずつと忘れていた日記を書いてみた。

日記を書く習慣って昔はあったんだけどなあ。

確か大学くらいまでは毎日書いていたけど、いぎニートになってみたらたいして代わり映えのしない毎日になってきて、書く内容もせいぜいが料理のこととか読んだ本のこととかくらいしかなくなって「書く必要ないな」ってことになってからずいぶんが経つ。

この体になってからは「次に目が覚めたらどうなるか分かったもんじゃない」ってことで初めの数日こそまじめに書いていたけどだんだん慣れと諦めとが出てきたせいか、目の前に置いているのに視界に入らないという始末だ。

人間、メモしておこうが何しようがする気のないものはしないもの。

……それにしても最近の生活を書き出してみると、どうもこの体や新しい知り合いに汚染されているような気がする。

汚染っていうか……話題を理解したり追いつこうとしたり服を楽しいものだと感じるようになったり、胸のことばかり気にするようになっていたり。

ちなみに僕はおしりにはこだわりがないからどうでもいいけど、とにかくそういうことだ。

ぱらぱらとめくっても少なくとも前回……もう先月の日付だったけど、そのときにはまだここまでの変化はなかったようだし。

特に胸のことには触れていない。

もしやこの体に意識が順応しているんだろうか？

「……………」

……なんか怖くなったから忘れよう、うん。

ともあれ以前と変わってきていること自体は事実だ。

これがいいことなのか悪いことなのかは分からないけど変化は変化。

ついこの冬までにはよくあつたようになんとなく気乗りがしないからだらだら適当な連続ドラマとかを見ているうちに夜になってきていてお酒を飲んでいううちに翌朝……なんて不健康な日っていうのがなくなっているのはいいことだろうしな。

体力が無ければ無いなりに無茶はできないんだから。

まずは中学生に勉強で追いつき直そうっていう張り合いがあるぶん充実感があるよ  
うな気がする。

これもJCさんと知り合ったからかもな。

「なにを中学生相手にムキになつていゝんだ」って冷静になるとそういう考えが浮かんで  
は来るけど今の僕はその中学生以下なんだから耐え忍ぶしかない。

そう思つていうちに口が寂しくなつてきて冷蔵庫までとてと下りて来た僕は瓶た  
ちを眺める。

今日はウイスキーの、……思いつかないからただの水割りでいいや。

じゃばじゃばとコップの中には完全に無色なアルコールと水とが混ざつてちよつと  
だけでもやつとする。

つんとするアルコール臭。

……濃すぎたかな？

まあいいや。

別にストレートでもいけるんだし。

口の中にそれを含みながらコップ片手に階段をがんばって上って日記のところにとどり着き、もう一口を飲んで体が少し温まってくるのを感じながら開き直して次のページへ。

もうちよつとだけ書いておこう。

どうせ今日は寝るだけだしな。

そういえば試して気がついたっていうか気がついたら試していたから自覚したのはそんなに前のことじゃないんだけど、今の幼女な僕はお酒が飲める。

飲めちゃう。

それも前の体と変わらないくらいには平気で余裕で。

発育には悪そうだけど、まあ子どもころから飲む習慣のある文化圏もあるし飲み過ぎなければ、うん。

人種的にはオツケーなはず。

倫理的には完全にアウトだけど気にしない。

このへんはひとり暮らしの特権だ。

ほとんど唯一ともいえる楽しみのお酒が完全にムリになるっていう悪夢が数年続く

よいかはだいぶマシだし、うん。

ほら、お酒も適度なら精神的ストレスがなんとかって言うし、少なくとも僕にとって  
はいいことだ。

きつとそのはず。

とりあえずとしてワイン瓶を半分なら飲めるし困ることはない。

体重は半分なのにな。

肝臓が強いんだろうか？

なまじ飲めてしまうせいでせっかく止めようと思っていたお酒の習慣、断酒がふた月  
も続かなかつたのはしょうがない。

中身は大人だしこの姿は魔法っていう未知のなにか凄い力の影響だし。

うん、しょうがない。

「……………けふっ」

僕は今日1日で思ったことを、一応は後日に他人に見られるかもしれないことを想定  
して堅苦しく書いておいて、もう一度日記帳をぱたんと閉じる。

もちろんお酒のこととか胸のことは書いていない。

だって自分で読み返すのだって恥ずかしいもん。





お酒が入ると眠くなってくる。

ずつとがんばって起きていればそのうちに逆に目がさえてきて眠れなくなってくるんだけど、そのへんのさじ加減が肝心だ。

いちど体調をいろいろな意味で崩しきつた経験からこういう大人な判断は染みつくようになっていいる。

痛くないと覚えないうつてのは本当だな。

「……ぺっ」

まだお酒臭い口の中を磨いてきれいにしてトイレを済ませてぼーっとしている頭と重い体とをがんばって動かしてどうにかベッドにのそのそとたどり着く。

熟睡するためにわざと小難しい本を、酔って理解力の欠けている脳みそでかみ砕こうと格闘しているうちに本格的に寝落ちする寸前まで来た。

この感覚がたまらない。

クセになつちやマズいつて分かっていてもクセになつてるんだからしょうがないよね。

「えへへー」

意識が飛びかけのよく分かんないテンション。

あ、さつき書くのを忘れた。

睡眠時間、2時間くらい増えたんだって。

おかげでいつも宵っ張りなんてできなくなつて遅くても9時、ゴミ捨てる前の日は8時には布団に潜り込まないと翌朝に目覚まし時計に負けることになる。

だからお酒はそれより2時間くらい前な夕飯どきからなんだって。

たいていの場合それプラスで昼寝がセットでようやくすつきりするんだって。

子供か。

子供だったな。

「くあああ………」

おつきなあくびを1回してからごろんって横向きになつてうずくまるようにして眠気に落ちる。

……これだけ寝ているんだ。

成長ホルモンが出て早く成長してくれるか、あるいはさつきと元の体にも戻つてほしいな。

そんなことをごちやごちやとしている頭の中で考えているうちに僕の意識はぶつんと切れて翌朝まで吹っ飛んでいた。

☆☆☆☆☆

水平線の彼方から朝日が昇る。

その太陽は恐ろしいくらいに巨大なもので、海面からゆつくりと出てくるに従い世界を暗いオレンジ色に染め上げていく。

波打ち際にはその光で目が覚めたらしい鳥たちの元気な声と、夜中もずっと響き続けたいた波の不規則で規則的なざあざあという音と空を飛び回る鋼鉄の重低音がびりびりと、繰り返して訪れている。

そこで、波がぎりぎりかからない程度の砂の上で、暗かったころ……空と海の境界がまだ分かれていなかったころからただただその方向を見続けていた彼女は、まぶしくなってきた空と海を片手で少し隠しながら、隣に立つ彼女に向かってつぶやくように語る。

『響』、そんな顔しないで。 大丈夫、きつと……きつと上手くいくわよっ」

「……………」

その声に向かってぽつりと返される声はひどく小さいもの。

それに向かって元気づけるために、彼女は「彼女」に対して、いつも以上に活気に満

ちている声を渡す。

「——もちろんっ！ 『響』をいちばんよく知っているこの私が保証するわ！」

「……………ふふ」

「……………な、なによ！ なんでそこで、どうして笑うのよ!? もーうっ！ 『お姉ちゃ

ん』に向かって！」

「……………」

少女と「少女」はしばらく笑い合った後。

「……………ふふ、元氣出た？ 『響』」

彼女は「彼女」の手を引きつつ砂浜をゆつくりと歩き始め——振り返ると今度は「彼女」と「もうひとり」に向かって語りかけた。

「——それじゃ、がんばってね。 『響』」

☆☆☆☆☆

14話 春↓夏 1/3



「うーん……」

寒いなあ……。

寒い。

僕はシャツ一枚って言ういつもの格好。

シャツだけを着了た状態で鏡の前に立っているんな角度から光を当ててひたすらに研究し続けること数十分くらい。

僕はめんどくさがりで飽き性なクセに1回気になると気がするまで調べないと気が済まないんだけど、その調べもののあいだは食べたり寝たりしなくてもわりと平気だ。

そんなわけでぶるつとするくらい冷えてきたけどまだまだ。

ちよつとつて言うか大分体が冷えてきたけどあともうちよつとだけ……。

「ふんっ」

力を込めてみる。

……でもやっぱりそれはできなかつた。

んー、だめかー。

できそうだつて思つたんだけどなあ。

女の子なら自然に浮き出るはずの胸ポチつてやつ。

いや、特に理由はなくつてただ気になつただけ。

漫画でそうなつているシーンを見て「僕も幼いとは言つても女の子なんだからいける

んじゃない……？」つて思つただけなんだ。

深い意味はない。

もちろん裸になれば見ただけでも触つただけでもポチが分かるんだけど、シャツ越しだとどうにも難しいみたい。

「かすかな膨らみが無いでもないからできるかな」つて思つて試してみはしたけど、やつてみるとなかなかハードルが高いものらしい。

乳腺とやらが育っていないんだろうか。

だつて第二次性徴つてのが来てないっぽいもんなあ、この体。

幼女だし。

でも僕は意地でも10歳は超えていたいんだ。

10歳過ぎてたら個人差で女の子らしくなってるってネットに書いてあったし、がんばれば見えるかもって思ってもしょうがないじゃん。

お風呂でよくやっていっているように肩甲骨をつりそうなほどにくつつけるようにして胸を反らして、そのうえでシャツを後ろにぐいと引つ張って胸に押しつけたならようやく確認はできるんだけど……それじゃ天然物じゃないしな。

ニセモノでもないけどさ。

一応のベースは女のはずだ。

それにしても、同じようにしてみてもポチが起きるときと起きないときがあるのはなぜだ。

数秒のあいだに浮き出たかと思えば沈み込んでいるし……訳がわからない。

「はあ……」

ため息をつきつつ微妙に伸びてしまったシャツから手を離してぺたんとする。

やっぱりもつと成長しないとムリなんだろうか。

脱いでふつうにしていたら、かつての記憶にある子ども時代の男だった僕の体の胸とたいして違わないくらいだしなあ。

むしろ肉がついていないぶん……。

本を読んでいたら女の子は先っぽのほうから成長してくるってあったのを見つけて

喜んでここまで来たんだけどなあ。

そのときの興奮は体温とともにとっくに冷え切ってしまった。

悲しい。

空しい。

あちこちに脱ぎ捨ててあるばんつや他の服を、もう冷たくなっているそれらをもそもそと身につけ直しながらため息を再び。

……女だったら誰にでも起きるわけじゃないのか。

今の僕は「少」女以前の「幼」女だしなあ。

揉めない。

見えない。

浮き出ない。

………つまんない。



昨日までのしとしと雨からざあざあ振りになっているらしい雨粒の音を聞きながらカーテンをそつと開けて外を眺める。



誰にも見つからないようにって気をつけながら開けるのにも慣れた。

水気を含んだ布と木と金属の匂い。

暗い空。

雨がいつまで経っても止まない。

今年の梅雨は長い。

もうすぐ終わるらしいけど結構長かった気がする。

ニートが長いって思うくらいなんだから相当のはずだ。

こんな天気なもんだから夕方の散歩がさぼりがちになるのは仕方ないよな、うん。

こんなぐずぐずした天気がもう半月も続いているものだから、ろくに外に出る気がそもそも起きないという悪循環もまた続くんだ。

外に出たとしても、どす黒い風景と肌にとわりつく湿気と帰ったあとに体じゆうがじとつとしてお風呂に入るまでどこかじめじめし続けるんだから、それらないっそのこと出なければいいやってなるんだもん。

こんなのは去年までもずっと同じだったしムリして外に出ていたずらにストレスを溜める必要もないし。

「……………」

初めのころは「雨具で隠られるからいい」って思ったけどさすがにどんよりが続け

ばいい加減にうんざりしてくる。

北国の人もこうしてメンタルがやられるっていうのを耳にした覚えがあるし、やはりお日様は偉大だ。

この体のDNA的にはどうなんだろうな？

『……………なのでこの……被害者というよりは……………と呼ぶべき……………』

『前兆がなくなりきなりというパターンがほとんどであって対処に……………』

『……………が遅くなると……………という事態を招くケースも……………』

午後のテレビはつままない。

辛うじて興味の持てるワイドショーなんかを適当につけていることが多いけど、どうも僕の知りたいことを掘り下げてくれる局はないらしい。

まあこの時間帯のターゲットは僕みたいな20代の男じゃないからしょうがないんだけど。

別に僕だって暇を潰したいわけじゃないもんな。

ただ耳が寂しいからつけておくだけなんだ。

あと時報的な機能もあるし。

けどなあ……………。

「ふ……………」

ぼんやりと画面の向こうで熱心に話し合っている人たちを見ながら思う。  
もうこの体になって4ヶ月か。

長いものだな。

1年中日曜日な僕にとって季節はあつという間に過ぎるものはずなのに、それでも長  
いつて感じるんだからよつぽどだ。

やっぱ子供だから時間感覚が？

うーん。

比べられないから分からない。

世間ではこの天気のことを諦めているらしく、もうすぐに来るらしい梅雨明けとその  
先の夏休みを間近に控えてのレジャー特集とかで浮き足立っている印象だ。

話題がなければとりあえず今年のオススメスポットを紹介しておけばいいだろう的  
な制作者の意図を感じる。

コマーシャルもみーんなそんな感じだしな。

僕としてはそういうもののほうがまだ興味を持てるからいいんだけどさ。

にしても夏休みか。

ここ数年はずっと家にこもっていたな。

暑いし人でいっぱいだしで外に出る意味がないんだもん。

こんなに毎年暑いのにわざわざ余計に暑くなりに行く神経は持ち合わせていない。  
ニートを舐めない方が良い。

ニートっていう特殊な生態を考えると、この時期は外出を控えてオフシーズンを狙うのが鉄則なのは明白だしな。

去年まではそうやって人の少ない時期に2週間3週間の旅行とかしていたんだけどなあ……今年はどうあがいてもムリっほいし。

趣味の温泉巡りすらできないのは悲しい。

ああ言うのってふと思いついて本屋に走ってガイドブック買ってきて、ひととおり読んでから行きたいルートを考えて予約するのが楽しいのにな。

もちろん物理的にはできる。

……できるんだけどそもそも日帰りだつてこの見た目じゃ変に思われるし、男湯に入るのにも女湯に入るのにも勇気が要るしなあ。

幼女がひとりで都会からそこそこ離れた温泉郷に来る時点で怪しまれる可能性しかない。

それにいざパスしてすっぱだかになるにしても……男湯なら僕の精神的にマシなんだけど、どうしたつてこの長い銀の髪の毛は女だつて主張するものだし無理っほい。

いくら体に凹凸が完全に……ほとんどないといったつてさすがに腰まで伸びている

髪の毛は隠せないしな。

切るのにはNGみたいだからこれだけはほんつとうにどうしようもない。

なら理想郷の女湯はどうなのかって言うと……その、覗きに入っているような気がするからたぶん僕の心が持たない。

まるで変態じゃないか。

いやまあその、女の子の見た目で男湯を選ぶのも充分にやばいんだけど男の精神で女湯に入るとかもまた相当にやばいんだ。

漫画の女湯なシーンとかを見過ぎているからこうやって思うだけで、現実に入ってくる人の多くはおばさんとか年寄りの割合の方がずっと高いだろうとは思う。

だからそんな心配はないはずだけど……それでも中学生くらいまでならともかくそれ以上とか元の僕と同じ年くらいの女性なんて見ちゃったら、きつと罪悪感で寝込む。

だって僕現実の女の人の裸なんて直接見たことないもん。

威張ることじゃないけど経験値が0と1以上にはとんでもない差があるんだ。

姉か妹とか小さい頃一緒に入ってた女友達なんて存在は僕にとっては縁の無い灰色の人生だったしな。

だからよっぽどのことがない限りはどっちに入るにしてもムリだろう。

温泉は諦めないと行けなさそうだ。

家族風呂とか高そうだし、なによりひとりつきりだしなあ。

「……………」

CMをぼんやり見ていた僕は思いつく。

待てよ。

「持病がある」とか「ケガの跡がひどくて」とか言えば。

……うん、それなら不可能じゃなし不自然にも思われないか？

ただ同伴者って言うか保護者が居ないのだけが問題になるだけだ。

いや、やっぱりそれが駄目だ。

高校生くらいまでの子供は社会的には保護される存在。

怪しまれるしかない。

ちよつといいアイディアが浮かんだけど、そもそもわざわざ山奥の効能抜群のお湯なんかに浸かったらこの体の貧弱極まりないお肌ではどうなるのか分かったもんじやない。

薄い肌で濃い温泉なんかに入ったらしみたりして最悪のたうちまわることに。

やっぱり止めておこう。

……入りたいなあ、温泉。

旅館に泊まって何回もお湯に浸かつては上がって部屋でお酒呑むループが大好き

だったんだけどなあ……。

あ、今夜は日本酒にしよ。

◇

梅雨にはいいところもある。

外に出なくていい理由があるから普段通りの生活に戻っても「まあ引きこもってる……」ってちくちく痛んだりしない。

一応でも僕の良心は引きこもりを良しとしていないもんな。

それにいちいち外に出るかどうかを考えて家の前を確認してってことをする必要もない。

「雨だからしょうがないよ」って言い訳で今日もぐうたらできるんだ。

こうしてシャツとぱんつだけっていうだらしない格好でベッドでごろごろ気楽にしていられるのがその証拠。

シャツ1枚だと単純に楽っていうのと洗濯がすつごく楽っていうのと肌が布に擦れて気持ちいいっていうお得さで、けども下に穿かないとお尻が冷たいし汚くなったら困るから1枚換算300円のぱんつでカバーする完璧さだ。

こうしてじつと静かに過ごすのって好き。

だけど僕も一応は人間だから何日かに1回あるかないかだけでも外に出てちよつとだけでもいいから会話をしてみたくなる衝動に駆られることもある。

こう、スーパードでお会計の後に「ありがとうございます」だけでもなんか違うんだ。

僕には将来性皆無で人生で学生時代の次に大切な20代を無駄にするって言う……あ、ちよつとずきつて来る……ニートって言うご職業をする適性はあるんだけど引きこもる適性はないらしい。

ニートと引きこもりって似ているようでイコールじゃないんだよなあ。

その辺を大半の人が理解できないんだよなあ。

「やれやれ」

適当につぶやいてぴろりと鳴ったスマホをめんどくさがって取らない。

初めてこの姿で外に出たあの日のせいなのかおかげなのかは分からないけど、幼女な僕にも中学生だって言い張る怪しい存在に対して知人ができた。

年下の中学生っていう存在だ。

小学生でも高校生でもないらしくって中学生。

ある意味幼すぎもせず男の僕からして理解できなくなってくる年頃にもなっていない純粋な女の子っていう存在の知人。



一応は知り合っちゃったし完全に無視するのはなんだか悪いしで気がつけば何回か外でお昼とか食べてるんだ。

なにかと予防線を張りつつ、ほんの軽い雑談だけとかそんな感じで。

まあ僕が深いお付き合いはお好きじゃないってのは態度で分かるらしくって本当に軽い感じだけだ。

せっかく連絡先を教えさせられたんだ活用しないともつたいないしってことで今どきの現役の女子中学生なJCさんと……「友だち」として何度か。

子供って顔見知りから友だちになるのが一瞬だよな。

僕なら最低でも3ヶ月は欲しいのにな。

相変わらずやけに距離は近いしうるさいしで疲れるけど、そこは僕の機転。

適当なアラムとかをつけて「もう行かなきゃ」ってごまかしてなんとかなるし。

人と話したい衝動をちょっととした買い物とか旅行先とかでまとめて発散していたんだけど今はできないし、情報収集は大切出しでずると会ってる。

正直めんどくさいんだけどそこはニートの特権を行使。

そういう気分になった日に「今日なら時間あるよ？」でオツケーだ。

学生が暇そうな時間なら大体二つ返事だしな。

でも、顔見知りとこれだけ頻繁に会うのは何年ぶりだろう。

多分高校生以来じゃないかな。

高校生までなら僕もなんとか周りとか合わせていて学校帰りとかお休みの日にご飯食べたりしてたしな。

大学からは……うん。

授業で必ず同じ人たちとって言うのがほとんどなくなつたしサークルなんてのはめんどくさくって。

そういうこと。

そんなわけで人寂しさをすつごく年下の女の子で紛らわせるって言うやばいことをしてるわけだ。

僕の肉体年齢はそれよりさらに幼いのは置いておくとして。

子供相手とはいえ結構に会話もしたし、これで少しは……少なくとも設定も何も無かつた最初の頃よりかは見た目と設定とのバランスの取れた「らしい」話し方と振る舞いのできるようになってきたんじゃないかって思う。

ついでに寄るお店とかで店員の人に「ん？」って顔をされるあの一瞬もほとんどなくなってきたし。

容姿に見合わぬ貫禄みたいなものが出てきているなら嬉しい。

努力は必ずしも実るものじゃないけどなんらかの見返りはあるものだ。

相応のやり方と時間と頻度が不可欠だけど。

にしても家族同士の知り合いとかじやない女子中学生と外で度々会うなんて。

成人しちやった男としてはお金を払う以外に手段がない気がする。

つまり元の体だったら事案になってもおかしくないってこと。

やっぱり結局誰がなんと言おうとも人は見た目がすべて。

だからもつと中学生っぽい雰囲気醸せるようになって……いい加減赤ちゃん言葉で話しかけられるのは回避できるようにしたい。

本当に。

今でもときどき、たまーにだけどしやがみ込んでまで話しかけてくる人がいるくらいだもん。

まあ素顔が見られちゃえば小学校低学年だもんな。

他人と話すときは丁寧が染みついている僕だってこんな姿の子が居たら砕けた話し方しちやうもんな。

◇

僕は忘れっぽいし興味ないとそもそも認識すらしないでどうしようもない存在だ。

だから会った話の内容とか忘れないうちに整理しておこう。  
ちやうど今何もする気無いからちやうど良いしな。

さすがに日記に書いたらなんだかマズそうだしスマホのメモで適当にすいすいつて。  
何もする気が起きなくなつてスマホをいじれるんだからやればできるはず。

かつては同級生の同じクラスの子の顔と名前できえ学年末になつてきてようやく浮かぶようになるつていうのを高校まで続けていた僕。

こうして何回も何回も思い出さないと記憶に残らないもんな。

とりあえずは面倒なおつきい子のJK下条かがりさん。

年下に対してさん付けもどうかつて思うけどそれが僕。

全体的にすべてが大きい子。

なにがとは言わずに全部が。

彼女は高校生だとばかり思い込んでいたんだけど、なんと中学2年生。

つまりは設定上の僕と同じ年だそう。

んな馬鹿な。

初めにに聞いたときははてつきり冗談かなにかかつて思っていたんだけど疑いすぎたら怒りだして学生証をぐいつと突きつけられたから本当だったらしい。

あの体で本当に中学2年生だった。

あの体で。

あの体で。

あの体で。

いやらしい意味とかじゃなくって背も高いし胸もでかい。

あの大きさと何カップになるんだろうな？

いくら肉体的には同性だって言っても僕は男だって言ってるし、いくら女の子同士でも初対面に近い間柄で「何カップ？」とか聞かないだろうしで言わなかったけど。

年齢をさんさん疑ったせいでまあふくれること。

どれだけ幼かろうと年齢を気にする女の子っていう生きものだし何歳も上に見られるのがコンプレックスだそうだ。

漫画みたいにほっぺをわざとらしく膨らませて怒るアピールするもんだから大変だった思い出。

余った、もとい食べきれなかったお菓子もといスイーツをあげたらすぐに機嫌直ったけどな。

下条さんの場合、いざとなれば甘味か僕の着せ替えでどうとでもなるらしい。

ちよろい。

でもどこからどう見たってそもそも中学生にも見えなくて高校生どころか大学生つ

て言つたつて「そんなんだ」で済みそんな体もとい外見をしているのが悪いって思う。よく冗談で「グラビアアイドル目指せば？」つて友だちに言われるつて言つてたしな。實際脱がなくてもすごいって僕でも思うんだしそんなだろう。

まあこの辺に深く突つ込むとその反対な僕にも流れ弾が来そうだから黙つておいた。肉体年齢と設定年齢と精神年齢がゼーんぶ違う僕には直撃しそうだし。

きちんと頭の中で分けておかないときどき分からなくなるくらいだし。

えーつと僕は大人の男の心と幼女だけど中2男子つて言い張つてる体で、下条さんは幼い心と中学生なのに高校生の色気つてのをを出してる体。

ずるい。

交換して欲しい。

無理だろうけど。

くるんプリン下条さんとちよつと話してみれば、確かに顔は中学生くらいの幼さだし精神年齢が年相応だつてのはすぐに分かるんだけどな。

高校生だろうつて思つてから話すと案外分らないもの。

おととい会つたときには、定期試験でやらかしてたつた1科目のために補習があることになつて夏休みが残念なことになつたつて嘆いていたかわいそうな子。

話を聞いている限りどうも勉強にあまり向いていないつていうかすぐにぼんわかす

るってどうか、たぶん学力は同学年の中でちよつと……な様子の子。

かわいそうになあ。

本とかは普通に読んでいるみたいだし地頭は悪くはないと思うんだけど勉強のやりかたと習慣つてのは難しいな。

「中学生なのにバイトして良いの？」って思ったらあの外見が原因だったそう。

なんでも部活の先輩……高校生のらしい……がバイトとして働いているあのお店で人が足りなくなっていたのはこの前の通りだけど「高校生の制服を借りて履歴書に高校生って書いたら通るんじゃない？」っていう学生らしいノリで出してみたら特に疑われることもなく即日採用だったとか。

「ずさんすぎない？」って思ったりもしたけど、たしかにあの子が制服を着ていて静かにしていたなら高校生だって言われても違和感がなさそうだし実際間違えたしな。

まあ肉体が少女の身で飲酒している僕からは何も言えないし、そもそも働いていたのもあの連休中だけのことらしいし社会経験ってやつだ。

とにかくあの身長と胸では年齢詐欺にもほどがある。

ちよつとは分けてほしいくらいだ。

どっちもな。

まあ何も言われなかったっていうのには臨時だったっていうのもあるらしいし。

店長か誰かしらが多少勤づいていたとしても本人たちが言い張っているし、書類上は高校生だし「まじめそうならわざわざ言わずとも問題なく働いてくれるんなら良いよね」っていう大人のグレーな判断。

高校生たちのツテを頼るくらいだし切羽詰まっていたんだらうしな。

世の中余計なことを突つつかなければわりとどうとでもなるものだ。

藪からは何が出てくるか分かったもんじゃないしな。

実際僕もそうやって突っ込まれないことが多いんだらうし。

だからこそおとなしくしないやいとどうなるか分からない。

ボロだけは出さないように気をつけよう。

出したところであっさりされるだけだ……そういう他人の反応が平気だったらこんな生活してないんだから。

……ま、こんな幼女の中身がその辺に転がっていきそうな地味な眼鏡男だなんて誰も信じないだらうけどさ。



## 14話 春↓夏 2/3

自慢じゃないけど僕は人の顔と名前を覚えるのが苦手。

だから小説でも漫画でもドラマでも映画でも主人公くらいしか分からない。

好きなので2回3回って楽しんでようやくやくって感じ。

だからってわけじゃないけどせっかくだしってことでスマホのメモに知り合った人のことをすいすいと、思いついたことを箇条書きのようにして覚え書きを作っていく僕。

こうして突発的に何かするのってすぐに飽きるけど……まあヒマだし。

だけど……。

「うーん……」

疲れた両手を休めながら僕は何年ものスマホを眺める。

何度か思ったけど、スマホ、ちっちゃいやつが欲しいなあ。

画面は大きすぎて操作がしづらいし重いし片手に収まらないしで良いところがひとつもない。

大人と子供、男と女のかげ算で大局的な生物になっちゃったからしょうがないんだけ

ど。

ずっと持つてるだけで手首が痛くなるしなあ……………しかたない、下に置こう。

こんなんで手首痛めるとか軟弱にもほどがあるし、さすがに困る。

「今つてスマホはネットで買えるんだっけ？」とか思いながら、ことんと置いてするすると思いついた順に文字を並べていく。

「……………」

おっぱいもとい下条さん自身が年齢と体のことを気にしているせいか「私中学生なのよ？」つて言うのに合わせて「僕も同じ年だけど子供扱い止めてくれる？」つて伝えてもちよつとだけ驚いてすぐに納得していたのには僕が驚いたっけ。

なんとなく話し方で見た目よりは上だと分かってくれていたらしい。

僕の言葉づかいかいもときどき気になっていたらしいし。

最初の頃は僕自身のキャラを作るのもおぼつかなかったからだろうけど「いつもだから」つてことにしておいた。

便利だよな、「いつもだから」つて。

どんどん使つていこう。

けど話している最中によく「それつてどう言う意味？」つて聞き返されるし……………僕じゃ分からないけどやつぱり世代間、千支1周分くらいな時の流れつていうのはちよつ

とした表現にも表れているみたい。

そりやあそうだ、あの子たちが生まれた頃僕は中学生だもん。  
なるべく違和感が出ないように意識しているんだけど難しい。

「ふむ……」

めんどくさくなって疎遠になるなら良いんだけど嘘がばれてじくじくしたお別れになるのは嫌だ。

……「じいやとおはなしするの大好きだから……」とかいう設定も作っておくべき？

じいや、じいや。

大きな家にいる執事さんの存在。

じいやって言うからにはおじいさん。

ならそれに合わせたエピソードも必要だ。

だけど将棋とか囲碁とかルールもふんわりとしか分からないし興味あまりないからなあ。

興味は無いわけじゃないけどそこまでストラテジックに何手先まで読むとかできないし、それよりも楽しめる娯楽がありすぎるっていうのも大いにあるし。

このありあまる時間をちよつとは使って、せめて初心者レベルまでは試してみるべき……？

今はアプリでもできる時代だ、ひとりぼっちでもなんとかなる素敵な時代なんだ。勉強に飽きたらやってみるか。

覚えていたらな。

意欲が残っていたらな。

……ん、何の話だっけ。

ああそうだ、着せ替え人形にしてきたあの子の特徴を書くんだった。

下条さんとの会話は正直苦手。

だってほとんどが学校とか部活とかテレビとか雑誌とか漫画……もちろん少女漫画的なものとかのはなしをほとんど一方的にされると感じる感じだし。

だいたいいつもファッション雑誌とかネットの記事とかを見せてくるし。

いちばん楽しそうに話すのが芸能界とか学校の友だちとかの恋愛話とかいう、僕にとってはいちばんつまらない話題なあたりいまいち話が噛み合いづらいんだ。

生きている世界が完全に違う。

例え同世代でも話なんて合わなかったって思う。

脳みそゆるゆるだもんな。

けどそういうのがいわゆる今どきのJK……じゃなかったJCっていう存在らしいからちよつとがんばって付き合ってみてるんだ。

あんな中学生の女の子に我慢して付き合っているんだ、僕は偉い。

つまりニートは偉いんだ。

がんばった甲斐あって会話のテンポとかもある程度コントロールできるようになって、最初のころみたいに下条さんが息継ぎ以外はずーっと口が回り続けるのに付き合うっていうのはなくなっているから僕としてはありがたいところ。

服のボタンがズレているっていうか、そもそもこちらにボタンを通すための穴を探すところからはじめないといけない感じで大変だったけど。

……いや、ちよつとだけ良くなってるだけで根本的には何一つ良くなっていないんだけど。

ボタンの穴を探したとしても今度はそのサイズが合っているかの確認が必要な感じ。違うかな？

それに、会うたびに「誰それがくつついた」とか「離れた」とかいう報告と、そのついでに僕にまで「好きな人ができたか」とか聞いてくるからどうにかして話題をそらすまでがあいさつだ。

「ニートだからいないよ？」って言えたら手っ取り早くて楽なのにな。

フリーターさんと違って人と接する機会がゼロだから出会いがゼロなんだってさ。

……いや、そうしたらいきなり同級生を引っ張ってきたりしそうだからやっぱりごま

かしておこう。

とにかく彼女いない歴〇年齡っていう最近はマジヨリテイになりつつもさりげなくやばい状況の僕としてはいい加減にしてほしいところ。

でもそれが生きがいなら僕は否定しない。

代わりに僕も適当に相手するだけだ。

そもそも20超えるっていう良い年して好きになるっていうことが僕はよく分からないし。

親愛の情ならまだ分からなくもないけど恋とか愛とかなあ。

人間って言う猿よりちよつと話が得意になっただけの生物に備わっているただの繁殖行動のための機構なのに、それがどうして世の中の人を……特に女性を惹きつけるのかさっぱりだ。

あ、文学的表現としては好きだしエンタメでも嫌いじゃないけど。

そんなどうでもいい話題がほとんどだからメッセージもよく流し見するしどんなことを話したのかもよく覚えていない。

会ってへとへとになったという結果だけが残る。

あと話を合わせたことによる経験値も少しだけ。

……けど。

「れんあい、ねえ——……？」

丸っこい声が僕の口から出る。

微妙に舌つ足らずなのが要改善な幼女な僕の声。

意識しないと自然と本来の見た目らしい声と話し方になるちっちゃい口。

そもそも将来女性とくつつけるかどうかすらも怪しくなっているもんな。

もともとの体だったとしてそういう関係になれたかどうかはまた別の問題だし。

やっぱり予定通りに死ぬまでひとり身のままかもな。

独り身のおじいさんと独り身のおばあさん。

……しわくちやになっちゃえば性別なんて関係なくなるだろうな。



続いては関澤ゆりか……さん。

ちっちゃいほうのJCさん。

けど1回覚えたJKさんとJSさんのうちのJSさんでも良い。

JSとかJCとかJKとかも普段使わないから使いたいだけの言葉だしな。

で、彼女は僕と同じ側の人間だ。

僕よりは数段マシではあるけどやっぱり外見が中身よりも数段幼い気がする。

まあ僕には負けるけど。

威張ることじゃないけど。

そう言えばあのとときの「同志」呼びはなにかのゲームで出てきたもので、あのとときにハマっていたからつい出てきたとのこと。

今はとつくに別のものに興味が移っているらしくってあれ以降変な呼び方はあまりされない。

たまにはされる。

別にどうでもいいけど。

同志ちっちゃいのとは意見が合う。

主にちっちゃいのがコンプレックスって面で。

事あるごとに「小さい体あるあるを」メッセージでつぶやいてきて結構同意できらくらいには。

気持ちは分かる。

高いところじゃないものでも取れないのかな。

僕はさらに踏み台必須だしなあ……。

こうしてふつうのサイズのスマホが大きすぎるって感じるくらいだし。



彼女は髪型はぱつっんに近い感じのきれいに整えてある感じで肩に軽く触れるくらいの長さ。

彼女の学校の校則的には長めらしくって、顔も体もどうか中学生という口を閉ざしていれば地味に溶け込む感じだ。

マジメな顔して黙っていれば本当にどこにいるのか分かんないくらい。

言ったら怒るだろうけども、それをはねのける喜怒哀楽とテンポの良さっていうのが個性だから良いじゃない。

制服が新入生のようにぶかぶかだっというのにはなんだか哀愁を誘われる。

そんな感じなもんだから、待ち合わせのときだと同じ制服の子たちに紛れられると身長以外では見つけづらい。

そもそも周りの人遮られるもんなあ……。

低身長宿命だ。

この件で何回うなずき合ったことか。

しかし関澤さんは外見に合わず何でもできるタイプらしい。

勉強もスポーツも人並みよりひとつ抜けてできるらしいけどモチベーションが遊ぶことに向いているからそこまで目立った成績ではないっていう、才能と意欲とがズレているパターンの印象を受ける。

まあその逆で全部人並み以下だけと真面目にこなしてるから先生の評価で平均より少し高めだった僕と比べたら、きつと何十倍も快適な学生生活だろう。

僕は早生まれとかじゃないけど飲み込みがものすつごく遅い方だから、きつと2年くらい遅いくらいでちょうど良かったんだらうな。

そんな思い出も卒業しちゃえばなんだか良いものに思えてくるから時間って不思議。

「ねえねえねえ、昨日の5話もう見た？」

「すつごい展開だったよねー」

「夜中なのに私感動しちゃって！」

「あ、私徹夜とかできるタイプなんだけどさあ！ 今度一緒に」

「そっか、響はできないんだー残念ー」

「話はどこで変わるけどちよつと前に出た」

「つてゲーム知ってる？ あやつぱり！ よかった！」

「あれ友だから借りたから今度一緒にしたいんだけど！」

「え、ダメ？ 隣で見てるだけでいいからさー」

「……えー、ダメ。 ケチ。 ケチな響。 ケビキ」

なんだケビキって。

……どうやら独特の言語センスがあるらしいちつちやいの。

ゲームからアニメから映画からあらゆるものに対する興味は強い。

おもしろそうなものはひととおり経験し終える前の、見たことがないからこそまだ飽きていなくてもなんでも楽しめるっていう……ある意味大人になる境界をまだ過ぎていない状態の彼女にとってはこの世界は新鮮で、寝る時間も惜しいくらいに何でも楽しめるらしい。

そんな話をこの前聞かされた。

一方的なメツセージで。

渋い古典から最新のゲームから昨日のアニメまでと話題がとにかく広いから話があつちから合つて、僕的にはとつても楽。

その代わりにメツセージの量はときとしてスパムと見間違ふくらい。

その熱意がうらやましい。

「それだけ引き出しがあるんだつたらたくさんいるらしい学校の友だちとでも話せばいいんじゃない？」って思ったしそう言ってみただけど、ぱつつんさんに言わせるに「奴らは知識が浅いから深い話ができないのだ……」とか言つてた。

特に彼女の大好きだというシミュレーションゲームなんかはもはやレトロゲーの分類らしいしな。

どうやら彼女はかなり早熟らしい。

おっきいのと比べるとそれがよく分かる。

けど中毒で有名なあのゲームとか……あんな時間を食べる遊び、よく睡眠時間とそこその成績を確保しながら学生生活の傍らにできるなあって感心する。

よっぽど要領がいいんだろな。

もともとのスペックも高そうだし。

睡眠不足は肌が荒れるからってきちんと寝てもいるようだし。

中学2年にしてまさに万能。

うらやましい限りだ。

できたらその要領を少しは大きいのにあげてあげて代わりにあふれんばかりの胸と交換してもらったら良いのにな。

あ、女の子だったらお尻も大きい方がモテるからもらったら良いのにな。

けどそんなことはできない。

人って産まれながらにして平等じゃないんだ。

けどメロンさんとの会話でうんざりしたあとで会ったときに懐かしい作品の話が振られたせいで、ちよつとだけ嬉しくなつて話し込んで……僕がそういうのにもそれなりについて行けると知られてからはとにかくメッセージが来るわ来るわ。

1対10以上なのに気にせず昼夜問わずスマホが光るのはちよつと怖い。

その作品とかも僕からしてみると「ちよつと古い」程度だけどちっちゃいものにとつては「物心つくどころか生まれる前」な作品について話してきたりもするから「確かにこれじゃ話し相手が見つからないんだらうなあ……」とも思う。

マニアックというか何と言うかマニアって言うか。

そういうのを語れるのがネット上の、顔も知らない不特定多数な相手。

つまりは本来の僕よりも上の世代がほとんどだとか黄昏れていたあたり相当に飢えていたみたいで、僕がその聞き役になつた訳だ。

まあメッセージを送ってくるだけなら許そう。

僕も話していてノスタルジーに浸れるしな。

「メッセージは良いけど電話は嫌いだからかけないで」って言うておいたの、守っているうちは友だちごっこに付き合おう。



主観的には事案だけど客観的には正常な僕たちの関係。

彼女たちと会話をするときには気をつけなければならぬことがある。

彼女たち今の中学生は、僕が中学生くらいするとき……つまりは今の彼女たちと同じく

らいのときに生まれたつていうとても悲しい事実だ。

干支がひとまわりしているつてのはそういうこと。

なんだか急に老けたような感覚にとらわれるけど頭の隅に置き続けないと困ったことになる。

「昔」と「つい最近」がごちゃごちゃになつて話がかみ合わなくなることがあるくらいだし。

まだ「ちよつとズレてる」程度にしか思われていないだろうけど、これがずっと続けば「やつぱり変」つて思われるだろう。

つまり距離は近いんだけど接する感覚としては……親戚の子どもを相手にするようにつつと気を遣い続けておいて、話しているあいだはずつと時間の違いを意識していなければならぬ。

そういう親戚がいたならまだちよつとは慣れていたのかもな？

いや、いたとしてもそもそも話さないか？

僕の親戚……居はするけど飛行機の距離だしなあ、みんな。

おかげで滅多に口を出されなくてニートでできているんだし。

なんとなく働いているつてぼかせるおかげだ。

離れてるつて便利だよな。

親から仕送りもらって遠いところで生活してる感覚で、年に何回かそれっぽく報告すれば後は好き勝手にできる感じで。

僕に親はもういないけど。

にしてもジェネレーションギャップというものを社会に入らないうちから僕のほうが経験するだなんて……人生ってば分からないもの。

洋物の幼女にもなったしな。

本当に何があるか分からないもんだ。

僕にとってはほんの少し前に見たつもりのものが彼女たちにとっては幼いころのものだったりして何度も冷や汗をかいたものだ。

ミステリー小説とかの犯人サイドのキャラクターたちの気持ちがよく分かる。

ひと言ひと言には気をつけていても、ついぼろっと出てきちゃうんだよなあ……。

そしてそれを補うためにどんどんとがんじがらめになっていくっていう。

口走るっていうのは怖い。

今度からああいうのを見るときは犯人サイドに同情しかできない気がする。

あ、あとちっちゃい関澤さんと話しているときにはでっかい下条さんとはまた違って、ときどきよく分からない言い回しでなにかを聞いてくるんだけどいまいちよく分からない。

「分からなければいいよ」なんて予防線も張ってくるし。

まあそこまで頻繁じゃないしメロンさんとは違ってレモンさんは年下の少年とでも話しているような感覚でいられるから気分は楽だ。

外国語と同じで理解できないことを話されても僕が認識できないんだからなあ……。その辺がたぶん男と女の感性の違いなんだろうし、こればかりはうまくごまかすしかない。

「……………」

こんな感想が出る内は、僕はまだまだ男で居られるようだ。



連絡先をいただいでしまった以上には芸能関係な萩村さんと、萩村さん経由の悪魔もとい今井さんとの連絡も一応は取っている。

「あんまり返せませんよ？」って念を押しなおかげか萩村さんのほうとしかやりとりしないおかげで激しい勧誘はされなくて済んでいるから今のところ無害。

とはいっても1、2週間に1回くらいってわりと多いんだけど「ライブとか撮影とか見に来ませんか？」っていうお誘いも来る。



当然ながらお断りしている。

誰が人混みにいくもんか。

僕は元引きこもりのニートだぞ？

行ったら最後、子役の契約書にサインでもしなければ帰してもらえなさそうだし。

だけどいざとなったら親戚以外でこの状況をどうにかできる……可能性のあるところ。

まさに駆け込み寺だな。

対価は僕のアイドル化だけ……今の僕が拉致監禁虐待の末の孤児経由の養子になつて前の僕が悪逆非道な行いをした男つてことになるよりかははずつとマシだ。

こういうコネクションは大事だから忘れられないようにって返事はしておいていけど最近はこちらと面倒になってきた。

だけど毎回おんなじように返していたら完全に興味ないってバレるしなあ……なんともしがたいところ。

たぶん、うっかりでいちどでも返事を忘れてそのままっていう感じになるんだろうけど。

「む……」

届いたメールにはいつも通りに添付でチケットが添えられている。

関係者席らしい。

バーコードと一緒にそう書いてあるし。

ってどうか今ってすごいよね。

スマホを見せるだけで良いんだから。

あ、飛行機とかもおんなじか。

昔とは違って便利だよなあ。

でも添付のチケットはきつと今井さんの仕業。

毎回わざわざそういう席を取っておくってことはそうに違いないんだ。

……これって毎回お金かかっているんだよな……？

いや、それも織り込み済みっていうのは知っているけどさ。

ちよつとは悪い気がするし……やっぱり一回くらいは行っておくべき……？

そういうものなの……？

社会経験が無いからなんにも分からない……。

「……………」

ぶんぶんって頭を振ると髪の毛がぶわつとひろがって良い匂いが充満する。

シャンプーとコンディショナーと甘い体臭の混ざった匂い。

いやいや……行ったら最後に絶対にそのまま引きずられるって。

人前に出るなんて何があってもごめんなんだ。

僕が頼りにするとか、ほんつとうにどうしようもなくなつたときしかありえないも  
ん。

そうでもないど職歴皆無なニートなんて続けていられやしないんだから。

## 14話 春↓夏 3/3

ようやく。

ようやく……。

「晴れた——……暑い」

ようやくと梅雨が明けて夏になったらしい。

4時台から明るくなってきて朝日にきちんと起こしてもらえるしあわせ。

幼女だろうがニートだろうが虫けらだろうが糸くずだろうが嬉しいものは嬉しい。

明るさの代償に外はうだるようになって湿気が相対的にマシになってセミが朝から

晩までうるさくなる。

嬉しさでつい準備もそこそこ家を出て夏な朝を20分くらい歩く。

最近はや強制的な引きこもりモードだったから気持ちいい。

「……………」

でもその辺のお店のガラスに映る僕の顔は不満そう。

だってもう服は下着から順に汗を吸い始めているんだもん。

気持ち悪い。

空気がまとわりつくあの感じ。

梅雨のそれとはまた違うやな感じ。

そりやまあ前みたいに「男」って感じに汗臭くはならないけどさ……。

っていうかお風呂に何日か入らなくても平気ってどうなんだろう？

新陳代謝が綺麗にできる子供だから臭くなりにくいのかな？

いや、でも小学生でも汗臭くはなつた気がするけど……うーん。

とにかく夏は充分に楽しんだ。

所要時間は30分だ。

お手軽だな。

そんな僕はさっさと引き返してきて家の中へ。

床に着かないようにって気をつけながら下着以外をすると替えていく。

服を脱ぐたびにエアコンの冷たい風が肌から熱を吸い取ってひんやり心地。

「あ——……」

（ごくらく。）

「……………」

いやいや。

せつかくなんだからもうちよつと外へ出よう。

もうちよつと涼んでからだ。



ときどきごくたまにたまーにだけど女性の服に慣れるための練習ってことで家を出るときはいつもの男装……野球帽にパーカーにズボンにリュックっていう少年らしい格好をしておいて、繁華街のあらかじめ調べておいたビルの中のきれいなトイレの個室で女の子の服に着替えるときがある。

つまりは女装の練習だ。

けども肉体的にはむしろこっちが正常。

よつぼどに気が向いたときで、かつ他に予定がなくて着替えを持ち歩いても疲れ過ぎなさそうなときだけ。

玄関まで来て「やつぱりいいや……だるいし」ってなって引き返すのも多いから勢いも重要みたい。

もう通算で4回くらいはしたんじゃないかな？

外での女装。

とつくに女な幼女だけど念のためにつて「女装 外 ばれない」とかでがんばって調

べたんだ。

まだ女性用のトイレに入るのには抵抗感があるし、そもそも入るときには少年の格好だしとこれまた困ったことになるから上の階の人が来ないような共用トイレが狙い目。

どうしても空いていなければ諦める口実になるしな。

そのままの格好で適当にふらつとして適当なものだけ買って帰る。

そんなこともある。

どうしてもだめでもどうせセニートなんだ、何年かかけて慣れればいいんだしって気楽に。

何事も気楽なのが大切だって最近の本で読んだし。

最初は「外で女の子の服を着る」って意識しちゃって心臓がぼくぼくして着替えるだけで汗をどばどばかいて手が震えて「やっぱり今日は調子悪いみたい……」って帰っちゃったりしていたものだけど、今日くらいになるともう平気だ。

目立たない服で出かけて出先のトイレでいちど服を脱いでから女の子らしい服装に替えるっていうのにも慣れてきた感がある。

「ぬぬぬぬ……」

だから僕はこうしてトイレの中で気張っている。

けど駄目だった。

「はあ……」

いそいそと着てきた服をリュックに詰めてがらがらとトイレから出てとぼとぼとそ  
の辺の外が見える系のガラス張りの壁に近づく。

背が低すぎて鏡を見て全身をチェックなんてのは物理的に高さが足りなくてできな  
いもんだからこうして見るしかないのが悲しい……。

幼女が主体的に使用することを想定していない設計者の怠慢だ。

いやまあ共用トイレで着替えとかいうのは駄目なんだけどね。

必要な人が使っていないんだったら良いよね？

リュックの中は湿度が高めだ。

着て来た服がここに来るまででちよつとだけじとつとしてるリュック内の感触を  
思い出しながら、ガラス越しに町を見下ろしながら細かいところを直す。

夏休みで肉体的な同世代が多い時期だけどあまり目立つのもよくないし……つてい  
うわけで今日は無難に下条さんを選ば「され」た流行りだつていうシャツとスカートの  
組み合わせ。

スカートなんて絶対やだつて思つてたけど風が吹くのならズボンよりもずっと涼し  
いのがいい。

「♪」



冬は絶対に履かない。

電車の風物詩だもんね、寒い中ふとももむき出しでじつと耐えてる女の子って。

で、こういう無難な服を持ってきたのも計算ずくだ。

このくらい年の女の子は……いや子供はみんなそうか、だいたい母親に選んでもらっているだろうしディスプレイで似たものが多かったし、髪の毛と全身のカラーリングさえ無視すればどこにでもいる年相応の……できれば中学生の女の子に見えると思う。

多分。

夏つてことでつばがぐるんと広い帽子もどんな格好にでも合うしな。

未だに慣れない人からの視線を切りつつそれでも見られていることを意識しながらの女の子の格好……女装の練習にはびったりなんだ。

この帽子、本当に便利。

視界が極端に悪くなることを除けばそのほとんどが気にならなくなるし、滅多なことでは顔も見られないしな。

見上げたときだけ、つまり僕が見せたいときだけっていうのはとてもいい。

快適。

パーカーっていうこんな真夏でも必需品なアイテムが使えないし日の光でよけいに

つやつやして目立っだろうこと間違いなしな銀色の長髪を隠せない中で普通の格好をするんだから、こうでもしないとな。

いくら夏休みとはいっても平日の午前でお店もまだ開きはじめてのこの時間帯だ。

繁華街を避ければ厄介ごとにも巻き込まれないだろう。

そう思った僕は暢気に歩き出した。



なるべく人通りが少なくて日陰の多い道を選んで歩いて、この体だとそこその距離にある広めの運動公園に着く。

もう疲れたけどまだまだ大丈夫。

この体は体力が無いんだけど休んだら案外動けるってのは把握済みだ。

おとといから毎食何口分かずつ多めに食べてきたし汗拭きタオルも替えの下着も手元にある。

どうしても疲れた場合に備えてタクシーの番号も登録済み。

「よっ」

これなら梅雨でさびついた体をほぐすついでにちよつとは鍛えられそうだ。

せめて基礎的な体力だけでもつけないとこの先が思いやられるしな。

所詮は子供だからたかが知れてるけど、子供だってインドアとアウトドアではつきりと運動能力に差が出てたはずだし、今からでもまだ間に合うはずだ。

……筋トレしてみようってして腹筋がいちどもできなかったのはいい思い出。

今でもせいぜいが4、5回止まりだけど0よりはマシ。

ま、適当にゆっくりとトラックをぐるつと歩いて回るだけなんだしいしたことじゃない。

どれだけががんばったとしてもせいぜいが数キロだろう。

この体で10キロも歩いたら数日は筋肉痛と疲れとで寝込むだろうしムリは禁物だ。

前の、一歩一歩の歩幅が段違いの体だったらジョギングとかでもつといたんだけどなあ……つくづく脚の長さが悔やまれる。

先は長い。

気楽にいこう。

「ふ………」

おっと。

ここに来るまでですでに息が切れ始めているし脚もときどき痛くなるからゆる〜つくりと。

こう、だるだるって歩かないとちよつとやばいかも。  
早速に今の僕が幼女だつて認識させられて鬱々する。

「……………」  
自然の中って良いよね。

町中も良いけど人と射線的なものが交差するって思っただけでストレス感じるヤワな心してるし、半径一メートル以内に人が居るとなんだかやっぱりストレス感じるしでのんびりできないし。

それに比べてこういう広い運動公園的などころとか旅行先の観光地、それもバスとかロープウエーとかで行く場所とかだと人の気配が少なくて素敵。

それにしても人がいないなあ……素敵だ。

いや居はするんだけどみんな町中に比べて距離があるし人の数そのものが少ないし、そもそもあんまりじろじろと見てきたりはしないから快適。

帽子のつば越しでも視線っていうのはなんとなく感じるよね。

不思議なことに。

いるのもほとんどはスポーツウエアなスポーティかお年寄りばかりだしな。  
おかげでぼーつと歩いていてもぶつかられる心配もないし迷う心配もない。

疲れてきたとき用に座る場所をちらちら探しながら歩くめんどくささもない。

精神的にとつても楽だ。

こんなことならもつと早く来ればよかつたかも。

ただどここまで来るだけでも疲れるからなあ……よつぽど気合いが入っていないと難しいものがある。

やっぱり僕の根本はどうしようもない根暗で怠惰で引きこもりらしい。

人間つてのはそう簡単に変わるものじゃないつてのは男から幼女に変貌してよく知っている。

諦めよう。

地味に肩と背中が重くつてじつとりとしていた、服を詰めてきたリュックもロッカーに預けて身軽になつたしでさつさつと歩く。

自転車とか走る用とは違う歩く用のトラックに入ると両側が高い木で囲まれてきて涼しい木の息が吹いてきて木陰でさらに涼しくなつて蝉の声が降ってくる。

……夏だなあ……

太ももから腰までが一気に涼しくなつて気持ちがいい。

……うん。

男に戻つても夏は短パンとタイツにしよう。

スポーツウエアにすれば町中でも目立たないだろうし。

あと寝る前の「起きたら戻ってますように……」っていう祈りが通じるかどうかだな。

◇

「あ……………」

疲れた感じの声が僕のちっちゃい口からあーつと出ている。

だいぶ歩いた。

体が重い。

そもそも脚の感覚がなくなってきたからだいぶ経つ。

あんまり履かないからおニューのスニーカーもまだまだ硬いしな。

けど、たったの4キロもしないうちにこれかあ。

先は長い。

まあ子供の足ならこんなもんだろう。

男の体でのジョギングなら結構楽でサイクリングならかなり楽な距離なんだけどな。

でもまあ一気にこの道のりだ、この体にしてはそれなりどころかかなり歩いたっていつてもいいだろう。

下着はばんつの中の布までぐっしよりだしものすごくだるいし。

そもそも家でここままでそれなりだしな。

1時間のウォーキング、ここまで大変だとは……………気楽にいこう。

と、汗が髪の毛伝いに染みこんでいくのを感じながら自販機のそばへ惹かれていく。体の疲れか、それとも髪の毛が汗を吸っているせいか頭まで重いし。

こんな暑くて疲れたあととはぐーっとビールとか炭酸割り……………はダメだから冷たい炭酸飲料……………も泡がダメでただの冷たいだけのものしか選択肢がないのが悲しい。

この体、アルコールもおおいに受けつけはするけどしゅわしゅわだけがダメだからなあ。

開けたまま放っておいて炭酸を薄くするかしないと飲めないのが欠点だ。

なんで炭酸だけがダメなんだろうな？

他のものはみーんな前るときとたいして変わらないのに。

そもそもこの体じゃ買いたくても買えないけどな、アルコール。

悲しいことに。

旅行のときとか以外じゃ昼間つから外で飲んだりなんてもとしなかったけどさあ……………こう、呑めないって思うと呑みたくならない？

そういうのを楽しむんだったらせいぜいがビアガーデンとかいいかも。

騒々しいし僕には合わない場所だけだな。

「ふんっ。……………」

そんなことを思いつつ自販機に向けて精いっぱい足先から指先までを伸ばしてみただけ、それでも上の段の飲み物を選べないっていうのを今さらながら知ってもやっとしつつ、いちばん下の段の適当なジュースをがこんって買う。

この体、貧弱だからなあ。

低血糖にでもなったら困る。

僕は甘味はダメだけど普通のジュース程度なら平気だ。

あとはカクテルもいける。

飲んだら口直して苦いのか辛いのにするけど。

飲み物を選んでいるうちにお腹が空いてきていたのに気がついた。

時計を見てみるともうお昼からそれなりだ。

……………準備は早かったんだけどなあ。

やっぱり移動でどうしても時間がかかるんだ。

ちまちま休みながら歩いてたしスマホも見てたしこんな時間になってたのに気がつ  
けなかった。

往復で自転車も使えないしな。



物理的に足が届かないどころかそもそも座れないって言う……。

自転車にも乗らなくなつて3ヶ月か。

そろそろタイヤがぺたんこになつてゐるかもしれない。

安いのでもいいからやつぱり子供用の自転車とか買つておくべきだろうか？

と、つま先で立つてぎりぎりボタンを押して買ったジュースを「しやがむのは楽だな」なんて思いつつ冷たいのを取り出して飲むうと思つて気がついた。

「うげ……」

これ、プルタブが硬いやつ。

つまりは僕の敵だった。

指の力すらない僕にとってプルタブつてのは天敵だ。

珍しいのを選ぼうとしたのが悪かったか。

今の僕は爪の先まで柔いらしい。

すごく弱いつていうか薄いつていうか……爪を切るときの音がぜんぜん違うしな。

だからいい感じのプルタブならともかくとして普通のプルタブ以上の悪い感じの缶はなにかの道具がないと開けられない有様だ。

僕は自販機の前でぼけーつと立ち尽くす。

「困つた」

困った。

僕は困っている。

無理やり開けて万が一のことがあつたらいやだし。

大丈夫だとは思うけどこの弱々しい体だしなあ。

そんなことを思つて万が一を思い出して玉ヒユンの感覚。

玉ないんだけどそれに近い感覚。

あれは男女共通のものだったのか……まあおんなじ人間だしな。

でも、近いって言つても前するときよりもうちよつとうしろの……おしり近くで感じるんだけど、なんて呼べばいいんだろ。

尻ヒユン？

股ヒユン？

「……………」

なすすべなく缶に詰められた冷たい液体を思つてごくりと喉が鳴る。

……小中学生じゃあるまいしバカな考えをわきにおいておくとして、さてどうしたも  
のか。

どこかで適当な硬いカード的なものを手に入れるか通りがかる大人を待つか。

いや、別に学生とかでもいいんだけど。

僕より爪が強そうな人だったら誰でも。

つまりは大半の人間だ。

だから僕は大半の人間以下ってことになって悲しい。

だけどころかいうときにはこの見た目が役に立つ。

幼い子供でしかも女だっていうのは人の警戒心をゼロにするらしい。

何か話しかけても、よっぽど忙しそうにしている人以外はたいてい立ち止まって最後まで聞いてくれるしな。

「よし」

誰か適当な人に開けてもらおう。

そう思ったら今度は一向に人が通りかからない。

日陰でのベンチを選んだからかちよつとトラックから逸れているせいかな。

ふだんはあちらから寄ってくるくせにいざ用があるときには姿がない。

なんてことだ。

両手はすっかり冷たくてひんやりしていた水滴もただの水になりつつある。

「……………」

しかたなくのこのことトラックのほうへ歩く。

いくら少ないとは言っても視界には何人かは居たんだ、こうしてちよつと待っていていれ

ば……と、来た来た。

僕の視界の隅……上の隅つこには人のシルエツト。

よし、ここは新技で行こうか。

なあに、ここを通りすぎるだけの人だから遠慮は要らないしすぐに忘れてくれるはず。

「んんっ」

喉の奥を調節して、高めかつちよつとだけ甘えた感じの声で営業用の笑顔を作つて。

さらに小首をかしげつつ上目づかいを演出しながら両手を差し出すようにして。

うむ。

これで見た目どおりの幼女な演技は完璧だな。

「すみませえん、あの、このフタ、開けられなくて。開けて欲しいんです」

僕の喉から信じられないくらい甘えた声が出る。

家で散々練習したから耐性は着いている。

けど甘えられたら男の僕なら何でも買つてあげたくなる声だ。

ロリコンとかじゃなかったってたいいていの人なら絆されるだろう声。

僕もがんばればできるじゃないか。

これなら舞台とかに出てもイチコロだろう。

なんてどうでもいいことを考えながら視線を上げてみる。

……その人は事務職の格好をした女性でスニーカーを履いているらしい。

表情筋と喉の筋肉をがんばりつつ顔を上げていった先には——ワイシャツの上の膨らみの上にはどこかで見たような顔があった。

「え？」

え？

……え？

あ。

あの、この人って。

「け、ど……………」

何を言おうって考えてたのか分からなくなつて僕はフリーズする。

僕からたつたの1メートル足らずのところまで立ち止まってくれてしまったのは——  
思い出したくもない、あの人だったらしいから。

「すみません勘違いで」

「……………あら！ あらあら、かわいらしい格好だと思つたら響さん  
じゃないですか!! わー、かわい——!!!」

その声にびびつて後ずさるも遅く、悪魔さんはすつと歩いてきたかと思うとかがんで

きて僕の両手を缶ごと包み込む。

やめて。

離して。

お家に返して。

「お久しぶりです！ お元気でしたか?! おひとりで運動ですか？ こんなに暑いのに偉いですねー！ 夏休みのトレーニングとかでしょうか？ それにしてもこんなところでお目にかかるなんて思ってもみませんでした！」

うん。

僕もまさかと思ってた。

なんで居るの……?」

「あ、このプルタブですわね？ 硬いですよねえこういうの……けど私なら大丈夫です！」

僕は大丈夫じゃない。

10秒前の僕の愚かな行動を無かったことにしたいって願う。

どっか行って？

「あとそのスマイル……とつても素敵です！ その甘え方もとつてもキュートで、私……やられてしまいました!! メロメロです!!」

そのまま気を失ってくれたら良かったのにな。

缶を取り上げられた代わりに手を握られて、さらにはがっちりホールドされた。

このまま走ってでも逃げたいんだけど近距離で話されているからうまく声が出ないし、そもそもびつくりしすぎているのと疲れが一緒に来て体がうまく動かない。

た、助け……。

「……………」

声が出ない。

なんてことだ……。

今井さんは立ち上がる。

僕の腕が上にちよつとだけ引つ張られる感覚。

顔はもちろん見えない。

だつて身長差は圧倒的なんだ。

「今日もこんなに暑いので私もちようど休みたいところだつたんですつ！ 一緒に少し休みましょう！ 久しぶりですし！ あ、あちらのベンチがちようど木陰でよさそうですね！」

「あ」とか「ちよつと」とか言おうとしながらぱくぱくしているうちにずるずるされて座りたくなかったところにすくとんと座らされる。

もうダメだ。

「ついでに私も喉が渇きましたしすつきりしながらおはなししましょう！ 少し待っててくださいね！ どれにしようかなー？」

持っついていかれた。

僕のジューズ。

返して？

「……………」

悪魔もとい鬼さんはあのときとなら変わることはない強引き。

僕に背を向けながら「今日は暑いですねー」とかものすつごく意味のないことを話しかけてきながら選んでいる様子。

この前は気がつかなかったけど、髪、意外と長かったんだな。

まあずーっと僕の顔を見続けていたしな、あのときは。

今日は後ろで縛っているらしくって彼女が左を右を見るたびにひと房がぶんぶんしている。

犬みたいだな。

なんとなくだけど。

このスキにもちよつと考えて試そうとしたけど、なんと足がすくんでいる。

つていうか、腰が抜けている……？



「……………」

しゆるって髪の毛がベンチに落ちる。

あ……。

髪の毛まで見られた……しかも今はスカートじゃん……。

「おう……………」

この前よりも格段に悪い状況にとうとうメンタルまでがメルトし始める僕。

僕はもうおしまいだ。

……………どうしようもない状況だけど、1個だけ学んだことがある。

帽子って視線を切ることができて注目されにくくて僕自身もすごく楽だけど……こうして知り合いになってしまった人を先に見つけて逃げるってのができないんだって……  
いうとつても大切なこと。

索敵範囲が狭いつて前から分かっていたのに気づかなかった。

「……………」

せめて。

事務所とやらに連れて行かれそうなきに備えて通報画面にはしておこう……。

そうすれば、気がついたら衣装を着て人前にほっぴり出される未来だけは回避できるだろう。

けど……ああ、防犯グッズはリュックの中。  
肝心なときにことごとく駄目な僕は打ちひしがれるしかなかった。

15話 困惑：「勘」 1 / 2



視界がぐるぐる回る。

ごろごろ。

「はあ………」

ごろごろ。

「あ………」

ごろごろごろ。

「ああ——う——………」

ごろごろごろごろ。

おっと、ベッドから落ちるところだった……危ない危ない。

「ふう………」

なんにも考えないでただ体に任せていると、今はもう味わえない冷えた炭酸をぐつと飲んだ感覚とか……熱いお湯にぎぶつと浸かった感覚とか疲れたあとにぐーつと伸び

をする感覚みたいな、体の底からの声が高く、柔らかい声に変換されて出てくる。

なんにも考えないで本能に任せられた声。

今の僕は正真正銘の幼女なんだ。

だからもういつかいごころ。

「あ……………」

飛びそう。

予想以上の気持ちよさだ。

枕を全身で抱きしめていつも通りに下着姿で毛布を被ってごろごろするのが最高。

クセになりそう。

もうさつきからずーっと目は閉じたまま、手足の力だけで動き続けて口からは際限なく声というよりはもはやただの音とかしたなにかが漏れ続ける。

お腹の奥から口先までただの楽器になった気分。

酔ってもいけないのにここまで気持ちよくて頭も体もぼーっとするっていうのはこの上ない快感だ。

することがなくなったときにふと思いついて小さい子どもがよくやっているみたいに大きくなって柔らかいものを抱きしめてみたらどうかなくて、実際に試してみたけど想像以上だった。

クセになりそう。

とつくになつてゐる。

重くなつたまぶたをがんばつて広げてみれば……もう30分以上はこうして何も考えないで何もしないでただただ感覚に浸つていたみたい。

これ以上時間を無駄にするのも貴重に使うのもなかなか難しいだろう。頭と体の中がからつぽだ。

ぎゅーつと枕を全身を使って抱きしめてみると肌という肌から純粹な気持ちよさつていうものが伝わってくる。

「うあ………」

なんていうか湯あたりしない温泉に浸かっているみたいな感じ？

そう、ちょうど長湯のための寝湯みたいな温めのお湯でぽーつとしてゐるときみたいな。な。

あるいは寝落ちの寸前ですつごくとろとろしてる感じ。

このまま続けているとダメになりそう。

とつくにダメだった気がするけどさらにダメになる。

いやあ二トトな上に幼女になつたからともダメだったかあ。

「う——あ——………」

でまかせで口を動かしてみたりする。

はじめのころは「こんな大人にもなって……」っていう羞恥心と常識とで吐息程度だったけどすぐに諦めた。

だって気持ちいいんだもん。

なんていうか安心するっていうか？

なるほど、小さなころはこういう感覚で落ちついていたのか。

とつくに無くなっているけどきつとあつただろう幼い頃の記憶。

とにかく気持ちいいんだからしようがない。

けど、ただの枕でこれなんだから大きな人形とかクツションとか抱きしめる用のをぎゅーって手と足を使って抱きしめちゃったら僕はどうなっちゃうんだろう？

「うあ——あ——……」

ごろごろをひたすらに繰り返す。

髪の毛が顔に着くのも気にしない。

ここまで来るともはや「精神年齢が……」とかいう気持ちはかけらも消え失せている。

酒の席なら多少ハメを外してもみんな大目に見るんだ。

だったらこうしているときくらいはいいだろう。

僕は酔っても少し気持ちが高まる程度だしどうせ誰が見ているわけでもない。

と、ふと思いつく。

これ、ちよつと前に流行っていた人をダメにするなんとかってやつならどうなるんだらう……？

確実に、これ以上のなにかが来たら確実にダメになりそう。

ごろん。

「いえ——……」

なんだかテンションがおかしい。

振り切れている気がする。

お酒を呑んだときでもこうはならない。

けどもうなんでもいいや。

今の僕は幼女なんだから幼女らしいことをしたって良いじゃないか。



「……………」

さて。

幸せな記憶に浸っていたけどそろそろ現実に戻らう。

見たくもない現実に。

いつかはその時が来るんだ。

「……………」  
手元には、頷くだけで返事をしているように見せかけるためにつてちびちび飲んでいううちに半分を切つてぬるくなつたジュース。

木漏れ日しか差さないひんやりした日陰でひんやりしたものを飲んで少しばかり座つていてだんだんと暑さが引いてきた体と、さいわいなことに足の裏までしつかり着くくらい低い木のベンチのおしりに響く硬い感覚。

そして隣からは鬼もとい今井さんの気配と声。

あい変わらず僕は逃げられない。

逃げられないからトリップしていた。

でも戻つて来た。

戻つて来たから困つてる。

困っている。

困っているんだ。

どうしよう。

どうしようもない。



世界は残酷だ。

「そのときのその子の顔がまたとても嬉しそうで達成感にあふれていてですねー。あのようなすばらしい笑顔を見るとこの仕事をしていて、一緒にがんばってきてよかったなって感じるんですよ！ ふだんは地味な練習を遅くまで繰り返すのを続けてきただけあって上手くいったときの感動はまたひとしおなんです！」

「そうですか」

さつきから似たようなことを言い続けるのに一向に飽きる気配がない。

「それですね、先日の審査で起きたことなんですけど……」

「……………」

目もほとんど合わさないので平気そうにしながらずーっとこんな感じだ。

いや、僕がマジメに聞いてなくて返事も「そうですか」オンリーなのに気がついてないだけだこれ。

まあ今日はこの前みたいに「そのまま連れて行ってでも！」っていう殺気みたいなのは感じないし無理やりっていう様子でもない。

ちよつと拍子抜けだ。

せつかくポケットに入れっぱなしで邪魔なアクセサリーと化していたブザーが役に立つかもしれないのに。

無いと思つてたらこんなとこにあったのかつて言うの、良くあるよね。

使つたら確実に騒ぎになるし……つていうかそのためのものなんだけど、とにかくそうならなくていいことではあるんだけどさ。

でも、この変わりよう……もしかしたら萩村さんに言い含められたのかもしれない。僕が嫌がつているつて自覚したのかも知れない。

そんな奇跡。

……この人がそれを素直に聞くとは思えないんだけどな。

座っているのもベンチの端と端だし、一応はふつうの知り合いレベルの常識的な距離は取つてくれているし飲み物のおかけかときどき静かになつてくれるしで害は少なめ。

これくらいのマイルドな勧誘なら話だけは聞いておいてもいいかもしれない。

萩村さんも丁寧ではあるんだけど……なんていうかこう事務的すぎるつていうか、慣れてはるはずなのにいまいち僕へどこまで話すか迷いながらつて感じでもどかしいときもあるしな。

ふつうに接してくれたなら男同士つてことで気楽なんだけど今はガワがなあ……。

あの人もこのご時世でずいぶんと齒がゆい思いをしているに違いない。

だつてあの体格の男だもんなあ。

僕に近づいただけで通報されそうだもんなあ。

身長差倍だもんなあ。

かわいそうに。

今度会うことがあつたらもうちよつと話聞いてあげよう。

そんなことを勝手に思つたりして時間が経つ。

「それでですね、……………」

「……………」

ふむ。

よく聞かないようにしてるけどどうやらアイドル活動とやらの現場の話とかに切り替わってきたらしい。

僕の反応がオートになってるっていい加減に気づかれた？  
なら次は。

……………。

あ、あれ……………？

普通に……………本当に普通におもしろいな。

ドキュメンタリーみたいな感じに話してくる。

あのときのきんきん声とはまた違った落ちついた声を聞いているとまるで憑き物が落ちたような印象を受けるくらい。

さすがの話術。

ただこれには本当にあのとときの悪魔のような女性なんだろうか？

別人じゃないのか？

そう思うくらいだ。

人の印象ってこれだけで変わるんだな。

いやいや、「なーんて思っていたら……」ってこともありえるから慎重に警戒しよう。  
手法を切り替えてきただけかもしれないし。

人はギャップに弱い。

僕も弱い。

体験済みだし。

初対面でのあれから完全に方向性を変えて今度は興味を引き出そうとしているだけ  
かもしれないし。

危ない危ない。

危うくニートからアイドルへと堕ちる……かもしれないところだった。

ニートはニートだからこその存在意義を持っているんだ。

アイドルなんかになってみる。

思考まで塗りつぶされちゃって僕は僕じゃなくなるんだ。

「……………そういえば響さん。先日は大変失礼しました」

ん？

さっきまでの落ちついた感じがさらに落ちついている。

なんか落ち込むことあった？

僕が目を合わさないこととか生返事なの以外で。

そう不思議に感じて顔を見てみれば……………なんだか落ち込んでいるような？

静かにさえしていきたくれるのなら僕としては理由なんかどうでもいいんだけど。

「あのときはいつになく……………私の『勘』が働いてしまって抑えたくても抑えられなかったんです。迷惑でしたよね……………自覚はしてるんです。私、ああして『勘』が働くと歯

止めがきかなくなつて……………あのときも響さんとお別れしたあとでひととおり騒いで疲れ切つてから初めて我に返つて思い出して気がついた次第で。萩村からは響さんが

不快そうな顔つきをされていたつて教えてもらいました。面目ないです」

両手で持つていたペットボトルをことんとベンチに置いて姿勢を正した今井さんは……………なんと、軽くとはいえ頭を下げていた。

すぐに上げたけど彼女は成人している。

こんな幼児に対して真正面から頭を下げるなんてそうそうできないこと。

……………いきなり何言い出すのこの人。

困るじゃん、僕が。

困るじゃん、そういうのってさ。

対人関係経験が引きこもってリセットされて限りなくゼロに近いんだからそういう気まづいのやめて。

一応表情も声も本気で謝っているように見えるしおちやらけた雰囲気は皆無。

僕にはウソを見分けることなんて到底できないから演技されていたらどうしようもないけど……ここまでの変わりようが気にはなる。

それに、その『勘』ってやつ。

なんか意味深なワードに反応した僕。

なんかこう「魔法さん」に近い印象だし。

彼女が頭を下げてて顔が少しだけ近づいた拍子に気がついた。

どうでもいいんだけどやっぱり社会人だとお化粧するんだなあって。

最後に多くの女性を日常的に見ていたのが大学生のときだったけど、あのときはまだほとんどしていない人も少なからずいた記憶がある。

ド派手なのも結構いた気がする。

まあ他人は他人として認識していたからよく覚えてないけど。

でもお化粧がぱっと見て薄い感じなのはいいことだ。

あ、毛先きれいにしてる。

毛先ってすぐにほつれるよね。

僕も最近枝毛チエック忘れていた気がするし帰ったらお風呂のときに見ておこう。

じゃなくって。

「いえ、過ぎたことなのでもういいです。萩村さんに止めてもらいましたし。けど

『勘』……ですか？ そのせいで僕を執拗に？ あの群衆の中で？」

「あう」

さりげない牽制を放ちつつ聞いてみる。

勘。

女の勘ってことはないだろうしこの前みたかオーラとかそっち系かな？

女の人だし占いかで出てくるワードが好きなんだらうけど。

でも、日常でそういうのが出てくるとしたら……同世代だとしても女の人の会話に溶

け込む自身なくなっていくなあ……。

あれでしょ？

「分かるー」って心の底から納得しないと裏でえげつないくらいに叩かれるんですよ？

女社会って怖い。

男で良かった。

男って単純だから楽なんだよね。

僕が単純の代表だからよく分かるんだ。

「そうなんです。えっと、こういうの、経験したことの無い人には分かってもらいづらくってうまく表現できないんですけど……理解しやすい、してもらいやすいかもしれない表現で『勘』って知り合いには言っています。誤魔化しているとかじゃないんです」  
なんだか遠い目をしながらぐいっとしたペットボトルから、ぐつと喉を鳴らす今井さん。

汗が喉をつつーと流れている。

ああ、そういうえば女性は喉仏ってこんな感じでほとんどないんだっけ。

下から見上げて初めて見えた気がする。

萩村さんのはおつきかったからなあ。

あ、喉仏が。

前の僕のは……まあ標準的だったと思う。

もうあんまり覚えていないし写真を見ても証明写真しかなかったから確認できなかったけど。

でも特に高くも低くもなくってその辺に居る男って言う感じだったからどうでもいいか。



今井さんの口からの「ぶはあっ」っていう気持ちよさそうな声を聞いて僕もジュースの残りをちびり。

こくんとほんの少しずつしか飲めない、なんとかしたいこの体。

この生ぬるいつて言うよりはあつたかくなつているジュースが憎い。

「うまく。うまく言えないんです。けど別の言い方をするなら第六感とかインスピレーションとか……知ってます？ あつ、中学生なんですよね、ごめんなさい……そういう感じのものなんです。ほんとうに直感というか。ちようど視線を感じて顔を上げたら誰かと目が合ったあんな感じのものです。妄想とかじゃないって思いたいんですけど……私だけが感じる感覚なので。あの、済みません、分かりにくくって」

たどたどしくなるのがやけにリアルでとりあえず信じてみるけど、ああ、それなら分かるかも。

僕は靈感とか超能力とか魔法とか信じていな……かったけど、今でも魔法さん以外は信じてないけど、人の視線なら嫌というほど感じてついさつきにひどい目にあつたんだしな。

今は魔法の存在までしつかりと毎日この身で確認しているからな。

直感というものがあつたとしても魔法よりかはずつとよっぽど現実的だし。

交換してくれないかな。

君なら……えっと、今の僕くらいの歳の少年になれそうだよ？

魔法さんの性質的に、多分。

「なんとなくでも結構です、分かってくれますか？」

「なんとなくでしたら」

「よかった、知り合いには何人か『自分も経験がある』って言ってくれる人もいますけど、たいいていは変な顔をされるか笑われるかするだけで……」

だろうね。

女の人同士の話じゃないと「女の人ってそういうの好きだねー」って適当に流すだろうし。

僕ならそうする。

「……私。少し前までは靈感みたいなものとか一切なくって、そういうのを信じていなかったんですけど……働き始めてしばらくしてからもう何回か。人目を引きつけるなにかを持っている人を目の前にすると、こう、どこかのアンテナにびびつと来るんです。あの感覚はちようど……どこか知らない別のところから来るような『なにかの力』。電波……そういった感覚です」

電波。

電波さん。

そういうことか。

……………冗談だ。

今井さんが頭がばーな電波さんだっと思っていいんだけど、この変わりようだしな。

今のぐてつとした今井さんを見ているとあそこまでエキセントリックな言動こそが特殊な、その『勘』とやらによつてヤバい人にさせられていたって考えるほうが自然だと思えてくる。

ハサミが飛び回るのに比べたら現実的だしな。

こうしていれば普通に話しやすい人なんだつても知った。

「…………この感覚、ほんとうに急に知ったのでまだまだよく分からないんです。分かっていることといえば、すでに人気が出ている子やスカウトされたばかりでも人気が出そうって感じる子の何人かという感じで。だから、まったく関係のなかった響さんを見たときにこれを感じて舞い上がってしまったていたんです」

「そうなんですか」

くびりとジューズを最後まで飲みきる。

うん、その勘つてやつは錆びついてるよ。

僕に反応する時点で何かエラー起こしてる。

こんなことを話していても静かだし迫つてこないしで、とりあえずは強引に引つ張つ

ていけないだけで今井さんって言う人は嘘をついてたり頭がおかしいって言うわけでもなさそうっていうのは分かる。

演技じゃなければな。

疑い続けてもしようがないんだけどあのときのあれが僕のトラウマになっているんだ。

それくらいは勘弁して欲しい。

「……………」

多分圧倒的多数なごく普通の感性を持った、さらに女性って言う性別の今井さんにとつては気まづい沈黙。

圧倒的少数派な僕にとつてはとっても安心できる静寂。

蝉の声とスポーツしてる人たちのかけ声と自転車の音が途端にうるさくなった。

## 15話 困惑：「勘」 2/2

やっぱり外でのんびりするのって良いよね。

隣に座ってなんか意味深なこと言ってた今井さんのことを気にしないで少し楽しんでた僕だけど、事務員さんの格好をしている彼女は軽くうつむいてため息をひとつ。

やっぱり女の子って演技過剰だよね。

けどそうしないと伝わらないのも知ってる。

「……私自身、占いとか。そりゃあ他の知り合いの人たちと同じくらいには好きです。好きですけど、それは盛り上がれるからなので別にそこまで信じていたわけじゃないんです」

おや意外。

てつきりJKさんみたいに頭の隅っこまでお花が咲いてるかって思ってた。

「なのでこのあいだまでは、この感覚はたまたま錯覚しているだけだと思っていたんです。……けど、その。そこへ響さんが現れてしまったんです。とつても強くて歯止めが利かない響さんが」

え？

僕のせい……？

僕のせいなの？

なに人のせいにしてしようとしてるのこの人……？

じとつと見ようとしたら今井さんはハンカチを取り出して首を伸ばして「ふうっ」ってまたため息つきながら首すじを拭う。

なんだかよく分からないけどしばらくぼけーって見ちゃって、そう言えば僕も体じゅうから汗が出てるなあって思う。

僕もタオル持ってくればよかった。

リュックごとぜんぶ預けたのはちよつと失敗だったかもな。

きつとベンチにも汗がぐっしよりと染みこんでいるだろう。

夏だもんな。

前に通つてたジムでも夏はタオル使つてたりしたし、今度から外に出るときは持つて出よう。

女子的にはハンカチが必要らしいからな。

b y、JKさんが教えてくれた雑誌。

「響さんを見たときのそれはそれほど強烈だったんです……響さんが迷惑そうにしてるのにも気がつかないほどに。気がつけなかつたんです。普段は事務所に来る

みなさんの体調管理とかをお手伝いしている私なのに。まるで……なにかから体を動かされているような、取り憑かれていたかのような……私を私の外から見ていた感覚です」

なにそれこわい。

「あれはかなり。思い返してから気づきましたが……かなり怖いものだったんです」「そうですね」

けど多分魔法さんより怖くないって思ったら平気になった僕。

帰ったらざっとシャワー浴びてすっきりしたいな。

持ってきた着替えも家につく頃には汗だくだろうし。

「この感覚をスカウトに役立てられるって素直に喜ぶことができればいいんですけど……」

大切そうな話じゃなくなつて女の人特有の肝心な話の前後に挟む時系列的なテンションになったから適当に聞き流す。

……それにしても女の子も女性もどうして一方的に話をしていても平気なんだろうか。

これまでの経験で「そういう生き物」だつて知っているから諦めてはいるけど、不思議なのは不思議だ。

だって普通会話なんて交代でしょ？

なにか話したいことがあってお互いに話すでしょ？

なのに女の人相手になると途端にそのリズムが崩れてどうしようもなくなる。

大抵は押し込められる。

僕だったら返事が少なかったらまず不安になってくるのにそういうのは平気らしいし。

会話なんて同じくらいの量を交互に繰り返していたほうが楽しいって感じるのにな。

意味のない会話を延々とするのも不思議。

僕はそういう非効率的なこととはできないからなあ。

まあ人の話を聞いているのは楽だからいいけどさ。

こうして適当に聞き流せるし。

「……………」

脚をぶらぶらさせる。

自分語りをしたって気持ちはあんまりよく分からない。

体は完全に女の子になっているけどやっぱり脳みそはそのままなんだろう。

あるいは魂とかの問題なんだろうか。

そもそもそんなものがあるのかは分からないけど。



まあ現実世界で男が少女に変貌するんだしハサミも物理法則に乗っ取って宙を舞うんだ、魂くらいはあるのかもね。

そう思うとちよつと安心するしな。

だって、この体に入ってる僕は男の魂ってことになるんだから。

「私はそこまで外に出てスカウトする機会もありませんし……最近ほとんどネットですし、ね。私、もともとそんなに積極的な性分でも積極的にする理由もありません。……あ。そういうえばこの『勘』、今日もうつすらと働いていた気がするんです。だから響さんに会えたのかも」

ほ？

「……………」

なんだか急に運命論的なことをほざきだした今井さんからちよつと距離を取る。

今さんと僕のお尻のあいだが拳1個分くらい遠ざかる。

いや、僕そういうオカルティックな話はもうお腹いっぱいなんで……。

「ここに来る前に……事務所に断りを入れてまでなんとなく置きっぱなしだった運動靴を履いて。いつもは同僚と食べるお昼をひとりで食べてそのあとに歩いて……：そうですね、3、40分くらいでしょうか？ それくらいあるここへどうしてか歩いて来た

くらいなんです。その最中も『そうしなきゃいけない』って気がして……」

やだなあ、背筋がぞくつと……あ、汗のせいだろうきつと。

うん。

でもずっと聞き流していたけどちよつと待つて。

それ、とつても怖いものじゃない？

良く平気だね？

そんな勘とかいうものが働いちゃったら、僕だったら怖くてびびって引きこもるけど

？

間違いなく。

「……今はどうなんですか？　僕と会ったあのときはかなり大変だったみたいですが

ど」

僕もすつごく大変だったけどつて暗に伝えてみる。

「今ですか？　……んー、そこまで強くないですね。いろいろな人たちに会つてとき

どき感じるくらいのもんです。なんていうか『今はそのタイミングじゃない』つて感

じるんです。不思議ですね」

今度は首をかしげる今井さん。

彼女に釣られて不思議だねーつて僕の視界もちよつとだけ斜めになる。

……僕の大変さは伝わらなかったみたい。

でもそういうえば、あのときもやけに「このタイミングじゃないとダメなんだー」とか  
なんとか言っていたっけ？

まるで洗脳されたみたいな感じなんだな。

いや、熱に浮かされた感じ？

「それに、響さんはああした強引な感じはお嫌いでもものね」

「はい」

うん、だいつきらい。

「……こうして冷静におはなししていれば、それくらいは私にだって分かります。こ  
れでもたくさんの子たちを担当してきているんですから。ふだんはこうなんですよ  
？」

「そうですか」

「ふだんは」で急にずいっと彼女の顔が近づいて来たから反射的に同じくらい体を反ら  
す僕。

びつくりするしやな気持ちになるから止めてほしいな。

人には入られたくないゾーンってのがあるんだって知っていて欲しい。

「響さんはきつと、人から指図されてモチベーションが湧くタイプではないですよね？」

「ご自身の内から興味があれば自然と湧いてくるタイプ……合ってます？」  
「……………」

「あ、これはもちろん私が今思いついたわけじゃありません。萩村と話していてそう  
だろうってなっただんです」

勝手に近づいて来て勝手に人の内面を探って勝手に近かった顔が離れていく。

……うん、やっぱり元の僕よりも年下だと思う。

お化粧も汗で結構落ちてたからはつきり分かった。

慣れている様子だし、新卒で働き始めて2、3年つてところかな？

そんな推測をしつつも萩村さんっていう安心できる名前が聞こえてきてそういうこ  
とかって納得。

会って大して話してもいないのに、こんな短時間でそこまで探られたってことになっ  
たらもう二度と、どんな手を使ってでも会わないようにしていたところだ。

だって怖いもん。

サイコメトラーとか怖いじゃん。

ホラーとは別の方向性で……ほら、こうやって考えてることが丸裸なのはヤだし。

「もちろん。もちろん私たちはいつでも響さんを歓迎していますよ？ 先ほどから真

剣に聞いてくださっているみたいですし……どうです？ ちよーつとエアコンの効い

たお部屋にでも……」

「結構です」

「ふふ、冗談ですよ。私ももうすぐ戻らなければなりません」

「……………」

何がおかしかったのかくすくす笑いながらペットボトルを一气飲みする今井さんのどろろと音がきゅきゅ鳴っている。

……目つきとかが冗談には見えなかったんだけど……思い直してくれてほつとする。

一瞬だけ声も視線もガラツと変わっていたし、肝心に捕食者の目だった。たぶん安全にはなっているんだろうけど油断はできない。

危ない危ない。

この人はやっぱり危険な人だから警戒を解いちゃダメなんだ。

僕はスカートのポケットの中で汗ばんだブザーを握りしめ直した。

◇

「……………」  
「……そうですよねー？ ……くす、それにしても今日の響さんはおしゃれ、していますよね。

シックな色合いですしきれいな髪の毛とてもよく似合っています。あ

のときみたいなストリート系でボーイッシュに……あ、それで髪の毛もしまっていたんですね？ そのこだわり、やりますね……なのもかつこよくて好きですけど今のよう可憐な感じもまたお似合いです！」

「どうも」

話が長いから聞き流す。

「……どうです？ 読者モデルなんかから」

「お断りします」

「……響さん？ なんだか雑になってきていませんか？」

「気のせいです」

「ほんとうでしょうか……」

「ほんとうです」

ばれてきた。

まあいいけど。

でもボーイッシュなストリート系……そういうファッション用語になるのか。

いつもみたいにぼーっと別のことを考えたり返事に悩んだりしないで即答を続けていたらそういう印象に映つたらしい。

会話というものはいまいち難しいもの。

けど、話していて分かってきたことがある。

女性の言う「かわいい」「かっこいい」とかいう褒め言葉、こういうものは「とりあえず対象の人がマイナス評価じゃないよ」「って伝えるためだけのもの。

文脈次第では多分ぜんぜんかわいくなくても「かわいい」って言うんだらうって。

中には「自分と比べて」って人もいるらしいけど、ひとまずは最近会った人との会話ではそういう雰囲気は感じない。

で、何が言いたいのかっていうと……褒め言葉は真に受けすぎないほうがいいだらうってという悲しい事実。

とりあえず相手を褒めるとか、ちよつといいところがあるとか……そんなときにでも使うんだらうし恐らくは僕に対してもそういう意味でたびたび言ってくるんだらうし。

この人相手に油断しちやいけないんだ。

スカウトといったって雑誌とか見ていたら僕的には「ふつうじゃない……？」って人もよく出ているし見た目がどうかというわけじゃなくって性格とかを含めた総合的なっていうのはもちろん……それこそ「たまたまタイミングがよかったから」「なんとなく」っていうのもあるんだらうし。

今の僕は珍しいっていうのもかなりあるんだらうし。

……考えすぎだって思うけどそう思っちゃうのが僕なんだからしょうがない。

特に今は見た目らしい……いや、ちよつとだけ盛ってるけど今風のJCっていう存在に擬態しなきゃなんだから女の人と女の子の考えが理解できないとまずいんだ。

暑いから2本目になってしまった冷たいものを手に取る。

断るヒマもなく手元に置かれた薄味のスポーツドリンクのペットボトルだ。

ちっちゃいやつ。

この体になってから普通のサイズのペットボトルが大きいつて感じるのが悲しい。

賄賂な感じがしたから「要りません」って言ったけど置かれたし……喉、乾いて来ちゃったしな。

……はじめっから缶を避けておいたらよかったな。

そうしたら今井さんに見つかる心配も……いや、その勘とやらが働いてこつちを見られてしまったらたいして変わらなかったのかもしれない。

未来は変わらないんだ。

なーんてこの前見たSF作品の分岐地点を思い出す。

ペットボトルのフタにも種類があるから硬いやつは開けられなかったこともあったし、そういう意味でも未来は変わらなかつたんだろう。



……力を入れてもフタは動かない。  
ただ僕の手のひらが痛くなるだけ。

……知ってた。

でもムキになって開けようとするすると手のひらが真っ赤になってひりひりして手首を痛める。

男のプライドですでに何回か家で試して手首を痛めたから確実だ。

握力まで貧弱なんだ。

「ふだんはどちらの格好をされることが多いんですか？」

「？」

「今みたいなガーリーと、この前のボーイッシュユツ。私はどちらでも似合っていると」

「あのときのです。これは知り合いに勧められて仕方なく」

あ、ようやく開いた。

ひりひりする手を涼しい顔して隠しながら思う。

……なんか、やりづらいなあ……。

この前みたいにしつこくぐいぐい来ると思ってた身構えていたのに来なくって、距離も取ってくれてそこまで強く詰め寄ってこない。

常識的な、ふつうの大人に近くなっているからちよつと拍子抜けになっている。

まあさつきのが常識的かといえはそうでもないんだけど、知り合いに対する程度の強引さと言えはそうなるのかもしれない。

んー。

判断に迷うなー。

近づいて良いのか、いざつてときに頼つてもいい相手なのか……なにしろこの数年つて言うもの他人に頼つた経験がないからよく分からない。

大半の人間は善意で助けてくれるつて知ってるけど……世の中には悪い人もいるからなあ。

「っー」

「あら」

ぴびぴつとアラームが鳴ってびくつてなつたけど、僕のじゃなくて今井さんのだった。

こうやって驚くと冷や汗がぶわつと出るから嫌いだ。

止めてほしい。

「……すみません。すっかり長話しちゃいましたね。そろそろ戻らないといけませ

ん……つていうかちよつと遅刻ですわね」

てへペろつてのをするあざといさん。

「今日は響さんとお話しできてすっごく楽しかったので時間、忘れちゃいましたっ」

僕が普通の男だった状態で普通に出会って普通の会話をした後だったら多分どきつとしただろうセリフも、幼女な僕には効かない。

時間……僕にとつてはとつても長かったけど？

僕は戦々恐々としていたから。

ぜんぜん楽しくなかったから。

でもほつとする。

「ランチのあとの散歩のつもりでなんとなく勘に誘われてきてみたら響さんにお会いできて。あのときの誤解も……ええつと、あれはふだんの私じゃないんだって伝えることができて。響さんを今すぐに何が何でもーつという訳ではないとお伝えできてよかったです」

本当……？

嘘じゃない？

そんな僕の疑念なんて知らない今井さんは立ち上がるとペットボトルを捨ててに行く。肩の左右に揺れる後ろで結っている髪の毛がやつぱり犬の尻尾にしか見えない。

結んだ位置の問題かな？

これからは犬さんと呼んであげようかな。

でもこの雰囲気。

どうやらほんとうに連れて行かれずに済みそう。

「響さんはどうでしたか？ ……お嫌ではありませんでしたか……？」

「……はい。 僕も話を聞けたので、まあ……よかったです」

「そうですか！ それはよかったです！」

なんか不安げだったからリップサービスしただけなのになんだか嬉しそう。

ひやひやしていたからストレスは感じていたけど、それでも参考になることはあったからまあ許そう。

話し方も話の持っていき方もうまいからな。

話術というやつだろう。

僕に2番目に欠けている致命的なものだ。

いちばんはもちろん質量だけ。

働いたら自然とこうなるんだらうか？

いや、口が達者なのはもともとだろうな。

女の人が話し好きなのは本能だし。

僕が働いたとしたって地味になる将来しか見えない。

「では失礼しますね。 また何かありましたら……何もなくてもお話するだけでもい

「いのでご連絡を！」

「はい」

何歩か歩いて振り返る。

「お待ちー！」

「はい」

また何回か尻尾をふりふりしてから振り返ってちよつと大声。

「してきます!!」

「はい」

最後にうるさく言い切って満足したのか、ようやく離れて行ってくれた。

.....

「ふひー.....」

会話って言うものに疲れた僕はぐてーってベンチに寝そべる。

汗で濡れたスカートが木にくっついてふとももがけっこうぎりぎりまで見えちゃつてるけど誰も居ないから気にしない。

女ならまだしも僕は男だからな。

あ、でも、視界に入った視覚的な刺激がなかなか.....

今井さんが遠くでもう1回だけ振り返って手を振ってきた以外は小走りで戻ってい

くあたり、さっきのはほんとうに演技とかじやなかったらしいなって思う。

……けど、あのスカートじゃたいして急げないだろうに。

働いてる女の人が良く穿いてる脚が広がらないスカート……何て言うんだろうな？

それで動きづらそうに小走りを続ける彼女を見るともなく見る。

……やっぱり尻尾かぶんぶんしているようにしか見えないな。

「……………」

……急に静かになった気がする。

さっきまで座っていたベンチにはふたりぶんのおしりのあと。

大きさはまるで違うけど。

僕のが小さすぎるだけだ。

「……………帰ろ」

ふとももの付け根くらいまで上がっていたスカートの裾がベチャってふとももについて、なんかやな気持ちになったからそそくさとスカートを下ろしながらベンチから腰を上げる。

なんだか休みすぎてやる気がなくなつたし話して精神的に疲れたもん。

幼女の身での運動なんてここまでで充分だろう、うん。

今日がんばりすぎて2度と来たくなくなるよりは、ほどほどにしてまたなんとなく来

たくなるのを待ったほうが結果としてはいいはずだし。

あと、暑さに負けて2本分も飲み物をお腹に入れたせいでたぶたぶして苦しいし。そんな言い訳を僕自身しながらとぼとぼと歩き出す。

そーつと歩いていないと飲んだジュースがそのまま口から出てきちゃいそう。

動かしすぎたせいで口も疲れているしガマンできないだろうし。

……………一応トイレは意識して歩こう。

町中で悲惨なことになりたくないし。

この歳でお漏らしなんかしたら多分1年くらい引きこもるし。

どうしてか我慢が利かないんだ、この体。

やっぱり物理的に短いからな？

歩き出すと足の裏がじんじんする。

ぱんつとスカートがおしりに張り付くのが気持ち悪い。

腕が重いし肩が痛い。

ずいぶんと悲惨なことになっている様子。

ゆっくり、ゆっくりと帰ろう。

トラックの流れに逆らって歩いていると、彼女との会話がなんとなく浮かんで消える。

悪魔から人へ、そしてそこその常識人へ、そして犬つころへ。

……でも、人の印象なんてたったの1回の会話で変わるんだな。

最近よくそういうの実感しているし今のも1回の会話にしては多いほうではあったんだけど、それにしたって……なあ。

節操なく強引に引きずっていきそうな雰囲気から一転、ちよつとスピリチュアルな感じだけど話せなくもないワンころに。

またどこかでばつたり会ってたととしても、とりあえずは全力で叫んで周りに助けを求めらるっていう用意をせずに済みそうでひと安心だな。

「……………」

びたつと足が止まる。

……え……もしかして僕って相当ちよろかったの……？

たったあれだけの会話でちよつとでも絆されている気がする。

対人経験の少なさがネックなんだ。

え、あれ？

そういえばニートになってからまともに話をしたのって、この体になってからじゃ？

最近はやけに……最近って言ってもこの3ヶ月の内の何日かに集中してだけ。

いやいや、もっとあるはずだ。



いくら僕だつてそこまで話さないだなんてありえないし。  
そう、たとえば。

たとえば。

.....

.....ご近所の何人かと1回限りの店員さんと旅行先の何人かくらいしかなかった。  
それも自己紹介と近況報告程度。

「.....がんばろ」

これまでがさすがにちよつとまづかったのかもしいない。  
そんな収獲片手に.....僕は家までの長い道のりを思い出してよろけそうになった。

## 16話 学生たちの、夏休み(1) 1/3

とうとう世間。

っていうか学生たちは夏休みっていうスペシャルな期間に入ったらしい。

良いよね、夏休みと冬休みと春休み。

なんで秋は無いんだろ。

シルバークウィークはなんか違うしなあ。

まあ僕は毎日が夏休みの最終日だからあんまり関係ないんだけど。

ああいや、ふらつと出かけて何日か泊まってつてことができた成人の男だったときには関係あったか。

ホテル代とか夜行バス代とかフェリー代が乱高下するもんな。

閑散期こそが狙い目だ。

とにかく夏休みというのを何年か年ぶりにテレビとかよりも前に知ることができたわけだ。

だってメル友……古いかな……な関係の現役JCさんたちにとっては試験が終わるイコール夏休み。

直前の1週間くらいは授業も少なめで実質的に夏休みに近い気分だったからって普通の倍くらいうざったかったし。

そういう会話が飛んでできていたから思い出した、とつくに忘れていた感じの僕の懐かしい学生生活。

たいした思い出はないのに歳を取ってくるとただただ昔が懐かしいって思えるのが不思議だ。

歳を取ったって言っても高校を卒業してから換算だからそこまでじゃないけど。

それが今はこんな子供になって幼くなつたもんだから余計に老けたように感じる不思議な感覚を味わってた僕。

不思議だよなあ。

まあ縁もゆかりも無い少女に変身するわハサミが空中遊泳するわな方が不思議かも知れないけども。

それにしてもちっこい関澤さんもでっかい下条さんも楽しそうだなにより。

僕みたいなプロのニートってのは年中有休な感じをずうっと満喫しているわけで、これまでこれからも緩急のない緩慢な時間を過ごすだけ。

それに比べて真面目な学生さんってのは年から年中無理やりに大人数の空間に閉じ込められて親や先生たちの言う通りに過ごさなきゃいけなくて、したくもない勉強と

か試験とか課題とかいう苦行をさせられるから大変そう。

同情はするけど僕もやったからなあ……。

「がんばって？」ってしか思えない。

学校って大変だよな。

「友だち」とかいうものを作らないと休み時間とかがさらなる苦行の時間になるシステムだし。

集団生活って言うのはそういうものだ。

僕みたいに月に何回か誰かと適当にちよつとだけ話せばいい人種にとっては拷問のような空間だけど、多分必要なんだろう。

だって高校以降はその「友だち」ですら自分から合いそうな人を動いて探さなきゃいけないんだもんな。

強制的じゃないもんだから隣の席に座った子に話しかけるタイプの人間じゃなければほんつとうに話す人が居なくなる。

そうして気がつけばぼっちっていう存在になる。

積極的ぼっちと消極的ぼっちのどっちが良いんだろうね。

そんなわけで解き放たれた学生さんたちが暑くてしょうがないこういつたときくらい羽目を外したくなる気持ちはよく分かる。

常識的な範囲で外すのなら問題も何もないしな。

それは分かるんだけどとにかく相手するのがめんどくさい。

うるさすぎてとつくに常時マナーモードにはしているんだけどちかちか光るしなあ。

あんまりためすぎると読むのだけで10分くらいかかるしなあ。

子守は大変だ。



若い人は気が短い。

肉体年齢で言えば僕がだんとつに若いんだけど心はわりと元々の同年代よりも上な感じ。

つまりは精神的な体感時間の密度が違うんだからしょうがないんだ。

「……………うーん?」

この体になってそうとう幼なくもとい若くなつたはずなのに体感時間はそれほど変わったようには感じない気がする。

もともとだるだるしていた時期を除いてはわりと毎日毎日が濃かつたようにも感じていたし、その辺はやっぱ個人差なんだろう。

ニートつて続けられない人もいるみたいだしな。

僕にはニートになる素質と資格があったっていうことだ。

多分お金がなくてもバイトとか派遣しながら似たような生活してただろうし人の根元は変わらない。

毎日それなりに知的好奇心を満たしたりしているからなんだろうか？

本を読んで家事を自分でして散歩とかしてお酒呑めば幸せだもんな。

まあいいや。

そんなわけでメロン下条さんやレモン関澤さんがヒマになったこの夏休みっていう時期。

この1ヶ月くらいの期間、華の中学生相手にたつたの2、3回……今までみたいな頻度でちよつとだけ話すだけだったら愛想を尽かされかねない。

元々特に近所に住んでるわけでもなければ同じ趣味が……関澤さんとはあるけどそこまででもないし精神的にも同性でもないから温度差も結構ある。

なんでか僕に興味持ってくれてあつちから毎日怒濤のつぶやきをくれるけど……でも多分充実した夏休みつてのを楽しむだろう彼女たちをほつとくと愛想を尽かされるんじゃないかなつて思う。

それは困る。

ともかくにもこのエセ中学生な設定で面と向かって話ができて、なにより最初っから自己紹介し直さなくていい関係っていう貴重な知り合いを失う可能性があるのはいいだけない。

相手は多感な時期のおしゃべりで生きているぴちぴちの女子中学生だ。

アラームを駆使したり「この後は約束が……」とかで長くても30分会うだけなのは彼女たちの反応を見てもそろそろ限界。

そろそろ学生っぽい距離で学生っぽくだらだら話しながら会う時間を増やすかお引き取り願うかの境目に来ている気がする。

僕としてはこのペースがいいんだけど……性別も年齢も性格もなにもかも違うからしょうがない。

出かけるたんびにめんどくさい人と知り合うから男で中学生くらいの子とも知り合えそうって思ってたけどそんなことはなかった。

僕みたいに休みの日は家でじつとするタイプで本とかについて語れる相手が欲しかったのになあ……。

まあ無理なら別にどうでもいい。

これで何年もやって来てるんだし。

そんなことよりあの子たちを放置してたら僕の方がなんと会いにくくなって来

てそのままフェードアウトしそう。

気がついたらもう忘れ去られて「あなた誰？」とかいう風なことにもなりかねない。そんなこと面と向かって言われたらいくら僕だってしよげる。

1年くらい寝込む。

ぼつちなことを思い出してちよつと落ち込んできたところで、だるんと起き上がった僕は体の力を抜いてぼふんつてクッションに埋もれる。

「う——……」

さらさらという音。

あー気持ちいい。

お気に入りになったビーズなクッションに顔から突っ伏してダメになりながら1人で勝手に想像して1人で勝手に傷ついて1人で勝手に癒やされよう。

この体の何がいいって、顔のあぶらとか汚れとかぜんぜんないから気にしなくてもいいこと。

多分中学生になってにきびが……とかになる以前の幸福だ。

おかげでこうして枕とかシーツとかクッションとかに顔をうずめたって一向に汚くも臭くもなりはしないしな。

気をつけるのは寝落ちしたときのよだれくらいだ。



寝落ちには気をつけなければならぬ。

この体はわりと寝落ちするからなあ。

「む………」

脚をばたばたしたりしながら癒やされてきたから考える。

そんなわけだからって、ここのところ気合いを入れて結構頻繁にお茶したりお昼食べたりしながらあの子たちと会う努力をしている。

でも僕は用事をまとめて片づけるタイプだからおんなじ日に近い場所で時間をずらして会うことにしている。

話が長引いたりして危うくニアミスしそうになつたりもするけど、今の僕は現役のDCってやつってことにしてるから多分大丈夫だよ。

おかげでまだ忘れ去られてない代償に僕らの精神はものすごく、ものすごく疲れている。

暑さも地味に効いている気がする。

夏バテかもな。

幼女だし。

なんだかだるいから「次の約束してたのキャンセルして良いかな……？」って言うとなんかわけわからぬジュリアアプリーを無言で見せつけられるから女の子って怖い。

年下なのに言葉に表せない恐怖が芽生えるんだ。  
女の子って怖い。

それでも「やだ」って言えない。

女子中学生にすらNOと言えない僕の心の弱さ。

というよりも何回か言ってみただけものすごく反発されてしぶしぶ引き下がったというのがほんとうだけ。

やっぱり僕は押しに弱いみたい。

気をつけないと。

でも上からのぞき込まれて声が上から降ってくるとなあ……体格差で抑え込まれるんだよなあ……。

この低身長が憎い。

「ぬー！」

ばたばたと全霊を込めて憎らしさをクッションに発散。

でも大した力は発揮できない僕だ。

もふもふな感覚に癒やされてなんとかがんばれている現状だけど、これでも前よりは  
ずっと耐性も体力もついてきているのは感じているし……こんな僕でもちよつとは進  
化できている感じ。

現役JCたちに比べるとまだまだただけだな。

それもこれも実質的幼女なこの体が悪いんだ。

食っちゃ寝しているのに体重も微増したと思ったら減って戻るしな。

「……………え？」

もしかして成長期はまだ来ないの？

いやいやそんなこと無いはず。

ほら、胸だつてちよつとは……………なかった。

「……………」

揉めない胸は胸じゃない。

足元に転がっている別のクッションを蹴り飛ばそうとして失敗した僕はずてつて床に転がる。

髪の毛が散乱している。

なんなら口にも引つかかっている。

シャツがめくれ上がったおへそが寒い。

スカートつて破廉恥な格好だよなあ。

どうしようもない。

めんどくさいなら2人まとめて相手しようつて考えみたこともある。

せつかくだし一緒にたにしちやえばふたりで会話していてくれるだろうして。

だけど毛先が内に外にとくるくるしているのとストレートにさらさらしているのが学校帰りだったときに知ったんだ。

おんなじ制服着てるって。

だからたぶんおんなじ学校の同学年なんだろうしなおさら良いって思ったんだけど……おんなじ空間に居るうるさいのが倍になったら騒音の相乗効果で僕が瀕死になるのに気がついた。

危ないところだった。

思いつきで動く危険なんだ。

だから別々に会うしかないから週に4回とか6回とか会話する時間があるわけ。

話をするのにどうにかしてくつついていくのに精いっぱい帰ってきたらくたくなるわけ。

いつも帰ってきたらそのままこうしてシャツとぱんつ以外をさっさと脱いじやって30分くらいは眠らないと動けなくなるしな。

はじめのころは帰ってから翌朝までぐっすりだった。

それを思えば相当に……確実に耐性がついてきているって思う。

けど……なあ。

先は長い。

「む……………」

もう1回クッションにへばりついて潜って幼女な敏感肌で全身で快感を味わい尽くした僕。

慎重に体重をかけないようにして抜け出ないとビーズのさらさら具合に負けてもうしばらくふかふかして無限ループだからって、そろりそろりと体を離す。

「ふう」

エアコンの冷たい風がひんやりと来て気持ちがいい。

「うむ」

部屋の隅にある姿見、前の僕の背丈な鏡には髪の毛をぼさぼさにした銀髪の幼女。気がつけば部屋に置くようになっていたけど……あれ、なんでそうするようになったんだっけ？

「……………?」

ちよつとフリーズして考える。

なんでだっけ？

「……………」

何でか分かんなかった。

まあいいや。

そんな鏡を前にちよつとズレた下着姿で乱れた銀色とクッションでもふつたおかげで桜色になっている顔と肌を晒している幼女な僕は実に扇情的……じゃない。

クッションをぎゅつとしているとなんだかすぐに息が上がるこの体。

地味に運動になっているのかもな。

だけど、こんな格好になっても扇情的にはあと5年は足りない。

色気が壊滅的だ。

くびれすらない寸胴だもんな。

いや、僕の子供のころとかと比べると人種的にはほつそりしてるんだけど……最近会ったメロン下条さんとかお犬様の今井さんとかと比べると肩と腰とお尻のラインに差がありすぎる。

悲しい。

悲しいから成長してくれないと困る。

魔法さん、お願いします。

僕は祈った。

でもその後でやっぱ元の体に戻してって頼み直した。

「……………」

ぺたぺた足音を立てながら冷えた体をクーラーが効いてなくなつて良い感じに蒸し暑い廊下であつたためる。

ま、9月になるまでだし。

正確には8月の最後の週になるまでかな？

今どきの子たちは9月に入る前に学校だもんな。

それまでの辛抱だ、がんばってみよう。

期限があればなんとか持ちそうだしな。

もうひとふんばり。

将来……:できるかどうか怪しくなつたけど社会人として隅っこに出る予定なんだからちよつとはがんばつて会話に対する耐性をつけよう。

でも、昔は夏休み宿題つていえば8月31日の夜中つて決まっていたものだけど今はそうでもないらしい。

かわいそうにな。

◇

「やあやあひびきんひびきん、おっはよー!」

僕の名前を「ひびきん」って呼ばれたのは学生時代を通り越して初めてだ。  
どういう言語センスをしているんだろ、この子。

「つて、やっぱり見てもそのカツコ大変そうだねえ——……肌を出せないつてこの季節はほんとうにつらそう。 見ているだけで私まで響の暑さが移っちゃいそうだよ」

「慣れているからね」

「……私にはムリそう」

「慣れだよ」

「そんなもん？」

「そんなものだ」

そんなどうでもいい会話をしながら、改札の近くで先に待っていた……夏だつていうのに心なしか髪の毛が伸びている関澤さんのところにたどり着いた。

あいかわらずこういうところってほんとうにぎわわわしている。

夏休みなのにこれって、年齢層がいつもより低めだからか？

僕としては視界が開けるからありがたいところだけでも。

平均年齢が低くなってるからなんとなく紛れられるしな。

そんなわけで今日は関澤さんと会う。

でも「小さいもの同志」とは言ってもこうして真正面に立ってみると身長差は歴然と



している。

真ん前を見るだけだとちようど彼女の慎ましい胸元になるしな。

見ようとしてるんじゃない。

視線がデフォルトでそこになるんだ。

僕は悪くないし僕に少女趣味は無いから大丈夫。

髪の毛が肩にふわりと乗っている感じになりつつあるレモンさんとはにかく涼しげな格好。

肩から胸元まで結構大胆な、汗を吸うと下着が透けるくらいのシャツと短めのスカート。

良いなあ。

できるなら僕もこんな格好をしたいし……したら涼しいんだろうなあ。

僕なら下着はただのシャツで充分っていうか着なくてもたぶん誰にも気づかれないくらい胸だからそれはとつても悲しいことなんだけど、とにかくそんな感じだし輪をかけて子供体型だしな。

ここまで短いスカートだと風が吹いたら見えちゃいそうだから僕ならもうちよつと長めにするけど。

この身長だとちよつとかがめば覗けちゃうくらいだ。

興味は無いからしないけど。

それにしても……いくら準子供体型だからとはいってもそのふとももはあんまりよくないんじゃない……？

派手すぎない……？

変な男寄ってこない……？

最近の子ってみんなこうなの……？

僕は心配で不安になる。

僕が男だからなんだろうけど女の子のふとももってのは視線が吸われる物質だって本気で理解している。

それは男の劣情つてのをかき立てる存在……らしい。

僕は大丈夫なんだけど不安になって、彼女の普段の制服姿を見慣れているから余計にそんなことが気になってしょうがない。

ちなみに彼女も胸はレモン未満な同志だからそちらの方は心配が要らない。

今見えてるのも見せブラってやつらしいし。

まあそんなの知らない男にとってはそれだけで嬉しいんだけどな。

悲しい性だ。

その性はいつか、どうにかして取り戻したいもの。

でも今はその当てがないんだから素直にこの子を守る心意気で行こう。

変な輩が寄ってきたら……どう見ても小学校高学年なファツションにもなってる関澤さんをかどわかそうつてするロリコンが来たらブザーを鳴らしてやるんだ。

見た目は幼女でも中身はこの子を守る男。

その心意気でいきたいところだ。

「なんか今日は元気だねえひびきん。良いこととかあったん？」

「いや？ 別に」

「そっか」

## 16話 学生たちの、夏休み(1) 2/3

「じゃあさ響、とりあえずビルン中に入ってまた適当なところでいい？ 私、お店とかスイーツとかあんま詳しくないからいつもおんなじようなところでごめんね？ 女子力低いのよ」

「別に。 僕も同じだしそうしようか」

「うんっ」

そのときの気分次第で僕の呼び方を変えるゆりかが言う。

でもなるほど、女子力。

よく耳にするけどまさか僕自身のことになるとは思ってもみなかったし幼女には関係ないって思ってたから気にしなかったけど……僕に足りないのはそれ？

「……………」

いや、料理とか家事とか全部同世代の並以上にできる自信あるぞ……？

男料理だけど料理は料理だしひとりしかないとは言え一軒家をそのままに保つ程度にはできるし？

そういう意味じゃ元々僕は男なのに女子力高かった……？

ああでもこの体じゃ肝心の色気は壊滅だもんな。  
体型のせいだ。

色気つて言うには言葉通りに10年早い体つきだもんな。

首の後ろ側に重力が掛かるのを感じながら目の前の少女のあとを着いていく僕。

……あ、めんどくさいこと思い出した。

そういうえば関澤さんのことはゆりかかって下の名前と呼ぶように言われていたんだ。

せつかく名字が顔とセットになつてきたところだったから変えたくはなかったんだけど……いつもの通りに根負けして呼ぶことになったもんだからまた1から覚え直した。  
なんだった。

こんなことなら最初からフルネームで呼ぶ習慣にしておけばよかったな。

……あ、だからたまーにそういう呼び方する人がいるのか。

なるほど、次からはそうしておこう。

最低でも頭の中で毎回呼んどけば今よりは覚えやすくなるはずだし。

「……ね、大丈夫？ またはぐれたりしない？ ……手、繋がなくていい？」

「だからあれは人の波に流されたから。それに僕はそんなに子どもじゃないよ」

「そー？」

「そーだ」

たったの一回、それも団体さんな大勢の人が横から来たせいであつたくらいで大げさだよなあ。

なんだかやけに子供扱いされるのがやだから少し大人っぽく話すけど効果はないらしい。

そしてさりげなく僕の袖をつかもうとする閑澤さ……ゆりかさん。

いや、さすがに下の名前にさん付けは変か……同い年設定だし呼び捨てにしておこう。

惨めな思いはしたくないので僕もまたさりげなく手を引つ込める。

手を繋がれて歩くのはやだもん。

「ケチー」

ケチって。

この年ごろの女の子だからお姉さんぶりたいたいだろうか。

多分この子より背が低い同世代なんてほとんどいないだろうしな。

そうして僕よりも背の高い女子中学生のあとを着いていくっていう妙なことをしながらエアコンの効いた屋内へ向かう。

そんな僕の服装はいつもの通りな夏バージョン。

夏バージョンでも長袖長ズボンにパーカーと帽子っていう厚っ苦しいことこの上な

い格好だ。

おまけに髪の毛もしまい込んでいるし真夏だというのにもこもこしている。

いや……意外と耐えられるって気がついたし、案外平気だし。

それにこの体の元になったDNA的なのは多分この緯度と気候の日差しが苦手だし。

でも最初のとときみたいにダサくはなくなつて一応はちよつと前にかがり……いつの間にか呼ばないと拗ねるようになってきたから下条さんも下の名前呼びだな……に選んでもらつたものだし、一応は夏用で一応は薄い素材のものだから風が吹けばいくらかは涼しい。

風が通らないと蒸し焼きになるけど。

何回かは女装して外に出る感覚に慣れてきてはいるけど、それはあくまで人の少ないところでしかも知り合いに会わないような場所限定の話だしな。

まあわんこな今井さんには見られたんだけどあれは事故だしな、防ぎようがなかったんだ。

あれは不運な事故だったんだ、野良犬に噛まれたって思つて諦めよう。

そう言えば野良犬って僕海外に行ったときくらいしか見たことない。

「……………」

「まーた考えごととしてるー」

……今井さん。

あの甘えた演技だけは見られなくなかったなあ……。

忘れてはくれ……ないだろうなあ……。

やだなあ……。

弱味握られちゃったもんなあ……。

僕が全力でぶりっこってのをしているのを同じ年くらいの女の人に見られるのと女の子とはいえ子供に見られるの、どちらがマシかといえ……どっちもよくないな、うん。

「ひびきー？ ……あー、いつものだ」

年相応の幼女風に甘える姿なんて見られて喜ぶ趣味なんてないし今後は控えよう。

なんだか荷物が重くなった気がする僕。

「ふい……夏は屋内と電車の中とかに限るねえ……」

なんか相変わらずに歩きながらぶつぶつ言ってるのを優しい目で知らんぷりしてあげること少し。

冷気に包まれて冷却が始まった僕たちはとぼとぼと、背の高い一般人たちに押されなようにすみっこの方を歩いて行く。

「お肌が弱いんだったよねえ、その格好。 1年の半分くらいは厳しそ……それって目とかは大丈夫なん？ 帽子だけでいいの？ サングラスとか要らないの？」



「まあね」

「ふうん」

エスカレーターで一気に身長差ができた彼女の背中の肩甲骨の上のヒモを見るともなく見ながら返事を返す。

僕もブラジャーっていつかは必要になるのかな。

めんどくさそうだしごわごわしそうだからやだなあ。

そんな感想しか出てこない時点でこの子にもまた色気はない。

悲しいかな、どう見ても小学生なゆりかだからな。

あ、そう言えばお肌うんぬんはこの前の病弱設定の流用だ。

なるべく髪の毛を隠すためにはフードのある上着と帽子が必須で、それを正当化するためにそういう感じの言い訳が必要で、だから必然的に長袖長ズボンになっちゃう。

暑いけど耐えられないわけじゃないからこのままでいいや。

それにこの真夏にあえての長袖長ズボンとフードと帽子。

目立ちはするけど「肌を出せないんです」で納得してもらえるのが楽。

昔と違って今ってそういうのに対する理解があるもんね。

多分「こういうのが好きなんです」「そっか」で済むくらい。

違うかな？

でも、白い肌に日の光が苦手とか本格的に吸血鬼っぽい感じになってきた。でも苦手なだけで死にはしないのってデイウオーカーって言うんだっけ？

もちろん創作上の存在だけどそんな属性がついた気がする。

そういうわけで家の前の出入りでは雨が降っているときと真夜中以外はたいいこんな格好だからもはや普段着のこれ……「暑苦しいけどこういうもんだ」って思えばほんとうに何とかなるらしい。

でもやっぱり暑い。

魔法の存在が小憎たらしい。

この体の体温が低いのと汗もかきにくいっていうのがあるおかげでなんとかなるのが唯一の救いだな。

汗だくになってきても日陰でじっとしていればすぐに冷えてくるし。

低血圧なのかも。

「ああ……涼しい。　生き返る——……」

「涼しいね」

「……喜び方がいつも地味ー」

この子ののんきなラフさ加減がうらやましい。

だけど幼女な都合上こんな格好をしないとイケないからなあ……。

姿が変わるにしてもせめて目立たない普通の見た目の男だったらこんなことにはならなかったのになあ。

そうしたら今ごろはお隣さんとか親戚の叔父さんに助けてもらいながら快適な外に出ない暮らしを堪能できただろうにな。

◇

学生が外で集まるといったらたいはカフェかファミレスと決まっている。

お金ないもんね。

高校生……バイトとか今って相変わらずNGなところが多いんだろうか……にっこの千円は大きいもんね。

「あ、2名で。空いてたら静かな席が良いです」

リツチな僕は手際よく店員さんをさばくゆりかの後を着いて行く。

着いて行くだけってのは実に楽だ。

おこづかいの少ない学生にとってはこうしてエアコンと飲み放題の冷たい水と話してもいい空間は貴重だよな。

お金を使わないなら誰かの家とか図書館とかファストフードとか。

少なくとも僕たちのときにはそうだったけど今でもそう変わらないだろう。

これが大学生以上になった瞬間に毎日が酒の席になるのは大人っていう財力のたまもの。

大手を振って好きなだけ稼いで好きなように使えるのはいいものだ。

自分の余った時間をお金に変換して好きにできる楽しみってのは良いもの。

僕は稼いでないけど。

「響は宿題ないんだっけ？」

「うん」

「いいないいなー。 私たちはけっこう、けっこうな量出ててさ。これがまた頭と目と手が痛くなる代物なのよ。 んで勉強はまだいいんだけど日記とか感想文とか自由研究とか。 なーんで中学生にもなってるんなことしなきゃって感じ。 学校なんてなくなればいいのに。 てかこういうのない学校ずるくない？ 不公平じゃん！」

そう言いながらクーパーンを使ってさらに安くドリンクバーを満喫しているゆりか。

炭酸の泡に合わせてぶくぶくしている。

そういうところが幼いんだと思うよ？

ごく自然に出てきてしまう子供っぽさが。

僕が言えたガワじゃないんだけどさ。

「響のここは家庭教師が来てくれてるんだっけ？ 学校行けないのは大変そうだけど、でも自分のペースでやれていいなあー。自由研究とかはた迷惑なモンないし」

「大変そうだね。まあ楽だけど、その代わり夏休みみたいなものはないよ？ 1年中

同じペースだ」

「うげー、それもやだー」

そういうことになっている。

今の僕の状況を意識してみるとそういうことになるから嘘じゃない。

休みしかないしペースは完全にフリーで期限も試験もない。

だけど自由過ぎて自分でゼーんぶ管理してスケジュール立ててやらないとまったく

進まないって意味では大変なんだ。

大人になって会社に通いながら勉強とか本当にすごいって思う。

だけど僕だって、難易度が低かろうが昔1回やった内容だろがちゃんとそのこの

ペースで勉強できてるんだから良いよね。

最大の敵はちよつと休憩って罫だ。

ちよつとのつもりでいつの間にか夕方になってたりするし。

それもこれも娯楽の多すぎる現代社会が悪い。

定額制配信という沼地。

その気になれば何十年でもいけそうな深いところだ。

「私、勉強のほうの宿題はなんとか超がんばって終わらせたんだ。けどさ、他のは時間かかるし考えなきゃだしめんどくさいな。自由研究う……何にするかなあ？もうてきとーにしてもいいかって思ってはいるんだけど、できるだけ楽で時間かからなくて無難なやつないかなー」

気持ちは分かる。

僕もずっと前に何回も通った道だ。

けど。

「……勉強、もう終わらせたのか？」

まだ夏休みに入って確かまだ何日……から10日くらいでしょ？

その前の期間で引きずり回されすぎて体感的にもっと長く感じはするけど……すくない？

「けっこうな量があるって言っていたような」

「私、先にイヤなことぜんぶ片づけて後を憂いなく楽しむ派だからね！」

「すごいね」

ものすごい笑顔の小学生。

間違えた、中学生。

どや顔っていうのをしてる。

ついでにサムズアップ。

元気だな。

僕にはないエネルギーを秘めている。

でも胸を張ってるけど張るための胸がないのには同情する。

「えへへー。 だつてそうじゃないとFPSとか反射が命のゲームのときちらついちやつて集中できないことあるしー? あ、戦略とか考えてるときもそっか」

夏休みを全力で楽しもうという気概を感じる。

「それにドリルとか問題集とかはもつと前から範囲とか言われてたしき、量がやったらに多いだけだいたいして難しいもんでもないし。 音楽聴いたり配信流し見したりして手動かすだけだし、こう、サクツと終わらせたのよ」

「えらいな」

「えへへー響に褒められたー」

それが分かかっていてもできる子とできない子がいる現実の中、ゆりかは確かに偉い。

要領のいい子はこの辺が違う気がする。

学生時代の僕とは大違いだ。

「それにもともとこういう性格だしねー。 あとでわかんないとこ出てきたら間に合わ

なくなるかもだし？ あーあ、勉強ってやだねー、なんでみんなしなきゃなんだろうね？」

勉強して強いる。

学生って大変。

「……君は確か、成績はいいほうだろう？」

「上には上がいっぱいいるのよー。所詮は偏差値そこまでじゃないとこだから進むスピードも速くはないしなんとかなるけど。それに私、勉強自体はそれほど好きってワケじゃないし、そんなことよりゲームの攻略とか見たりアニメとか観たり本とか読んでいるほうがよっぽど楽しいかなー」

「みんなそうじゃないか」

「おっと、そりやそうね」

おどける仕草とかすると髪の毛がぴよんとするくらい。

でも不自然じゃない程度に大げさな関澤ゆりか。

演技、やっぱりあれくらいしないとダメだよなあ……。

このムダに多い髪の毛をなんとか生かさないと。

こうしてフードにしまい込んでいたらできないけど。

でも恥ずかしい以前になんとか会話をひねり出すので精いっぱいだから……まずは



会話に着いて行けるところからだな。

「でもさ、響だつて」

「ん？」

「響だつてそういうタイプでしょ？ たぶん。いやなんとなくだけどき。しなきやいけないこととか先に片づけちゃってからいちばんしたいことするって感じの？ そうじゃなきや戦略ゲームみたく時間かかるのとか分厚いシリーズ読破したりとか私よりも多くはできないっしょ。本とかマンガとか私より詳しいときあるしさ」

「まあ……そんな感じか？」

「合つてた!!」

ただ長く生きてきただけなんだけどな。

具体的には、君の年齢ぶんくらいは。

こんなこといっても信じてもらえやしないだろうし、そもそも説明すること自体がめんどくさいし……あとぜんぶウソだつてばれるし、そういうことにしておこう。

いざとなつたらじいやの出番だ。

「最短の攻略法はこちらでございませう」とか言うハイスペックじいや。

そんな人いるんだろうか。

「こういうのつて人から言われるまでさ、自分じゃよく分からないもんだよね。私の

場合は親友からいつつもずばずば言われてるからよく身にしみてるけど。響もすっかりしてるしあんま言われたことなかったり？ 勉強してるの、とか、もつとがんばりなさいーとか」

「そんな感じだね」

「そっかー、仲間仲間っ」

嬉しそうに握手を求めてきたからしぶしぶで出した片手を掴まれてぶんぶん振られる。

「……………」

通り過ぎた店員さんの視線が…………。

やめて…………ほほえましい子供のやり取り見る顔しないで…………。

高校生くらいの子にそうされるのが堪えるんだ…………おねがい…………。

そんな願いは届かない。

けど少し懐かしいな、こういうの。

こうしてなんでもないことをしゃべるっていうの。

多分最後にしたのは高校を卒業する前だし。

…………相手が僕より背が高い子供、中学生っていうのが気になるけど。

小学生寄りの中学生を座高の分さらに上のほうへ見上げるこの変な感じ。

見下されている感覚にまだ慣れない……。  
あと首が疲れる。  
相手は小学生寄りの中学2年生なものにな。

## 16話 学生たちの、夏休み(1) 3/3

「ひびきー?」

ちよつと居なくなっていたゆりかがにやにやとしながら戻つて来る。

その手にはコップ。

……ああ。

こういうのつて懐かしいな。

こんな僕でも中学くらいまではなんにも考えない子供でいられたからそういういたずらをし合つたつて。

「はいよ——……ぬふふ」

「……………」

僕的にはものすごくほほえましい光景を見ている感覚だけど当の本人は楽しくて仕方がない様子。

無邪気つて素敵。

そんな僕の目の前にとんとおかれる謎の色のナニカ。

焦げ茶色においてはよく分からなくて、混ぜたつてことだけ分かる感じの液体。

「私特製ジュースどーぞー！ いつもてつきとーなんだけどわりとイケる味にするの得意なんだー。ゲロマズじゃないはずよ？」

「……………」

「……………こういうのはお茶とかをたくさん混ぜなきゃ鳥肌が立つ味とかにおいにならな  
いはず。」

大丈夫、大丈夫。

そう僕自身に言い聞かせながらそつと口をつけて飲んでみる。

「くくくくくくくくくく」

「……………どうよ？」

「……………」

身構えていたからか普段からの癖からか両手でコップを持って目をつぶっていたらしい僕。

その液体の感覚を覚えた僕は何気に体がこわばっているのに気がついた。

「……………確かにそこそこおいしい」

「私がひどいコトするって思ったんでしょ。響ものすごくぎゅってしてたもん」

「しょうがないじゃん……………こういうの10年以上ぶりなんだもん。」

「……………けど、これはただの炭酸のないソーダに近い何かだな」

「まーそうんだけどさー」

この気持ちをごまかすために努めて冷静に反応したら興味を失った様子のゆりか。

可もなく不可もない安い感じのジュースを買ったときのような……普通に無難でよくある感じの微妙な味が口と喉を流れる。

「けほ」

おっと、一気に飲んだから。

……外で食べるのにはいくつもの課題があるけど、ここにもひとつあったな。

コップが大きすぎて両手じゃないとこぼしそうってこと。

太くて重いものをつかむ握力と手首の力が厳しい。

手の大きさが足りていない。

それを補助する筋力が足りていない。

あと僕だとドリンクバーはボタンが届かない可能性が高い。

押しつけるだけでいいところもあった……けどそれですらっていう始末だ。

なにもかもが足りないんだ。

「これ使う？」って彼女がくれたありがたいストローでちゅーつと吸いながら……会話も無いでなんとなく遠くを見て、乱視混じりのメガネじゃ見えなかつただらう細かいところまでを見る。

ドリンクバーの機械。

ファミレス自体に来ることも無くなっていたから何気に新鮮な見た目。

多分旅行先で電車とかバスとかを待つ時間に入る以外じゃこういう店には入らないもんな。

こういうところはどちらかかっていうと人と話をしたり出掛けにちよつとした時間をつぶすためだったり、家にいると誘惑が多すぎるからやらなきゃならないことをするためだったり……つて食べることで以外のほうがメインのことが多かった気がする。

自炊にこだわりすぎたせいでムダに舌が肥えたもんだからファミレスみたいな中途半端な味が苦手になったからっていうのもあるんだけどな。

あと、安いつて言ってもやっぱりお金はかかるし。

1回のランチ代でも肉以外の料理なら自炊で何食分にも膨れさせられるしな。

それにしても……店の雰囲気も何もかも昔からほとんど変わっていないんだな。

だからいくら綺麗でもどこか懐かしさが抜けないような気がするのかも。

タッチパネルとかがあるのは時代を感じるけど、1回触ったらもう飽きて目に馴染むもの。

「とっろでかい」

「うん？」

ゆつくりとジュースを飲んでいたら目の前に崩れはじめたばつつんとその下の両目があつてびくつとした。

かろうじて押さえ込んだからバレてはいないはず……。

「響つて近距離苦手な感じ？ もうちよい離れた方が良くない？ ガマンしないでね？ そういうの」

「……いや。ただ急なことに驚いてしまうだけなんだ」

「そ？ あ、でさ、これもう食べないの？」

「ん？ ……ああ、食べきれないからね」

身乗り出してきているゆりかの指すのは僕の食べ残しのサンドイッチ。

育ち盛りだもんな。

成長が遅いからこそたくさん必要なのかもな。

やっぱり小学生にしか見えない彼女のほっぺとか肩周りを見るともなく見ながら結論づける。

ファミレスの食事。

こういうものなら1人前食べられるかもって思ったけど……やっぱりムリだった。

1人前って言っても元の体だとたぶんこれでも半人前くらいの感覚なんだけどなあ……。



悲しいかな僕は半人前。

見た目相応にお子さまランチがちようど良いんだ。

胃の拡張が急務だ。

食欲ってどうすれば増やせるんだろう。

毎食前に食前酒でも飲む？

体動かすだけだと疲れて寝ちやうだけだしなあ……。

「……いつものことだけど、ほんんとびつくりするくらい少食だよ、響って。そんなじゃ体力戻るの時間かかるんじゃないの？ もう退院して……何ヶ月なんでしょ？」

「うん、まあね。けど、どうしても胃が受け付けないから」

「……………」

「ただ体力が無いだけなんだ。気にしないでくれ」

なんか不安そうだったから大丈夫だって言っておいてあげるけど、ほんとうになんてだろうな。

この食欲の無さ。

本当に子供だからってことだけなんだろうか。

最近はその……繁華街とか駅とか電車に乗っての移動とか公園への往復とかで

そこそこの運動に、こうして外で会話をするっていう口も頭も体力も気力もものすごく使う重労働をそこそこしているわけだけど……それでも一向に食欲が増える兆しはない。

ちやんと僕なりに動いているんだ。

むしろ過労に感じるほどなんだ。

そんな状況なのに食べられないもんだから体重も増えるはずがない。

なんなら気を抜いてご飯を抜いたりするとあつという間に1キロ2キロ減るからおっそろしい。

僕は前からだるかったり熱中したりしてると食べるのを忘れるから気をつけなきゃなんだけど……こんなこと言ったら肉体的な同性のほとんどを敵に回しそうだけどな。

でも太れないっていうのもそれはそれで厳しいものがあるんだ。

この苦しみはこうなつてみないと分からないもの。

僕だつて前から知識としては知っていたけど「ふーん」でおしまいだつたもんな。

一時期は買ってたトレーニングのときに買い貯めてあつた牛乳とかと混ぜて飲むあれとか試してみたけど、気持ち悪くなつただけだしな。

買いすぎてもつたないことをした。

飲み物なら……お酒ならいくらでも飲めるのにな。

「……………」

「?」

僕の目の前で僕の食べかけだったサンドイッチを……僕の口がついたところは切り取ってあるけど、それでも平気そうに頬張っていた少女は首をかしげる。

……そういえば目の前でじつと僕の食べ残しを見つめているこの食いしんぼさんもまたぜい肉が限りなく少なそうな体だよな。

薄着だからはつきりわかるけど肩周りとかふとももとかが子供のそれだ。

もう少し肉をつけたほうがいいぞ、肉を。

女の子はちよつとだらしなくらいがちようど良いんだって思うしな。

まあこの僕が言えた義理じゃないけど。

◇

「あ」

女の子はいつも唐突に声を上げるからいつもびっくりする。

けど今回はびくってならなかったから安心。

「……………どうかしたのか?」

「よく考えたら私……ごめん」  
「？」

「食べることとかつてお医者さんとかお家の人とかか言われてるよね……体力のこととかも。ちよつと無責任だった……」

しゅんとしている閑澤さん。

あ——……確かに本当の病人相手ならそうなるか。

「いや……平気だよ。僕は気にしていない」

「ほんと？」

罪悪感って言うのはこういうちよつとしたところで突き刺さる。

「今のところ、順調……に回復してきているし。体力がないのと少食なのは……あとこの背の低さは元からだしな。君が気にする必要はないよ」

「……そう？　ならよかった」

「……………」

「……………」

しんとなる一瞬。

「こういう一瞬は気まずい。」

「じ……………」

けど、ぱつと表情を明るくしてわざとらしい声で伝えてきたのは……もういつこ残つてる僕の食べ残し。

半分以上食べちゃったやつ。

……本当に食べるの？

ていうか食べたいの？

そんなにはらぺこななの？

そんなに成長期なの？

いやしんぼなの？

……どれだけ食欲旺盛なんだろう。

僕とたいして違わないその体のどこに収まるんだか教えて欲しいくらいだな。

「……これも？ いや、違うのなら別に」

「ありがとう——!!」

うるさい。

しょうがないからまたナイフとフォークで僕の口が突いた部分を切り分けようとする。

「響つてば潔癖？」

「……一応他人の口がついているのは食べないほうがいいんじゃないか？」

「んむ……」

なんでそこで不満そうなの？

気がついたらお皿を手元に寄せて今にもかぶりつきそうな感じでこつちを見ているゆりか。

まああちらにとつて僕は友人の杵らしいし、確かに同学年の同性って見られてるならそういうの気にしないのかもな。

そうは思うけど僕の両手は止まっている。

困った。

尿意だ。

突然の尿意なんだ。

「？」

ゆりかが見てくるけど気にする余裕が無い。

全身がアラートを発しているんだ。

この体になってから本当にいきなり襲ってくるようになっていく気がする危機感。

なんというか……気を抜いていたらいきなり膀胱にずしんとくるような？

で、あわててぎゅつと締めないと漏れてくるかもつてなるの。

前はなんとなくトイレに行きたくなってもそこから1時間とかぜんぜん余裕だった

んだけどな。

なんならちよつと経つと忘れるくらいだった気がするのに。

前に不思議に思つて調べたら、なんでも女性の体の排尿を抑える筋肉は男のそれよりもかなり弱いらしい。

くしやみで出ちやう人もいるんだとか。

女つてやばい。

僕はまだそんな経験はないけど、それだつてこうしてちよつとでも行きたくなくなつたらすぐに行くからだし万が一はあり得る。

それで漏らしでもしたら1週間は落ち込む自信がある。

それに、外だけは絶対にダメだ。

それにそれに今は知り合いのゆりかもいる。

まちがいなく立ち直れなくなるだろう。

2回目の引きこもりは避けたいところなんだ。

「済まない……少しトイレに。食べるぶんは自分で切つてくれるか？」

「あ、うん。分かった、そーするね」

かちやかちやとお皿とかを押しやるとイスから飛び降りるようにして……何でもない風を装いつつ全力でトイレへGO。

「……………」

なんだか変な視線を感じるけどとにかく今はトイレだトイレ。

トイレさえできなくなったら僕は男どころか人としての尊厳を失ってしまう。

立って歩き始めた途端にゆるくなってきた感じがあるしで膀胱を刺激しないようにしながら、でもすばやく向かう必要がある。

……来たとき、事前に場所を意識しておいてよかった。

じゃないとところどころの仕切りで視界が遮られているせいで矢印とかぜんぜん見えないしなあ。

あー、だからお店とかでよく子供が迷子になるのか。

そりやあそうだ、親の後ろに誰かが入っちゃったら見失うもんな。

それでわたわたしてるうちに角を曲がっちゃってとかそんな感じなんだろう。

大きくなってから小さくなったからこそ分かるそんな仕組み。

トイレで夢中の僕の頭の中は変に高速回転している。

帰りがけにご意見書とかに書いておきたい。

看板とかサイン……足元とはいわないからせめてもつと低いところに設置して欲しいって。

迷子防止です、って。





「うわ」

僕は絶望した。

トイレは片方だけに行列ができています。

もちろん女性のほうだ。

ドアの外に……えっと、何人かが群れを成している。

その全員がうつむいてスマホを操作している異常風景。

タイミング悪かったみたいだあ……。

立ったままだと危ないから1回戻って時間が経ったら戻って思ったけど、それだとなん

だか危険な気がする。

「……………」

見回しても残念なことに共用トイレはない。

まあただのファミレスだからな。

今どきでも新しいところとか大きいところとかじゃないと飲食店なんかには無いよね。

こういうときはむしろ小さいお店の方がトイレがひとつだけだったりして遠慮は要らないんだけど……しかたない。

僕は覚悟を決めて足を踏み出す。

……男のほうはいつものようにがら空きだし、こっちでいいや。

いちいち髪の毛を出して整えてしまつて整えてがめんどくさいから、あと恥ずかしいからこうして屋内で会つているときとかもずっとパーカーとズボンでぜんぶ隠しているのが役に立つん。

肉体は女だけど女未満の幼児だから女な特徴の胸もおしりも無い僕だ。

ちよつとお行儀悪い気もするけど「これはファッションなんだ」つて言つてお店の中でもフード被つたままの人だつていくくらいだし、別に不審に思われやしない。

子供つてのものもあるな。

この時ばかりはこの小ささに……感謝してやらない。

でも女だつてのはバレやしないだろう。

相手はみんな立つたままスマホしているんだしのぞき込まれない限りは問題ないはず。

バレる要素が顔と髪の毛しかないつていうのは悲しいけど、こういうときには役に立つな。

……男ならこういう苦勞がないのになあ。

女ってだけで大変って言うのの意味がちよつと分かる。

けど今の僕は便利な仕様だからすすいだ。

並んでいる女の人たちを尻目に入っていくと……そういえば最近では毎回共用トイレを選んでいいたからひっさしぶりな男のトイレ。

この雰囲気懐かしいまでである。

「あ」

僕の足が止まる。

……………。

……立ってしている人のおしりとアレがちようど目の高さになることに気がついたんだ。

僕は嫌な気持ちになった。

とても不快だ。

すさまじく気分が悪い。

僕はなんだってこんな目に遭うんだ。

世の中は理不尽に満ちあふれている。

久しぶりに誰かに対して文句を言いたくなつた僕。

……トイレに入ったらいきなり視線の先に来ることになるらしいのを知る。

今はさいわいにして誰も居なかったから現物を見ずに済んだけど油断はならない。

ズボンを下ろしてする人も居るから警戒しないと。

この視線の高さだとちようど……見たくないのに見ちやうことになるもん。

嫌に決まつてるじゃん。

頭を振って急いで個室に向かう。

……にしてもこの仕切りもない陶器のこれも見るの久しぶりだな。

ずいぶん見なかった気がする。

「……………」

最近、こういう上の方は隠す気もなくてこぼさない程度の覆いしかないやつが増えたような気がする。

確か、これだと前に立つから掃除が楽になるんだっけ？

そんな記事を読んだ気がしないでもない。

まあ僕には……少なくとも今のところは縁のなくなってしまうものだからどうでもいいのか。

毎回座つてするのも面倒だし早いうちに戻りたいけどなあ……。

せめて性別だけでも戻って、あわよくば僕の子供のころの外見にはなって欲しい。

そうすれば……20年後くらいには「歳のわりに若く見られるんです」って言って大手を振って外に出られるかもしれないんだし。

理想は起きたら元の体だけだ。

そのための下着姿同然の寝間着だ。

かちやり。

「ふう」

個室の鍵を下ろしてひと安心。

すぐにできるからよかったけど、でもやっぱりトイレは男のほうがなにかと。

ほんとうになにかと楽なんだなあ。

……なるほど、トイレのことを考えたらやっぱり女の格好は止めておいた方が良いんだな。

髪の毛を出していたりスカートだったりするとさつきみたいな場面で不利なことになるんだ。

そんな格好だったらこっちに入るときに見とがめられるだろう。

やっぱり女装は進んでするものじゃないな。

けど、しなきゃならないときってあるからなあ……。



「.....」  
じやあああああーつと水の音が響く。

僕のおまたの下から、水面から。

.....すつごく恥ずかしいんだけど、これ？

誰もいないって分かっていても恥ずかしいんだけど.....？

なんなのこれ.....？

男のときだったらそもそも立ってできたし、座つてするにしても向きを調節できたから消音できていたのに.....ホースが無いもんだから方向も勢いも自然のままだ。

今まで家でも共用トイレでもまったく気にも留めていなかったんだけど、音.....派手に響くなあ。

完全な個室じゃないんし当然といえは当然か。

なるほど、音姫さん機能は必需品だな。

しやあああああ。

「.....」  
最初のいちばん勢いのあるのから少しずつ衰えてくるけどまだまだ音は止みそうに

ない。

反響してる気がする。

天井を伝って外まで。

そんなわけないんだけどそんな気がしてならない。

そわそわする。

いや、さつきまでは誰もいなかったけど来ているかもしれないし……って思っちゃつて。

相手はどうせ僕のことを男だと思ってるだろうから「よっほどガマンしてたんだな」ってくらいにししか思わないだろうけど、それでもなんだか恥ずかしい。

個室から出たらバレるしな。

ふとももをぎゅつとして音を閉じ込めて量を抑えようとは努力しているけど、どうやらあまり効果はないみたい。

無駄な抵抗だ。

……なんでこんなに響くんだろう。

男のときなら根元のほうで水量だけなら本能的に簡単に調節できたはず……だったんだけどなあ。

とつても便利だったんだ。

けど、今はどうにも抑えられない。  
困った。

しかもさつきまで肩だしレモンさんに合わせてがんばって飲んでいたから、まだ止まらない。

あああ、止まらない。

ふとももにびしびしと生暖かい感触。

……終わったら拭くのも大変そうだな。

女って不便だ。



「あー……おなかいっぱい。　ぐちそーさまー……」  
「……………」

結局男子トイレには誰もいなくてよかつたって安心して戻ってきたら、関澤さんが僕のぶんまで平らげてぐてーつとしていた。

ご丁寧に食べ残しのところまで、きれいに。

いや……切りなさいって言ったよね？



聞いてなかったの……？

捨てるのはイヤだったから残飯もとい食べ残しの処理はありがたいんだけど……このくらいの子たちって口がついているのか気にしないんだなあ……。

スイーツとか分け合って食べたりもするんだろうか。

するんだろうなあ……。

食べさせ合ったりするんだろうなあ……。

だって女の子ってそういうもんだって言うし。

「たったの600えんちよい、かつこ税別。そんだけでこれだけ食べてジュースいっぱい飲んで何時間でもいられてさ……ファミレスは最高だああ……」

そんな僕のじとーっとした目つきにも気がつかない食いしんぼさんはお気楽だ。

薄着の下でおなか膨れているのが僕からでも分かるくらいになっっている。

どれだけのものがこの子のお腹の中に吸収されたんだろう。

「1. 5人前……いや、もうちよつとか。さすがに苦しくないか？」

「へーきへーき、私、食いだめとか得意……うぶ」

「……………」

「ちよーつと時間経って、動いたらすぐ消化されるって」

「……………そうか」

ちよつと心配だけど別に顔色も悪くないし、単純な食べ過ぎの様子。

……これが若さか。

正確には健康的な若さ。

良いなあ。

体と心の両方が若いつていうのもありそうだ。

僕のように半分だけつていうのとはワケが違う。

本物の子供だもんな。

……成長期。

羨ましい限りだ。

# 17話 学生たちの、夏休み(2) 1/3

同性でも胸つて言うのは気になるものらしい。

普通の仲程度でも普段の会話で日常的にお互いのそれについての言及があるとか無いとか。

僕に対して堂々と自分から言ってくる当たりすぎいよねこの子。

「そう……」って反応したけど他にどうすりや良かったのかさっぱりだ。

そんなことをいつか言つてのけてきたメロンさんのダブルメロンが跳ねる。

レモンさんのダブルレモンとは比べものにならない存在感だ。

……いやだから僕の身長的に目線のド真ん前にあるもんだからしょうがないって。

このあいだ言われたばかりだし。

「今日もまたいつそう暑いからねえ……。夏休み入つてからずーっと真夏日じゃないの、も——……」

「ああ、暑いね。ゆだりそうだな、毎日毎日……」

「本当よねー」

そんな彼女も暑くはなるらしい。

当然か。

動物だつて暑かつたら木陰に行くもんな。

「なら、もつと涼しくなつてから歩かないか……？」

「それとこれとは別よ！」

「そうか……」

動物の本能も通用しないらしいメロンさん。

そんなここ最近の会話だ。

「夏休みで暑いし家の中でじつとしてたら？」……そんな提案は即座に却下されてこうして出歩くハメになる僕。

その元凶はわざわざ外を歩いて回ろうつてしつこく誘ってくるかがり（大）。

女の子っていう身分になつてしまったんだし、いつそのこと日傘でも用意しようか  
なつて思う。

せめてこんな格好をしているときくらいは……。

「……………」

やだなあ……。

ちよつとだけ下を見るとひらひらひらひらしているスカートの裾。

それも僕の腰の周りでひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらしている。

布だ。

僕自身のことながらふとももと鎖骨がまぶしい格好なんだ。

下条さんの主張に根負けして指定されて断れなかった、肩出しのシャツに短めのスカートっていう服装なんだもん、しょうがないんだもん。

かろうじて……かろうじて「お肌が敏感肌で弱いんだ」って言ってその上から羽織るものとタイツで肌を隠すっていう機転が利いたおかげでなんとか致命的な羞恥心は感  
じずに済んでいるけど……やっぱり致命的な気がする格好。

それでも帽子がなければ他人の視線でとつくに参っていた。  
やっぱり帽子は大切だ。

しかし今日もさりげなく夏休みをおとなくさせようとしたら反対されて頓挫だ。  
しかたない、また次の機会をうかがおう。

僕は諦めが悪いんだ。

幼女になってそろそろ半年が近づく中でもまだ粘る程度にはしぶといんだ。

そんなことを考えながら僕の目の真横で揺れるそのの圧を感じつつとぼとぼと歩き  
続ける。

だって目線で動くものがあれば自然と視線が向くて意識するのは仕方がないだろう  
し。

ゆっさゆっさと動いてるし。

なんなら音すらしてらるし。

一応事案的な感情も衝動も無くって、ただただ気になるだけだから許してほしい。

「はあ……」

「♪♪」

「はあ——……」

「楽しいわねー」

これ見よがしなため息もまったく通じない。

僕に演技の才能は無いらしい。

今日は下条さんの呼び出しのせいで電車でちよつと行つたところの大きめの繁華街。

テレビで最近よく見る女性に人気のスポットとやらだ。

「人気って作られてるんだよ？」って言っても通じなかつたからもうダメだ。

来る前はめんどくさすぎて鬱々してたけど、いざ着いてみたら結構珍しいもの。

ぱつと見て町並みがどこかきれいなのとカラフルな感じなのと、あとひたすらに横文字でショーウィンドウまで来ないと何を売っているんだか分からないような店が多い気がする。

興味がかけらも湧かないけど観光地で写真を撮って回る気分になればなんとか乗り

切れそう。

当然ながら歩いているのは女性が圧倒的。

男は少なめで、ただ通りがかったりするだけか女性の付き添いできているって感じ。

ちようどデパートとかのベンチでたむろしているような、だるーい表情が目立つ目立つ。

僕もおんなじ気分だしおんなじような顔しているんだろうなあ。

ご苦勞様だ。

お互いにねぎらいの視線。

……すぐに逸らされた。

通用しなかつたらしい。

悲しい。

一方で元氣そうなのはチャラそうなほんの一部の人だけ。

男とはそんなもんだ。

もちろんそんな奴らは今を楽しんでいるわけじゃないだろう。

女の子と一緒にいるのを楽しんでるだけなんだ。

あるいはこの時間を楽しそうにして乗り切ればって思ってるだけ。

男なんてしよせんは単純な生きものなんだ。

でもそんな夢も希望も持ち合わせていない僕はただただだるい。

だるいのはともかくこういうスポットっていうところは僕には生涯縁のないエリアだと思っていたから不思議な感覚さえしてくる。

興味をそそられるお店がひとつもないのに来るって言う不思議さで。

なんで僕はここに存在しているんだろう……。

哲学的な問いかけが僕の中に芽生える。

まあ実際に歩いてみればなんのことはない。

きれいな繁華街がみんな女性向けのお店で埋まっているだけのこと。

ただそれだけだ。

道のタイルまで徹底的にきれいになっているあたり本気度がうかがえるというもの。

こういうのって町の設計段階からぜんぶ仕切つてあるんだろうか？

「やだっ！」

「……なに？」

「やだっ！」の「やだ」の発音は悲鳴とかじやなくて鳴き声だ。

つまりは彼女の感情の揺れ動きが脳みそから口へと直通で出てきただけのこと。

そう理解しておかないと疲れる。

「見て見てほら！ 見て見て響ちゃん！」



「.....」

「これもかわいいわよ！」

「.....そうだね」

「やっぱり!? そうよねー、かわいいわよねー！」

「.....はあ.....」

めんどくさい。

投げやりな返事でも満足するからまだましか。

いちいちなにかを見つけては急に立ち止まっていちいち僕に同意を求めてくるか  
り。

とにかくいちいちめんどくさいという他ない。

個人の意見というものを聞きたいのか聞きたくないのかどっちなのかって問い詰め  
たいところ。

それすらめんどくさいからしないけどな。

さっさと終わらせたんだ。

駅から少し歩いてきたけど、どこもかしこも女性が好きそうな小物とか服とかスィー  
ツとか.....ひと言で言うとな僕が興味を持たない感じしかしないお店だけしか無いから  
やっぱりだるんってなる。

好き好んで買いたいものはないし、買い食いとかも旅先でしかしたことないなあ。休日どこか近場に行つて買い物して……つていう過ごし方なんて僕は知らない。

おかげで今すぐにも引き返してベッドかビーズに潜りたい気持ちでいっぱいな僕。たいして歩いていないのにすでに疲れがすごいことになっている。

気持ちの問題だ。

帰りたい。

帰れない。

「これも欲しいんだけど、ちよーつとお高いのよねえ……。 厳しいわー」

「……………」

この子に裏は無い。

「買って欲しいなー」つて言うのじゃ無くつてただ本当に「これも欲しいんだけど、ちよーつとお高いのよねえ……。 厳しいわー」つていう思考が口から出て来ているだけだ。

そんな中くるんさんは元気なことこの上ない。

中学生つて元気だな。

ほとんどゾー軒ずつとといった調子にお店から出たら隣のお店に僕を引つ張つて突撃。

端から端まで隅から隅まで品物を見て回つてずーつと僕に感想ではなく同意を求め

てくる。

こういうときはほんとうに男女の感性の差っていうものを痛感すると同時に僕の脳みそはまだ男で居られてるっていう安心感。

下条さんと会っているあいだはいつもこんな感じ。

関澤さん相手なら……彼女が追っているという番組とかゲームとかいった僕でもそれなりに楽しめるもので一応は会話というものを楽しむこともできるんだけどな。

「今週のマンガもう読んだ？」とか「ゲームどこまで進んだ？」みたいに話す内容がどう考えても小中高生の男子が盛り上がる話題しかないあたり、まるで僕みたいに「実は中は男でガワだけ女の子なんだ……」とか唐突に告白されたとしても驚かない。

それくらい楽にラフに居られるからレモンさんの相手は楽。

その分の女子力的なものがぎゅっとメロンさんには詰まっているらしい。

男の感性。

常識が通じるというよりメンタルがどっちかって言うとなりに近くて、たぶん小学校のときから男子に混じって遊んでいる感じの女子だろうレモンさん。

あの子なら普通に話を通じるんだけどメロンさんはそうもいかないのが困る。

いわゆるゆるふわ系女子ってやつだな。

あまりよく知らないけどイメージ的にそんな感じ。

ゆるゆるふわふわさんとなんにも考えないで話そうとすると、選ぶ話題も話している感じもなにもかもが微妙に食い違って結局めんどくさいことになる。

かがりは期待していた返事が来なくて不満になって僕はどうしてそうなるのかが分からないというどうしようもない状態になって、結局は僕がこうやって面倒を感じるようになってめんどくさいんだ。

試行錯誤したり「初めての彼女を作ろう！」的なものを読んだりしてどうにかこうにかそういうのはだいぶ減ってきてはいるんだけど彼女いない歴な僕なもんだから難しいこと。

まだ大学の理系の科目をやれって言われた方がやる気も上がるってもんだ。

ゆるふわさんが持ってきた雑誌と一緒に読まされていて「おいしいスイーツとやらを食べに行きましょう！」って言われて「けっこう並ぶみたいから僕が空いている時間に買っておくからどこかで食べよう」って至極真つ当で常識的で効率的な提案をした途端に機嫌が下がっていく感じとかもうよく分かんない。

なんなの？

本当に感情でしか生きてないの？

頭と2個の胸と2個のお尻の中にはわたあめでも詰まってるのこの子??

こんな子を見て親御さんは平気なの???

なるほど、モテる男とそうでない僕らとのあいだにはこうした女性っていう不思議ななにかに対する理解と忍耐と努力がなにもかもが違うんだな。

「そんな努力とかするくらいならそれなら別に一生独り身でいいや……」って思っちゃうあたりが恋愛に興味ない男という僕たちみたいな人種。

今の時代の結構な勢力だ。

まあお互いさまなんだろうけど。

そういうわけでもにかく下条さんと会うときは関澤さんのときの……最低でも倍以上は気を遣うことになって、それはもう疲れるもの。

ただどー回、その扱い方っていうのをわかってくると途端に相手するのが楽になってくるからおもしろい。

ふたを開けてみればなんと言うことはないんだ。

要は一緒にいるときに体験していることとか話していることとか見ていることとか感じていることとか、そのすべてを同じように感じる努力をするだけ。

つまりは「わかるー」というこのひとことに尽きる。

いやほんとうに。

ほんとうは分かかっていなかったとしても「分かる」って言っておけば解決しちゃうんだ。

ちよろいのか複雑なのか分からない。

しかも中学生でこれってことは高校生でさらに進化して大学生でどうにかなるんだ。大学でおとなしくしておいて正解だったな。

だから困ったときにはとりあえずで「わかるー」に似ているニュアンスのなにかを口にしておけば間違いはまずない。

「分かる分かるー」っていう万能の言葉を手に入れたから難易度はがた落ちでどうにか一緒に居られている感じ。

それだけで頭を動かすのを止めておいて、でもときどきは察してかがりが言いたいだろうことを言っておあげさえすれば機嫌も維持できるし手を引っ張られて歩くことも減るし……服屋に押し込められることも少しだけは減る。

全部は減らないしときどき適当なのがばれて怒られたり着替えさせようとしてくる。そんなものだ。

◇

「うん、いいな」

「うん、似合っていると思うよ?」

「かわいいね」

「うんうん、かわいい」

「僕もそう思うよ」

「僕もそれが合うと思ってたよ」

微妙にニュアンスを変えながらの返事。

ふう。

ぼーとしながらオートで会話してこんな返事だけをアレンジして繰り返しているだけで今日もくるんメロンはごきげんだ。

たったのこれだけでもう30分くらいは稼いでいる。

そうでないと着せ替え人形再度だからな。

必死になって勉強した甲斐があったというものだ。

これで将来に彼女とかができた場合にも不安にならずに済む。

その前に体をどうにかしないとだけどな。

幼女が女の子と付き合いたいとか……いや、今の時代ならアリなのか……？

女子校とか行けば実現できちゃう……？

「……………」

いやいや、お金とか戸籍とか親とかどうするのって以前に学校はめんどくさい。

「……………あー あそこの屋台、あのジェラート!! 並んでるわよ!」

「人気みたいだね。暑いし、冷たいの食べたくなってきたな。並ぼうか」  
「そうね！ なら響ちゃん、早く早く！」

うまく視線を誘導してお腹にたまりそうなものからアイスっていう半液体な半固体で気を紛らわせることに成功しつつある。

暑いのは確かだしな。

それもこれもこの炎天下をわざわざ歩くからなんだけど。

「楽しみねー」

「分かる」

さて、なにも入ってなさそうな下条さんはおいしいものに弱くて空腹に弱い。

ほとんど同じ意味なんだけどとにかくそんな感じだ。

だから「食べたい……」ってぼつとでも言ったりぼーっと見ていたりでもしたら、食べないという選択肢はない。

まあお金に困ってるわけでも無いしちよつと食べて残りは押しつけたらいいもんな。

ここで「そう……」ってスルーするとだんだんと口数が減っていったと思っただけなり不機嫌になるんだ。

最初のころはなんでそうなるのかが分からなくてほんつとうに悩んだもの。

女性は言わないで察して欲しいらしいんだけど、それなら女性のほうは男性の察する



というの自体が難しいんだっていうのを理解はしなくてもいいけどせめて知っておいて欲しい。

たつたひと言「こうしたいの」とか「こう言って欲しいの」って言ってくれさえすればなんとでもなるのになあ……。

だから熟年離婚とかになるんだ。

違うか？

まあいいや。

今はなにかおいしいものを見つけさえすればいいって知ってるからちよろいもの。

ちよろんメロンだ。

犬とか猫とかそんなイメージ？

とりあえず満腹にさせておけばいいみたいな。

つまりは野生動物みたいに空腹だけを避けるべし。

散歩中言うことをきかなくて飼い主をぐいぐい引つ張っている大型犬を見かけることがあるけど、僕の中でのメロンさんのイメージは完全にそれだ。

でかいのも一緒だしな。

飼い主さんともい親御さんはもつと躡して？

こういうのは女性の特徴だとも思ってたけどよく考えたら肉体だけは僕も女だし、たぶ

ん精神的なもので脳みその的なものなんだって結論づける。

僕は甘いもの食べなくてもめんどくさくなくなって適当に2、3食抜いたりしても別にむしやくしやしてきたりしないしな。

女性ホルモンのせいなのかもな。

この1歩ごとにたゆんつとして胸とおしりを見ていればなあ……。

同性の女性ですら結構な頻度でメロンさんを見るし。

下条さんの顔に目が行って髪の毛のくるんくるんを見て体を見て僕に視線が行ってからもう1回彼女の胸のあたりをガン見するのが今日だけで何十回。

女性視点でも相当に詰まっているらしい。

そういえば男っぽいレモンさんもやはりレモンだし合っているのかも？

僕もさくらんぼだしな。

なるほど。

そんなどうでもいいことを考えながら体と口はオートで対応させている器用な僕。

「もつといろんな味乗せなくていいの？」

「ああ、お腹壊しても困るしね」

つまりはいろんな味を食べたいってこと。

でもめんどくさいから今は無視しとこ。

手元にはいつの間にか買ったアイス。

僕のコーンの上にはふたつの丸いのが、そしてメロンさんの手には4つが乗っている。

そういうことになったらいい。

そう言えばそうだった気がする。

周りの女性たちに習って適当なところに腰掛けて、ぎりぎり足がつく高さで口の中に冷たい味としやりしやりとした感触が来る。

しやりしやりしやりしやり。

しやくしやくしやくしやく。

アイスとシャーベットか……なるほど。

食べる前にみんな自分たちの顔とアイスを画面に収めているのがおもしろいくらいに同じだ。

そしてかがりは座ったそばからまずかぶりつく。

……よかった。

この子が「なんとか映え」つてのに興味なくて。

「あ——……。冷たくて甘くて。おいしいわね……」

「夏はやはり冷たいものだね……」

それだけには同感しつつものすごい勢いでしやりしやりしやりしやくしやくしやくしやくと食べ続ける音が耳もとで聞こえる。

ちよつとこそばゆい。

流行りのASMR的な？

とか思っていたらピタリとそれが止んでなにやらのうめき声を発し始める。

……大丈夫？

頭が。

いや、流石に失礼かな？

「………！……………キーンっとするわあ………。響ちゃんは大丈夫？」

「僕は奥歯で噛まないようにしているし、それほどは」

「そうなの!？」

経験則で口の前のほうだけで食べるようにすれば平気だと知っている。

なんでかは知らない。

僕だけのものかと思っていたけど今の体でもそうだしな。

前歯はかなり冷えるけど頭痛よりはマシだろう。

あと、そんなにがつついて飲むみたいに食べないっていうのもあるとも思うけどなあ。

言ったって治りやしないだろうし、聞いても聞かずにおんなじようにかぶりついてはぎゅーっと目を閉じてるしどうしようもないから静かに食べていよう。

とりあえずは体力を回復しないとだ。

この子の相手はとにかく疲れるからな。



「ふたりともお綺麗ですね！ お洋服もおそろいでお手々もつないで……仲いいんですね！ 親戚の方とか、ひよっとしてご姉妹だったりします？ 最近はそういう方たちをたまに目にするので！」

「え、えーっと……」

お店の中、店員さんがするリップサービスを真面目に捉える憐れな下条さん。

「……………」

つながれた腕の先から振り返ってくる。

ちよっと困ってはいるけどどちらかといえれば嬉しそうな感情がにじみ出ている。

どこをどうしたら姉妹なんだか。

けどまあいちいち説明するのも面倒だし……なによりこの場の選択肢はこうすれば

良いって理解している。

「そんなところですよ」

「まあ！ いいですね！ 利発そうな妹さん？ ……いとこさん？ ……でうらやましいです！ どおりで雰囲気似てるって……」

買わせるためのお世辞で心の底から喜んでるらしいくるんさん。

似ている？

僕とくるんが？

どこが？

……女性の価値観はほんとうに分からない。

顔も髪も体もなにもかもがぜんぜん違うのに。

あと雰囲気だけはぜったいにない。

ありえないな。

絶対だ。

この僕のどこがネジの緩んでいるゆるふわだ。

髪の毛を隠してズボンなら弟、そうでなければ妹。

関澤さんと出かけるときはそんなこと言われもしないのに、こうして下条さんと出かけるほとんど毎回、それも何回もおんなじようなことを言われる。

いやまあ手を引かれておとなしくついて行っているっていう光景がそう移るんだらうけどさ。

きつと「姉妹くらい仲が良いんですね」っていう意味なんだろう。

そう翻訳している。

けど、僕がくるんメロンさんと似ているって言われるたびに……なにかこう、心にもやっとするものが広がる。

「……………」

高校生と見間違える背丈とファッションセンス、でつかいおっぱいにおしり。

いいなあ。

身長と体重と胸とおしり、ちょっとでいいから分けてくれないだろうか。

どうせすぐに増えるんだらうし、少しくらい良くない……？

## 17話 学生たちの、夏休み(2) 2/3

「.....」

「♪」

アイスとかってカロリー高かった気がする。

いちいち何かにつけて「カロリーが」って言うんだから止めといた方が良いんじゃないかな？

そう思うんだけどこの子みたいな女性とか女の子とかいう存在らしい存在は理由をつけて食べるだけだろうし……別に良いや。

でぶるのは僕じゃ無いし。

僕こそがでぶりたいんだけどなあ。

ああいや、でも標準体重越えは何となく嫌だしやっぱり普通で良いや。

そんなくるん子さんは僕の倍のアイスが乗っていたのに僕よりも早く食べ切って、そして例のごとくやっぱりお腹がいっぱいになってきてどうしようか迷うあのさくさくしたコーンの部分もさくさく平らげてご満足そう。

食べてるのを見てるだけで僕も満足しそう。



満足しちやった。

やっぱり食欲か。

その栄養がメロンへ繋がるのか。

……アイスならなんとか食べられそうだし、僕もこれで肥えてみようか？

けど食べ過ぎててもお腹を下して栄養がだだもれになっちゃいそうでああ。

包み紙のところをなんか折り紙みたいにして遊んでたけどやっぱりゴミ箱へぽいと捨てに行く。

行動のいちいちが新鮮だからって見入っちゃってたけど、彼女が戻ってきたから気がついたことをひとつ聞いてみることにする。

「ところで下条」

「かがりよ？」

「下条」

「むー、かがりだつてば響ちやんっ」

どうしても下の名前じやなきや嫌なんだって。

関澤さ……ゆりかもおんなじだけど、どうして女の子ってそういうのにこわだりが強いんだらう？

男ならその辺どうでもいいのにな。

「……………かがり」

「なーに？ 響ちゃん。 あら、アイスおいしかったわね！」

「そんなに買って食べて……………お小遣いのほうは大丈夫なのか？ いつも随分と使っているけれど」

「……………あら」

複雑な表情できたんだ……………って思うほどにレアな顔をしてぱつと反らした彼女視線の先には服屋と小物屋と香水屋とかで買った紙袋がずらり。

駅を出てたったの30分歩いただけでこれだ。

僕だったらもう重くて動けなくなってる量のお買い上げ品一覽。

どれもそこまでの値段じゃないのは一緒に連れ回されて「いいね！」botをさせられてたから知ってるんだけど、こんな感じで買い食いまでしてこのあとのお昼もあつて。

……………いつもこんな感じなんだけど、ちよつと羽目外しすぎじゃない……………？

中学2年生のはずでしょ……………？

高校生ならまだしも……………いやいや高校生でも毎回こんなに豪遊できるの……………？

おこづかいいくらなの……………？

そう思ったんだ。

僕のときは月に千円くらいしかもらってなかったけど今の子は違うんだろうか。

まあその辺は家によるとしか言えないしな。

僕みたいに小学生で500円からってコースもあれば「お年玉なの？」って金額をもらってる子も居た気がするし。

子供自身としてはそりゃあ多い方がいいんだけど……金銭感覚が決定的に狂いそうだよなあ。

少なくとも今の僕みたいなプロニートを続けるための清貧な生活なんてできないだろうし。

それはともかくこの子の金遣いはちよつと、いや大分荒い感じがする。

浪費癖がつくとこの先が地獄だ。

ちよつと年上として……あくまで年上として、釘を刺しておかないといけない。

この子ってば頭がその辺に生えてるお花みたいだから「お金たくさんもらえるよー」ってだまされていかわいお仕事平気でしちゃいそうだし……心配じゃん……すつごく心配じゃん……。

「今朝親御さんにねだつたと言っていたけど、いったいいくらだ？」

「あの、えつと」

「そこまで買うとそれなりの値段になっているはずだけど？ レシート捨てていなかった

たのは偉い、見せてくれないか？」

「ひ、響ちゃん？」

「ひとつひとつは安いものだけど僕が見た限りでは7、8千円くらいにはなっているんじゃないか？今日の買い物だけで」

「違うわ、6千と……」

「6千円。大学生が真面目に働いて6時間の金額か。毎回そんなに使って何も言わないのか？」

こういうときはたたみかけるに限る。

たたみかけられて学習したんだ。

それに正論ってのは強い。

こうやって押し通せるんだもん。

今の時代はロジハラとかいう謎の論理があるらしいけどそんなのどうでもいい。

これは年上の友人からの真剣な忠告だもん。

どうせいつものように「だって」とか「でも」とか「ところで」とか「思い出したんだけど」みたいなこと言って強引に打ち切ったり話題を変えようとするだろうからって思っていたから、息継ぎなしでひと息で言ってあげた優しい僕。

だまりこくったメロンかがりをじっと見上げる。

彼女の瞳の中にその反対の色の僕の髪色が映る。

でっかいメロン……じゃなくて、僕でもお洒落って分かる服装の私服はいつも新しいパーツになるし、言葉遣いとか話のところどころに出てくる言い回しとか雰囲気とかはちやんとした家って気がするし、余裕があつてお金多めにもらえる家庭ではあるんだろう。

でも中学生からそれはちよつとまずいんじゃない？

いや、他人の家の教育方針にとかわれたらしようがないんだけども。

でもこの子だつて中学生。

中学生つてことはあと10年以内には絶対……ほぼ確実……多分……きつと家を出て働いてるんだ。

この瞬間も全力で働いてない僕のことがあるから強く言えないけどたぶんそう。

んでこの調子で育ちちゃつて就職したら、お給料の大半を生活を切り詰めての買い物三昧とかなんとかカリボみたい陰謀でにっちもさっちもいかなくなる生活がおぼろげに見える。

それはちよつとかわいそうだ。

メロンしか育つてない未来が見える。

「えつとね、大丈夫なのよ。平気なのよ、これは。ええ、響ちゃん。念のために貯

金もしているし……」

「ほんとうかい？」

「え……ええ」

目が泳いだ。

分かりやすいなーこの子。

しれっと嘘つくような感じじゃないだけ良いのか。

「まだ夏だよ？ 今年はまだまだ残っているよ？ 次のお年玉まではかなりあるんだけど、ほんとうに残っているのか？」

「あう」

「毎回の外出で毎月の小遣いを使っているように見えるけれど？ それはもう、夏休み前からだな」

くるんくるんとした髪の毛の先がしおれて行ってアイデンティティを失うかがりさん。

微妙な表情になって目線は外したまま元くるんさんは指をもぞもぞしたりしている。

……悪いことできそうな子じゃないのは良いんだけどなあ……。

「毎回復を買っていたらいくらお金をもらっても終わらないよ？ 大人ならまだしも、

君たちの年頃はまだ背が伸びるだろう？ 来年には今日買ったものも使えないかもしれないよ？」

身長は充分高い……多分160超えてるんじゃないかな、中学生の女の子なのに……どうも食べたものの栄養が胸とおしりに行く体質らしいし、その服もぱつつんぱつつんになりそうだよ？

「……実はね」

「うん」

「けっこう……そのね？」

「うん」

「まずいの……」

だろうね。

しおれた毛先をいじいじしだすしおしおさん。

あ、髪の毛そうやると気が紛れるよね、分かるー。

……じゃなくって。

最近思考まで汚染されて来たのに困惑。

「夏休みに使うはずだったお金も……あとお年玉も……秋までのおこづかいも」

「……………」

「もう、ほとんど残っていないの」  
ああ……。

「やっぱり」

使い切るどころか前借りにまで手を出していた様子。

それなのに今日みたいにお金をあげちゃう親も親だな。

多分相当に甘いんだろう。

前借りさせるくらいだもんな。

「でもね響ちゃん！」

「うん」

「でもでも、夏休みじゃないとこんなふうに出かけられないし！ 今使っておかないと  
当分使う機会もないのだし！」

「貯めておけばいいじゃないか。 欲しいものはキリがないんだから」

「でもっ！」

なんか元気になって来たらしい。

しゃべってるだけで元気になれるとかすごい才能だよな。

くるんつと髪の毛が立ち直る。

「響ちゃんと出かけていると、その……小さいのに立派な男の子と一緒にあそばせて



いるみたいでなんだか新鮮だし、他のお友だちとはまた違う感じでなんだか楽しくつて、つい……普段はこうじゃないのよ……」

「……僕と出かけると……」

「……一瞬どきつてしたけど初めのころのかみあわなさとか気まずさを思い出したら当然か。」

「今だって服装だけかがりに合わせてやつとの思いで来たスカートだけど話し方とかまでは変えていないしな。」

「肉体はどう見ても女だけどつて言うか着替えのときに下着まで見られたから女だつて知ってるんだけど、でもそれ以外は成人男性がにじみ出しているんだろう。」

「でもなー。」

「口調まで変えたら……今はいいかもしれないけど戻ったときが怖いことになるもんなあ。」

「こういうのつて一回染みついたらぼろつと出てきちゃうもんだし。」

「いい歳した男がちよつとわづつた声で女の子みたいな話し方したらやばいじゃん。」

「このご時世だから「そういう人なんだ」つて指摘されなさそうつて言うのもまたやば

いじゃん……。

僕はノーマルなんだ……アルファベットで自己のアイデンティティーを表現しなきゃいけない大変な人たちじゃなくなつて由緒正しい紛れもない正真正銘の男なんだ……。

「お金も貯金箱にあつたらあつたで部活の帰りの買い食いとかでちよつとずつ減つて行くのだし……本当にいつの間になくなつちやつているのよ？ お金つて難しいものよね……」

「そうか。 大変だな」

「分かつてくれるの響ちゃん！」

「ああ、少しね」

とりあえず危機感を持っているようだなによりだつて分かつたから良いや。

あと親御さんもお金渡してるんだから毎回注意くらいしてるだろうしな。

典型的なお金に……いや、勉強とか全般かな……そういうのをみんな自己管理できないつていうよりはまだ中身は子供なんだつて分かつたけど。

いや、小学生でも我慢したり先を見て貯金できる子はいっぱいいるんだけどな。

この子にそこまでは求められない。

体だけが急成長して中身が追いついていないんだな、きつと。

栄養もさぞかし肉体に吸い取られているに違いない。

このまま順調に成長……いや、体は充分だから精神的に……するといいんだけど。将来が少し心配なところだ。

「でも、ありがとう」

「ん？」

「私、いつもお金のことになると怒られてばかりなのよ」

「そうだろうね」

「だから響ちゃんみたいに優しく言ってくれる人は……あつ！」

もうびつくりするのにも慣れてきた不思議な感覚。

下条さんのたれ目が向いた方向に続くと……そこには女性客がわんさかなお店。

ああいう雑貨の店、女性はほんつと好きだよな。

小物が好きなんだよな。

ゲームでクリアに関係ないちっこいものを収集するって考えたら僕でも納得できる。

「響ちゃん！ あのお店行きましょう!!」

「かがり？」

「この前テレビで見たのよ！ 配信の人も言っていたわ！ 有名なんだって！ またいいもの見つかるかもしれないわ！」

「かがり、そろそろ止めたほうが……それに君は今の僕の話を」

そこでぐいっと腕を引つ張られて僕の口が止まる。

僕は僕の腕を見る。

いつの間にか紙袋を片腕に抱えて僕の片手をつかんでいるかがりの手。

いつの間にか掴まれていた。

いつの間にか。

なんでこんなに動きがすばやいんだ。

質量保存の法則はどこに行った。

「分かってるわ！ 見るだけ！ ここは見るだけだから！ ね、いいでしょう!」

「はあ……………」

「分かるー」 or 「いいね!」 以外の選択肢が無いみたいだからのそのそと立ち上がる。

あんな人混みにあえて突つ込んでいく神経が分からないけどそれがこの子だから

なあ。

ああいうところに行くとな僕、女の人たちのおしりとかで顔を押しされるから好きじゃな

いんだけど。

男がほとんどいないから、かろうじてなんとかぎりぎり我慢できるけど。

男だと僕の顔にベルトとかの金属がちょうど当たって痛いんだよなあ。

あと見たくもない膨らみが目線だという。

女の人のかばんもよく当たりそうになるけど意外と女の人って僕のことにはすぐ気がついて避けてくれるから楽だし。

これが低身長の悲しみ。

今度ゆりかと「分かるー」しよう。

僕はbotだ。

「ほら早く早くっ」

「待ってくれ……」

せめてもの抵抗でわざとゆっくりと歩く僕。

……彼女や奥さんの買い物に付き合わされるっていうの、こういう気分なのかもな。うんざりしてきてからが本番だというやつ。

しかもそういう関係だから機嫌悪くさせたくないって言うどん詰まり。

なまじ距離が近いぶんその辺で待っているとかできないの。

「……………」

実際に体験してみても痛感しているけどこれはきつい。

やつぱり僕は独り身で良いや。

結婚とかするにしても……相手に大きな希望を抱かない冷めた関係が理想だな。



それから30分。

くるんはくるんくるんしていた。

「それでね！ その子が言うにはね！」

「そうか」

止まらないかがりの「そういうえば」でつながれるお友だちとやらの話。

「それはすごいな」

「でしょ!?! でね！」

「なるほど。 その子はそれでどうなったんだ？」

「あ！ やっぱり気になるの？ そうよね、実はねっ」

以下似たループが延々と。

おしやべりには話をさせておくのが効く。

ただこうして適当に話を聞くフリをしておくだけで無駄に歩かされるのを回避できるし。

結局なんにも変わってないかわいそうな子だけど、さすがにちよつとマズいと思った

かお店の中を見るだけで買い物はせず流れるようにして喫茶店へ。

ずいぶんと連れ回されて僕はもう体が芯から重いのにこの子は元気そうでなによりだ。

「疲れたよ……」ってどうにか説得してやっと入った喫茶店。

このチャンスを逃すわけには行かなかったんだ。

僕の体力はもう限界なんだ。

でもお洒落すぎる町なもんだから外でだるんと休める場所なんかないし駅も遠いしで、高くないお値段の喫茶店。

あとはここで話でもしておけば……っていうよりは今みたいに話をさせておけば今日のところは満足してくれるだろう。

これで1週間くらい……持たなそうだよなあ……。

僕にとってはもう丸1日経った気がするんだけど……現実ではまだお昼前なわけで2時間経ってなくてこの子にとってはまだ10分なんだろうなあ……。

相対性理論を思い出す。

時間の流れが相対的って言うところだけ。

「でねっ」

「うん」

学校外の知り合いってことで話したい話題がまだまだまだあるみたい。

適当に突っついてやればいくらでも出てきそうだし、このまま疲れさせておこう。

おしゃべりだから話していると楽しくなってくる性質でそこまで疲れなにか……。

まあ外ではしごするよりはよっぽどましだからそのくらいは我慢だな。

手元には豆の香りが薄いコーヒー。

ここのお店は僕的には失敗だった。

豆を浅煎りしすぎだし、たぶんそもそも豆が古いしお湯の量が多い。

不満しかないけど……まあ所詮はチエーンだし、安いから入ったんだしで文句は言えない。

いちどグルメになってしまってもう元には戻れない。

生活水準は下げられないんだ。

……帰ったらちゃんと飲み直そう。

ちよつとだけ濃くして、ブラックで。

下条さんの会話を少しだけ聞くフリをして単語だけ拾ってかんたんな情報整理をしつつ話したさそうなどころを聞いてあげる……というのをぼんやりとする。

僕はそういうのが得意。

なに話したか頭を素通りするのが欠点。



……でも、ここまで振り回されてかなり歩いたけど、思ったほど疲れてない気がする。地道な筋トレと近所の散歩のおかげで体力がついたおかげかな？

そうじゃなかったら今ごろは息も絶え絶えだろう。

春ごろだったらまず間違いなくそうなっていたはずだ。

いや、梅雨でもまだ怪しい。

少しだけ進歩かな？

……中学生の女の子の買い物についていくだけだから誇れることじゃないけど……。

えのき一本から数本ぶんになったくらいの進化。

まずはもやしが目標だ。

さて、メロンさんの手持ちはいよいよとなくなったらしい。

いつものようにセットで必ず千円は超えるような甘ったるいお店を名残惜しそうに見ながら「こつちにしましょう……」っていつものように手を引かれながら入って来たもんな。

僕の提案が通るって思ってもなかったから僕がびつくりしたくらい。

まさかスイーツを食べるお金すら心許ないなんてな。

当然お昼も食べられずまさかまさかの昼前解散だ。

……ご飯のお金使い込んじゃうとかやばくない……？

僕が言わなくてもこの子の友だちとか親御さんにお説教だっただろうな。

でもお金が無いわけじゃないから……コンビニで買ってその辺でとかラーメン屋とかみたいなどころならぜんぜん余裕だろうけど、そういうのは好きじゃないみたいだし。

この子といるときにはものすごく珍しいできごと。

僕にとっては嬉しいことこの上ないな。

お祝いに帰ったらラーメンでも作るか。

味噌か醤油か……暑いから塩でさっぱりだな、うん。

煮卵を作っておかなかつたのが痛い。

仕方ないから奮発してスープの煮卵を買って帰ろう。

「まだこれくらいはあるんだから！」って財布を取り出して……中のお札がほとんど姿を消していたのに気がついて本人が驚いて多少は反省もとい落ち込んでいた彼女。

カフェまたは喫茶店って言うホームグラウンドに入っておしゃべりっていう本能を出してすつかり元通り。

まあそんなもんだよね。

けど、聞いているとこういうのはよくあることらしくって、ときどきお会計で足りなくなつて友だちに借りることもあるんだとか。

ちやんと返して……?」

反省するとか言っついても甘いものを食べられないことに対して真剣だったしな。そうかんたんには治らないだろう。

将来が思いやられる。

「で、そのとき私、こーんなに困っていたのよ!」

「そうか、それは大変だったね」

「そうなのよ、それでね……?」

どうでもいい話が続いてるらしい。

ふんわり系な彼女の会話はボデイランゲージが激しい。

そのたびに揺れるぶるるんはさぞかし目の毒なんだろう。

学校や家であったこととか見聞きしたことをストーリー仕立てで最初から最後まで、強調したいところはそのあとでもういちどって感じで声音も使い分けながらの演出は見事なもの。

楽しそうでなにより。

毎日が幸せそうだ。

熱心に聞くと疲れてきて僕の会話を受信するキャパシティを超えるから会話の10分の1くらいしか聞かないで残りは通り抜けさせているけど……それでも彼女の私

生活はだだもれだ。

たぶん個人情報とか気にしてないんだろう。

気にしないんだろうな。

「あれは申し訳なかつたってちょっと思ったりしてるの……」

「それはしかたないさ」

しょうもないことは意識にも引つかからない。

でも話を合わせるってほんとうに大変だからときどきちゃんど意志を持って会話を  
るんだ。

まずは中学生になりきって、それも将来的になるかもしれない「なんとか女子」みたいな人たちに囲まれた生活に溶け込むための情報収集って目的があるから、こうして  
られる。

あとはちよつとした感性とか興味のポイントとか意外と発見があるものだからそこ  
まで退屈はしない。

まあ僕の目的はとりあえずはJ C、次はJ K、そしてJ DそしてO L……今は言わな  
いか……そんな感じに無難に擬態することにあるんだから細かい名前とかはぜーんぶ  
スルーしてはいるんだけど。

忘れていても何とかなるしな。

どうせ話してくれるんだし。

僕がこの体のままで迎える未来に向けてこの子たちを利用することには罪悪感もあつた。

でも今はこうして話を聞いてあげているんだし、僕が疲れたところにおしやべりして満足しているんだからウインウインだろう。

服飾の店ではとりあえずでアクセサリーをつけられて服屋ではとりあえずでいろいろ店員さんと一緒になつて着させられているしな。

抵抗するだけムダだつていうこともある。

なにを言つたつて結局は着飾れるんだから。

むしろ僕がもっと対価をもらいたいくらいまであるんじゃない？

だつてこれってお守りでしょ？

胸とおしりだけでつかいけど中身は小学生な中学生のお守りでしょ……？

## 17話 学生たちの、夏休み(2) 3/3

こんな僕だけど、別にかがりみみたいな幸せな子について思うところは特にない。

いや将来どこるか来月の金策をどうするのかとか勉強する気あるのかとかは心配だけど、ふわふわと好きなことをしているのを止めはしない。

止めたら流れ弾が僕に直撃だしな。

ニートって言う高等遊民には厳しい。

それに僕は僕と相容れないタイプの女性の人生について深く考える興味はないし、ただ幸せになってほしいって思うだけ。

さて、そんな感じでおはなしすることしか頭がない下条かがりさんに対して僕は考える。

どんな感じで言えば……僕がこうやって連れ出されるのが本気で嫌がついてるって理解してくれるんだろうかって。

いやいやちゃんと言ってるよ？

僕は家で静かにしているのが好きなタイプなんだって。

外に出て歩いてお店を見て人と会って楽しくなるタイプじゃないんだって。

頼むから分かつて頂戴って何回も言った。

でもこういう大切な話ほどお耳からお耳へと素通りするらしいんだ。

こればかりはどうしようもない。

分かつてる反応をして分かつてない証拠として、そう強く主張してみても毎回軽い感じで流されるし……どう考えても僕が恥ずかしがっているからだっけか思われていない気がする。

なぜだ。

やっぱりこの見た目か。

やっぱりこの声か。

子供だもんな。

当然か。

精いっぱい大人の男を演出しているのに「クールねー」とか「知的な話し方ね！」とか「守ってあげたくなるわー」とかぬかしおる。

どうしてくれようか……。

「……あーあー」

ふとくるんさんの何音か下がった声。

おっと、これは聞かなきゃいけないさそうな声の調子。

僕はよく理解できているんだ。

そうしてくるんさんの目元を見上げる。

歩いているときには身長差のせいですごく見上げる感じになるから体相応の顔に見えなくもないけど、真つ正面から見ているとやっぱり精神年齢相応の顔。

童顔の女性つて見えるけど……やっぱりつい最近まで小学生だった子供だよなあ。

ちよつとだけ厚ぼつたい感じの目元と肉付きのいいほつぺた。

うん。

あと数年順調に成長すれば引く手あまただろうな。

いや今でも多分そうなんだろうけど彼女自身が、その……ねえ……。

こういうのが好きな男も多そうつて言うか多分大半なんだと思うけど、それにしても知性がねえ……。

ごくたまーに興味に向いたときとかには結構普通に頭良いなつて思う刹那もあるんだけどなあ……残念さがとつても悲しいなあ……。

致命的に現実社会に向いてないんだよなあ……。

「今年の夏休みも半分が見えてきたわねえ……。長いつて感じていたのに気がついたらあつという間に終わってしまいそうだわ——……。」

それで落ち込んでたらしい。



なんだ、心配して損した。

甘いものを食べられないストレスからかやたらと砂糖とミルクでじやりじやりして  
いそうな紅茶をすすってくるんさん。

……あ、砂糖を噛んで楽しんでる。

なるほど、お金が無ければそれでそんな楽しみ方があるのか。

みみつちくとも学生だから許される贅沢。

角砂糖をこころ楽しむとか……どれだけ甘味が好きなんだろうか。

そんなことしてるとまた太るぞ。

胸と尻が。

「毎日遊べると思っていたのだけど夏休みって部活も補習も忙しいし、お友だちともあ  
んまり予定が合わなくて……なかなか思っていたみたいにはならないのよねえ。

こういうときは響ちゃんももーっともーっと、お誘いに乗ってくれたら楽し  
かったって思うのにお家の事情じゃ仕方ないわよねえ……まだまだ遊び足りない

わあ——……」

「……」  
恨めしげな目で見られるけど強気で返す。

「……」

「……響ちゃんってじーつと見るの好きよね！　かわいいわ!!」

「……」  
しよせんはくるんか。

でもさあ、僕、がんばって週2で付き合っただけよ……？

僕の全力を使っただけよ……？

こうやって外で会って帰ったら2時間くらい寝ちゃうんだよ……？

幼女ボデイの貧弱さなめてるの……？

それでもまだ足りないの……？

どれだけ話をしたか、生き物なんだか、このゆるくるんは。

しかもほぼ毎日部活と補習とで学校に通ってこれらしい。

学生だから元気だな。

だって人生の最高潮だもん。

その体力を1割でもいいから分けて欲しい。

かなり切実に。

もいでもいい？

「……」にしても「家の事情」とかいうふんわりしてるにもほどがあるのに妙に説得力ある設定を考えておいてほんと良かったと思う。

ほんとうに。

いろいろなとごまかせる上に誘いを簡単に断れる……3割くらいの確率で……ついでうのはとっても助かるんだ。

あんまり断りすぎてもまたむくれるから加減が重要だ。

遊び相手しないとむくれるとかお子様だな。

下手をするとペットの犬とか猫並みだ。

「ん。 そう言えばかがり」

「なあに？」

「勉強、というか宿題は……大丈夫なのか？ 毎日どこかしらへ出かけているしずいぶんと忙しいみたいだと今日も聞かされたけれど、きちんと手をつけているのか？ 毎日やれとは言わないけど週の半分くらいの午前は手をつけておかないと手遅れになるぞ？」

「やだ響ちゃん先生みたいなこと言ってー」って言われる覚悟で言ってみる。

……最近の夏休みの宿題とやらがどれだけ大変かなんていうのはわからない。

けどゆりかから聞いた限りじゃ、彼女みたいに勉強の基礎体力と集中力があって、しなきやいけないときには集中できる感じで「普通に気合入れてやって5日くらいかな？」らしい。

これは日記とか自由研究とかいうやり方次第では時間のかかるものを除いた量。

さらに言えば、これは分からないところはさつきと飛ばすっていう要領がいいっていうか勉強のコツを知っている子の場合なんだ。

試験なんてだいたい6割から8割できれば通るようになってきているって理解できてるゆりかみみたいな子の場合の話。

学生時代の僕とか目の前のこの子みたいに与えられた分をこなすしかない生徒にとってはもつと大変なはず。

学校やクラスが違ったとしてもこういうのはだいたいみんな横並びだしたいして変わらないはずだけど……。

「……………」

「……………」

問。

「……………」あの、ね？」

「……………」

沈黙。

「あのね、響ちゃん、実はね、あのね？」

「……………」

不安で心臓がぼくぼくしてきた。

他人の分かりきつてる答えを聞くのでここまで心配になるなんて初めて。  
ある意味すごいなこの子。

「……その。もし、もしよかったらーなんだけど……宿題、手伝ってもらえないかしら  
……?」

「……………」

明確な回答を逸らして譲歩を引き出す術は身に付けているらしい。

そうやって親御さんとか先生のお説教から逃げているんだろうな。

「ひ、ひびきちちゃん……?」

「……………」

「そ、そうやって無表情でじーっと見つめられると照れちゃうわ——……?」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ほら、また今度、次は秋のお洋服も一緒に選んであげるから……」

「ごまかせないと悟ったか汗をかきながら全然嬉しくない提案をしてくる。」

「学校じゃ怒られるのー」って香水つけてるもんだから、それが汗の水分で漂ってくる。

空間に充満するくるん成分。

「……………えっと……………そのお……………」

……………なんだかかわいそうになって来た。

元からかわいそうな子なんだけどな。

「……………服は別にどうでも良いし他にお礼とかも要らないよ」

「ほんとう!?!」

両手を勢いよく胸の前で合わせたもんだからぶよんっとなってるのに気がつかないらしい。

……………この子、ほつといたら危ない気がする。

とりあえずで先手は打ったから「着せ替え人形がお礼」とかいう意味不明な未来は回避。

大体服なんてもうどんな風を選べばいいのかとかどんなサイズ感なのかとか分かってるし。

実店舗だろうが通販だろうがおおよその見当はつくようになってるんだ。

成長を期待しているから実店舗で買うことになるだろうけど、どうせ……………どうせまた別の理由で僕を着せ替えさせるつもりなんでしょ？

僕は知ってるよ？

「それで？」

「？」

僕のうながした問いにくるんつと首をかしげるだけの反応。

……くるんさん……。

「……あとのくらい残っているんだと訊ねているんだよ。君の宿題が」

最初の質問事項に戻ってあげる優しい僕。

「……………」

「科目とか何ページ分とか。それくらい言えるんだらう？」

「……………」

沈黙。

返事がなくて不思議に思うと……目がさまよいはじめている。

「今日は暑いわねえ」とかどう考えても遅すぎる発言をしながらハンカチでしきりに顔を拭っている。

……まさか。

まさか。

え、嘘でしょ？

いやいやさすがに……え？

中学も2年目になって去年の反省も忘れて遊んでしかないとか……普通にあるけど、でもさ……？

「……ほとんど」

「ほとんど？」

「……………」

「……………」

「……………」手をつけていないの」

「ああ………」

脱力。

ものすごい勢いで僕の体から力が抜ける。

だってこの子……夏休みの宿題って言う結構なポリウムあるのを完璧にほつぽり出して毎日ふらふらしてるんだよ……？

なにやってるの……？

いやまあ中2なんてそんなもんだって言えばそんなもんなだけどさあ……ちよつと前にゆりかが勉強系は終わらせたって聞いちゃったから余計になあ……。

あと、うつかりとはいえ補習受けてるって聞いているからなおさら心配なんだけど……



?

「そもそも……そもそもね……?」

「うん」

「私だつてこのままではいけないかもしれないって思ったのよ」

「うん、このままではいけないね」

よろしくないね。

「でしよう? だからなんとか立ち上がつてお部屋の中をがんばつて探しても……プリントもなにもどこかへ行つてしまつていて」

「ええ……」

「あ、でも、昨日お友だちに! お友だちをお願いつて言つて撮つたものを送つてもらつてようやく分かつたのよ?」

それはいばるところじゃないつて思うよ?

「補習のときに先生に頼んで教室も探したけど無かつたし……どこへ忘れてきたのかしら……?」

「ああ……」

この子、そういうのが致命的にダメな子だつたか……。

知つてたし理解はしてたけど、それをこの耳で聞くのは段階が違う。

違うんだ。

数ヶ月前どころか数年前の会話まで……声音まで身振りまでみーんな再現できるほどに記憶力はいいはずなのに。

誰が誰とひつついてどうなつてどう離れたかまでゼーんぶ覚えていくくせに。

それをこの前僕の前で再現して見せたくせに……つい半月前に「大事だよ」つて渡された、提出しなきゃならないものが載つてる大切な紙すらをどこかへやつてしまう子。

いたなあ、こういう子……。

「でもねっ」

なんか言い訳してるけど僕の耳にはもうなんにも入つて来ない。

自力でプリントとかを手に入れるだけまだマシな部類とは言えるよ？

一応ヤバいつて自覚できて自発的に誰かを頼つて情報を手でできたんでしょ？

えらいよ？

これが「明日提出なのに友だちから返事が来ないから分からないの」とか抜かしたりするよりはよーっぽどえらいよ？

でも、これはさすがにまずい。

僕が大変な思いする以上に……僕が言われるままに時間を潰すお供をさせられてる以上に、このままにしておいたらこの子はかわいそうな子になっちゃう。

しよせんは中2だしまだ充分になんとかなるけど……ちよつと距離置いた方が良いな。

僕のためにも、栄養が体に吸われたこの子のためにも。

「かがり」

「響ちゃん？」

「君はここで僕と話をしている場合じゃない。すぐに帰ってさっさとできるところから手をつけるんだ」

イスつていうかシートをずりずりしながらテーブルから抜け出て自然な感じで着地して席を立ちながら言う。

断固とした姿勢だ。

僕の決意は固い。

おっと、スカートがめくれてる……。

「……………」

さっさつとホコリを払うフリをしてさりげなくふとももをガード。

ちようどテーブルで視線が遮られて気づかれなかっただろうからよかつたけど……スカートの下が他人に見られても僕はなんとも思わないけど……タイツだし平気なんだけど……そもそも幼女だから誰も気にしないだろうけど……それでもはしたないか

ら気をつけないとな。

ここは足がすぐにつかない高さだから嫌いだ。

このチェーンの名前、しつかり覚えておこう。

テーブルも高くて肩が凝ったし。

ここは僕の敵だ。

幼女に敵しい世界。

「響ちゃんっ」

「僕が一緒にいてもこうして話をしてしまうだけだろう？」

「え————！ 響ちゃん、一緒にしてちょうだい！ お勉強会よ！」

「嫌だ」

NOと言える僕に驚いたのか下条さんの体の動きが激しくなる。

頭を振れば髪の毛がくるんくるんして腕を使って話せば揺れる揺れるでとにかくす

ごい。

声が少し大きいせいで近くの席の人からは見られているし……っていかその辺に

居る感じの男の視線がたぶんに行っているのが丸わかりだけど……成人男性が中2に

欲情したら犯罪だからね？

「……………」

ついでで女装している僕にまで視線が来てるし……えつと、僕幼女だからペドフィリアつてのになっちゃうよ？

でも男だからしょうがないか。

そう割り切るしかないから無視しよう。

とにかくわざわざそうやって注目を無自覚で集めるのは止めて欲しい。

けど、いちどヒートアップするとなかなか収まらないんだよなあこの子……。

本当なんなんだろうこの子……無敵なの……？

「勉強会とか言つて1問ずつ僕に聞くつもりだろう？」

「だって、そうなんだけど！」

え、そうなの？

「けど……ひとりだとどうしても他のことが気になり出してしまつて手がつかなくなるし、宿題の範囲のよく分からないところあるし……」

「同級生の友人とすればいいじゃないか。プリントを送ってくれた子の他にもたくさんいるだろう？ なんなら部活の子でもいいんだろうし」

「……みんなも」

「？」

「……みんなもやっていないのよ……私たちが勉強会は何回かしてみたけど、結局すぐ

にお話しになっちゃってほとんど進まないで終わってしまったの。だから勉強会はダメねって結論に」

「ああ……………」

かつての僕の数倍の交友関係があるとしても、そのお友だちたちもみんな同類らしい。

まとめて不憫な子たちだ。

「…………その点、響ちゃんなら厳しいときは厳しくしてくれてくれるでしょうし。…………いつもいつも帰りの時間が来るとどれだけ『もうちょっとおはなししましょう』って言っても『決まり事は守るべきだ』なんて言っさつさつと帰っちゃうくらいだし！あと勉強も私よりもできるみたいだし！」

急に真つ赤な顔になってくるくるんさん。

真剣さが伝わってくるな。

「…………響ちゃんなら遊んでしまえばいいようになったら止めてくれそうだから…………それでもダメ、かしら？ちゃんと言うことは聞くから…………お願いよ…………」

髪の毛も顔も胸もしょげた感じになったおかげで静かになる。

躁鬱激しいな。

でも割と真剣に困っているらしい。

とつてもレアなのを見てちよつと嬉しい僕。

……この子はきつと、子供たちの勉強を見ていたときによくいたような感じに典型的な切羽詰まらないとできないタイプの子なんだな。

その切羽詰まり出すタイミングとか手元にあるテキスト次第で切羽詰まってやつと本気を出しても終えられないことも多いっていう悲しい宿命を背負っている系の。

まあ大多数の子は多かれ少なかれそうなんだから別に良い。

ほとんどの科目をクリアできてるんならなんとかなるんだし。

学生って大変だな。

二一トで良かった。

「……………」

顔を上げてみると、おそろおそろという感じで僕を見つめていたらしい。

……………ぼーっとしているのを熟考しているって見られた印象。

「……………」

「……………」

……まあ、勉強会なら外を連れ回されないだろうし……こうして外に出るたびに補習や勉強のグチを聞かされるのも不快だし、やだって言っても諦めないだろうし……。

それに、ここまで聞いてほつとくのもなんだか寝覚めが悪い気がする。

……赤点はひとつだけだってことだし今までは補習とか受けたこともなかったようだし、教えることもあまりないだろう。

単元の最初からいちいち教えたりしなくて良さそうで、適当に本でも読みながら監視するだけでいいならむしろ楽……？

「……いいよ」

「ほんとう響ちゃん!？」

だから声でかいて。

いい加減に人目を引くって分かったほうがいい。

「ただし僕は解いたりはしないよ。書き写したりさせるのもしない。宿題を自力でちゃんとやって終わるのをさぼらないように見ていてあげるだけだよ?」

「え——、お手伝いは……」

「イヤならこの話は無しだ。がんばってくれ」

「いいえ! き、厳しいけどそうやって見ていてもらえるだけでもありがたいの……ありがとう、助かるわっ」

いつのまにやら紙袋たちをかかえてすぐそばまで来ていたかがり。

……この感じ、もしや今から……?」

いやいや元気すぎでしょ。



僕はもう眠いの。

お昼前なのに体力の限界なの。

帰ったら寝なきやなの。

幼女の体力なめたらダメなの。

.....

.....なんかときどき思考が子供っぽくなる時がある気がする。

「それならいいけど。でも今日は僕、そろそろ帰らないと行けないから。君も早く

帰ってできそうなところから手をつけてみてほしい。それで別の日に.....」

というところでいつもの尿意。

尿意は突然に。

そんな映画無いかな。

「.....と、済まない、少しトイレに行つてくるよ。先に外にでも出ていてくれないか

？」

「あ、じゃあ私も行くわ！」

「.....は？」

「テーブルのコップとかを片づけてしまえばいいんだし。ちよつと待っていてねっ」

なんか変なことを言い出したかがりがるんな感じでお片付けを始める。

いやいや、さすがに一緒にはないでしょ……。

個室だったとしても隣同士っていうのはちよつと……なあ？

まだ女性トイレでも抵抗感があるのに知り合いがそばにいと困る。

大変に困る。

……この辺が学生と社会に出ていない社会人との差か。

男女の差とか言うものじゃないだろう。

僕だって大学までは人の中に居たんだから。

「……ならかがり。 僕が荷物を見ておくから先にトイレへ」

「あら？ 響ちゃんが行きたいんでしょう？ それなら一緒に行ってしまえばいいじゃ

ない」

「いや、だから」

「考えてみたら私たち、まだ一緒に行ったことなかったものね！」

「……………」

女性とは徒党を組む存在。

一匹狼でも平気な男とは違う。

それは用を足す瞬間でもおんなじ。

……あー、どうやっていいわけしよう。

「……あら、一緒はダメなの？ 今は人……いないみたいだし……ぱつと見てだけれど。いなかったらさっさと済ませて早く出られるわよ？ 嫌なの？」

嫌なの。

そんな僕をのぞき込むように屈みながらメロンが迫る。

不思議そうな顔も上に乗っかっているんだけど、この場合はなんて言ったら……。

「……えつと、僕は。……そう、事情があつて。言い辛い事情があつてそういうのが

苦手なんだ」

「？ そう？ 残念ね」

どんな返し方したら納得してくれるんだろうって思つて考えてたらあつさりとな納得したらしい。

……やっぱ僕はこの子のことがよく分かんない。

「じゃあここで待っているわ。ちよつとお友だちとかお母さんからのメッセージがたまっているからお返事したいところだったし」

「……すぐに戻るよ」

さっさと僕の分のトレーまでチェーン店の喫茶店特有の返却口に返すとすとんと座り直してスマホをいじり始めるかがりさん。

「……………」

……あつさり過ぎない？

いや助かったけどさ。

それでもこの子のことだから気は抜けない。

何歩か歩く度にそつと振り返って見るけど手元以外は微動だにしない現代系JK風  
JCさん。

苦しい言い訳かって思ったけど……そこはくるん下条さんの実力発揮だ、興味が他に  
移りさえすればあつさり風味。

僕は年下の女の子が隣の個室に居るって言うシチュエーションを意識しながら用を  
足すって言うやばいのを回避できたからありがたがっておこう。

そうしてお店のすみっこのトイレの前に着いたけどもこの前と違って誰もいないみ  
たい。

こういうのって本当タイミングだね。

「……………」

ぱたんって扉を閉めてオシャレなトイレ空間でタイツを膝の上までするつと下ろし  
てぱんつを脱ぎながら考える。

……そうか。

人と外に出るときにはいずれそのうちなんだ。

しやあああという音が音姫さんキャンセル。

たつた今危なかつたみたいに連れションつてのもすることになるのか。

聞くところによると女の子のほうがかういうのにこだわるみたいだし……女社会に巻き込まれるなら嫌でも付き合わなければならぬだろう。

女性はリーダー格から嫌われたりするとおしまいっていう怖い世界に住むらしいな。

まあ冷静に考えたら男同士だって学校に限らず駅とかでちよつと一緒にとかよくあるんだし、なんなら男は真横に立つたまま出して出すんだから考えようによつちや男の方がやばいし。

うん、冷静に考えてみればごくごく普通のこと。

こつちには音姫さんもついているんだしそこまで必死になることじゃない。

男みたいにお互いのがすぐそばに見えるつていうのも物理的にないんだもんな。

「……………」

でもなあ……。

「はあ……………」

こういうのに過剰反応してつて理解はしてる。

理解はしてるんだけど……僕の気持ちは動揺するんだ。

どきどきするんだ。

相手は子供なのに。

人と接しなすぎた弊害でもある気がする。

年端もいかない女の子たちと……ここは良いけど、そう。

駅とかのトイレで半個室みたいな空間で隣同士でするっていうのには、僕の元成人の

常識的な男としての倫理観が悲鳴を上げるんだ。

僕の思考っていう理性を感情が上回る珍しい場面。

いやだって……どう考えても物音とか聞こえるでしょ……？

僕のが聞こえるのはともかく、聞こえて来るのは困るでしょ……？

うじうじしながら出し切ってほっとしてちよつと落ち着いたけど……こうして女の子の格好をして外出をするのならいずれは越えなきやならない試練なんだろうなって考えてまた鬱々した。

ただでさえ社会復帰が遠のいてるのにこの仕打ち。

僕が何したって言うんだ魔法さん。

……なんにもしてなかったのは事実なんだけどき……。

## 18話 学生たちの、夏休み(3) 1/3

テレビの向こうはいつだって物騒だ。

『……………で、現場の状況を……………どうなっていますか?』

『はい。……………の衝撃で辺りが一面……………』

『これはやはり初期の対応が……………だったためでしょうか?』

まだ情報が入ってきていないのですが、おそらくは……………』

でも僕には関係ない話。

どれだけ悲惨なことでも僕自身の身に迫らないんだ。たらやっぱり他人事なんだ。目を背けちや行けないって言う意見も理解もできるし納得もできる。

……………でも、こんな僕に何ができるって言うんだ。

「ふう」

集中力が切れたしキリのいいところだったからノートも問題集もぱたんと閉じる。

顔を上げるとまだ勉強を始めて1時間といった様子。

ちなみにノートは用意してもほとんど書かない。

だって分かっていればそこまでする必要ないしな。

元々1回は頭に入れたものなんだ。

思い出して1回書き出せるのを確認したらそれでおしまい。

そんな感じで進めてきてやっと気分が乗ってきたのになあ……予想以上にできちやつたから手元の勉強が全部終わっちゃつたらしい。

「……………」

日課になっていたからなんとなく集中するモードになれる時間帯なのに急な手持ち無沙汰。

ただの休憩じゃなくって、するはずのものがなくなっちゃつた虚無感。

これを片づけないと行けない立場の学生なら喜ぶんだろうけど……僕はただ僕のためだけにしているだけだしなあ。

「うーん」

まあしよせんは中学生の範囲だし。

やっているうちにいろいろと思い出してきたから、最近は午後のすることがない時間とか夕飯を食べたあとのお酒が入った状態でもちよくちよくやつていたしな。

なんかこういう作業って気分が乗るときはいくらでもできるよね。

でも結構かかったって言うべきなのか遅かったって言うべきなのか分からないなあ……中学生の範囲を終えるのに2ヶ月くらいかかったのって。



終えたっていつても完璧じゃないし主要教科だけだし。

先を知っているから歯抜けを埋めるっていう感じだったわけだし。

このまま学校のテストを受けても割といい成績は取れるだろうけど思い出しただけなんだ、受験とかになるとちよつと厳しいかもしれない程度の学力だろう。

細かいところまでやる気力はなかったし意味もないからどうでもいい。

強いて言えばお酒を呑んで眠りが浅いときに見る悪夢の中で、試験勉強が間に合わなくって悪い点数を取るって言う経験したことのないシチュエーションがいくらかは減るかなって思うくらい？

……いや、結構切実だな。

夢の中って疑問を持ってないもんだから、何故か僕が高校生に戻って試験で困っているとか大学生に戻って単位落としそうとか言う場面なんだよな。

夢って不思議。

けどまあ復習っていう意味ではこの辺で充分だろう。

これで中学までの範囲なら……特に空っぽかがりに教えてあげられるようになったしな、自信持って良いだろう。

でも歯抜けもあるから結局はテキストを片手じゃないと確実じゃない。

でもでもなにごとく完璧主義はよくないし、こんなもんだらう。

どうせみんなができないところをできるようになったってそこまで誇れるものじゃないしな……大人が中学生に「僕の方が勉強できるんだぞ」って威張っても「そうなんだ」でおしまいだし。

時間をかけた分先に行けるのは当たり前。

そこでいばつてもしようがないもんね。

それよりも無難に平均点よりひとつぶん上で満足して次へ行くほうがコスパがいいもの。

時間が余るからって地味に通信の資格の勉強とかしてたときもそんな感じでクリアできたしな。

にしても……昔よりもノート、きれいに書けるようになった気がする。

気のせい？

……いやいや、閉じたばかりのノートを開いてみるとまとめの問題の丸つけで終わっている。

そのページに書いてある字は前の僕のよりも……学生のとときの僕のよりも綺麗に見える。

っていうか綺麗。

ぱっとみて綺麗って言う感じ。

筆圧が弱くなったからか？

いや、文字のバランスというかページ全体のバランスというか……。

そういうえばこういうノートの子いたなあ。

男の一部と女子の結構な割合で。

つまり僕は2回目にしてようやくそういう子たちの……空間把握能力的なものに追いついたわけ……？

ささやかな補正が、このちっこい手のひらに宿っていた……？

体は痩せてるのに手首から先は妙にぶにぶにしている感じの手のひらを見つめる。

……相変わらずにちっこいな。

あとすべすべだしなめらか。

……ま、どうでもいいか。

さつき飲んだばかりだけど気分転換にともういちどつてことで、台所へ豆を挽きに行く。

コーヒーは何杯飲んでもいいんだ。

この体のこともあるからカフェインレスのも混ぜてるけど。

それにしても勉強って基礎がほんとうに大事だな。

公式と基本的な変形とよく出る問題、こういったものをまずは覚えていないと話にな

らないし。

つい少し前……僕基準で少し前、ほんの2年くらい前まではバイト先で……したり顔でこういうことを教えていたのにもう忘れているなんてなあ。

学生のおときは「1回覚えたんだし、こんなのは絶対忘れないよね」って思っていたのに、完全に使わない期間があっただけでもう忘れてる。

人って、使わないと本当にゆっくりと忘れるものなんだなあって実感する。

中学とはいえ主要教科3年分っていうのはなかなかのボリュームだったし。

幼女に退行して中学生って言い張ったばかりにこの始末だ。

精神年齢20代がなにを喜んでるんだか。

まったく知らないことを勉強したわけでもあるまいし。

そりやモチベーションにはなっていたけどさ。

そんな感じで僕はしよげる。

なんか昔つかから良いことがあると悪いところをわざと探してダメだつて結論づけて気持ちを抑えるクセがある気がする。

「……………」

挽いた豆を蒸らした香りが立ちこめる。

でも、引きこもりとニートとアルコールで減っていた知能もいくらか回復してきただ

ろう。

そう考えるとちよつとは安心。

社会人でも資格とかでずつと勉強するらしいし、これでちよつとは社会復帰の目処が立ってきたのかもしれないって思うとなんだか嬉しい。

でもせっかくなか働こうかって気になっているのにそもそも働けないというジレンマ。

惜しい。

すごく惜しい。

このテンションのままお仕事探しとか行けちやいそうなのに幼女だから行けない。

悲しい。

こんなの僕にしてはものすごく珍しいことなのにな。

1年に1回くらいある「どうかしないといけない……!」って奮起する時期。

まあどうせいつも通り準備しているあいだに疲れてきて飽きるんだけどな、きつと。

でも昔に勉強したはずの内容とちよつと変わっていたところも少なからずあったし、前は丸暗記するだけだったのが今はちゃんと理解できることもあって……今までは読み飛ばしていた記事とかにも興味が持てるようになってちよつとだけ人生が充実した感じがある。

生涯学習。

良い言葉だ。

やっぱり人は知らないことは認識できないしそもそも興味を持たないもんだから、その存在すら意識を素通りするんだなあって思う。

勉強の楽しみというやつを……だいたい遅いとは言っても今の段階で実感できるうになったのはいいいことだっと思う。

20代前半つてのはJCたちから見たらおじさんだけど社会的には若者なんだから。

……あの子たちにおじさんつて言われたら凹みそうだなあ……。

っらい。

つらくなつた僕は煎れたコーヒーをずっと飲みながらつけっぱなしのテレビをぼんやりと見つめる。

……………手持ち無沙汰だ。

火がついてきたところだったのにゼーンぶ終わっちゃったからなあ……。

せつかくあのふたりから誘われなくて静かな日が続いていたのに。

まあ明後日にはまた呼ばれるんだけども。

それもこれも最後のまとめ問題が予想外に少なすぎたのが原因だ。

気がついていれば昨日のうちにも買っておいたのに。

お酒が入っていても乗り気になっていれば頭には入るもんな。

中学生の範囲ってだけしか意識していなかっただから高校生の範囲の教材は無い。もちろんかかつての僕が使っていたそれらなんかはとくに捨てちゃっているし。

今までだったらこの時間、午前って言うのは……勉強をはじめめる前だったらネットとか見たり二度寝したりして適当にダラダラしていたんだけど一回勉強の習慣がつき始めたんだ、そうやすやすと途切れさせたくない気がする。

つまりはもったいないんだ。

「……………」

着信でちかちか光ってうざったいから最近ではテレビの前のテーブルに置きっぱなしになっているスマホを両手で操作して調べてみる。

今は見たい気分じゃないからあの子たちからのメッセージは既読にしない。

あいかかわらずに手首が負けるから持てなくてテーブルに置きながらすいすいとな。

……やっぱり小さいの買ったほうがいいな、うん。

じゃないと家はともかく外は不便だし。

それもこれもこのちっこい体が悪いんだ、まったく。

ささくれてきたから髪の毛に両手を突っ込む。

うなじのあたりがいちばんだ。

「……ほう……」

ちよつとほっこり。

指から手のひらから毛根から気持ちいい感触がさらさらぞわぞわと感じられるのがたまらないんだ。

「……………」

髪の毛をしばらく触っているうちにささくれはじめた気分も癒やされてきた。で、調べてみると今買っても届くのは明日の夕方から明後日らしい。

うーん、どうしようか。

せっかくのやる気、このまま失うのはもったいないしなあ。

「めんどくさい」

けど仕方ない。

この時間だったら人は少ないだろうし今から買ってこよう。

今日は曇っているから涼しいし。

少しだけだけど厚着するんだから大切だ。

……そういえば約束がないのに繁華街まで出るっていうのは久しぶりかもな。

ちよつとだけ嬉しい気がする。

そうと決まればお出かけ用の服に……。





「あ——……んんっ……ん——あ——」

のどの奥の筋肉や舌を動かして、確かめて準備運動。

よし。

………。

「おねえちゃん、私これが食べたいのーっ」

「でも私もうおこづかいがないの………」

「おねえちゃん……ね、ダメ？ ねえーっ……」

「おねがいつ、おねえちゃん！」

甘ったるい声が響き渡る。

部屋中に。

………。

録音アプリを止めてたつたの30秒にも満たない声を、再生。

『おねえちゃん、私これが食べたいのーっ』

『でも私、もうおこづかいがないの………』

『おねえちゃん……ね、ダメ？ ねえーっ……』

『おねがいつ、おねえちゃん!』

声に出していたときとはまた違う、小さい女の子の懇願するような甘えた声が聞こえる。

もだえる。

僕はもだえた。

たいした訓練とかはしていないのに甘えようとするやと自然とアニメ声に近くなつていて、けどわざとらしさが感じられない。

つまりは本物の少女が誰かに甘えているかのような、そんな声。

だつて天然だもんな、養殖とは違う。

それが音声データとして現実に存在することになった。

「……………」

何度か聞いているうちに意識しないでいようとしてムリに押しとどめていた羞恥心がぶわつと上がってきてきてあつという間に顔がかつかつとしてきてのたうち回る。

「……………!!!」

言葉にならないとはこのこと。

ああもう、ふだんは滅多にかかかないのに汗まで出てくる始末だ。

鏡で銀髪幼女な僕を見ながら再生してみたのがなおさらまずかつたらしい。

鏡の向こうの僕は真っ赤になっている。

ものすつごくはずかしい。

なんだこれ。

なにこれ。

僕は男のくせになにやってるんだ。

……ゆりかと話を合わせるために見ているアニメに似ている声質のキャラクターがいたんだ。

酔った勢いで、最近たまにしている声の練習を試してみようと思い立ってしまったんだ。

その結果がこれだ。

どうしよう。

予想以上に合いすぎているもんだから聞いていて体じゅうの毛が逆立つような感覚が止まらない。

ものすつごくどきどきする。

お酒の飲み過ぎじゃない。

うん………やばいな、これ。

素でこんな声が出るのなら、鍛えたら将来は小悪魔系にでもなってしまうような勢い

だ。

「……………あう」

恥ずかしいし、こんな声は消して……………いや、もつたいないな。  
保存だけ……………保存だけ、しておこう。

ほら、これもこの先なにかの役に立つかもしれないし……………。

「……………」

再生ボタンに指が進む。

『おねえちゃん、私これが食べたいのーっ』

『でも私、もうおこづかないの……………』

『おねえちゃん……………ね、ダメ？ ねえーっ……………』

『おねがいつ。「おねえちゃん」！』



こここのところの外出で体が慣れてきたのか、いつもの格好で出てきてもほとんど疲れないままに駅前へたどり着いた。

うんうん、順調だな。

体重はいささかも増えてはいないけど筋力がついてきたようだ。

あとはがんばって食べて寝てを繰り返して立派な大人になるだけ。

なれたらだけど……こればかりはがんばるしかない。

で、お店とかつて意外と開くのが遅いよね。

だから開いたばっかかりなビルの中に入ってちよつと別世界を味わいつつ、空いている中を気楽に歩いて上って参考書コーナーへGO。

やっぱひとりには気軽に楽だ。

男は孤独じゃないとね。

好きなペースで好きなところに行けて遅れがちな歩幅で振り返られて落ち込むことがないし、かがまれて身長差で落ち込むこともないし「妹さん?」とか言われて落ち込むこともない。

そこはせめて弟でしょ……ってならないんだ。

素晴らしい限りだ。

たったのこれだけで勝手に癒やされて嬉しくなってくるあたり、最近の生活がどれだけ僕にとっての負担になっていたのかがよくわかる。

……早く終わらないかなあ夏休み。

けど、あと半分はあるんだよなあ……。

あの子たちの世話が大変なんだよなあ……。  
でも約束しちゃったしなあ……。

「はあ……………」

ため息が出てきて一気に嬉しかった気持ちが消え去る。

最近の僕は躁鬱が激しいみたい。

「……………」

ふと思う。

……………ここのところ。

僕はあるの子たちのこと、ちよつと甘やかしすぎたかもしれない。

相手はたかが中学生、それも特に深い関係でもなし。

ただ情報収集と時たまに話したい欲を発散するためだけに友だちごっこをしているだけの関係だ。

友だちつていうのなら……僕からだつて「今日はだるいから無しで」つていう権利く  
らいはあるはずだ。

それが普通の対等な友人関係つていうものだろう。

なまじ相手が年下だからつてちよつと気を遣いすぎたかもな。

なにも僕がここまで疲弊してまでおつきあいする義理はない。

男と女、外交的な性格と内向的な性格とでは何もかもが違うんだ。

僕たち内向的な性格の男はなにか1個発見があればその日はなにもしないで幸せなんだ。

うん。

帰ったら「家の事情で忙しくなった」とか何とか適当な理由でもつけて減らそう。

それでなにか言われたらまた適当にじいやにでも頼む。

仮想じいや。

コンピューターおじいちゃん。

それでいこう。

……………と。

ノリノリになっていたところに意気消沈して戦意高揚したところで、気がついたら書店のいちばん奥で隅っこ、けどかなり広い感じの教材が揃っているエリアにたどり着いた。

英会話のテープの音を頼りにしていたらぼんやりしていても迷わずに来れたらしい。

僕に搭載されている楽々機能だ。

でもきんきん響く録音の音が耳障りだし、さっさと目星をつけてさっさと買ってさっさと帰ろう。

で、時間まで勉強してそのあとはお断りの文面を考える時間だ。

「よう」

……で。

中学生の範囲をやっていて気がついたけど、僕は一応は真面目な生徒だったもんだから1回やっているからには記憶の隅っこに……ぼろぼろ抜けはあるにしても基礎的な知識は定着している。

だから今の僕に必要なのはテンポよく思い出して数回の練習をして再確認して、昔の勉強であいまいだったところを復習することだけ。

だから練習問題は少なくでもいいからとにかく例題がいっぱいあって、字が大きくて……あとは手で押さえていると手首がずきずきしてくるから開いていても勝手に閉じていく小さいサイズのもの。

幼女の肉体に配慮された系のテキストが欲しいんだ。

とはいえさすがに高校の範囲にもなると分厚いものが多いしテキスト自体も小さめ。困ったことになった。

「……………」

迷うなあ。

参考書と違ってなんだか魅惑的だからどれも欲しくなる。



こういうのって好き。

「ぱらぱらと見るだけで重いつて分かる参考書を数冊横に置いてよく吟味する。

こういうのはだいたいシリーズならどの科目も似たような作りだから1教科で充分。

む……これはいいけど紙が硬いしこれは色が少ない。

……迷うなあ……。

あ、重さも比べておこう。

これとこれはどっちが重いかな？

……どっちも同じくらいだから、なんとなくデザインが好きなのつちに……。

「……………あれ？ 響？」

しようかな？

って思ったところに声をかけられてフリーズした僕。

顔を上げると……歩いてくるのはなぜか制服を着ているぱつつんレモンさん。

……………なんで君がここにいるの？

今日は約束とかしてないでしょ……？

やだよ？

休日も子守なんて……ああいや、この子相手なら大丈夫か。

かがり相手ならまだしも……いや、やつぱり話が長いからご勘弁だ。

さて、休日……ニートだけど人と会って言うのはニートにとっては重労働なんだ  
……そんな中でばったりゆりかと遭遇。

これ、どうやって乗り切ろうか。

## 18話 学生たちの、夏休み(3) 2/3

僕の安寧は打ち砕かれた。

せつかくのオフの日に誰かと会いたいだなんて思えないのが僕みたいな人間。

ゆりかも僕たちに近い気はするんだけど……やっぱり女の子だな。

いや、男でも「今ヒマ？」って電話してくる人もいるって言うし単純に性格か。

「やっぱ響だよね！ そのミニマム銀色ほでー！ こんちやー」

……君だつてミニマムじゃん。

そう言いたいけどぐつとこらえる。

僕は大人なんだから。

でもせつかくよさげなシリーズを吟味していたのに横やりが入って嫌な気分。

気分が乗つてるときに邪魔されると嫌だよね。

そういうときに限って宅配とか電話とか来るんだもん。

……だけどなんでレモンさんがここに？

本当、なんで？

見間違いかとも思ったけど、あいかわらずの小学生っぽい雰囲気のままな関澤さんが

近づいて来ちゃったからどうやら本物らしいって分かったちゃう。

遠くで目が合って合わなかったフリをしてお互いに離れるってのは望めなかったらしい。

あつという間に50センチを切る距離まで迫ってきて、ぐーつと顔を近づけてくるゆりか。

この距離感……ほんとうに小学生と言っても過言ではない。

彼女の悪戯っぽい目元とか口元がはつきりと見える。

警戒感はずゼロだ。

……ここでも僕は男って見られてないらしい。

悲しい。

でもなんで制服も着ているんだ？

あ、でも、普段に比べて胸肩周りの露出が少ないから少し安心はする。

だって話しているあいだってふとした拍子にそういうところってどうしても目が行くくし。

なんかそういうのって昔から気まずいんだよなあ……。

リアルの人間相手じゃなくても、テレビとか漫画で露出が多い人とか出てくると反射的に目を背けちゃうあれ。

一体何なんだろうな。

別に潔癖症とかじゃないんだけど……。

でもこれなら安心だ。

安心して子供扱いができる。

学習塾に来る中学生ならお手の物だ。

「……ゆりかか。おはよう」

「奇遇だねえ、こんなところで合うなんて。まさか運命!?!」

ないない。

「……なわけないけどさー。にしても離れたところから見てもほんと小さいねー響は。

迷子かって思っちゃったくらい」

「うるさい」

「えへへえ、お互いさまだし同志だし仕方ないよねー。……あ、この前も私、迷子って

間違われて警備員の人に優しく声かけられたトラウマがあー」

いらつときてつい返しちやっただけど、どうやら目の前のぱつつんさんは結構悲しい目に遭ったらしいからそつとおこう。

でもなあ……気がつかなかったって感じで視線を合わせずにそそくさと離れるつもりだったのに。

いや、そもそもすぐに追いつかれるからムリだったか。

……それに、今はゆりかだけじゃないから気が気じゃない。

つまり彼女は学校帰りかなんかで……同級生か誰かを連れてくるんだ。

「……………」

関澤さんの隣には友人と思しき距離感で立っている女の子。

身長が高い……たぶん平均よりは……だから僕を見下ろす形になっている普通の中学生的な子。

横にいる関澤さんと比べるとその差は明らかだ。

ちっちゃいって悲しいな。

いやそれでも背が高いというか全体的に……こう、大きい。

運動部って感じな子。

ワイシャツから覗くうっすらとした筋肉は多分ちやんと動いてる人のもの。

健康的な感じだから男子から人気がありそうな印象だな。

髪の毛は長くもなく短くもない感じだけど、最近見た雑誌に乗っていた髪型になっているからおしゃれはしているらしい。

派手なヘアピンもしているし。

……さりげなく相手のヘアスタイルを気にしているのに気がつく。

最近いろいろとあれだし、ちよつと気をつけないと……。

本格的に心まで女になるわけにはいかないんだ。

女社会つてルールから逸脱しちゃうと目立つらしいから、あくまでそういうルールを知るために雑誌とかで勉強してるだけなんだから。

ともかくこここのところ髪の毛だけはさらに伸びてきているレモンさんとは違って女の子の子している子。

メロンさんも似てる感じだけど、また違う方向。

僕の知り合いにこういう子はいなかったからまだ言語化できないけども。

あ、アニメとかマンガで言うならバレー部とかしてそうって言えば通じそう。

小学生みたいなゆりかとバレー部的な子。

いろいろな意味で凸凹コンビだ。

「……………」

そのうちの凸のほうからずーっとじーっと見られているんだけど……。

なに？

ガンつけられてる……？

いや、まさか。

単純に上から見下ろされているだけだ、気にしても無駄なんだ。

そういう言葉に出来ない思いをを込めてゆりかを見てみる。

お願いだから挨拶だけでおしまいにして？

この子を紹介したりしないで？

そんな気持ちを含めて。

「やんっ！ 響つたら、情熱的!?!」

「.....」

通じなかつたらしい。

ゆりかだもんな。

本当にボケてるのか素なのかがさつぱり。

ゆりかだしな.....。

「.....あー、こほん。 えっとね？ うちのクラス、今日登校日だったんよ？ なんにも

することないし、ただ朝早くに集まってイスに座って話聞くだけのやつ。 意味ないよ

ねーって言いながら適当に過ごしてはい終わりでもう帰りなのよ。 だからこの時間」

「.....そうか」

「で、このでかいのは『りさりん』って言ってね？ うん、名字が『りさ』で名前が『り

ん』。 りさりんって名前に見合わずでつかいんだけど、もちふたつの意味でね？ り

さりんと私は去年からおんなじ.....あいた!?!」



「『りさ』ね? り・さ! 名字は杉若! あと余計なことは言わない!!」

「んー、痛いよりさりーん」

「だからー、り、さ! ちゃんと名前前で呼びなさいって! 初対面の相手でしょう!」

ぎやいぎやい始まる中学生たち。

……ああなるほど……ゆりかはいつも人の名前、変な風に呼んでいるのか。

いつもみたいにゲームとか流行りのネーミングをもじったりして。

僕のことときどき変な呼び方するしー人でぶつぶつぶやいていたりするしな。

……あれ?

もしかしてこの子、ちよつと変?

……ちよつと考えてみたらくるんメロンはあんなだけゆるふわで一括りにできるし、それに比べてぱつっんレモンはって言う……。

……。

僕は常識人な人しか相手したことがないからこういうときに動けない。

そんな僕の前であつという間の決着。

身長差っていうか体格差であつという間に後ろから抱えられるぱつっんだ。

彼女もまた軽そうだもんなあ……。

多分僕と大して変わらない気がする。

「うあ」とか変なうめき声とともに僕に負けず劣らずな脚がぷらぷらとしていてどう見ても子供だ。

うん、間違いなく小学生だな。

で、それを見るときもさもなくぼーっと見ていたら、ひととおりぶらぶらさせて満足したのかりさりんさんとやらの目がふたたび僕と合う。

「……ごめんね、うるさくって。で、あなたが響さん……だっけ？ 最近コイツが噂してたから名前だけ知ってるわ」

「みぞおちは地味に来るんだよりさりん……」

「あ、はい……よろしく。えっと……りさ、さん」

「ん、よろしくね？」

「りさりんだってうう、おえ」

すごいうめき声が聞こえるんだけど大丈夫だろうか……。

いくら僕でも初対面の相手に嫌がついている呼び方をする趣味はないからちゃんと挨拶。

語感が良すぎるから気をつけておかないとついぼろつとしちやいそうなりさりんさんに。

りさりんなのに体格いいけど。

……言葉の響きがいいな、りさりん。

確かに合っているかもしれない、りさりん。

「そんなに怒らなくてもさありさりん……。いつも呼んであげて喜んでるじゃないりさりん」

「名前まちがって覚えられるからじゃない！　せめて最初るときくらいはまともに呼びなさいって何度言ったら！　あと喜んでないからね！」

「そんなー、顔赤くして喜んじやつ……。あ、ちよいまち、ギブギブっ」

お腹をさすりながら口を尖らせるのに負けじと詰め寄っているぱつつんとでかいりさりん。

身長差が著しいな。

まるでカツアゲだ。

まあケンカ売ったのはちっこい方だけだ。

……今でもカツアゲってあるんだらうか？

いやそんな経験も見ただこともないけど。

単純に僕が治安の良い町に育っただけか？

「ゆりか、あなたがいつつもいつつも学校でそう呼んでるからすつかり定着しちゃったじゃない！　しかも私がいなくていいときでもなんでしょ？　顔だけ知ってるような人から

いきなり『りさりん……さん?』とか呼ばれることもあるのよ!! それもしょっちゅう!!」

「おう、私のりさりんが浸透している……良いね!」

「あんたのじやないし良くないわよ! おかげで呼ばれて恥ずかしい思いをして、それで毎回フルネームを言わなきゃならない私の苦勞が」

「えー、親しみやすくっていいじゃんりさりん!」

「よくないわよ……って、こら! ちよつと、止めなさいってば!」

「えー、ケチー」

「ケチ言うな!」

ゆりかがりさ……さんにしがみついてうねうねもぞもぞしている。

「……………」

あんなにくつついて暑くはないんだろうか?

夏服だし冷房効いているし、平気か。

でも女性ってやっぱり距離感近いよなあ……男同士だどここまでひつついたりしないもん。

ましてや公共の場所、ましてや初対面の僕の前で。

と、途中でゆりかが痛そうな顔をして離れてじゃれあいがびたつと止まる。

ほっぺをさすりさすりしている。

……あー、身長差があると胸の下のところ……ちようど顔のあたりに来るよね。

あれ、ブラジャーとかが当たるとけっこう痛いんだよなあ……僕も何回かあるから分かる。

かがりに良く抱きつかれるから知ってるその痛み。

おかげで抵抗感も薄れたけど。

スポブラみたいに布だけでできているのならまだしもだけど……普通のは意外と痛いんだよなあ……。

金属がむき出しなわけでもないのに何でか痛いつて感じる。

なんでだろう？

「……………」

……頭を抱えてうずくまりたい気持ちになった。

だって、こんなこと自然と考えてるんだもん……。

こんなことがすつと思ひ浮かぶのが怖いんだ。

だけど嬉しいことに僕から意識が離れている様子。

このスキにうまいことどうにかしてそつと身を引きたい。

けどそれにはじゃれあっている彼女たちの真横を通らないとならない。

だって僕はすみっこのコーナーに閉じ込められる形になってるから。  
……………どうしよう。

「……………」  
することもないからぼんやり立ってるしかない悲しみ。

こうして女子中学生同士のやりとりを見ていると……………ふだんのゆりかもスイーツと着せ替え以外のかかりもけっこう遠慮してくれていたのがよく分かるな。

あのかかりでさえ結構控えめだつてことが分かる程度に距離が近いって言うか肌同士が密着しすぎている。

制服の硬いはずの生地がふんにやりしてるもん。

きつと柔らかいんだろう。

……………暑そうとしか見えないけど。

目の前で繰り広げられているような……………取っ組み合いとかじゃないけど体の大部分が触れあいながらの軽い感じのじやれ合い。

こんなのされたら絶対に距離を置くな。

レモンならともかくメロンだったら。

不純でも異性でもないけどなにやらいかがわしい交流だもん。

そういうのつてもつと相手を知ってからじゃなきゃいけない？

レモンとさくらんぼならくつついたってごつごつとしてたいして気持ちよくもないだろうからゆりか相手は気にしなくても良いけど……なんか悪い感じがするしで僕からはしないけど、あのメロンは要警戒だ。

だけど困った。

どうしよう。

どうしようもない。

「……………」

うん。

普段の2人の関係はよく分かった。

いつまで経っても僕のことを忘れて普段のようにじやれているだけのようだし、ここはさっさとお暇しよう。

うん、それが良い。

「勉強があるんだ」とか適当だけど嘘じゃないこと言ってさよならするんだ。

「えっと、ふたりとも。その……元気だな……」

「僕は元気じゃないからそういうのは余所でやってね」っていう意味を込めたけど口が回らない。

圧縮言語が世界に広まれば良いのにな。

「あつ……………ごめんなさい、つい」

「私たち、ラブラブだからむぎゅっ」

「ゆ・り・かー?」

……………頭を押さえつけられている。

身長的に僕もこうされたら身動きが取れない。

りさりんさんの近くへはあまり寄りかからないようにしよう……………。

「……………ようやく静かになったわね……………。あ、ごめんなさい。確か体が弱い……………ん

だったわよね? このアホから聞いているの。大丈夫?」

「いえ、このくらいなら平気で」

「そう? よかった」

僕のことを話されていたって分かってちよつとイラツてきたけど、考えてみればそうだよな。

ゆりかとして一応は女の子だからおしゃべりが好きなのには違いない。

きつと僕っていう珍しい生き物に会ったことはとつくに知らせてはいたんだろう。

問題はどこまで話すかだ。

あんまり細かく……………なにからなにまで話しているようだったら今後はちよつと会話を気をつけないといけないかも。



だって会ったことがない人にまでみーんな筒抜けっていうのは気分が悪いし。かがりからの、彼女の友人やら家族やらの個人情報漏洩っぷりを知ってるから余計に。

あと、僕っていう存在があまり知られるのもなんだかまずい気がするし。

……かがりの話しっぷりを聞いているときに気がつくべきだったかな。

顔も知らない人の下の名前とか性格とかどんなことをしたとか、気がつけば10人以上は頭に入っちゃってる恐ろしさ。

見知らぬ子たちのプロフィールが知らぬ間にインプットされている。

噂の力は怖い。

気をつけよう。

もう遅いかもしれないけど。

「……………あ——重かった……………大丈夫よー響。響の話はほんとそんならいしかしてないし。友だちだと言って言ってもなんていうか……………ふつーじゃないじゃん？ 私たち。

あ、もち悪い意味じゃなくて！ ホント！」

確かにそうではあるね。

学生の彼女のにも学外の近所で知り合うなんて早々ないだろうし、僕にとつてはこういう関係なんか10年ぶりくらいまであるし。

「えーつと……事情持ちっていうか？　そういうの、どこまで言っただけなのか分かんなかったからさー。　同い年で小さいもの同志でクール系で。　そんなくらいだよねえりさりん？」

「あ、それでいつもふわとしか言わなかったのね……つて！　だから名前！」

「りさりんのこと？」

「り・さ・よー！」

「ふーい」

……ひとまずゆりかは大丈夫と。

線引きできる子だって分かったから少しは安心だ。

じゃあ残るはかがりだけだな。

もう手遅れかもしれない……けど話されるのはイヤだって伝えておかないと。

どれだけ聞いてくれるのかは分からないけどなあ……あのおしゃべりくるんは。

……。

やつば無理かも……。

「……そうか。　僕、あまり知らないところで噂されるのは苦手だから助かるよ」

「よかったー。　いつもお家のこととかになると話そらすしなんとなく思ってたの当

たってたね！　で、ところでさ響？　YOUはなぜここに！」

両手を突き出すようなポーズ。

……ちよつと古いぞ。

いや、テレビを見ていれば昔の流行りとか目にすることもあるし、おかしくはないのか？

「こーんなイヤーなコーナーに来てるつてことは参考書とか単語帳？ マジメさんねー」

「ああ、ちよつとね」

なんかおかしいなつてさつきから思ったんだけど……気がついたら二頭筋から先がしびれていた。

ふたりに気を取られて、さつきまで比べていた重いテキストを持つていた様子。

……指の関節と手首と肘……大丈夫だろうか。

とりあえずとして明日に筋肉痛は確定だなあ。

だつて貧弱だもん。

幼女だもん。

「さすが響一、まじめさんだ！ ……だつてよー？ りさりーん？ 夏休みの熱い中わざわざ一人でお勉強のものを買いに来る精神を見習いなー？ 話も上手で先生ウケもよくつて頭もよさそうつてイメージしかないのにダメな科目はとことんダメなりさ

りーん?」

「……こんの、今回の成績で勝ったからって……。私は毎日少しずつやってるって

言ってるよね……?」

「今回だけじゃなくて中学入ってから……。あ、はい、おとなしくします」

「……………」

痺れたところって原因がなくなると一回強烈に痺れるよね。

しびしび。

僕はしびしびしている。

「でもさーりさりん、昨日だってゲームで夜更かししてたって言ってなかったー? いやな予感がした私からの今朝のコール、なければ遅刻だったじゃーん? 下手すれば今日がサボりだった可能性すらあるのはご存じで??」

「あ、あれは……っ! あれは、たまたま熱中し過ぎちゃってちよつと寝るのが遅くなっ  
て目覚まし時計、無意識で止めちゃってただけじゃない! ふだんはちゃんとしてるん  
だから! ……あ」

ぱちつとりさりんさんと目が合う。

「……ちゃんとしてるんだから、ですからね!」

「うん」

「何故に敬語? りさりん」

……ふむ、こうして見ていると人を煽るのって意外とかんたんそう。

レモンさんが調子に乗っている。

唐揚げにかけているかのよう。

なんだか微笑ましいけど僕のないところでやって欲しいところ。

あ、でもだんだんとしびしびがしびくらいになつてきた。

「……でもさーりさりーん? もー1週間くらいずーつとそればつかしてない? ゲー

ムも開いてるって言い張るページも。ほんとに大丈夫……?」

「………少しは、やってるから大丈夫……よ」

急に真面目な口調になつたゆりかに戸惑う、りさりんさん(仮)。

「えーほんとうかにやー? りさりんさーん? ウソついてるんじゃない?」

「ほ、ほんとうだつて言ってるでしょうが!」

「あ・や・し・い♥」

しびれが取れてきたら今度は軽い痛みが両腕に広がる。

なんだつて僕がこんな目に遭うんだ……理不尽だ……。

ふたりはこんな感じですつと会話しているし、これ、僕がいなくても別にいいよな

……?

もう帰って良い……？

帰らせて……？

仲がいいのはいいことだけどさ、僕にはここまで碎けた友人関係とか作れたことなかつたし。

こういうのはマンガとかの世界だけの話かとも思っていたけど現実にいる普通の子たちでもあるらしいって分かったのは結構びっくりだけどさ。

興味がなかつたっていうか中学からできた友人たちはみんなどこか僕みたいな性格ばかりだったし、高校からはいないも同然だったならまだしも僕の両親のことで腫れ物扱いだったしなあ……。

当時はなんとも思わなかったけど、こうして年下の子たちが戯れているのを目にする……ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ。

寂しい学校生活だったのかって。

灰色の学生生活だったんだって気にもしていなかったのに、どうしてか急に胸が締めつけられるような気持ちになったんだ。

……不思議だよなあ、心って。

当時はなんとも思わなかったのに、こうして大人になってから……こう、きゅんつてなるんだから。

18話 学生たちの、夏休み(3) 3/3

女性って自分たちの世界に入るよね。

いや、僕もそういうクセあるから深くは追求できないけどさ……。

「りさりん、もっと計画的にやんなきゃダメよ?」

「言われなくたって……」

「いや何回も言ってるけどぜんぜんやんなくって赤取りそうだったの誰よ」

「ぐっ……」

「しかもボーダーだったから普段の提出物点っていうお情けで追試も補習も回避してるし」

2人の関係は勉強のことになると逆転するらしい。

学生って体育が得意だったり勉強ができたり友だちが多かったりすると強いもんな。

加えて女子は顔でも決まってくるって言うから恐ろしい。

このふたりは顔も良くて愛嬌もあっておしゃべりもできて、あとりさりんさんはお胸も大きいからきつと上なんだろう。

僕男で良かった。

今は女だけど。

.....。

あれ？

もしかして僕女社会に出るとしたらカーストとかあつたりするの？

え？

昼ドラ並みの女同士のどろどろに放り込まれるの？

なにそれこわい.....。

一応今の僕もこの2人くらいには整ってるけどそんな社会ストレスで死にそう。

やっぱり無難にどこにでもいる男が最強なんだって思う。

「あ、置いてきぼりにしてごめん」

「あつ.....ごめんなさい」

「いや」

楽だったから別に良いんだけど。

「響ー、怒った？ ごめんねー？ それもこれもこのりさりんが悪いのよー、責めるなら

この子だけに」

「あんたのせいじゃない!？」

急に話しかけられたからYESかNOしか言えなくって不機嫌に聞こえたらしい。



そんなことないのにな。

普段から会話しないから頭の回転と口の動きと発声がうまく行かないだけなんだ。  
つまりは全部だめだめなんだ。

「りさりんは煽り耐性がないのが悪い。 いじりやすいのが悪い」

「……覚えてなさいよ」

「ふいふい。 で、響は今日どんなの買いに来たの？ こういうのってふつー、家庭……  
おつと。 ……んー、親とかが用意してくれるもんじゃないの?」

「別にそこまで気を遣う必要はないよ。 家庭教師だね。 これくらいは隠すことでも  
ないしな」

「そ? 家庭教師ってふつーの生徒に取っちはずかしいもんだもんねえ」

「家庭教師……確かにね? 勉強できなかつたらまずは塾よね」

「りさりんに今最も必要なものだったのだ」

「あん?」

まーたじやれてる……。

もう欲しいのは見つけたし帰るだけなんだ。

きやんきやんしているあいだ早く終わらないかなって奥の方にあるのを見てみたら  
いいのがあったし。

なんか偶然で欲しかったもの見つけるのってあるよね。

……あ、そうだ、家庭教師さんはクビってことにしよう。

唐突なリストラ。

もう勉強も追いついたところか設定上の学年のふたつ上まで届いたことだし必要ないつてことで。

うん、それでなるべくその話題を回避しておいてちよつと経てば……どんな人だったのかとか聞かれても「もう来なくなつたから忘れた」とかでごまかせるし。

うん、それがいい。

そもそも男か女かも考えていなかったという稚拙さだしなあ……とりあえず女にしておくか。

同性じゃないと嫌がる親御さんとかいるしな、そんな感じでGO。

「もう家庭教師は来ない」

「……ん？ どゆことそれ？」

……「もう家庭教師は存在しなくなっている」的なニュアンスになつちやつた。

また言葉が足りない。

僕はいつもこうだ。

「……これだ」

思うように口が動かないからってしずしずと差し出してみる参考書。

差し出すって言っても、もう腕がだるだるだから選んだのを指さすだけ。

元はといえばこの子たちに気を取られたからこうなったんだし。

「これ？ 見ていい？ あ、どもども」

「へー、見たことないわねー。どこの出版社の？」

「……りさりんの家つてば参考書だけはあるもんねえ。あれでしょ、目移りして揃え

ちやうんでしょ」

「違うわよ。……お母さんとかお父さんが『これが良いんじゃないか？』つて買って来

ちやうの」

りさりんさん。

それ、次は「塾に行ってみない？」の前フリだよ？

ちやんと勉強した方が良いよ？

塾代とか家庭教師代つてその参考書とかを月に10冊買うくらいかかるんだから。

中抜きもとい仲介手数料的な感じで塾とか家庭教師派遣の会社からその半分くらいをもらつてた経験があるから知ってるんだ。

「ほーほー。………？」

「……………」

なんかゆりかの手が止まる。  
りさりんさんは固まっている。

ページを見てから表紙を見て、2人顔を合わせて、もういつかいページへと忙しい。  
仲良いな。

息も表情の変わりようもびつたりだ。

「……えつとー、響さんやい。これ、高校のじゃない？ お間違え？」

「いや、合っているよ。 高1のだからね」

いちいち芝居がかかるのにも慣れたけどほんとうにオーバーリアクションなゆりか。

芸能界とか目指せばいいんじゃないかな？

僕、ちょうど良い感じのコネあるよ？

あ、でも今どきはセルフプロデュースな時代か。

でも事務所とかのバックアップあった方が人気出やすいって聞いたことあるし……。

「あつれー？ たしかこの前退院……あ、ごめん……え、これも言っていないの？ あ、じゃあ。 ……響が退院してからまだ勉強追いついてないって言ってたって思うんだけど……？」

しどろもどろなゆりかはわりとレア。

「あれは家に戻ってきたばかりだったからね。 今までは全然勉強していなかったん

だ」

嘘は言っていない。

意図的に僕の状況を曲解しただけだ。

意識とも言う。

「退院? ……響さん入院してたの? たしかに体が弱いつて言つてたしゆりかよりも

小さ……あ、ごめん。背もかなり低いし……聞いていいのか分からないけど重い病気

とか……?」

「りさりん、もうちよつと待つてて? それ、初対面で聞いちゃいけないやつ」

僕は初対面で話したけどね。

「……のはずなんだけど響つて結構そういうのオープンだよ。初めて会ったときも

そうだったし。私、結構気いつかつてそこまでは言つたりしてなかつただけど

……」

「ゆりかの友だちだろう? ならこの先どこかで会うかもしれないし、それなら知つて

おいてもらったほうが話が早いしな」

こうして夏休みの午前中つて言う遭遇しないはずの時と場所で実際にばつたり会つ

ちやつたからには「会わないだろう」つていう仮定は通用しない。

元々ゆりかともこの近くで知り合つたんだもんな、そりゃあそうか。

「いちいち……そうだな、誰にどこまで話したのかを忘れるくらいならさっさとせんぶ話しておいたほうが楽だし」

毎回誰にどこまで嘘ついたか、どのくらいの嘘か嘘じゃない範囲かっていちいち気にするとストレスで背が縮みそうだし。

「あと僕はこの通りだから。この容姿のことと一緒に説明し慣れているからぜんぜん気にしないから平気だよ」

「お、おう……」

「すごいわねえ」

まあぜんぶウソなんだし。

いや完全にウソじゃないけど、状況的に見たらある面では合ってはいるんだけど……やっぱりでまかせであることには変わらないんだし。

……ほんとうははじめつから言わなきゃよかったんだけどな。

それこそ「家の事情でほとんど話せない」っていういいわけを最初に思いついていて貫いていれば今ごろはミステリアスな存在だけで済んだはず。

……

……こうやって、あとからならいくらでもベターな選択ができるのにな。

後悔というやつはいっつもこうだ。

やっぱり嘘はつかないに限るな。

男に戻ったら何でも素直にしよう。

記憶力も良いって方じゃないんだからその方がずっと楽に過ごせるはずだもんな。

「やっぱり言うあのメンタル。見習いなよ？ りさりん。正直は美德よん？」

「ごんの……」

ごめん、嘘なんだそれ。

「……学校に通ったりするようになったら必ずみんなに聞かれるだろうしな、こういうのは。なら君たちで慣れておこうって思ってたね」

やっぱり僕の見た目は子供なんだし中学生って言い張ってるので学校は必要。

最近はずっかり忘れていた通う先の学校のことも考えておいたほうがいいのかもしれない。

……けどなあ。

そこまで決めちゃうし完全なウソになっちゃうしどうしたものか。

ひとつのことを決めると数珠つなぎで新しいことも決めなきやなくなる。

だから盛ったりマシマシにしたり解釈を変えるだけならともかく、完璧なデタラメは大変だ。

と、ぼんやりしていたら両肩に衝撃と重み。

びくつとして前を見るとほんの数センチのところに関澤さんのぱつちりな目……あ、眉毛長いなこの子……があつて、もういちどびっくりした。

「……………響！ 学校、行けるの!?! どこ!?! この近く?!」  
近い近い近い。

身長差で上から被さられるようになっていいるから小さいはずなのに威圧感があるし。揺れる揺れる。

世界が揺れる。

僕の首がぐくぐくしている。

幼女の細い首がぼきつと折れちやいそう。

わー、蛍光灯がちかちかしてー。

「…………いや、自分…………先の…………ことにはなると…………思うし…………まだ決まって…………もいないけど…………」

声がぐわんぐわんしている。

なんか新鮮な感覚。

「…………なあんだ残念！ でも決まったらすぐに、すぐに！ ……教えてよ？ ね?!」  
「…………分かった」

荒い鼻息を感じながら絞り出した声に満足したのか、ようやく離れてくれたレモン。



……かがりよりもはるかにマシとは言ってもゆりかもやっぱり年頃で多感な少女。  
ときどきこうして暴走気味になるよな。

そこそこ話したけど未だによく分からないそのポイント。

ジェネレーションと性別と性格のギャップはまだまだ深い。

でも、学校つてだけでそこまでなるもの？

詰め寄るほどに気になるものなの？

……僕だったら「ふーん、良かったね」で済ませちやいそうだからいまいち分からない。  
い。

だから友だちつて言うのが少なくなつて同窓会とかの連絡も来ないんだろうな。

悲しい。

「りさりんりさりんっ」

「はいはい」

でもなあ。

こんなに考えなきや行けないくらいならはじめっから恥を捨ててさ、「ニートに準ずる不登校」とか「ひきこもり」とかそういう限りなくほんとうに近いことを言っていたほうが良かったんじゃないかな……。

そうすれば悪いって思ってくれて深く追求されないんだしさ……。

あと、肉体年齢もひとけたから10歳くらいだつて正直に。

あ、でもそれだと子供扱いだからやつぱりやだな。

なにが悲しくて小学生にならなきゃいけないんだ。

でも、そうすればこうやってゼロから設定を考える必要もなくてウソもほとんどつく必要もなかったわけで。

今よりもずっとずーっと楽だったんじゃないや？

そう思うと僕つて墓穴あつちこつちに掘つてる気がする。

はじめっからか？

はじめっからか。

「えと、そういうわけでりさりん。響はこないだまで、ずーっと何年も……10年まではいかなきゃね？ ……あ、さいですか。10年以上……え、そんなときから？」

入院しててろくに勉強もするどころじゃなくなつて。でも退院もできるくらいに元氣になつてきてそつから勉強するほどまじめさんでね？」

そう、彼女によつて僕の遍歴が構成された。

すうつと息を吸い込むけど膨れないレモンさん。

「……なワケだったんだけど！ そうだったはずなんだけど！ 少なくとも中間くらいまではそうだったんだけど……。だつて聞いたとき試験範囲の問題とか分かんない

「いつて言ってたし！」

ああ、あの。

あれって私立の受験の問題だったね。

高校受験のやつだって。

逆に解いたら先生にばれるところだったらしいよ？

だって中3の公式何個も使うやつだったし。

今の僕なら解けるけどね。

威張れないけどね。

中身は成人してるから。

「……………そうだったのに！ 何？ この1ヶ月で何があつたのひびきい！ もう勉強は追いつくどころか追い越しちゃってホームティーチャーもお役御免にするほどで、手元には高校の参考書とか!! なにその超ハイスペック!? マンガのキャラみたい！」

うん、僕もそう思う。

そういうキャラクターっているよな。

聞いただけでウソだって思うし実際にウソだし…………。

「……………」

「……………」

ふたりの視線が厳しい。

……やっぱり嘘だっと思って思う……？

僕もそう思う……なんかごめん……。

「……………いや、その。みんなよりも、……時間が、あったただけだよ。時間と、見張られている環境と。それさえあれば、きつと君たちだっつて同じこと、できるはずだ……………」

でも今さら「嘘です」なんて言えない。

それがドツボっていうヤツなんだ。

「いやいやいやいや絶対ムリだから！ 私だったら隠れてゲームとかしちやうしさぼるし！ ねえりさりん！！ りさりんなら分かるでしょ！！」

「え、ええ……………ごめんさい、毎日ヒマなのに宿題さえしていないくて……………」

りさりんさんが僕に向かって何故か謝る。

「ほれ、見習いたまえりさりんくん。勉強はやればできるんだよ？」

「……………明日から。誘われてたとおりあんたの家でするわ、勉強……………流星に響さんのを聞いたらやらなきやって思ったわ……………」

しよげりりんさんになっている。

「おお、りさりんが響のおかげでついにデレた！！」

「勉強よ勉強!!」

「……………」

くつついてるふたりを見てちよつとだけは癒やされるけど、でも罪悪感で胃が痛い。きりきりきりと痛む感じのこれ。

背中まで痛んでくるあたりもはや懐かしい感じでストレスを感じているようだ。

……10年以上先取りしているんだからできるのは当然なのに。

さつきまではそこまでじゃなかったんだけど、こうしてウソで褒められるのが続くと良心がこなごなになってくる。

やめて。

僕自身がすごいのも何でもなくって、ただ1回やっているだけなんだ。

そこまで言わないで。

僕はそのままで人間じゃないんだ。

ただのどうしようもないニートなんだ。

僕は元の、まだある程度の力仕事でも嫌でしょうがない雑用でも……やろうって決心すればできる健康な体を持った男。

でも、ただそれだけだったんだ。

将来の可能性で言えば君たちの方がずっとすごい存在なんだ。

少なくともニートやってるよりはずっとずっと。

そうやって、いつそのことぜんぶバラしてしまいたくなる気持ちもたげてきたけど……もつと酷いことになるだろうしって思ってたぐつと、なんとかこらえることができた。

……帰ったらお酒飲んで寝よう。

もう勉強する気もなくなった。

僕は弱いんだ。

昼間っからで呑んだら朝までぐつすりだろう。

1日スキップすれば多分ちよつとだけ楽になるんだ。

僕はそうやって今日までやって来たんだ。

「えつと、すごいですね響さんって」

「……いや」

「あの、……知り合ったばかりであつかましいって分かってますけど、勉強。響さんがよければ、教えてくれ……もらうことって、できますか……？ あ、もちろん時間があるときにちよつとだけで良いので……」

「でた、りさりんのコミュ力！ あとなんか敬語！ 敬語りさりん良い!!」

ぐつたりしていた僕をかがみながら見下ろす感じでりさりんさんが迫っていた。

その後ろからびよんびよんとゆりかが跳ねている。

……うん、全体的に大きい。

いろいろと。

メロンさんとは違って健康的でがっしりとした感じにいろいろと。

それに反比例する憐れなゆりかの髪の毛が跳ねている。

「……おーいりさりん。 私が教えたいげるとばさー、もちろん優一しく手取り足取り

……」

「……ゆりかはイチイチ『こんなことも分かんないの?』とか煽ってくるじゃない。 イ

ヤ」

「なんですと!! あれは愛のムチってやつなの!!」

「……………」

ぎやあぎやあ言い合ってさつきみたいな感じに戻りつつあるふたり。

……とりあえずで時間がかかりそうでやり応えのありそうな数学だけでもって買い

に来たの、失敗だったな。

まさかゆりかと、ついでに……りさりん……まずい、名前が定着している……なんと

かさんがいるなんて。

語感いいもんな、りさりん。

登校日って概念そのものがすつぽりと抜け落ちていたし、そもそも偶然に会うなんて思ってもみなかったし。

……いや、そもそも、そもそもこうしてゆりかと話すのめかがりに追われるのも、みんなその偶然ってやつのおかげな。

……僕がこの姿になった魔法。

やつぱり呪いか、これ。

罪悪感もようやく引いてきたしでもう少して座り込みでもしそうなくらいだった脚にも力が入ってきた。

……病気設定使って切り抜けようかな。

けど、やつぱり真っ赤なウソはなあ……うーん。

「それにしても2年分以上だよなあ!? それをたつたのワンクールどころか1ヶ月ですつ飛ばしちゃうなんて! 響、恐ろしい子……!」

「はあー、ほんとうよね。もちろん努力したからだっていうのはわかってるけど、でもそれでもさすがにそこまでは私たちではムリだわ……」

「……たち?」

「うっさい! あんただってムリでしょ!」

「まーね」



「……………」  
ふたりの隙間から出口のほうを伺う。

「……………」  
これでも話の合間にさりげなくずりずりと移動を重ねて外まで見える位置にたどり着いたんだ。

あとはもう帰るっていうのをどうにかしてうまく言い出せば。  
すうつと息を吸う。

……………よし、言うか。

「……………」  
息を吸って溜めたところで気がつく。

……………ん？

通路の先にまたしても女の子がいる。

分厚い本を抱えるようにして歩いているメガネの子がふらふらと儂げだ。

あの子もこの子たちと同じ制服らしい。

珍しいものもあるもんだって思ったけど今日は登校日だって言っていたしな、他の子がいたって不思議じゃない。

ゆりかたちの学校、この辺から通っている子が多いんだな。

いやまああったの3人だけだよ。

この本屋はこの近くでいちばん大きいんだし、定期券で来られるんだったりしたら来ることもあるか？

「……………あら、友池さんじゃない！ 珍しいわね、こつちまで来るなんて！」

耳の上を大声が通過してびっくりした。

いや、そこまでの声じゃないんだけど、ちよつとぼーつとしていたから。

その文学少女的で友池さんのな子も僕と同時にびくつとしてたし「ぴやつ」みたいな発声も確認できたから一瞬で僕の同族認定だ。

僕たちみたいな存在はそれだけで分かり合えるんだ。

「およ、りさりんが元気」

「そっか、今日はどこのクラスも同じタイミングで下校だったものね。部活とかなかったら同じ電車に乗るわよねっ」

「……………」

しまった。

びっくりして固まる僕を追い越すようにして……つまりはせつかく総員2名の人垣から抜け出しかけていた僕がりさりんさんに塞がれる形になって、その先にはメガネさんがいて後ろにはゆりかがいる。

僕よりも背の高いJ C 3人に囲まれたんだ。

……状況が悪化している。  
僕はもう駄目だ。

## 19話 学生たちの、夏休み(4) 1/2

「ふ………」

お風呂上がり。

僕はほっこりしている。

火照った体にひんやりとした空気としっとりしたタオルが気持ちいい。

あー、これが温泉だったらなーって思う。

習慣で冬でも鳴るべく毎日散歩くらいはしてたしそこそこ運動も……ニート基準でしてたからたぶん日焼けしてたんだろう男だったときの肌が懐かしいくらいの白い肌  
がまぶしい。

けどまぶしさも桜色になっていて、わきとか太もものつけ根とかさういったところが  
いつそうに色づいている。

ほっぺたも耳も真っ赤だし目はいつもよりも余計に重そうになってるし。

……なんかこういう表現ってやらしいけど実際に目で見てみるとそうなんだから  
しようがない。

やらしいことする相手は居ないから安心だな。



そう言えばこうしてじっくり見るのは初めてな気がする。

今まではなんだか悪いって感じていたから遠慮していたけど……ふとした好奇心にはついに勝てなかつたんだ。

つまりは学術目的だ。

便利だよな、学術目的って言葉って。

それに異性の肉体って言っても幼女だからとつくに羞恥心もなくなってきたというか、そもそも僕自身の体だとしか感じなくなつてからもうずいぶんだしな。

体だつて何十回も洗つたしトイレなんか何百回も行つている。

今さらだ。

まあ恥ずかしがる肉体年齢でも精神年齢でもないしなあ。

ここでちっちゃい鏡の登場。

それをいい感じに傾けてのぞき込んでも微妙にしか見えなかつたところを……見る。

「……………」

「……………」

「……………おお」

痩せているからなんだか想像とかとは違つたけど、それでも男とは確実に違うそこが

はつきりと確認できた。

「ふむ……」

資料で見たのとはずいぶんと違う趣。

なんかいろいろ理由でそういうのってモザイク掛かってるしな。

「……………」

ほんとうに穴同士がここまで近くて縦に開いているのか。

「……………ふむ……………」

なるほど。

脚の開閉に合わせて、ここも開閉。

不思議な造りをしている。

男とはまるで違うそこが興味深くってじっと見入っちゃう。

おなじ人間っていう種族でここまで違うなんて……………って。

胸は男女ともにベースはおなじだし今の僕みたいに「男の胸」って言っても通用してしまう女性もいるんだから、そこまでの違いはないんだけど……………ここはさすがにちがった。

幼児の段階でここまで違うなんてな。

不思議だ。

洗うときの感触で、指とここ自体との感覚でなんとなくは分かっていた。けど、こうして目で見るのとは実感も衝撃もぜんぜん違うもんな。

なんていうか……ちよつと、感動……？

多分ごく一般的な男なら……最近は僕のお仲間が増えるから分らないけど、それでも半分くらいの男ならこの歳くらいには1回は見たことあるだろう異性の体。

その秘したる部分。

興味深くないはずがないか。

「ふう」

なんかため息が出たしくらくらしてきたからやめとこ。

単純に好奇心が満足したっていうか知ることができたっていうか見ることができたというか……そういう感覚が入り混じったような不思議な感じなんだ。

男に生まれたら女の体が、女に生まれたら男の体が気になる。

人間ってそういうものなんだろう。でも。

……ほんとうに。

ほんとうに——男から女になっていたんだな。

ただ無くなったただけじゃなくって内側にめり込んで。



「……………」

女の子、かぁ。

僕は本当に女の子になっちゃってるんだなあ。

……TSって言うものをして実に数ヶ月。

意気地のなかつた僕はとうとうにそれを実感したんだ。



「儂げな文学少女さんもとい友池さんとやらは客観的に見た僕みたいな反応をしながらふらふら歩いてくる。

僕はりさりんさんの後ろに居る形。

ゆりかの前に居る形。

つまりは身動きが取れないんだ。

「友池さんもこっちにも来ることあるのね。偶然ね！」

「……………」あ、えつと」

りさりんさんに呼ばれてしまったメガネの子が本を重そうに抱えながらのそのそと歩いてくる。



「うん、ときどき話すのよ。あれあんた知らなかったっけ」

「私、りさりん一筋だからー」

「まーたそんな思ってもいないことを……で、ゆりか？ 友池さんは近すぎる距離感苦手だからね？ 今みたく軽口ばっかしてると嫌われるわよ？」

なるほど。

つまりこの子は完璧に僕側の人間、と。

「ふーい。つまりは時間をかけて攻略されるタイプなのね。ぐいぐい行きすぎると嫌われる感じの」

「攻略言うな。響さん相手するときみたいに、普通に常識的に……あたりまえにしていればいいのよ。ふざけなければね」

「りよー」

元気だなー。

僕たちはこの子みたいな子たちに陽気を吸われているんだ。

「……………」

「……………」

ふたりがテンポの速いトークをしているから手持ち無沙汰だったのか、ふと儂い系の……メガネさんと目が合う。

「……」  
なんかじつと見られてる。

なんで？

僕がちっこいから？

いや無い無い、ゆりかも居るし。

「……」  
じー。

まだ見られている。

でも僕系の中学生が初対面相手にここまで視線を投げるってのはできないはずなんだけどな？

僕は僕の経験から推測する。

……メガネの度あんまり合っていない？

もしかして。

なんだかちよつとだけそんな感じがしたんだけど気のせい？

そうだったら、目を細める感じの元メガネ男子だった身としてはさらに親近感が湧く。

というか僕は制服も着ていないしそもそもちっこいし、たぶん「なんでこの子はここ

で立ったままいるんだろう……子供だけどりさりんさんの知り合いかな……」とか思っ  
ていそう。

僕もそう思う。

何でだろうね。

僕も分かんないや。

「で、友池さん。こいつうるさいけどイヤだったらすぐに言つてね？ どっかにやる  
から」

「ひどいよりさりんっ！」

「りさりん言うな。……で、友池さんもなにか面白い物？ えっと、いつも……たしか  
…………うーん、名前、ここまで出てきてるんだけど、とにかく仲よさそうな子と一緒  
にいるわよね？」

「えっ と

………

は い

………

ピタツと会話が途切れる。

息を吸い込むためだ。

僕はその間合いを知っている。

「今は………今日は別に。………いえ、一緒に来ているんですけど。」

……でも、近くなんですけど、違うところ、コーナー見えて。  
その、違うジャンルの本が、好きだから

がんばった。

えらい。

複雑な文章を高速で理解する脳みそと簡単でも発音する文章を組み立てる場所って  
かなり離れてるよね。

「そうなのね。いつもふたりでいるところしか見たことなかったから新鮮だわー」

「い、いえ………、ふう」

けどりさりんさんこういう子の扱いにも慣れてるんだな。

コミュニケーションに長けているとはこういうことだ。

そうして話し終わって脱力している友池さん。

……僕の学生の頃も、このくらい静かな声でゆっくり話してくれる子と知り合いた  
かったなあ。

話すたびに一緒に緊張してくれるとちよつと嬉しい感じが良いんだ。

メロンさんもレモンさんもレモンさんにくっついてるりさりんさんも、いかにも姦し  
いって感じの女の子だし。

もちろん理想は男の知り合いなんだけど……出会い、ないからなあ。

いや、あえて作りたいとは思わないし……あ、男ならいたな。

えっと、ガタイのいい、……萩村さん。

よし、名前を思い出せた。

僕もちよつとは成長しているらしい。

「私、友池さんとはたまに話すくらいだったし改めて自己紹介しておくわね？」

「え………はい」

うわ嫌そう。

嫌そうって言うのはりさりんさん相手が嫌なんじゃなくって、多分会話が続くことに  
対して。

僕だからこそ分かる。

「来年はおんなじクラスになるかもしれないし、たしか高校からは選択制のクラスもあるらしいし、お友だちは多い方が良いものね！」

そう？

「私はりさり……じゃなくて」

「おやあ？」

「だまらっしやい」

「むぎゆ」

りさりんさんの二の腕と胸に押しつぶされる関澤さん。

……上から来られると逃げられないし、あの球体が重そうだ。

ほどよく柔らかさと弾力を感じられそうだけど相応の重みがありそう。

「え、えーつと、私が杉若りさ。で、この小学生みたいなのが関澤ゆりか。全校集会

とか移動のときとかで見たことある？ 私、今年一緒のクラスになってからいつつもつ

きまとわれてるんだけど」

「……………はい。廊下、とかで何回か」

「つきぎゆむむ」

ゆりかの発言はキャンセルされる。

何言いたかったのかちよつと興味が湧いた。

「なら早いわねつ。で、こちらは響……………さん。えーつと、同じ学校じゃないし、この

ゆりかよりも幼……………若……………小……………ええつとお……………」

ちらちらと困った顔で見てくるりさりんさん。

いいよ、ちつこいで。

客観的に見れば僕は幼女なんだから。

「……………背は低いけど同い年なんだって。私もさつき知り合ったばかりなの」



「りさりん重い——……もしかして、太った？ あ待って待ってちよい待って、もつと重い!! 深刻な重さだよりさりん!!!」

「ちよーつと静かにしててねー、自称中学2年生さーん?」

「自称じゃないやい!」

「……………」

「自称中学2年生さん」って言葉で一瞬ひやつとした。

流れ弾が怖い。

さりげなくまた1歩距離を置いてみる。

……あ、ゆりかがりさりんさんにじやれる形で前に出たから僕の周りにスペースができた。

この子たちが会話に夢中になるかその辺の参考書のどれかを手に取って話をし出したりでもしたら、なにも言わずにすつと気づかれずに逃げられるかも。

でも買いたい参考書……。

いやいやこの状況の方が嫌だしそもそも帰ったらお酒でだらしくする予定だし。

「……………」えつと、響、さん。よろしく、お願いします……………」

「どうも」

もたもたしているあいだに振り向かれてしまったからとつさの返事。

定型句だけは得意なんだ。

再びに文学図書館さんと向き合う形になってじーつと見下される。

身長がさつきのふたりの中間くらいだからそこまで首が疲れなくて楽。

あと、ちゃんといいい感じに離れてくれるのも良い感じ。

でも……あれ、でも他の人みたいにそんなに驚いた様子はないみたい？

うーん、僕が中学2年生だという詐称をしても特になんとも思わない人もいるのかな。

学生だと全校集会とかでゆりかみみたいなのがいっぱいいるのかな……？

今のところみんな初対面ではそれなり以上に驚いているんだけど。

それともびっくりしてるけど表情に出ないし口で言うのにもまだかかるのかも。

……こういうのって大人の方がびっくりするものなのかもね。

だってぱつと見て相手が何歳かって言っても歳が離れてたら誤差になっちゃうし。

あるいは僕みたいにあんまり人に興味を持ってないとか？

そうしたらこの子は完全に僕の同類だな。

小説とか読んでいても痴情のもつれとかはどうでもいいから展開見たくてすつ飛ばしちゃって、でもそれが大切な場面だったりして分かんなくなっちゃうこととかよくあるよね。

「で、途中で逸れちゃったけど響さんにも名前言っちゃってもいい？ 今さらだけど……そ？ こちらが友池さよさん。 で、合っているわよね？ 良かった、ときどき図書室とかでお話するの」

話の展開が速いりさりんさんは図書室系友池さんが「えつと」とか言うだけで意見を察知したらしく話したいことを話している。

すごい。

その度胸が欲しい。

「よろしく………お願いします」

「つまりさよちんとか……んむむむ！」

「あだなは親しくなってるから、よ？ しかも相手が良いって言ったのじゃなきや駄目よー？」

「んむむむうむむ！」

「あはは、何言ってるのか分かんない！ おっかしー！」

「んむ——！！」

姦しくて何より。

そんなふたりをぼんやり見ながら友池さんが姿勢を戻していく。

必要以上の丁寧すぎる感じのお辞儀。

髪の毛が箒のように垂れ下がっていたのがカーテンみたいにするすると。

重そうだなあ……………。

分かる、分かるよ。

僕のほどじゃないけどそこその髪の毛だから、見てるだけで一気に髪の毛の重心が移動する感覚が浮かんできた。

それにつやつやつてるし手入れも大変そうだな。

あー、でも綺麗で黒い黒髪って映えるね。

どっちかって言うとう光の加減で緑っぽくなるけど。

「……………。」

どきまぎしている友近さよさんを見ながら思う。

……………どうして人との距離が近いコミュ力が高い人っていうのは、こう……………あんまり面識がない人でも平気に気軽に平然と話しかけたりできるんだろう。

僕に近い感じの友池さよさんはともかく、ゆりかとりさりん、あとはかがりとわんこさんとも今井さん。

僕の知り合いはことごとくそういう系だな。

厄年か？

究極の厄年に決まってる。

絡まれてしまった感じの友池さよさんがぼやんと突っ立っている。

多分僕もおんなじ感じなんだろう。

よし。

おんなじ感じなメンタルとしては同情する。

「……………さん。これは

……………でしょうか。いえ、でも……………もしか

して……………」

と、ほんわかしたところでメガネさんがぶつぶつしていたのに気がついてさりげなく  
1歩離れておいた。

……………この子はこの子でひとり言とか出ちゃうタイプなのかな……………って思ったから思  
わずに。

僕はひとり言とかは口から出ないで頭の中で延々ととめどなく流れるから、どうして  
考えたことが勝手に出てきちゃうのかは知らないけど……………近くでぶつぶつ言われるの  
はちよつとだけ苦手かも。

だってぼそぼそ言っているのぜんぶは聞き取れないけどなにかをつぶやいているつ  
ていうのだけが分かるのって中途半端に気になるしなあ。

うるさいのとかスキンシップが多いのとか距離感が近いのとかに比べれば段違いに

マシンではあるけどな。

最近だいが鍛えられてきたから耳も痛くならず、柔らかいのが当たって居心地悪くなったりもしなくなりつつあるけど、それでも静かなのには比べるべくもないし。

「……………すみません。あの……………」

「……………ちよつと待っていてもらっても、いいでしょうか。その、一緒に来ている……………を、呼びます、ので」

「あ、別に見かけたからあいさつしただけだしいつも一緒の子でしょ？ わざわざ呼んだりしなくたって」

「……………いえ、その人が……………ちよつとあるの、で……………」

「そう？ 私たちは別に良いわよ？」

僕は良くない。

「ほほう。りさりん、新しいヒロイン候補はどんな子？」

「ヒロインって……………あんた、最近磨きがかかってきたんじゃない？ そういうの古いらしいわよっ！」

「懐古のなにか悪いのか!! 今のベースなんだぞ!! 歴史から学ぶのよ!」

「加減つてものをしなさいよ？ 誰でも彼でもそういうノリが好きだってワケじゃない

んだから」

「分かってるってばーやっさしいなーりさりんちゃまは」

「だ、か、ら。 止めなさいってのそれ」

「……………」

なんかみんなの興味がこの長い髪の子へ……いや僕よりはずっと短いんだけど向かっていて気が楽。

あれ、でもこれだけの長さって校則違反とかじやないんだらうか？

たしか、ぱつっんとともに崩れて肩に乗ってきているゆりかの髪の毛の長さで「ぎりぎりセーフ！」とか言っていたような。

「……………えっと、……………さん。 この前……………」

う、そう。 うん、そうなんだけど。 ………………そうじゃなくて、今はね。 今

……………あ、そうなんだ？ えっと……………聞いて？ うん。

……………今ね、私、……………なんだけど」

さつきまでよりもさらに小さい声でスマホに向かって話し出す友池さん。

断片的にぼんやりと聞こえるだけで、むしろ電話相手のやかましい感じの声のほうが大きいかもしれない。

……………あれ、でも。

電話口の声。

やたらとテンション高くて嬉しそうな声。

……なーんだか聞き覚えがあるような。

「……………」

いや、気のせいだろう。

うん、気のせいだ。

気のせいに間違いない。

あの子の相手が大変だからそういう幻聴が聞こえているだけ。

それだけだ。

この子たちと制服が一緒だった気がしないでもないけどきつと偶然に決まっている  
だろう、うん。



# 19話 学生たちの、夏休み(4) 2/2

悪いことつてやけに正確に分かるよね。

これこそが第六感つてやつ？

女の子が好きなオーラとかかってやつ？

「……………」

僕は僕の頭が解析した声の波形を意図的に無視する。

いやいや。

いやいやいやいや。

ないでしょ。

そりゃああの子ともこの近くで、つていうかこの上でバイトしてた子だけどさ。

あの子もおんなじ学校だけどさ。

いや……いやいやいやいや。

そんな僕の思いを無視しながら儂いメガネさんの電話は続いているらしい。

ずっと続いてて。

「……………」 うん。 うん、ほんとうです。 ……あ。 ……ほ、ほ

んとう……なの、よ？ ……そう、いちばん奥のところの。うん、

……急がなくて良いって……あ

切れた通話から戻って来た儂いさんはぼーつとしながら僕を見ている。

「……………」

「……………」

やっぱりじーつと見られてる。

……いやいや、無い無い。

無いでしょ？

き、きつと同級生の誰かに違いない。

僕はありえない偶然っていう妄想を意識して排除しながら逃げようとしてゆりかに抱きつかれて逃げられなくなる。

「……………」ゆりか

聞いてない。

楽しそうにりさりんさんと話すついでに彼女の両手を、彼女から見てちように良い感じに背の低い僕の肩に乗っけているらしい。

ああ、女子ってやつの距離感……。

そんなのはどうでも良くって、とにかくただでさえ想定外の関澤さんにくつついたり

さりんもとい杉若さん、杉若さんが呼び寄せた友池さんという3人がいるんだ。

もう振り切ろう。

多少強引でも良いだろう。

じいやに呼ばれてるって言って全速力で走ろう。

うん。

お迎えが来ていることにしよう。

参考書はネットで買えば良いんだし時間の無駄だしなんかやな予感するし。

この子たちの話に巻き込まれたままファミレスとかカフェとかお昼とかに連れて行かれるよりはずっとましだ。

軽く夕方になっちゃう。

お酒を呑むより不毛な時間だ。

せっかく会話をしない期間でリフレッシュしていたところなのにこれじゃまたすぐに元どおりになっちゃうじゃないか。

急げ急げ。

「うーわ。うわー……高校つてこんなんやるの？なんか記号とかやつたら長いイミフな文章とか。魔術てきー。魔方陣とかに書かれてそう。あ、やつば、ちよつと興味湧いて来ちゃった」

「ある意味すごいわねえゆりか。……でも本当、何書いてあるのか分からないわね……なんで数学でこんな長い文章書くことになるのよ？ あと何この記号だらけなの……私たちこんなのやるの……？」

「あの……」

「りさりん、頭使ったしおなかすいたー」

「そういえばそうね」

「えっと」

「もともとお腹が空くまで適当に本屋でもって感じだったんだし、まだちょっと早いけどお店はもう開き始めているわよねー」

「僕はそろそろ」

「お昼行っちゃおう？ 良いって言ってくれたら響さんも友池さんとお友だちも誘って。

せつかくお友だちになったんだし！」

会って10分で友だち認定はちよつと早すぎるって思うな。

眼鏡さんもそう思うでしょ？

「だから」

「良いねえ！ えっと、全部で……5人？ 結構な大所帯になりそー」

「だったらまずお店決めるところからね。みんなの好みとかあるだろうし……あ、食

事制限とか響さんは大丈夫なのかな。入院してる人とかってそういうのあるって」

「……………」

「響はだいたいのもの平気だって言ってたし平気っぽい！ あんま食べないけど」

「そうなの」

聞いてくれない。

なんで聞いてくれないのこの子たち？

無視してるわけじゃなくて単純に耳に届いてない雰囲気。

「……………」

「……………」

眼鏡友池さんと視線が合い続けている。

……君なら僕の気持ちちをよーく分かってるでしょ？

助けて？

「……………僕は迎えが」

「あ……………あの……………お会計終わって、すぐそばにいるみたいで。

私の、その……………友だち、が。もう来るって」

分かってなかった。

「友池さんたちも、ご飯。よければこのあと一緒に食べてく？」

「……ええ、よろしければ」

「……僕はしょげたけどがんばってみる。」

「……中学2年の子供に良いようにされてたまるかって気合を込めてみる。」

「あの、済まないのだけど」

「さよちや——ん、お待たせ——っ!!」

僕のか細い声はそれでつかい声に吹き飛ばされた。

……間に合わなかった。

失敗したんだ。

しょうがない、またひととおりの自己紹介合戦が終わるまでは辛抱しよう。

それが終わったら今度こそは帰るんだ。

なんとしてでもご飯の前には。

だって今日は煮卵がいい感じの味のしみ具合なんだ。

ラーメンなんて重いものはこの胃はお昼でないと受け付けられないんだ。

だから僕は帰るんだ。

「さっきの電話あまり聞き取れなかったのよーごめんさい。でも屋内だし並んでいたらから長くなってしまってもって思ったのよ。アナウンスの声と違って電話すると

きにはジャマよねえ、普段は聞き逃してしまいうらいなのに。でも、待ち合わせには  
けっこう早いけどどうしたの？ 急にこのあいだ話した響ちゃんのことを聞きたがる  
なんて……あ、響ちゃんについてまた聞きたくなったのかしら!!」

怒濤の文章がひと言に凝縮されて発せられる。

僕はゆつくりと振り向く。

振り向いた。

そして見上げた。

「……………」

くるんとかしげるくるんくるん。

……いや、分かっていたんだ。

第六感でなんとなく分かっちゃってたんだ。

振り向くと……いろんな意味ででかい下条さんがそびえていたんだ。

なんで君がここにいるの？

……呼ばれたからだよね……。

「……………」つてあらあら、そこにいるのは響ちゃん？」

人違いです。

その辺を無作為に抽出したら絶対に1人はいる感じの男だったときの僕ならまだしも、長い銀髪で背が低くて……な今の僕は言い逃れできない。

そもそもこの服装もこの子を選んだものだしな。  
もう終わりなんだ。

「ほんものよねえ、その格好だし。最近見ていなかったけどその格好をしているとほんとうにまるで………」

なんかほっぺに両手を当ててトリップし出すかがりさん。

ああ、この子はいつでもマイペース。

「およ？ 響？ 響ちゃんだなんて……そんなかわいい呼び方されてるの？」

ぐいっと僕の肩を引き寄せられて抱き寄せられたけど女の子な部分が当たらないから平気。

でもやっぱり良い匂いがして困るんだ。

年下でも異性は異性。

……精神的な性別が大切なんだってよく分かるな。

「あらあらっ？」

「うおでけえなにこれりさりんなんか目じゃねえ……」

気持ちは分かる。



中学生どころか一般的な女性にあるまじきでかさ。

ゆりかがこの場のみんなの代弁者だ。

「……………」

「……………」

ひと呼吸置いて……なぜかメロンとレモンがすつと対峙する。

僕を挟んで。

目の前にはメロンの気配が……うなじにはレモンの気配が詰め寄ってくる。

なんで？

つていうかなんか怖くない？

どうしちやったのふたりとも。

「響ちゃんと仲良さそう……響ちゃんのお友だち？」

「響？ ちゃん付けって響的にオツケーだったん？」

「そうよね、響ちゃんって人とおはなしするのが面倒くさいだけで人見知りではないも

のねえ」

「ひびき？ 響の性格知ってるけどヤなものはやだって良いなよ？ なんなら私が言う

よ。」

前と後ろから全くの同時に話しかけないで欲しい。

まるでヒマなときに聞いているイヤホンで聴くあれみたいじゃないか。そうして僕の上で視線が合っているらしいふたり。

僕は蚊帳の外なのに中心だ。

「……………」  
メロンが近づく。

レモンが密着したらしいのが分かる。

あー、ブラジャーって形が崩れないようにって意外と硬いんだよね。

そういう説明を受けて選ばれて買わされたから知ってるよ。

でも男に「当てるのよ」は行けないって思う。

たぶん男って見られてないんだらうけど。

だって肉体は幼女だしな。

「……………」  
「……………」

何かを言いたげなふたりの無言が突き刺さる。

遠巻きにしているらしいりさりんと友池さんは気配すら感じない。

……めんどくさがっていつもどおりにネットで注文して今日は適当に過ごしておけ

ばよかった。

そうしていたらこんな面倒くさいことにはならなかったのに。

どうして今日に限ってやる気なんか出しちゃったんだろう。

どうして今日に限ってめんどくさがらなかつたんだろう。

「響ちゃん？」

「ひびきー？」

どうして女の子っていきなり声が低くなるんだろう。

誰か教えて？



「……………」

誰も教えてくれなかつたし疲れた。

もうすぐにでも寝たい。

せつかく別々に時間を調節してうるさくならないようにって、顔を合わせないよう  
にって気を配っていた下条さんと関澤さんがまちがってエンカウトしてランデ  
ヴー。

そうしてちよつとのサイレンスの後、僕は両手を片手ずつつかまれてアブダクト。

その先はいつも彼女たちと会っていたミアミスだ。

『いつもの……………そう』

『へえ。いつもなんだ』

「いつもの」って言ったらもうワントーン声が下がったのが怖かった。

漏らしそうだった。

トイレを早めに行く習慣がなかったら多分漏らしてた。

危うく男どころか人としての尊厳を失うところだった。

なんで女の子はゼーんぶ……………1から100までみんな話しておかないことについて

ここのまで怒るの……………？

別に良いでしょ、他人なんだから……………駄目なの……………？

駄目なんだよね、今日思い知ったよ……………。

しかもふたりだけに説明するならまだしも、この場にはりさりんこと杉若さんと眼鏡

さんこと友池さんも同席している。

なんで「友だちだから！」で新しいふたりの前ではじめつから説明しなきゃならな

かったの……………？

女子ってそういう種族なの……………？

そういう種族だったかも。

「……………」  
煮卵は帰ったらすぐに容器を移そう。

それでお酒を呑んで気持ちよくなるんだ。

4人の中学生の前で説明させられた代償は強烈だ。

……別に経緯を話すのは良いんだけど、僕は何かボックス席の「お誕生日席」つていうところに座らされてずっと4対の視線に晒されていたのが効いている。

そつかあ、人生で初めて座ったけどここって注目されたくない人間にとつては苦痛でしかないんだ……。

帰ったら奮発したけどもつたいないって思ってたお酒飲もう。

こんなときくらいたくさん飲んでもいいだろうしさ。

「んで、いろいろごっちゃになってるからここは考察班な私が話を整理してみると」

そういやゆりかってアニメとかマンガとかゲームの設定を考察する掲示板に出没しているとか言ってたっけ。

そんなどうでもいい情報が頭をぐるぐるする。

「まず響は、さるお金持ちの家の子。しかもそんじよそこの小金持ちじゃなくてガチの」

「……………」

まあ間違つてない。

僕自身が僕自身の判断で僕自身のために使えるお金がたくさんあるのは本当だし。

問題は幼女になつちやつたもんだからそれを引き出せなくなつてることなんだけど。

「響？ まちがつてたりこういうのイヤだつたら言つてね？」

「……………」

間違つてないから良いです。

そういう意味を込めての沈黙。

それにどうせ「やだ」つて言つても謎の尋問は続くんでしょ…………？

「大丈夫っぽいねえ…………あいかわらずだねえ…………。で、ただけかつていうとメイドさんとかいて着替えとかからお手伝いされるレベルで？ でも響はそういうの嫌いな感じ。んで送迎と護衛をいっつもされてるくらいの過保護で、あと年の離れたお兄ちゃんっ子」

「……………」

メイドさんとか執事さんとかはかがりさんの妄想でお兄さんは僕です。

なーんて言つてもどうせかがりが「私見たもの！」とか何歳児かつて感じで言い張られるからそれで良いや。

「こういうのって何歳のときかに大体の子供がなるんだってね。」

「でも響ちゃんはこの春、私たちと会うまではずっと病気で入院していたのよね？ あと、今もまだお家で療養中だって聞いたわ！」

「……………」

何故か威張っているメロンさんがいる。

「こつそり……………」といつてもお付きの人が傍にいつもいるらしいのだけど目立ちたくな  
 いていう理由もあって、お兄さんの服を着てお家を抜け出すくらいにはやんちゃさ  
 ん。それで、前からその……………ええと」

「私？ ゆりかだよ？」

「ごめんなさい、ゆりかちゃんとも』『お友だち』なのよね？」

「うん。私『も』響の『お友だち』だよ？」

トーン下げるのやめて？

「……………」

「……………」

「……………この夏は君たちとの。せつかく知り会ったんだからとい  
 うことで……………外との友だちを作るという理由で許可を得て外出している。……………」

ああ、そんな感じだ」

こうでも言わないと納得しなかったからしょうがない。

僕は無言のプレッシャーに負けてかがりが納得してくれそうな論理を引き出した。

ようやく必死のつじつま合わせが上手く行ってこつそりため息。

どうにかこうにか齟齬なく繋げられた……と思う。

少なくとも今、疑問を投げかけられない程度には。

嘘じゃない嘘って大変なんだな。

4人から注視されながら話すのとっても苦しかったんだけどなんとか乗り切れた感

じだけど、僕、もう帰りたい。

帰っちゃ駄目？

駄目っぽい。

懐かしい小学生の頃の帰りの会を思い出す。

そうだよね……君たちは2年前まで小学生女子やってたんだもんね……そりやそう

だよね……。

「響つたらけつこう大胆ー。いやまあさ、今思えばそこかしこにそのヘンリンはあつ

ただだけどさ。それにしてもそこらのマンガとかのキャラよりよっぽどマシマシだ

よねえ響の属性」

だつて盛りに盛ってるし。



「事實は小説を越えるってほんとーなんだねー」

「波乱なのね……生まれも違うって感じだし別世界の話すぎて実感がないくらいよ。人並み外れて……背が低いし、美形だし。髪の毛が羨ましいし」

「あ、髪の毛すっごいよね。日の光苦手だからいつも隠してるけど」

「あら、そうだったかしら？」

左側にはレモンさんとりさりんさんが座っている。

「でも……そう、体が。ずっと病院にいるほどだったの……でも退院できてほんとうによかったわね。でも、まさか……あの、知らなくて連れ回しちやっつてごめんなさいね？」

「大変だったけど平気だ。大変だったけど」

その件についてだけは強気で文句を言っておく。

口を尖らせるも気がつかれないのは知ってたけど。

「それにしても、洋館、召使い、メイドさん……セバスさん……一族。いいかも……」

かがりさんが謎の詠唱を始めた。

「おや、魂が疼くかい下条さんとやら」

「たましい……ええ……、とっても良いわね……」

「ぐつときておる。闇の住人か」

それにゆりかが共鳴している。

ここは本当に現実世界なんだろうか。

ひよつとして魔法さんのせいで幻覚とか見てない？

「……………ほんとうに、そういうご家庭、あるんですね……………」

話が途切れてちよつとした静けさに口を開くさよ・友池さん。

話すの苦手にしてはこの子、けっこう話すらしい。

「……………ふつうです、あ、私の家は……………ですけど……………私も体が弱くて、何  
度も入院と、それと、手術……………しているの。気持ち、響さんの。分かる気がし  
ます……………。同じくらい、過保護にされすぎると、嫌気が差す、というのにも……………  
です」

「おおう、こつちもまたディープなのをさらりと」

そして右にはメロンメガネが塞いでいるんだ。

ついでにメガネさよさんは本当のご病人だったらしい。

……………なんかごめんさい、こんな嘘ついて。

「…………………………」

僕から言っておいてなんだけどこの設定、どう考えても現実感ないよな。

今までばらばらに言っていたのをまとめただけで僕のこれまでをアレンジしたものだから完全に創作っていうわけではないんだけど……だからって、いくらなんでもこれはなあ……。

盛りすぎでしょ……なのにこの子たちは4人とも疑っている様子がないのは何でなの？

この子たちにとっては本当のことに聞こえるの？

疑うことを知らないのか、それともマンガや映画といった文化に毒されているのか。

それともいきなり疑うのもアレだして追及しないでいてくれるのか。

男女以前に世代が違いすぎるからその辺がいまいち分からない。

けど「本当にそう思う？」とか聞いたら絶対めんどくさくなるからこのままでいいや。

それに僕には人の機微ましてや女性の子供の女子なそれを察するなんて高度なことではないから、この子たちから問われない限りは分からないし分かりたくない。

まあ、今は表面的にでも納得してくれているってことは突っ込む気はないってことって理解。

「……………」

それにしてもやっぱりはじめから隠さずに魔法さんのこと以外はぜんぶ話していれば、これだけ悩んで胃がしくしくしくなくてどれだけ楽だったことか。

この体になった直後で混乱していたからとはいえ、方針も設定も固まっていないあのときに「どうせ一回しか会わないでしょ」とかいう謎の自信で外に出たのがそもその発端。

まあ実際あの状況でこれが現実なのかどうか把握するにはあれくらいしか思いつかなかつたわけだけど……もう少しやり方無かつた……？

無かつただろうなあ、あれがあのとときの僕が選んだ行動だもんなあ。

後悔しても遅いんだ。

それに、くるんとぼつつん。

この2人とここまで付き合いが濃くなるなんてあの時点では想定できるものじゃなかつたんだし。

できたとしたってせいぜいが萩村さんと元悪魔な今井さんだけだ。

いやあ、それにしても久しぶりに肝が冷えるって体験をした。

針のむしろだったな。

ちなみに久しぶりって言うのは言葉の分からない外国を旅行してたときに車にひかれかけたときが直近。

命の危険と同等な危機感を覚えるんだからやっぱり女って怖い。

話し終わるまでずーっと声が低いままだったから怖かつたし。

きつとそつちが素だつたんだらうな。

女つて怖い。

女性つて電話のときとか咳払いもせずにボイスチェンジするしな。

ということはこの中にいるみんな……いやメガネさんはハスキー系だから違うかな……3人は外向けの声を作っているの？

女つて怖い。

もつと男の単純さでいけばみんな幸せなのにね。

ひとり怯える僕を置いてきぼりにして……みんなは僕のことを聞いてひととおり満足したのか会話に花を咲かせている。

お互いのことについてとか夏休みの宿題のこととか、まあ学生らしいたいしたことじゃないんだけど。

「……………」

だけど。

もう芯から疲れ切っているから帰りたいんだけど、あえて忘れていたんだけど……僕が座っているのはお誕生日席で左右にふたりずつでブロックされているわけで。

つまりなにかという……話をしながらみんなが食べ終わって満足するまで逃げられないんだ。

「……………」

「？ 響ちゃん？ ひとくち食べる？」

「あ、ずるいつ」

そうじゃない。

そうじゃないんだ。

……こうなったらなるべくこれ以上の余計な設定を増やさないように最低限で使い  
回す。

そうして矛盾が起きないようにするのとなによりに僕自身がそれを覚えていられない  
っていう課題をクリアしないとイケない。

それで良い具合にそつと抜け出して帰るんだ。

「……………」

僕にそんな高等なコミュニケーションできるのかな。

無理だろうな。

20話 下条かがり(1) 1/6



服には意識が通う。

変な言い回しするほどストレスたまったわけじゃない。

ただ着こなしか仕事とかそんな感じの意識の持ち方って感じで別にスピリチュアルなことでもない。

あの日ばったりゆりかとかかがりがはち合わせしちやったもんだから、連行されたあのあとも微妙にちくちくする言葉と視線で大変だったからとかそんなわけじゃない。

違うよ？

もう何日か経ったし大丈夫。

大丈夫じゃなかったのは忘却の彼方だから大丈夫なんだ。

それよりも服がお洒落なのに「どこか合っていない」って感じたり、逆にラフだったりみんなが着ている既製品なのに妙にしっくりきているとかそういうときとかにそう

感じるだけ。

そういう意味では僕の着ぶくれた格好も「意識が通う」っていう状態らしいのはあの場の4人からの意見で一致していた。

既製品のおんなじ服を着ているのに上品だったり下品だったり……見ていればなんとなくどういう家柄とか性格なのかが察せられるようなそんな感じのがあるみたい。

不思議だよ、ただの布なのに。

でもその布が意外と大切なのは女の子させられてから……む、なんだかやらしい、女の子としてのいろはを手ほどき……これもやらしい気がする。

言い方って難しいよね。

とにかくこの意識、基本的にその形の服を着ている時間とか鏡で見ながら「周りからどう見えているのかなー」とか「こういう動きをすると映えるなー」とか「こうするとぱんつ見えるのかー」とか「ここまでならぎりぎりセーフだけど逆に危ない気がする……」って研究することで服のほうに人が合ってくる感じがするんだ。

………こういうの、今まではまったく気にしたことなかったんだけどな。

男の頃は何着ても普通だったからな。

とつても楽であの頃は良かったよ。

でも気にしたことがなかったからこそ今になって……幼女になって、でも中学生だと



言い張るからこそ下条さんに襲われて無理やり着させられて口うるさく言われて、ようやく身についたんだ。

これが普通の男なら高校生か大学生のときに女の子にモテようって必死になってファッション雑誌とかで勉強してたんだろうし、普通に母親とか姉妹のいる男でもいち指摘されて嫌でも身についたんだろう。

でもほら、僕ぼつちだったし女の子に興味ない……じゃなくて彼女とか欲しいって本気で思わなかったから……。

この年になってようやく僕の意識の中に、寝ぐせとかヒゲのそり残しとかだけじゃない「服装」っていうものが体の一部になりつつあるのかもしれない。

服なんてぱつと見ておかしくなければ後は暑いか寒いかとお値段だけだったもんな。

ああいや、さすがに機能性しか重視してないスニーカーとかとはお別れしてたけどさ。

「……………」

ファッション雑誌だって、この数年で1、2回見たくらいだったのがこの夏だけで10冊以上。

ぜんぶ下条さんから押しつけられたものばかりだ。

「要らない」って言ったけど「去年のだからもう流行遅れなの、もう見ないから気にしな

いで」だつて。

違うよ……僕は君のお財布の心配じゃなくって単純に持つて帰るのと捨てるのが大変だから言ったんだよ……雑誌とか女で子供な僕なんかじゃ10冊縛つてなんて捨てられないんだからね……？

幼女を舐めないで欲しい。

あと、かわいい系の服にだけ新しく付箋がべたべた貼られていたのはただの嫌がらせだと見た。

押し付けられたからには読まないとおの子の機嫌が悪くなるなーって思つてしぶしぶ読んでたのがいつのまにか興味深く読むようになってる。

僕は活字中毒だから電子書籍も読み放題なものだからたくさんの雑誌も読めるわけなものだから吸収は早かつたんじやないかな。

というわけで。

「はなせい」

鏡の前には、ゼ・清楚っていう感じの白いワンピースを着た僕。

僕もそうだけど男つて何で白いワンピースと麦わら帽子な女の子が好きなんだろうね。

多分本能なんだろうなって思いながら服の中に残つていた髪の毛も両手でばさつと

出して、さらに中途半端に残つてゐるのを引つ張り出したり絡まったりしてゐるのを手ぐしで軽く整えて身だしなみ。

さらに裾とかを引つ張つてきさいな引つかかりとかズレてるところとかそういうものもおしゃれじゃないから修正。

念のために鏡の前で右を向いて左を向いて振り返つてお尻を見て。

女の子つてこういうのが大切なんだつて。

まあ布一枚……いや、下着が上下に一枚ずつだから3枚つて言うのかな……つていう薄着な女の子が乱れた服装だったらそれを見た男たちにやらしい妄想させちゃうからしようがないよね。

そういうのがあんまりない僕だつて見たらどきつとするだろうし。

ホットパンツつて言う、もはやパンツ並みのズボンを穿いてエグい股下な人を見かけたときくらいにどきつてするもんね。

「よし」

もう何度も着ているからこの服も僕にまた馴染んできたような気がする。

鏡越しで見るとたまーに僕自身じゃない気がする程度には似合つてゐるらしい。

……僕がこうなるんじゃないかってこんな娘が欲しかった。

そんな感想出て来ちゃうのが20代の男だ。

10代のそれとは違う。

すぐく早い人じゃ20で子供いるもんなあ……そうしたらちようど春先までの僕の肉体年齢的には今の肉体年齢な娘がいても不自然じゃない程度だもんなあ……。

晩婚化つて言う言い訳があるから気にしてこなかったけど、こうして純粹に生物としての……子猫とか子犬とかハムスター的な可愛さつて言うのが感じられる、銀の長髪で幼い顔つきの白いワンピース着た幼女もとい女の子を見ていたらそういう感想が浮かんできた。

でもやっぱり肌の露出が多いわけで、そうなるるとこの女性的な魅力なんかない体でもどきつとさせられる程度の魅力は出てくるらしい。

銀色の長髪がマントみたい……ケープとかフリースとかの春とか秋とかに女性やおしゃれな男の人が上にふわつと羽織つていようなそんな感じのふわふわな感じを1枚乗せている感じになっている。

なんなら髪の毛のキューティクルつてのが光でちかちかしてラメが入ってる感じになつてる。

眉毛ももちろん銀色で肌も薄くつて、顔に比して大きいけど近くでじつとのぞき込んでも水晶みたいに透き通るこれまた薄い色の目。

その上半分がまぶたで押されていて、眠そうでほっぺたがぶにぶにで口がちっちゃく

て。

本当に日の光を求めて北国から来ているどこぞの令嬢って感じ。

吹けばどこまでも飛んで行きそうな儚さの女の子な僕がいつもどおりにぬぼーっと佇んでいる。

人って見た目だ。

前だったら「だらしない若者だ」とか通りすがりのおじいさんとかに理不尽に怒られたりもしたけど、今だったら絶対そんなことは言われない。

人の価値って不平等だよな。

かなりのなで肩で鎖骨の下にはほのかな膨らみがちやんとあるって信じてて、腰のところからふわふわと膨らんでいてちらって見えるふとももと全部見えているふくらはぎ。

女性的には「かわいい」で男としてはこんなに幼かったとしてもちよつと扇情的。

そういうものだ。

女性だって汗かいて臭そうな男でも格好良ければ男の魅力とか言うし、顔が良ければ文句言わないし……異性ってそういうもの。

うん。

そういうわけでちゃんと成長してくれたら10年後が楽しみな感じ。

僕の希望としては早く戻りたいけどな。

「……………」  
そんな女の子みたいな僕を見て、ひととおりいろいろと体を動かしてから着たばかりのワンピースをぺろんと脱ぐ。

ワンピースってどうやって着るんだろうなって思ってたけど想像よりずいぶん大胆な方法。

記憶にないはずの小学校の教室でプールの前とか後に、肩のところでぶちって留めてもそもそ着替えるあれを思い出したくらいにアナログな服だ。

服って言うか布。

確かにこの布は今の見た目にこの上なく合っているんだけど……ここまで女の子の子供のかわいいのはまだちよつと恥ずかしい。

家の中くらいじゃ平気なんだけど……でもくるんさんと会うとき最低でもスカートじゃないと服屋に連行だからなあ。

なんでだろうなあ。

あの子、僕のことを勝手にじいやからレベルアップしたセバスチャンがいる規模の子供って思い込んで服、隙あらば買わせてこようってするしなあ……。

雑誌とか見ていると、ズボン……パンツって言うんだって、発音がちがう感じの「パ

ンツ」……とか短パンとかスパッツとかタイツとか女の子らしい服装っていくらでもあるのに、なんなら今はぶかぶかズボンが流行ってるって自分で言ってたクセに僕に対してはなんでスカート系限定なんだろう。

解せない。

まあくるんさんはちよつとメルヘンっぽい感じがするただの趣味か。

私服はリボン多めだしな。

あれも客観的に見れば可愛いだろう容姿があつて許されるものだけど趣味ならしうがない。

人の趣味にいちいちケチつけるのはいけないことなんだ。

「……………」

そうやって無理やり着せてくるのをやめて欲しいのに、最近は「慣れてきたし別にいいか……」つてなつてきているのが困るんだ。

会うときはほぼ強制的に着させられるから僕にとつても女装の練習になるしで割と実践的なのもまた困る。

あの子、無意識に他人を誘導するの得意だったりしない？

やつぱり服屋の店員さんは天職なんだろうか。

人に何かを売りつける才能。

それがありそうだし初対面の人とすぐに打ち解けるし頭の中が幸せだからきつとうまくやっていけるだろう。

けど女装はこれからの僕にとって必要な技術。

肉体的には紛れもなく女だからこそだ。

女性ホルモンがどばどば出てすごい体つきになったとしたら男っぽい服だけって訳にはまず行かないだろうし。

可能性はあるんだけど……極小な予感がするのは気のせいなんだろうか。

でもまったく成長しないのは社会生活が困るんだよなあ。

魔法さんがんぼって？

「……はあ……」

……ふつうがいいなあ。

ふつうに胸も……平均ってCカップくらいなのか？

そのくらいのおっぱいとそれに見合った程度のおしりとふともも。

僕はムチムチは好きじゃない。

だから男だった僕からして日常生活に支障が出ない範囲で留まって欲しい。

あと身長はできれば女性の平均より5センチくらい高いととにかくと便利だ。

低いのもうごりごりだ。



踏み台がないと何にもできなくて人混みで動けなくなるのは勘弁なんだ。

理想は元の姿に戻ることなだけど……半年近く経っているのに一切の進展もないから希望が持てなくなってきた。

まあ幼女ボディには慣れてきたしいんだけど……。

将来のどうしようもない不安は丸投げするに限るんだ。

首元のフアスナーを下ろしてすとんと落とした一枚の白い布を、しわにならないように脱いだらさつとハンガーに通してそのへんにぶら下げてきた僕が鏡に再び映る。

不自然に……少なくともAカップくらいには胸が膨らんでいるシャツとその下のぱんつ姿な僕。

なぜ僕にないはずの胸が存在しているのか。

がんばってレモン未満のさくらんぼなはずの僕の胸が揉める程度に膨らんでいるのか。

その答えは単純で、これもまた詐称しているからだ。

シャツも脱ぐと僕の胸からわきの下をぐるりと通って背中まで締めつけている布が露わになる。

ブラジャーだ。

………やつぱり慣れないなあ……ブラジャーをつけているときの感覚。

他の服はともかく、これは完全に未知のものだったからな……もう既知だけど。手のひらを吸い付けると柔らかい布の感触だけで温かさとかは伝わってこない。手のひらにも胸のほうにもなんの楽しみもない。

だってパッドだもんな。

悲しい。

僕に胸があるはずがないもんな。

悲しい限りだけど。

なんでブラジャーをつけているかというところ、これもまたつけていないとダメらしいから。

なんでもスタイリスト下条によると女の子らしい格好をしたいなら必須らしい。

って言うか「女子なら絶対につけなきゃ駄目！」って妙に真剣だったからしようがない。

「めんどくさい」って言うとなんかすんごい目で見えてくるからおとなしくつけざるを得ない。

「別に良いじゃん、シャツ一枚でも乳首とか浮かないんだし」って言いたかったけど我慢した。

一応異性だからね、どう見ても頭脳は子供で体は大人だけだ。

そんな僕が外出するときはの8割方は、まだ、ズボン。

比率がじりじりと下がってきいているのは下条さんのせいなんだけど、だから気楽なんだけど……あの子と会うときにはスカートまたはワンピース。

そうしないとむすーって膨れるし声のトーンも一瞬だけど冷えるし、また「服を選びましょう」とか言って連れて行かれるからしょうがない。

僕が楽しくて女装して外に出てるわけじゃないんだ。

絶対に。

ちなみに下条さんはワンピースがお好きらしく毎回1着は試させられるほど。

「……………あれ？」

初めて試着させられたときあまりにも胸がすんとんってしていたから見かねて「女性的な魅力が僕にはないから……」的なことをぼろりしちやっただけで、とうとうブラジャーの導入っていう流れだった気もしてきた。

つまりはまたいつもの僕のうっかりだったりののか。

いつもだな。

女の子らしくしたいのなら必要はなくてもおしやれとして形だけを矯正するためのブラジャーをつけさせられることに……って流れだったかもしれない。

あんまりにも衝撃的な物体を前に出されたもんだから記憶が曖昧なんだ。

シヨックだったんだ、しょうがない。

見た目がまっピンクだったり派手なのだけは断固として固辞したおかげでただのスポーツ用……スポブラとかナイトブラっていう形だけのものなのが心の支え。

やたらふりふりした飾りが付いてるとかつけさせられたら落ち込む。

買わされたのが何個かあるのは見なかったことにしてしまい込んである。

もちろんパッドもおしゃれのためだから必要らしいし、なんと世の中の女性、つまりは人類の半分は胸を盛るそれをつけるって言う大罪を犯しているらしいから僕は悪くない。

別にそこまで気にしていたわけじゃないんだけどやたらと真摯だったのがおかしかった。

ただ単純に鏡を見て「ふつうの女の子がこういう服を着ていたら胸元に視線が行くのかなー」って思ったからこそそのぼろりだったのにな。

そのときはなんだかいつも幼女には見えなかったから。

ただの錯覚だ。

脳みそはまだまだ男なんだからしょうがない。

はじめは胸ポチ対策だと思っていたからされるがままだったんだけど……って言うかその胸ポチもよっぽど薄い生地一枚でぐいって胸を張らないとできないんだし、って

言うか試着室で上半身を剥かれていろいろと素手であれこれとつけられたのって友だちの範疇なの……?」

「こんな感じで盛れるのよ!」って言ってわきの肉とかをぐいぐいと寄せられそうになつて「そこまでのお肉無いのね……その、ごめんさい……」って気まずそうに言われたのが悲しい。

あれからちよつとだけ優しくかつたりするのもまた気を遣われてプライドがなくなつた。

僕はこれっぽっちも気にしていないのにな。

せめて僕自身の楽しみのために揉める程度欲しいだけのことなんだけど。

……ま、まあ学生とかなら体育とか水泳とかの着替えで見たり揉んだりするんだろうし、あのくらいはあたりまえだったんだろう、きつと。

普段のあの子から変な視線とかも感じないし女の子同士の様子とりだったんだって納得しておく。

ともかくそういう感じで胸を盛るための詐欺アイテムを数点買わされたからには今日も道中の着替え以降はこれを着けていなければならぬって決まつてるんだ。

さすがに女装って感じが抜けないから家では絶対につけないけど。

スカートやワンピースとかぱんつ一丁はセーフ。

僕ルールだ。

おかげで胸がほんとうは平坦なのに、透けていなかったとしてもシャツの上からぱつと見たら「ああ胸なんだ……」ってはつきりと分かる程度の盛り胸がふたつ、本来の僕の胸から数センチ距離のあるところに存在する。

まるでほんとうに、ほんとうにおっぱいが僕に生えているかのようにでなんとなく嬉しい。

この格好なら中学生だって言っても胸を見てそうだねって思えそうなのも嬉しい。でも揉めないから悲しい。

クセになるとまずそうだから買わなかったけどシャツとブラのパッド部分の一体型みたいな服もたくさんおいてあったし、つまりなにが言いたいのかというとな性はみんな嘘つきだということ。

油断をしてはいけないんだ。

だってこの盛るってやつ真つ赤なウソじゃん。

うそっぱちじゃん。

詐欺じゃん。

お化粧とかハイヒールとかと組み合わせたらすごいじゃん。

もはや別人じゃん、どう考えたって。

「……………むー」

ふつつつと、僕にしてはとつても珍しくこみ上げてくる怒り。

世の中の女性の何割がこんなひどい、僕たち男に対する組織的犯罪を昔も今も続けているんだろう。

僕はぱんついच्चよのまま「くちゅん」ってくしやみが出てくるまでずっと、そのことについて思いを巡らせていた。



「……………」

「……………」

静かな室内。

かりかりかりと書いては止んで、ちよつとしたらまたかりかりする音。

ときどきのため息。

頻繁にぺらぺらと紙をめくる音。

そして時計の針の音だけが響いている。

僕は頭からおしりまでを柔らかいクッションに預けるだらしない格好をしながら静

かに手元の単行本の中のストーリーを読み進めていく。

「……………」

なにか言いたげな視線を感じてもぜったいに顔を上げてはならない。

でも「だけど」「ねえ」とか「ちよつと」とか言葉を言われたら反応してあげないと不機嫌になる。

その加減が難しい。

「……………ねえ、響ちゃん」

「……………なんだい？」

「ねえ」が来たからお返事。

さつきから感じていた視線へ答えてあげるといつもの覇気はどこへやら、げっそりとして下条さんのにごった目が怖い。

「ねえ。そろそろ……………もうたくさんがんばったから休んでもいいかしら……………？」

「まだ始めて15分じゃないか。あと10分はがんばって。それでも学校の授業のたったの半分の時間だよ？」

抗議の内容はどうでもいいことだったから、さつと視線を手元の吹き出しに戻す僕。

「そんなあ……………ほんとうにまだそれだけ？ ひよつとしたらそのタイマー」

「壊れるはずないよね？ いいからさつきとやるんだ。じゃないと帰るよ？」



「うう……響ちゃんひどいの………」

「ひどくない」

かがりの勉強会という名の見張り役をしている僕は、ぼんやりと普段読まないジャンルの漫画を読みふけていた。

そこでは小学校高学年になった少女漫画の主人公の子が初めてブラジャーをつけるどきどきのシーンだった。

だから僕の無い胸のことばかり考えてたんだろな。

## 20話 下条かがり (1) 2/6

さて。

成人男性っていうのは法律的にも条例的にも世間的にも危険な存在だ。

しかも相手が女の子、さらには中学生とあつては正当な理由無しに近づいちゃいけないってことになっている。

そんな僕が……親戚とか親との知り合いとか家庭教師とかその他公的な理由無しに、他人でJ Cな下条さんの家にお邪魔するのは犯罪行為とされる事案に該当するもの。

例え僕が手を出すはずが無くって下条さんの方から来て欲しいってお願いされていても絶対に密室にふたりつきりって言うのはダメ。

何も無くたって「何かあつたでしょ」って言われてお縄に着くことになる。

理不尽だけど男って危険な存在だからしょうがないよね。

僕みたいに何もしないからこそ安全な存在ってレアだもん。

でも今の僕は幼女だから完璧に平気。

このときだけはこの体に感謝だな。

今は危険なことすることさえ物理的にできないんだから問題は一切に無いんだって

思うと僕の気が休まる。

なんなら僕の方が危険なまであるんだしって思えばもう気兼ねは無いんだ。

僕はなぜか偽乳っていう組織的詐欺に思いを馳せてからきちんと身だしなみを整えていつもどおりの手順でリュックに服を詰めて家を出て、すっかり慣れたトイレでの着替えを経てもういちどきちんと身だしなみを整えて……約束させられていた彼女と会うことになっていた。

……そこまでは普段通りだから良かったんだけど、その辺に居るかもしれない女子中学生……小学生……やっぱり中学生らしき格好に変装していた僕は、いつも通りに混みを苦勞して抜けた先の待ち合わせの場所で衝撃的なことを抜かされた。

目が点になるって言うのは多分ここ数年でなかったんじゃないかな。

「お待たせ響ちゃん！ あら、それも似合っているけど、この前の特別におしゃれなお洋服は」

「今日は買い物じゃなくて勉強するだけなんだからジャマなだけだろう……」

そう言うなりぷくつとほつぺたをその下のでつかいのみたいに膨らませる。

不満そうな年齢詐欺(高)さん。

でも今日は負けない自信がある。

「でも私、あれをてつきり着て来てくれると思ってわくわくして待っていたのよ?」

「そうか。嫌なら今日はお開きだね。もともと今回僕は乗り気じゃない」  
そうだ。

これまでとは違って今日は僕に拒否権があるんだ。

拒否権。

素晴らしい言葉。

「ま、待ってちようだい響ちゃん！ ごめんなさいわがまま言ったわ！ だからお願いっ！」

「……………おしゃべりじゃなくて、勉強を監督するだけ。それだけを分かってくれればいい」

ふふんと鼻息も荒くなるって言うものだ。

ああ……………すごい。

はつきりと拒絶の意を表すことができ嬉しい。

こんなに嬉しいことは滅多に無い。

「……………う？」

「響ちゃん？」

っっていうか……………僕がメロンさんにここまで強気で出たの……………もしかして初めて……………？

僕が？

年下のくるんさんに対して？

「……………」

「響ちゃん」

……いやだって普段なら人目もあるし腕力ではもちろん敵わないし唐突な低い声も怖いし……………」

「……………」

「また考えごとしているのねえ」

……今は僕が彼女の頼みを聞いているっていう上位にいるからだけども普段からこうだっていうわけじゃない。

元・成人の男のはずなのに僕はどうしてここまでこの子に対しては……………？

「……………」

「でもこういうときの響ちゃんって見続けても怒らないから好きよー？」

人は見た目がすべて。

見た目幼女、盛って小学生。

言い張って中学生な僕に逆らえる余地などないんだ。

ましてやこの子はガワだけならもう大人なんだししょうがないんだ。

うん、きつとそうだ。

そういうことにはしておこう。

そういうことにはしておかないと僕の何かが壊れちやいそうだし。

それにあれだ、泣く子には勝てないっていう感じだからいつものはしかたがないんだ、うん。

年上として年下にわざと負けてあげているって感じだし。

そうそう、僕はこの子の面倒を見ているんだ。

「……………」

「あら、良いことあったのかしら？」

にしてもこうして堂々と言い返せると嬉しいもの。

つい口元も緩みそうになる。

……いつもこうなるために、できるだけかがりの「お願い」っていうものを聞いてやろう。

その度に少しずつ、少しずつ時間をかけて立場を築いていく。

上下関係を確認するんだ。

そして僕が断ることを恐れるようにして、きちんと武力を用いて交渉というものできるようにならないといけない。

長期的なプランが必要だな。

帰ったら検討してみよう。

「かがり」

「あら、良いかしら？　じゃあこつちよ！　歩いて15分くらいなの。途中でお菓子とか買っていきましょ？　おいしいケーキ屋さんがあるのよっ」

「？」

くるんさんは今日もくるんさんだ。

勉強つてことでエラーを起こしているんだらうか。

「かがり、それだと繁華街から離れてしまうよ？」

普段と逆の方へ歩き出そうとしていたメロンさんを引き留める。

「あら？　そうよ？　だって私の家だもの？」

「ん？　なぜだ？」

「え？　だってお勉強でしょう？」

「ん？　だからいつもみたいにするんだらう？」

「え？　だってお勉強つていつも誰かのお家でしているもの。　そういうものでしょ

う？」

「ん？」

「え？」

「.....」

「？」

.....お互いのはてなを投げつけ続けてようやく分かってきた。

「.....かがり。 勉強会、いつものファミレスとかでするんじや.....」

「それは勉強会ではないって思うの」

何言ってるんだこの子。

「.....」

「あら？ もしかして響ちゃん」

いつも通りだと油断していたから確認を怠ったせい。

つまりは僕のせいで開催地は変更らしい。

彼女たち学生の常識とニートな僕の常識は違う。

女子学生と孤独なニート男子の生態は違うんだ。

.....最近そういうのがすつぽりと抜けてるなあ.....。

気づけば2日に1回は外で誰かと会ってるもんなあ.....。

「あ.....僕は他人の家が苦手なんだけど」

「そうなの？ でも勉強道具はぜんぶ置いて来てしまったわ？」



「くるん？」って擬音で平然と言つてのけるくるんさん。

「……取りに行つてくれたりは」

「今から？ でも……取りに帰つても往復で30分くらい掛かるしもつたいないじゃない。それに、せつかくがんばつてお掃除とかしたのよ？」

「お菓子も買つてあるのよ？」

いや、お掃除とかお菓子とかはどうでもいいんだけど……？

「……………」

でも困つた。

「……………」

「？」

……この子がそこまで考えて取返して手ぶらで来たとも思えないもんなあ……天然だもんなあこの子……。

「……はあ——……………」

「それならこつちよー！」

僕のため息イコール了承の合図。

最近はいつもこうだ。

もはや反論するのさえめんどくさいもんだから、勝手に握られた手を振りほどくのも

まためんどくさいもんだから……僕はなすがままにされる。

どうせ力じゃ敵わないんだ。

「響ちゃんを招待できるって思ったら嬉しくって、昨日の夜もなかなか……」

「そうか」

どうせどうでもいいことしか言っただろうから僕は思考を放棄しながら手を引かれつつ閑静な住宅街へと招かれることにした。

……まあ万が一にも間違いの起き得ない幼女な肉体だし、少なくとも外見的にはなんら問題はないはずだし？

気まずい思いもせずに済むんだし、彼女の家に親御さんがいたとしたって不審がられるどころかきつとかわいがられてしまうに違いないし問題ないだろう。

だつてくるんメロンさんの親御さんだしな。

女の子はお母さんに似るって言うし、この子の母親もでっかいこの子に違いない。

……この子でさえ歩くだけでゆっさゆっさ揺れるんだ、何カッパ行くんだらうな。

でもよく考えてみれば、バイトで学生に勉強を教えていたときにもこの子くらいの子の家の、それも自室とかで教えていたりしたからそこまで不自然なことじゃないのか？

勉強を教えるって謎の信頼があるよね。

良く知らない大の男を自分たちの娘の部屋に時間単位で滞在させて平気なわけ無い

のにね、普通なら。

でも現実って案外そういうものだし平気だな、きつと。

不本意だけど問題は何か一つない様子だった。



くるんさんの家は少し大きめだけど……まあどこにでもあるふつうの戸建てだった。

家の内装も彼女の部屋もよくある感じ。

あと親御さんはいなかったからちよつと拍子抜け。

「どうぞぞつー」

「……………」

ふだんの調子だからてつきり自室にはファンシーな人形が敷き詰められていたりピクピクしている壁紙だったりするんじゃないかって思い込んでいたんだけど、実際に入ってみるとちよつと小物が目立つほかは意外とシンプルな感じだった。

ものすごく意外。

どうやらこの子のメルヘンチックな雰囲気の原因は幸せそうな頭の中から来ているらしい。

「……今日は勉強だろう」

「そのための準備よ？」

着いて早々にいそいそとジュースやお菓子を広げておもてなししようとしてきたから勢いよく断る。

口の中がじやりじやりするからいつもの通りに僕のぶんのケーキも食べてもらう。

僕はちっこいからフォークで一切れ。

それで充分なんだ。

「……で、でも、まずはちよつとお話ししましょう？」

「ケーキを2個も食べたんだ、糖分は充分だな。さあ、宿題を出すんだ」

気を抜くとすぐこれだもんな。

どれだけおしゃべりしたい存在なんだろう。

でも「嫌なら帰る」ってのはつきりと強気で勝ち誇って言えるのはすごく……すごく心強い。

至高のひとつときだ。

「……で、でも、なにをすればいいのか分からないわ？」

何が「でも」なのか分からない。

そのために僕を呼んだんでしょ？

「それならまずは送ってもらったプリントの写真。あとは要らない紙」

「……響ちゃんが冷たいわ——……」

おしやべりに持つていこうとしてもそうはいかない。

「……………」

「響ちゃんの字つて男の子みたいねえ」

さらさらと宿題を一覧に分かりやすく書き直してやる。

さらにはおおよっぱだけ掛かりそうな目安も難易度も書き出してやる。

「こういうのには慣れてるんだ。」

「ほあ——……」

「……口と目を開けっ放しにして思考が止まっているらしいくるんさんがかわいそうだから、せめて監督くらいはしてあげよう……」

「……ほら、今日の予定表と時刻表も作ったから」

「へ？」

一時停止していた彼女にペしペしお手製のそれを叩いて見せてあげて良い感じのところに立て掛けておく。

「この通りにやってみようか」

「こうすれば何か言いだしても黙ってこれを指させばいいって思いついたんだ。」

「……響ちゃんってすごいわねえ」

「君の方がそうだと思うけどね」

そのぼわぼわ感はきつと誰にも真似できないって思うよ。

◇

そこからは楽な時間だ。

絶対にすぐに飽きてくるだろう確信があるから細かく科目とかを分けてあつて。

持って来たタイマーで時間を区切ってあげて。

……部屋の真ん中に机を出して勉強し出そうとした彼女を諫めてあげて、本来の机に向かわせてやって。

そうして僕は部屋の反対側に良い感じのクッションを引きずっていつて座る。

完璧だな。

この子との距離感はこれで適切なんだ。

「これでは寂しいわー」

不服らしいくるんさん。

「勉強なんだから満ち足りていては駄目だろう……」

「むー！」

イヤイヤ期に入ろうとしていたかがりも僕の断固とした姿勢に屈したのか、少しずつ口数が少なくなっていく。

そうは言ってもくるんさんだ。

とどこどこ詰まったりお腹がぐうって鳴ったりして集中力が切れるたびにさつきみたいにだだをこねてきたりする。

でも聞き分けは良いからおおむねきちんとやっている様子だ。

良きかな良きかな。

これで僕も静かに本が読める。

……本棚にいつぱいの漫画から引つ張り出した少女漫画でも暇つぶしにはなるしな。

「……響ちゃん、またここも分からないの」

「む。……………これはこのページの……………」

中学の範囲の勉強はつい最近終わったばかりだから僕の敵じゃないし、僕がこの子に勝っているのは精神年齢と知識と経験だけだからここぞとばかりに年上ぶってみる。

「響ちゃんの教え方って優しいし分かりやすいわー」

「分からないところがあつたら呼んでくれ。それ以外では呼ばないでくれ」

「響ちゃんって結構冷たいわよねえ……………」

そんなことはない。

でも……ふむ。

やつぱりこの子、別に頭は悪くないじゃないか。

むしろ良い方だっと思うし、分からないところだっただけか忘れてるかみただから一回言えば分かる。

なのにどうしてこの子は……本当にどうして普段から……。

「はあ——……」

くるんさんのくるんくるん……何でも美容院でパーマとやらをかけているらしいその髪の毛を見ながら思う。

この子は多分、単純に経験が足りていないだけなんだろうなって。

中学生から急に「自分で期限とか決めてがんばってね？」っていう教育システムにはまった典型例。

放っておいても、そのうちできるようになるんじゃないかなって思うけど……せつかく頼まれたんだしな、知り合いの子供の面倒を見ると思って付き合っただろう。

それに思ってたよりも楽しめたり暇つぶしもあるし。

取りかかる範囲とか順番とかかける時間を分かりやすく書いてあげたからか、ぐずることはあるにしてもなんだかんだもくもくと進めているかがり。



まあ苦手な科目だと露骨に集中力が切れるわ口を閉じようとしなわなのはどうしようもないけども。

「.....」

「.....」

かりかりかちかち。

下条さんが存在する空間にしては異例な沈黙のほうが長いっていう事態は僕にとつてもものすごく居心地がよくってしあわせ。

いつもこんなだったらいいのになあ.....

無理だろうなあ、くるんさんだもんなあ.....

「.....」

「.....」

にしてもこの子の本棚の漫画がすごいことになっている。

こういうところだけは几帳面なのか、それとも親御さんがしようがなくしているのかは分からないけどもタイトルごとにきちんと整頓されているしどれもほとんど新品。

案外に綺麗な読み方をするらしい。

僕はそういう人が好き。

僕自身が本屋さんで折れたり引つかいた跡がない綺麗な本を買うのが好きだし、それ

をほとんどそのままの状態で読み終えてそのままの状態で本棚に並べて行つてたまに読み返すのが好きだから。

それに、漫画つて言うのは……長く続いているのは世代を超える。

だから懐かしいと思つていたタイトルが置いてあるもんだから「懐かしいな」つて思つて読み始めたりすると、昔読んだときには読み飛ばしたり分からないでいたところまでに気がついたりして意外と楽しいものがあるつて気づいた。

今度漫画がたくさん置いてある温泉とかに行つて1日読みふけて……そうか、僕幼女だから駄目だったか。

早く戻らないかなあ、僕の体。

あ、少女漫画はなんか少女の域を超えてどろどろしてきてたからお帰り願つた。女性向けの本つてなんであんなにどろどろしてるんだらうね。

◇

「びびびびび」

「っ」

「！」

毛穴がみんなぶわつとなる。

タイムマーの音でびっくりした……よく考えたら僕がセットしたのにすっかり忘れていたから心臓に悪い。

こういうの嫌い。

もう嫌だ。

「おしまいね!」

「ただの休憩だよ」

試験期間が終わった瞬間みたいな表情だから釘を刺しておこう。

「あ——……疲れたわっ もうこんなにかんばった……、えっ……まだたったの2

時間……?」

「休憩を除いたら90分だな。けれど君にしては随分かんばっているね」

ものすごい重労働したような態度だったくるんさんが固まる。

そこそこ早い朝に待ち合わせして寄り道しないで来てすぐに始めたんだからまだお昼にもなっていないのにな。

でも嫌々する勉強ってそういうものだよな。

君は学生なんだからかんばって?

僕は学生終わったから好きにしてるね。

社会って言うのはそういうものなんだ。

「……………まだそんなに……………？　まだお昼にも……………？　……………もう丸一日勉強したみたい  
な感じよ……………」

ぼふんつとベッドに飛び込んだ彼女はさっきまでの僕みたいにだるつとしている。

「……………」

……………その衝撃で上がった風で、彼女の脚が。

スカートの裾が。

ふとももが。

太いところまで。

……………白いのまで見えてるし……………平気なの、この子……………？

平気だよね、知ってた。

というか白なのか、ぱんつ。

普段は僕にピンク色とか黒とか勧めてくるクセにさ。

でも知人の年下の無警戒のふとももとそのあいだにある布っていう……………目と心の毒  
が見えた罪悪感が半端じゃない。

僕は良識的過ぎるんだ。

……………僕が背の低い女の子に見えるから同性だっていう安心感からか、かがりもゆりか

もとにかく無防備になることが多い気がする。

僕に合わせてかかんできたり僕に触ろうとしてきたりすると自然な感じで胸元が見えるし、歩いていて話しかけられて上の方を向くと袖からわきの下が見えちゃうこともある。

座るときにはふわつとした瞬間にふとももの奥が今みたいに見えることもあるし。

なんならスカート慣れしていない僕でさえぱんつは見えないようにって膝をくつつけるようになっていてるっていうのに……ふたりとも開いちゃってチラって見えてるときがあるしな。

ほんものの女の子がはしたない。

これがJCっていうもののスタンダードなんだろうか？

「……………」

共学のはずだったよな、確か。

「……………」

……早いうちに指摘しておかないといろいろとまずいかも。

ゆりかならまだしもこのかがりっていう子は。

だつてほら……この子の体はこの子の精神に反して大人びてるから。

「…………お疲れ。どこまで進んだ？」

「響ちゃんのスケジュール通りよっ！ がんばったわっ!!」

お返事は元気だけでも完全に脱力して開いた脚を閉じようとしなくるんさん。

もー、はしたない……。

普段からこうだったら大変だな。

多分こうなんだろうけど。

クラスの男子諸君は大丈夫なんだろうか？

多分大丈夫じゃないんだろうけど。

「……………かがり」

「どうしたの？ 休憩はまだ」

「かがり。……………脚を開いてはしたないぞ」

「あら。女の子同士なんだしいいじゃない？」

「いやまあ確かに……………ん？」

「響ちゃんが気にしすぎなのよ。ふだんの動きが男の子っぽいとか大胆なところ

あるくせに私には厳しいんだからっ」

なんかぶんすか始めたから追求は止めておこう。

「……………」

……女の子同士って言われて違和感を覚えるのに一瞬のラグがあったのはまずい気がする。

でもこの子が言うつてことは僕も気が抜けると見えちゃったりしてるんだろう。

そういう自覚もそう言えばあるような気もするし……気をつけよう。

男は悲しい存在だから白い布で理性を破壊されるからな。

それがたとえ幼い少女のものでも。

男つて言うのはそういうものだ。

「あら。その漫画……響ちゃんも好きなの?」

「うん? ああ、うん。読ませて貰っているよ」

君がひいひい言ってるあいだに満喫してたよ?

「おもしろいわよね! 私ももう何回も読み直しちゃったわ! いろんな要素があつていいわよね! 技のネーミングだとか主人公とライバルの因縁とかちよつと大変なことになってる恋模様とかっ!」

急にエンジンかかってきたくるんさんがくるんつと飛び起きて駆け寄ってくる。

動きが素早い。

目が追いつかない。

「響ちゃんは響ちゃんは?!」

「僕はどちらかという話の展開に興味があるからそこまでは」「  
「そうなの！ 人によつて読み方つて違うわよね！」

さつきまでは僕みたいにくでーつてしていたのに急に元気になったか  
つて思つたらよつんばいでにじり寄つて来ているメロンさんがいる。

「……………」

重力の力を借りるとそこまで形が変わるのか……でかいな。

じゃなくつて……近くない？

こつちへ来ないで？

「かがり」

嫌な予感かして懸命に後ずさるけどすぐ後ろは本棚。

「かがり」

逃げられない。

そう思つた数秒後には——僕の上にはかがりの肉付きのいい体の重さが乗つ  
かつていた。

「むぐ」

重い。

柔らかい。



……温かい。

「……………」  
……………最近慣れてきた、女の子のいい匂い。  
……………嗅ぎ慣れたかがりの匂いが濃くなった。

## 20話 下条かがり (1) 3 / 6

重い。

暗い。

甘い匂い。

目の前の重圧感だ。

僕は下敷き。

背も高くつてばいんばいんで大人でも通用する体に乗ってる中学生らしい顔つきでばいんばいんがせり出している。

それに対するは小学校低学年な肉体の僕。

差は歴然としている。

「……………」

僕はびっくりすると猫みたいに目をまん丸にして固まるらしい。

そういう僕自身が知覚できる程度には止まっていた時間。

天井の光が下条さんの髪の毛だけを照らしていて彼女の顔は……光っている目以外

は暗くなっている。

蛍光灯がまぶしい。

……あー、女の子が「電気は消して……」って言うのの真相が分かった気がする。

あくまで資料による情報だけでも。

くつろいだ姿勢だったところにすすすと来られたから猫どころかライオンに近づかれてしまったていたネズミのような心地な僕。

重力が働いている地上において上下って言うのは致命的なアドバンテージとデイスアドバンテージ。

それは虫けらから鳥から動物から人間様から変わらない。

つまり僕はもうおしまいってことだ。

「響ちゃんはやっぱり変わってるわね」

そう？

君には負けるよ？

「複雑になってきている人間関係がおもしろいってみんな言うのに」

「？」

……ああ、さっきの漫画の話？

相変わらずのマイペースっぷりだね。

この体勢になって言う台詞じゃないでしょって思うくらいに場違いなことを抜かすくるんさん。

「あー！ ならこつちの恋愛ものとかはどうかしら？ 響ちゃんがおもしろいって思うのかどうか前から気になっていたのよ！」

うん、漫画に夢中でこの状況をしでかしたって思っちゃいない。

この子大丈夫……？

危機感なさすぎじゃない……？

「むぐ」

「あらごめんなさい」

……自分の体重を僕に乗っけてるって自覚してるじゃん。

僕の両方の肩に重力が加わって視界が服という布で遮られる。

というか2個のお胸がちょうど両目を包むように乗っかってきているのって、これぜったいにわざと……なわけじゃないよなこの子だし。

うん、絶対だ。

そういう積み重ねた信頼がある。

大丈夫、この子が何かを意図的にするって言うのは不可能だ。

そういう意味での安心感が凄まじい。

でもおっぱいがあったかくて重い。

「かがり」

ようやく声が出始めた。

「僕を台代わりにしないでくれ」

「だってちようどいいところにいるんですもの」

何が「だって」なんだろう……。

「響ちゃんの肩と頭で支えてもらったらちようどいい場所にあるのよ、取ろうとしての」

彼女の思考パターンには何らおかしくない反論だけど世間一般的にはおかしい反論。

本当に良くも悪くも距離感が無いんだなあこの子……。

と、まぶたからこめかみに感じていた弾力とぬくもりが離れていく感覚。

目を開けてみるとものすごく近いところに彼女の両目があってもう1回びっくり。

「……………」

「……………」

くるんヘアがこしよばゆい。

彼女の前髪が僕のおでこをくすぐる程度の距離感。

いやいや近いでしょ……これはさすがに女の子同士の距離感……なのかもしれない。最近そう思うようになって来たけど……いやいややっぱり近すぎるよね？

「……………」

なんで君が不思議そうな顔してるのかな。

あ、けど、こうして近すぎる距離で見ると、たぶん15センチくらいだと顔の印象はなんだか普段と少し違うように感じる。

なんて言うか、なんだか普段の幸せそうもといふんわかしているのはちよつと違うような。

目元が厳しいというかなんというか野性みを感じるって言うか。

気のせいだろうか。

気のせいだろうな。

「それによ？ それに響ちゃんって普段スキンシップしようとしてもすぐ逃げちゃうし。まるで人に懐かない猫さんみたい」

僕は今の意識外からのにじり寄り方とか飛びかかり方の方がよっぽど猫っぽいと思うけど。

猫というよりはネコ科のナニカだけど。

ついでに僕は袋のネズミだ。

「お手々だつて、最近は少しだけ前より長く繋いでくれるようになってきたけど、でもやっぱりすぐに離されちゃうし。私さみしいわ!」

なんでこの子つてここまで人と近いんだろうな。

あー、そう言えば母さんも幼い僕が恥ずかしいって思う程度にはくつついて来てた気がする。

……つまり、これが母性？

いや違うな。

この子に限つてそれだけはない。

「僕はその子の苦手だつて」

「だけでもうちよつとくらい良いでしょう？ これくらいは友だちとして普通よ?」

そうなの？

サンプルがこの子とゆりかしかいないから分からないけどもしそうなら慣れないといけなくなる。

J Cはあと2人知り合いになつちやつたけどあの子たちとは初対面のまんまだし今井さんたちは大人だから関係ないしな。

……僕たちの位置関係に変更は無い。

僕が違和感を覚えさせないように溶け込もうとしている対象、その女の子のひとりの

ちよつと……いや、かなり……だいぶアレな子なこの子に「女の子としての普通」について口にされてしまうと、ぐうとも言えないんだ。

女の子同士の距離感って本当はどれくらいなんだろうね。

現実世界じゃこの子とゆりかしか知らないから分からない。

「だからさつきは珍しく響ちゃんが無防備な感じになっていて警戒、いつもみたいにしていないみたいだったからつい近づいてしまったのよ」

良く分からない論理で弁論するくるんさん。

「ね？ 近づくと引つかいてくる猫さんだって落ちついているときならおとなしく撫でられてくれるのよ」

つまり君は猫を撫でようとすると逃げられるって自覚してるんだね。

「僕は猫じゃないよ？」

「あら、似合っているわよ？ 猫さんな響ちゃん」

「そういうことじゃない」

この微妙どころじゃなく歯車がずれてる感じ。

「いいじゃない！ 似合っているのだし。眠そうな猫さんってかわいいわー」

うーん、その論理の飛躍が良く分からない。

……まあ髪の毛とか目の色とか珍しいな。



ペルシャ猫みたいな感じがしなくもないっていうのは初めの頃この姿を見て思わなくもなかったけど……でも。

やわらかかった。

あつたかかった。

………おっぱいというふたつの物質は想像以上。

普段抱きつかれるとその重量を、クーパー靱帯を守って形を維持するための構造上硬度があつて痛いなあつて思つてた案外に頑丈なブラジャーとその下の脂肪のかたまり。

今みたいにゆつくりくつつけられるとその弾力性が布越しに分かる。

……人生初めての嬉しいはずの感覚が………よりもよつて10歳も下の子のものなんてな。

僕の胸に乗ってるのはおっぱいにはまだなれていない骨と皮なあばらだからノーカウントだし、あまり嬉しくない初体験。

それに顔に当てられても嬉しくない。

ばふばふで喜ぶのつて本当なの………?

男つて馬鹿じゃないの………?

性欲つて悲しいね。

その無い僕は気まずいだけだ。

「……」  
「……」  
この子はなんとも思っていないみたいだけど僕としてはとても気まずいだけ。

時計の針の音。

エアコンの音。

外で車が走る音。

どこかで子供が叫んでいる声。

静かな空間って意外にうるさいよね。

ふたりしてくっついていてこの変な状況。

よつんばいになっていて、くるんが下がっていてメロンもまた重力に負けていて、しなつた腰の先にあるらしいおしりがそびえている。

ネコ科が狩りをするときの姿そのものが後光じゃなくて電灯に照らされている。

あいかわらずに珍しく目線の高さが合っている下条さんの目が近い。

瞳孔が開いている瞳。

虹彩までがはつきりと。

……ここまで近くなったことなかったけど目元は意外とすつきりとしている気がする。

お、この感じ、眉とかちよつと変えた？

「……………」

「？」

……………なんでこんなことに気がついてしまうんだ、僕は…………。

このあいだの雑誌に眉の整え方とかあったからか。

女子力の向上に懸念を覚え始める。

男子力的なものが低下してきてる気がするんだ。

「……………だから言っているだろう」

早くどいて？

重い。

「僕はそういうのが……………近すぎる距離感も肌の触れ合いも苦手なんだよ」

「響ちゃん……………」

猫でも人懐っこくなかったり苦手な人相手だとふしやーってなるでしょ？

「……………それは病院でずーっとひとりだったから……………でしょ？」

くるん？ってなる。

くるん？じゃないよ？

たまたまなんだろうけど前髪とか横髪のかくるんくるんが彼女の意志に沿って動いて

いる気がする。

それだけ近いんだ。

と思っただらもつと、ずずいつとさらに近くなつて来てさつき食べていたケーキの甘い匂いがぶわつとくる。

……唇、やけにぶるんとしているな。

僕みたいにめんどくさくてリップ塗らないとかないんだろうし、努力の結果だ。

そんなことを思うくらいに近い。

唇が切れたりしたりかさぶたみたいになつたりしたりしたら女の子失格。

いつしか説かれた下条さんの言葉が思い出される。

……………柔らかそう。

ぶるぶるしてる。

僕みたいに鶏がらじゃなくなつてしつかりと女の子らしい女の子な彼女の唇はぷつきりしていてうらやましい限り。

でも、さらなる脅威を感じて後ずさろうとするも背中はずツシヨンにぎゅうぎゅう押しされてこれ以上は下がれない。

というか、のしかからないで？

体重差考えて？

それくらいのも思考力は……あるって信じたい。

いろいろと圧がすごい。

いろいろと。

「かがり。……まだ根に持っているのか、それ」

「だって響ちゃん。…………ゆりかちゃんには」

どうやらゆりかに説明していたぎりぎり嘘じゃない説明を自分が聞いてなかったのが気に入らない様子で声が低くなる。

いきなりだからこわいって。

どうして女の子ってそうなの？

「……………」

……嫉妬には気をつけよう。

女の子同士の間関係って暗黙のなにかでどろどろしているらしいしな。

完全に平等じゃないところなるらしい。

ハーレムって大変そう。

僕はそういうのいいや。

女の子が好きで好きでしようがない人だけが堪能すれば良い世界なんだ。

情報の伝達未遂は社会人でも致命傷らしいし、僕の小さい肝にもしつかりと留めてお

いて……とか変な方向に思考が飛んだりする程度の時間が経つ。

「あの子」

ぼそりと話し出すけど、それはゼロ距離での……まるで恋人同士の会話のようで。

「響ちゃんの。他の。仲の良いお友だち。関澤さん。ゆりかちゃん」

こわい。

「私とおなじような時間に、おんなじように仲良くしていたゆりかちゃん。『小さいもの同士』って……かわいい子よね？」

「かわいい」に含まれてるニュアンスが普段とはちがう感じがしてなんかこわい。

こわい。

誰か助けて。

「あの子には教えていたのに。響ちゃんの病気のこと。私には……私にはひとこと

も言わなかったじゃない」

だってその設定あのととき考えたんだもんなんて言える雰囲気じゃない。

「私、ちよつとだけど嫉妬しちゃったわ」

着せ替えのお人形さんを友だちに取り入れた的なやつ？

「……かがり。そもそも君と知り合ったのだったの数ヶ月前だろう。たいして

変わらないよ。言う機会もなかったし」

「言うつもりもなかったけど」っていうのはすんでのところでお口の中に収納。

だって深く突つ込まれるとぼろがぼろっと出ちやいそうだし。

この子だったら入院についてとか無限に聞いてきそうだし。

入院生活のことなんてドラマとかでしか知らないことだしなあ……さらなる嘘はご遠慮したいところ。

これ以上設定が積み重なっていくと僕の頭が追いつかないんだ。

とりあえず重い。

あつたかいつて言うか熱い。

甘い感じの匂いで頭とお腹が変になりそう。

なんでお腹なのは良く分からないけど……お腹からふわふわしてくるんだ。

なんでだろうね。

「……………」

でもなんだかこの変な感覚を深く知ったら行けなさそうって思った僕は思い切つて体を横に移動して……くしゃみをされたらごつつんしそうなどころまで来ていた彼女から距離を取ることに成功する。

けど後ろをちらっと見てみたらあんまりスペースはなくて本棚と壁のすき間に入っちゃってるって分かった。

………退路、自分で完全に断ち切った………？

ここからさらに逃げようとしたら、なんとか言いくるめる以外にはもう頭突きくらいしかなくなつてしまった僕。

でも頭突きつて痛そうだからやだな。

「響ちゃん。私はね？」

ローテンションのかがりはウルトラレアだ。

「もう何回も……ううん、もう10回は超えているわよね？　それだけ一緒にお出かけをしておはなしして」

「連れ出した」の言い間違いだよね？

「とつくに……お着替えを手伝ってあげたあのときからずーっと、私からは響ちゃんのことお友だちだと思つていたのに。　響ちゃんからはお友だちつて見てくれていなかったのね……？」

不思議な論理で怒っているらしいかがり。

あれは君がしたいからしていたんだよね？

僕は望んじやいなかったよ？

そんな反論をしようと思つていたら僕の口が動く前にさらにじりつと迫られる。

こわい。



猫は猫でもサバンナにいるネコ科なくなるんさんだ。

「む……………」

……ほつぺたを膨らませて怒ってるアピールをしているらしい。

そういうところが子供っぽいんだぞ？

「……………君の友だち認定は、僕にはちよつと早すぎる。世の中には僕みたいにじつくりと距離を縮めたいタイプの人間もいるんだよ。僕は君みたいに早く仲良くなりたい子相手だとしても引いてもしまうんだ。分かってくれ」

「それは、……………分かってはいるのだけど」

分かってるの？

ほんとう……………？

「あと、かがり」

今度は僕のほうからじつと見返してみる。

……お、こんなことは滅多にないから猫だまし食らったみたいなお表情になってる。

ちよつと気の抜けた顔を見ることができてけっこう嬉しい。

「……………なにかしら」

「重いぞ。もうちよつと甘いものは控えたほうがいいよ」

「ひどいわ!？」

いや、だつて本当に重いし。

肩こりそう。

いい匂いが離れて行く。

僕のようなエセ幼女じゃなくつて本物の女の子なかがりは女の子らしい匂いを放っている。

なんというか健康的な匂い。

どう表現すればいいのかは分からないけど、男とは違う匂い。

シャンプーとお菓子と甘味と紅茶と肌の、………とにかく甘い匂い。

それがようやく離れてくれてくらくらした頭がすつきりしてきた。

でもなんか顔真っ赤にして怒ってるっぽいから、なだめないと。

「君が特別に太っているというわけじゃないよ?」

「……………」

「けど体格差を考えてくれ。僕は特別に小さくて君は大きき……成長が早いんだ。体

重だつて身長に比例しているんだから太っているとかじゃなくて」

「……私は太つてもいないし重くもないわ!! きちんと適正体重のぎりぎりがんばっているんだから!!」

適正体重からぎりぎりはみ出しちゃっていると見た。

けど実際には小太りなくらいがちょうど良いらしいからそこまで気にしなくても良いって思うよ？

中学生だから学校で体も動かしてるだろうし、別におへその横もぷんぷんとしてないから安心して良いよ。

「ほら響ちゃん！ ねえ響ちゃん!! もういつかい乗ってあげるからしつかりと確認してちょうだい!! 私は太っていないから重くはないの!!」

その理屈はおかしくない……？

「ま、まて………わぷ」

今度は思いつ切りのしかかられた。

どうやら体重の話は地雷だったらしい。

女性に体重は禁句だったということを忘れていた。

この子も一応は女性だもんなあ……分類上は。

メロンさんに飛びかかれるようにして押し倒されて上からぎゅーっと抱きしめられることで、僕はそのメロンも体の柔らかさも全身で、息ができなくなるまでずーっと味わわされることになった。

目の前が砂嵐になって行く。

酸欠。

……口は災いの元。

そう思った僕は真つ暗になった。

◇

もしかもしやもしやと買ったばかりのお菓子を平らげつつある下条さんはすつかり元通り。

こうして餌を与えておけばおとなしくなるネコ科のちっちゃいやつにしか見えなくなっただけが。

こうして静かにしてくるなら毎日でもやぶさかでは……やっぱりめんどくさいからイヤだな。

「……それでね？ このへんのはクラスの男の子にでも人気があるらしいの。恋愛要素ばかりじゃないし、これなら響ちゃんも楽しめそうだから一度読んでみたらどうかしら」

すつかりご機嫌で本棚を眺めるくるんさん。

「タイトルは耳にした覚えがあるな」

たしかアニメになっていたから表紙の子たちの特徴的な顔と髪の毛だけには見覚え

がある漫画に思いを馳せる。

この子、本当に漫画が好きだな。

でもよっぽどにこれを薦めたいんだって察知した僕は先手を打つ。

それくらいはできるようになってきた。

そうじゃないとまたのしかかられるもんな。

首絞められた鳥みたいな声出ちやうし。

「食わず嫌いはもつたいたいなし、君がそこまで言うのなら読んでみようか。これを終えただけだ」

でも読みかけを途中で放り投げるのが大嫌いだから後回し。

「いいけれど……でもそれはあと20巻くらいあるのよ。今響ちゃんが読んでいるのはまだまだ中盤よ?」

長寿漫画って長いよね。

暇つぶしに最適だ。

「ここで読むだけだと何日も掛かる量よ? 帰りに残りの巻、貸してもいいのよ?」

「持つて帰ると重い。僕の腕力は知っているだろう?」

「お迎えの人に車で来てもらえば良いじゃない」

「……こんなことでいちいち呼びたくはないよ」

僕にはセバスチャンもじいやもないんだ。

あと、綺麗に読んてるから遠慮しちゃう。

持ち歩くとカバーの端っこ折ったりしちゃうしちゃう……。

「それにどうせ。また何回かはこうして勉強をと言うつもりなんだろう？ 近いうちに読み切れるよ」

だってこの子、絶対ひとりじゃやらないでしょ。

そう思ったら来ざるを得なくなる。

「よかったわー。どうやってお願いしようかって思っていたのよ！」

どうせストリートに言うつもりだったんでしょ……それくらいは分かるよ……僕がどれだけ苦労してるって思ってるの……思ったくないよねえ……。

夏休みの宿題って言う中学2年生にとっては嫌なことこの上ないものを片づける機会……って言うよりは単純に彼女にとつての友だちな僕と自室で一緒に居られるのが楽しいんだろう。

そんな彼女はとつても嬉しそうだった。

ああ、子守って大変。

僕は独り身で良いや。

## 20話 下条かがり(1) 4/6

さつきネコ科のでつかいやつみたいにして人に乗っかってきたのをもう忘れたくるんさんは元気だ。

無敵なんだ。

「ねえ響ちゃん!」

「かがり、音量を落としてくれ。僕はうるさいのが苦手なんだって何回か言ったよ」

いちいち声がおっきい。

2人しか居ない空間でどうしてそこまでポリウム出す必要があるの？

「あらごめんなさい、つい」

しゅんとなるくるん。

自覚はあるらしい……っていうか何回かクレームつけたもんな。

でもそのたびに繰り返すんだ、きつと学校でも先生にたしなめられていること間違いないだな。

「ところで響ちゃん」

適正音量になっているのは偉い。

でもそろそろデフォルトの音量を覚えてね？

「ここのところ聞くのを忘れていたのだけど、響ちゃんには今のところ気になっている人も好きな人もいないのよね？ 初恋もまだだったわよね？ 私とお揃いで」

「そうだな。同じ話題を唐突に振ってくるのもいつものことだけでも回答は変わらないよ。 出会いなんか無い生活だから」

まーた始まったって思っついていい加減な返事になる。

ちよつとだけ最近ちよくちよく出てきた「分かるー」な感じに浸っていたら、まったくこれっぽっちも「分からない……」なことが出てきたんだもん。

それに対していつも通りに不服そうなくなるん。

……ほんとうに好きだなあ、この話題。

何回も……いやもう10回以上もおんなじこと聞いてくるんだもんこの子。

毎回毎回よくもまあ飽きないものだ。

その歳でボケかかって思ったけどそうじゃなくって聞かすにはいられない性質のためらしい。

「今まで家と病院の往復しかしていなかったんだし……そもそもがそういう状況じゃなかったんだ。 まともな生活じゃない。 今だっつてそう変わらない。 前から言っているだろう？」



ニートは世間一般には理解されない、まともじゃない存在なんだ。  
孤高の存在なんだ。

「それに……僕の家のこともある。さらに言えば……いかげんに分かってほしいんだけど、かがり。僕は恋愛には……少なくとも今はまだ興味はないんだよ」

これだけ強調してもどうせ素通りされるに決まっているのが悲しい。

また次に会ったときにおんなじようにして聞いてくるんだろう。

君は親戚のおばちゃんか何かか？

そろそろ納得して欲しいけど無理だろうなあ……。

だから特段感情を込める必要もないし淡々と説明だけしておいた。

何十回か伝えていればそのうちいつかは分かってくれるだろうって願いを込めて。

まあダメかも知れどそこはスイッチとコイバナで生きている女子っていう生き物だ  
と、思つてとつくに諦めている。

男と女なんて永遠にわかりあえない生きもの同士だからな。

でなければ物語の定番のテーマになどなりはしない。

僕がこのくるんさんとおんなじ生き方をするなんて絶対ないもんなあ……。

まあ……僕のほうにも少しは問題はあある。

欠陥つて言つても良いかもね。

物心ついてからでも20年以上生きてきたはずなのに恋っていうものを感じたこと  
すらないんだもん。

異性にときめいたことがないんだから相当だ。

この歳にして枯れているって言っても良い。

普通は……常人なら小学生、遅くても中学生までにそうなるものらしいけど僕にはな  
かった初恋。

せめてそれくらいは済ませておけばその感情と感覚くらいならこの子と共感できた  
はずだけど……元の肉体的にも今の肉体的にも、そういうのを感じられるかすらも疑問  
なところ。

今後そんなものを実感することがあるのかどうかさえ怪しいもの。

だってニートって言う孤独な生活だもん。

人との関わりが……深くてスーパージョのレズの人なんだから押し付けて図るべし。

だいたいこの子が求めるそんなもののは大半は「恋をしたい」っていう錯覚と性欲との  
複合物だろう？

「恋に恋する」って言う言葉があるくらいだからみんなも分かってるんだ。

手近な誰かでその気持ちを味わってみてあわよくば嬉し恥ずかしなひとときを過ご  
したいんだ。

思春期だもんね。

そういうものだよね。

僕は良く分からないけども。

僕の人生経験はかがりのような子供とはさほど……いやいくらかは上なはず……たぶん……と変わらない。

もしかしたら、万が一があつたら……今後にそういう感情を覚えることが無くはないのかも無いけど。

「……………」

「今回も長考ね？ 響ちゃん」

けど今はそもそもが女の子の体だし、ましてや少女だし。

そういうのを体験するとしてもとりあえず魔法さんの気が向いて男に戻れてからってことになる。

女の子が好きなのの子っていうのも今の風潮的にいなくも無いとは思うけど、今はそれ以前の少女だしなあ。

恋なんて10年早い。

物理的な課題だ。

何かとんでもないことが起きて運命がねじ曲がって、僕も好きで相手からも好きって

言う関係ができる奇跡が起きたとしても……今のままじゃ精神的にも肉体的にも年齢差がとつてもないことになる。

それはまずいし絶対に長続きしない。

やっぱりそんな奇跡は起きないだろうな。

まあ身分がないんだし端から縁のないことではある。

どうでもいいか。

「……………」

「おでこにシワが寄ってるわ？　可愛いのもつたないわあ……」

もし、間違つて。

僕に何かのエラーが発生して……女の子っていう性別の肉体で、本来の僕なら生理的にムリなはずの男相手にそんな感情を覚えたりしたら。

……………それを忘れて本気で引きこもるしかない。

またイヤなことを思いつくどうしようもなくぼんこつな僕の脳みそ。

全ての星が1列に重なったとかでそんなことがあつたら山にでも籠もるしかない。

髪でも切つて慎ましく永遠に……あ、切れないんだつた。

ここでまたしても魔法さんの出番だ。

「……………はあ……………」

「毎日が大変なのね。 分かるわあ……」

なにか悲しくて男なんかについて思うとため息も出るもの。

絶対にありえないって断言したいところだけど……今の僕は魔法にかかっていてさらに言えば肉体的な性別は女の子。

色恋は社会的なプレッシャーとか個人的な嗜好もあるけど何よりも肉体の性ホルモンによるものって知識はある。

ひよつとしたら成長とともに出てくるはずの女性ホルモンのせいで僕が男を好きになる……そんなことを考えるとお酒を呑みたくて手が震えて来る気がする。

いけないループに入りつつある。

切り替えよう。

アイデンティティの危機だ。

男という自己同一性の危機。

僕は真剣なんだ。

「響ちゃんっておもしろいわよねえ」

「……………」

くるさんがなんか抜かしてる。

いらつて来たから言い返してみる。

「そう言うかがりはどうなんだ？」

「？」

「いつも僕にそんなことを聞いてくるけど、君自身にとつて誰がかっこいいだとか気になつてるとか好きだとか、そういう話は話してくれたことがないと思うけど？　こういうのは互いに言い合うものだって、そこにあつた少女漫画にもあつただらう？」

「あ、わ、私？　……………えつと、私は。ええつと、その。」

……………

む？

……………なんか予想外に考え込んだ……………不思議だ。

何か悪いもん食べたのかなこの子。

けど今まで何となく何でかなくて何か疑問に思つてたんだ。

恋愛脳なこの子だったら絶対にするだらう、学校とかの身近にいるこの子自身の好みの男子の話題とか耳にした覚えがないって。

最初の頃はクラスや学年のかわつこいい男子について話してくるんじゃないかって身構えていたのにまったくその気配もない。

中高生だったらたとえ付き合つたりしなくても気になる人のひとりやふたりはいるだらうに。

まあのろけ話とか聞かされるのは今以上に無為な時間になるから勘弁願いたいけども。

なにが悲しくて中学生の恋愛事情を聞かされなきゃならないんだ。

でも、不思議でしょうがなかった彼女の恋愛模様。

好きな人が居るのならその相手の話題で時間を稼げるし、なにかしらのアドバイスができたとしたら恩も売れるしで……僕にとつては良いことしかない気がする。

のろけはやだけど適度に建設的なら大歓迎。

ぜひともその相手のことを聞き出したいところだ。

人は好きなことを話してあげればごきげんだしな。

それに、恋愛ともなれば人ってお馬鹿になるらしいからきつと毎回おんなじようなことを言うようになるだろうし、返事が今よりも楽だろうから僕が得意なオートでの会話ができる。

たかが中学生の恋愛模様だ、たいして難しいものじゃないし楽勝楽勝。

そう思ったんだけどなんかすつごく考え込んでる。

あれー？

「その反応……もしかして居ないのか？ 意外だな、いつもあれほどラブラブと他人や漫画やドラマの恋愛について語っているのに」

「うぐ」

僕の言葉に黙り込むるんさん。

……今日はほんとうに珍しいことが続く。

メロンさんの困っている顔を見られるなんてな。

「……そうなのよ………恥ずかしいんだけど、でも私。いつも響ちゃんにも言っている素敵な恋というもの、とつても甘酸っぱいような感じの恋をしてみたいんだけど、でもまだ気になっている男の子さえないの。 どうしてなのかしらね」

「実に意外だな」

「……響ちゃんが珍しくみんなと同じ反応をしているわ……」

きつとみんなもそう思ってるんだな。

年下から年上まで毎日のように同じ空間にわんさかと思春期の男女が揃っている学校っていう特別な空間。

恋愛にはこれ以上ない環境だ。

社会に出ると打算が出てくるから純粋に恋に恋できる、最初で最後の空間。

お互いにそういう感情とか衝動が強い時期でそういう風潮。

大人に比べると笑っちゃうくらいにかんたんに恋人っていうものを作れるはずの学生なのにな。



責任とか立場とかしがらみとか将来とかの憂いがない分思う存分にくつついては離れてができるのにな。

僕はしたことなかったけど、そういうのに積極的ははずで人気もあるはずのこの子が……なんてなあ。

世の中って案外分らないものだ。

まあ科学じや説明が付かない幼女化が起きるんだもんな。

もはやなんでもありまである。

でももつたいなあ。

僕みたいにそういうのにかけらも興味ない男子なんて……それなりには居るって思うけど、それでも大半はぼんやりしている系くるんでメロンなかりならよりどりみどりだろうに。

せっかくのチャンスを台無しにすると僕みたいになるから気をつけてね？

「君なら告白のひとつやふたつどころかもっとされてるものだと思っただけで、違うのか？」

この子からじゃなくても相手から来てないの？

ほら、その顔と胸っていう肉体とほんわりした性格と雰囲気と人当たりの良さっていう内面……ちよつとトリップしてる性格も男にとってはきつと理想を体現しているは

ずだもん。

高嶺になっちゃっているんだらうか。

あるいは本人が気がついていないだけとか？

……ありえる。

くるんだしな。

「好きです」って言われてloveじゃなくてlikeって本気で思っけていてもおかしくはない。

「……なんで分かるの？ この前も告白されただなんて」

「いや、そうは……なんとなくそう思ったよ」

そこまで言っけてないけど言っただけにしておこう。

「……たしかに小学校のころからよ。学期の終わりとかお休み前とかに男の子から呼び出されて告白されること、よくあるの」

良かった、少なくとも告白してきた男子を振る以前のことをしてはなくなつて。

小学校のころから成長、早かつたんだなあつて思う。

たぶん全体的にまんべんなくすすくと成長していったんだらう。

ちよつとお花が頭の中に咲いている感じだけど、いつも笑つてて楽しそうだしモテないはずがないもんね。

よっぽど女心が分かってる経験豊富な男以外は話が壊滅的に合わないだろうけど……若ささえあればなんとかなるらしいし、学校にいるあいだけなら話題なんていくらでもあるだろうし。

つくづく恋愛に適した環境だな、学校って。

この僕でさえちよつと懐かしく思わないでもないくらい。

別に惜しいって感情は湧かないけど懐かしいとは思う。

「……だけどね？」

珍しく真剣な意味合いが含まれている気がする声。

「私……告白されても好きなおはなしでみんながしているみたいに胸がきゅんとしてきたりどきどきしてきたり、嬉しいって感じたり思ったり怒ったり泣いたりしたことないのよ。何かおかしいのかしら、私って」

情緒が育ってないだけじゃない？

とはさすがの僕でも言わない。

思うだけだ。

「相手の子も良く知ってるお友だちだから、そのままおつきあいしてみようと思ったこともあるんだけど……でも私がそんな調子だから失礼だっと思ってしまうの。毎回。だから結局お断りしかしたことがないのよ」

案外にまじめだな。

成熟した大人な僕的には好印象だ。

「だから……彼氏とかの恋人。　これまで居たことないの……みんなからは『今は居ないだけなのね』って言われるのに……」

しゅんとなるくるんさんのくるんくるんもといしゅんしゅん。

「だから恋愛相談とかよくされてしまうの。『分からないわ』って言うのも可愛そうだからって思っ『恋愛ものだったらこうだけ……』っていうのしか答えてあげられなくって。　でも、なぜかみんなそれでうまく行くのよ」

「ふーん」

当てずっぽうもすがすがしければ逆に真実を言い当てる感じ？

漫画のお馬鹿キャラが適当に抜かしたことが鍵になることって良くあるよね。

漫画とか映画の話だけだと思っただけでもしかしたら真実なのかもしれない。

「なんでかしら。　響ちゃんは分からない？」

「さあ」

僕に聞かれても……。

くるんさんのますますと弱ってきているくるんをなんとなく見ながら思う。

この子、恋愛が好きだけあって理想を追求しているのかもって。

こだわり、理想もここまで来れば良いものだ。

僕のコーヒーとかお酒とか温泉とかのこだわりに通じるものがある気がする。

思春期以前に女子って存在なら「とりあえずで付き合ってみよう」っていうのをす  
るって聞いてたのに意外なもの。

好意を示されたらよっぽどじゃなければ嬉しいものだしちよつとした優越感も感じ  
るだろうにな。

まあ僕にはこれっぽっちも縁のない話ではあるけどね。

そもそも興味が無いからどうでも良かったんだけど。

今も前も僕の芯のところは変わっていない。

そういうものに心を動かされることはないんだ。

好きの反対は無関心なんだって。

興味がゼロなら何があってもなんとも思わないんだ。

「ねえ、響ちゃんには分かるかしら?」

「なにが?」

「何がって、恋って何かってことよ」

「恋か。 難問だね」

まさかこの子からそれを訊ねられる日が来るなんてってびっくり。

人生って何があるか分からないね。

「恋をするのにはあこがれているし恋している子を応援したくもなるんだけど……恋についてお話ししたり読んだりするのももちろん大好きなのだけど」

知ってる。

「私、自分ではまだよく分かっていないのよ」

「それを自覚できているだけで立派だと思うよ」

「？」

「……さて、なんだろうね」

社交辞令的な答えを理解してもらえなかった僕は深く深く傷ついたから避難先のベッドの上でぐだぐだしながら考えてみる。

僕のベッドからとは違う甘いようなふわふわした下条さんの匂いがただよう。

さつき嗅いだ匂いがしたから湧いてきている空間。

……こうして家の外で脱力するっていうのもまた新鮮。

「……………」

「響ちゃんは どう答えるのかしら？」

そう言えばこの子ってよくひとりごとぶつぶつ言うよね。

ずっと耳に力入れているのも疲れるから聞き取れなかったら無視するけど怒らないか

らどうでもいいのかな。

さて……恋について。

僕が最も興味ないもののひとつについて何か言わなきゃいけないらしい。

この子が納得する答えを思いつかないと終わりそうにない気がするから考えてみる。

……子どものころは思っていた。

大きくなるにつれて自然と誰かを好きになつて誰かに好かれるんだつて。

だつて知り合いの大人の人たち的大半が異性とくっついていたんだもん。

だから僕も学生のうちにはもちろん、社会に出て働きながら何回か恋人を作つてくついたり分かれたりしながら過ごして、幸せだつたり怒られたりしながら苦労したりして……30くらいまでには結婚して子供くらいはいるつて思っていた。

母さんが僕を産んだのだつて元の僕くらいの年齢……大学卒業から数年だつたらしいしな。

なんなら学生のころからずっと付き合っていたらしいつてのを聞いていたから「そうなるんだろう」つてどこかでぼんやり考えていたんだ。

「だけど現実と言えば灰色の学生生活。

僕がひねくれてたのも無気力だったのも致命的に変だつたのもあつて、とうとうにデートさえないままにこの歳になつてこの歳になつて女の子にもなつちやつた。

今思えばただの子供が歳を取るだけで勝手にいろんなことを知って経験して大人になるって思い込んでいただけだったんだろう。

でも、なんだか悲しいな。

「……………かがり」

そう思ったら、勝手に口が開いていた。

「恋なんて、……………少なくとも。　したいと思つてするものじゃないと思うよ。　僕だったら、ね」

ベッドでぐんなりしていたらなんだかセンチメンタルな気分になったからかは分からないけど……………僕でも考えたことがないような言葉が、ぼろっと出ていた。



## 20話 下条かがり(1) 5/6

僕自身は色恋沙汰なんてものには縁がなかったから全然まったくもってこれっぽっちも分らない。

だからいろんな本とかで見てきた受け売りしかない。

で、それらによると……人を好きになる「現象」っていうのは運命とかいう非科学的で存在しないけどロマンチックなものを置いておけば肉体が恋や愛をしている「状態」であって、恋愛っていうのは生物の本能に備わっている生命として種族を残すための「機能」らしい。

だから高尚ななんとかじゃなくって単なる本能。

どんなに頭が空っぽでもそういう状態になっただけっていうものらしい。

悲しいくらいにシステムチックなそれは遺伝的に遠い人を無意識に好きになるレベルって解明されていて、科学的に分析すると最終的にはそういう進化の果てのプログラムのな本能に近い現象らしいね。

多少は物を考えられるけどそれでも僕たちは哺乳類の一種に過ぎないんだから、他の

動物って言うやつらと頭の中以外そこまで変わっていないんだ。

それで、本能に従ってつがいになりそうな相手をどうにかして意識すると……動物は簡単に……その、繋がるんだけど人間は一応理屈をつけたがる生きもの。

見た目とか性格とかが好きだっと思ったり家同士で決まっているからってことになり、そこまで好みじゃなかったとしてもこの異性と子孫を残そうって意識したら、脳みそのどこか忘れたけどどこかでなんかいろんなホルモン物質が出てくる……らしい。

そうなる恋愛のスイッチが入って「自分に合う異性はその相手だけしかない」って思うようになって、その人がいちばんだって心の底から思い込む。

その相手がたとえそれほどの人じゃなかったりどうしようもない人だったとしても1回その状態に入ると、もう自分自身ではどうしようもなくなくなって良いところだけしか考えられなくなる……らしい。

「らしい」ばっかりなのはしょうがない。

僕にはそんな経験ないんだから知識で補ったに過ぎないんだ。  
で、順調にいけば結婚してつがいつてのになつてから数年くらい。

野生ならちようど子供が何人か生まれるくらいまで続いて、そこからゆっくりと冷えてきて、そこからは次世代をどうにかして育てるのに躍起になるもの。

そういうものらしい。

だから倦怠期とかがあるし子供を産んでお母さんになったらお父さんになった人を虫けらみたいに冷たく扱うんだとか。

ひどいよね。

男として同情する。

使い捨てって感じだし。

でも生き物の中には男が役目を果たした時点で本当の意味で用済みになるのもいるらしいからそれに比べたら人間はずいぶん優しいって思うよ。

「うーん」

「響ちゃんがんばって考えているわ……静かにしないとっ」

だけどなあ……。

目の前のくるんさんと目が合う。

……なんとなくじーつと見てたらなんか逸らされた。

なんで？

普段はうざったいくらいに見てくるのに自分がされるのは嫌なの？

わがままにも程があるんじゃない？

でもそんなくるんさんであつたとしても、自分自身とか誰かのラブっていうエネルギーで生きていると言つても言いすぎじゃない女の子っていう生き物に……ましてや

中学生に対してこんな身も蓋もない真実を伝えるのはかわいそうな気がする。

僕だつてそのくらいは配慮する。

僕がこの子に対していろいろ思うのはいつもいろいろストレスフルに構われすぎるからなんだから。

というよりも子供に対してこんな理屈を叩きつけるのはただの嫌がらせでしかないから止めておくとして、さてどういふ答えにしようか。

今考えたみたいなきことをこんこんと説き伏せたら泣き出すことまちがいなしだなあ。

性ホルモンに影響された本能のようなものなんて夢見る乙女には悲しすぎる現実。

たとえそれが事実に近いものだったとしても、理想は理想のままでもいいささせてあげるのが大人のお仕事。

小さいころからおんなじようなことをぼんやり考えていたところにそういうのを知つて「へー、そういうもんかー」つて納得しちやつたような僕にとつてはあたりまえのことだとしても、それをメルヘンチックなこの子に押しつけることはない。

ふーむ。

「……………」

「あ。響ちゃん、枝毛」

なんか髪の毛触ってくるんだけどこの子……。

……考えるのめんどくさくなってきたから無難でいいや。

適当に掘り起こしたどっかの記憶からそれっぽいことを言っごまかそう。

どうせ君も別にそこまで真剣に聞いたわけじゃないんでしょ？

「……僕もしたことがないから分からないけど、たぶん。たぶんだけど、少なくともしたいと思ってるものじゃないと思うよ、恋というものは」

「……………どういうこと？」

首をかしげてお口もくるんとしているかがりはかなりレアでおもしろい顔。

いつもこれくらいなら僕も気軽に近づけるのにな。

この子には1日中でも適当な妄想をして過ごしてもらって無害で居て欲しいところ。

「たぶんだけど。……人を好きになるって言うのは、みんなが言っているように出会

いを探したり好きな人を見つけたりするものじゃないんだ」

僕の中にある言葉をひとつひとつ丁寧に取り出してみる。

「近くにいる誰かを見ているうちに……あるいは初対面でか途中からかは知らないけど、『気がついたら好きになっただけ』。『自分がその人のことを好きになっただけ』。『気がついた』。そういうものじゃないのかな、好きって言うのは」

「……………」

ぼかんと口を開けている下条さん。

そのお口から僕の言葉を吸収しているんだらうか。

『好きになろうとして好きになる』とか『良きそうな人と恋をしてみる』とかはよく言うけど……その漫画でもあつたけど。でもたぶんそれは『恋に恋している』っていうものなんだ。それは本当の意味での好きとかじゃないって思う」

ちゃんとそのお口から吸収できるように言い含めるように。

「その相手じゃなくて恋っていうもの自体を求めているんだったり、恋をしているときの自分が好きっていうのだったり。それとも恋をして浮かれていて気持ちがいい状態が好きなんだったりするのかもしれない。でも僕は、それは恋とか愛とかじゃないって思うんだ。恋とか愛とかはそんなに即物的な物じゃないって思いたいんだよ」

「……………」  
恋愛に酔うとか恋は盲目とかつてよく聞かされた。

恋愛依存症とかあるくらいなんだからそうなんだらう。

お酒みたいに一晩で抜けてくれたりしなくて何年も持つてしまうのが余計にたちが悪いもの。

吊り橋とか人質のあれも有名だし、人は単純だからとりあえずどきどきするとそういう酔いを起こしやすいんだらうな。

つまり人類は総じてみんなちよろいんだ。

そうじゃなければここまで繁殖できていないだろうし。

しかも適齢期の男女だとそれに酔ったせいで人生の方向を大きく変えることにもなる。

慎重に越したことはない。

肉欲っていうものは本能には逆らえない。

でも僕はやっぱり、そういうのに振り回されて大切なことが決まっちゃうのは違うって思うんだ。

この子に残酷な現実を突きつけるのは止そうって思ったけども、でもやっぱり恋しいから適当な男子学生と……って想像するとなんだかもやつてするんだ。

この先ずっと、この子自身じゃなくってこの子の体……顔とお胸とおしりが好きだからって男たちから告白され続けるのがわかりきっていて、なのにならと頭が軽い感じのこの子なんだ。

適当にごまかすにしても多少は言い含めておかないとお尻まで軽い都合のいい女ってやつになっちゃいそうで不安。

それでも本人が幸せならいいんだけど……女の子だからそうじゃなくなるのだからありえるしなあ。

どうせ女の子に擬態するためのラーニング目的での繋がりだから用が済めばフェードアウトする予定ではあるんだけど、それでも知り合いになっちゃったんだ。

せつかくならまともな同級生を、良い人を見つけて欲しい……というのは年上のおせつかいかな。

でも僕がそう感じちゃうんだからしょうがない。

娘を持った父親の感覚が少し理解できた気がする。

肝心の僕が、その娘な年頃に戻っちゃってるけども。

「……………」

あれ、まだ僕の言ったこと飲み込めない？

結構経ったんだけどな。

そう思ってた彼女を見てみると……なんでそんなに顔赤くしてるの？

この部屋そんなに暑いかな。

僕の幼女ボデイは結構暑いのも寒いのも平気らしくってなんともなってないけど、かよりはなんか真つ赤だし暑いんだろう。

もー、子供だなあ。

びつとりモコンを操作してやる。

これも年上の務めだ。



「……………ふえ」

電子音に変な鳴き声を発して反応するのがおもしろい。

口をおにぎりみたいにしてているかがりが普段よりも良い感じ。

今伝えたことをどのくらい聞いててどのくらい理解できたのかは分からないけど……ちよつとお花が好きだけとお馬鹿ではないから、ほんのかけらくらいは人生の役に立ってくれるだろうって思っておこう。

じゃないと言つて損したことになるもん。

それはなんか嫌じゃない？

「かがり？」

「ひゅいつ」

僕もよくびっくりして変な声出るから気がつかないフリをしてあげる優しさを發揮する。

僕のはいつもボリウムが低すぎてほとんど聞かれていないらしいけどこの子のはでかいな。

「これも僕が読んだ本や映画や人が言っていたことの受け売りだけど。 わかりやすく言い換えると」

今度はちゃんと聞いてね？

できるだけ簡単に言ってあげるから。

そう思つて彼女のベッドの上でちよつとだけ膝立ちになった僕は、くるんを少しだけ上から見下ろす感じに……しようとしてバランスを崩しそうになつて両手を着いたらなんか彼女の肩に手が乗つてたらしい。

あ、ごめん。

でもこれ、さつきと逆パターン？

僕、そんなに復讐したかつたのかな。

まあたまには圧迫される身にもなつてみたほうがいいつて思うよ？

相変わらずに真つ赤な顔と三角形に開いたままのお口。

見開いたままのお目々。

少し垂れた感じのそのお目々はなんだか潤んでる。

花粉症？

いや、でも今真夏だしなあ。

……もしや……眠気を我慢してこんな感じになつて……？

……もうちよつとがんばつてよくなるさん……せめてお勉強の時以外はがんばつて

よ……？

「ふとしたときに顔が浮かんでくる人。いつでも見ていたいという人。その人がど

れだけ喜んでいたり悲しんでいたたり輝いていたり黒ずんでいても、それでも見ていたい人」

青春的な衝動だけで告白してくるような輩じゃない人のことだよ？

ちゃんと分かってね？

お願いだから……本当、心配だから……。

「たとえば他のすべてを捨ててでも。何時間何日も何週間も考えてみても、それでもその人だけを見ていたいって思えるような人」

「……………」

じーつと僕の目に合い続けているかがりの瞳。

……ちゃんと理解してくれてるかな。

こう言っておけば「情熱的な告白だったからオツケーしたの！」とかにらならないはずって思いたいんだけども。

「そんな人を見つかれば、その人に対して抱いている感情が『恋』とかその先の『愛』。

そういうものじゃないかな。そう言いたかったんだ。だから今すぐに探すもの

じゃないよ、きつと。分かったか？」

「ひゅっ」

……これくらいの表現でオーバーヒートしないで欲しいんだけど……まあくるんさ

んだししょうがないか。

「君の人生はまだ始まったばかりなんだ。今焦らなくたってお気に入りの恋愛もので満足しておけばいい。大丈夫だ、君は充分に魅力的な女性なんだ。そのうちに自然と……それこそ気がついたら、すぐそこに恋を『している』相手が見つかるんだから」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」ふひゅう

お返事を待っていたら、ぼさつと倒れかかってくるかがり。

……知恵熱か……憐れな。

でもそうなるってことはがんばって理解しようとしてくれたんだろう。

きつとちよつとでも分かってくれたんだって思っておく。

「大丈夫か？」

なんか息荒いな。

熱中症かもしれない。

エアコンをびっぴって2度ほど下げて置いてあげよう……あ、冷たいから1度上げてつと。

僕の顔に張り付いている彼女のくるんくるんからむわって漂ってくる彼女の汗の匂い。

それにはさつきので慣れたんだけど、そんなことより……その……ほら、夏場つてこ  
とで薄着で？

なんか汗かいてるもんだから水分を吸った服が反対側をくつきりさせるから……つ  
まりはシャツが透けているのに気がついたんだ。

白いシャツの下の、さつき押し付けられて痛かったブラジャーが浮き出ているんだ。  
これはまずい。

僕たちは他人の男女……じゃなくなってたんだけど僕の気が休まらない。  
けど水色か。

今日の僕のぼんつ（1つ500円の高級品）とおんなじ色だ。

さすがに白ばかりだと色気もないからと手に入れた大切な逸品とおんなじ。

なんかおんなじだと気分良いよね。

でも風邪も引いちやいそうだな……とりあえず部屋が冷えるのを待とう。

あんまり治らなそうだったら冷蔵庫へ失礼して氷とか、それでもまずそうなら救急車  
だ。

僕の頭は高速に回転して熱中症に関する情報を引き出す。

僕の取り柄は無駄に豊富な知識だ。

「かがり」

「へ……平気。ただ少し……と、とにかく平気なの」

受け答えはちゃんとしている様子。

でもしつかり見ておいてあげよう。

でもやっぱり中学2年生とは思えない体つきと中学2年生とは思えない頭の中身なこの子にこういう話は早かったみたい。

精神年齢そのものは決して幼いわけじゃないんだけどなあ……なんていうかとかくふわふわしてるんだよなあ……この子のお父さん、絶対に心配してるよなあ……僕でさえこれだけ心配なんだから。

同時期の知り合いなゆりかと比べても、心と体の発育が正反対。

個人差って馬鹿にできないな。

「済まない。僕でもよく分からないことを偉そうに」

冷静になってみれば僕もけつこうに恥ずかしいことを言った気がしないでもないから今のうちに言っておく。

こつぱずかしいというかなんというか……借り物の言葉だからってちよつとクサクかったかも。

恋愛経験すらゼロの僕が言っているいいことじゃなかった。

やはり聞きかじりでは説得力がないんだろう。

「……………」

でも、顔を真つ赤にして苦しそうって……もしかしたらこんな小さい僕がとつても理屈っぽいこと言っているからツボに入っちゃって笑いをこらえてるのかもって思えてきたな。

……人は見た目。

この、何を言っても説得力のない感じが悲しい。

やっぱり男に戻りたいなあ。

頼むよ魔法さん。

「かがり?」

「ひやいつ、……………うるさくしてごめんなさい」

どうやら自分の声量がそのお胸程度に他人より大きいってことに気づいたらしい。

「かがり」

「ひやひつ!」

びくつてなってくるんってなるかがりが見ていておもしろい。

「冷房なんだけども」

「はいっ！ 私もたぶん、……………えっ？ れい、ぼう…………？」  
む。

この反応……………もしかして今どきの子は「エアコン」じゃないと通じない？

「エアコンのことだよ」

「え、エアコン…………」

「うん。とにかくもう1、2度は下げたほうが良いと思う。これだけ外が暑いんだ、数字で出ているよりも冷えないんだよ」

「……………」

「熱中症は怖いからね。気分は悪くなっていないか？」

「え、……………ええ……………たぶん…………？」

「そうか、なら良いんだ。あと今気がついたんだけど、たぶん寝ているときに顔に風が当たっているよ。風向きは夜だけでも変えたほうが良いと思う」

「……………えっと……………はい…………」

意識ははつきりしているようだし、だんだんと赤みも収まってきているから大丈夫だろう。

良かった良かった。

「それで、どうかかな」



「えっ……ど、どうって」

「君が聞きたがっていた恋愛について……普段人に話したりしないから分かりにくかっただろうけど、とにかく言ったよ。今みたいな感じで良かったか？」

「あ……………え、ええっ！」

ちよつと元気になってきた下条さん。

ぶんぶん顔も振ってるし、きつと勉強とおやつのおあとで眠気が来ちやつてたんだろ  
う。

ほら、中途半端な眠気で寝ちやうと体が火照ったりするからきつとそれなんだ。

僕も伊達に20を超えていないんだ。

そのくらいは分かる。

「……………あのね？ 今の……………恋や愛について語っている響ちゃん」

ふうつと息をついてぱつと上げた彼女の顔は、すっかり元通りだ。

でもまだちよつとだけほっぺたが赤い。

「……………その……………そう、映画。映画とかの良い場面で静かに語りかけているワンシーンみたいって思っ  
て。それで……………その。私、とつても……………どきどきし  
ちやつていたの」

「そうか」

この子ってそういうの好きだもんな。

「……………そうなのね。……………響ちゃん……………、いつも。

……………そう。そういうものが、こ。……………こっ……………」

ぶつぶつ言いだしたって思ったらふと目があつて、ぱつと後ろを向いちやつてまーたぶつぶつ言つてる。

もう女の子たちのぼそぼそには慣れたよ。

「びびびびびび」

「さあ、かがり。勉強の続きだよ」

「い、…………………………え？」

「え？」じゃないよ……………僕が何のために来たのか、この子もう……………忘れちゃつてたんだろ  
うなあ……………。

「来たときから言っていたように今日中に2科目。そのうちの今分かっているところ  
まで、つまりは自力でできる分だけをなんとかしても片づけるぞ？」

それくらいのパースでやらせないと自由研究とか読書感想文とかいう2度と触れた  
くないトラウマ的な宿題が片付かないだろうしな。

でもかがりはそんな僕の気苦労も知らないで、多分だけどせつかくのおセンチな気分  
を害されたことにぶんすかとし始めたらしい。

「……………——もうっ、響ちゃんの鬼！ あと鈍感！」

「？」

僕、すつごく優しくなかった？

あと室温と体温の変化に敏感だったよ？

「……………とにかくひどいわっ！ もうちよつと感傷に浸らせてくれてもって……………」

「感傷？ なにを分らないことを。宿題からは逃げられないよ」

そうやって隙あらば雑談に持ち込もうってするんだから。

「……………もうっ……………」

きつとメルヘンからリアルに引き戻された怒りだろう。

僕はそつと、僕のお皿に載せてあつて一口しか食べてないお菓子を譲ることで機嫌を

直そうとした。

## 20話 下条かがり (1) 6/6

とんとんとん。

机の上に良い感じの音が響く。

「響ちゃんはマジメさんのねえ。 どうせ明日も使うのだからそのまま良いのに

……」

今日終わった分の宿題とか使ったものとかを整える僕にケチを付けるかがりさん。

こういう分かりやすい演技とか儀式みたいなのは達成感を感じるためには必要だつて聞いたことがあるんだ。

わざとらしいのもいつもじゃなければメリハリとなる。

らしい。

僕は普段からこんなことはしないけど……この子が心配だからなんとなくでしてみた。

「おつかれ。 君が今日がんばったおかげでこれだけの……」

……別に多くはないかなあ。

効率が良いとは言えない感じのノートの使い方をペらペら見ながら考える。

夏休みって言うか同じ学校の同級生なゆりか情報だと、ここをやっておきなさいって  
いうのは期末試験が終わったときに言われてたらしいから、実際には2週間程度じゃな  
くて1ヶ月くらい経ってる宿題。

その1ヶ月のあいだ1行もやってなかったのが今日だけでこの量。  
そう思うとすごい。

えらい。

それをとつくに終えてるゆりかとか、さらに言えば高校受験のためにがんばってる子  
とかはもつと偉いんだけど……こういうのは人と比べちゃ駄目って知ってる。

こういうのはその子を基準にしなきゃいけない。

僕だつて学生の頃先生から「今日はとつても学校で人とおはなしできていましたね。  
でも他の子はあなたの何倍の時間楽しそうにしていたから明日からもつとがんばり  
ましようね? お友だちはたくさん作りましようね?」とか言われたら不登校になつて  
ただろう。

だから人と比べちゃいけないんだ。

ニートつて言う人と比べられない存在な僕だからこそその配慮でもある。

「問題集系の……3割近くを片づけられた。初回でこれは大戦果だね。基礎とはい  
え、このペースはいい。この調子だよ」

これでもかというくらいに褒めちぎる。

まあ今日はこの子が「これならやってみても……」って言うところだったし簡単などころだったしで他の日はこうは行かないだろうけども。

でもけなすよりは褒める。

よっぽどバカにした褒め方じゃなければ誰だつて褒められる方が良いよね。

ああいや、でも世の中にはなじられる方が嬉しいって人もいるのか。

今の僕みたいな子供にバカにされたいって言う人もいるくらいだもんね。

この子も僕から「ばーか」とか言われて喜ぶんだろうか。

……喜びそうだからやめとこ……毎回罵倒を希望されたら僕が困るし……。

「ふう……………」

はいつくばるようにして机に乗っかりながらだるだるしているかがり。

でも完全には体重を乗せきれないらしくって微妙に浮いている上半身。

胸があると大変そうだなあ……ベッドに寝そべってスマホとか漫画とかつらそう。

僕にはこれっぽっちも縁のないことではあるけど。

うつ伏せに寝るときには男のとくと全くおんなじだからこの上なく便利だからいいけどさ。

「……………」

「学校とかでお友だちからそういう目されるのよ。なんでかしらね？」

僕の目線に気がついたらしいかがりは、特段に隠すわけでもなくだるーんとしている。

メロンさん。

胸。

おっぱい。

どのくらいが良いかって言われたらやっぱりちよつとは欲しい。

だって僕の心は男だもん。

邪心がなくなつたって目の保養つてやつなんだから、かがりほどはいらないけど欲しいものでしょ？

せめて目で楽しめて手で楽しめるくらいには。

こんな不便な代償が小数点以下は悲しすぎる。

女の子にさせられている以上、せめて下に無い分を補えるくらいには特典が欲しいんだ。

だってなんか寂しいし。

なまじ整いすぎて顔とか幼児な体とか強い光で発光してるように見えちゃう長い髪の毛とかは、誰にも注目されないで静かに生きたい僕には不要なんだもん。

ちよつとくらいの特典くらいいいじゃない？

「でも響ちゃんってほんとうにスパルタね……思っていたより厳しいわあ」

そう？

塾とかで教えてたときの僕はもつと厳しかったよ？

だつてお金も責任も絡むんだもん。

今みたいに学生同士って立場だからこそそのいい加減さだ。

まあ僕、学生でも社会人でもないニートだけど。

職業欄には「無職」だ。

「嫌か？ 嫌なら」

「もちろんそう頼んでいたのだから文句はないのよ？」

文句があつたらこれつきりにしたかつたのにな、残念だ。

「ないのだけど、でももう頭と動かしていた指が動かないの……学校の外での勉強ってこんなに大変だったのね……」

そりゃあ授業とは違ってひたすら問題解いてもらったからね。

集中力をなんとかして続かせて、そのあいだずっと書き続けてもらったから。

でも毎日10分ずつとかだつたらすすごく楽だつたんだよ……？

1時間でも30分でもなくって、たつたの10分で良かったんだよ……？



「私、受験のときはこんなに大変だったかしら……」

くるん?とじているくるんさん。

一応の受験生だったらしい。

そういうのを雑談のあいだに聞いた。

さぼることをあんまり知らない小学生だったからこそがんばれたのもね。

受験の初めてが高校じゃなくて良かったタイプの子だ。

けど、なんだかんだで夕方。

朝からなんだから、そりゃあ誰だって疲れる。

逆に言えばこの子だって、がんばりさえすればこのくらいできるといふことだ。

普段はがんばらない、がんばれないだけなんだ。

基礎的なスペックはこのくらいあったとしても勉強って体力が無いと難しいよね。

単純に机に向かう体力とやなこと続ける体力と、見られてなくても自分でやる体力。

心の体力。

MP的なものだ。

それが足りないのとどれだけががんばってもいつもの僕みたいにだるーつとなるのは

しょうがない。

筋トレとおんなじで地道にやるしかないんだ。

たったの1日だけだけど、それでもこれだけやれた達成感はあるはず。これが君の今後に効く……と良いね。

なあに、まだ中学2年生だ。

世の中大人になってから本気出す人もいるからなんとでもなるよ。

僕だってまだまだ本気出してないからニートなんだし。

「君の場合はこれっぽっちも手をつけていなかったのが原因。これからはがんばるんだ」

「うう……反省しているって……」

なんか僕の認識外でぶつぶつ言ってたから責任の所在は明確にしておく。

10も年上の生産性なんてないニートには言われたくはないだろうけど、そのニートに教えられてるんだからこれくらいは良いよね。

「響ちゃんは厳しかったけど、おやつをエサに釣られた気がするけれど……ありがとう。おかげでなんとかかなりそうって思えてきたわ！」

「そうか、よかったな」

そうじゃないと困るもん。

この子も僕も。

最後の方なんか机に突っ伏しながらだっただくらいのだるだるだったから、気力をなん

とかするために1ページでひとつまみのお菓子をあーんとかしてあげたからね。

この子の方から「してくれないとやだ」って言ってたから事案じゃない。

なんでか知らないけど僕の指まで食べようとしたのは幼女じゃなければ事案だった。

やっぱり女の子はスキンシップが好きらしい。

僕の指でお菓子をつまんでできるたびにご褒美として直接口に入れて欲しいって……子供か。

ただ手渡すのと同じややる気の上がり具合がまるで違つたし、ある意味安上がり。

でも僕結構に潔癖だから早く指を消毒したくて困つてるんだ。

だけど人の口の中ってけっこう熱くって唇つて柔らかいんだなって思った。

この歳になつての初体験。

「……響ちゃん、そのお」

お願いをするときの声の出し方になって、上目遣いになって体を傾けてのぞき込んでくるくるんさん。

……この子のこういうのはあざといとかじゃなくて天然のもの。

オーガニックで有機栽培なんだ。

勉強なんかできなくなつてなんとかなるだろうって気がする。

愛嬌って大事だよね。

「できたらまた、明日とかあさってとか……いえ、響ちゃんに合わせるわ！ でも、その、えつと……ま、また今日みたいに……お願いしたいんだけど……」

今日の戦果が相当に嬉しかったらしい。

綺麗に積んであげた宿題の山をちらちら見ながらせがんでくる、これまた珍しくしおらしいくるん未満さん。

「……………あたりまえだろう」

でも、この子は甘くし過ぎるとダメなのは分かっている。

僕みたいにほつといたら墮落するタイプなんだ。

第2第3のニートを再生産するわけには行かない。

僕は心を鬼にする。

「響ちゃん！ それ、女の子がしちやいけない顔!!」

「知らないね」

なんか気合を入れたらそれっぽい顔になったらしい。

でも僕は女の子じゃないから平気。

男だし幼女だし。

……………ん？

そういえばこの体になって真剣な顔をしたのは初めてかもしれない。

そういえばそういえばで鏡とか見るのは髪の毛が綺麗かどうかとか服がよれてないかとかだけ。

後は体を観察するときくらい？

今の僕自身の表情とか気にしたことなかった気がする。

……帰ったらいつもの眠そうな顔がどうなっているか確かめてみよう。

だって、いつもならイヤだっていう意思表示をしても「あら響ちゃん、眠いの？」って誤解されるんだし。

「なら目が覚めるようにちよつと離れたところのお店に行きましょう」だとか「なら目が覚めるようにいろいろなファッションを試してみしよう」だとか屁理屈をこねられることになるんだ。

だからこそこれだけの苦勞をしているわけだ。

だからメモリーに残ってるはずの表情を再現してこのくらいなら眠くなさそうって見てもらえるようになりたい。

「とにかくだ」

指を立てて集中させるテクニク。

「明日から連続……は疲れて効率が悪くなるだろうから、毎日ではなくても明日を含め

て来週までに3日くらい。その3日で集中して片づけないと残りの宿題がすべて白紙になってもおかしくない。もちろん今日みたいに見てあげるとも」

この子はちよろい。

おだてたらなんでもしてくるのは分かってるんだ。

だから気分が乗ってるだろう近いうちに……学校の先生がため息をつかない程度に「なつやすみのしゆくだい」をさせておいてあげるんだ。

僕なりの優しさだよ？

「……響ちゃん、ちよつとはその……私のこと信用してくれても」

信用……？

いやいや、絶対しないでしょ。

もし自主的にするんだったらこんなに残念なことにはなっていない。

「まずは明日だね。明日も空いているよね？」

「え、ええ……あ、待って頂戴明日は」

「さつき君自身が予定なんて無いと言っていたから大丈夫だ」

さつと目を逸らして早速に明日がめんどくなつた様子だからたみかけよう。

「朝のもつと早くからじゃないと間に合わないかな。なら朝食のあとすぐに向かおう」

「で、でも、それだと響ちゃんに悪いし」

「それから休憩を挟みながらこのくらいの時間までやろう」

「でも、響ちゃん病み上がりだって」

「大丈夫だよ。ここまでの道は覚えたし、僕は朝は強いんだ。僕が遅れることはな

いはずだから安心してくれ」

でもでもだつてだつてやっぱり。

大人な僕にその手は通用しない。

「でも私が寝坊とかしてしまつたら迷惑を」

「ああ、しっかりアラームで起こしてあげるから心配はないよ。寝坊したらインター

ホンで起こしてあげるから安心していい」

遅刻の可能性を事前に言えるのは偉いね。

でもすぐに遊ぼうとするのは……お兄さん、良くないって思うよ？

「ああ、親御さんにはきちんと伝えておいてくれ。僕が教える格好になっているんだ

から菓子折とかは必要ないよね？」

確か友だちの家に行くときには相応の手土産が必要だった気がする。

最後にお邪魔したのは多分中学生も最初の頃くらいだったから全く記憶にないんだ  
けど、きつとそうだ。

礼節ってやつは大切。

丁寧に越したことはないもんな。

でも今回はこの子のためだつてご両親も理解してくれるだろうからいいや。

何よりこの後にわざわざ買いに行くのだからいいし。

「後は、……このくらいでいいか。でもかがり、今言つたことを忘れたりしないか……

? あとでメツセージで再確認したほうがいいか……? 今ここで適当な紙に書き出

してあげた方が」

「ひどいっ!? 私、そこまで忘れっぽくはないのよ!?!」

ひどくない。

あたりまえのことを確認しているに過ぎない。

「それに響ちゃんつて、どうしてこういうときだけ饒舌なの!? いつもはさよちゃんと

おんなじように可愛らしく静かにお話するのに!?!」

さよちゃん?

……文学少女さんか。

なるほど、この子にとってはぽつぽつとかたどたどとかで抑揚のない話し方は小動物的に映っているのか。

まあ確かにあの子は庇護欲をかきたてる感じだもんな。



庇護欲を他人に対してすぐに覚えそうなりさりんさんとは大局的な存在だ。

僕もこの見た目で僕から会話しないからきつと似た印象なんだろう。

「これが僕の普通だよ。 厳しくも甘くもない。 君だって普段、服とか恋とか友人の

いろいろについて話すのが止まらないだろう？ それだけ僕も熱心なんだ」

「でも……」

「それに、次の試験で赤点を取ったりして塾に通わせられたいか？」

「……塾の話は嫌いな。 私、どうかして……受験当日もたまたま得意な問題がた

くさん出て。 だから運が良くってたまたま今の学校に入ったくらいには勉強が」

「そのいいわけは通用しないよ。 運だって最低限の地力がなければ通用しないんだか

ら」

僕は調べた。

この子たちの学校のこと。

中高一貫の私立。

特別に名門というほどじゃないけど、それでもある程度の学力がないと入れないとこ  
ろなんだって。

たまたまだろうとなんだだろうと入ったからにはその程度以上の頭はあるはずだって。

「……宿題、きれいに終わらせられたら何かお礼をしないとイケないわね！」

……ぱつと顔が明るくなったと思ったら唐突に抜かすくるんさん。

もう先延ばしにするのは諦めたらしく、その次にしたいこと考え出したらしい。

便利な頭してるよなあ。

「なにがいいかしら……響ちゃんが喜びそうなもの……」

「僕は別にいらないよ?」

「そういう訳にはいかないわ?」

だって僕、ほんとうになんにもしてないしな。

ただごろごろ漫画を読んでただだけだ。

ただこの子の都合に合わせてこの子の家の子のこの部屋でこの子の目の前で監視される……勉強を監視しているのは僕の方だけど、実際にはこの子が誰かに傍にいて欲しいだけだもん……それだけだもん。

「ふむ……」

そう考えてみると。

普段みたいに連れ回されてからの服屋で店員さんと一緒になって脱がされて着させられてまた脱がされてまた着させられてだったり、お昼とかを食べた後でのカフェとかで女の人だらけな空間でスイーツとかを甘いものをたくさん食べさせられてうんざりするよりも、そのあいだずっとひたすらにとめどなく話をされるよりも……ずーっと幸

せなんだって気がつく。

寝転がっていられるし人目にさらされないし天国と言っても過言じゃないかも。

「……………あっ！ そうだわっ!!」

そう唐突なボリユームで叫んだくるんさんの表情がいつもの……僕をかわいく仕立てようとしているときのものに戻ってしまったている。

なぜだ。

一瞬前までは確かに、平穏で安寧で天国みたいな状態になっていたのに。

僕の中に一気に緊張が走る。

じわつとにじむ手汗。

「いつも思っていたのよ！ 響ちゃんって、せっかくのそのきれいで長い髪……きつとお母さんとかお家の人にお手入れしてもらっているのよね？ ときどき響ちゃん自身がだらしなくしているとき以外は痛みとかもなくって嫉妬する気にもなれない、その美しい銀色の髪の毛！」

口の回転が速まっている。

非常によくない兆候だ。

なんとかしなければならぬことだけが理解できる。

「かがり」

「響ちゃんを響ちゃんたらしめているその輝いている髪の毛!」  
「かがり」

「いつつも下ろしたままだし恥ずかしがって隠しちゃうくらいだし……そんなのもったいなさ過ぎるって思っていたのよ!!」

机をばんつとされてびくつとなつた。

こわくないけどこわい。

脅すつもりがないのが分かっていてもこわいものはこわい。

ニートと幼女を舐めないで欲しい。

「だからかがり」

「お家にもきつとかわいいリボンとかいっぱいあるんでしようけど!」

そんなのないよ?」

「だって響ちゃん自身がかわいいものね、それに似合うし、だけど今はせっかく私と一緒にいるんだからこういうときくらいたまには結ってみたり髪留めとかつけてみたりしてくれてもいいんじゃないかしら! お母さんとかメイドさんとかとはきつと違うセンスで可愛らしくしてあげられるって思うしその自信はあるのよ響ちゃん!」

「かがり、落ち着」

「大丈夫よ! 心配しなくたってお嬢さまっぽい髪型とかにはしないわ! 響ちゃんは

そう言うのが苦手だつてこの前言っていたものね！ 大丈夫、ちゃんと覚えているわ！  
他の子の髪の毛を上手に整えてあげるの好きなよ私！ まかせて!!」  
任せたくない。

「……そうよ！ まずは今日の分のお礼が必要よね！」

「かがり、僕は何も要らな」

「少し待つて頂戴！ 今すぐに試してみましよう！ 大丈夫、私があるからいっぱい試せるわ！」

対話を試みるも僕の頭と口の回転がかがりのそれに遠く及んでいない。

……違う、僕はそんな心配なんてしてないんだ。

だからにじり寄つてこないで。

お願い。

僕自身の性格と体格差とで目の前に来られると動けなくなつちゃうの。

「かがり……頼む、僕の話を」

「心配は要らないわ！ 今の響ちゃんが響ちゃんらしく……そうね、わたしが知っている響ちゃんに似合う髪型とかを一緒に探してあげるわ！ 待つてて！ 今すぐだから！」

唐突すぎてぼけつとして動けなくなっている僕を置いてきぼりにして……彼女は僕

の両肩に体重を乗せて僕を縛り付けて。

「待っていて頂戴？」つてばそつと言い含めるとさつきの本棚の雑誌のところをこそそつと漁り始める。

何冊かをぱつと出してばらばらと眺めてなにやらとぶつぶつしながら吟味している。

……かがり、それは僕のためとかお礼のためなんかじゃなくつて、いつもどおりに君がしたいことじゃないの……？

なんでお礼とか言いながらもその趣旨を忘れちゃつてるの……？

鶏さんに負けてるの……？

……ただでさえ女物には半分くらいしか慣れていなくて外では恥ずかしいのに髪の毛まで……かがり基準で「かわいい」感じにされて覚えさせられて「次からはその髪型で来てちょうだい？」とか言われたらどうしよう……？

「響ちゃんはせつかくの長髪を活かさないともつたいないわ。だからミディアムまでのは参考にしなくて良いから……」

不穏な単語が聞こえてくるし……やつぱり勉強見てやるの止めよつかな……？

ちよつといいかなくなって思ったくらいに僕へのメリットを羞恥心つていうデメリットが飛び越えそうだし……でもなんとなくだけど口約束でも一回約束したのを「やつぱやめた」つていうのはやだし……。

「響ちゃんっ!」

「……………」

最近覚えた「どや顔」というやつをしている彼女はたいそう満足げ。

そうして雑誌を何冊かと髪留めとやらが入っているらしきでかいポーチを両腕と両方のお胸を使って包み、ぺたりと座り込んでいた僕の頭上から僕にとつての死の宣告をする。

スカート裾から見えそうなのも気にしない彼女は仁王立ち。

そうして「ふんっ」と意気込んだかがりの胸元から1個のポーチがぼとりと落ちてくる。

「……………」

それは僕の、最近のクセで女の子座りをしていたふともものあいだの形に凹んでいるスカートの上に綺麗に収まっていて、僕は失敗したことを悟った。

……僕、これ以上女の子になっちゃったら戻れなくなるからほどほどにお願いね……

?

僕はそう願って意識を放棄してされるがままのお人形さんと化した。

後のことは無事に家に帰ることができたら考えよう。

お人形さんなあいだは適当なことを考えておこうって。

大丈夫、なんにも見なかったことにするのは得意だから。



## 21話 関澤ゆりか(1) 1/5

「くあ……」

体のサイズに比べて大きなあくびが出た。

全然成長してないのはこの数ヶ月で確認済みなのにこの眠気。

ちっちゃい体だからしょうがないか。

出てきた涙をふきふきした先にはいつも通りにつけっぱなしのテレビ。

どの局にしてもとめどない音と光という情報が流れ出ているにぎやかさ。

別に見ているわけじゃないんだけど、こうして誰かの姿をちようどいい音と距離で聞いているっていうのはとっても安心するから居間に居るときはほとんど付けているんだ。

あつちから一方的だから興味を引かれたときだけ注意すればいいというのも良いよね。

だからそんなに持たなくってもう何代目かになる何台目。

わりと新しめのテレビのきれいな画面に映っている人たちを眺めるひととき。

……あんまり良くない習慣って言うのは知ってる。

こういうの、人寂しいからするものらしいしな。  
でも人との接点が無いんだからしようがない。

春まではひとりでひきこもってニートしてたんだから僕のせいで、春からは幼女になっちゃって誘拐犯になっちゃやうから僕のせいじゃないからしようがないんだ。

でも最近はがんばってるんだよ？

J Cさんたちな知り合いが4人になっちゃって予定が重なると毎日お出かけだもんなあ。

ちよつと前だったか何年か前だったか、何週間かじとつと引きこもっていたら会話ができなくなっていたことがあったけど今はそういうことないし。

言葉って使わないとダメになるって言うのは本当だったらしい。

「あー」とかすらかすれるって言うかどうかやつて声出すか一瞬考えたりするレベルにもなったし、なんならちよつとでも早口だと聞き取ることすらできなくなるっていうおつそろしい経験もしたし。

あれはほんとうにやばかった。

さすがの僕も危機感を覚えたくらいだもんな。

母国語が聞き取れないって言う危機感はやばかった。

めんどくさくつても人と話さなきゃ行けないんだなーって思った。

「……………」  
気がつけばいいじじしている長い髪の毛。

さわさわすると気持ちいいそれを無意識にくるくるすべすべしている僕。

だってちようどいいところにあるし触り心地いいし安心するし……せつかくもつきり生えているんだから使わないともつたないし。

うん。

モフれるうちに存分にモフっておこう。

男に戻ったら多分消えるんだろうし。

ひと晩でもつきり生えたんだから戻るときもひと晩ですつきりするに違いない。

「……………」  
……これだけ生えた代償とか言って生えなくなるのとかは止めてね……？

この歳ではげたら悲しすぎるんだよ……？

僕も男だから薄毛の悲惨さは僕自身のことのように意識している。

男って案外に繊細だよな。

意識を僕自身からテレビに向け直してみると、さつきまではまじめな話題をしていたはずなのに視聴率の取れそうな芸能ニュースになっていた。

だからぼんやり考えていたんだな。

芸能人のだれがどうしてどうなったっていうニューズって言う名前のバラエティ。

この体になってかがりに刷り込まれるまでの僕だったら「つまらないしくだらしないし  
どうでもいいしさわがしいし」ってきつきと切り替えていただらう時間。

でも彼女に叩き込まれたおかげで、そこに移っている人が誰なのかってそこそこ分かるようになってる。

だからか気がついたら「ふーん」って思いながらぼーっと見てるときがある。

不思議だよな。

ほんの数ヶ月前まで、こんなのは時間の無駄としか思えなかったのにな。

人ってちよつとしたことでここまで変わるんだな。

まあ男が幼児になるんだから不思議じゃない。

つまり僕はほんのちよびつとだけは普通でまともで常識的な人間に近づいてきたの  
かもしれないって言っても良いだらう。

容姿と状況は普通にはほど遠いままなのが課題だけでも。

そんなきらきらした世界の人たちは同じ世界の住人のスキヤンダルに夢中の様子。

ついこの間まで仲良さそうにしてたのにね。

昨日までの友だちは今日の敵な世界観らしい。

殺伐としてるね。

やっぱりこわい。

有名人って大変だね。

そのぶんのお金とか名誉とかはもらっているとは言ってもさすがに可愛いそうって思う。

まったく関係ないことまで「らしい」とか「かもしれない」で好き放題。

僕だったらウソだって分かるようなことも平気でしたり顔で分かったような顔で裏切られるんだ。

こわいこわい。

まぢがつてもこんな世界なんかに入るもんか。

今井さんにお手々引かれなくて本当によかった。

やっぱりあのときのコネを使うのは控えておこう。

最終手段としては……まあまあアリだっと思うけど。

現状どうしようもなくなったりときに電話する相手って言ったら叔父さんかお隣さん、その次に萩村さんたちって順番だもんな。

……どうしようもなくなったりとき。

お巡りさんに連れて行かれたときとか家が火事か泥棒に襲われたとき、あとは急な病気とか怪我。

僕は今まで幸運にもそういうのが……20年以上生きてきても無かったんだから大丈夫って思うけど、可能性はゼロじゃない。

だからちゃんと少ない連絡先には残しておいてあるんだ。

万が一って言うのは無いからありがたがるもの。

使わないで捨てる防災グッズ的なものなんだ。

「けふっ」

お昼までに今日のぶんの勉強をみんな終わらせてあつて外出の予定がないもんだから珍しく退屈になった午後。

こんぶ茶とおまんじゅうを口に運びながらもさもさと過ごす。

銀髪幼女な外見と黒と白でなんだかお嬢様って服装になつちやつた今日の僕にそぐわないチヨイスだけど食べたくなつたんだからしょうがない。

でも、食欲は少ないんだけど甘さ控えめなら意外と量もいけるんだよなあ。

不思議だなあ。

お酒と同じかな？

ああ、お酒を呑む夜が待ち遠しい。

「……………」

静かな室内にテレビからの声だけが小さく映る。

台所を眺めると……そっちにあるガラスの反射で、銀色でもつきりしていて目がぼんやりしてほつぺがぶにっとしていてちっこい僕が退屈そうな顔を向けて来ている。たまにはこういうのっていいな。

最近はやけに騒がしかったし忙しかったから、こうやってひとりでヒマつてのがなかなか良かったんだ。

これじゃニート失格だな。

何かにがんばって忙しいとニートからフリーターに格上げされちゃうんだ。

知り合っちゃってなんだから懐かれちゃった子供たちもとい中学生たちのお世話はおとちよつとだけ続きそうだけど、でも夏休みの終わりが見えて来たから僕はご機嫌だ。

夏休みが終わったらちよつと遠足……じゃなくて遠出をする計画も立てている。

やっぱ僕は普段家で静かに過ごして、たまーにふらつと何日か僕を知らない土地に行くのが好きみたい。

本当は温泉にも入りたいけどなあ……結局男湯か女湯か決められないから行けないしなあ……。

楽しみをひとつ失った悲しみ。

体と心の性別が合っていないと大変なんだってこの歳になって知ったんだ。

そう思うと今流行りの……って言っちゃ悪いけど、ようやく日の目を見るようになって

て来た人たちに親近感が湧いてくる気がする。

今の僕の現状って性同一性障害ってやつになるもんな。

普通の人に「男だったんだけど魔法さんが幼女にしゃがったの」って言っても通じないだろうし。

ちょうどテレビでもそういう特集をしているからスマホをすいすいしながらちらちら見る。

……僕って人への興味が薄かったらしい。

だから好きな有名人とか居なくって、だからだからスポーツ選手とかお笑いの人とかアイドルとか……普通の人が当たり前が好きって言うその対象が居なくって、だからこれまで詰まんないって思ってたんだ。

でも誰の影響でも何でもいいからひとりでも見つける。

見つけたらその人の出ている番組とかニュースが気になるようになる。

そうすると自然とその人と仲のいい別の誰かの情報が入ってきて顔なじみになって、そのさらに顔なじみが増えてくる。

で、そこからお芋みたいになくなっていくっていうのは、ひとりの友人から知り合いや別の友人を増やしていくっていうのと流れはおんなじだ。

友人。



友だち。

全然居なかったからこうなったんだらうか。

本当に居なかったもんなあ、友だちって。

友達が居ない人の話題になっても「ふーん」って平気だった辺り、本気で人としてやばかったのかもしれない。

高校大学ひきこもりニート時代と僕から話しかけたりしたのって数えるくらいだし。作れないわけじゃなくって作りたくなかったのかもね。

こう毎日のように誰かと会う生活をしていると「これまでがなんだったのか」って思う。

なんだったんだらうね。

なんで僕ひとり寂しくニートなんかしてるんだらうね。

そう思えるくらいには人として成長したらしい。

だっておしゃれっていう概念を獲得したし、立派に女の子として振る舞えるようになってきたし、知り合いもちよっと前の3倍には膨れ上がっているし？

きつと天国に行つたはずの父さんと母さんも喜んでるだらう。

そう言うところがあるのかどうかは知らないけど、あつたとしたら多分。

……その相手が全員年端もいかない女の子だつていうのは……まあ幼女になつてい

るし同学年ってことになってるからいつか……どうせそう遠くないうちにお別れなんだし。

期間限定というのも後腐れがないし悪くない。

旅先での数日だけの関係だと思えば気も楽。

短期間だけでお別れって思えば逆に楽しいものだしな。

幼女から男に戻って社会復帰をするための準備なんだって思っておこう。

「……ずずつ………ぶは——……」

昆布茶っておいしいよね。

じじ臭……ばば臭い趣味だなあ。

そんなことを思う幼女の見た目の成人男性な僕だ。

◇

◇の思考にノイズが◇◇る。

でも、そのときの僕がそれを自覚することはなかった。

◇

そう言えばなんで僕今日はずっと居間に居るんだっけ？

普段は部屋がメインなのにな。

まあいいや。

僕がテレビの向こうの人たちの顔が分かるようになってきたのって◇かがりのおかげでもあつて、かがりのせいでもあるんだっけ。

会う度に何十回も何十分も好きだけ話すあの子だから自然と聞き覚えのある人が増えたんだ。

最初の頃は「はいはい」って流してたけど、どんな人だって10回聞けば覚えちゃうもの。

そんなわけでだんだんと理解できるようになってきて、気がつけばその人は一方的な顔見知り。

そうなるともうその人についての新しい情報を手に入れるのが楽しくなる。

そんなことばっかりしてるからお花畑さんなんだろう。

でもこれってすごいんだ。

まるでぜんぜん分からなかった外国語をひとつずつ覚えていって、あるときに「あ、これ分かる……！」ってなったときみたいな感動まであつたりするし。

「◇◇◇◇ニュースです」

そんなときに◇◇◇◇とイヤな感じのテロップとともにスタジオがぶつ切りになって急にマジメな顔のニュースキャスターの人。

「……………いいところだったのに……………」

この瞬間にかがりが言っつていそうな言葉が口を突いてくるけど、よく考えたら「別にどうでも良くない？」っと思う。

でも良くないんだ。

なんなんだろうね、これ。

しかたない、これが終わってさっきの続きになるのを待とう。

なんなら続きはネットで見てもいいんだしな。

今って便利だよね。

僕はイスの上で立ち上がってテーブルの上でお茶を準備する。

そうしないとクツションを重ねたイスの上からも座高が足りないのがひとつ、熱湯を顔よりも上の位置で操作するのが怖いって言うのがひとつ。

袋からがさがさと粉を出してポットからお湯を注いで今度は梅こんぶ茶。

……………あれ？

これ、さっきも飲んでなかったっけ？

「……………気のせいだろう、気のせい。」

でも今度はもうちよつとだけ熱いままで飲もう。

薄いのから◇いの。

◇いのから熱いの。

戦国時代からの常識だつてどこかで聞いた。

「……………?」

なーんかさつきから、ぎざつと◇……………。

「……………速報です、たつた今入ってきた情報ですが……………」

うーん、ちよつと熱すぎたな。

唇が痛い。

僕の猫舌は男のときからだけどこの体は肌も薄いからきつと唇も薄いんだろう。

気をつけないとな。

唇とかべろとかのやけどつて何日か地味につらいんだから。

でも不思議だよなあ……………この僕が◇◇なんて。

「……………?」

……………なんだろう、これ。

頭が……ちりちり？

ちみちみする◇な？

「……………」

深いことを考えられない。

なんか不思議な感覚。

あ、でも、これってちよつと前に経験した気がする……いつだっけ？

あ、そうだ。

これって僕がこの体になった◇◇◇◇に。

「……………え？ もう始まって？ ………………失礼しました、◇◇長官の会見の様子を中継し

ます……………」

◇◇◇……………、ざらざらする。

画面はまたまた切り替わって見慣れた政治家さんの顔がどアップで映る。

でもよく分からない。

まるで子供の時に真面目な番組を見るような感じ。

基礎的な知識が全くなくて理解できないっていう、知らない言語のラジオを聴いているような感じでもある気がする。

僕は◇った。

「……政府は……今朝の臨時閣議によつて次の……措置法を」……合同対策本部を設置し、速やかに◇◇◇混乱を最小限に抑えるよう……」「……以後は……した関係各国との連携と……の救済を目標とし、また同時に国民の皆様にも……」……また、周知活動はもちろんのことその第一弾として……」

「……………」

くらくらする。

……………

◇◇◇。

「……………」

僕つて誰だっけ。

「……………」

◇◇◇ 以上です。 カメラをスタジオに戻します」

「……………」

「……………」

そうだ、響つて言う名前の幼女……になつてる男だった。

「……………」

危ない危ない、こればかりはアイデンティティとして大切にしないと。

「……………」

「……そこで今回は、周知活動キャンペーンとして、◇◇◇……の方々、を……」

「……………」

「……として起用することになったそうです」

「……………」

◇◇◇、もう準備できているんですか!?! ……こほん、失礼しました。 それで

「……………」

は中継をつなぎます! フラッシュに……」

それにしてもこのキャスターの人、新人さんなんだろうけどつつかえつつかえだし素の言葉遣いが出ちやつてる。

後で怒られるんだろうなあ……かわいそうに。

◇◇

◇◇

◇◇

「……………ん」

目が覚めるときって急に物を考えられるからすごいよね。

「?」

なんで僕そんなこと今考えてるんだろう。

まあいいや。

それよりなんだか画面に映っているこの子たちに見覚えがあったんだ。

誰だっけ……?」

そんなに前じゃないような……?」

あのときはメガネだったはずだけど◇な子と、髪の毛を後ろでひとくくりのポニ◇

テールさん。

どこかで見◇覚えがあるような?



なんか印象的だったのは間違いないんだけど、多分僕から一方的に1回くらいしか見てない気がする。

誰だっけ？

確か僕がこの体になって――。

「むー？」

と、記憶を中から掘り出そうとしてやつきになっていると画面のすみっここのほうにもっと見慣れた人が居て。

「えー、彼女たちは……として有名な◇◇◇……として1年ほど前から……」

「今回は彼女たちが……で影響力のある、今人気のアイドルということもあり……」

……あのガタイの良さと高い身長、だけどどこか僕と似た雰囲気を感じないでもない感じの彼。

……◇村さん？

あれ？

……ガタイなわりに優しげな、◇◇………忘れた。

「……………」

……ああ、萩村さんだ萩村さん。

ついこないだ来ていたDMまがいの◇◇◇の送り主が画面に映る。

スマホって便利だな。

登◇しておいてよかった。

それにしても最近会っていないからけっこう懐かしい感じまでするな。

連絡はメールでいちおうは取っているけどしよせんデータでしかないし。

ということはこの子たちは……………ああ、思い出した。

僕がハサミに追われていたころ、家から出て駅に向かっていたら萩村さんにばったり会ったんだっけ。

そのときに黒塗りの3台くらいの車から出てきたのがポニーテールの子と学生服で目立つメガネをかけていた子だ。

2人とも高校生くらいの女の子で……………あー、そうだった、結構はつきり思い出せた。

テレビに映ってるのこの子たちだ。

萩村さんも隅っこに映ってるし……………お仕事もらえたんだね。

けどなんかアイドルさんたちにしては物々しい雰囲気。

なんなんだろう。

けどそれを目指してたんだろうし、応援してあげよう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

でもこの時の僕の頭は、それより先へは上手に働いてくれなかった。

「なんだか懐かしいなー」「あときはまだスカートにも慣れてなかったなー」「あとあの日にかがりに再補足されてこうなってるんだよなー」くらいしか考えられなかったんだ。

## 21話 関澤ゆりか (1) 2/5

「……………」  
僕は考えられないし認識できない頭でぼんやりしていた。

このときの僕には分からなかったんだろうし……そもそも自分の顔なんて普段は見えないんだから、もうちょっとしつかりできていたとしたって分からなかったんだろう。

でも、このときの僕の目はまっくらになっていた。

真っ白な肌なのに真っ黒な目になっていた僕は考える。

……テレビの前の◇◇◇◇◇のふたり。

この体になって少ししたころ。

たしか暑い日差しから逃げようとぬいぬいしていたころのこと。

◇◇◇が飛んできたころ。

ハサミさん。

それで思い出すんだ。

萩村さんに送迎されていた子たち。

遠くから見た姿と車の中に残っていた良い匂い。

僕のほうから一方的に知っているだけの子たち。

かがりのおかげで今ならあの子たちが香水で、よく彼女に連れられてデパートの1階とかで試させられることがある匂いの中のどれかに似てるんだって分かる。

「ただいまご紹介にあずかりました◇◇◇◇と」「◇◇◇◇ですっ!」

「私たちは◇◇◇◇を受けて私が」「私は◇◇◇◇したんですにやっ◇」

へー、そうなんだ。

そう思ってるのに認識できてない不思議。

まるで夢みたいだよね、こう言うの。

おかしいのに気がつけない辺りが特に。

でも「にや」とか……こんなまじめな会見でもさすが芸能人、いやアイドルさんだからかキャラを守っているらしい。

それが「けしからん」って言われないう程度にはこの子たちが必要らしい会見っていうお堅い場。

大変だなあ……◇◇◇◇って。

でも。

「……ん——……………?」

頭がくらくらする。

テレビの画面がなんだか◇◇◇◇◇◇している。

「あー……。すみませんですよ、ごめんなさいですよ！ ……え。つ、続けていいんですよ？ あ、はいですよにや。 ……マジですかにや、天下の◇◇局なのに……

あ、今のはカットお願いしますにや。 で、これは◇のせいなので今のはキャラ付けとはふだんの私のキャラクターとはなんの関係も」

あ、なんかこの子たちのにもダメなんだ。

「まじめな場なのでできるだけ抑えようとはしているんですけどちょっとでも」

「……………あああ、写真は!! 写真は……………そんなに撮ったらダメですよあああ！ 今は、今はダメですよにやああん!!! ◇えている今は恥ずかしいですよにやんつ!!!」

なんか悶えてる。

……顔も真っ赤だし声もうわずつてるしで正直こっちの方がやばいんじゃない？

「え、えーつと……………相方が騒がしくなつてごめんなさい。キャラ付けもあるんですけどそれ以上に急にこんな大舞台は予想外だったのでどうか大目に見えていただけると。

この子、まだ◇◇ですし。 ……と、見ていただいたとおりに」

「そのとおりです。 ……と同じように、……………に繋がる◇◇でしたっけ？ ……はい、これまで公表が伸ばされていた理由」

そんな大ごとになってたんだ。

でもなんで僕はそれを全然知らなかったんだらう。

◇

「……………や、……………じゃないと、そもそも当の本人ですら気がつかないことも。◇

◇◇◇◇◇ということだそうですね」

◇◇◇◇◇

「にやつ、にやああああん!!! ……ちゃん、助けてですにやつ!!!」

「あ、これはカンペ、◇り書きみたいな感じそのままなので、そんな感じで書いてあるまましかなので、これ以上のことは今の私たちには」

◇◇

「それでは質問もどうぞ！ 枠は充分にあるので、っていうか、たぶんそのうちに各局スタジオの方に」

「私たちもさつきここに連れてこられて強制的に知らされて諦めたばかりなので詳しいことは、ですけど。まあ、◇の半分くらいはまちがってはいないという感じでしょうか」

「……………あ、やーっぱり聞かれますよねえ、これ。◇◇◇◇◇。あはは、急に怖い人たち

に囲まれて着替える時間も余裕もなかったの……………あのときは、なにかに◇◇◇◇ま

れたのかと。 もー終わりかと思いました」

「これですかにや？ これは相当集中していないと難しいのです……にや。 やっぱり  
ですにや？ む◇◇◇——…」

夢の中は素敵な場所。

「……………」  
僕は独りぼっち。

「……………」  
でも今はそうじゃなくなってる。

「……………」  
その関係って言うのはぜんぶ、僕が言いだした嘘っぱち。

「……………」  
……僕は、◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇。



映画館って独特の雰囲気だよね。

滅多に行かないけど僕は好き。

行くって言うっても月に1回程度が上限だろうけど。

だってほら、普段は高いし……。

あ、でも、そつか……レディースデー。

僕は肉体的には女なんだし、来ようって思えば結構お安く……？

ああいやでも子供ってことで安くなることは確かか。

ああいやいやでも学生証って言う切り札がないんだ。

「さっすがに封切りしてすぐだから人でいっぱいだねえ。 普段はがらなのにさ

？」

僕の次にちっちゃい子が言う。

「いちばん見やすい席くらいしか埋まらないことのほうが多いのよねー、最近は。 最

近はって言うっても私が産まれる前からこうだってお父さんが言ってたけど」

「確かに混んでいるな。 ゆりかが取っておいてくれなかつたら見づらい席でも取れた

かどうかだ」

彼女が言うくらいには混んでるのにびっくりしたもん。

こんなの僕が子供のころくらいが最後じゃない？

ホールのなところにみんなで立つて待つとかすごい人気なのかな。

「でしょつ。私、期間限定グッズの購入とかで慣れているからさー、こういうの得意なんだよ！ ほめてほめて響ほめて超褒めて！ 私を褒め称えよ!!」

「ああ、ゆりかはすごいな。助かった」

ぴよんぴよんしてるゆりかがほほえましい。

わず頭をよしよししてあげたくなるけど僕の方が背が低くなっている悲しさで手が引っ込んだ。

「むふーっ！ あ、そだ、響響、私の頭も撫で……ムリか。背、ひつくいもんねえ」

「それ、君自身にも返ってこないか？」

この子、低身長がコンプレックスだつて言ってる割にはその話でよくいじってくる気がする。

僕くらいにしか言えないのかもね……ほら、多分「小学校高学年の子供に負けない」つて言えない身長だし……。

「……すつごく返ってきた。うあー。……牛乳、ちゃんと飲んでるのになあ……なんでだろ」

「体格は遺伝と幼少の食事が大きいらしいね。……君は、いや君も、きつと……もう」

中学とか高校でいきなり背が伸びるつて言う子も少くない。

けどなあ……平均よりずっと低いこの子にその希望があるかって聞かれたら……。

「言わないでえええ……」

床は絨毯で色合いは高級感を醸し出している空間。

歩くとぼふぼふとかぼふぼふって感じの足音が返って来る。

そうしてポップコーンの匂いで包まれている独特の空間。

僕はゆりかとその隅っこで、ほんの十数分の時間をつぶすために普段以上に中身のな  
い会話をしている。

だって今日はミニマム級ふたりだ。

この人混みに飲まれたら息苦しくて仕方ないので意見が一致しているんだ。

「今から観る映画。 評判もかなりいいみたいだね」

何日前かに「観ない？」って誘われた映画館での映画。

「観ない」って言うおうとしたけどなんだかんだで来てる僕。

だってほら……かがりの相手に比べたらすっごく楽だし……。

「みたいだねー、だからこそなるだけ早くって思ったんだけどね？ せっかくだし？」

この監督の作品も外れは少なくってヒットも多めだしさー、特に最近は。 書き込みとか

ざっと見た感じ今回も期待できるみたいだよ？ PVとか観たでしょ？」

「まあね……なかなかおもしろそうだな。 僕も普段は来ないけどたまには映画館で観

るといいうのも雰囲気があるからいいね」

「そだねえ。映画館には映画館の魅力があるよねー。まー、本来映画ってそういうものだったはずなんだけどさ？ 私たちが生まれるずっと前の話らしいけど」

「いつの話になるだ、それ」

「んにゃ、先代のかな？」

ゆりかつてよく適当なことを言う。

それで分からなくなったり飽きたりするとまた適当な返事でごまかす。

でもそれは嘘じゃなくてただの冗談なんだって分かる形になってるから不快にならない。

すごいな、そういうのって。

僕にはできないだろうテクニクだ。

とりとめもない会話をしながら壁により掛かって周りの人をぼーっと見る。

この雰囲気、ほんとうに懐かしいな。

最後にこうして誰かと映画館に来たのって、たしか……中学生のとき家族で。

そうだ、寒い夜に父さんの運転する車で……だったっけ。

10年も前のことで今まで忘れていたことも何かの拍子で思い出す。

記憶って不思議だな。

「……………」

「ほよっ…」

ふと目を上げると黙った僕を見ていたらしいレモンさんと視線が合う。

だいぶ伸びてるなあ、前髪。

もはやぱつつと呼べなくなりつつある。

いちど定着したからたぶん呼び続けるだろうけど。

「……………」

「やーん、ねつれっ…」

あと、今日は冷房が寒いかもって言ったおかげでいつもより露出が少ないから安心だ。

僕は別にこの子の肩とか二の腕とかおへそとか太ももが見えてたってなんとも思わないけど……でもやっぱり中身が男なもんだから、どうしたって視線が引き寄せられる。

それをごまかすのが大変なんだ。

「……………」

「……………」

どうやら何十秒か顔を見たままにしちゃってたらしい。

顔が赤くなっちゃってるゆりか。

人と目がじーつと合うと誰だつてそうなるよね。

僕つて目からの信号とかより考えてることを優先するおかしな脳みそしてるからなあ……。

動物にとつて目を合わせ続けるのは「ちよつと面貸して？」つていう意味になるらしいし、良くない癖も治したいところだ。

「おう………。ん、んーつ。そ、そうだ響ー！ ポップコーンとか食べるよね？ せっかくだし映画館だし！ たぶんゆつくり食べても序盤で食べ切っちゃうだろうけどさー！」

「ん？ ひとりじゃそんなもつたいたいことはないけど……そうだね」  
その点、家で食べると格安でドリンクまで付く。

多分10分の1の値段で味わえる。  
でもこの雰囲気は味わえない。

世の中つてよくできてるよね。

「だったらでつかいの頼んで分け合わない？ その方がお得でしょ？」

「うん……そうだな」

学生的にはここに來るのだから結構お高いもんな。

僕の金銭感覚と彼女たちのそれとは違うんだから。

「胃袋私の半分な響でもポップコーンなら見た目よりはお腹にたまらないしたくさん食べられるし? お昼軽くすれば大丈夫じゃない?」

「……それならたぶん大丈夫かな」

いざとなれば残ったら全部あげちゃえばいいし。

こういうときにこういう食べものは便利だ。

「こういうときの定番な炭酸が受けつけないのは残念だけど……仕方ない」

この体、味の感じ方とか特には変わってないんだけど、ただただ炭酸が苦手なのが不思議。

なんでだろうね。

「あ——……ポップコーンにはププシだもんねえ。 響、炭酸は気が抜けてきたのじゃないとダメだっけ」

「咳き込んでしまうんだ。 映画館でそれは悪いだろう」

「そだねえ……炭酸自体は好きだって言うのが残念だね。 私もちっちゃいころはダメ

だったなあーそーいえば」

僕、そのちっちゃい頃に戻ってるからね。

「ま、ダメなもんはしょうがないよね」

人のあいだをふたりでぬいぬいしながら売り場へと向かう。

駅とか繁華街とかと違って、人の流れがほとんどないのがこれほど楽だって感激してる僕。

いつもこうして楽に、前みたいにぬえるといいんだけどなあ。

人つて無意識で他人を避ける生き物。

でも目線より低いと悪意がなくても、たとえばスマホに意識を吸い取られていなくって視界に入らない。

視界に入らないと避けることもできないわけだからみんなは僕の方へぶつかりに来る形になるんだ。

だから子供が人とぶつかると言うのがあるんだろう。

子供自身も物理的な視野が狭くって、大人もそんな子供を見る方向な下へなんて視線を向けてないんだからな。

存在を認識していないものに気をつけるなんてできないもんな。

こつちのちつこいほうがぶつかられないように警戒する必要がある。

まっすぐ歩いていたはずなのにいきなり方向を変えたり止まっていたのに歩き出す人とか、思っていたよりもずつと多いしなあ。

悪意がないからこそ予測ができないんだ。



「……………」

「ひびきー、ちゃんと前見てー」

せめて普通の人の視界に入るくらいには背が伸びてほしい。

最低でも普通の中高校生くらいの身長。

理想は前とおんなじくらいだけで……どうなんだろう。

「あ、ダメだこりや。いつもの響になつとるわい。すいませーん、私たち並んでまーす」

この体。

幼女。

成長にはあと数年は待たないといけなくって、場合によってはそれすら危ういのが悩みどころ。

でも、たとえば体が戻らなかつたとしてもせめてもうちよつと大きくなりたいてって魔法さんをお願いしたいところだ。

横を歩いていたはずがいつの間にか前を歩いていた関澤さんの後ろの髪の毛の先っぽが、歩くのに合わせて肩に乗っかってはぴよんぴよんと跳ねている。

なんかこの子もかがりもそうなんだけど女の子ってせっかちだよね。

この子は小さいのにいちいち動きが大きいから余計に幼く見える。

……それならこの子よりちっこいけどゆったり動く僕はどうなんだろうね。  
「並んでもちっちゃいねえ私たち」

元ぱつつんさんに誘われて来た映画館は記憶にあるよりも綺麗になっていて、ATM  
みたいな機械とスマホだけですぐいとパスできるハイテクさに満ちた空間。

ずつと長いあいだこういうところに来なかつたからちよつとしたウラシマ効果だな。

元の意味は違うけど僕の頭の中だけだから好きに呼ぶ。

「ひびきー、このセットなんだけどさー、安いからー」

関澤さんが迷わずにスマホを使ってさつさとスマートに手続きを済ませているのが  
余計にジエネレーションを感じさせていて、年を取ったと自覚してダメージを受けたの  
はほんの少し前のこと。

僕ひとりで来たってそもそもとして一緒に観る人は居ないんだからひとりで無言で  
待ってひとりで無言で観てひとりで無言で帰るだけ。

「聞いてない……い、良いよね？ あの、私たち……」

それだったら値段が何分の1、しかも気に入ったら繰り返し観ることができて途中で  
休憩しても平気なレンタルに、そしてオンライン。

……ゆりかたちの世代にしてみれば映画館こそが特別な場所。

時間の流れって残酷だ。

「ただどうして誰かと話しながら歩いて、隣で座って体温を感じつつ一緒に観る時間を過ごすっていうの。」

「映画を観るのと同時に体験を共有するというか雰囲気を感じつつ感じて……これをもたいたいものって思う。」

「はああ……ははい。けど本気で聞いてない響、ある意味すげえ」

中学生まではよく来ていたなあ。

「母さんか父さんとくればもちろんだけど、その頃の友だちと「一緒に行きたい」って言えばおこづかいとは別に、映画館と飲み食いするお金まで出してくれていたしな。」

「少なめのおこづかいな代わりにそういうシステムになっていた。」

「今は家のお金丸ごと預けられた代わりに父さんも母さんも居なくなつて、僕が全部決めるシステム。」

「……………」

「お、戻って来そう」

……………ん。

「なんだかノスタルジックになっていたら……いつのまにかゆりかが身の丈に合わない大ききのトレイに顔まで隠れる大ききのポップコーンを抱えていた。」

「なんかサイズ感違くない……?」

なんかアリス症候群的なの再発しそうでやなんだけど……う？

「でかい」

ちっこいのがでつかいのを抱えている。

そりゃあ重くなくてもでかいよね。

「持とうか？」

「嬉しいけど……でも響が持ったらこけたりしない？」

うん、僕もそう思う。

「響、私より腕の力とかないじゃん……いいよ、私のほうが大きいから。少しだけでもマシだから。ほら、10センチって言ったらちようどのポップコーンの上の端っこがはみ出るかどうかという超重要なところで!!」

「……………」

「…………ごめん」

「ん？」

「今の、さっきの軽い仕返しのもりだったんだけど……怒った？ よね？」

「いや？ 別に」

なんか急にしゅんってしてるって思ったら僕たちの背丈って言う真理について揶揄していたらしい。

いやまあ僕も今君がちっちゃいなって思ってたから別に平気だよ？

でもなんか珍しい表情をみていたら、ふと……なるほど、これが嗜虐心っていうやつ。  
「どんぐりだなと思っていただけだよ」

「どんぐり。……たいして変わらないってこと?! それ怒ってるでしょ?!」  
「いや?」

あー、こういうのゆりかにはちやんと通じて楽だ。

かがり相手にこうすると「それはどう言う意味なのかしら?」って聞いてくるから解説しなきゃならないっていう泥沼になるし。

「……ひびきー? 感情はちやーんと顔に出さないと伝わらないよー?」

「だから怒ってないんだ」

「いいのいいの、私も分かるからその気持ち。体育とか身体測定でみんなから『1番前に並ぶんでしょ?』って目で見られて私が先頭の基準になる悲しさよ……先生とかも自然私の前に立つてくるしい……よよよ……」

怒ってないってのになんか自爆してる。

小さいのにはもう諦めているし怒るはずがないじゃない。

だって僕の真の姿って言うのは君よりずっと大きいんだから。

## 21話 関澤ゆりか (1) 3 / 5

この体になって良かったことがある。

背が低いってことは視線が低いから視点が低くって視野が狭いんだ。

もちろん人混みとかじやマイナスにしかならないんだけど、僕みたいに寝てるとき以外はずっとなにかをもやもや考えてる人間にとっては良いことだって思う。

あんまり周りを見渡せないもんだから情報が制限されていて……うまくは言えないんだけど、なんかこう……楽なんだ。

普通は人よりよく見えてる方が良いって思うんだけど、どうやらそうじゃないらしい。

不思議だね。

僕の頭の出来は普通だから何ともないけど飛び抜けて頭の良い人とかは病んじやうって言うし、その逆だと将来の不安とか考えずに済むって言うし……案外そういうものなのかも。

うん。

かがりのあの様子を見ていたら本当にそう思う。

いや、別にお馬鹿さんってわけでもないんだけど。

「……そういえば」

関澤さんが取ってくれていた席を案内図で見ながらつぶやく。

「席は……けっこう前のほうなんだね」

「うん。響はあんまり映画館来たことないんだよね？ だから教えたげるけど、こんな風に席の大半が埋まっちゃうようなときにはさ？」

「私たち同志は」

「……………?」

同志？

なんだっけそれ？

「……………あ、小さい同士か」

「……ひーびーきー、ほんつと忘れんぼなんだから。そろそろ覚えて？」

ほっぺを膨らませるちっこいの同志もとい同志。

スマホで入力した漢字を見せられたから訂正する。

……この子って変なところのこだわりがあるよなあ……。

こだわりって言うかはまってる作品のキャラの真似っこだろうけども。

「で、同志はね？ 通路の真後ろっていう1メートルくらいの前方の空間を確保しとい

て、前の人の頭で視界がジャマされない席が大切なのっ」

……背伸びをするようにつま先で立ってアピールしようとしてポップコーンを2、3個こぼしてわたわたする。

いつつも演技過剰だな、この子。

でもちゃんと拾っているのはえらい。

……さすがに食べないよね？

あ、良かった、ちゃんと足元に置くだけか。

良かった良かった、この子がそこまで食い意地張ってなくって。

「響？」

「何？」

「……」

「……」

何でか知らないけど女の子って僕の考えたことを察するらしい。

オーラってやつをちよつと使えるらしい不思議な生き物。

じとーつと見てくるから表情筋の力を抜いて脱力だ。

「……で、それが取れなければ前の方の席。首は疲れるし痛くはなるし音も大きすぎで画面も見づらいからできれば別のを取ったほうがいいんだけどー、どうしようもなければそっちもあり。　　そういう見上げるような不人気な席でない……運が悪いと



前がみーんな背の高い人とかで最低でも視界の下半分がジャマされちゃって散々なのだよ」

「なるほどね」

小さき者の宿命か。

大変だな。

なにをするにしても標準しか考慮されていないこの世の中、それから外れるほどに不便さ押しつけられる。

その標準の中のさらに標準だった僕としては、こうして気がつかないところで誰かがちよつとイヤな思いをし続けていたことをこの体になって初めて知ったんだ。

僕自身で体験して実感してみないと分からないことって本当に多いよね。

知識としてはどこかで聞いていて知っていたはずなのに、こうなるまで本当の意味じゃ知らなかったんだ。

「……………」

「もきゅもきゅもきゅもきゅ」

映画が始まるどころかまだ入場前。

でも手持ち無沙汰のあまりぷちぷち食べている僕たち。

けっこうな量だし多少減っても問題ないだろう。

僕はどうせ食べきれないんだからどうでもいいしなあ。

「まー普段なら空いている時期と時間帯狙うし見やすい席でも苦労しなくても取れるし？ ……んむんむ。 ……んでさらに言えば良い席以外はがらなことが多いから、前に背の高い人いても始まってから別のところに移動できるしね。だから、普段は気にしなくてもいいの。予告終わっちゃえば入って来る人ほとんどいないし」

自称同志な関澤さんの講義が続く。

この子って語るときはかなり早口になるから聞き取るのが大変。

それでもかがりの方がもつと大変だからこのくらいは余裕なんだ。

「だけど夏休みの昼間、しかも公開したばっかのこのタイミングは……ねえ。レディーステー狙ってきたし背の高い男の人の割合は低いはずだけど……私たちみたくたまたま今日のこの時間取っちゃうこともあるし。 ……かつ、 ……カツプルさんとか家族さんとかいるし？ ……ぱりぱり」

やっぱり映画とか普通は誰かと来るもんだよね。

ひとりで来てた僕は誰が誰と来てたかすら興味なくて観察しなかったな。

「詳しいんだね、ゆりかは」

知識を披露したら褒める。

この子たち相手に学んだ知識だ。

「まーね。 どーよ?」

「頼もしい限りだな」

むふんつとどやってるからさらに褒めておく僕。

「むふふんつ。 だてにいつも友だちの予約とか任されてないよ! 私こういうの好きだし!」

「将来有望だな」

きつと幹事とかもそつなくできるんだろうし、大学生以降の未来が明るいな。

持ち前のコミュ力というものも備えて完璧だろう。

小さいというのも武器にしてうまく生きていけそうだな。

かがりと違ってまったく心配のない子だ。

あの子はもうちよつと、その……年相応に経験を積めば、たぶん きつと……大丈夫かな?」

「……………」

……………心配だ。

性格は明るくって良いんだけど……やっぱり心配になる。

これが父親の気持ちってやつ……?

僕、彼女とかできる前に子持ちなの……?

「響もネット強いよね？ 他の友だちとか知らないの響なら知ってるってこと多いし。パソコン持つてるのも大きいよね。やー、スマホとかタブレットだけの子ってデープな話せないからさー」

「まあね」

そっか、今の子はパソコン持ってないこともあるのか……世代間格差は激しい。

スマホだけで何でもできる時代だもんな、そりゃそっか。

ネットも軽いゲームも電話もチャットも読書も映画もこれひとつで印刷ならコンビニだし……あれ、本当に要らない……？

「でも映画館には来ないんだ、響。映画自体は好きなのに」

「映画やドラマはいつもレンタル……じゃないか、オンラインになるまで待つてテレビとかパソコンとか。迫力を味わいたければホームシアターで観ているからな。気がつけば映画館に来るということ自体を意識することを忘れていたよ」

「ホームシアターとか……ブルジョア!! 敵だ!!!」

「何だブルジョアって……安いやつだよ？ たしか全部で10万くらいのじゃなかったかな？ スクリーンだつて大したものじゃ」

「きんせんかんかくう!! これだからお金持ち出身は……ぶつぶつ」

「え、えっと……」

拗ねるフリをしているゆりか。

ブルジョアとか、やっぱりこの子変わってる。

でも良いテレビとかがある家って多いしそこまでじゃないと思うんだけど。

シアターセットだってただのエントリーモデルだし、それで満足しているからぜんぜん投資していないんだけどなあ。

むしろ音響のほうが青天井っていうのは黙っておいたほうがよさそう。

サラウンドとか言ったらなんかまずそうな雰囲気だし。

それにホームシアターとかですらVRゴーグルに取って代わっちゃった感があるしなあ。

完全に寝っ転がれるのが最高なんだ。

お値段は……やっぱり高いから言ったら絶対なんか言われるだろうけど。

「ゆりか、そろそろ入れそうだよ？ ほら、並ぼう」

「うぬ……しゃあねえ……！」

テンションまで変な子だ。

よく分からない理由で楽しそうになるのは女の子共通なのか？

僕たちは小学生級だから、いくら夏休みで平均年齢が低いとはいっても背の高い人のほうが多い。

不注意でぶつかられてこぼされたりしないようにって僕もゆりかのそばで気をつけつつ一氣にできていた列へと並ぶ。

「大切な大切なポップコーンを死守せねば。もきゅもきゅ」

「……………」

金銭感覚。

彼女に指摘されてしまったように、これもまた気をつけておくべきだな。

学生にとつてはお金とは百円、千円単位だ。

万というのは年に数回の感覚的にはまさにケタ違いのそれだろう。

つまりは大金だということ、10万を超えるのはとんでもないもの。

僕は新しいもの好きだから結構な頻度でお高いものを買っちゃう癖がある。

うっかり口走らないように覚えておこうつと。



「いやあー……ラスト30分は怒濤だったねー」

無重力な世界から一氣に地上に降り立った感覚。

「ラストシーンなんだけどね？ 私、実はネタバレなしコメだったはずのものでまさか

のネタバレ食らってたから知ってたのよ。でも直前までどうやったらそこまで持っていくのか分かんなかったし楽しめてよかったー!」

「うん、いくらかは勢い任せなところもあつた気がするけどきちんと伏線も回収していたし、好印象だったね」

なんだかゆりかの声が大きいうように感じる。

映画が終わつたあとっていつもこうだよね。

「響は辛口だねー」

「いや、勢いというのも大切だ。演出とはいえテンポを損なってしまう作品も多いし」  
「ついそうやって分かつた気になつて言つて見るけど別にマニアとかじゃないからな  
んとなく。」

僕がおもしろいつて思う映画つてあんまりないからこれで良いんだ。

「お、お——……?」

「褒めているんだよ」

「そっか」

「どうやら伝わってなかつたらしいから捕捉しておく。」

「……………」

「んーつ……………1時間半でも長く感じる現代っ子よ……………」

暗い空間でひと言も話さず、なのに隣に座っていているってことがはつきりと感じられて。

序盤まではときどき手が当たったりしつぽップコーンをがさがさしたりジュースの氷の音が聞こえたり、ふいの静寂でぷちぷち食べている音がお互いに聞こえたり。

10年ぶりだったけどなかなか懐かしい体験だったな。

エンディングが終わって明るくなってからの非日常感もまた良いもの。

普段そのままパソコンの操作とかに戻っちゃうしな、家だと。

あれでも余韻は味わえるんだけど……こうやって時間をかけて戻るって言うのもまた良いかも。

今度から映画終わったらごろごろしてみよつと。

「……………」

それにゆりかも、いつもはずーつと話し続けているのに映画が終わったあとちよつとだけ無言のまま歩いていたのもまた新鮮。

こんな感じならいくらでも一緒にいてもいいんだけどな。

でもこの子もやっぱり女の子、普段はとにかくやかましい。

どこかにほとんど話せずにはいられる知人候補は存在しないんだろうか。



ただ傍に居てくれるだけで、できたら男が良いんだけどなあ……いらないかなあ……。

「ふいー……それにしてもやつぱこー、あれだよね。映画館から出たあとしばらくつ

てき、今みたく夢見心地でふわふわしてるよねー」

「そうだね。あのスクリーンからの光と音しかない環境がいいんだろうな。真つ暗

闇の中でただ座っていて……家だと他のことで気を取られたりして、つい気が散ってし

まうし。インターホンとか電話とか外の音とか……スマホの通知もそうか」

「そだねえ。でもさー？ まー？ ほうむしあたあーつてのがあるご家庭じゃ気にな

らないんだらうけどー？ ね——？」

「まだ言うか」

「ごめんごめん。それもまた響のひとつだからさ。あ、もち冗談だからね？ 怒ん

ないで？」

「分かっている」

気がつけば映画館からファミレス。

もうお昼は過ぎていているんだけど、でもまだ僕はお腹がいっぱいのままで、でもゆりかは少し空いているってことで入ったらしい。

ぼんやり何かを考えていたからまーたもうひとりの僕に任せきりだった。

日常動作と頭の中を切り離せちゃうのも人付き合いではマイナスだな。

フアミレス。

安いのにそこそこの味でおしゃべりしていても怒られない場所。

最近こういうところとの縁がほんとうに深いけど、ともかくここのチェーンはイスもテーブルも低めだから僕としては文句はない。

多分ゆりかのことだからわざわざここを検索しておいてくれたんだろう。

ありがたいな。

中学生らしからぬ心配りだ。

あー、いや、でも人の精神年齢って言うほど育たないもんだから案外僕と大差ないのかも。

僕も多分……そうだなあ、小学校高学年くらいからほとんど変わらない印象だし。

「でもさー響」

ふんやりと言うゆりか。

「やつぱりさー、見終わったあとこうしてさー。おんなじような感性持つてる友だちとすぐに感想言い合えるのつていいよねー。こうしてダラダラ食べたりしながらさー。響はまだお腹空いてないから付き合わせちゃってごめんだけど」

「……………そうだね」

まだ非日常が抜けない日常感が良いよね。

「こうしていい具合に気が抜けた状態でおもしろかったところやダメだったところを話せるのは……楽しいね。楽しいとはまた違う楽しさ……良く分からないけれどそんな感じだ。ライブとかが好きな人たちもこういう気持ちで通い詰めるのかもしれないね」

「だよな——……良いよねー、こーゆーの……」

クライマックス直前の緊張からのほっとした感じが抜けなくてぼんやりしている。頭も体もふわふわした感じがまだ残ってるんだ。

……お酒を飲んだときよりもちよつとだけ頭が冴えていて、でも気持ちいい感じ。

「……………じゃ、じゃーさ、ひびき」

「ん？」

意識を元ぼつつんに戻すと珍しくもどかしげにしている様子。

「……………じゃあ、さ。……………今度からさ、私の家で。じよ、上映会とかしない？とか言ったりしてー！」

「あははー」といつも通りの演技過剰で体をくねくねさせながら顔も真っ赤にしているゆりか。

この子って演技するからどこまでが本心なのかがいまいち分からないんだよなあ。

その点かがりみたいだな単純……裏表が存在しない……演技する必要がない子よりも

難しいんだ。

でも……確かに。

かがりには強制的に勉強会って名目で引きずって行かれたけど僕から誰かの家に遊びに行くって言うのはほとんどないこと。

かがりのそれでさえ10年ぶりって言う始末だしなあ。

……片方だけにお邪魔するのは不公平かも？

何でか知らないけど自分がしてもらってないってことについてやたらと怒る女の子の性質を考えると……この夏休みで1回はゆりかのところに行つた方が良いかもな。

## 21話 関澤ゆりか(1) 4/5

「親もいない家の中でふたりつきりとかはずかしーっ！」

「……」  
「なんでこう女の子ってテンションの上げ下げが極端なんだろう。」

「目の前でくねくねしているゆりかを見ながらそう思う。」

「やーんー！」

「……」  
「かがりとはまた別の方向性で元気だよなあこの子。」

「会話の中のととした何かですぐにこうなるもん。」

「やーんっ……あはは……」

「……」  
「で、いつも途中でテンションが元に戻って来始めて自分のそれに気がつく。」

「いつも絶対最後まで気がつかないかがりとはまたまた違いがあつて興味深い。」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

……反応、しようもないよね？

僕がこういうのに反応してふたりして騒げる性格じゃないって知ってるだろうし……。

だから僕はただただ待っているんだ。

彼女はしばらくそのままくねくねしていたけど……すぐに疲れたらしくゼーゼーとして「こほんっ」とこれまたわざとらしく、そして顔だけ赤いまま何食わぬ顔で続けるらしい。

たくましいね。

子供はなんにも考えないでノリとテンションで乗り切れるからすごい。

あ、でも、大人だってお酒が入れば大差ないのか。

「……うち、テレビもたいして大きくないしき、響んとこほどの環境じゃないだろうけどさ。でも響のそこは……そのお、あんまり人を呼びたくないかもだし？」

「ん、まあね」

呼んだらこの関係も終わるしな。

どうせ終わらせるんだけどそうにしても穏便にしたいところ。

なにが洋館の豪邸か。

どこからどう見ても普通の一軒家だもんな。

じいやとかメイドさんとかなんて空想の存在だ。

かがりが毎回テンポ良く妄想を吐き出すもんだから……。

「響にとつてはともかくさ、私にとつてチケツト代とセットので2000円つてのは毎回は厳しい……んだけど、その、さ？ 買ってくれば500円しないじゃん？ うちもオンラインの定額のやつで観られるのあるしき？ 買つても数百円なわけで合わせても1000円しないし？ あと響用に適当に振つたりすれば炭酸系もちょうどいい感じに抜けるし？ あとトイレ休憩がほしいし？ ガマンしたあとのあの行列はもーイヤ。 さつきすつごく待たせちゃったしきー」

「ふむ」

なるほど……学生的にはそのほうが良いよね、映画観るなら。

僕としては予定をみんなこうして楽に消化してもよかつただけど、それだとちよつとおこづかいが厳しいのかな。

考えてみればそうだったな。

そりやそうだ。

かがりみたいにダダ甘の親からなんだかんだでもらえるわけじゃないだろうしな。

あと、確かにあの行列は大変そうだったし。

毎度毎度のこととはいえ女性はトイレすら大変なんだしな。

僕は何食わぬ顔で男のほうをさせるから平気だったんだけど。

このときばかりはこの体に感謝だ。

もつともこの手は、かがりに女装させられて……いや、肉体の性別的には正しいんだけど……ともかくスカートとかで髪の毛を出していたら使えないんだけど、ゆりかとのときはパークーズボンでいいから遠慮なく使えるもんな。

ほんと、トイレが近いのに10分15分立ったままとか大変そう。

女の子って大変だね。

夏休みもまだ2、3回こうして出かけたらしいしそのあとも週に1回くらいは会いたいって言っているし……それを映画で解決できれば僕がとっても楽な気がするし。

観ているあいだは話す必要もないしで楽だし終わったあとの、この懐かしい感じも良いし?!

悪くはないか。

「夏休みはともかく、そのあとは学校もあるだろうし。たまになら良いかな」

「やたっ!」

ぐつと握りつぶしな演技さん。

よつほど友だちと観る映画が好きらしい。

純粹に喜んでる姿ってほっこりするよね。



前に自分のことを考察班とか言っていたし、観たあとにあれこれ話し合うって言うのが観るのと同じくらいに好きなんだろうな、きつと。

探偵ものとか、犯人とか手口を予想しながら読むタイプらしいしな。

僕はただぼーっと読むだけだからその気持ちはよくわからないけども。

ああ言うのってちゃんと頭が良い人しか推理しながらストーリーに着いて行けないんじゃない？

「でもや」

「……？」

「あ、う、……………」

「……………う？」

なんか黙っちゃった。

なんだろう。

でも僕はじっと待つ。

話したいことがあるんだけど頭の中でうまく組み立てられなくて、それが目の前の人で焦ってもっと崩れちゃう系の、僕もよく分かるし。

「……………やっぱや」

「ん」

くつろいでいるところにぼつりとしんみりとした感じで再開。

「やっぱね。響とだとき。好きなものとか話題とか。好きなこととかおもしろいつて感じるツボっていうのかな。そういうの、合うんだよね。私でも知らない作品とか知ってるし。学校とかでもそこまで詳しい人いないし。同い年で私より詳しいの初めて会ったんだよ? リアルでさ」

そこは年の功ってやつなんだ。

むしろこの子は「なんで僕が子供のころの知ってるの……しかも僕より詳しいし……え、引く……」ってレベルでマニアックに知ってるもんなあ。

「それにさ。……その、響ってクールっていうより無関心って見えるんだけど……実際は違うよね? 私が『こんなの見た』『こんなの知ってる?』って聞いたりしたのとか、あとで見といてくれたりするし。別に頼んでいないのにね。でも、実は知っててほしかったりするの。それを次会ったときに響から言ってくれるの」

時間だけは余っているしなあ。

いくら勉強するって言ってもほんの1, 2時間程度だし、朝から夕方までの学生だろうと社会人だろうと束縛されているはずの時間をみーんな自由に使えるっていうのは大きい。

しかも魔法さんのせいで……ああいやニートだからどっちにしたってこれからずっ

とヒマなんだ。

だから娯楽はあればあるほどいい。

でも世の中にはその娯楽はあふれているんだけど「僕の興味」っていうアンテナに引つかからないのにはそもそも気がつくことがない難しさ。

でもでもゆりかみたいなのは身近な人から勧められると途端に親近感が湧いて「じゃあちよつとだけ見て見ようか……」って気になれるっていうの知ったから。

あんまりおもしろいって感じなくても「でもそれもまた話題になるか……」ってぼーつと見ているうちに途中からおもしろくなること、結構あつたしなあ。

内輪で盛り上がるっていうのはきつとこういうことなんだろう。

それをこの歳で知ったんだ。

だからそのお礼として僕自身も話したいから話してるだけなんだ。

「そういうのってすごく珍しいし。それに……その……んー。……私に合わせようってしてくれているのが分かるから、その。えーつと……あはは、けっこう嬉しいんだよ。他の子はそもそも関心がなくなつて『ふーん』で終わるかだしさ」

「……そうか」

……僕も今「ふーん」って返事しそうになつて焦つた。

「……うわ、こういうのこっぴざかしい……」

ずずーつと音を立てて、ストローの先からかすかに残ったジュースをすすっているゆりか。

そういうところが子供っぽさで僕以下なんだけどなあ。

でも中学2年生って言ったなら青春なんだからそういうのもいいんじゃないかって思う。

青春。

良いよね。

僕も体験したかった。

「私ね、響。響みたいに価値観とか近くって、性格も合って。んで一緒にいて心地よくって。こうやって趣味についてたくさん話せる友だちって、ずーつと欲しかったんだ」

今日のゆりかはやけにセンチメンタル。

さっきの映画に影響されたんだろうね。

僕もそういうのあるから分かる。

「だから、響とこうして映画にきて嬉しくなっちゃった。ごめんね、映画のあとだからなんだか感傷的になっちゃって」

「良いんじゃないかな」

僕にとっては普段の、海外ドラマとかアニメみたいな大げさな演技しているほうがよっぽど恥ずかしいって感じるしな。

これが感性の違いってやつだ。

指でぱつっつんをくるんくるんとしながら立ち上がって「混ぜてくる!!」って宣言してドリンクバーへと小走りで行く関澤さんの後ろ姿をぼんやりと見る。

……たとえ恥ずかしくても、ああして素直に自分の思っていることをちゃんと伝えられるのって少しうらやましいな。

僕だったらそもそもあまり気持ちが悪く動かないし、珍しく動いたとしたって「別に今言う必要はないか……」なんて思っちゃってけつきよく言わないってこと、ものすごく多いしな。

だからSNSとかも見ると専らだ。

友だちがネットにさえ誰ひとりいないって言うのもあるけどさ。

「……………」

素直で率直。

そういうの、これから目指していこうかな？

どうせ先は長いんだし。

服装に興味なかった僕でも毎日気にする程度にはなれるんだし、スカートやワンピース

ス……ワンピースを身に付けてるときは膝同士をくっつけようって意識できるようになっているんだ。

たつたの半年でこれなんだ。

僕もまだ主観的には若いんだ、なんとかなるだろう。

「……………ふふんっ」

またしてもオリジナルブランドにしたらしい、どす黒い茶色って感じのジュースを持って帰ってきたゆりかの顔はさつきまでの紅くなっていたのからすっかり元通り。

「あ、そーだ響」

「ん？」

ぼふんと座って話しかけてきた調子は完全に普段のそれ。

「さつきさ、買うときにぱっと店員の人に答えちゃったけどさ……そのー、カップル割ってやつ。あははっ、期間限定だったし珍しいからつい頼んじやったよー、響もこっち見てなくてどうしようか聞かなくてごめん！ あれ、イヤだったりした？ やっぱカップルとさー！」

いつも通りの無駄なテンションがまぶしい。

「いや？ 別に、安くなるに越したことはないと思うよ？」

カップル割。

そういうものがあつたらしいね。

でも帰るときになんとなく見てみたけど大したことはなかつたけどなあ。

カップル割とは言いつつ単純に2人用のセットのことでしょ？

別に男女じゃなくても家族連れとかでもなんでも2個ずつならどういう組み合わせでも割引しますよっていうだけのやつ。

ただ量を多くして、でも値段はそこまで上げない。

結果的にお客さんはちよつとだけ多めにお金を出して倍以上の量を手に入れて満足して、お店もちよつとのコストでお金が多めに入ってきて満足するっていうだけのものだよね。

なんかプレートとかストローとかがハート型になつていた以外には安くなる利点しかなかつたもんな。

反対に持つてみればただの桃の形だし、別に僕はどうだつていい。

それにせつかく安くなるんだ、僕はともかく中学生な彼女にとつては貴重な割引。

お店の人がふたり連れと見ればいちいち聞いていて、女性同士はきやつきやつしてて……男同士は「えつ……」て感じだったのが地味におもしろかつた。

店員さんもああいうのは楽しいだろうな。

お仕事も真面目なだけじゃなくてユーモアつてやつもきつと大切だよな。

「……そっか。 ……んう——……」

何杯目かになるジュースを飲みながら何かを考えている。

いつもの僕もこんな感じに見えているんだろうか。

見えているんだろう。

別にたいしたこと考えているんじゃないんだけど考えの中に埋まっていくクセってやつ、小さいころから治らないもんなあ。

いつも待ってもらっているんだから僕も待たないと。

こういうのはお互いさまだ。

「………」

「………」

「………んじゃ……さ。 ね、響。 この話の流れのついでだし

……聞いちゃっていい？ やだったら聞かないフリ、してくれてもいいから……さ」

「ごうごう」

なんだか妙に歯切れ悪い感じの関澤さん。

トイレかな？

「………んー、えつとね。 あー、えつと、その——………」



「……………」

もじもじしている。

トイレなら恥ずかしくも何ともないだろうから違うか。

まだおセンチを引きずってる？

なんだか髪の毛を触りだした……少しでも大きい服を着ているとレモンが確認できなくなる悲しい元レモンさんは「んー」とか「んあー」とか言うばかり。

1分くらい経っておずおずと見上げてきた彼女は……けどすぐに僕から目を逸らしながら言った。

「ひ、ひびきって、さ。今、その、ね？ その……付き合ってる人とか。あ、ええつとつまりなんだね、好きな人とかっているのかねって聞いてみたかったのだよ。

……………じゃなくて、その……いる、の、かな……？」

## 21話 関澤ゆりか (1) 5 / 5

「うひゃ——ハズい……」

僕に付き合ってる人について聞いておきながら自分が恥ずかしがっているゆりか。

……かがりのときもそうだけど、最近立て続けに変なことばかり聞かれている気がする。

本当に女の子って好きだよなあ……。

きつと学校での話題もそういうのばかりなんだろう。

学校とかつて、仲の良い男女のグループ同士以外はそんなに話さないよね。

きつと話す話題が根本的に違うのをお互いに分かっているんだろう。

でも、聞かなくてもそういうのが好きって分かるかがりならともかく、ゆりかまで言  
い出すなんてな。

まあ会ってから半年近くして初めてなんだから本当に単純な興味なんだろうけど。

なんだか真剣そうだったから、なんかもっと重要な言いにくいこもの……僕の家とか  
学校とか病気だつて言い張っているものみたいな、ついてる嘘について突っ込んで聞か  
れるのかつて身構えちゃったけど損した。

……嘘って一回ついちゃうところやって何かある度にちくちくするんだなあ……つらい……。

つらいけどゲロるか隠し通すしかないんだからどっちかを選び続けるしかないよな。でも僕と同じく恋愛というものに興味がない……あ、いやこの子キャラクター同士のとかについてはうるさいんだつたな……そんな感じのゆりかから僕についていうの、なんだか不思議な気持ち。

なんだろうね、これって。

「……あ、ごめん、言いたくないならいいよ？ やな話題だったりしたらスルーしてくれてもぜんぜん大丈夫だから！」

なんだか急に早口になっているゆりか。

「きゅ、急にこんなこと言ったのだったきー！ え、えーつと……そう！ ここ最近の登校日でさ、『夏休み中に告白して付き合うことになったんだー』みたいな子が同級生でけっこー出てきたりとかしたからで！ いやっ！ その！ 私はもちろん違うんだけどさー、でもなんだか気になっちゃったただだからほんと気にしなくて良いから!!」

この子は普段からマンガとかゲームの話題だとすぐに早口になるから聞き取るのが大変。

下条さんが着せ替え中にとめどなくしゃべっているくらい早口だけど彼女とは

違つて基本的に意味のある内容だから聞く気になれる早口。

それでもなかなか大変だ。

かがりの早口の9割は聞き流すけどこの子の早口の5割くらいは聞き流さないくらい？

でも、よくこんなに早く口が動くよなあつていつも口元を見ながら思う。

女の子つてかなりの割合で饒舌だよな。

男ががんばつてもこうはならないって思うし。

こんな感じなんだから口げんかをしたつて絶対に勝てないって分かる。

まあ僕は男の中でも寡黙な方だからさらに勝率が下がるんだけど。

多分小数点以下くらいしか見込みないんじゃないかな？

にしてもわたたしながらすつごい早口の小学生に見える中学生。

ぱつつんが左……あ、彼女からすれば右か……そちの方だけまぶたにかかつて結構頻繁に手で払っている。

僕の前髪もそうだからそのめんどくさき分かるよ。

でも僕と違つて自分の意思で切れるんだから切ったほうがいいと思うけどなあ。

いやでもおしやれのためだったりしたらしょうがないのか……髪の毛命な女の子だし。

めんどくさいことをするほどにおしゃれになる不思議な生き物だからなあ。

男なんて髪の毛とヒゲを整えるだけで良いのにね。

かがりにいろいろ雑誌を見せられながらお説教される日々だけど……その化粧とか髪の毛のお手入れの大半は男視点ではどうでも良いものだから「それって女性同士の見栄の張り合いなんじゃない？」って思う。

でもそう言ったらとんでもない目に遭わされそうだし止めておこう。

「おしゃれすれば分かるわよ！」って服屋と美容院とのループになりそうだし。

間違いない後悔し続ける時間になるだろう。

「えーとそのう……とにかくね！」

「うん」

しゃべってるうちに言いたいことが見つかってくる感じになったらしい。

「さつきまで見てた映画のラストの……その、き、キスとかその先の……む、結ばれた場面……とか……」

中学生ってそういうのにいちばん敏感な年頃だよな。

無菌状態の小学生からいきなり……ああいや、女子って高学年からこうなるんだっけ

？

僕はこの歳まで無菌状態で育ってきたから全然分らないけど。

「今のカップル割とかでソーユーのでなんか浮かんた疑問だし！ あ、いや私はきよーみなくもないんだけどともかくそんなわけだから、ぜんぜん答えなくっていいから!!」  
こんなに手を振り回して疲れないのかなってくらいに激しいボディランゲージ。  
こんなだから幼く見えるんだ。

「僕は別に平気だよ？ ただ君が話し終わるのを待つていただけだから」

「あう」

なぜかささらに赤くなっていくゆりか。

よく分からないけど、多分思ってもないことまで話しちやっただらう。

緊張していると勝手に口がしゃべっちゃうんだよね。

すっごく良く分かる。

「君は普段から恋愛の話題とかしたことなかったから少し驚いていただけ」

かがりとおなじ女の子って生物のはずなのに半年のあいだ1回も……友だちが多いらしいのにその人たちについてすらもひと言も言っただけだからなあ。

だからこそ気楽だったんだけども。

まあ1回2回なら良いけどさ。

「それに」

「それに？」

「……あ、いや。ただ、つい先日と同じようなことを聞かれたばかりだったからデジャヴみたいな感覚になってね」

こういうのは立て続けに起きるものなんだ。

この子たちと出会ったときもそうだったしな。

「……ね。もしかしてそれ、この前の……えっと、大きい子」

どっちの意味で大きいんだろう。

多分どっちの意味でもだよな。

「……かがりつて子だったりする？ なんとなくだけど」

「ん、よく分かったね」

妙な化学反応が起きないようにしてばらばらに会っていたのにばったり会っちゃったこの子とかがり。

かがりもそうだけどこの子も結構相手のことを気にしているらしい。

なんでだろ。

同じ学校なのにお互いのこと知らなかったからかな。

学校で話すようになったのかって思ったらそうでもないみたい？

「まあ彼女はほとんど毎回そんなことばかり話しているから取り立ててってわけじゃないけどね。普段からあいさつ代わりに聞いてくるくらいだしな」

「そっか。 なんとなくそんな感じがしたよ。 ……………」

これまた珍しくぼんやりとしているゆりか。

僕もぼんやりしながら見つめ返す。

なーんかこの子と一緒にいると、ふとしたタイミングでこういうの多いんだよな。

こういう感じ、昔の母さんと少し似ているかも？

目が合う確率が高いというか目が合っているだけでも嫌な感じにならないというか、そんな感じが。

「……………」

……こんなちっちゃい子なのにね。

性格が似てたんだろうか。

「……………で、どうよ？ 聞いたことないけどいるの？ 相手。 付き合うまではいかな

くても好きな人とか。 あ、2次元とかでもいいよ？ なんならアイドルとかでも2.

5次元とかでも可！ むしろ良き!!」

「そんな相手、僕には居ないよ。 どの次元でも」

そう言えばこの子も「このキャラクターが好き」とか「このキャラクター同士早くくつつかないかなあ」とか良く言うけど……好きな男性キャラクターとかも聞いたことない気がするなあ。



「……ほんど?」

「うん。好きな人も付き合っている人も。そういうの興味ないしね」

「今までも? ずっと? ……あ、そっか入院生活かあ。でもさでもさ、先生とか看護

師さんとか他の病室の人とか、きれいな人とかいないの? 響からも相手からもとかな

いのかねキミい!」

なんか結構食い下がってくるな。

そんなに気になるの?

「特になかったな」

「うそおん……」

「ほんとうだ」

だって小学校から大学卒業っていう学生生活とその後の、通算で20年近く恋人なし

だもん。

………自覚すると凹む。

でも言うほどには凹まない。

だってこの歳で居ないって言うことは僕自身が真剣に欲しいって思ってるんじゃないかな

い証拠だもん。

本当に欲しければ僕から動かなきゃ見つけれないんだし、真剣にがんばれば見つかる

るんだろう。

多分。

む、けどニートが足かせになるか？

でもなあ……誰とも付き合った経験もその先の経験もないままに男として終わるなんて誰にも想像できないでしょ……？

30まではセーフって誰かが行ってたからそのうちそのうちって思ってたらこれだ。まさかのまさかで引っこ抜けるだなんて誰にも想像できやしない。

のんびりしてたのがいけなかった。

男として生まれたんだから1回でも……いやいや、まだ希望は捨てていない。

突然に女の子になったんだから突然に男に戻ることだつてあるはずだもん。

僕はそう信じてる。

「……そういうゆりかはどうなんだ？」

「え……わ、私い!？」

彼女いない歴について考察していたらなんか心臓が痛くなってきた気がするからゆりかに投げ返してみる。

「君には居ないのか？ 肝心なときにも冗談を言つて失敗しそうな性格をしているけれど」

「……響つてときどき辛辣だよねえ……」

ふたたびぱつつんの下の目と合う。

「でもそうねえ……私もね?」

真つ黒な目のふちに光る窓の外の光。

黒と白と緑の混じった明るさのコントラスト。

ふだんはおどけていることが多くって口の端が上がっていることが多いんだけど、今はどちらかというときゆつと力が入っている感じ。

めつたに見ない、ちよつとだけ大人びた感じのゆりか。

こういうのを見ると「この子もやっぱり女の子なんだなあ」って気持ちになる。

これが父性か。

「恋人とか、付き合った人とか。 ……私も。 今までいたこともないし、考えたこ

ともなかったよ」

「なんだ、一緒か」

大丈夫、中学生ならまだまだ大丈夫だから。

それに君なら望めばすぐにお相手は見つかるだろうし。

「だけどね、響」

まぶたが少しだけ下がってぱつちりしていた目が、切れ長になっている。

僕としてはこういう目つきのほうが普段の元気すぎる感じのよりも似合ってる気がする。

「気になってる……かも？ そんな人。最近いるかなーって感じ……かな？」  
ちよつとうつむいてちらちら見上げてくる、不思議なことをしてくるゆりか。

「……………」  
「……………」

なんか言いたそうだけど言ってこないなあ。

下条さんとは違つてこちらには意中のお相手が居る……いや、最近できたんだな、きつと……らしい。

初手で人と仲良くなれるはずのこの子が今ごろつてことは学校の外で会つた男子なんだらうか。

それとも夏休みに教室で会つたら雰囲気変わつて見えて……つて感じなんだろうか。

青いなあ。

これが若さ。

僕には欠けているもの。

つまり僕は中学生の頃からずっと枯れているつてことになる。

悲しいけど仕方がない。

それが僕なんだ。

悲しいけどしばらく考えても正直どうでもいいかなって思っちゃうんだもん、やっぱ僕には関係ないことなんだろう。

「青春しているな」

「……………あり？ 予想外の反応」

どんな反応を期待してたんだろう。

「あ、いや……………あ……………まあ響だもんね。そーだよねえ、こつちの方が自然

だよねえ……………」

どう言う意味なんだろう……………いや、そのまんまか。

「そっかそっか。あんまり興味ない感じだよねー、恋愛とか」

「そうだな、僕はそんなにはな」

「だよねだよねー、今期の推しのヒロインとか反応薄いもんねー」

「君の方がそういうのに詳しいくらいだからね」

「さすがに有名どこの名前くらいは覚えた方が良いつて思うけどねー」

「人の名前と顔を一致させるのは大変なんだ」

「キャラでも？」

「キャラでもだ」

そうして「うあー」とか言いながら普段の僕のように急にぐだつとした関澤さん。

この子も僕と同じくうつ伏せになつてもなんら支障はなさそうで何より。

……この体のままでいるのなら将来的にこの子よりも少しだけ大きい感じが理想だな。

つまりこの子はまだその域に達していないんだ。

失礼だし絶対に言わないけど。

「その話、今度会うとき彼女……かがりにしてあげると、きつと喜ぶと思うよ？　この前会ったときはなんだか君にしては珍しくぎこちない感じだったけど、その話題ならすぐに打ち解けるんじゃないかな」

「……………」

がばつと頭を上げてなんかすつごく見てきたゆりか。

なんかすつごく変な顔してる。

……なんで……？

あ、そうか。

かがりから怒濤の恋バナというものの講義をされたことがないのかな？

「彼女は恋愛アトバイスのプロらしいし、君が当事者になつたらきつと相談に乗ってくれるよ。もちろん恋バナも好きだ。根掘り葉掘り聞かれたのをみんな言いふらさ

れるからほどほどにだけでも」

「……あ——……うん。 そゆこと。 そゆことだよねえ、 響だもんねえ……」

「？」

「いや、なんでもない。 別にいいのよ」

「ずーっと溶けた氷だったものをすするゆりか。」

「なんか微妙に不機嫌？」

「なんで？」

「……あの子。 多分私の……その相手のこと知ってるよ」

「そうか、なら話は」

「だから響が言ったとおりにゼーんぶ話し尽くさないと解放されなさそうだし遠慮しとく。 学校で噂になったらハズいし」

「そうか」

「なんか強烈だもんねえかがりさんって。 あーいう子クラスにもいるからなんとなく

想像ついちゃうんだ」

「分かる。」

「すつごく分かる。」

「あの子の相手は本当に疲れるんだ。」

「僕から言っておいてなんだけど、うん、止めておくのが無難だな……」  
「そゆこと」

かがりが知ってるってことは、そのお相手は同級生なんだろう。

それなら間違いなく満足するまで質問の嵐だろうな。

ものすごく簡単かつリアルにその光景が想像できる。

話さなかったらこの前みたいのしかかかってきて「話すまでどかないわ!」とかしそ  
う。

恋愛的な意味ではともかく物理的な意味で自分の体を武器にすることを覚えている  
らしいから手強いんだ。

つまりは野生な野性。

本能で生きている生物だもんな。

だからあれだけのびのびと育っているんだ。

体格の大きいほうが生存競争では有利。

ちっちゃいもんだから飛びかかられたら逃げられない同志なゆりかには深く深く同  
情する。

「じゃあ話戻してさ、あの映画のモチーフだけどさ? さつき響が言ってたみたいに」

「ああ、うん。 やっぱりギリシヤ神話だね。 分かりやすすぎる嫌いはあるけれど」



元ぱつつんゆりかはコイバナに飽きたのか、そんな感じの話題に戻ってくれたから楽になった。

……ファミレスとかでただ適当に話す時間。

こういうのもなんだか良いなって思うようになってきた今日このごろだ。

青春にはまだ肉体年齢が届いてないけど精神年齢と合わせて割ったらちようど良いんだらう。

## 22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 1 / 4

今朝の太陽は少し弱いみたい。

僕の快適な寝起きは結構お天気に掛かっている。

カーテンを開けてみるとうつつすらと曇っている空。

僕は今朝、珍しく目覚ましに負けたんだ。

なんかこういう日ってだるいよね。

「んー……………」

忌々しい目覚ましを枕元に投げて「ぼふっ」って音をさせて満足。

もやつとした気持ちだけを解消するのに手っ取り早い方法だ。

こういう誰も傷つかないストレス解消法って大切だよな。

僕は滅多にしないけど、枕をサンドバッグにするのってとっても良いって思う。

僕は自然に起きるのが好き。

眠っているのを無理やりに起こされるのが嫌いなんだ。

自然な形で目が覚めて起きないとこうも体が重くって心臓がばくばくするもんだか

ら……気持ちいい夢を見ていたはずなのにつてささくれ立つんだ。

結構寛容な気がする僕が唯一嫌いな感覚。

ああいや、うるさい音とか振動とか声とか近すぎる距離感とか花粉とか虫とかホラーとか嫌いだし結構あるか。

……光で起こす目覚ましとやら、お高いみたいだけど買ってみようかな。

お天気でも日の低い冬って寝起きが良いわけじゃないし。

なんなら結構寝坊するし。

「くああ……………」

急に起こされたから体がまだ起きていなくてあくびが何回も出る。

顎を開けるだけ開いて目から涙が漏れてくる。

なんでも、自然に目が覚めるときには血圧とか意識レベルとかそういうのがみんなきれいにちようどいい感じに上がってきて体に良いらしくって、逆に目覚ましに頼ると自然のバイオリズムが途中ですばつと切られて覚醒するから、あまり良いことではないんだとか。

でも現代社会は忙しいからみんなスマホとかで強制的に起こされる悲しみ。

このどきどき感……成長期って言う全盛期を終えていた成年な状態から若返った幼児でさえも走った後みたい感覚は、確かに心臓に負担が掛かっている気にさせるもの。

別に特段の病気もしたこと無いしまだ30代にもなっていない、いや、なかったのについて思うけど、僕は怖いのが苦手だから健康についての本とかで心臓への負担とか言うのを読む度に不安になるんだ。

ああ言うのって読むと不安で不健康になる気がするよね。

でも本屋に行く时必须買っちゃうんだ。

昔っから朝型だったっていうのもあるかもしれないこの動悸。

というか肉体が変わってもおんなじな辺り朝型とか夜型とか言うのは脳みそなのかな。

僕が2人に分裂したわけじゃないから比較とかはできないけども。

僕が2人なら……それでもたいして変わらない生活なんだろうけど。

もつともこういう生活……目覚ましに絶対に頼らない生活なんて学生以前の幼子とかニートとか隠居後の人以外は難しいんだろうな。

でも僕は大学の頃には無駄に健康にはまってこようやってたし、意識高い系ならしてるかもね。

ちようど僕とは真逆な感じの人種なら。

「ふああ……………」

あくびが止まらない。

とつてもすごく眠い。

もうちよつと寝たい。

けどダメだ。

二度寝はすつごく気持ちいいお酒の次の娯楽なんだ。

でも今朝はできない事情がある。

だって今日は燃えるゴミの日。

他のゴミはともかく今日は駄目なんだ。

いくらクーラーさんがんばってももらい続けているとは言っても、量はそれほどじゃないにしても夏場は生ゴミと相性がとつても悪い。

出さないと大変なことになるんだ。

めんどくさがって置いとくと大変なんだ。

二度寝しちやって朝の普通の時間……今みたいになつたばつかりとかじやない時間帯になると、ご近所はともかくお隣さんとはち合わせの可能性が上がっちゃう。

お隣のふんわりした奥さんもお母さんがゴミ捨てに出ると学生の娘さんの通学とお父さんの通勤のタイミング、みんなばらばらで読めないしなあ……。

ここまでカーテン閉めつばなしにしてエアコンと外出を最低限にするって言う、まるで敵から身を隠すみたいなの生活ががんばって続けてきたのが二度寝で台無しとか悲し

すぎるでしよつて思うと今さら失敗したくはない。

そんなんで「あら、あなただあれ？」とかお隣さんに見とがめられたら泣くに泣けない。  
い。

それはあんまりすぎる。

一生懸命作ったプラモデルをうっかり落として台無しにするくらいには悲しい。

僕はすぐパーツ無くすから作れないけど。

でもちよつとくらい無くなつても案外平気なんだよね。

パソコンとか組み立てるときネジ半分くらい残つても使えてるし、世の中つてそういうもの。

「うあ——……」

精神力を限界までふりしぼつてみみずみたいにシーツを張つて流体の猫みたいにベッドからず落ちるようになって落ちて冷たい床の感覚がほつぺたに。

「……………」

ちよつと寝落ちしそうになつたけど冷たさと硬さで目が覚めてようやくもそつと起き上がった。

「……………」

昨日は少し飲み過ぎたかもなあ。

まだ少しアルコールのぐるんとした感覚が体に残っている気がする。

呼気に基準値の何倍ものアルコールが含まれてる気がする。

って言うか吐く息から香ってきてる。

今の僕の周りはお酒臭いんだ。

それもこれもゆりかおすすめのおもしろいコメディイを通して見ながらがぶ飲みしてしまつたせい。

僕にしては珍しいことに最後のほうの記憶が薄い程度には呑んだらしい。

お酒って怖いよね。

それも呑める僕みたいな体質だと余計に。

ぼわぼわしながら楽しく呑んでるうちに歯止めが利かなくなつて気がつけば一本開けてるんだもん。

こんな生活続けたら30代には肝臓悪くしそう。

今はひとけた代に戻つてるけど……って言うか戻つてるから余計に危ない。

「僕の本体は20超えてるからー」って思い込んでるからかお酒が全然平気なんだけど、それでも良くないのは知ってる。

体に悪いって理解して呑んでるからこそ自制心が大切なんだ。

よたよたといつもに増して不安定な体を引きずるようにして冷たい廊下をひんやり

と感じつつ、一途悲鳴を上げている膀胱を解放してあげるべく急ぐ。

……慣れてるから漏らしはしないだろうけど万が一はある。

僕って考えごととしてなんにもないのによく勝手知ったる家の中でぶつかるし転ぶしだから、そうしてトイレに着く前に衝撃を受けて……つてなったら悲惨だもんね。

急いでいてもそもそもがやわい体でその上二日酔い未満のたるたる具合。

ほてほてほてほてとしか進めない小さい体な僕だ。



「はあああ——……」

語尾にハートマークがつくってこういうことなんだろうなあって感じの声が出た。

ものすごい勢いの洪水が過ぎ去る。

ぜんぶ出てものすつごくすつきりした。

排泄の快感ってアブノーマルだけど自然のことだからしょうがない。

ちなみに家の中じゃおしっこにはもはや恥ずかしさなんて覚えなない。

それよりふとももに飛び散るのに対するやだなって気持ちの方が大きいくらい。

このちっちゃな体のちっちゃな膀胱にどんだけ溜まっていたのか不思議になるくら



いの量の液体。

それが膝をくつつけてもできるふとももの根元だけ空いたすき間から放出された結果が個室に響く。

……よく漏らさなかつたな、これ。

漏らしたら相当に凹むけどすごい量だ。

お酒のあとだからな、まあしょうがない。

いつものことだし。

おかげで寝起きだというのにアンモニア臭よりアルコール臭のほうが漂うくらい。

そもそもふとももでガードしているし臭いはほとんど感じずに済むんだけど……それにしても良い匂いだな。

そんなどうでもいいことを考えながら出し切った僕は恍惚としたまま脚をぶらぶらしていた。

あ、ぼーっとしてたらまた出てきた。

緩いもんねえ……。

◇

台所でお水がぶ飲みして胃が重くなった感じを抱えながらよたよたと洗面所へと戻って、身繕いを半ば無意識に習慣として始めていた。

こういうのって習慣になるとなんにも考えなくてもできるから楽で好き。

「よいっ、しょ……」

踏み台に乗って。

顔を、……寝てたくらいじゃ油も汚れも分泌されないからお水だけ。

カチューシャみたいなので前髪ともみあげを濡らさないようにしてじやぶつと洗う。

こうしてるって言ったらかがりがすごい声上げてたんだけど大丈夫かなあの子。

ゆりかは笑ってたし別に良いんじゃない？

「気持ちいいからってごしごしするのだけはやめて!!」ってかがりが言ってたからそれだけは守って、タオルでぼんぼんと抑えて水分を吸わせるけど。

かがりにしつこく布教されたもんだからちよつとだけめんどくさいのをしている。

でもしないともしつこいからしょうがない。

化粧水と乳液のセットをしとすと肌に染みこませるようにべちべちしてリツプクリームも塗る。

どうしても少しばかりは濡れる髪の毛も挟むようにして水気を吸わせて、前髪から左右、横から後ろ、下へと梳かして行ったらおしまい。

最初は毎回「ちゃんとしたかしら……？」って聞かれるからしようがなくでしてただけど、いや、今もめんどくさいんだけど、体が勝手に動くようになったから続いているみたい。

胸まで下りている横からの髪の毛の先やおしりに乗っかる毛先まで体をひねりながら丁寧に、動物みたいに毛づくろいしてる僕自身が鏡に映ってるしな。

「……………」

習慣ってすごいよね。

多分一回でもやめたらもうしなくなるけど。

もっさりしている僕の髪の毛。

量が多いのもあるけど真面目にお手入れしてるからなんかふんわりしている。

なんにも考えないで無心に癒やされながらしているからなあ。

髪の毛を指で梳いていると、なんだか本に集中しているときのような指先までがじんじんと温かくなる感じになるのが不思議。

そんなことをとりとめもなく浮かばせながら鏡で枝毛の確認。

「よっし」

踏み台のおかげでがんばると腰まで映るようになって洗面所。

前の体サイズの、着古しているけど安心する白いシャツでふとももまでしっかり包ま

れていて、だけど中はぼんっいっちよのだぶつとした僕が真つ正面から見ってくる。

感覚的にはボクサーパンツよりもブリーフでもブリーフな女の子用ぱんつ。

「……………」  
うん。

小動物的なかわいさだ。

やましいこと抜きでかわいいって思える。

今日も今日とて眠そうな薄い色の瞳が半分だけをまぶたで塞がれているように見える、ジト目に見えなくもない僕の、近視でも乱視でもない大きな両目。

去年あたりから出てきた飛蚊症……加齢でみんななるらしいね、怖い……まで消えて嬉しい両目の上の二重のまぶたからは、銀色の細くて長くって毎日不意にちくつと目の中に飛び込んでくるまつげがわんさかと。

毎日何本か目に入って痛いのは勘弁してほしい。

銀色で細くって見えづらいのも致命傷だ。

いきなりだからびっくりと痛いので悶えるハメになるし。

まつげが長いのも良いことばかりじゃないらしい。

眉毛は、……たしかおとといに、かがりに遊ばれもとい整えられたから短め。

その上には1センチ以上切るとハサミさんが怒るさらさらつとした前髪があつて。

前髪の両脇の横の髪の毛が必要以上にぶにぶにとしたほっぺたと耳を包んでいて胸に掛かっている。

これこそ切りたいたいんだけど無理なのは魔法さんの意志なんだろうか。

そうして最後に後ろの髪の毛が白いシャツの保護色みたいに周りを囲んでいる。

後ろの髪の毛って1回内側に寄ってから外に広がるんだなーってこの体になって初めて知った。

というか現実にはここまで長い髪の毛の人ってそうそういないしな。

身をもって体験しているようにとにかくお手入れで時間掛かるしめんどくさいし。

日によって形が変わる、ものすごくもさもさして内側にくるんとしている後ろの髪の毛。

それに包まれて銀髪幼女っていう生きものな僕。

属性を付け加えてみるのなら、北国カラーで無乳でなで肩で貧弱で全体的にぶにぶにしているけどやっぱり無乳で悲しい感じ。

そんな、少女未満の幼女。

でもときどき中学生くらいに見えるときがあつて不思議な見た目。

髪の毛さえ短ければ服装次第で、いや、裸でも下半身を隠せば男でも通じるって実証されている謎の体。

髪の毛を短かくできたら生えている方の性別って思ってもらえなくもない、中性的とでも言える……男の子とも女の子ともつかない、そんな不思議な顔。

そんな顔が起き抜けで二日酔い気味で眠くて……な僕に張り付いている。

「……………」

そろそろまた髪の毛、切らないと。

鏡を見ながら髪の毛を何本かつまむと二股になったり折れていたりする毛先が見えるもん。

……なんで枝毛ってやつ、こう無限に生えてくるんだろう？

男のときにはなかったのにね。

まああつたかもしれないけど短髪じゃ見えないか。

トリートメントとかしたことなかったし雑に拭いてたもん、数は絶対多かったはず。

その辺を無作為に抽出したら「その他」に分類されるような「ザ・普通」な男だったから枝毛だらけでも誰も気にしなかったんだろう。

その方が気楽だったんだけどなあ……まだ戻らないのかなあ……。

枝毛。

髪の毛のうるおい成分とか言う謎の物体が足りなくなつた先っぽが裂けてできるらしいそれ。

毎朝とかおふる上がりとかに1本1本……はどう考えてもムリだからねじって束にして確かめているんだけど、それでもどうしたって枝っているやつは存在する。

ちよつとだけなら大丈夫だけど多くなつてくると途端にくるんさんの索敵に入るもんだから、すぐに小さいハサミとクシと拡大鏡を持ってきて30分くらいは拘束されるハメになる。

そのあいだずーつと話を聞かされるしぐいぐい押されるしメロンを押し付けられて重いしだから毎回メロンさんと会う前の日は忙しい。

まるで恋人と会う前の日の女の子みたいだけど僕は男だしあの子はそういう対象未満だし……うざったいのと切られすぎて魔法さんがおこにならないかってひやひやするからしようがない。

かがりは僕のお人形さんみたいな長さがお気に入りに入りらしいからいつも揃えるくらいしかない。

今までいちども発動しなかったけどあの子のことだ、いきなりばつさり切ってきてもおかしくないから気が気じゃないんだ。

そんな信頼がある。

負の信頼ってやつだ。

だつてくるんさんだもん。

……でもなんだって男の僕が髪の毛の手入れに苦労しなきゃならないだろう……。  
こうなる前はあんまり話しかけてこない人がいるとつても良い美容院で「いつもの  
で」って言うてあとは黙りこくってたら「これで良いですか?」「良いです」って感じで  
無難な感じに短く揃えてもらっていたのにな。

多くて5回くらいしか会話しないからとつても楽だったのになあ……。

と、そんなことを考えながら櫛をすみっこに置いたらこつんと手に当たるものが。

「いたい……なにやつ」

イラツとしたらつい声が出た。

僕是不意打ちで危害を加えてくれるのが嫌いなんだ。

ひりひりするところをさすりつつ元凶に焦点を合わせると、それは黒くて大きくて。

成人男性の手のひらにちょうどいい大きさと重さを備えた……ひげそりだった。

ひげそり。

シェーバー。

「……………」

持ってみたらずっしりと重い。

持っていたら手首とかヒジを痛めるかもしれない重さだ。

だって貧弱だし。



にしてもひげそりかあ……もう長いこと使っていないな。

あの朝が3月だから……もうすぐ半年。

ずいぶんだな。

きつと電池も切れているだろう。

使わないからどうでもいいけど。

それだけ触っていないからかそれなりにホコリも被っている様子。

「……………」

当分は、いや、下手したら魔法さんの機嫌次第ではずつと使えないかもしれないからしまっておこう。

ずつしりとした黒いそれを手に取ってしばらく眺めてちよつとだけ懐かしくなって、それから引き出しの奥の方へとぐいっと押し込む。

ひげそり。

名前の通りに毎日生えてくるひげを剃るもの。

「……………」

すりすり両手でアゴとか鼻の下とか口の周りを撫でてみてもつるつるとした感触しか返ってこなくて、鏡にも当然につるつるでぶにつとした肌しか映ってはいない。

いくら待っても生えてこないひげ。

いや幼女のまんまそただけ元通りになったら困るけど……。

でも朝起きたあとの手順に髪の毛の手入れが加わってからずいぶん経つけどその代わり、毎朝生えてきていたひげを剃ること自体を今こつんってなるまでほとんど……いや、完璧に忘れていたんだ。

毎朝毎晩ここで視界に入っていたはずなのにな。

人って不思議。

人の認知って曖昧なものらしいね。

「……………」

眠いながらも自然としていたはずのひげの処理。

10年以上続けていたのに忘れるのはすぐ、か。

記憶も習慣も……過去も、きつととてももろいもの。

こんなにもかんたんに薄れて上書きされているんだもん。

どれだけ体に染みついていていた長い習慣だって、必要がなくなったらあつという間で気づくこともなく記憶から消えていってしまうんだ。

記憶なんて本当に当てにならないんだな。

忘れる、つて言うか思い出さなくなれば……それは次に思い出せるまでは無かったのとおんなじ。

次がなければ本当に無かったことになるんだよな。

めんどくさがって何日か放置したあとにときどき楽しんでいた無精ひげのじより  
じより感が、もはや懐かしい。

当分……いや、下手したら。

もうこれから先、ずっと……死ぬまで経験できなくなるんだな。

「……………」

そう思った僕はなんだかメランコリックになる。

男が女になる。

そんな非科学的な現象がまたひとつ、僕を別の存在にしたんだなって……そう実感する。

銀髪の幼児。

女。

親も戸籍も親戚もなんにもない、ただの人間。

僕は……どうなっちゃうんだろうな。



## 22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 2 / 4

「んあああああ………夏休みも、今日でとうとうおしまいかあー」

ただでさえ小さいゆりかが溶けたような声を上げる。

「私たちの天下は早いものでしたなあ……これが俗に言う三日天下か」

「ちがうと思うわよ？」

「細かいこた良いのよりさりーん………明日休んでもいいかな？ なんかだるいの」

半分溶けている関澤さんの気持ち、よく分かる。

でも僕は学校がないからすごく嬉しい。

ニートしてると平日とかに特別な優越感あるんだ。

「けど、長いようで短いのよねえ。明日から学校って思うと憂鬱ね、本当に」

「部活だけとは違って部活に加えて勉強だもの」と忙しそうな運動部のりさりんさん。

「それに最後の1週間ってほとんど宿題に追われてたし、余計にね……」

「それはりさりんがやってなかったからよ？ なんだかんだ終えて偉いけど」

「それについてはありがと。でもゆりか？ ほんとうにダメよ？ 明日さぼったりし

ちゃ」

りさりんさんもとい杉若さんが同じく溶けそうになりながらたしなめている。まるで姉と妹だな。

精神的にも体格的にも。

「もちろん言ってみただけよ。あたりまえじゃん？」

「去年ずる休みして連休増やしてたのどこの誰だっけ？」

「さあ？ 私は過去を振り返らない女なのよ」

「こいつは……」

さぼったのか……中学生にしてだらしがない大学生のような自主休校具合。

さぼりつて癖になるから良くないって思うよ……？

ほら、僕みたいになるからね……？

「あああ重い！ 重いよりさりん!!」

「さあ？ 私も過去を振り返らないから分からないわ？」

「このおっぱいめ……中身ぎっしり詰めおって」

完全に崩壊したぱつつんさんの上になりさりんさんが覆い被さる。

夏休みでかなり伸びてぱつつんじゃなくなってるぱつつんの上になりさりんさんのあ

ごと大きなお胸が乗っている。

経験があるから分かるんだけど、人って重いんだよなあ。

お胸も見た目どおりに重いんだ。

それにしても仲いいなあこの子たち。

女の子特有の肌が吸い付く面積が広いっていう近すぎる距離感。

服越しでも弾力と温かさと匂いのが感じられる、くつつき合うゼロ距離。

「うあ——……」

「来週から授業かあ……」

脱力しているからそのままふたりでさらにテーブルに吸い付く感じでお団子になっている。

ふたりが元気だとうるさいし、ぜひともそのまま静かにしていただきたいところ。

「ほんとうね……もう夏休みが……」

左に向けていた視線を今度は右へ向けてみる。

「何回も登校したし、部活もあつたし。……もちろん普段よりはずっと短いけれど、でも朝早くに起きて電車で通って……。なにより私、宿題だけすればよかつたはずなの

になぜか苦手分野の勉強まで去年のぶんまでまとめてさせられたから遊んだ気がしなかつたわっ！」

話している内にぶんすかと怒り出す性質を露わにするかがり。

「やつぱり響ちゃんはスパルタよねっ」

めんどくさいから反応しない。

「むーっ」

「ふいつ」

……のぞき込んで目が合いそうになったから適当にそのへんを眺めることにする。

いじけてる子供の相手は疲れるんだ。

どうやら下条さんにはそうとうに根に持っている様子。

いつか感謝する日が、……来るのかな？

来ると良いなあ。

来ると良いね、本当。

この子についてはすごいことに宿題が予定通りに終わったんだけど、でもまだ僕が読みたいのが残っていたしもうしばらくで楽になるって思ったら、なんだかその気になつて……つい、その……つい家庭教師のノリでこれまでの総復習もやらせちゃったから。

いや、その……タダで家庭教師してあげたんだから良いじゃん……？

ねえ……？

「この夏で一年半分勉強し直そ？」って聞いてちよつとぽかんってしまった後のかがりは、そ

りやあすごいだだのこねようだった。

けどお菓子でしぶしぶな感じでちよろくなっていたし、これで勉強で困り切るなんてことは多分なくなるだろうこと間違いない気がしないでもないって思う。

次の定期試験になるころにはその成果を実感できるだろうから、それまでは流しておこう。

きつと泣いて感謝……はしないな、その頃にはすっかり忘れているだろうし。

それどころか僕と一日中部屋でぐだつとしていたつて記憶にすり替えられて、それを盾に揺すられるかもしれないからしっかりとメモしておこう。

証拠は大切だ。

口じゃ負けるから写真や文字という物証で勝負するしかないし。

でもこの子についての心配がちよつとなくなつてほつとしてる僕がいる。

だつてもものすごく心配だつたんだもん……いろいろと、いろいろと。

「……………そうですね。私も、そう………思います」

ぽつりと珍しい声。

僕よりも少ない口数で僕より静かなのが好きな、僕のお仲間の眼鏡っ子仲間な友達さ  
ん。

僕も含めてこのメンバーはすっかり慣れているからか彼女がなにかを言おうとして



いるときは静かになる。

さりげなくがポイントで優しさだよね。

僕もきつと普段は同じようにされてるんだろう。

「……………計画とか、立てていても。自分を、律して、自分の意思で……………勉強をするというのは……………その、とても、難しい……………から……………」

結構賑やかな空間が今だけ静かになっている。

「……………あと下条さん……………は。……………最初のころ、遊びすぎていた、せい……………私、心配していました」

「……………え、私!? ひどいわさよちゃん!」

そこへ投げかけられる強烈な一撃。

ああ……………この子つて会ったときからかがりの友だちだったから遠慮ないんだね。仲が良いんだろうな。

なんでくるんさんと眼鏡さんが仲良いのかさっぱりだけど。

「……………だって。私、何度も……………連絡、しましたよね? ……ちゃんと、宿題してるかって。何度も、何度も」

「え、ええつと……………」

「響さんが、……………助ける、その前に、です。何回も……………試験の時だって何回も

です……………よ？」

「……………あ、あれはその、忙しくてつい……………」

「……………」

かがりが絶対に敵わない雰囲気を出している友達さん。

普段はかがりがぐいぐい押ししているようにしか見えないんだけど、実は力関係逆なのかな？

左には鏡餅みたいになっているりさりんとレモンさんなりサレモンペア。

右にはメロンさんに詰め寄っている感じのメガネさんなメロンメガネペア。

解放感と絶望感とでいつもよりも覇気がなくて静かだ。

とても嬉しい限りだな。

みんなが勝手にぼそぼそと話す感じのだるだるな空間だから、僕もまたぼーつとして

いても平気なのも良い。

とつても良いんだ。

いつもこうだったらなあ。

そう思うけど……………そう思うくらいに僕は打ち解けたんだろう、きっと。

「……………」

午前のおアミレスっていう僕たち以外には店員さんも含めて数人しかいない、BGM

しか流れていないとても静かな世界。

そのすみっここのほうのテーブルで、窓際で。

こうして外をぼんやりと眺められて居心地のいい場所。

……………ああ、……………とても幸せだな。

あるひとつを除けばとてもとても。

「あ、響ちゃんが嬉しそうっ」

「ごまかさないで……………ください」

「でもどーせ聞いてないでしょ」

「響さんらしいじゃない」

まあでも僕としては、ようやく終わったって感じ。

懐かしい感じの、休みの前日のような体がむずむずするような感覚までしているんだ。

だって、もう夏休みが終わる。

終わるんだ。

だから今夜はたっぷりと呑もう。

学生たちのお守りっていうプロジェクトの完遂記念だ。

なんかぱったり会っちゃったばかりにゆりかとかがりに加えてりさりんさんと友

近さんって言うJ Cさんたち4人に囲まれる日々。

相手がたった1人でも僕にとっては大変なのに4倍っていう修羅場を何度も経験して。

最後のほう……この1週間なんかはほぼ毎日外に出ていて話をしないとイケなくて。それも朝からお昼を食べての夕方までなハードワークをこなしてようやくだ。

心底ほつとするな。

……それもこれもひとまわり下の子供たちのお願いを断れないせいなんだけども。

ゆりかはまとわりついてきてせがむし、かがりはのしかかってきてせがむし……眼鏡さんと運動部さんもついて顔して来るし。

「……………」  
でも何で僕はいつもこうして……みんなに挟まれたお誕生日席に座らされるんだろう。

すつごく居心地悪いんだけど？

席順なんてジューズを取りに行ったりしているうちにばらばらになるものなのに、僕だけ無言の圧力で、ど真ん中にいさせられるのはなんでなの……？

しかもそれが当たり前って顔されるし……眼鏡さんでさえそういう顔してるし……。

「……………」

「いつになく真剣そう」

「普段何を考えているのかしらねえ」

きつと女の子……いや、女子たちのあいだでなにかしらの同意があったんだろう。

僕にはさっぱりだけど。

女性のあいだには不文律が多いって言うし、きつとそれと何か関係があるんだろう。

慣れたらそこまでイヤなものでもないし、むやみに女の子の暗黙知をつつくマネをすることもない。

細かいニュアンスとかいまだにわかんないことのほうが多いしなあ……かといってわざわざ聞いても変な顔されるからやっぱいいや。

「そうやって……聞かなかったことにして………下条、さんは……いつも……」

「ご、ごめんなさいね？ さよちゃん」

そうやってぼんやりしているうちに友達さんがちよつとだけ涙声になっていたらしい。

それをかがりがあやしていて……それが収まったと思っただけゆりかがはやし立てている。

それをりさりんさんがたしなめるいつものパターン。

すつごくだるいからぼんやり過ごしてた夏休みでなんとなく目にしてきた光景だ。

この子たちって元気だなあ……ずっとしゃべってるもん。

文学少女さんでさえ話すときは話すんだしな。

やっぱり若さって貴重な時間だね。

「響ちゃん」

「ん？」

友達さんからのじーとした視線に耐えられなくなったのか、僕に注意をそらそうと企んでいるらしいかがり。

「お勉強。今日改めて言わないとって思っていたの。ほんとうに助かったわ。ありがとう」

ぺこりと頭を下げてくるくるんさん。

さつきまでのふざけあっていた雰囲気から一転、まじめな感じになっている。

「……あのままでと去年みたいに、たぶん。昨日と今日で終わらせないといけなくなって、今ごろ宿題の範囲とかを聞いたりして……寝る間も惜しんで泣きそうになりながら模範解答を赤ペンで写す作業に追われているところだったわ。………それでも間に合わないから学期明けに先生に怒られて、って。去年みたいになるところだったわ」

自覚はしているらしい。

「この子は残念なただけだもんな。」

「……僕が役に立てたみたいだね」

「ええ、とつてもよっ」

「それはよかった。それなら冬休みも覚悟しておくように」

「ええ。……………えっ？」

「おおう鬼畜う」

「さりげなさすぎたわね……」

「なる……ほど……こうすれば……」

「良いよ」つて言つたよね？

みんな聞いてたからこれで大丈夫。

「この子のことだから……今日くらいはセンチメンタルになつてこんな殊勝なこと  
言つてるけど絶対すぐに忘れるのは間違いないんだ。」

「だからきつと冬休みにもおんなじことしかすんだからどうせまた頼んでくるだろ  
うつて思つて先に言つておいたんだ。」

「どうせ頼まれるんだつたら先に主導権を握つておきたいんだ。」

「けど、新鮮な気持ちちつて言うの、私も分かるかも。その、今年もそうなりそうだった  
し……宿題残すのとか……」

りさりんさんも宿題は後回しにするタイプらしいね。

「こうして最後の日になにもしなくてよくって、もうぜんぶカバンの中で揃えておくことができて明日寝坊さえしなければ良くなるだなんて。こんなの夢にも思っていないかったもの」

「あら、りさちゃんも？ 準備できているって気持ちいいものなのね！ もうなにも怖くないこの気持ちって、いいわね！」

なんだか似てる雰囲気醸し出す2人。

お胸のサイズも近いもんね。

「なんかいつにも増してやたらテンション高くない？ りさりん」

「気のせい気のせい！ 普段のアンタに比べたら全然よ！」

「……ま、その気持ちも分かるし……いっつか」

「そうよー、いーのよ——……」

完全にダメなかがりと、できるはずなのに観たい番組とかの誘惑にころつといつちやう系なりさりんさんがふたたび溶けている。

「……………あゝあゝ!!」

唐突に叫ぶゆりか。

いつものだけどいつもびくってするんだけど。



と言うかどっから出してるんだろう、その声。

僕が発音できないタイプの声だ。

おんなじ女の子の肉体のはずなのに。

「去年のりさりんは『小学生のときみたいに宿題が終わらないから、ゆりかサマ助けてくださいませ……』って私を頼ってきてたの唐突に思い出した!!」

「ねっ造すんなっての!」

『おバカな私にはぜんっぜんわからないからお願ひしますうー!』ってすがりついてきていたのにい! ……りさりんを、私のりさりんを響に……たったの1週間ぼっちで取られたあ——!!」

「そんなことしてないし言っていないたら! 少し教えてほしいって言っただけじゃない!!」

「……ゆりか。他の人に迷惑だよ?」

ついでに僕にもすっごく迷惑。

「えー? こんなにガラガラなんだし、いーじゃないひびきーん。本気の大声じゃないしさ。響もはっちゃけちゃってもいいのよ? ……夏休みの終わり……ふいなーれよ? 一生に1回の中学2年の夏休みが終わるのよ?」

ごめん、僕にとっては2回目なんだ。

「……店員の人も見てないけど……いい加減にしなさい、ゆりか。あと記憶を勝手に改ざんして触れ回るのもう止めてね？ 私の名前みたいに定着しちゃうから。しちゃうから……」

「あるえー？ 間違ったかなあ？」

店員さんたち。

学生のこういうのに慣れているのかそれともやる気がないのか、僕たちには鋭い視線も向けて来やしない。

こんなに騒いでるのにな。

こんなにうるさいのに注意してくれない。

「……………」

そう思って念じ続けていたらやつと目が合った。

これで注意してくれるはず。

「……………」

「……………」

……ふりふりって手を振られた……大学生くらいのバイトさんに……。

やっぱり女の人ってこういうのに寛容なの……？

企みが潰えた僕はしよげて会釈だけしてテーブルに視線を落とす。

僕は失敗したんだ。

「あの……響、さん」

今度は眼鏡さんが話しかけてきた。

普段は必要なことしかしやべらないのに今日は元気だね。

「……私も、えつと、……ありがとうございます」

「君は、ほとんどできていたじゃないか」

かがりのついできて言うよりは監視目的っぽい感じでききて来た友近さん。

僕並みに空気に溶け込むからとっても気楽だった。

「でも、その。わからなかったところ、とっても、えつと………わかりやすく、教えてくれて……」

恥ずかしがり屋なメガネさんはいつも通りに視線を微妙にずらして話しかけてくる。

その気持ちはとってもよく分かる。

まるで学生のころの僕だもんな。

目を合わせるのってけっこう体力と気力要るよね。

「そうよねえ。 響ちゃんの教え方ってわかりやすいわよねっ」

何でか知らないけどやたらと嬉しそうなくなるんさんが割って入ってくる。

「解けないからと言って急かしたりしないし、教わったこと忘れちゃっても怒ったりし

ないしー！」

「……………安心、できますよね。……………去年退職されてしまった、算数、じゃなくつて、……………数学の先生みたいな感じで……………」

「それよ！ あの人みたいでがんばろうって気になるのよ!!」

「かがり、声を落としたほうがいい。うるさいよ」

耳の穴がびりびりするんだ。

僕の鼓膜は敏感なんだ。

「あ、響ちゃんっ！ 照れてるの？」

「照れていない」

違うんだ、君の声が単純にでかいんだ。

その胸に比例する感じででかくて困るんだ。

「……………」

……………けど。

騒がしいみんなとは対照的に、僕の胸の奥は少しだけちくちくしている。

中学生たちに……………それこそカンニングみたいなことをして、したり顔で教えていたツケが今来ているんだ。

いちど勉強したことだっていうカンニング……………チートを隠してさも「最近勉強したん

だ」って顔してたのが。

照明のせいかメガネがきらきらしている友近さん。

一身上の都合上どうしても見下ろされる形になるかがりと杉若さん。

目線がちよつとだけしか上じやないから安心できるゆりか。

みんなの視線がむず痒いし、……痛いんだ。

いくら飲み込みが悪かろうとなんだらろうと、他人に怒らずに教えるというのはただのスキルだ。

別に僕が特別なわけじゃない。

数少ない、僕が社会に出た経験が少しは役に立ったのは嬉しい……けど。

でもしよせんは責任なんてないただのバイトだからそこまでだし。

「……………」

僕って嬉しいときに限ってやなこと考えてわざと気持ちを落ち込ませちゃう節がある。

でも今日くらいは抑えたいな。

「？」

とりあえずなぜかずつと僕を見ている文学さんに言っておく。

「僕は君には、友近さんはほとんど何もしていないよ。応用問題くらいだったじゃない

いか？ それも、ほんの少しですぐに自力で気がついていたし。……僕はたいしたこ  
としていない。気にしなくて良いんだ」

「そんなこと……ない。………と思えますけど」

そんなことあると思う。

「……ま、いちばん大変だったのはかがり。君だったな」

「響ちゃん!？」

こういう微妙な気分なときには気軽に文句を言える相手が良い。

普段迷惑をかけられているからこそ遠慮なく投げつけられるんだ。

「まさか問題集を探すところから始まるなんてな。……初めて部屋を訪れた知人に、

まず宿題そのものを一緒に探して……なんて初めて聞いたよ?」

「ちよつと響ちゃん、みんなの前で言わないでっ! 恥ずかしいじゃないっ!」

「……やつぱり………だから学期末に声をかけたのに……」

「さよちゃんも響ちゃんと一緒にならないで!」

「おー、珍しく静かな2人がノリノリ」

「2人も嬉しいのね」

ちよつとちがうけど……こういう悪ノリも悪くないって思う。

本当は中学生じゃなくて大人だし明日からも夏休みがずっと続くし……女じゃない

僕だけど。

今日くらいは……こうしていても、良いよね。

## 22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 3／4

「もう、響ちゃんってばひどいわ……」

秘密を暴露されてわたわたしているかがり。

腕と一緒に胸までわたわたしているのはさすがだな。

ほら、レモンさんの目がすごいことになってる。

「いやっ」

確かに君の前で言ったのは今だけど。

「ここでみんなの分の宿題を……この1週間で見ていただろう？ 休憩のときとかに聞

かれたから話したし、みんなとづくに知っているよ？」

「……え？ 嘘………みんな知っているの？ ……嫌——!？」

本当のことは言っておかないとね。

そもそも言わないでついでにいわれてもいけないし……多分みんな知ってたし。

ついでに着せ替え人形にした報いを受けるがいい。

こんなのはそれに比べたら些細な問題だよ？

「意外だよねー。知らない人が私たちをばつと見たとしてさ、いちばん頭よさそうで



まじめそうなきよちゃんはそのまままで、りさりんもサボりがちだけどまーフツーにできてー。なのにしっかりしてそうなかがりんが実は……………つて。黙ってればモデルさんみたいだから余計にね」

メガネ友達近さん、りさりん杉若さんから相当離れてかがりだもんな。

学年すら下に見られるゆりかとか僕の方が勉強できるつて言うのもびつくりされそう。

「ゆりかちゃん？」

「あは、ごめんごめん」

「もうっ」

この子たちには随分振り回されたけど、でもこういうのを見ているのはなんていうか和むよね。

仲の良い人たちつて言うのは見ているのだけで癒やされる。

そこに僕が入る必要はないんだ。

お互いが「友だち」だつて思える距離がはじめから近くつてすぐに仲良くなれる学生つて言う歳ごろの子たち。

女の子だつていうことを差し引かなくても、よく考えたら「席が近い」つていう理由だけでなにも考えずに仲良くなつていたもんなあ、学生の頃つて。

そういうのって良いよね。

まあ僕の歳でも普通の人なら近くに居れば自然に世間話から仲良くなるんだろうけど……ほら、僕はプロのニートやってるし。

「……………でも、響さんって。ほんとうにすごい……………ですね」

ドリンクバーとかトイレとかで何度めかの席替えが起きて……角を挟んで隣に来ていたらしい友達さんが僕の手を取る。

「？」

視線が眼鏡さんの眼鏡と長い髪の毛とお手とを2回くらい往復する。

いつもびっくりする……だってみんな距離近いんだもん。

僕の同類だって思ってたこの子でもこうして隣に座ったら手を握ったりするんだ。

でもなんでまた急に？

あと手、冷たいなあ。

冷えてる？

そんなに寒いかな、冷房。

自然な感じで体温に合わせてひんやりしがちな僕の手よりもさらに温度が低い彼女の手。

まあこの子の性格からすると自分から人に接触するのって、緊張するだろうしなあ。

特になにも思っていないよっていう態度をしておいたほうがいいだろうか。

あいかわらずレンズの向こうの視線は、……………ああなんだ、僕の顔じゃなくって髪の毛見ていたのか。

……………枝毛、まだ残ってるのかな……………それがずっと気になってたのかな……………？

「あ、ずるいわ！ さよさん！ 私も……………むぎゆ」

「はいはい静かにしましょうねーあなたの親友が勇気出してるのよー？」

「りさりんって気配り屋さん☆」

「むー」

かがりの「ずるい」は防がれたらしい。

なんでも「ずるい」って言うもんね、君。

「響さん、みなさんの宿題を……………解答がなかったりするときでも、ほとんど……………ノーヒント、で。分からないところを……………ていねいに教えてくれて。

……………そうでなかったとしても、その、答えの……………当たり……………でしたっけ。それを、つけてくれて……………」

「そうなのよ！ 響ちゃんってば……………うひゃっ!? あなたたち手冷たいわっ!? ……」

あ、でもひんやりして気持ちいいわねっ」

くるんさん……………だからくるんさんなんだよ……………。

でもそういう気楽さって羨ましい。

「……………」

呆れているらしい2人にお口チャックされたらしいかがりさん。

そんなくるんさんを見てたら……冷たい手に握られたままだった僕の左手が、今度は上のほうからいきなり温かい感触でサンドイッチされてまたちよつとびくつてした。

「なにやつ？」って思ったらその手の持ち主はりさりんさん。

どうしたんだろう、この子は意外と距離置いていてくれてありがたい系なのに。

ゆりかがフリーハンドになってるよ？

良いの？

それにしても体がでかい。

なんて言うか肉付きがいいって言うの？

かがりが柔らかい系だとしたらりさりんさんは弾力がある系だ。

でもきつとこの子くらいが普通のJCさんな体してるんだろう。

テーブルの向かいまで身を乗り出せば届くリーチがあるって良いなあ。

あとやつぱり、りさりんさんからは他の子とは違う匂いがする。

あ、体育会系だしスプレーとかかな。

他の子はしてないみたいだし、きっとそう。

僕はインドアだったし汗も前から少なかったから縁がなかったけど、女の子用のそういうスプレーならこういう匂いがあるのかもしれない。

なんか良い匂いだね。

今度買って試してみよう。

「本当、響さんってすごいわよね。ヒマなときとか高校の教科書……じゃなくって参考書とか問題集よね、あれ。眺めるように勉強しているのすごいって思っていたの。ちよつと見ただけで公式とか理解して単語とか覚えるのって信じられないんだけど、実際にそのあとすぐすらすら解けているものね」

「……………ああ、いや」

「まずい、この子も僕を褒めようとしている。」

「いや、それは」

「ほんと小さな……響、なにか言った？」

「いや、良いよ」

声が被ったら相手に任せるのが僕だ。

話題変えてくれないかな。

「あ、良い？ そ？ ……響ってちっちゃな先生みたいだよなーって。マンガとかで

たまにいるレアキャラの『先生だよー!』ってムキになってかわいい感じの。私から  
見てもちっちゃいんだしって思ってたさ」

「……………」

悪化していた。

「ゆりか、全校集会で毎回1年生だつてまちがわれるもんねー?」

「言うでない。……………りさりん、もぐよ? そのたわを」

「え? なんだか怖いんだけど……………ちよつと、いつもの冗談じゃない」

「……………小さくても、その、かわいい、ですよ? ふたりとも……………」

「フオローになってないよ? さよちん。あとそれは私と響に効く」

「……………効く、んですか? え? ……?」

「……………あー、ごめん、忘れて。なんでもないの」

ネットスラング……………でもないのかな、この世代だと。

でも知らない子は知らないから止めた方が良いでしょう?

この中でそういうのが分かってるの、たぶん僕くらいだから。

僕も詳しくはないけどさすがに年季が入ってるからちよつとは分かるんだ。

「でもさー、響ってこのテーパーの高さだと微妙に背丈が足りないのよねー」

ゆりかが背中を丸めて僕の真似をしているらしい。

「このへんでいちばん私たちサイズのテーブルとイスあるお店のなのにそれでも足んないの、座高。 んで、勉強教えてくれるときにはひざ立ちになったりとかテーブルに恐る恐るって感じで乗り出したりして教えてくれるのよ！ それがちよつと背徳的っていうかなんていうかなのよねー」

「……………わかりますっ」

「さよちんも分かるかね」

「ええっ」

眼鏡がきらりと輝いている。

今のどこにきらりポイントがあつたのかいまいち分からない。

「んでこういう話するとちよつといじけるのよねえ響つたら」

「いじけてなんかいいないよ」

「なるほど、これがギャップ萌えというやつで！ マンガでは定番だけど、こーリアルだと破壊力がちがうねえ……………！」

「だからそんなのじゃない」

明日から学校だからか妙なテンションのゆりか。

「またまたー」

「こら、人が気にしていること言わないの！」

そこへ割り込んでくれる常識人なりさりんさんは良い人。

「あんただって自由研究まとめるの途中からつきつきりで手伝ってもらってたじゃない、恩を仇で返さない！　すぐに調子乗るんだから」

「あ、それについてはほんとにほんとに感謝してます響せんせえ。でもちっちゃい同志は譲れないねえ」

「何の話よそれ……？」

本当元気だなあこの子。

かがりとは別の方向性でのめんどくささもあるけど。

現役のJCCって言うこの世界でいちばん元気な存在は僕にはまぶしすぎる。

「まあ僕はこの通り、体も弱くて発育不良でそのうえ家の事情で満足に自由ができない身だ。これくらいできないといけなかったからな。環境の違いだよ」

この子たちと僕との違いを並べてみると結構な差があるな。

不自由って言う一点でしか合っていない……はずんだけど妙にしっくり来る僕の詐称。

「ひゆう、かつこえーのう。自然に真顔で言つてのけるのよ」

「……………今のセリフ！　忘れない内につ……………！」

「ハンデをものともしないで……………すごいです。見習わない、と……………」



「フツの中2の発想じゃないわよねー。大人びてるって言うか」

うそっぽいの僕を褒める流れを変えようとしたら不発だったみたい。

かがりはなんか急いで手帳……学生手帳って懐かしいなあ……を広げて今の言葉を書き留めているらしい。

なんかこの子、独特の感性してるよね。

「……………」

ふと世界が遠くなる感覚。

本当にふとした瞬間って言うのでこうなるの、ときどきある気がする。

しらけたともまた違うような、なんて言うのか良く分からないけどそんな感じ。

僕自身はちゃんとここにいるのにちよつと上からそんな僕を見下ろしているような不思議な感覚。

そんな僕を囲むようにしている女の子たち。

中学2年生の、10歳下の子たち。

近い順に目を向けると、会話が始まってから少し経って場が温まってきたころからぼつぼつと混ざれるようになる、引つ込み思案で度の強いメガネ仲間……元、だけど……そんな友近さよさん。

身長がこの中でいちばん高く、でも二の腕とかが健康的に引き締まっているからふ

くよかさでは負けている、ツツコミ体質なりさりんもとい杉若りささん。

ひたすらに書き貯めたらしいセリフを音読し始めてみんなにドン引きされつつあるメロンさんこと下条かがり。

というかそういうところだけマメなんだね……それを普段から発揮したら良いんじゃない……？

そしていちいち小さい体を動かしてアピールしている「小さいもの同志」がポイントらしい関澤ゆりか。

ちよつと元気すぎる感じだけどバランスが取れているようなこの子たちのお世話はけっこう大変だったんだ。

それはもう夏休みに過ごした記憶が結構抜けているくらいには疲れたんだもんな。

きつと僕の脳みそがストレスだからってシャットアウトしてクラウドにでもアーカイブ化したんだらう。

「……………」

「響つて考えてるとききよろきよろするからすぐ分かるよね」

「あ、そうよね！」

「私、分かる気がします……」

「没頭するタイプなんでしょ。あんまりじろじろ見ちゃダメよ？」

それでも結局毎回集まるたんびに褒められていろいろな罪悪感で胃がしくしくするの……変わらなかつたなあ。

僕は人から褒められ慣れていないんだ。

でもなあ……やっぱりなあ。

もうどうしようもないことではあるんだけど、でもやっぱりどうせだつたらちゃんとした出会いをしてちゃんと自己紹介して……嘘じゃない僕自身の、本当の僕自身のこと褒められたいって思うんだ。

女の子にならなければこの子たち相手にこういう気持ちにはならなかつたんだろうけど、でもやっぱりそう思う。

仲が良くなつちやつたから余計に。

そんな考えがぐるぐるって回るのがこの夏休みって言う期間のことだ。

でももうすぐ終わるからちよつと楽になるのかな？

「小さいと言えば」

「ああん？ りさりん私にケンカ売ってんの……？」

「なんでいきなり怒ってるのよ」

「いや、なんとなく？ とりあえずりさりん相手には怒つちやう乙女心」

「そんな乙女心なんて捨ててしまいなさいゆりか。 あんたのことじゃなくって響さ

ん」

ん？

また僕の話題に戻った？

「響さん、ごめんね？　なんかこんな雰囲気だから言っちゃうけど、響さんってこの中でいちばん……精神年齢みたいなの？　学力もだけどそういうの高いって感じるの。」

でも見た目のせいでどうしても、話したことのない他の人たちからは私たちのなかでいちばん小さくって……その、幼く見られちゃうって大変だなあって。店員の人とかの対応見てるとなんだか不思議な感覚になっちゃうのよ」

りさりんさんの口が良く回っている。

精神年齢が高いと言われてちよつと嬉しくはなった。

りさりんさんはいい人だ。

過剰に吸い付いたりしてこないしそこまでうるさくないしいい匂いだし。

「……この店員の人……場所がいいからって、いつもここで、集まりましたけど……その、おかげで覚えてもらえましたけど。最初の何回かは……えっと、

お子様ランチ、セツトみたいなものとか……サービスでジュース、とか勧められていました、よね」

「仕方ないさ。人は見た目だから」

小さいって言うのはそういうこと。

この体になってよくよく思い知ったんだ。

何度も来たおかげでここでならこの子たちの同級生、中学生なんだって認識してもらえるようになったけど……他のところに行けば毎回リセットだ。

……そもそも会って話す約束をさせられて何度も来させられなければこんな思いをすることはなかったんだし、夏休みなもんだからどこの飲食店も高校生とかのバイトの人が多くって必要以上に子ども扱いをする人が多かったんだし。

仕方ないとは言ってもやっぱりうざったい。

どうにかならないかなあ。

「僕だって同じような光景を見たら同じような感想を持つだろう。仕方ないんだ」

僕が店員さんだったとしたらそういう対応するだろうしな。

しよすがなくなつたっていらつとする感じ。

これがコンプレックスというもの。

僕が20年以上縁のなかったものだからしよすがないんだ、うん。

でもこの4人の後に続いて歩いてると……ほぼ確実に誰かの兄弟って思われるんだよなあ。

判定すれすれのゆりかはともかく、あとかがりはたぶん高校生だって思われるだろう

から中高生のグループに小学生が連れてこられているんだって、そう思うんだろう。

かがりとゆりかが居るおかげで集団の見かけ上の年齢幅が広がるせいで僕が下に見えるんだ。

移動中は手を引かれることが多いのも原因だろう。

大半はかがりで、ときどきゆりかにまで引つ張られるもんな。

お店でもみんなに任せて注文とか言ってもらうからなおさらなのかもしれない。

けど注文する前に「何にするか決めた？」って聞かれて答えたの、僕が口にする前に言われちゃうからなあ……楽だけど。

もう少し発話を早くできるような練習、気が向いてでいいからしておいたほうが良いかも。

今まではどうでもいいやって思ってたけど、こう毎日のように子供扱いされるとさすがに危機感を覚える。

人は本気で危険って思わないと真剣になれないもの。

危機だつて感じている今がチャンスだ。

「響つて割り切つてるねえ。それはもしやおとぎ話な社交界とかで会得した心の強さなん？」

「そんなものに出た覚えはないよ？」

「ちい……そう簡単に口割ってくれないなあ」

「だから違うって」

ゆりかもゆりかで僕に属性を加えようとしてくるし……やっぱり話す練習、しよつと。

1日1分くらいがんばれば良いよね。

## 22話 夏休みの、最後の日（まだ8月） 4 / 4

会話しているときにふと訪れる「間」ってあるよね。

ひとりきりなら当たり前な時間なのに、なんでか他人と居るとそれが気まぜくなるものらしい。

「らしい」って言うのはかがりとかが言ってたことってことで、僕にとってはむしろ嬉しいもの。

だって静かって良いものだもん。

なんなら1ヶ月でもじめつとしていたい。

目的がない会話ほど詰まらないものはないんだ。

「せっかく夏休みになってからみんなが知り合って友だちになれたんだからよ?」

そんな時間が苦手らしいりさりんが無理やりに思いついた感じで言い出す。

「来年はみんなどこか……あ、もちろん夏休みのことね……遊びに行きたいわね。

いえ、冬休みとかでも楽しいって思うけど」

そう言えば1人旅って女性はあんまりしないらしいね。

もちろん治安の関係もあるんだろうけど、それ以上にひとりですつといるのが耐えら



れないらしい。

僕には全く理解できない感覚ではあるけどこの子たちを見てきて「そういう生き物だよね」って納得はできる。

ひとりでお昼食ベに行くとかゆりかくらいじゃない？

そんなことできるの。

だってトイレだってみんなで行く種族だし。

「おう、りさりんいいこと言うねえ。たまには」

「ゆりかー？」

「急に猫なで声怖いからやめて!! ……あ、でも考えてみたらさ、ついこないだまでみん

なばらばらだったわけだもんね。同じクラスのりさりんと私でしょ、かがりんとさよ

ちんでしょ、あとは学外の響ってことで」

その僕もこの春までは存在しなかったわけだもんね。

物理的に。

だって成人男性と幼女って完全なる別の存在だし。

「ともかくさ、響がいなかったらこうしてみんなが友だちになれて、こーやってぐだぐだしてたり勉強会したりして集まって話すなんてできなかったんだよね？ 多分」

「そうねー、私も友達さんは移動教室で知ってたけどそれくらいだったし」

「わ……私も、杉若さんのことは顔くらいしか……あ、ごめんさい……」

「良いのよ、私だってたまたま覚えてただけだし、友近さんの名字」

別のクラスで特に仲が良いわけでもない相手の名字を覚えてるだけですごいんだけどなあ。

僕なんか同じクラスでもほとんど覚えられなかったし。

卒業して大分経つ今となっては誰が誰だったかすら思い出せないし。

「こそ、そんなわけでき、私たちは顔くらいしか知らなくてしかも響は別の学校で。

違うかー、違う出自つてのだし！　なんだかうまい表現が思いつかないけど、とにかくなんか感慨深いなーって」

魔法さんに生み出されたのを出自だつて言えばそうなるね。

「……いいわねゆりかちゃん!!　青春よ!!」

「おう元気だねえかがりん」

くるんさんのくるんがより一層にくるんくるんしている。

……この子、まだ遊び足りなかったのか。

「明日から新学期も始まってしまいうからすぐには難しいけど……みんなで遠出したりお泊まり……そう、パジャマパーティーを!!　私、パジャマパーティーしてみたいわ!!」

「お………おおう。　かがりんは大胆だねえ………」

唐突に話を飛躍させるかがり。

……うん、まあ、君はそういう子だよね……。

良くも悪くも人との距離感がゼロっての。

良くも悪くもな。

「お泊まり、ですか……」

「え、ええつと……し、下条さん、それはちよつと……」

お泊まり発言に引いている友近眼鏡さんとりさりんさん。

友近さんならともかくりさりんさんの反応を見るに、女の子って言っても意外とすぐにお泊まりし合う関係になるわけじゃないのか？

あー、かがりをスタンダードって思っちゃいけないのか。

どっちかって言うくと小学生男子に近い感性のゆりかとかこの子とかより、ちゃんとした感じのりさりんさんを基準にした方が良さそうな気がしてきた。

「あら?? みんなでパジャマパーティーとか憧れるじゃない?」

その反応にはてなしか浮かばないらしいくるんさん。

「おしゃべりしたり映画とか観たり、怪談とか恋のおはなしで盛り上がったたりしないのかしら?」

「まじですかい。……かがりん、いや、かがりさんマジパねえ……」

ゆりかが真顔になるほどらしい。

なるほど、本物のJCでも知り合って1ヶ月程度じゃお泊まりはしないと。

僕はひとつ学習した。

「？ ゆりかちゃんどうかしたの？」

「見よ、りさりん……あれがマジもんの天然ぞ？」

「す……いわねえ……」

ぼそつとささやきあうゆりかとりさりんに向けておにぎりみたいなお口をしているかがり。

なかなか珍しい光景だ。

でも、おにぎり口が久しぶりに見れたけど僕、かがりは天然じゃないと思う。

きつと、ちよつとだけ……いつも夢見心地なだけなんじゃないかって思うんだ。

だって本物のそういう人にとって多分僕話が完全に合わないって思うから。

いや、かがり相手もなかなかに厳しいんだけど……。

「わ……………私もっ」

眼鏡さんが急に大きめの声。

うん、緊張してると声とかびつくりするくらい大きくなって裏返るよね。

でも落ちついて？

何か言いたいことあるんだよね。

ちよつとびっくりしたけどかがりに比べたらなんてことはないから平気。

「……………私も、運動はまだ、控えるように言われてますし、すぐに病院に……………連絡が取れないと、いけないので。あ、あまり離れたところへは、難しいです、けど……………近いところとか、誰かのお家だったりとか。だったら、ぜひ、ご一緒したい、です」

ひと思いに吐き出してほつとしてる様子がほほえましい。

……………でもこの子は僕とは違ってほんとうに体が悪いらしいからいろいろ大変そうだな。

顔真っ赤にしてるけど心拍とか血圧とか大丈夫なんだろうか。

僕はニセモノだからいざとなってもどうすればいいのか分からないし、とりあえずはすぐに救急車呼べるようにはしておこうかな。

学生時代の僕を彷彿とさせるシンパシーを一方的に感じさせる子だし普段は静かだし、何よりむやみに頭とか手を触つてこない良い子だからとても心配なんだ。

かがりに対するそれとはまた別の方向性の父性を感じる。

「海はもうシーズン過ぎちゃうけどさ、山はこれから見頃だしね？ 紅葉とか。電車で近くまで行けて、そこからバスとかロープウエーで直接行けるとこならみんなで行けるんじゃない？」

「山ねえ……良いわね」

「でしよでしよー。私、小学校の行事以外で行ったことないしき、頂上とかでほんとに『やつほー』って返ってくるのか知りたいんだー」

「そうね！ せっかくですもの、遠出……疲れてしまうから遠すぎない範囲ね？ 気楽に行ける範囲でみんなが楽しめるところがいいわねっ！ 響ちゃんとさよちゃんが平気なところならー！」

「でしよー！」

メロンとレモンの相乗効果が生まれ始めている。

「……でも、下条さん……私たち、これから運動会と学園祭が……あとは中間試験も」

「さよちゃん。その先は駄目よ。そんなことを考えてはいけないの」

「え？ ……あ、はい」

でもくるんさんはやっぱりくるんさんか。

「あーそつか、それもあつたわね……冬休みまでの2回の定期試験。夏休み明けだから 容赦ないのよねー先生たち」

「りさちゃん！ 今から嫌なことを考えてはいけないのよー！」

いや学生さんなんだから勉強はしなきゃでしよ……？

夏休みが終わる日から遊ぶこと考えちゃ駄目でしょ……？

「下条さん、諦めなさい？　というか勉強、響さんに教わって今までの範囲大丈夫なんですよ？　軽〜くやれば良いのよ勉強なんて、軽〜くやれば」

「りさりんりさりん。それりさりんが言うのかい」

「へ、平均点目指せば良いんでしょ？」

「うう……でも、勉強はやっぱイヤあ……」

「下条さん、……が、がんばりましょう……」

なんだかんだでりさりんも大変そう。

ゆりかと友……さよさんは平気そうだけど。

「でも、そうねえ……試験もあるし学校の行事もあるしでなかなか難しいのねえ。これからの時期は台風とか多いし、予定立てづらいわね」

「だねー、りさりんとかは部活の大会とかあるし」

話の流れは遊びから学生生活の忙しさへ。

よかった、泊まりがけで僕も加えられての外出は避けられそうだ。

決まりそうになったらどう言い訳しようか焦っていたけど大丈夫そう。

いやだって、こうして昼間に出かけるだけなのとお泊まりなんてのはさすがにぜんぜん違うし、いくらなんでも僕がいちやいけないでしょ。

僕は成人している男、それも親御さんが知ってる人間でもなんでもないんだから事案でしょ。

いや、今は幼女ではあるんだけどさ……社会的には存在しない人間なわけで。

あとそもそもとして僕の体力的に厳しいところがありそうだしな。

そうなりそうな雰囲気になったら病弱仲間な友近さんと協力して……なんとか近場で、それもお泊まり無しの日帰りで被害を抑えたいところだ。

熱い視線を眼鏡さんに向けてみる。

「……………? ………………」

なんか逸らされた。

恥ずかしがり屋さんだもんね。

「試験もあるし2学期は忙しそうね。　ならやっぱり私はお泊まり会を推すわ!!」

なんで?

「うちならいつでも歓迎よ!　なんならこのまま今晚でも良いくらい!」

いやいやまずいでしょ……なんでこの子はくるんくるんしてるの……。

「かがり」

「響ちゃん!」

「明日は学校で早いんだろう。　僕はともかく君たち4人そろって寝坊したらどうする



んだ」

「うぐつ……で、でもお」

「だいたい泊まりだと親御さんの負担がある。それを気にした方が良いし、泊まる側の親御さんも事前の挨拶とか準備が必要だろう？」

お泊まり会とかするときに最低でも親同士が知り合いじゃないとめんどくさいらしいよ？

「……響ちゃん、ひどいわあ。せつかく思いついたのに」

「事実じゃないか。始業式に遅刻したらどうしようもないよ？」

実際どうしようもないよね。

この歳でサボり癖がついたら高校生でプロノートデビューもあり得るんだ。

この僕が実際に大学生あたりからサボり癖ついたからこそ断言できる。

「……うーん、お泊まり会かあ……」

「どうしよ、りさりん。このままじゃ」

そんなくるんさんを置いておいてぼそぼそ話してるゆりかとりさりん。

何かこの体、聞こうってすれば結構聞き取れるんだよね、ひそひそしてるの。

目も良ければ耳も良いの？

身長以外に欠点ないの？

あ、胸がないのは致命的な欠点か。

「お泊まり……大丈夫かなあ……？　ねえ、ゆりか」

「悩むねえ」

「私はそこまで心配じゃ……まあそういう感じ全然ないし、私はあつても」

「りさりん？」

「前にも言ったじゃない、凄まないでよ。だから私はそこまで抵抗ないんだけどゆり

か、あんたは」

「そだねえ……かがりんってけっこーそういうところ無頓着だからねー」

体育系の部活なら合宿とかで慣れてるって思ったけど……それでもない感じ？

まあ前からの友だちなゆりかの家に泊とかなら平気だろうけどそうじゃないもんね。

「あんだだけ参考資料ため込んでのになーんで自分は平気なんだろうねえ、かがりんってば。だって少女漫画って結構……」

「だから天然さんなんじゃない？　悪い意味じゃなくって」

「分かってるって、りさりん人の悪口言わないし。……ま、平気じゃない？　間違つてもかがりんが企むとかないでしょ」

それにしてもりさりんさんとかがりって仲良いよね。

よく分からないけど結構真剣に話し合っている。

「……………」

あ、それ見てる友達さんがうらやましそうな眼鏡の光らせ方してる。

かがりは……トリップしてるからどうでもいいや。

「あらあらー？ ゆりか、まだちよーつとそういうの早いんじゃない？ まだ中2なのよ？」

「うるせいやい」

何が早いんだろう。

お泊まりが？

いや、仲良ければ小学生どころか幼稚園児でも……って言うのはもしや世代の違い……？

「私はともかくさ、かがりんの行動を警戒したほうが良さそうよ？ だってさ、あのけしからん胸見てよ。あれが夜中にずーっとそばにあったら万が一が起こりえる可能性が！」

「こら、セクハラ禁止。公共の場よ」

「あい」

とりあえず楽しそうで何より。

僕ものけものにされてぼーっとしてられて何より。

なぜか勝手に落ち込んでたくるんさんをなだめている黒縁メガネさんと、反対側でなにやら盛り上がりつつしているらしいぱつつんさんとさりりんさんのあいだでずずーっとジューズをすすする僕。

やっぱり女の子の感情のツボってやつ分からないなあ。

「……………」

それにしても気が早い。

まだ夏休みが終わるばかりなのに、もう次に遊ぶの考えてるもんな。

まあ明日からの学校生活をぎりぎりまで忘れていたいだけなんだろうけど。

でも…………どうしよう。

少しずつ距離を置くつもりだったんだけどこの夏休みでむしろ近くなっちゃったたまであるし…………ここまですると、そうすぐに別れようとは思えなくなつて来ちゃったしなあ。

…………このままずるずる付き合っているうちに魔法さんが僕を元に戻してくれるか、このまんま幼女の姿のまままでいさせられてぜんっぜん成長しなかつたりして不審に思われはじめるまで2、3年と言ったところかな。

なにしろなった経緯が経緯だから分からないんだよなあ…………ほんと、毎晩お願いはし

てるのになあ……いつ戻っても良いように家の中じゃシャツ一枚って言う準備万端っぶりなのになあ……。

僕からしてもそこそこの期間だし、たまになら……ごくたまになら気晴らしとかでこの子たちとどこかへ行くのも悪くないって思ってたあたり情が湧いちやっただなあって思う。

もちろん泊まりがけは断固として拒否するけど。

肉体的には問題ないけど……でもやっぱりダメでしょ……大人の男としてここだけは譲れないもん。

もし万が一、億が一でもお風呂上がりでだるつとした格好のこの子たちを見て砂粒でもやましい気持ちになっちゃったりでもしたら罪悪感で死にかねないもん。

その辺は一応で成熟した大人の男なんだから。

さすがに肉体年齢が半分近い子供に欲情つてのをしたら、男としても大人としても……人としておしまいだろうから絶対にあつてはいけないんだ。

まあ、ないとは思うけど。

「……………」

でも充実していた夏だった。

とつても忙しかったしとつても疲れたけど、それでも何年かぶりに……僕がこの子た

ちくらの歳以来に楽しかったのかもしれない。

手元を見る。

いつものようにブレンドされたジュース（微炭酸）と、みんなから一口ずつ分けられた安っぽい、雑な味だけど懐かしい学生のとくによく食べた料理。

視線をテーブルのほうに向けるときやいきやい騒いでいるかしましい女の子たち。

そのせいなんだろうな。

会うたびに疲れるし大変ではあるんだけど、それでもこの子たちと一緒にいる時間。

それがとても楽しいものですぐには手放したくないって思っている僕自身が……いる、らしい。

……いけないな、最近はどうもメランコリックだ。

季節の変わり目が近いからかな。

「でもさ？　旅行とかはおいておいてさ」

視線を上げるとみんなに見られていたのに気がついた。

「とりあえずみんなでこうしてチケットにだべったり食べたり。あとはゲーセンとかで遊んだりしたいね。それくらいなら大丈夫でしょ？　響もさよちゃんも」

「……そうだね」

「今度はみんな映画館行ったり、お泊まりじゃなくても誰かの家で遊んだりしてさ。

「どんだけ忙しくなったりしても……ね！ 響ー！」

学校が始まっちゃったら怒られるから切らなきやって言ってる、ぱつつんに戻るらしいゆりか。

「そうねっ。 お話しするくらいなら、響ちゃんさえ都合が合うのなら学校の帰りとかお休みの日だっていくらでも集まれるわよね！ 響ちゃんも前よりはずいぶん打ち解けてくれて……夏までは何回かに1回しか会ってくれなかつたけど今は2回に1回はお誘いに乗ってくれるようになったもの。 私、それがとっても嬉しいのっ」

「断ったらその分服を用意されたり髪型を変えられたりするからってのが大きいんだよ？」

「ね、響ちゃん？ また、秋もたくさんお話して遊びましょうね？」

くるんはくせつ毛で天然もの、パーマでもなんでもなくって……あと夏休みで体重に合わせてカップもひとつ上になったと知らされてしまったメロンさんことかがり。

「……たまになら」

何日おきとかは僕の精神力だとやっぱりつらいから月に1回くらいなら。

「いいよ。 たまになら、こうしてみんなで集まるのも。 ……悪くはない………っ  
て思うし」

今までを思い出しながら口にした途端に「かしゃっ」っていううるさい音。

びつくりして見上げたらゆりかのスマホのレンズがこつちを見ていた。

「あ————！ 響のレアな表情!! これ絶対実はものすんごく照れてるやつ!! はい、いただきました——！」

「あ、ゆりかちゃん私にも送って送って!!」

.....え？

「もつちろん！ この人類の秘宝はプレシヤス!! グループのに乗つけるよー」

「止めてくれ」

「どうしてよ、いいじゃない!! かわいいわよ!!!」

「やめて」

隠し撮りとか良くないって思う、僕。

「顔赤ーい！ ふだんは真っ白なのに!!」

「くすつ、響ちゃん、かわいいっ」

「消して」

誰も僕の抗議を聞き入れてくれない。

「こういうときに女の子って酷いよね。」

「ゆりか、なんでどアップなのよ.....? いや、すごくお肌も綺麗だけど」

「.....でも、その。.....美しい.....です」



「だから……」

……女の子の子する格好をさせられたのを撮られて共有されるよりかはずつとマシかって思つて諦めるか……。

かがりのスマホには僕の女装つて言う名前の痴態がこれでもかつて詰め込まれているから、いずれどうにかしないとだけど。

後ろを向いて両手をほつぺに当ててみる。

……確かに熱くなつてる……かも。

「……………」

いや、誰だつて至近距離で見られたくない表情隠し撮りされたら恥ずかしくてこうなるはず。

うん。

「ぴろんっ」

「……………」

手元で鳴つたスマホにはたつた今僕がしていたらしい、……うん、見事な照れ顔というやつ。

どアツプで。

前髪が軽く掛かっついてまつげと合わせて光つてるのが余計に恥ずかしい。

……もう、この体も顔も僕自身のものって感じるんだから止めてほしかったなあ。

四角い画面には……いつも鏡で見るような眠そうな顔じゃなくなつて、目を見開きながらもちよつとだけそらしてうつむき加減。

でも口がすつごく緩んでいる、年相応に見える笑顔が映っていた。

## 23話 山／山 1／4

ぶしゅーつと音がしながらちよつとだけ傾く感覚。

「ありがとうございましたー」

「……………」

ひとり、またひとりと若い人から順にバスから降りていくのを眺める僕。

乗り始めた駅前からしばらくは毎回のように止まっていたけどその間隔も次第に遅くなって行つて、フロントガラスの上のお値段も加速をつけて上がっていくのにひやひやする。

乗り換え案内で先に調べてないといくらになるのかって不安になるよね……バスつて。

電車はそこまで気にならないのにどうしてバスだけこんなに気になるんだろうね。

普通のバスなら電車と同じで、乗ってる時間イコール時給のお値段って思っておけば間違いないのね。

そうして市街地を抜けてどう見ても田舎って感じの町並みに……背の高い建物が数えるほどになって車の数が減って信号の方が多くなつてきて、歩道の両脇が緑で染まる

のがあたりまえになって。

「なんか止まらなくなつたな」って思ったときには大きくて古いバスの中に運転手さんの他には僕しかいなくなつていたらしい。

気まずい。

誰か乗つて来て？

車窓からぼーつと眺めるのが好きだからつていつものクセで無意識に選んだ、バスのいちばん前のよじ登らないと座れない特等席に座つてゐる僕は気まずいんだ。

だつてカーブのときとか信号待ちのときとかに運転手さんからの無言の視線がちらちら飛んでくるんだもん。

きつと「この子大丈夫かな」つて思われてるんだらう。

だつて田舎の誰も乗つてないような区間にひとりだけ乗つたまんまな子供だよ？

「下りる場所ちゃんと分かつてるかな」つて心配になるでしょ。

僕がこの人ならそう思う。

中身が分からないんだからしようがないよね。

これでも大学を卒業したニートだつて言うのにな。

「……………」

「次は市役所前―市役所前―」

テープの音だけが結構頻繁に聞こえる車内。

僕はそれに気がつかないフリをしながら車窓を楽しむ。

後ろの席だったら気兼ね無しに外を見たり本読んだりできてたのになあ……でも景色は悪いし人に囲まれるからやなんだよなあ……。

妙な緊張感をちりちりと感じていると、バスは刈られて土色になっている田んぼを抜けてぼこぼこした道を走るようになって、バス停の名前に川とか山とかが含まれるようになって来て。

坂道を登り始めたって感じるころにはしよつちゆうぐねぐねし出して酔いそうになつてくる。

前の体だと全然酔わなかったけどいかんせんに幼女だ、気は抜けない。

というか体重が軽すぎてカーブの度にお尻が浮きそうになるから結構怖い。

必死に鉄のバーにしがみついていると安心するけど運転手さんが心配になるジレンマ。

いざというときのための酔い止めを意識しながら、両側に広がる背の高い木々の柱とその向こうの真つ暗で真つ黒な空間で囲まれている道を……ガードレールがないのに2車線なおつそろしい道をエンジンを吹かしながら器用に上がっていく運転手さんを中心の中で応援する。

運転手さんはこの道何十年なんだから大丈夫なんだとは知っていても僕にとっては

初めてなんだし、怖いものは怖い。

そうならないって知っていても怖いものは怖いんだ。

映画とかでも落っこちるシーンでひゅんってなる体質だし。

ペーパードライバーを舐めるな。

「……登山口入りロー」

「む」

見るべきものが植物しかなくなつてうとうとしかけてたらしいけど不思議な第六感によつてちゃんと起きた僕は偉い。

よじ登つた席からよじ降りて金額を見て子供用財布からお金を……田舎つて現金しか使えないよね、バスでも……寝起きの頭でがんばつて出してたらなんかすつごくここにこされたのが悔しい。

「子供料金だからこつちだよ」って優しく言われるのが切ない。

中身は大人なのにこうして子供扱いされるのにはどうも慣れない。

いや、どう見てももたつてゐる子供なんだからしょうがないって頭では理解してるんだけどさ……。

すつごくここにこしてる運転手さんから投げかけられる、予想していたとおりの会話をひとつおりにしてからバスを降りて、目の前の看板の消えかかっている案内図をスマホ

に収める。

こうして子供だとしてもしっかりとしてる子供だって認識させておけば迷子って通報されないだろう。

多分。

通報されないといいな。

けどここまで来たらもう戻れない。

「……………ぐへえ」

けど口が疲れた。

見た目相応の、でもしっかりと感じた感じの女の子の演技をしたせいだ。

喉の筋肉をしつかり使って舌もしっかり意識して、でもやっぱり幼女な声を作ったせい。  
い。

やっぱり一見さんに対して……特に大人に対してこの見た目で中学生は「ん？」ってなるらしい。

だから小学校高学年って設定で乗り切ることにしてそれっぽい話し方しているんだ。  
だ。

高学年ならたまーに大人びてかشこい感じの子っているからそのイメージ。

幼すぎず、でも頼り無さ過ぎずな塩梅が難しい。

ちよくちよく買い物するときとかにしていた練習が役に立ったなら嬉しいね。でもそのおかげで多分疑われずに来たんじゃないかな。

とりあえずで変な顔もされなかったし「お母さんは？」攻撃にも多分ちゃんと耐えられた気がする。

さりげなく会話の途中にスマホとか取り出して画面を見る振りをするのがポイントだ。

あと僕、ここへ来るまでのお金を普段の半分しか使わずに済んだ。

つまりは往復しても片道分しか払わずに済む。

だって子供料金だもん。

運転手さんから言われたんだから問題無いはずだもん。

ということとは……日帰り限定ではあっても、旅行に行きたい放題だということになるんじゃない？

だって半額だよ？

「……………ほへえ」

子ども料金って最高だなあ……。

やっぱ出かけるときは小学生って設定にしておこう。

嘘じゃないしな。



子供扱いを我慢すれば良いだけなんだから。

遠くから高くから聞こえてくる鳥の声と葉っぱの音しかしない、うっそうと暗いけど登山道だけは明るいバス停。

僕はしばらく小学生って侮られる代償の大きさにほくほくしていた。



今朝は起きた時間こそいつも通り。

でも通勤時間より前っていう、日が昇るのが遅くなり始めてきたからちよつとだけ暗いままで涼しい風が吹いてる時間に家を出たんだ。

それは僕にとっては相当に珍しいこと。

夏休みっていう地獄が終わってからしばらくして静かになった喜びを堪能したから泊まりがけの旅行で温泉とか……はムリだからとりあえずは日帰りってことで静かそうな場所を探した先の、とある山に登るためなんだ。

子供値段の切符も使って電車とかバスに乗って、僕の見た目がどうなのかっていう実験の追試だ。

別にお得な思いをしたかったからじゃない。

その気持ちも無いって言えば嘘だからやっぱりあるって言うけど、でもそれよりも今の僕がどう見えているかを改めて知りたかったんだ。

だって未だに鏡をじーつと見てるとふと思うんだ。

この子、誰？

だってだって僕がこの子になってるみたいなのは間違いないみたいだけどこの子ってば年齢不詳だもん。

顔つきは中学生で「うーん……」って感じに納得してもらえただけど身長も体つきも小学校の真ん中よりちよい下って言ってもいいもの。

でも裸になってみると胸がある気がするんだ。

いつまで子供の胸を気にしてるんだって僕でも思うんだけど1日に1回は見るんだからしょうがない。

今まであったものが無くなった代わりとして生えたものなんだ、気にならない方がおかしいもん。

そんなアンバランスな体な僕。

……この体の出自的に、かなり早熟で……第二次性徴ですごいことになるはず。なのにそこまではなくなってなくて、でも身長はすつごく低いときた。

なんか変だよ、この状況って。

まあ「魔法さんだから……」で済むって言えば済むんだけど。

そんなもやもやが溜まっていたからって言うのもあつて試してみた結果は……言うまでもない。

中学生つて見えるんなら「学生証は？」つて聞かれるはずだけどそんなことはなくつて、むしろ途中におばさんとかおばあさんとかおじいさんとか駅員さんとか運転手さんとかに「1人で本当に大丈夫？」つて念を押されたくらいだからやつぱりがんばつても小学生なんだろう。

「年長さん？ しつかりしてるわねー」つて言われたときには怒りと悲しみとやるせなさどむなしさが一緒にたになって湧いてきた。

園児はないでしょ園児は……。

……さすがに無いよね？

発育遅いだけだよね？

ゆりかみみたいな特殊体型なだけだよね……？

とりあえず何話しても園児扱いのままだったおじいさんは許さないんだ。

何がお遊戯会だ。

「……………」

悲しいけどやつぱり今の僕は紛れもない少女……幼女の様子。

少なくとも親のどちらかがそばにいるはずだ。って思い込まれるくらいの年齢の。なんでこんなになっちゃくなくちゃってるんだらうね、ほんと。

どうせならがっちりしたイケメンにしてくれたって良かったじゃない。

それなら肉體改造と整形しましたって言い張れるのにね。

これじゃ海外で大規模に工事してきましたって言っても信じてもらえない。

アスファルトかと思えば砂利道、丸太かと思えばこんどは石畳で舗装されていたりしなかつたりする山道をただただざくざくと登っていく。

久しぶりの全身運動。

耳に入ってくるのは僕の幼い息づかい、リュックの中のがさがさ、靴が地面を踏みしめたり石を転がしたりする音だけ。

それが反響するでもなく、ただただ真上までそびえている木々のすき間に吸い込まれていく。

僕こういうの大好き。

誰も居ないところで……居ないって言っても人の手が及んでる程度の僻地でこうしているのが。

今回は様子見つてことで山っていつてもそこまで険しいわけじゃないところにしてるし、いざとなればバス停に引き返せば1時間しないうちに次のが来る。

ゆるふわな絵柄で運氣アップとかパワースポットとかかがりが好きそうな旅行雑誌にも「お手軽に」とかあったんだし、初心者向けの場所なら大丈夫なはずだし。

バス停が山の中腹まであって、そこからほんの30分くらい……僕の足なら1時間かな、がんばれば……頂上に着けるってだけの、たぶん近くの小学校とかの遠足でも人気のありそうな山。

辛うじて丘じやないって感じの、けどしっかりと山々のひとつって感じ。

展望台からは山と町を一望できるらしいってそんなところ。

僕の家を出てから電車とバスで2時間くらいでそこまで標高がなくてところどころとってっぺんが観光地化されていてっていう割と近場だったらしい。

意外と近いところって行く気しないよね。

運転手さんに話し込まれたから知ったけど、ちよつと前まではさっきのバスとかは連日立ち乗りになっていたんだとか。

まあ僕がわざわざ来ようって思うくらいには難易度が低い上に夏休みは頂上まで直接ルートがあつたらしいし。

だからプロのニートは閑散期に旅行に行くんだ。

「……………うわっ」

僕はぼーっとするからよく石とかを踏んづけて足首を痛めそうになる。

前に比べると視点がだいぶ下で重心が下がっていて安定しやすくってしかも地面からの距離が近いこともあっていくらかはマシだけど、それでもぐきつとしそうになる。

子供のときってよく足くじくよね。

そういうのを思い出す。

足をなんどもくじきそうにはなるけど、今までに家の中でさんざん痛い思いをしたせいか無意識でその瞬間にぴたつと止まれるように訓練されている。

今日はすでに何回目かになるひやつとだけど、まだ無事みたい。

けど、ちよつと気をつけないとな。

こんな山の中で足首痛めてうんうん言っているところを親切すぎる誰かに見とがめられちゃったら、すつごくめんどうくさそうだし。

この歳の子供って、何かあつたら「お母さんの連絡先は？」だもんな。

「お母さんはいません……」って事実を言つたらどんな顔するんだろうって思う。

悪いからしないけど。

……夏休みも終わっていて、平日で、しかも午前。

がらがらだつて言つてもやっぱり交通の便がいいからか、数分にひとりは僕と同じような格好をしたり町を歩くような軽装で歩く人を見かける。

それくらいには登山に至らない感じの場所の様子。

ちよつと前までのごみごみしていたらしいのがウソのよう。

たまに後ろから登ってきたと思つたら追い抜かされたり降りてきた人とすれ違いうらいだしな。

団体さんと遭遇する可能性が低いのは安心だね。

でも何十分も誰の姿も見えないでただ植物の世界を歩くのは怖いからなあ……。

田舎つて「ちよつと山道だけ」の「ちよつと」が草木を掻き分けてつてことあるし。

僕、虫とか大きな葉っぱとか苦手だからなあ。

男の体ならやなところは全力で走り抜けられるんだけど幼女だから埋もれそうだし。

「……んぐ、んぐ………」

さびてぼろいベンチに座りながら軽く水分補給と体力回復をした僕はふたたび登り坂に挑戦しはじめる。

なんだか精神力が回復する気がして楽しい。

孤独つていいよね。

僕は最近人と会いすぎて話すぎたから疲弊していたんだ。

それも現役JCたちとか言ういちばんうるさい年代の、しかも女の子たち。

後半なんて毎日のように何時間もへとへとになって「もういや」つてなるくらいだったんだ。

いや、「だるいから今日はいいや」って言いさえすれば良かったんだけどさ。  
「んおっ」

変な声が出た。

考えていて気がつかなかったけどきれいな石畳だった道が急にじやりじやりしてき  
たらしい。

ひゅんってなつて危なかった。

用心しておこう。

「……………」

あの子たちと頻繁に会うまではこうして日帰りでもいいから旅行へ行こうって思っ  
てたはずなのにすっかり忘れてたのって、忙しかったことはもちろんあるんだけど、た  
ぶんそれ以上に。

退屈を紛らわせるためのなにかをせずに良くて、ただめんどくさがりながらも子供  
……中学生の相手って言うかお世話を楽しんですらいたからなのかもな。

めんどくさいから続かなかったけど、立ちっぱもやだし不特定多数の人を相手にする  
のもやだったからってバイト先を学習塾とかにしてはいたけど……そもそも僕って子  
供の面倒見るのが好きだったのかもな。

もちろんにやらしい感情なんて芽生えないから純粹に。



人じゃなくても動物の世話でも良いのかもね。

今の体じゃむしろ僕がお世話される側って思ってたけど、一応一回やったっていうアドバンテージで宿題とか教えられたしな。

そうだよなあ、今の僕はお世話される側なんだよなあ……。

下を向くとふりふりしてる僕の横髪。

背中を丸めると体の前の方にふりつて来る後ろ髪。

……子供だよなあ。

この体じゃ、保護者同伴でもなければ泊まりがけの旅行なんてどういったってムリだろうな。

だから日帰りで人が少なそうで、でも幼女の体力でもどうにか行けそうなここを適当なガイドブック頼りに来ているわけだ。

子供が1人で来ていてもおかしくはない場所。

この時期だから「自由研究の写真が足りなくて……」で乗り切れそうな範囲。

電車とかバス、今日は使わないけど僕の大好きなロープウェイとか登山鉄道とか飛行機とか。

いちいち払うからいつの間にかすぐにつっこうなお値段になる観光施設とかの入場料とかまでほとんどゼーンぶ半額近くになる体。

50%オフ。

なんて魅力的な数字なんだろう。

窮屈な生活の代償がこれっぽっちじゃ悲しいけどしょうがないものはしょうがない。

安いつて言うので我慢しておこう、うん。

安さも半端じゃ無いもんな。

このくらいの距離だったら乗り放題の切符とか買うのがばからしくなるくらいだし。

どうにかして宿泊できるようにさえなればいくらでも好きなどころに行けそうな気  
までしてくる。

……そんな方法あるのかな。

この見た目で誰にも気にされずに……なんて。

ただでさえ声かけられやすい女の子っていう生き物になつてのにな。

「ふう」

お水の冷たい感覚がお腹の真ん中まですとんと落ちる。

思っていたよりもずっと疲れていない僕。

金銭的なことで嬉しかったからか、それとも散歩とか思い出したらしていた筋トレとか、特に最近あつちこつち連れ回されて体力がついたからかは分からない。

でも緩いとはいってもそこそこの山道なのに、息がちよつと上がるくらいの運動をし

ていてもそこまで疲れを感じない。

ちよつとは鍛えられてるんだつたら嬉しいな。

そういうえば「夏休みもおしまいだから！」ってかがりに1日かけて連れ回されかけた

日があつただんど、そのときも夕方に帰ってすぐ眠くなったりしなかつたもんな。

これからはだんだんと涼しくなるだろうし、こうやって外に出て体を動かして背が伸

びるように祈ろう。

半年もずつと狭い家の中でうじうじしてたんだ。

◆  
こんなときくらい頂上の展望台からのすばらしい景色というやつを……◆◆◆◆◆

◆

ん？

なんか変な感じ。

なんだろ。

おしっこ？

「……………」

……地図でしっかりトイレの場所覚えておこう……。

こんなところで漏らして大人の世話になつたらどうなるかわからないもん。

## 23話 山／山 2／4

僕は偉い。

僕は痛みに耐えているから偉い。

上を向きすぎて首が痛い。

無理やりにつ作った笑顔のせいで顔が痛い。

微妙に体全体を反らさないといけないから背中まで痛い。

偉いつて言い聞かせても痛いものは痛いんだ。

もういやだ。

帰りたい。

けど帰るのもいやだ。

「まー！　ひとり写真を撮りに？　えらいわねー」

「慣れてますから」

髪の毛の色で驚かれるのにも慣れてる。

「親御さん……お父さんかお母さんは一緒じゃないの？　そう？」

「慣れてますから」

必ず近くにいるはずの親とかを探されるのも慣れてる。

「いつもなの？ でも気をつけたほうがいいんじゃない？ 近頃物騒よ？」

「慣れてますから」

最近物騒って僕が産まれる前からみんな言ってるらしいよ？

「時間あるし着いて行つてあげようかな。 私たちは時間あるし」

「慣れてますから」

せつかく早く来たのになあ……お年寄りの方が行動早いもんなあ。

何がお年寄りを労れだ、幼児を労れ。

「大丈夫じゃない？ これだけしつかりしてるし……わたじまだ若いころもそうして遠

くまでひとりで行つたものよ。 あらやだ」

「慣れてますから」

「あ、疲れたら甘いものよ？ 低血糖は登山の敵なの。 あとで食べてね」

「慣れてま……あ、ありがとうございます」

おんなじ顔をしておんなじ対応を数え切れないほど繰り返す。

僕の両手に乗せた帽子の中にはごっそりとアメやら何やらがこんもりと。

足りない分はリュックにぎゅつと押し込められて積載重量オーバー気味。

でももちろん拒否権はない。

善意という名のただの余りものの投棄なんだ。

人つて良かれと思つて行動するとかかなり強引だよな。

だからいつもネットの世界は荒れてるんだらうね。

ため息出るけど実際この見た目の子供に対する対応としては正解だからしようがない。

僕以外の幼女は本物の幼女だからな。

「まあ、きちんと敬語を使えてお上手ね！　うちの子も4年生になったのに……あなたを見習つてほしいくらい」

「慣れてますから」

「しかし本当に綺麗じゃのー。外人さんのハーフかい？」

「慣れて……そういうことになるかもしれませんが」

「どういふことかは明言してないのがポイントだ。」

「何かあつたらすぐにブザーとか笛とかで音を出すのよ？　緊急の電話も登録しとくのよ？　もちろんすぐに使えるようにして」

「慣れてますから」

都合6組目くらいのおじさん&おばさん&おばあさん&おじいさんの集団とのやりとり。

今回の人たちはたったの4人連れだったからそこまで話が長くならなくてよかった。

でも個人と集団は全然難易度が違うんだ。

「はあ——……」

中学生たちとも違う距離感。

あの子たちの相手で慣れていたはずなのにたったの数分の会話でげっそりだ。

……大人の女性は僕の天敵だ。

これならまだ子供の相手のほうがまだずっと楽だったなあ。

「はあ——……」

ため息と一緒に疲労を吐き出す気持ち。

おぼちやんたちとの視線が切れたのを確認してから、限界までがんばって作っていた

笑顔を解いてぐにぐにとマツサージする。

特に目元と唇の端の筋肉が致命的に疲れている。

なんか痙攣してるし。

……もう小学生っぽい感じにしくてもいいんじゃないかな……？

いやいや、こんなところで不審に思われたり心配だって思われちゃったりしたら困る

しなあ。

人がばつと僕を見て判断する年頃が小学生なんだからそれっぽい応対をしないと不審に思われるから厳しい。

いつもの眠そうなのに考えているんだかわからないような顔でぼそぼそしているの  
ところどころ笑顔を作って活発なの、どっちが受けがよくって信じてもらいやすいかって  
いったら言うまでもないしな。

人は見えた目、話し方なんだ。

ついてこられるだけならまだしも、家出とかなんとかでおまわりさんとか呼ばれちゃうかもだし。

まさかひとりで出かけるのがここまで大変だとはなあ……。

「うにうに」

って顔のスジというスジをほぐしきって、僕は視線を落として首の後ろの緊張をほぐしはじめるついでに今日の服装を眺める。

都会だったら痒い思いをするだけで済む虫という奴らは、こういう自然のほうが多い  
空間になると途端に数を増やす。

数の暴力で、テリトリーから抜け出すまではずーつとつきまとわれて不快な思いを  
する。

だから山とか川に行くときにはかならず長袖長ズボンで靴下は長いのできれば首も



しつかり覆う感じの格好でツバのある帽子というのが鉄則だ。

植物たちも地味にちくちくざくざく来るしな。

この低身長ならさらに……だ。

旅行に行き始めの初心者ころにはこうした夏に、ズボンこそ長いものの靴下とかシヤツとかが短いつていう装備で来ちやつてひどい目に遭つたんだ。

山を、自然を舐めてはならないんだ。

都会つ子だった僕にはそれを肌で実感して苦い思いをするしかなかったんだ。

まあ慣れさえすれば平気なんだけど。

事前の準備というやつがすべてだ。

準備だけちゃんとしていたらなんとかなるもの。

あとはこれでもかかってくらのスプレーも吹きかけておけば完璧だね。

ともかくそういうわけで僕の格好は山でよく見る感じのだけとしたものだけど、それでも銀髪幼女な僕の姿は……とりわけ緑と茶色と黒がメインの山の中ではそれはまあ目立つ目立つ。

ひとこと目に必ず「外人さん？」だもんな。

うん、確かに外人の人がこの国に来るとうんざりするのも分かる。

さらに言葉まで分かっちゃうんだつたら大変だろうなあ。

こんな見た目の僕でさえ外人って思うんだもんなあ。

まあしょうがないものはしょうがない。

見慣れないんだからな。

「ふう……」

そこそこ以上の運動量。

いくら多少涼しいからといってもそれなりに汗はかくもの。

登りはじめるまではいつものパーカーさんにお世話になっていただけさつきからはリュックの底に詰めていて、だから帽子しか僕を隠すものがなくなつて。

そんなもんだから帽子の下からは僕の顔がはつきりと見えちゃうし髪の毛はふあつさりしている。

隠しようが無いんだ。

うなじのところって蒸れてけっこう汗かくしなあ。

おかげで歩くとびに髪の毛がもぞもぞとしている。

でも前みたいに髪の毛をシャツの中へ入れたらびしょ濡れになるだろうから止めておいた。

目立たなくなるけど、たぶん不快感で結局汗だくになつてから髪の毛出しちゃうだろうし。

それでもはじめは髪の毛を下のほうでくくっていたんだけど、それだとなおさら歩くのに合わせて髪の毛の房がびったんびったん体を回るから今は好きなようにさせている。

まるで生き物のようだったな。

……切られるのを大変イヤがることからあながちまちがいではないのかも。

生きてる髪の毛とか怖すぎるけどな。

そんな僕だから、遠くで視界に入った瞬間からロックオンされて、近くまで来たら声をかけられてひととおりの質問とかをされて、大丈夫だつてどうにかわかってもらえたら甘いものとか飲み物とかそういうものを貢ぎ物みたいに渡されるのがパターン化している。

僕に構ってくる時間が長いのは女の人。

男の人はそこまで熱心じゃ無いから良い奴らだ。

あんまり心配しないのが心地いい。

男同士の距離感つてやつ。

今は女だけだ。

おぼちゃんつて感じの人たちに絡まれる事故に遭うと最長でひと組20分くらい……立ち話という疲れる姿勢のまま拘束される。

「親とか付き添いとかとはぐれたんじゃないの？」って心配される。

そうじゃないってわかると「ひとりで大丈夫なの？」って何度も確認される。

高く見積もって小学生女子なんだからしょうがないんだけども。

まあもつと上に見られたって、女の子がひとりでこうして人気のないところにいたら普通の人の普通の神経なら心配もするだろうけど僕にとつてはうざったいだけなんだ。

「一緒に行こう」とか「目印になるところまで」とか「今登ってきたばかりだから案内してあげる」とか……下心がないぶん断るのがものすごくめんどくさい。

でもみんな現金だよなあ。

僕が特徴の無い男だったときにこういう風に構われたことなんて1回も無いのにな。

やっぱり人ってそういうものだ。

「……………」

肩が凝ってる気がする。

こきこき言ってる。

……幼女の肩も凝るんだなあ……。

上を向きながら話していると疲れるっていうのを学習した僕は、敵……じゃなくて人と遭遇しそうなところで座れる場所を確保するようにしている。

だから今もいい感じの、僕の脚の長さにフィットしている岩にお世話になっていた。

それでも首ががっちがちだ。

大変なストレスを感じている様子。

がいがいやいやいしながらおばさんたちが離れていく。

元気だよなあ、特におばさんって生き物たちは。

話しがてら数分休んで軽くなった感じの体を起こして立ち上がり、すみっこのほうに置いておいた一眼レフをずっしりと持ち上げる。

「おもしろい」

僕の……もう10年ものなるカメラ。

「なんにも趣味がないのもアレだし……」って感じで昔に買ったこのカメラは今の僕にとってはいささか重量オーバー。

片手で持とうとすると手首を痛めるから必ず両手で持つ必要があるし、首にかけるだけだと首がまた痛くなるからたすき掛けにするような感じでかけている。

ところどころ落したりしてハゲたり欠けたりしているカメラ。

使用感はばっちりだ。

これだけぼろぼろになると逆に愛着が湧くものだよな。

持って来たばかりの時は不相応な荷物にはなっていて重いから後悔しかしていなかったんだけど、今となってはいい判断だったと思える。

ぜんぜん思いついても見なかった「写真クラブとかに入っていて今日も山からの風景を撮るために来ている」んだっていうもつともらしい言い訳が素直に通るんだもんな。やっぱり形から入るのが良いらしい。

特に今はがんばってミラーレスで普通はスマホで済むもんなあ。

時代って残酷。

写真を撮るために親からの許可をもらってもう何回もひとりでこうしているんだっていう信憑性のある言い訳が成立するのはありがたい。

使い込まれているから「家族の愛用のをもらったの……」とかそれらしく言えるし、さらに言えばレンズをふたつ持つて歩くのもいちいち変えるのも大変だからって遠近両用のごついレンズにもしているから、カメラ愛好家さんがいけばすんなり話が通って楽だった。

なんだか細かい話をされはじめたら「お下がりで使ってるだけだからそこまでわかりません」で引き下がってくれるしな。

芸は身を助くって言うけど今日のところはほんとうに助かっている。

重いけど。

もう肩が凝っているけど。

でもカメラの話になるまで明らかに怪しまれてた感じの雰囲気も何回かあったしな。

でもでも重いんだ。

写真を撮るっていう用途以外にもぞんぶんに活躍しているカメラさんをゆつくりと体にかけて、ヒモの下敷きになっていた髪の毛をきちんと出して、それからまたゆるゆると丸太の階段を登っていく。

たすき掛けにしてヒモが胸に食い込んでもさして支障ないのが悲しい。

女の子はこうすると恥ずかしいって聞いてたんだけだなあ。

10分に1回は立ち止まったり座ったりしているから疲れはほとんど出ていなくて良い感じ。

見た目を変えることはできない以上かなりの確率で絡まれもとい声をかけられちゃうのは避けられないとして、らしくて納得しやすい言い訳。

服装とアイテムと演技とで完璧にカムフラージュできている。

擬態できているんだ。

こういうのも本当に慣れだな。

とにかく場数をこなして自然と出るようになるまでがんばれば後が楽だ。





◇合目の展望台とやらに着いたらしい。

背の高い木でできた回廊が途切れたと思つたら途端に出現した景色。

まだ頂上じゃないはずなのに遠くの山々が見渡せて端つこには麓の町も見える。

「ぼしゃ」

シャッターが降りた音。

画面で確認してみれば、遠くの方の景色は目で見ているよりもずっと水色掛かっている。

……このレンズ、安物だからなあ。

10万に届かない万単位の金額が初心者用っていうずぶずぶと浸かりそうな世界。あんまり興味がなくなつて良かった。

数万でもいいやつ半額くらいだったっていうのが恐ろしい。

便利だからつけっぱなしなんだけど、どうしても隅つこのほうはぼやけるし真つ青になる。

こういうのは最初に思い切つて高いのを買っちゃったほうが◇◇◇◇だろうか？



でも、レンズだけで◇◇万超えるのはちよつとな。

「……………ん？」

なんか変な気がする。

なんだろう？

「……………」

何でもないらしい。

柵があると安心できるけど、今の僕にとってではちよつど視線のあたりが手すりで遮られちよつと不便なことこの上ない。

まあ棒のすきまからしつかり見られるんだけど、でも前の体だったらこういうの、一切気にしなくてもよかつたって考えると……やっぱりこの◇、不便だよなあ。

あ、ここは◇合目なのか。

今まで気がつかなかつたところにある、半分草に飲まれつつある石碑。

途中から◇と会わなくなつたからじやまものがいなくなつて、夢中で上がつてきたからなあ。

「……………ふう……………」

いつのまにか、息も切れていたみたいだし。

ちよつと休んで、それから◇◇まで行こう。

そうすれば、

.....

「.....んー?」

そこまで疲れてるはずはないんだけど.....変な感じ。

ちよつと前からこういうのあるよなあ.....ほんと、なんだろう。

## 23話 山／山 3／4

◇ 「ん——……」

ちよつと疲れ出てるのかもなあ……なんかぼーとするし。

思えばこの体になってここまで遠出したことなかったんだから気づかれもしての  
かも。

でも中途半端などこだし登り切っちゃってから休もう。

良いところに立っていた案内標識と駅でもらった地図を見比べる。

もうここまで登ったんだよなって再確認。

地図を見ながらだしGPSで迷わないようにしてるけど念のため。

ほら、道って何気なく二股とかになってることあるし？

話しかけられるせいもあって休み休み来たせいかかなり遅いペースだけど、気がつけ

ばもう◇◆……8合目。

「？」

……8合目だよな？

うん。

お昼前には山頂に着いちやうからお昼のタイミングが微妙かな。  
ん？

予定より遅く移動してるのに予定より早く着いちやう？  
なんでだ？

「??」

……やばい、本格的に疲れてるっぽい。

あー、精神的な疲労ってちよつと経ってから出てくるもんなあ。  
忘れた頃に風邪引いたりしてそれが分かるって言う。

けどどのくらいお腹減ってるかな、今の僕。  
おもむろにお腹を触ってみる。

凹んでいる。

あばらがごつごつしている。

「……………」

あんまり空いてないっぽい。

持ってきた水とか手渡された和菓子とかちよくちよく口に入れていたし……計算ミ  
スだ。

僕のお腹は幼女仕様だけどそれを処理する能力は男仕様なわけで、つまり甘いものだってあんまり食べられないんだ。

なんか人のお腹って本当に別腹あるらしいね。

あるって言うより「デザートだ！」って思うと胃がめこつと拡張するらしい。人体ってすごいね。

男が幼女になるくらいだもんな。

しかも脳みそも小さくなつて記憶と人格はそのままって言うご都合主義。

いや、これで人格変わつて記憶がなくなつたりしてたらもはや別人だけでも……。おーこわ。

なんにもないところだからって考えすぎるのも困るもの。

しょうがない、もっかいガイドブック読み込もう。

お腹を空かせるためにうるうるしているガイドブックに乗ってないようなちよつとした見所とか見つかることって割とあるしな。

なんだかい感じの写真スポットとかおみやげ屋とか。

時間を潰すために細かいコラムに載つてるような微妙な場所へ遠回りして時間を稼ぐ作戦。

まあ写真映えはするから楽しいしな。

見せる相手は居ないからデータに収めて満足するだけなんだけども。そうでなくても適当にぼーっと座っているだけで景色を堪能しているだけで時間つぶすの得意だし。

◇

◆◆

◇

◆

◆

「……………着いたあー」

あっちこっちに寄り道をして結構疲れたけどおかげでちょうど良い時間と疲れ具合。ぐーっと伸びをして気持ちがいい。

カメラの過重量で凝るのを通り越して痛い肩とか首とかをスジを痛めないように気をつけながら伸ばす。

この歳で首回りがつつたりはしないだろうけど念のため。

そうして上を見上げると一面を遮るものがない水色に近い青空。真上をずっと見ていると空に落ちそうなくらい。

ひゅんつとする。

ひゅんつとしてじわつとなつたから慌てて体を起こす。

……危ない危ない、うっかりで漏らしちゃうところだった。

女の体の膀胱の緩さを甘く見てはいけない。

いかにも整備されたばつかりの観光地って感じのきれいな地面とか、なのに古くさい感じのお店とか……そういうものが所狭しと、けど柵の先が空中で開放感のある高台。

さつきまでときどき見えていたような、確かにすごいけど微妙に木とかがじゃまだったり視野が狭かったりするような、そういう限定された感じの景色とは違う感じのいわゆる展望台。

もう半年以上ぶり……いや、冬休みは温泉しか行かなかつたから実質1年ぶりになるのか、こういうところに来るのって。

「ぱしゃぱしゃ」

とりあえず写真を何枚か撮ってっと。

こうすることで周りで「あの子どうしたのかしら……声かけてあげた方が良いかしら？」とか「親がいないみたいだけど……もしかして家出……？」っていう不安を払拭できるとだ。

こういう「らしさ」って大切。

こんな見た目でもちやんとした登山的なカッコしてでかいカメラ構えてたら「そういうもんか」って思ってもらえるんだ。

人ってちよろいよね。

でも……うん、やっぱり高いところからの眺めって良いな。

見ていてすつきりするし、もやもやがぜんぶ吹き飛ばし。

どんな人だっかってこうしてぐるーっと広い景色を眺めていたら悩みなんて……少なくともそのあいだだけはなくなるはず。

そう思うくらいに広い景色って言うのはなんだか好き。

今日はすつきりと雲がちよつとだけ浮かんでいて逆にいい感じの青空だし、けど空気は澄んでいるみたいで遠くまでがはつきりと……平野のところは地平線じゃないけど、視力の限界まで見えているし。

カメラのレンズに頼ればそれこそちっこい家まで一軒一軒とがはつきりくつきり見えるし。

昔からある観光地ってコイン式の望遠鏡あるけどそれを使うまでもない。

この身長じゃのぞき込めないけど。

それにしても……遠いところまで見えすぎて気持ち悪い……なんだか見えすぎじゃない……？

近眼とかまで完璧に治っているデメリットなのかもしれない。

目そのものが新しくなったって言えるくらいだもんな。

何をどうやったらこうなるのかは魔法さんしか知らない。



その代わりというのはおかしいけど、暗いのが見やすくなった代わりには明るいのはちよつとだけ苦手になっている。

調べてみたら目の色素の関係だとかなんだとか。

だから洋画とか、暗い画面が多かったりみんなサングラスしてたりだとからしいね。まー、色素ほんつと薄いからなあ。

目と髪の毛とまつげとお肌。

……いつもかがりに言い含められるし、紫外線対策……がんばらないといけないのかも。



柵のあいだから写真を数歩ごとに撮ったりして満足した。

やっぱりひとりって良いよね。

結構広いからそのへんをうろうろしてみたりして満足した頃には日の光でじりじりと疲れがにじみはじめる。

僕はそこからさらに高台へと急な階段を2、3分かけて昇って、とうとう本物のてっぺんへ。

木とか以外には鉄塔くらいしか高いものがない真正銘の山の頂上だ。

こういうのつて来ようと思わないと来ることがないからいつでも新鮮。

天気が悪いと残念だけど。

旅行先で雨雲に入っちゃったときは目の前すら見えなかったっけ。

それにしてもよかった。

僕にとつてはすごく幸運なことに、ガイドブックの一面に載っていた山のとつぺんの見晴らしがよくつてほぼ360℃パノラマなこの展望台にはたまたま誰もいない様子だ。

真ん中にはちゃんとテーブルとイスがいくつかあつて、風の音とその風に乗って飛んでくるはるか遠くの車の音とか電車の音とか以外にはなんにもない、がらんどうの空間。

柵にもたれて下まで見てもいいしベンチに座つて遠くまで見てもよくつて、

テーブルにもたれて遠くの山とか空をぼーつと見てもいいつていう特等席。

その特等席にたつたひとりだけでいられるつていう幸福だ。

家の中とはまた違った静けさが心地良い。

まあ1年ぶりだし幸先がいいといえましょうということになるのかな？

この秋はあの子たちの面倒以外でも出かけようかな。

こうして体を動かして遠くにいるときの僕はアクティブだ。だからまとめて旅行とかするんだろうな。

ニートって別にじめじめしたのが好きなんじゃない。

ただめんどくさいからニートしてるだけで、動かざるを得ない場所に来れば来たでそれなりに楽しめるんだ。

あ、さすがに引きこもってるときは違うけども。

あれは心の休息が必要な時間だからじめじめしてるだけなんだもんな。

経験者な僕、現ニートは語る。

「よつと」

テーブルにがさつとビニール袋とリュックを置いてぼすつとイスに腰を下ろしたため息をひとつ。

「……………」

なにも考えないで目だけを開いたままにして体の感覚のぜんぶを研ぎ澄ませてみた。とつてもよかった。

やっぱり人間は自然の中じゃないとおかしくなるのかも。

こういうところに来るとそういう感傷に浸るよね。

家から離れて知らない人とたくさん話して、まったく知らないところをときどき考え

ることも忘れながら懸命に体を動かして終点までたどり着いて……たったのこれだけで僕の中のなにかが少しだけ楽になった気がするんだ。

もつと早く来れば……いや、中学生たちの世話があったか。

その前は家から出ることそのものが慣れていなかったぶん今よりずっと大変だったししょうがない。

魔法さんにご近所の目が恐ろしかったな。

あのときのあれこれも、今になるともはや懐かしい感じだ。

だけど思ってみれば外で完全にひとりになってこれだけ……たったの4、5時間だけど……これだけの時間を過ごしているのは下手するとつていうかたぶん、この体……幼女になってから初めてかも？

前はよく時間とお金に任せてふらふらとしていたのになあ。

放浪癖ってやつ？

まあ前はともかく春からはご近所の目、とりわけお隣さんの目を避けるためにほぼほぼ家においてきのこみたいになってるし、駅前への買い物とか運動を兼ねていた散歩とかだつてせいぜいが1、2時間だし。

そもそもそれ以上外にいると体がだるくなつて眠くなつてくるつていうどうしようもない体力のなさつてのもあつたしなあ。

本当に幼女でさえ無ければって思う。

ほら、こうやってベンチで脚がぷらぷらできない程度の身長だったらとかさあ……。でも忙しくなかったわけじゃないしむしろ忙しかったんだ。

梅雨が明けたくらいからはどうしても出なきやってとき以外中学生の誰か……。そういやはじめはゆりかとかがりしかいなかったんだっけ……。に呼び出されて話をさせられて着替えさせられたりして。

外に出なかつたとしても、家の中でほとんど一日中メツセージが飛んできていてほつといったら未読が何件もたまつてゐるって具合だったしなあ。

あれが女子っていう生き物のコミュニケーション依存症気味な、男の中でも特に連絡とかめんどくさがる僕にとっては強烈な情報量だったもんな。

あれだけ文字を流してくるくらいだったら電話で話していたほうがよっぽど楽だつて思ったりもしたけど、それだと今度は何時間でも拘束されそうだったし。

僕のことながら律儀過ぎるかもだけどNOって言えないんだからしょうがない。めんどくさいだけだしな。

だけどその夏休みも終わったんだ。

僕は自由なんだ。

結局ここまで来るまで年下に見られることはあつても子ども用の切符とか買つても

見とがめられることがなかったんだし、今度からはもう少し多めに……それこそ体力作りと気分転換を兼ねてもつと頻繁にこうして遠出したほうがいいかもな。

中学生未満な今のうちにできること、しておきたいしな。

交通費が半分になるって地味に嬉しいし食費も半分だもんな。

まあ泊まりじゃなければたいした金額じゃないからあんまり意味はないんだけど

……。

でもこうして黙ってひとり静かに感傷に浸るのがいいんだから絶対に中学生たちに悟られないようにしないと。

最低でもくるんさんだけは。

彼女だけにはながあってもだ。

振り回されるのは想像なんかしなくともかんとんに再現できちゃうくらいだし。

「……………」

それにしても、こうしてふらつと外に出て目的地と宿泊先……は今は必要ないけど………だけを決めて、あとはガイドブックで予習する以外は現地の駅とかで地図をもらって。

適当な人に聞いてよさそうなところを回ってへとへとになったところに温泉……入りたくないなあ……に浸かって、おいしいものを食べてお酒を飲んで寝て、起きたら朝風呂に



特にどこも……加齢とニートっていう不健康な生活にのせいで常識的な体の不調以外にはこれといって悪いところもなかったんだけど、それでも温泉に入るとしばらく体の調子、よかった気がするし……子供にや分かんない娯楽ってやつだ。

ともかく露天風呂に入りたい気持ちになってきた。

あの解放感とか涼しさとか、たまに吹いてくる風とかがいいんだ。

屋内はいろいろと籠もるからダメ。

入って体じゆうから熱いのを感してのぼせてきたら上がるっていうのをしたい。

「いいなあ……」

でもなあ……。

視線を落として今の肉体を見る。

両手をにぎにぎする。

「ぜんぜん節がなくなって肉のほうが多くって指自体が短くって血管とかが浮いていない両手。」

「幼女の手のひらとちっこい体。」

「宙ぶらりんの足の裏のせいであらぶらとできてしまう脚がはつきりと見えてしまう。もちろん脚のあいだはすつきりとしていて肉体的には女で。」

「……………」



常識と勇氣。

常識がジャマをするからためらって勇氣がないから赤系統ののれんをくぐれなくて、女湯には入れない。

かといって男湯だとそれはそれで……たぶん髪の毛だけでじろじろと見られるだろうし、いくら元同性だつていつても男湯にも抵抗がある。

そもそも男のときでも温泉とか他人の存在が嫌だったもんな。

だつて人に裸見られるんだよ……？

ありえないでしょ……？

温泉によつては7才から10才くらいまで男女どつちでもOKだつたりするから、あとは僕の性別を僕が選ぶだけなんだけどまだ選べない。

あいかわらず煮え切らない。

常識と羞恥心が抵抗するんだ。

やつぱり男湯でも女湯でも温泉、だめかなあ。

僕は決められないっていうただのいくじなしなんだ。

もうちよつと頭の出来が残念だつたり本能に忠実だつたりすれば女湯に意気揚々と入れたんだろうけど、こういうのが僕だもんな。

とつづくに諦めてるし、なんならこれが好きまであるもん。

常識的な範囲で自分のことが好きって強いよね。

僕はそう思う。

そうじゃなかったら何年も「お仕事？ 特にありません」なんて言えないよね。

## 23話 山／山 4／4



「♪」

僕は感情の起伏に乏しい方だけど、僕だつて嬉しいときくらいある。

たくさん寝たときとか美味しいもの食べたときとか美味しいお酒呑んだときとか。

だから今もなんとなくで嬉しいんだ。

いつものとおりにどんなイスに座つても足がつかないしテーブルだつて高すぎる環境でも気分は上々。

だから僕はこうして膝の上にお弁当を広げて食べているわけだ。

飲み物だつていちいち腕を上げるのがめんどうだからふとももの横に置いているし。

これが僕にとつてのベストポジション。

つまりは地べたに座つてもたいして変わらないということになるんだけど体がちつちやいからしようがない。

世の中の子供はどうやってるんだらうなー。

もつとちつこいのから大きくなってくるから気にしないんだらうな！。

僕みたいに大人から子供になるなんてレア中のレアだもんな！。

そんなことを考えながらもぐもぐもぐと口を動かす。

この漬物おいしいなあ。

総合的になかなかにおいしい味付けの小さいお弁当。

やっぱり旅行の醍醐味はお弁当だな。

お店で名物を食べるのとはまた違った良さがある。

どうして外で食べるとこんなにおいしく感じられるんだらうね？

不思議。

まあ遠足のときのご飯とか美味しかった覚えがあるしそんなもんなだらうね。

「お弁当」

ペットボトルからお茶をすすって、ふたたびふとももの上のお弁当箱を持ち上げる。

このお弁当が包まれていた紙袋には、この山をバックによくわからないゆるキャラとやらが描かれている。

それを見るときもなしに見ながら食べるだけの時間。

麓の駅で、荷物にはなるんだけど万が一で頂上でやつてるはずのレストランが閉まっていたりしたら困るから……って念のために買ってきたお弁当。

山菜がメインで量が少なくて僕好みな感じだ。

お酒を呑む都合上胃に優しいモノを選ぶ習性が幼女になっても継続している感じ。

いちばん小さいやつなのにあいかわらずの胃袋のせいで食べ切れなさそうなのは残念。

まあレストランはやっているだろうって思っていたから持って帰って家で食べるつもりだったし、食べきれずに余ったのは予定通りにお持ち帰りすればいい。

そう思ってた念のため買ったんだけど……まさかほんとうにレストランが軒並みに休みだとは思わなかった。

張り紙を見る限り今朝に何かがあったらしく臨時休業だとのことで。

他のお店も足並みを揃えたのか平日だっていうのにほとんど閉まっていたし。

観光地ってそういうときあるよね。

まあかき入れ時じゃなくなったらしな、休みたくもなるか。

その気持ちは僕だからこそよくわかる。

ガイドブックでもネットでも「今日はやっている」っていうからバスで何十分かけて行ったら「今日はお休み」な看板なんて数え切れないほどだったから慣れている。

適当に書いたってわかる張り紙がドアとかシャッターとかに貼ってあるときのがっかりといったらもうねえ……あのころは若かった。

今もつと幼いけど精神的には成熟した感じ。

「……………」

じつと下を向いていたらしい顔を上げると見渡す限りの田園と山の風景。

「もむもむ」

こうして遠くに広がる景色を眺めながら食べるのは「知らないところへ旅行へ来てい  
るんだ」って実感できるから好き。

でもなあ。

これで軽く一杯……一杯だけで良いからお酒とかあったら最高なんだろうな——  
……………」

前だったらそのへんのお土産屋とかで適当な地酒つてのを買ったのに、今は休みじゃ  
なかったとしても買えないっていうのが頭からすっぽり抜け落ちてた。

持ってくるのを忘れたから家に帰るまで手に入らないっていうのも思いついちゃつ  
てかなりのシヨック。

「……………ああ……………」

僕は絶望した。

なんてことだ。

悲しすぎる。

がっかりだ。

こんなことがあつて良いのか。

なんで僕はそんなことを今……取り返しのかない失態をわざわざ思いついちゃつたんだらう。

「おさけ……おさけ」

両手が震える。

お弁当箱を落とさないようにつて意識するので精いっぱいだ。

「ああ」

お酒。

アルコール。

「……すんっ」

まあでもどうせダメだからいいや。

僕は諦めが良いっていう長所を備えているんだ。

大体のことなら諦められるんだ。

目の前でバスが行つちやつても次が2時間後くらいなら許せちゃうんだ。

旅先で次の便が6時間後とか次の日とかを何回か経験したら、人つて大体のことは許せるようになる。

それにお酒を一杯くらい飲んだって……どういふ原理か幼女になっても肝臓さんのスペックはおんなじらしく顔色とか変わったりはしないんだけど、でも万が一にでも誰かに見られて見とがめられたらまずいな。

水筒とか小さいペットボトルに入れて持って来ていたとしたって、近くに寄られて話しかけられたら口を開いた瞬間にまき散らされるアルコール臭でばれるだろうしな。にじみ出るアルコール臭は酒飲みの宿命。

子どもが、幼児が外でアルコールをとか……どう好意的に考えてもアウトだな、うん。この体の出身だろう地域だってさすがにアウトのはずだしな、うん。

元の僕だって、そんな光景を目にしたら「虐待とかじゃ……？」って通報する気にもなるだろうし。

「そっか……」

かたかた震えてた割り箸が収まる。

つまりこの見た目だと……外で、旅行先でぼーっとしながら飲むっていうの、できないのかあ……。

悲しいなあ……。

子どもがお酒を手をしているところか呑んでいるなんて言いつくろえる気がしないしなあ。



叶わない夢は忘れよう。

諦めるんだ。

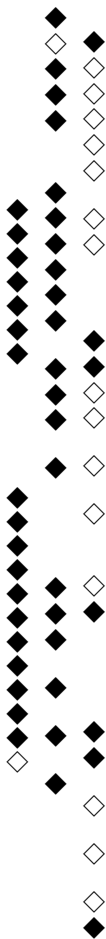
魔法さんの機嫌がよければ明日の朝、そこそこなら数年後には、……悪ければずっと外はムリか、でもまあ家の中でなら飲めるんだし。

通販様々だ。

ああ、でもなあ。

この漬物と辛めの日本酒、合うだろうなあ。

「ああ……すんっ」



「！」

ぴん、と頭が認識するより先に体が反応する。

お酒への悲哀を感じながらややけ食いしようとして胃袋が悲鳴を上げたあたりで、遠くからコツコツって音。

この高台へここまで上がって来るための石の階段を杖かなにかを使いながら上がってくる音がする。

こつこつって音と石の階段を登るかな足音と話し声がゆつくり登ってくるのが、たまたまこつちに向かつて吹いてきていた風のおかげで先に知ることができた感じらしい。

せつかくひとりぼっちで……温泉とかお酒っていう楽しみがないけどひとりぼっちというだけで至福だったのに、他人が入り込んでくる。

とつても残念。

ああ残念。

ここはてつぺんで頂上で行き止まりだったのに。

どれだけ急いで荷物まとめても見つからないうし、そのまま全力で逃げたつてこの場から去るためにはあの人たちの来る方向に行くしかない。

だけどしようがないよね。

ここは公共の場だもんね。

今がたまたま貸し切りだっただけのこと。

ほら、バスだって1時間に2本くらい往復してるみたいだし。

せめて僕を気にかけないようなタイプの、前の僕みたいな男の人だったりしたらいい

んだけどなあ。

こつちが幼女だつて見るとかなりの人が……7割くらいの人が「とりあえず話しかけなきゃ！」つて感じで迫ってくるからなあ。

せめて他人に興味のない若い男の人でありますように。

祈ろう。

魔法さんにも祈っておく。

「ぬーん……………」

祈りは通じなかつたらしく、男の人と女の人のペアらしい。

声の感じから歳は前の僕基準でも相当上みたいだし、夫婦とかかな。

とすれば話しかけられて話し込まれる確率がぐんと上がっちゃうな。

構ってくるタイプの人じゃないって願いたいけど、お願いなんて今叶わなかつたばかりだし。

魔法さんでもムリかな？

ムリか。

「もむむむ」

まだ食べきっていないからすぐには離れられないけど……めんどくさくなったり不審に思われたりしたらすぐにまどめられるようにはしておいたほうがいいかも。

いくらお節介な人でも「構わないでください、迷惑です」って言いながら脱兎する相手を追いかけたりはしないでだろうし……多分。

ワンアクションで席を立てるようになってリュックも脇に置いて、お弁当とお茶以外はみんなぐいぐいと詰め込んで……あ、いざつてときは必要だからパーカーは出しておいとつと。

ゴミは……今つて昔みたいにゴミ箱、あちこちがないよなあ。

まあ袋とかだけだしたいしてかさばったりもしないか。

がさがさばりばりぎゆうぎゆうとリュックが膨らんでいつて、あとはお弁当とを詰めればよいようにしておいて。

「よし」

あ、幼女がうろついているっていう通報からの警備員さんとか職員さんとか恐ろしい公権力さんとかが来る可能性、考えておくべきだったかも。

それこそこういう場面で通報されてたら逃げ場ないし。  
もう遅いけど。

たとえここから逃げようとしたつて柵さえ越えられないからどうしようもないじゃないか。  
ないか。

今さらだけど……まあ大丈夫だろう、きつと。

何の根拠も無いんだけど、今までのところ変な顔してた人いなかったしな、たぶん。そんなことを思っているうちに手とか足の汗がすごいことになりつつある。

気持ち悪いからゴミに手汗を吸わせていたら誰かの頭がひとつ、ふたつ覗いてきた。

……………おじさんとおばさん？

いや、おじいさんとおばあさん？

うーん、外国の人の年齢ってわかりづらいからなあ。

僕みたいな幼さかって思ったらあつというまに青年を通り越して成人しているし、すぐにおじさんおばさんに見えるようになるし。

海外とか行くと……………あ、アジア圏以外でね……………ほんとみんなすぐく老けて見えるんだよね。

それ以前に外国人とか、よつぽど特徴のある顔とか髪型とかしていかない限り区別もあんまりつかないものだしな。

そのせいで映画とか登場人物がごっちゃになってわけわかんなくなることあるくらいだし。

とりあえず杖をついているおじいさんと元気そうなおばあさんはお年寄りの区分でいいんだろうか……………まあこの年ごろの子供から年上に見られても怒りはしないですよ。

言葉が通じない以上話し込まれないのが確実に変わったから緊張が抜けて一気にだ

るってなる。

ほへーつとぼーつとしていたら先に登ってきたおばあさんと目が合うけど要警戒対象じゃなくなったから安心して見ていられる。

あ、顔はまだおばさん止まりだ。

ということとは夫婦みたいな距離感だしおじさんの方もただ脚が悪いだけなのかな？

あ、いや、じっくり見たら……今の目がいいから近視じゃないからよーく見えるおかげで……なんというかいろいろとすんごいからやっぱりお年寄りなのかな？

うーん。

まあいいか、僕に害がない種類の人たちなんだし。

「もきゅもきゅ」

安心してお昼を食べ始める。

「……………」

おばあさんもといおばさんが僕をじつと見ていたと思つたら、ようやく登ってきたおじさんに話しかけている。

メガネだつたら顔が見えないくらいの距離なんだし、そもそも外国語なんだろうから近くにいたってきつとなに言ってるのかわかんないだろうけど、風向きのせいか声とい

ントネーションだけは漂ってくる。

身振り大きいしな。

「……………」

……ああいう年代の人たちって指とか指すよなあ……別にいいけどさあ……。きつと僕が珍しいんだろうし。

あれ、もしかして外国繋がりで話しかけられる？

いや、僕が聞き取れないってすればそうそうに諦めてくれるだろう、きつと。

こつちで育った子なら母国語を話せないっていうのけっこういるらしいし。

「……………」

「……………」

「……………」

階段を上ったところで話し込みはじめた様子。

ん、山椒が辛い。

でも杖使っているもやっぱ外国の人は違うよなあ。

しやきつとしてるっていうか筋肉の量というか、そもそも骨格からして強そうだし。

凄まれたら僕なんかひとたまりもないだろう……あ、いや、僕だって見た目だけなら

何十年か後にこの人たちと同じような感じになるのかな？

成長できたら。

成長して老いてきたら。

まあでもこの人たちがアスリートとかだったのかもしれないし。

だって肩周りとかふとももとか明らかに筋肉って感じの盛り上がりだしな。

あつちの人たちって体のラインが出るぴちつとした服、好きだよなあ。

この人たちは映画にでも出てきそうな体つきだけど、ぶよぶよしていても平気そう  
人たちがたまに見かけるし。

これが価値観というか文化の違いってやつなのかな？

いつつもだぼつとした服で身を隠している僕が言えたことじゃないんだけどさ。

とまあ、どうでもいいようなことを考えながらちらちらと見ていたけど、特に話し  
かけてくるっていうかこっちに來る気配がないし。

体力があるから登ってきて景色見て満足してすぐに降りちやうのかな？

僕でも登れたんだし、脚が悪かったりお年寄りだったとしたってそこまで大変な山  
じゃないんだしな。

いつものクセでまんべんなく均等に食べたお弁当の中身を見下ろす。

む、このおいしい漬物……あ、惣菜としても売っていたし帰りに買っていこうかな。

漬物とかってあるだけでしばらくご飯だけ炊けばご飯になるから楽だよな。



あの子たち相手に外食にも飽きたし、当分は家でご飯プラスなにかって感じにしたかったからちようど良い感じ。

「♪」

口の中にいい感じのピリ辛が伝わってきてご機嫌。

僕はグルメなんだ。

なまじ自炊生活が長いのと、あつちこつちに旅行して地元の料理を食べたおかげで意外と舌が……。

「……………宜しいですか、そちらのお嬢さん？」

「ほへ？」

想像もしていなかった感じに声をかけられてつい釣られて顔を上げると、ご年配たちが僕のまんに……いや、上に、ふたり揃ってそびえていた。

あれえ……今のすぐく低い声もしかしてこのおじいさん？

下から見上げるとすごい迫力。

怖い。

さつきは気がつかなかったけどなんだかごつい眼帯もしているし……退役した軍人さんとかかな？

すごい。

格好いい。

映画とかじゃない現実で初めて見た……………じゃなくって。

あれ？

こっちの言葉、話してる？

なんで？

「はて。親御さんや……………引率の方はどうされましたかな？ 僕たちは今登ってきたと

ころなのだがそれらしき方たちは……………目の届く範囲でお見かけしなかったのだが？」

吹き替え映画みたいな話し方と声……………バリトンボイスっていうんだっけ？

「どなたかとはぐれたのなら下のレストランとか……………ああ、休みみたいだったがロビー

……………休息室というんだっか？ そこには入れるみたいだな。一緒に行つてあげ

ようかい？ こんなところでたつたひとり食べていたら不安だろう？ そんな小さ

いのに」

そしておばさんあ、この人もなんだか顔に傷とかあつていよいよ軍人さんっぽい

……………つていうかなんだかマフィアとかみたい……………いやさすがに失礼か、考えるだけで

も。

ともかくおじいさん？もおばあさん？もしやきしやきとしていて華麗に普通に言い

逃れができないくらいに言葉が通じてしまっているらしい。

……まあイントネーションはちよつと違うけど、たまーにあるくらいだし。  
見た目はともかく……圧力あるし、まあ見た目は置いておいてこの人たち。

ここに来るまでに話しかけられたような、ごく一般的に子どもがひとりでいるのを心配しているいい人たち……人のいい人たちなんだろう。

「……………」

……話が長引きそうだったらスキを見て退散しよう。

無駄に圧力感じるし。

ああ、楽しかった時間……。

## 24話 疑念と助言と発覚 1 / 3

海外だと結構あつちこつちで軍人さんを見る。

一目で見て分かる全身の装備に一目で見て分かる体格と威圧感。

でも銃を構えてるって言ってもなんにも悪いことしてなければ案外怖くないんだよね。

そんな僕だから分かる軍人さん疑惑。

口には出さないけどなんとなくそうなんじゃないかなーって思いながら見上げる。

ごついなー。

僕なんかひとひねりだろうなー。

こんな幼女なんてどうにでもできるだろうなあ。

まあそれ言ったらこの世界でこの肉体的な同世代以上の誰からでも好き勝手されちゃうんだけども。

世界で最弱まである疑惑。

だつて幼女だもん。

真正面から勝つ見込みがあるのは……小学校低学年で気が弱い子だけなんだ。

「ほう………ずいぶんとまた使い込まれておるな」

「はあ」

リュックにはしまえないし、なにより偽装のためのアイテムだし………つてテーブルに置いたままだった僕のカメラを目ざとく見つけたおじいさんまたはおじいさん。

来るときにもいろんな人に散々触られたし「どうぞ」つて言ったら手に取つてまじまじと見ている。

うーん……おじさんとおじいさんのあいだくらの年齢かなあ。

つまりは近くで見ても判別がつかないともいう。

どっちかはわからないけど僕的にはおじいさんのほうが近いし、そういうことにしておこう。

もし違つたとしても……この見た目が効いて、人によつてはそう呼んだとたんにでれでれした顔になつてお子ちゃま言葉で話しかけてくるから大丈夫。

なんでかは知らないけどすつごくくちよろくなるから便利だ。

侮られるにもここまで極端だとむしろ清々しいな。

年齢のことはさておき、僕のごついはずのカメラを取つている手のさらにごつい拳を見るともなく見る。

正確には見上げている。

首が疲れる。

どこもぶつとくて頑丈そう。

僕なんかあつというまにちぎられそうな印象のお手々。

僕を見下ろしてにぎにぎしてみる。

ぶにぶにとしている。

力込めすぎたら壊れそう。

「写真か。君みたいな小さな子が写真を……珍しいものだ。スマホやデジカメでは

なく、あえての一眼レフ。さすがにフィルムは」

「デジタルですね。撮り直しができませんし、フィルムは高いですし」

そもそもフィルムなんてまだ売ってるんだらうか？

僕の世代でももう使ったことないしなあ。

「……そうか、あれはもう時代遅れか……しかしこれを持ち歩いて、自分で被写体を求めてはるばると山へ。ううむ、渋い。その歳で実にいい趣味をしている」

ことりと元の場所に置かれるカメラ。

「それにしてもその歳で写真撮影のためにたったのひとりで遠出とは……行動力があるというのかな？ ずいぶん慣れているみたいで堂々としている。良い子だ」

「ええ、まあ」

どんな返事したらいいんだろう。

分かんないときはあいまいにしておくのが秘訣。

「良い子だ」とか映画とかドラマでしか聞いたことないセリフ言ってきたのはおばあさんの方。

やつぱりちよつと外国語っぽいしやべり方だつて感じる。

お仕事柄なのかちよつと硬い感じの言い回しだし、話し方も硬い感じ。

なんていうか……やつぱり外国語つて感じ？

声も大きいわけじゃないのに大きく感じるし、体が大きいからか威圧感まで感じる。

端的に言つて怖い。

見た目も雰囲気もこの人たちそのものが怖い。

僕、昔つからこういう人たち苦手。

なんていうか萎縮しちゃうんだよな。

この人たちほどじゃなくつても筋肉質でがしつとした体格で声が大きくて押しが強い人つて苦手なんだ。

もちろん相手の人は僕をどうこうつて思つていないんだろうけど、僕からすると肉食獣のすぐそばにいるような気持ちに本能としてなるんだからしょうがない。

これが根つからの草食系だ。

きっと前世はシマウマなんかだろう。

誰にも見つからずに仲間と静かに草を食べて生きるんだ。

あるいはダンゴムシみたいにじめつとしたところで一生を過ごす。

そういう人生って良いよね。

「反対側の席。 いいかね？ 私たち年寄り話し相手がいないと退屈でね」

「……………はい」

「済まないね。 嫌だったらいつでも言ってくれ」

イヤだけど、こういうのがイヤっていう人種は至近距離でイヤって言えないんだよ

なあ。

そういうのって分からないんだろうなあ。

どうせ理解はされまい。

草食系だけの「分かるー」だ。

同族だけがわかってくれたら満足だ。

でも話したいからって言っても杖をつきながら座ろうとして中腰で言うのは卑怯だ

と思う。

おじいさんは別になにも考えていないんだろうけど、これじゃ断れないに決まってる

じゃん。



僕が本物の少女だったら氣負わずに「やです」って言えるんだけど中身は大人だしなあ。

テーブルはいくつも他にあるし誰ひとりとしていなくってがらがらなんだから、そっちに行ってくれたらよかったのに。

そのためにわざわざ、わざわざ階段から見えていちばんすみっこのテーブルを選んだのに。

これだからこの見た目は困るんだ。

ムダに興味とか庇護欲とかを刺激するらしいこの少女の体は。

あー、ちやほやされて喜べる性格だったら良かったのになー。

なんか損な性格で生まれちゃったんだからしょうがないか。



「けふ」

会話を少しでも遅らせるためにつて頬張っていたお弁当は、結局食べきれなかった。

小数点以下をちみちみと食べているけどどう考えてもこの先は今ほムリ。

なんなら既に眠いまである。

子供の体はこういうものだ。

食べ残しは3割ほどといったところ。

残りは家でお酒と一緒に食べられそうだからそれだけを楽しみにしておこう。

その代わりに今の苦境を耐えないとな。

いや別に苦境ってほどじゃないけど……あの子たちに比べたら。

苦境、または地獄とは……着せ替え人形になつている状況を指すんだ。

好き勝手に「かわいくされる」状況を言うんだから。

テーブルを挟んだ向こう側でこつちを向きながら座つているおじいさんとおばあさんはムダに圧がある。

まるで面接だ。

僕はバイト以外で面接受けたことないけど。

面接が嫌だから働かなかつたまでであるかも。

けど自然な感じで話し始めたらそこまでのことはなくって、むしろ話し好きなお年寄りってだけだったから今は怖くない。

見た目にさえ慣れれば案外いけるもんだな。

世話好きなおばさんとかに話しかけられるいつもどおりに、僕のことを聞くのもそこに勝手に自分の身の上話をはじめられたからふんふん聞いてれば良くて楽。

これまでもた例のごとくおばあさんが一方的に話しておじいさんのほうは相づちをうつ程度なのは、世界のどこでも共通らしい。

聞かされてしまったところによると、この人たちは長いこと……ニュアンス的に少なくとも僕が生まれる前からずっとこっちに住んでいたらしい。

だから外国の人なのにほとんど違和感のない言葉づかいとかなんだらう……まあ語彙は硬いけど、そういう人もいなくはないしな。

むしろ強い方言に比べたら聞き取りやすいまであるし。

もつともこのごつつい見た目のせいで台なしになっているけど。

さてさて見た目は置いておいて、なんでも最近引退……なにをだらう……したばっかりで時間が余って仕方がないんだとか。

いくら長く住んでいようと見た目が明らかに違うからどこへ行ってもヨソ者の腫れものの外国人扱いで困るんだとか愚痴られた。

そう……。

そんな感想しか浮かばない。

でも「見た目が明らかに違うんだから仕方がないけどねえ」って言っていたのには心から同意する。

僕もこの体になってからうんざりするほどだもんな。

そんな感じで他愛もない、ちよつとだけ外国要素は混じるものの他の人からもよく聞くような話が続いていて拍子抜けしたからかいつの間にかオートでの会話が成り立っている。

人つて話していると気持ちよくなる生き物。

だから僕はさつきからペースを極端に落としていつものごとくに聞き手に回つて、一口を少なめにして咀嚼回数を増やして時間を稼ぐ方向に進んだんだ。

おかげでお腹いっぱい過ぎるんだけど。

もう10分以上は話し続けているんだし、普通の人ならそろそろと話すのに満足しはじめの感じだしさつきと席を立ててほしいって願っている。

まだかなあ。

なんとなくで脚をぶらぶら。

「そのカメラも随分と使い込まれているが、君のものかね？」

「……………んぐ。いえ、これは兄のものを譲り受けたんです」

「ほう、お兄さんがいるのかね」

僕自身のことだけだね。

でもこう毎回架空の僕を語っていたらまるで僕がもうひとり居る感覚になってくるよね。

「だがそのお兄さんは君のお出かけには着いてきてくれないのかな？　いくらここが平和な国だとはいえ、ご家族は君がたつたひとりで丸一日……心配されないのかな？」

「はい、僕がひとりが好きなのを知っているのです」

このへんはもう今日だけで10回くらいした会話だ。

さすがに考えなくつてもすらすらと出てくる。

定型句つて大事。

定型句さえあれば口下手でもなんとか乗り切れるんだ。

「それにけっこう頻繁に出かけるので、僕も家族もこういうのに慣れていきますし。いざとなったら周りを頼ります。いちおうは人のあまり通らないようなところには行きませんし」

「そうかね。その歳で遠出とは、儂らから見ると心配でしかたないのだが……」

お兄さんⅡ僕なんだし、あまり突っ込まれないようあくまでもカメラをもらっただけって感じで興味を逸らしておくのも今日で何回目。

「ずず」

お箸を置いてお茶をすするとご老人たちもひと息。

……まだまだ話したりないらしい。

普通なら「じゃあそろそろ……」ってしてくれるのになあ。

この人たちは手強い。

さつきまでみたいに立ち話じやないから、相手もまた行き先があるっていうのを利用した方法が使えないし、そもそもここは終点だ。

それに来てからいちどもスマホとかも触らず、近くにある時計とかもぜんぜん見る気配がないのから時間には追われていないのがわかる。

しかも何かを食べる気配もない。

つまりはヒマを持って余したご老人。

手強いに決まっている。

……さらに言えば今の僕は彼らの孫くらいの見た目……文字通り年齢も容姿もだから興味を強く引くのはムリもないのか。

さあ困った。

さつきまでは口を動かすぶんお腹がいつぱいになっていたのに、時間が経ちすぎて逆にお腹に余裕が出てきちゃって、お腹がいつぱいなはずなのにもう少し食べられそうで、だから動けない。

どつちにしろすぐには席を立ついいきつかけが見当たらなさそうだ。

「……君は箸を器用に使うんだね。 私たちも慣れてはいるんだが、米粒なんて狙って拾うのはどうも苦手で」

「そうですか」

いちいち食べるたびにすみっこのほうにご飯をまとめるっていうクセが気になったのか、またどうでもいいことを言い出すおばあさん。

こういう悪意のない相手って無下に辛いしなあ。

単純に話がしたくって、お年寄りで……いや、外国人だから僕たちにとっては老けて見えるんだっけ……どつちにカテゴライズしたらいいのかは微妙なだけど。

いずれにしても隠居したご年配って印象だからどうにも苦手だ。

子どもと年寄りだけは邪険にしようとしてもできないのが人つてもの。

これならまだ適当に相手をしていてもぜんぜん気にしない子どもとかのほうがマシなくらい……いやあのエネルギーに当てられるととっても疲れるから、それもなあ……？

とにもかくにもこの小さい口と胃袋、そのせいでちびつつつじやないと食欲が負けるほどに弱い体が悪い。

なのに食べようと思えば食べられそうっていうもはやわけわかんない状態になってきた。

きつとストレスだろう。

そうじゃなければこの人たちが登ってきたタイミングでぱつとまとめてさよなら

できたのに。

その敏捷性も足りないのか。

鍛えてこれだもんなあ……。

いろいろ課題のできた遠征だったな。

まだ終わってないけど。

「ふむ……」

どうでもいいことを話題にするために「撮った写真とかカメラの画面も見てもいいですよ」って言ったからカメラの中身を手持ち無沙汰にばらばらと見ていたおじいさんが顔を上げる。

「たしかにここからの景色はいいね。 儂らが来たときには見る余裕もなかったが、下の木々のあいだからの眺めよりはずっといい様だしな。 いや、いいものを見せてもらった。 これなら儂の携帯でも良い画が撮れそうだ。 帰りにでも試してみよう」

おじいさんは羽織っていたベスト……釣りをする人とかがよく着けていたりするあれみたいなのからスマホを取り出す。

スマホ。

お年寄りって二極化するよなあ。

それを携帯って言うあたり本当に何十年も住んでいた感じがする。



「時にお嬢さん。ひとつ聞いていいかね？」

「なんでしようか」

スマホをおばあさんに……さつきから静かになってくれて助かっている彼女に手渡したおじいさんが、片目と眼帯とで僕をじっと見つめてきた。

「君は……お嬢さん……女の子で良いのだよね？」

「へ？」

なんかものすごく当たり前すぎることを聞かれてフリーズする僕。

……。

……僕、ごく自然に僕自身のこと女でしよとか思っちゃってた。

それに気がついてさらに思考が止まる。

……アイデンティティの危機が迫っている。

## 24話 疑念と助言と発覚 2 / 3

外人さんって遠慮ないよね。

ただの文化の違いだし、実際現地だとその方がお互いに楽って知ってるから別に良いけど。

そんなわけで「君は女の子だよね？」って聞かれたわけだ。

結構聞きにくいこともずばずば言ってくる感じはまさに外国人。

……ただの年のせいかもしれないけど。

そういうのを今までほとんど聞かれたことなかったのって、髪の毛と服装とで女の子だって一目瞭然だからだろう。

もちろん違和感を無くすため意図的に男っぽくとか女の子っぽい服装にしてるんだけどね。

で、今はやっぱり女の子って見えるらしい。

帽子してるって言ってもいつもみたいパーカーで隠してないし、そもそも今は取って髪の毛全部下ろしてるしだから顔も隠れていないし。

ズボンとシャツだけで登山なら普通だしな。

そうなるといくら「僕」って一人称を使って普通に話していても男だっと思ってもらえなくなるってことで、つまりは男らしさが失われているってことだからしょうがないんだ。

でもそれは男だった僕にとつてはとても悲しいこと。

楽だから良いしもういい加減に慣れてはいるけど……せめてスカートじゃないときは男って見て欲しいもんなあ。

でもそれを魔法さんが許さないんだ。

ほんと、どうしてか。

そう考えてみると今初めて男か女か聞かれたっていうのは僕のアイデンティティ的にはものすごくいいことかもね。

だって僕の中から少女と化した僕の中から男が染み出ているってことになるんだし。

ほら「女の子っぽいけど男っぽくもあるし……どっち？」って聞かれたわけだからさ。

「男の子なら……坊や」

なんか坊やって言う人レアだよね。

「……とは今は言わないのか……坊ちゃんかのう？」

うーん、どうかなあ。

「ぼく」とかかな?

うん、僕の主観から見て年下の大学生くらいの女の子に「ぼく?」って子供に対する感じで話しかけられるのってなんかぞくぞくするし。

男じや別になんとも思わないのに……なんなんだろうね、あれ。

「いやそれも……うむ、言葉というのは難しい。とにかくだ、君は男性であつて先ほだから呼んでいたように『お嬢さん』……レディー、つまりは女性なのではないのかと思つてな。いやなに、さつきからずっとそのように呼んでしまつていたけれども間違えていたら申し訳ないと思つてね」

「いえ、合っているので構いません」

肉体的にはなにひとつな。

もう特段のこだわりもないし。

そんなのは着せ替え人形で記憶を飛ばしてあるあいだにどっか行つたから。

あの子は本当になあ……。

「ふむ、よかつた。いや失礼した、話しているとどうもそう感じたのでね。農らの故郷でも、その自分の流行りだったのだろうが髪が長い男子は多かつたのでな」

あー、外国つてそういうイメージあるかも。

まあ何十カ国の寄せ集めのイメージなんだけどね。

「いわゆる海外」ってやつだ。

「この国でも近年は一見してどちらか判別できないような子供もよく見かけるようになってる。もはや見た目ではわからんし名前を聞いても分からんことが多い」

「お気になさらず」

うん、確かにな。

「ははっ、おいおいお前、そのお嬢さんに気を遣われてしまっているぞ？ 何十も下の子に」

「おっと、これは済まなかった」

「お気になさらず」

スマホで何やらしていたおばあさんが会話に戻ってきてしまいうらしい。

「ずず」

お茶をすすりつつ思う。

そういうえば最近の本当、ごく自然に男とか女とかそこまで気にしなくなっていたなつて。

初めのころはあれだけモヤモヤしていたのに、今では特になにも思わないことの方が多し……かも？

着ている服装次第でどっちに見えるのかコントロールできているのが大きいのかな

?

普段は男として地味な感じのシャツとズボンで、かがりがだだをこねるときや気分が乗ったときは女としてスカートにしたり髪の毛を少し出したりしてるもんな。

女装……いや、女の子としての格好。

スカート履いて外に出ていてもそこまで恥ずかしくないもんな。

知り合いさえいなければ別になんということはないって感じ。

周囲にはそこそこ溶け込んでいるみたいだし。

まあ、もう半年だ。

これだけ時間が経ったら……慣れるよな、そりゃ。

女の子扱いにも女の子として見られることにも、抵抗感なんてもはや皆無だ。

……慣れきっているのが怖いって言えば怖いんだけど、もう今さらだし。

どうせ成長したとしたらどんな格好をしようと女の子扱いなんだろうし。

比較にはならないけどこのおぼさんの胸も体格に見合ったものだしな。

せめて冬くらいは隠せるくらいの体型止まりならいいな。

メロンさんみたいななのやりさりんさんみたいになるとたぶんムリだろうからもう

ちよいちつちやい感じで。

大きいのは見た目としてはすごくいいんだけど、僕的には大歓迎なんだけど……肩凝

るらしいし。

あとほうつ伏せでごろごろしくくなるしな。

やっぱレモンさんくらい止まりでいいや。

「ああお嬢さん。コレが君を男に見えるだなんて失礼なことを言ってしまった。申し訳ないね」

「慣れていきますから」

夫のことを「コレ」呼ばわりの男よりも漢らしいおばあさん。

かかあ天下はどこでも変わらないらしい。

「だとしても、だ。『お前は男か』などレディーにするような話ではないだろう馬鹿。

なああ？」

「ぐぬ……」

「許してくれ、男というものは無遠慮で鈍感な生き物なんだよ。お嬢さんもその内に

嫌という程分かる」

けちよんけちよんなおじいさん。

女性特有の言葉での攻撃で何にも言えなくなってる。

かがりとかも拗ねたりするとよくやるんだけど、いちいちくちくちくるんだよなー。女性って怖い。

男の方がずっと穏やかかって感じる。

「話を変えようか。 こういうときは全く違うものがないかな?」

いえ、そろそろお暇したいですけど?」

「そうだな、それなら……これもまたぶしつけになって悪いが、君から見て私たちはどう見えるかね?」

「……………えっと?」

感性の違いからか投げてるボールが物理法則を無視してる感じ。

「お前こそいきなり過ぎやしないか? ほれ、お嬢さんも困っている。 物事はもっと

シンプルにじゃぞ?」

「お前に言われたくないな」

「で、だ……お嬢さん。 別に難しいことではないんだ、ただ普通の……小学生かね?

そうかね……である君の目から見て、明らかに外国人である僕らがどう映るのか気になっていてね」

「……………」

小学生って言われるのはもう諦めた。

園児よりかはずっとマシだもん。

「僕らがその辺を歩いているとな? 僕らのどちらも君くらいの子どもからはどうも遠



巻きにされることが多くてな。子どもが好きな儂らにとつては悲しいことこの上ないのだよ」

顔が怖いからです。

なんなら体から威圧感がほとばしってるからです。

なーんて初対面の人相手にどこまで言ってもいいのやら。

「……………」

「……………」

でも子供の話し相手がいらないのかとつても聞きたさそう。

じゃ、じゃあ遠慮なく……。

「…………おふたりは背も高いですし、体格もとてもいい、ので、その……………特にあなたの方はプロレスラーでもおかしくないように見えますし、威圧感……………ありますね？」

「むう」

できる限りニュアンスを柔らかくつて意識して言ってみてあげる。

「それは、私も……………だな？」

「えっと、はい」

むしろお胸の威圧感でおばあさんの方がぶつちやけ怖いです。

「分かっているとも、泣いて逃げられたことがあるんだ。……君よりも大きな子に」  
しよげている初老夫婦。

「……僕たちが想像するような、女の人……とは、その、イメージというか受ける印象が、その」

「いや、わかった。それ以上はいいよ。ありがとう……」

特におばあさんがしよぼんとしている。

しよぼんとしても肩周りのごつきとか大きすぎて圧力しか感じないお胸とか腰周りとか、ついでのついでに言うか怖い元凶な顔の……派手な傷跡とか。

傷跡。

グロくはないけどやっぱ怖いよね、そういうのつて。

切った張ったの世界の人みたいじゃない？

多分怪我とかなんだらうけど。

そういう身体的特徴って面と向かって言いくいものだし。

多分それは外国の方が言いくいんじゃないかなって思う。

そんなもんだからナチュラルな迫力がある。

必ず悔られる僕としてはちよっぴりうらやましいかも。

「まあ、これは仕方がないことなんだがな？ 改めてそう言われてしまうとな。いや、

はつきりと言ってもらえるとても助かるんだが。……これでも現役のところに比べてだいぶ薄くなつたし、減量もずいぶんしているんだけどな。いくら体重を落とそうと、肩周りと脚はなかなか細くならなくてな……」

顔はともかくその体格は大の大人でも威圧されるもん。  
骨格から違うしなあ。

僕もこの体になつたばかりのころは、眉毛のあいだから鼻までの飛び出した感じとか細すぎる脚とか違和感しかなかつたし。

脚つて骨格とか筋肉量とかがはつきり出ちやうよなあ。

「な？ 儂が言つたとおりだつただらう？」

なんか元気になつてたらしいおじいさん。

あ、奥さんが凹んでると元気になるのも全国共通なんだ……。

「知己に聞いたつていつものように勝手に遠慮されてごまかされているだけだと。善意のウソは見抜く以前に気がつかないものだからなあ」

「通りで子どもと向き合つて笑顔なぞしても逆効果だつたわけだ……」

あ、うん……多分それは。

「端から見ると筋肉からのごまかされたとしか映つていなかったらどうな、ははっ！」  
そうじゃないんだけどそういうことにしておいてあげよう。

「無論それは儂もなのだしな。　そうだろう、お嬢さん？」

「えーつと……………」

僕の反応で分かったのか、苦笑しながら笑うおじいさん。

「あなたたちは子供でなくても怖いんです」って誰か言つてあげて…………？」

みんなも怖いんでしょ…………？」

「……………ありがとう、お嬢さん。　もう少し……………まずは服装からだな、試してみることにするよ。　さすがに近づいただけで泣かれるのはこりごりなんだ。　君くらいだよ、逃げたり泣いたりしなかったのは。　君は肝が据わっているね」

「そうですか」

だつて僕大人だからね。

こういうときに自尊心が養われるんだ。

人は歳を取るほどにおんなじような話をするようになり、それが女の人だとさらに倍増する。

公園とかで話しかけてくるお年寄りとかだいたい前に聞いた話のアレンジしかしないし、かがりやゆりかたちと会つているときも似たような話題……………まあさすがに「なんかこの前も話したよねー」とは言うけど、それでも話題はループする。

かがりの恋バナとかな。

む、恋バナ。

そういうえば、あるときからぴたつと恋について聞いてこなくなつたのは……飽きたんだらうな。

くるんさんだもんな。

ゆりかのは多分ただの興味だつたんだらうし……聞かれないからどうでもいつか。

「で、だ。お嬢さん、しつこくて済まないが頼みたい。——他にも『何か』無いかね？」

「何か、ですか？」

しつこいけど凄みがあるから「しつこいのでうざつたいです帰ってください」つて言えない僕。

「うむ、ついでだしな。他にも何か、子どもに怖がられそうな要素があつたら遠慮なく言つてほしい。家族や仲間からは『特に気にしなくていい』の一点張りで教えてくれないのだよ。こちらは答えを問うている立場だから、何でもいい。まだ気がつくことがあれば是非言つてくれないか？ この話し方なども、これでも随分気をつけてはいるのだがまだ硬い印象だらうしの。ああ、もちろん怒つたりはしないさ。もし良ければ頼みたいのだよ」

この食い下がりよう……普段よつぽど気兼ねなく言い合える対等な相手が居ないと

見た。

まあふたりの話しっぷりから会社とかのトップだった感じだもんね。

それで子供とか居なければ……話をする相手も限られるか。

でも良いや、これで怒るんだったら帰るし、そうじゃなくつてもそろそろお尻が疲れてきたし。

……そう言えば結構経つけどなんで誰も来ないんだろ？

登つてくるときは結構な頻度で人を見かけたからちよくちよくここにも来るはずなのにね。

やっぱりレストランとか閉まってるからみんな引き返しちゃうのかな？

「遠慮がいらぬのなら、もうひとつお伝えしたほうがよさそうなのが」

時間をかけて、リュックの中にぐしゃつと詰めていた紙を広げて元のようにお弁当を詰め始める。

帰ってからのお楽しみ。

あ、帰りに漬物買つてくの忘れないようにしないとね。

「その、大人でもだと思えますけど……子供にとつておふたりの目つきは少し、きつすぎます。いえ、正確には目つきと顔つきの両方ですけど」

彫りが深いっていうのとは別に、なんだか目つきが……ふつうの人がチワワだとす

るとハスキーくらいには鋭いってジャブを入れてみる。

「……………」

「……………」

特段怒る気配はないけど……なんか観察されてる？

なんだろ。

まあいつか。

「さくらに言ってしまったますと、そもそも笑い方も表情も声もその全てが怖いです。たぶん、力が入りすぎなんだと思います」

緊張すると顔ってこわばるよね。

この人たちが緊張でそうなるって思えないから多分会社とかで厳しい命令してたときの表情がくっついたままなんだ。

手で毎日うにうにって解せばそれなりに動くようになるって思うよ？

それで僕もびっくりするくらいかわいい笑顔できるようになったし。

うにうにって、うにうにって。

「……………ふはははは！」

悪役みたいな笑い方するおじいさん。

「そうだな、僕たちはいささか故郷……吹雪の吹きすさぶ寒い故郷の表情が染みついて

しまいすぎているようだな！ ふははははっ

言い回しが古い。

まるで俳優さんだ。

「太陽のせいもあるか……？ 私たちにとってはこの国の日の光は少し強すぎるからな。しかしこの国の人たちはサングラスをしているともつと避けてしまおう……ううむ」

あー、サングラスって外国は普通だけどここじゃ普通じゃないよね。

花粉症とかのマスクは平気なのに不思議だね。

これが異文化ってやつ。

「いや、こういうのは本当に……一切の遠慮が無い、知り合いでない他人にこそ聞いてみるものだな！ 数年来の懸念があつという間だ！」

がははと笑っているおじいさん。

その笑い方も怖いんです。

声量が違うもんですね。

「特に、家のものたちは皆無駄な遠慮をしてばかりいて困る」

だからぼそつと怖いこと言うのもまた怖いんだって。

いそいそとリュックに詰めてしまったものをぜんぶ出して、お弁当を下敷きにぎゅう



ぎゆうと詰めていく作業中。

「親しい者に、君のような幼……失礼、若者が、大人でないのがいけないから助かるよ。

他にもないかのう？ 話し方や仕事などささいなことからなんでもだ！ もう……20年はこちらの人たちと暮らしておるし、だから合わせ慣れているつもりではあるのだが。君から見て何か……アドバイスはないだろうか。これも縁というやつだ、是非聞かせてもらいたい」

なんか仲良くなつたつて勝手に思つてずけずけ言ってくる人つて多いよね……僕そういうの苦手。

でもそういう人たちつて割とひどいこと言われても平気な気がするし……なんかイラつて来たから言つちやえ。

「ええと、強いて言えば、その」

「はつきり言つてもらつて構わないよ。どうせ知人に当たつても君ほど気軽に教えてはくれないだろうからね。なにを言われても怒つたりしない。約束するよ」

なんだかおばあさんのほうも乗り気だし。

でも「怒らないから言つてごらん？」つて怒る前フリじゃない？

そうじゃないよね？

信じるよ？

「……………身体的特徴なので言いにくかったのですけど。それは仕方ないとは言っても、子供と触れ合いたいのなら……………その。『そちらがつけている真つ黒でござつござつした眼帯』は遠くからでもはつきりと目立ちますし、近くだと威圧感があります」

「ほう？ 『眼帯』とな」

怒ってないよね？

あ、背中に汗垂れてきた。

「……………それでそちらは、目からほつぺたにかけての大きな傷跡。……………せめて髪の毛とかお化粧とかマスクとかで隠したほうが……………いいと、思います」

「そんなに大きいかね？」

「え？ あ、はい。ぱつと見て分かる程度には」

でも言いかけたことだから言っちゃう。

言えって言われたんだから言っても良いよね？

「……………」

どうして？

怒らないって言ったのに。

怒らないって言ったじゃん？

怒らないって言ったじゃん！

ああいや、この人たちときどき変なタイミングで黙りこくる癖があるみたいだからもしかしたら怒っていいのかもしれないけど……なんというか、あれだ。

怖いものは怖い。

ただでさえ生物学的な本能で体格差に圧迫されている僕になんてことするんだこの人たち。

……お年寄りだからって思わないで「僕、バスの時間あるんで……」ってさっさと下りちゃえば良かったなあ。

「まず」

しようがないから限りなくゼロに近づいて来たお茶をちびつとすする。

……あ、怖いからって漏らさないようにしっぴかり締めておかないと。

何か男のときより難しいけど、こう……きゅってね、きゅって。

## 24話 疑念と助言と発覚 3 / 3

「……………」

最近の若者は打たれ弱いとか言われてるけどしょうがないじゃん。

小さいころから理不尽には怒られないんだからさ。

そんなことを思う。

こ、こんなにか弱い幼女に向かって手上げたりしないよね……………？

その、たぶん見えなくなってるお目々と顔の傷のこと言っちゃってさ。

「……………」

「……………」

何かしやべって？

そう思うけど続く沈黙。

やっぱり言わないほうがよかったのかな……………事故かなんかのなんだろうし。

いやでも「なんでも言え」って言ってたし、なんだか勢いするつと言っちゃったし

……………。

他人と接した経験が少なすぎるからどこからがダメなラインなのかが分からないんだ。

でもさ、言えつて言つたじゃん……？

「……………」

緊張感が漂う。

漂っているオーラ。

でも言っちゃつたものはしょうがない。

言わなかつたことになってできないんだから。

それにこの人たちが子供どころか大人からも避けられるのってどう考えても……映画で出てくる悪役そのものな顔つきと特徴のせいなんだしさ？

悪の親玉的なポジションの。

なんだかここだけ悪の組織が出てくる洋画チックなアトモスフィアだ。

あ、すごい。

おじいさんの筋肉がなんだかもりもりつと盛り上がっている。

……………いきなり叩いたりはしないよね？

え？

怖いんだけど。

「……………なるほど。それには思い至ら

なんだ……………」

「はっ。」

……………聞き間違いかって思った途端に一気に力を抜いてしほみ、背もたれに寄りかかって目の前のイスがぎぎいっと悲鳴を上げている声が聞こえた気がする。

筋肉と骨格とで体重、きつと前の僕よりもあるんだろうし。

「部下……………召使……………使用人、いや、友人」

友達って言うまでにもものすごく遠回りしてない？

「皆、長い付き合いなのだが気にするそぶりがなかったし話題にもそうそう上らない。

そうか、このせいかな……………盲点だったな……………」

「そうか、言われてみればたしかに。もう何年もカムフラージュの化粧もするのを忘

れていたな。なるほどなるほど。知り合いということは私の『これ』にも慣れてい

るということで、そりゃあ反応なぞ……………あるわけがないか……………」

露骨に落ち込むふたり。

無くしてたって思ってた鍵とかを30分くらい必死に探して、ふと目の前にあったと

きの脱力感的な感じ。

「……………」

でも……なーんだ、怖がって損した。

おばあさんもイスに体重を乗せて……そろそろイスが壊れそうだけど大丈夫かな  
……脱力してふたりしてぶつぶつ言い合っているのを見るに、僕に対しては怒ってな  
かったらしい。

……この人たち、いやこの人たちの知り合いもみんな本気で気がついていなかったの  
……？

それとも言えなかったのか。

たぶん言えなかったんだろうな。

ちらちらつと出てくる言葉から推測するにこの人たちは相当偉い立場の人みたいだ  
しな。

面と向かってこういう怒られるかもしれないこと言えないのはわかるけど。

でも誰も居なかったんだ。

僕みたいに友達が居ないわけじゃないだろうから多分怒られそうで怖かったに違  
ない。

きつとそうだ。

「はず」

どうしよう。

怖いから逃げようとしていた相手があるものすごく落ち込んでいるような、そんなレアなシチュエーションになってるんだけど。

「……おふたりとも、その」

きつと威圧感とかも気のせいだったんだろう。

たかが子供のひとことまで落ち込んでるんだもん。

よく見たら怖くなってきた。

「体格とか腕は仕方が無いので、服装は……町で普通の人が着ているようなカジュアル……ラフなものにして。その、お化粧はもちろんですけど眼帯のほうは」

つぶらな瞳で見上げてくるおじいさんおばあさん。

あ、やっぱり怖いかも。

「子供に懐かれないのなら……」

でもなんかかわいそうになったから、普段のかがりとかに習って言うてみてあげる。

「人ってギャップで笑ったりしますから……いつそのことウケ狙いで赤とかピンクとか……そうで無くてもかわいいキャラクターものとか……あるのかは知りませんが……そのときだけでもつけてみるとか。普段使いでも、髪の毛の色に合わせてもう少し明るい色にした方が良かった……」



僕の言葉を聞いてごぼつと起き上がるふたり。

イスさんからはさらなる悲鳴が上がっている。

なんていうか素のリアクションがぜんぜん違うからやっぱり外人さんだつて感じる。

「やはり化粧か……そうしてみるよ。厚化粧は嫌いだが若いころのようにせめてだ……」

「受け狙いという発想はなかった……！ なるほど、花柄などでデコるといふやつでいけそうだな……！」

まあ喜んでみるみたいだし、いっか。

多分僕に合わせて大きさに喜んでくれてるんだらうけど悪い気しないし。



「……では、私たちはこれで」

ひとしきりどんなのが良いかなくて話したらようやく腰を上げてくれてほつとする。

「お先に失礼するよ。貴重でありがたい君からのアドバイス。………ほんとうに

貴重な、私たちを近くで見ても逃げ出したりしない子供の……ああいや失礼レディーから忌憚のない視点。早速と試してみんな」

レディーって言われてもぴんと来ないのは男だからなんだろうか。  
脳味噌まで女の子になってたら嬉しいはずだもんね。

懐いてくれない親戚の子供とかに「じいじ」とか「ばあば」とかそんな風に呼んでもらいたいつて聞かれて、またそこそこに適当な思いつきをいくつか話したらなんだかずいぶんとありがたがられた。

でも僕としてもいろいろと得るところがあつたから良かったんだ。

とりあえずこういうデッドエンド、逃げ場のなくつて他の人がいない状況で絡まれちやうと身動きできないっていう……強すぎる善意だったり悪意を持った人を相手にするときにはまずいつて身にしみて理解できたし。

ほらもう、気がついたら30分も経つてるし。

「それでは」

「はい」

ふたりとも帽子とリュック……あとおじいさんは杖つていう来たときの出で立ちに戻っていた。

「お嬢さん」

「……はい？」

そのまま行つてくれるのかと思つたらおばあさんからなにかをかきつと差し出され、

「貢ぎものをもらっていたさっきまでのクセでつい受けとっちゃってから「これなんだろう」って考える。」

「……………折りたたんだ、紙？」

「なんかやけに古風なものが僕の手には。」

「ここまで映画っぽいと現実感ないよね。」

「これは相談に乗ってくれたお礼だ。…………もし。もし何かあつたらここへ連絡する」といい。ささいなことから重大なものまで何でもだ」

「いえ、僕はそこまでのことは」

「重いからやめて…………？」

「いいから受け取ってくれないか。君にとつての『そこまでのこと』は、僕たちにとつては天啓にも等しいものだったのだからな」

「こつん、と杖で主張するおじいさん。」

「いや、天啓って。」

「だから言い回し…………。」

「そういうことだ。…………私たちは君が『どんな状況』にあつても手を貸す。約束しよう」

「…………あ、はい。そういうことなら…………」

なんか有無を言わさない感じ。

まあ受け取つちやつたし、僕が紙を広げて番号……外国の人つて数字の書き方独特だよなあ……を見ているあいだにふたりはもう階段までさしかかっていた。

「それではな、お嬢さん！　またいつか、だ！　………とりあえ

ずは、これが似合うといつも言っておつたバカどもを肅正せんとな」

「大目に見てやれ。　だが、そうだな。　これを機に服飾などもいつもの者に任せるのではなく、もう少し若い世代の………」

「うむ」

風が運んできたなにやら物騒な言葉がちらりと。

「……………」

ほへーつてしながら手元の紙をがさがさ弄ぶこと少し。

………なんだつたんだ、あの人たち。

話の内容と言いあの肉食獣にがっしりとつかまれたみたいなの雰囲気と言い、普通の人じゃないことだけはたしかなんだけど。

それこそこの前観たマフィアが出て来る映画に居たみたいな人たちだったじゃないか。



「〜♪」

夕暮れ。

最近は一気に日が傾いて色づいてくるのが早くなってきた。

季節ってこういう時に感じるよね。

セミの声とオレンジ色の光を浴びながら、暑いんだけどもうそこまでじゃない空気を引きずりつつ家へ向かっている。

もうすぐ……あの角を曲がれば家でぐったりできる。

あともう少しの辛抱だ。

そんなことを何十回繰り返してがんばって来たけどどうとう最後の角だ。

肩と背中、両手、そしてそれを支えている脚で感じる、帰りに買ってきた荷物のずっしり感がつらい。

こつちに着いたのがまだ2時とちよつととかだったから「時間も余つたし、なんだか体力にちよつと余裕があるな」って思ったからついついと買い物をしてきちやつたんだ。

昔からごくまれにある、苦手なはずの買い物とかを丸1日でもできちゃうっていうそ

ういうエネルギーがある日だった様子。

普段は省エネなのにたまーにそういう日があるんだ。

こういうときは体と気分の動くままに任せたほうがいいって知っているから、持てる限度までひたすらにお店を回っていた。

だから僕にしては珍しく、……3時間くらいずっと休まずにシヨッピング。

まるでかがりみたいだな。

いや、あの子はお昼から夕方まで休みなしで動けるんだ……格が違うんだ。

追いつける気がしないんだ。

ビニール袋が3方向からがさがさとうるさい。

重いし。

けどそのおかげで秋ものも揃えられたし、満足はしている。

今年の流行だろうストールとかも見つけられたし。

流行りのアイテムというやつをひととおり揃えて着回せばかがりも満足するだろう。

僕にとってはどうでもいいものでも、女の子と女性にとっては価値のあるものらしいし。

概念は理解しているからあとはそれを肌でわかるようになるまで続けるだけだ。

「……………うげ」

それにしても気分が悪い。

さっきの反動じゃなくて単純にお昼を食べ過ぎただけだ。

あと調子に乗ってはしやぎすぎたから疲れて気持ち悪い。

心なしか枝毛が増えている気がする。

繊細で脆弱な僕の胃が悲鳴を上げっぱなしだ。

しょうがない……もう夜はとも食べられないだろうし、家に着いたらまず赤ワインで消化しよう。

そう考えていたからか、普段は何かを考えなきゃいけなかったのを思い出せない。

重たい胃と荷物を抱えながらふらふらになってせえせえ言いながらようやく家にたどり着く。

どさつと荷物を下ろしてカギを取り出す。

荷物の重さでとうとう指までが疲れ切っていてうまく動かなくなってもたもたする。

でも頭がぼーっとしてるから特に急いだりしない。

急がなきゃいけない理由があつたはずなのに、普段よりずっと遅い僕の脳味噌は動いてくれない。

かちやかちやと、鍵穴がカギを受け入れない音が響き渡る。

かちやかちやかちや。

……よく考えたら今日つてわりと忙しかったよなあ。

そんなのんきな考えがぶわぶわ浮かぶ。

かちやかちやかちや。

遠出して子供料金に喜んで、お弁当を食べて……ごついお年寄りたちに絡まれて。

あ、あのインパクトで忘れていたけどあの人たちを含めて人との会話でも相当に疲れ  
ているに違いない。

買い物でも動きっぱなしだったし……明日からの怠さとか筋肉痛とかが今から怖い。  
怖いものばかりだな、僕つて。

かちやかちやかちや。

まあいいや。

良くないはずなのに僕は気がつけない。

とりあえずお酒飲んでお風呂入ってゆっくりしよう。

手がかじかんだみたいになつていゝから、さつきからなかなか入らなかつたカギがよ  
うやくドアに差し込むことができ「かちやり」つてカギが空いて。

ほつとしてカギを抜いてポケットに入れて、荷物を持つとうと横を向く。

その全ての動作が普段よりもずつとのろのろしてて、頭ものろのろしてて。

——だから、僕が気がついたときには遅かつたんだ。



……後ろのほうに、人の気配。

手のひらと靴の中の足から、どっとイヤな汗が出る。

「……………あら」

頭の上から降ってくる、声。

僕の前もずっと大きい影法師が、僕からわずかのところに真っ黒にそびえている。

心臓がばくばくうるさい。

頭がががんとする。

……………昔から聞き慣れた、女の人。

たしか中学生だったはずの娘さんのいる……………お母さんの、声。

——僕はこの人を、知っている。

「響、くん？」

汗はとめどなく出て、あたまのなかは真っ白になって……………心臓がばくばくして止まらなくって、僕は、動けない。

……………脚から力が抜けるっていうの、ほんとうなんだな。

そんなどうでもいいことが、飲み過ぎたときみたいに頭がイヤな感じに冷たくなつて、周りが暗くなったように感じる中、ぐるぐると、くらくらと。

……………とうとう、やらかした。

今の僕は、半年前からの幼女の外見で。

だぶつとしたズボンとシャツこそ着ているものの、暑いからって疲れているからって、お店で帽子を取ったまんまの……銀色の髪の毛と幼い女の子の顔を、出した状態で疲れて、でも嬉しくて、楽しくて、浮かれていて。

珍しくうじうじと「過去」じゃなくって「未来」のことばかりを考えていたせいだ。慣れないことはするもんじやない。

そういうのは嫌ってほど味わってきたのに。

「……………」  
「……響、くん……よね？」

……………僕が置かれている状況。

性別が変わって幼くなつてなにもかもが変わってしまったっていう、超常で非現実的な、魔法みたいなものがかった僕。

その銀髪幼女になった僕が、どう見ても面白い物をしてきたって格好でカギを開けてドアを開けようとしている姿を……この瞬間を、よりによっていちばん見られてはいけない人に……見られた。

「……………」

……………言い訳も言い逃れも……もはやできない。

最後はやつぱり、結局……僕自身がやらかしておしまいなんだな。

僕は「はい」とも「いいえ」とも言えなくって、振り向くこともドアを開けることもできなくって……ただただ血の気が引ききってイヤな汗かいて寒く感じるのに任せていた。

## 25話

## 発覚と発覚

## 1 / 4

見られてる。

じいっと見られてる。

「……………っ！」

「……………」

やばい。

やばいやばいやばいやばい。

汗が、イヤな汗が……体じゅうから吹き出しているのが分かる。

さつきまで……下りてきてまだまだ残暑の厳しい夕暮れを歩いて帰ってきたときに  
出ているのとはぜんぜん違う、どろどろとした汗がにじみ出ている。

暑いとかのせいじゃなくってストレス性の汗。

とつても気持ちが悪い。

だけどそんなことを不快に思うことすらできないこの状況。

頭の中がぐるぐるしてわけがわかんなくなっていて、最低でもちよつとひと息入れて  
からそれこそお酒でも飲んでゆっくりしてから解決策を見出したいけどできるわけな

い、この……今の僕をお隣さんに見られたっていうシチュエーション。

今この場でこの僕のことをどうにかして何かを言つて納得させられないとアウトだ。

……この体になつてからずーっと、これを避けるためにあれだけ苦労してきたのに。

スカートとかはともかく肌も出さないようにして、じりじりと蒸されつつも帽子とパーカーで深く顔まで隠して、暑さに耐えるようにして夏休みのずつと……ほとんど2ヶ月くらいがんばつて来たのに。

家の出入りだつて通りに誰もいないタイミングまで待つてからつて言うのをもう何ヶ月も意識して努力して来たのに。

閉めきつてから久しいカーテンのスキマからじつと見つめ続けるか、あるいは狭い道をうねうねとしながら伺い続けるつていうのを徹底していたのに。

家の前の通りがムダにまつすくなせいで目の届く範囲に人がいないつていう状況がなかなか見つからなくて、へトへトになるまで「ただの通りがかつた男の子ですよ」つていう演技をし続けて。

……その苦労がたつたの1回の、ほんのちよつとの油断のせいでぜんぶペアだ。

僕はもうおしまいだ。

……はじめのころにしていたような、いざバレたときのシミュレーションなんてとつくにやらなくなつていく。

ましてや今はびっくりしていて恐慌していてそんなのとてもひねり出せるようなメンタルでもなくなっているし。

「……………」

視線が怖い。

「だけど早く……」「この家のお兄さんに呼ばれてるの?」「何か変なことされてない?」とか詰め寄られる前に……: どうにかしてなんとかして、僕がここにいるのがおかしなことじゃなくって、もういなくなっている元の僕にいたずらとかされているんじゃないかと……: つまりは、その、通報しないでほしいって上手に言わないと。

この場で、今のこの瞬間で作り出さないと、僕はパトカーに乗せられて保護されてしまう。

正直に言えば虚言癖な子か頭のおかしい子、はたまたは元の僕をかばっている子、かわいそうな女の子として。

ごまかしてもやっぱり家出とかになるし……: 虫歯とかがひとつもなくなっていてどう見ても歯医者さんに行ったことのない口の中になっていて、学校とかそのほかのすべてが記録にない……: 「この年になるまでどこにもお世話になったことがなかった少女」っていう虐待とか不法滞在とかそういう厄介ごとを抱え込んだ子として。

そうして前の僕はメディアに、どっちのいいわけをしても幼女拉致監禁……: いや、自

由に出入りしているから拉致だけで済むかな……していた男として取り上げられて。

20代のひとり暮らし、ひきこもっていた時期のあつた現ニート、両親がいないこと、近所を徘徊していた証言、ぬぼっとしたメガネでもやしな男。

格好の餌食になるだろう要素しかない。

ゆりかに合わせるために買ったたりしたマンガとかゲームを見て「やつぱり……！」つてなるんだ。

でもそれ以外に家の中には恥ずかしいものなんてなにもないからそれだけが幸い……いやいやスク水をはじめとして今の僕の服がたんまりとあるんだ、ついやつちやつた自撮りとかだつてあるしつまりは前の僕も今の僕ももうだめだ。

客観的には幼女監禁どころかわいせつの証拠までが揃っているんだもん。どうしよう。

こうならないうちに僕はがんばつて来たのに、崩れるのは一瞬で——。

響くん、お久しぶりね！」

「……………、はっ」

その言葉を僕の頭が処理するまでにたつぷり10秒はかかつたつて思う。

小さいころから聞き慣れているお隣さんの声が……普通のトーンで降ってくる。

多分は小さいころの位置関係に戻っている、その人からの声が。

「前は毎日のように顔を合わせていたのにこここのところ……そうねえ春からかしら……しばらく見かけなくなっていたから、近所のみなさんも私も心配していたのよ？」

ネガティブに振り切れたせいかな、すんごいスピードで考えていたらしい僕の意識が斜め上方からの声で現実に引き戻される。

お隣さん。

そのお母さん。

お父さんとお母さんと娘さんの家の中で遭遇頻度の最も高い人。

「……………」

鍵を開けていたときのまんま、半分かがんで半分横を向いていて顔を少しだけ回しているっていうものすごく中途はんばな体勢なのを思い出しつつ、とりあえずあいまいな顔で会釈らしきものだけをして少しだけまともな姿勢になりながら考える僕。

そうか、やっぱり数年来の徘徊……じゃなくなつて散歩とか運動とか買い物とかそういう日常生活でしよつちゆう声をかけられていたんだ、さすがにウワサにもなるか。

理由が分からないけど毎朝家の前に立っていて通りがけると挨拶してくるお年寄りとか、小学校とかの交通整理のおじさんおばさんや先生とか、よく徘徊している人とかには無視もできなくなつて挨拶だけしかえしてたんだもんな。

……だからこそ初めのころにはそういうのいっぱい考えていたし、対策も……一応は



考えていたはずなんだけど、そんなの今はとづくに忘れている。

ともかくにも部屋に戻って日記を探せばどれかは見つけられるんだとは思うけど、脅威は今この瞬間に僕の脳味噌で処理しなきゃ行けないもの。

でもどうやって？

小学生女子な見た目の僕が、この家の鍵を持って開けたんだ。

買い物を終えてきた格好で鍵を開けた以上「友だちの家と間違えて来ちゃったんですう」っていうのはダメ。

「前の僕とは一切関係がない別人なんですう、すぐ近くの家に住んでいる子どものごろに遊びに来ただけなんですう、まちがえちゃいましたあ」っていうのはムリだ。

こういうときの僕はすごい速さで考えている。

そうだ、親戚っていうのなら……父さんたちのお葬式とかいろいろを済ませてからの僕は、人づきあい自体がそもそも好きじゃない僕は……ご近所づきあいというものを最低限しかしてこなかった。

特に謎の対人恐怖症な時期には目を合わせないでの「ど、どうも……」で精いっぱい立ち話とかにもろくにつきあつてこなかった。

だから今日のお天気のこととかくらいしか話してこなかったはず。

その期間、実に10年。

ご近所でもお隣のこの人でも僕の、この家に関する情報は10年前で止まっているはず。

噂なんてそもそも家から出ないんだから僕自身からは生まれようがないし、僕と唯一の関係がある親戚の人たちだってほとんど来てもない。

10年つていうのは大きい。

それは僕が幼女になってからさんざんと経験してきたように、世代がひとつ変わって  
いるほどに。

中学生なら新人を通り越したいっぱしの社会人に。

大学生なら深甚な社会人……うまく行つていれば会社の出世ロードなるものを進み  
初めてそろそろ結婚を考える時期で、子どもまでできていてもおかしくはない。

そんな時間……時の流れというもの。

時間はどんな人にだって平等だ。

あの子たちを見ればわかる。

僕が中学生のときに赤ん坊だった子たちが今や中学生だ。

……つまり僕がひとりになったあのとき、父さんと母さんが死んだあときにはまだ  
いなかったけど……そのへんのタイミングで生まれた10歳に満たないこの見た目通  
りの小学生な親戚。

「遠縁の親戚……外国で結婚した誰かでもいい。

今の僕はその子供。

そういうことにすれば、あるいは。

というかそれしかないな、うん。

だってひとり暮らしの成年男性の家に女兒がいるだなんて……これが未成年誘拐じゃないシチュエーションなんてそれくらいしか思い浮かばないしな。

このご時世、成人している男の元に未成年の少女が来ている時点で怪しまれないはずがないんだ。

よし、今は親戚つてことで乗り切ろう。

ウソが増えるのは困るけど精神的なつながりつていうのなら親戚つていうのも間違いないし、なによりも本人だし。

「親戚」の範囲には家族も本人も含まれるはずなんだ。

ひとり暮らしの男の家に親戚つていってもミニママでも、いやミニママだからこそ女の子がひとり来て来ているつていうのは今見られている以上避けようがない事実にはなっちゃうけどまだマシのはず。

あ、でも、「じゃあちよつと『前の僕』を呼んできて」なんて言われたら？

……前の僕は寝込んでいるつてことにしておこう。

で、今の僕がそれをお見舞いに来ているっていうことで。

移しちや困るからっていうことにすればお見舞いっていうありがた迷惑もお断りできると。

うん、それならどっちもウソじゃないしな。

そこまでおかしいシチュエーションでもない。

この僕はいくつか先の駅に住んでいて、今は学校帰りとかなんとか適当に作り上げよう。

女兒を連れ込んでいる理由としては……不審に思われにくい言い訳の中じゃたぶんマシな方だと思うし。

そうそう、前の僕が頼んだんじゃなくって親戚が無理やりに……それこそ今の僕が、少女な僕が「心配でしかたがなくなつて来ました」みたいに押しかけなんとかみたいになそういう演技でもすれば、説得力は増す……かもしれない。

……大丈夫だ、落ち着こう。

と言うよりもそれ以外にこの場をやり過ぎす手立てはないんだ。

怪しまれて「ちよつとごめんね？」って家に入られたらアウト。

怪しまれて「ちよつと家に来てくれないかしら？」って手を引かれてもアウト。

ここの対応で全てが決まるんだ。

「……………ふうっ」

息を吐いて幼女モードに切り替え。

今まで、買い物するときとかにおまけしてもらっためだとか演技の練習のためだとかで、少女とか幼児とかのフリというものをそこそこ練習してきた。

やったら恥ずかしくなるからその日は寝るまで悶えることになっていたけど、やらな  
いよりはマシだろう。

今社会的に死ぬのと、今を乗り切つて夜に悶え死にそうになるとどつちがいいかな  
んで、悶え死にそうになれるという状況を得られるか否かなんて考えるまでもない。

今夜安心してお酒を呑めるかどうかの瀬戸際なんだ、がんばるしかない。

「ふ……………」

さらに息をおなかの底まで吐き出してぱつと吸い込むと同時に、表情筋を覚えている  
形に整えて喉の中の形も意識して顔は活発系幼女に、声も女性受けしやすい高いもので  
リアクションをゆりかみみたいに活発に、大げさなくらいにする。

「あ……………あのー！」

よし、声は大丈夫。

「僕……………あ、いや、私、は……………」

よく考えたら銀髪僕っ娘洋口りなんて属性過多すぎる。

まずは「私」で普通の女の子らしく。

脚のバネを使うのがカギだ。

軽く飛び跳ねるようにすると今の僕を形作っている髪の毛がぴよんと動いて、余計に子供っぽさを演出する。

これはゆりかを観察して得られた仕草。

驚いた感じの顔をしているお隣さんの奥さん……娘さんのお姉さんとよくまちがわれている、まだまだ若い同世代の人の顔を見あげる。

……あ。

ひよつとして「髪の毛は長いけど男です」でよかつたんじやない……？

親か自分の趣味ですって。

あるいは故郷……祖父母とかからの慣習ですとかなんとか。

今日会ったお年寄りたちもどっちでもおかしくないみたいない振りだったし。

シャツにズボンで女の子らしさのかけらもない格好を選んでいるんだし、それに顔立ちだつて男で通せなくもない……はず。

このくらい年齢ならまだ声変わりしてないし男か女かなんて自己申告なんじや。

……親戚つて言つたつて男の子が来ているのと女の子が来ているの、両方ともほほえましいって感じだけど、でもやつぱりこう常識的に考えて男の子が来ているほうがあら



これはまるでお昼に、あのご老人たちとの会話でふと訪れたようなあの変な感覚。  
いや、違う……その直前に僕は、コレとよく似た感覚を

「……………まあ！ まあまあ響くん！ ずいぶんと『かわいらしく  
なっちゃって』！」

「……………え？」

ほっぺたに両手を当ててあらあらなんて言っているお姉さんもと奥さんを見返し  
つつ……僕の背中を、冷たい汗がつつーつと下る。

——なんでこの人は、僕を。

銀髪幼女になっていて前の面影のかけらもなくって……まだ僕が僕だと言ってい  
ないのに、今の僕に向かって、「響」っていう前の僕の名前として……「僕」として認識  
しているんだ？



## 25話 発覚と発覚 2/4

「響くん？」

聞き慣れたはずの声聞き慣れた感じの世間話をしてきている。

「この春はぜんぜん見なくてみんな心配していたんだけどね。でも夏休み前からかしら？ ああ、もう学生さん……じゃないから梅雨が明けたくらいって言ったほうがいいのかな？ 暑くなってきたところからお出かけが多くなっていたものねっ」

「ええと……」

「あ、そうそう、みんなで話していたのよ。響くん、昔から冬はよく見かけるけど夏はめったに見なかつたのに今年は逆なんだ、珍しいねーって。——さんとか——さんなんかは響くんとご挨拶できなくて寂しいって言っていたわよ？ 今どき珍しくあいさつをちゃんとできて硬派でまじめな好青年だから、なおさらに心配だった」

「……………、あの」

女性特有的なお話するスイッチがかちんと入りかけていたから強引に割り込む。

普段は遮ったりせず話したいだけ話させて適当な相づちを打つフリをして満足す

るまでしゃべらせておくんだけど、今は……事情がちがう。

僕には……知りたくって知りたくなくて、でも……知らないやならないことがあるんだ。

「あらっ」

「その。「僕」が………。「響」だと——分かるんですか……？」

さつきとはまた違う感じの汗がとつくに冷たくなってきた背筋をまたつつと流れ、ぱんつに吸い込まれる。

さつきは、今の僕が前の僕に、成人男性の家に少女がひとりで来ていることをとがめられるかもってことしか頭になかったんだけど……彼女は、お隣さんは、奥さんは、僕のこと。

こんなに姿が変わっているのに僕のことを、……そういえば、はじめっから。

腰まで広がって狭まってそれからぶわっと広がって見えていたはずの、色の長い髪の毛を見てからずーっと「僕」のことを——「響くん」って、呼んできた。

身長も体重もぐつと小さくなっているってとっても苦労している、別人の顔になっているこのミニマムを。

「いやあね、ボケにはまだ早いわよ！　うちのおばあちゃんじゃないんだから！」

「あ、はい。飛川さんは娘さんがいるようには見えないくらいにはお若いですけど」

久しぶりにお隣さんの名字を口にした気がする。

多分僕が今の僕になってからは初めてだもんな。

「あらやだ響くんだったら!! いつても上手なんだから!」

「いえ、本当ですから」

まだ40にもなっていないはずだしな、たしか。

僕のいなくなってしまうた母さんの代わりをしなきゃって変な義務感があるらしく、事あるごとにお母さん風を吹かせてくるし母親のように接してくるけど……いや、僕としては近所のお姉さんって意識しか未だに持てない。

よそ行きの格好をすれば普通の大学生にしか見えないし。

お化粧控えめでこれだもんなあ。

「……響くん? 私、夫も娘もいるんだからそういうこと言ったりしたらダメよー?

言っておくけど私と同じような他のお母さま方にもつ。みんな言っていたのよ、響くんってば気を抜くとすぐそういうこと言うマダムキラーだつて……あらやだ、内緒にしておこうって思ったのに」

女の人の会話では基本的に内緒なんてない。

あの子たちに揉まれて知った事実だ。

「……………ごめんね、忘れてちようだい?」

「はあ……………えっと、それで。 僕を「響」だと分かったのは」

「ああ！ そうだったわね」

お隣の飛川さんもまた買い物帰りだったらしく、ビニール袋をかきりと足元に置き直してから。

ジャガイモと牛乳が重そうだ。

…………カレーかシチューか。

「そうそう、だって今年こそ私のほうも娘のPTAとかで忙しくって響くんと顔を合わせる機会がなかったけど、だって響くんがちっちゃいころからよく…………そうね、中高生のときなんかは夫の見送りのときとかに毎朝のように会っていたじゃない？ 夫と同じくらいの電車だったんだから。 見間違えたりなんてしないわ、たったの何ヶ月くらい会わなかっただけで。 『ちよつと変わっただけじゃない』」

「……………そう、ですか」

…………こつそりと手をにぎにぎしてみる。

うん。

爪は薄いしちつこい、節くれがなくなっていてぶにぶにしているまんまるい幼女チツクな今の僕の手だ。

はじめのころに考えていたような「僕の認識だけがおかしくなっていて周りはずっと

正常」だっていう仮定は成り立たないだろう。

だって体の感覚……五感のすべてがこの具合で、事実として時間あたりの移動可能距離とか体力とか食欲とか視線の低さとかその他にもろろ今の姿でしか有り得ない状態なんだ。

さんざんに苦勞してきた幼女のデメリットを惜しげもなく体験してきたはずだ。

あと食費が半分とか「おつかい偉いねえ」っておまけしてくれることがあるとか子ども料金とかの数少ないメリットも。

そのうえ半年近く付き合ってきたあの子たち……内のふたりはひと月だけだけど、でもそれだけずっと顔をつきあわせていたあの子たちの反応も、大人の男に対するものじゃなかった。

どう見たって小学生でしかない、否定したかった幼い子どもの見た目の……女の子を相手にするものだった。

じやなきや家に上げたりなんてしないだろう。

いくらくくるんさんだつてさすがにそこまでは………ないよね？

だからこそあの子たちをはじめとして出会った人たちのみんながみんな「幼女だつて思い込んでいるおかしな男」を哀れんでいるからそういう対応をしているんだつていう可能性、お店の人ひとりひとりまでがそうしているんだつていう可能性と、僕がほんと

うに魔法さんのせいで女の子になってるっていう可能性。

週に何回もおんなじファミレスとか中学生の女の子の家とかに……若く見られたりしたって大学生の男が加わっているなんて絶対にひと悶着起きるはずだ。

まあ間違いないとおまわりさん、そうでなくても店員さんとかがひと言二言三言言ってくるはずだ。

だから僕の頭と体、どっちがおかしくなっているのかって言ったら……そりゃあ僕がマジックでトランスフォームしているって考えたほうがなにもかもの説明がつく。

だから……だから。

「？」

——この人は、何で不思議そうな顔をしてるんだ。

僕が本当に幼女になってるって思ったからこそ僕は僕の認識と意識と五感と……「僕自身」を信用することができて、魔法さんの機嫌を損ねないようにすることなどでなんとか平穩に過ごせていたのに。

見上げると口元の緩みきった飛川さんの顔。

………なんだ、これは。

お隣さんは……姿が変わった今の僕を、前の……これまでの僕だって認識している？  
性別が変わって人種が変わって色素が変わって年齢も顔も変わっているの？

どこにでもいるぬぼっとした純国産な成人の男が一気に幼女になって洋物になって、なのにも不審にも思わなくて「かわいらしくなった」っていうたつたのひとりで、片づけている……?」

おかしい。

おかしすぎる。

「……この夏はお洗濯をするのも早くにしていってねえ。だってみんな汗をかくからたくさん干さないとならないしすぐに暑くなるじゃない? だからだと思っただけで響くんが朝早くからお出かけするのをよくペランダから見かけたのよ。けど静かな時間帯に大声出すのものはしたくないしって声はかけなかったんだけど」

そうか、上から見られていたのか……朝早くたってそもそも日の出の早い夏だ、みんなだつて早く行動しているよな。

思いつけなかった。

いや、上方への警戒が足りなかった。

視線の低さがはつきり出ていた。

「今年は……見るたびに毎回暑そうな格好よね? 運動とか外でする趣味とか新しくはじめたりしたのかしら? 私たちみたいに体重が気になるから汗を余分にかこうとして……っていうわけじゃないわよね?」

「……まあ、そんな感じ、です」  
観察されていた。

たぶん飛川さんだけじゃなくって、もつとたくさんのご近所さんに、通勤通学の人たち。

「まあ！ よかつたわっ！」

ほんと両手を合わせる奥さん。

「響くんって、いつも……もう何年も朝晩のジヨギングとかサイクリングとかかしていたし、よくお出かけとかもしていたじゃない？ それなのにこの春からいきなり姿が見えなくなってる」

指をくるくるとしている奥さん。

「いつものようにご旅行とか思索の旅みたいなものとかに行っているのかとも思ったけど、お家にはいるようだし……だって電気とかゴミとかいつも通りなんですもの。」

昔っから判を押したみたいに時間に正確なんだから。だからいつも響くんを見かける人たちのみんなで『病気とかかしているんじゃないか』って心配していたのよ？ ひとり暮らしだしスーパーでも見かけなくなつたから、きちんと食べているのかって。でも通販は前よりたくさん来るようになって……あ、そうそう、宅配のこの箱便利そうよねえ。場所取るしなによりそこまで私の家では通販で食材とか買わないけど。



……でも元気そうでなによりだわっ」

知りたい情報をまとめて聞けるのはありがたい。

……それにしてもそこまで大ごとになっていたとは、そしてそこまで話が広がっていったなんてびつくりだ。

田舎じゃないんだし、みんなそこまで他人に興味はないんだってずっと思っていたんだけどなあ。

奥さんを見上げる。

いつものようなぼやんとした顔が、やっぱり女性らしい体つきのせいでお胸のすぐ上に乗っかっている。

この人、僕より頭いつこ以上背が低かったのになあ。

もうそろそろ娘さんに追い抜かされているんだらうか？

でもそこまで話が伝わっているんだ、もしかしたら今の僕のこと誰かに見られていて知られていたかも……いやいや、現に飛川さんはほんとうに今の僕を見て「以前の僕」だって認識しているんだ。

……それなら、だ。

「……………」

……ものすごく恥ずかしいし間違ってたなら人生の汚点になるけど今はそんなこと

言つてる場合じゃない。

実験のため、さっきのおねだりポーズングをふたたび。

こびっこびな、だけどガワのおかけであざとさがかけらも感じられない、幼女チックなスマイルで、声も「女の子A」とかになれそうなくらいのに調節して。

「すみません飛川さん。実は僕、見ての通りにこの春から……、その。イメチェン、してみたんです。こんな風にガラツと変えて。……似合っていますか？」

いちいち語尾を上げてみる。

喉が痛い。

ほつぺたの筋肉がひくひくする。

それにこれ、知り合いにするってやっぱりものすつごく恥ずかしい。

顔が熱くなつてるのが分かるけどなりふり構つてる場合じゃないんだ。

前の僕は、いや今でもなんだけど愛想というものをする必要性は感じてるけど、めんどくささと比べちゃってやっぱ適当でいいやつてなつてだるつとした話し方と表情しかなかったはずだ。

少なくとも中学生とかあたりからは。

だから今のシニア層ならイチコロ（証明済）な演技なんて見たことがないはずだ。

奥さんは、僕をちっちゃいころから知っている飛川家の奥さんは——どう反応するん



そしてさつきまで僕の髪の毛を、顔をしげしげと観察していた彼女の大きな瞳はさらに大きく見開いていて揺れていて——「僕」ではない「僕」を見ているかのようにどこか遠くを見ていて。

光を写さなくなった瞳は、がらんどうになっていた。

## 25話

## 発覚と発覚

3/4

人の目。

視線っていうものは怖いもの。

人に限らず動物でも「目を合わせる」ってのはよっぽどの仲じゃなければガンつけてるってことになるって言う。

だから僕みたいに人との距離感が遠いタイプの人間は普通の人の普通の距離から見られると怖く感じるんだ。

それは昔つから……きつと幼いころからでも普通の小学生をやっていたときも、こじらせつつあったときから引きこもっていたときがピークだったとしても、今でも実はそう変わってはいない。

ただ、慣れてきただけ。

ほんのちよつと大人になって、嫌なことにもちよつとだけ耐えられるようになっただけなんだ。

目があつて頭の中をのぞき込まれている感覚に対する耐性と、実は目が合ってる瞬間って普通の人は特になにも考えていないんだっていうのを経験と知識で知ったから

だ。

ほとんどの人は目を見ただけで人の頭の中までわかったりしやしないって、ようやくわかってきただけ。

サトリサトラレなんてのはよっぽどの仲とか魔法さんの影響下で無ければ起きようがないんだ。

つまりはただちよつと繊細すぎただけで臆病すぎただけで、考えすぎただけ。

僕みたいな人って案外に多いんだって知ってから気が楽になったのもある気がする。じゃなきや今だって誰かと話すだけで疲れたりはしないだろうし。

最近のでいくらかは良くなってきてはいるけど、でも生まれつきの性格っていうのは多分治らない。

というよりは、これが僕みたいな性格の人にとっての「普通」なんだって思っている。「……………」

そんないろいろが頭に浮かぶ程度に僕の脳みそはパニックになっていたらしい。当然だ、だって。

——ぶつぶつと息のような声のような、そういうものをかすかに動かしている唇と恐らく舌とで唱えながら……ただただなにも見ていないみたいなのに、しつかりと見てしまおうとさつきまではあんなに輝いていた目を濁らせて僕を見透かすようで僕が見透か

してしまいそうな、そんな目が光を反射しないで向いているんだから。

表情がない。

焦点も合っていない。

そもそもとして僕を見ていない。

僕と話しているということ……意識していない。

これはまるで、俗に言う「取り憑かれてる」ってやつみたいで――。

「……………あらあらあらだつて響くんは男の子でちっちゃいころはあんなにかわいくても立派に大きくなつてお隣でよく家に来てもらつて勉強をそういえばうちが越してくる前からだつたからよくお世話になつていてもやつぱり人気なのよねイケメンで美少女でお年寄りの方たちからは受けがよくつてまるでお人形さんみたいで娘も小さいときにはよく大きくなつたらあらでも女の子同士になつちやうのねいえでも……………つ、けほっけほっ」

最後の方になるとあまりにも苦しそうに息を最後まで吐き出すようにしてぶつぶつとだんだんと大きな声になつてきて、聞いているだけでつらいようなつぶやきから会話になつてきて。

呼吸を整えてからもう一度……やつぱり変わらない瞳で僕を見下ろしてくる。

「でもたしかけっこう前に成人のお祝いで写真をあらあのときはどうしてお父さんとお

母さんがあらごめんさいあのとときからいなくなってしまうたのよねだからそうして親戚のかたとうち家族と一緒に祝いしてあげてなんだか肩身が狭そうだったけれどでも記念だからきつちり撮っておかないとってほんと響くんって繊細なんだからでもそれがまた」

人って意外と息継ぎつてのをしてる。

そういうのは普段は全然意識しないんだけど、ふとした瞬間にそれに意識が向いた途端に……10秒に1回以上の頻度でされるそれがやけに大きく耳に届くもの。

それが、今のこの人からは一切ない。

「あの」

心配になってきたから恐ろしい速さで回っている口を止めようと試みる。

目をのぞき込むとなんだか僕までおかしくなっちゃいそう。

そんな気がするから、視線はそらして。

けど、止まらない。

「そういうええあと少して中学生あらもうとつくになつたんだつたわねなら高校生いえ大學生よねだつて成人式だしあらあらでもそれはうちの子がまだ小学生だったころのことだからだつてあの子つたら昔はお兄ちゃんお兄ちゃんって懐いていたのになんだか恥ずかしがっていたんだものこれが年ごろつてやつなのねつてお父さんが落ち込んで



いたのをよく覚えてあらそういえばもう卒業したんでしたっけそれなら卒業式はどうしたんだったかしら」

いつものようにほったたきに片手を当てて考えている……いつものクセ。

だけど今はずーっとひとり話して続けていて、たぶん自制が効かなくなっていて、だからぜえぜえと言いながら呼吸を整える間もなく続けている。

ぼたぼた垂れている汗は、きつと暑さのせいだけじゃなくって。

「お母さんの代わりにきつとどなたかがああたしか親戚のお名前を忘れてしまったわねでもきつと響くんにあとで聞けばあら女の子なんだから響くんはおかしいわよねそういえばなら響ちゃんかしらいえでもやっぱり響くんよねみんなもそう呼んでいるんだしだつて響くんだものね響くん響ちゃんんどつちだつたっけねえびきくんかなそれともびきちゃんかな？」

と、半分上を向いている格好だった飛川さんはいきなりこっちの方を向いてきて僕と視線が合いそうになってきて、危ないところでそらすのに成功した。

「いえでも当然いまはおひとりでもいいでもお父さんとお母さんは響くんにべつたりであらでもやっぱり今はいないしあららいるはずよねだつてひとりでなんてとても暮らしていけないものだった響くんはまだ中学生なんだもの親御さんなしではでもそれならどうして響ちゃんは今までおうちでもう何年も」



延々と続く彼女の苦しそうなはずなのに平気そうな声に、思わず大きめの声が出た。

「飛川さん、すみません。聞いてください」

声をかけるとぴたっと話すのを止めて僕に意識を向けているのがわかる。

当然視線は合わせないから予想でしかないけど。

でも止めないとなんだか危なさそうだし。

あと声がとつてもつらそうで。

「……………ふう……………」

ようやくにまともな息継ぎができてるけど……………多分また話し始めちゃうとおんなじだ。

話している内容は支離滅裂……………いや、今と昔の記憶がごっちゃになっている？

だって僕の呼び方とか母さんたちのこととかわけわからないことになってきているしな。

でも大きめの声で話しかけた僕の呼びかけには反応する、と。

注意を向けている様子ではある。

だったら。

「飛川さん。……………僕、このとおり遠出をしてきたところで」

「……………」

くるっと回ってみる。

あいかわらず目を合わせてはいないけどどうやら僕のことを見てはいるらしい。

だってわざと傾けた髪の毛とかに注目しているし、手に取ってみれば手のひらを見ているみたいだし。

女の人ってアクセサリー、アクセだっけ……それ1個にも敏感に反応する生き物だからかな。

完全におかしくなったわけじゃないみたい……なら。

「今日はもう、とつても疲れているんです。また……今度でも良いでしょうか。ほ

ら、買ってきた食材、冷蔵庫。 入れないと大変ですし」

「……………」

僕の髪の毛のふわっとした先を眺める形で口も目も空いたままで静止することしばし。

……緊張感がすごい。

なんというか全身に力が入りっぱなしって感じだ。

僕も、目の前でおかしなことになっている奥さんも。

と、体の力が抜けたようになったと思つたら急にしゃきつとして、いつのまにか悪く

なっていたらしい顔色も一気に明るくなってきて……顔に笑顔が戻ってくる。

最後に焦点が僕と、僕の目とぴったりと合つてやつと普段通りになる彼女。

そんな彼女のひたいにはびっしりとした汗。

それを今になって気がついたように拭っている。

たぶん目とかにも入っていたはずだし本当に気がついていなかったんだろう。

ごしごしと……くしくしつて感じの仕草もやつぱりお姉さんつてしか見えないな。

経産婦なお姉さん……おつとお隣さんな奥さんが目をこすりつつ苦笑している。

「あらいやだ。響くん、ごめんなさい？ こんなに話し込んだりやつてみたいで」

「……………いえ、お気になさらず」

きよろきよろと門の外のほうを見回す、いつもどおりに戻ったように見えるお隣さん。  
ん。

セミの声が少なくなつて夜の、秋の虫の声が混じつて……夕日が沈んだあとの黄昏になつていて。

もう影法師も薄くなつてきているのに僕も気がついた。

……そんなに時間、経っていたのか。

なのにこの人が……最後のほうはそこそこに大きな声でひたすらに話していて、途中で盛大に苦しい感じのセキとかもしていたつていうのに、通りがかつていたはずの誰ひ

とり声すらかけてこないなんて。

「私つたらおしゃべりに夢中になつて気がつかなくつて。響くんは長話嫌いなのに、それにそんなに重そうな荷物ですものね、疲れているのに引き留めちやつてごめんなさい」

「い、いえ」

……普通の、慣れているこの人の話し方に戻っている。

「でも私、響くんの元気な顔、久しぶりに見ることができてほんとうに安心したわ！ 響くんが元気だつて、心配されているご近所の方たちとか娘や夫にも伝えておくわね？」

「え、ええ……ありがとうございます」

とつさにあいまいな返事を口にしてから「なに伝えるんだろ」つて思った。

「そういえばお夕飯とかもらい物の余りとか最近なんだかやけに多かつたのつて『響くんにお裾分けするの忘れていたから』だったのねえ……なんでかしら？ もう何年もそうしてきたのにね？」

「……いえ僕は、もうそういうのは」

「いいのいいのー！」

いや、僕はおすすそ分けに乗じて話し込まれたり家にながられたりお隣さん家に連行されるのが嫌だからなんですけど。

「娘は部活、夫は会社の人との急な夕食とかでせっかくなかった食事、よく余るんだから。最近お野菜あまり食べていないんでしょう？　なら栄養も心配よねえ」

「いえ、僕は要らな」

「とにかく『響くんがかわいくなっている』の、ぼつちり伝えておくわね？　それじゃまたねっ」

「え、あの」

普段通りのせわしなさでさっさかと行っちゃった。

やっぱり女の人って人の話、聞かないよな。

かがりで慣れていた気がしたけど……これがご近所さんとの井戸端会議とかママ友とのランチとかPTAとかで鍛えられた真の姿。

ぶるっと身震いしてぐっしりと汗をかいていたのを思い出した僕。

ずっと立っていたのと緊張の走る場面をぐり抜けたのと今日の疲れのみんなが……どつと押し寄せてくる。

「……………」

いつものように腕を上げてドアノブをひねってやつとこのことでドアを開けて、買ったものやらリュックやらをずりずりと家の中へ引き込む。

もう体力も気力も残っていないからこうするだけで精いっぱいだ。

ぱたんと閉めてがちやりと……念のためにチェーンまでかけて。

「……………はぁ……………」

……腕、背伸びしてギリギリだな……さすが低身長。

なんて思ってる場合じゃ……ないんだよなあ……。

完全に安全で万全なことを確認してから僕は、ぺたんと崩れ落ちた。

「……………」

脚を見る。

がくがく震えている。

よく見れば手の指先までが真っ赤になって震えている。

——あれが、怖いっていう感情なんだ。

僕、そういうものとは無縁だったからこんな知らなかった。

知識としては……腰抜かすとか情けないって思ってたけど、いざ僕自身のことになると体には逆らえないって理解する。

僕は身の危険って言うのを感じたことがない。

海外にふらつと行ってたときもそうだったんだ。

特に目立たない男の身だったってのと単純に運が良かったからなんだろう。

……でも今は。

ちよつとしてからタイルの冷たさがおまたや内もにも伝わってきて冷たいのを感じて「ああそういうばもう女の子座りのほうが楽になっているんだな」なんて思ったりもした。

「ズボン越しでも石の冷たさつてちやんと伝わるんだな」「これがスカートだったらくつついただけでひやつとするんだらうな、だつて直接肌にだもんな」なんてどうでもいいけど男のときじゃ浮かばなかつたことばかりが。

「……………」

このままここでうつ伏せでぺたつと寝たいくらいなんだけど……まぢがいなく風邪引くしぜつたい後悔する。

まずもつて冷たいし硬いしほこりっぽいし砂っぽいしな。

あとは、たつた今まで感じていた恐怖がまだ抜けないのか……わずかな明るさしかない廊下から「何か」が来そう、そんな錯覚が来るくらいにはまだ僕は怖がつているらしい。

だから内ももの力で踏ん張つてどうにかぼーつと体を起こしているのを維持する。

10分もすればきつと、今のびつくりにもほどがある衝撃も少しは過ぎてくれるだろうって思いつつ。

……それにしても。



今のもきつと、魔法さん……の仕業なんだろうなあ。

髪の毛だとかハサミだとかそんな僕だけに起きるようなことじゃなくなつてとうとう……とうとう周りの人へも……僕の思い込みとかそういうのじゃなくなつて目に見える形で、現実に影響を及ぼすものになつちやつてるんだ。

一体いつからなんだろうなあ。

……多分気がつかなくつただけで、たまたま運良くこうならなかつただけで。きつと、あの朝からずつとなんだろうなあ。

だつて見知らぬ女の子になつちやつてるんだもんね。

「うあ——……」

こういうときくらいは肉体年齢と性別相応の声くらい出して……良いよね。

## 25話

## 発覚と発覚

## 4 / 4

「ふい——……」

腕力して思わずで出た僕の声とぴちゃんど天井から水面にしたたり落ちる音が反響する。

「……………」

ぼーっと上を向いていると視界に入ってきたのは浴室の物干し竿。

……ほとんど使ったことない洗濯物は雨の日だつて居間に干すし、いつつもこうして水滴がぼたぼたと地味にうるさいしたまに水滴がひやつと冷たいし……外した方が良いのかなあ。

まあ今の体じゃ届かないけど。

湯船のふたの上……たぶん乗つても平気だろうけど、たぶんそれでも届かないし。

そもそもとして外して動かせるだけの腕力がないだろうから無理かなあ。

本当に幼女の身の上は厳しい。

そう思いながら見上げているとうなじからお湯が髪の毛に染みこんでいつて首すじがじわつと温かくなる。

この感覚が好き。

男のときじや絶対に……じゃないか、ロン毛にすればできるだろうけどしないだろうし……な感覚。

「……………」

そんなどうでもいいことばかりがぐるぐるしてて、とつくに汗がにじんでくるくらいには温まってきていた。

頭を元に戻すと目に入るお湯越しの僕の体は、心なしか小さい。

光の屈折とサイズの問題だ。

……きつと、僕って言う幼女の心細さのせいもあるんだろう。

出るところなんてなくなってお股がすつきりし過ぎていて細くつてくびれなんてなくなつてあばらが出てて揉めない胸な体。

「……………ふう」

見るともなく、何十回も視線が吸い寄せられてきた欠けているタイルに今日もまた焦点が合う。

——魔法さんのせいでハサミが、金属の尖ったものが石を砕いたあのときの名残。

雑にべたべたとマスキングテープをとりあえずで貼って「あとでなんとかしよ」って思っていたら結局そのまんまなやつ。

こういうの、よくあるよね。

だからはじめが肝心なんだ。

……それくらい何も起きなくて平和だったのに、な。

ぴちゃん。

ぞわぞわ。

ここにきて……この体になってそう時間が経っていないときにハサミが飛んで、魔法さんの……魔法の存在を認識して、それからずっとなんにもなかったのに。

でも、だからこそ気が抜けていたんだろう。

お隣さんに見られて豹変してっていう、今の僕のことを知られた衝撃をもともしない強烈なボディブローを浴びることになった。

あんなことの前には「前の僕のこと雑にイケメンって褒めてくれてたなー」とか「今の僕のことかわいって言われて凹んだなー」ってこととかはどうでもいいことになった。

もはやどうでもいいくらいのインパクトだった。

今でもあの剣幕を思い出すだけで怖いんだ。

おふろに入っているのを忘れるくらいにひやつとする。

……僕のこと、これまで通りの僕だって認識していた。

それなら社会的な死は免れそうだし、その点じゃ良かったのかもしれない。

そう考えるとひよつとして僕、魔法さんに助けられた？

「……いやいや」

そもそもだ、そもそもとして魔法さんが僕をこんな姿にしなければ……ま、まあ見た目は良いし、視力も良いからごろんとしての読書がとつても楽なんだけど……でも幼女になりさえしなければこれまでの苦労なんて一切なくつて、いつもどおりの生活が出来ていたはずなんだ。

最初に考えてた、この家に住んでいる幼女な身バレつていう社会的な死よりもある意味ではマシではあるんだけど、ある意味ではもーつとひどい事態になっているつてこと  
で。

だつて僕だけならともかく、他人にまで迷惑をかけつつあるんだから。

……飛川さん、喉大丈夫かなあ。

次会ったら聞いておかないとな。

だつて、あんなに苦しそうになつてたんだから。

もうお隣さんから隠れる必要、なくなつたんだし。

ぴちよん。

しずくでちよつとの間だけ僕の姿があいまいになって、波が収まつてきたら……残念

ながらちっこいままの僕の姿がはつきりと写ってしまう。

「……………」

顔も体も、両方とも見知らぬ幼女。

僕に残されているのは、僕だったっていう心……あるいは魂、あるいは意識だけ。

自意識以外は、世界のほとんど100%は僕のことを欧風幼女としか見てくれない。

……今まで偶然発動しなかっただけで、元々この体、この姿。

この長いままで固定されている銀色の髪の毛とこのちっこい体からして魔法っていう地雷、抱え込んでるもんなあ。

特定の事象を起こさなければ爆発しないから安全ロックが掛かりはするけど……爆発物か何かだとしか思えない。

もう何ヶ月も……半年くらいか、それだけなかったもんだからすっかり油断していたのもしょうがないとは思う。

僕は僕。

過大評価をするつもりはないからしようがないものはしようがないって結論づける。

うっかりって、気をつけていてもそのうちに起きるもんだしな。

だからうっかりなんだ。

どんなことをしたってゼロにはなれない。

なれるんだったら世の中からはヒューマンエラーなんてなくなるはずだしな。

……幸いにもというか残念にも大事に至らなかつたわけだし、これ以上くよくよしてもしょうがない。

理屈で分かっていたのが長風呂でだんだんと体と頭に染みてきた。

こういうときはぼうつとするのが良いんだ。

最近さらさらめんどくさくなって、とうとうそのまま湯船の縁に横に伸ばすようにして伸ばしている髪の毛をたぐり寄せながら踏み台をぎゅむつと踏みしめてじゃぶつと上がる。

ぼうつとしてるし、20分くらいかけて髪の毛の水分をタオルに吸わせてのドライヤーっていう作業をしながら考えよう。



「ふう」

ほかほかだ。

おふろとお酒のおかげで少しは気力が戻ってきた。

やっぱりお酒は命の水だな。

「きりかえ、かんりようっ」

ちよつとぼーつとしてるときは舌つ足らずになっちゃう。

かがりに聞かれたら大変だろうな。

ぐつと力を込めた手はきようもちっちゃい。

ひとまずはこの魔法さんが起こしている事態を整理し直した。

さつきまでばらばらと確認し直していた日記帳を、今日の日付でぎゅつと開いてクセをつける。

腕を垂直にして全体重をかけないと紙の硬さに負ける腕力。

そう言えば小学生のときと違って教科書が硬くて重いつて思ってたなーって思い出す。

ペンが心持ち大きくなった感覚にもすっかり慣れたし、学生しなくなつて全く書かないもんだから下手になつていた字も少しはマシになつている。

そうしてちまちま書いていく。

またいつ何が起きるか分からないから。

「……やっ」

まずはひとつめ。

この体について。



会ったこともない少女または幼女……いややっぱり少女の体になったことが発端だけど、これについては夏休みとかにアルバムとか古い写真とか手紙とかを総当たりしてみたけど、親戚の誰にも、そこに写っていた知り合いの誰にも似ていないことが確認できている。

ネットで行方不明事件の記事とかもちらちらと覗いたりはしてみたいけど今の僕の幼女な顔はどこにもなかった。

……この体の幼女との入れ替わりだったっていう可能性は今のところは除外しておく。

考えはするけど無駄だしな……世界中のローカルニュースまで回る体力ないもん。

どうしてよりもよってこの姿とこの顔とこの髪の毛になったのかは今でも不明なまま。

不明だけど、ほぼ100%僕に縁のある人じゃないってわかったという収穫もある。

……春までの僕の体とこの子が入れ替わってるとかいう可能性は、僕ひとりじゃ調べることができない以上考えてもしょうがない。

やっぱり魔法さんに魔法をかけられたって考えておく方が今は良いはずだ。

どうしようもないことについてうじうじ考えても無駄だもんね。

ふたつめ。

見た目を変えられないことについて。

これは髪の毛を切ったときだけに起きるっはつきりしてる。

10回以上いろいろ試したからな、これだけは確実だ。

髪の毛を切って良いのは、前と横は3センチ、後ろは5センチまで。

たしか人って1ヶ月で1センチ髪の毛の毛伸びるっ言うし、普通の散髪の範囲なら魔法さんも良いよって言ってるんだろ。

夏休み、かがりのお守りもとい勉強会でお邪魔してたときに襲われてリボンとかゴムとかで髪の毛を結わえられたり編まれたりしたし、カチューシャとかその他もろもろをつけられたこともあった。

あの子って本当にかわいいに夢中だよなあ……。

とにかくそういうので見た目を変えられたりしてもなんにもなかったから、その程度じゃ魔法さんの逆鱗に触れたりはしない様子。

……なんで猫耳・ウサギ耳・犬耳カチューシャとか揃えていたのかっていうのは今でも謎。

そういう趣味……コスプレ趣味があるんだろうか。

そういうのは自分で楽しんで欲しいっ言うのはわがままなのかな。

おかげで僕の男としての自尊心が踏み潰された気がする。

「あ」

思い出した。

そのときに撮られた十数枚の写真。

僕がコスプレをさせられている現場。

消させようと思つてできないままだ。

……諦めよう……くるんさんには何を言つても無駄なんだから。

「はあ……」

と、とにかくハサミのあとは今日まで一回も物がすつ飛んだりしたことはないから、髪の毛を切つて見た目を変えようとするときだけに、明らかに不自然で強くて強引な魔法の力つていうものを目で見て確認することができる。

みつつめ。

さっきのだ。

目が真つ暗で真つ黒で、何も見ていないようでも見通すようになってまくしたてられた。

あれは……あの魔法は、あの魔法さんが起こした何かは、僕を見た人の認識を操っている……そういうものだって推測できる。

だつてお隣さん、飛川さんは言っていた。

この姿の僕を外から見かけたときから僕なんだって……思い込んでいるって。そんなの、このちっこい女の子を見て僕だって思うはずがないのに。

寡黙な美容師さんに適当にお任せしてもう何年なただの男のどこにでもいる短髪の男が、この長い髪の毛になっても僕って分かっていた。

……この銀色のまつげと薄い色の瞳な顔を見ても「僕」を「僕」だって、理解していた。

お隣さんは前の僕と明らかに違う今の僕を疑いもせず同一人物だって認識して……そのまま前の僕と話すように今の僕と話していたんだ。

あれが魔法さんのせいであって以外に何があるんだ。

あの人がボケたって言うのか。  
ない。

……あるとすれば、前の僕が今の僕をいたずらするために誘拐しているとか思われて、事情を探るためにとりあえずで話を合わせていたっていうのも……考えられなくはない。

ちよつと考えすぎかもしれないけど少女誘拐とかはニュースでさんざん取り上げられている。

飛川さんが幼女な僕を見て、娘を持つ母親として、一般的で常識的な大人としてまず

そう考えるのはおかしくはない。

まあほんとうにいい人だし、まったく疑いもしていなくってただ幼い女の子が僕の家に来ていて思っただけのも……ゼロじゃないけど、だったらこそ今の僕を見て前の僕だっけと思うはずがない。

「……たしか」

僕が、前の僕のこと……大人の男の僕のこと……いや、そこまで言っついていなかった。たつたの一言、今の僕とは違う、髪の毛を出した状態で普通の人にとつての僕とは明らかに違う要素な——「男」だっけというワンフレーズを口にしただけで……魔法さんがお隣さんに、牙を剥いた。

たつたのひとことで。

まるで呪文のように……それこそまさしくの魔法だな。

あのときの彼女はまるで操られているって言うか夢遊病みたいになつてたつて言うか半分寝ている感じっていうかお酒で頭がマヒしているっていうか、そののひどい状態になつていて……目は明らかにおかしくって表情もなくなつて立っているのがやつとつて感じになつていて……思考は乱されて混乱していた。

まるで真逆のことを一気に左右から同時に言われたような……思考自体は正常なまま情報を処理できない感じ？

そういう矛盾した考えがとめどなく頭の中で広がって口から吐き出されていたよう  
なわけ分かんない感じになってた気がする。

しかもあそこまで大変なことになっていたのに通行人の誰ひとりとして奥さんの様  
子に気がつかなかった。

最後の方はきつと道にまで声届いていたはずなのに。

話を切り上げようとして話題を変えたとたんに、急に……何ごともなかったかのよ  
うに元どおり。

あの「ふと話しすぎたのに気がついた」って感じを見るに、意識がおかしくなってい  
たことについて自身でおかしいのに気がついていていう自覚はなさそうだった。

……さっきの魔法さんの仕業。

他の人に気がつかせないようにするっていう働きもある……っていうこと？

「……………」

とつくに何日分のスペースに書き殴るようにして書いている今の情報はきつと、支離  
滅裂なんだろう。

でも。

「……飛川さんみたいに、忘れちゃうかもだし」

魔法さんは同時にいくつもの魔法を扱うらしい。

ひとつは今の僕と前の僕をおなじ存在だつて認識させる力。

もうひとつは前の僕を思い出そうとするときに前の僕の、のつぺりしていた僕の姿を思い出させないようにする力。

あとはおかしな状況だつて……たぶん僕以外に気がつかせないつて言う力。

さつきの魔法が働いているのはハサミさんほどじゃなくてもすぐにわかりそう。

だつて表情も目も明らかに変わるし話すのも止まらなくなるしな。

だけどこれは……もしかすると。

「……………」

……ある考えが浮かんだけど、今は浮かんだままにしておこう。

今日はもう疲れたんだ。

肉体的にも山登りで、精神的も散々の幼女扱いの後に成人男性扱いで。

今日1日で家からの距離も高低差も気分も乱高下しすぎたんだ。

ぱたんと日記帳を閉じて小指のところが痛くなっていた手をもみもみしつつ空になつてたお酒をもう1杯を注ぎに行く。

とんとん、と階段を降りる。

僕の脚にしては高すぎる段差……けど、もう慣れきつた落差を。

ぺたぺたぺたと裸足と木の床のくつついては外れる音。

踏み台にぼすつと乗ってぼんとコルクを外してとくとくとと真つ赤な液体を注いでいく。

心持ち多めにぎりぎりまで注いでこくと一口。  
のどの奥にまで染みわたるおいしいアルコール。

「ふあ……」

この瞬間だけは至福だ。

シャツ1枚の女の子がお酒で恍惚としてるって言うとんでもなく危ない絵面だけど。  
チエイサーも汲んで今度は両手にコップを持ちつつ、ちよつとだけ軽くなった体を引きずりつつ口に苦いのが広がるのを感じながら部屋へとまた昇っていく。

……明日、外に出て確かめよう。

最初はこわごわ、だんだん慣れてきて忘れかけていたところにこれだもん。

この魔法つてのはたぶん、きっかけがないと気づくことすらできないもの。

だったら今、もしかしたらつていうのも確かめておかないと危ないんだ。

これがもし……もし、あの子たちと一緒に気がつかないで起きちゃったら……

僕はどうしたらいいのか、もうわからないもん。

「(イ)へ(イ)へ(イ)へ……」

……お酒。



今夜はちよつぴり苦い気がする。

## 26話 検証 1 / 3

「夢じゃない……」

どれだけイヤだったとしたつても朝は来る。

たとえ眠れなかったとしてもやっぱ朝は来るんだ。

まあちゃんと寝たけど。

睡眠は大切だもんな。

ムダにアルコール耐性があるからどれだけ飲んだっていつもどおりの時間に目が覚める僕。

こういうときに規則正しい生活にいらつとする。

お酒呑んで頭ぱーになって気がついたら寝ていて……起きる。

完全じゃないけど再起動的なりセットだ。

「……よしっ」

一晚寝て覚悟は決まった。

いつもどおりに朝を過ごして、けどなにも手に着かないから夏からの日課になっていた勉強もなにもしないでただただ時間を待つばかりの朝を過ごして。

……そして今。

僕は、いつもどおりじゃない格好で。

なんとなくなかがりに連絡して今日のラッキーカラーというやつをコーディネートしてもらって。

よさげな服装を思いつかなかったから男のプライドとかちっぽけななにもかもを投げ捨てて、おすすめだつていう服をそのまま着て。

データに残るのを承知の上で鏡の前で自撮りをして送ったところ、それはもう大絶賛だった格好になっていて。

夏休みに買わされた、あのふりっふりの真夏仕様の白いワンピースを着ていて。

下着はもちろん色を合わせて目立たないようにして、けどやっぱりいくらかは恥ずかしいから下はスパッツで気持ちだけガードして、併せて買わされた真っ赤でつるんとしたサンダルを履いていて。

あえて胸にもしつかりと女の子の装備を着けることで偽乳を作り上げ、どう見ても女の子……まぢがつても女装した男の子には見えない見た目にしていて。

……こうして胸があるように見えるだけで一気に年齢が3つ4つ上がったように見える気がする。

はじめからこうしていれば少なくとも低学年扱いはされないんじゃないや……いやさすが

にブラジャーをいつも人前でいつもつけているのはさすがにその……まだ、ちよつとな。

今さらながらに知ったどうでもいいことをぶつぶつと考えつつ、その上にかぶせるように、銀色の長い髪の毛をただただふあさあつと乗せて麦わら帽子を被つて。

だから僕は、どう見ても現実世界……いや、ここにはふさわしくない、明らかに異質で遠く離れたどこかの世界にでもいそうな、そんな姿になっているんだ。



通勤時間になってきたから、ぐじぐじしないためにお酒の力を借りて家を出て近所を徘徊していたら、運良くすぐに見つかった顔見知りの奥さん……僕のことだから当然お隣さん以外の人の名前なんて覚えていないけど、たしか猫を飼っている家だ……とご挨拶。

「……おはようございます」

「あらあらおはよう、お久しぶりねえ。聞いていたとおりに雰囲気変わったのね？」

でも、とつても似合っているわよ！　まるで『お姫さま』みたいで！」

「……………、どうも」

まずはひとり。

僕が女の子の格好をしていることについてもこの低身長にも、なにも疑問に思われな  
い人がいることを確認した。

あと、やっぱりウワサっていうのはあつという間に広がっているんだなって再度確認  
しつつ。

やっぱ早いなあ飛川さん……あの後買い忘れた食材でもあったのかな。

そうしてたつたのひと晩……まだ丸1日も経たないうちにこれだ。

どこまで広がっているのか。

女の子たちのネットワークは想像以上に根が深く広く広がっているらしい。

「おやおはよう。最近見なかったけど元気かい？」

「ええ、……おじいさんもお元気そうで」

前は見下ろしていた関係のおじいさんが、今ではおんなじところに視線がある関係に  
なっている。

「うちの子もいつもこのへんで君に撫でてもらっていたから、なんだか不思議そうな顔  
をしていてねえ」

「ちよつと忙しかったもので」

「わふっわふっ」

「お手」

「わぶん」

町内一周な散歩を朝晩にしているおじいさんは特に見た目には言及しなかつたけど、それでも僕を「僕」だつて認識していることがわかつて。

おじいさんの犬……そこそこに大きい人なつつこい子……も、姿はもとより匂いすら変わっているはずの僕を認めて近づいてきていつものように撫でられるままで。

まあこの子の場合には誰にだつてこうするから犬にまで魔法が効いているのかはわからずじまいで。

けど幸いにしてこの人にはウワサ……たぶんまだつてだけだけと伝わっていなくて。

でも僕がこんな格好をしていても気にしないで、いや、気がつかないで、数ヶ月前とおんなじように接してきて。

そうして1回でも話したことのある人ならお構いなしに何人か、駅まで歩きながら捕まえて尋ねて。

よく知っている人なら僕の印象を尋ねて、そうでなければあいさつだけをして。けど誰でもやつぱり僕を僕だと理解していて、それなのに変な顔すらしなくつて。

僕が前の僕だつて見えているとしたら、きつとぴちぴちどころかいろいろとまずい状態になっているはずのふりつふりのワンピース姿でおえつとなるはずなのに。

僕が今の僕だつて見えているとしたら、見知らぬ洋物幼女が親しげに話しかけてき

たつてなるはずなのに。

そうして歩いてきて疲れてベンチで足の裏と腰を休めがてら会社や学校へ急ぐ人たちを眺めている。

僕とは違つて行く場所もすることもしつかりと決まっている人たちを。

万年ニートな僕とは違つて。

「……………」

いつものクセで下に着かない……いや、このベンチはいいベンチだから着くんだけども、でも深めに座るともちろん着かない足の先を真っ赤なサンダルごとぶらぶらしていると、ただでさえ目立つ格好の上に帽子を取つて日の光を浴びて光っているだろう銀髪がきらきらしている僕は、それはそれは注目を集めている様子。

体感的に7、8割……というよりはスマホとかで下を向いたりいつもの僕みたいにもぼーっとしながら歩いているらしき人以外からは、珍しい色彩でまず1回、それでもつて髪の毛と顔と服と振っている脚とで2回目、そして人によってはじーつと3回目と、それはそれはじつくりと見られる。

……やっぱ目立つよね。

黒髪の中の銀色と、夏休みも終わっているのにおしゃれをしているこの格好。

今までパーカーさんと帽子さんのセットのおかげでどれだけ人目を避けられていた

のかがよくわかる。

それでも誰も、僕を……特段おかしなことをしているようには考えないみたいで、珍しいものを見たって顔はするものの立ち止まったり話しかけてきたりなんかせず、そのまま駅へと吸い込まれていく。

そんな十数分を、人の流れが薄くなってくるまでただぶらぶらと脚を振って過ごした。

「……やっぱり」

彼らは僕を見た目通りの女の子だと認識している。

それが結論だ。

けど僕を知っている人だったとして……元は男だった僕とも同時に認識しつつ、けどそれをおかしいと思っていない。

僕が深く突っ込まなければ今の僕の見た目にも格好にも違和感を持つたりはせず「ちよつと雰囲気変わった？」程度止まりで、前の僕と今の僕とを半ば同一視しているみたいで。

女装とか以前に、たとえば髪の毛を少し伸ばしたとか丸刈りにしたとかひげをちよつと蓄えているとかコンタクトにしたとか……その程度の認識のようで。

僕がわざわざ前の僕について言及しなければ、少なくとも今朝話をした数人の知り合



い未満の顔見知りの人たちは、魔法さんでおかしなことにさせられたりはしなくって。

……………まあ、顔とかがかわいいとか小さいとか、そういう成人男性に対してはどう考えてもケンカ売っているとしたか思えない褒め言葉が浴びせられるけども。

今までにどこかで聞いたような感想は必ずといっていいほど添えられていたんだけど。

耐性ができていなかっただら危ないところだったけれど、今の僕はかがりやゆりかに鍛えられている。

問題はまっただくなかった。

……………慣れてしまっているのが悲しいっていう感情は、もはや失せている。

さらに僕があえて「僕、かわいいですか？」って聞いたり、逆に「僕、かっこいいですか？」って聞いたりしても大体似たような答えが返ってきたあたり、どうやら男と女の区別もずいぶんとまたあいまいになっているみたい。

こんなふりっふりなのはどうして格好いいってことになるんだ……………。

あちこちからぴらぴらしてうっとうしいからみんな縛っちゃったりボンチツクな装飾が逆にアクセントになっちゃっている、今のロリータな格好なのね。

都会の繁華街でも無し、ここまでのロリータもなかなかお目にかかれないだろう。

……………かがりに買わされるとき、夏だからって黒を選ばれなくってよかった。

これで黒だったら銀髪の黒の赤っていう完璧なゴスロリが完成しちゃうところだった。

なにより暑かっただろうしな。

ともかく町中の人だって僕には注目……カラーリングと格好のせいだろうけど……するけど、だからってどうこう思うわけでもなく「ただ幼い女の子が近くにいる」って程度の認識のようだった。

山に登ったときみたいにいるいろいろと聞かれたりもせず、ただただあたりまえに、ただここに女の子がひとりいるだけだった。

それだけだった。

あのときのように困ることもなくって、ただただ見られる。

ただ、それだけ。

僕がこんな格好をして、こんな時間にこんなところでたつたひとりぼっちでぼけーっとしていても、変だとすら思ってもらえない。



「次の方どうぞー」

お昼が近くなってきたスーパーは、ちよつとした戦場だ。

カートで爆走するお子さまたちがいないぶんマシだけど、その代わりにお年寄りの比率が上がって奥さんおばさんたちも多くって、けど夕方みたいに時間に追われていないからぴりぴりとはしていない。

そんな駅前スーパーに寄ってぶらつとそのまま中ほまで行って1本の缶を、350mlの重さですらやられちゃいそうなほどに細い手首のせいで両手で持つてそのままレジへ行つて、気持ちを落ち着けるために、わざとこれでもかつて買い込んでいるおばさんの後ろで待つて。

1円単位までがんばつて買い物をしていたおばあさんが嬉しそうにしているのを横目に、僕の顎くらの高さのカウンターに缶ビールを置いて。

「お願いします」

「……………えーつと」

うんまあ、困るよね、これは。

でもあえて当たり前だつて顔をしながら顔を上げて。

「お願いします」

「…………ごめんね——、お父さんのかな？ おつかいだよね？ わかってるんだけど、そのね？ こういうの、お酒つて子どもには売っちゃいけないんだ」

じつと見上げた先のお兄さんが困った顔をしている。

たぶんこんな銀髪幼女がビールだけを買いに来たついでなので魔法さんとか関係なく混乱しているんだろう。

ごめんね、大学生くらいのアルバイトさん。

ただの実験だから。

多分ひどいことにはならないって思うからちよつとだけ付き合つてね。

「最近は厳しいから大人の人でないとお酒はねえ……料理用でも売ったらダメって言われてるしなあ。悪いけどお父さんかお母さんにご自身で買いに来るようになって。」

ああ、日本語通じてるのかな……えーつと……」

「……………」

突き返すわけにも行かなくなつてただただ僕が持つてきた缶を片手に、僕の後ろに並んでいる人の顔もちらちらと見ながら困っているお兄さん。

いや、前の僕よりいくつか年下のはずだから……青年？

まあいいや。

ごそごそと首に掛けていたちつちやな袋から「それ」を取り出す。

スカートにもポケットはたしかにあるんだけど、ズボンとは違って……ちよつとでも重いものとひらひらとするはずのスカートが片方に引きずられちゃって、見た目もな



ほんの数秒の硬直が過ぎる。

周りから音と光がなくなつたような、そんな感覚。

もちろん僕の錯覚なんだろうし、……いや、そうじゃないかもしれないけど今は周りまで見る余裕はないし……ただただじつと、待つ。

「……いいですか？」

つてかけた僕の声に反応したのか、彼は僕の免許から視線を外しながらタッチパネルを操作しつつ僕にそのカードを差し出してきた。

「……◆◆◆◆◆失礼しました。 お若く見えたもので。 はい、確認しました。

袋のほうは——」

そして僕もまた反射的に「袋、要らないです」つて言っちゃって。

——実験の結果、僕は、シールを貼られた缶ビールつていう見慣れないモノを手に入れたしまった。

白昼堂々ふりふりの白いワンピースと赤いサンダルの銀髪幼女にしか見えない姿でも、免許で男だつて伝えたら——魔法さんの効果が立証されちゃったんだ。

## 26話 検証 2/3

「買えた……」

スーパ―の中は……こんな格好だからワンピースの内側まですーっと寒かったけど、自動ドアのちよつと外に出たとたんに熱気が顔にぶわつとかかってくる。

ちよつとだけの時間差で布1枚の内側の涼しさが失われていく。

こんな格好もちよつとだけ役に立つらしい。

ズボンだったらこうは行かないもんな。

でもそんな僕が持っているのは缶ビール。

重いもんだからもちろん両手でしつかりと。

「……………」

人のジャマにならないすみっこに移動してほんのりと冷たい缶ビールを眺める。

シールが貼られていて、お財布にはレシートも入っていて、つい1、2分前に間違はなく僕がお店の人の許可を得て対価を払って手に入れた、これ。

……幼女のはずの僕が出した免許証を見て、ほんの数秒だけおかしくなって……で

もごく普通に、年齢確認の必要な商品を僕が買えた。  
買えちゃったんだ。

それを改めて自覚するにつれてへにやりと力が抜ける感覚がする。

スーパーから出入りする人たちがちらちらさつきみたい僕自身に注目して、さらに角度的に僕の持つているおかしなものが見えた人はそこで初めて変な顔をして……けれども僕に話しかけることもなくみんな素通りしていく。

都会だから話しかけられないのか、それともこんなところはまだ魔法が掛かっているのか。

……いつそのこと誰かに話しかけられたらよかったのにな。

「子供がそんなもの持つてちゃ行けません」って。

でもそこで「大人なんですけど」って言ったらおんなじようになるんだろな。

「……………」

——昨日お酒が入ってきてぼーっと空になった瓶を見ていて思いついたのはこれだった。

「男だ」って僕が言うだけで認識が変わって魔法さんが腰を上げるのなら、僕のことを知らない人に対しても元の僕じゃないとNGなこともできるんじゃないかって。

具体的にはお酒っていう今の僕じゃ絶対に対面では手に入れないであろうモノ。



そういうモノを今の僕が面と向かつて手に入れられるかっていう実験だ。

でもよく考えたらなんで僕ビールなんか買っちゃったんだろう……炭酸ダメなのに。

どうせならカツプ酒とかにしておけばもつと持ちやすかったはずだし、それにここで飲めたのに。

僕はこういうときに限って変なことしちゃうんだよなあ。

「しょうがない」

適当なところにビールさんを置いて歩き出すことにした。

どうせ持っていても飲めないしな。

ちよつともつたいたいけどしょうがないよな。

運がよければ誰かに飲んでもらえるだろう。

そう願う。

立派な不法投棄だけど新品だからきつと大丈夫っていう根拠の無い理屈を付けておく僕。

手のひらだけ冷たくなっていた僕は人混みに紛れようとしたけど、普段とは違って派手な格好になつて僕は少しだけ遠巻きにされる形になる。

人からは見られるけど今までみたいにみんなからぶつかられる心配は無いのか。

こうしてみないと分からないこともあるんだな。

……さつきのお酒をかうって言うのは、もし魔法さんが掛からなかったらアウトな行動。

でも、「それじゃ良いです」って言つてエア父さん宛てのエア電話でもしながら離れば大丈夫だろうっていう目算で動いたんだ。

当てが外れて「ちよつと奥まで来てくれるかな？」とか言われたとき用に、今こそつて感じでコネな萩村さんのところをセツトしておいたけど無駄になつて良かった。

身元引受人無しでお巡りさんのところに行くよりかはあの人たちにお世話になる方が良いつて判断。

今確かめないと行けない気がしてたから、ちよつとだけ無茶なことをしてた気がする。

でも多分大丈夫だろうなつて気持ちの方が大きかったからの賭けだった。

だから拍子抜けつていうよりは思った通りだったつて感じ。

やつぱり僕には、見えないナニカ——魔法が掛かっているんだ。

さつき僕が成人してゐるつて見せた途端、店員の人の目がやつぱり暗くなるつていうかどす黒くなつて、どこ見てるのかわからない感じになつて……ちよつとだけ硬直して、けど今回はおかしなことを話し出したりはしなくつてすぐに僕を今の僕を前の僕だつて——大人だつて認識していた。

写真や生年月日から何までどう見ても今の僕と合わないのにな。

そういえば……後ろに並んでいた人とか周りにいたはずの人たち、あのときは気に留める余裕がなかったけどなんにも言われたりしなかったあたり、やっぱりおんなじようになつていたんだらうか。

それとも僕たちの会話とか僕が買おうと奮闘していたモノとかが気にならないつていう認識だったんだらうか。

ちよつと時間が経つてくるといろいろと浮かんでくるけど、これはまあたいしたことじゃないし後回しでいいだらうし。

……ということでは本題だ。



「……ではもう一度ご確認いただけますか？」

「は、うん」

何度か来たことのある大きめの銀行の応接室のひとつ。

今の僕にとつてはおしりをぎりぎりまで浅くしてもまだ不安定な居心地の悪いソファから身を乗り出して、もらった書類を見つつ言う。

なんでお役所とかこういうところってやたらといっぱい書類があつていちいち日付とか名前とか判子押すんだろうね。

実印とか銀行印とか分かんないからまとめて持つて来た判子が手元に転がつてる。社会に出てないからそういうのが分かんないんだ。

「今回は……定期預金のうちの一部のご解約でよろしいでしょうか？ 前回と前々回にお引き出しがなかったので手数料などは……」

「はい。 少し入り用なので。 残りはそのまま継続で結構です」

こうして引き出すのが大学の学費とか以来だからちよつと聞かれたけど「生活費に使うから」ってだけでオツケーだったみたい。

まあ大人つて認識されたらそうなるよね。

そこまでの金額でも無いしな。

「そうですか。 もう成人されているわけですし、当初のスケジュールよりも引き出す金額がだいぶ低いのでこれ以上の手続きは必要ありません。 ただ、以前にもお話しさせたいただいた通りに残額に關しましてオンラインや郵送だけでは……」

「ここに來て今みたいなの手続きをすればいいんですよね。 大丈夫です」

僕の定期預金に關しては、いづれにしたつてここに来なきやならないらしい。

なんでもちよつと特殊な状況で得たお金が混じつて、いるからだとか、なんとかか。

そんなわけでもんどくさい法律に従ってこれまでに1、2回聞いたことのある文言をぼーっと聞きながらしばらく。

「承知しました。それではただいま書類のほうを」

「あの。このとおりカバンなどを持ってきていないので家に届けていただいても？」  
試しに両腕で袖のリボンをひらひらさせてみる。

「……もちろんです」

その反応は……生暖かい……ほほえましい感じで見られただけだった。

目の前に座っていたレンズが分厚くつて色がかすかについている……この部屋に入ってからしばらくの雑談で老眼がきついつて言っていたつけ、そんなメガネをしている初老の銀行員のおじいさんに近いおじさん。

相続とかのときからの付き合いだからかれこれ10年以上の顔見知りの人。

顔を合わせたのは数回くらいでしかないけどいろいろと衝撃的だったからなんとなく覚えている感じのおじさん。

僕がちやんと覚えてる数少ない人のうちのひとりだ。

……父さんが生きていたら……そろそろとこういう雰囲気になってくる年ごろだったんだらうか。

「……………あの」

「はい？ なにか疑問点など」

「いえ、ずいぶんご無沙汰してましたので。 20になるまでは叔父と来て毎年のよう  
うに顔を合わせていましたから。 ……………以前は、父と母のときからお世話になつ  
て」

「とんでもございません！ 響様のお父様やお母様からも、…………あのとき以前からずつ  
と、私どもこそお家のことなどでお世話になつておりました」

…………この人も前の僕を知っているひとりで。

「…………僕。 前…………10年前のときと比べて、どう……………ですか？」

「はこ」

受け付けの、背伸びをしないと差し出せなかったからいらつとしたカウンターで用件  
を伝えて免許や通帳を見せたときも、待合室で別の人に案内されたときにまた見せたとき  
も、このおじさんに会ったときに僕の名前と父さんたちの件とそしてもう1回通帳と  
かを見せたときも、店員さんとおんなじ反応。

「あのときも好青年だと…………突然のことに見舞われた中学生の方にしてはとても落ちつ  
いた話し方をされてご立派だと思っておりましたが。 今も変わらずに…………いえ、ずい  
ぶんと『かわいらしく成長されていて』！ ええ、きつと亡くなられたお父様がたも喜  
んでいらつしやると思いますよ」

「……………そう、ですか」

男がかわいらしく成長。

立派じゃなくて、かわいらしく。

それを、両親が喜ぶ。

どう見ても小学生に遡っていて性別が変わっていて、脱色していてふりふりなワンピースきた僕に対してごく自然な感じで言っていて、それがおかしいって思わないらしい。

ひとつの会話で矛盾したことを言っているのはやっぱり昨日と同じだ。

いちいちねちねち指摘したらきつと昨日のお隣さんみたいになるんだろう。

前と今について立ち入った質問を投げかけなければ、こういった矛盾しつつも違和感を持たずに接してくれるっていうのがもうわかっているから、あえて今そうする必要もない。



セミの声がうるさい。

ジージーとうるさい。

ふてくされた僕の耳にはそういったどうでもいいことばかりが響いてくる。

閉まったばかりの自動ドアを振り返ると、微妙に眉間にしわの寄っているロリータが映っていた。

なるほど……これくらいいらつとしていてもこのくらいしか表情が変わっていないのか。

どおりで着せ替え人形のときのアピールが伝わらなかつたわけだ。

よく見て見ないとわからないほどのわずかな変化しか現れていない。

「……………」

ドアを見ながら眉間をもみもみしていたら通りがかつた大人に笑われてしよげる。

男がお店のガラスとかで髪の毛直していても見られるだけだけど、見た目の通りの子供だと途端に好意的すぎる反応。

人って見た目だよなあ……。

その他大勢って言うとっても楽なポジションで生きてきた僕にとつてはめんどくさいことこの上ないけど、その見返りにいろいろお得があるって思うと満更でもない気がする。

でも着替えるたんびに店員の人と話し込んでいたかがりを思い出しているうちに「あのときに比べればいくらかはマシかな……」なんて思い直して機嫌も戻ってきた。

あの子たちと過ごした、どうでもいいけどほのかに楽しかった夏休みを振り返りなが



らとぼとぼと残暑の中を歩く。

持つて来た通帳……そこにははっきりと、贅沢しなければ次の次の期限まで何もしなくても生きていけるだけのお金が数字でばっちり記録されていた。

それは、当初どうしようかって悩んでいたお金の問題が解決しちゃったってことで。

……ここまでのお金がちゃんと動いたんだ、どう考えてみたって否定できる要素がなくなつた。

魔法さんの効力は確かで、僕が幻聴とかそういうわけじゃないんだ。

僕の姿だけを初めて見た場合、見た目通りの……もうロリでいいや、今はそういう格好だし……だつて認識する。

で、こうなる前からの僕を知っている場合には「雰囲気が変わつた」程度の認識止まり。

見た目の齟齬についてはなにひとつおかしいって思わないんだ。

……帰り道にもいくつか実験を試してみた。

別のスーパーとか服屋とか、本屋とか駅員さんとか、そういうばらばらな人たち相手に試してみた……けど、知らない人でも結果は変わらなかつたんだ。

反応が人によってばらばらだったのは要検証かも。

性別と年齢のどつちかだけが今の僕のままって人のほうが多かつた感じだったし。

男だつていう認識をしつつ、けど女だとも思っているみたいだつていう、整理しようとする僕のほうがこんがりそうなことになるくらい相手によるとしか言えない様子だったし。

「なんだかなあ……」

この半年間の苦労は何だったんだろう。

なんか気が抜けた感じの僕は気だるげな銀髪の少女つていう形になって、ガラスの向こう側から見つめ返してきていた。

## 26話 検証 3/3

今の僕はふりふりで目立つ格好をしている。

帽子で顔を隠していないしフードで髪の毛も収納していない。

だから注目されて人が勝手に離れてくれるから歩くのがとっても楽。

ドン引きじゃないことを祈りたいけどその心配はなさそうだ。

ちらほらとかがりみたいな表情をする女性がいるんだしな。

……なるほど、ああいう顔する人は危険なのか。

経験が役に立つな。

今までの苦労はいつたい何だったんだろうって思うくらいにすすいっと駅前を  
き来できてちよつと感動。

「……………ふう」

昨日の夕方からさつきまでのことが歩いていてちよつと消化できてきたからかため  
息が出る。

この、いかにも女の子の子供の子している姿で外に出ても……………今までの生活に支障はまっ  
たくなくなって、もちろんお巡りさんたちの世話にもならなさそうで。

たぶんお役所関係も……そういうえば税金のこととか今でもみんな叔父さんに丸投げだな……とにかくふつうにできてしまっていて。

ここまで徹底しているんだから、きつと病院とかだつて平気だろう。たいした病氣とかしたことはないし。

多分これからもよつぽどのことがなければお世話には……いや。

今の僕は女の子。

ということとは……たぶん、その

やっぱり、いずれは血が出てくる感じになつていくんだらうか。

もはや洗うときたまに意識する程度のそこからのとかで。

「……やだなあ……」

今は機能していないはずのそれが、男女の決定的な違いがあるんだらう。

本格的に成長できたとしたら何年でそういうのも気にしないといけなくなるのかも。

逆に言うと、肉体が幼女から少女へと成長するまでは何の問題もないわけで。

個人差がすごいからにはたしてどのタイミングで起きるのかはわからないけど、とりあえず今じゃないけど。

女の子っていう女「性」なら避けては通れないもの。

男つてそういう意味でもほんと楽な存在だよな。

女の子になったからこそ思う。

まあそのときが来たらでいいや。

魔法さんのせいで来ない可能性もあるんだし。

とぼとぼと一路家へと、人通りが少なくなってきた住宅街を進む。

お天気は真夏の死ぬほどの暑さを脱しつつあるようで、そこそこに暑い程度がよく晴れた青空。

つまりは日陰をぬえば快適に近い感じの、吹いている風のおかげでときどき涼しいくらいで。

……さっきの並んだ数字を思い出す。

「大人ですって言えば大丈夫だよね」ってことでATMからお金を下ろす試みも何も起きずに成功した僕はようやくまくともな現金を手にした。

……幼女がATMを背伸びして使ってお金とかを首から提げた袋に押し込んでいても誰にも咎められなかったんだ。

魔法さんのせいなのか今の社会的に声をかけなかったただけなのかは分からない。

でも、お金はいつでも自由に下ろせるようになった。

貯金はまるごと使えるようになった。

だからお金の問題は、贅沢しなければ……僕の性格的に豪遊しなければあと何十年か

は大丈夫。

大きな病気とか散財さえしなければ、人生の下り坂になるまではそこそこに楽しんでいけるはず。

まあ食費がだいぶ減っているっていても10年くらい巻き戻っているわけで光熱費とか税金とかは地味にのしかかってくるから男だったときより10歳若いくらいでお金が尽きるわけだけでも。

つまりいずれは食いぶちを稼がなきゃならないわけなんだ。

……でも、今日分かったとおりに身分証とか書類とかちゃんと用意したら……その気になったら就職だってできるんだ。

だって少なくとも怪しくない身分が記録として存在して、魔法さんで僕の見た目を誤解してもらえないんだから。

もつとも特になにもしてこなかったニートな前の僕を採用するような珍しい会社に巡りあったとしたらだけど……いくら僕だって明日の寝床とか食べものに困るくらいになったらやる気は出せるはずだからどうかありつけよう。

きつと、たぶん。

どんだけお給料が低くたって最低限の生活費がもらえるお仕事を探し出せば僕としては不満がないんだし、探せばひとつくらいはあるだろう。

「あら、こんにちは響くん」

声を掛けられてはじめて下を向いていたって気がついたけど、向こうからやってくるのは昨日振りのお隣さん。

今の彼女は普段通りに戻っているらしい。

「こんにちは。 お買い物ですか」

「夕食の準備でねー」

ぱたぱたと手を振っているしやれつ気のない奥さんは今日もまたラフな格好で、それがまた大学生っぽい雰囲気醸し出している。

ぼんわりした感じの表情もあるかもしれないな。

つまりはケバくない大学生……JDに見えるんだ。

だから飛川さんはご近所のおじさんたちに大人気。

おじいさんたちにとってはちよつと幼すぎるらしい……そういう情報は立ち話とかでさりと知っている。

でも本人はきつとそこまで意識していないだろうなあって思える辺りは天然というやつなんだろう。

かがりと組み合わせるとシナジー起きそうだもんな。

ちよつと想像したらぞくつとして身震い。

「涼しくなってきたわねえ……もうすぐ夏も終わりがしら」  
「そうですね」

ぶるつとしたのをなんか勘違いされたけどいつものことだから適当に合わせておく。  
……いつもどおりだ。

姿が変わろうが変わるまいが何年も続けてきたような、僕の、だらしない生活という日常。

「また今度、娘の勉強見てあげてくれるかしら？ もちろんきちんと家庭教師ってことで。最近成績落ちちゃったみたいなのよ……中学生って大変だから。ほら、親が言うより知り合いの響くんからの方が……ね？」

「……………考えておきます」

バイトをしてみよう時期にはフリーター、それ以外はニートとしてただただ好きなように生きてきた生活が続いていくんだ。

「それにしても今日はいちだんとおしゃれさんね！ お出かけしてきたのかしら？」  
「いえ……いえ、そうですね。少しだけ」

少しだけ、ほんの少しだけは変わっているんだけど、結局「僕」って言う存在は変わっていないらしい。

魔法さんもさぞ驚いているだろう。



幼女になったのに僕がこれまでと全く変わらないんだから。

まあ意志があるかどうかは分からないけども。

そうして雑談をこれまでの普段通りに交わして別れて、またひとりぼっちになって。ずーっと母さんたちと住んできて少し前からはひとりぼっちで広すぎて、けどきつとこれからもずーつとひとりぼっちで生きることになるだろう家の前に着いて。

ふと見上げて「そろそろ外壁の塗り替えの時期だな」とか「この夏は伸び放題になっちゃった草を刈ってくれるようシルバーさんにまた電話しなきゃ」とか「いい加減にお風呂、なんとかしないとなあ」とかどうでもいいことが浮かぶ。

……もう大丈夫だってわかってちゃったから洗濯ものも普通に干している。

子供用のシャツとかぱんつとかが風にあおられて、髪の毛のせいでたくさん使うようになったタオルが、ぱたぱたぱたぱたとはためいていて。

かちやりと背伸びをして開けたドアの中に入る。

結局は……この体になったばかりのときに考えていた、僕の認識だけがおかしくなっていて僕が僕自身を銀髪幼女だって……小さな女の子になっているって思い込んでいるっていう状況と、ほとんど変わらなかったわけだ。

つまりはどっちも合ってたんだ。

僕が本物の幼女になっちゃったのも、認識がおかしくなってるのも。

もつとも認識については他人のだけでも。

多少の不便さはあるけど、男のままだったらあと何年かで老化を意識しはじめる年齢になるわけだし、1日中座ったままで腰とかがやられはじめるんだって考えてみたらこれは幸せなこと。

10も若返って、その上に容姿までよくなるっていうおまけ付きな僕の状況はきつと、とつても嬉しいものなんだろう。

「でもなあ」

僕は普通に目立たない男のまままで良かったのに。

分相応ってそう言うことだろうって思ってたのにな。

……玄関はすつきりしちやっている。

もう使わないだろうって思えてきたから前履いていた靴は高いのを残して全部捨てたから。

代わりに靴箱の中にはこのちっこい足にぴったりな靴が占めるようになって久しい。……ムダにあれこれ必死になって考えて行動して、失敗して……いろいろとがんばってきたのがゼーンぶ、みんながみんな空回り。

なんにも起きなかった……それだけありがたいけど、ただそれだけ。

僕は勝手にひとりで慌てふためいていただけなんだ。



「ふうあ………」

そんなやな気持ちはお酒で吹っ飛ばすに限る。

だからテレビの音も光もぼーつとしていてる。

体の感覚も頭の中もみんなぼーつとしていてる。

テーブルの上にはわざと並べたお酒の瓶たちの群れ。

ワインから日本酒から、家にあるのを手当たり次第に並べてこれまた手当たり次第に

飲み始めたお酒たち。

よく考えたらわざわざこんな風になにかに対する当てつけみたいにして並べる必要はなかったんだけど、たぶんこうでもしないと収まらないくらいにはさつきまでの僕の心はちくちくしていたんだと思う。

いくら温厚なニートを自称する僕だってささくれ立つことくらいはある。

でもちゃんとそれを解消する手立ても知っているんだ。

こう見えても大人だからな。

「ふうあ………」

普段からローテンションな僕もお酒を呑んでるときだけはちよつとハイになれる。飲んだくれになるのはさすがにイヤだつて思つていたから控えていた、まつ昼間つからのお酒。

うじうじ考えるのがいやだからつてとうとう手を出したのはもう数時間も前のこと。

「む………」

さすがに長時間呑み続けているからか思考力とかが遅くなつてきてるのが分かる。

でも、大人にはこういう時間が必要なんだつて誰かが言つてたからいいや。

普段はお酒の味と香りを楽しむだけの僕だから、ここまで飲んだのは初めてだ。

普通は大学生で浴びるほどつてのを経験するらしいんだけど……ほら、ぼつちだつたし。

でもまだ呑めそうつてのは分かる。

限界を知らないから「やばそう」つて思つたら止めれば良いんだ。

体はこんなになつちやいのにここまでお酒が呑めるつてことは、やつぱりこの体にも魔法が掛かり続けているんだらうなつて思う。

「けほつ」

ふと、ちよつとだけストレートで流してみた40%くらいの液体はとつても辛くつてむせる。

……なるほど喉への刺激がダメなのか。

◇

そんな感じでぐだぐだしてトイレに行った回数が10を超えてわからなくなっただけで、テレビはいつの間にかまた知らない番組になっていて、見ているようで見ていなくて聞いているように聞いていないまま夜になってたらしい。

スマホで読むともなく読んでいたら面白い適当な記事とかもまったく頭に入っていない。

けど感覚としてはまあそれなりに、そこそこに興味を持って読んでいた……らしい。お酒が入ってくるとこうなるよね。

僕は誰かと話しながら飲むってことがないからこうやって時間を潰すんだ。

……僕が酔い潰れたことがないのって、こうしてひとりで飲むからなのかな。

「まわるー」

「ちよつとぐるぐる回る感じになってきたからもうほとんど飲んでないけどアルコールは何時間も続く。」

空の瓶を見ながら、何度もタップし損ねたりしつつ通販サイトで気になるお酒をカー

トに入れていく。

ぷにっとしていくくせにふだんは乾きすぎている指のせいではなかなか反応してくれないから苦手になったタッチパネルも、今は前の体のときみたいやすいと反応してくれるようになっていく。

ふと思つて見てみると指先が真っ赤だ。

「じんじんする」

珍しいこともあるもんだ。

そこそこの運動をしたりお風呂に入らないとここまでならないのに。

んー、まあそこそこ汗かいてるしなー。

じゃないな、お酒だお酒。

知っている銘柄をスクロールしていく。

これだけ平気なんだから多少飲む量が増えたって、問題なんてないはずだ。

そんなことを思いながらぼいぼいと入れたカートの金額はそれなりだけど、今日の僕は懐が温かいから問題ないはずだ。

「……むー」

何回か目をごしごしするけど数字が認識し辛くなっているって気づいた僕はなんだかめんどくさくなって、スマホをぼいっと投げ出してただただぼーっとする。

……テレビがうるさい。

けど消しちやうととたんに不安になるから、身の回りに音と光がないとなにかに襲われそうな気がするから結局はチャンネルを回して……あ、この表現今のこには伝わらないことあるんだっつけ……ともかくぱっぱつと変えて静かめな感じの画面に落ち着けるだけで、また天井を眺める。

まだ寝るには早すぎる時間。

次は……赤にしようか。

ロゼでもいいかな。

そんな風に僕は、未成年どころか幼児飲酒という真つ黒な行為を繰り返していく。

今まではこの体での将来のこととかを小難しく考えていたからほどほどにしていたけど、もうどうでもいいしな。

どうせ魔法さんが何とかしてくれるんだから。

「……………ひっく」

お金のこととか体のこととか、ご近所のこととか未来のこととか。

今まで気にしていた分をみんな流すために……飲み潰れたい。

酔い潰れるっていう感覚を、体験を、してみたいんだ。

こういうのこそ大学生っていうワルやっても笑って許される年齢と場所でやってお

くべきだったんだろうな。

だからこそハメの外し方を知らないんだ。

でも、良いんだ。

家の中でひとり静かに呑んだくれるだけ。

誰に迷惑かかるとはじやなし。

どうせ誰も見てないんだ。

「……………ん。　　なんで、脱いだんだっけ」

……………ついでに僕はどうやら酔うと脱ぐらしい。

「……………どうでもいっか」

遠くのソファにワンピースが掛かっていて、つまりぱんついつちよになってたらしい僕自身を再確認した。

体にまとわりつく髪の毛がこしよばゆいんだけど汗で毛先が張り付くからそうでも無いっていう不思議な状態な僕自身をぼーっとした頭で観察していた。



## 27話 回想・又は過去・ 1/4

僕は昔から、なんだか調子が悪かったりどつかを痛めたりヤなことがあったりすると必ずといっていいほど夢を見る。

普段夢なんか見ないのにね。

見たとしても普段なら朝ごはん食べる前に忘れるのにね。

夢つてのはストレスのせいで見るものらしい。

少なくとも僕のは。

夢。

悪夢。

10年も前の、その日のこと。

思い出さないうようにって普段からがんばり続けてようやくほとんど思い出さなくなっていたのに、思い出すとしても「かつてそういうことがあった」っていう程度の興味しか引かない程度なのに。

そのくらいは忘れることができていたあの日のこと。

つまりは僕にとつての悪夢である、その日から始まった「それ」。  
僕が僕になった日のことだ。

——僕はいつのまにか中学生になっていた。

今の幼女つて意味じゃなくて、本当に元の体で精神年齢はそれよりももうちよつと低めつていうどこにでもいるような内気で静かなのが好きで、かつての僕。

もう顔も思い出せなくなって短い髪の毛に大きめの制服を着込んでいたつてだけ思  
い出す。

当時から眼鏡かけてたからイメージ通りのインドア派で根暗でじめじめした男子中  
学生。

その僕が、その日のその場面にいる。

そしていつもどおりにその場面をスキップすることも目をそらすことも閉じるこ  
も耳をふさぐことだつてさせてくれないんだ。

ただただ見せつけられるだけ。

僕の中のなにかが完璧に壊れた、その瞬間を。

『2年——組の——響くん。 至急荷物をまとめて教員室に——』

それでもその日その電話を学校で聞いた前後の2年くらいのは、ほんの一部しか  
……それも断片的にしか覚えていない。

つまりは中学に入る頃から高校に入ってしばらくするくらいまでのそれなりの期間がどっかに行っちゃっているんだ。

覚えていないのか、それとも記憶に留まらなかったのか。

たぶん両方だとは思うけど、とにかく薄い記憶しかない。

こうして夢の中でさえすべてがモノクロになって、すり切れはじめたビデオテープを古いブラウン管で再生しているみたいな、そしてそれを映画館のスクリーンで上映しているようなそんな具合だ。

……ビデオとかブラウン管とか、小さい頃家にあつたのを見たくらいなのにね。

多分あの子たちにとつては映画やドラマや漫画みたいな創作物でしか見ることのないものだ。

もちろん観客はいつも僕ひとりだけ。

きっと上映しているのも僕ひとりだけ。

その日のその瞬間からしばらくしてから……そのときの先生や叔父さんに心配されて無理やりに連れて行かれて、彼らが満足するまでのそここの期間をかけて何十回と受けたカウンセリングとやらによると……僕はいわゆるPTSDとかいうやつだったらしい。

僕は「違う」って思っていたんだけど、行くのがめんどくさかったしで何度もそう主

張したんだけど「そうなっている人はみんなそう言うんだよ」なんてらしい言葉で言いくるめられてそういう病歴を抱えることになったわけだ。

まあ中学生が大人たちに「そうだ」って言われて「そうじゃないんですけど」って言い張れるほど度胸も知識も経験もないもんな。

僕自身は特段にふさぎ込んだりしなかったんだし、むしろ僕自身のあまりの普通さにびつくりしながらもそこそこにはまともにも生活できていたんだから平気だったのにな。

本当に大変な目に遭った、心に傷を負った他の人たちと比べちゃいけないって思っているんだけど……ともかく公式な見立てではそういうものだったことになっていた。

こういう風に周りが、僕が受けるはずだった衝撃を大げさに、さも彼ら自身が苦しんでいるかのごとくに受け取ってごろごろしている様を見ていたから僕は余計にそれほど苦しむことはなかったわけだし。

その日のその瞬間——教員室から校長室に連れて行かれた先で聞いた、その電話。「父さんと母さんが死んじゃった」っていう連絡。

ああいうのってどんだけオブラートに包んだ言い回しとかしたって結局はショックは受けるものなんだからさっさと言ってもらったほうがいいのにな。

僕ならそう思う。

当時からずっとそう思っているのは変わらない。

僕みたいなのは薄情なんだろうか。

普通の人は違うんだろうか。

もつと情緒豊かなんだろうか。

パニックになったり泣きわめいたりするんだろうか。

気を失ったり吐いたりしちやうんだろうか。

僕はそういうのがまったくなかったから分らない。

少なくとも僕みたいな思考回路している人ならきつとこう思うはずなんだけどもあつて思うだけ。

——その日もいつものようにだらだらと受けていた授業の合間に「ちよつと……」つて呼び出されて、そのまま先生の車とか呼んでもらったタクシー……とかじゃなくつて、荷物をまとめたらずぐに来たらしいパトカーに乗せられて。

かみ切れないあんちくしょうを歯のあいだに残したままみたいな言い回しでまくし立てられ、なんだか悪いことをした気持ちを抱えつつ結構離れたところのばかでかい病院へと連行された。

車内では乗っていた人がいろいろと気を遣ってくれたのは覚えているけど、それが却つてうざつたかつたことのほうが印象に残っている。

「早く帰りたいなあ」つて、そればかりがぐるぐるしてて。

そうして病院に着いて物々しい雰囲気で、おんなじように連れて来られた人たちがたぐさんいて、泣いたり怒ったりしながらそれはもうすさまじいことになっていた。

「阿鼻叫喚つてこういうことを言うんだなあ」つて、「まるで映画みたいだなあ」つて思っていた気がする。

僕が入った両隣の病室では大騒ぎになっていたこともあって、僕と僕を連れてきてくれた警察の人と病室にいたお医者さんと空のベッドしかない部屋は、とさらに静かな感じだった。

「ご両親のことは残念でした。手は尽くしたのですが、ここにいらしたときにはすでに、その……」

僕と目を合わせない……きつと合わせられなかったんだらうお医者さんらしき人が告げる。

「いえ、仕方なかったんですよ。事故ですから」

そういう事実があったんだつて認識はできていた僕。

ニユースつていう画面とか紙越しでしか知らなかった人の「死」つてのはこうもいきなりくるんだな―つて思つてた。

そんな風なことが他人ごとのようにループしていた。

心の準備なんかできるはずなんかないものな。

……いろんな映画とか本とかマンガとかで知ってはいた。

けどいざこうして見ると、本当にいろんな気持ちがあぐちやぐちやになるんだってそのときに知った。

僕はそんな感じで妙に頭が冴えていて冷静で、朝まで顔を合わせていた父さんと母さんにはもう会えなくなったことをただの事実として認識しただけだった。

比喩表現である、胸がぽっかり空いたようになっていう感覚。

本当に胸が冷たくなってお腹の奥も冷たくなって、なんでか奥歯とか腰が痛かった気がする。

ものすごく、ことさらにやんわりと。

僕の目の前でお医者さんでもごもごと言っていたのから多分、まだ中学生だった僕にそれを見せるのは酷なことだってくらいにはひどい事故だったんだろう。

ドラマとかで遺族の人とかにする「酷だとは思いますが本人確認を……」っていうの、無かったし。

あのときは気づかなかったけど、多分そういうのは全部後見人の叔父さんがしてくれただろうな。

だからだっただのかはわからないけどそれからずーっと、僕が聞いてもどうしようもない事故の細かい経緯とか現状とか、これからの僕のこととか学校のこととかお金のこと

とか……そういう、僕にとっては本題でもないようなどうでもいいことばかりを何時間もかけて、いろんな人が入れ替わり立ち替わり口を開きつばなしでとにかく忙しかつたことだけを覚えてる始末だ。

まるでお葬式してみたいに忙しかつたんだ。

でも、そのときの僕が思ったのは……駆けつけてくれた叔父さんをはじめとした親戚の人たちがほとんどやってくれたはずの父さんたちをお墓にしまうという作業に比べて、名前を書いたりハンコを押したりしなきゃならない書類のほうがつつと大変で、肉体よりも情報のほうが大切なんだなって、そういう感想だった。

人ってのはしよせんはただの情報。

死んだら写真と戒名と書類だけになるんだ。

実際今はそうなっているもんな。



その事故のことは、僕が忙しかつた……といつてもほとんど人任せで、僕は父さんたちの相続人っていう法律上の立場からどうしてもしなきゃならないことしかしなかつたんだけど、ともかく僕基準で忙しかつたひと月くらいのあいだずっとそれはもう大変



な話題だったらしい。

今思えば周りの大人たちに……叔父さんとかお隣さんとかにテレビとか新聞とか見ないように仕向けられていた。

多分適当な理由でスマホさえ取り上げられていたんだろう。

それで特にニュースに興味を持つたりもしないただの中学生男子だったから、気がついたら事故の報道とかはとっくに終わってたんだ。

だからそのあとの学校で気を遣われながら、でも好奇心に負けているって感じでそろそろと父さんたちのことを聞かれたときも、むしろ僕がぜんぜん知らないからみんなびつくりしていたくらい。

まあまだ高校生になる前だったのもあつて学校の外の人が押し寄せるとかはなかったあたり僕は恵まれてたんだろうな。

ともかく、父さんと母さんは死んだ。

生物は死んだら死んだままで生き返ることは無い。

エントロピーは失われたら失われたままなんだ。

それが魂って言うものかどうかはさておいて、もう会えないところへ行ってしまったんだ。

ということはそれ以上のことを考える必要はなかったわけで、だから僕にとってその

経緯とかはそれこそどうでもいい情報だった。

おかげで今でも単なる偶然で起きた事故で、しいて言えば玉突き事故みたいにぜんぶがいちどに起きたわけじゃなくって、誰かの故意とか過失とかそういう悪意とかがあつてのものじゃなくって本当に偶然で、ただの不運としかいいようのないもので……何回振つてもーしか出ないような、そんなサイコロみたいなもので。

誰にも何にも責任はなくって、無駄にそこにいるお巡りさんとか自衛隊の人とかに食つてかかる理由も無ければ泣きわめいて同情を買う必要も無くって……ただ「僕の両親だったもの」を含めて20に近い人がこの世をほぼ同時刻に去つたつていうだけの不幸に襲われた、ただそれだけで。

……そりやあ今にして思えば、まだ中学生つて言う子供だった僕……いや、今はもういつかい子どもになっちゃつていくけど……心までが子どもだった僕にとつて父さんと母さんがいなくなつたつていうのは相当なストレスだったつて、今ならわかつてい

る。  
多分みんなで相談して母さんたちだったものを僕に見せないままホネにしてくれたおかげなんだろう。

それが子供に対する大人の優しさなんだつて今なら理解できる。

ともかくそのストレスのせいでその後どころかその前のことでさえ……少なくとも

中学に入ってから高校を卒業するまで周りが一切気にならなかつたんだろうな。

だから一応でなんとなくやっていたはずの部活もあれ以降はやった覚えがないし、学校だつてだんだんと行かなくなつていった。

家のこととかひっくりかかるとか、後見人を買って出てくれた叔父さんがいなかったら中退までありえたかもな。

だつて僕だしな。

適当にぶらぶら……いや今でもニートしてるけどそれ以上に、その日暮らしで放浪するとかそういう人生にエントリーしていたかもしれない。

ひよつとしたら半年前にホームレス幼女が爆誕していた可能性だつてあるんだ。

でも外からせつつかれてようやく動く僕だから、そうしてお世話を焼かれないとダメだつたのかもしれないと思う。

だからそうして、これまで……今までも残っている記憶といえぼんやりとしていてふわふわしていつかみどころがなくなつて、とぎれとぎれで力が入らない感じの「僕が僕ではなかつたような」そんな思い出未満の何かだけだ。

……ないものはない。

よつていくら踏ん張つてみても出ないものは出ないんだ。

そういうわけで僕自身のこととはよく思い出せないしそのころの僕の周りのことを思

い出してみることにしよう。

というより経験上、この悪夢はひととおり思い出して見させられてストレス抱え込まれないと目、覚まさせてくれないしなあ。

悲しい経験知だ。

悪夢なんてなんで見るんだろいな。

しかもまいっかいおんなじように。

「……………」

どうにかして入ったんだろ高校ではたいしたことはしていない。

本気でのろのろやってた勉強ぐらいしかないんだ。

それはもう悲しいくらいに。

休みの日なんかは本当にぼけーっとして気がついたら寝る準備してたとか言うレベルで。

……人の噂って、どうやってか広まるもの。

だから気がつけば同級生……っていうよりはたぶん先生たち主導だろうな、みんなそろって僕の親のことを知っていて、けど口にはしない程度に優しい子が多かったんだろ、それでイヤな思いついていうのはほとんどしないままだった。

僕は本当に周りの人たちに恵まれていたんだろ。

僕は神様とか信じないけどそういうのには感謝してる。

でも当時の僕は、もともと人よりも精神年齢が低いつていう自覚があった高校生になりたての僕にとっては、そういう、初対面のはずなのに「両親を失った気のかわいそうな子」って感じにものすごく遠慮がちに接してこられるのがたまらなくて、ほとんどの時間は図書館とかに逃げていた気がする。

なるべく話しかけられないようにって。

まあそれでも話しかけてくる子はそれなりにいたけど。

あのときよりもずっと小さくなっちゃったけど、あのときよりは大人になった今だからわかるけど、あれはすべてに恵まれていないと実現しない環境だったんだ。

だけどそのときの同級生たちや先生たちかなりの優しさっていうものは、そのときの僕にとってはただただうっとうしいものでしかなかった様子。

なんでこんなことぐりぐりとねじ込まれるんだか。

それも自分自身に。

正確には僕の無意識に。

心が痛い気がする。

夢だからあたりまえか。

「……………んう？」

と、ここで。

普段の僕なら夢の中でこんなにじつくりと思い出すことも考えることもないついでうのをやつと自覚できた。

「……………こっわ」

頭の中でつぶやく声は聞き慣れた幼女のもの。

こういう精神異常系つて怖いよな。

だつて「おかしいのをおかしいつて自覚できない」んだもん。

ようやく意識を……自我を取り戻した僕の目の前に、ちらちらと通つていた校舎とか近くの席の子とか先生とかそういうのがばらばらと回つていく。

昔のことが断片的に駆け抜けるように流れていくこれつて……まさか、走馬灯？

「いや……ない。 ないない」

ないないつて声が耳から聞こえてる感じがある限り僕は生きてるらしい。

まあ死んだ覚えもないもん。

ただの夢だ、気楽に行こう。

起きたらトイレに直行しないと危ない膀胱と栓になっちゃつてるんだから。

## 27話 回想・又は過去・ 2/4

「けど、今日のは長いなあ」

半ば強制的って感じに昔の記憶をたどらされている今の状況。

走馬灯って言葉がいつもみたくぼろっと出てきちゃったけど気にしないことにしたい。

……そんなわけない。

そんなわけないよね？

まさか本当に死にかけてるとかないよね？

まあ考えても目が覚めるか覚めないかの2択だからどうしようもないんだけど。

……こういう起きる寸前の夢の中のあいまいな意識でもってさらに考え込むのってどう表現するんだろ。

よくわからないけど、ともかく目の前は大学時代へと切り替わっていたらしい。

高校よりもずっとひどかった大学生活へ。

………思い出すのもこっばずかしい。

思い出させれるのはもっどこっばずかしい。

このあとにはのたうち回りたくなる記憶が待っているはずなんだ。  
止まってくれない……………？

「……………止まれっ」

……………いろんな授業……………講義とか大学特有の独特の懐かしい表現だよね……………それを受けていた記憶がやって来ている。

なんかダメそう。

諦めるしかない。

黒歴史って言っても僕がしでかしたこと。

なあに、他人との関わりがほとんどなかったから他の人よりは恥ずかしいことなんてないはず。

そんな悲しい気の紛らわせ方してみる。

……………とうとうまともな生活っていうものを放棄しだしたところのことだから、大学へは行ったり行かなかったりして単位もぼろぼろと落ととして、留年っていう子どものころにはダメな大人の代名詞だったのにいざしてみたらず拍子抜けだった烙印をいくつか手にしたりしていた。

理由は単純この上なくって、ただがんばるっていう気持ち……………気力とかMP的なものがなくなつて、家を出ることすら……………もつといえは起きてから目を開けるまでにも時間



がかかるくらいにおつくうになるっていう、めんどくささの頂点に来ていた頃なんだ。一時期はどうにか呼吸すらしなくてすむ方法がないかとかわりと真剣に考えていたくらいだしな。

座禅とか瞑想とか本当にはまったよなあ……今から思い出してみても相当にやばい気がするし

、変な方向にねじ切れなくって良かった。

食べるのもめんどくさい時期まであったし、病気になつたりしなくってほんとうによかったな。

ほんとうに。

だってヒトに限らず生き物の根幹のなにかをしようとする力、なにかをするっていう意思そのものがなくなっていたからんだから。

まあこういうのって神妙に相談したら精神科に連れて行かれるんだらうけどな。人ってこういう時期あるじゃん？

大二病って言葉もあるらしいし誰だっけと一回は通り過ぎる道なんだ。

だから人生を台無しにしないで無事に終えられたことを誇るべきなんだ。

でもまあ普通の人はちよこつとで終わるんだらうけど。

大学って、出るのは簡単なもんだからそんな感じだったのに卒業できちゃって、とう

とう最後の砦を自分で破壊しちゃったわけで。

慣れないスーツで卒業証書を持って帰ってきた僕に残っていたすべきことは、もうなくなっていた。

だからひきこもった。

別に理由なんてない。

ただただひきこもったんだ。

何ヶ月か卒業証書をテーブルに置きっぱなしで埃が被る程度には自堕落になっていた。

お金とか財産の権利とかも勝手に持って行かれたりなんかはしなくってみんなきちんとされていたし、巻き上げられたりすることもなくちゃんと僕のものになっていた。

父さんも母さんも会社社員の働き盛りだったからだろうし事故の影響が大きかったからなんだろう、ちゃんと働きながらなら万が一でも大丈夫な金額が手元にあったんだ。

いろいろといっぱいたくさんの紙に名前書かされたりしたりしたし、そもそも叔父さんが有能な善人だったっていうのもあるかもだけど。

あらためていい人過ぎる叔父さん。

元の体に戻ったら会いに行こうって思う。

「……………戻れるのかなあ」

夢の中でも幼児になつて居る辺り状況は深刻で、いつ戻れるかは分からないけどね。

そんな感じに中途半端に足りないものが無い状態だった僕は、僕自身ががんばらないとやばいって言う動機がないし、誰かのために……親のために立派になるって気持ちも無くなつてたから、がんばろうっていう意欲も生まれようがないわけ。

住み慣れた家があつてお金もあつて男ひとりで生きていくのに何一つ困らなくつて、唯一の悩みどころの叔父さんとかの親戚とか近所とかお隣さんも、ときどきどこかで働くフリをしてがんばっている感じを醸し出しさえすれば、そこまでとやかくは言つてこない。

「体が優れないので……」とか「同僚と合わなかったもので……」とか言えば求職期間つてことで「またのインターバルを……」つて感じのループ。

「響くんは響くんだから自分のペースで良いんだよ」つて言われるたびに心がちくちくしてたっけ。

多分そういうの親から直接言われた方が効くんだろうなあ。

体はモヤシだけど健康で特に病気をする兆しもない20代。

家の敷地からゴミ捨て場までの往復以外じゃ、やろうつてすればスマホひとつで食べ物から娯楽までほとんどすべてのものが手に入る。

改めて便利すぎる弊害がここに出た感じ。

めんどくさがりには素敵すぎて墮落する時代なんだ。

だから僕はたいした理由もなく、特別のトラウマとか不幸があつて……つてわけでもなく、ごく一般的な、誰にでも起こりえる範囲のちっちゃなきっかけのせいで、ただ、すべてを投げ出したんだ。

ただただめんどくさかつたんだ。

——そうして1回投げ出して気がついたらもうあつという間に数年。

きつかけから換算すると実に10年。

10年っていう生まれつきの赤ん坊が今の僕と同じくらいにまで成長するっていう、途方もない貴重な時間を僕は無駄に過ごしてきた。

ちやうどあの子たちが産まれた頃から今までの時間。

生まれたての命が人らしく育つ時間に僕がしてたのは、ただ学校をそれらしく過ごしてお酒を覚えただけ。

「……………もしかして、だから僕はこの姿に…………？」

ちよつとシリアスになつてみたけど無い無い。

そんな偶然なんてありえっこないもん。

すべては魔法さんのごきげんだしな。

きつと魔法さんは銀髪幼女趣味なんだ。

だいたいその10年っていうのが原因だったら中学生くらい姿にはなるわけで、間違ってもこんな幼女チックな幼女にはならないはずだしな。

魔法さんが意志を持つてるのかなんて相変わらずに分かんないし、誰かの呪いとかだったとしてなんで僕って感じだし……どうせ分かることもないんだろうしな。

……そんなことを考えていたら場面が一気に変わってた。

ダメダメな僕でも「これじゃダメだね」って思ってたちよつと動くつてのは何度かあつて、「あ、これは本当にやばい」ってなつたのは引きこもつて少ししてから。

その原因は単純に自律神経失調症つてやつで、しかも自分のせいって自覚があつたら。

……人間つて毎日規則正しく体を動かして外に出ないとだんだんとかかしくなつてくるらしい。

僕は起きたいときに起きて眠くなつてきたら寝るつていう子供のころに夢にまで見ていた生活を始めて、昼夜逆転さえまつたく気にしないような生活を続けていた。

ものすごく快適そうに過ごしている僕。

だつて本能に従つて生きるだけだもんね。

でもそんな生きながらの天国に近い生活長続きしないんだ。

実際こうして見てみると不健康そうにしか見えないし幸せそうじゃない。

「なんとなく体調が変……？」っていうのから始まって、動悸とか頭痛とか階段を上るだけで息が切れるとかが出て来てびびくりしてる。

さらには眠いのに寝付けなくなってお酒とか薬とかに頼ってもまともに眠れない不眠とかになって、音とか光にはもともと敏感だったけどちよつとした音とか肌触りでもダメになったり、感情が僕のものじゃないみたいに四六時中ずーつと勝手気ままに動いて手がつけられなくなつて……ひと言で言うとなんか神経がささくれ立った感じになつてどうしようもなくなつてる。

気がついたらもうどうしようもなくなつていて、ただ生きるだけっていうの自体が難しくなる始末僕が放心してる。

あー、大変だったよねえ。

多分僕の人生で一番辛い時期だったんだろう。

中学生のときよりもだからよっぽだもん。

人は健康こそが幸せするのがよく分かったんだ。

このおかげで、人っていうのは適度なストレスっていうのがないとただ楽しくて楽なことばかりしていたらダメってことが分かったんだよねえ。

けど原因がわかれば話は早いもので、早寝早起きに毎日最低30分は外に出て散歩とか軽い運動するだけでちよつとずつ良くなった。

目の前で幼女なのに成人男性なりピートさせられてる僕の姿もとても大変そうだけど実際大変だった。

体力ってほんと毎日の積み重ねだよね……この体になってもう一回身に染みて理解してるけど。

あの辛さを知っているからこそ、どんだけめんどくさくなくなったりしても「あれほどの生活に戻ろう」って気にはならなくて、つまりはちよつとだらしない程度の生活を維持できるようになったのは、きつと良い薬ってやつになったんだろう。

人って痛い目見ないとわかんないもんだからなあ。

後でわかるから後悔っていうんだし。

ひーひー言いながら朝早く起きて動いて……ってしてる少し前の僕を眺めてたら改めてそう思う。

その後は「完全なニートも良くないかも」って思って、やる気のある期間だけ適当に楽そうなバイトをして社会人もどきをしてみて普通の人にならなだけ近づいてみたりしてたらしい。

ひきこもり明けで体力が戻りきつていなかったのもあって、力仕事でもなく拘束時間も短めで僕が持っている唯一って感じの勉強……まあつい最近まで失うことになっていたんだけど、それを使つての学習塾とかでのバイトが一番続いたっぽい。

勉強とかいっても、熱心じゃ無くてただぼーつとしてただけなのになんか特定の子に懐かれやすいからか、ほとんどがそういう子の子守みたいな感じにいることが多かった様子。

その内に子守にも飽きたから適当な理由をつけて止めて、もういつかいニートに戻ってからは生活リズムだけ守って、でも好きなことを適当にするっていうそこそこに充実した生活を送って、ひとりぼっちにしてはこれまたずいぶんと満ち足りた時間っていうものを過ごして。

———そうしてあの朝になって「なんじゃこりやあ!？」ってなってる場面まで追いついてる。

脳みそってすごいね。

どう考えても僕自身は体の中に居たはずなのに、こうして記憶の中では僕を外から眺めているようにできるんだもん。

しかも前の僕も今の僕ティストで。

まあ男見てるよりは目に優しいしいくらか悲壯感が紛れてる気がするからいいや。

やっぱり人って見た目だね。

元の体に戻ったら見た目にはちゃんと気を配ろうつと。



## 27話 回想・又は過去・ 3/4

「うーん……」

目の前で僕らしき幼女が女の子になって慌てふためいて、それをすぐ近くで見ている僕自身は突っ立ってるだけ。

やっぱこれ……走馬灯じゃ？

走馬灯かも。

走馬灯な気がしてきた。

走馬灯じゃないって否定したいんだけどできる要素がひとつもないしな。ということは控えめにいつてもやばいわけで。

なんか死ぬようなことあったのかなあ……心当たり無いんだけど……？

なんだか過去のことばかり、それも考えないようにしようとしたって次々と浮かんでくるっていうか目の前に見える感じで、強いていうなら僕の隠し撮りをうまく編集してあるのを無理やりに観させられているような感じで。

それもいつもの悪夢とは違ってやけに長めだし、やけにやけに意識もはっきりしている。

「うーん？」

しかも初めつから終わりまで僕のイメージが今の僕になっているおかげでなんだからどこどこもおかしなことになっているし。

おかげでバイトのときの場面なんて幼女が年上の学生をあやしているっていう実に背徳的ななかになっているしな。

見ているだけで違和感のかたまりでしかない。

まあこれが僕の想像力の限界なんだろうけど……それにしてもなんなんだろうこれ。

命の危機……お酒の飲み過ぎで？

いやいや、いくら飲んだからっていつでも無意識でセーブしてたし、急性なんとかになる分量じゃなかったはず。

あ、今の僕幼女だった。

普段通りに呑めちゃうから気にしてなかったけど、さすがに許容量は少ないはず。

「……………やばい？」

もしかして。

もしかしなくても。

そもそも呑んじやいけななんだもんな、本当は。

でもアルコールに慣れた大人だから止められなかったんだ。

今の虚弱な胃腸とおんなじくらいに……いやもうちよつとは頑丈なはずか、そんな肝臓さんが悲鳴上げているのが今だとしたら、どうにかしてすぐに起きてがんばって吐き出してお水をがぶ飲みしなきゃいけないんじゃないじゃ……？

「ふんっ」

お腹に力を入れてみたり息を止めてみようとしたけど目の前で2日目を迎えている新鮮な僕が鏡を見ているだけで何の意味もなかった。

駄目だ、起きる気配がない。

体の感覚がないんだしな、夢っていう意識しなくなつて。力を入れようにも体がどこにあるのかする分らないのが分かつただけだし。

「しょうがないか」

僕は諦めが早い。

どうせどうしようもないんだし、目の前の記憶でも観ていることにする。することないしな。

どうやったって起きられないんだつたらこうやって待つしかない。

これも含めての悪夢なのかもだしな。

どうしようもないのならただぼーっと流されているほうが楽だ。ムリに逆らつたつてあがいたつて、どうしようもないんだから。

目の前はどんどん切り替わる。

「幼女と化して現実逃避しようとして試行錯誤の悪戦苦闘をして……その過程でかがり目をつけられて、今井さんと萩村さんっていうムチとアメのペアに発見されて、ゆりかからは妙な親近感を持たれて。」

「そうかと思えば一気に時間が飛んで父さんたちのお葬式のとときとか、最低限のものを残すっていう遺品整理とかに終われている場面が挟まれたり。」

死にかけ？

やっぱり僕死ぬの？

幼女で？

幼女になって？

もしそうだったら、ひよっとしたら夢の終わりって父さんたちとの再会なんだろう  
か。

こんな終わりはイヤだなあって思うけどこれが定めならしょうがない。

今週末にもみんなとの予定、あるんだけどなあ……。

それにいきなり消えるのはなんだか後味が悪いし。

だからどうにかして起きたいとは思っただけで夢の中でどうやって目を覚ませばいいんだか。











「響くんのお父さんにもお母さんにもうちの子が小さいころによくお世話になったし、恩返ししなきゃね！ まかせて！ その体に慣れるまでは……いえ、響くんさえよければそのあともつ。……さんとも相談したし、家で面倒ばつちり見るわよ!!」

「いえ、適度で良いです」

かがりのような目線を浴びせてきている飛川さんと引き気味な僕の声。

……僕は、こうはしなかったんだ。

見つからないようにって、ただ隠れていたはずなのに。

そもそも初日の午後に起きたときは「何だ夢か」って寝て過ごしたはずなのに――

「それにうちのさつきも響くんにくくさん遊んでもらって勉強まで見てもらっていたじゃない？ だからそんな迷惑なんかじゃないわっ、困ったときはお互いさま。まずは今までにお母さんたちからもらった分くらいは響くんに戻させて？ ……ね？」

「……………はい」

ああ……この人が魔法に掛からない状態で今の僕と会って話を聞いたらこうなるのかも。

その程度には違和感のない光景……だけでも。

なのにどうしてこんなにも……昔の、本当の記憶なんかよりもずっと……かがりやゆ

りかと会っていたのと同じくらいにクリアで「まるで初日にお隣さんに助けを求めたのが事実だ」って感じで。

「っ……」

——体の感覚が無いはずなのに頭がくらくらしてくる。

これはなんだろう。

まるで「矛盾する正反対のものを同時に認識させられているような」——。

「あ、起きてきたわ！ ……さつき、ちようどよかった！ この子はお隣の響くん。今朝女の子になっっちゃっていたんだって」

そうして何でもないように言ってるお隣さん。

「……………お母さん何を変なこと言ってるの。お客さん？ まだ私パジャマだから」

「いいからちよつと来てみてって！ ほらほら!!」

「ちよつとお母さん、やだ、まだこんな格好で……………え？」

懐かしい感じのやりとりのあとにミニ飛川さんって感じの女の子が引きずられて来る。

飛川さんよりも背はちよつとだけ低くって雰囲気はそのまんまで、でも年相応の精神年齢と顔つきって感じの子。

飛川さつきちゃん。

いやもう中学生なんだから、さつきさん？

お隣だからってこの子がちっちゃいころによく面倒を……母さんが勝手に連れてくるからよく見させられていた女の子は、立派な中学生くらいになっていた。

確か最後に近くで会ったときはまだ小学生だったからまだまだちっちゃいって思っていたんだけど、今観ている彼女はすっかりと今の僕を軽々と……いろいろと越えていて。

さすがに奥さんみたいにぼややんな感じはそこまでじゃないけど、ときどきそんな気配はしているけど小さい頃からしつかりした子だった。

現実でもちやんと成長していたらこんな感じになっっているんだろうか。

ゆりかとかかがりたちと一緒にいてもおかしくはない女子中学生になっっている。

「……え、ええつと……お母さん？ この小さな女の子……髪の毛とつてもきれい……じゃなくて、この子が響……さんの親戚の子とかってこと？」

うん、この子の反応が普通だよ。

「違うわよ、この子が響くんなの！」

「………響さんは、もつと背の高い男の人ですよ？」

ばつさりなさつきさん。

「お母さん変な冗談は……!! まさかまた寝ぼけてご近所の子を……！」

「冗談でも寝ぼけてもないからね!」 響くんの前なんだからそういうの今は言わないの!」

「また」つて……まあ飛川さんだから……かがりに通ずるものがあるこの人だから……。

「あの……本当に響さん?」

「一応は。 僕の認識が狂っていなければね」

「あ、響さんですねこの感じ」

「ん? 分かってくれるなら有り難い」

なんだかちよつとした会話で僕って分かったらしい。

——そこからは早送りみたいにいるんな場面が来ては過ぎていく。

どうあがいても逃れられない運命だともいうのか、母娘にもみくちやにされて着替えさせられていて。

見覚えのあるさつきさんの服とか……ふたりの言動からすると奥さんの昔の服とか、あるいはデパートへ引つ張られていってムダに高そうな服とか着させられて。

これが運命?

「あ」

初日から……昨日着ていたみたいなのワンピース着せられてる。

「……………」

「ご愁傷さまだな、「そっちの僕」も。

そりやあもう相当にだるつとした顔をしている。

さいっこうにイヤそうな顔をしていても、やっぱり眠そうってしかわからなくて。

サイズ的にもかがりがふたりに分裂してまとめて襲いかかってきたようなものだし、むしろこうして眺めてる僕の方がいろいろとマシだったのかも……いや似たり寄ったりか。

だけど——ただ見た感じでは。

嘘をつき続けて悩んでいる様子がないのだけはうらやましいな。

最初から何にも隠さないで全部さらけ出してたら眉間に皺寄らないんだ。



そうしてお隣さんに家ぐるみでお世話になって。

背が届かないからって居候みたいになって夏を迎えて。

……なんらかの理由をつけられてさつきさんの部屋に寝泊まりさせられて。

いや、なんでかはよくわからないけど、なんでか。

——そうしているうちに何かをきっかけにしてゆりかが、続けてかがりが、りさりん

とさよが。

レモンとメロンとりさりんとメガネロングっていうあの4人と知り合ったらしい。

あの、夏休み最終日に「もう友だちなんだからみんな呼び捨てにして」って言われて下の名前でひとりひとり呼び呼ばされた……なんでだ……そのみんなが、さつきさんを加えておんなじ場面で会話をしている。

「……………」

夢って無意識の世界だし、だからつじつまなんて合わなくてもいいわけ。

だからこれは——僕の願望。

「誰にも嘘をつかないでよかった」っていう未来、いや過去か、それを妄想した夢なのかもしれない。

魔法さん関係のストレスでざくざくしていた僕の心を、こうやって都合が良くって見えて気持ちのいい夢を見て癒やしているうちにたまたま意識が起きちやつたみたいなの、そういう感じなのかも。

……見ていてうらやましいって思うくらいだな。

無意識にでもこうしてきつと楽だったはずの光景を見るだけで。

嘘を嘘で塗り固めていって誰にも本当のことを、何一つ偽らないで。

過去も年齢も性別も………僕っていうものを、何一つ偽らないで。

偽らないで、最初っからぜーんぶ本当のことしか言わなかったら、こうしてもっと  
ずっと楽に自然体で人に交われるんだとしたら。

「……羨ましい」

そんな夢にいつまでも浸っていたいくらいに幸せな光景なんだ。

## 27話 回想・又は過去・4 / 4

「は——……」

他人の幸せを見るとため息が出るって言うのは女の人の特徴かって思ってたけど違ったらしい。

いやまあ今の僕も肉体は女なんだし否定はできないけど他分別の理由。

心から望んでいるのが目の前で見えていると……こう、ため息しか出ないんだ。

「いいなー」ってうらやましさと「ずるいなー」っていう妬ましさがブレンドされた感じ。でも完全に現実とは違う展開をしているのを見せつけられるから「お隣さんたちにお世話されているあつちの僕」と「そうじゃなかったこつちの僕」とを別人として見るようにもなつてきている。

まあ夢だし。

夢って都合良いものだし。

それでもつて夢つてのはおかしいのにおかしくないもんだし……って思ったんだけど。

「……えっ」



今までののは……ちよつと思ふところはあつたりはするものの、けどただの仮想的な展開だつて考えていつも見ている映画とかみたいにはぼーつと見ていられたんだけど……なんだか様子がおかしなことになってきている。

夢の内容がおかしな方向へと転がりはじめてきているっていう感触。

だつて今までは「今までのこつちの僕」が経験したようなできごとを「あつちの僕だつたとしたら？」つて感じにI Fな空想として再現していた感じしかなかったのに、なんだか……そう。

なんだか、この夏休みを終えたような時点から夢の中の展開がひとり立ちしちやつていくかのようで。

だつて僕の目の前のスクリーンにはすでに紅葉を迎えた山からの景色が広がつていて。

ということとは季節は今を……残暑を通り越して秋になっているはずで。

それもそこそこに標高の高い山の風景だからつまりは11月くらいにはなっているはずで。

だからだから今の僕からしてみたら「2か月は先を進んでいるかのようなありえない未来」へと突き進んでいることになる。

まあ夢だし、明晰夢でもこうして意識ははつきりとあつたとしてもつじつまが合わな

いつていうのもありえるんだろうけど……だけど今までが今までだったし、なんだかこう、もしやもしやする。

たとえるなら楽しもうとしていた作品のネタバレを不意打ちで食らっちゃったときみたいなの？

それともちよつとだけわくわくしながら引いていたクジが紙の感触とかで「あ、3等くらい微妙なやつが当たっちゃってるみたいだな……」って分かつちやっただときみたいな、そんな感じ。

そうして……この感じは温泉かなにか。

あるいは火山の麓とかよりも上の観光地。

そういうところによくある日帰り温泉っぽいところの更衣室。

僕がひん剥かれている光景。

もちろん当然ながら全裸だ。

思わず目を背けたくなるような幼い女の子の体の上に銀色の髪の毛が腰を通り越した辺りまでさらさらと囲んでいて、周りの女の人たち……ほとんどおばちゃんとかだけ……がガン見してる。

そんな光景を「誰かの目から見ているような」そんな違和感。

その僕は珍しく羞恥心を感じているらしく……当たり前か、周りは肌をさらした女性

ばかりだもんな……脚のあいだだけを隠して、指摘されてもう片手で胸も隠すっていうのを教わるようにしている場面だ。

どうしようかって戸惑っているらしい僕が貝の上にいるような格好をしてから少ししてようやく……文学少女さんがタオルを手渡してくれている。

あ、お風呂でもメガネするんだ。

まあ僕もそうだったし見えないもんな……じゃなくて、その……彼女たちも、いるんだ。

既に下着姿になっちゃってるからどうしても視界に入っちゃって居心地悪い。

僕、こんな妄想するほどの男じゃなかったんだけどなあ……罪悪感が。

あ、りさりんの大きい。

あ、眼鏡さんの中々。

あ、メロンさんがぶるんってなってる。

あ、レモンさんのは……揺れない安心感。

「……………」

頭を全力で打ち付けたい衝動に駆られたけど体が動かないから起きたら自戒しておこう。

……なんで僕はこんなの見てるんだろう。



さつきまでとは違つてはつきりとしている。

しかもこの目で「今」見ているみたいにフルカラーで、やけに鮮明で。

さつきとは違つて声はぼんやりとしか聞こえていないけど、でもさつきよりも解像度的なものが上がっているようで。

「あ」

……………見えちゃった。

その……3人とも、ちらちらと、そしてはつきりと。

だつてタオル……してないんだもん。

いや、タオルを体に当てるは居るけど横から見えちゃうみたいな感じで。

いくら女の子同士だからつてもうちよつと隠したら………あ、男でもぜんぜん隠さない人多いからもしかして普通なのかな。

いつの間にか僕自身の視点になつてるけど、僕の視点だからこそ上も下も至近距離で、動くものだから……目がぱつと、本能的に、その……見ちゃうことになるわけで。

——僕とは違つてきちんと女の子らしくなっている彼女たちを。

ひとりひとり違う体つきの……かがりとゆりかなんかはずんぜん違うんだけど。

けどこれは目の劇薬だ。

えぐり取つてしまいたいほどの罪悪感だ。

目が覚めたら全力で忘れて、忘れられなかったら日帰りで一般人に座禅させてくれるお寺行ってあの木の棒で叩いてもらおう。

幼女だろうと煩惱があれば打ち付けてくれるだろう。

控えめに言って死にたい。

このまま突然死したくなってきた。

死んだ後のことなんてもうどうでもいいし。

もう思考をしたくない。

だってこの子たちと次に会うときが苦痛この上ないんだから。

ひとまわりも年下の子たちの裸を……夢とはいえ意図的じゃないにしても妄想し

ちやったなんて……それも細かく隅々まで。

いくら幼女な僕の肉体とか興味本位で眺めてみたさういうのから妄想したとは言っ

ても、女の子の見ちや行けないところを至近距離でじっくり見させられるってのは行け

ないんだ。

冒流だ。

……もし忘れられなかったら、せめてもの気持ちとして彼女たちの言うことを何でも

聞こう。

ゆりかには頼まれていた24時間耐久の映画とかアニメの鑑賞で、かがりには好きな

だけの着せ替え人形、りさりんさんはグチに付き合うのと、さよは一緒に読書。

さつきさんは……こつちの僕は現実ではまだこの体で会っていないけど、きつとその内に。

「……………」

いや、でも……少し変だな。

だって僕は僕以外の……幼女だとは言ってもぎりぎり女の子な僕自身の体以外に女の子の裸なんて直接目にしたことがないのに、どうしてここまでのはつきり……？

「っ!？」

唐突に視界がぶれて目の前が砂嵐みたいになる。

白黒になったり虹色になったりひとつの色しか見えなくなったりモザイクになったりして、まるでこ◆う◆い◆う◆も◆の◆ば◆っ◆かり◆になつて。

そしうてかろうじて見えていたみんなの裸体が完全に消えてほつとしたと思つたら、今度は空の中のかなかに吸い込まれるようにふわふわと引つ張られるような感覚で包まれて。

なにか白い／黒い球体？

それとも放射線状のなにか？

あるいはうずまき。

.....。

そういうものが無数にどこを見ても上も下も前も後ろも泡だらけな炭酸の中にあるような感じになっていつて、ぱちぱちとっていて、そういうのがいきなりぶわつと襲いかかってくるような感じがしたから動かない体を動かそうとしていきなり動けて、それでぎゅつと体を丸めて目をつぶってしゃがみこんで。

ぶつぶつぶちぶちという音が——唐突に消えた。



◆.....?」

光と音と五感がまとめて刺激されているような不快なような心地良いようなわけのわからない感覚が僕の中を通過することしばらく。

まだ何かあるのかもって思って少しばかりじーつとしていたけど、どうやらその気配はない。



というよりは何も無い……みたい？

まぶたの裏から見ると限りには明るさも常識的で、耳から手を少しだけ離してもそれに静かみたいで。

だから僕は、開いたとたんにもまぶしいのがまた光ってきたりしないかってゆーつくりと目を開いていつて。



———そうして、次に目に映ったのは。

……くるくると飛んでいる白い鳥たちとその奥のもくもくとした雲と、そのはるか先の水色に近い青空。

それがみんな水平線に乗っかっていて。

その一本の線の下のは浜まではみんな、透き通って緑がかった……エメラルドグリーンっていうんだっけ、そんな海の水で埋め尽くされていて。

空からは鳥たちの声とたまに吹く風の音、遠くからの波の鈍い音やなんだか分からないけど大きいなにかの音、近くからは規則的に波が砂を薄く覆ってから少しだけ引っ張りながら引いていく音。

つまりはどこかの海の砂浜の光景の中に僕はひとりでしゃがんでうずくまっていた、  
……らしい。

「……………」  
振り向いてみれば見たこともない、けどひと目で南国だつてわかるような植物がわん  
さかと生えていて。

そのもつと奥のほうには低いながらもいくつかの山がそびえていて。  
というところはここは少なくとも南の島……かどうかわからないけどそんな雰囲気  
のところ。

「びっ!？」

不意打ちで足に冷たい感覚が来て口から漏れた僕の声が空まで響く。

どうやら波打ち際よりも少しだけ海の方にいたらしい。

あわてて何歩か下がる。

たしたし、と砂を踏みしめる音。

……………あれ、はだしだ。

けつこうに熱い砂の感触が、濡れちやつたからか指のあいだに張り付いている砂の感  
触が、さっきの冷たい海の感触が、指の股に残っている。

「……………」

さつきまでと違って今度は体の感覚があつて動かせて、視点も感覚もは完全に僕自身。

さつきみたいに近いところにあるスクリーンから僕とそのまわりを見ていたようなのとは別物だ。

それにびつくりすると今みたいな情けない声が出るのっていつもの僕だしな。

「……………  
???

ぼーつとしていてもなにも起こらないみたいだからちよつとだけさくさくと砂を歩いて、さつきまで立つて……………うずくまっていたところへ戻ってちよつとだけ水を触ってみる。

……………冷たい。

「……………しよっぱっ」

あまりのしよっぱさで何度かぺっぺつと吐き出してなんとかツバで中和された感じの口の中は、まるで夢じやないみたいに現実感がある。

ちよつとじやりじやりするし。

砂が入つちやつたらしい。

やだなあ……………。

もういつかいしよっぱくなりながら口の中をすすいで立ち上がると、脚からおしり、

背中、髪の毛へと重力を感じる。

一緒に視界も砂浜すれすれから地上1メートルへと上がり。

「……………」

……明晰夢つて、こんなにはつきりするものなんだろうか。

さつきまでのでも充分以上にクリアだったっていうか現実ときほど変わらない感じだったのに、これじゃまるで完全に現実じゃないか。

……なるほど、そりゃあ明晰夢に躍起になる人がいるわけだ。

これだけ五感があつて好きに動けるつてことは、その……訓練次第でお望みのシチュエーションを作り出せばいくらでも好き放題できるし。

もしどんな場面でも作り出せるつてなれば、普通の人ならいろんな欲望があるわけだから。

さく、さく。

もやもやとしているまま突っ立っていたらしい僕の後ろの方から、なにか……いや、人の足音が近づいてきて。

でもそれを前もつて分かつてたらしい僕は別に怖かったりしなくつて。

「……………」ありや？ あなた、もしかして」

振り向いた先には……腰までの長い髪の毛を僕と同じようにだらんと流すようにし

ていて、不思議な感じの幾何学模様の入った服を着ていて、背が高くって、でも……服のせいもあるんだろうけど……でも、胸と腰回りからスレンダーって感じで。

……まるで「今の僕を色違いにしてからをそのまま成長させたような女の子」が、けど今の僕とは違ってくりくりつとした感じの濃い色の目を向けている、……中学生くらいの女の子がいて。

遠い南の島の砂浜に僕みたいにぼつんとふたりきりになっていて。

「もしかして……『響』……なの……？」

「……さあ？」

そんな彼女も僕も、おんなじようにかしげた頭からさらさらと髪の毛が風に吹かれるのに任せて立っていた。

## 28話

「――」

1 / 4

「ちゃんとして来てね？」

「……………」

「返事は？」

「はー」

夢の中なのに、いつものごとく年下なのに背が高い女の子に年下として手を引かれてうねうねうねうねとした道をずーっと歩き続ける。

夢の中なのに。

夢の中くらい好きにしたいんだけど身長差はトラウマになっているらしい。

でもお姉さん精神みたいなのを發揮している女の子を振りほどくのは不可能だつていうのも知っているから、ちよつとだけでもやつとしながら引つ張られるのに任せて……前の僕ならまだしも今の僕じゃ現実では絶対にムリな距離を、かなりの速さでさくさくさくさくとひたすらに歩く。

この辺の記憶はどこのをくつつつけてるんだらうなーとか思いながら歩く歩く。

そのうちに握られた手を真横に持つていかれてときどき僕の肩がその子の腕に当た

るポジションに。

僕の肩が黒髪の子の二の腕くらいだからやっぱり背丈の差は圧倒的。

僕はいっつになつたら対等な相手と巡り会えるんだろう。

「ねえ、聞いてる?」

「うん、聞いている」

「ほんとー?」

「本当だよ」

ちよつとももの思いに沈もうとすると敏感に察知されるけどいつもの会話術で乗り切る。

だってこの子どうでもいいことしか話してないっぼいし、夢の中の存在だし。

でも僕は相当な子供扱いをされている模様。

まあいつもの通りにちっちゃいもんなあ……少なくともぱつと見で最低でも中学生って見ることができるとこの子よりはずつとな。

もう慣れたけど。

夢の中だし、もう僕のこととは肉体年齢相応の小学生でいいや。

夢の中くらいは正直になろうって思うし。

僕が自覚して知覚して実感してもいるこの肉体年齢を僕の作り出した夢の中でごま

かすことなんて不可能だろうし。

……だけども夢の中でくらは元の体か……せめてこの子くらいに育っている、僕が成長できた姿を自慢したいところだった。

夢だったら念じたりしたら変わるかも？

「むーん」

「どうしたのよ『響』……くすつ。そういうとこ、ホント響そつくり」

念じたけどムリそうだった。

そもそもイメージ力が不足しているらしい。

あとはそうなりたいていう強い意思も。

今の僕はこういうちっこいものだって思い込んじゃってるからなあ……。

「それでね、あのとんがってるのが島いちばんのお山で、そのふもと……あ、わかる？

ふもとって。そ？ そのお山の手前に広がっているのが島で2番目に大きい町で――

「……ねえ聞いてる？」

「うん」

「んでね、資材が追いついてないからこのへんはまだかんたんな木造の家がほとんどでね？ ……聞いてて理解できてる？ 学校の先生とかの話と違って」

「わかっているよ。さつきから言っているけど僕は大人で」



「ならいいの！ 『響』は私よりも年下でしょ？ ムリしなくつてもいいの」

何回言つても僕が年下つて決めつけられるらしい。

話を聞かないと怒る、聞いても怒る、でも答えが意に介さないともつと怒る。

めんどくさい系のJCさんらしい。

女の子つて躁鬱激しいよね。

見た目はゆりか以上かがり未満なのに、中身は足して3か4で割つたような年齢くらいなのかもな。

まるで今の僕とは正反対だ。

またまた怒り出さないようつてなるべく顔色をうかがいながら受け答えをしながら、さらにそれから脚が疲れないのをいいことに延々と歩かされ、ガイドされる。

人の少ない観光地とかで説明して回つてくれるボランティアの人に絡まれちゃったときとかこういう感じだったなあ……その記憶を使っているのかな、これ。

これだけのペースで歩き続けても息さえ弾んでいないのを見ると、僕と同じようにこの子も疲れないらしい。

まあ夢だしリアリティなんてどうでもいいもんね。

おかげで口も舌もくるくると回つていて止まる気配はない。

「ねえ」

「聞いているよ」

「なら良いわつ、それでね……」

人工物といえば木と藁で作られたものしかなかった砂浜を過ぎ、軽い丘のあたりからはじめてだんだんと石へ、そしてなめらかな感じの不思議な材質でできた道へと合流し。

丘を越え。

山を越え。

……山？

……山だ。

歩いて山越えしちやつたんだ。

たいして高くなかったし視界が開けていたから忘れていたけど何にも意識しないで峠を越えていて、もう下りだ。

だからか植生も道の両側にいろんな種類の見たことがない木々と花とかが、等間隔に植えられている人工的なものになっているし。

そのまま下るかと思っただらまた登っているうちにごつごつしていた山とかも次第に小さくなって行って視界をさえぎるものがなくなってきた……と思っただら今度はいろ

んな建物。

みんなわりと新しいみたいだけど、でも道とおんなじでやっぱりコンクリートと木とアスファルトと金属を混ぜ合わせたみたい不思議な感じの材質でできているのを、見たことのない感じの建築様式を興味深く見続けて。

でもやっぱり大半の家は色も塗っていないのが多い木造。

ひとことで表してみるとファンタジーっぽいけどリアルっぽい景色？

なんだかよくわからない。

けど、こういうの大好き。

だからこんな夢見ているんだろうけど。

「……………着いたわ！　ここの中！　さあ入って入って！」

「だから転びそうになるからいきなり」

「あ、ちよつとそこに立って？　……………クリア。大丈夫ね、まああたりまえよねっ」

「……………」

……………まあ女の子っぽくなるほどに人の話聞かないのはもう諦めるしかないとい  
うか女性ってそういう生物だつてこの半年で諦め尽くしたから…………。

なんかひとときわメタリックで平面だけのばかりでかい建物に入ったと思つたら、あちこちの扉のそばで…………たぶんこれSF映画の要素も入ってきてるんだろうな、指を適当に

動かしたりしているお姉さんっ子を片目に、さつきよりもちよつとだけわくわくしながらぼーっと突っ立つ。

さつきよりはずつと楽しい。

僕だつて景勝地とかをぐるって回る遊歩道も好きだけど、それはそれとしてやっぱり大きな遺跡とかの方がその場に居て楽しいんだ。

それにしても随分遠かった気がする。

夢なんだからそう感じているだけで実際にはほとんど時間経っていないんだろうけどな。

夢って実はそんなに長く見ていなくてレム睡眠っていう規則的に来る短い時間帯限定で、しかも夢の中の時間は現実とは違って物理に縛られないから相当な早送りで見ているらしいし？

だからあつという間に……今までの経験から体感で10キロ以上20キロ未満くらいの、普通に歩いたとしたら休み休みでも何時間かかかるくらいの距離をお日さまがたいて移動しないうちにたどりついているわけだし。

いつもだつたらこうは行かない。

元の体だつたらまだしも……戻らないかなあ。

いや、こんな夢わざわざ見ているんだからひよつとしたらあり得るかも？

だとしたらいつもみたいにだぶだぶな元のシャツとぱんつだけっていう寝るときの定番の格好にしておけばよかった。

昨日に限ってはいろいろあつて白い少女用のワンピースだし。

……………ホワイトローリータを着た成人男性。

それも、特に女装とかしているわけじゃないのが寝ている場面。

「うげえ」

「？」

想像しただけで吐き気もするし、なにより目覚めがきつとぱつぱつでびりびりと服をはじけさせながら痛みで迎えることになるっていう想像で激しくげんなりした。

もう半年もひげさえ剃っていないし剃れなかったものだから、それはそれはもうひどいことになってきていること間違いない。

でもやっぱり元の……………これまで慣れ親しんできて、子ども扱いも女の子扱いもされな  
い女の子じゃないごく普通の男が嬉しいんだけどな。

「……………終わったわ、それじゃ『響』こっちよ」

「はいはい」

「ちよつと、『はい』は一回なのよ？」

「はい……………」

危うく口答えをしようとしてしまった。

ぐつと抑えられた僕はえらい。

慣れていてもいう。

もう少し慣れと自制心が足りなかつたらちよつとだけ言い返して、それで怒りだしたこの子をなだめるのにまた何分も費やす必要があつただろう。

その心配は今の僕には無い。

男は何も言わないでいる自制心。

これあるのみだ。

他には何も無い。

女性相手に男は無力なんだ。

そんなことをぼんやりしていると離されて楽になつていたはずの手が握られる。

機械的なものを操作しているときだけは置いてきぼりにしてくれて嬉しかったんだけど、それ以外はやっぱ指を組まれて有無を言わさずにどんと中の方へと案内されていく。

指、絡める必要まではないんじゃない……？

でも女の子だからこういうもんなのかも。

進む家に歩く音も金属的なものになつていて、映画とかでよく見るような感じにな

んかこう、なにかしらの基地の中とかでかい船の中とかそんな感じの作りになってきていて退屈しない。

けどときどきやたら古い感じの作りとか材質とかあるし、なによりも書かれていますプレートとかの字がひとつも読めない。

海外をうろついてたときに見て回った石造りの古い遺跡とかと未来を舞台にした映画の中の世界がほどよくミックスされている様子。

楽しいからいいけど。

こういう未知の空間ってロマンがあつてわくわくするし。

どうせなら初めからこんな感じの夢なら良かったのに。

ついでに言えばこういうところをひとり延々とただ黙って静かに冒険できるんだつたらもつともつと良かったのにな。

それなら何時間でも潜っていられる気がするし。

ホラー展開にさえならなければ。

でも夢だから文句言つてもしょうがない。

しよせんは夢なんだ。

狭い通路を進んだと思つたら倉庫的な空間が広がる。

工場みたいなの、けど機械はそんなに多くないっていう機能性しか考えられていない空

間。

もちろん電気は蛍光灯とかじゃなくって壁全体が光っている的な映画とかでよくあるやつ。

僕こういうの好き。

隅まではつきりと見えてちらほらと機械とか箱とかアームとかがあるけど、別に怖い感じは受けないし。

なんとなくだけで映画で闇の取引されてる感じ。

自然物しか無い浜辺から延々と歩いて不思議な町見たと思ったら人工物しか無い工場。

一貫性も論理性も脈絡もあつたものじゃない。

夢だつて分かつてないとおかしくなりそう……。

扉開けたらお次は海の中とか空とか宇宙とかファンタジックな生きものが出てくるとかそういう唐突さが無いんだつたら、まあそれなりに楽しめるってやつだ。

ロジックは大事。

女の子の会話みたいな支離滅裂なのはどうも苦手だ。

耐性は着いたって言つても苦手なものは苦手なんだ。

その辺は女の子たちには分かつていて欲しいところ。



「ちよつと待ってて？ ごめんね？ 何回も」

「いや別に」

「たぶんこのへんに………あ!!」

……イヤな予感がしたと思ったら耳もとでつかい声でキーンとなる。

………この子のモデルは絶対にくるんさんだ。

歩いていて「いいもの」を見つけたときのくるんさんとおなじだもん。

やはりトラウマになっているのか。

「お————い!! こつちよ———!!!」

子供って声おつきいよね。

人っていつから大声出さなくなるんだらうね。

しかし腕が指ごと絡め取られているから耳をふさぐことすらできないって……。

「ちよつとこつち来てくれる———たいへん！ なの！ よ———!!!」

頭がぐわんぐわんする。

僕は大きな音が嫌いなのに。

でもこの声も脳内で再現されてるものなんだらうなって思ってた我慢する。

全身で声を上げている黒髪の子にゆさゆさ揺られながら僕はなすすべもない。

「あり？」

「ほよっ」

変な声する先に目を合わせると、倉庫にある程度規則性を持って置かれている物のうちひとときわ大きい装置から女の子たちの顔が覗いていた。

金色と赤髪の女の子たち。

鮮やかすぎる髪色は隣の真つ黒な女の子のそれよりはつきりと夢の住人って分かるもの。

そんなに派手な髪の毛を腰まで伸ばしている子たち。

——また、僕とおんなじような顔をした子たち。

今の僕を何歳か成長させた姿って感じの若干慎ましって感じの体つきをした子たち。

黒、金、赤の色違いで中学生から高校生くらいの僕がオリジナルの僕を囲んでいる形になる。

……なんか合体とかする？

もしかして。

ほら、夢の中で秘められた自分と合体って定番だし……って、さすがにゆりかに影響受けすぎだな。

## 28話

「——」

2/4

「ちゃんとついて来てね？」

「……………」

「返事は？」

「はい」

夢の中なのに、いつものごとく年下なのに背が高い女の子に年下として手を引かれてうねうねうねうねとした道をずーっと歩き続ける。

夢の中なのに。

夢の中くらい好きにしたいんだけど身長差はトラウマになっているらしい。

でもお姉さん精神みたいなのを發揮している女の子を振りほどくのは不可能だっていうのも知っているから、ちよつとだけでもやつとしながら引つ張られるのに任せて……前の僕ならまだしも今の僕じゃあ現実では絶対にムリな距離を、かなりの速さでさくさくさくさくとひたすらに歩く。

この辺の記憶はどこのをくつつつけてるんだろうなーとか思いながら歩く歩く。

そのうちに握られた手を真横に持つていかれてときどき僕の肩がその子の腕に当た

るポジションに。

僕の肩が黒髪の子の二の腕くらいだからやっぱり背丈の差は圧倒的。

僕はいつになつたら対等な相手と巡り会えるんだろう。

「ねえ、聞いてる?」

「うん、聞いている」

「ほんとー?」

「本当だよ」

ちよつとも思いに沈もうとすると敏感に察知されるけどいつもの会話術で乗り切る。

だってこの子どうでもいいことしか話してないっばいし、夢の中の存在だし。

でも僕は相当な子供扱いをされている模様。

まあいつもの通りにちっちゃいもんなあ……少なくともぱつと見で最低でも中学生って見ることができるとこの子よりはずつとな。

もう慣れたけど。

夢の中だし、もう僕のごときは肉体年齢相応の小学生でいいや。

夢の中くらいは正直になろうって思うし。

僕が自覚して知覚して実感してもいるこの肉体年齢を僕の作り出した夢の中でごま

かすことなんて不可能だろうし。

……だけどせて夢の中でくらは元の体か……せめてこの子くらいに育っている、僕が成長できた姿を自慢したいところだった。

夢だったら念じたりしたら変わるかも？

「むーん」

「どうしたのよ『響』……くすつ。 そういうとこ、ホント響そつくり」

念じたけどムリそうだった。

そもそもイメージ力が不足しているらしい。

あとはそうなりたいていう強い意思も。

今の僕はこういうちつこいものだって思い込んでるからなあ……。

「それでね、あのとんがつてるのが島いちばんのお山で、そのふもと……あ、わかる？

ふもとって。 そ？ そのお山の手前に広がっているのが島で2番目に大きい町で—

——……ねえ聞いている？」

「うん」

「んでね、資材が追いついてないからこのへんはまだかんたんな木造の家がほとんどでね？ ……聞いてて理解できてる？ 学校の先生とかの話と違って」

「わかっているよ。 さつきから言っているけど僕は大人で」

「ならいいの！ 『響』は私よりも年下でしょ？ ムリしなくってもいいの」

何回言っても僕が年下って決めつけられるらしい。

話を聞かないと怒る、聞いても怒る、でも答えが意に介さないともつと怒る。

めんどくさい系のJCさんらしい。

女の子って躁鬱激しいよね。

見た目はゆりか以上かがり未満なのに、中身は足して3か4で割ったような年齢くらいなのかもな。

まるで今の僕とは正反対だ。

またまた怒り出さないようってなるべく顔色をうかがいながら受け答えをしながら、さらにそれから脚が疲れないのをいいことに延々と歩かされ、ガイドされる。

人の少ない観光地とかで説明して回ってくれるボランティアの人に絡まれちゃったときとかこういう感じだったなあ……その記憶を使っているのかな、これ。

これだけのペースで歩き続けても息さえ弾んでいないのを見ると、僕と同じようにこの子も疲れないらしい。

まあ夢だしリアリティなんてどうでもいいもんね。

おかげで口も舌もくるくると回っていて止まる心配はない。

「ねえ」

「聞いているよ」

「なら良いわつ、それでね……」

人工物といえは木と藁で作られたものしかなかつた砂浜を過ぎ、軽い丘のあたりからはじめてだんだんと石へ、そしてなめらかな感じの不思議な材質でできた道へと合流し。

丘を越え。

山を越え。

……山？

……山だ。

歩いて山越えしちやつたんだ。

たいして高くなかつたし視界が開けていたから忘れていたけど何にも意識しないで峠を越えていて、もう下りだ。

だからか植生も道の両側にいろんな種類の見たことがない木々と花とかが、等間隔に植えられている人工的なものになっているし。

そのまま下るかと思つたらまた登つているうちにごつごつしていた山とかも次第に小さくなつて行つて視界をさえぎるものがなくなつてきた……と思つたら今度はいろ

んな建物。

みんなわりと新しいみたいだけど、でも道とおんなじでやっぱりコンクリートと木とアスファルトと金属を混ぜ合わせたみたい不思議な感じの材質でできているのを、見たことのない感じの建築様式を興味深く見続けて。

でもやっぱり大半の家は色も塗っていないのが多い木造。

ひとことで表してみるとファンタジーっぽいけどリアルっぽい景色？

なんだかよくわからない。

けど、こういうの大好き。

だからこんな夢見ているんだらうけど。

「……………着いたわ！　ここの中！　さあ入って入って！」

「だから転びそうになるからいきなり」

「あ、ちよつとそこに立って？　……………クリア。　大丈夫ね、まああたりまえよねっ」

「……………」

……………まあ女の子っぽくなるほどに人の話聞かないのはもう諦めるしかないというか女性ってそういう生物だつてこの半年で諦め尽くしたから……………。

なんかひとときわメタリックで平面だけのばかりでかい建物に入ったと思つたら、あちこちの扉のそばで……………たぶんこれSF映画の要素も入ってきてるんだらうな、指を適当に



動かしたりしているお姉さんっ子を片目に、さつきよりもちよつとだけわくわくしながらぼーっと突っ立つ。

さつきよりはずつと楽しい。

僕だつて景勝地とかをぐるって回る遊歩道も好きだけど、それはそれとしてやっぱり大きな遺跡とかの方がその場に居て楽しいんだ。

それにしても随分遠かつた気がする。

夢なんだからそう感じてはいるだけで実際にはほとんど時間経っていないんだろうけどな。

夢って実はそんなに長く見ていなくつてレム睡眠っていう規則的に来る短い時間帯限定で、しかも夢の中の時間は現実とは違つて物理に縛られないから相当な早送りで見ているらしいし？

だからあつという間に……今までの経験から体感で10キロ以上20キロ未満くらいの、普通に歩いたとしたら休み休みでも何時間かかかるくらいの距離をお日さまがたいて移動しないうちにたどりついてはいるわけだし。

いつもだつたらこうは行かない。

元の体だつたらまだしも……戻らないかなあ。

いや、こんな夢わざわざ見ているんだからひよつとしたらあり得るかも？

だとしたらいつもみたいになぶだぶな元のシャツとばんっただけっていう寝るときの定番の格好にしておけばよかった。

昨日に限ってはいろいろあつて白い少女用のワンピースだし。

……………ホワイトローリータを着た成人男性。

それも、特に女装とかしているわけじゃないのが寝ている場面。

「うげえ」

「？」

想像しただけで吐き気もするし、なにより目覚めがきつとばつばつでびりびりと服をはじけさせながら痛みで迎えることになるっていう想像で激しくげんなりした。

もう半年もひげさえ剃っていないし剃れなかったものだから、それはそれはもうひどいことになっていること間違いない。

でもやつぱり元の……………これまで慣れ親しんできて、子ども扱いも女の子扱いもされない女の子じゃないごく普通の男が嬉しいんだけどな。

「……………終わったわ、それじゃ『響』こっちよ」

「はいはい」

「ちよつと、『はい』は一回なのよ？」

「はい……………」

危うく口答えをしようとしてしまった。

ぐっと抑えられた僕はえらい。

慣れているともいう。

もう少し慣れと自制心が足りなかったらちよつとだけ言い返して、それで怒りだしたこの子をなだめるのにまた何分も費やす必要があつただろう。

その心配は今の僕には無い。

男は何も言わないでいる自制心。

これあるのみだ。

他には何も無い。

女性相手に男は無力なんだ。

そんなことをぼんやりしていると離されて楽になつていたはずの手が握られる。

機械的なものを操作しているときだけは置いてきぼりにしてくれて嬉しかったんだけど、それ以外はやっぱり指を組まれて有無を言わさずにどんと中の方へと案内されていく。

指、絡める必要まではないんじゃない……？

でも女の子だからこういうもんなのか。

進む家に歩く音も金属的なものになつていて、映画とかでよく見るような感じにな

んかこう、なにかしらの基地の中とかでかい船の中とかそんな感じの作りになってきていて退屈しない。

けどときどきやたら古い感じの作りとか材質とかあるし、なによりも書かれているプレートとかの字がひとつも読めない。

海外をうろついてたときに見て回った石造りの古い遺跡とかと未来を舞台にした映画の中の世界がほどよくミックスされている様子。

楽しいからいいけど。

こういう未知の空間ってロマンがあってわくわくするし。

どうせなら初めからこんな感じの夢なら良かったのに。

ついでに言えばこういうところをひとり延々とただ黙って静かに冒険できるんだっつらもつともつと良かったのにな。

それなら何時間でも潜っていられる気がするし。

ホラー展開にさえならなければ。

でも夢だから文句言ってもしょうがない。

しよせんは夢なんだ。

狭い通路を進んだと思つたら倉庫的な空間が広がる。

工場みたいな、けど機械はそんなに多くないっていう機能性しか考えられていない空

間。

もちろん電気は蛍光灯とかじゃなくって壁全体が光っている的な映画とかでよくあるやつ。

僕こういうの好き。

隅まではつきりと見えてちらほらと機械とか箱とかアームとかがあるけど、別に怖い感じは受けないし。

なんとなくだけど映画で闇の取引されてる感じ。

自然物しか無い浜辺から延々と歩いて不思議な町見たと思つたら人工物しか無い工場。

一貫性も論理性も脈絡もあつたものじゃない。

夢だつて分かつてないとおかしくなりそう……。

扉開けたらお次は海の中とか空とか宇宙とかファンタジックな生きものが出てくるとかそういう唐突さが無いんだつたら、まあそれなりに楽しめるってやつだ。

ロジックは大事。

女の子の会話みたいな支離滅裂なのはどうも苦手だ。

耐性は着いたって言つても苦手なものは苦手なんだ。

その辺は女の子たちには分かつていて欲しいところ。

「ちよつと待つてて？ ごめんね？ 何回も」

「いや別に」

「たぶんこのへんに……………あ!!!」

……………イヤな予感がしたと思つたら耳もとでつかい声でキーンとなる。

……………この子のモデルは絶対にくるんさんだ。

歩いていて「いいもの」を見つけたときのくるんさんとおなじだもん。

やはりトラウマになっているのか。

「お————い!!! こつちよ———!!!」

子供って声おつきいよね。

人っていつから大声出さなくなるんだらうね。

しかし腕が指ごと絡め取られているから耳をふさぐことすらできないっていう……………。

「ちよつとこつち来てくれる———たいへん！ なの！ よ———!!!」

頭がぐわんぐわんする。

僕は大きな音が嫌いなのに。

でもこの声も脳内で再現されてるものなんだらうなつて思つて我慢する。

全身で声を上げている黒髪の子にゆさゆさ揺られながら僕はなすすべもない。

「あり？」

「ほよっ？」

変な声する先に目を合わせると、倉庫にある程度規則性を持って置かれている物のうちひとときわ大きい装置から女の子たちの顔が覗いていた。

金色と赤髪の女の子たち。

鮮やかすぎる髪色は隣の真つ黒な女の子のそれよりはつきりと夢の住人って分かるもの。

そんなに派手な髪の毛を腰まで伸ばしている子たち。

———また、僕とおんなじような顔をした子たち。

今の僕を何歳か成長させた姿って感じの若干慎ましいって感じの体つきをした子たち。

黒、金、赤の色違いで中学生から高校生くらいの僕がオリジナルの僕を囲んでいる形になる。

……なんか合体とかする？

もしかして。

ほら、夢の中で秘められた自分と合体って定番だし……って、さすがにゆりかに影響受けすぎだな。

## 28話

「――」

3 / 4

金髪と赤髪が黒髪に合流してひそひそひそひそと話し合っている。

そして夢の中でもひとりぼっちにされる銀髪な僕。

……いや、こうやってほどよい距離感が保たれているっていうのが好きなんだからいいんだけど。

むしろ集合時間以外はぼんやりさせておいてほしいんだ。

「いえ、でもそれは！」

「でもでもっ、だって現にこうして『こっち』にいるし。 ゆーれーとか思念体とかじゃなかったよ？ 触れたしあつたかかつたし良い匂いだったし」

「ゆ、ゆーれーとか怖いこと言わないでよアメリカちゃん……」

女の子の相談してるところって何十回も見えてきたけど似てるよなあ。

こうして見てみるとみんなほとんどおんなじような……ちよつと硬めな素材でできたコートみたいな、だけど涼しそうな証拠として生地は薄いらしくって光が少し透けている感じの春コートみたいなものを着ているらしい。



これはきつと、かがりに連れ回されるときにマネキンが来ていた服かなんかを僕の無意識がフアンタジックな模様とかつけてアレンジしただけなんだろうな。

その証拠に3人とも髪の毛の色こそ3色カラフルだし、でも僕と同じような感じにだらんと伸ばしたままで僕と同じようにちよつとだけ短い毛がはねているところがあるっていうのも変わらない。

体つきも顔も僕の成長後の理想をほぼ再現した感じだから文字通りの色違いって感じだしなあ。

理想とはいっても今の理想だけ。

さすがに大人になるのならこれじゃまだ足りないし。

一応はかがりみたいに世話焼き……お姉さんぶりたがる黒と、その黒と仲がよさそうな赤、それと引つ込み思案なのかちよつと腰が引き気味な金、と性格は違うみたいだけど誤差の範囲でしかない。

まるでゲームの色違い程度の違いしか無いもんな。

ぱつと見てわかりやすいのはいいんだけど……もうちよつとこう、違いとか作れなかったんだらうか僕の脳みそ。

みんなदैいつもの僕みたいにぼけーと立っていたら色以外では見分けつかなささうだし。

これが僕の想像力の限界なんだろう。

「それじゃあ、あなたはもしかして……？」

話が終わったのか黒よりも動きが大きい赤がにじり寄ってくる。

ちよつとつり目っぽいつて思ったけど違つて、ただ目がもつときらきらしてる感じっただけか。

「え、う………うそ………じゃないの、ほんとうに………？」

もはやへっぴり腰つて感じの金色が赤に隠れて僕を見てくる。

僕よりもまぶたが重そうな感じだけど眠そうじゃないのはきつと、ちよつとは成長してほつぺたがしゅつとしてるからそう見えてるだけ。

「そうなの!!」

「!?」

どんつと衝撃を受けてびくつてしたら……けっこう離れていたはずの僕に体当たりをかましていて後ろから抱きつかれていた様子。

いつの間にか後ろに回り込まれていたらしい。

そしておもむろに僕の肩へ彼女の両手の、僕の背中へ彼女の……お腹から胸の、僕の頭の上には彼女のあごの重量が乗ってくる。

ああうん、これはかがりやりさりんの感覚を再現してるだけだな。

女の子って本当にべたべたしたがるよね……男同士じゃありえないくらいに。

「重いよ……」

「ふふふんっ！ 私たちは『響』よりもずーっとお姉さんだからねっ」

重いって言っても怒らない。

……この子本当に女の子？

あごが頭のとっぺんをぎりぎり痛くない感じに押し込んできて、ちよつとだけある感じの胸がうなじを包んでくる。

香ってくるのは今まで……あの4人とお隣さんくらいだけ……今井さんとかもあるか……とにかく僕の限られた経験の中でもまだ嗅いだことのない海の香りって感じの香り。

海外の人の香水とか日焼け止めって独特の匂いしてるけどちよつとこんな感じ。

僕この匂い好きかも。

あとでシャンプーの銘柄をいやいやこれ夢だから僕の妄想だから危ない危ない、ついいつもの思考回路になりそうだった。

「そうなのよ！ この子がソニア……じゃなくって『響』！ おんなじ『響』みたいななのよ!! たぶん」

ソニアって誰？

うしろからほつぺたをびよんとされてるけど僕は大人だし、そもそも夢ってことはこの子たちも僕の一部だし、怒らない怒らない。

「なんでもか分からないうんだけどね、だけど私がさつき通知があつたから行つてみたならなんと！ このぼーつとしたちっちゃい感じの『響』を北の海辺で見つけたのよ!! すぐくない!?!」

「え、でも、それって……………」

拾得物とか保護した小動物みたいな扱いをされているのはきつと、この子のモデルになつたかがりのせい。

起きたらもう一緒に服を買いに行つたりはしないって……………もちろんムリだつてわかつてるけど彼女にこそうメッセージを飛ばして憂さ晴らしをしないと。

それくらいはしても良いだろう。

いつも世話を焼いてあげてるんだからさ。

それにこういうもやもやして全部一個一個の積み重ねなわけで、つまりはみんなかがりのせいだろうし。

とにもかくにもあの中身が詰まっていけないメロンが悪い。

脂肪だけは詰まっついていて単体でも重いけど。

とにかくあの子が悪いと思ったら悪いんだ。

僕は悪くない。

「でも、やつぱりおかしいよ……いくらなんでもそんなのあるはずが」

「そうよねー、あとこんだけちっちゃくなってるのも変だし。それじゃあまるで『響』がこつちに来たとき……あ、ダメだったつけ言っちゃ？」

「止めといたほうが……」

主語と目的語を省略する仲の良い女の子たち同士の話が続いているけどもう慣れてる。

僕は興味ないからどうでもいいけど。

話し振りからして僕は犬とか猫扱いらしく、頭上でなにやらを相談しつつ代わる代わる3人におんなじようになで回された。

ちなみに体のバリエーションもないらしく、みんなおなじくらいの身長で胸もおなじくらい大きかった。

抱きつかれ慣れていると背中とかうなじの感覚でだいたいの大きさがわかるしなあ……悲しいことに抱きつかれる経験だけは豊富だから。

……胸はともかく身長、せめてこの子たちくらいあればなあ……。

僕の頭はどうも中学生にとってちょうど置きやすい位置にあるらしいし。

みんなによく手とか置かれるしな。

縮んだりはないってわかってはいても気になるものは気になる。

『響』を連れてくる途中に考えたんだけど……」

「それしかないかなあ……う？」

「うーん……難しいねえ……」

と思つたらもういつかい順番に後ろから抱きしめられるツアーらしい。

やわらかいし温かいしみんな似た感じの匂いするからいいけど。

この子たちが現実にいる年下の女の子たちじゃないって分かつてるから罪悪感とか無しにされるがまだ。

おんなじように髪の毛の手入れで苦労しているはずの、背が高いぶんだけ髪の毛もさらに長いはずのこの子たちは撫でるときにくしゃくしゃにしてきたりしないのだけが救い。

代わりに手で梳かれるから地肌をくすぐられる感じになつていくけど。

頭のとつぺんの毛つて短いのかあるしくせつ毛たちは跳ねやすいもんだから、いけど梳かしたらなるべく触りたくない……これ夢だったから関係ないのか。

ということはこれもまた僕がふだん抱えているストレスの一端つてことで。

……そろそろ言いたいことはちゃんと言おう。

そう決心する。

だいたい僕のほうが……少なくとも中身は年上なんだし、触らせてあげているだけだし。

親しき仲になりつつあるとはいえいつも僕が我慢している関係っていうのは子ども相手とはいえよくないだろう。

どうせ口はすぐに動かないからそもそも抜け出たりしないといつまでも……だし。

撫でるのが下手だったりそこじゃないところを撫でてくる人の手からさつと身をかわす猫みたいに、スキを見て抜け出ないとならない。

「……これは一時的なものだとは思うのよ。だってここまでっていうのは予想されていなかったし。けどこれ以上のかなにかとかわからないじゃない？ だから念のため、ふたりのどっちかでもいいから直接報告して連れてきてくれる？ タチアでもノーラでもどっちでもいいから」

なにやら黒髪の子のトーンが下がっている。

あれ、なにか僕怒られるようなことしかしたっけ？

ああいや、これは怒っているほうのトーンじゃなくて大切に内緒な話をするときの感じか。

「……………」

「なんか不機嫌そう……？」

「『響』もおんなじなのねえ」

途中から耳を澄ませた感じだと、どういふ話の流れだったのかは聞いていなかったかはつきりとわからないけど……どうやら僕の身柄をどうこうするって方向らしい。

僕がいつ目を覚ますのかってことかな？

早く起こして欲しいっていうのがついに夢の進行に反映し出したか。

いい傾向だ。

醒めない夢とか悪夢でしかないもんな。

「なんだったらあなたたちに預けて私が行ってきてもいいんだけど……」

「でも私、『響』はアメリカ、あなたと一緒にだったんだからあなたはそばにいたほうがいいと思うよ？」

「そう……だね、誰かが話しかけていたほうがきつと気が楽だし……私じゃうまくお話しできないからなあ」

でもなんで僕はいつもお世話される側なんだ。

たまにはお世話する側でも良いって思うんだけど？

「なら別にタチアでもいいんじゃないの？」

「え、いいの？」

「ダメだよ、タチアちゃんだとぐいぐい行き過ぎちゃうでしょ？」



「あ——……」

「やっぱりアメリカちゃんがいいよ。この中でいちばんのお姉さんだし」

「ぐぬぬ……」

アメリカ、タチア、ノーラ。

なんでここへ来て洋風な名前なんだろう。

まったく聞き覚ええない感じの響きだから覚えづらいんだけど。

とりあえずひとりだけ覚えよう、黒はアメ……黒飴……アメリカと。

よし。

お姉ちゃんぶるのが黒アメさん。

今はそれだけ充分だ。

人の顔と名前を覚えるのが苦手な僕は人がたくさんいるときはとりあえずで話しやすそうな誰か一人だけ覚えるようにしてる。

そうするとちよつとだけ気が楽になるし、話しかけなきゃ行けないときにもあわあわしなくなるんだ。

「ないとは思うんだけど、もしこのままになっちゃったら……だし」

「そうね、今日はようやくのおやすみなのにまたひとりでどっか行っちゃって。どうせまた連絡つかないだろうし。なら私とノーラで手分けして来たほうが早いんじゃない

ないかな？」

「うん……………そうかも。お話しできるアメリカちゃんとタチアちゃん、どっちかはここで一緒にいてあげてほしいし」

赤がタチアちゃん……………じゃなくってタチアで金色がノーラか。

……………夢の中なんだからもつと覚えやすい単純な名前にしてほしかったなあ。

僕の無意識が自動生成した名前だからか案外素直に頭に入ってきているしそんな問題は無いんだけど。

あー、やったらに長い名前とか似た名前とかじゃなくってよかった。

ほら、文学とかだとやたら長い名前の人って多いし。

「あれはもともとが奇跡みたいなことだったし……………予測できないこういう事態も充分にありえそうだね。できるだけ早く伝えないと、かなあ」

頭の上であごの動きと一緒につぶやくのが聞こえたと思っただらようやく金色の……………ノーラって子からのハグから解放された。

ようやくできたこのスキに2歩3歩と後ずさって、もとい前にずさつとしてこれ以上猫の扱いを受けないようにと試みる。

普段からの学習だ。

「そう？ ならタチアは……………船のほうに。ノーラは島を回ってくれる？」

「ええ」

「い、い、い」

金色がノーラ、赤がタチア。

黒はなんだっけ？

「私はこのへんで『響』と待っておくわね。……けっこー歩いてきたし、これ以上どっか連れ回しても困っちゃうし？ だからといってひとりにするのは私たちも不安だし。ひととおり見て回ってもいなかったらまたここへ来てちようだい？」

「いや僕は一人の方が」

「了解よっ！」

「はいっ！ アメリちゃんも『響』ちゃんのお世話、お願いしますっ」  
「……………」

僕とタチアとノーラの声がびったり重なって誰にも聞かれなかった。

夢の中でも僕はこうなのか……まあ現実の再現だしな。

落ち込みそうになったところでしょうせんは夢だと立ち直る。

起きて覚えていたら発声練習とかも毎朝しようって思う。

せめて「あれ、今なんか言った？」って聞き取ってもらえるくらいには成長したい。

声って普段から使っていないとどんどん小さくなるもんだし。

でも夢の中だからしょうがないんだけどな。  
夢の中くらいは理想の僕で居たいところだけどそれが難しいんだろうなあ。

## 28話

「——」 4/4

「は……」

他人の幸せを見るとため息が出るって言うのは女の人の特徴かって思ってたけど違ったらしい。

いやまあ今の僕も肉体は女なんだし否定はできないけど他分別の理由。

心から望んでいるのが目の前で見えていると……こう、ため息しか出ないんだ。

「いいなー」ってうらやましさと「ずるいなー」っていう妬ましさがブレンドされた感じ。でも完全に現実とは違う展開をしているのを見せつけられるから「お隣さんたちにお世話されているあつちの僕」と「そうじゃなかったこつちの僕」とを別人として見るようにもなってきた。

まあ夢だし。

夢って都合良いものだし。

それでもって夢ってのはおかしいのにおかしくないもんだし……って思ったんだけど。

「……えっ」

今までののは……ちよつと思ふところはあつたりはするものの、けどただの仮想的な展開だつて考えていつも見ている映画とかみたいにはぼーつと見ていられたんだけど……なんだか様子がおかしなことになってきている。

夢の内容がおかしな方向へと転がりはじめてきているつていう感触。

だつて今までは「今までのこつちの僕」が経験したようなできごとを「あつちの僕だつたとしたら？」つて感じにI Fな空想として再現していた感じしかなかったのに、なんだか……そう。

なんだか、この夏休みを終えたような時点から夢の中の展開がひとり立ちしちやつていくかのようで。

だつて僕の目の前のスクリーンにはすでに紅葉を迎えた山からの景色が広がつていて。

ということは季節は今を……残暑を通り越して秋になっているはずで。

それもそこそこに標高の高い山の風景だからつまりは11月くらいにはなつていないはずで。

だからだから今の僕からしてみたら「2か月は先を進んでいるかのようなありえない未来」へと突き進んでいることになる。

まあ夢だし、明晰夢でもこうして意識ははつきりとあつたとしてもつじつまが合わな

いつていうのもありえるんだろうけど……だけど今までが今までだったし、なんだかこう、もしやもしやする。

たとえるなら楽しもうとしていた作品のネタバレを不意打ちで食らっちゃったときみたいな？

それともちよつとだけわくわくしながら引いていたクジが紙の感触とかで「あ、3等くらい微妙なやつが当たっちゃってるみたいだな……」って分かっちゃったときみたいな、そんな感じ。

そうして……この感じは温泉かなにか。

あるいは火山の麓とかよりも上の観光地。

そういうところによくある日帰り温泉つぼいところの更衣室。

僕がひん剥かれている光景。

もちろん当然ながら全裸だ。

思わず目を背けたくなるような幼い女の子な体の上に銀色の髪の毛が腰を通り越した辺りまでさらさらと囲んでいて、周りの女の人たち……ほとんどおばちゃんとかだけど……がガン見してる。

そんな光景を「誰かの目から見ているような」そんな違和感。

その僕は珍しく羞恥心を感じているらしく……当たり前か、周りは肌をさらした女性

ばかりだもんな……脚のあいだけだけを隠して、指摘されてもう片手で胸も隠すつていうのを教わるようにしている場面だ。

どうしようかって戸惑っているらしい僕が貝の上にいるような格好をしてから少ししてようやく……文学少女さんがタオルを手渡してくれている。

あ、お風呂でもメガネするんだ。

まあ僕もそうだったし見えないもんな……じゃなくて、その……彼女たちも、いるんだ。

既に下着姿になっちゃってるからどうしても視界に入っちゃって居心地悪い。

僕、こんな妄想するほどの男じゃなかったんだけどなあ……罪悪感が。

あ、りさりんの大きい。

あ、眼鏡さんの中々。

あ、メロンさんがぶるんってなってる。

あ、レモンさんのは……揺れない安心感。

「……………」

頭を全力で打ち付けたい衝動に駆られたけど体が動かないから起きたら自戒しておこう。

……なんで僕はこんなの見てるんだろう。





さつきまでとは違つてはつきりとしている。

しかもこの目で「今」見ているみたいにフルカラーで、やけに鮮明で。

さつきとは違つて声はぼんやりとしか聞こえていないけど、でもさつきよりも解像度的なもの上がっているようで。

「あ」

………見えちゃった。

その……3人とも、ちらちらと、そしてはつきりと。

だつてタオル……してないんだもん。

いや、タオルを体に当てては居るけど横から見えちゃうみたいな感じで。

いくら女の子同士だからつてもうちよつと隠したら………あ、男でもぜんぜん隠さない人多いからもしかして普通なのかな。

いつの間にか僕自身の視点になつてるけど、僕の視点だからこそ上も下も至近距離で、動くものだから……目がぱつと、本能的に、その……見ちゃうことになるわけで。

——僕とは違つてきちんと女の子らしくなっている彼女たちを。

ひとりひとり違う体つきの……かがりとゆりかなんかはぜんぜん違うんだけど。

けどこれは目の劇薬だ。

えぐり取つてしまいたいほどの罪悪感だ。

目が覚めたら全力で忘れて、忘れられなかったら日帰りで一般人に座禅させてくれるお寺行ってあの木の棒で叩いてもらおう。

幼女だろうと煩惱があれば打ち付けてくれるだろう。

控えめに言って死にたい。

このまま突然死したくなってきた。

死んだ後のことなんてもうどうでもいいし。

もう思考をしたくない。

だってこの子たちと次に会うときが苦痛この上ないんだから。

ひとまわりも年下の子たちの裸を……夢とはいえ意図的じゃないにしても妄想しちゃったなんて……それも細かく隅々まで。

いくら幼女な僕の肉体とか興味本位で眺めてみたそういうのから妄想したとは言っても、女の子の見ちゃ行けないところを至近距離でじっくり見させられるってのは行けないんだ。

冒読だ。

……もし忘れられなかったら、せめてもの気持ちとして彼女たちの言うことを何でも聞こう。

ゆりかには頼まれていた24時間耐久の映画とかアニメの鑑賞で、かがりには好きな

だけの着せ替え人形、りさりんさんはグチに付き合うのと、さよは一緒に読書。

さつきさんは……こっちの僕は現実ではまだこの体で会っていないけど、きつとその内に。

「……………」

いや、でも……少し変だな。

だって僕は僕以外の……幼女だとは言ってもぎりぎり女の子な僕自身の体以外に女の子の裸なんて直接目にしたことがないのに、どうしてここまではつきり……？

「っ!？」

唐突に視界がぶれて目の前が砂嵐みたいになる。

白黒になったり虹色になったりひとつの色しか見えなくなったりモザイクになったりして、まるでこ◆う◆い◆う◆も◆の◆ばっかりになつて。

そしうてかろうじて見えていたみんなの裸体が完全に消えてほつとしたと思つたら、今度は空の中のなにかに吸い込まれるようにふわふわと引つ張られるような感覚で包まれて。

なにか白い／黒い球体？

それとも放射線状のなにか？

あるいはうずまき。

.....

そういうものが無数にどこを見ても上も下も前も後ろも泡だらけな炭酸の中にいるような感じになっていって、ぱちぱちとしていて、そういうのがいきなりぶわつと襲いかかってくるような感じがしたから動かない体を動かそうとしていきなり動けて、それでぎゅつと体を丸めて目をつぶってしやがみこんで。

ぶつぶつぶちぶちという音が————唐突に消えた。



「.....?」

光と音と五感がまとめて刺激されているような不快なような心地良いようなわけのわからない感覚が僕の中を通過することしばらく。

まだ何かあるのかもって思っただけしばらくしていただけ、どうやらその気配はない。

というよりは何も無い……みたい？

まぶたの裏から見る限りには明るさも常識的で、耳から手を少しだけ離してもそれなりに静かみたいで。

だから僕は、開いたとたんにもぶしいのがまた光ってきたりしないかってゆーつくりと目を開いていつて。



———そうして、次に目に映ったのは。

……くるくると飛んでいる白い鳥たちとその奥のもくもくとした雲と、そのはるか先の水色に近い青空。

それがみんな水平線に乗っかっていて。

その一本の線の下の方まではみんな、透き通って緑がかった……エメラルドグリーンっていうんだっけ、そんな海の水で埋め尽くされていて。

空からは鳥たちの声とたまに吹く風の音、遠くからの波の鈍い音やなんだか分からないけど大きなかの音、近くからは規則的に波が砂を薄く覆ってから少しだけ引つ張りながら引いていく音。

つまりはどこかの海の砂浜の光景の中に僕はひとりでしゃがんでうずくまっていた、  
……らしい。

「……………」  
振り向いてみれば見たこともない、けどひと目で南国だつてわかるような植物がわん  
さかと生えていて。

そのもつと奥のほうには低いながらもいくつかの山がそびえていて。  
ということはここは少なくとも南の島……かどうかわからないけどそんな雰囲気  
のところだ。

「びっ!？」

不意打ちで足に冷たい感覚が来て口から漏れた僕の声が空まで響く。

どうやら波打ち際よりも少しだけ海の方にいたらしい。

あわてて何歩か下がる。

たしたし、と砂を踏みしめる音。

……………あれ、はだしだ。

けつこうに熱い砂の感触が、濡れちゃったからか指のあいだに張り付いている砂の感  
触が、さっきの冷たい海の感触が、指の股に残っている。

「……………」

さつきまでと違って今度は体の感覚があつて動かせて、視点も感覚もは完全に僕自身。

さつきみたいに近いところにあるスクリーンから僕とそのまわりを見ていたようなのとは別物だ。

それにびつくりすると今みたいな情けない声が出るのっていつもの僕だしな。

「……………??？」

ぼーっとしていてもなにも起こらないみたいだからちよつとだけさくさくと砂を歩いて、さつきまで立つて……………うずくまっていたところへ戻ってちよつとだけ水を触ってみる。

……………冷たい。

「……………しよっぱっ」

あまりのしよっぱさで何度かぺっぺつと吐き出してなんとかツバで中和された感じの口の中は、まるで夢じゃないみたいに関実感がある。

ちよつとじやりじやりするし。

砂が入つちやつたらしい。

やだなあ……………。

もういつかいしよっぱくなくなりながら口の中をすすいで立ち上がると、脚からおしり、



背中、髪の毛へと重力を感じる。

一緒に視界も砂浜すれすれから地上1メートルへと上がり。

「……………」

……明晰夢って、こんなにはつきりするものなんだろうか。

さつきまでのでも充分以上にクリアだったっていうか現実ときほど変わらない感じだったのに、これじゃまるで完全に現実じゃないか。

……なるほど、そりゃあ明晰夢に躍起になる人がいるわけだ。

これだけ五感があつて好きに動けるってことは、その……訓練次第でお望みのシチュエーションを作り出せればいくらでも好き放題できるし。

もしどんな場面でも作り出せるってなれば、普通の人ならいろんな欲望があるわけだから。

さく、さく。

もやもやとしているまま突っ立っていたらしい僕の後ろの方から、なにか……いや、人の足音が近づいてきて。

でもそれを前もって分かってたらしい僕は別に怖かったりしなくって。

「……………ありや？ あなた、もしかして」

振り向いた先には……腰までの長い髪の毛を僕と同じようにだらんと流すようにし

ていて、不思議な感じの幾何学模様の入った服を着ていて、背が高くって、でも……服のせいもあるんだろうけど……でも、胸と腰回りからスレンダーって感じで。

……まるで「今の僕を色違いにしてからをそのまま成長させたような女の子」が、けど今の僕とは違つてくりくりつとした感じの濃い色の目を向けている、……中学生くらいの女の子がいて。

遠い南の島の砂浜に僕みたいにぽつんとふたりきりになつていて。

「もしかして……『響』……なの……？」

「……さあ？」

そんな彼女も僕も、おんなじようにかしげた頭からさらさらと髪の毛が風に吹かれるのに任せて立っていた。

## 29話 「お姉ちゃん／姉さん」 1／3

この体になつてから食欲はかなり減つた。かなりつて言うのはざつくりと半分くらい。

食欲自体は前からいあるんだけど、いざ口にしてみるとすぐにお腹がいっぱいになつちやうつていう胃の容量の問題なんだろうね……身長150にも届かないしね……。

だつて胃の容積つてその人のこぶし大つていうし。

それならコンビニのおにぎりいつでもお腹がいっぱいになつちやうのは当然。

だけどこれには抜け道があつて水分だけなら問題ないらしい。

つまりは夕方からはお酒で占められているわけだけど、その前までの時間つていうのはコーヒーとか紅茶とかジュースとかの飲み物でかつての食欲に対する今のか細かい食を補うような形で、ヒマさえあれば適当ななにかを喉へ流し込んでいるわけ。

そういう意味では今ここで夢の中でもまたごくごくと冷たいものを喉で味わつているつていうのもまた……僕が現実で満たし切れていない本能を満足できる形で再現しているんだろう。

だって、前の僕と今の僕とで変わった行動はこのくらいだしなあ。  
代償行為っていうやつ。

煙草とかお酒を止めようとするのと別の何かでストレス発散したくなるあれだ。

とつても悲しいことだけどこれはそういうものなんだろう。

まあおいしいんだからどうでもいいか。

今回は夢の中なわけでカロリーも何もかもゼロだしな。

うん、やっぱりお酒呑めて良かった。

この体でのお酒なんて人に見つかるわけに行かないもんね。

「ふう……………」

息を止めて一気にごくごくくと、時間をかけてごくごくくと、舌とほっぺたの内側と舌のつけ根と喉で……………もちろんこれもまた妄想んだけど、黒飴さんからもらったジュースを味わっていた僕は満足のため息をひとつ。

中身はミックスジュースっぽいなにかだ。

繊維がつぶつぶしているから外国でよくある目の前で絞ってくれるアレみたいな感じで、これもまたきつと過去の僕のすっかり忘れちゃっていた記憶を使っているんだろう。

触覚までしつかりあるんだから、そりゃあ味覚も僕を満足させるくらいはあるよ

なあ。

できればここにもお酒がほしいところだった。

念じれば出て来ないかなあつて今でもこれにアルコール分を込めている。

今のところ、この試みは無力だけでも。

「ぶいああ……」

僕に合わせて無理やりがんばっていたらしい黒アメさんことアメリカさん。

このくらしいの年ごろの子って呼び方に困るよなあ……の口からもまた気の抜けた音が響く。

「たつくさん歩いたもんだからおいしいわよね！　これが働いたあとの一杯つてやつよね！」

「うん、多分」

労働の後だったからお酒が欲しかったな、僕は。

「あそこはなーんにもないところだったからどつちにしろムリだったんだけど、でもあそこ……あ、『響』がいた砂浜ね？　あそこだったらきつと……じつとしてたら暑くなるけどときどき日陰とかに入ったりして気持ちいい日差しを浴びて！　そんでもって海を見ながらーって感じできつときつともーつとおいしかったかも！　こんどやりましょ!!　……あ、でもー、あつちには冷蔵庫とかないし……こうして体をさんざん動か

したあとにぐーっといっぱい飲むのもまたいいものよね『響』？」  
「うん、そうだね」

夢の中だったら炭酸のしゅわつと感も味わえないかなあ。

「やっぱり？　そうよね、やっぱりあなたも『響』だものね！　そりゃあそういうのもおんなじよね！」

「うん、だろうね」

飲み食いしているときなら女の子っていう生きものと一緒にいてもわりと楽。

だって意識の大半が味覚に行っているもんだから、いつもよりも雑な返事しかしなくたって気がつかれることがないし。

だからいつもかがりにはコンビニとかデパートでちよくちよく見つけては一粒ずつ食べられるようなお菓子を与えているし、りさりんさんもおんなじだし。

ゆりかには効果は薄目だけど、でもお菓子なら一緒に食べておけば若干は静かになる。

……さよは僕とおんなじタイプだからその必要はないし、こういう餌付けもとい貢ぎものをあげたことがないからわからないけど。

ほとんど会話らしい会話しなくともいいときまであるし、楽なのはいいことだ。

夢の中だし遠慮はいらないしって手渡されたおかわりをごきゅごきゅと一気飲みす

る。

「……ね、ねえ『響』？」

「なに？」

「『響』はさ、そのー。……最近元氣してる？」

「……………」

ろくにコミュニケーションが取れない父親か君は。

見た目が僕の成長版で色違いだしなんだか……………哀愁を感じてしまう。

ある意味僕自身を正しく正確にちゃあんと反映しているとも言えるけど。

その気持ちはものすごくわかる。

久しぶりに会うと話題見つけづらいよね。

まあ僕たちは初対面なわけだけど。

「……………あ。……………っていうのもなんか変よねえ……………どう言えばいいのかしら？ ねえ

『響』？」

「どうなんだろうね」

なにか変なのかも分からないから適当に返す。

「初めまして？ それとも久しぶりなのかなあ？ かといって肝心の『響』にはそのへん

のくわしいことあんまり言っちゃいけないだろうし。 うーん、これはどっちになるの

かなあ」

「どうなんだろうね」

よく分からないから首をかしげておく。

「聞いている？ 『響』」

「もちろん」

「あ、よかった。それでね、えつとその、ね。……困ってること、なんかない？ 私でも……少しくらいはなにか助けになれるかもしれないし。何かあるんなら……あるんだと思うんだけど、相談乗るわよ？」

「相談……ね」

「そうっ！ なにかある？」

「……………ん……………」

なんだか食い気味のアメリカさん。

ずっと2人で居たから話すことがなくなってきたのか、あるいは景色っていうちよくちよく変わるものだったから話し下手だけどガイドとかがして時間を稼いでいただけなのか、いろいろ飛ばしての話題は僕の悩みらしい。

なんだか自分相手のセルフヒーリングのような気もするんだけど……そもそもそれを僕の意識自身が自覚しちやっっているから意味がないし、なにより話題の変え方が下手



で唐突すぎて逆に安心してきた。

でも困ったことねえ。

「……まあまず、とりあえずはだけど」

「なにになに!? なんでも聞いて!」

「このよくわからない状況……それにいちばん困っているかな」

「あう……それは、ええつと……」

なんでもとかあんまり言わない方が良いと思うよ?

でも子供って「なんでも」とか「一生に一回の」とか好きだよね。

……さすがに意地悪だったかな、子供に対して。

「まあ無理ならしょうがないよ。でもここに連れてこられた理由は知りたくないな。

だって僕は別にあのままあのときの砂浜にいてもよかつたんだし。 帰る方法う知り

たいかな」

僕は知っている。

夢の中で水に関係するのってイコールトイレに行きたいんだって。

物心ついてから粗相をしたことがない身としては今日も安全に過ごしたいんだ。

もし漏らしてたら?

しよげる。

だからこそ早く起きたいんだけど一向に醒める気配のない夢なんだ。きつと漏らさないって思っておこう。

「え……えーつと……ごっ、ごめんね……？ それはそうなんだろうーけど、けどねえ、私じゃムリなのよ。もちろん聞いてあげることにはできるんだけど解決できるかどうかはちよつと……」

なんかダメらしい。

まだ起きちゃダメってこと？

気まずそうな雰囲気醸し出しはじめたアメリカさん。

「といつてもどうできるわけでもなく「でもでも」とか言いながらもじもじしつつ、僕の肩に腕を乗せながらうんうんうなっている。

「解決できるとしたら、えつと……さっきの。あ、あの子たちは私の妹なんだけどね？」

あの子たちの名前は覚えてくれた？」

「な、名前……そういうのつていきなり言われると覚えていたような気がするのにお吹っ飛んじやつて、とっさに出てこなくなるんだ。

「あははっ、その顔！ほんつと、おんなじなんだから！いーい？元氣なのがタチアでおとなしいのがノーラ！あと私はアメリカ！ちゃんと覚えてね？」

「あぁ……うん」

僕としては初めて聞いた名前をすぐに覚えるっていうのがムチャぶりなんだと思うんだけど、女の子ってみんなこうだからなあ……。

いや、女の子っていうより人と仲良くなるのが好きな人かな。

でも、いくらがんばっても覚えられないものは覚えられない。

それに今回の場合はさらに見た目がみんなほとんど同じでまとめて会ったんだし無理でしょ。

「で、なんだっけ？」

「……ここから出るには？」

「ああそうそう、そうだったわね！ 難しいけどとりあえずあの子たちが帰ってきてからで良い？ で、それ以外に！ それ以外で！ それ以外ですよ？」

つまり僕が聞きたいことは全部NGと。

なんでも聞いてつてわりにはとことんダメなんだね。

「それ以外で最近悩んでいることとか困っていることとか無い？ なんでもいいから言ってみて？ たとえばねー、その、えーつと。『響』の周りで起きていることとかがいいんじゃないかな？ お姉ちゃんのおすすめよ、おすすめっ！」

この押し強さはこの前の山で会った人たちの再現かな？

まったくよくできていること。

これが夢だつていうんだからすごい。  
でもまあ、他に何か……か。

「……………」

「わくわく……わくわくっ」

……どうせここはもうじき覚めるはずの夢の中でこの子も実在しないどころか僕の意識の一部なんだし、なんだかどうも僕の無意識はストレスを抱えているらしくつてあの程度は吐き出さないとこの会話劇場が終わらなさそうなんだ。

ならさっさと話しちやうか……ただの自己対話みたいなものだけどしなないよりマシなんだろうし、きつと僕の脳みそはこのことについて悩んでこんな夢見てるんだろうし。

「なら」

「!! なんでも言つてちようだいっ!!」

僕の髪の毛を黒くして少しだけ大人びた……他の子もそうだけとお肌は静脈が透けるくらいなのは変わらないみたい……まだまだ子ども、そんな彼女の顔が息がかかりそうなくらいに近くなつていたからちよつとだけ顔をそらしつつ口にする。

別にジュースと海の匂いしかしないから臭いとかじゃなくつて、僕はもともと近距離は苦手だから顔を背けるんだ。

あ、隅のほうのクレーンがいくつか一斉に動いてる。

なにをしているんだろう……じゃなくって。

「……………ここのところ、少しだけど」

「うんうんっ！」

「自己嫌悪で参りそうになっていることがあるんだ。 アメリ、よかつたらそれについて聞いてもらえないだろうか」

「……………じ、じこけんお……………？」

「…………………………」

「と、とにかく私になんとかしてあげる！ まかせなしゃいつ！ ……あつ」

「…………………………」

口を押さえて真つ赤な顔になった黒髪な僕ことアメリさん。

「い、今のは……………そのお……………」

……………クレーンのことを考えるんだクレーンのことを。

いくらなんでもここで笑っちゃうのはかわいそう。

僕だつてそれくらいの配慮はできるはず。

この子はこの子なりに真剣に僕の悩みを聞いてくれようとしているんだからがんばって耐えるんだ。

それに嘸み嘸みなこの子を笑うってことはひいては僕自身を笑うことになるんだ。こうしてお腹の奥に力をぐっと込めればポーカーフェイスは保てるはず。

あ、でも嘸み嘸みとかかがりとの初対面を思い出すな……やっぱりこの子の原料はあの子か。

## 29話 「お姉ちゃん／姉さん」 2／3

「……」ほんっ！ とにかく何かイヤなことあったのね？ 会ったときからなんとなく思っていたの！ いいわ、しょーがないから私が相談に乗ってあげるんだから！」  
噛み噛みだったのは不幸な事故としてお互いの記憶から消してそのいつこ前の会話に戻ったアメリカさん。

「うん。 まあ、……嫌なこととか何と言えば良いのか……その」  
ずいっと顔を近づけてきた彼女から距離を置きながらどう話せば良いのかなって考  
える。

だって今の僕の状況ってとつてもややこしいことになっててさくつと説明できなさ  
そうだし。

細かくいちいち説明するのはめんどくさいし……だいたいこの子つて僕が作り出し  
た対話をするためだけの幻みたいなものだし別に「やっぱいいや」って言えば良いんだ  
けど。

でもいつか来るかもしれないときのためにシミュレートはしておいたほうがいいか  
もしれない。

こういう頭を使う会話って普段から口に出して……今は脳内だけ……何回も練習しないと上手に話せないって知ってるし。

——僕がこの体になったこと。

魔法さんが確かに存在すること。

人の認識まで変えられること。

日記帳を見せながら時間をかけて話せば納得はできなくても理解はしてもらえらうに説明できるだろうって思っていたんだけど、お隣さんにぼったりしちやっただけのあの慌てようを考えるに動揺していたりしたらムリっぼいし。

僕は突発的なことに弱いからまた同じようなハプニングがあつたとして、はたして次はちゃんと口を動かせるのかどうか非常に不安になってきたし。

「ふむ……」

「あ、おんなじクセね！ 難しいの考えてるのね！」

けど今は相手がエミュレートされたこの子だからどうせ「事情を知らない人物」っていう設定だけ全部知っているんだろうし、だったら簡単にぎっくりと……ちよつともやもやして寝落ちしたくなつた気持ちも伝えるだけでいいかな。

ちゃんと説明するときのこととかはまた後でだ。

大丈夫、ただの練習。



今は真つ黒な目になったりしないから大丈夫……。

「……僕がついてしまった嘘についてなんだけど」

「ふんふんっ」

「ずっと前からついている嘘を……止められなくて今でもつき続けているっていうのが、このところ辛くなってきたんだ。でも今さら嘘だつて言えないし言ったらどうなるか分からなくて……それでどうしたものか、迷っているんだ」

口を動かしながらついて出てきたような……けど、昨日の僕がああなったのは突き詰めればそういうことだったんだつて、すどんと来るようなものだった。

……やっぱり夢の中だからちゃんと口が動くんだろうか。

「ウソ……ウソ、ねえ？」

「なんだか軽いニューアンスしか込められていない「ウソ」つてのを何回も繰り返すアメリさん。」

いや、僕が言ったのは悪い「嘘」の方なんだけどなあ。

「くわしいこと聞かないとよく分かんないけど、そのウソつて『ごめん！ あれウソだったの！』つて言えない感じのものかしらね？」

「……………」

「……『響』がそんな顔するくらいなんだから、お菓子をこつそりひとくちのつもりでぜ

んぶ食べちゃったとかみたいな昨日私がした……おつとと」

うん、ほほえましいウソで羨ましい限り。

「……じゃなくて、そういう軽いものじゃなさそうねえ」

「君は昨日盗み食いをして？」

「そ。昨日ね、私、ソニアが隠してたどびきりのを………つて！ わつ、私のこと

じゃなくて今は『響』のことなんだからどうでもいいでしょっ」

どうやら黒髪な僕は、夢の中ではそういう人格と過去を持つているらしい。

……この体があんまり食べられないの、もしかしてこれもまたストレスになってたり

？

なんとかして解決策を見つけないとな。

ストレスって自覚ないの多いみたいだし。

そういう意味でも新鮮な自己対話だ。

「……いや、言おうと思えば言うことはできるんだ。できるんだけど………なんという

か」

「なんていうか？」

近いところにあつておんなじようなところの毛がぴよんと跳ねている黒髪を見ているうちに、さつきみたいにまた言葉が出てくる。

「……そうだ、これはで僕は多分………」

——顔が浮かんでくる。

ゆりか、かがり、さよ、りさ。

本来なら僕との接点がなかったはずの子たちの、顔。

「……本当のことを言って。言っただとして」

その子たちの……怒ったり泣いたりしている顔。

「僕が嘘つきで、今までのことが……なにもかもが嘘だったっていうのを知ったときの……知り合いの顔や、言われるだろう非難の声を聞くこと。それが、恐ろしくて怖い。

……そうなんだと思う」

「……わかるわっ！ 私もわかるっ、その気持ちっ!!」

「近い」

両手で、僕よりちよつとだけ大きいけど僕とおなじくらいぶにぶにしているほつぺたを押しのけようとする。

僕がせつかく思っていたのを言葉にできたのにこの子はもう……。

「辛いわよねっ、苦しいわよねっ！ 分かるのよ!」

「だから近い」

柔らかいほつぺたじゃ彼女の体重を支えきれず、もう少しでおでこか鼻か口がごつつ

んしそうでひやひやする。

どうして女の子っていうのはこう、興奮するとすぐに顔をセンチ単位まで近づけてようとするのか……男である僕にはついぞ理解が届かない感覚だ。

「少し離れてくれ」

「ひよっほひひひ」

しばらくむにむにしてやったりしてにらみ合いが続いていたけど、ふと目と目が合つて彼女がフリーズする。

そうしてさすがに気がついたのか一気に顔が赤くなつてきて、それからそろそろ手でガードしないで済むけどまだまだ充分に至近距離なところへ下がってくれた。

「な、なんだか暑いわねえ……」

「そうだね」

僕は空気が読めるからそう頷いておく。

落ちついたからさつき口について出たことばを反芻してみてなんだかするつと自己分析がうまくいって「ああ僕はそれで昨日はなんだか情緒不安定だったんだ……」って感慨深くなっていたら、もう少しでおでこがごつんしそうな距離までまたぐいつて来たアメリカさんのまつげまでが黒くなつていて目も明るく……あれ、こんな色◆◆だったっけこの子？

ともかくびっくりさせられたしジュースの匂いがかわらさず鼻と口から漏れているから、あと髪の毛がひたいにかかってくすぐったいからさっさと離れてほしいところ。

「落ちついたか？ なら離れて」

「私も分かるのよ『響』っ！」

聞いていない。

僕の相談じゃなかったの？

あ、多分目的忘れてるやつだこれ。

そしてすつと息を吸うアメリをみて「あ、これうるさいやつだ」って身構える。

「私もよくウソついて怒られるんだけどね？ でもね、ばれて叱られているときよりも叱られるのってすつごくイヤなんだけど、でもでも逆に！ 逆になのよね！ 逆にばれていないときのほうがずーっとどきどきして不安なのよね！ だけど本当のこと言ってもまた怒られるだけだし、でも言わないでいるのももやもやしてイヤだしって感じでほんと、どっちにしても辛くて苦しいのよねっ!!」

「う、うん、まあ……っ？」

ヒートアップするしてる人を見ると落ち着いちゃうあれ。

「やつぱりそうよね！ 『響』なら分かってくれるって信じてたわ！ そうよ、あるとき

もあのときもいつつも……」

ウソをしよつちゆうついでいるらしい。

そしてだいたいのウソならきつとみんなも分かっているから軽いんだろうな。

それくらいウソならきつとみんなも分かっているから軽いんだろうな。

だつてこの子、アメリカさんはウソをつくつて言つたつて……つまみ食いを隠すとかいたずらを黙つているとか忘れ物とかを……ごまかすとか……そういう感じで人を傷つけないウソしかつかなさそうだし。

つけなさそうつていうのは、かがり成分が多分に含まれているからだろう、たぶん。

あんまり深く考えることがなさそうなもの。

僕とは対極的な存在だ。

「……………でもね？」 『響』

うつうつしているときの僕とおんなじ表情をしていたアメリカはいつのまにか元気を取り戻して、ふたたび目の前にどアップになつていた。

両手を突き出すしぐさで今度はちよつとだけ引いてくれたけど相対位置は変わらないままで。

「そんなときはね、なるべく早く謝つちやえばいいのよ！ いさぎよく！ 思い切つて！」

「うん、でもそれができたら」

『ずっと』っていうのがどのくらいなのかわかんないけど、でも今の私たちにとつては今がいちばん早いだよ！ ソニアがそう言ってたわ!! 『過去は変えられないけど未来は選べるんだ』って！ それにいくらうまく隠せたり、たまたま気がつかれていなかっただけだったって、どうせいつかはバレて怒られるんだもの！ それにそれに怒られればすつきりするし！ 怒られたくないけど」

しよげている黒髪。

「怒られるあいだはとつても怖いし泣いちゃうし、後で何度かちくちく言われるけど……だからね！ 私、問い詰められたりする前に白状しちゃったほうがいいの！ 自分からごめんなさいするのって思いついたの！ どう？ これが私が編み出した鉄則よ！」

どやっとしているアメリカさん。

そもそもそういうウソをつかないようにすればいいんじゃないや？

というかそういう怒られるようなことしなければ怒られる原因がないんじゃないや。

そう思うけど、横道をちゃんと修正してあげるとこれは僕の嘘についての会話なんだ。

だからウソを……嘘をついたらできるだけ早くにばらしちゃうのがいいっていうこ

の子のいう鉄則っていうのは、きっと僕が気持ちの上でも頭の中でも分かっていたこと  
のはず。

半年。

最初の出会いからっていうのは……ちよつと長すぎたから迷っていたんだ。

さすがに初めつからぜんぶまるごと嘘っていうのは、白状するにはいささか勇気が要  
りすぎる。

けど——今がいちばん早い……か。

「……………」  
「!!!」

「?」

「……………」響』がちやあんと聞いてくれるから感動してるの！ 嬉しいわっ！」

なんかふるふるしてるとって思ってたら感動してたらしい。

……もう少し人の話も聞くようにしましょう……。

「ソニアだったらそんな素直に聞いてくれないもの。あ、忘れるところだったわ、こ  
の鉄則なんだけどごめんなさいするのはコツがあるのよっ」

「コツ?」

さつきからちらちらと「ソニア」とかいう人の名前が出て来て気になるけどどうせ覚  
えられないし気にしないでおこう。



「そうー！ 怒る予定の人がとても嬉しそうにしていたりほーっとのんびりしているときだったり？ おいしいものとかお酒とか飲んでるときとかもいいわね！ そんな感じのときを狙ってうまーくごめんなさいするのね？ ……泣きたくなるくらいまでには怒られないで済むのよ!!」

さつきよりもさらにどやつてるアメリカさん。

ということとはどつちにしろ怒られるというわけか。

まあ非は僕らにあるし避けられないことではあるんだけど。

あとこの子なら怒られて毎回泣いているような気がするな。

なんとなくだけど。

「……『響』ならきつと軽いウソをつくような子じゃないだろうし、だからごめんなさいするっていうの、慣れていない……よね？ ……そ。それならせめて、怒っているときとか悩んでいそうな顔をしているときに言いさえしなければいいのよ。とにかくタイミングよ！ タイミングが大切なの！ 命なのよ！」

どんだんと自説もとい僕の本心を語ってくれる自称お姉さん。

この子を見ているとなんだか……そう、よく小さい子の面倒を押しつけられていたときのいたずらっ子とかをお世話していたときを何年ぶりに思い出すな。

そのときはまだ、父さんと母さんがいたときで。

……懐かしいな。

「……ふふつ……」

なんだか目の前でがいがい言っているアメリの話を聞き流しつつ昔のことを思い出していたら、なんだか、僕にしては珍しいことに自然と笑いつていうものがこみ上げてきた。

「……あつ!! 『響』、ようやく笑ってくれたつ!」

なぜか両手でほっぺたをぐにぐにとされつつ確かに今日ここで笑ったのは初めてか  
なってしまう。

唇をつつと端っこまで撫でられると、僕の口がほんの少しだけ笑っている感じになっ  
ているのが確認できる。

……ここまではつきりなってるのってそうそうない気がする。

「今日久しぶりに……いえ、初めて! 会ってからようやく見たけどいい笑顔ね! 私  
の鉄則を伝授したかいがあるってもものよ! だてに怒られ慣れてないんだから!  
……怒られるの怖いけど……」

喜んでいたと思ったら落ち込んでいる黒アメさん。

よくわからないことで勝手に喜んで落ち込むのってやつば女の子だよなあ。

この年になって知った女の子……女性というものの生きた。

もう遅いか？

いや、元の僕の年齢でもまだまだだし、きつと男にさえ戻れたらなんとかしてお仕事を探せたら、なんとかかなるはず。

僕で妥協してくれるお相手がいるかどうかはわからないけどな。

そもそも僕は◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆だしな。

…む、また変な感覚。

でも目の前で落ち込んでいる飴飴さんを見ていたらちよつと気が楽になってきた。

それにしても、見た目だけとは言っても僕の一部とはいっても子どもに諭されるなんてなんだかダサイ気がする。

ここに來てからのぜんぶの会話はみんな僕の意識というか脳みその産物ではあると思うけど、それでも…誰かに相談するっていうのは、うじうじしそうなときには効果的なんだな。

したことなくかったから初めて知った。

悲しいけど事実だからしようがない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆だつて、

たつたこれだけ話しただけで魔法さんの本領を知ってからずっとぐるぐるしていたのよりよっぽど早く気分がすっきりしているし。

「……………ああ、ありがとう……………『姉さん』」 ◆

なんだか意識がぼんやりしてきたしそろそろようやくやくい加減に夢が覚めるらしい。だから僕はいつもよりも口が軽くなっていたのか、口がぼつりとなにかを漏らしてから「？」ってなる。

姉さん？

いや、僕はひとりっ子だしそんな関係の年上の子とかも居なかったはずなのに？

……………まあ夢だし、変なこと考えることもあるか。

## 29話 「お姉ちゃん／姉さん」 3/3

初対面の女の子のこと「姉さん」とか言っちゃって恥ずかしい。

この歳にもなつて……いや幼くなつてるけど。

でも年下の子をお姉さん呼びわりしちゃうとかいう小学校とかで先生を「お母さん」呼びしちゃうのに近い……いや歳が上な分、より深刻な過ちだ。

ここが夢で良かった。

夢じゃなかったらのたうち回るくらいじゃ済まない恥ずかしさだ。

この子自身がお姉さん風を吹かしていたし別に問題はないだろうって思つてしのいでおく。

むしろ喜んでくれるんじゃないかな。

そうだ、きつと。

僕よりもずっと年下……今の僕よりは年上なのはもちろんだけど、まあ僕を成長させた姿だし？

頼れる人が父さんたちがいなくなつたあの日からずーつといなくなつたんだから、こうして妄想の世界でくらは精神的に頼れる存在がいてもいいんじゃないかな。

そう思い込んでおく。

思い込むのは得意なんだ。

「え、『響』？ 今なんて……じゃないわ!!」

頭にこつんと痛い感覚。

ほかりとされたらしい。

感覚的にげんこつじゃないけど軽いおこだ。

でも夢の中の被創造物から反逆された僕は、抗議の意味を込めてわざと頭をさすりつつアメリの顔を見てやる。

ぶんすかかって感じのふくれつぷりがそこにあつた。

……なるほど、今の僕がこうしてみせると一応は怒っているってニュアンスを表せるって感じか。

でもなあ……とつても、見た目以上に子どもっぽく見えてるからちよつとなあ……。

「そこは『姉さん』なんてのじゃなくって『昔』みたいに『お姉ちゃん♥』のほうが嬉しいかな!」

「そこに感情を込める理由は?」

「私が嬉しいのよ!」

「僕の気持ちは?」



だけどやっぱりいちばん適切な表現としてはすり切れてくるまで何十回も繰り返しビデオを見ているときみたい。

まだ低学年くらいのころに家にあつたビデオデッキで、古いテレビで観ていたあれ。ふと思ひ出したとき、ゆりかたちにあの現象について言ってみたことがあるんだけど現役JCたちには通じなかつたのを思い出す。

ゆりかときよつて言うちよつと前のこともなんとなく知っている子たちは反応こそしていたけど、現物を自分で使つた記憶がないしそこまでじやなかつたしなあ。

まあ僕だつて少し年上からしたら「そんな世代なんだね」つて感じなんだろうけども。時間つていうのは残酷だ。

まあムダにした僕にそれを言う権利はないけど。

「◆◆◆？ ◆◆◆」

だんだんと薄れていく明晰夢の向こうの子。

話している声は聞こえているんだけどそれを認識できていない感じ。  
 なんだか変な感じ。

「◆◆◆！！」

声つていう信号がぶつぶつ切れかかっている。



意識はぼんやりしてこないのに五感がぼんやりしてくるっていうまたまた新しい感覚を味わっていると、とうとう声自体も聞こえなくなってきた。体の感覚も薄れてきてい  
るらしい。

寝不足気味だったり疲れていたりして、でもまだ寝たくはないけどだるいからって横  
になつて意識が途切れる瞬間の感覚に似てるかも。

そんなのを意識している今に至っては、もう僕が夢の中で体を持っているっていう  
……目が覚める前の体の感覚なんだろうか……：そういうのがなくなつてもいるし。

とつても必死な感じになっているアメリをみているとなんだか申し訳ない気になつ  
てくるんだけど、夢っていうのはもともとコントロールできるもんじゃないんだから  
しょうがない。

あつちから僕はどう見えているんだろうね。

もう関係なくなることだけだ。

……でも、いつか。

いつかこの明晰夢を自力で見られるようになったら、また会えるんだろうか。

黒のアメリと金のノーラと赤のタチアに。

あとソニアって名前も聞いたかもしれないけど結局会わなかったな。

……いや、これがストレスの結果とか酔い潰れた結果だったりしたら、もう見ないほ

うが僕にとってはいいのかもしれない。

ただのセルフセラピーな空間なのかもだもんな。

」

ぼーっとしていたら視界がゆさゆさとしている。

黒アメさんがなにかを話していてすぐそばにいて。

……たぶん肩をつかまれてさつきみたいに揺すぶられているんだろう。

そのせいで視界が上下して余計に周りが見えづらいし見えなくなってくる。

……

……あ。

遠くのほうでクレーンの……先から赤髪の子と金髪の子。

タチアとノーラ。

もうじきに忘れるはずだった子たちが隅のほうから走ってきていてぎりぎり間で間に

合わなくて。

……?

もうひとり、誰かがいる？

誰かが走ってくる？

ざらざらになった視界の中でがんばって目を凝らす。

——その後ろからおなじように走ってくるのは彼女たちと同年くらいで。

——銀色の髪の毛をばさつと振りまいていて、最近お手入れを怠っているのかわりとぼさぼさとしている感じで、だけどなんだかムダにきらきらと輝いていて、体力がないのかそれとも不摂生なのかはわからないんだけどともかくインドアっぽいノーマよりも疲れた様子で。

それでも年相応に中学生くらい年齢相応の走り方をしていて、みんなとおんなじように硬そうだけど軽そうな服を……ちよつとばかり装飾が派手だけど……を着ていて。きつとかちやかちや鳴っているんだろう装飾と、服のせいかわらしさはうかがえない……女の子の域を出ない見た目で、でもよく見てみれば顔からは幼さが抜けていなくて、目を見開いていても眠そうで、つまりあの姿は



ん

薄い日の光が差し込んでいる僕の部屋の天井にぶら下がっているライト。

「……………んう」

横を向いてみれば、枕の横に置いている机の上の時計とかスマホとか読みかけの本とか。

「……………んー」

反対側を見てみれば、今日着るために用意していたらしい……………酔っていてもちやんとできたらしいな……………今日に着るはずの服が、上下、鏡の上に掛けられている。

——今の僕になってからの目が覚めて最初に見る光景が広がっている。

「……………」

僕の呼吸の音しか聞こえない静かな空間。

僕の部屋。

僕の匂い。

前の僕と今の僕のが混ざって、でもほとんど今の僕の……………小さい女の子の匂いになっている部屋の香りに包まれていて。

がばつと起き上がってみれば、たしかな僕の体の感触。

サイズは……………変わっていない。

どうやら夢の中で危惧した事態は起きていない様子。

そのまま着ていた白のワンピースのふっりふりも一切変わっていないくって、だから今この瞬間は僕が寝た次の時間って確定したわけで。

「……けど、ちよつと………ほこりっぽい？」

「気のせいかな。」

「……けほっ」

喉が、いがいがする。

壁に片方をくつつけているベッドも……お気に入りであったけど今の僕にとっては大きすぎて、けどいつのまにか慣れていた枕と、ベッドの反対側に……地震が来てもぎりぎりベッドと机のそばなら無事って感じにアレンジしてある本棚と、机の上の日記帳とパソコンとその上のカーテンと窓と。

「……ぼくのへや」

ちよつともぞもぞしていたらなんだか肩周りとかがきつい気がする。

「……もしや」

よく見てみると、なんと！

……裾はワンピースなのにその上からパジャマを来ている形になっている。

なんでふりふりの上にパジャマを着ているんだろ。

おんなじ色だからぱつと見てわからなかった。

それほどまでに酔っていたんだろうか。

覚えていないけど、たぶんそうなんだろうけど、寝る前に着替えるって言う本能は作動したらしい。

でもおかげで……あ、ズボンはいいかかわらず履いていないのか。

……でも、ズボン？

「……………!!!」

あわてておまたに手をやる。

「……………ほっ」

冷たくも温かくもなっていない。

人肌のぬくもりの股ぐらだ。

よかった……本当に良かった。

粗相はしていない様子だ。

さすがにこの年でしちゃったら立ち直れない気がするし、本当によかった……。

肉体年齢と性別とで、あと昨夜の大量飲酒とで栓が緩そうだから心配だったんだけど助かった。

ついでに生えていなかったのには喜ぶべきなんだろうか、それともがっかりしないと  
いけないんだろうか。

……いや、まあ明晰夢を見た程度で魔法さんが諦めてくれるとも思えないしな……  
知ってた。

「はあ……………」

現状確認つて言う喫緊の課題をクリアした途端にさっきまでの余韻が戻つて来る。  
僕にしてはすつごく珍しくまるまる覚えてる夢の内容。

……夢とは言つても、昔のことを思い出したり動いたりしているときに僕の子供のころの体じゃなくつて、この幼女な僕の今の僕の体だったことを考えるとあらためて自意識が汚染されてる気がするなあ……。

もうすつかり今の僕を受け入れちゃっているんだなつていうのを痛感する。

だつて違和感を感じこそしたけどその程度だったんだし……。

……おまけに精神年齢的には年下のはずの子に悩みを打ち明けちゃうとかさあ……  
やっぱり少しメランコリックになつて弱つていたんだらうか。

きつとそうだ。

……あれを思い出すとすぐに恥ずかしさがこみ上げてきて顔がちよつと熱くなつてくる気がする。

きつと人から見たら普段通りの顔なんだろうけど恥ずかしいものは恥ずかしい。

でも……ついに深層心理まで本物の幼じ、女の子になりつつあるのか。

否定していたかったんだけどこうもはっきりとした夢見ちやうと改めてやばいなあ。やっぱり山に行くべきか。

あ、山にはもう行ったんだった。

それにしても変な夢だったな。

普段夢を見ないからわからないけど、でもきつと普通じやない夢だったはずだ。

はつきりと、まるで昨日のことのようにくつきりと覚えている夢なんてそうそう無いもの。

朝ごはんを食べたら日記帳に書き留めておこう。

その前に忘れるんならその程度なんだ。

夢の中では大冒険をした気になってもすぐに忘れるのが夢なんだから。

——黒髪のアメリ、赤髪のタチアと、金髪のノーラ。

そんな今の僕をアレンジしたような姿の子たちと、目が覚めるまでのほんのひとときを過ごしただけの時間。

あともうひとり、銀髪の◆◆も居たけどあの子は遠目で見ただけだし……でも、気晴らしにはなつたかなって思う。

「夢ってすごい」

もそもそと布団にうずくまり直す。



それに合わせて髪の毛が上に引っ張られていく、いつもの慣れ親しんだ感覚。

「でも寒い……」

寒いから出たくない……寝起きだからかな。

「……………」

夢のことを、覚えている範囲で思い出してみよう。

昨日おとといと割と、僕基準ではかなり大変な目に遭っていたから癒やされた。

自分で見た夢ではあるんだけど、もちろん偶然のおかげだけど、でもちよつとだけ癒やされたし、心もぐーつと楽になっている気がする。

……けど。

「うーん？」

髪の毛がわさわさする感覚を頭皮で感じつつ、顔だけ布団から抜け出して……見慣れたはずなんだけどちよつとだけ違う印象の僕の部屋を見回してみる。

……なんで僕の部屋なのに、なんだかほんのちよつとだけ違う感じがするんだろ？  
夢の中にずいぶん長いこといた気がするから、かなあ？

「……………」

ま、いつか。

その内眠気が取れたらうじうじしたのもなくなるだろうし。

——そうしてベッドの上で毛布をもふもふしていた僕の周りは、家は、町は、厚く積もった雪の中にあつた。

その年、珍しく雪が積もりに積もった12月のある日。

9月のある日に眠つたはずの僕は目を覚ましたんだ。

### 30話 跳躍、あるいは冬眠 1/2

「う……………」

へんてこな夢から無事に生還できた喜びをベッドでいつもみたいにごろごろしながら味わうことしばし。

ちよつと寒いけど布団の中はまだ充分にぬくいからなおさらに出る気がしない。

なんかだるい。

そんな朝もあるよね。

「……………あ……………」

よく分からない声を本能のままに出してみる。

この体になってから良くするようになった謎の発声練習。

眠い。

怠い。

そりやあもうこんな変な声だつて出しっぱなしにもなるもんだ。

髪の毛は絡まつてるしくすぐりたいし……ナイトキャップつて言うのを買ってみた

こともあったけど、寝ているあいだに自分で取っちゃうから結局毎朝酷い絡まりようなんだ。

まったく、なんでこんなに長い髪の毛が必要なんだ……。

だからすすごく二度寝したい。

できれば今度は普通の夢を見たい。

普段夢なんて見ていたとしてもまったく覚えていないけど、だからこそ睡眠つて言うのはなんにも見ないで脳みそと体を休めるものだって思う。

……こういう起きるのも寝るのもめんどくさいときつて、ちよつと手を伸ばしただけで取れるスマホで適当なニュースとか見たり読みかけの本を読んだりできるはずなんだけど、そもそもとして目を開ける気にもならない。

つまり僕は起きるか寝るかの判断もできないくらいにだるいんだ。

朝に強い僕としては本当に珍しいことに。

だるいんだからしようがない。

けど、なんでだるいんだろ。

体感……いや、意識の上でとっても長い夢を見ていた気がするからか体がとっても重いし。

けど疲れは取れているし驚くことに二日酔いもないみたいだし、それにすすごくよく

寝た感覚があるのに。

なのに、なんでだろうね？

なにかこう……何かの力を消耗しているみたいなの、そんな感じ。

なんだろうこれ。

忙しい日が続いたりして……僕にとつてはせいぜいが旅行先で動き回りすぎるのが続くくらいしか経験したことないけど、過労と睡眠不足とで明らかに体が疲弊しているって状態。

これはそれに近いような感覚かも。

そんな「疲れていないはずなのにものすごく疲れている」っていう未知の感覚にござろとしつつ、不思議とたくさん呑んだ翌朝の部屋の中の独特の臭いがしないのにもまた疑問を覚える。

アルコールが肝臓さんに処理されて息とか汗とかでえもいわれぬあの臭いが部屋に充滿しているくらいは覚悟していたのに、すすすんと鼻を動かしてみてもいつもの僕のベッドの髪の毛と肌から漂ってくる……ちよつと甘いような匂いしか感じられないし。

まあこの体になってアルコールの……解毒臭もほとんどないんだけどな。

にしても。

「うーん？」

お酒。

なかなか消費した感のあるお酒。

現実逃避にはやっぱりお酒がいちばんだった。

今までこんなことしたことはなかったけど……みんながするやけ酒っていうものでもない、それだけの効能はあるんだろう。

健康的なストレス発散じゃないけどこの体じゃ走り回る体力もないしなあ。

まあ昨日の場合は本気でお酒に逃げるっていうほどじゃなかったし、それよりも「悩んだ気持ちを抱えたまま考え続けているとドツポにはまって気が滅入るから眠くなるまで飲んじゃおう……」っていうのだったけど。

ほどよくいい気分にかけてくれて楽観的にぼんやり考えられる状態にさせてくれるお酒っていうのはやっぱりいいものだ。

1日中呑むわけじゃないのもまたメリハリが付く感じがするし。

まあ飲み過ぎると辛いだけだけど飲み慣れているんだし、なんだかんだできちんとセーブできていたんだろう。

伊達に毎日飲んでないんだ。

でも無意識ってすごいね。

あんな夢見させるくらいだもんな。

……それにしても、天井がぐるぐる回る感じとか胃腸がずんとする感じとかそういう二日酔いの手前くらいの症状でさえないのが不思議なところ。

思ったよりもアルコールが残っていないらしい。

あれだけ飲んだのにね。

不思議なこともあるもんだ。

かなり早くから飲んでいたこともあつてちよつとずつ解毒できていたから実はそこまで飲んでいなかったとか？

お水もトイレがめんどくさくなるくらいにがぶりと飲んでいたしな。

昨日は結局……寝た時間を覚えていないからわからないけど、たぶん6時間くらいかけてぼんやりしていたんだし、そういうことなのかも。

ちゃんぼんしていたしな。

そういうこともあるのかも。

おとといと昨日っていう短期間で、僕の体を変えた魔法さんが髪の毛を切ったときだけじゃなくってずっと……前の僕から今の僕になったあの日からずっと僕にかかり続けていて、しかも僕の性別とか前の姿っていう引き金でも発動するものが見つかっちやったりと、少なくとも3つ以上の効果を持つていてかなり衝撃的だったのは確かだし。

あの夢でもあったように、あの朝、前の僕が今の僕になったあの朝になんにも考えないで迷いに迷って血迷ってお隣さんに助けを求めていたとしたって……きつと今の僕かつ前の僕として何も問題なく生きて行けたんだって確信しちゃったからなあ。

だつて魔法さんっていうご都合主義そのものみたいな力がかかっているんだから。「ただ僕の体を変えただけ」っていう思い込みがあつたのもあるのかもしれないけど。

でもよく考えてみると、あの夢の内容もかなりがばがばだつた気がしないでもない。けれども嘘をついたりしないので過ごせて、その流れで銀行のこととか戸籍のこととかにたどり着けていた可能性が高いんだ。

少なくとも昨日確認した限りでは問題がひとつもなかったんだから、きつとそう。

なにより深く考えない性格のお隣さんの奥さんなら、あとすつごくいい人なお父さんとか、ちよつと内気だけどいい子なさつきちゃんだつたら……あの内容もあながち妄想でもなさそうだし。

まあもう手遅れなんだけどな。

どうしようもなく。

本当に今さらなんだ。

嘘まみれになつちやつてどうしようもなくなつてる、今の僕。

「……………」



もし家族……僕の場合は親戚の人か、とかすぐに連絡できる友人とかを作ってさえいれば割と早い段階で……たぶんほんの2、3日くらい、早ければあの日のうちにわかったことなんだろう。

だってひとりじゃなければ服もすぐに用意できて、ひとりじゃなければ外に出る勇気もたいて要らなくて、ひとりじゃなければもつといろんな考えを見つけられていただろうから。

たぶん……ありえないことだけど万が一に僕が働いていたとしたって、ちよつとした混乱はあつたとしても、しようと思えばそのまんまおんなじ生活を続けられていたんだろうって。

せいぜいが服関係とかかな？

困るのって。

あああとイスとかそういういったものもあるのか。

踏み台とか何個か設置してもらわないとなんにもできない低身長だしな。

……ニートでなかったとしても今まで以上に……ムダに考えてムダに警戒してムダに嘘をついてムダに時間を浪費していなかったら、きつとかんたんだつたはず。

「……………うあ……………」

毛布を体に巻き付けつつ、髪の毛も顔に巻き付けつつ、ごろごろと。

ご近所とか親戚とか友人とか知り合いつていう僕が持つていた数少ない相談相手になるかもしれない人たちと縁を切るつていうか疎遠になつて、その大半とはスマホの引き継ぎの際にめんどくさいからつて連絡先消しちやつたのは紛れもなく僕のせい。

僕がこんな怠惰な生活……いや、生き方を選んでしまったから。

つまりは僕の落ち度つてことになる。

めんどくさがつて全部投げ捨てちやつた、僕のせい。

あのときの僕に言うことはできないし、言つたとしたつてきつとおんなじ人生を送るはずだから無意味もないだろう。

けど、もう少し人との繋がりがつていうか、縁つてやつ。

そういつたものをもうちよつとでも大切にしてさえいたら、こんな無駄足踏まなくてよかったかもだし悩むのも相当に少なかつただろうな。

おかげでたくさんの人に嘘をつき続けるつていう僕にとつても相手にとつてもよくないこと……とつてもよくないことをもう半年も続けているんだ。

……嘘をごめんなさいと謝る鉄則……か。

今さらどの面下げてつて感じで顔、合わせづらいけど……嘘をついているの、早くどうにかしないといけないな。

だつてこのまま嘘を続けていたら僕のほうがもたないだろうし。

あんな夢見るくらいだもんな。

嘘っていうのは、ほんの一握りの人以外にとって苦しい以外のなにものでもないんだ。

そして1度ついたらバラして謝って怒られ切るまで心の重しになるんだ。

「……………うあ……………くちっ」

……………ごろごろしていたらなにかの拍子に絶妙な具合で髪の毛の先が鼻の中をくすぐってきて、油断していたからそこそこ大きくしゃみが。

……………いけないいけない。

こうやってもんもんと考えちゃうから昨日はお酒に頼ったのに。

ひと晩寝てすっきりしたしいい加減に気持ちを切り替えないと。

もう子どもじゃないんだ。

少なくとも、僕の意識は。

……………それにしてもなんにしても変な夢だったな。

そもそも明晰夢なんていうものすごく珍しい現象だし、普段の夢なんてほとんど覚えていないからわからないけど、それにしても変なものだったはずだ。

僕の想像力も妄想力も圧倒的に凌駕したような、なんだかすごい夢。

一貫性があるようでいて肝心なところでないって感じの、摩訶不思議って表現がぴつ

たりの舞台。

「明晰夢かも」って気がついたときにはちよつとわくわくしたけど意識があるだけ。

後半はなんだか動けたりしたけど、でも流れに介入したりできるわけじゃなくって。

黒あめのアメリ……金髪がノーラで赤髪がタチアだっけ？

ほら、僕なのに初対面の相手の名前と特徴がまだ一致しているしよつぽどのインパクトだったんだ。

まあでも適当なドラマを見たくらい印象だったからしばらくしたら忘れるか。

どうせならもつと……いつそのことぶつ飛んで、空を飛んだり宇宙遊泳とか絶対に現実じゃありえないような体験してみたかったなあ……。

まあ1回見たからにはそのうちまた見るだろう。

そのときに楽しめるように無意識に教え込まないと。

どうやるのか知らないけど。

まあ多分男の体が北国の幼女になる方がよつぽどのありえないことだけどね。

「……………くちゅんっ」

寒い。

暖かい服が必要そうだ。

お酒であったかくなつてぼんやりして……つまりは普段よりもうちよつと暑く感じ

ながら寝たのか、パジャマの下のワンピースのせいでお腹までべろんとめくれ上がったし、そのくせなぜかシャツは着てないし。

だからおへそを丸出しで、さらに下はズボンを履いていないからぱんつちよに近  
い格好で毛布だけくるめて寝ていたようなもんだしなあ。

端から見たらものすごい格好だっただろうな。

まさに幼児……………幼女じゃないか。

うん、今回ばかりは幼女だって思う。

「……………いがいが」

……………それになんだか喉も冷たくなっている感じもする。

気温……………空気がとても冷えているのか？

……………早くも秋が近づいて来たのやもしれない。

まだまだ残暑が当分続くっていつていたけど天気予報は外れるものだしな。

そうして年齢相応のぐずり方をする僕自身をなだめるようにして……………多分30分くら  
いはのんびり過ごしていた寝起き。

……………もしかしたら薄々何かがおかしいって分かっている、だから知るのを先延ばしに  
してたのかもね。

## 30話 跳躍、あるいは冬眠 2/2

僕は震えている。

ふるふる震えている。

「やむい……」

寒い寒い……寒い寒い寒い。

廊下を歩く1歩1歩が地獄だ。

とつても冷たいこと氷のような床。

幼女な僕の足を刺すような刺激。

家の主をなんだと思っているんだ。

……でも、そろそろ初秋か。

家の中でも靴下を履く季節になってきたなあ。

まだまだ残暑が厳しいって言っていたのに天気予報というやつはいつも当たらない。

それに加えて寝方が悪かったから体が冷え切っていて芯から冷たい感じもするし。

「まるで体温が今まででなくって」「さつきごろごろしていたときから少しずつ温まってきたみたい」な感じ。

そんなわけないけどな。

でも寒いものは寒い。

「さむっ」

歯がちがち言つて体の震えが止まらないくらいには……つて体、冷えすぎじゃない？

空気とか廊下とかドアノブとかいろいろ、冷たすぎじゃない？

ベッドから出たばかりのときはそこまでじゃないって感じていたから軽く羽織ってきただけだしなあ。

ひたひたとできるだけ接地面積を減らそうというムダな努力をしつつ大外れの天気予報を想う。

今年の秋、早かったじゃないか。

そしてすつごく寒いじゃないか。

どうしてくれる。

というか昨日まで朝晩は多少涼しい感じでも昼間は汗ばむ残暑つてやつだったのにいきなり過ぎない……？

これじゃ「まるで冬だ」。

……つていうのは多分体を冷やしすぎたんだらうな、きつと。

しばらくは寒さに用心しておかないと……この体で病気にでもなったら病院に……  
行けはするけど……とてもめんどくさそうだし。

お医者さんの目まであんなつたらどうしたらいいのかわからないしな。

◇

「ぴいひいひいひいひいっ」

僕の声じゃない。

ヤカンの音だ。

コーヒー用のはフタがかたかたなるだけだけとお湯用のはちゃんと叫んでくれるから分かりやすい。

でもちよつとぼーつとしていたらこれだ、ぬるま湯でよかったのにこれじゃ熱湯に……まあいいか、薄めれば良いんだして。

「(ト)く(ト)く(ト)く(ト)く」

光の加減かやけにホコリが目につく台所を移動しつつほどほどのあたたさのお白湯をいただく。

あ——、アルコールで脱水して冷たくなりきっている体に染みわたるこの感じが好



き。

朝ごはんにはインスタントのしじみなお味噌汁飲もうつと。

……でも思ったよりは普通な感覚。

喉がからからのときに飲むから気持ちいいのに今朝はそこまでじゃない気がする。  
変なの。

「(ハ)〜(ハ)……けぷ」

コップが3杯目にさしかかるころにはちよつと温かくなつてきてようやく安心できる感じになつてきた感覚。

お腹がたぶたぶだけど、どうせすぐに飲めるようになるんだろうからって4杯目を注いでからリビングへ。

ぼてぼて歩いているとポケットに入れていたスマホがふとももにこつこつって当たる。

……そうだった、忘れるところだった。

かがりたちに「次の休みは？」って誘われていたんだつた。

でも今はまだ気持ちの整理がつかないからちよつとお断りさせてもらおう。

それよりも嘘を告白するほうが先だろうし、スジだろうし。

それを寝起きのわずかな時間で見ただろ夢の中で決めたんだから。

それで嫌われて会えなくなるのなら悲しいんだけどしょうがないこと。

問題はいつ勇気を出して「実は嘘でした」って言うかなんだ。

「……………ん？」

まだ体に残っている寒さのあまりに頭も手ものろのろとしながら、ちよつと見るつていうことさえ忘れていたスマホを取り出して操作しようとして……………できなくて。

電源ボタンを押してもういちどおんなじ動作をしていたけど一向に明かりがついていないことに気がつく。

……………あれ、電池が切れてる？

そんなに少なかったっけ？

まあ電池切れるの良くあることだし、後で充電しておけばいいか。

ついでお断りの文言を考える時間稼ぎにもなるしな。

勇気を振り絞るための時間にも。

「…………………………」

寝起きの頭、しかも冷え切った体を抱えていたら誤解のない文章なんて書けやしないだろうし、ちよつと時間が必要なんだ。

というわけでお白湯4杯目をこくこくと飲んでいくと指先のほうまでにあつたかいつていうエネルギーが流れていく感覚がして、いよいよ寒い季節が近づいてきたんだ

なつて実感する。

「ふう」

ほけーつと喉の奥からあつたかい空気を感じながら「幼女なのにジジ臭いなー」つて思ふ。

気が抜けたところでお腹がぐーつと鳴り始めた。

胃はたぼたぼのはずなのにお腹は空いているらしい。

そりゃそうか。

昨日は夕方から飲んでいたのでからご飯食べるの忘れていたしな。

別に食べなくてつて翌朝にこうして猛烈にお腹が空くだけだから昔からしよつちゅう抜かすことあつて慣れてはいるけど、お腹が空いたものは空いたんだ。

ぐぎゆるーつとなるお腹を抱えているとちよつと気持ち悪くなるから早急な栄養補給が必要。

今食べようかそれとも後にしようかって悩んでいたら、お腹が空いた危機感からか頭もようやくすつきりしてきて眠気がどつかに行つたし、やっぱり今食べることにしよ  
う。

ぺたぺた歩いて台所へ引き返す僕。

「あ」

炊いてあるお米がない。

しゃもじを持った僕は悲しくなった。

食べようと思って思つて準備万端でいたのになんにもなかったことほど悲しいことつて  
そうそう無いよね。

フタが開いたままだった炊飯器は悲しい冷たさ。

どうやら炊くのもで忘れてたらしい。

昨日の僕は本当にいろいろとダメだったらしい。

まあ昨日の酒盛りで立ち直れたんだからコスパというやつはいいんだらうけど。

普段からよく炊き忘れるんだし……：……しょうがない、冷凍のでもいいや。

ごはんごはん。

「ふうん、ふうん」

なんとなくで音程がどっか行つてる声を出しながらレトルトのご飯のパックを開けて真ん中にしゃもじを突っ込んで半分に分けて、片方だけをお椀に入れてレンジへGO。

食欲ないから半人前で充分なんだよね。

おかげで食費がとつても浮いているのがあるがたい。

そうしてできた温めすぎたせいであつたのご飯片手にテレビの前まで引き返す。

朝は貴重な情報収集の時間だ。

時間さえ合わせれば食べるついでに十分な情報を仕入れられるのが良いよね。  
リモコンをぴつとしてニュースやってそうな局へ。

えっと、今の時間は。

「……まもなく7時です」

時計を見るまでもなく絶妙なタイミングで起きて食事にありつけるらしい。

でも今日は少し寝坊だなあ……まあ30分ごろごろいじいじしてたわけだけど、それでも普段5時くらいに起きる僕にとつては充分に遅い。

僕にとつての7時なんて、ゴミ出しと……あ、もうそこまで早起しなくても問題なくなつたのか……ごはんと洗濯と掃除とその他もろもろが終わっている時間なのな。

夢見は悪……くなかつたけど、ともかくも幸先のよさそうな朝だ。

これからいろいろ考えてしなくちゃならないだろうし、ここは気合いを入れられないな。

今日はたしか金曜だっけ……前よりは曜日と日付の感覚に敏感になっているけどパソコンは別の部屋だし電源も付けてないしスマホもおやすみ。

こうしてぱつと見るだけで把握つてというのができないのかもどかしい。

カレンダーなんて貼らなくなってから何年経ったことやら……ちよつと電化製品に頼り切りの気がしないでもない。

「くあ……………」

ごはんをひとくち口の中に入れて、……20時間ぶりくらいの固形物の感触をかみしめていると、見慣れたアナウンサーさんたちが現れる。

ごはんがばさばさだ。

ちよつと古いやつだったかな？

それとも暑かったからかなあ。

『おはようございませう』

そう言ったアナウンサーさんたちの後ろの画面には、一面の雪景色。

雪景色？

雪？

……ああ、北の方はもう初雪なのか……まだ秋だつていうのに寒そうだなあ。

まだまだ秋はこれから。

紅葉とか栗とかいろいろ楽しい季節なんだ。

そう思った僕の耳に飛び込んできたのは——信じられない言葉だった。

『12月23日金曜日。朝のニュースの時間は大雪の情報からです』

「……」  
かちやかちやつと箸が落ちて散らばる音。

こういうときって本当にものを取り落とすんだなあってどこかで考えてる僕がいる。

口からは声にならない声。

でも頭は冷静にいろいろ考えている。

——朝7時、見慣れた朝のニュースキャスターさん。

「ライブ」ってあるから……ドラマとかバラエティじゃなければ……この景色は今現在、この瞬間のもの。

そしてテレビの中継で見慣れた駅前……ということとは、この画面に映っているのは外国とか北の方じゃなくって僕の住んでいるところと変わらないところと変わらないうところで。

雪を見ない年も多くくらいなのに積もっている。

現実には、多分僕の住んでる町もこうなっていておかしくない。

——雪となれば秋が深くなるか冬にしか降らないもの。

異常気象とかだったら別だけど、それだったら「今年も寒いですねー」じゃなくて「異常気象で大雪!!」っていうテロップが出るはず。

なのにそんなことはなくて——12月、23日。

クリスマスイブの、前の日。

そう、上の隅の方にテロップではっきりと書いてある。

「……ありえ、ない」

そうだ、ありえない。

こんなことはあり得るはずがないんだ。

「……………」

……そうしていたら口の中のごはんを咀嚼するのも忘れていたことに気がついてちよつとずつかみしめるけど……さつきまで感じていたごはんの味が全然分からなくなっているのに気がつく。

ただの、ばさばさしているなにかだ。

だつて唾液も出なくつて。

「……あ。おはし……」

のろのろイスから降りてお箸を拾い集めて台所へ行ったりして……それすらものろのろしてみても時間を稼ぐ。

でも僕の頭は冷静に考えちゃうんだ。

冬。

雪。

大雪。



積雪。

12月23日。

……それは、ありえない。

だって昨日はまだ9月で、残暑で秋で、まだ夏のほうが強くって。みんなと最後に会ってから、まだ1週間と経っていなくって。

そのはずだったのに。

「……………」

『先日から降り続いている雪のおかげで、今日もまた一段とこの都心でさえも……ご覧ください！ 25センチの積雪を観測しています！』

わざとらしく長靴を履いたりポーターさんがずぼと雪の中に足をつっこみ、同じように突き刺した定規の目盛りをアップで映している。

——なんで。

なんで9月が12月なんだ？

12月って9月だったっけ？

……………落ち着け、ちがうちがう。

今ははつきりと目を覚ましていて僕は正常で、テレビの向こうの人たちも正常に見える。

とすることは僕の主観だけがズレていて……今日は9月のはずだったのに12月になつてゐるんだ。

本当に、3ヶ月も経つてゐるんだ。

『予報のとおりですとこの天気はまだしばらく続くようです。ということは明日のクリスマススイブ、そして明後日のクリスマスは数年ぶりのホワイトクリスマスというものになりそうですねー』

『そうですねえ、今年のクリスマスは素敵なものに……』

カメラがあちこちに切り替わつて、たくさんの人が道を歩いている場面で止まる。

コートを着た大人の人は歩きにくそうにしながら会社へと向かい。

止まつている路線があるらしくつてタクシーにも行列ができていて。

『イブから土日となる、これまた天気と合わさつて絶妙なホワイトクリスマスとあつて、みなさん大変盛り上がつてゐるようです』

『子供から大人まで楽しい2日間になりそうですね。しかし交通への影響で……』

小学生くらいの子たちが走り回つて、雪を丸めたりして遊んでいて。

その子たちが身につけているのもこもこのダウンとか手袋とかマフラーとか毛糸の帽子とか、およそ夏らしくない格好で。

つまりは明らかに夏でも秋でもなくつて。

『……はい、それではまず気になる明日と明後日の降雪量ですが……』

ぴつとチャンネルを変えてみる。

『この大雪で転倒したという通報が昨晚だけで……』

おなじ。

もういつかい、もう2回。

『まあ例の事件のおかげで外出を控える人も多いようですので一概に悪いとは……』

……おなじ。

どの局もこぞっておなじようなことを言っていて、映している。

——これは、現実。

それは分かった。

理解はできて納得はできないけど無理やりに納得するしかない。

けど……なんだ、これ。

だってクリスマスなんて……3ヶ月も先のはずでしょ？

予定はまだ決まっていけないけど「クリスマスパーティーとかしよう」ってみんなが

言っていた、あの遠い未来のことじゃないか。

なのにどうして今は3ヶ月後なんだ。

「……まず」

落ち着かなかつた僕はいつの間にかに料理用のお酒を出して呑んでいたらしい。

しばらくしてからそれに気がつくくらいには……僕にしては珍しく動揺つてのをしていた。

### 3 1 話 秋は何処に 1 / 2

「うーん……」

立ち尽くしていた僕は静かに再起動した。

これ……受け入れるしかないかなあつて。

明日がクリスマスマスの前の日なイブ、明後日がクリスマスになつちやつてるつてこと。

今の状況で否定できるものがなにひとつ無い以上には受け入れなきやならない。

……魔法さんが散々いろいろしてきたおかげで結構耐久性がついてきた気がする。

「テレビがうそつぱちを言っているんじゃないの？」つていう、か細い希望を持ちながら

……まだ閉まったままだったカーテンを開けた僕は、テレビの向こうとおんなじ光景を

目にする事になった。

窓の外は——白で包まれた世界だった。

まっしろ。

光自体は暗めなはずなのにまぶしい白。

1階の窓からだ和本気で雪しか見えない様子。

やわらかそうな雪がふんわりとこんもりと、狭い庭の地面や塀の上やすっかり枯れて

いる木の枝に積もっている。

それも積もりすぎているから2階に上ってみてようやく白以外の色がはつきり見えるっていう具合だ。

……見た感じ50センチくらい行っただけ……こんな雪初めて見た。

さすがに道は除雪されているらしく歩くこと自体は……あ、うちの前も少しだけやつてもらっているのはお隣さんかも。

お礼に行かないとなあ……もう会って話しても平気だし。

でもこの体だと雪かきなんてできそうにもないけども。

やり始めたとしたって10分と経たずにへばりそうだし。

この姿でへばへばしながら雪かきとかしていたら通りすがりのお年寄りとかおばさんたちに声かけられそうだしなあ……夜か明け方にやるしかないか。

はたしてこの体の筋力でどこまでできるかは疑問だけどやらなきゃならないものやらなきゃならない。

それが町内会の掟。

独り身だからこそ愛想だけはちゃんとしなきゃいけないんだ。

目を見て挨拶をきちんとして決まりごとを守っていればなんとかなるんだ。

「……………」

手のあとがついちゃった窓……ちっちゃいもみじがたに曇っていたガラスがくつきりしているし、せつかくあつたかくなっていた手のひらがまた冷たくなっている……から離れると、低い空からふわふわと舞い降りる雪が見えてちよつと幻想的。

「きれ〜」

真夏に南半球とかに旅行している気分。

だけど今は景色、楽しんでいる余裕なんてないよなあ……残念だ。

普通に秋を過ごして普通に冬になったんだったら楽しめただろうに。

充電ケーブルを繋いだばかりでまだびくりとも動かないスマホさんは戦力外として、パソコンさんのほうは普通に使えた。

かちかちとしばらくネットの記事とかを見ても……やっぱり今日が12月に属しているっていうのは本当のことらしい。

だからこれほどまでに体が冷え切っていたわけで、床も空気も冷たいわけだ。

そりやあ真夏の格好をしたまま一切暖房とかしない家の中で、寝ていれば……ねえ？ さつきエアコンも入れたけどまだまだ寒い。

というかまだ風が温かくなってない。

……うん、ヒーターとか出したほうがよさそうだな、すぐには温まらないだろうし。季節としては……雪が積もるほどの真冬。

それも今日まで3ヶ月間一切の空調をしてこなかったことになるわけで。

「うう……さむい」

僕は何着ももこもこと着込んだ上で毛布にくるまっている。

そうして何かがあれば、それを引きずっての大移動だ。

だつてこうじゃないと寒くてしょうがないもん。

……今までよく風邪とか引かなかつたなあ……というかよく死ななかつたなあ。

これもまた魔法さんのせいなんだから、そもそも3ヶ月動かずに寝たまんまで生きていたこと自体が魔法つてやつなんだろうけども。



「あつたかくなつたのに、またさむい……」

せつかく少しして家の中がなんとなく……もこもこと着ぶくれなくても震えないくらいに温かさになってきたというのに、今の僕はもう一度もこもこしている。

僕がもこもこしなきやならなくなった原因。

窓を開けつ放しにして換気をせざるを得なくなった憎い原因は……冷蔵庫だ。

正確には冷蔵庫の中身……野菜はともかくとして作り置き料理とか野菜とかのな



れの果て。

あとはお肉のなれの果て。

なれの果てって言うのはとってもマイルドな表現。

3ヶ月って言う時間は僕を置き去りにして、すっかりと過ぎていたっていう証拠としてキッチンが……さらには冷蔵庫の中が、それはそれはひどい臭いになっていった。

それでも冷蔵庫を開けたばかりのころは「うん？」って違和感がある程度だったんだけど、中身を調べているうちにナニカが溶け出してきたと思ったら「うひえ」とか「ぶぐう」って感じの変な声が出るくらいには恐ろしい悪臭が立ちこめたんだ。

開けるんじゃないかった。

本気で後悔している。

もういやだって思った。

だって夏場でも……あ、9月はまだ夏場で10月もそんなに寒くはないのか……野菜を放っておけば緑とか黒っぽい液体になって、お肉は白くなったり黒くなったりして異様な姿へと変貌するし。

それを3ヶ月。

とんでもないことになっていったんだ。

でも全部ビニールとかで区切られてるし何でここまでになっちゃったんだらうって

思ったんだけど……よく調べてみたら上に置いておいた作り置き料理から流れ出したナニカが下へ下へと浸食しながら広がって……さらには乳製品とかまでを直撃した様子。

キノコとかコケとかが生えていなかったのが幸いなところだけ見たものと嗅いだものが強烈すぎてしばらく忘れられなさそう。

勝手にトラウマを生み出されて非常に迷惑この上ない。

とりあえず魔法さんのことは掃除しながら徹底的に罵っておいた。

……これ、冷蔵庫の前身……瓶とか以外はみんな新しくしないとだなあ……臭いが染みついちゃっていてもどうしようもないだろうし……。

内側のプラスチックにまで染みていたらヘタすれば冷蔵庫ごと買い替えてことになりそうだけど、そうならないといいなあ……冷蔵庫って高いし……。

というか冷蔵庫が無事だったとしても、その下はどうにかして動かして掃除しないとならないかも。

だってナニカの臭い液体が、扉から床にまでぼたぼたと染み出てきちゃってたから。

まさにホラーだ。

臭いし汚いし最悪。

おかげで日付が飛んだショックももういつかい飛ぶことになったくらいだ。

五感は何にも勝る。

「……………ふう」

臭いのを片づけるために使ったぞうきんとか着なくなったけどそのまま取っておいた服とか、臭いナニカを染みこませたものが詰まったビニール袋をぎゅつと二重に閉じる。

でもくさい。

もういやだ。

誰か助けて。

でも僕がやんなきゃなんないんだ。

それがひとり暮らしてこと。

だからがんばって綺麗にして、さらに念には念を入れてとりあえずで庭先へ避難させてきたらちよつとはマシになった気がする。

臭いもだいぶ抜けてきたみたいだし。

そろそろ良いかなつてところで窓を閉めて、もこもこしながらコーヒーを飲み直すことにした。

「……………」

冷蔵庫はまだ良いとして……………こんなに外寒いしベランダに置いておけば腐らなさそ

うだし……こうして着ぶくれなきやならないほど薄い服しか持っていないのが問題だ。

暖かい服が足りないことのほうをなんとかしないとなあ。

まだ「冬には戻るかも」って思つて取つておいた男物だとぶかぶかすぎて間に合わないし、ズボン系は全滅だし。

こうして着ぶくれたあとに毛布被つていてもいいんだけど重いし外には出られないしなあ。

……あと、鏡を見るとどこかのお遊戯会にいそうなまん丸になっていたから、さつさとまともな格好になりたいっていうのが本音。

……こんなときにまでいちいち男のプライドが顔をもたげてくる辺り、僕つて案外図太いのかも。



鼻の奥まで染みついた、あの「モノではないナニカ」の臭いがコーヒーのおかげでようやく消えてくれてなによりで、それだけで機嫌がよくなってくる。

単純だけど本能だからしょうがない。

これでまともに考えることもできるつてわけだ。

臭かったら考えるものもむずかしいもんな。

で、体を動かしていたらまとまってきた思考を働かせよう。

まずは時間のこと。

まさか僕自身が……タイムスリップとかでいいんだらうか……するとは思ってみなかったけど、とりあえずは事実として受け止める。

僕視点で一昨日、山からの帰りにテンションが上がったおかげで秋ものを買っておいでまだぎりぎり外に出られる格好が残っているのが幸い。

ああいやそのせいで飛川さんにもバレるハメになったんだし……まああの日の前からこの姿を何回も見られてたってわかっていいるから、いずれああなるっていうのは変わらなかつたんだらうけど。

でもそのおかげでこうして、寒いんだけど着ぶくれて毛布を引きずっていれば温かさと重さを両立させられる格好ができるし……うん、過ぎたことはしょうがない。

それにバレたおかげで魔法さんについてよりはつきりとわかることになったから、むしろ早めにバレてよかつたんだらう。

じやなきや今でもよくわからないまま、なんにもバレていないって思ったままで今までどおりに何も知らないで過ごしていただらうし。

それはそれで怖いよね。

知らないって怖い。

……なんだかイマイチ魔法さんが僕に求める方向性がはっきりしてこないから、これが呪いなのかS F的な何かなのか、ファンタジックでオーソドックスな魔法ってやつなのか超能力なのか。

そのへんはあいも変わらずにわからずじまいだけど、それは生きていくだけなら必要のない情報だし今はまだ保留だ。

昨日……これまた僕にとつてだけど……実験のおかげで、金も人目もまったく気にしなくていいってことがわかったのも大きい。

あんな変な夢見るくらいには飲んだくれるハメになったけどたまにはああいうのも……つていやいやこれはアル中の思考じゃないか、やめやめ。

「……ゆめ」

明晰夢的な——あのなにか。

僕の過去を無理やり見せられるっていう毎度おなじみの悪夢に続いている。「もし嘘をつかずに隣さんに即バレしていたら？」つていう妄想とみんなと会っていた記憶がごっちゃになっていった場面。

成長したさつきさんつていう……妄想でしかない存在も出てきて。

そのへんからだんだんとクリアな視界と音が出てきたと思つたら、今度はまぶしく

なつてからのもつとりアルな、限りなく現実に近いような展開。

そして黒あめさんと赤タチアさんと金ノーラさん。

そんな不可思議な夢を見ていたせいで現実感のない目覚めになった。

まあそんなのは寒さと日付と冷蔵庫のせいでさつき吹っ飛んたけど……。  
で。

3ヶ月。

僕は……どうなつてたんだろう。

普通に寝たまんまだったらこうはならないはずだ。

魔法さんが僕の体にも何かをして……タイムスリップとかコールドスリープみたいなものとか冬眠みたいな現象が起きたんだって思っておく。

多分あの不思議な明晰夢も魔法さんの仕業。

でも……今度は何が原因でこうなったのか、皆目見当がつかない。

特別に何をしたわけでもなく、今までのように誰かと接触したり物理的に僕の見たいを変えようとしたわけでもないし……。

「うーん」

心当たりは思いつ切りある。

けど心当たりのある原因がまとめて同時にいくつも起きたもんだから判断に難し

いつていう感じなんだ。

でも、時間が過ぎたのは確か。

だつて僕、お風呂ついでに鏡でじっくりと見てきたけど……激やせしてたから。

それはもうぱつと見て「ぴっ」て声が出るくらいにはがりつがりになつていたんだ。

顔もこけてるっていうか眉のところのホネまではつきり見えるくらいになつていた

し、いつにも増して顔色も悪くつて体も全体的にホネホネしていたし。

せつかく「ちよーつとはふくよかになれてきたかな？」つて思つていたのに、ぜんぶ

リセットどころかマイナスに食い込んでいるし。

おまけに力も入りにくいし体もだるい。

ただ立つて歩くだけでずーんと重力を感じる始末だ。

なんか全部巻き戻されちゃった感。

そう言えば最初にこの体になったときもこんな感覚だったなあつて思い出す。

せつかく半年掛けてちよつとは肉付き良くなつてきたのになあ……また食べ直した。

「おつとつ……」

ちよつとふらふらするし体力も落ちているんだろう。

だつて3ヶ月だもんね。

何ヶ月も寝たまんまで雪の日に目を覚ますとかものすごくレアな体験してるなつて



思  
っ  
て  
お  
ご  
う  
つ  
と  
。

## 31話 秋は何処に 2/2

ぼたぼたと髪の毛からお湯がしたたり落ちているお風呂上がりで素っ裸の僕はぼつと見てやばい。

あらゆる意味でやばいのは確かだけど、今はその痩せっぷりがやばい。

本当に痩せすぎていて今すぐお腹いっぱい食べさせたくなくなるくらいやばい。

お風呂に入ったから髪の毛がさらにもっさりとしていたのも確認して僕の裸体がさらに色気を失っていたのが分かったわけだけど、女の子に近づくとどこか逆に幼女にまします近づいていたのが非常に残念だけど、特に悪くなっていそうなどころはなかったのだけは安心だ。

こんな状態で病院とか行くわけにいかないもんね。

魔法さんの力でいろいろ何とかなるのは確かだろうけど怖いし、それでまた何日も入院とかなったらお金も時間も大変だし怖いし……。

いろいろと観察した結果、この3ヶ月のあいだ僕の体はベッドの上で……床ずれとかはないから多分身じろぎとか寝返りくらいはちゃんとしていたんだろうけど……とにかく眠っていて、時間が飛んだわけじゃなくてきちんと時間は経過していて、僕の意識

だけがなかった……っていうことになりそう。

でもそこは魔法さん、ただ寝ていたわけじゃないのはまちがいない。

だって常識的に現実的に考えたとしたら、僕は死んでいる。

それもそのはず、3ヶ月間飲まず食わずだったわけだし。

さらに言えば排泄さえもしていなかったわけで、たとえ栄養が足りていたとしても毒素が溜まりきって死んでいたはずだ。

3日じゃなくって3ヶ月だもんな。

まず魔法さんがなにかしらしていたのは確定で疑う意味もない。

昏睡ってやつで、これだけ痩せて体力と筋力がなくなっているって言うてもそれだけで済んでいるんだ。

起きたら金縛りみたいに動けないとかホラーなことにはなってなかったんだし。

ただだるいだけで普通にこうやって動いているのがなによりの証拠。

ただどこんなのは病院で点滴で水分と栄養を補給され続けて、床ずれしないように体をしよつちゆう1日に何回も動かしてもらって、さらには体を拭いたり髪の毛を洗ったりトイレの始末してもらってという介護がなければ実現しないものなんだ。

つまりは僕は魔法さんに生かしてもらって……いやいや魔法さんがこれをしてかしたんだから感謝するいわれはない。

危ないところだった。

思考誘導とか……しないよね？

魔法さん。

……されていたら、もはや僕ができることはなにもないんだけども。

まあ逆説的に僕が今こうやって疑えているんだから、たとえそうだったとしても「よく考えれば気がつけるかも」っていうくらいではあるんだろう。

つまりは思考が強く操られているわけでもない……はず。

そう信じておこう。

「ふむん」

クリスマス特集しかしていないテレビを見ながらだらんとソファアの上で寝そべって、ただただ時間を想う。

3ヶ月。

3ヶ月だ。

1年の4分の1、ワンクール……秋という季節のまるごと。

これを文字どおりに寝て過ごしたことになる。

普段みたいになだ無為に過ごしたわけじゃなくって、言葉通りになんにもしなかった

……できなかつたんだ。

完全に寝過ぎしたんだからこのインパクトはすさまじい。

引きこもりとかニートだってここまでののはそうそう無いんだから。

9月はまだ暑いからエアコンをつけっぱなしだったからいいとして10月はちよつと暑いのと涼しいのと寒いのが混じるくらいだから……まあぱんついっちょよにワンピースとその上のパジャマと毛布っていう格好で良いとしたって、そのあとは厳しかったはず。

ここまで家が冷え切っているんだから12月に入ってから、ここ1週間続いていたらしい雪のあいだはもちろん11月だって相当に冷え込んだにちがいない。

さっきの室温的に最近は10℃もなかっただろうこの室内であんな薄着……しかもおへそからふとももからまるだしな格好で寝ていたら低体温とかで死んじゃうはず。

そうならなかったってことは僕が起きなかったのとおんなじで魔法さんのせいってこと。

夢に飛んでいた僕の意識はともかくとして体の方はここで冬眠していたっていうコールドスリープ的なものが正しい理解なのかもね。

SFとかで見るような機械とかはないし、やっぱり冬眠のほうが感覚的にも合っているのかな。

クマとかみたいに？

秋にぶくぶくと太ってから体温と代謝をぎりぎりまで下げてカロリーを節約してひとつの季節を待つクマみたいに。

あんなに大きい奴らとちっちゃい僕とじゃあなんだかイメージがそぐわない気がしないでもないけど……まあ魔法さんだし変でもしようがない。

さしずめ小グマってところかな？

それも生まれたての。

髪の毛とお肌の色的にホツキョクグマかもね。

でも僕はどうして目が覚めなかったのか。

3ヶ月も意識が戻らなかったのか。

いくらアルコールをたくさん飲んじやったからって言っても丸1日以上寝っぱなしっていうのはありえない。

いくら死んだりしなかったとしても1年の4分の1も意識がなかったってというのは……正直に言って恐ろしい。

……本能的な恐怖って感じの、痛いのと気持ち悪いのと得体の知れないナニカが一緒くたになって襲ってくる感じがこみ上げてくるし。

「寝ているあいだは死んでいるようなもの」っていうのは誰かが言ったことらしいけど、3ヶ月も意識がなかったっていうのを自覚しちやった今となつては、この3ヶ月ってい

う時間限定で「僕が死んでいた」って考えるほうがしつくりとくるっていうか、すとんと落ちる。

「……死んでいた、かあ……」

口にしても現実感の無い言葉。  
死。

そう言えばあの夢でもそう思ったつけ……どこだったかは忘れたけど。

でも、もし仮にこの期間だけ僕の魂的なものが「あの世」とやらに行っていたら？

それならきつと天国寄りなんだろう。

あんな綺麗な風景が地獄なはずないもんね。

僕はこういうのをぜんっぜん信じてなかったんだけど実際に魔法さんにお目にかかっているし否定できなくなっているんだ。

あの夢の後半。

きれいな空と海と、そこそこに満足できる大きさの島。

あたたかくって気持ちよくなって、穏やかで。

僕のことをぜんぶ知っていて受け入れてくれる人がいる、あの世界。

都合良すぎるってあのときも思ってたけど……あれが「あの世」っていうんなら納得できるかも。

あの世があんな感じなら死ぬのもあんまり怖く……いやあもちろん怖いけど「悪くはないかな」って思ってしまうのもムリはない。

あそここのどこかに母さんと父さんとかがいるんだとしたらなおさらだ。

まあ今死ぬっていうのはさすがに勘弁だけだな。

なにもせずにこのまま死ぬのはちよつと……もつたいないし。

死んでた可能性があるけど生き返ったつぽいからにはまた死にたくはない。

せつかく女の子の体に慣れて女の子同士の話し方とかにも慣れてきて、話題とかも僕から振れるようになったのに……そんなのもつたいないじゃない。

「んー」

でもやつぱりいくら考えても魔法さんの今回の冬眠魔法的なものがかった理由はさつぱりだ。

ついでになぜか激やせしていたのも分からないし、トイレしてないのも分からないし体もきちやなくなったりしてなかったのもまた分からない。

トイレにも行っていないのに起きてしばらく平気だったもんなあ……お酒の残ってる感覚も無いし。

「うーん」

昨日の夕方から夜にかけてっていう直前の行動じゃなくもつと前のことを考えてみ



たとしたって、外に出て魔法さんを働かせる実験を試みたからといって、それだけで3ヶ月も寝ることになるなんて到底思えないし理屈も通らないだろうし。

だって魔法さんのすることって言えば僕をこの幼女にして髪の毛切らせないで、あとの前の僕とごっちゃにしてこの情報社会な現代社会でも無難に生きて行けるって言う都合良すぎるようにする程度だし？

あるいはもつと前のできごと……いろいろと確かめていたときのなにかに反応した？

それともお隣さんとかの……前の僕を知っている人に会ったこと？

遠出をしたこと？

家から離れたこと？

それとも山に登ったこと？

それとも——たくさんの人たち。

中でもあの子たち。

中学生のあの子たちと外で一緒にいる時間が増えすぎたせい——なんて思いたくはないけど、僕が当時意識しなかっただけで……不特定多数の人たちとすれ違ったり近くでしばらく隣同士になったりしていた内の誰かの何かに反応して？

いろいろ連れ回されたりして訪れた、今まで僕が知ってはいたけど行ったことはな

かったような、そういう場所に反応して？

……考えれば考えるほどに何もかもが怪しくなってきたそのどれもがもつともらしくなるんだけど、同時にどれも説得力に欠ける気もしてくる。

つまりは堂々巡りだ。

だいたいこの夢と冬眠……このふたつは、今までの魔法さんの仕業とはなんだか質が違う気がするから。

だって今まで起きたのはどれも……この姿になったのはともかく、髪の毛を切ろうとする、前の僕の姿とかについて口にする、今の僕を前の僕と認識させる、っていうときにすぐにその仕業が確認できた。

つまりは原因と結果がきちんとながっていてわりとすぐに反応するっていう、なんでそれが起きたのか、ちよつと考えればわかる印象だったんだけどなあ。

よく言えば素直で、悪く言えば単純で。

それが僕の知る魔法さんだったはず。

……でも目にも見えなくて音も無いし心配って言うのも無いただの現象なんだ。

今まで運良くこういうのが起きなかっただけで、起きる可能性だけはおんなじくらいあったのかもしれない。

「……………つかれた」

さつきから思ったことをひたすらに書き続けて真つ黒になった紙をぺらぺらと何枚かを眺めつつ、疲れて痛くなってきた手をさすさすしながら力を弱めにして、それでも書き続ける。

時間をかけて考えて書きながら整理してみても、魔法さんが怒る因果関係がはつきりしているのは、今のところ髪の毛を切るのと、前の僕関連のふたつだけだし、まだ断言はできない……か。

そもそもなんでこんな姿、銀髪幼女にさせられたのかっていう根本的な課題も残っているしな。

さつき外を出歩きすぎたっていうのを挙げてみたけど、そうやって僕が気がつかないかただけで他にトリガーになるなにかが起きていたとかあるいは起こしちゃっていったとか、そういう可能性だってあるしなあ。

そこまでいくともうキリがない。

堂々巡りの空しさはこの姿になったばかりの頃にたくさん味わったからこのくらいでいいや。

書きもののあいだずっとコーヒートか紅茶を飲んでいたんだけど……それでも寒い。暖房が効いているって言っても寒いものは寒い。

特に足元。

僕の体感はまだ夏だもんなあ……

「……やむべし」

もう一枚もこつと羽織った僕。

真夏から真冬でこの体になったのは春だから冬物は持っていない。

だから家用のものはもちろん外行きのものも手に入れておかないとだ。

残念ながら……コートとかの冬物は高いのに男のときに持っていた冬服は使えない。

だつて羽織るものでもぶかぶかなんだから下は当然合わないわけで、つまりは下半身が冷えるのには変わらない。

だから今の僕に合った服を手に入れる必要がある。

だけど今はクリスマスの前っていうこれまた絶妙なタイミング。

もう何日か早く起きてさえいればっていうのは贅沢じゃないだろう。

クリスマス前だから、通販だと注文したのが届くのは何日か後だろうし……。

「やむべし」

昼……というか朝だけど、それでこれだ、夜はもつと冷えるはず。

それまでに風邪でも引いたら困るしさっさと買つてこないとな。

……きつと大丈夫。

半年……のうちの2ヶ月くらい毎日のように出かけて何かを踏んじやっただから、

たかが駅前にはばつと服を買いに行くくらい何ともないはず。

水分でたぶたぶになったお腹を抱えつつ出かける用意を……おっと、その前に洗面所だ。

なにしろ冬眠後の僕はとんでもなく痩せこけている。

いくら髪の毛や帽子で隠したって目元までこけているんだから、店員のひとかに「虐待!」って驚かれて通報されでもしたらめんどろうだし困る。

だから、かがりに習ったついでに買ったついでに譲ってもらったたりしたのを使って、かんたんなお化粧をしないと。

せめて、ぱつと見て何ともないように見えるくらいには血色とかいいように見せない  
と。

髪の毛も軽く毛先とか整えておいたほうがいいかな。

女の人ってそういうのに敏感だからそれで目を付けられてもめんどろくさい。

それならお化粧のポーチとかもまとめて持って行って。

「……あ」

びたつと足が止まる。

……ひよつとして僕……今ナチュラルにいろんなことをいつペンに考えていたけど。

知らないあいだに女の子として鍛えられた意識とか振る舞いとかが完全に定着……

しちやつているんじゃ……？

「……………」  
……不自然に見えない程度の軽いお化粧だけにしておこう……これは緊急事態のため医療行為なんだ、おかしいことじゃないんだ……。

## 3 2 話 クリスマスと騒動と 1 / 3

「ひいひい……」

寒すぎるのって声出ちゃうよね……暑すぎるときもだけど。

前、あったかい季節に旅行へ行ったときにロープウエーで山の上とかに一気に行った  
らこうなった覚えがある。

肺まで冷たいって感じるレベルになると抑えきれないらしい。

そのくらいに外がすつごく寒い。

それはもう、家の中とは比べられないくらいには。

だって、雪、そこそこに積もっているっていうのにまだまだ降っているしなあ……。

僕の記憶にある限りこんな気温は生きてきた中で何日かないくらいだし。

寒さのあまりに思わずで雪道をのろのろ通り過ぎようとしていたタクシーを捕まえ  
ちやったのは……不可抗力だ、うん。

家を出てからたった10分そこらってというのは……まあ薄着しか持っていないって  
いう事情が事情だし……？

あと体力も筋力もその他もろもろのすべてが落ちているんだろうし大事を取ったん

だ、うん。

……お風呂でそれなりにあつたまつてから出ただけど、本物の寒さには勝てなかつたらしい。

一応今の僕に合う服を重ね着したりカイロ持ったりもしてみただけど……10分もたないとはなあ。

普通寒い日なら相応の格好をするのに今の僕のベースが秋物……それもまだ寒くない秋物でその上にぶかぶかの男物を羽織る形だからそこまであつたかくないんだ。

……無理にでも買いに行くしかなかったみたい。

ずっと寝ていた影響なのか、体、ちよつと歩いただけでもすぐくだるーくなつたし今日じゃなくてもとは思ふ。

体がまるごと重くなつたこの感じは風邪とかで寝込んだときに近いものだし、きつと痩せているのとおんなじ原因で体力も削られているんだろう。

だって冬眠だもんなあ……家の中をうろろするくらいじゃたいして気にも留めなかつただけど、こうやって少し歩くと体力つてはつきり分かるよね。

時間が飛んでいてびっくりしたり生ゴミ未満のナニカを片づけたりつて忙しかったし、そういうのに気がつくヒマがなかつたというか余裕がなかつたというか……だからタクシーに乗るつていうぜいたくをしちやつたのもしょうがないんだ、きつと。



こうしてタクシーに乗るのもまた相当ぶりの気がするし、たまにはいいだろう。けどタクシーなんていつ以来だろ。

……たぶんお葬式のとときとかかな。

つまりは、これまた10年ぶりってことで昔のこと。

10年に1度なら贅沢とも言えないな。

それにこれはしようがないことなんだからしようがない。

よし、自己肯定完了。

で。

タクシーの中……シートベルトが顔にかかりそうで手で押さえなきゃならなくなつてそればかり考えていたけど、乗った印象としては……なんだかこぎれいになつたというか高級感があるっていうか、そんな感じ？

なんで目の前のモニターで延々と広告を聞かされなきゃならないのかは分からなかったけどまだ寒くて震えてたから気にならなかつたけども、タクシーだなんて……前の僕のとときにはそもそもモヤシだとしても男だつたわけで、その男としての体力と脚力があつたもんだから使うだなんていう発想もなかつたものだ。

旅行先とかでタクシー以外じゃ30分くらい歩かなきゃならないところとかだつて、ぼーっとして歩いていればすぐ着いちやうもんだから気にしないで歩いていたしなあ。

今思えばそれってものすごく良いものだったんだ。  
ただ若いってだけで素晴らしいんだ。

若いを通り越して幼くなつた僕は良く分かる。

そう言えばこんな子供が乗ってきたらやっぱり何か言われるからまた魔法さんのお世話になるうかなって思いながら乗つてみたならなんにも言われなくて……特段の反応もされなかつたから拍子抜けだな。

ミラーでときどき見られてはいるけど、これくらいは普通の範囲……なのかな？  
たぶんきつとそうだろう。

だつてなんにも言つてこないしな、運転手さん。

信号待ちでもどこかと連絡とかしてはいないみたいだし……通報とかされないなら良いや。

まあ楽なぶんには文句はない。

今の時代なら子供でも乗るんだろう、きつと。

そうして結局駅前までたつたの千円くらいで……歩いたらタダだったんだけど貧乏性が抜けないし……いつもの駅前に到着して、さつと適当に服を手に入れて着替えてきて、もこもこしながらロビーでくつろいでいる次第。

もちろんすみっこのほうで。

「ふ——……」

缶コーヒーであつたまつてきて人心地が付いたのか、もの思いから戻つて来たらしい。

……考え込むクセは治らなさそうだなあ。

駅前もどこもかしこも人だらけだ。

しかもみんな長靴と傘で動くもんだから大変なことになっている。

……タクシー使つて良かった。

クリスマスつていうイベントの前つていうのもあつて平日なのにごみごみしてうざりたいけど今日ばかりはしようがない。

「…………あれ」

デジャヴ。

既視感。

知らないはずなのに知つていたりする……ような脳みその錯覚が起きているらしい。

まるでおんなじようなことが前にもあつた感じがして……つて思つたら、ああそうか。

ここはちょうど、僕が「アイドルやらない？」つて絡まれた場所——。

「……まさか」

イヤな予感がした僕は必死になって、髪の毛がほつぺたをばしばしと叩いてうざったいくらいに頭をぐるぐると目に見えるひとりひとりを見てみたけど……ただの杞憂だったらしく萩村さんも悪魔さんの姿も見当たらない。

デジャヴじやなかった。

ただ警戒しすぎただけだったらしい。

まあ、さすがにそうだよね……あんなことはそうそう無いよね。

今はちゃんと髪の毛も顔も隠してるから大丈夫みたいだ。



少し休んだら楽にはなったし、服も最低限のものを揃えたしで安心した僕。

こうしてセーターとか着てみるとさっきの服装がどれだけ無謀な冒険だったのかわかるけど、ああいった非常時はしようがないしなあ。

……荷物増えちゃったから帰りもまたタクシーかな……無駄遣いはしたくないけど体力的に心許ないし、雪道で倒れたら大変だから今日ばかりは贅沢をしておこう。

なあに、3ヶ月分の生活費がかなり浮いたって思えば安い。

クセでぶらぶらしちゃっていた脚を落ち着けたら、さつきまで着ていた服が入った紙

袋にがさつと当たった。

雪が冷たかったから靴まで買ったけど……しばらくは雪かきもしなきゃだし長靴も必要だしな。

長靴とかほとんど履いたことないけど……雨の日とかに履けるから使えるし？

おかげで今の僕は下着以外みんながみんな新品に包まれている。

でも身長的に子供っぽいデザインのみしか合わなかったから……余計に子どもらしくなっちゃった気がするけど何回か着ているうちに馴染んでくるだろう、きつと。

……長靴にふかふかの子供用コート……ボンボンの付いた帽子も被ってる僕はどこから見ても子供でしかない。

やっぱりアイデンティティーにすぎずき来るけどしょうがないことなんだからしよ  
うがないんだ。

店員の人のあしらい方とかも身についた僕は無敵だ。

あの人たちって子供と見るやにじり寄ってくるもんだから、先にアクション考えておかないとずるずる引きずられることになるんだ。

『どうしたの？』

『おかあさんは？』

こういうセリフが発せられる前にわかるようになったくらいだしな。

「おかあさん？　もう居ません……」とか言ったら悪いしなあ……事実なただけど。母さんはあの天国みたいなところで待っているだけだろう。

なぜかみんな聞いてあげない父さんも一緒に、きつと。

ちなみに輪廻転生を考えるとつくにナニカに生まれ変わっている。

天国で待つとか次の人生に生まれ変わるとか……大人になるまでは散々考えてたけど今は割とどうでもいい。

特に今は幼女から逃れられないことだけだしな。

ちなみに服装も子供用のだけどカラーリングは男に見えるのにしておいた。

というか単純に無難なのってだけ……ほら、女児用乗ってピンクだから。

髪の毛を隠せば男でもおかしくない色合いで、帽子とパーカーで必死に隠していた夏までよりも楽ですらあるのが新鮮だ。

周りの女性……に限らず小さな子、それこそ今の僕くらいの子でもスカートとスパッツとかタイツとかスカートの代わりに短いズボン、ホットパンツっていうらしいんだけど……そういうとんでもない格好とかも勧められたけど、僕にはそこまで張り切る根性もないしズボンで済むのならそれに越したことはないし。

肉体こそ女の子だけどスカートとか脚をふとももまで出すって格好にはやっぱり抵抗あるもんなあ。

それを思うと女の子ってすごいよね……真冬でふともも出すんだから。

でも服の種類もサイズも1回目の試着でばっちりだったし、色合い……コーディネートも無難だけど怒られるほどじゃない感じになったし、今年の流行とかも意識したし。

これで立派な女の子として、……。

……僕、また意識が……女の子として見られることに傾いていない？

気のせいじゃなくて？

「……………」

……知ってはいたけど習慣っておつそろしい。

みんなと会ったときにダメ出しされたり、そのまま買い物に行かされるハメになったりするっていう恐怖もあるんだけど、それにしても自然に考えてるのはまずい。

帰ったら男用のファッション雑誌も読んで自尊心を取り戻そう。

髪の毛を触りつつ顔を上げて目の前にそびえているクリスマスツリーでも見てみる。吹き抜きのロビーを3階くらいまで突き抜けているツリー。

イルミネーションがまぶしいほどに、これでもかかってくらいに張り巡らされている。もちろんペンには巨大なお星さまだ。

そして下のほうでは自撮りしている人多数。

周りを見てみればどこもかしこもクリスマス一色。

うん、心動かされない。  
男だもん。

こんなことどうでもいいからそれより家でごろごろしていたって心底思う。  
うむ、完璧なる男の心だ。

「よしっ」

心の安寧を取り戻したところで、改めて時差ボケのような変な感覚を思い出す。

——寒くて暗くて静かで雪が降って積もった白と、クリスマススの赤と緑。

それに対するは僕の主観で昨日まで感じていたはずの、残暑の熱い日差しやセミの声と湯だったアスファルトときついくらいの緑と、高い空の水色とオレンジ色。

……半年飛んだっていう感覚が染みってくる。

未だに「これもまた夢なんじゃない？」って思いもするけど……次に目が醒めるまではここが現実ってことで。

あの夢の中でも今みたいに好き勝手に動けたんだし五感もおんなじくらいあったから、ここがまだ夢の中だとしても否定できる要素はないけども。

せいぜいが知っている世界だってことくらいかな？

なんだか時間軸はちよつと……いや、相当にずれてはいるけども。





人混みは苦手だ。

というわけでまだ体力が戻りきっていない僕は、いつだか来た覚えのある喫茶店の奥のほうの席を確保してなんとなくで選んだハーブティーを飲んでゐる。

かがりがどこかで飲んでいた香りだけ……あつたかい。

ほつとするけどまだお昼前でこの混みようだし、ちよつと休んだらさつさと帰つたほうがよさそうだ。

だつてほとんどクリスマスだもんな。

夏にかけていろいろと連れ出されたせいで耐性ができているからもう少しなら大丈夫そうだけど……今は冬眠後つていう状況がなあ。

寝過ぎたせいで体もだるいしあんな夢とこんな現実とで精神も不安定だし、なるべく家でぐだつとしていたい。

というか本当に冬眠していたんだとしたら栄養とかもすつからかんだろうし、事実瘦せているわけでで高カロリーなチョコとかで補給してしばらくは安静にして肥え太らないと本気で病気にいかかつちやいそう。

この体で病気になるらとつてもめんどくさいから気をつけないと。

いや、魔法さんのあれでどうとでもなりはするんだろうけどさ……。

「……む」

家を出るときにはまだ起動すらできなかつたスマホを思い出す僕。

3ヶ月のせいでバッテリー、空になってたから結構掛かつたなあ……。

電源ボタンを押してしばらく。

……起動が長い。

あの子たちのことをふと思ひ出したけど……あれ、もしかしてやばい？

だってみんなからしてみれば夏休みが明けたばかりのあのタイミングで僕との連絡がいきなりつかなくなつて……「気が向いたときだけ」って言つてあるにしても1日に何回か返していたメッセージとかも返つて来なくなつて既読すらつかなくなつたつてことになつていて？

「よつぱどこのことがなければかけて来ないで？」って言つておいてある、教えただけの電話番号にかけてみてもスマホの電源がないもんだから留守電にすらならない。

ケチつて留守電つけてないんだ……ほら、今つて1個1個でプラス料金になつて、僕が通話する時間なんて年に何分だから……。

どれだけチャットしても見られなくつて、電話しても「電源が入っていません」つていうあのメッセージが流れるわけで……つまりはいきなり音信不通になつちやつた

……ということになるわけで。

……どういわけしよう。

「ごめん、ちよつと3ヶ月くらい寝てた」なんてまず信じてもらえないだろうし……。

前から病弱つてことにしてたし、なにかあったつてことくらいは察してくれるだろうけど、それだけに今から説明するつてなると気が重いなあ。

……けど、僕は決めたんだ。

みんなに嘘を——どうしても言えない部分以外はちゃんと言おうつて。

## 32話 クリスマスと騒動と 2 / 3

びつくりすると「うへっ!」とか「んに!」とか変な声出るよね。

普段話さないからとっさの声を変なことになるんだ。

男のときは「あっ」とかしか出なかつたけど、ちよつとだけ語彙が広がるのは女の子だからかも。

その証拠に女の子たちってちゃんと「きゃあ!」って叫ぶもん。

「びっ!」

……だから僕が出しちゃった変な声はしようがないんだ。

しようがないんだけど派手な声だから周りの人が振り向いてくる。

視線が集まってくるのを感じる。

僕の髪の毛へ、続けて顔へ注がれてくるのが分かる。

……さすがに暖房の効いてる喫茶店でもここの帽子を被り続けるのは厳しいからって脱いじやってるから……全力で影を薄くして気づかれないようにしていた僕の見え目に視線が集まる。

視線ってただの目の動きなはずなのに第六感か何かで頭皮や顔のお肌がちくちくち

くちくと分かつちやうんだ。

「うう……」

……恥ずかしい。

暑いけどもこもこを深く被り直して何も気にしないフリをしながらスマホをしばらくいじっていたら……ようやく視線が逸れてきたのが分かる。

だつてしょうがないじゃん……未読が500で着信履歴が800とかになっていれば誰だつてびつくりもするもん。

「もしかしたら100とか行つちやつてるのかな？」つて予想は甘すぎたらしい。

こんな数字初めて見た……迷惑メールだつて年単位で集めないところはならないのにね。

背筋が凍るとはこのこと。

指先までしつかりと冷たくなつたし。

せつかくあつたまっていた指先までまた冷たくなつちやつたから注ぎ足したハーブティーを飲んで温まることにする。

「……………」

ちらちら周りの人が見てくるけど無視無視。

通報されないんだつたら良いんだ。

こくこく飲み続けてほーつとしてるうちに落ちついてきたから……恐る恐るでざつと斜め読みしてみる。

まとめて見たからびびくりしたものの、ひとつひとつはそうでもないことに気がついてきた。

連絡の間隔も連続でつてわけでもない。

最初を除けば……僕が眠っちゃつて3日くらいは頻繁だけ、どそれ以降はそこまでじゃない。

夏休みが終わつて次の学期が始まったばかりだつていうのに、その週末からもうどこかに出かけたりするつていう約束していたし、日程こそ決まっていなかったけどなんとなくで「良いよ」つて感じの約束つていっぱいあったしなあ……断れなかったとも言うけど。

だからだからこのときみんなにとつて……その前日まではほとんどいつでも連絡が取れていた僕がいきなり返事を返してこなくなつて、どうしても心配になつてしてみた電話にも出なくつて……つてことになる。

しかも都合の悪いことに僕には病弱設定があると来た。

それもこの春までずーつと入院していたつていう重症のが。

言わなきやよかつた？

いや、言わなかったらもつとたくさん連れ出されていただろうし、だるい日は「今日は病院だから……」つてもものすごく便利言い訳もできたからあれでよかつたんだろうけど……こんなの誰だつて予想できないしなあ。

そんなわけで当然に心配で仕方なかつたんだろう。

住所とかどうにか教えないで済んでいたんだけど、そのせいでみんなからしてみれば……僕がいきなり消えちゃつて連絡が完全に取れなくなつたつてことになるわけ。

逆だつたら、こんな僕だつて……薄情な僕だつて多分気にはなるしなあ。

ちよつと仲のよくなつた知人つて感じに思つてる僕ならともかく、友だちになるための垣根が低いあの子たちにとつての僕もまた友人で、友人つてことはとつても不安になるだろう。

「……どうしよう」

謝るハードルがもつともつと高くなつちやつた。

◇

まあしようがないことなんだからしようがないつて気持ちを切り替えた僕はお店を出た。

歩いて上り下りできる段差じゃなくなつたエスカレーターがごとごとと言うのに身を

任せての移動だ。

……よく考えたらあつたかい上下と上着……ひざ丈のコートだけど、それから靴まで揃えておいたついでに下着も買っておきたくなつたんだ。

だつて寒いし。

座つているだけでお尻からじんわり寒さが来るんだ。

夏は暑かつたからシャツとぱんつつていう快適で楽で見ても楽しめる居心地のいい格好で過ごすことも多かつたけど今は冬、とても今着ているような薄っぺらいものじゃ耐えられないだろう。

ちやんと厚手であつたかいものを買つておかないと……だつて寒いし。

もともとこの体は体温も低いし冬は苦手なのかもしれないと思ふ。

女性の体は冷えやすいつて言うし、この体の体質のせいじゃないかもね。

幼女だつて「ついてない」つていうことは女性のひとつだしそういうことなのかも。

シャツはともかくぱんつはいつものぱんつ……ブリーフ程度の防御力しかないこれじゃなくつてちやんとおしりから腰まであつたかくなるショーツつてやつがよかつたはず。

いや、そもそもぱんつじゃなくて全部ひつくるめてショーツつて言うんだつて……どつちでも良いけど。



「腰骨からおへその下にかけてと太もものつけ根がはつきり見えてなんとなく嬉しいからっていう理由で、あとは憧れだったっていうししょうもない理由で「いわゆるぱんつ」を楽しんでいたんだけど寒さには勝てない。

……さすがに毛糸のとかまではしなくてもいいだろう。

「そこまですぐと本気でお子さまみたいだし、ちよつともこもこしすぎてちくちくしうだし。」

あとタイトとかもあつたほうがあつたかいかも。

厚手のものを穿いておけばじんわりあつたかくなるかも。

そう思うと男の体って基礎体温が高くて良かったんだなって実感する。

ああ、手袋も忘れていたな……やっぱり急いでいると僕はダメだ。

「……………」

……みんなにどうやって返事するかはまだ決めていない。

「だってまだ落ち着かないし、まだ目が覚めたばかりでなにがなんだかって感じだし。」

もう少し慣れてから……スーパーへの買い出しとかも大変だろうし掃除とかもちやんとないとホコリまみれだろうし、ちよつとでもいいから雪かきもしておかないとご近所が大変だから。」

冷蔵庫も様子見しなきゃいけないし、がさつと無理やり詰め込まれた感じに溜まっていた郵便受けの中身とか不在票とかその他にもろもろのお世話もあるんだし。

だから何日か忙しくしながら考えて、それから連絡しよう。

……がんばって1週間以内には、きつと。

そもそも僕自身がまだこの状況を完全には把握できてはいないんだし……またなにか新しい魔法さんの魔法が降りかかるって可能性も無いでもないし？

さっきの未読の量を見たらそんな言い訳で延期するほどになつた僕。

せつかく夢の中で……つい数時間前までは僕のことちゃんと話そうって決心していたのになあ。

……タイムミングが命。

黒あめさん……お姉さんとやらの鉄則はもうしばらくおあずけだ。

「よつと」

エスカレーターのスPEEDもつと速くなればいいのにつて前は思つてたけど、幼女になつてみると遅い方が安心できるって知つたそれから下りる僕。

ちゃんと足元を見て勢いよく下りないとちよつと危ないから毎回ひやひやする。

さてさて、さつき行つた店に行くつていうのも気が引けるけどめんどくさいからいつか。

靴下も下着もサイズは分かっているんだからたいして時間はかからないだろうし。

「……………ん」

なんか声があちこちに反響している……走ってる音とかも？

なんだろう、学生がはしゃいでるのかな？

そう思うけど何人かの大人——男性だな——大声を出しているのがここまで聞こえてきて胸がぎゅってなる。

物々しい……というよりは騒々しい感じだけど、なにかあったのかな？

こんなところで、クリスマス前の浮かれているこのときに……ってことは色恋沙汰とかな。

……いやいや、かがりの恋愛回路しか備わっていない思考に汚染されすぎている。

ゆりかで中和して……あ、だめだ、いっつも微妙に古いセンスで「ここはギャルゲー的には……」って言い出したりするから、ここは常識人なさよとか案外まともなりさりんを思い出して中和中和と。

「!!」

「!？」

「、」

「……………!」

それぞれの声が男の人のなのか女の人のなのか、どのくらいの歳なのかが分かるくらいにはつきりとしてきた。

……エスカレーターで移動してる？

そう察した僕は急いで目的のお店に行つて隠れるようにワゴンの傍に。

なんとなくで手に取つていた桃色の毛糸ばんつを手に取りつつ耳を澄ませてみる。

毛糸つて柔らかいよなあ。

両手でもみもみしながらじつとエスカレーターと階段のある方向を見る。

騒動に巻き込まれるのは勘弁だし怖いし……収まるまでここにいればよさそうだ。

僕には野次馬根性とかもないし、それに今どきならSNSで何があったのかなんてすぐに分かるんだし。

へたに巻き込まれたら……警備員さん相手でもとつても困る幼女つて言う身分だから警戒すること少し。

エスカレーターをだだだつと駆け上がる音に続いて女の子がふたり飛び出すようにして上がってきたのが見える。

エスカレーターの下のほうを見やりつつふたりで何か相談をしているらしい。

「……………」  
ふたりともその辺にいなそうな普通の格好の女の子だ。

こんなに暖房効いたところでコートを着たまま走っていたら暑いから暑そう。だけどあの髪の毛と顔、どっかで見た覚えがなくもない感じ。

「うーん」

毛糸の感触を楽しみながらこっそり眺めていた僕は思い出す。

……あ、あのときの子たちだ。

えつと、萩村さんに送ってもらったときにいい匂いの香水とかしてた子たち。

直接会ったことはないけど車の中の匂い越しに一方的に知っているんだ。

あと、この前テレビとかで少し見た覚えがある気がする。

名前は……いつものように覚えていないけど、たしか萩村さんのところの芸能界の人

だよな？

アイドルとか言っていた気もするなあ。

そんなふたりはどっちに行こうか言い合って、指さして行きかけて、やつぱって感じでたたらを踏んでいる様子。

……焦っているからかもたついていて、見ているだけでだんだんはらはらしてきた。

うーん……僕が普通の男だったときなら「どうかしましたか？」って言うるんだけど

なあ。

なんか危なさそうだったらお店の人に言ってあげよう。

背の高い方は明るい緑色で小さめのメガネをしていて、りさりん程度のちようどい……きつとお手入れとか考えたらちようどいい長さと量の髪の毛をそのまま下ろしている感じ。

あとおしやれな帽子もかぶっている。

それで背の低い子はとうとけっこう大変そうな長さの髪の毛……まあ僕ほどじゃないけど……をよく知らない感じに結っていたりして、後ろはポニーテールっぽい感じで明るい茶色に染めている様子。

ちよつと前……女性用、いや、女の子用のファッション雑誌とかを読み始める前は知らなかったんだけど、髪の毛をくくる場所によって細かく呼び方が変わったらしいね。

まあここでいちいち調べるのもめんどくさいから分かりやすくポニーテールでいいか。

視力が良くなった今の目で観察するに、ふたりとも髪の毛の結い方とか留め方とか服装とかのそこそこにおしやれが光っている。

かがりとかゆりかとかが目を輝かせそうな感じ。

いや、多分女の子なら憧れる存在。

だつてアイドルだもんな。

緑メガネさんと茶色ポニーさんは息を整えながらまだわたわたとしている。

そうこうしているうちに騒がしい声が少しずつ上がってくるのも聞こえてきて……あ、僕も手汗がじつとりしてきた。

こういうのってどきどきするからあんまり好きじゃないんだけど……早く逃げてくれないかなあ……。

……あの子たちは芸能人。

つて言うことはきつとマスコミとかに追いかけていられるんだろうし、大変そうなのは同情するけどそういうお仕事だからしょうがないよね。

それにしても芸能人ってああやって追いかけられるのが宿命なのか。

本当に断れてよかった。

じゃないと今みたいのにんびりぶらぶらすることもできやしないもん。でもあの子たち。

僕みたいにさ……人目を気にするんだったらさ、もつと変装とかして。

せめて髪型を変えるとかいつもの僕みたいに帽子とかで隠しちゃうとかは最低限だっと思うんだけどなあ……ほら、1回見たことがあるだけの僕でも「あ、あの子たちだ」って分かるレベルだし。

でも誰か大人の人……それこそ萩村さんとかのマネージャーさんとか警備員さんと

か誰かが傍にいたりするものだって思っていたけど違うんだろうか。

そうしてわたわたしているふたりをしつとりしてきたばんつをもしやもしやつつ考えていた僕。

「……………!!」

「……………!？」

……緑メガネさんがびつと立ち止まったかと思ったら、なんだか僕を見ている。

視線がぼちつと合った感覚。

そうしてじつと見られて縋るような目つきで見られている。

……なんで？

僕、こんなに離れたところの女性服売り場のワゴンにもたれかかってばんつもふもふしてただけなのに？

こんな背の低い子供じゃなくて鍛えてそうな男の人探した方が良いって思うよ？  
ほら、このとおりに毛糸のばんつをもふもふもこするしかできてないし？



## 32話 クリスマスと騒動と 3/3

「……………」  
 「……………」  
 気まずいときって時間が何倍にもなって感じる。

だから逃がしている2人のうちの1人とじ——つと動かずに見つめ合う。  
 そういう気がしているだけって分かっていてもなんだかもにつてする。

緑メガネ越しの緑メガネさんと目が合った感覚で体の中に軽い電流が流れたような  
 ……そういう不思議な感覚を感じながら「なんでだろ」って考えること数秒くらい。

けっこう離れているから確かじゃないけど……目が良くなつたって遠いところのも  
 のが細かく見えるようになったからといって、メガネって光っているしなあ。

だから目が直接はつきり見えているわけじゃない。  
 けど……ガン見されている気がする。

だつて僕の方向向いて硬直しているし。

こつちには服しか売ってないんだ、僕以外を見てるわけはなさそうだし。

そうして緑さんが目をそらしてくれると思つたら今度は僕を指してふたりでひそひ

そひそひそとしている様子。

……まさかね？

止めてね？

僕を巻き込むの……つて。

「……………っ！」

2人はうなずき合うと僕の方に走り出す。

なんで？

思わず身構えたけど……コートが重いのか疲れているのかよたよたとこちらへ走ってくる2人を見て気が抜ける僕。

背の高い緑メガネさんはわりと余裕そうだけど服が重そうなのが僕でも分かるし

……でもなんで……？

止めて、巻き込まないで。

そういうのも含めてアイドルなんですよ？

大体守るはずの人はどうしたの？

その人がなんとかすればいいのに。

そうは思うんだけど足がすくんで動けない僕。

とつさのことに弱いつていう僕の弱点がまた僕を苦しめるんだ。

もうだめだ……おしまいだ。

僕は目立ちたくなくて目立ちちゃいけないのに。

魔法さんがあるからいざとなったらなんでもなりそうだけど、でもやっぱりめんどくさいのに。

なんで僕はいつもこうなんだ。

そう頭の中でぐるぐるしてたけど、ふと手のひらの毛糸のぱんつで緊張がほぐれたらしくつて急に体が動くようになる。

……あの子たちは僕の方へ一直線、たぶん10秒もしないで来ちゃう。

そうしたら追いかけてきた人たちもじきに来てめんどくさくなる。

でも……昨日まで見ていた夢の中の突拍子のなさに比べたらどうつてことはない気がする。

そんな不思議な感覚。

修羅場を経験するとそれ以下はなんてことないようになるよね。

あの夢が修羅場だったのかは置いておくとしてもやっぱり慣れって大事。

「……よしっ」

ぐつと両手を握ったって思ったらまだ毛糸のぱんつがあったからそつと戻す。

そうして冷静に見回すこと少し。

……ここはエスカレーターの出口の真つ正面のお店で、その中でもまん中くらい……  
ただどワゴン以外に遮るものがない見通しのいい感じの通路で、僕はその通路において  
あつたワゴンの中のぱんつを物色していたのであつて。

いや、買おうとしたわけじゃないけどなんとなく気になつたからだ。

決して買いたいとは思わないんだ。

それはいいとして、つまりここは女性用の下着売り場……ランジェリーだっけ、と子  
供服売り場の境目くらい。

そしてお店にいたはずのお客さんとかは外からは見えないところのすみっここのほう  
のレジに……店員さんと一緒に集まつて呑気にも結構な大声で笑い合つたりしていて、  
まだ騒動に気がついてすらいらない様子。

僕が今大声を出しても多分僕の声がかき消されちゃつて意味がない。

女性同士の世間話に対して中身男な幼女の声帯は非力すぎるんだ。

だから、……。

「あ」

ふと横を見上げた僕はそのカーテンに気がつく。

そうか、試着室……それなら。

することが決まつてようやく動いた足と荷物を引きずつて試着室に荷物を押し込ん

でもどかしく靴も脱ぐ。

ちらりと外を見てみるともうすぐそばまで来ているふたり。

……騒動に巻き込まれないためには今ここでそれを起こさなければいいんだ。

だからこの子たちがこつちに来ちやったのはもうしょうがないとして、残りの……追いかけている人たちが邪魔じゃなければいいんだ。

それこそ……この子たちが別の階とかに行つちやつたって思ってもらえばいいんだ。

それなら少なくともここで、僕のすぐそばで大勢の人が集まってややこしいことになるのは避けられるはず。

だから見つけられる前に隠しちゃおう。

いや、別に放っておいてもいいんだけど……そこは僕が男だつて言うアイデンティティーで逃げてる女の子たちを見過ごせないつてだけだ。

ささいだけどこういうのひとつひとつが大事。

だから僕はカーテンから頭だけを出して、そのふたりへいくいくと手招きをしてカーテンをつかんだ試着室を指さす。

これで伝わらないんならそれまでのこと。

「……………っ！」

だけどその子たちはどつちも僕の無言のジエスチャー……だつてとつさに言葉出な

いし……に反応して走ってくる。

「……………ありがとうございますにやつ」

「ありがとっ」

今「にや？」って言わなかつた君？

……ああ、テレビでもそんな語尾してたような？

プロの根性つてのはこんなときにもすげーいらしい……良く見たら猫耳と尻尾のアクセサリー付けてるし。

「……………くつも」

言葉足らずな僕が指差した、多分普段の癖で脱いじやつたそれを取り込むようにまたまたジエスチャーで慌てて引つ込めるふたり。

うん、こういうときこそ普段のが出ちやうよね。

……でもまだ油断はできない。

こんなところで女の子を追いかけ回す輩はきつとしつこいんだろうしな。  
めんどくさいのは勘弁だからなんとか追い払いたい。

だからなんか思いついたこれやってみようつと。

「この階だなー」

野太い声が「だん！」って言う……多分エスカレーター駆け上がってきたんだろうな

……大人の男だからすごく響くし……音と一緒にここまでのはつきり聞こえてくる。

「っー！」

「にゃ……」

カーテンって言う布一枚な心細い仕切りしかないって気がついちゃった彼女たちが……せつかくほつとしてたみたいなのにまた縮こまっちゃってる。

うん、怖いよね……僕も男の頃から男の大声とか苦手だったし。

女の身になってみると余計に怖いんだ……手を上げられそうなのがして。

いざつてときに絶対に敵わないって自覚しちゃうと怖いよね。

僕も分かるようになった。

そんなやつはきつと元から僕が苦手なタイプの間人。

丁寧に相手する必要はない。

その声の主に連れられたたくさんの人たちが走ってくる音が聞こえる。

どたどたばたばたと服飾フロアにはふさわしくないような騒がしい音。

こういうのって営業妨害とかで警備員さんがなんとかできないのかな……いや、駆け上がってきたんだったら間に合わないか。

「こっちの方へ来たはずだ！」

「本当だな!？」

「歩いていた人から証言が！」

……この勢いで何人にも囲まれて問い詰められたら言わずにはいられないよね、通りがかりでも。

「……………」

「ね、やっぱ迷惑かけちゃうし」

「にや…………でも今出ても」

……僕はマナーを守らない人は嫌いだ。

上品である必要はないだろうけど、それでも人としての最低限のそれはあるだろうって思うから。

じつとカーテンのひらひらを見つめる。

……次第に聞こえてくる声から察するに少なくとも5、6人。

普段は他人になんとも思わない僕が「くたばってくれないかな」ってすら思うほどだからよっぽどだな。

「すみませーん、ちよーつと入りますねー！」

「こ、困りますお客さま！ 報道関係者の方なら先にアポのほうを」

「今はそんな余裕ないんだよ！」

「大声は止めてください！ け、警備員を呼びますよ！」



「おい、面倒だから落ち着け」

さすがに気がついたらしい店員さんが止めようとしてるらしいけど……女の人1人2人で血相変えてるだろう野太い声の男たちを抑えるのは無理だよな。

けどマスコミの人ってこんなにガラ悪いのかな……ああいや、今なら個人でも配信とかでできるしな。

「か、買い物をされている一般のお客さまもいらつしやるんです！」

「そ、そうです！ そんなに大勢で詰めかけて……しかもこっちは女性用のランジェリー売り場ですからご遠慮」

「男が下着売り場に入っちゃいけないのか？ あ？」

「い、いえ、決してそのようなことは……」

うん、怖い。

お腹の底がじくつてする。

……でもきつと、今話してる店員の人とかこの子たちみたいに生まれてからずっと女の子だった人たちが怖いはずなんだ。

「あ。……ちよつと、店にいる客とかに撮られてネットにアップされたら不味いつす

よ」

「しかしこのチャンスを見逃すわけには！」

「じゃあ女の私たちが行ってきますから。外に逃げだそうとしてきたらお願いしま  
す」

「分かった」

あ、女の人も居るんだ。

「というわけでー、私たち女だけなら問題ありませんよねー？ 私たち、ちょうど見たい  
のがあつてー？」

「いえ、ですからカメラのほうは」

「チツ……はーい……ほーら、カメラは外で待ってもらうんで。今は私たちはただの  
お客ですよ？ なら問題ないですよね？」

「い、いえ、でも」

「じゃー私たち、ちよつと服を覗きに來ただけなので入りますねー？ 買う意志あるん  
で客扱いですよねー？ ねーねー、どれにしようかー！」

「……せめて他の方のご迷惑にはならないよう。ご試着されている方もいらつ  
しゃいますから邪魔は」

「……………！ 試着室!! 行ってきますっ」

「あ、あのっ！」

店員さんの……多分僕を見てたんだろう、気配りがアダとなった様子。

まあ今のはしようがないって思う。

へんな人には理屈通じないもん。

と言うかふと思っただけで、僕、今この人たちの会話すぐ傍で聞いているんだけど……女性用の下着売り場の試着室でカーテン1枚ってどうなんだろ？

女性って案外、不意に開けられる恐怖っていうのをそこまで感じないんだろうか。

……あー、試着室は奥にもあつたし普通なら下着はそつちで試したりするのかな。そつちならドアがあつてカギがかかるようになっていたし？

ここは普通に試着したり……ギリギリ子供服売り場からも男用の服売り場からも近いし、あふれた人用なのかもね。

なら鍵掛かる方だったら……いや、ドアの上から覗かれたらおんなじかあ……。

普通なら、普通ならこんなこと起きないもんね……僕のせいでもあるんだけど全部あの人たちが悪いってことで。

でも、手で開けるカーテンしかないんだ。

あの様子だと「あ、まちがえました☆」とか言つてわざと開けるっていうのも充分に想定できる。

ていうかしてくるだろう。

このまま隠れてやり過ぎせそうかなとも思つていたんだけど、やっぱり思いつく限り

での最悪の状況っていうのを想定すべきだ。

だからこういうときはインパクト重視で有無を言わさないのが必要。

「……………」

「え？ あの時」

「……」。 コート脱いで頭から被ってなるべく小さく小さくなって」

「にや？ でも、それくらいじゃ」

「早く。 すぐ来そうだから」

アイドルさんたちにもまた有無を言わせない感じで、普段のかがりにするみたいに簡潔な指示を出しながら僕ももぞもぞ脱ぎ出す。

カーテンをちよつと開けただけだと死角になる入り口。

明るいところからだとよく見えないスペース。

……そこにふたりを隠すんだ。

でもあの人たちなら「そこちよつと見せて？」とかやりかねないから……丸まってくれた2人の上から僕の着て来た服を被せていく。

僕が来ていたコートとかカーテンから手を伸ばしたらつかめた適当な服とか僕のセーターとかシャツとかズボンとかをばさばさと被せていく。

「えっ……………」

「そ、そこまで……にや?」

うずくまりながら服たちの下敷きになってスキマから目だけがこちらを向いているおふたりさんがなにかを言いたげな顔つきだけど、唇に指を当てて静かにしておいてもらおう。

「しー」

「ひやいつ」

「にやっ」

ズボンを脱ぐとさすがに寒い。

けど暖房が効いてるからしばらくは大丈夫なはず。

「む」

鏡に映っている僕はシャツ一枚。

……こういう外でこういう格好になるって……なんかどきどきするな。

「……奥も含めて人がいるのはここだけみたいです」

「じゃあ私が。……んんっ、すみませーん緊急なんですーちよつといいですかー?」

やっぱり無理やりに来るらしい。

……女の子って同性だと結構強引だよね……かがりとかがりとか。

あの子のおかげで相当な体勢が着いたって思う。

「ちよつとお客さま、他の方にまで！」

「えつとですな〜。……あーめんど〜……あ、そうだー、はぐれちやつた人がいるんですけどー、その人たちなんですけどねー、大切な用事ですぐに行かないと困っちゃうんですよー！ 土壇場でやだやだつて逃げちやつたんで顔見知りなんですけどー！」

……雑だなあ……僕でももつと良い言い訳思いつくよ？

まあ無理やりにカーテンさーつとしないだけの理性がある人たちっていうのだけでまだ話は通じそう。

それだけが救いだ。

にしても強引だし、多分返事しなかったら勝手に開けるだろう。

じゃあ靴下も脱いで……いや、ここは片方だけ半分脱いだ感じにして、と。

よし。

「——えつと、なんですか？」

あえてカーテンを半分くらい……控えめつて感じに開きつつ、上目づかいで見上げる僕。

上目づかいには慣れてる。

こうすると、特に女性にはきゅんと来るらしいって言うのも。

多分庇護欲煽るんだろうね……だつて幼女だし。

さらに普段の演技の実戦だつて気持ちで表情筋をがんばつて動かして、不安そうな顔とおどおどした感じの声を出しつつ言ってみる。

「ぼ……………、わ、わたし……………今、着替えてるんですけど……………」

ことさらにあざとく、儂い幼女を意識して。

こういうときには下ろしている腰までの薄い色の髪の毛が強烈だ。

見下ろしてくる女の人たち……………思つたより普通な印象の人たちだ……………は、僕の顔を見て気の抜けたような表情をして。

それから僕の髪の毛へ、そして体を見てからようやく「しまった」つて感じになつて  
いる。

うんうん、予想どおり。

効果は上々だ。

どんな悪い人でも子供には甘いもの。

さらに今の僕は胸元だけボタンを外してはだけさせていて、その間からは……………少しでも温かくなりたいから買ったあつたあつたかわい感じのブラジャーが覗いてい  
る。

僕の見た目のインパクトで本当に着替えている途中だつて見えるだろう。

ぱんつはシャツの裾で隠れるから恥ずかしくないし、ズボンだとインパクトないしつ

て脱いじゃってふとももの際どいところから片方の靴下まではつきりと見えているはずの僕の白い脚。

同性でもぼけーってなるのはかがりで証明済みだ。

……あ、「わたし」って言ったのもしかして初めてかも？

まあ特にこだわりはないから良いけども。

「……………」

「……………」

「……………??」

「……………」

「そんなのどうでもいいからそれ見せて」って言われないから成功なんだろうけど……じつと黙ってどうしたんだろこの人。

なんだか無言の間が続いているから適当にもじもじとしてみたり、髪の毛を弄ってみたりして早く出てけアピールをすることしばし。

「……………」あ、ご、ごめんねー？ 人違いだったみたい！」

無事に成功した証として女性が子供に話しかけるとき特有のトーンと話し方になっている様子。

「お、お邪魔しましたーっ」



しゅつとカーテンを閉めてくれたけど……顔、真っ赤になっていたのなんだから。

女性が……普通の人だったよなあ……こんな幼女の半裸を見たからってどうこうなるわけもないしな。

うーん？

……あ、下で見上げてきてるふたりも顔真っ赤。

いや、女の子なら学校とかの着替えでお互いの見えるから慣れてるでしょ……？

「……ふうつ。……こつちには居ませんでした！」

「ちつ！ じゃあさっきのは見間違いかよ！」

「それならやつぱそのまま上に逃げたんじゃない？」

「いや、俺たちがここぼっかり見ているあいだに……エスカレーターでもエレベーターでも、とつくに降りているかもしれねえ！ 下の連中に連絡を！」

「はいっ」

まーたどたどたとせわしい音……すぐにエスカレーターを駆け上がる音と一緒に消えてひと安心。

「……お客さま、大変失礼しました」

ほつとしていたらカーテン越しにさっきの店員さんの声。

「ごめんなさいね？ 怖かったですよう……すごい剣幕で……えつと、みんながわーっ

と来たもんだから私、止められなくて」

「いえ、平気です」

この店員の人もこつちが子どもと見るや口調が変わる人だった様子。別にいいんだけど……慣れてるし。

ちよつとした演技をしなきゃならなくてとつても疲れたけど、つまりは非常に不本意ではあったけど……でも、これで何ごともなく穏やかになつてくれればばんざいだしコスパつてやつもいい。

「うむ」

僕は男だし、別にふとももさらしたつて全然平気だしな。

ガワも幼女だし見られて減るものなんてなにひとつとして無いんだ。

僕のぱんつを見せて何が解決するなら喜んで見せるよ？

……ん、そう言えばふたりともずっと丸まつてて疲れないのかな。

顔赤いままだし……酸欠？

「……もう大丈夫みたいですよ？」

「……あ。ほ、本当ね……」

「たつ……助かったにやあ……」

どさどさと服の山が崩れて下敷きになつてもらつていた緑メガネさんと茶色ポニー

さんかもぞつと出てきた。

……まちがえて乗せちやつた毛糸ばんつが頭に乗ってる。

「？」

それを手に取つてみて調べている。

「……!？」

少ししてそれが自分の頭に乗っていたのに気がついたらしい。

「……た、助けてもらったんだから……」

心なしかしよげている。

……まあ新品だし、文句はない……よね？

助けたんだし？

全部僕のためなんだけどもこの子たちのためにもなったんだし？

けど……ふむ。

これが女の武器っていうやつかな？

初めて使つてみたけど、同性に対しても……少なくともひるませるくらいの効果はあるというのが確認できた。

猫だましの効果しかなさそうだけど、またなにかに使えるかもしれないし覚えておこうつと。

……いや、違う？

男の人は遠巻きに……少なくとも僕が見えないところにいたみたいだし、見たのはみんな女の人だったし。

肝心の武器っていつても真つ白なふとももくらいで、限りなく平べったいブラジャーの中身でさえニセモノだしな。

ただの幼女だ、武器なんて幼さしか残されていないはず。

……つまり今のは女の武器じゃなくって、幼児もとい子供アピールってことになるのかな。

うーん、難しい……。

## 33話 猫と17歳 1/4

「……私たち、ほんとうに助かったのね……」

「ようやく実感してきましたにやあ——……」

あの後こそこそ店員さんたちの助けを借りてエスカレーター伝いに移動して、試着室からさっきの喫茶店の隣のレストランにまでたどり着いて「さすがにここなら来ないでしょ」ってなつてひと息つく。

まさにとんぼ返りつてやつ。

目的の下着も買えたから僕としては悪くない。

なぜかあのとときの毛糸ぱんつもカゴに入れちゃっていたのに気がついたのはレジで「あ……それちがうんです……」って言う前にしまわれちゃったから言い出すこともできなかつて僕用の毛糸ぱんつが手に入ることになった。

まさかカゴに入れられていたとは……どっか行つちやつたつて思つてたのにいつの間にか？

「いやー、ほんつと助かりましたあ」

「いえ」

とりあえずで頼んだ今日何杯目かになるコーヒを静かにすすっていたら、テーブルの反対側でふたりして面接のように……僕は就活してないから知ってるだけだけど……座つてこつちをずっと見ていたふたりのうちのひとり、茶色ポニーさんのほうから声をかけられた。

そのまま静かにしてくれていたらよかつたのに。

僕は何時間でも「……」が続いて平気な人種だからね？

「あのまま私たちだけだつたら、きつとすぐにあの人たちに見つかつちやつてまたカメラの前に引きずり出されて質問攻めに遭うところでした。あー、こわかつた！」

「ほんとうでしたにやあ……ほへえ」

にやあ？

なんだかさつきからにやんにやんと耳に残る語尾で改めてもうひとりを見る。

猫系の芸能人、アイドルをやつてるらしい緑メガネさんもと緑メガネ猫尻尾さん。

だつてこんなときなのに猫耳と猫しっぽのアクセサリー外していないし……筋金入りだな。

根性がすごい。

やつぱりプロは違うんだ。

「実は私たちですね、ちよつとしたインタビューを……それもここじゃなくて別のところ

ろで受けていたんです」

あ、別に事情とかは良いです……って普通の人はならないから言わなきゃいけないよねって当然のようにしてしゃべりだすポニーさん。

見た目的にも身長的にもこつちの方が年上っぽい。

そう言えば芸能界って上限関係厳しいらしいなあ。

「けどですね、そこへ突然って感じで……警備員の人とかを押しつけてあの人たちが無理やり入ってきて強盗みたいに押し入るっていう感じだったんですよー、ほら、今って配信されてるとすぐ大変なことになるのでこつちから手を出せなくってー」

さらさらと話しているポニーさん。

さすがアイドルなんだなって感じで話し方がアナウンサーみたいに綺麗で聞き取りやすい感じ。

歌とかトークとかもいつもしているんだろうし、そりや普通の人とはちがうか。

きつとドラマとかにも出ているんだろうしラジオとかもやっているのかもしれないし。

トレーニングとかで毎日忙しいって言っていたしなあ、萩村さんが。

あのととき井さんはひとつとも言わなかったけど。

ただただ楽しいってことしか強調せず。

やはり信用できない悪魔さん。

メリットだけしか伝えなくてデメリット、こつちから聞かない限りはひとつことも言わないっていうの。

やっぱりあの人は要警戒だ。

「それからですね、そばにいた人たちの助けがあつてなんとか逃げ出すことはできたんですけどにや？」

一緒に説明してくれようとしているのはメガネ猫さん。

けども……その、なんかギャップがすごい。

真剣に話しているのに猫耳とか尻尾つて。

「相当な人数だったみたいで裏口まで抑えられていたみたいで。そこから全力で走つて……10分20分くらいですかにや？」

「そのくらいねえ……いや、もつとかな……とにかく疲れたわ」

鍛えているとは言え追いかけられた状態で全力疾走を10分単位。

そりゃあ疲れる。

でも僕もう帰りたいんだけど？

助けたからつてお礼とか要らないしさつきと帰りたいし……さつきの毛糸ぱんつ気になるし。



「私はまだまだ行けたんですけどにゃー？　せんば、相方さんがへばってしまってますにゃ」

ボロが出そうになってる猫さん。

キヤラ付けて大変だね……僕が外部の人だからがんばってるのかな。

「もー走れないって感じで押したりしながら走ってたから私もちよつと疲れてきたところで、もーどうしようかって思っていましたにゃ。　どんだんに追われて袋のネズミでしたし」

猫が鼠。

……ただの比喩表現だったらしく、普通にため息をついていた。

良かった、「はは……」とか愛想笑いしなくて。

僕は会話の経験が少ないからどう反応したらいいか分かんなくて笑っちゃいけない場面で愛想笑いとかいやいやこういうのもうやめよう心が痛い。

「いやいや、いっくらダンスとかで鍛えているとは言っても人海戦術されたら敵わないわよ……走って追いかけてくるのはもちろん車とか何台も使って追ってくるなんて言うどこぞの映画みたいなことしてくるやつらからずーと逃げるのなんて限度があるでしょ。　相手みんな男の人で怖いし」

「情けないですにゃあー」

どうやら緑猫さんはフィジカルもメンタルも強いキャラで通すらしい。もはや尊敬する僕は猫耳キャラな子って扱ってあげようって決めた。

「……………」  
それにしてもだ。

騒動の本体に巻き込まれるのはかろうじて回避できて助かったけど、今度はレストランっていう望んでもいない場所へ「お礼だから！」っていうのと「良ければちよつとだけ聞いてほしいことがあるから……………」って言って半ば強制的に連行された僕。

まあいつものだな、うん…………この体になってからの「いつも」。

もちろん抗議の声はちっちゃくかすれたぼそつとしたものだったから当然にして聞こえなかったみたいだし…………もうやだこの小さい体。

なんとかならない？

ならないよなあ…………。

でもなんで2人が正面に座ってこっち見てくるんだ…………やめて、僕こういうの苦手だから。

隅っこでひとりじとじとしている方が気楽だから。

どうして僕はいつもこんな目に遭っているんだろう。

やっぱり呪い。

つまりは魔法さん。

というのはさすがに言いがかりかも。

少なくとも今回ばかりは魔法さんにはなんら関係のないことだろうし。

……関係ないよね？

そうだよね？

面倒ごと引きつけるとかやめてよ？

「そもそも私、置いて行っても良いよって言ったじゃない」

「いやいや無理ですよ！ だから抱っこしようかって」

「お姫様抱っことか恥ずかし過ぎるからイヤだったのよ」

「普通におんぶのつもりでしたにや!？ そんなこと考えてたんですかにやあ!？」

「あ、そうだったの？ 私てつきり」

なんだかぎやーぎやー言い合っているふたりを眺めながら、なんだか落ち着かない理由の周囲を見回し直してみる。

名前は知らなかったけど何度か前を通って知ってはいた、いかにもな高級レストラン。

その中の……わざわざこのふたりの名前を出してーの、これまたいかにもーって感じのフスマの奥の個室だ。

内装もなんだか凝っているしそここの装飾は黒に金箔だし、おまけに壺と掛け軸なんかが備わっている。

僕は全然詳しくはないけどひと目で見て「あ、これ壊したりしたらとんでもない金額だ」ってことくらいは分かる感じの高級感と希少感を放っている。

……僕には縁のない世界のものだなあ。

「こやっ」

僕はじつとその尻尾を見る。

必ず語尾に……いや、聞いていたら必ずしもじゃないみたいだけど、でも「な行」がみんな「にや行」になるわけでもなく、ただただ語尾に「にや」を着けるっていう完全にキャラクター作りをしている様子の猫耳しっぽ語尾緑メガネさん。

語尾はともかくカチューシャで着けているんだろう猫耳も腰のあたりに固定しているんだろうしっぽも、声とか体の動きに合わせて動いているように見えるのは……気のせいじゃなさそうだ。

まあ昔ならともかく、今ならその筋の技術を持ってすれば体の動きと抑揚に合わせて動くこういうのなんてお高くとも手に入るのかもしれない。

だってアイドルっていうのだし。

それにこういうのって前にどっかの記事で見た覚えがあるしなあ……あ、科学の勉強

ついででだった気がする。

脳波を読み取るんだっけ？

すごいね。

なにがすごいってそんな技術をこんなことに使うっていう需要の方に。

こんな非常事態のときまで目立つっていうのに着けっぱなしで、しかもこういう個室の中っていうオフに近い環境でも語尾は残しておくっていう徹底ぶりだ。

もちろん移動中も耳と尻尾は出しっぱなしだったし。

いちおうさっきのお店で買った僕の服のうち今は着ないのを「貸してほしいにや？」って頼まれて渡したシャツとかを腰に巻いたり帽子をかぶったりして隠してはいたけどばれられ。

なんでもコートを着るには暑いらしい。

ふたりとも汗、結構かいてたしな。

近くでって言うかいつもみたいに手を引かれて歩いたからそれを嗅ぐことになったんだけど……あの匂い、やっぱり嗅ぎ覚えがあると思ったら萩村さんの車の中の成分のひとつだった。

制汗剤とかでちゃんと管理している汗と違って不思議と臭くないよなあ。

どっちかっていうと甘い感じ？

よく僕がお風呂上がりとか寝起きとかに「ん？」って感じで不意に僕自身から漂ってくるあの匂いに似ている感じ。

ミルク系な感じ？

女の子の匂いってこういう系統だよな。

男とは絶対に違う何かだ。

「……あー、えつと。それでなんですけどね……う？」

ゆらゆら揺れていた尻尾の先を見ていたら茶色ポニーさんが会話を再開し出す様子。

……ふさふさ感を触って確かめさせてもらいたいかも……。

「助けておいてもらってさらに……なのも悪いんですけど。その、ほとぼりが冷めるまで？ このレストランに駆け込むまでは運良く見つかりませんでしたけど、きつとまだ何人かあの手の人たちがそのへんにいると思いますので、そのお……もうすこしだけ私たちと一緒にいてもらっても良いでしょうか……？」

すつごく言いくさそうなポニーさん。

さすがに僕のイヤそうな表情とか態度、伝わってはいたらしい。

「そうしてもらえらるとつても助かるんですけどにやあ……だつてこういうときに『女性ふたり組』っていうキーワードで聞き込みされちゃったりすると割とかんたんに居場所、探られちゃいますからにや——……。足とSNSで情報を集められちゃうとどうし

ようもないんですにやあ。このお店の人たちなら大丈夫だつて思いますけど、歩いてきたのを見ていた人たちなら無理ですし、にや?」

なるほど……あ、耳の先つぽがぴくつと動いた。

あ、もう一回ぴくぴくつて。

「ここでのお昼は好きなものをいくらでも食べてもらつてもいいですし、帰つた後で相応のお礼もしますし……おねがいですよ!」

「そうそう、好きなグループとか人とかの握手とかサインとかライブのひとつやふたつとか……予約でいっぱいのもいくらでもねじ込めますから!」

「別に僕も急いでいませんし食べるくらいは構いませんけど、そういうのは良いです」

朝は寝坊して冷蔵庫で忙しくて来るのも大変で、ようやくまともな服を手に入れられたと思つたら今度はこの騒動でちよつと休みたいのも事実だし。

「それなら誰がいいですかにや? あ、後でも良いですけど……もちろん私たちでも大歓迎」

「ですから僕そういうのに興味がないので要りません」

あ、この子たちのもう一つセリフに重ねちゃつた……ちよつと悪かつたかも。

でもそれを特に気にするでもなく、なんか驚いてるふたり。

「なんと……こんな人も居るんですか……あ、ごめんなさい」

「珍しいですよ？ 前ならともかく今となつてはサインとか要らないつてばっさり言われたの、たぶん初めてなんですにや」

うん……むしろ食い気味になつちやつたよね……タイミングが悪かつただけなんだ……決して嫌いつて訳じゃなくて単純に興味がないだけなんだ……。

「ちよつとがっかりですけど、まあご興味ないんじゃないですか。あとで気になつてきてもらえたらいつでも喜んでしますからにや？ お礼の方も別の形で」

「……………」

さすがに何にも要らないつて……さつき言つたけどもう一回は言いにくくつて黙るしかない僕。

それにしてもサインとかつてもらうの嬉しいものなんだろうか。

これがかがりとかかりさりんなら喜び勇んで色紙とか用意しに行くだろうけど、僕は興味ないし。

……あ、でも好きな作家さんのサインを本にもらうつていう見方に変えてみればたしかに嬉しいものかも？

そんなことを考えつつも「やっぱ早く帰りたいな」つて言う帰宅部の本能が疼く僕だった。



### 33話 猫と17歳 2/4

「まー実際ほんつとに助けられましたからにや、サインとかいうお手軽な手段じゃダメなら」

「(うら)うら」

「冗談ですにや。　そーゆーのが要らないみたいなので後でなにか別の方法を考えてお返ししますにや。　事務所の方から」

「そうねえ……さつきまでかなりピンチだったし。　……今回は反対派の人たちだったから大変だったのよ。　ああ言う人たちって何言っても反対って決めてるから……あ、ごめんなさい」

「いえ別に」

あれだけの事が起きてて僕が居なかつたら……多分今ごろ質問攻めになって大変だったのは簡単に想像できる。

だからこそ意地でもそのおかしをしたいらしい。

まあ要らないって言ったから無難にカタログギフトとかなんだろう。

でもなあ。

僕がどうでもいいってことでも……あの山でのご夫婦もおんなじようなこと言っていたし、少なくとも感謝っていうのは……あちらが感じているのなら相応のそれは受け取っておいたほうがいいのかもしれない気がしてきた。

こういうとき社会にろくに出了た経験がないとその加減がわからないのが悩みどころ。本当ならこういうのは親に聞けば常識つてのが分かるんだけど僕にはそういうのもう居ないし。

「まあ飲みものだけっていうのも寂しいですし私たちもお腹空いてきましたし？ だつてあんだけ走り回つたですよ!! とりあえずご飯食べましょうごはん! もーおいしい匂いが我慢できないんですよ! ここのお店はおいしいって知ってるから余計なんですにや!!」

さつきからぐうぐうお腹なってるもんね……猫さん。

アイドルつて体力が資本だからご飯の量も多いんだろう。

ちようど僕の反対だな。

「あ、支払いはもちろん私たちもとい事務所持ちにするので遠慮しないで好きなもの好きだけ食べてくださいにや!」

メニューをみて「うげっ」って顔したのを見逃さなかつた僕。

そりゃあひと皿2千円とかしたら……ねえ。

いや、僕は大人だしこの子たちは芸能人だから払えない金額じゃないはず。

実際観光地とかじゃもつとするのも平気だし。

でも、それを家の近くでつてなると……なんだか気が引ける根っからの貧乏性。

ひとり暮らしのニートなんだ、そうじゃなければとつくに使い切つて就職してる。

……いや、世間一般的に見ればそっちの方が良いんだらうけど働きたくないし今はそれどころじゃないし……。

「あ——……冷たいお茶もおいしいですなえー」

「言動がいちいちおばさんくさいですにやよ?」

「そこ、うるさい」

「……ぷは。あ、この子が言うとおり本当にお金のことは気にしないで好きなもの頼

んじやつてね? スマホは持って来れなかったんだけどお財布はありますから。心

配ご無用です!」

「はあ」

さすがにこれだけ話してるとこんなに年下相手なんだ、くだけてきたポニーさん。

いや僕は別にはしらないけど……やっぱ子供になるとこういうのつて多いから。

それにしてもお腹が空いた感覚が結構強めなのに新鮮さを感じるけど、よく考えてみ

たら朝はニュース見ながらごはんを食べていて……今日の日付のことに気がついて動揺しちゃったから食べるの途中で止めちゃって。

いろいろと漁っていたら冷蔵庫の悲惨さを目の当たりにして臭いとの格闘で忙しくつて、汚れたし寒かったからお風呂に入つてそのまま来たんだつた。

そりゃあいくら幼女の胃でもお腹は空くよね……お茶だけで「そろそろ帰ります」つて言うつもりだったから飲みものだけ頼んでいたけどせつかくだしつてことで。

どうせ断れないだろうし、断つたとしたつてかがりとかみために余計なひと皿を頼んで「食べきれないから食べて？」つていう姑息な手を使つてくるんだらうし。

女の子……お節焼きな人はそう言う手を使つてくるんだ。

そういうわけで適当なのを選ぶけど、ふと気になる。

そういうえば食事も3ヶ月ぶりになるなあつて。

主観では連続してるけど客観的には3ヶ月寝たままだつたわけだし……お腹とかどうなつてるんだろ。

朝はちよつとだけだったし脂っこさもなにもないものだったから大丈夫だつたけど、こうして外で食べるものつて味付けも油も多いよなあ。

食べなかつた後つておかゆとかから始めるつて聞いたけど……大丈夫なんだらうか。

そのへんも魔法さんがなんとかしてくれるんだらうか。

こういうときだけは神頼みならぬ魔法頼みもしたくなる。  
いやだって、食べた直後からトイレに籠もるのは勘弁だし？

◇

「そういえば」

「あ、ちよつと待って、飲み込んじやいますにや」

「いいよー」

「……………んく」

あちらはお皿を半分ほど食べてひと息。

こちらはお皿を……4分の1ほど食べて顔を上げる。

どう考えても食べきれないけど、いくらなんでも初対面のこの子たちに食べてもらうわけにはいかないよなあ……かがりやゆりかじやあるまいし。

あれは歳が近いっていう偶然とはらぺこっていう中学生女子の特性とが揃って初めて起きる奇跡だったんだ、きつと。

だって試しについて、りさりんとかさよと一緒にのときに「余ったけど食べる？」って聞いてみたら一瞬だけど目が泳いでいたし……まあそれでも食べられたんだだけ。

女子中学生の食欲、男子中学生にも負けない。

いや、そのあとに甘ったるいデザートを食すあたりそれ以上かもね。

そりゃあ体重とかいっつも気にしているわけだな。

僕とは逆で。

「……………ん、いいですよ」

「そう？ ……そういえばなんだけどね？ あ、悪い意味じゃないので気を悪くしない

てくださいね？」

「はあ」

「悪い意味じゃないので」って言うときって大抵悪いことだよな。

「初めて見たときには男の子っぽい印象だったんですけど女の子だったんですねって。

勝手にヘンに思い込んでいたので……なんとなく謝らなきゃって思ってたですね？

あの売り場に立っていたのを見てちよつと『あれ？』って思ったり、試着室に匿ってくれたと思ったら女性ものの服を放りこんできて……それで入ってきてさらに脱ぎ出したときにはびつくりしてたんです。 さっきまでは男の子かもって思っていたので、それで……」

うん、僕だって初対面の男でも密室でいきなり脱ぎ始めたらびつくりするって思う。

「ああ、あれにはびつくりしましたにや……追われていてのどきどきにさらにまし

でしたにや。この相方なんて男の子がズボン脱ぎだしたと思つてからに、ズボン脱いだところをガン見してほんつとシヨタあいたたたた!!」

……うん、年下の異性だつて思えばそりやあね……男とか女とか関係ないよね。

大丈夫、僕はそういうのに理解あるから。

「女の子だつたんだからいいでしょ! ……あ、すいません……それに背ももつと高いつて感じたんですけど気のせいでしたね。なんかそんな感じがして」

「あー、たしかに近くに来てみるとなんだか幼く……ごめんなさいですにや」  
「気にしていませんから」

小さいのは事実だからね。

……この席、イスがテーブルに対して低すぎてヒジもつくことができないから。

お店の人が気を利かせてくれて持つてきてくれたクッション2枚重ねじゃなかったら、まともに食べられたかどうか。

多分お高い、ムダにいいクッションだからバランスを崩すとそのまま落ちちやいそう。

足でも踏ん張れないんだし気をつけないとな。

「ほんつとーにすっかりした子ですにや」

僕は大人だからいちいちの子供扱いにはなんにも感じない。

なんにも感じないんだ。

「さっきの話に戻しますけど……そろそろ囲まれそうだってところでとりあえず隠れようって思つて、あちこち走り回っていたらあそこでたまたまランジェリーの……あ、下着のことです……売り場が見えて『店員さんに、お店のバックヤードとかに匿つてもらおう』って考えて。そしたら誰かが助けてくれそうだったから相方に言いながら近づいてみたら男の子が手招きしているように見えたので、びつくりでしたにやあ。……あ、なんども男の子だつて言つてごめんなさいですよ？　ただ女性用の下着のエリアつて男性が近寄らないので、その」

「よく間違われますから。もう気にされなくてもいいです」

……何回か謝られては「気にしてないよ？」っていう、どつかでやったようなやりとりが始まったもんだから会話から興味が薄れた僕は、気がついたら適当な返事をしながらごはんに集中していた。

注文する前は高すぎるって思っていたんだけど、いざ食べてみるとたしかに値段相応なのかもつて味に負けたんだ。

細やかな味付けで人工調味料の味もしくつて……使っている材料だつてみんな良いものみたいなのが分かる。

……こんな料理を頻繁に食べられるならアイドルつてやつも……いやいやダメだこ



れは悪魔の誘いだ今井さんの顔を思い浮かべてなんとかしよう。

あれ、でもそう言えば珍しく男か女かって聞かれた気がする。

そういうのつてみんな聞いてこないもんね……時代的にもセンチティブな感じだし。

少なくとも僕なら「ん？」つて思つてもどつちでも良いような受け答えしからないもんな。

普段はともかく今日の僕は……もう女装の必要がなくなつちやつたこともあつて、ズボンこそ履いているけどコートの周りには髪の毛を振りまいているし顔も出している。

髪の毛つてひと目で見てわかるようなシンボリックなもので、だからこそあれだけ遠くから僕を見たのなら、幼いかどうかはともかく男だとは思わないはずだ。

だつてこんなに長い髪の毛だもんなあ……背は低いのに。

タクシーに乗つて行き先を伝えたあとのちよつとした会話も、そのあとの服を選んだり喫茶店に入ったときも……さらに言えばさつき毛糸ぱんつを買つちやつたときもこのレストランに来たときも、明らかに女の子扱いつて言う非常に不本意だけどすっかり慣れきつてしまつている対応をされたのに気がつく。

……なのこの子たち、僕を男だつて思つていたらしい？

なんでだろ……そんなに格好良かったのかな、僕……冗談だけでも。

でもこんなに髪の毛伸ばしている男なんてそうは……あ、そういえばおじいさんだか

おばあさんだかが「最近はおつと見てわからない子もいる」って言っていたし、ひよつとしたら僕が気がついていないだけで、外にろくに出なかつたから知らなかつただけで……世の中では長髪ファッションの小学生男子とかも居ないではないって感じの風潮になりつつあるのかも？

うん、僕は周回遅れな人生送ってるわけだし充分にあり得る。

さらにこの子たちは時代の最先端なテレビ業界人なわけだしそういうのの最先端だよね。

……男って思われて嬉しかった。

うん。

僕はまだ大丈夫だ。

今の言葉だけでしょげてた心が元気になってきた。

「……しかし、しかしですよ？」

「え？」

「その年でその美貌……！ 褒める分には良いですよ、あ、これお世辞とかじゃないですからね！ 雰囲気も普通じゃない感じで話し方も知的クール系ですし、帽子とか格好次第じゃ子役も、いえ、それ以上行ける！」

「ちよ、ひかりさん止めましょうにやあ」

……あれ？

この流れ、半年前にも……。

「男性はもちろん、きつと女性ファンもたつくさん期待できますよ！ 中性的で私だつてどきどきしちやいますもん！ 顔も髪の毛もその目も素敵で話し方も格好良くつて。

どうですか？ 私たちとアイドル、いっしょにやつてみませんか？ 私たちなら事務所に話せばどつかにすぐに!!」

この体、僕のじゃないから褒められても嬉しくないんだ……あ、でも話し方のところだけは嬉しいかも。

「ひかりさあーん……『あの人』みたいな唐突な勧誘は止めましょうにやあ……ほら、ナントカ詐欺の勧誘みたいで結構みんな引きますし……『あんな状態』になっちゃったあの人のカンつてやつが移っちゃったんですかにや……？ 引きますにや……？」

まさか？

とは思うけど……同じ業界でこんなに近いところなんだつて言うか確か事務所この駅だったよね……。

……世の中は意外と狭いんだつて。

「……えっ……ウソ、私今のある感じに……？」

「そうですね？ あと、助けてもらったばっかりでそんなことすると……さっきのがぜーんぶこのための演技だなんて思われたって仕方ないですよ？ ドラマでもよく見る展開ですよ？」

「……うそ——お……あんな風にはならないって決めてたのに——……」

ひどい言われようだけでしょうがない。

茶色のポニーテールがしなびてきた。

髪の毛が意外と動く……いや、逆立ったりしなびたりするよなあ。

猫みたいに。

いや、こうやって髪の毛がもさもさになったからこそ知ったんだけど、感情が……自身は滅多にないけどあの中学生たちとかを見ていると彼女たちの表情とか声とかに合わせて……たぶん毛根がどうにかなるんだろうな、動いて……髪の毛もほんのちよつとただけで形が変わることがある。

すつごく嬉しいときとすつごく怒ってるときに。

僕も、なんとなくそういう感じすることあるしな……なんていうかちりちりするって感じで。

「……むむ……言われてみたらそうでした。そういう番組とがありますし警戒されても仕方ないですよね……」

「ですにや?」

「ということやらせとかじやないんです……本当なのでどうか」

「分かっていきますから気にしないでください。それに」

「あの人」の「あんな風に」って言うので大変に落ち込んでいるらしいポニーさんと心底申し訳なさそうな猫さんに向かって言っただけ。

「もし、仮にです。あれが全部演技で貴女達が危険な目に遭っていなければ安心したって思いますから」

……大人の、いや、大人に限らず人の本気の大声と走りですつと追いかけるとか怖いってものじゃない。

それはこの体になってついさつき傍で聞いただけでそう感じたんだ。

だからもし全部が今井さんの仕業だったとしても……とりあえずはほっとするだろう。

もちろん断るけども。

「……………ほあ……………」

「にや……………にやあ……………」

一瞬の間があつて「僕が疑ってませんよ」って言うのに安心したのか顔を赤くして静かになった2人。

「?」

女の子って……全然話す機会を持ったことがなかったんだけど、やたらと恥ずかしがるよね。

同性なはずの僕に対しても。

やっぱり喜怒哀楽が……良い意味でも悪い意味でも激しいんだろね、女の子って。

その傾向がまだ無いから僕自身に安心できるんだ。

だって男に戻ったときに女の子みたいなメンタルになってたら困るし……。

### 33話 猫と17歳 3/4

「……………」

「……………」

「……………」

かちやかちやとしばらく無言で料理を類張るっていう嬉しい時間で僕は堪能した。でも嬉しい時間っていうのは儂く過ぎるもの。

まあポニーさんはぜんぜん食べていなかったし居心地悪かったのかもしれない。

そのまま残りの時間を黙っていてくれればいいんだけど、やっぱりそこは女の子なわけですっきの話を振り直してくるらしい。

「……………あの」

「はい」

「えつとですね、さつきのはえつと……………そんなにまだ小さいのにさつきみたいにとつさの機転とか利くし、話し方もこんなに落ちついていて理知的ですし」

多分小学校高学年から中学生くらいって小さいって言われたらイラって来るって思うよ？

「だって言葉の使い方とか会話の受け答えとかってたまに感じるの、こっちに来てすぐにごぼう抜きしていつちやう子とかとそっくりだと思って。ちよつと指導とか受けただけですぐがいいところまで行けるんじゃないかって思うんですよ……つまりは貴重な即戦力ってわけで。だから勧誘したくなって、つまりはごめんさいつて言いたくって……」

「そうですか」

しどろもどろな感じは本当に困っているらしい。

……僕からの黙ってたから無かったことにしてあげるサインを見逃されたいらしい。

僕が出す合図ってほとんど見逃されるんだ。

「反省しなさいですよー？ いやほんとじよーだんじやなく今のうちに。ああなる

前に」

「反省します……あれはイヤだもん」

この感じ。

萩村さんとのつながり、芸能界つながり……どう考えても今井さんのことだろうな。

なんなら以前どつかのポスターであのビルに生息しているアイドルさんたちがコマーシャルやっているのを見たしな。

でもまあ反省してくれているみたいだし、僕としてはこれでも悪魔さんよりもずっと



理性的だし、別に文句はない。

でも……そっか、僕はそう見えるのか。

今さらながらに僕の住所年齢性別不詳疑惑。

だって実際年齢も性別も何もかも違うんだしな。

普段は学生って言う……2年前までは小学生だったあの子たちとしか話さないし、同年設定で通しているから「ちよつと大人びてるね」とか「いつも静かだよね」くらいにしか言われないけど……さすがに大人相手じゃ「ん？」って思われるよね……。

見た目で目立つついでに褒められるのはしようがないから諦めてる。

どこにでもいるおとなしくて影の薄い系の……いわゆる草食系ってやつの中でもさらに影が薄かった前の僕と、黒系統の髪の毛がほとんどのこの国でたったひとり薄い色の髪の毛をばさつとしていた僕はまるで違うもんね。

僕だってこんな子が歩いてたらなんとなくで見ちやうくらいだし。

分かってるけど改めて目立つって自覚し直した感じ。

……普段のフードと帽子作戦はよっぽど効果的だったらしいのも。

最初はいろいろダメダメだったけど僕なりにがんばってたのは完全な無駄じゃないってわかってちよつとほつとする。

でもしよせんは借り物の体。

ニセモノでウソつきでかりそめの姿。

元が男つて事もあつてかわいいかなんとか言われてもなにも感じないのが空しい。

「それで、そのー。 えっと、一緒に」

「お誘い自体は嬉しいんですけども」

なんか「あの人」に似てるつて言われて凹んでるポニーさんがそれでもめげずにぐい来る。

「じゃあっ」

「ですけど僕は人に見られるのが好きではないのでお断りします」

こういうのはきっぱり言つてあげるのがその人のため。

「以前にもそういう話ありましたけど、そのときにも同じようにお断りしたんです」

「そ……そう……………」

ポニーテールがさらにしよぼくれる。

「その感じ、もしかしてこういうの多い……つてそりゃそつか、そのお顔と髪の毛だもんね。 ごめんなさい……………」

「いえ、気になさらず」

でも今つてそんなに人手不足なのかな……そういう業界つて行きたい人ばかりだつて思つてたけど違うんだろうか。

芸能人って必ずしも見た目だけじゃないんだからそういうやる気のある人たちから選んだ方が良くって思うんだけど違うんだろうか。

「にやつ……にやつ」

ぼつさりした僕とぼつさりされたポニーさんを交互に見ていた猫さんが気まずい雰囲気つてのに押されてようやく話題変えてくれるらしい。

「ところであつ！　ところでなんですけどにゃ？　もひとつお願いしたいことがあるの思  
い出したんですにゃ！」

「なんでしよう。働くの以外なら」

「あ、ホントに違うので安心してくださいにゃ」

尻尾をくいくいつて動かしながら全力で「違う違う」しているのが気になる。

「で、そのですにゃ？　お恥ずかしい限りですがにゃー、私たち逃げてくる前はお堅いところ  
でインタビュー受けていたのでスマホ……連絡手段をまるごと預けっぱなしなんです  
にゃ。……だからここまで来たら迷惑ついでに……えつと、そちらのスマホとか  
ちよつと電話かけるくらいでいいので使わせてもらえないかにゃあ、なんて」

ん、新しい「にゃ」だ。

「あ、もちろん私たちも女の子ですからスマホの中身見られるのが嫌だつて分かつて  
るので電話だけですにゃ！　もしおイヤだったらどこかで……このお店で貸してもらえ

るか交渉したり、ダメだったらどこかでパソコンと電話、使えるところ探そうって思っているの〜！」

あー、確かに今つてスマホ無いと何にもできないよね。

「せめてネットでうちの事務所を検索してもらって電話番号さえ調べてもらえたらとつてもとつても助かるんですにや。よく考えたらマネージャーさんとかのなんて覚えてませんし」

「あ、あ……それもあつたわねえ〜！」

ようやく頭切り替えられたらしく話に乗ってくるポニーさん。

「たしかに今のままだと連絡の取りようがないからね〜。電話番号だつて昔みたく覚えてたりしていないし、そもそも電話だつて今はアプリだし。前の事務所の受け付けのなら暗記してるんだけど今はもう意味ないし。公衆電話だつて……このへんであるのかなあ……一応あるはずんだけどそれすらスマホで探すくらいだし……ちよつと前までは探さなくてもあつちこちにあつたんだけどな。今つて不便よねえ」

「ちよつと前つて……大昔ですよ？ 公衆電話とか使ったことないですよ」

「え、マジ？ あ、でも何年か前にそういうニュース見たかも〜！」

うん、僕の世代でもテレカとか知識でしか知らないもんね。

でもポニーさん何歳なんだろう……話の内容的に僕より年上っぽいんだけど女の人ってお化粧で全然変わるしなあ。

あ、でもそういうや連絡先つてやつ知ってた僕。

「あの、おふたりとも」

そう言えばなんか話しくいって思ってたからお互いに名前も言ってなかったんだっただ……ほら、僕つて基本的に一期一会の精神だからって聞くのもめんどくさかったから。

「はいですよ？」

「使わせてもらえるの？」

取り出した僕のスマホを眺めるふたりとも。

「……あのケース……何にもない黒……」

「き、機性能重視つてことでもいいですよ！」

かわいくないって暗に言われて傷ついた。

……僕は別にスマホを着飾らせるのには興味ないし今は忘れよう。

かがりが勧めてきたようなピンクピンクラメラメラキラキラしたのとか、ゆりかが「余ったから要る？」つて聞いてきたアニメキャラのとか僕の趣味じゃないしなあ。

「いえ、そうじゃなく……そうなんですけど。おふたりとも萩村つて言う方と今井つ

て言う方とお知り合いですよね？」

今井さんの方はふたりの会話で出てきてたし萩村さんの方はテレビでこの子たちと一緒にのところを見てたから僕が知ってる。

「えっ？」

「にゃ？」

名前を出してすぐに表情が変わったのを見るに予想どおりらしい。

「え……、あ、あれ？ 私たち萩村さんたちのこと」

「話したかにゃ？ あ、今井さんは話したかも？」

どっちでもないけどね。

「以前の話というのがその方たちからのお誘いだったので。もちろん興味はないのでさつきと同じようにお断りしましたが連絡先は知っているんです」

今井さんがすごい勢いで食いついてきて困っていたところを萩村さんが押さえられない情けなさだったところをゆりかが颯爽と助けてくれたあのときが懐かしいなあって思いつつ、すすつと操作をして1年に何回しか使わない電話モードにする。

今の僕の耳と口の距離的にはちよつと大きすぎるスマホをほつぺたに当てつつ……そういえば今の僕ならいくらこうしても画面が汚れたりしないんだろうな……「ぶるるる」という懐かしい音を聞くこと数回。

「はい、萩村です」

低めでちよつと頼りなげな声が聞こえてくる。

懐かしい。

けど、ちよつと息が切れている感じ？

「萩村さん、ご無沙汰しています、響です。以前お会いした……お誘いをいただいた。

えつと、覚えていらつしやるかはわかりませんが背が低くて薄い色の長髪の」

もう半年連絡取つてないからな、「誰？」つて言われてもしようがない。

あの人たちつて多分手当たり次第にいろんな人に声かけてるんだろぅしな。

「え……ええつ、もちろん覚えてつ、いますがつ」

声がちよつと聞き取りにくい……何か急いでる感じ。

本当に覚えていたのかは分からないけど覚えてることにする。

それが社会人だつて聞いたことがある。

「何度かご連絡をいただいていたみたいですが、ちよつと事情があつてお返しができな

くて申し訳ありませんでした」

「い、いえつ……お気になさらずつ、こちらこそ以前は大変つ……」

電話してるあいだもずつと走つて……つてなると、多分この子たち絡みだよなあ。

……もうちよつと早く連絡してあげたら良かったかも。

考えてみたら自分のところのアイドルさんたちが男たちに追いかけられてるんだもん、そりゃあ必死だよね……多分警察も動いてるんだろうし。

「……すみません、今回はせっかく響さんっ、のほうからご連絡っ、いただいでるのですがっ」

ときどきすぐそばから誰かの声も聞こえるしくラクシヨンとかも遠くから聞こえる。

「たぶんその件なんですけど……ちよつと待つてください。あの、おふたりのお名前前は？」

「へ？ あ、岩本ひかりです……？」

「島子みさきですよ！」

「岩本……さんと島子さんと、今一緒にいるところなんです。おふたりが萩村さんたちに連絡を取りたいって聞いて連絡していて」

「……え？ ……えっ？」

「目の前に居るんですけど……代わりますか？」

予想外だったのか、僕の耳に萩村さんの……ちよつと笑っちゃいそうな声が聞こえてきた。

うん、本当の予想外ってそういう変な反応になっちゃうよね。

僕もいつもびびったりしたとき変な声出るし。



## 33話 猫と17歳 4/4

『ひ……響さん……ごほっ……そ、それは本当で……』

「とりあえず走るの止めて落ち着いてください萩村さん。ふたりとも無事なので」

息も絶え絶えになりながら「どういうことなの!？」って聞いてきてた萩村さんを落ち着かせることしばし。

『……そ、そういうことでしたか……しかし偶然響さんに助けてもらえるなんて』  
「ええ、しばらく留守にしていたので本当に偶然ですね」

3ヶ月冬眠してからの今日だもんな、偶然以外に何とも言えないもん。

そうしてとりあえず安全って言うのと場所を伝えてすぐに来ることになったらしい。

逆に言うとか萩村さんが来るまでは帰れないってのもまた決まっちゃったけどこれはしょうがない。

「……はい……はい、わかりました。萩村さんが来るまでここで待機しています。

到着の直前に連絡を……はい、それでは」

「……ふう……」

「……………」

「……………にゃ」

あー、疲れた。

電話つてすつごく緊張して疲れるよね。

目の前で話すのならまだマシなんだけどなんでなんだろう。

流れて愛想笑いかか会釈とかしちゃうし。

「……あ、というわけでもう大丈夫です」

「ひゃいっ」

「にゅっ」

にゅ？

キャラ付けって大変そうだね……今ちよつとブレかけたし。

けど驚いた拍子に耳も尻尾もぴつと立ち上がっているのには興味をそそられる。

あとでさりげなく「お礼として触ってもいいですか？」って聞いてみようかな。

どのくらい猫のしつぽを再現しているんだろうか、あのデバイス。

動きはとも猫つぽいけど、はたして触り心地とかはいかほど。

そもそも猫になんてほとんど触ったことないけど興味はあるんだ。

だって家の近くって野良とかいないし地域猫とかさえもないし。

かと言って猫カフェとか男が言っても変な目で見られそうでって思ってたし……そ

うか、今なら猫カフェに行っても変な目で見られないのか。

猫なんて最後に触ったのは旅行先で野良のをだし……触りかたがヘタだったらしくつてごろごろ言ってくれていたのに急にこつちを向いたかって思ったら触っていた手に向けて猫パンチされて逃げられたし。

あれは悲しかったなあ。

やっぱりかわいいものは外から眺めるに限る。

関係が薄い方がきつと楽なんだ。

猫パンチされたときのごとく。

……と、いけないいけない、なんか変な顔してるふたりちに教えておかないと。

「あと30分ほどで、ここの地下の駐車場に……えつと、『この前使った車』というので来るそうです、萩村さんと今井さんが。『見れば分かる』そうなのでおふたりなら大丈夫でしょう。……できればここへ直接に来たかったみたいですけど萩村さんたちも顔が知られているので面倒だそうで」

電話で話されたのを説明するけど……悪いやつから女の子を匿うとか悪いやつに見つからないように送るとかまるで映画みたいだな。

その主人公が男だったら画になるんだけどあいにく僕は幼女なわけでむしろ守られる側だ。

「タイミングを見計らってエレベーターへで地下へ行つて……スマホのある僕しか連絡できませんから、おふたりを車に乗せるまでお送りすることになったので」

ぼかんと口を開けているふたりに言つてあげる。

……どうやら僕の流暢さに驚いているな？

さつきまでは押されて全然話さなかつたもんね。

こうして横やりを入れられなければこんな僕だつてまとまつて話せるんだから。

まあ、いつもこうだつたらいいんだけど……少なくとも女性とか女の子相手だと当分は難しそうなのが厳しいところ。

だつて発音が追いつかないし……せめて声量くらいは鍛えたいんだけど難しいかな、僕だし。

「……萩村くんを知つていて、連絡先まで。しかも連絡もしてくれて全部お膳立てしてくれちゃつた……さつきまでの私たちの逃げ回つて逃げ回つての苦労つて一体……」

それはまあ偶然つて言うことで。

偶然に見えないけど実際そうなんだしな。

「さつきに続けてまたも重ね重ねですにや、申し訳ないですよ」

「いえ、乗りかかつた船ですし」

こんなセリフ初めてだ……こんなシチュエーションも初めてだし大半の人はそうだ

ろうけども。

でもこのままほっぽり出すのも気がかりだしってさつきと連絡したまでだし、これの後हतったの30分待ちさえすればいいんだから、残りはちびちび遅滞戦術をとりながら食べていけばいいだろう。

口にもものを入れている間は「食べるのに忙しいんだな」って思ってくれるから、相づちだつて適当な会釈でしているふりをすればいいんだし。

こういうのつて大学に入ったときになんとなくで参加したサークルの歓迎会とかで身に付けた技術だ。

ちなみに僕はすみつこの方でちびちびしていただけてそれつきり何にもしなかつたけども。

……良いんだ、僕は人と話すのが苦手なんだから。

僕みたいに静かな人もそれなりにいたし、気負うはずはないはず。

うん。

「いやあ……うん。まあ、楽に済んだつて考えとこつか……なんかすごすぎて逆に落ち着いちゃつたもん」

「ですにゃ。もう1回ありがとうございますにゃ」

さりげなくさつき聞いた2人の名前……よく考えたら女の子から名乗られなかつた

のつて多分初めてな気がする……えっと、島子さんと岩本さんだっけ？

もうどっちがどっちだかはわからなくなっているけどどうせペアだからどっちか呼ばば反応してくれるだろうしどうでもいいや。

30分つて言う僕にとつては長すぎる時間を耐えたらようやくに帰るんだ。

……3ヶ月ぶりに動いたのにこのハードさはきついけど、あとちよつとあとちよつと……。

「いずれのお返しっていうお礼が増えただけのことつて思えば気が軽くなりますにや？  
これからどうやって帰ろうつていう心配もきれいになくなりましたし、あとはただ待つていれば助けが来るつてことですからほつとしましたにや！」

注意して聞いているとちよくちよく「にや」じゃない話し方してるのは猫耳キャラとして許容範囲なんだろうか？

「でも下まで降りないといけないのよねー」

「下りる前にお店の人通じてここの上の人に協力してもらえばいいんじゃないですか？」

「やだ！ 頭良いわね！」

それなら僕もう帰つて良いんじゃないの？

「安心してたらお腹空いてきましたにや！ とにかくみんなでもう一品二品分け合つて

食べておいしそうなデザートも食べますにや。ゼーたくなランチ食べますにや、クリスマスなのにお仕事で寂しいですし………ですし………」

「おいしいもの食べて忘れましょ!!!」

あー、そう言えばクリスマス……正確にはイヴだけどこの国の風習的には何故かイヴが恋人の日になってるもんね。

アイドルと言えども年頃の女の子だからやっぱりそう言うのが良いんだ。

……それ、一般人の僕の前で言っても良いの？

そう思うけど多分巻き込んだから良いよねってちよつと気が抜けてるんだろうな。

聞かなかったことにしてあげよう。

別に誰かにばらす楽しみは持ち合わせていないし。

「小皿なら3つ4つ行けちゃう？」

「あ、これ！ これさつき食べたって思ったんですにや!!」

ふたりでメニューを開いてあれもいこれもいって相談し合っているのを眺める僕。

僕は要らないんだけどなあ……頭数に入ってるんだろうな、一応お礼ってことになつてるし。

……僕のお腹、家に着くまで無事だろうか。

3ヶ月ぶりの食事がこんなに豪華だとお腹壊してもおかしくないもん。

「あ、そうですよにゃ」

しゃべらないためにちみちみ食べていた僕は「食べてるからあんまりお話しできません」って顔で見上げてみると、メニューに指を指したままの緑メガネさんと目が合った。

あ、派手なマニキュア。

さすがはアイドルだ。

あと黒い髪の毛に緑色のメガネって合うなあ……髪の毛も深い緑が混じってる感じだし。

黒に黒で暗い雰囲気やさよにもフレームだけでも変えるよう提案してみようかな。

なんなら赤系統とか似合いそうだしな、さよさんの落ちついた雰囲氣的に。

人の印象なんて小物で結構変わるんだから。

かがりに無理やり着けさせられたストラップとかバッヂを見せびらかさせられながら歩いているとすぐく見られるし、かなりの頻度で声かけられるしなあ……「かわいい妹さんですよね！」って。

「これとこれとこれとこれをみんなで分けて………そういえばここに来るまでは急いでいましたし、ここに来たら来たで食べるのに夢中で『なんだか変だにゃ?』って思ってたままで忘れちゃっていたんですけど、自己紹介、お互いの………まだでしたにゃ? 多



分

「あ、ほんと。名前教えてもいなかったし聞いてもいなかったもんねえ。私たちのはともかく」

「どーりでなんだか声をかけにくいって思っていましたにや」

「えー、まつず。暴漢から襲われていた私たちを助けてくれた恩人なのにそれも忘れていたなんて……トップアイドルとして失格になるところだったわ!」

「いっそのこと名前知られない方が楽だった……ああいや萩村さんと今井さん経由で知られちゃうかあ……」

「まー、フツーだった前と比べると今はブーストかけられてますけどにやー。トクベツな立場ですもんにやー?」

「いいのよ、偶然とはいえ私たちのものだもの。使わない手はないでしょ?」

女の子同士の会話って自分たちの世界に入るよね。

少なくとも男同士より平気で知らない話混ぜてくるって学習したもん。

「そーですけどー、知らない人たちに『ずるい』って言われるのは毎度のことながらイヤなんですにや……ネットで書かれるのとはともかく、特に先輩方にすれ違いざまとか会話の途中にさりげなくぼそって言われるの……ああ、思い出しただけでも向けられるヘイトで胃が……胃がですにや……」

「諦めなさい？ 有名ってだけでなににしたってなにか言われるんだから。むしろ守られてる分そのくらいいしか手出しされないんだからガマンよガマン」

「さすがは大先輩、肝の据わりようがすごいですよ」

「やつかみなんて浴びすぎるとかえって気持ちいいのよねー。あ、実害出るのは事前に対処するのよ？ 何かありそうだって思ったら萩村くんに言うのよ？」

さつきからポニーさん、萩村さんのこと「萩村くん」って……もしかしてこの子って萩村さんより年上だったたり？

「世知辛いですにやあ。私、ストレス耐性ないのに」

「猫なの？」

「猫だってストレスでハゲたりしますにや？」

「どれどれ……」

「いきなり後頭部かき分けなくてくださいにやつ！ まだまだハゲませんにやつ！！ 誰かさんとはちがって!!!」

「私だって今はちがうわよ!!? いえ、前だってまだまだぜんぜん!!!」

「汗かいてるけどかぐわしい」

「ニオイかぐなですよにや!!」

大丈夫かな……僕って言う一般人の前で猫耳取れちゃったりしないかな……って心







このままじゃ、また体は完全に寝ちゃって意識はあの夢の世界だなんて。魔法さんが原因なんだろうこれ——なんとかしないと大変なことになる。外出先で昏睡。

意識を失った幼女。

——スマホを指紋で開けられちゃえば、叔父さんに連絡が。

僕が説明できない今、意識が無いままじゃ僕が犯罪者つてことに。

それだけは絶対に——。

34話 魔法と抵抗と「NEKO」 1/4



「.....」

2人の声が聞こえているはずなのに聞こえない。

五感が薄い。

薄っぺらい。

偽物みたい。

あの夢の中で味わったばっかりの、このイヤな感覚。

それが僕を包んで離さなくってもはや目の前のふたりの会話は耳に入らない。

夢の世界、あつちから離れるときもそうだった。

しゃべっていること自体は分かるのに何をどんな声で話しているのかが分からな

いってという状況。

ふたりの顔も目の前の料理も部屋のお金がかかっているらしい内装とかも、そのぜんぶがどこかぼやけていて、ずっとつてわけじゃないけどアナログ的なモノクロの縦線とか横線とかが入っていて、つまりはすり切れてぼやけたビデオテープみたいになつていて。

……ここは夢の中じゃないはずなのに。

現実の家の外で他人と会っている……はず、なのに。

いや、もしかしてここもまだ夢の続きなのかもしれない。

そうも思ってみるけど夢じゃなかった方がやばいから今は現実だつて思つておこう。

夢落ちなら安心できるけどそうじゃなかったらやばい。

「ふぐ……」

学生時代に机に向かつてうとうととしてきたけど寝ちやいけないときみたいに歯を食いしばつて手とかお腹に力をぎゅっと入れて息とか止めてみたりして1秒でも長く起きていようつてがんばる。

こんなところで寝ちやつたら大変だ。

力が抜け過ぎて……意識がないもんだから勢いよく顔からテーブルに突っ伏したりイスから落ちちやつたりしたらとんでもないことになる。

学生なら「そこまで寝るやつがあるか」つて笑うだけだけど今は幼女な僕の体だし意



識失って受け身取れないとケガするかもしれないし。

そんなことになって「大丈夫!」って起こされても目を覚まさなかつたりしたら匿うどころの話じゃなくなって救急車とかの大騒動になるのは確実。

それだけは避けたい。

せつかく機転が利いて助けたのにそれじゃあかえって申し訳ないことになって、だつたら初めつから気がつかないフリをして隅っこで知らんぷりをしてた方がお互いに幸せだったってことになっちゃう。

せつかくこうして疲れてまで僕がしたことが無意味になる。

それは嫌。

わざわざ脱いだのに脱ぎ損じやないか。

「……………」

……いやいや僕は男なんだから別に見られるのは心底どうでもいいことのはずなんだけど、せつかく珍しく人のためにがんばってみようってした僕の気持ち全部ムダになっちゃうのは嫌なんだ。

がんばって踏ん張るおかげでなんとか意識だけは残ってるらしい。

……僕が反応していないはずなのにふたりとも気がついていないのを見るに、魔法さんの仕業って証拠が積み上がっていく。

でももしこのまま気を失っちゃったとしたら……病院に運ばれて検査とかされて体に異常がないってわかったら。

そのあととはただ入院させられて目が覚めるのを待つだけになるんだろう。

「使うかも……」って思っていたから免許も財布の中にあるから身元がすぐに分かっちゃうわけで……僕が意識を失っている以上、ここでまさかの誘拐疑惑で全部がおじやんなんだ。

だつて魔法さんの力、今の僕を前の僕だつて誤解させる力は僕が意図的に使わないと……意識があつて僕から働きかけない限りは前から知っている人以外には効果がな  
いっぼいし。

だから点滴とかして僕が起きるのを待っているあいだ、ヘタをすれば家の中にまで……カギもポケットに入っているし……入られて調べられてっていう大ごとになるかもしれないし。

絶対になる。

だつて幼女……に限らず未成年だもん。

あ、いや、大人だろうと意識不明ならそうなるか。

まあ冬眠のときみたいに魔法さんが都合よくやり過ぎしてくるっていう可能性もそれなりにはあるんだけど確実じゃない。

それにこの子たちにも……えっと、猫さんが島つばい名前の島子さんでポニーさんが岩本さん……危機感から初対面で名前を覚えちゃったらしい僕をほめたいけど今はそれどころじゃないし、とにかくこの子たちにもとんでもない迷惑をかけてしまうのには変わりない。

彼女たちにしてみれば初めて会った僕が……よく考えたらようやくの自己紹介中だったからまだ名前も教えていないし……住所とか連絡先も知らない相手がいきなり昏倒とかしたら、そりゃあびびる。

びびるどころじゃないか。

それに……スマホの中味からゆりかたちに連絡とかが行っちゃったら、3ヶ月音信不通だった僕がなぜカレストランで倒れていて「身内がわからない」って呼ばれて、見てみたらびびくりするくらい痩せていて心配させて。

けど僕の、いるはずの親とかの連絡先は誰ひとり知らなくてみんなが「？」ってなる。

だって家は男な僕の名義だし、お隣さんは魔法さんのせいでこんな幼女を成人男性って言い張る謎のお母さんになっちゃう。

いくらなんでも悲惨すぎる。

しかも今度は病院で介護されるもんだから……必要はないのに点滴とか心電図とか

のケーブルとか管まみれにさせられて無理やり栄養補給と排泄とかさせられて体を拭かれて、つまりは寝たきりのケアってやつをさせられて。

意識が戻ったらあっちこっち穴ぼこだらけになっただけに今度は質問攻めだろう。

それはもう厄介っていうレベルじゃないくらいに取り調べな感じになるはず。

……あああ、考えれば考えるほどに事態が転げ落ちていく。

もつと悪い想像しちゃうとその騒ぎでまだこの辺をうろろしているはずの追っ手の人たちがこの子たちを見つけちゃう可能性さえあるんだ。

どう考えてもおしまいだ。

どうしよう。

◆◆◆

どうしようもないよね……だって制御不可能な力だもん。

そう思つて諦めが入つて来た僕はふと気がつく。

ここから先のやつ、意識が遠のいたりよくわからない光の狭いところを抜ける感覚とか、これ以上砂嵐がひどくなるっていうあのときの感覚が無くなって。

あれえ……？

「……………」

両手でにぎにぎペたペたさわさわしてみる。

……手のひらと指の感覚から触ったところまで、ちゃんと確かにある。感じられる。

試しに目の前のお茶をすすってみる。

「……ずずつ」

一口食べてみる。

「もむ」

……食器を触った感覚がある、味覚も、嗅覚もある。

ごくんと飲み込めばお腹の中に送られる感覚も……たぶん、ある。

……なんかよく知らない内に収まってきてる……？

いや、でもおかしいな感じは続いているし……うーん？

あ、冷や汗かいてる。

こめかみとか背中をつつーと流れているイヤな感覚。

感覚がここまであるんならきつとまだ大丈夫だっと思っていたい。

あの夢だったらこうした不快感までは一切なかったから違うんだって。

汗とか疲れとか、今感じているように頭から血の気が引ききっているイヤな感覚とか。

そんなことを思いつつもいくら待ってもなにも起こる気配がなくて……人って変化

がないと落ち着いてくるらしくってだんだん冷静になってきたから目の前のふたり、ポニーさんな岩本さんと猫メガネさんな島子さんを見てみる。

よく観察してみると、そのふたりが会話している相手のはずの僕が相づちどころか返事どころか反応さえなんにもしていないのにそれをおかしいとは思っていないみたいで。

それどころか僕が返事したり話しているのを聞いているかのようなそぶりさえ見せていて。

……雰囲気から察するに、さっきの自己紹介のあとの会話ってやつ……ってというか説明つぽい感じだけどそれを続けているらしい。

僕が話していないのに、目の前の人たちにとつての僕は普通に話している。

まるで「僕じゃない誰かと話している」感じ。

それは……すつごく怖いもの。

僕の体が知らない僕に乗っ取られている……あるいは「この体の持ち主」な女の子かもしれないって思う。

「……………」

……でも、今日がんばったのは僕なんだ。

起きたら3ヶ月経っていて冷蔵庫が悲惨なことになっていてがんばって掃除してお

風呂入って、寒い思いしてタクシー乗って服を揃えて……この子たちを助けたのは、この僕なんだ。

それを全部取られるなんて嫌だ。

だから……返して貰おう。

## 34話 魔法と抵抗と「NEKO」 2/4

魔法さんが何かしらの悪さをしてのこの状況。

あの夢の中でもおんなじ感じだったけど……あのとき僕は何もできなかった。

けどここは現実、何もできないじゃ無くてなんとかしなきゃいけない。

「……………」

「……………」

目の前の2人は普通の会話をしているみたいな感じだけど、まだ僕からはぼんやりしてる。

なんだかときどきボケとツツコミを……たぶんふたりで組むときにはこうしてやっているんだろうなっていう感じで年季の入っている印象を受ける掛け合いをしている様子。

声がまったく聞こえないわけではないんだけど理解ができない感じ。

まったく知らない国の人たちが近くの席でしゃべっているのを聞いている、そんな感じ。

雰囲気的に……多分だけどさっきの自己紹介が続いているっぽい？



まだ僕の名前も言っていないのにどうやって進むんだらうって思うけどなんとかっているんだらう。

普通のテンポで普通の会話をしているらしいことからふたりとも僕のことをおかしいつて思っていないのは確かだ。

けど、自己紹介。

……もしかしたらこれが魔法さんの逆鱗に触れちゃった可能性があるかもな。

だって「僕は男」って言っただけでみんな変になるんだ、それ以外にも何かあるかもしれない。

今までたまたま……会話の内容的に大丈夫だったただけで。

「僕が男」って言うのはこの姿とすごく矛盾すること。

だから魔法さんが変なことするんだって考えてみると彼女たちの自己紹介の中で出てきた何か引つかかったって考えることもできる。

でもこれまでもまた違うものらしい。

だってふたりともおかしな目になってないし、話しすぎて汗だくになっただけでもない。話しすぎてもおかしな目になってないし、話しすぎて汗だくになっただけでもない。

3ヶ月の冬眠で変な夢に入るときと出るときあの感じに近い気もするけどどうかは分からないし……ってことはあの夢すらも別の魔法ってことになるのか……ややか

しい。

あれ、でも僕が黙りこくつてるのに全然気にしている風がない？

そうなるとやっぱ男って言ったときのと近いのかな。

あれなら僕がどんな状態でもおかしいとは思わないだろうし。

……こんがらがってきちゃったから、とりあえずで今の魔法は僕がどんな姿でどんなことをしているようにと気にならないって言う「他人の僕に対する認識を歪めるような作用」をしているものだって思っておこう。

相変わらず因果関係が不明だし流れ的には今までの逆だけど、とりあえずで。

じーつとふたりの顔を交互に見つめていたらなんかピントが合ってきた感じで普通に見えるようになったけど状況は変わらず。

「じ——……」

1分くらい必死に見つめてみたけども不審がる様子もないから多分変な顔していても気がつかないだろう……あ、目が乾いて潤んできた。

そうして目がしばしばしてきた僕のことなんか気がつかないで、島子さんと岩本さんは楽しくお話ししているらしい。

そう言えば途中でできたらしい追加の料理も僕に向けて「食べるでしょ？」って感じの会話になったらしいジェスチャーとイントネーションがあつて、でも多分「要らないで

す」って言ったってことになったみたいで「しょうがないなあ」って感じで喜んで平らげている。

女の子って想像以上に食べるよね……あ、いや、この子たちは運動の後だし？

僕だったらこれだけで3日分くらいの食事にできそうな量まである。

消費エネルギー、ほんと少ないからな。

コスパ、燃費のいい体だし、幼女だし。

アスリートの人とかは筋肉がエネルギーを使いすぎるからたくさん食べないと体が持たないらしいって言うけど、きつと鍛えているだろうこの子たちもそういうものなのかもね。

まだ10代でまだまだ成長期だろうし。

その状況でさらに頼んだらしいケーキとプリンみたいなデザートをひとつずつ食べているのは驚きを通り越したなにかを感じるしかないけども。

気がつけば僕の前にも頼んでもいないのに置かれているし……あれ？

なんで？

ああ……きつと魔法さんが悪さをしているあいだに頼んだことになっていたんだらう。

空いてるお皿を下げに来た店員さんの動きを見ると……魔法さんは少なくとも

この部屋全体には効果を及ぼすらしいのが分かる。

「……ありがとうございます」

「……」

試しについてお水を注いでくれた店員さんに話しかけてみる。

水の中で出したような感じに聞こえたような僕の声と会釈に店員さんもまた笑顔を返してくれてなにかを答えてくれたみたい。

「……この魔法がかかっている話せば通じる……つぼい……?」

これ以上ヘンなことになったら困るからヘタなことは言えないけど何とかできる可能性はあるのか。

あと、僕の前に置かれているビターチョコでお酒入りのケーキ。

これは甘いものが苦手な僕にとってはまだマシなほうのデザートのひとつだ。

でもそれが、僕が頼んだかのように用意されている。

「……僕が話したってことになってる……?」

猫な島子さんやポニーっぽいの岩本さんの手元を見ると実に実に甘ったるそうなデザートとプリンがでんと置かれてもう半分くらい食べられている。

ふたりのを見る限りには僕の分は適当に選んだってわけじゃなくて、きちんと話の流れの中で僕が食べたいものを頼んだっていうことになっているみたい。

だって甘い物好きなのが多い女の子だからわざわざこういう苦いのを食べようって思う子、少なくとも今までは出会ったことないし……まあ数が少なすぎるのはしょうがないとしても女の子って大体甘いのが好きだから。

だから僕の好みは魔法さん経由でどうにかしてふたりと店員さんに伝わって、きつと「甘いもの苦手だなんて珍しいねー」なんて会話があつたんだろう。

時計を見てみると15分以上は経っているらしいのが確認できる。

ということはあと同じくらいしたらお店を出て地下に……つてことになる。

「……………」

「……………」

ちよつと観察してみたけど……だめだ、おひげこそ生えていないもののアクセサリーと語尾のインパクトでどう見ても猫っぽい顔にしか見えない島子さんのなんだかこれもまた猫っぽい感じの口元を見ているも、ちよつと口紅がキラキラしている岩本さんの唇を見ているもせいぜいが母音がわかる程度で話の内容まではわからない。

くるくる変わるふたりの表情とイントネーションとジェスチャーでなんらかの説明とかコントとか質問とかされているらしくって、変な顔しないから僕もちやんと返事したことになる様子。

でもどしたら……うん？

なにか忘れていている気がする。

なんだろう？

なにか。

「……………」

そういえば確か。

——飛川さんに対して僕が「前の僕が男でしたよね？」って言ったとき。

——スパーとかで僕が「成人します」って免許見せながら言ったとき。

どっちでも僕が話したから前の状況が変わった……上書きされた？

……それなら。

「……あの、すみません」

「……………」

「……………」

相変わらずに理解できないふたりの話す声。

だけど注意が僕にはつきりと向けられていて耳を澄ませているのだけはわかる。

……これもお隣さんのときとおんなじだ。

なら。

「あの……話の途中で流れを切ってしまつて申し訳ないんですけど、どうしてもひとつ

だけ伝えておかないとって思いました」

「？」

「何？」「何だろ？」そんな反応。

岩本さんのポニーテールが傾き、島子さんのしつぽがくるんとはてなになる。

……やっぱり僕が言ったことは通じている……なら大丈夫。

これ以上に悪いことになるなんて多分きつと無い……はずだといいな。

手のひらの汗を膝にしいた布……高い店だとナプキンまですべすべだよなあ……に吸い込ませて「ほっ」と息をついて。

心臓がぼくぼくしているのを、これだけははつきりとしているのを感じながら演技してみる。

僕が普通なら言わないようなこと。

もう慣れきってるから僕的にはどうでもいいこと。

でもきつと他の人が聞いたら「そりゃあ据えかねて話の途中で怒るよね」って思うようなこと。

——魔法さんが動くはずの認識。

「さつきから女の子の子供の子供……これまで言わなかった僕も悪いですけど、僕は——  
「男」、なんです。　こう見えても、男なんです」

そう言った途端にさあつと波が退くような感覚。

そうして僕は——中途半端な夢の中みたいな状況から戻って来られたって感覚で理解した。



## 34話 魔法と抵抗と「NEKO」 3/4

貧血のあとにだんだんといろいろ戻って来る感じのあの感覚を味わいつつ、ふと思  
う。

あれ……ひよつとして僕が男つてのを知り合いに言ったのつて、前の僕を知っていた  
飛川奥さん以外で初めてかも？

この子たちも……名乗り合ったからには知り合いで良いよね、うん。

この春までの僕なら顔見知りつて言つてただろうけど、あの子たちに揉まれた僕は少  
しだけ知り合いのハードルが下がっているんだ。

で、冬物とは言つても女児用の服だからやつぱりズボン……じゃないパンツでも女の  
子に見えるはずだけど、だからこそ唐突に言つてもおかしくない話つて思つたんだ。

肉体上は紛れもなく生えてもいない……毛もモノも生えてない幼女なわけで、そこに  
は知らない穴があるわけで、だから常識的には女の子。

でも中身は男だつてはつきりと口に出したのは今まではなかったわけで。

あの子たちへの告白の予行演習を兼ねて、どうにかして魔法さんから逃れようとして  
……お隣さんのときみたいに魔法さんが激怒しそうなことを口にしてみる博打。

……でも、何か変化を起こすにはこれしかなかったんだ。

実際に起きているし、「男」って言うのはやっぱりひとつのキーワードなんだろうな。男から女になった訳だし……あくまでキーワードのひとつなんだろうけども。

そうしてさーっという音が引いたあとには……不意の静寂。

耳が痛いほどの静けさが僕を襲う。

「なんでこんなに静かなんだろ」って思ってた探してみたら、どうやらさつきまでのざあざあちりちりしていた感覚も、ちみちみとかざーっっていうあれも、理解不能な言葉で会話していたらしい僕たちの声のどれもが止まっていて、静止していて。

……今度は何が起きる。

そう身構えていても何かが起きる気配は無い……みたい？

それどころか——魔法さんが引いて行った、そんな気配。

確証なんか全然無いのに元に戻ったって言う謎の理解が僕を包む。

そうして恐る恐るで目の前の2人に視線をやってみる。

——猫耳としっぽを千切れればかりに真上に突き出して……あ、ちゃんと毛まで逆立つんだ、技術の進歩はすごいなあ……口をあんぐりと開けている島子さんと、こつちに指を突き出して口をぱくぱくとして声にならない声を上げて……いないけど声なき声を上げている岩本さん。

「……………!!」

「……………!?!?」

2人とも固まって驚いている様子。

指先とねこみみの先としっぽの先がゆらゆらしている。

人がここまで驚くつてのはそうそうないこと。

だから多分2人にさっきの告白が聞こえたつて解釈できる。

僕が、体はともかく心は男つていうこの真実。

このご時世……じゃなくてもびつくりする内容だもんね。

「……………え、ウソ……冗談です、にや?」

「本当です。冗談ではなく、僕は男なんです」

ちゃんと——言葉が聞こえるようになってる。

やっぱり魔法さんの謎のあれは無くなつてる?

……良かった……また3ヶ月とかつていう確証は無いけど寝ちやわないつて言う確

証も無かつたから……本当に良かった。

「本当……あれ? でもですよ……?」

「……あ、あつはは——! 響さんは冗談上手ですねー?」

急に声を上げるポニーさん。

「私たち、瞬リアクションに困っちゃいましたよー、いきなりですもん！ あ、いえ、もしかしてあえての不思議系ってことでそういうトークとか……ちよつと心変わりしたとか……オーディションのつもりだったりしますー？ もちろんいつでもOKだと思えますよー？ あ、あは、あははは……」

「……先輩？ 昔じゃあるまいしその反応はないって思いますにやあ……」

「……………ごめんなさい。 その、どう言って良いか分からなくなつてね……」

……魔法さんって制御、できるんだ……って、ん？

あれ、今岩本さんが僕のこと名前で呼んできた？

まだ僕の自己紹介……ああ、さっきの会話は本当に続いていたのか。

そうだよね、ふたりが変な顔しなかつたってことはあの後本来あつたはずの自己紹介の流れで当然僕の名前とか、最近慣れてきたワケありの中学生な事情とかもひととおり話したことになるんだろうし。

2人がおかしいって思わないってことはそういう会話の流れになつてはいるはずだ。

ということは僕の口が自然と、あのときの飛川さんみたいに……でも多分違和感を与えない感じの態度のまままで魔法さんが話させていたんだろうか。

あるいは乗っ取つて？

……………怖っ。

「……ええと、唐突に済みませんでした。驚かせてしまって」

「え、ええ、まあ………ね?」

「にやあ……」

びつくりするよね……そのために言ったんだし。

初対面の相手、どう見ても顔も髪も服装も女の子が「実は男なんですけど!」とか会話をぶつた切つて不満そうに言い出したらなあ。

別にこの場でわざわざこの2人に言うことじゃなかったんだけど必要だったし……でも悪いなっと思う。

「これで助けたのと帳消しで充分ですよ」って言ってみようか……いやいや、最近はこういうのに敏感だからそういう訳にもいかないか。

「………普段は、その」

唐突に「男なんですけどどうしてくれるんです?」的な印象になっちゃってるっぽいからそれっぽい理由も言ってみる。

芸能界の人だからこういうのってほっとくとやばいんだろうしな。

人ってそれっぽい理由があれば結構納得してくれるものだから。

僕のニート生活も「本当になりたい仕事を探しているんです……」で何年も切り抜けてきたんだし。

「僕は女の子扱いされていても……こんな見た目でこんな格好ですし、慣れてるんです。普段はそこまで気にしないんです。なので平気なんですけど、最近ちよつとこのことで……いろいろあつて。おふたりのせいじゃなくてただ僕の気が立っていたので。先ほど追いかけて来たあの人たちのことにも腹が立っていたので……済みませんでした。もう平気です」

よし、それっぽい感じのをうまく言えた。

子供なら癩癩くらい起こすものだから多分納得するだろう。

多分僕はちよつと精神年齢高めな子供って見られてるから多分大丈夫。

僕が逆の立場なら「すぐに謝れて偉いなあ」って思うだろうし。

「……う、うん。 よーし、分かった!」

ぱんつと両手を叩いて急に声の調子を元に戻したポニーさん。

……こういうところは本当に芸能人なんだ。

「びつくりはしたけどさ、よくよく思い返してみるとさ? 私たち、何度も響さんが女の子だつて思っているいろと言つたけど、響さん自身はひとつこともそうだつて言つてい

なかつたもんねえ。 私たちこそごめんね? 気がつけなくて……無神経なこと

言つてたら本当にごめん!」

「私もごめんなさいですにやつ」

大人だなあ……やっぱり人生経験値が違うんだろうなあ。

僕はニートで学生のまま止まって、2人は小学校か中学校から社会の荒波に揉まれて。

本当、今の見た目そのまんまな関係だもんな。

「いえ、僕はそう言われるのに慣れてはいるんです。 なにより事実ですし……今のは

その、僕が……」

「男の子を女の子扱いしてたら当然ですよ、謝る必要ありませんにや?」

「そうよねー。 ……さつきからときどきあきれたような、ちよつと怒ったような。

そんな感じの視線を感じたのってこれだったのかあ……そりやあ言いにくいよねえ」

……僕が魔法さんになにかされていたときの印象はそんな感じだったらしい。

「むしろ言ってくれてありがと。 そうよね、時代が違うものね。 気をつけていても

決めつけちゃうって結構あるって知ってたつもりなのになあ」

「私たちこそが気がつかないやいけませんでしたにやあ」

すつかり砕けている……わざとだっと思っけど、そんな感じで明るく話してくれているふたり。

……ああ、大人と話すのは気が楽。

普段は僕が子供たち……って言ってもこの子たちといくつも変わらない中学生なん

だけど……の面倒見てるからなあ……。

「あれ？　でもですにや？」

くるんつと尻尾がハテナっぽい形になる。

「さつき私たちをかばってくれたとき……あ、見えちゃったのでごめんなさいですけど、ブラとかつけてましたし見えちゃったのもショーツでしたにや？　あと毛糸のあったかそうな……ごめんなさいですにや」

「え、えつと」

……そつか、男つて言つたらそうなるか。

さつきはなんにも考えずにやったからなあ……色仕掛け。

色気なんて皆無な体だけでも。

「シヤツの裾から下ガン見してた先輩、どうだったんですにや？」

「そこまでは見てないよ!？」

「ほんとーですかにやー？　怪しい……」

「本当だつて！　それどころじゃなかったし、それに私だつて女の子つて思っていたか  
らー!」

「せんぱーい。　響さんがちゃんと話してくれたんですにや？　不公平ですにや……

？」



「……ちよつと、こういう男の子ってどんなの穿いてるんだろって思っで見ちゃいました……」

「シヨ、シヨタコン……うわぁ……」

わざと……なんだろう会話をしているふたり。

「先輩」って言うからには後輩な猫さんにとっては私情も含まれていそうだけど。

「尊敬する先輩、毎年クリスマスは欠かさずフアンの前に居た理由がそれって……法律的にも倫理的にも道德的にもアウトな相手が良いからって……うわぁ……」

「引かないで、お願いだから。 うん、ほんと。 違うのよ」

「お相手は中学生ですよ？」

「あときはそうとは知らなかったし！ いえ、むしろその方がまだ年が近い分！ それに男の子は真剣な交際なら15からセーフって……」

「ドン引きですよ」

「誤解なのっ」

「そーゆーの今どきアウトですよ」

「だから違うの!?! ひ、響さんも違うからねー?!」

何やら本気でドン引いて引かれているふたりを見ていると安心してきた。

シヨタコンってロリコンよりずっとマシなもの……って言うのは僕の感性で、ひよっ

としたら最近の若い子……いや、今の僕もそうなんだけど……たち、それも女子の中では違うのかもね。

猫島子さんが岩本さんからがたがたってイスごと距離を取っている。

……ここまで演技ならって言うか多分そうなんだろうけど、確かに気が楽になる辺り本物は違うなって思う。

でも……男って言いながら女物の下着。

これはどう言い訳したらいいんだろうね。

……この歳にして女装趣味とかややこしい誤解されるより本当のことを分かりやすく言った方が良いか。

女の子の体に男の心。

そういうのは……本当にそのせいで苦しんでいる人たちには悪いけど、今の僕も似た状況な以上こう言うしかない。

「……僕は、その……いわゆる心と体の性別が、意識が違うというもので」

「ああ、性同一性障害、トランスジェンダー……そこまで詳しくないのでぴったりじゃないかもですけどそういうものですかにや？　つまりは男の子ってことなんですにや？」

「……そうです」

「それなら私の友だちとか知り合いとかにもいますしそれ以上言わなくても大丈夫です

にや。業界的にも多分普通の人たちよりも多い比率ですし、カミングアウトとか珍しくないですし」

あつさりと納得している様子。

……時代が違うって本当なんだな。

少なくとも僕の子供のころにはここまでじゃなかったって思うし。

でも、そうか。

女の子の体で男の心で、「どっちの性別が良い？」って聞かれたら「どっちでも良いけど強いて言えば男」っていうこの状態のこと。

今なら……こんなにも簡単に。

拍子抜けな気もするけど……でもそうだよ、こんなデリケートな問題深入りしないもんね。

でもどうして魔法さんがこんなので反応するんだか……助かったけど。

## 34話 魔法と抵抗と「NEKO」 4/4

性同一性障害とかトランスジェンダー。

本当の人には悪いけど、僕だって今はそんな状況。

だから人に分かりやすい例えとして使わせてもらう。

よく考えたら初めからこの言葉を調べておけば良かったんだって気がついた。

特にかがりとかに對して言っておけば着せ替え人形にならなくて良かったんだろ  
うって。

この言葉も概念も知識として知ってはいたんだし、思い出させていれば今までの苦勞の  
大半はさらっと片付いていたはずなのにつてしよげる。

見た目通りの女の子らしくなる研究とかしなくても……いや、あれはあれで……いや  
いややっぱり良くない気がする。

「でも本当にごめんね？ そんな他人……初対面の私たちにも話しにくいこと言わせ  
ちゃって。後でこの子の耳でもしつぽでも好きに弄つていいから許してね？」

動いている猫耳と尻尾？

もちろん許すけど？

「人を売らないでくださいにや! というか同罪ですにや?」

「だって私にはそんなもふもふ生えていないしー? 年上とはいえ女の子のねこみみとしっぽよ? 男の子なら余計に、ね?」

この人……僕が男だって言ってるから余計におねえさん振ろうってしてない……?

一応僕の方が年上なんだけど……?

なんでみんな僕に向かってそうするの……?

……小さいからだよね、知ってた……。

「なら触らせてあげたら良いんですにや、その髪の毛とかそのいつつもわざと見せびらかしているムダな脂肪とか」

「なに言ってるのみさきちゃん!? 男の子の前なんだって!」  
む、いけない。

女の子同士の軽くセンチティブな話題に入りかけている。

僕はそういうのが苦手なんだ、ここは無理やり話を戻そう。

「僕の体は、肉体は女なんです。でも心は男なのでそういうのも苦手です」

「んもー、マジメさんですにやあ。でも中学生男子ならそんなもんですかにや? あ、

だったからこそせんぱいのお胸とか」

「み・さ・き・き・ちゃん?」

「にゃー！」

戻せなかった……あ、いや、「こほん」ってしてるし戻してくれそう？

「みさきちゃんが暴走しかけちゃったけど……でもなるほど、それで納得が行了きました。だから最初にぱっと見た感じが男の子だったんですね」

「あー、確かにですにゃ？」

「髪の毛がそんなに長くてもなんだかそう見えたんですよー、あの目が合ったとき」

「……そんなに目が良いんですか？」

「あ、合ってなかった？」

「いえ、僕は合ってたって思いましたけど」

「私も『そう感じた』から……ほら、人の視線って肌で分かるものだし？」

僕は小学生からメガネ……今は無くなってるけど……だったから目が良い人の感覚が分からないけど、どうやら見えていたらしい。

……小さいころから近視とか乱視とか無い人ってぜんぜん違う感覚なんだろうなあ。

今の僕だって目が良くなってるけど「見えちゃ行けないんじゃないか」って脳みそが錯覚起こすことあるし。

「遠すぎてそこまで気が回らなかつたのかもしいけどねー、でも私の勘違いで押しかけなくて良かったかな。……にしても良かった！」

「何がですか?」

「うん……あ、これはさつきみたいなの勧誘じゃないからね? 念のためにね?」

「はあ」

「どうせだから言っちゃうんだけど……『もし君が女の子だったとしたら』、どう考えても将来的に私がアイドルしているのが恥ずかしく……ううん、女として嫉妬しちゃいそうな成長するんだろうなああって思っちゃってね? 異性だつて思えばため息出るくらいだけど、同性だと……ねえ? 妬いちゃう感情つてしつこいから」

「……勧誘ではないんですね?」

「褒めちぎりからの勧誘じゃない! 純粹に褒めてるのっ」

「そうですねー、男の子だから言いますけど私もため息出ますからにやー? モテモ

テですにやー?」

……整ってる顔。

僕は美醜の区別があんまり付かないから分からないけど……この人たちの反応を見る限りそうなんだろうな。

僕から見たらすごく整ってる……多分世間一般的には「かわいい」アイドルの人たちなんだろうけども、でもやっぱりその感覚がよく分からないんだ。

「ま、( )まで違つて嫉妬もできなさそうだけ。だつてねえ? 今の君が成長して

……えっと、体が女の子でも男の子っぽくするんでしょ？ だったらきつと中性的で、  
こう……すんごいことになりそうじゃない？」

「顔のお肌は子供、あ、ごめんなさいですよにや、思春期でお肌が荒れ始める前ならともかく、その絹みたいなの……シルクみたいなの髪の毛ってどーやって維持してるんですよ……知りたいですよにや……」

「？ 知り合……友人の、女子の友達に聞いたとおりのケアくらいですけど」

「……………素材ね」

「……………素材ですよにやあ」

「……………私たちも苦労しているのよ……………」

「……………大丈夫ですよにや、分かりますにや……………」

ふたりとも、僕の顔と髪の毛を眺めながら自分の顔とか髪の毛を弄りだしている。

……女の子にとって、女性にとって外見はととても大切なもの。

それを理解している僕は黙ってすごそうとするけど……何か違和感がある。

なんだろう。

えっと、ちゃんとこの人たちには男って扱ってもらってるよね？

それで良いはずなんだけども。

「……………あ」



つぶやいた声は髪の毛の枝毛見つけて熱心な2人に届いていなかったみたい。だけど……そうだ。

この子たちは今までの人たちみたいに僕のこと「男子だとは認識してはいても男性とは認識していない」んだ。

話してる内容からも僕のことを見た目通りに……さばを読んでの中学生としても、子供って表現してる。

でも、それはおかしいんだ。

だって僕は「大人の男」——前の僕に見えるはずなんだ。

お隣さんだってそうだったしご近所さんたちだってそうで……僕を知らない人たちだって、最初の何回かは免許とかわざわざ見せていたけど最後の方はめんどくさくなつて、ただ口で「男なんです」って言っただけでもお酒を買えたりしたんだ。

なのに今はそうじゃないみたい？

でも大人の女性に向かって「大きくなつたら……」とか言わないはずだからやつぱり少年として見られているんだ。

……ほんと、どうなってるんだろ……あの日に確かめて回つたときは確かに大人の男だつて見られてたはずなのに……うーん。

考えれば考えるほどツボにはまっていきそうだし、ひよつとしたら魔法さんが今は

そういう気分なのかもしれないし……だからとりあえずは放置しておこう。

そんなはずはないけど実際にそうなんだからしようがない、今はそう思っておこう。

「あの、僕のことよりさっきのおはなしの続き、聞きたいんですけど。……あ、いえ」  
さっきの。

自己紹介の後のなにかについて。

その話題のときにさっきみたいなたんたんだった。

……だからまた魔法さんが出しやばってくるかもしれないけどひよつとしたら今は疲れて休んでいるかもしれないし、もうどうにでもなれって諦めてくれているかもしれないし。

怖いけど、またああなつても戻って来られる。

それは実証済みだから怖いけどがんばろう。

そうしないと……ああなつちやう原因が分からないと、また何ヶ月も寝たままになつちやうから。

どんどんみんなから置いて行かれちやうから。

「……僕、それについては初耳だったのであんまり理解が追いつかなかつたんです」

「え？　でもそんなことって」

「あり得るんですかにや？」

……そこまで大切な話じゃなかった……？

いやでも魔法さんが発動したしな、せめてどんな話題だったかは知りたい。

「用語とかも知らないものばかりで……あ、僕は家庭の方針でテレビとかネットをあまりしないのでみんなが知っていることでも詳しくないんです。だから、実は聞いていてもさっぱりで……つい分からないまままで合わせてしまったんです。済みません、僕の悪い癖がまた」

相手が話しているのいうわの空で適当に合わせちゃう。

本当に悪い癖があるから事実なんだ。

「なので申し訳ないんですが、もういちど。今度はちゃんと聞きますので、分からないところは訊ねますので。……初めて聞く、中学生の僕にも分かりやすく教えていただけますか？」

うん、なんか良い感じに言えた気がする。

「済みません、聞いていませんでした」って言ったら普通の人なら怒るだろうけど……この子たちなら多分大丈夫。

あげた恩をここで使い切れれば良いんだ。

「……ああ、そうでしたにや、これは失礼しましたにや」

先に僕の言ったことを飲み込めたらしい島子さんが尻尾をぴんと伸ばして……触り

たいな……僕を見る。

「秋からずつと『これ』についてインタビューとか取材とかワイドショーとかで解説する役割ばかりしていたので、初めの頃にしていたようなゼロからの、基礎からの説明っていうものがすつぽりと抜けていましたにや。お家の方針でニュース見ないんならしようがないですよ。あ、でも聞いても大丈夫なんですにや？　今私たちが勝手に教えてお母さんとかお父さんに怒られませんかにや？」

「あ。……大丈夫だと思います」

「……いざつてときは連絡くださいにや、私たちが謝りに行きますにや」

「いえ、きつと大丈夫です」

この会話で僕の架空の両親がとんでもなく厳格な家庭つてことになつてゐる気がするけどもう居ないし良いや。

「僕も知らないままつて言うのはやつぱり嫌なんです。だからわからないままに適当な相づちを打っている途中から……せつかく話してくださいからにはきちんと聞きたいと思ひまして。おふたりとも、お詳しいようすし。ですから」

——— 響さん。君、ほんとうに中学生？」

「——、え」

どきつと——嘘をついているのを見抜かれたような感覚で、一瞬で頭から血が引く感

覚。

「あ、いやね？ すつごく話し方が……ま、いつか。長くなっちゃうと途中で迎えが来ちゃうし手短にだよ。……こほん！ それなら私の出番ね！」

「そういうことなら先輩にお任せですよ」

「任されました。でね？ つい最近子ども向けの番組で子どもさんとお年寄り向けに……ちよつとだけですけどこれについて解説したので、きつとわかりやすく説明できると思います！」

教育番組のお姉さん、みたいなイントネーションで話し始める岩本さん。

……すごいなあ、話し方までガラって変わるなんて。

「じゃあ簡単に説明するから、途中ででも良いから分からないところ……今後の番組とかでも助かるからどんどん質問してね？」

「はい」

「よしっ。……んんっ」

——これだよやく、僕の。

魔法さんの、幼女の、「これ」に関係のあるなにかについて普通の人を知っているらしい知識——あるいは関係のあるそれを知ることができる。

「……？」

姿勢を正した教育番組のお姉さんの横には……猫さんが猫っぽいポーズを取っている。

え？

なんで？

「にゃんっ」

岩本さんに寄りかかると横を向いて両手を「にゃん」ってしながらもたれかかって、背中はそのけ反っていて、耳はぴくぴくと……すっごく早くいろんな方向に動かして、しっぽもくるくると丸めたり伸ばしたりして、それを片手に巻き付けていて。

……あの、僕、そういうマスコットが居なすぎや集中できないくらいの子供じゃないんだけど……教育番組ならしょうがないのか……。

「それじゃあ説明しますね？　みさきちゃんと私が『かかった』、見た目が変わったり何かが生えちやったりしちゃう、けどぜったいに人に移ったりはしなくて、遺伝とかでもないもの。普通の人じゃなくなっちゃったからって言っても絶対にいじめたりしちゃいけない『病気じゃないナニカ』のこれについてです」

——見た目が変わったり。

「いちばん分かりやすいのが『ねこみみ病』」

——ねこみみ病、……つて、え？

「『病』って言うけど病気じゃないのよ？　ただ最初にそう呼ばれていたから今も使ってるだけのただの名称なんです。突然変異……まあ指が1本多い子みたいな感じかな？　とつても珍しいけど居なくはない感じ。他には『ねこみみが生えちゃう症候群』とかもよく言われるんだ。そのほかにもいろいろあるけど今は『ねこみみ病』って呼びますね？」

ねこみみ？

生えちゃう？

………??

「……ごめんなさい、いつもみたいだとちよつとバカにしている感じになっちゃいますかね」

「あ……いえ」

「響さんは中学生ということでもう少し細かく説明しますと、英語圏では『NEKO』とか『NEKO—MIMI』とかもよく言われていますね……まあ聞こえ方はほとんど同じですけど。本来の意味なら猫って言う単語の『Cat』とかになるはずなんですけど、こちらの呼び方がそのまま定着しているみたいで……正式名称の代わりに『ねこみみ病』って言うのと同じね。まあコミカルになっっているので私たちとしては助かる限りなんですけど」

「……………」

頭が着いて行っているのに追いつかないって言う珍しい感覚。

「おかげであちらさんの検索とかがどえらいことになっているとかなんとか。あ、詳細な学術名とかは私たちもよく知らないっていうか発音しづらいから覚えていないの。どうせ司会者さんがボード出してくれますし。とにかくねこみみ、ねこみみなんですよー！」

「つまりは私に生えているこの耳！ がシンボルマークでトレードマークなんですにゃ」

「だからみさきちゃんは便利なのよねー」

「人を便利な猫って言うなですよ！」

「って言うのがいつもの流れなの」

「体が反応するレベルで染みつきましたにゃ」

島子さんのねこみみがすごい勢いでぴこぴこことあちこちへ向いている。

ついでにしっぽがそのねこみみを、頭の上のほうについているはずのそれをくると伸びて……指している。

ゆらゆら、ふさふさしている。

……どう見ても機械の動きじゃない。



自分の意思で、自分の体の一部として動かしている？

つまり岩本さんの今の説明は、嘘っぱちとか子ども相手のホラっていうわけでもなくて、つまりは本当で——。

「……………、え？」

どういうこと？

ねこみみ？

しっぽ？

ぐるぐるしてくる頭の中。

「おお——……………ほんつとうに初耳だったんですねえ……………」

「最初の頃はよくみんなそういう顔してましたにや！」

「そりゃさっきの会話について行けないわけです。響さんは悪くないです、みんなが

知ってるって思い込んでいた私たちが悪かったんです」

「人には事情がある……………そうですにや、知らない人もまだまだ居るんですにや？」

多分僕だけだっと思うけど……………駄目だ、インパクトのせいで頭が。

「いろいろすつ飛ばして会話してましたしねえ……………つて言うかただのグチでしたもんねえ、これについての……………怒られて当然です」

「……………いえ」

しつぽをペしりと岩本さんに振り下ろしている島子さん。

そしてそれをぐいっとなつかまれて「にゃー」とか言っている。

かわいけれど……それよりも。

一体どんなものかと思って身構えていたのに……なんだそれ。

子どもにも分かりやすいようになって、通称とか愛称とかそういうものだったとしても

……あんまりな名前じゃないか。

身構えたのに力が抜けていく。

だってねこみみだよ？

魔法さんが僕を乗っ取るほどの何かなんだからきつと大層なものだって思ったら

……ねこみみ。

目の前でぴこぴこ動いてる、島子さんのねこみみ。

……僕、ねこみみなんて生えてないよね？

尻尾も生えてないよね？

心配になってこっそり触ってみただけ、僕の尾てい骨からは何も生えていなかった。

# 35話 「ねこみみ病」 1/7

「んっ……にや、にやつ」

「……………ぐくっ」

「……………ほう……」

猫の耳——ねこみみとしっぽは確かに神経と繋がっていて体の一部になっているらしい。

だからこうして耳の……人のじゃない、猫の耳の先つぽやその先に生えている毛をくすぐるようにさわさわするだけで、髪の毛みたいにくすぐりたいと感じるらしい。

「やあっ……………ふにや」

毛がやわつこい。

耳自体も柔らかい。

いや、耳なら人のだつて柔らかいはずだけどこんなにはあつたかかないだろうし。

なによりも毛がまんべんなく生えているし。

総合的な触り心地は段違いだ。

僕はとても満足している。

「ふ、ふたりともー？　ちよーつと」

「……………ふむ」

「はにやあつ!？」

その耳……………ねこみみは一本一本が髪の毛とは違う質感を備えていて、地毛が黒な島子さんの髪の毛よりも薄い色をしている。

暗い緑色が混じってる感じだから……………多分明るいところで見るとエメラルドグリーンな毛。

髪の毛に比べたら短いっていうのと、ちよつとかき分けたら地肌……………猫の耳の地肌がこうなっているっていうのは初めて見たんだけど、とにかく地肌が見えるくらいには細かく生えていないから薄く見えるだけなのかもしれない。

あと地肌って薄い色なんだな……………お肌の色よりも白っぽいし。

非常に興味深い。

存分に触って良いって言われたから触ろう。

この歳になるまで猫とか飼わなかったもんだから新鮮すぎるんだ。

「あ、ああつ……………ひ、ひびきしやあん……………」

「す……………みさきちゃん……………くつ」

「くすぐりたいなら止めますよ?」

「……………つづけて、え」

「良いんですね？」

「……………」

こくつと頷く猫さんを見て僕は手をまた動かし始める。

僕も子供のときはくすぐったがりだった記憶がある。

だからそうだったら悪いから止めようかって思ったけど続けても良いって言われたし続けよう。

猫のヒゲはセンサーだとは知っていたけどどうやら耳だけでも敏感で、つまりはこうして僕が触っているだけでもくすぐったいらしい……けど、不快じゃなくて嫌じゃなくって我慢できる程度……ってことなんだよね、きつと。

ときどきもぞもぞしてるから声かけると「気にしないで良いんですにや！」って何回も言われたし、止めなくて良いらしいなら遠慮なく。

女の子にとって髪の毛は命。

それはあの子たちから毎回ののように髪の毛いじられてたからよく知ってる。

それで、この子のねこみみは髪の毛と一体化しているもの。

つまりは髪の毛。

だから本当に弱い力、どこかで聞いたフェザータッチで優しくしてあげている。

触らせてもらえるんだからこれくらいは配慮しないとね。

「んっ……あ、ああっ……」

「あー、これはそのですねー、そのー！ ……ねこみみ病だとグルーミングが！ はい！  
必要なんですよあつははははーっ」

「おや、店員さんがお茶のおかわり持って来てくれてたらしい。」

「けどなんで個室の入り口で立ったまま僕たち見てるんだろ。」

「……ああ、きつとねこみみ病自体は知ってても知り合いにいないのかなのかな？」

「実際のどのくらいいるのか聞いてなかったけど……まあ多すぎるってことはないだろう。」

「あ、真面目にこれケンゼンなやつなのでお願いですから書き込みとかしないでください  
いね？ はい、いちおう政府からのご依頼なんで……はい、ほんつとすみません」

「んやあ……」

「ほんつとすみませんほんつとすみません、未成年に対してとかじやないんですほんと  
に！！ 通報とかしないでくださいいね、とつてもとつてもややこしいことになるので！！

はい！！」

「それにしても手触りが良い。」

「触るたびにびくびく生き物みたい……取れちゃわないか不安になるくらいにはぐる

ぐる回る。

僕の手から逃げようとしたり、けど逆に近づいてきてみたりしたり。

これは島子さんの意思そのものなんだろうか？

それともさつき聞いたような猫としての本能とかいう触られたがる習性が備わってしまっただけなんだろうか。

興味深くておもしろい。

ずっと触っていたい。

「……ほどほどにね——……」

「？」

「……邪念がないから余計にかあ……なむなむ」

よく分からないけど店員さんはいなくなっていてポニーさんが両手を合わせている。

だからなんとなくで片手で触っていたのを両手にしてみても、両方のねこみみを軽くもみもみしてみる。

「ひゅあつ!? ……ふーっ、ふーっ」

ちよつとくすぐったかったかな……けど目の前から離れないし、良いんだよね？

まあこの子も女の子だけど高校生だし腕力では圧倒的なんだから嫌だったらはねのけてどいてくれるだろうってとにかくモフる。

「んゆ……んゆっ……」

刺激に慣れてくるまでは毎回びくってなるけど、顔を見てみてもこくこくとうなずいてくれているし問題なさそう。

なんとも言えない弾力が指に返ってくる。

柔らかくて温かくて気持ちいい感じの。

それにしても確かに動物の毛って触っていると気分が落ちついてきてなんだか穏やかな気持ちになってくるなあ。

アニマルセラピー？

そういう感じの。

昨日から今日までの3ヶ月でのストレスとここに来るまでの凍えそうなストレス、そしてさっきの魔法さんで3重のストレスを抱えた僕にとってはありがたいことこの上ないもの。

触っているだけで胸がぼかぼかしてくるっていうか本気で癒やされるし。

……ふたつの耳だけでこうなんだから、しっぽだとうなっちやうんだらう？

耳を堪能したらしっぽにも手出ししたいところだ。

「……………」

なんとなくでねこみみの内側へもほんのちよっぴり指を差し込んでみる。



……指を包んでくる、なんともいえない毛の集団の感覚。

「……………~~~~~っ!？」

「あ、ごめんなさい、痛かったですか？」

お耳に指突っ込んだ瞬間すっごく毛がぶわってなつたから心配になつたけど平気らしい。

ほんの少しだから大丈夫だつて思つたんだけど……そんなにこそばゆかつたのかな。

「……………響くーん？ ちょーつとストロップ。 もーだめ」

「はい？」

「そのままだとみさきちゃん……………えっと、そう！ くすぐつたくて!! 実はこの子いじつぱりでくすぐつたいのくすぐつたくないって言い張つてたから私も話し合わせあげてただけどお!! でもやっぱりそろそろ危険そう……………そう、笑っちゃつてお化粧崩れちゃつたら困るから!! ね？」

「あ、はい。 そうですよね、女の人はお化粧崩れたら大変ですものね」

「んうっ……………にゃあ」

名残惜しくお耳の穴から指を出して。

「……………すんすん」

「ふにゃあっ!？」

なんとなくで嗅いでみたけど……なんて言うかクッキーみたいな匂い。

「……………ふにゃあ……………」

「……あのさ？　ひとつ聞いて良い？　響くん」

「はい、何でしょう」

「響くんって、その……そういうの……知ってるお年頃……？　中2って……いえ、でも

個人差があるって言うし……………」

「そういうの？　って？」

「ああいやどう見てもわかってなさそうだしいいや。分かってこれやる悪い男の子

でもないはずだし……………じゃあ説明の続きの打ち合わせ！　するからちよつとだけ待っ

ててね？」

「はあ」

まだまだ触り足りなかった。

説明終わったらまた触らせてもらえるよね？

触って良いよって言うから触り始めたのに、でもやっぱり途中で駄目ってなっ

かりした僕はしぶしぶ立ち上がる。

うずくまって……身長差的に僕が島子さんのねこみみを触るためには、イスじゃな

くって床でしゃがんでもらわないと駄目だったんだ……そうしていた島子さんは確か

に、くすぐったさを相当にガマンしていたのかかなり激しくなっていた息を整えつつ、真つ赤な顔をしながら僕を見上げてくる。

目じりに涙がにじんでいる。

そんな顔をした島子さんが、じーつと僕を見上げてくる。

「……にや、にやあ……」

そんなにくすぐったかったんだったらさっさと止めてって言えばいいのに……本当  
にいいじっぱり？

いや、1回「良いよ」って言ったけど意外とくすぐったさすぎて止めてって言えなかつたのかも。

そう思うとちよつと悪い気がする。

なんだか顔にも汗かいているから後でお化粧つて本当みたいだし。

「……大丈夫？ 立てる？」

「……な、なんとかあ……」

たったの2、3分モフっていただけだったのに足が疲れたのか……いつもの僕みたい  
によじ登るようになってへろへろとイスに腰掛ける。

「……ふはあ……」

「済みません、もつと加減ができなくて」

「い、良いんですにや……………ふう。それで響さん？ 今触ってもらって分かったって思いますけど、この耳もしっぽも本物ですにや？」

「はっ」

ということはやつぱりしっぽも触らせてもらえるんだ。

そんな希望が湧く。

彼女の、スカートに被さるようにしてぴこぴこしているそのしっぽ。

耳とはまたちがうだろう質感のそれ。

ぜひ堪能したいところだ。

早く終わらないかな、ねこみみ病の説明。

いや、しつかり聞かなきゃいけないんだけど。

関係なさそうだけど魔法さんと関係あるんだろうそれを。

「この猫の耳も猫のしっぽも、どちらも造りは本物の猫がベースなんですにや。人間

の細胞に猫のDNAを入れた感じでできている……………らしいですにや……………んにやあ  
!？」

「ちよ、ちよいちよい響くん!？」

「……………駄目ですか？」

思わずで手を出しちやった尻尾。

その尻尾もまたくすぐつたいものだろうからって優しく両手でしゆるしゆるつてしただけなのに……。

なんだかしつぽの先が僕の方に向いていたから「説明だけだと飽きるだろうし触つてもいいよ？」っていう合図だったのかと思つたのに残念だ。

「……今は駄目ですにや」

「みさきちゃん？」

「……今は駄目なんですにや」

「今だけじゃなくって尻尾はダメ」

えー。

「くすぐつたいのが我慢できないって今日知つたのでごめんなさいですにや、響さん」

とつても残念だけど本人が言うんだつたらしようがないか……。

「……えつとですにや？ 触られた感覚……敏感なので毛先を撫でられるだけで寝ていても起きちやうくらいだったりますし、このみつつめとよつつめの耳……あ、もちろんこの通り人としての耳もありますにや？ まあ猫の方は中からも毛がびっしりと生えていて奥まで見えませんけどにやー。だからお掃除するときは綿棒よりも太いのが頭の中までするつと入つちやつてちよつと怖かつたりしますにや」

「そうなんですか」

……耳が4つもあつたら聞こえすぎて大変じゃない？

そうは思うけど普通になっているし大丈夫なんだろう。

「しかもしつぽは運動性能が上がるんですよ。まあこの太さと長さですからにや、そこそこの重量ですしお医者さんによると骨もあるそうですし、これのおかげでバランスを取ったりできるのですしつぽが生えて以来転んだことないほどなんですにや。」

まあ大人になれば転ぶなんてそうそうないですけどにや……とつさにどこかをしつぽだけでつかんで支えたりもできますし、慣れれば便利ですよにや」

「……尻尾で体重を……痛くないんですか？」

「自分でするぶんには。そうですねえ、腕でなにか重いものを持ち上げたり鉄棒とかにぶら下がったりするときみたいに心の準備もできていますし？ それに結構筋肉もあるみたいで、ふつーに『腰に生えている腕』みたいな感覚ですよにや」

「そうなんですか。ところでそろそろしつぽも触っても？」

「おーい、響くん？」

「……あんまり優しすぎてもくすぐったくなっちゃうので、もつと、ちよつとだけ強めでお願いますにや」

「……みさきちゃん？ さつき私に言つてたの返そつか……？」

「これは説明！ 説明のためなんですから大切なんですよ！」

「本当にー?」

「良いんですね?」

「……………はい」

「わかりました、では」

「……………んあつ……………にやつ……………」

差し出してきてくれた尻尾をもう1回、今度はもうちよつとだけ力を込めて。

……………確かに太いな。

人の腕よりは全然細いけどしつかりした太さと重さとあつたかさがある。

あとはふわふわ。

もふもふ。

……………露天とかでよく売っている、猫のしつぽのおもちや。

あんなものが猫だまじだと思ってくらいには触り心地とつかみ心地がいい。

ああ……………うれしい。

今度猫カフェに行かなきゃ……………ああでも普通の猫は触らせてくれないよなあ、ここま

では……………。

「……………あ、あ……………つ、ふうつ、……………」

さつきとはちがつてイスに座ってもらっているんだし、そこまでお互いにムリな姿勢

でもない。

だからとても触りやすくて、もうちよつとそばに寄ってしつぽを軽く目の前までつかみ上げてしゆるしゆると堪能することができる。

すばらしい限り。

「……………んうう、ひ……ひびき、しゃん……し、しよこを、もつと……………そう、にゃあーっ……………」

「はいはいストップストップ!!! 今度こそダーメー!」

しつぽをほつぺたでしゅつとしてみたりしていたら岩本さんに取り上げられた。

「……………」

普段は温厚な僕でもイラツとしたからジトツとした目で見上げてみる。

「あ、いや……………その、ね? えーつと、みさきちゃんはね? 典型的な『ケモノ化』って呼ばれてる、ねこみみ病の愛称が生まれるきっかけになつたいろんな症候群の中でも典型的で、わかりやすいものなのよ」

「そうですか」

尻尾の魅力に比べたらねこみみ病なんてどうでもいい……………いや、良くないんだつた。

よく分からない謎の魅力のせいで暴走しかけた気がするけど大丈夫、もう落ち着いた。



けど、ねこみみ病……のケモノ化か。

誰か知り合いに出ないかな。

そうしたら毎日でも話しに行ってやっても良いのにね。

## 35話 「ねこみみ病」 2 / 7

「お礼をするって言いましたよね」

「いや、まあ、私たちができることならって」

「なら尻尾で」

「いやあ……それはちよーつと……」

「……………にゃ」

「ほら、島子さんは良いって」

普段になくちよつと強気で言ってみた僕。

だって尻尾触りたいんだもん。

なんでこんなにこだわるのか分からないけどとにかく触りたい。

これが女の子の本能？

女の子ってちっちゃい頃から人形とか好きだしぬいぐるみとかいい歳して持つていてもおかしくないって共通観念があるくらいだし、あとやたら他人と体くつつけるし。

多分そうなんだ、きつと。

そうに違いない。

だから今の女の子になって僕がこだわっても良いはず。元に戻ればきつと失うだろうこの感覚を大切にしたいんだ。

それがしつぽ。

人の体には存在していない尻尾、それも猫のつて言う長細いそれ。

腕よりは細いけど手首くらいの太さがあつて、今の僕の腰までよりもずつと長い……人間の身長、島子さんの身長に合わせて生えたような、僕が前から触りたいと思つていた猫たちのそれ。

それが今は僕の手元にある。

「……みさきちちゃん、お願いだからニユースになるようなことだけは……」

「ニユース？　ですか？」

「……うん、響くんはただの興味本位……いざとなつたら一応同性つて言い張つてもらえば……うん、だから大丈夫……」

ポニーさんな悩んでるんだろ……まあいいや、それよりしつぽだしつぽ。

猫のそれよりもずつと手のひらのサイズの合つた大ききさになっていて温かくて「どうぞ」つて差し出されている。

こんな幸運あるんだろうか？

ここに来るまでがひどかつた反動なんだろうか。

けど僕はこの程度じゃ、ほだされない。

説明も何も一切ない魔法さんの魔法には迷惑をかけられっぱなしなんだ。

だけどこの感覚、僕にとつてはねこみよりもずっと興味深くつて触り心地も独特でふさふさしていていつそのこと飼いた——  
落ち着こう。

「……………ふあああ……………んっ……………」

島子さんの毛はいつも触りはじめにぶわつとなる。

くすぐったがりだからなんだろうけど、そうしてしばらくぶわつとしていてだんだんと毛が寝ていって収まっていくのもまたおもしろい。

しっぽ自体をゆっくりしゆるつとしてみたり早くしゆるつとしてみたり、あるいは緩急をつけてみたり丸めてみたり。

触っていても飽きる気配がぜんぜんない。

「……………んん……………んんんんっ……………」

このくらい力ならくすぐったすぎないみたい？

さつきまでより静かになってきたし、僕も手慣れて…………む。

ずっと同じように触っているのもいいけど思いついたことが。

「ちよつといいですか？」

「……………ふにゃあっ……………」

良いらしい。

ってことで島子さんに許可は取ったから、しつぽの真ん中へんの毛をかき分けて地肌の奥の骨があるっていうその感触を確かめてみようとする。

もちろん痛くない範囲で。

「……………んひゃあうっ!？」

むう……残念ながら10個以上あるっていう人にならない部分の骨は確認できなかつた。代わりにほどよい筋肉と脂肪の配分のぷにぷにとした弾力という気持ちいい感覚だけが指に伝わってきた。

中の骨を確認しようとして力をなるべく加減してぐつと押し込んでみたら、しつぽの先としつぽ全体の毛と耳……猫のほうのまでがぶわってなつたから痛かつたんじゃなかつた。不安だつたんだけど、大丈夫みたい。

なるほど。

でもやっぱり飼いたいなあ、犬か猫。

長生きな種類ならあるいは……ひとり暮らしだしなあ。

「……………んにゃあああつ！」

「……えつとねとところで響くん聞いているかなというか聞いて!？」

「聞いています」

もう一回興味深い感触を楽しんでたらもう一回しつぽを取り上げられて「さすがにもう駄目！ もうおしまい！ っていうか私の説明聞いてなかったでしょ！」って言われた。

うん、手元の触覚に夢中で聞いていなかった……なんだっけ？

……そういえばねこみみ病の説明の続きしてもらってたんだった、すっかり忘れてた……。

しつぽのあまりの良さに聞き流していたけど、そこは女の子たちにさんざん振り回されてきた経験からとっさに「そうだけど？」って感じの声を出すことに成功した。

「そう？ よかった……だけどね、そのねこみみ病の典型的なケモノ化っていうの、今触ってもらってわかったように」

「……………」

あ、尻尾が伸びてきてる。

両手でおんなじように強めに、きゅつと。

「……………」んにやあつ！」

「す……じゃなくて止めなさいってみさきちゃん……」

「だつてしゅつぐく」

「やばい顔してるし声もやばいからお願い。ね？」

手をわきわきさせてみる。

猫さんの目は僕の手に吸い寄せられている……撫でられると気持ちいいのかな。

犬とか猫とかって触られるの好きだって言うし。

「と・に・か・く！ 聞いてね！」

「はい」

「ホントにね？ ……普通の人の体に、いえ、普通のヒトだった人の体に人の大きさに合わせたサイズの耳とかしっぽ、それもいろんな種類の動物のが生えてね？ みさきちゃん

の場合みたいに本物の猫さんほどじゃないけどそのオリジナルになった動物の要素が芽生えたりするの。たとえばみさきちゃんだったら猫だから、その………そう、触覚とか!! 触った感覚とかね!! ……もちろん音とか動きとかにとっても鋭くなるんだけど生活に支障のある範囲じゃないの」

「そうですか」

「……テンションダダ下がりね……猫とか好きなの？」

「それなりに？」

「そう……あ、そう言えば。響さん？ いえ、響くん？ さつきまでなんとなくで呼んでいたけど君はどっちの呼び方がいいんでしょう」

「あ、いえ、どちらでもいいです。どちらでも呼ばれますし」

女の子扱い歴が半年になってきた僕にとっては本当にどうでも良いんだ。  
社会人ならさん付けなんだって聞くし……社会人になったことないけども。

「……………」

そう言えば尻尾の匂いってどんな感じなんだろ。

「……すんすん」

「……………!!?」

「あー、響くん？ いちおうは男の子なんだよね？ なら余計にその……みさきちゃん  
のニオイ、あんま嗅がないでくれてあげる？ そういうのって女の子は恥ずかしいもの  
だからさ？」

「別に臭いとかではないですよ？ どちらかというといい香りで、もつと嗅いでいたい  
感じです。 ほら、動物の動画とかで飼い主の人がペットの毛に顔をうずめる感じ、あ  
あしたい程度には」

「?!?」

「はい響くんストップ。 あと、みさきちゃんも反応しない。 相手は中学生だけ見  
た目は小学生な子でしょ？」

「……………ふあい、ですにやあ……………にやあ……………ふみや」

僕のこと幼いって言われたけど、今の僕はしつぽをモフるってやつで大変満足してい



る。

そうか……これが。

これがかがりとかが僕を好き勝手しているときのあの感覚。

この高揚感、楽しさ。

うん……こういうことならもうちょっとさせてあげてもいいかな……僕が嫌じゃな  
い範囲で。

そう思える程度には素敵な体験だった。

一方でイスの背にへばりつくような格好をしている島子さんは僕をしばらく眠そ  
うな目で見てたんだけど……なんでだろ……僕が離れてもう触らないって分かったから  
か、ほっとしている感じ。

僕としては残念極まりないけど、でも嫌がられたら困るからこの辺で潮時。

そう言えばもうちよつとで下に降りる時間だし、確かに聞きたい話があるのにもふっ  
ておしまいだともつたないよね。

「……………」

……萩村さんたちの勧誘に乗るとこの子と同じ空間に居られるわけで、そうするとま  
た触らせてもらえる機会がいっぱい増える。

……………絶対したくないお仕事からどうしても嫌だけどご褒美があれば、つて程度に

なつて来た気がする。

ちよろい？

いや、あの感覚を知らなかったからしようがないんだ。

## 35話 「ねこみみ病」 3/7

「……みさきちゃん？ その、個室とはいっても一応は公共の場で、それも初対面の小さい男の子……女の子でもあるけど、でも男の子に触られて……誤解されるような声を上げるのって。 ちょっと……いやごめん、今度は私の方がかなーり引くよ？ ……というかぶつちやけやバいつて思うのよ……うん」

僕をイスに座らせて「半分くらい残っているケーキ食べたら？」って言い残して、ふたりしてイスを少しテーブルから僕から離してこそこそ話を始めている。

なんか聞かれたくないらしいからちまちま食べてあげるけど……耳、今の僕のは前の僕よりもなんだか聞き取りやすいから聞こうとすれば聞こえるんだけどなあ……悪口って訳じゃないらしいから良いけども。

でも、なにがまずいんだらうか。  
くすぐったいのはしようがないだらうに。

我慢しすぎたことかな？

まあいいや。

内緒話を聞くのつていうのはなんだか悪いしな。

それに僕としてはもふるというやつをできて大変満足だし。

いつのまにか中から染み出していたお酒のビターな部分もつたいたいなし、ちよつとだけ胃が空いたみたいだからもうちよつとだけ食べておこう。

うん、苦い。

こういうのが好きだ。

香りも上品だし。

そうそう、こうやって美味しいのをちよつとだけなのが……つて、なんだか年寄りっぽくてやだな。

こんなに幼くなつてるのに中味は元のまんまだからかな。

学生のとときから「大人びて見えるね」つて言われてたのつてそれかも？

「……ごめんなさいですにや……ホント、その、前にも言いましたけどこの生えている状態だと……ふう……どうしても猫としての本能が理性を私を思いつきり上回つてせいぎよ……ん、できなくなつて」

「うん、知つてる。けど押さえる練習しようね？ 生放送だつたらおしまいよ？ お

堅い番組でそんな色気出したら即打ち切りね」

「止めてもらつて助かつたですにやあ……あのままだと、もっとその、猫として、猫とし

てですけどにゃー！ もっと気持ちいいところをついていう本能でもっと奥を求めていたかもなんですよ」

「奥とか言わないでお願いだから」

「だってつけ根と……のあいだが、いちばん、その、なので」

「分かったから止めて。 さっきので変な気分になっちゃったのみさきちゃんだけじゃないの」

変な気分ってなんだろう。

くすぐったいのこらえる気分？

「ですので、あくまで本能なんですけどもっと痴態を晒すことになっていたのは確実に、つまりは救われたのですにゃあ……それにしても実にいい具合の撫でっぷり過ぎたので……油断していましたにゃ。 でも、あれは正に猫が求める手つき……」

「うん、それも知ってた。 ……知ってたけど正直さっきのアレとか今の声の感じとか、あと、顔。 どう考えてもアウトだからね？ 声だけでもやばいし絵面ももっとやばい。

来週のちっちゃい子との触れあい体験とか生放送とかで気をつけなきゃいけないこと、増えそうねえ……万が一響くんみたいなことしてくる子がいたらって思うと。

お耳とか尻尾に触るのは女の子限定で、しかもちよつとだけってしないと……」

「でも、ああいうのはもつと小さい子で」

「小学生みたいな背丈の中学生の男の子に触られてあんなつまさきちゃんがそれ言うの?」

「にゃ」

僕がちっちゃいのは知ってるから怒らない。

今は満足してるから怒らない。

「ああいう感じで、クール系でマジメ系でおとなしい系の子にさつきみたいじっくりとつぶらな瞳で見つめられつつ触られちゃったら?」

「……………んっ」

「……………」

「すみませんにゃ。ドン引くの止めてくださいにゃ……………」

「……………事前に人目のないところで……………店員さんに見られちゃったけど。ドアも閉まっていたしさつきみたいな大声じゃなかったから外の人にも気がつかれていなかったようだけど……………店員さんに見られちゃったけど。でも今でほんつとよかったわねえ……………あの人だけ口止めすれば済むから」

「……………面目ないですにゃあ」

「いや、冗談じゃなく政府からの依頼とか以前にアイドル終わってたかもよ?」

「でも私は響さん相手なら何年待っても……………」

「その発言もおさえましよーね?? あとさりげなくズルいわよ?」

僕に関係のないひそひそ話しかしていないし、残っているうちにもういつかい手のひらの匂いを嗅いでみる。

「すんすん……」

……シャンプーとみさきさんの匂いと、あと……毛の匂い。

とつても良い匂い。

「……こほんっ、じゃあ気を取り直して!」

「島子さん、くすぐったかったのはもう大丈夫ですか?」

「……響さん、お互いに忘れた方がいいこともありますにや」

「?」

「はーい!! 気を取り直しましてえ!!!」

なんだかみみとかしつぽがしおれている猫さんと元気すぎるポニーさん。

なんでだろ。

「で。……響くん? 聞いている?」

「あ、はい岩本さん」

さつきまでの騒動がウソのように真剣な感じになったおふたりが僕を見ていた。

いや、何分の1かは僕のせいだったかもしれないけど。

いやいやでも許可を出したふたりのせいだろう、きつと。

「話を戻すとね？　今みさきちゃんを触ってもらってわかったように、みさきちゃんみたいに猫……他にも犬、ウサギ、鳥、そのほかいろんな生きもののものがあるんだけど。

とにかくね？　ある日突然に『本物の動物の一部が人の体に直接生えてくる』のよ、『ねこみみ病のケモノ化』って」

「といつてもヒトに存在しない部位、こういう耳とかしっぽとか羽とかなことがほとんどですにゃ」

くるんと丸くなるしっぽ。

さつき僕はあれをじつくり堪能して……。

「それでね？　『小さいころからずっと生えていたかのように』違和感なく自然と自由自在に使えるようになるのが、まさしく体の一部になるのがねこみみ病のケモノ化です。

……急に説明しちやつたけど理解、あ、いえ、信じてもらえましたか？」

「はい、あんなに細かい動きとか、あたたかさとか力の強さとか。機械では無理でしょうしね」

「……………んうっ……………」

「はいはい思い出すの止めてねみさきちゃん」

くすぐったがりなの、べつに恥ずかしがらないでもいいと思うんだけどなあ。



どうせテレビでも触られたりして慣れてるんだろうし。

「……………」

ねこみみ病なる不思議な病気……じゃないんだっけ、生えるやつ。

僕が知らなかっただけで、どうやら世間一般的には認知されているものらしい。

でも……自己紹介で魔法さんが起きた。

自己紹介と言うからにはこの話題も出たんだろうし、僕に掛かっている魔法さんが何らかの形でねこみみ病に関係している可能性もある。

っていうか自分にはい部分が生えるとかは体が完全に生まれ変わったみたいになっちゃってる今の僕の状態と関係がありそう。

……どうせだから聞いてみよう。

大丈夫、キャンセルして戻って来る方法は、もう分かったから。

「えっと、その……それって、マンガとかアニメで昔からよくある……『魔法とかで変身する』っていうもの」

……ひと呼吸のあいだにつばをこくりと飲み込む。

「……それで、その状態が続くようになるっていうもの……っていう理解でいいんでしょうか？」

かなりどきどきしながら口にしてみた……けど、今度は何も起きてない……っばい？

「そんな感じでOKですにや」

さらつとすぐに答えが返って来る。

……どうやら大丈夫だったみたい。

じゃあこれは関係なかったのかな……。

「若い世代……って言ってもゲームとかマンガに馴染みのある人だから大半の人なんですにや？　そうやってお手軽に理解してもらえるのが手っ取り早いのですにや」

「こう言う表現で嫌になったりしませんか？」

「にや？　別に抵抗はないですにや」

「……それじゃあ……それはいきなり生えるものだったりしますか？　たとえば」

大丈夫なはず。

『ある朝いきなり生えている』とか」

「あれ？　響くん、知ってたの？」

「……いえ、マンガとかだとそうなので」

「あ、確かにそうねえ。　何でか知らないけど寝ていた内について言うのが多いわよね、マンガだと……現実もそうなのは偶然なのかな？」

……これも、僕が女の子になったときとおんなじ。

「あ……恥ずかしいからあんまりじろじろ見ないでくださいにや？　私るときはで

すね、さつき言ったとおりにある日突然……もう2年くらい前になりますけどにや、その日の朝に起きて『なんだかちよーつとなにかが変だな』くらいは思っていましたにや。でも『気がつかなかったんです』にや。コレが生えていたのを鏡でも見たはずですし着替えのときも違和感こそあったものの、あ、着替えにいちいち邪魔でやつぱりなんだか変な感じはあつたんですけど、それ自体を……ぜんぜんなんとも、不思議だとも思いませんでしたにや」

ねこみみがびこびことしている。

「髪を梳かしたり、着替えたときもだよね？」

「はいですにや。髪のを梳かすときに、最初に耳……猫の方の……に引つかかってちよつと痛くって不思議だとは思いましたが、それがついていること自体にはなんにも思いませんでしたし。パンツ……あ、いえ、男の子にはズボンって言ったほうがいいんだつたような」

「そうね、一応は。テレビとおんなじ感じでお願ひ」

「はいですにや。……その日はズボンだったんですけどにや？ズボンも、腰のところでしたっぽに引つかかっていつものところまで、腰まで上げられなくって。それでも『なんだかおかしいな』くらいでしたにや」

「だから今日も。いえ、それからずっとスカートなんですか？」

と、さつきしつぽのつけ根近くを触ったときのことを思い出して島子さんのしつぽの先を見てみる。

確かシャツの下、スカートの上から生えていたような。

「いえ、ちよつとだけ下ならズボンでも問題ないですよ。腰の位置が低いデザインのものならそもそも問題ありませんし。ベルトをきつく締めすぎたり硬すぎる素材のものだったりしなければいいのはなんとか履けますし。……まあちよつとだけかさばりませしズボン自体も下げないといけないものの方が多いので、今では私のしつぽの位置にあったメーカーとかデザインのだけしか履きませんけどにや。あとケモノ化の宣伝とかで私たち専用の服とかも作れられているので、そのモニターを兼ねていっばいもらつたりしていますにや」

「そうなんですか」

ということは、あのしつぽは島子さんのおしりというよりは腰から生えているということになるのかな？

まあくわしい場所は……相手は女の子だし、さすがに聞くと失礼だな。

もう僕が男つて言つてあるし……帰つたらネットで調べてみよう。

「それに、ねこみみ病でしつぽ生えるのは男性でもいますし。男性がズボン履けなくなつたら大変ですよにや？」

「そうですね」

男がズボン履けない……危機的状況だ。

スカート穿くか露出するかかの極限の二択。

僕なら嫌だ。

「だからだいたいの場合には違和感はあるけれども普通の服のままでもなんとか過ごせるんです。……慣れなくてすにゃ。しつぽの太さにも種族差とか個人差も大きいですし。……慣れなくてと体型的にどうしても身につけられないっていう服が増えちゃった、そのくらいですにゃ」

「なるほど」

「というわけでとにかく私にこういう……耳は手のひらサイズの大きいので、しつぽに至ってはだらんとしたら立つたままでも毛先が地面についちやいそうなくらいの長さのこれがいきなり生えていても『それが私の体の一部だ』という感覚で、違和感なんてゼロだった』んですにゃ」

「……………不思議ですな」

「不思議ですにゃあ。これも個人差なんですにゃあ」

「でね？ 響くん。ケモノ化するとね、運動神経とか筋肉量とかが生える……いえ、くつついたところだけじゃなくてそれ以外の全身に至るまで、その元となった動物にか

なり近いところまで発達していることが多いんですよ。例えばみさきちゃんなら猫……というよりはネコ科のヒョウとかをイメージしてもらおうといいんですけど、そのサイズになつた動物とでもいうように」

「筋肉も前よりもずつと増えましたにや。おかげで体重もびつくりするぐらいには増えているんですけど、でも引き締まつたおかげで前よりはむしろスタイルよくなつたんですよ。ケモノ化で体重爆増したので別にバレてもこのせいだからって平気なくらいにですよ」

「よく折れないわねっていうくらいには体柔らかくなつたしね？」

「関節の可動域もなんとかってことらしいので体じゆうが造り変わつてるのですにや」  
「……………」

つまり猫島子さんは、やろうと思えば岩本さんを担いで、それこそ映画みたいに建物の上とかを飛び越えて逃げたりもできたんじゃないや……いやそれだと余計に目立つどころじゃないか。

なにより危ないしな、電線とかアンテナとか。

そうでなくても目立つんだ、なんとか手を引いて走るくらいしかできなかつたんだらう。

ドラマのロケにしては派手すぎるし映画だったら町中でそんなアクション撮

らないだろうしなあ。

……そうか、別に、ヒトより優れた……超人的な身体能力を手に入れたってそれをいつも全力で使えるわけじゃないのか、こんな時代じゃ。

なんだか世知辛いなあ。

そんなすごいことが起きてるのに肝心のその人たちは見た目が変わる以外ほとんど普通に過ごさなきやいけないもんね。

ちようど、僕みたいに。

## 35話 「ねこみみ病」 4 / 7

朝起きたら姿が変わっている。

ものすごく不便になるかと思っただらそこまでじゃない。

でも僕は起きてすぐに気がついたし、なにより魔法さんみたいなことをこの子はひと言も……。

「体が柔らかくなったおかげでダンスとかはものすごく楽になりましたけどにやー、普段のストレッチとか筋トレとかが楽になったので忙しくなってきた身としてはありがたいかぎりですよにやあ」

「ほんつとうらやましいわよね——……まあ私も……『前』に比べたらずっと……」  
「？」

そういえば岩本さん、結構「前のこと」って言うみたい。

なにかあったんだろうか。

そして何回も言うからには聞いてほしくって話したいんだろうか。

少なくともあの子たちならそうなんだけども。

「来年あたりからは学校とかスポーツとかでも普通のヒトとねこみみ病の中でもケモノ



化した人を別の種目としてカウントしたり、あるいはハンデ……えつとですね、つまりはケモノ化して増えたスコアぶんだけマイナスして点数をつける、そういう動きもあるそうですにや」

「……それってどうやって測るんですか。学校ならまだしもああ言う世界ってすごくシビアって」

「さすがは響さんですにやあ。その通りで、そのスコアってやつ個人の差がものすごくいことになってるので相当揉めているみたいですよにやあ」

やっぱり世の中は世知辛いらしい。

けど……そうだよな、変わっちゃったものはしょうがないけどそれで生きている人にとっては死活問題だよなあ。

アスリートの人が僕みたいに男から幼女にでもなったら……まあ、ここまで変われば諦めもつくか。

「……なるほど。あの、猫とかの動画でもよく、ものすごく速く走ったり高いところから飛び降りても無事に着地とかできるものってありますけど」

ふと、さっきこの子の話を聞いて「映画とかみたいに屋根伝いとかで逃げたら」って考えたのを思い出す。

「あー。スタントマンさんみたいなことではできませんし怖いんですけど……安全な場所

で3階くらいまでならケガせず痛くもなく着地できますにや」

——それはもう人間じゃないんじや。

そう思ったけど僕の口が重くって助かった。

「私みたいなネコ科になった人の中にはもつと高いところもいけるそうなんですけど、私はそのへんで怖くなっちゃうのですにや。それに3階くらいからだどけつこー風に吹かれて着地地点がズレるから……多分猫ちゃんたちでも場所がずれたら酷い目遭いますにや?」

「確かに」

「あと、下りた後って……痛めたりこそしませんけど、でも足の裏から脚までしばらくびりびり痛いですにや。うまく手と足と体のバネを使って着地でできれば大したことはないんですけどにやあ」

「……痛いで済むんですか」

「こー、両手を思いっきりばちつと合わせた程度ですにや。ま、痛みといえれば痛みですよ? しばらくじんじんしますにや?」

「……………すごいですね」

ねこみみと尻尾が生える、しかも身体能力はマンガやアニメみたいなことができる……子供なら喜びそうだな。

子供って言っても高校生くらいまでは案外喜べそう。

大学になると就職のこと考えて頭抱えそう。

人間なんてそんなものだ。

僕は良く知ってる。

「で、響くん？」

「岩本さん？」

「あ、私のことはひかりちゃんでも」

「せんぱい？」

「この子のこともみさきちゃんの良いのよ？」

「……ええと、年上の方なので止めておきます」

「マジメねえ」

「そんなところも……」

あの子たちもそうだったけどこの子たちも呼び方にこだわるのか。

出会ってまだ1時間なのにな。

ちらつとスマホ見るけど……まだ萩村さんたちは着いていないらしい。

「それでね？」——実は私も同じようにねこみみ病にかかっているんだけど

「え」

「どんなタイプか想像できますか？」

「……岩本さんまで。……」

……岩本さんまでそうだっていうのは初耳なんだけど……でも、それで前のことつて。

まあ、ねこみみ病になっている島子さんとコンビを組んでいるんだし考えてみれば当然か。

ただ仲が良いとかじゃなくて、この子もまた別のねこみみ病で……政府広報とかで出てるのかな。

でも……んー。

「……………」

「……真正面からってなんかこしょばゆい」

「そういうものですよ」

やっぱりテレビに出る人でもこうして近くでじっと見られるのは恥ずかしいのか。

でも彼女の耳は……人のしかないし、前髪に隠れてちらつとしか見えないけど上にはそれらしきものはない。

しつぽも……服から出ていない、少なくともここに来るまでと今座っている範囲では見えていない。

つまりはぱつと見て分かるものじゃない？

でも「私を見て分かるかな？」って雰囲気なんだよね……なんだろう。

「……からかっているわけじゃないですよね？」

「本当よー？ テレビとかで説明するとき、みさきちゃんのを今みたいにしてそのあとに私っていう毎回しているお約束です。というか、こうでもして茶化さないと割とシャレにならないというか。特に女性の方たちからの……ね？」

うーん。

シャレにならない。

女性同士で。

なんだろう。

……胸が大きくなるのか？

目線は合わせてないからバレないはず……だけど、彼女のはそこまでじゃない。

多分は偽乳を使っていなければC……なにを考えているんだ僕は。

たしかに岩本さんのほうが島子さんのよりもち大きいかもいやそうでもないかいやいや忘れよう思考がおかしい盛る系のだったらそうじゃないってば。

胸は大きさはじゃない、トップとアンダーの差だとかなんとかたたき込まれたからなあ

……。

僕がこういうことを自然と考えるようになった元凶のメロンさんの罪は計り知れない。

「……はい、そろそろ良いですね。でしょ？ 見ても全然分らないでしょ？ そうなんです。私の場合にはなにかが生えたりはしないんです。つまりはケモノ化でもない別のねこみみ病なんです」

あ、そっか。

ねこみみ病でわざわざ「ケモノ化」って言うくらいなんだから別のものもあるのか。でも、別の？

ねこみみ病と似たような病気……じゃないんだっけ、現象で姿が変わる——  
「分かりやすく言ってしまうとです。響くんみたいな若い子にはまだピンとこないかもしれないが」

女性同士で困ったことになる。

見た目がそこまで変わらない……ように見える。  
けどはつきり区別されるくらいに変わる。

それはまるで、僕のように——

「私のねこみみ病の症状は『若返り』なんです」

「え」



若返り。

岩本さんがかかっているって言う、ねこみみ病のもうひとつ。

若返る。

つまりは幼くなる。

それはまるで僕に起きたような。

「……あははっ、わかりやすいねこみみとはちがつてやっぱり『若くなる』っていうのはおさな……んんっ、若い響くんにはいまいちピンときませんでしたか？」

「……………いえ」

体じゆうから汗がぶわっとして、この魔法さんがねこみみ病の症状のひとつだったのかもって思ったらなんだか落ち着かなくなっただけ。

……………こういうときでも無表情な僕はまたまた誤解されたい。

今回ばかりはそれでよかつただけ。

でも。

「そうですねー、これもいつもしているやりとりだから気にせずにご返答してほしいんだけ

どね？ あ、怒らないから大丈夫だよ？ テレビでも配信でもいつもやってわざとおかしなこと言う子に『めつ』って言ったりする程度なの。——私、響くんから見えていたいくつくらいに見えます？」

高校生くらい……じゃないのかな……少なくとも見た目とか態度とか、話し方は。

幼さがまだ残っていて、よっほど若く見えていたとしても多分成人はしていない……か、少なくとも前の僕よりは年下な印象。

でも若くなつたって言っていた……ってことは前の僕より年上？

でもでも島子さんと仲良いし高くて20代……あ、女の人ってお母さんと娘でも友達みたいになれるんだっけ……余計分かんないや。

「……………えっと」

なんだか目をきらきらさせている岩本さん。

……あ、よく見たら眉毛、剃っていないくて地毛でまつげも目の色も茶色掛かっているみたい。

茶髪、染めているんじゃないかって本物だったんだ。

ついでになんだか茶髪というのと染めているというニュアンスが含まれちゃうし、これからは栗色ポニーあざとい若作り岩本さんと呼んであげよう。

「……済みません、分かりません。お化粧品もすごく薄いですし、それでもお肌も、いえ、



全体的な印象からいってもどう見ても高校生……か、僕の上の学年の中学生にしか見えないです」

分からない以上思いっ切り低く見積もってあげた。

僕なりのリップサービスしてやつ。

だって女の子は女の人になっても1歳でも若く見られたいんだって知ってるから。

実際にそう見えなくてもないしな……高校生でも不思議じゃなくて、お化粧とか服装次第で女の子っていくらでも変わるから。

おとなりの島子さんと比べると背も低いし胸……は関係ないけど童顔系だし。

ださい格好にさせて、あるいは中学校の制服を着させて、あの子たちの前に立たせて「同級生なんだ」って紹介したら「上級生みたい」って言われそうだけど納得もしてくれそうな雰囲気。

胸はそこそこあるけど現役JCなかがりとりさりんっていう前例がいるし、女性の年齢は胸ではわからないというのを知っているし。

「いやー！ いやいやー！ 中学生！ ねえみさきちゃん私中学生だって！」

「さっさとお答えするですよ」

「そう見えちゃいますかー！ 中学生！ でも中学生な響くんからそう見えるんなら」

「さっさとお答えするにや」

「JKって言われて嬉しくなるのに」

「さつさと言うですにや」

「……もうっ！ 分かっているってみさきちゃん！」

「……………」

「それですね？ 私、中学生！ って見ていただけるのは本当に初めてでだからとっても今私は嬉しいんですけど、ともかく私はこうして実際の肉体年齢が著しく若返ってますね？」

「せんばい」

「ああもう最初のころは同じスタジオとかインタビュアーの女性の方からの視線が気持ちいーいくらいに刺さってきましてね？ ああ私の年ですね、ああでもその前に具体的な年齢を」

「27ですにや」

「あ」

「……………27？」

「岩本さんが？」

「……ねえ、いきなり」

「にじゅうななさいですにや。」

「にじゅうななさい」

天井のシャンデリアっぽい明かりが気になるのか、上を眺めつつぼそりとつぶやく島子さん。

「みさきちや」

「私プラス10歳ですにや。じゅっさいですにや」

でも……ぼくと同世代。

20代って予想は合ってたけど……でも、見えないなあ。

「み、みさきちやーん……？ なに先にバラして……普段はもっと」

「ひかりさんは、元27歳、現17歳っぽい感じですよ。……………元、27歳。

7さい、にじゅーななさい。アラサーですよ」

「連呼しないで!?!」

「だって事実ですよ」

「うぐ」

あ、これ怒ってる。

急にトーンが下がったし……どっかで尻尾踏んづけちゃった？

「さっきからまたああやって若く見られてからにコーンしないてくださいにやお相手の響くんもドン引きですよ」

僕は静かに待つ。

「ついでに言うなら響くんのひとつ上つ上の世代に人気だったくらいにはアイドル歴も私たちの中でトップクラスに長くてですにや。私がいさいときから人気だった、目標だった人ですにや」

「みさきちゃんひどい」

「さらにさらにメディアへの露出も減り始めてご本人もそんな感じで『そろそろ引退考えてるかも』ってささやかかれていたくらいの年増ですにや」

年増。

それは僕にも刺さる。

だつて前の僕……今の僕に入っている前の僕の意識。

それは岩本さんと……地元がこの町なら。

下手をすれば学校同士のイベントとかで遠くからでも顔を合わせたこと……はないだろうな、アイドルって学生するときからするものだから。

……………。

けど、そうだよな。

……まあ成人していない猫さんからすれば20後半なんて年増……つまりはおじさんおばさんになるよなあ。

自分が歳を取ると別にそうは思わないし感じもしないんだけど……でも僕が高校生

くらいまでの感覚じゃあ25を過ぎたら親の世代って……つまりはおじさんおばさん。

なんか凹んだ。

しよげた。

……歳を取るって嫌だなあ……今は若返ってるけど。

うん、さっきのはしやぎっぷり。

僕だけは素直に褒めてあげよう……僕も知らない人に「学生さん？」って聞かれるのは嬉しいって分かるから……おじさんは嫌だから……。

## 35話 「ねこみみ病」 5 / 7

高校生ってことは17歳くらいって考えるとそれより3歳くらい下のあの子たちにとつて僕の世代はさらに上になるということ。

先輩に向かって……って言うか17歳にとつての27歳って力関係とかその他もろもろ圧倒的なんだろうによくおばさんなんて言えたね……それほど仲が良いんだらうって思っておく。

そうして僕がおじさんおばさん問題にもんもんとしているあいだにもコントは続いていたらしい。

「……………み・さ・き・ちゃん？ さつきから十二失礼なことばつか言ってるのかな？」

「いだだだ暴力は反対ですよ！ だいたいいつもおんなじこと隣で聞かされ続けてきた私の身にもなってくださいにや！ 尊敬してい『た』はずの先輩が！」

「ああん!？」

さつきまでとはまるでちがう声がおんなじ岩本さんのはずの人の口から出ている。

……やっぱり女の子も女の人も怖い。

「譲りませんにや！ だから暴力反対！ あ、ちよ、痛っ！ ……いい加減耳タコなんですにやこのやりとり！ しかも中学生の子に同じ年くらいに見られたからって言っ年甲斐もなくはしゃいで！ 今は私と同じくらいの肉体年齢で同じ年ってことにしてもらっているんですから年増って言ってもいいじゃないですかにや！ どーせネットじゃとつくにそういう扱いですし！ 持ちネタなんだから良いですにや！ センパイならセンパイらしく大人な対応を！」

「たしかにその通りね。 けど、それとこれとは別」

「にゃ————つ!？」

こめかみを器用にぐりぐりと……あれ痛そう……したりしながら、いつもやっているらしいコントを続けているふたり。

ねこみみとしっぽが荒ぶっている。

けど本当に慣れているんだなあ、ふたりでこうして説明するっていうの。

だってボケとツツコミが違和感なく、まるで今「本気で怒って怒られている」ってしか感じないくらいだし。

すごいなあ。

さっきの怒った声も多分演技で、本当に怒るとこんなもんじゃないんだろうなあ。

……それにしても、「若返り」。

それがはたして島子さんみたいなねこみ病なのかはともかく……いや、本人たちがそういうニュアンスで言っている以上そうなんだろうけど……でも、話を聞く限り……10歳。

「くらい」っていうのはきつと正確にはわからないからなんだろう。

だつて肉体年齢つてちよつとした生活習慣でだいぶ変わるもんだし。

実際、僕が引きこもっていたときに買った体重計とかでの肉体年齢は30を超えていたのに、それが運動とかをし始めて健康になつてきたときにふと測つてみたら10代にまでなつていて当てにならないなあつて思ったし。

つまりは機械での肉体年齢つていうのはあんまり当てにならなくつて、それよりもお肌の調子とか生活とか運動習慣とかストレスとか。

あとはこれも個人差だけど、成長期の終わりのタイミングな20代中盤とか……本人の意識とで判別するしかないわけで。

いや、病院とかで厳密に調べたらある程度はわかるのかな。

でも同い年つてことにしてるつてことはやっぱり曖昧なんだろう。

「……………その」

でも聞いておかないと。

僕にも関係あるはずだもんな、若返りつて。



「だーかーらーいい加減子どもっぼい怒り方は、あ、ひかりさんひかりさんっ！ 響さん！ 響さんがお話ししていますにやっ」

「……しようがない、今はこれで許す。 ごめんねー響くん、いつもの調子で、つい」  
 やっぱりいつもしていたらしい。

染みついちやつているんだろな、きつと。

「いえ。 それより、その、若返ったというのはどうして……いえ、どうやって分かったんでしょうか。 あと、その若返るといいうのは先ほどのケモノ化……耳やしっぽが生えるのとはずいぶんとちがいますし、それでもねこみみ病なんですか？」

「あら響くん、急に興味津々。 ……若返りの逆とかで大きくなりたかったりするのかな？」

「いえ別に」

子供が大人になる……確かに子供は大人に憧れるけどそのパターンがあるとしたら地獄。

いや、でも……若返るならその逆って。

「あ、先に言いますとそれはないですよ。 少なくともまだ確認されてないですね」

「そうですか」

「ですねえ。 で、若返りですけど……こほん。 響くんにはまだまだ先の話ですけど、

背が伸びたり、あとは響くんの体は女子だし……だよな？ ……うん、で、そろそろ胸が大きくなってきたりもするんだろうけど、その時期、成長期つて遅くても大学生のうち……20くらいですね、そのくらいで終わるんです」

……胸。

僕にそのおっぱいとやらがきちんと育ってくるのか、それ以前に成長できるのかはともかく。

ついでに言えば僕はもう少しあとまで背とか伸びていた気がするから、成長期つてのは個人差がありそう。

「もちろん個人差はありますよ？ 身長とか中学生くらいで止まっちゃう子もいれば30くらいまで伸びていた人とかもいましたねえ」

「同世代の方でしたにや？」

「いちいち言わないの、もうっ。とにかくそうして成長期が終わって成長しきって、成長が止まって……つまりは老化が始まって。しばらく……数年はなにも起きないもんですから『私の体はこのままずっと若いんだ』って思っちゃうの」

わかる。

すつごくわかる。

だって僕も、前の僕だったころ。

……その、老化というやつを実感し始めていたんだし。

だからこそ前の僕から今の僕になったあの朝に、見た目のことはもちろんだけどそれ以上に体の不快感がなくなっていたことに……気がついてびっくりしたわけで。

まあそれ以上にベッドから下ろした脚で、ズボンで、男物のパンツで分かったんだけど。

「……ごめんなさいですにやあ……だからそろそろ許してえ……」

「けど、だいたい25くらいだったかなあ」

「やっぱりオバサンじゃないですかにや」とかまた余計なことを言っつて折檻された様子。

……こめかみのぐりぐりつてそんなに痛かったつけ？

けど、ねこみみもしつぽもしおれているんだから相当なダメージはあったみたい。

「……うう、痛かったですにや……」

頭を抱えて涙ぐんでいる島子さんと、それとは対照的にどこか黄昏れた感じになつて  
いる岩本さん。

「私のときは25くらいかな。そのくらいからだんだん体がだるいつて感じるときが増えてきたり、あとはお肌もちよつと寝不足なんかするとすぐに荒れてきたりして……」

『あ、私もとうとう老化する歳になつちやつたんだ……』つて自覚……してしまつたんですよ」

なんだかわかる気がする。

ある時期を境に寝起きのだるさっていうのを感じるようになったような。

あとお酒を思いつ切り呑めなくなったりとか。

「わかりやすいたとえで言うなら、そうですね。……お昼寝、学校の机とかでしたことある？ そう、ならそうしてちよつとうとうとして起きるとき、お肌に腕とか服とか、あるいはノートとかの形に跡が残るでしょう？ けど、その跡……ほっぺたとかについたそれ、響くんの歳なら気がつかないうちにすつと消えるけど、そうならなくなつてなかなか消えなくなつたりするようになるのよ」

そうだっけ？

「そうなんですか？」

「そうなの。寝起きの顔のむくみなんかもなかなか取れなくなるの。だから朝は寝坊なんかできなくなつて、早く起きておいてからお化粧しないといけないのよ……おとなの女性って」

僕はそういうの特には気にならなかつたけどなあ。

……まあ滅多に外出もしない、誰とも会わない、家の中にいたつて鏡を見るのは朝とおふろくらいだったし、なにより顔なんかぜんぜん気にしていなかつたつていうせいで、ただそうなつていたのに気がつかなくなつただけかもしれないけど。

あと、顔にそこまで気を遣わなくてもいい男だった……からっていうのもあったか。

「……あとはね、徹夜明けがとでもつらくなって……いえ、そもそも徹夜そのものが、どんなに楽しいことをしていても体の限界って感じで厳しくなってきたり。ほかにもあつちこつちの痛みとか、どこも悪くないはずなのに出てきたりしてねえ……そうなる前までは……たつたの、1年前の24のときとかにはこれっぽっちもなかった感覚が、体の衰えというものが現れて来ちゃうのがそのくらいなのよ」

「老化ってイヤですよ」

「みさきちゃんも、どんだけ始まるのが遅くたって10年後にはそうなっているわよ？」

イヤでも、どれだけ抵抗しても。だって人間なんだもの」

「いやですよああ……」

「健康診断とかも、ひととおり、それも毎年。30超えたらまちがいなく受けておかな

いって言うしね？」

「もう止めましょうにやあ、年、取るのこわくなってきましたにやあ……」

「みさきちゃんならまだまだ先のことじゃない。お酒飲めるようになって慣れてきて

から焦ればいいの」

「どう考えてもそれじゃ遅いですにや」

「むむ」

今まで大丈夫だったお酒の飲み方とか飲む量とか、そういうのがある時期……覚えていないけど、でもここ1、2年で急につらくなって、意地になって飲むとダウンしやすくなったり。

二日酔いつていうの、今まではしたことすらなかったのに初めて経験したり。

……なるほど、これが老化だったのか。

てつきり引きこもりのときに体が弱ったせいだつて思っていたけど、もしかしたら老化、僕にはもつと早く来ていたのかも。

考えたくはないけどそう考えてみると引きこもりで自律神経がおかしくなっていたつていうのじゃないかもつていう体の不調も、いくつか思い当たるし。

たとえば一時的に汗とかがひどいことになって、けど収まっても前みたいには戻らなくつて。

たとえば飲んだ翌日の胃もたれとか、おなかの痛みとか。

老化なんて30過ぎてからの話だろうつて思っていたんだけど……もしかして意外と早い？

もしそうなら今の僕にそういう感覚が皆無つていうのとか説明がついちやうし。

幼女だからつてわけじゃなくて、ただ単純に成長期だからつてこと？

……知りたくなかつたかも。

なんだか前の僕に戻りたくない気持ちがある。ほんのちよつぱり芽生えてきちゃったし。

いや、戻らないわけにはいかないんだけども。

「……あとは、そうですね。女の子的には、いえ、油断した男の人もあつというまにそうなるので、これはみさきちゃんも覚えて置いたほうがいいと思うけど。食べる量です」

「にゃ？」

「ご飯の量。特に夜。それまで以上に気をつけておかないと、ほんとうに1ヶ月とかそのくらいでおなか周りのお肉が、ウエストが、ズボンを履いたら自分でもわかるし、他の人からでもなんとなくわかっちゃうようになること。あとは地味にふとももとかね？」

「おつそろしいですよ……」

太りやすいっていうのは……なかった、かな？

というよりは僕は元から少食だったし。

甘い物好きで、しかも外食がどうしても多くなつちゃうお仕事柄のせいっていうの、あとは女性っていうのが大きい気がするんだけど。

「でつ、でもっ！ 私はこうして猫の体になっているわけだし、きっと大丈夫」

「ほんとうに？ ネット探せばデブ猫なんていくらでもいるわよ？」

「デブ猫はいやですにや用心しますにや、サボつてたトレーニングもひかりさんにおつきあいますにや」

「それがいいわよ? もつとも、これはむしろそのくらいになってきてからが大切な習慣なんだけどね、筋肉の維持つて。……あ、ごめんね響くん、嫌なことばかりで」

「いえ」

「……で、こうしてひとつひとつ挙げてみたら、もういちど、いずれは来るだろう10年後くらい……いえ、おんなじようにふ、ふ、……老ける、のなら、あと7年くらいがリミットかな? とにかく思い出すだけで私もつらくなってきたからもう止めるけど、とにかく私の元の肉体年齢つていうのはそういうものなんです」

「言われてみれば、ぜんっぜんそうは思つていませんでしたけどにや、ひかりさんの顔とかもシワがいだだだだ!!」

こんどはねこみみがやられている。

「……わかりました? 響くん。たしかに今の私は概算で……おおざっぱに言えばみさきちゃんと同じ年くらいだけど、でも、元は君よりもずつと年上だったつていうこと」

「はっ」  
よくわかった。

岩本さんは、少なくとも前の僕と同世代だつていうことを。



……けど、なるほど。

敏感なんだから、ねこみみ、つまみ上げるだけで痛いんだ。

かわいそうになあ。

じゃなくて……そうか。

若返り。

目の前に座っているこの人もなったんだ。

僕みたいに10歳くらいを……いや、僕は15歳くらいかな……下手すると20歳くらいなんだけど、とにかく若返った。

お医者さんが「そういう現象がある」って認めてる。

……だったら僕のこれも、性別が変わるってことさえクリアすれば……。

## 35話 「ねこみみ病」 6 / 7

ねこみみ病と僕の今。

ケモノ化と若返り……化とは言わなさそうだな……と、幼女になった僕の関係。

すぐそばに、手を伸ばせば……1回口を開けばその答えは返ってきそう。

でもそのときに魔法さんがどんなことをするのかって思うと……まだ怖い。

そうしている僕の前で、ねこみみと人の耳をセットでつまみ上げられて「たしたしつ」とタツプしてようやく解放された猫さんたちは戯れている。

「……しかあし！　しかしですね響くん、ねこみみ病を私が発症したって自覚したのはその経験あつてこそだったんです！」

「……というところ？」

ちよつとももの思いに沈むと直前の文脈が分からなくなるのが僕の悪いクセだ。

むふん、と胸を張りつつあざとい岩本さんが僕を見てくる。

何か良いことあったんだろうか。

「ある日を境に……って言っても私の場合もみさきちゃんみたいに正確には覚えていませんけどね。　私はたいして見た目変わりませんでしたし」

「ほんととすにゃー? だってにじゅうななからじゅう……あ、なんでもないですにゃほんととすにゃ」

「……こほん。とにかくある時期を境にね? ねこみみ病になったと思しき時期をまたいでは体が重いかどこかが痛いかお肌がーとか、そういったイヤな老化での感覚がみんななくなっていたのよ! 多少夜更かししても体は軽いままだしお肌のダメージもたいしたことなくて、お化粧のノリがいい……いえ、それ以前にお化粧をしなくても出歩けちゃったりするほどにはコンディションがいいんです! すつぴんで外に出られるって最高って知ったのよ……!」

「私、学校はすつぴんですにゃ?」

「現役女子高生は黙ってなさい」

「にゃー」

僕は男で良かった……お化粧って言うめんどくさいのがないってだけでヒゲ剃りの手間を遙かに上回っているもん。

それに加えて髪の毛のお手入れとかいろいろあるし……本当女の子ってめんどくさよね。

「髪の毛のお手入れも……痛みにくくなつたのですつごく楽になりましたし。それになにより高校生ファッションしても『うわキツ』とか言われないので本当に人生が明る

くつて……！」

うん、気持ちは分かる。

僕だつてただ高校生くらいに若返つただけならきつと喜ぶだけだつただろうし。

幼女にさええならなければ。

いや、せめて高校生くらいに年齢だつたら女の子でも……それだといろいろまずいからやっぱいいや。

「私にはまだよくわかりませんが、とにかく私のついでに調べてみたらお肌とかだけじゃなくて内臓とか骨とか……科学的に調べてもらったら体のすべてが明らかに高校生くらいのものでした、でしたにや？」

「そうなのよ。 もともと私みたいに若返つたつていう報告も前から少しずつ上がつていたみたいだからスムーズに調べて貰えたし！」

——若返つたつていう報告。

つまり……これもまた一般的なものになつていて。

「それに私の場合は……ほら、デビューが中学生だったからその頃の映像とかがぼつちり残つているわけで、つまりは骨格とかまでかなり細かく記録されていたつてこともあつてね？」

「お得でしたにや？」

「まあね……実際若返った直後から『別人じゃない?』とか『替え玉だ』とか。『妹だ』とかはまだ良くて、ひどいところじゃ『私の子供だ!』とかネットで言われはじめていたしで必要だったっていうのもあるの。噂だけで大変なことになる業界だしねえ……私が若作りしすぎだっていうのはまだよかったんだけど、いや、よくはなかったんだけど!!」

「まーお子さんは言い過ぎですよ、だって忙しすぎるのとネームバリューすぎてお相手すみませんお口チャックしますよ」

——ねこみみ病。

生えたりするだけじゃなくって若返ることもあるよく分からない病気……でもないらしい何か。

そういう人が、少なくともテレビで賑やかになるほどには増えていて。

「それまではいろんな学説で別れていて、こういうのはみんな別の名前がつけられるところだったんだけど……:というか実際にそうでしたしね、初期の初期は。でも、あんまりにも同時期にこうも『人の姿形が変わる』っていう症例が全世界でまとめて出てきちゃったものですから、学者さんたちもついに降参したらいいんです」

「あのころの論戦はなぜか私たちまで同席させられたのでよく覚えていますけど、ほんとうにわけわかんないものでしたにや。科学者とか政治家さんたちの派閥が大変

みたいでしたにや」

「まー、お偉いさんたちにも譲れない部分っていうのがあるんでしよう、きつと。で、ひととおりケンカした後で『もしかしたらねこみみ病は元の体に追加でなにかが生えたりくついたりするだけじゃなくって、若返ったり、あるいは体のどこかのパーツだったり全身だったり。そういうように体になんらかの影響や変化を及ぼす現代の科学では説明がつかないモノ、その一部なんじゃないか』っていう大雑把な区切りになつたみたいね」

「……………」

「一年くらい前でしたかによあ、ひかりさんの若返りの件が宙ぶらりんになったまますったもんだした末によやく『もうめんどくさいしキリがないから、とりあえずでこいういう変化が起きたりしたらもうねこみみ病でいいよね』って言う方向になつたって聞かされましたにや。それ以前にもう世間で有名になり過ぎちやつて今さら変えてもたぶん定着しないだろうっていうことで」

「つまりは現時点ではまだあやふやなものですね。きつとお偉いさんたちの意見も変わらずにばらばらでしようし普通の人を持つているイメージもまた、きつとばらばらなはずです」

「説明がしやすい。ぱつとわかる。とつても大切なことですよあ。まーあと何

年かすればみんな落ち着いてきてはつきりしますにや。ほら、新種の病気とかでも2、3年経てば……」

——ねこみみ病は、カラダが変わるもの。

その総称。

——成人男性から幼女は？

魔法さんのあれは？

「目の形とか色、まぶたとかまつげとかそういううちよつとしたところが変わっていたり、女の子だったらバストサイズがちよびつと増えたり減っていたり、『気のせいかな』っていうレベルの小さな変化から、私たちみたいに明らかに変わっちゃうもの。そういう本人では気がつかない……もつとも私の場合も初めはなんでか気がつかなかったんですけどにや、目立たない変化でさえもねこみみ病なケースである可能性もあるらしいのですにや」

ほんのちよつとした変化から、自分どころか他人から見てもはつきりとわかる変化まで。

……島子さんみたいに自分では気がつかないくらいから、その時期に感覚でなんとなくわかつていた岩本さんみたいなパターンまである。

そんな幅の広すぎる、けれど普通ではありえない……ありえなかった、魔法さんがな

にかをしたんじゃない限りは起き得ないそんな変化までが世間では許容されている。

僕が情報に疎かっただけで、世間はとつくにそれを受け入れていて。

まるでウラシマだ。

3ヶ月だもんな。

——「魔法」、超常現象、未知の病気、ありえないもの、あるいは運命のいたずら。

魔法さん。

ねこみみ病。

もし。

もしそうだとしたら僕は。

やつぱりこの子たちに「僕もそうかも」って言えば——すぐに楽になれる。

でもそうじゃなくて——洋画の怖いシーンみたいに酷い目に遭うかもしれない。

「あ、そう言えば私のこの耳としっぽだつてずーっと生えているわけじゃないんです  
にゃ」

「……………そうなんですか？」

意識が一気に引き戻されて島子さんのねこみみとしっぽにぜんぶの意識が飛んでい  
く。

……………あの柔らかくていい匂いのあれが消えることがある……………つていうこと？



信じたくない、いや、信じられない。

そんなのは人類の損失じゃないか。

「ややっこしいことにそうなんですにやー。ずっと生えていたかと思つたら寝ているあいだに消えてそれから何日かなくなつていて、次に目が覚めたら『あ、また生えてる』つていうこともあるくらいで。まあそう滅多にはないんですけど……私だけじゃなくて『たまーに戻る人も居るらしい』ですにや。お医者さまも学者さまも頭抱えてましたつけ？ そうなるタイミングも完全にランダムですし、なにかがあつたからとかそういうわけでもないですしにやあ……『身体能力まで変わるとただ消えただけではないはず……』とかぶつぶつ言つてましたにや」

「あー、みさきちゃんのもまたレアケースらしいしねー。フツーはいちど生えたらそれつきりらしいよ？」

「ふつーは生えっぱなし。

それなら良いんだ。

「知つてますにや。だからこそこうして担ぎ上げられているわけで……ひかりさんだつて同じですよ？ 10年なんてものすつごく珍しいらしいですし？ おかげで最初のころは満足に外も出歩けませんでしたにやー」

「まあねー、6年ものさんとか8年ものさんがポツポツ出てきてくれたおかげで、やつと

そこまでじゃなくなってきたかんじかな——」

「10年モノ……まるでお酒みたいなの。やはり、おば……いえなんでもにやああ!!」

「いちいち余計よー? みさきちやーん?」

「にやー!!」

「……………」

10年モノのワインとかワインセラーにあつたつけなあ。

そろそろ飲んでもいいかも。

ああいやでも、ここまでため込んだんだからいつそのこともっと熟成させたい気もするな。

……そんなことを考えて決断を先送りにしようとしてしている僕自身をはつきり自覚している。

うん、分かっているんだ。

ただ勇気が無いだけ。

「というわけでー、だいたい分かったかな? ねこみみ病つていうのはまだまだよくわかっていない、病気がどうかすらもわかっていない『なにか』。でもたくさんの人が、それはもうバリエーション豊富なもんだから現実存在する未知だけど既知になりつつあるなにかなの。……って感じでいつも教えているんだけど……どう?」

「よく分かりました」

「あ、ちなみに生えていないときはこんな感じですよ？」って言ってしつぽを僕から見えないところに隠して、耳も自分でぺたりと髪の毛の上のつけて両手で隠すようにしている島子さん。

……たしかに以前ちらっとだけどちよつと昔の島子さんの写真を載せているページとかで見たこの子の姿になっている。

トレードマークが黒髪に緑メガネだけっていう、わりとおとなしめな見た目の子に。

「……なるほど」

「ごめんねー、これくらい知っててようやくさっきの話について行ける感じだったもんね。気がつかなくてごめんなさい！ 本当ならもう1回話したいけど……そろそろよねえ」

「いえ、先ほど言わなかった僕が悪いのでお気になさらないでください」

ねこみみ病。

見た目に変化。

——だから魔法さんは僕をさつきみたいに変な感じにして「隔離」して。けど今はなぜか隔離されていなくて。

あいかわらずにさつぱりな魔法さん——だけど。

「……つまりその、ねこみみ病は」

やっぱり踏み出したい。

例えその先が……でも。

「形態、あるいは種類を問わずになんらかの変化が……肉体上のなんらかの変化。それが目に見えるか気がつけるかは別としてある日突然に現れるもの……」

「……響くんって難しい本とか読んでるよね？ 言い回しとか」

「私よりずっと読んでそうですにゃ」

確認するために……ついになんたなく髪の毛が偏っている感じがしたから顔を反対側に傾けつつ「あ、これ、わからないときのジエスチャーじゃないかな？」って思いながら言ってみる。

あ、髪の毛が正しい具合に戻った。

なんだかしくりくる。

よし。

「やだ、響くん自然にかわいい」

「男の子にかわいいはNGにゃ？」

やっぱり量が多いと風とか動作とかちよつとした加減で髪の毛、偏るよなあ。

重いし前髪が目隠してくるからすぐにわかるんだけど、とにかくいちいちめんどく

さい。

……前にかがりとりさりんさんにつけられちゃったときみたいにならへアピンとかしてみようかな……そのくらいなら魔法さんも怒りはしないだろうし。

いくらなんでもさすがにならへアピンひとつでぶち切れて吹っ飛ばして壊したりなんかしたら逆に笑っちゃおうし。

そんなどうでも良いこと考えてひと呼吸。

……大丈夫だ、きつと。

「……でもちよつと、この子ホントに中学生？ 今どきの中学生ってこんなに知的なの？ ナントカ世代って言うんだよね？ なんだか私、もつと上な気がしてきたんだけど」

「だーからこそこそ話すのは悪いクセですよ。 私みたいなケモノ化している人には筒抜けなんですにや？ それに聴覚が敏感な人だって。 響さんもドアの外の音とかちらちら気になっていたみたいですし、耳、とてもいいほうなんじゃないですか？

ねえ？」

ひそひそ話始めたポニーさんに……そう言えば耳が4つならそりやあ聞こえるだろうなあって思いつつ「今の僕の聴力とか視力もおんなじ理由なのかな」って。

「え……ウソ」

「……あ、はい、聞こえはしますけど気にしていません」

僕は嘘はつきたくない。

少なくともこんなことくらいじゃ。

「あ——……………ごめんね……………」

「平気です。年齢はいつも間違えられますから」

相手のためのウソなら許容範囲。

嘘じゃない範囲のウソなら僕自身が耐えられる。

「学校……せんぱいでも小学校なら通ってましたし、クラスとかにも昔からいまして  
にや？ 他の子よりも大人びていて本とかたくさん読んでいて頭も良くて、まるで学  
年がいくつか上みたいな子。お嬢様……じゃないんですにやよね、ならお坊ちやまみ  
たいですし、きっと英才教育と元からの響さんの素質なんですにや」  
「そっか」

……魔法さんがわざわざ僕に知らせまいとしてきた、ねこみみ病。

起きたら見た目が変わっている……つまりは寝ているあいだに変わっている、ねこみ  
み病。

——寝ているあいだといえ、あの夢、あの3ヶ月……にもなんらかの関係があるよ  
うにも感じられる、ねこみみ病。

もう9ヶ月も前になった、この、銀髪幼女への変身……魔法さん。

——このタイミングを逃したら聞けるのは最後かもしれない。

言おう。

……  
それでどうなるかは分からないけど……この子たちが無事なんだ、きっと僕だって

## 35話 「ねこみみ病」 7 / 7

ねこみみ病。

なんだかバリエーション豊かみたいだし、人によつてばらばらみたいだしなよく分からないもの。

当事者……つて言うか政府から依頼受けて広報してる人たちがそう言うんだからそうなんだろう。

だけど——外見が、姿形が、見た目が、ある日突然に——変わる。

起きてみたら別の何かになっている。

それだけは共通しているらしいもの。

やつぱりそれなら——成人男性から少女、幼女へと変わった、僕を襲つたこの変化。

ねこみみ病と、魔法さん。

寝たら戻つて、何日かしたらまた幼女になる……みたいにはならないけど、岩本さんみたいに……断言はしていないけどあんなに喜んでいたり、きつと永続的に変わり続けるだろう変化。



若くなる、見た目が変わる。

それがセットで起きて、性別まで変わった例があればクリアなんだ。

性別が変われば顔だって相当変わるだろう。

……………性別。

男から女へ。

そうだ、性別だ。

これさえ合っていれば、僕もこのふたりに仲間なんだって言える。

ひとりぼっちじゃ、もう、なくなる。

ひとりで悩まないで済む。

みんなに説明しやすい概念のそれってことになれば大手を振って説明できる。

——だから、今まで嘘ついてごまかしていたんだって言いやすくなる。

嘘は謝らなきゃならないけど、でもこういう事情があつたんだよって。

……………すみません」

「はい？」

「なんですにや？ あ、そろそろですか？」

「いえ、連絡はまだで——ひとつだけ聞きたいことがあつて」

心臓がばくばくとうるさい。

手のひらから、背中から、じつとりと汗が出ている。

けど、今こそがタイミングの良い「鉄則」のときなんだ。

「……興味本位。そう、なんとなくて思いついたんですけど、それって、その」  
ちやんと予防線は張っておく。

「……最近読んだマンガであつたんですけど」

僕がそうだって分かつてまずいときのために。

魔法さんにも「たとえだから」って牽制しておいて。

「——性別が変わったりする変化。男の人から女の人へ。あるいは、女の人から男の人へ。それとか、顔が親戚の誰にも似ていなくなったり……そういたりするの、ねこみみ病の症状のうちにあつたり……するんでしょうか」

僕はとうとうそれを口にした。

……けど、すぐに返つて来たのは明るい笑い声。

「あははっ、響くーん、そこまではありませんよー」

「笑つちやダメですよ。響さんマジメですよ」

「うん、ごめんごめん。でも、てつきり……だつて」

目じりを拭う彼女が「本当にごめんね」って言う。

「響くんがそんなに真剣な感じで聞いてくるから、てつきり身内とかのお知り合いにも

いるのかって思ったの。ほら、お家の方針でテレビとかネット見ないんでしょ？ ならご家族の方も知らないのかなあって」

「あー、確かに。今でも知らない人いますもんじゃあ」

「でも響くんがマジメな顔で……ううん、バカにしているんじゃないかと、そういう可能性も確かにあるよねって思ったの。ふふ、ごめんなさい？ でもまあ昔からそういうのいっぱいありますからねえ。呪いとか『魔法』とか」

ぎゅつとお腹に力を込める————けど、魔法さんは無反応。

……これもセーフ？

それとも今はここに居ないだけ？

「あー、この前やったソシャゲのキャラにもいましたにや？ なんてしたっけ、ていーえす、でしたかにや？ なんか定期的に人気なキャラとか出てきますにや。漫画とかで昔から根強い人気だつて聞きますにやー？」

性別が変わることについて直接ではないにせよ間接に聞いてみても、口に出しても……それに対してなんにもアクションが無い。

「で、ですね？ この病気……つていうよりは症候群とか変化とか変異とか呼び方も学者さんそれぞれなのでどう表現してもいいんでしょうけど、とにかくこのねこみみ病には『それはありえませんが』ねえ」

「……ありえないんですか？」

「ええ、ぜったいに」

ばつさり切り捨てられた。

だつて見た目が変わるっていうことは……性別が変わったとしてもおかしくはないはずなのに。

なんでそんなにはつきりと断言できるんだろう？

「見た目が変わるとは言いましたけど、それは家族とか親しい人が見ても見た目はすこーし変わってはいるけど、でも昨日までの本人だつてわかるレベルの話です」

「そうですよ。なので、みみとかしっぽが生えたりした私みたいな場合には、それ以外の変化は起きません。それにパーツが変わるといつてもせいぜいが雰囲気が変わったとか色素……お肌とかお目々とか髪の毛の色がほんの少し変わる程度ですよ。最近増えてきたような顔認証とかそういうもので引つかかるようになるレベルの変化は、つまりは骨格までが変わるっていうことはほんつとうにレアケースなんですよ」

……確かに少し変わる程度だつて、さつきも言っていた。

「つまりは周りの人が……その人のなにかが変わったつて気がついたとしても、絶対に元の見た目から連想できるとか、その人だつてはつきりとわかる。その程度ですね」

「まー見た目が別人になっちゃったら……子供ならまだしも大人でなっちゃって。顔とか性別が変わったら別人になりますにや？ そしたら大問題ですにや。今の程度じゃ済みませんにや」

「若返りだって私みたいな極端なのはすごく珍しい部類だしねえ」  
確かにそうだ。

僕だってこうなつたからすごく困っているだけで、もしちよつと変わった程度なら「まあいつか」で済ませちゃつただろう。

「でも、それなら……とても珍しいという範疇なら……今まで例はないんですか？」  
「おろ、なんだか熱心ですにや？」

「……気になっているので」  
ちよつと「ん？」って感じになつてるけど気がつかないフリをする。

「まー確かに。けど、あとひとつ性別が変わると大問題があつて、このせいでたぶん無  
いだろうって考えられてますにや。それはなんだかわかりますかにや？」

「……………」

分からない……けど、見た目が変わるのなら、僕みたいに性別が変わる人だつて。

「あー、みさきちゃんみさきちゃん。いくら頭良くても中学生だとまだやってないかも……いや、どうなんだろう。昔とずいぶん違うだろうし……ほら、生物学の授業。」

内容自体は知ってるかもしれないけど、もう時間もないしさっさと教えてあげて？」

「あ、意地悪じゃなかったんですよ、ごめんなさいですよ響さん。それはと言いますとにや、男の子と女の子は……肉体の、あくまで一般的な話ですよ？ 響さんみたいな場合を含めても肉体の性別の話ですよ？ ……中学生くらいまでには、顔の感じも体の感じもだいたい変わってきますにや。 第二次性徴っていうもので、男の子と女の子は骨格から変化してくるんですよ。 これは心の性別に関係なく……響さんにとつては辛いかもしれませんが、生物としてなつてしまいますにや」

「……………」

「……その変化は男の子と女の子をわけるもので、つまりはDNAっていうものが違っているんですよ。 正確には染色体というものなんですけど今はいいですよ、多分ちよつと調べたら響さんならすぐ分かりますにや。 とにかくそれで……私たちがみたいにねこみみ病で見た目がどんなに変わっても、DNA、体の設計図、これは元の体とおんなじなのですよ。 ですので性別が変わるなんて極端なのはありえないのですにや」

有り得ない。

染色体。

……そうだよな、僕って人種すら……。

「そんな耳とかが生えていても同じっていうのは不思議よねー」

「不思議ですけどそうなっているらしいんですよ。だからこそこんなものが生えたりするのにDNA、遺伝子がまったく変わっていないのにもお医者さまたちがオテアゲなのですよ。……私たちがみたいになってもDNAが変わらないっていうことは染色体も……男の子と女の子を完全に違う見た目にする、このミクロレベルのものまでも『変わっていない』んですよ。じゃあにやんで私たちはこうなってるのかとかはぜんぜん分からないですよにえー」

「性別が変わったら細胞の元になる設計図に書かれているっていう男の子の成分と女の子の成分。その情報までが変わるっていうことで、つまりは『別人になる』っていうこと。だからそれはありえない、だったわけ。ま、私だっておんなじ遺伝子でDNAだけど……実はお化粧する前の顔つきとか全然変わってびっくりしたけど、でも変わったものねえ。この程度は誤差……ってことなのかしらね？」

「……………そう、なんですか」

せつかく見つけたって思ったのにな。

仲間に入れる、そう思ったのにな。

「……………あ、響さんのスマホ。ひかりさんひかりさんお会計頼んでもいいですか？」

「はいはい。 済みませーん」

岩本さんが席を立つ。

「長い説明になっちゃってごめんなさいですよ？」

「……いえ。僕の方こそ変な思いつきで」

「良いんですよ、むしろいろんな質問に応えたと後で楽なんですにや！」

……前の僕が今の僕になったのも魔法さんのおかしなあれやこれやも、もしかしたらねこみ病とかいう一般的に周知されているっていう……僕ひとりだけじゃなくって、もつとたくさんの人がなっているっていうその現象。

そのひとつかもしれないって思った矢先に「それだけはない」って断言された。

そのことがよほど響いたのか……多分ようやく仲間ができて相談もできて、それでもうひとつの嘘もきちんと言えるようになるんだって思ったかっただらうな。

若返りについては岩本さんも喜ぶはずだったんだ。

自分よりももつと長い時間を巻き戻ったっていう僕っていう例が出てきて、注目が少しは逸れて。

代わりに僕が……それはもう注目されはするだろうけど、でも今みたいになんにも分からないままでただただ自分で考えて、ときどき魔法さんに怒られるくらいしかできない今とは全然違うんだし。

でも、そうじゃなかった。



振り出しには戻らなかつたけど……それどころか今日だけでとんでもない情報が入ったけど。

でも、ぬか喜び。

……そうだよな、ただ期待しただけなんだもんな。

そうしてぼーっとしてる僕に気づくこともなく岩本さんはドアを開けて出て行ってしまい、空いたドアからは外の喧噪とか空気とか匂いが入ってきて一気に現実……僕たちは駅ビルの上の階で話していたんだっていうことを嫌というほどに知らされて。

鳴っていたスマホからは駐車場に着くつて言う電話。

それを、いつもみたいにオートに任せる。

そうしてちようど窓の外、真下には、僕がこれから……歩けないだろうからまたタクシーで帰るだろう、真つ白になった、僕の家があるはずの方向の町並みが広がっていて。

そしてふわふわと、しんしんと降り続けている雪。

「……んーっ、結構話しましたにゃー。つまり響さん、ねこみみ病っていうのはあくま

で自分は自分のままで、中身はほとんど変わらなくなつて。でも私たちがみたいに見た目

だけがちよこつと変わつたりするだけなんですにゃー」

「……はーい」

「でも響さんのその考えもマジメに議論されてる話ですから荒唐無稽でもないんです

にや。こんだけいろんな種類があるんだったら性別だつて変わるんじゃないかって言っている学者さんもあるそうですけど……今のところはあり得ないでしょつて域を出ていないわけですよ」

「……そうですか」

「でも、今のところはですからにや？　この先でそういう人が出てきたんだつたら話は変わるかもしれませんけど……でも大変なことになりそうだから公表されるかどうか、にや」

……そうだよな。

男が幼女になる事件が多発して、魔法さんみたいなハサミとか冬眠とか認識がおかしくなるとかになったら……世の中大騒ぎなっているはずだもんなあ。

「あ、検索してみるとやつたらとねこみみの女の子の画像が……ウイキとかお役所さんとか病院のホームページとかにまで載っていますけどにや？　あれはねこみみ病の擬人化っていうもので、つまりはいつものマンガカルチャーで生まれた子なのですにや。

たぶんSNSとか……やってますかにや？　あ、いえ、なんとなく、お家が厳しそーなので特に深い意味はないのですにや。それで話題を追っていけばおんなじような子がいっぱい出てくるはずですよにや」

そう言いながら島子さんも、席を……さりげなかったけど、たしかにしつぽも使つて

席を立ち。

しつぽを意のままに、新しい腕のように扱っているのをしつかりと見定めて。

先つぽの方だけちよつとぐんにやりしながらも力強くイスのクッションを押し、立ち上がったら少しだけ後ろに押すっていうとつても便利そうなことをしていて。

「といつてもこの子のおかげでかわいいとかぱつと見てわかりやすいとかつていう要素が揃つたマスコットキャラクターが自然に定着したおかげで、宗教的にねこみみ病が厳しい国でも比較的かんたんに受け入れられたっていうことらしいんですよ。やっぱりかわいいは正義かもですよ？」

## 36話

## 準備

## 1/6

「……………」  
「……………」  
……………戻ってこられたんだ、僕。

あんなにいろんなことあったのに、こうして無事で。

そう………あつたかいお湯に浸かってしばらくして身に染みてきた感覚。

天井一面に冷えた湯気が水滴となって張り付いてきてびちゃんびちゃんと落ちる音が続くようになった。

どれだけ温かい格好をして暖房をしても、僕の意識も………たぶん体も、まだ夏のままの気分。

いくら冬だって実感したとしたってそう簡単に切り替えられるものじゃないんだろ  
うな。

体は家の中にならずとあつた………はずだけど、でもそれは「冬眠」っていう魔法さんの不可思議な力の支配下にあつたわけで、つまりは自然じゃなかったわけで。

だから寒いのは慣れきつていなくて、寒さを感じていないつもりでもこうしてお風呂で………夏よりも温度を2度くらい上げて入っているのに、ぼーっとしてくるくらい

には入り続けているのに汗すらかいていない。

……よっぽど冷えていたんだな。

まあ季節が一気に逆転したんだ、むしろ起きてからたつたの1日も経たないうちに慣れる方がおかしいのか。

時差ぼけだって何日もかかるし、季節が変わるたび風邪を引くくらいには体ってそういう変化に弱いからなあ。

あと、大切な皮下脂肪さんたちが軒並みすり減っているのが効いていそうだ。

腕とかふとももとかの……特につけ根あたりの細さがまずいことになっているし。

今の僕になつたばかりのころによく感じていた、折れそうに細いつていうのがもう1回だ。

今見ると……最近は特に意識することがなくなっていたのにぼつと見てそう感じるようになってきているっていうことは、きつと今までは努力の結果として脂肪も筋肉も増えていて、けれどもそれが……まとめて使われちゃったっていうことの証で。

冬眠つてがりがりに痩せるものらしいからしようがないけども。

3ヶ月寝てこの程度ならきつと安いもんなんだろうし。

「ふう……」

それにしても。

ねこみみ病。

ケモノ化。

そして、若返り。

体が変化するっていう、実際にしかとこの手で確認した、あれ。

とうとう……前の僕から今の僕になって、幼女になってから9ヶ月……いや、意識がなかつたぶんを除いたらまだ半年なのかな……それだけ経つてようやく手がかりだ。

そう、思ったんだけどな。

一応は若返る例があるって分かっただけでもすごい収穫ではある。

けど……性別なんて変わらないうって言われちゃったしなあ……。

脱力してお湯の中でぶかぶかしていた手を水面から出して、あのと時のもふもふ感を思い出してにぎにぎしてみる。

柔らかかった。

あつたかかった。

そして、いい匂いだった。

あれは現実だった、はず。

猫もそうだけど……どう見ても、高く見ようとしてもせいぜいが高校生とか大学生な

「元」27歳。

僕には人の年齢、さらに女性のそれはそこまで細かくわからないけど、でも子供と学生と大人のどれかって聞かれたらまず学生だろうって思う見た目。

でも、元の僕と同世代だった子。

ん？

女性って言ってあげた方が……いや、女性は若く見られるほどに良いらしいし、今どきは50代とかでも女子って言うんだし、女の子って呼んでおいてあげよう。

「……………」

ちやぶんと両手を沈める。

けどちっちゃな今の僕の手は、腕は、浮力に負けてあつという間にぷかりとお湯から覗いてくる。

入ってからもなんにもせずなんにも考えず、ただぼーつと見続けていた水面には今の僕の……小さい足の指から細くて白くてつるつるな脚、2重の意味で何も生えていないすつきりしすぎてしまっているおまたが映る。

肉がなくなりすぎて、たぶんいつもトイレのときなんとなく見つめているデルタゾーンも広がっちゃっているだろう、そのすき間。

男なら……多分こんな幼女であってもふと目の前にあつたら1回は見ちゃうだろう場所。

それが僕の体の一部になっている。

日常生活で見飽きるほどに見ていて、触っていて……トイレとお風呂で身近になりすぎたもの。

毎回のトイレが不便にはなったけど、無いなら無いですつきりして楽とも感じる。人つて順応性が高いんだなあって思う。

二十何年間もぶら下げてたものが無くなってもすぐに平気になるんだもん。

ズボンがずり落ちかかることがよくあるくらいには細い腰、むしろスカートの方がそういうのがないぶんまだマシな腰、けどなかなか腹筋がつかないせいかぼっちゃりしているおなか。

調べてみたらこういうのはイカ腹……なんでイカなんだろう……って言うらしい。

つまりは幼児体型で筋肉がなさ過ぎるせいでこうなっているんだとか。

腹筋、がんばってしてたから少しづつ付いていたのになあ……。

ここまですべてまとめてだとなんだかやる気まで取られちゃった感じがする。

その上に乗っかっている、いや、へっこんでいる小さいおへそ、何も無いというよりはあばらで色気もない胸未満の胸と、その上にぶかぶか浮かんでいるたらいの上のわっさりとした銀色の髪の毛の束。

前の僕に生えているはずのものがみんななくなつてすつきりしすぎちゃって、けど代



わりに短くすることもできない、僕を嫌でも女だと……いや、幼女だと印象づける長くて多い髪の毛。

「…………ふう」

ひとしきりねこみもと尻尾を堪能するついでに……じゃなくてねこみみ病についていろいろ知ったあのあと。

レストランから出たあと、まずは事情を聞いたビルの警備員さんや僕が少し先を歩いて、そのあとから2人について来てもらうっていう慎重さでエレベーターを使って地下へ。

もうとつくに諦められていたのか、結局誰ひとりとして追っ手さんたちとは遭遇しなかったんだけど……そうして久しぶりに萩村さんに会って、車に猫さんと栗色ポニーさんを押し込めてさよなら。

ちなみに車はあのときの、黒塗りで威圧感があったあれ。

「良ければ送るよ？」って言われたけど家は知られたくないから「いいです」って言うておいた。

……そしてさよならしてからタクシー乗り場まで行ったら行列で、寒い中立って待つあいだ「やっぱどうせなら近くまででもいいから僕も送ってもらえばよかったかな……」って思いながら帰って来て。

で、ひとりになったことだしってお風呂を温め直しながらねこみみ病について調べてみた。

ねこみみ病。

病つてつきはするけど、聞いていたとおり病気ではないってどこでも書いてある。

まあ治療とかしようもないし、する必要も……少なくとも普通の人はないから。

それに医学的な根拠……誰がいつなるのかとかどんな風になるのかも全然分からなくって、眠っているあいだにいきなり変わるってことだけしか分かってない。

そういうものらしいからその原因も、変化しているあいだのメタモルフオーゼの瞬間もさっぱり。

そういうものらしい。

あの子たちが言っていたみたいに、どこも細かく「私たちは何々と呼んではいるけど、理解してもらいやすくするためにしようがなく『ねこみみ病』って書いてます」っていう感じがのがほほえましい。

で、ねこみみ病。

今のところは国内で千人ほど、その他はその倍くらいが確認されているらしい。

だけどこれは国内で特段多いっていうわけじゃなくて、偏見が薄いからわりと気軽に「ねこみみ病かもしれないので調べてくださいな」って言い出しやすい環境だからとの

こと。

若返りはともかく特にケモノ化って宗教的にアウトっていう地域が相当あるようにで隠されるのがまだまだあるらしいからこそ突出しているんだとか？

一昔前ならここでだって狐憑きとかで怖がられそうだもん……だって耳と尻尾だもん。

国内だと満遍なくいるけど、国外の地域によつては……ケモノ化したらすぐに手術で切り取っちゃったりして「僕は今までと変わりませんよ」つてしないとイケないらしくつて、統計が0人とか言うところもあるらしい。

それに若返りなんかは気がつかない人もいるだろうしなあ……だって多分3年くらいなら気づけないだろうし、それ以上でも大人なら大して変わらないし。

「けどなあ……」

わきわきと手のひらを動かす。

みみ。

しっぽ。

……どうせなら幼女になるよりアレが生えた方が……いやいや、落ち着こう。

どこにでもいるようなメガネ男子だった僕に動物の耳と尻尾、あるいは羽とかだぞ？ そんなの誰も得しない……いや、SNSで流れている少女漫画っぽいテイストのイラ

ストとかだと「ひよろい男にそういうのが生えちやっでどうしよう……」ってなってるのを女の人が甘やかすみたいなのが人気らしい。

ってことはやっぱりその方が僕の人生、楽になつてた？

ニートでも彼女できたりしてた？

なにひとつ良いところがなくつてもかわいければ良しつてなつてた？

……いや、無いか。

いくらかわいくとも職歴無しのにートなメガネとは誰も付き合いたくないよね。

僕は元の顔にどれだけ良い感じの耳と尻尾を生やしてみる妄想してみただけ……

やっぱダメっぽいつて分かった。

今の顔が整ってるから余計にいろいろと壊滅的なんだ。

1回生活水準が上がると戻すのは大変つて言うのと同じだ。

……ちよつとちがうか。

36話 準備 2/6

お風呂の鏡で見るのに抵抗がなくなった僕自身を眺めていると、ふと気になったことがある。

前髪、ちょっと伸びた……？

いや、全体的に伸びているんだ。

寝ていたとしても時間は経ってるんだもんな。

朝は慌てていたしまだ夢の中かもって思っていたしでそこまでくわしくは見ていなかったけど、とりあえずざっくりと1、2センチくらいは伸びているのがわかる。

だって、前髪の束のひとつが眉毛にかかるくらいだったのがつまむと目の下まで引つ張れるくらいだし。

「ながい」

まあ意識のない寝たきりの人だって髪の毛は伸びるっていうしな。

僕もそういう感じだったんだろう、きつと。

けど爪とかは……大丈夫みたいだな。

なんでかは分からないけども。

で、ねこみみ病のことに戻ってみると。

エレベーターで下りているときにも聞いたんだけど、ねこみみ病って容姿がほんの少しだけ変わるっていうケース……肌とか髪の毛とか目の色とか形とかがちよつとだけ変わったり、ちよつとだけ若返ったりするケースの方がずつと多いらしい。

しかもねこみみ病って、なつてからしばらく自分でも気がつかないっていう島子さんみたいなケースも珍しくないらしく、さらにほんのちよつとの変化だとすれば……とつくにねこみみ病で姿形が変わっているのにまだ誰も気がついていないっていうケースも多いはずで。

別にその程度なら生活に支障はないし……とも思うけど、一応は数を把握しないとイケないってことらしい。

だからこそああやって広報の役を……半ば強制的にらしいけど、とにかく買って出た様子。

ねこみみ病のメジャーかつわかりやすいねこみみしつぽと、けつこう……いや、かなりらしい……僕は知らなかったけど……人気で有名でデビュー当初に近い年まで若返った女の子のペアとして。

……ほ、ほら、僕が芸能人とかに詳しくなつたのって今年になつてからだから……。

あの子たちの反応を見るに大半の人が知っていたらしいアイドルって存在を全く知

らなかつた僕自身の無関心さはともかくとして。

——でも、違つたんだ。

あのときに「もしかして僕の、このちっこい体の原因がわかつたかも……！」つて思つて最後の確認で聞いてみたあれ。

結果的に「僕もそうなんです」つて先に言わなくて正解だつた……男から女になるというもの。

僕がなつているこれ。

これは、ありえないことらしい。

これまでで……ちようど僕が冬眠し始めた辺りからテレビやネットや新聞や雑誌で話題にならない日は少ないつていうほどには話題になつていたらしいねこみみ病だけど、性別が変わつたとか見た目が別人のようになつたつていう報告は——ぜ口。

「ちよつとしかいない」じゃなくつて本当に「誰もいない」そうで。

……だからもし僕がねこみみ病で若返つたんだとしても、そもそも10歳……いや、幼女だつてこうしてお風呂でじっくりと今の僕の体を観察してしまうともう認めるしかないんだけど……15年くらいは若返つてはるはずで。

でも、今までのねこみみ病患者……つて呼んでいいらしい、その患者さんの中でも最

長が岩本さんの10年程度。

まあ若返りについては成長期の子供以外には実害はまったくないし、むしろ利益しかないんだから放っておいてもいいんだろうけど……とにかく僕がねこみみ病で若返ったんだとすると、残りの5年程度の時間。

……これをなんとか無理やり個人差の範囲で、いや、ねこみみ病の症状の差っていう範囲で大目に見るとしたって、やっぱりちがうものなんだ。

見た目が人種ごとで性別ごと完全に別人の……銀髪幼女という生きものになっちゃったことには説明がつかないことになるもん。

DNAとか面影とかまるっと無視しているこの感じは、やっぱりねこみみ病じゃないんだろう。

だから、あの場で早とちりして「僕も」って言わなかったのは正しかった。

ぐつとこらえられた僕は偉かった。

そうは思ってもシヨックは大きいもの。

「……ふう」

頭からじんわりと汗がにじみ出てきた感覚。

僕の体はようやく温まってきたらしい。

こうやって芯からあつたまるのって大事だし、もうちよつとお湯でぬくぬくしていよ



う。

だから僕はねこみみ病っぽかったけど違う謎の状態って分かり直した形だからってさつきまでがっくりときていたけど、よく考えたらそもそもとして……朝、目が覚めたら体が変わっていたって言ってもねこみみ病なら変化はひとつだけだから、僕はそれに該当するはずがない。

仮に今後僕みたいに複数……えっと、年齢と髪の毛の色と肌の色と顔の形と体の形、人種とが1度に変わる、っていうものすごくレアなケースが出てきたとしたって。

遠い親戚……僕にこんな北国出身的な親戚がいるのかどうかはさっぱりだし多分居ないだろうけど、とにかく仮に親戚にいたとして、そのくらい離れた親戚くらいまではDNAが変わったりする人が出てきたとしたって。

そういう都合すぎる展開が起きたとして……魔法さんのことは？

あんな非科学的な物理をどう説明できるんだっていうことになる。

だって特定の動作で物が勝手に動いたり、特定のキーワードで人の認識を……下手をすれば広範囲で僕からのキーワードが聞こえていた人たちまでを巻き込んで認識を変えて改ざんして隠蔽するっていう、どう考えても物理現象としても心理現象としてもありえない、それこそ超常的な魔法みたいなことが起きるっていうの。

これもまた「ゲームとかアニメみたい」って予防線を張って聞いてみた限りでも、

やっぱり笑われただけだし。

帰り際に粘ってみたけど、それでもダメだった。

『仮にそうだったとしたら、それはもう、みんなまとめて魔法にかかったみたいなものじゃない』って。

……そうだよなあ。

だからこそ最初の頃にありえないんだって思ってたんだもんなあ。

ぼちゃぼちゃという天井からの水滴の音とぴちやぴちやという僕の髪の毛とかあご伝いの汗の音で、お風呂場がうるさくなってきた。

汗がしたり落ちるくらいになってきたからじゃぶつとお湯から出て、シャワーを髪の毛に馴染ませながらシャンプーを手に取って。

「……………」

なんで起きたのかも、どうしてあれだけの期間だったのかも……なんで痩せる程度で済んでいたのかわからない冬眠。

魔法さんの仕業。

魔法さん——魔法。

あんなものが起きるんだつたらもつと前から大騒ぎになっていたはずだ。

だっついていきなりの意識不明が月単位だもんな。

たとえ何ヶ月か経ってけろりと目が覚めるって分かっていたって……誰だってびっくりする。

警戒する。

恐れる。

そんな人があちこちで全世界で起きたとしたら……寝ちやったとしたら、きつと未知の病気とかいう扱いになって、ねこみみ病だつてこんな簡単に好意的……なのは国内を始め一部の国でだけど受け入れられるはずがない。

頭皮と髪の毛の毛先にまで無意識に優しくシャンプーを染みこませるようにして洗い終えて時間をかけて流し、続けてリンスを塗りたくる。

これも染みこませるようにした方がいいらしいんだつてかがりから教え込まれて、それをマジメにやってきたんだけど……冬眠のあいだまったく痛んでいなかったんだ。

多分シャンプーで洗って雑に拭いて雑に梳かして雑に乾かすだけでもせいぜいが枝毛ができるだけなんだろう。

けど習慣化しているんだし無理に止める必要もないかなあ。

もうめんどくさいとも感じなくなっているんだし。

めんどくさいくないんだつたらどうでもいいもんな。

3カ月間意識不明だった冬眠のあいだの僕……あの夢は夢だからどうでもいいとし

て、ああやって普通に寝たらそのまま月単位で寝ちやうってというのはどう考えてもまずい。

とてもお泊まり……ああ約束破ったこと謝らなきやなあ……とかできる状態じゃないし、なによりこれがもし昼間にうとうとしたときだったり、起きている状態でもいきなりなるっていう最悪の事態を想定してみたら……今日の昼間みたいになりそうだったら危なっかしくて家から出られない。

ナルコレプシーっていう突然寝ちやう病気の酷いものに近いナニカになっちゃったら。

「前の僕の家」に「今の僕」がいるっていう事案になっちゃうからなるべく見られないようにしたかったのと注目されなくなかったのと、なによりもめんどくさかったからっていうのもあったんだけど……今はそういう僕のわがままとかじゃなくって意図しない冬眠を防ぐためっていう切実な問題のために。

あまり外にいる時間……長くしないほうがいいだろうな。

遠出は避けるべきなんだ。

少なくともすぐ眠くなってもどうにかして戻って来られる距離止まり。

今までだつてたまたまそうならなかつただけかもしれないし、あるいは魔法さんが冬眠させたのはなんらかのなにかを蓄積した結果かも知れないんだし——路上で昏睡と

かしたら大騒ぎだもん。

原因が完全に突き止められていないのが怖い。

仕組みが分からないのが怖い。

僕が幽霊とかが怖いのもって怖い見た目なのはもちろん、因果関係や理屈がないから怖いんだ。

「……………ん」

いつのまにかトリートメントまで行っていて、馴染ませているあいだに体を両手で塗りたくるように……………だっってごしごしするとすぐに荒れるから……………洗っていたら自然と、全くの無意識で。

僕の指が軽く、僕の中を——おまたに空いてしまった穴のすごく浅いところとその周りにたまるらしい汚れを洗っていて。

男のときだったら生えていたそれを洗っていた程度の軽い気持ちで、特に何も感慨もなく脚を広げて洗っていて。

必要ないだろうって思っつてずっと触らないようにしていたけど、かがりから借り……いや、押しつけられたファッション雑誌とかのちよつとアダルティーナコーナーに書かれていた「体のケア」とかいうところで目にした衝撃の事実のせいで、いやいやながら……恥ずかしく感じながらもなるべく意識しないようにして洗うようにし始めた、こ

い。

「……………」

顔を上げて、鏡越しに僕の中に僕の指を突っ込んでいる僕自身を見ても……なんとも思わない。

僕の指がほんのちよつとだけ入っているそこを目にしたり、中に入っている感覚が僕自身にあつたりしたり、温かい穴の中に差し込んでいる感覚があつても、なにも感じない。

男のときに見たこともなかったそれを平然と見てするようになっていて。

でも恥ずかしさもいやらしさも、違和感すらなにひとつなくなつて。

まるで僕が、はじめから今の僕だったみたいに。

年相応の幼女として育ってきたかのように。

20年以上も男として生きてきたのに、たったの数ヶ月でもうこんなにも慣れ切つている。

記憶が、それこそ魔法さんに書き換えられているだけで……前の僕として生きてきたつていう記憶だけがすり込まれているだけの、ただの子供のように。

幼女のように。

……洗い終えて、石けんを洗い流すためにシャワーを軽くそこに当てて、いつものよ

うにきれいにする。

もちろん特に感じるものは無い。

おしりまで肛門までしつかり洗うっていうのとおんなじ程度なんだ。

でもなあ……幼い女の子の恥ずかしいはずのところを躊躇なく洗えちゃうっていうの、それはそれで、こう……来るよなあ……。

多分慣れるっていうのはこういうところ、根本的なところなんだろうって思うから。だからこそ僕が女の子になっっている事実がはつきりしている。

まあ幼女だし……女の子らしい女の子でもないっていう理由が大きいそうだけでも。

普通の男でも普通は中学生未満の女の子じゃあ裸でもどきどきなんてしないはずだしな。

……そっか。

毎日のこれと、いつかは来るかもしれない月のもの。

そういうものを考えると、まだ女性としての機能が本格的に働いていない女の子未満の幼女になったっていうことは僕にとって……せめてもの救いだっただけかも。

だって女の子らしい女の子になっちゃって普通に暮らせちゃっていたら……僕の中の男の感覚なんて、あつという間に塗りつぶされていただろうから。

## 36話

## 準備

## 3/6

最近はなんだかブルジョアしていた。

うん、ただの冗談だ。

なんだかゆりかがときどき「これだからお金持ちはー」とか言ってくるもんだから気がついたら自然と出てくるようになってしまっただけだ。

ブルジョア、それともブルジョワ？

どっちでもいいらしいけど言葉遣いってすぐに影響されるものだよね……だからこそ僕に対する違和感がすごいんだらうけども。

とにかくお金遣いの荒い日だった。

だって昨日3ヶ月越しの朝を迎えたあとと言えば……いや、その期間光熱費とかサブスクくらいしか掛かってないわけけども……タクシー使って冬服一式大人買いしてまたタクシー使って、で、冷蔵庫が空っぽになっちゃったって気がついたからとりあえずで保存の利くものをそこそこ買いだめたりしたし、あとたくさん飲んじゃっていたお酒も補充したし。

それもこれも魔法さんが悪いんだ。



まさかの3ヶ月っていうのをやらかした魔法さんのせい。

僕はこれっぽっちも悪くない。

僕は悪くないって言うよりは本当にお酒以外は必要だったから買ったまでだしな。

お酒だっついていきなり止めたりしたらきつと悪影響があるはずだ。

だから本当に悪くないはず。

ほら、急にそうするのはすごいストレスだからってお酒を止める本とかで書いてあるし？

だから僕は悪くない。

タクシーだって体力の落ちている今無理をしちゃって風邪とか引いたら困るっていうちゃんとした理由もあるくらいだし、わりと本気で悪いことはしていない気がする。

けど1日に使った金額としてはブルジョアってやつだった。

でも現代でブルジョアっていったいどういう場面で使うんだろう。

そうして現実逃避している先にはスマホに映るメッセージたち。

かがり、ゆりか、さよ、りさの4人との。

いろいろもんもんと考え続けてせんぜん眠くならなかったから……たぶんあれだけぐっすり寝過ぎちゃったせいだとは思うけど今の僕としては破格に夜中までなら起きていた昨日の夜に思い切った連絡で。

……夜中って感覚があつたけど、よく考えたら日付が変わるくらいの時間って普通の人にしてみたら……前の僕基準でもそこまで夜中じゃない気がするけれども、がんばってしたんだ。

だから僕は目が覚めて翌日の今日、クリスマスイヴって言う……しかも外はホワイトクリスマスな今日にいつものファミレスに来ている。

雪のせいで雰囲気はがらつと変わっちゃっているけど、でも、見慣れたファミレス。もごもごって感じの雪を踏みしめる音が足元から続いていて止まる。

「……………」

あの4人がようやくくにできた僕からの連絡に「今すぐにも会いたい」って言ってきたから断れずに今日。

僕が目の前の自動ドア。

僕の体重が軽いせいなのかそれとも存在感が薄いからかはよく分からないけど、でもドアの前まで来ただけじゃ空いてくれない嫌いなドア。

わざわざ腕を高く上げて「自動ドア」って書いてあるのを押さないと開かないドアだから、ついこのまま帰りたくなっちゃうけども……僕はあの子たちよりもずっと年上でもいい年した大人なんだ。

いい加減勇気を……勇気を、出そう。

小さい体でも心は立派な男なんだから。



「あー！ ひびきー、おひきーってうわあっ!？」

この子にとつて3ヶ月ぶり僕にとつては何日かぶりの再会の第一声。

……うん。

すっごくげっそりしてるよね。

鏡で見るとよく分かるんだ。

「……あ、ごめん」

「いいさ、僕自身だって久しぶりに鏡を見てぎよっとしたから」

こういうのって後まで思い出しちゃうから先に「良いよ」って言うしておく。

気休めでも言わないよりはずっとマシだ。

「こういうのも2度目だし、君のその気持ちはよくわかる」

「うわーお慣れてるーう。動じてもないなあーい……そっか響って」

入ってから適当にうろろしていたらまたまたドリンクバーで……いつものようになにかを調べていたゆりかとぼったり会い、なんだかさつきまで入り口でどきどきも

たもたしていたのが炭酸のあわあわみために抜けてきた。

僕よりも少し背が高くって、でも服装次第では、あと普段の態度的にもぎりぎり小学生に見える前髪ぱつつんで元気な子。

普段なら楽しそうな顔つきが今はすごく歪んでいる。

「……ほんと、だいじよぶ？ 入院してたつていうのは、もー顔見ただけで一発なんだけど」

「もう平気だ。 退院もしたしね。 この通りにひとりで出歩けている」

ゆりか自身の分の……自分の分はしないのがミソだな……配合していない普通のジュースと、被害担当の誰かのジュースを持ちながら歩くゆりか。

……ちよつと大きくなった？

いやそんなはずはない……って言うのは失礼か、さすがに。

成長期だしな、背くらい伸びるだろう。

ひよつとしたら長年のコンプレックスもついに解消されるときが来たのかもしれない。

そうだといいいね。

心の中で応援しておく。

……あるいはただ僕が縮んだのかもしれないとも思うけども。

なにしろあの魔法さんだ。

冬眠をしていたけど、たかが僕のひ弱でちんまい体に蓄えられていた脂肪とかだけじゃどう考えても生きていけるはずがないって考えていたけど、そのエネルギーを例えればそう——時間から持つてきたりしていたら。

さらに幼くなりつつあるっていう可能性だって出てくるんだ。

そうして幼くなつて行くのを続けて僕は……なんてのはホラーでしかないか。そんなわけがないって思っておこう。

ゆりかの……また肩より下に伸び始めているらしい髪の毛を眺めていたら、みんなのいるテーブルに着いていた。

僕が縮んだ疑惑を考えていたら会話をまたオートで済ませちゃっていたらしい。

「あら響ちやつ……!?!」

勢いよく立ち上がりうとして……普段と違って帽子を被っていないから見えちゃう僕の顔で固まつちやうかがり。

うん、まあやつれてるよねえ相当。

お酒呑んでただ寝ただけなんだけどねえ……3ヶ月ほど。

「……大変、だったみたいね……たくさん連絡してごめんなさい」

「事前にひとことこの連絡もしなかった僕の方が悪かったんだ。 気にしないでくれ」

今日の会話は何回もシミュレーションしてきたからちやんと受け答えできている。今日は大切な日だから。

大切って言えば今日はイヴかあ……なんか悪い気がする。

せっかくのイヴ……クリスマスを僕なんかの心配しちやつてね。

「そんなことないわよ！ だって持病のことですものつ、誰が悪いとかではなくて響ちやんが無事でよかったことだけでいいの！」

いつになく強い調子で……真面目な顔。

普段からそうしていたらもつと話しやすいのに。

「だって寝たきりで面会謝絶で……それを3ヶ月もでしょう？ また顔を見られただけで嬉しいわ」

「連絡できなくて済まなかった」

かがりはいつものかがりでメロンさんで見た目は特に変わっていない。

けどいちばん連絡が多かったのもメッセージが毎回長かったのも、いちばん心配していたのも、たぶんこの子。

後ろめたいことこの上ないけどさすがにいきなり「僕は魔法さんのせいで冬眠していたんだ……」なんて僕がただ満足したいがためだけに、それもまた魔法さんがなにかするかもしれないっていうか絶対にしてくるだろうことを口にすることは避けないとな

らない。

だからまた嘘の上塗りをしちゃうわけだけど、でも今のこれは不可抗力だからウソ扱  
いでもいいのかもしれない。

実際の状況を考えてみるとあながち嘘でもないし。

ただちよつと……心配していたはずの家族とか僕を診てくれていたはずのお医者さ  
んとか僕を管理してくれていたはずの病院の設備とかを、ちよつとだけ盛っただけ。

このこともいつかは話せるかもしれないけど、今ややこしくしたつてしようがない  
だ。

「……退院したのは昨日の朝なんだ」

グループのチャットで1回説明したのを改めて言う。

「けど僕の家に帰って来られたのは夕方で、みんなの連絡に気がついたのも夜に連絡を  
したタイミングだったんだ。まさか電池が切れているなんてね……ずっと使わな  
かったから。……みんなに心配をさせて本当に済まな……」

頭を下げようとしたら顔にセーターが押しつけられる感覚。

「そういうのは良いのよ」

見てみればそれはいつものまにかとなり立っていたりさりんの腕の生地で……促さ  
れるままにいつものように、なぜか僕がお誕生日席へ。

そしてりさりんさんは、あいかわらずに健康そうな雰囲気醸し出して、  
こうやって運動に力入れている人って、なんとなく安定感あるよなあ。

いい意味で。

それはセーター越しの体からも感じられた。

あ、今日はヘアピンつけていないんだ。

冬だからかな。

……いや、たまたまか。

けどいつも思うけどほんと、なんで僕だけお誕生日席なの……？

途中でさらっと帰ったりできないから、あとはなんだかみんなの視線が集中しやすい  
からここはゆりかにも譲って隅っこに座っていたいんだけどなあ。

まあ、今日はしようがない。

いろいろ心配と迷惑をかけていたんだ。

今日くらいはおとなしく言いなりになっておこう。

……いつもそうだった気もするけど。

慣れた動作でおしりをぺたんぺたんしながらシートを移動していき、着てきたコー  
トとかをおしりの下に敷くと……すでにみんなの目が僕に集まっています。

そして、なんだか見覚えのある店員さんとかも……あ、手を振られた。



「……………」

会釈くらいはしておくか。

「実はそこまで心配はしてなかったんだよ？　だつて病弱だつてことも、ていうか春まですつと入院してたつていうこともみんな知つてたし、なんとなくそんな感じだつて思つてたよね？　あとはさよちんつていうお仲間がいるし。　ね？」

「……………はい。　私もそういう経験……………いきなり悪くなつて動けなくなつて。　1週間とか2週間とか……………あつて、その。　……………そういう説明、してましたから」

前よりはちよつと声の大きさも話すスピードも、おどおどした感じも……………減っている？

けど前に垂らしているおさげと前髪はけっこう伸びていて、総合した雰囲気はさほど変わっていない様子の病弱な彼女。

「とまあ響と似た経歴のさよちんからも入院したらどうなるかとかいっぱい聞いてたしさ。　それにそんな激やせしてるのも見れば文句なんて言うはずないじゃん？　友達でしょ？」

「……………そう、か」

「もちろん！」

「そうよねえ」

右隣にいたかがりがいつものように視界外からいつものように唐突に、僕のほつペタを両手で包んでくる。

「……………」

「……………」

やっぱりこうされると眼前の圧がすさまじい。

これ、下手したら前よりも大きくいやいや失礼だつて。

ただし太っただけだろう。

「……………」

「……………」

僕のほつペタをむにむにとしているのに合わせてゆらゆらしているそのふたつのメロンを見るときもなく眺めていたら、満足したのかようやく圧迫から解放された。

……なぜかゆりかとりさりんが、かがりをじーつと見つめている。

急に無言になつて。

なぜだろう。

女の子つてこういう不思議な沈黙を持つてる気がする。

どうでもいいか。

位置関係は僕の左斜め前にゆりか、その奥にりさりん。

さつき僕がおしりを引きずってきた、というか足が着かないからいつもそうせざるを得ないんだけど、そのルートを逃すまいとしてふさいでいる。

反対側に今離れたばかりのかがりとその横のさよってといういつものポジション。本当なんで僕がお誕生日席なんだろう……。

「……………はあ、残念。あのかわいかったほつぺたのぶにぶにもちもちしていた柔らかさとか眠そうでかわいかった目の感じまで、すっかり変わってしまった」

やっと元のくるんさんに戻って来た感じ。

「それだけ大変だったのね、響ちゃん。……………そんな状態で今日ここへ来て大丈夫なの……………」

「うん。ここへ来るくらいはなんとかなる。それに、行きも帰りも車を使うし」  
タクシーという名の車をだけでも。

冬眠から覚めたその日に無理やりであんなお出かけをしちゃったせいで体が重いんだ。

僕は予想以上に体力を消耗していたらしい。

ひと晩経つてもまだ全然良くなっていなくて5分立っているだけでめまいがしてくるしなあ……完全にエネルギー不足なんだろう。

重めの風邪を引いたときとかこうなるし、人に移さない風邪だつて思えばそんなに大変じゃない。

……あんなことがあつて……起きてすぐのときにはまだ半信半疑だつたしなによりも服がなかつたんだからしようがなかつたんだけど、でもやつぱり冬眠から覚めたばかり、僕視点でいえば冬眠した翌日に外出なんて無謀としかいいようがなかつたんだろか。

でもそのおかげで偶然とはいえあの2人を助けられて話す機会があつたんだ。

……みんなと顔を合わせてとりあえず僕はまだ生きているつて見てもらつて……それで勇気が出たら、話題をうまく持つていければ「あの鉄則」のとおりになつたと謝りたかつた。

だから今日じゃないとダメだつたんだ。

それに……いつまたあなつて何ヶ月飛ぶのかもわからないんだ。

それこそ今夜寝て今度は春とかあり得るもんな。

だから今日。

天気もいい……雪だけど、それでいて体調も悪くない……だるいけど、でも嘘やウソを告白する勇気が残つていて、それでいてみんなと会えるつていう絶妙なコンディションだつたから。

話の流れ次第だろうけど、でもできたら言っておきたい。

僕のついている嘘とウソのこと。

全部じゃなくても良い。

ただただ、僕の自己満足だけにならない範囲で——できるだけ本当のことを告白しておきたいんだ。

## 36話

## 準備

## 4/6

「……………」  
みんなが心配そうな目で見てくる。

心配しすぎる感情が響いてくる。

常々思っていたことだけど……女の子は感受性っていうか感情が少し強すぎる。

古今東西そういうものらしいけど人生経験の少ない僕にとってはまだまだ新鮮な感覚。

僕が大丈夫だと言っていているんだから大丈夫だと思ってほしいのよね。

……さすがに3ヶ月入院したって聞いたんだ、ここにいるのが男だったってたいして変わらないか。

「具合、悪くなったらすぐに言ってちょうだい？ 私たちとおはなしするために来てもらったのに、それでまた入院とかになってしまったら申し訳ないし、なにより……いたたまれないもの、ね？」

「だねー、だから来る前になんども聞いたけど、響、大丈夫っていう返事しか送ってこなかったからねえ」

無理もないか。

どのくらい大変かなんて本人しかわからないもんな。

「心配しなくてもいいとは言っておくよ。今日は体調もいいしな。もちろん悪くなったらすぐに言うさ」

決して良くはないけど悪くもない。

ちよつと熱が出て寝込んだあとみたいな感覚だけがしつこく残っているんだ。

「……響つてさ、ほんつとうにマジメっていうかそれよりもジブンに厳しいっていうか」「ストイック……ですか?」

「さよちん、そうそれ! ほんとストイックだよねえ……びつくりするくらい痩せてるし顔色も悪いのに平気だつて。けど、私たちはそれでも響に会えてうれしいよ」

「…………ありがとう」

全部僕がやらなきゃ行けないから気が張っているのか、それとも少しでも嘘とウソをばらさなきゃいけないって気持ちだからか、大変ではあるけどここに来る元気があった僕。

……そう言えば中学の途中くらいまでは熱が出てようと何だろうと学校は行くものだつて思つて普通にかんばつて行けていたもんな。

いつから「今日はなんかだるいからいいや」つてなつたんだろうね。

「そーやって素っ気ないのもあいかわらずだねえ……でもみんな、大丈夫だろうって思っていたけどそれでも心配だったのよ。ね、りさりん？」

「そうよ、心配だったんだから。……まあゆりかの落ち込みように比べたら私たちはまだ平気」

「わわっ?! なに言ってるのさ、りさりん?! 内緒にしてって」

「いいじゃない、心配してたってわかってもらいやすいでしょ？」

「だけどお……うう……」

ゆりかが珍しくりさにやり込められている。

……人を心配する気持ちって、そんなに強いものなんだね。

僕はこれまで、ほとんど経験してこなかったから分からないだ。

「別にストイックじゃないよ。ただ自分の体調は自分で把握できているだけだ」

「私なんて熱とか出るだけでもみんなに甘えるのに」

「ゆりかでも風邪は引くのよねえ」

「どーゆー意味りさりん!!」

「……それで僕は行けなかったし、そもそも連絡すらできなくて申し訳なかったんだけど。秋とかは忙しかったんじゃないか？ 学校も行事も、あのときみんなが決めてい

たお出かけとかも」



この子たちに任せているといつまでも話が続きそうだからある程度は僕が進めないといけない。

いつ魔法さんがやらかすのかも分からないもんな。

「いやー、まー去年もやったことだったしそこまでじゃなかったよねえ？ 学校のは。

出かける予定とかは結局やったけど……でもこのみんなではやらなかったし」

「……いろいろ行こうって言うていたじゃないか」

「いやいや、響が行方不明……じょーだんよ？ そうなのについて思うと……ねえ？ な

んとなくばらばらになっちゃって。 りさりと私でしょ？ んでかがりんとさよち

んって感じで」

まあ元々この子たちそういう友達同士だったもんな。

「そうねえ。 お出かけだって響ちゃんがいらないんだもの、行こうって思っていたとこ

ろへは結局半分も行ってないわ。 それにお泊まり会も響ちゃん抜きでやったら申

し訳ないって思ったからまだしていないのよ」

「いや、泊まりは別にどうでもいいんだけど」

「え!？」

「だからお泊まり会くらいは君たちですれば良かったじゃないか」

「それはダメよ!」

何がダメなんだろう……。

「……………お泊まり……………」

「したいわよね、さよちゃん!」

「……………憧れは、ありますけど……………でも……………」

かがりは積極的すぎるくらいに賛成でさよは控えめな賛成。

「ほら、さよちゃんもバジャマパーティーしたいって! ね!」

「……………はい、したい、です……………」

「む。 かがり、意見の押しつけはよくないよ?」

「押しつけなんかじゃないわ!」

いやいや、これはどうみても押しつけにしか見えないよ?

「……………見たかいいりさりんや、あれがかがりという難敵なのだ」

「難敵ねえ。 天然って強いわあ……………」

うん、強いよね。

あらゆる意味で。

「……………」

僕は目の前のお茶……………今日は甘いものは飲みたくないって言ったら取ってきてくれた、なんの変哲もないお茶で喉を潤わせる。

……よし。

きつと、大丈夫。

僕はすうつと息を吸って、思い切って言う。

またああなるかもしれないけど、でもまずはこれから。

「……話は変わるけども。この期間で世間では、たしかねこみみ病◆◆◆」

—— やつぱり来た。

魔法さん。

……やつぱりこれがキーワード。

ねこみみ病の何かがダメなんだ。

ちりちりちみちみじりじりしてきた僕。

けど、◆◆◆いい加減にこの感覚にも慣れてきたし、なんとなく予想もできていた。

なんというか、魔法さんの気配？

そういうもの、ちよつとはわかるようになってきたかも。

でも、これが強引に突破できる類いのものって知っている僕は続ける。

「……………つ、それでかなり騒がしかったみたいだし。それに……………◆◆◆つつつ！」

ちよつといやな感じにこめかみがぢりつてした。

この感覚は……………初めて。

けど止めることはしない。

みんなもねこみみ病については知っているはず。

話題になってすぐ……たしか夏の終わりとか言っていただけ、すぐの政府による正式発表と栗色黒耳ペアの活躍が始まったのが、たしか僕が冬眠したほんの少し……僕の主観では1週間とか2週間前のことで、つまりは3ヶ月のことで。

でも僕はそのときこの子たちから解放されたすがすがしさと夢中になっていた小説があつて、何巻もあつてだからネットもテレビもほとんどせぜに◆◆◆◆◆

あれ？

◆◆ 僕は、ほんとうに、それを

◆◆

◆◆ 知らなかつ

「……………」

周りなんにもわからなくなって、少しだけ真っ暗でしんとした感じになつて、それから視界がざらざらとしてきて目の前が切り替わる。

4人がいたはずなのに僕の目の前には5人ぶんのコップとメニューが置いてある、僕にとつては少し高いところにあるテーブルがあつて視界の左右にはみんながいて、その

さらに先には廊下とほかのテーブル、いや、ブースがあつて、ちらちらと店員さんと目が合つたりしていたはずなのに。

今の僕の目の前には底上げのクッションでちょうどいい高さになったリビングのテーブルに手元に飲みかけのコーヒーと画面がつきっぱなしのスマホが左右にあつて、その先から音と光を届けてくるテレビ、そして僕の家のリビングの光景。

さつきまでの暖房とは真逆の感覚でエアコンの風を涼しいって感じていて……あのときはまだ隠れられていたって信じていたから夏だつていうのに閉じっぱなしだったカーテンから漏れてくる外の明かりも今よりもずっと明るくて、温かくて暑くつて。ついでに耳を澄ませばときどきセミの音が響いてくるくらい季節で。

そういう感覚が、五感が入つてくると同時に目の前のテレビからも音と光が漏れてくる。

大きくなつてくる。

……夢。

冬眠の直前か、あるいはすでに寝落ちしちやつたあとの明晰夢？

だとしたら僕は、もう？

「……………」  
魔法さんが怒るつていうことは、やっぱりねこみみ病は魔法さんと深く関係が◆◆

『……………ただいまご紹介にあずかりました◇◇◇◇と』

画面にはどアップからの引きで、昨日会ったばかりのあざとい栗色さん17歳が。声の感じとか体の動きとかがちよつとだけあざとい感じになっている。

……お堅い会見なのにコレなのか。

ということはふだんテレビとかに出るときはもつとあざといんだらうか……これでも抑えてるんだらうし。

若作り……年増。

……実年齢を知っているとたしかに……いやいや失礼だし、それは声とか表情の練習とか服装とかでいろいろと僕に返ってくるから止めておこう。

そもそもアイドルとはキャラクター性で覚えてもらうものだしその辺はしようがないんだらうな。

ふだんはきやぴきやぴしている子が急に素に戻っていたりしたらファンもびつくりするだらうし。

別に不祥事起こしたわけでもないしって許可も下りたんだらう、きつと。

『……………◇◇◇◇です』

一方の黒猫さんはなんだか声が詰まっていた。

風邪でも引いていたのかな？

それに語尾が「にゃ」とかじゃないし。

……さすがに島子さんの方は場の空気を読んだか。

それにしても——「見ていたはずなのにこうして再現されるまで完全に忘れていた」あの会見。

萩村さんが映っているっていうのまではしつかりと見ていたんだし、ということはやっぱ僕はちゃんと見ていたわけで。

「……………」

ということは。

僕がこの子たちの話をきちんと認識……できていなかったっていうことになって。

つまりは僕もまた、これもまた先週のように魔法さんに認識をぐちゃぐちゃにされていたっていうことの証で。

でもどうしてこれを見た記憶もなぜかよく聞こえない……いや、認識できていないこの子たちの会話を、僕が◆◆

……ぢりぢりするけどお腹に力を入れてふんばる。

……そもそも岩本さんと島子さんの名前すら……なんだか◆◆◆◆みたいにもんやりしてうまく聞き取れないというか、うっかりテレビをつけたままうたた寝しているときみたいに聞こえてはいるんだけど理解が追いつかないというか、そんな感覚。

「私たちは……◇◇◇◇◇……を受けて私が……」

「私は……◇◇◇◇◇……したんですにや◇」



ぷつと……静かに、なった……？

夏休みも終わりのころの僕の家の、エアコンで涼しくなっているリビングに戻らされたのは同じだけど、五感がしつかりとあるのも同じだけど……けど、まだまだ強かったざらざら感が完全になくなって、違和感もなにひとつなくなつて。

まるで僕が今、あのときの……冬眠前の、3ヶ月前のあのときに見ていたはずだった光景を……ちようど今、家の中で見て聞いているように。

『……私たちはねこみみが生えちやう症候群、通称ねこみみ病の変異を受けて。私がお返しを』

『私はねこみみ病の名前の通り、こうして……んしょっ』

と、ここで今まで帽子をかぶっていた……ベレー帽だっけ？

緑色の帽子とメガネって似合っているよなあ……じゃなくて、そのうちの帽子を外す

黒島子さん。



すると、あの触り心地のとてもいいねこみみがふたつ、ぴこんと出てきて記者の人たちがざわつとしたところで、こんどはしつぽをにゆるにゆると上げてきて。

そしてみんなをまとめて……あえて見せつけているんだろうけどいろんな感じに動かして……マイクをしつぽで持ってみたりねこみみ同士でがんばって帽子を挟んだり、くるくると回してみたり。

そうしてざわざわががやがやになって、それが落ちついたところで。

『まずはケモノ化。 獣化とも書くらしいですけど、とにかくこうして私の場合には猫さんのみみとしつぽが生えちゃったんです……にゃ!』

僕が堪能したねこみみと尻尾がテレビの中でぶわつとなっていた。

## 36話

## 準備

## 5/6

明晰夢、いや、白昼夢。

認識していなかった過去の時間。

いつぞやに見ていたはずの、けど、僕が見ていなかった『ことになっていた』場面。

栗色岩本さんと黒猫島子さんの記者会見……それも政府の、いつも政治家の人たちが話しているような場所でのそれ。

初めは「またあの明晰夢みたいなものか」って思ったけど、どうやら違うみたい。

だってあのときは違って僕は意思のままに動くこともできなくて、ときどきコーヒースーツを着ている動きでさえ当時の……そのときそのまま、ただ体が勝手に動くのに任せてテレビをぼんやり見ている。

そんな僕の中に入った僕が僕として存在する感覚。

今の僕はおとこの夢みたいに自由じゃなくて、ただ過去の忘れていた……いや、忘れさせられていた場面をただただ再現している中に入っているような、そんな感じなんだろう。

でもコーヒの苦さや香りはそのときの僕の動きを通じてしつかりと今この瞬間の僕でも感じられている。

さつきまで飲んでいたドリンクバーのおいしくないお茶とは違う、家で挽いた豆の香りと味。

あの子たちの声も顔も知覚できない。

ふんぬつとお腹に力を入れるけど……たぶんまだ起きてる。

根拠は無いけどそんな感じがするんだ。

一方で画面の向こう、急に駆け寄ってきたスーツの人に耳打ち……ねこみみと人の耳のどつちか迷ったのが笑えるけど……された彼女はぴんと尻尾と耳を立てている。

『すみませんですよにやごめんなさいですよにや！ にやとか言っちゃって……え、このまま続けていいですよ……？ にやって言うてもおっけーですよ？ ……あ、はいですよにや。 ……マジですかにや、天下の……ととと、これは失礼しましたにや』

なんかいろいろ漏れちゃってるけど、多分「にや」とかNGって思ってたのがOKなんだらうね。

ねこみみ病になると「にや」禁止って言うのも差別とかになるんだらうか。

『ちよつとみさきちゃん、早く原稿原稿!!』

『あ、はい！ ……こほん、すみませんでしたにや。 ……けどこれもうガマンしきれないの

で言いますけどにや？ この「にや」って言いたくなくなるのはケモノ化が強い時期に出る本能っぽいもののせいなので、今はキャラ付けとはふだんの私のキャラクターとはなんの関係もないんです。ふざけていたりキャラ守ったり、いえ、守らないといけないんですけどもとにかくですにや？ ……あー、ほら、こんな感じですよ」

島子さんのねこみみとしっぽはこの前会ったときみたいに、いや、あのととき以上にくるくと忙しくしていて顔も真っ赤。

島子さん、どうやらくすぐったいとき以外でも焦ったりするとああなる様子。

『まじめな場なのでできるだけ、できるだけ抑えようとはしているんですけど難しいのですにや……』

……そうして恥ずかしがっている姿はカメラさんたちにとって格好の餌食となったらしい。

「ばしやばしやばしやばしや」ってシャッターの音とフラッシュの光がいつせいに瞬きはじめた。

まあ現役アイドルだもんね……それを新聞の一面とかに載せても良い場面だもんね……。

『……あああ写真は！ 写真はそんなに撮ったらダメですよにやああ！ ……今は、今はダメですよにやああん!!! 生えている今は恥ずかしいですよにやんっ!!!』

あー、そんなこと言うから余計にフラツシュが……。

ねこみみとしっぽを片手ずつで隠そうとして、でもこの場がそれを見せる場面だつて思ひ出したらしく、あいかわらずの真つ赤な顔のまましぶと下を向いてガマンしている様子。

やつぱり恥ずかしがりなんだな、アイドルやつてるのに。

……あ、ふたりの横で立っていたスーツの人たちがすすつと姿を消したかと思うと、だんだんとその音も光も収まつてきた。

まあ物が物だしね。

それに生放送みたいだし、そもそも政府主催らしいし。

『相方が騒がしくなつてごめんなさいねー？』

一方で……多分わざと止めなかつただらう貫祿の岩本さん。

これこそが年の功つてやつだね。

僕よりちよつと年上なだけなのに。

『さて、それでは会見の続きを。カメラさん、こちらよろしいですか？ ありがとうございます』

ございますっ』

カメラさんとかが集中してきてわたわたしている島子さんをかばうように、すつとマイクを自分の前へ持つてきて何ごともなかつたかのように落ちついて話し始める岩本

さん。

年はさほど変わらない見た目になるうとも中身の貫禄を匂わせている。

……アイドル、中学からだって言っていたもんな。

10年近くキャリアがちがうんだ、そりゃ根性、肝も据わるといふもの。

『もちろん今までの彼女の……ふだんのキャラ付けがたまたま猫だったのでよかつたんですけど、とにかくそれで語尾をつけるクセもついちゃっているっていうのもあるんですけども。急にこんな大舞台は私たちも予想外でしたので、どうか細かいところは大目に見えていただけるとありがたいです。この子の話し方はケモノ化のせいでもありませんし』

すつと話を切り、完全に静まってからまた話し始めるポニーさん。

『それにもさきちゃん……島子さんはまだ高校生ですから。……さて、見ていただきたいとおあり、ねこみ病のうちのケモノ化の特徴として人にはない部位の出現……それも、ペットをお飼いになっている方ならおわかりでしょうがきちんと血の通った、神経も筋肉も意思も通った部位。この子ならお耳と尻尾ですね、それが表れます』

声色を使い分けて声のトーンもテンポも落としていき、一気にアイドルからアナウンサーへと早変わりした岩本さん。

『……そのとおりで。私の若返りと同じように、すでにご存じのように一部の地域

では偏見や迫害に繋がる危険でしたっけ? ……はい、これまで公表が伸ばされていた理由だそうですね。もっとも今日ここに居る私も実は先ほど知らされたばかりなんですけどね。いえ、そういう暗いところをです』

器用に記者の人たちの質問を振り分けているのがすごい、ポニーあざといさん。今は若返る前のときの肝っ玉を発揮しているようだ。

『ちなみになんですけれど、私の若返りは対象の幅が広いということ、ほんの数ヶ月……あるいは1、2年である場合には著しい見た目の変化がなくなつて、成長期のお子さんや赤ちゃん……あ、今のところこれで命の危険にさらされた方はいないそうなのでご安心を……はともかく大人であれば身体検査を受けないと当の本人ですら気がつかないこともとても多いということだそうですね。そこで今まで気にしなくとも良いのかもしれないですね。だって大人が数ヶ月若返つたとして……ですから』

『にやつ、にやああああん! ひかりさんっ助けてですにやつ! しつぽ! しつぽを接写されていますにやああああ!!!』

『みさきちゃん』

『せんばい!』

『がんばつて』

『せんばい!?!』

『で、ですなー』

『見捨てられましたにやああ!』

『まー今の説明はカンペ……こほん、この会見の直前で渡された紙……急いでいたみたいで走り書きみたいな感じなので、そんな感じで書いてあるままなんです。なのでこれ以上のことはどこまで話して良いのかってのはこれから少しずつ』

『にゃん!』

『……あはは、この子はまだ慣れていなくって。……といかなーんでテレビでしか

お目にかかったことがないこんな場所でききなり全国中継なんでしょ——……』

「あはは」って笑い声が上がっている。

……意外とカジュアルな雰囲気だな。

『それではご質問もどうぞ! 枠は充分にあるので、っていうか多分そのうちに各局スタジオの方に……あ、そのカメラさん?』

彼女が指差した先にカメラが向く。

……何かあつたんだらうか。

ちよつと会場の横の方から構えているけど……あ。

『尻尾はオツケー出てますけどー、それ以上アイドルのおしりを近くで盗り続けていたらー、あとで怒られちゃいますよ? 今は一応公式の場なのでー。……はい! ご



協力感謝します♡ あとみさきちゃん？ おしり』

『にや!』

『私たちもさつきここに連れて来られていろいろ知らされて諦めたばかりなので詳しいことはそつちの政府の方に……まあネットに出回っている情報の半分くらいは間違つてはいないっていう感じでしょうか。 残りの半分は「デタラメとか誇張とか……私たちを気持ちよく思つてないそういう方たちに書かれたもの」って言うので』

『あんまりひどいことは言わないでほしいのですにや……』

『……あ、やーっぱり聞かれますよねえ、これえ……ふりふりの衣装。 ……あはは、恥ずかしいですけどしようがないんですよ。 このハデなのはちようど今の時間帯にするはずだったライブのリハーサルのためのものなんです。 けど急にお仕事つてこと着替える時間も余裕もなかったので……あのときはなにか恐ろしい勢力について目をつけられたのかと。 もー終わりかと思いましたがよーあはは』

『あ、これですかにや? これは相当集中してないと難しいのですにや。 ……やっぱりですにや? どーしても「にや」って言いたくなつて。 むう——……やっぱりどうしても、なかは知らないですけど語尾だけに「にや」つてつけたくなつてしまうのですにや。 これはもう本能としか言いようがないのですにや。 あ、いえ別に、話している最中のな行とかは特には。 不思議ですにやあ』



記者会見は続いている。

けど……そうか、あのときに見ていたはずのものはこんな感じで。

つまりはあのときに僕の意識がまともでさえあればあの時点でねこみ病の、少なくとも公表されたっていうものと、ネットに転がっていたはずだし他の局とかも連日やっていただろうし新聞に書いてあっただろう情報で、僕はもっと早く知っていたはず。

つまりはあのときだけじゃなくて、いろいろな場面で気がつかないうちに「気がつかないようにされていた」んだ。

だけどどうしてそれが今になって？

『……………びき!! ひびき!!!』

『響ちゃん、ほんとうに大丈夫!?!』



ざーっとしたかと思うと、ドアップでゆりかとかがりの顔が、いつものようにちよつと上……じゃなくて目の前にあつた。

すつごくびっくりしたけど、びっくりしすぎて変な声も出なかつた。

だつていきなりに目の前が夏から冬に戻つて来て……おまけにドアップだし。

苦手だからつて普段は顔はあまり近づけないでもらつているのに、それが僕のすぐ目の前に迫つていたんだ、そりゃあびっくりもする。

おかげで一氣に現実に戻つてこられたけど。

……そうか、戻つて来たんだ。

どうしてか分からないけども。

ちらつと周りも見してみる。

りさとさよも、ひざ立ちになつて覗いてきていて……店員さんまで何人か来ている。

……うん、魔法さんの影響は今ほ消えているみたい。

もう少しでなにかが見えそうな気配もしたんだけど……あれ。

すごい汗かいてる。

体じゆうが生暖かくじめつとしていて。

「ひびきー！ よかつた、気がついたんだよね？ さつきまでぐつたりしてて聞こえてな

くつて、目、開かなくなつて息も荒くつてつ。……そうだ病院！ 病院は行かなくて

いいの!？」

……そっか、今の僕はあのお隣さんみたいになつてたのか。

「本当に良かったわ……だつてさっきの響ちゃん、いきなり下を向いて。つらいんだつたらそろそろおしまいにしましうつて聞こうとも思つたらお返事がなくて。」

「……顔も赤くなつてくるし息も苦しうになつてきてすごい汗で」

「……気がついたみたいなので、大丈夫です。はい、救急車は……ご家族と連絡取れま  
すから」

「ご心配おかけしました! もう大丈夫そうなので! ありがとうございます!」  
少し離れたところでさよとりさが店員さんに謝つてくれてる声がする。

……後で2人へも店員さんへも、僕が謝らないとな。

「……とりあえずはもう大丈夫だと思ふ。心配かけてすまない」

でも、今まで……それこそ昨日はそんなこと起きていなかったのにな。

こんなにびちやびちやになるほどの汗だなんて。

おかげですつかり体がだるいし……気持ち悪い。

「本当に大丈夫なのね?」

「うん、安心……できないだろうけども」

「響さん、いつもの調子みたいね……はー、よかつたわー。 私たち響さんのお家も知ら

ないし困っていたのよ」

「……私と同じで、恐らくスマホに……担当のお医者さんへの番号……あるだろうから、響さんには悪いけど……と」

「ええ。勝手に使つて連絡するか、もう救急車呼ぶかしかないって話していたところだったのよね。あー、よかつたわー、肝が冷えたわー」

そうか……でも。

ねこみみ病。

それが、キーワード。

そうして今度はどうしてか僕自身が変わな感じになって……あの2人と会っていたときにはこうはなっていないかつたのに。

同じもの……じゃあない。

けど、これもきつと手がかりのひとつで。

「……………ふーっ」

……走つた後みたいに荒い息。

落ちつけるまでにはちよつとだけかかりそうだ。

## 36話

## 準備

## 6 / 6

荒い息

髪の毛がひたいやこめかみ、あごに張り付いている。

シャツが体にべたつとしてている。

ぱんつもぐっしより。

……いや、漏らしたわけじゃないんだけど、こう、全体的に……ほら、炎天下で歩き続けたときみたいにさ。

たぶん背中とかおなかでかいた汗が垂れてきているだけだと思うけど。

その証拠におまたのところは無事。

多分。

まあ臭くなつてないから大丈夫だと思う。

汗なんて今の僕になつてからはあんまりかかなかつたけど、こうしてかいてみると気持ち悪い。

今が冬で室内には暖房が入っているから急に冷やされないのだけがあるがたいもの、だからこそいつまでもじめつとしてるんだ。

でも前の僕とはちがつて汗をかいてもぜんぜん汗臭くならないどころか逆にちよつといい匂いがしてくるのはなぜだろう。

夏のときも、ふと香ってくるこの香りが……変態みたいだからやめとこ。

幼女の汗の匂いにじやなくて臭いに喜ぶなんて変態だもんな。

僕はまだ常識的で一般的な男としてのプライドを捨てたつもりはないんだ。

でも……甘いものは好きじゃないけど香り自体は嫌いじゃなくて、つまりはこのココナッツとかミルクとか桃とかそんな感じの汗の体の匂いつていやいや今はそんな場合じゃない。

僕自身の匂いを嗅いでいる場合じゃない。

落ち着こう。

たぶんまだ動揺しているんだ。

「響さん。……発作のときのお薬とか、注射器……とか。そういうのは……持ち歩いて」

「……僕のはそういう類いのものじゃないよ………安心してくれ。でもありがとう、さよ」

僕が幼女の香りについて考えているときにさよは真面目に呼吸困難とかそういう系の心配をしてくれていたらしい。

ありがとう……あとごめん、すつごくごめん。

僕は男っていうどうしようもない生きものだからついこういう思考に襲われるんだ。

「てことはそれ、命に関わる何かっていうわけじゃないってこと？ 私たち、響さんが死んじゃうかって思つてすつごく怖かつただけよ」

「心配を掛けたね……りさ。でもこれはただの軽い発作だ。……大げさなくらいの反応は起きるけど、それでどうこうなるわけじゃないんだよ」

僕自身がアレな状態になってたらしいからどのくらいだったのかは分からないけど、みんなの反応の限りには相当アレだったらしい。

「……………そっ？」

「ああ、そうなんだ。心配をかけた」

「……………それで、軽い……………ですか」

「えーっと私も心配だけど……響さんってそういう嘘はつかないし、本当に大丈夫なんじゃない？」

りさとの会話に深刻そうなさよが入って来て、僕の言うことを信じてくれたりさがフオローしてくれる。

それでも心配そうなさよの顔。



本物の病人だもんな、これが嘘かもって思うんだろう。

その通りで大丈夫かなんて誰にも分からなくて、僕は嘘まみれなんだ。

君たちとの会話の何割かはウソと嘘で塗り固められていて、もうどうしようもないって……つい最近までそう思っていたくらいなんだ。

けど——嘘はもう、つかない。

どうしようもない嘘……誰かを守るための嘘やウソ以外には。

そう決めたんだ。

だから今日は嘘とウソについて言おうって思っていたんだけど……タイミング悪く魔法さんのせいで僕はもうへとへとになっていて頭も回らない。

……仕方ない。

みんなを不安にさせたままにしないためのウソで……なるべく嘘をつかない範囲で、方便の範囲で、どうにかごまかして乗り切ろう。

謝るのがまたひとつ増えるけど、ここで下手に必要なことまでごめんなさいしてもこの子たちが困るだけなんだ。

自己満足な告白は自爆って言うんだ。

僕は……脳みそと心は大人なんだから、これくらいはできないとな。

「……どー見てもそーは見えなかつただけど……なんか口からひゅーひゅー言ってた

し。私、こんなに怖いって思ったの、生まれて初めて……」

そう言いながら僕の喉元とか胸、肺のあたりをまさぐってくるゆりか。

びつくりしたけど同性だから遠慮がないんだなあって思い直す。

すつごい速い心臓の音と振動で心配されなかつてひやひやする。

……僕の服、触つて汗がべとべと手について気持ち悪いだろうに……平気なんだろう

か。

僕だったら他人の汗なんて絶対触れない……つて思うのも、多分今まで親しい人がい

なかつたからなんだろうって理解はしている。

まだ気持ち追いついていないだけなんだ。

「……………」

それにしても「今日はただみんなに会うだけだし、かがりもうるさくないだろう……

多分」つて思つて、なるべくいつもの楽な……男っぽい格好で来ておいて良かった。

顔と髪の毛を隠す必要はもうなくなつただけど、けどやつぱり寒いからなんとなく

でパーカーこそ着て被つてはいるけども。

つまりは僕がいちばん好きな、女装していないときの僕の格好の冬パージョンつてい

うわけで。

下はただの厚めのシャツだけで。

だから逆に胸を触られた感触もブラジャーがないぶんダイレクトだったんだけど……悲しい、いや残念なことに僕のこれはまだ完全に子どもだから触られたって前の僕だったときに触られたのときとそんなに変わらなくて、つまりは平気だったし。ただ、ちよつとだけ男だったときよりも敏感な気がするから、あまり触られたくないくらいかな。

その、先端がぴりりしてするんだ。

そこだけは一応女の子らしい。

こんなにちっちゃいのにね。

本当に年齢不詳な体だ。

それにブラジャーに触られるのって……こう、なんていうか女装しているのを改めて実感させられるというか、なんとなく未だに抵抗あるしな。

……「かがりがあるからやっぱりつけておこう」なんて出かけるぎりぎりまで悩んだけど、つけてこないで……本当によかった。

直前に脱ぎ捨ててそのへんにほっぽり出してきて、本当によかった。

いや、別に平気なんだろうけども……ほら、なんとなくイヤってやつ。

「で？ それ、どんな感じなの。詳しくなくても良いから知りたいよ」  
じーつと見つめて来ているゆりかが言う。

「ああ……今のは、その」

嘘にならないウソ。

「……吸入器のいらぬ程度のぜんそくの発作みたいなもので、時間さえ経てば勝手に収まるものだ。酸欠になるからぼうつとはするけれど、ただそれだけ。だからみんな、もう心配しないでくれ」

「……響が、響自身がそういうのなら信じるけど……ムリはダメよ？」

「うん」

しぶしぶといった感じで離れてくれた彼女。

久しぶりに嗅いだ感じがするな、彼女の匂い……じゃなくなつて。

ついでに言えばあいかわらずにみんなものぞき込むように見てくるな……つていうのも後回し。

ん——……ここまで頭回らないのはやっぱ魔法さんのせいかも。

風邪で寝込んだときみたいなくらくらさが残つてるし。

「……なら、近況報告とかおしゃべりとかはまた今度の機会に回した方がいいわよね」

自然な形で珍しく真面目な……当然か、かがりが口を開く。

「急いで話さなければならぬわけでもないのだし、話したければ帰ってからグループで話せば……チャットなら響ちゃんの具合が良いときに見てもらえるものね。それ

に、ひとまずは響ちゃんが……無事ではなさそうだけど、こうして介助なしに出歩ける許可をもらえる程度には回復しているって分かったのだし」

誰……？

失礼って分かってるけど、でも聞かずにはいられない気がする。

でもがんばって抑える僕。

「……………そうですね……発作、が出るというのも、恐らくは……………その……………体力がまだ、回復しきっていない、そういうのも……軽いぶり返しも、よくありますし。

そうです、よね？」

くるんさんとさよが荷物をまとめ始めている。

「今日は私たちも響ちゃんの顔を見てお話しできて、少しは安心できたから。早くお家へ帰ってもらってしっかりとっおやすみしてもらわないと」

「そだねえ。見るからに激やせしてるし、まずは肥えることからだよびきん！あのふに感を取り戻すのだ!! それに痩せすぎは、いやそれでもなんだかミステリアスな雰囲気マシマシだけど、でもやっぱ健康第一！」

「じゃあ私お会計してくるわね」

「ん、細かいのは後でにしよう」

りさりんとゆりかも席を立っている。

それじゃあ……………、いや。

なんだか大丈夫そう……………？

根拠はどこにも無いんだけど、なんだか急に体が楽になつてきたからあと何分かで朝  
くらの調子には戻れそう。

不思議だけど……………多分合ってる。

そんな感覚。

……………だつたらいつこだけ話しておきたい。

魔法さんの理屈の分からない力はたつた今にも昨日にも、おととい……………3ヶ月前にも  
降り注いできた。

時間が経つほどにおかしくなつていく気がするんだ。

だから次に会つたときに倒れたりなんかしちゃつたら困るんだ。

——昨日おかしくなつた後には魔法さんはおとなしかった。

ねこみみ病について話していても邪魔をしてこなかった。

……………つまり今ならまたおかしくなることはないわけで。

でもみんなはおかしくなつた僕を見ていたからすごく心配しているわけで。

……………どうしても言つてちよつと話すくらいが限度っぽいな。

「……………待つてくれないか」

「ひびき?」

「お会計なら良いわよ?」

「そうね、私たちが無理やり連れ出したみたいなものだし」

「……みんな、そのうちに響さんと会えて……おでかけに、って。……だから、おこづかいは貯めてあつて……」

……そんなに楽しみに待つてくれていたんだ。

「最近の子供は」とか「今の世代は」とか言うけど、多分それは時代が少し変わっただけで子供つてのはそんなに変わらない。

だつてこの子たちはこんなにも良い子たちだから……僕には過ぎるくらいに。

「……ありがとうみんな。でも、ひとつだけ。……ひとつだけ話したいことがあるんだ。すぐに済むよ」

「んー、それつてチャットじゃや?」

「……せつかくだからね」

「心配だけれど……いいのかしら」

今日はみんなの意識が僕に向いているからか一回で聞き取ってもらえて。

顔を見合わせつつ、もう席を立っていたさよとりさりんも素直に座ってくれた。

「けれど、また苦しそうにしたらすぐに帰つてもらおうわよ? 良いわね?」

「かがりんの言う通りよ？　とりあえずでタクシー呼んじやうぞ？　んで押し込んだらうぞ、ひびきん？」

「……事情のわかつている親御さんや、お医者様のほうが、いい……と、思います。なので、さつき……のように」

「さつきさよさんが言ってくれたみたいに、スマホ。勝手に指に当てるかロック番号言ってもらってそれらしい連絡先。分かった？　もしまた苦しうになっても我慢したらそうするらかね？　響さん」

……本物の病人経験のあるさよが本気で、面倒見の良しさよもまた……いや、みんなが本気。

「……分かった。それで、落ちついて聞いてほしいんだけど。僕はね、みんな」

今は何も分からない。

魔法さん。

冬眠。

ねこみみ病。

若返り。

少しずつ分かりかけて事態が好転してきているようにも感じるけど、悪くなっているのかもしれない。



どちらにしても一気に動いているのは確実なんだ。

だから——タイムリミットを決めておくんだ。

僕がひとりで悩む限界の。

ひとりと考えていたってなんにも変わらなかつたのは、この半年——9ヶ月で明らかなんだから。

もう、悩む段階は終わりにしないとだから。

「……春の退院。そして今回の退院。両方とも一時的なものなんだ」

だから、僕は決めた。

「また悪くなるようなら、今度は長期間。月単位、季節単位……年単位で、前のように

外に出られないことになる……かもしれないんだ」

それを過ぎたら、僕はこの子たちにもう会えなくなるかもしれない。

だから。

「響ちゃん……」

「だから、君たちには先に……もしもの場合のためにお別れを言っておこう。そう思ったから、今日は来たんだよ。……本当はこんな話をいきなりしたくはなかつたんだけど、この体たらくだから」

「……響、さん。ほんとうに、命に関わる手術とか、そういうものでは……」

「そうじゃない。それだけは本当だから安心してほしいんだ、さよ」

これもまた根拠のない感覚でしかないけど、多分僕に取り憑いている魔法さんは僕を呪い殺すとかそういうことはしない。

ただただ幼女にしておきたいだけ……なんとも不思議な性質。

まるで「大切すぎるから過保護に守ろうとしている」って思えるくらいに。

だからこれはウソでも嘘でもない。

けど、みんなに会えないし連絡が取れなくなるって伝えてはおきたいんだ。

「ただ、こうやって外に出て……人に、君たちに迷惑をかけるような状態なのは、まだ退院が早かった。ただそれだけなんだ。そう……ただ春から夏にかけて少しだけマシになっていただけ。僕はまだまだ不安定すぎる、ただそれだけなんだ。だからまた急に連絡ができなくなっても不安にならないでほしい。そう言いたかったんだ」

僕の嘘／ウソで、みんなを悲しませた。

女の子って感受性は男よりもずっと繊細で敏感な生きもの。

大丈夫だと言ってているのにかがりとさよなんかは涙ぐんでいるし。

……僕の嘘でみんなにこうして負担をかけさせるんだったら、そもそも。

そもそも初めから僕は——みんなに会わないほうが良かったのかもしれない。

本当に……本当に、ただ初めのころ。

僕が幼女になって、僕がどう見えるかっていうテストをするためだけにしかけた先での相手がかがりとゆりか、ただそれだけだったんだ。

僕が「幼女でしかないけど成人男性が幼女扱いはイヤだから、せめて中学生くらいの扱いはしてほしいし」っていう変なプライドをくすぐられたばかりに言い出した年齢の設定——最初の嘘。

いいわけ。

いろんな設定。

ウソ。

嘘。

……言わないっていう選択もできるけど、できたら言っすっきりして——例え嫌われてもいい。

でもそれはただ僕が楽になりたいから癩癩みたいに投げつけるだけの意味のない告白。

それが分かる思考能力とヤケにならない理性があるからつらい。

でも、それが僕なんだ。

この子たちに——こんな良い子たちに迷惑を掛けて申し訳はないんだけど、それでもこれが僕なんだ。

だから、万が一どうなっても良いようにっていう保険。

それを直に伝えられたんだから……今日は充分。

それに……少しだけ大人びた印象のみんなの顔も近くで見られた。

だから今日は満足なんだ。

## 37話 別れはもう少しあとで 1/2

「……そう。 そんなにひどいのね、響ちゃんの病気……」

「うん……といつても命に関わるものではないけどね。 本当だよ」

そう言いつつ髪の毛をなでりなでりしてくるかがり。

ぶわつと僕の汗の匂い……甘い感じのそれが立ちこめる。

……いい匂いだけでもやっぱ汗の匂いっていうわけですまりはかがりにも嗅がれることになるから止めてほしいんだけど、さつきから止めてくれない。

……やっぱりこの子、僕のこと年下の着せ替え人形って見てるよね？

「……すんすん」

「やめてくれ」

全力で引き剥がす……けど剥がれない。

元々腕力じゃ敵わないもんなあ。

でもこういうの、さすがの僕でも恥ずかしいからね……？

というかがりだけじゃなくて、なんでみんな僕の頭によく顔をうずめるんだろ。

やはり小さいからか。

みんなからするとちやうどいいところに僕の頭が……きつとつむじとかが見えるもんだから、きつとついやつちやうんだろう。

ほら、ペットの犬とか猫みたいに。

ほら、僕の髪の毛つてモフリ甲斐ありそうだし。

「でも入院でしょー？ 大変そー……」

「そうね……私たちにとつては重病つてイメージしかないわよね」

「……こうして出歩けることもあるんだ、たいしたものじゃない。 まあ駄目なときは

動けないけども」

入院つて聞くと大変つて思うよね……僕だつて聞いたらそうなる。

だから死にはしないつて強く言つておかないと心配しちゃうだろう。

「みんなと会つていたころ……夏までは安定していて、秋は駄目で。 今は小康状態だ

けど、いつまた倒れて治療が必要になるか分からない、そう言われてね……もちろん命

には関わらないんだけども」

「本当に……その、無理は。 私たちに会う……ために、無理とか」

じいつとメガネの中からのぞき込んでくるさよ。

……本当の病人さんな経験のある黒髪ロングさんから言われるとなんだか深刻に受

け取られちやいそうだな。

「だから無理はしていないよ。許可……も得ているし」

「こうでも言わないと……特にこの子はいつまでも不安なんだろう。」

「ごめんね、ウソついて。」

「それに、これは本当のお別れじゃない。もう会えなくなるというわけでもなくって、また急にしばらく……次の日に約束をしていたって急に月単位で突然連絡できないことも場合によつてはあるから、そのためなんだ。この前みたいな心配はさせたくないからね。本当にそれだけだよ、さよ。チャットでも良かったんだけど……こうして話せるなら直接の方がって思つて」

「そう、……………ですか」

「思うところがあつたのかようやくに引いてくれた黒めがねさん。」

「ただいつまでも言つていてもしょうがないって思つてくれただけかもしれないけど。」

「……この子、心臓かなにかが悪いつて言つていたしな。」

「手術も経験しているみたいだし。」

「だからこそ人に心配されすぎて困るっていう感情……理解してくれただろう。」

「直接会えなくても……許可が出さえすればスマホ越しにでも連絡は取り合えるしね。」

「ただ、どうなるかは分からない。急に僕が返事をしなくなっても心配は無いんだ。」

「ただ、それだけ」

魔法さんのせいで今の僕……幼女のままで一切成長できないっていう可能性とか、もつと先のなにかが起きる可能性。

そういうものを考えるところのまま長期間顔を合わさないうちに自然消滅っていうのがお互いに楽なんだろう。

……でも。

年は離れているとはいえ、みんな女の子ではあるとは言っても……少なくとも時間をいっしょに過ごしたせいで、愛着……湧いちゃっているからなあ。

「情が湧くと別れが辛い」って言うのは映画とかで良くあるセリフだけど、多分僕の人生で初めてくらいに経験している感情。

だから僕はこうしてこの子たちに今後も連絡を取れるって言いたくなって、言っただけで済ませようとしていたんだけど、言っただけで済ませようとしていたのは顔を合わさなくなると次第に興味が薄れていくものなんだ。

学校を卒業して別々のところに通うようになったり、転校したり就職したりして、初めこそ前みたいな頻度でやりとりするけどそのうちにだんだんと忘れる。

そういうものなんだ。

僕は幼稚園とか小学校で転校したことがあるから分かる。



多分幼いながらに泣いたりしたし、しばらくは手紙とか電話とかしてたけど……すぐに忘れる。

人なんてそんなもの。

僕でさえそうなんだ。

だから僕が前以上に人前に出なくなつて、つまりはこの子たちとも距離を取つてだんだんと会わなくなつていけば……来年の今ごろにはもうお互いに過去の人になつてい

るだろう。

たまに思い出して「懐かしいなー」つて言うだけの関係。

それは寂しいことだけど、もともとが嘘の関係なんだ。

だから、これできつと良いんだろう。

そのうち別れるつて言つておけば、直接会わなければ……連絡できたとしても、そのうちに。

「そういう意味でのお別れだったのね？ 響ちゃん」

「ああ」

ようやく頭に乗っていた重みとくすぐつたさから解放された。

「でも響ちゃん、ひどいわ！」

「……なにが？」

いきなり耳元で大きくなるかがりの声。

不意打ちだったから耳が痛い、頭が痛い。

くらくらする。

けど……なにかががりのスイッチ入るようなこと言っちゃった……？

あれ？

ここのところはうまく回避して制御できていたって思っていたのになあ……。

「いきなりだもの！ もうお別れだなんて言うからってつきりもう2度と会えないのかと思ってしまうたじゃない！」

「いや、きちんとそのあとに」

話を聞かないくるんさん。

「びつくりしたんだから！ 今みたいいきちんと順を追っておはなししてくれていたらさつきみたいに驚いたりはしなかったのに！ ねえ？ そう思うでしょう!？」

女の子って「みんなもそう思うよね？」って口癖だよねえ……この中でもかがりくらいだけでも。

「あー……まー、たしかにねえ……しよーがないって思うけどさ。響も……あとさよ

ちんもか、ときどき考えたこと省略して……こー、ずばつと言うことあるからねー」

ほら、ちゃんとゆりかとかは聞いてくれるのにこの子は……。

「私もびっくりしたわねー。なにせ久しぶりに……退院でいいのかな、した直後にいきなりあー言われちゃあね。マンガとかドラマ漬けだどーしても悪い方に考えちゃうわよねー」

ヒマさえあればドラマを観ているらしいりさりんが言う。

「……………え…………… 私も……………ずばつと? ………………え?」

……………多分自覚が無かつたんだろうさよが僕の顔と彼女の手のひらをあわあわしながら見比べている。

「……………癖なんだ、済まない」

「まー響とかがりんの相性、会話的なのは壊滅だからねえ……………普段は響が合わせてるけどこういうときは大変そう」

ゆりかがとつても良いことを言っている。

「?」

でもかがりはそれに全然心当たりがないらしい。  
だろうね。

僕ががんばってることだからね。

「……………響ってき」

ゆりがぼそつと言う。

「こう……男らしいっていうか……あ、さよちゃんもそういう傾向あるけどね？　なんていうのかね……あ、もちろん良い意味よ？　頭が良い感じの……すぐに結論まで考えられちゃう人にありがちな傾向っていうかさ？　わりと結論重視派っていうか……その、さつきみたいだったりさ。テキストなこと話している最中にぼそつと大切なこと言ったりするからね——……いや、良いところでもあるんだよ？　私は好………きよ？　もち、ふたりのそーゆーとこ」

なんか最後急につつかえてたけど大丈夫？

「最近はかなり減ってたけどねー。　なんて言うの？　話し上手になつた感じだったし。　ほら、初めのころとかよくかがりんのこと怒らせてたじゃん」

「……そうだったかな……？」

「そういえばそうだったかしら？　良く覚えていないわ？」

珍しくくるんさんと一緒に「くるん？」ってなる感じ。

「もー忘れてる……ま、当事者っていうのはそういうもんかねえ……でもさ、響も合わせてくれるけど私たちは平気な訳よ。　私とかさよちゃんならそういうのに耐性あるし、たぶんりさりんも部活とかである程度慣れているんだろうけどさ……かがりんは……その……うん……純粹な乙女だから」

「??　ゆりかちゃん、それってどういう意味なの？」

「や、わからないならいいんじゃない?」

脳みそお花畑ってことだよ?

……って言ったらすすがにかわいそう。

でも今のはお馬鹿さんってことじゃなくって、なんか周囲に花が生えてそんな雰囲気ってこと。

ほら、夏休みお勉強とか思い出せばそんな感じでしょ?

地頭は良い方なのに、悲しいほどまでに夢想家って感じの。

「……突き詰めて言うとか感性の違いとか考え方の違いとか? 脳の仕組みが男に近いか

と女に近いかの違いっていうやつなのだよ多分。ほら、最近授業でやったでしょ?

あんな感じ。文系と理系とかまでは行かないかなあ……うーん難しい。普段こう

いうのってグループで分かれてるからなあ……まあけど簡単に言うとか個性っていうこ

とで良いんじゃない?」

「はあ……」

「あ、ダメだ、全然分かってないや肝心のがりんさんは……でも残念かなー。それじゃ響、今日のクリスマスパーティー来られそうにないねえ」

急に話が飛ぶ。

……ん、今日はイヴだからつまり国内的には今日がクリスマス本番か。

「そんなものが……?」

「うん。だって『2度目の退院おめ!』な響へのさぷらいずの予定だったんだもん。

だから響が食べられそうな甘くないケーキとか……もちろんちっちゃいやつ買っておいたんだし。けどそんなに体悪いんだつたら」

「そうよね、よくよく考えたらそんなにびつくりさせてしまうようなこと……退院したばかりの人にしてはダメだったわね。もうっ、誰が考えたのかしらね!」

僕も夏みたいに元気だったら……何も知らなかったら楽しめただろうけど。

ありがたいけど、今は残念ながらそういう場合じゃなくなっちゃったんだ。

……ごめんね。

「……………」

「……………」

「……………」

「……あら?」

……なんか寒くない?

暖房消した?

気のせい?

「……………サプライズにしようって主張してたの、かがりんじゃないっけ。忘れたの?」

「私はなんども……止めたんです、けど……さすがに危ないんじゃないか……って」  
「あらあら？」

あー、かがりなら言いそう。

「素敵なパーティーをすれば響ちゃんも元気になるわ！」とか。

「……だ、だって！ 私たち、響ちゃんとまた会えるって思ったら舞い上がっちゃって思わずで！」

「かがりんが、したかったのよね？ まー止めなかったのも私たちだけだよさ」

「うう………はい………」

またいつものかがりの暴走だったらしいサブプライズ。

そんなの普通にクリスマススパークパーティーだよって言えば良いだけなのに………本当女の子ってサブプライズが好きだよねえ………。

着せ替え人形にし始めたときから一向に変わる気配がない。

やはりくるんくるんメロンか。

「………こほんっ！ とにかく本当はね？ さよさんのお家のいちばん広いお部屋でする予定だったのよ。 もちろんご両親の許可もいただいたわ？」

「はい、私と同じような………友だち、………が、いるって言ったら。むしろ………両親の方、から。………まだそんなに悪いのなら仕方ありません………け

ど、残念です……」

しゅんとなるさよ。

メガネが曇っている感じがする。

「クリスマスパーティー、響の退院祝いでしょうってことになってみんなで準備してたんだよねー。さぶらはず仕様は昨日急にかがりんが言い出したただけけど」

「飾りつけ、終わらなかつたわね……あと少しだったのに」

「それもこれもムダに派手にしたがるかがりんと凝り性なさよちゃんが悪い」

「だってー」

「……私、凝り性……え……？」

あ——……学校の文化祭とかみたいなノリだったのかな。

みんな学生だもんね、きつとそういうのは男女関係なく好きな子は好きなもの。

さよも乗り気だったみたいだし、きつと楽しみにしていたんだろう。

……気持ちだけは受け取っておこう。

「……………」

……そっか。

これが、サプライズが嬉しいって気持ちなんだ。



## 37話 別れはもう少しあとで 2/2

クリスマスパーティーなんてのはもはや想像上の存在になって十何年。

最後にそういうのに参加したのって……多分小学校低学年とかかもね。

僕も小学生のときはそこそこ友達がいた気がするし、そういう子たちと誕生日会とか……したんじゃないかな？

よく覚えてないけど。

だってだんだん今みたいな性格になってそういうにぎやかなのとは距離置くようになって行っただし。

この前読んだ記事によると、小さいころ活発で社交的な子供は大人になると静かに育つらしい。

真偽は不明だけど僕にとっては当てはまってる気がする。

子供のころってまるで別人だよ。

そういう意味でも今の幼女な僕は完全な別人なんだ。

でもクリスマスって子供にとっては特別なもんだから、父さんと母さんがいたときは

イヴの夜とクリスマス当日、家で3人チキンとかケーキとか食べてプレゼントをもらっていた気がする。

いや、もらっていたんだ。

でもなんだかそういうのが恥ずかしくなってくる年頃にちよūdふたりとも居なくなつたから、それからは家で静かにテレビとか観ながら黙つて普通にご飯を食べるだけになつた。

まあプレゼントなんて中学生にもなればもらわぬものだろうから良いとしても「世間はやたら騒ぐけど僕は別に……適当な映画でも観て過ごせば良いし……」つていうイベントになつたんだ。

だから家に置いてあつたちつちやいツリーさえ出さなくなつてケーキなんて甘いものも食べなくなつて長い。

せいぜいその時期に買い物をしてしに外かけて町のイルミネーションをなんとなく眺める、そんな程度だつたもんな。

あとはクリスマス特集とかを適当に楽しんだりして。

たつた、それだけだつた。

……あれ？

もともと興味なかつたけど、それにしたつてちよつと寂しすぎた？

青春時代、青年時代としてはあまりにもさみしすぎない……？

ほら、普通の男女はカップルで過ごすって言うし？

……興味もなかったから嫉妬すらしなかったけど……考えてみたらものすごくもつたいたい時間だった気がする。

だって学校って言う場所で強制的に異性と知り合う場所で、せっかくのチャンスを僕から見なかったことにしていたんだから。

そうしてひとりぼっちで10年。

「……ん」

ふとみんなの視線が集まっているのに気がつく。

……ああ、さよの家で派手に飾りつけていたって話だったつけ。

「響、戻って来た？」

「うん……でもそうだったのか」

口が勝手に動いたけどなにがそうだったんだつけ？

ああ、みんなでパーティーの準備してたって話か。

「そーだったの。けど今年はおあずけだねー」

「……君たちですればいいじゃないか。別に止める理由はないよ？」

「ケーキとかもつたいたいなし、さよちゃんのお母さんたちも居るからもちろんするよー？」

けどなんだかさ……メインゲストが抜けちゃうとねー」

「……？　メインゲスト？」

「響さんのことよ、響さん」

りさりんが軽い突っ込みを入れてくる。

……そつか、そうだよな、確かに文脈的に僕のことか……。

あいかわらずの察しの悪さが悲しい。

これでも成人男性だったのにね。

やっぱり引きこもりとかニート経験すると経験値が貯まらないどころかマイナスになるんだろうか。

「さよちゃんのお母さんとかお父さんも楽しみにしていらっしやったものね」

「……はい。私と、同じような境遇……だと、はりきっていました、ので」

くるんさんがさよにその重いものを2個とも載せている。

「あー、そうよねー。病気がちなひとり娘のさよさんの家いきなり私たちが押しかける……いえ、大歓迎されたんだけど。その原因……いえ、この場合はきっかけかしらね、そんな響さんが来られなくなるもの。そりゃあがっかりするわねえ」

「ノリノリだったもんね、さよちゃんのご両親。『4人もお友だちが来るなんて!!』って。

特にお母さんが。……さよもおどおどが抜けたら、将来あんな感じになるん？」

「え、えっと……………それは……………その」

「こら、困らせないっ」

「りさりんも浮かれてたくせにー」

姦しい談笑。

……………クリスマス。

今日はイヴ。

別に恋人じゃなくなつて、家族とか友人……………親しい人と過ごす日だっけ。

なぜにイヴに祝うのかつていうところで未だに僕の中では違和感があるんだけど、まあそういうものだしな。

「……………残念ながら僕自身はそのパーティー、行くことはできなさそうだけど」

「ていうか私たちが止めるんだしね。ぶっ倒れちゃつたらかわいそうだし」

「危ないからでしょ」

りさりんのツツコミが冴えている。

「や、だつて響つてそういうの響自身はぜんっぜん気にしていないみたいだし。てことは外に出てあーなつてもだいじょぶつていうお墨付きがあるからこそ来てくれたんでしょ？」 響ならそーいうの律儀に守る方だし」

「……………まあね」

「どつちかかっていうと倒れちゃったりしてそのまま病院に連れて行かれたりしたらさ。お見舞いにいざ行つたら『ああ、祝えなくて残念だったな』つてこの調子で言いそうだし。そうじゃない?」

「確かに響ちゃんならそうかももしれないわー」

「……そういうのに慣れている身としては……そう、言いたくなります……よ?」

僕が結構分析されている中でさよは僕と感性が似ているらしい。

でも、今日はこの子たちと顔を合わせられた。

心配は掛けちゃったけど……でも、生きてるつて見せられたから安心もしただろう。

「……そのことも、サプライズパーティーをしようとしてくれたことも」

長居できないから告白のほとんどはおあずけだけ……足りないくらいでちようど良いんだ、きつと。

「僕をそれに招こうとしたくれたこと自体にも、とても感謝しているよ。みんな、ありがとう」

「うひょー、かつこえー」

「こら、茶化さない」

「きちんと言えるのは響ちゃんの良いところよねー」

「わ、私も見習わないと……」

ちよつと気恥ずかしいけども、この子たちに3ヶ月も心配させ続けたんだ……ちよつとは我慢。

「……あ。 そういやさ、お別れだつて言うけど」

いつも話題を切り替えるのはゆりかだ。

「入院しているあいだとか……病室がダメなら中庭とか外とかでもスマホとか使えないの？ もし使えないんだとしても私たちが病室とか知つてたらさ、お見舞いとかにも行けるし。 良いのなら教えてほしいんだけどな」

「そうよね！ 響ちゃんと連絡が取れなかつたこの秋なんてずっと！ 響ちゃんにお家の電話番号とか住所とか、そういうのも聞いておけばよかつたつてずーつと後悔していたもの！ それにお見舞い！ 楽しそうよ！ ぜひ行きたいわ！」

ゆりかはともかくがりは本当にもう……。

「……入院。 していると……退屈で、心細い、ですから。 自分だけ、世界から……取り残された感じがして」

「さよさん実感こもつてるわね……。 ま、ほんのちよつと、誰かがときどきにも顔出せば響さんも元気が出るんじゃないかなつて思つてね、みんなでいつか行きたいねつて行つていたのよ。 どうかかな？」

む……なるほど。

確かに入院と来たらお見舞いまでがセットだ。

でも実際には前の僕でも今の僕でも病院になんか縁はないんだし、それに多分またなるとしたって家の中だろうからお見舞いはできないんだ。

「……え、えつと。とても言いにくいこと、なんだけど」

どうしようか……面会謝絶とか言ったらすつごく心配しちゃうしな。

「響が言いにくそうになるってことはもしかして『お家の事情』とやら、ここで出てくるん？ ほら、いつものやつよ」

「あ、ああ……そう、だけど」

……そう言えばそんなのもあったな。

僕的には3ヶ月すつ飛ばしてるんだけどすっかり忘れてた。

だから嘘つてのはよっぽど頭が良くなければ難しいんだよね。

「なんでかって、そりやすぐわかるよ。響がそうやって困った顔になるのってき、病気

とか病院の関係の話とかお家のこと……家族のことだけじゃん。普段私たちが聞き

たいこと、さつきみたい……唐突なこともあるけど、でも先回りして結論から教えて

くれたりするのに、そのことについてってなると急に申し分けなさそーな表情になるし

さ」

「嘘をつきたくないけど、でも本当のことは言えないしって感じよねー」



「それがミステリアスよねーってりさりんとよく話してるのよ」

「あらそうなの？ 響ちゃん、ミステリアス？」

「……………そうらしい、です」

なんか僕のことを僕以上に分かっているみたいなのゆりかとりさ、その少し後にさよ……知り合った順番で言えば確かいちばんのはずなかがり。

……………うん、まあこの子はこれが良いところでもあるから……。

「……………えつと。でも、あまり長話すると響ちゃんの体に障るし、ひととおりの話も聞いたわ？ だからそろそろお開きにしないといけないいわよね？」

「……………うん、そうしてもらえると助かるかな」

ほら、急に真面目になる。

やればできる子なんだ。

やらないのが大問題なだけで。

「……………だけど。もし具合がまたこの前みたいに悪くならなければ。……………またこうして会っておはなしとか……………できるのよ……………ね？」

こうしてちゃんと不安にもなる、ごく普通の女の子。

ただ少しばかりお胸に栄養が行き過ぎてるだけの子。

「そうだね、これくらいなら」

「……そうっ！」

「前からこのくらい……30分とか1時間くらいの外出なら平気だしな。体調さえよければもつとでも。夏もそうだっただろう？」

また魔法さんで冬眠しなければ、これから新しいなにかが起きなければ、だけど。

「……だつたらさー！」

はいはいっとりさりんが腕を上げる。

「今は退院したばかりだつていうのがあるからダメだけど、もう少しだけお家で休んでもらつててね？ 年越しとかお正月とかそういうのならどうかしら！ これから1週間あるし！」

「お、りさりん、いいアイデアじゃーん？ そうだよね、せっかくイベントがぎゅうぎゅう詰めになつてこの時期なんだから、別に今日ダメだからつてそこまで落ち込むことーないんだよね！」

それに釣られる……きつとそうしたかつただろうみんな。

「そうね！ 少しだけなら。ほんの少し来週に会つて少しでもお祝いできたら嬉しいわねっ」

「……念のため、人ごみを避けて……あとは、響さんに直接、その……車とかタクシーで、来てもらえば、そこまでの負担、では……ないと……思います。あるいは、その……」

どなたかのお家とか、でも」

「広さと歓迎っぷりからして、またさよちんのところになつちやうんじやない？ でも毎回は悪いよねえ」

「でも他の家だとそこまで……5人だと狭いし。いえ、別に平気だけど」

「さよちんの家、すつごいからねえ」

「あ、でもりさりんところも」

「うちは年末年始忙しいから……」



「また連絡するから」「もし来られそうだったら来てね」とか。

「だけどもりはしちやダメ」だとか。

矛盾していそうदैて、でもそれがきつと本心なみんなの言葉を聞きつつ外に出て、頼んでいた車に乗り込んで帰ってきてから……ベッドの上で、クッションの下で、だらんとしている。

……タクシーって今はアプリなんだな。

そんな変な感想しか浮かばなかつた帰り道。

まあ10分くらいだし。

でも、僕……変わったんだな。

だつて中学の頃から友達の家遊びに行つたり……そもそもその友達とやらでさえも作る気もなくて、10年近くひとり静かに暮らしてきたのに。

それなのに、それと比べるとたつたの少しだけだつたのに……ここまで、「今の僕」としての生活を手放すのが惜しくなっているんだ。

魔法さんが荒ぶるっていうアクシデントのせいもあつて嘘とウソについて告白できなかつたけど……でもまた会う約束はしたんだ。

それで今日は充分。

元々無理をしていたんだから。

嘘について言うのはもつと条件がそろつたときまで待てばいい。

もう……伝えるっていうのは決めているし、そのための勇気も今日でしつかりとできた気がするし。

「……………」

ごろんと寝返り。

——僕と小さいもの同志とやらで、なんだかやけに古いものと新しいものが好きで、いつもおちやらけていて、でも人のことはよく観察している……距離を取ってくれてい

るようで気がつく顔が近いということが多く、ぱつつんとぱちりお目々なゆりか。

——そのゆりかにいつも振り回されているっていつもぼやいていて、でもそれはゆりかに誇張しすぎだって言われたりしている、いつもちがうヘアピンとか髪型とかなおしやれさんで会うたびに抱きしめ……ハグされるときにはみんなの中でいちばん、なんていうか包まれているっていう感じがする、りさ。

——みんなと話すのにだいぶ慣れてきているのか、さつき会った感じではつつかえたり言うのをためらったりはあいかかわらずにしているけど、でも僕みたいに話しても聞き取ってもらえないっていうのがなくなっていた……いつもだぼとした服を着ていて、それがメガネと、さらに伸びた前髪とで雰囲気が出てきた、さよ。

——着せ替え人形にしてくるときどきのしかかってくるの以外はだんだんとマシになってきたけど、いつも小さい女の子扱いしてくるっていう困った性格をしている……僕が女の子だっていう生きもの、それも中学生の……への立ち回りを実践させられる元凶となった、けど今ではちよつと感謝している……けどやっぱりもうちよつと距離を置いてほしい、かがり。

「そっか」

あの子たちは、とつづくに友達なんだ。

あの子たちからだけじゃなくて、僕からも。

歳も性別もなにもかも違うけれど、でも——こういう関係が、友達。きつと、そういうものなんだろうな。

# 38話 「魔法」 1 / 5

「んくんく」

帰ってきたときにちょうど……スーパーに寄ろうか考えていたけどやっぱりで止めて正解だったタクシーから下りた、まさにそのときに宅配の人が運んできてくれていた重い箱。

こんな雪の日によく持つて来てくれるよね……「やっぱ今日は雪なのでダメです」つて言われるつてばかり。

もう隠れる必要もないからつて玄関まで入れてもらつて「こんなに楽なんだ」つて知つた。

冷蔵庫が空になったからいろんな物を買つたけど、その中で特に大切なもの。

おさけ。

お酒。

アルコール。

まとめで玄関に入れてもらったはいいいけど、そこからひとつずつ開けてひとつずつ出しては台所へつてという難事業をこなして、その達成感で……つい。

やつちやいけないってわかつてるのに、けどまたやつちやつた。  
夕方からのお酒。

なんか僕の中で無意識に「アル中にはなりたくない」って一線を引いていたやつ。

……3ヶ月前のおとといのでクセになっちゃったのかなあ……いや、1回限りだしそこまでじゃないはず。

そう思いたい。

けど始めちやつたものはしょうがない。

もともとお酒呑んでもそこまで酔わない体質だもん。

たまーに朝とかお昼に飲みたくなるときってあつたし……大丈夫大丈夫。

1回2回ならきつと……うん。

気がつけば片手で瓶を引きずり、それを目の前まで引き寄せてきたら両手で持ち上げてぐつとひと息、口の中へ。

いわゆるラツパ飲みというやつ。

幼女の身でやるには腕の力が足りないけど……めんどくさいし。

「……ふはあつ」

とん。

少しだけ軽くなった瓶が音を立てる。



持ち上げたままどころか片手で持ち上げることすらできない腕力だ。たかが小瓶なのにね。

こうして両手で持つているときこそ何ともないわけだけど、片手にした途端に手首がぐきつてなったりその拍子に落としたりしちやったりしちやいそう。

そんなのもつたいたいし痛いかもしれない。

今の僕はそのくらいにはか弱い存在なんだ。

ふつうの人の何分の1か、それ以下の。だつて幼女だし。

◇

魔法さん。

僕にかかっている魔法のような呪いのような……よくわからないもの。

その良くわからなさ加減はまさにねこみみ病とやら。

でも世間で流行つてるとは決定的に違うんだ。

不可思議なのは確かなんだけど……ただの現象的なものなのか意思を持ったそれなのか、それもあいかわらずに分からないもの。

とにかくねこみみ病でもなくて他の誰にも……説明すら難しいこれ。

でも、もしかしたらこれ、時間が経つほどに、あるいは魔法さんが怒る……意志みたいなものがあつたらだけでも……そのたびに強化されるものなのかもしれない。

そう思うようになって来た。

だって初めは僕をこの僕にするだけで、せいぜいがハサミを飛ばしてくる程度だったしな。

不安だったからこそ何も起きないようにしてしてきたから分からないってのもある。

「くくくくくくくくくく」

……いろいろと。

本当にいろいろと、ありとあらゆる僕がしてきたことってというのがことごとく裏目に  
出ちやつたんだよなあ……。

どつちが良かったかだなんて分からないけども。

でも多分、底なし沼みたいな感じになつてる。

いざつてときに僕が男だつて言えばそれでなんか解決しちゃう認識阻害的なものが  
オプシオンでついているんだけど、だからこそ緊急性も無くなつちやつて。

……しようがない。

しようがないんだ。

だってこれまでこんな不思議体験するだなんて……僕とはほど遠い世界の話だけだ  
だつて思つていたから。

誰だつてそうでしょ？

子供のころに漫画とかに影響されるごく一部の時期を除けば、きつとほとんどの人は  
そうなんだ。

ぐびつとやつて、とんつと置いて、ふうつとひと息。

……見知らぬ幼女な身の上は、多少の体重の増減以外には変わらない。

この姿でいること自体、魔法さんの魔法のひとつがかかりっぱなしつていうこと  
でいいんだらう。

もう半年……いや9ヶ月か、それだけ変化なく続いているんだからこれについては  
ほつとくしかない。

特に不都合も……不便ではあるけどその程度だし、なによりどうにでもなつちやうし  
な。

問題は……他の人の認識を無理やりねじ曲げたり僕の意識や体までいじつたりいき  
なり発作みたいになつたり、果てには3ヶ月も冬眠しちゃつたりつていうやつ。

こういうのはいくら探しても……少なくともネットのどこにも存在しなかつたんだ。

見た目が変わることについてならねこみみ病つてことでどこにでもいくらでも転

がつているっていうのに、なにひとつない。

……でも不思議なことがひとつ。

僕が男だったたりねこみみ病だったりを口にしたら何かしら起きるのに、こうして調べる限りにはなんにも起きないんだ。

言葉じゃなければ干渉してこない？

それとも他にまだなにか条件が？

……分からない。

でも、ネット上に一切情報が無いって言うのは当然だって思う。

仮に僕のようになった人がいたとして、明らかに超常的な現象に見舞われたとした人がいたとしたら……常識的な思考ができて、さらに家族とかの身内がいる人なら。

ネットに書き込む前にまずは身近な人と相談してそのあとにどうするかって決めるはず。

他人とか病院とかを頼るのは、そのずっと後。

だつてとんでもないことだもん。

そんなオカルチックなことが起きたりしたら……そもそも他人には分からないかもだし。

僕だったら隠す。

生きるのに問題がないんだから面倒が嫌で隠し通す。

本当に大変なことは表には出てこないし、出せないんだから。

世の中はそういうものだって聞いたことあるし、多分僕ならそうするし。

でも……これだけいろいろ起きて調べて考えてもいまだに原因も目的も……どうすれば収まるのかも不明。

なんで僕なのかも、僕だけなのかすらもわかっていなくて。

いつまで続いてどこまで影響が広がっていくのかも、なにもかも。

「ひっく」

持ちあげるようなしやつくりがひとつ。

……一気に飲みすぎたかな。

けど、今の僕は魔法さんっていう未知の力……意思や指向性があるのかどうかもわからないナニカにこの瞬間、たった今も銀髪幼女になり続けているっていう襲われ方をしているわけで。

それで止めるような何かがないんならかえって安心するんだ。

「ふうへえ」

調べ続けて2、3時間、お酒も飲んで体も頭も心も疲れてきた。

「……わふ」

ぼふつとベッドにダイブ。

あんまり勢いをつけすぎると枕の先の壁にごつつんしちやうからちやんと横向きのモーメントは抑えて、上から落ちる感じでぼふんと。

そしてぼふんとしてふわんとしてぼふつと、柔らかい布団の上に落ちる。

……3ヶ月で一気に入気から冬物へ、雪空だから干すヒマもなくつてただただ押し入れから引つ張り出してきたただだからちよつとほこり臭い掛け布団の上に。

けど今はしようがない。

夏に使っていた毛布だけだといくら暖房が効いていたって寒いんだしな。

「ふわぁ……」

今の僕は体が小さくて軽いから今まで使っていたベッドだつて相対的に大きくなっているわけで、つまりは多少ぼふんとするところがズレたとしたってなんにも問題はな  
いわけ。

そして体がふわんと気持ちいい程度に浮かんで気持ちよく落ちるもんだから、こうするの  
がすつかりクセになつちやつて。

こういうの、いつごろからしなくなるんだらうね。

多分体が重くなつてくるとしなくなるんだらう。

——足の裏がいつも着かないからつてぶらぶらしたり、なんとなく気持ちいいという

か落ちつくから両手をおまたとふともものあいだに挟んで体重を掛けた姿勢をしたり、前の僕じゃぜったいにできなかつた、男の体じやムリだつた女の子座りつてやつもベッドとかクッションの上ではよくするようになっていて。

ごろごろするときもなにかをしているときも、いちいち髪の毛を気にして。

スカートとかで外に出させられれば、急に吹く風とか階段とか座るときとかそういうときに自然と気をつけるようになっていて、手が勝手におまたかおしりを抑えるようになっていて。

知らない人とか店員さんから声を掛けられたり話しかけたりするときは自然と高めの声を出すようになっていて。

……女の子なのか幼女なのか、わからないくらいになっていて。

「うあ——……」

あたまがぐるぐるする。

……そうか、一気に飲むところなるんだっけ。

こういう呑み方しなくなつたから忘れてたよ。

「……………」

でも、多分これって逃避行動って奴なんだろう。

そう頭では理解してるんだ。

魔法さんが荒ぶっている今となっては明日を無事に迎えられるかどうかさえ……なんだ。

だつてこのまま寝て、次にきちんと……10時間も経たないうちに目が覚めるかどうかというのに、保証がなくなつたから。

当たり前だつたものが無くなっているから。

小さいころとか「このまま目が覚めなかつたらどうしよう」とって寝る前に無性に怖くなつたりした覚えがあるけど、あれが現実になつたんだ。

……まあ死んだりすることはない……って思うけど。

この歳になると死ぬなら死ぬで「ま、いっか」とって諦めもつくしな。

それにこれまで起きた、降りかかつてきた魔法さんの仕業のどれも僕に直接危害を加えるものじゃない。

幼女の姿だつてそれだけで直ちに困ることはないっていうのは……周りの人の認識を歪めるっていう形で保証されちゃっているんだし。

ただいろいろとめんどうくさいだけで死ぬわけじゃない。

別に痛い思いとかもしないし特段に嫌なこともない。

初めのころはそれを知らなかつたからこそ苦労したわけだけど。

ハサミだつて……しよせんはただのハサミだし、しかも何度か試したけど結局僕が痛



い目に遭ったことなんてなかったんだ。

ただ僕が髪の毛をある程度以上切るのを止めていただけだった。

害意があつたら多分あの辺でケガとかしてたはずなんだ。

「……………んむ……………ふは」

ずっと布団に顔をうずめていたら苦しくなつて来て、仰向けになつてみる。

「ぐるぐる……………」

天井がぐるぐるぐるぐるしている。

なんだかぽーつとするけど……………残念なことに僕は、前の僕だったときから、かなり酔つたとしてもそこまで思考が止まったりすることがない。

だから酔いつづれるっていうのが難しいんだ。

……………どうせなら、アルコールに弱ければ僕のこれまでのいろいろもつと楽だったかもしれないのね。

そういう意味じゃお酒に弱い人って良いよね。

たくさん呑めないけど何もかも忘れられるんだから。

……………いや、お酒飲めないのはちよつと寂しすぎる。

ちよつとどころじやない、人生そのものを損している気がする。

だつてお酒だよ？

こんなに美味しいんだよ？

あの子たちにしてみればスイーツだよ？

やっぱりこれでいいや。

こうやつてもんもんと考えるのには慣れてるんだから。

「んくんく」

あー、おいし。

38話 「魔法」 2 / 5

「ふ………」

ばたばたとシャツの胸元をゆらゆら。

そうして昇ってくる僕の匂い……甘い体臭。

ミルクみたいな匂い。

ぐいっとお酒を飲んで少しぼーっとしてベッドでぐったりしていると暑いって感じるんだ。

一気に顔までが火照ってくるような感じがして、せつかくあつたかくした部屋が真夏のようになってきたみたいに感じる。

お酒のせいで一時的にそうなっているだけなのは普段の晩酌で知ってる。

だからもぞもぞとだるくなってきた体を動かしながら靴下を脱ぐ。

「……………すんすん」

ちよっとお酒で出てきた汗で重くなっている靴下。

今日買ったばかりのだし臭いはまったくにない。

というか普段も……夏するときも汗臭くなったことないしな。

本気で汗をかいてないからかも知れないけども。

脱ぎ捨てた靴下はそのへんにぺいって放っておいてぐるぐるしている天井を眺めながら、今日の昼間に起きそうになった冬眠について考え直してみる。

ひよつとしたら違うかもしれないけど……でも外で起きたら困るもんな。  
でも……まずもつてなんで3ヶ月とかいう長い時間だったんだらう。

もし魔法さんがねこみ病について聞かせたなくなつてただ僕の意識を失わせるためだけだったらあんなに長期間にする必要がない。

魔法さんが仮に……どうしても僕をここ、家の中、あるいは僕がみんなと秋に約束していた出かける予定のどこかとか……範囲が広すぎてわからないけど、ともかく現実のどこかにいさせたくなかつたんだとしても「3ヶ月寝ててね？」っていうのはちよつと強引すぎる。

まあ理由は考えてもしようがないし心当たりがあるようではなさ過ぎて……しかも直前での心当たりといえませいぜいがお酒なわけで、だから余計にわけがわからないんだけども。

まあさすがにお酒のせいで冬眠とかはないでしょ。

ないよね？

あつたらいくらなんでもしょうもなさすぎるし……。

でも、3ヶ月僕は寝ていた。

眠ったまま起きなかった。

意識は夢の中だった。

9月の初めからクリスマス前日だから厳密に言えば3ヶ月半に近いけど、やつぱりこれだけの時間意識がないままなら脱水症状だけで3日持たないし、長くても1週間。

エアコンが入っていたとはいえ夏だったしな、もつと短いかも。

それにずーつと動かないんだ、寝たきりの人みたいに体がおかしくなるはずだし……足りないエネルギーを補おうとして体のシステムが勝手にせっかく蓄えた脂肪とか筋肉まで使っちゃうから、たとえずーつと健康なまま寝ていられたとしたって……起きようとしても起きられないくらいには弱っているはずだったんだ。

つまりは昨日の朝を無事に迎えられて目が覚めたとしたって、まったく動けずに助けて呼べないっていう恐ろしい状況になっていたはず。

怖いけど、それが現実。

かろうじて手だけを動かして助けを呼べるはずの手元のスマホはとくに電池切れで電話は下の階にあるわけで、つまりはどうしても距離があるっていうことになって、もしぎりぎり生きていたけど動けなくなっていたのならそこまでたどり着けないわけ。

まあ現実には3ヶ月飲まず食わず動かず起きずで生きていられたんだからどう考えても普通じゃない。

異常だ。

成人男性が幼女になるくらいに……いや、どっちの方が上かな……異常なんだ。

だから僕は熊さんみたいに冬眠していて、体温をすごく落として新陳代謝そのものをすごーくゆっくりにしてちよつとずつ足りないエネルギーをわずかな脂肪から持つていく状態だったわけで。

それなら意識がないのも……冬眠中の熊さんはずっと寝ていて夢の中にいるっていう状況的には合う気がするし、目が覚めたら……多少はだるかったりしようともきちんとか体が機能して朝もお昼も夜も……朝は意識していなかったんだからしようがないんだけど、お昼までしつかりとした固形物をいきなり摂ったのに胃とかおなかがやられることもないんだから。

多少体が重かったりふらついたりする程度、「なんだか具合悪いな」って程度で買ひ物にまで途中までは歩いて行けたりもしたしな。

だから。

こんなに「あんまりにも都合が良い冬眠」を人間がしたってことで分かるのは——魔法さんは僕をどうにかしようってはしてないってこと。

意志がないものだとしても、呪いとかそういうものじゃないってことだ。

それどころか僕が困らないように他人の認識をねじ曲げてまで男女年齢を曖昧にしてまで生きて行けるようにしているんだ、きつと長期間寝たままでもなんとかなるよう  
にしていたんだろう。

……年齢。

そう、年齢。

普段から幼女って意識してるほどに幼い体。

肉体年齢は統計的に、平均的に……認めざるを得ないけどぎりぎり小学生になるかならないかで、個人差っていうことでもりもりに盛って3、4年生、僕的にはそれでも認め  
めたくなかったから5、6年生っていうのも……ムリじゃない範囲だとは思う。

でも、そんな僕が中学2年生っていうとんでもないサバ読みをしている。

嘘をついてし出したんだ。

そんな嘘を……個人差ってレベルじゃないのに、今まで会った人たちみんなが信じて  
くれて普通の中学生みたいに接してくれる。

まあどの人も初めは疑惑の目で見てきて話しているあいだに……っていうのがほと  
んどだから、やっぱり見た目は幼女そのものなんだろうな。

帽子とパーカーでいろいろ隠して男子みたいに扱ってくれるだけだしな。

少年も声変わりし出すまで、遅くて中3までは高い声でもおかしくないから……やっぱり子供って見られてるんじゃないか。

男か女か以前に、子供って。

「……子供じゃないもん」

もぞもぞつて胸とお腹と太もと足の裏でベッドのシーツの柔らかさを味わいながら机まで、腕を伸ばして結構無理な体勢でコップからお酒をこくり。

「……ふう」

子供扱いもしようがないよね、うん。

僕は寛容なんだ。

お酒を呑むと気分が良くなるから好きなんだ。

「ふむ……」

こうして手を上げてみると前の手が懐かしい。

浮き出た静脈とか関節の筋張りとか微妙に生えていた産毛とか……特徴はなかったけどぱつと見て男のだから分かる手。

でも今僕の目の前にあつて腕の先にくっついてるのは、そういったものが一切ないぶにつとしてすべすべしているちっこい手。

ちよつとだけ汗ばんでるちっこい手。



「……………」  
今まではぜんぜん疑問にも思うことがなかったけど、実はとっても不確かな状態なんだ。

明日をきちんと無事に何ごともなく迎えられるっていうのが本当に幸運だったんだなってというのが、改めて身に染みてわかった。

そもそも魔法さんっていう得体の知れないナニカに囚われているんだからな。

だから、これまでは単純に魔法さんの地雷をたまたま踏まなかった。

魔法さんが怒るなにかを、生活をそこまで変えなかったおかげで一気に溜めることがなくて少しずつしか溜めていなかったからこそ、半年くらいは無事に過ごせた。

「ふぁう……………」

なんだかたまらなくなつて枕に顔を突っ込んで抱きしめっぱなしにしてみたら枕そのものが熱くなつてきちゃったから、ごろんと離れて天井を見る。

……やっぱり回っているように感じる。

ぐるぐるぐるぐる。

僕は酔っている。

普段とは違う酔い方。

そういうのもたまには良いよね。

だって今日はイヴだもん。

彼女とかはこれまでも居たことがなかったから大してさみしいとかは無いけど、どうせ多くの大人はこの時間帯はお酒を呑んだりしているんだから。

「う——……」

ぼんやりしていると、さつきまでしていたみんなとの会話が……意識したくなくても思い出される。

……そうか、こういうものだっけ、日常のモヤモヤって。

昔は、子供のときは、学生ときは……誰かしらと話したり楽しんだり失敗したりしていたときの僕は、こうしてよくその日の会話を思い出して楽しんだり落ち込んだりしていたんだっけ。

こんなに長いあいだろくに話してこなかったから、こんなのはもう忘れていた気がする。

なにもかもを放りだして、ただその日その日を楽しむ生活しかしてこなかったから。……きつと平和にニートできていたのも幸せだったんだろうな。

「ふう」

さらにぼーっと見るともなく部屋を眺めていたらちよつとだけ落ちついてきたらしい。

ぐるぐるしなくなってきた。

だんだんと眠気がやって来る。

だつて幼女の夜は早いから。

その気になつても深夜を越えることはできない体なんだ。

「……………すび」

……つと危ない危ない、寝落ちするところだった。

なんだか鼻から変な音が出ているのに気がついて時計を見ると15分くらい経っている様子。

僕自身は寝た覚えはないんだけど眠気が取れているような気がするし、ぼーっともしなくなっているし。

……これだけ呑んだんだ、そりゃあ出してから寝たくなるよね。

いや、このままでいいかな？

漏らそうとしてもどうせ魔法さんがなんとかしてくれるだろうし……いやいや油断は禁物だ。

漏らす程度はひとりさみしくぱんつとシーツを洗うだけだからどうにもならず  
に盛大に漏らすかもしれない。

「といれ、といれ……」

みのむしみたいにずりずりと体を動かしながらベッドの上を移動していく。体が小さくなったおかげでベッドが広く使えるようになって嬉しいんだけど、ベッドから降りるときとかにはあいかわらずに不便。

世界が相対的に大きく広く高くなっているんだ、しようがないんだけども。

おととい……3ヶ月前は今日以上に吞んで寝たはずんだけど、でもそれは魔法さんに襲われて冬眠したからっていう特殊な場合だから当てにしない方がいいはず。

……男と女の最大の特徴として、日ごろから実感するようになって久しいこれ……尿意。

耐えがたい、我慢しようとしても無理な、これ。

感じるのもすぐだしガマンできる時間が短くて「今いいところだからもうちよつと……」ってというのが失敗の元に繋がりそうな、膀胱とガマンするための筋肉の問題。

あとついでに歯も磨いていないし口の中がもやもやするしな。

「……………」

ふと思ひ、ぴたつと止まっておなかの中を意識する。

……そういえば僕は今女の子なわけで、つまりは体の仕組みも……病院とかで調べてこそいないものの、でも外から察するに——「中」まで女の子なわけで。

だから、たとえこんなちっぽけな幼女だとしたって——膀胱は男のときの半分くらい

しかなくって、その上には「子宮」っていう男としては想像もしたくないものが、僕のお腹のおへそのあたりにあるはずで。

まだ機能していないだけで、そのうちに機能し出せば内臓ってはつきりと分かるはずのそれ。

だからトイレが近くなつて、こんなに苦労しているんだ。

そしてもし仮に成長して、それが、子宮が……女の子としての機能を持ち始めてしまつたら。

僕は——どっちとして生きてらいいのか分からなくなつちやいそうだ。

人の心つて言うのは脳みそが作りだしたもので、その脳みそは体が動かしているもの。

だから子宮つてのが動き出して、おっぱいが膨らみだして女の子になつていったら……心まで少しずつ女の子になつちやうかもしれない。

でも男の子っぽい女の子も、男らしい女の人も居るわけだし必ずしもそうじゃない。

……僕はどっちになるんだろうね。

「……………」

さわさわ、さわさわ。

おへそのちよつと下を撫でてみる。

その内側にあるだろう、男とは絶対的に違う見えないそれを意識しながら。

38話 「魔法」 3 / 5

僕は廊下で悶えていた。

「ふぐ……うっ……」

なんで僕ばっかりこんな目に遭うんだ。

「うっ……ふ、ぐっ……」

本当に痛いときって声が出ない。

それが僕だ。

かがりとかゆりかとかだどちよつと痛くても叫ぶんだけどあれってどうやってるんだらう。

「うっ……うっ……」

それにしてもひどい。

僕が何をしたって言うんだ。

そうやって廊下でうずくまることしばし。

ひとしきり適当なものを心の中だけで罵った僕は少しだけ落ち着いてきたけど、まだ丸まっている。

だって小指ぶつけたんだもん。  
痛いんだもん。

「ぐす……」

涙ぐんでいるのに気がつく。

本当に痛いんだからしょうがない。

僕は痛いのが苦手なんだ。

なのにこの仕打ちはなんだ。

魔法さんもひどいじゃないか。

そうやって手当たり次第に文句を言う。

小指。

普段は意識しないくせにいざとなるとこんなに痛いもの。

前の僕だったらそれなりにぶついたりしていたけど、今の僕になってからは……その、体のサイズ的にも視点の低さ的にも壁のコーナーのところとか家具とかそういうものが大きく見えるわけで、だからこういう問題は起きなかつたのに……やっぱリアルコールって注意力が落ちるんだなあ。

さつき寝落ちしかけたし。

それにしても痛い。



もういやだ。

僕が何をしたって……幼女のくせに飲酒したか、そう言えば。

「……………良かった」

爪は割れてないし赤くもなっていない。

本当にちよつとだけこつんつてやっただけらしい。

そうして小指を確かめるためにしやがんでいたら、ぽつつとしずくが床に落ちた。

「……………まさか……………」

出所を探る。

「……………ちがった……………」

……………目からだった。

急に痛みが走つてびっくりして、それでどうとうやらかしたのかと思つたけどそういうわけじゃなかった様子。

よく考えたらおしっこをがまんしている状態でしやがむつていうのは漏らそうとしているとしか思えない状況だ。

だつてふとももをおなかに押しつけて、つまりは押し出そうとしているわけで。

危ない危ない。

この歳で……………幼児になつてるけど漏らさないように気をつけないと。

脚や腕とは別に、ぎゅつと出口のあたりに力を入れつつ起き上がって廊下をそろそろと歩く。

ベッドからずると降りてそれから部屋を出るときに、もういちど迷ったんだ。

もうこのまま寝てもいいんじゃないかって。

でもやっぱりダメだ。

あれだけ呑んだんだ、水分が豊富に蓄えられていてそれが一気に下に来たとしても……その勢いを抑える筋力も容積も長さも足りないこの体じゃ、こぼしてしまう危険がある。

漏らしてしまう危険性がある。

それはとてもまずい。

というか確実に明日の朝にひどいことになっている。

いくらなんでも肉体こそ少女になったとしたって精神は大人のままで。

この年で漏らしたらさすがの僕でも……魔法さんとか嘘のこととかじゃなくつても相当に凹むだろう。

だから僕はトイレに行っておかないとならないんだ。

そうは思いつつも歩きはどうしてもゆっくりというよりもよろよろとぼとぼという感じになる。

だって酔っているせいで体の感覚鈍っているし……そのせいでぶつけたし。

あとののくらいで漏れそうなのかもいまいちわからないっていうのもあるしなあ。

漏らさないために踏ん張っているはずの僕のおまたの筋肉も本当はどれだけ耐えているのか、そもそもどのくらいピンチなのがわからないから。

とっさの痛みを感じてぎゅーっとしゃがんでいる程度じゃ漏れないくらいだっていうのはさっきのようでよーくわかつたけど……やっぱ1回くらい漏らしてみないと界って分からないよなあ……でも漏らしたくないしなあって言うループ。

でも1回でも漏らすと幼女への階段を登っちゃいそうだから嫌なんだよなあ。

……今は急ごう。

なめくじみたいにすり足で壁伝いで歩いて確実に。

ああそうだ、トイレで出しておいたらお水も飲んでおかないとな。



「……………はあああ……………」

自然と漏れる声。

遠慮がいらぬ分いつもより大きいかもしれない。

しやあああつていう水しぶきの音もいつも以上。

あいかわらずにすごい音。

男だつたときにはよっぽどのがあつても聞くことのなかつたシャワーのようになっているこれ……ほんとすごい。

シャワーのノズルをひねると周りにしやあああつて広がるモードとまつすぐにびゅーつて出るモードがあるけど、ちょうどあんな感じ。

女の子はみんなこうなんだろうか。

気になるけど知りたくない気もする……もう彼女どころか結婚していてもおかしくない年齢なのにどれだけ子供っぽいんだろうなあ……。

いつものだけどその何倍か増しになっている、下の大洪水。

さつきまではぜんぜんまだまだ余裕だつて思っていたけど、座つたとたんこれだ。

やっぱり短いっていうか外に長さが無いぶん緩めるとすぐに出ちやうしくみなんだろうか。

横着してあのまま寝なくてよかつた……じやないとこの量だつたら……。

あのととき廊下でも無意識でふんばつていられて本当によかつた……。

ベッドがびしょ濡れになるよりははずとマシだけど、でも逆に廊下つていう毎日歩いているはずの場所でおもらしとか通るたびに思いだしてトラウマになりそうだし。

しやああああ。

それにしても止まらない。

いったい何十秒続いているんだろうか？

頭が回らないせいで、アルコールと寝そうになっていたので余計にぼんやりしている今の僕にはわからない。

ひよつとしたら一分くらいかかったのかもしれないけどアルコール臭が混じったおしっこを出し終えてほーつと気持ちよくなった。

ガマンしていたっていう膀胱が張り詰めそうでおまたの筋肉が踏ん張っていた感覚と、それをせき止めていたそれを、しやーつと出していた感覚とが一気になくなってぼたぼたと落ちる程度になってきたら、今度は別の……生理的にイヤな感覚が襲ってきた。

「……………うわぁ」

……勢いがすぎすぎて太ももの裏までびっしりになっていた。

それも膝の裏の近くからおしりまで、もうまんべんなく。

まだほのかに温かいけどすぐに冷たくなるだろうこの感覚。

普段なら少し飛び散る程度で済むのにこんなにつて……やだなあ。

けど、こういうときはビデっていう機能……母さんが使っていたとしても、それから

最低でも10年は使われていなかった、この機能。

もちろん勢いは弱くして軽くおまたを濡らすだけにはなるけど……そのおかげで清潔な水を染みこませたトイレトペーパーを使うっていうのができるから、おしっこを拭いただけでいちどトイレから出てお風呂に入り直すっていう手間が省ける。

柔らかくて温かいお湯がおまたにかかり始めたらトイレトペーパーを重ねて取って濡らしてふとももの内側と裏側をきれいにする作業に入る。

もちろん1回じゃムリだけど何回か拭いたのを見ても黄色くなっていないし、どうやらきれいにできた様子。

……本来の機能じゃないけど、これはこれでお役立ちだな。

普段からしているからどのくらい濡らせばいいのかもだいたい分かるしな。

そうして水気を感じながら綺麗にしてもういつかいから拭きして、ふと思う。

……女性は男よりもトイレトペーパーを使うって聞いていたけど、もしかしてこういうこと……？

いや、そりゃあ生理が……少なくとも今の僕はないけど、それなのに前に比べれば……とくにおしっこでたくさん使っているし。

たぶん毛とか生えてきたらもつと濡れる……のかどうかはわからないけど、とにかく成長してきたらもつと使うようになるはず。

……慣れて来てはいるんだけど、でも。

こういうときばかりはこんなことには絶対にならない前の僕の、男だった体が恋しくてしようがない。

男の体つてのは本当に便利だったんだ。

いろいろと、あらゆる面で。

女の子なんてちっちゃくてめんどうくさいだけじゃないか。

「すつきり……ふう」

トイレから出た僕はおかげで酔いも一気に覚めた感じ。

緊張からの脱力で眠くなるかと思っていただけ、どうやら違うらしい。

それならあとはお水を飲んで、あとあと忘れていた寝る前の歯磨きももう1回。

ならさっさと下に降りて……あ、ついでに食器も洗っておいて、あとは部屋に置きつ

ぱなしのコップとかを。

「……………え？」

視界がおかしい。

傾きがおかしい。

階段を降りようと思ってたのに、なぜか段が斜めになっていて壁みたいになっている

？

なんで？

「……あ」

いや、ちがう。

僕が斜めになつていて前のめりになつていて——ふわつと浮いた感じがあつて。

1度に情報が、回らない頭に意識に遅れて入ってくる。

そうしてさつきぶつけた小指に加えて中指くらいまでじーんとした痛みがあつて。

……まさか階段の手前かどつかでつまづいて……落ちそうになつてる？

「……………っ！」

もう、傾きのに止められない。

できることと言えばとっさに腕を突き出すだけ。

それ以外にできることなんてなんにもないんだ。

ぼーつとしていたからいつもみみたいに慎重に手すりを両手でつかむつていう、今の僕

にとつて必須な動作を忘れていたのかもしれない。

「わたつ、たつ」

まずい。

まずいまずいまずい。

転びかけているのに気がつけたはいいものの、もう間に合わない。



このまま下へ一直線だ。

いや、きつと顔とかおなかとか膝とかを階段の角張ったところに何回か思いつきりぶつけて、バウンドしてくるくる回って——そして階段の下の踊り場の先の壁に激突して。

……頭とか背中から落ちれば、大ケガ。

体が軽いぶん打ち所がよっぽど悪くなければそれで済むはずだけど……でも無傷ということはないはずで。

それに軽すぎて変な方向へ飛んじやったらそれこそ危ないんだし。

けど、こんなことを考えてる余裕はあるのに、体もそれを動かそうとするための反射神経も言うことを聞いてくれない。

アルコールが入っていてさっきまで寝そうになっていたから。

我慢していたおしっこをまとめて出して気が緩んでいたから。

そうして目が覚めた気になって、下を見ずにぼーとしていたから。

——足元がふらついてるってさっき分かったばっかりなのに。

小指を痛めてうずくまってたばっかりなのに。

どうしてすぐに忘れちゃったんだ。

いつもみたいに手すりにつかまって片足を下の段に下ろしたらもう片方も同じ段に

下ろしてつていう子供みたいな降り方、この半年のあいだ今の僕になってからずっとしていた降り方をしていないかったせいで——もう、止まらない。

受け身なんて取れやしない。

僕は運動とは無縁だったんだ。

ましてや今は幼女だし。

そんなことをできる瞬発力も訓練もしていない。

そうして僕は、僕の意識は正しく状況を理解していて……けど体のコントロールは利かなくて、でも汗はぶわつと出ていて。

なのに目の前はものすごくゆっくりと動いていて。

全てがスローモーション。

「死」を意識したときになるっていう、頭の中、意識だけが高速で動いていて周りがゆっくりになっているみたいに見えるっていうあれ。

つまり僕は、僕の意識は……「死」を生まれて初めて意識、知覚して危機感を持つているわけで。

「……………」

どうにかしようって思ってたけど、ふと「それ」に気がついちゃって力が抜ける。

——このままなら、楽に。

めんどくさいこともどうでもいいことももう経験しなくていいんだ。

ちよつと痛いって思つたらもう僕は居なくなつてゐるんだ。

……僕には家族なんていないっていうひとりぼつちな中で、残りの数十年つていう長すぎる時間を……これもまたひとりぼつちで過ごすことになるのなら。

幼女のままでいずれば不審がられて付き合ひはなくなるし、幼女から女の子に成長しちやつてもやつぱり身の振り方を考える必要があつて、男に戻れても……残りの人生をその辺に居る男つて悲しい生き方をするだけ。

……今夜はたくさん呑んだよな。

今日はみんなに会つた。

昨日もあの人たちに会つた。

3ヶ月前には昔の知り合いたちに、お隣さんにも会つた。

——なんか、それだけで充分な気がしてきた。

「……も、いつか」

こんなときでも口は動くんだ。

女の子だからかな。

そんな呑気な感想が頭をよぎつた。

## 38話 「魔法」 4 / 5

いつも見ている階段が斜めになっていて、僕の方に……まるで壁みたいにせり上がってきているっていう光景。

いつも見ているはずだけどもとはまるでちがう光景。  
僕が落ちかけているから世界が変わって見えているんだ。

階段から落ちるっていう特に理由もなく……いや、理由といえはるにはあるんだけど、でもはてしなく悲しい理由で落ちているから。

でも階段から落ちるっていう大変だって分かっていても10年に1回くらいはどこの家でも起きる事故はすぐそばだ。

ずーつと気をつけていた、身の丈に合わないサイズの階段を1段1段気をつけて降りるっていうめんどくさいけどもう慣れきっていたはずの作業を怠ったから。

忘れていたから。

アルコールと尿意と眠気のせいだ。

これから何ごともなく過ごせちゃうって思ったっていうのとおしっこを出し切れた

安心感のせいだ。

少しずつ近づいてくる階段を、その先の床を、ぼーっとなすすべもなく眺める。

時間が細切れになっているような、そんな感覚。

スローモーション。

一時停止。

怪我。

死。

ふと思ひ浮かんだ言葉、概念、現象。

打ちどころが悪ければそうなるかもしれないもの。

幼女っていうことで体が20キロもないちっこい体で、だからこそケガをするに当たってきつと軽傷で……運がよければ打ち身程度で済むんだって思っていて、その可能性の方がずっと高いんだってわかっていても。

どうしても最悪の状況っていうものを……いつものクセで考える。

無駄にいろいろ頭を回して疲れさせるための習慣。

——死。

ある意味で救いで、僕の、唯一の肉親のいるそこへ行ける、それ。

肉体から……この訳の分からない状況から解放される、現状で唯一の方法。

——死。

あの世。

空は水平線でぐるりと海と一緒になつてくつついていておんなじような青い色で、でも空の方は薄い水色が高いところまで果てしなく続いていて、海はもう少し濃い色とエメラルドグリーンとが混じっていて、ひとこと言えばとつてもきれいで美しくて。

潮の香りも波の音も海から吹いてくる風もみんなみななとつてもすがすがしくて、熱くもなく寒くもなくちょうどいい感じ。

島だつてどんな人だつて夢見ているような自然豊かで、でもきちんと人の手が入っている程度のこんもりとはしていない感じの自然な楽園で。

きれいなビーチが広がっていて砂の粒はさらさらしていてゴミはひとつも落ちていなくて、海はしよっぱくつて。

ああ、砂浜だけは気をつけないといけなかつたんだな……けど靴だつてすぐに履いていることになつていたからあれはほんの一瞬だけのことで、だからなにひとつ心配する必要はなかつて。

ヤシの木みたいなのがいっぱい生えていて落ちてきたら痛そうで、ぽつぽつと木とわらとでできた木陰で休んだりするためだろう建物があつて、風情があつて。

そこからはいくつつかの丘や山、けどそんなにきつくもないもの、そこに道がきちんと敷

いてあってそこからの見晴らしもきれいで。

山のとつぺんからはビーチと町との両方が同時に見られて、とてもいいところで。

町だつてちらつとしか見ていないしなによりも誰もいなかったんだけど、でも独特の……木がメインだけど不思議な感じの金属が混じっていたり斜めにくつつけられていたりして、興味深くて。

あの倉庫みたいなどころだつて、探検してみたらなかなか楽しそうで。

五感があつたぶん、まるでほんとうに理想の世界で。

厳密には誰もいないわけじゃなくつて。

黒あめさん、髪の毛が真っ黒で、けど日焼けして少し茶色がかっていた感じもする、話し好きで「お姉ちゃん」つて言つてほしがるアメリ。

元気な子、燃えるように透明な感じの赤髪のタチア。

おどおどしていても安心できる輝く金色の髪の毛のノーラ。

そういう子たちが……僕の色違いつていう、想像力がないからかみんな顔も体つきも同じ感じで、けど僕とそっくりなのに少しだけ大きい子たちがいて。

ひとりじゃなくて、僕が僕であることに……嘘をついたりしてそれ誰にも言えなくてこうして悩んだりしてきても良いつていう……そんな、夢みたいな世界。

探せば……ひよつとしたらまだそのへんをうろろして意外とあの世を満喫してい

るかもしれない父さんと母さんだつて……僕を待っているのかもしれない。

つまりは冬眠つていうのは、僕がそこへ行くための。

死つていうのは、そのための。

……………うん、知ってる。

死後の世界なんてないつて。

少なくともいろんな本を読んだ僕はそう結論づけている。

臨死体験とかもみんな脳みそが危機を覚えて作り出したもので、死んだらそこまで。

パソコンとかスマホの電源が入っていない状態になって、そのまま処分される感じ  
で。

でもあの夢を見て思うんだ。

感じるんだ。

もし死後の世界つていうものが、あの世つていうのがあんな感じだったとしたら。

こうしてぐだぐだとひとりで悩み続けてこの先何十年もひとりぼっちでただただ生きていくよりも、いつそのこと死ぬのも悪くはないかもつて。

『響ちゃん、次はこの洋服着てみましょう！ これも似合うと思うの！』

『ひびきー、助けてえー。 どーあがいても伸びるどころか縮んだー!!』

『響さんつて不思議よね。 あのゆりかにここまで懐かれてるなんて』



『……病気があっても……自分の思うように生きたいです。響さんのように』

——いや、まだだ。

まだあの子たちに、ほんとうの意味でのおわかれを告げていない。

結局あのままにお開きになって「それでもまだ会ったりはできるよね」で終わっちゃった、あの子たちに。

友人として意識して、まだ1度も。

たつたのついさつきに会ったときに意識したばかりだけれども。

それに「まだ大丈夫だったら」っていう条件付きではあるけど。

年越しで会うことを約束しているんだ。

新しい未来の約束、予定……しなきゃいけないこと、したいことが何年ぶりにあるんだ。

1回……いや、ただでさえ秋に予定していたたくさんの約束を破っちゃったんだ。

これでまた破ったり死んじやったりしたら、本当の意味で約束を反故にすることになるなんていうのは。

とても、





◆◆◆◆◆ちりちりちりうるさいけど、今はそれどころじゃない。

あの子たちにこのままもう2度と会えなくなるなんて。

せつかく僕のことを……10年くらいぶりに、ずいぶんと年下の女の子たちではあるけど、でも友人として見てくれたあの子たちにきちんとしたおわかれもせず「約束」も果たさないまま、このまま終わるなんて。



◆◆◆◆◆……うるさい。

僕は今、考えているんだ。

こういうときくらいは静かにしてくれ。



ナニカがすつと離れて行く感覚がするけど、そんなのはどうでもいい。

このままは嫌だ。

嫌なんだ。

ただひとり孤独に死んで……誰も僕の家を知らないから当分は気がつかれない。

冬場だし廊下には暖房も効いていないし雪の時期だから相当気がつかれない。

お隣さんも僕が嫌がるからってここ何年も家に様子見に来たりはしないし、電気も点きっぱなしで無事に過ごしているって思うはず。

それに僕は思いつきでふらつと、何年も前からひと月ふた月は旅行とかで平気でいなくなるし、しかも冬眠のせいで最近に3ヶ月もいなかったことになっていたんだ、しばらく姿を見せなかったとしてもきつと不審に思いやしない。

だから何ヶ月かって叔父さんが……メールでの連絡に返事がないからって初めて気がついて家を訪ねてきたときに初めて——前の僕でもなくて今の僕っていう「正体不明の誰か」が廊下の下でホネになっっているのを発見する。

いや、ひよつとしたら死んだら魔法さんも離れて行って前の僕の亡骸だけが残って——「僕」が死んだってというのがわかるのかもしれない。

けど、それはどうでもいい。

それよりも、誰にも僕がこの世からいなくなっていることにすら気がつかれないまま、このまま終わる。

終わってしまう。

僕は、そんなのは嫌だ。

だってなにかも中途半端過ぎるじゃないか。

なにより僕はあの子たち……友だちにまだ、嘘のことをひとつも話していない。怒られてさえないない。

謝つてもいない。

許されるかどうかはわからないけど、でも事実を伝え切れていない。

僕が「中身は男だ」って。

それも「君たちの倍くらいの歳」なんだって。

でも……友だちとして見てくれてとても嬉しかったんだって。

騙してごめんね、そんなつもりじゃなかったんだ、でもありがとう。

死ぬのならそれくらいは言っておきたい。

」

なにも見えない。

体の感覚もなくなっている。

きつと思ひ切り打ち付けた痛みを遮断しようとした僕の脳みそが今だけはぜんぶシャットアウトしているんだろう。

そういうのを事故に遭った瞬間の回想の話とかで耳にしたことがある。

だからきつと今の僕はあちこち痛いはずで、あとはうまく頭と顔を守れるかどうかなんだ。

なるべく頭を抱えるようにして体を丸めて少しでも守らないと。

目の前がざあつと切り替わる。

アメリカが僕をぶんぶん振っていて、その遠くでタチアとノーラが走ってきていて、さらにそのあとから具合の悪そうな顔つきをしながら——今の僕を何歳か成長させたような顔つきと体つきをしていて、けどまだまだ中学生を出ない範囲の幼さで、体も少しだけ女の子っぽいのが脚つきからわかるけど、でもだぼつとした硬めの生地 of 服装のせいで、それがわからなくて——けど顔ははつきりとわかつて。

……髪の毛は光に照らされてきらきらと銀色に輝いていて透き通っていて。

重そうなまぶたを限界まで見開いて、その奥の薄い瞳が僕とびたつと合つて。

つまりその子は僕をただ何年か過ぎさせたような成長させたような姿そのままです。

聞こえるように聞こえない、けど声は僕よりもいくらか大人びている感じで。

その子／ソニア／「響」／僕／「僕」からなにか銀色の光が、僕の方へ向かってきて。



僕は、銀色の◆／星に、包まれた。



「? ……さつきちゃん、何か音したかしら?」

「……………ううん。 なにも聞こえなかつたよ、お母さん」

「そうかしら……雪でも落ちたのかしらね。 響くんの家、雪かき必要かなあ」

「……………きつと近いうちにするつもりなんだよ。 響お兄ちゃ……響さんだから」

38話 「魔法」 5 / 5

「……けほっ……」

なくなっていた音が……なんにも聞こえなかった耳が、次第に戻って来たらしい。

「けほ」

僕の荒い息づかいも心臓がぼくぼくしている音も、それはもううるさいくらいにちやんと聞こえる。

体も温かくなってきたてぬくもりがあつて指の先や耳までぼかぼかしている。

そうしてぶわつとあふれてくる汗。

何が起こつたのかが分かつて、止まっていた思考が動き出したからなんだろう。

「……」

ちりちりつという魔法さんの……いや、あの夢の中で感じた感覚はもう居なくなっている。

銀色の◆／星みたいだったあれも、もう……すうつとどこかに行っちゃっている。

なにもかもがきれいさっぱり消えている。

五感は戻っているけど、どこにも変なところはない……らしい。

「ふ……ふ……ふ……」

耳を澄ませているとだんだん僕が息をしている音だけが聞こえるようになってきた。手や足に気を配ってみると思っていたとおりの、……しなきやつて思っていた卵みみに丸まっている姿勢な様子。

とつさの受け身なんて無理って思ったけど……体が軽くなって邪魔するものが無かったからかちゃん丸くなれたらしい。

そしてときたまばらばらと何かがはじけるような落ちるような音。

……なんともない……痛くも何も……？

そろそろと目を開けてみる。

入って来るのは僕の腕。

感覚のとおりには頭を守ろうとしてぎゅっとしていたらしい……筋力が足りていないからかぶるぶると震えている僕の細い腕が見えた。

ゆっくりと、折れたりしていないか確かめるためにことさらにゆっくりと腕を下げてみる。

……大丈夫、なんにもなっていない。

その腕を動かして頭を触ってみるけど痛いところもないし血だつて出ていないし、た



んこぶですらない様子。

今のところは。

事故とかに遭うとその日はぜんぜん平気なのにつてことが良くあるらしいから油断はできないけど。

髪の毛が目の前に散乱しているけど……ちよつとびつくりしたけどそりやそうか、だつて2回から飛んできて1回に着地、したんだもんな。

髪の毛だつて釣られて動いて僕の前のほうでばさあつともなる。

……こういうどうでもいいことを考えられるくらいには思考は正常で、少なくとも今のところ……アドレナリンがどばどば出ているからかもしれないけど、でも体も動かせて、少なくとも折れてはいない。

……最後にちらつと見えたけど、たしか僕は頭から下に突つ込んだんじゃ……？  
なのはどうしてこんなにきれいな姿勢で。

「……………ふむ」

もうちよつと体をぐねぐねしてみる。

ぱらぱらぱちぱちと、やつぱり……なにか小さいものが落ちるような、そんな音がする。

……でも、首も肩も、背中もおなかも、腰もおしりも脚も……あ、ぶつけた小指だけ

痛いけど、でもそれ以外にはどこも痛くもない。

そろそろと体を起こしてみる。

……打ちどころがともよかった……？

そう思つて一瞬油断した僕はびくつとなる。

「……ひうあつ!？」

やだ、変な声……こつつと頭になにかが落ちてきて死ぬほどびっくりした。

これまた反射的に頭を抱え込んで、気がついたときとおんなじような姿勢を取つていた。

2度目だからそれは見事な卵になつて。

……こういうのつて小学校のころの避難訓練とかが身に染みているんだろうか。

けど別に痛くもないしじーつとしていてもなにも起きないみたいだから、今度こそゆっくりと体を起き上がらせてみる。

「……あ、あー。……問題なし」

声も出せる。

それが聞こえる。

おしりは下についたまま首と腰をひねつて後ろを見てみると僕がうずくまっていたのは踊り場、ちやうど落ちるとしたらつて思つてた場所で、さつき転げ落ちたはずの階

段もしつかりと見えて。

僕はなんともなかった？

実際にどこも痛くもないし血もなにも出ていない。

けど、今こつんと落ちてきたのは？

なんだか体じゆう……髪の毛とかにいろいろと乗っかっているなあって思っていたうちのひとつをつまみ上げてみると、それは薄っぺらい素材のなにかだったり、あるいは木の破片だったり。

「……壁の、もくざい？」

剥がれ落ちたもの？

そう思つて僕がぶつかったと思しき踊り場の壁を見あげてみると「まるでなにか大きなものを横向きに落としたかのように」——ちようどこの前に測つたときの体重の20キロつていう重さ……よりもずーっと重くて硬いようななにか、そんな感じのものがぶつかったような、そんな亀裂が入っていてへっこんでいて。

ぱらぱら……つてときどき欠片が落ちてきて中の建材がむき出しになっている。

「……わ」

なんだか怖いから脚に力を込めて少しづつ起き上がつて、ぱらぱらと僕の体から破片みたいなのが落ちる音を聞きながら立つて様子を見る。

それをもうちよつと遠くに離れて……だって危ないし……見ようとしたら足元がごつごつしている。

「？」

なんで？

そう思つて足元を見た。

見てしまった。

「びいっ!？」

いつぞやに聞いた覚えのある変な声。

汗がぶわつと指先までじわつと出てきて「危ないかも」ってわかっているても反射で

ぱつと後ずさる僕。

……木の床だったところ……踊り場つてやつ、階段の下の床だったところ。

毎日何回も踏みしめていて、目をつぶつたつて1階と2階を往復できるくらいには慣れ親しんでいた、階段を上り下りするための最初の段。

——それがクレーター状に壁よりも大きくへっこんであるんだから。

めりこんでいるんだから。

ちよつと僕くらいの大きさに丸く、卵のように。

何か見えない楕円な球体に押し潰されたみたいに。

木だつてもちろんひしやげるところか……あちこち裂けて折れているし、その下からはなんだかよくわからない白っぽい素材のなにかが顔を覗かせているし。

「ひいつ……」

……たとえこれが僕が落ちた衝撃で、家が古いせいで——いや、それでも壁と同じようにおかしい。

だつて、たかが20キロだ。

子供の体重で子供の体の柔らかさだぞ……？

そもそも1回壁にぶつかつての落下だろうし、落ちた衝撃で……落下モーメントつていうやつでこうなつたとしてもそれにしてもそれにしてもは派手すぎる。

裂けていない木なんかはぐんにやりと曲がっているし。

むしろ僕の方がずっと柔らかいはずなのに。

なによりこれだけの被害をもたらしたはずのやわやわな僕の体は、このとおり……とつきに動けて声が出るくらいには、痛いのがさっきの小指から中指くらいしかなくらいにはなんともなくつて。

……明日どこかが痛くなつたら病院行こう。

大丈夫、不審に思われる前に魔法さんで認識変えられるから。

今は分からないけど……でもなんとなく、根拠のない「僕は傷ついてなんかいない」つ

ていう絶对的な自信があつて。

ということは一——これもまた魔法さんのしわざ。

あるいはおかげ。

それしか考えられない。

僕が運良くパウンドしてケガをしなかつたとしても家がこんなにぼろぼろになるはずがないし、木材が経年劣化で……築20年経つてないのにないって思うけど……そうだったとしてもこんなにぼろぼろになつてゐる時点で僕の体も同じくらいぼろぼろになつてなきやおかしいんだ。

今度こそ裂けた木のとげとげとかでケガをしないようにそろそろそこを離れ、無事な廊下についた僕は……そのまま脚の力が抜けて、ぺたりと。

普段からよくしているように、クセになつちやつたいわゆる女の子座りに両手を真下に下ろす感じにして……なんだか安心するからつてふとももの内側で両手を抱え込んでぎゅつとして、あつたかくなつて。

……腰が抜けた感じなのかな、これ。

よく分からないけど……どこも痛くない。

落ちてから数分は経つてゐるはずだけど、だから落ちたばつかりのときの興奮はとつとに収まつてゐるはずなんだけど、でもそれでも痛くもなんともない。

明日にならないと分からないんだけど、たぶん僕は……あんなにも懂れて、けどやっぱり心残りがあからつて戻つて来たけど、でも——「死ぬ」ことすらできないのか。魔法さんのせいで。

魔法さんのおかげで。

今までさんざん僕をもてあそんで振り回して苦労させられた、その存在。

「……ぼくを、どうしたいんだ」

呟いても当然に答えは返つてこない。

……僕にはもう、本当にもうなにひとつ分からない。

魔法さん。

それは僕をここに……この得体の知れない体に閉じ込めるものなのか、それとも僕を助けるものなのか。

それともなにか別の。

「……………もう、いいや」

どうしようなんて考えるのもばからしい。

体の力を抜いて床へ寝そべり、こつんと頭を床にくつつけてひんやりする。

もう、どうでもいい。

いちいち魔法さんについて考えるのも落ち込むのも……もう、疲れた。





# 39話 去る年と、来る年 1/6



足を下ろすと途端に厳しい寒さが襲ってくる。

「……………むむ……………」

おもわずぶるつとなつちやう寒さ。

体感的にはまだまだまだ残暑厳しい世界から放り込まれた印象の僕にとってではなかなかに厳しい限りだ。

……それにしても年末の神社っていうのはこんなにも寒くて雪のなごりがまだそこら中にあるっていうのに、もこもこした服を着た人たちがたくさん集まっている。

それでも駐車場のここはまだマシな方。

こんな車で来ていてもそんなに注目されなくらいなんだしな。

「カイロを( )所望ですか」

「いえ、すぐに屋内に入る予定ですから……送ってもらってありがとうございます。」

あの人たちによろしくお願ひします」

「……それでは」

ちよつと外国訛りな低い声で話しかけられる。

僕を送つてくれた人のひとり。

そんな人たち、こんな真冬なのにスーツを着た男の人たちに頭を下げる僕。

タクシー代わりには随分と物々しい雰囲気だけど助かったんだ。

ぱたんと閉めてくれたドアから離れて振り向いてあいさつだけをして、僕は人の波に紛れて一途境内へと向かう。

人がごみごみしていいやだったけど、でも来てつて言われていた場所は人がいちばん集まるメインの本殿……拝殿とか言うんだっけ……からは渡り廊下つていうので繋がつてはいるけど、でも離れた建物の前。

『来れば分かるから大丈夫よ！』つてりきりんが言つてたけど本当かなあ。

「うーん……」

でもとりあえずこの人混みからあの子たちを探す作業が始まる。

みんなに誘われて来た年越しと初詣のための神社で。

今夜はできたら朝まで起きていたいって言つていたただの飲み会……じゃないよな、中学生だし……年越しを遊ぼうつていうだけかもしれない。

学生にとつては夜更かししても怒られない唯一つて言つていくらいの機会だもん

な、はしやぎたくなるのも無理はないよね。

年越しそばとか以外にもお菓子とか用意しておいて、お酒……が無いのは残念だけどトランプとかゲームをしたりテレビを観たりして……お酒がないのはものすごく残念だけでも。

今日は大みそか。

夜には交通機関は止まっている。

そもそもまだまだ雪が残ってるからバスとか動くかも怪しいしタクシーも捕まるかどうか分からない……そうだからってある伝手で回してもらったさっきの車だ。

あの人たちに送ってもらったから体力は大丈夫。

だけど人が多すぎてみんなを探せない。

そもそもが夜で暗くって、神社の境内って言う普通の場所よりもさらに暗い場所なわけ……空だつてなんだか曇っているしかなり暗い。

時間はだいたい合っているはずだからみんな引つ込んじやっているっていうのはないんだろうけど……僕の身長的にかなり大変な作業になりそう。

……見つからなかったら諦めて帰りたいくらいそう……ほら、僕って一時期対人恐怖症も群衆恐怖症もあつたからぶり返したら困るし……。

ほとんどの人が僕よりも背が高くて……それだけならまだ普段出かけるときと同じ

だからいいとして、問題はお行儀よく年越し前の参拜で5、6列くらいに並んでいることとで。

だから人がぎゆうぎゆうになっていて壁みたいになっちゃって、反対側を見るためにはこの長い列をひたすら戻って境内の入り口との往復。

わざわざそのどこかを「通ります……」っていいながら通してもらうなんていうのは僕にはできない。

できたら苦労はしないよね……そもそも声が届くのかどうかさえ怪しいんだし。

気が弱い人間の宿命だ。

あとそうなるとうしても見上げなきゃならなくなるわけで、つまりは顔が見られて目立つちゃうわけで、この姿だとしても……どうしても、これはもうしょうがないことなんだけど、でも必ず一瞬「え？」って反応されるからあんまり好きじゃないんだよなあ。

つくづく普通の男だった前の姿が恋しい。

目立たないって素敵。

だからなるべくなら他人と顔を合わせたくない。

それに上を見上げたらコートのフードを被って顔を隠している意味がなくなるんだし。

いくら魔法さんのおかげで不審に思われなくなっているっていつても、でもやっぱり注目されるのは僕の性格的にイヤなんだ。

いやなものはいや。

生理的に無理。

無理なものはいしよがないよね。

そういうわけになるべくなら顔を隠しておいて「なんか小さい子がいる」程度の認識で気に留めないでほしいところ。

「……でんわでんわ」

電話は苦手だけれどしよがない。

この歳になってもどうあつても電話が苦手な人間なんだもん。

みんなが待っているっていう建物がこの並んでいる列のどっち側にあるのかって聞くのを忘れた僕のミスだしな。

「あ、響ちゃん！」

おや？

「今日、無事に来られたのね！ よかったわー！」

「かがり。……さつき連絡したじゃないか、今日は行けるって」

「でも、心配だったから。ね？」

「……うん。この前は心配かけた」

いつものくるんが服に合わせてすごい感じにくるんくるんしているくるんさんもといかがりと目が合ったからそのまま近づいていく。

あいかわらずでかい。

身長も含めていろいろと。

くるんくるんくるんの中にはいくつかの髪留めも着けていて、なんていうか盛っているって感じになってとにかくド派手。

そしてくるんくるんくるんの下には着物を身につけている。

もちろんコートは羽織っているけど……着物ってとっても重そうだなあ。

メロンさんのメロンさんたちがすごいことになっている。

「やつほびびきー」

「ゆりか」

「……おー、聞いてたとおりちよつと顔色よくなった？」

「まあね、ずっと寝ていたし体力の温存にも尽くした。ただ、まだ痩せたのまでは戻っていないかな」

何しろ3ヶ月の冬眠だからね。

ほとんど熊さんと一緒なんだ。

気が立ってないだけありがたいって思ってたほしい。

「まー、たった1週間でだもんね……体力はともかくさ。焦らなくてもきちんと食べていたらきつとよくなるよ。でもまあ足取りもしつかりしているみたいだし、いやあーよかつたよかつた！ 今日来てもらえて。久しぶりに5人揃うんだもん」

くるんさんの影もとい身長に阻まれて見えなかつたゆりかもまた着物姿。

ぱつつんもなんだかいつも見ないような感じにセットされているし、後ろの髪の毛も短いなりに……たしかこの前は肩に掛かつていたから決して短くはないんだけど、でも他の子と比べると短い後ろの髪の毛頭の後ろで結つていてまるで半ポニーテールな感じ。

半ポニーゆりか？

「……心配かけたね、ふたりとも」

「そりやもー、心配はしてたけど」

「私も大丈夫……だつて思いたかつたけど、でもやつぱり不安だつたわ。また響ちゃんか……その、倒れたりしちゃって来られないのではないかって。それかお母さんたちから止められるのはつて」

いけない、くるんさんの情緒が不安定になってきている。

くるんさんはなるべく可能な限りに精神状態を安定させておかないとなにを言いだ

してしでかすか分かったもんじゃないっていう恐ろしさがあるからな……きちんと  
言っておかなければ。

「……あれから一回もあのような発作も起きていないんだ。それにきちんと食事も  
できているしずっと横になっていた。だからかもしれないけど、おとといあたりからは  
すごく安定しているんだ。だからこそ今日こんな人ごみに、それも夜に来るのにも許  
可……もらえたんだし。帰りが深夜でも朝でも問題ないそうだし」

特別な伝手で召喚したさっきのスーツの人たち、タクシー代わりな人たちが朝まで居  
てくれる約束になっている。

イヴのあの日から準備してた、この日のための移動手段。

万が一に魔法さんがやらかしてもなんとかなるようになるための、あの人たちに頼ん  
であるあれ。

「ふーん、よかったねえ」

「でも響ちゃん、普段は早く寝てしまうのに今夜は大丈夫なの？」

「あー、そっちの心配もあつたかあ。響、見た目どおりに寝るの早いもんねえ……夜型  
の私としては夜こそにオンの人の多い時間帯にオンゲーのバトルとかダベりながらマ  
ンガとかしたいのにな。ま、ちっこいんじやしようがないよね。成長期だもん……  
なんで私は夜に眠くなれないのか。こんなだから背が全然……」



おや、ゆりかもちよつと怪しくなっている。

背が低いコンプレックスは根が深いらしい。

でも……小さく見られれば園見な僕と、同じように見られたとしたって小学生高学年なゆりか。

差は歴然としている。

「……ふつかつ！ 今日はおめでたい日だもんね！ 私たちもお昼寝したしばつちりばつちり！」

「ええ。だって今日は夜ですもの、オールナイトですもの！ いちばん遅くまで起きていて、できたら夜明けも見たいの！」

今日は曇っていて初日の出は見えないって言うけどね……まあ無粋なことは言わないでおこう。

「私ならしよつちゆう夜更かししてるし別に徹夜くらいよゆうだけ……この中で心配なのは響ときよちんだろーね。ムリはダメなのよ？」

「りさちゃんのご両親からの差し入れで眠気覚ましの飲みもの、いっぱいもらっているの」

「うん。けど、たぶん明け方までは大丈夫かなって」

あれ以来……冬眠から覚めて猫島子さんとあぎとい岩本さんのときのあれと、この子

たちと会ったときのあれ。

あととは未だに階段の下がすさまじいことになってるあれ。

それ以来ぴたつと静かになったから実に平和な一週間だったんだ。

階段のたびにおしりがひゅんつてする以外には。

それはまあともかくとして……このまま続けばいいなつて思うくらいには平和。

もうなんにも起きないんじゃないかって思つちやうくらいには。

「……響？　クリスマスの時は……その、なんていうのかな。　生気がないつてゆーか、存在感……存在が薄いつてゆーかそんな感じで印象だったからねえ。　今日だつて来てもらつたつてしてもまだあんな顔色してたら、みんなであいさつだけしてちよつとだけしゃべつてちよつとだけおそばでも食べたたら年越しの前に帰つてもらおうかつて相談してたの。　みんなで。　だけどよかった、杞憂でさ。　ね、かがりん？」

「ええ。　響ちゃんつていつもそうなんだから。　私との買い物とかかなり辛そうになるまで疲れたとか休みたいつて言つてくれないものね。　私、響ちゃんの体のこと知らないときに響ちゃんの具合に気がつかないで振り回してしまったものだから今でも後悔しているのよ……」

「あのとときはまだ体も良かったし、気にしなくてもいいよ」

「こんな楽しいときに僕なんかのことで鬱々とさせるのは悪い。」

「……けども。 うん、 たしかに訊ねもせずにごいぐいと強引で自分が楽しくって疲れ知らずで次はあつちが良いと振り回して話してばかりで人の話を聞こうとしなかったね、君は」

「おお、 ばつさりだよかがりん。 まー、 そーゆー傾向あるけど……これはよつぽどガマンしてたと見えるう」

「反省してはいますつてば……だからこそ今日はこういうのにいちばん鋭いゆりかちゃんにお願ひしていたのよ。 響ちゃんの体調、 このまま私たちと夜を共にしても大丈夫かどうかつて」

「ちよ、 ちよいちよい待ちなさいかがりさんや。 ……その表現は誤解を招きかねないから、 ひじょーに危険だから使わないほうがいいのよ……？」

「え？ どのことかしら？」

「……夜を、 なんちやらつてやつ」

「そう？」

「そうなんです、 ご遠慮くださいね？ かがりさま」

「なんだか変ねえ、 今日のゆりかちゃん。 なに？ 私のマネかしら？」

中学生だもんな、 茶化してはいるけどいろいろと多感なお年ごろなんだろう。

僕はそういう時期を通り過ぎた大人だから気がつかなかったフリをしておいてあげ

よう。

気がつかなかったフリのために適当に周りを見ておくフリは得意なんだ。

### 39話 去る年と、来る年 2/6

「かがりんって漫画とかだけじゃなくて普通に本とか読んでるのにどうして分からないのか……コレガワカラナイ」

「??？」

夜を共にする……そんな単語ひとつでこの騒ぎ。

ナイーヴでセンチテイヴな中学生というお年ごろな子たちだからだろうか。

まあたしかにこのくらいの子たちはいちいち反応するよなあ。

初々しいあのころが懐かしい限り。

僕にだってそういう時期はあった。

ただ何もしないで通り過ぎただけ。

でもやっぱりこういう話題になると男と女で反応が結構違うんだな……いやまあ僕  
のそのころの知り合いの誰もこういう話は好きじゃない感じだったから僕自身は体験  
したことはないんだけど……僕が知っている男同士のそういう話のほとんどが映画  
とかマンガとかの創作からってというのが悲しい。

作り話でも現実を参考にしてている以上ある程度の信憑性はあるんだろうけども……

男だったのにそういうのどのへんまでがあるあるなのかが分からない悲しさ。

いいもん、今は女の子だもん。

……………良くない良くない何考えてるんだ僕は。

なんか最近思考がおかしい気がする。

あ、でもこういう話、今後僕も振られる可能性があるのか…………この子たちに。

「むう」

…………この歳になっても、いや、男としてこの歳まで生きてきたからこそ抵抗感がある話題。

できるだけ分からないフリをするか気乗りしないフリをするかしかない気がする。

だって僕だし。

人の生態なんてそう簡単に変わらないんだもんな。

それに僕はそもそも、男女のそういうものについては——。

「ねー、響だつてこれくらい分かるでしょ？ 中2だし、響は本たくさん読んでるし」

…………そう思っていたら振られた。

どうしよう。

「…………うん」

ちよつとなんかもやもやつてなるけどゆりかまかがりも…………かがりは置いておこう

……特に変な調子にはなっていない。

つてことはたぶんこれは普通の男女の会話で良いんだろう。

なら変に反応しないで普通に言えば良いのかな……僕の人生経験の無さだ。

「どう言う意味なの？ 夜を共にするっていうの、そんなにおかしいものなの？」

「いやー、ちよつと文脈的にねえ？ なんとというかその……えつとお」

「?? よくわからないわ？」

僕がそつけなかつたからかかかがりの注目はゆりかに集まっている。

それで珍しくゆりかが顔を赤くしながらあわあわしているのを見てるとなんだか不思議な気分になつてくる。

普段は平然としている彼女でもやつぱり年相応の、青少年相応の反応するんだな。

うん、中学生つてのはこういうもんだよね。

男女のちよつとしたこととか表現でいちいち過剰反応する辺り、健全でなにより。

けどびっくりしたのはさっきのかかがりの発言。

僕の体力がないことに気がついていて、しかも振り回したことさえ自覚していて——あの強引さは何言つても手を振り払おうとしてもどうあがいたつてなすすべもなく着替えさせられるあの強引さを——自覚している。

それに気がついてそれがいけないことだということに気がついていて。

衝撃だ。

……やっぱりこの3ヶ月っていう時間は長かつたらしい。

あんなかがりだつてこうして人並みの気遣いができるようになるくらいには成長しているんだから……いや本当に感慨深いっていうものじゃない、これは奇跡的ななにかだ。

できたらもつと早くに気がついてほしかつたけどなあ……具体的には夏休み前までには。

そうすればさんさんに試着させられて「どれがいいかしら……よく分からなくなつてきたからもう1回全部着てみてくれるかしら？」なんて聞かれて「もうどうでもいいからこれにする……」つていうお決まりのパターンもなくなつていただろうし。

まあ、もうすぐ中学3年になるんだもん……この子たちみんな。

いくらかがりだつて、あのががりだつて、さすがに精神年齢も肉体年齢に追いついてきているだろう。

……早く体の成長に心が追いつくといいね、かがり。

まあ追い越すのは無理だろうけど心の底から祈つておこう。

ああそうだ、初詣にはそれを願つてあげよう。

この子はきつと別のことをお願いするだろうしな。



おいしいものとかきれいな服とか少女マンガとか、そつちの方に。

だから僕がお願いしておいてあげればフェードアウトするまでもきつと何回か連れて行かれるだろう買い物でも少しは遠慮してくれる……ようになるかもしれないし。

「えつと、ふたりとも」

ぶるつと寒さが昇ってきた僕は反射的に楽しそうな問答をしているふたりを見上げる。

「どうしてそこで男女の、その……とにかくそれが出てくるのかしら？ どうしてゆりかちちゃん？」

「いやいやかがりん、それはさすがに友達でも言いにく……つとごめん響、なーに？」

「りさとさよの2人はどこにいるんだ？ まだ来ていないのか？ あと寒いよ、ここは」  
「あ、そだったそだった。今呼んでくるから、かがりんと先にながって待つてて？ いくら大丈夫そうでもいつまた発作、起きるかわかんないんでしょ？ だったらさ、こんな寒空で立ちっぱもなんだしあったかいところで座ったり横になれるだろうし。そのほうがいいはずだよ、かがりん？」

「ええ、わかったわ。それでは響ちゃん、こつちについて来て？」

「……どこへ？ ここは神社の……管理している人たちが住んでいる」

「いいの、許可は取つてあるから。それよりもちよつと人が多から、手、繋ぎましよ

うね？」

「いつてらー」

振り袖をふりふりさせているゆりかを後にそう言いながら僕の返事を待たずにさつさと手を取つてしまふかがり。

……やっぱり変わつていない。

やはりくるんさんだった。

ほんのちよつとだけしか変わつていなかつたな。

「……あ。えつと、これはね？ 響ちゃんが苦手な子供扱いをしているのではなくつてね？ は、はぐれたら困るからよ？」

「それを子供扱いと言うんだけども」

だから、手を……く、離せない。

「だつてこの人出だもの、響ちゃんも背が低いから一度見失つてしまつたらお互いに見つけれないでしょう？ だからこれはしかたないことなのよ」

「ちよつと、かがり……スマホで連絡を取れば」

ぐいぐいと手をしっかりと握られてしまいつつ連れて行かれる。

……買い物のときみたいに。

やっぱり変わつてないじゃないか……いや、あれよりは足元が悪くつてかがり自身も

下駄を履いているから多少はゆっくりとはあるけど、でもやっぱりこの子の行動原理はなにひとつ。

「さ、こつちよ？ ここからは足元に気をつけて？ 砂利と石畳で歩きにくいから転ん

だら痛いわよ？」

「その感じ、もしかして転んだのか？」

「……………」

転んだらしい……厚底と着付けで歩きにくいのに、いつもの調子だったんだろう。

☆☆☆☆

参拝するためにできている行列。

その長い人ごみにずっと根気強く並び続け、自身の番が近くなってきたと思つたらさも用事があるかのようなフリをして列から離れ、そのまま……並ぶと30、40分にもなる列の最後尾へ回るといふ奇妙なことをしているスーツ姿。

同じようなことをしているのが4、5人……男性だけではなく女性も、その他にも境内のそここで話し込んでいるフリをしているのが年齢格好を問わず、散っている。

「もう隠す必要がなくなつたから」と、最近は——この冬になつてから、具体的にはクリ

スマスイヴの前日からそのまま出して歩いている、けれども今日はしっかりとフードにしまつてある、その長い銀色の髪の手を持つている幼い少女を——その子だけを見るために。

監視するために。

その少女……少女と、その幼女の手を引いている少女が一緒に入つていつた建物を……これも写真を撮るフリをして、特殊なカメラを備えたタブレットのそれやカメラとで引き戸が閉まるのまでを確認し、そつと連絡を取り合う。

彼らのしぐさはあまりにも自然で、服装も、あるいは話し込む組み合わせも、そこに並んでいる誰にも不審になど思われぬ、ごく普通の、自分たちと同じような参拝客だとしか見えないもの。

若者の連れ合いだったり夫婦だったりあるいは一人だったり、なんの共通点もないように見えるようにしているスーツ姿たち。

ぱつと見れば「きつと地元の会社の人たちなんだろう……こんな日まで働いているかわいそうな」と思われる程度の彼らの半分ほどは外国の風貌だ。

けれど彼らの視線は一般人には注がれず、ちらちらとはあるがしつかりとその幼女と友人が入つていつた建物に注がれており……そして常に境内の内外へも同時に気を配っている。

何かがあればいつでも上着の内側と腰に用意してある鈍器……あるいは刃物、さらには銃器を使えるようにしておきながら。

「……」

そして銀髪幼女たちが建物に入ってもその中を……熱・音波探知を使った装置でどこへ移動しているのかをお互いがたびたびに受けている、知り合いからの電話を装った会話で……異国の言語で。

皆が持つているタブレット端末上で、それは逐一共有されていた。

……内部に事前に設置してある音源まで、しっかりと。

それはその幼女の服に付けられていて——。

☆☆☆☆☆

「さあ、こちらよ？ 響ちゃん、座って座って？」

有無を言わずに僕が上がらされたのは昔懐かしい感じの和室だった。

こんなのはもはや旅行先とかで観光用になっている昔の家屋くらいしか見ない気がする。

それも、ただ「お邪魔します」とだけ口にしたかがりに引きずられつつ、なすすべも

なくただ導かれて到着しただけで何が起きてるのか僕には分かっていない。

かがりも「良いから良いから」ってだけだし……何が良いんだろう。

こういうのって神社の神主っていうんだっけ？

そういう人たちが管理していたり住んでいたりするわけだからきちんとその人たちに報告しないとイケないんじゃない？……いくらなんでも不法侵入はちよつと。

みんなの感じを見る限りそれは取っている……もしかしたら具合が悪くなった人のために解放されてるのかも……とは思うけど、でも不安だ。

レモンさんとはかくメロンさんはメロンさんだし。

どうして今ここにいるのがこの子なんだろう。

レモンさんだったたら少なくとも安心感はあるはずなのに。

僕と一緒に居るのはよりにもよってくるんくるんメロンさんだからなあ……。

「……かがり？」

「どうしたの響ちゃん？ ああ、みんなは多分すぐに！」

「そうではなくて」

ダメだ。

この子は好きにさせちゃ行けないタイプの子なんだって知っているじゃないか。

「本当に家主に断りもなく勝手に上がっているのか？ だってここは神社の本殿と繋

がっているようだし、つまりは事務所とかこのご家族が住んだりしているところだろう？ 入り口にも特に何も書いていなかったし、だから」

「いいのつ。 もうちよつとでそのワケがわかるからつ」

「……………」

……かがりがこう言うときは大抵何かを隠している。

にやにやしているのが顔に出ているし頻繁にくるんをくるんくるんしているし。

なんかむかつくから見ないでおこう。

けどなんだろ。

さっき言っていた「許可はもらってあるっていう」あれのこと？

けどここまで誰にも会わなかったし、かと言って。

「……………」

……まあ、今日はおもこもこしたって寒いんだ。

クリスマススの時みたいに雪こそ降ってはいないけど、代わりに切りつけるような風が恐ろしく寒くて痛いんだ。

だからこうして温かいところで……屋内で目の前にはストーブがあつてこたつまであつてつていう、なんだか生活臭あふれるこの空間で座っていられるつていうのはたしかに楽でもあるし、今はここでいいや。

「ほら、響ちやんも早く！」

目の前のくるんさんはくるんくるんして、こたつを囲むようにしている座椅子のひとつに座つて適当なことを言いながらくるんつとしている。

とても不安だ。

この子が安心しきっているのがまた、余計に僕を心配にさせる。

心配だからこうして……怒られたらすぐに出られるようにってコートも着たままで立ちっぱなしで悩んでいるわけなのにこの子はどうしてこうなんだ……。

「……」

ま、でもさすがに無断つてのは無いだろう。

もう上がつちやつた以上は座つてくつろぐくらいしても変わらない気がしてきた。

でも……無いよね？

無いよね？

この歳になって「人の家に勝手に入つちやメツでしょ！」って大人から叱られたくないんだけど……。



### 39話 去る年と、来る年 3/6

「よい……っしょ……着物つて動きにくいのよねえ。ふう、あとふたつねっ」

勝手も知らない、家主も知らない、そのうえ押し入れから座布団や座椅子を引つ張り出しているくるんくるんさんをぼんやりと見る。

いいの……?」

勝手にそんなことをして。

他人の家の冷蔵庫を勝手に開ける並みの暴挙じゃない?

あとでうんと怒られない?

いやまあゆりかが行けつて言つてたから多分大丈夫なんだろうけど……ほら、だつてかがりだし。

「ところで響ちゃんは甘酒、飲めるのかしら?」

「呑める」

「あら、甘いつて言うけど大丈夫なのね?」

ううん、甘いのは苦手。

ただお酒つてのに反射しちやっただけなんだ。

でもそんなこと言えないから黙っておく。

「みんなが集まったら……ちよつと遅い食事は体に悪いけど軽く食べて、お菓子とかジュースとをつまんでおそばと甘酒で年を越してみようっておはなししているの。だつてなんかこう……大人っぽいじゃない？ お酒つて」

甘酒が大人？

アルコールが入っていないのはお酒じゃ無いんだよ？

まあ法律に引っかかるからないぎりぎりです。僕ならお腹がはち切れるまで飲んで絶対酔えない量だろうけども。

甘酒とかチョコレートに入っているラム酒とかできやつきやしてるのつてむしろ子供だとは思うんだけど、それを口にしたが最後、またしばらくおさまらなくなるだろうから静かにしておく。

……ああそうだ、普段なら夜の9時頃から……今日は昼寝したからもう少し遅くからかな……でもやっぱり眠くなってきたやうだろうし、そのへんの自販機でも教えてもらつてブラックコーヒーを何本か手に入れてこようかな。

いや、ここは大きいからきつと敷地内のどこかにはあるかな。

「あら、来たみたいね！」

かがりの声がしたと思ったら廊下から誰かの足音……家主の人？

無断で住居侵入をしてしまったことだし……いや、許可は取ってはあるんだろうけど、でも一応は大人と初対面というわけで姿勢くらいは正しておかないと。

「おまたせつ」

「……りさ？」

「あれ？ なんで響さん立っただまなの？」

「響ちゃん遠慮しちゃっているみたいなの」

「あー」

……そこには巫女さんがいた。

白と赤の、巫女さんらしからぬ体型をした巫女さんが……おつとセクハラだ。

「良いのに……それよりどう？ この服！ 見違えたでしょ——！」

りさりんが巫女服を着ている。

……普段より胸が強調されるんだな、袴って。

「……ちよつと恥ずかしいかな……あはは。まーこの格好、小学生のころからやっている慣れてはいるから気にしないで！ けど響さん、クリスマスするときよりも顔色もいいしよかつたわー！ ……でもコートまで着て立っただままって疲れるし、なにより暑くない？ リラックスして良いのよ？」

「……………えつと」

巫女りさりん？

巫女りん。

語呂がいいな、巫女りんさん。

「……………あ。響、さん」

「……………さよものか」

巫女りんの後ろにへばりつくようにして出てきたのは、これまたおんなじような格好をしたさよ。

……………ああ、僕もこの子みたいに人の後ろに隠れて黙っているから存在感なくて居てもなかなか気がつかれないんだな……………ちよつと反省しよう。

「……………恥ずかしいので、あまり、その……………見ないで、もらえると」

「あ、うん」

巫女りんの巫女姿なんだかこなれているようなしっくり感がある……………あ、巫女衣装がけっこう使い込んであるせいかな……………さよは対照的にまだ折り目のついている新品の巫女姿で、こつちこそコスプレって感じ。

けど前髪まで……………髪の毛全体がストレートに長くておどおどした感じの雰囲気やさよはなんだかとっても「まさに巫女」っていう感じがしないでもない。

ふたつの意味でどっしりしている巫女りんとは、ちやうど正反対。

……しようがないんだ、僕の目線の真つ正面にこの子たちの胸元があるんだから。

男のころだったら上からの視線だから顔だけで済んだんだけど今はちっちゃいから難しい。

「ほらほら、まずは座つて座つて響さん！ この前みたいになつたりして倒れて……ほら、頭でもぶつけたら大ごとだし。ね？」

「……ですね。私みたいに貧血……になつたら、受け身も取れなくて……そうなります」

「ほらね？」

む、病人なさを引き合いに出すのは……いや、この子たちにとっては僕の方が病人か。

「ほら響ちゃん！ さよちゃんもりさちゃんもこう言っているんだからいい加減に座つて！」

振り向くと自分の隣に何枚か敷いた座布団。

……なんで僕が横になる前提？

というかそれ、乗つてて崩れない……？

しゃらん。

振り向き直すと……ご祈祷のときとかに鳴らされる、先の方に鈴とか紙が飾られている棒をひとりする巫女りんさん。

どっから出したのそれ……ちよつと格好いいんだけど。

「私のお父さん、ここの神主やつてるのよ。だからここは私の家の客室つてわけで、つまりは私の友だちの、響さんを含めたみんなはお客さまつてわけ」

……あー。

なんか話の合間に聞いた記憶が……無いでもない感じかも。

「だから、くつろいでもらつても大丈夫なの。……きつとこのこと心配してたんでしょ？ もーマジメすぎるんだから……響さんらしいけどね。つてなわけで響さん、まずは座つて座つて」

「あら？ りさちゃん、この小さめの座椅子は？」

「あ、それお子さん用の……なんだけど、たぶん……ごめんなさい、けど響さんのサイズに合っていて座りやすいと思うわ。よかつたらそれ使ってもらえる？ ほ、ほら！ 普段からファミレスでも座つてるだけで不便そうだから！ せ、成長期だからこれからよー！」

なんかすつごく気を遣われて悲しい……なんで僕が小さいつてことでこんなに悲しくなるんだ。

「……わかった」

今夜はお邪魔する時点で迷惑は掛けるんだし、いつまでもこうしていても意味もない。

女の子に口で勝とうだなんて僕には無理なことなんだ、諦めよう。

もそもそとコートを脱いでマフラーも外してわきに置いて、ぺたりと座る。

あ、この座椅子僕にぴったりフィットしてる。

悲しいけどお子様シートな僕だ。

「ふう」

ぱさつと出てくる髪の毛で籠もっていた熱気がふわあつと抜ける。

「良いわね——……」

「はあ——……」

「いつ見ても……」

3人が話している声が聞こえるけど今度は何が良いんだろ。

それよりふわつてした髪の毛からだだよってくる僕のお気に入りの匂い。

甘いのは苦手なはずなのに好きな、この甘い匂い。

シャンプーとコンディショナーと幼女な僕の体臭と汗が混じった匂い。

「？」

見上げたらみんなと視線が合う……あ、さよが逸らした……なんでみんないつも僕が  
こうやって動いたりしてしているとじーつと見てくるんだろう。

女の子って勤が良いとか言うけどこういうひとつひとつでの観察力って言うか興味が違うのかもね。

僕は幼女になつてるけど脳みそは男のままだからやつぱり分らない。

「そ、そういうえば響さんつて髪の毛、すごく長いんだつたわね！　いつもパーカーとか被っているから新鮮ねっ」

「……かがりさんが響さんの髪の毛がきれい』とか……『こういう髪型にしてみた』つて  
いうの、いつも言っているから……一回ちやんと見てみたかつたんです……」

……まさか。

「……………」

ばつと、くるんメロンを見上げる。

……くるんつと首をかしげられた。

「だつて可愛かつたじゃない？　響ちゃんのいろんな髪型」

——それは夏休みに襲われたとき、ファッション雑誌片手に髪型をいじくり回された  
あのときの。

誰にも言わないつて約束させたのに。



「あ、もちろん写真は見せていないわよ? 『人に見せたらもう会わない』って言うくらいだったからそういうの、嫌いだと思つて」

「約束が改変されてるんだけど?」

「どうしてくれよう……:……:……:ほんつとかがりときたらもう……:」

「けど最後の一線を超えていなかったのだけは評価しよう。」

「あのときの写真の数々をグループで共有されていたら僕は立ち直る自信がない。体は幼女でも心は男なんだ。」

「かがりによつてかわいくされた姿なんて絶対に勘弁だ。」

「それは助かる。そのまま誰にも見せないでくれ」

「……:もつたいないわ」

「もつたいたくはない。できれば消し」

「それはダメ! それだけは譲れないわ!」

「この子的には3ヶ月も経つてるしそろそろ良いんじゃないかって思うんだけどダメらしい。」

ケチ。

「ま、まあまあふたりとも! 響さんもその写真……:私もとっても見たいけど、でも見せないつて言っているんだしさ! かがりさんはそういうウソはつけ、つかないから安心」

して?」

巫女りんがそう言うなら……あとかがりが良い意味で純真すぎるってこと、みんな知ってるんだね……当然か。

「で、かがりさんも人の嫌がることは……なるべくしないでね?」

「はーいっ」

……いつかどうにかして言いくるめて消させないと死ぬに死にきれない。

「響ちゃんってこんなにかわいい子だったのにー」とかみんなに見せられたら化けて出てやる。

「で、話戻してもいいかな? そういうわけで私の家は昔からここの神社を管理しててね、だからここも渡り廊下伝いでそのまま家なの。……えつと、みんながお賽銭投げたりするところの先のところまで歩いて行けるのよ、靴とか履かないでも足袋のままです。まあ別にこういう時期以外に私も行かないけど……ね?」

「はっ、はい……私たちもゆりかさんから……聞いて、他の方たちに、お仕事……代わっていただいて、歩いて来ました」

ということとは巫女りんはほんとうに巫女りん……でも、さよはなんて呼ぼう。ん?

今、お仕事って言っていたような。

「毎年ね、この時期とお祭りの時期はたくさんの人が来ていつも働いている人たちだけじゃ人手が足りなくなるのよ……んで私も娘だからって手伝いになり出されるわけ。で、今夜みんなで空いてる家で年越しやるんだしって誘ってみたらやつてみるって言うから、こうして巫女やってるってわけ。 どうかかな？ 似合ってる？」

くるんつとひとまわりして、巫女りんの巫女衣装の……髪の毛と袖と袴とがふあさつとなる。

元に戻ったときにさりげなく片足を前に出して「とん」ってして、同時に「しやらん」ってしているあたり慣れているのがよくわかる。

「……ほらさよさんも！ さつき教えたでしょ！」

「……………え……あつ、はいっ」

次の番だと言わんばかりにさよがつつかれて、さよもまたくるんつと……しようとして転びそうになって、あわててりさに抱きかかえられている。

でもさよも髪の毛が長いから、勢いをつけてくるんつてしたらきつと映えただろうなあ……まさに巫女っていう感じで。

「……………ああ、うん。 そうだね、似合っているよふたりとも」

ちらちら見て来ているさよとすっごい笑顔の巫女りんでピンと来た僕は慌てて褒める。

女の子は、女の子同士でもまず最初に相手のファッションを褒めるところから。特に新しいものときは絶対に褒めちぎる。

僕が苦勞して学んだ実学だ。

「着慣れていて熟練の巫女という感じのりさも、新しい衣装と着慣れていない感じがあ  
るけど雰囲気がとても巫女らしいさよもね」

「えへへ、こしよばゆーい。その感じ、反応が遅れた感じ見惚れちゃったー?」

「いや? どう感想を言えればいいのか考えていただけだ」

「もうつ、響ちゃんだったらちちゃんと褒めないとりさちゃんが可愛そう!」

かがりが割り込んでくるけど……しょうがないじゃん。

だつてほんとのことだし。

でもそうだね、りさりんはちよつとギャルっぽい……もう死語かな……ところがあ  
るから軽いノリで良いんだろう。

肝心の僕がそういうのに抵抗あるつてのが致命的だけでも。

いやだつて、仲が良い女子とか彼女とか居たことなかったし……。

「あはー、かがりさんの言う通りにそこは乗つてほしかったかなーつて」

「……………えつと、私とか響さんは、そういうのは、その……………」

「……………ふう。わかつてるつて。言つてみただけよ。響ちゃんのもの」

この場で僕の唯一の味方なさはよは良い子。  
またなにか困ったことがあつたらこの子を頼ろう。

## 39話 去る年と、来る年 4 / 6

巫女りさりんと巫女さよ。

たぶん既製品、つまりはおんなじものなんだろうけど……年季の差ってやつですこしだけくたびれた感があつて柔らかい感じで、つまりは体のラインがわりとはつきりと見えちやつてるりさ。

そのりさとは対照的に新品の、折り目がはつきりつとついてぱりつとしていてごわごわしていきそう……けどこれもこれでまたありなんだろうなっていう感じのさよ。

その白い着物は胸元で合わせるところで……巫女りんはちよつと大げさなくらいに、一方でさよはほどほどに膨らんでいて、その下で袴が腰をぎゅつと締めている細さとのギャップが激しいことになっている。

……あれだけ腰を締めて息苦しくはないんだろうか……普段とぜんぜん違うし……。

しかも巫女りんの場合は年季が……汚れてはいないものの新品じゃないもんだからほどほどにくたびれて布が柔らかくなっているわけで、つまりは女性らしい凹凸が余計にはつきりと出ていてなんか大変そう。

まあ普段から頻繁に抱きしめられたりして運動部らしいスキンシップの多さで慣れているからそこまで気にならないけどな、あくまでも印象というだけのことだ。

そうして熟練で色気がほんのりある感じのりきに対し、巫女さよのほうは……まさに臨時のバイトの巫女さんって感じ。

きつと参拝客からは大好評だろう。

「……というわけで」

女の子たちでよつてたかって僕をなじる展開……ただのじゃれあい程度のが終わつたらしいから意識を引き戻す僕。

「今年も私は三が日……いえ、そのあともしばらくだから5日くらいまでかしらね？」

そのくらいまで忙しいのよ。 年末年始つていう普通の家ならのんびりする時期なのにね」

「そういう仕事だからな……仕方ないんだろう」

お家で仕事してるとこういうとき大変そうだよね。

がんばって。

「響さんの言うとおり、もう小さいころから慣れっこなのよ……おかげでお年玉も普通の子よりは多いし文句はないわ。でも、今年はさよさんが応援に来てくれて話し相手が出てきて楽しいのよ。 普段は大学生の人たちとかもつと年上の人たちばかりだか

らさー。それもさよさんからなんて。ねっ?」

「……はい」

みんなからの視線が急に集まったもんだからあわてて巫女りんの後ろに隠れようとした巫女さよ……けど両手で逆に巫女りんの前に出されてしまい、また少しわたつとしたけどすぐに落ちついて、ふうつと息をつき。

「……私も、少しは体力も、あと……度胸も少しだけついて……人と話すのも慣れて、きましたし……そろそろこの人見知りとか……克服して、いきたいって。もちろん、これだけではすぐには……ムリでしょうけど……だから、今日……人が足りなさそうって言っているの、聞いたので。……思いきってりささん、に。頼んでみて、それで」

つつかえつつかえだつたけど、でもいつもみたいに黙ったりしないで最後まで言いたいことを言い通せている。

……この3ヶ月っていう時間。

この子、さよがこれだけ成長するほどに長いものだったんだな。

……いつまでも同じまじやない、な。

なぜならこの子たちは成長期真っ最中の中学生。

これからいろいろな経験を積んでだんだんと大人に、ひとりの人になっていくんだろ



う。

——いつまでも同じで変わらない僕とは違って。

成長するのを諦めて停滞してさらには縮んじやった僕とは。

それは前の僕だったとしても今の僕だったとしても……同じかもしれないだ。

どうせ家の中にもつてただ静かにしているだけの僕は世界中のみんなから、どんどんと追い抜かされていくんだ。

だって、ひとりぼっちだから。

「ねえ」

「ん？」

巫女さよの意思表明が終わって場の雰囲気ふわつとして、巫女さよも巫女りんも腰を下ろしたと思ったら今度は横からいくいと引つ張られている。

……ああ、かがりのことを忘れてたなそういえば。

普段になく、珍しいことに静かなもんだったから存在を忘れちゃった。

「……ちよつと響ちゃん？」

「どうしたんだ？かがり」

上を見上げるも、なんだか珍しく真剣なまなざしで見下ろされ続ける。

「……………」

「……………」

なんか怒られることした？

え？

「……………」

「……………」

……なにかを言うんじやなかったんだろうか。

なんだろ、「んっ！」って。

「……………」 ゆりかちゃん和我。 私たち、 私たちも振り袖着ているのよ！

りさちゃんたちよりも先にお披露目したのにまだ全然感想を聞いてないのだけど!？」

「……………」 そうだったかな」

「ぜんっぜん！ ねえ!？」

「あはは………かがりさんは普段通りね」

「は、はい………」

静かすぎたのは静かに怒っていたらしい。

いや、言つてよそういうの……男は言われないと分からない生きものなんだからさ……何が「察して」なの、察する材料さえなければどんな探偵さんだって迷宮入りまわがいなしなんだよ……？

でも女の子っていうものはみんな平等に、けれどもひとりひとりちがう魅力を見つけ  
て褒めて回ってあげないと、褒められ足りないって感じた子が不機嫌になるっていう生  
態を知ってるからここで怒ってもしょうがない。

「ああ、ごめんね」

「……………」

返事がない。

怒っているようだ。

「ゆりかはまだ来ていないからあとにしておかがり、君は」

そう言えば大分経ってるのにゆりか来ないなあ…………どこ行っちゃったんだろ。

「普段君が好んで着ているような私服と同じイメージのその振り袖、振り袖の柄に劣ら  
ず豪華になっているその髪型とかんざし。君にとても似合っているよ」

「…………ようやく聞いた。ふふつ、ありがとう」

「響さんの褒め方ってすごいわよねえ…………大胆で。マジメに言われると逆に冷静に受

け取れちゃいそう」

「は、はわ…………」

女の子、女性を相手にするときは言葉を尽くさないといけない。

できるだけくみ取って先回りしてあげないといけない…………それがたとえ女の子同士

であつても。

「分かる」って言うのはとっても大事なんだ。

それが僕みたいな男とか男みたいなメンタルしてる女の子にとつてはきつとめんどくさいんだけど、逆にそれさえしておけばちよつとやそつとではそこまで機嫌悪く……なることもあるけど、まあほどほどにごきげんな割合が増えるんだ。

とりあえず話を聞いて褒めて褒めて「分かるー！」しておけばそうそう爆発はしない。あとは甘いもの。

これさえあればなんとかなる。

そういう生きものなんだ、僕たち男とは違って。

男は……どうだろ、そこまで不機嫌になるっていうの、思春期の一時期を除いたらそんなになんじやないかな……いや、個人差はあるけどそれも女の子とかとおんなじだし、別にひとりで居ても不機嫌になることなんてないし。

なんなら男ならお酒さえもらえたら多少のイライラでもたちどころに回復する。

ほら、荒くれ者でもお酒出せばとりあえず席には座るって定番だし？

僕だつてお酒、おちよこ一杯……じゃ足りないからせめてコップ半分くらいには……もらえたらなんでも言うことを聞く自信があるくらいだし。

「それじゃかがりさんの機嫌もよくなつたところまで」

「……私そんなに怒っていなかったわよ、りさちゃん」

「響さんの後ろでずーっとほっぺた膨らませてたかがりさんが言っても説得力ないわよ。ねえ？」

「えつと、……ま、まあ……」

女の子ってごきげんにさせておくのがほんと大変……いつもなら携帯しているお菓子で簡単にごきげんにさせられるのに、今日は忘れて来ちゃったしなあ……こたつに置いてあるラインナップだとなんだかありがたみが薄いし……。

「さて！ 響さん、これからなんだけど……しばらくは大丈夫そう？ ここにいて」

「うん、大丈夫だと思うよ。ありがとう、りさ」

ありがとうは大事。

りさりんはそう簡単に怒る子じゃないけど普段から言っておいて損はない。

「ならいいわつ。それじゃ、新年までもう……30分くらいだし、ちよつと早いけどお蕎麦、用意してくるわね？ ……お湯湧かすの忘れてたけど、みんなが食べ終わつたころに新年迎えられそうだしジャストタイミングかな？」

「そういえばそうね？ 響ちゃん、ちゃんとお昼寝してきた？」

子供扱いされたけどめげない僕。

「してきたよ……だからこの時間でも平気だ。さつきも言っただろう」

「あら？　そうだったかしら？」

「……………」

子供扱いされて忘れられたけど僕は大人だから起こらないんだ。

「じゃあ私は台所へ…………つて、あ、そうそう。　響さんはお蕎麦、あとは卵とかとろろとかお揚げとかいわゆる適当なトッピングしたおそばっていうのの中にアレルギーとかあつたりする？　聞いておくの忘れてたわ」

「平気だよ…………けど量はみんなの半分、3分の1くらいで頼みたいかな」

「もともと少なめにするつもりだったけど…………了解しましたっ」

「響ちゃん響ちゃん！　食べきれなかったら私が食べてあげるから量の心配はないわ  
！」

「ああ。　信頼しているよ」

その食欲の、ただの1点だけは信頼できる。

だつていくらでも食べられる子だもんな、くるんさん。

「…………あ、りさ、さん。　私も、手伝います」

「ありがとー、助かるわ」

人様の家にながらせてもらつて、家主…………は巫女りんだからいいのか、けども挨拶も遅くなって食事までごちそうになるなんて。

これが子供のときだったらなんとも思わないんだろうけども僕は当然ながら大人、このまま座っているだなんてのはできない。

せめて僕もなにかしらの……この低身長じゃろくにできることはないかもしれないけど、でも手伝いをしておかないとそわそわする。

配膳くらいはできるし、踏み台……こういうところならきつとあるだろうから、それを使えばお蕎麦くらい手伝えるんだし。

こういうときはさっさと……今のさよみたいに意思表示をしないと機を逃してしま  
うから僕も立ち上がって、……………。

「？」

脚に力を入れて、……………。

「??」

こたつのテーブルに手を置いて。

「??？」

立てない。

とうかなんだか肩が重いような？

「響ちゃん？」

「はい」

かがりの低い声……これはちよつと怒りかけているときの感情だ。

それが僕の頭上から後ろから降ってくる。

さつきのいじけている程度じゃないやつ。

分からないけどとりあえず経験から静かにしておこう。

「病みあがりなんでしょう？　まだほつぺたが元に戻っていないじゃない？　つまりは

まだまだなんでしょう？　……そういうのは響ちゃんの素敵などころだけれど今はこ

こで私と待つ。………いいわね？」

「はい」

「本当に分かっているのかしら？」

「わかっている。だからこの手を」

「だめ。　まずは力を抜いて」

「はい………」

「脚の力もよ………」

「はい」

怖い。

もはや抵抗は無意味だ。



力を抜いてしばらくして……やっと肩の温かい重さが引いていった。

「かがりきーン、その調子で響さんがムリしないように見張っててねー？ あ、体調とかも見ていてね！」

「もちろん！」

「……………」

「……響さん」

「きよ」

「ふたりとも……私も心配……なので、待っていてください……ね？」

「……分かったよ」

まさに四面楚歌っていう状況。

……ならせめて食べ終わったあとの片付けくらいは、そのあとの配膳とかその程度ならきつと、子供でもできるような手伝いならなんとか許可を狙おう。

自然な流れでやればきつとできるはずだ。

「あんなことがあったばっかりなのに、やっぱり響さんは響さんなのねー」

「わ、私も気持ちは分かる……んですけど……」

「響ちゃんってすぐ無理しちゃうから私が見ていなければダメなのよ」

「けちよんけちよんに言われても僕は男だからめげない。」

女の子ってひとしきりいろいろ言わないと気が済まない生きものなんだから……  
帰ったらお酒でストレス忘れよう。

### 39話 去る年と、来る年 5/6

木造の古い造りにふすまとタタミ。

いわゆる日本家屋っていうのはとにかく寒いもの。

なんでも昔は寒さは良いから暑さと湿気対策を優先したんだとか。

大半のものが木と紙と草でできていて、だから外の寒さが……こうして文明の利器をフルに使っていたとしたって筒抜け。

最近じゃ……観光地とかでも珍しいくらいに完全木造ってやつだもん。

まあ神社だしね、そういうもんなんだろう。

ストーブのじんわりとしたあたたかさとかこうしてぬくぬくと入っているこたつとか。

じーつとしていると、そうしたものののおかげでようやくよくにあつたかくなる。

「暖かいわねえ」

「うん」

「ちよつと良い匂いがしてきたわねえ」

「うん」

「響ちゃんって興味ないといつもそうよねえ」

「うん」

くるさんとふたり静かにこたつでぬくぬくすること10分くらい。

遠くからは……つて言うより外から、敷地内が境内でたくさん人もいるし鈴もじやらじやらなってるしでそれなりの音が聞こえてくる。

そうして置かれているテレビ……さすがにこの辺は今風らしくでっかい画面のやつで適当な番組を観ることになった僕たち。

でも、じーつと……人様の家で何もせずに座り続ける。

こういうのつてやつぱり落ち着かないよなあ……今からでも。

「ダメよ響ちゃん」

「!？」

「りさちゃんたちのお手伝いはダメ。みんな心配しているのよ、響ちゃんのこと」

「……分かってているよ」

「本当？」

「本当だよ」

「ならここで待っていていませよ！ あ、見て見て、響ちゃんがいなかったときの……」

テレビと会話とに集中しているはずだったのに僕の動きには敏感なくなるんさん……  
着物のせいで動きづらいうのは目ざといんだから。

女の人ってなんでもマルチタスクなんだとか。

だから何かに集中しているはずなのに全然別のことにもすぐに気がつけるらしい。

僕みたいにシングルタスクしか駄目なタイプとは相容れないし油断ができない存在  
なんだ。

……その注意力をもつと勉強とか普段から使っていれば苦労しないのにね。

☆☆☆

長細い木でできた廊下、しかも足は靴下ではなくて足袋、そのうえに慣れない着物と  
いうことで歩きづらそうに小股でそろそろぺたぺたと歩いている少女。

しかし彼女にとつてこの家は親友の住む勝手知ったる家。

つまり意識せずともこの細長い造りの家を自由に動けるわけで、そういうわけで気兼  
ねなく歩きスマホをしていた。

今日は大みそか……それもいちばん忙しい時間帯に入りつつあるということではと  
んどが参拝客たちの相手に追われているため住居側のこちら側はがらんとしている。

この家の住人の居住スペースが空になっていて、さつき入って来た中学生たちも客間と台所にしか居ないのだから当然だ。

それに人が来れば……大抵は小走りだから、なによりも木の床の音ですぐにわかる。だからこそ彼女は熱心に、その画面に注目していた。

「……ふうむ、なるほどねえ……」

横向きにした画面を見つつ……奮発してもらった、レンタルではあるもののしつかりした素材のその着物は、下に着込んでいる服のぶんも着ぶくれていてだから洋服よりも体が隠れるせいで……余計に幼く見えている。

しかしその前髪が横にきれいに揃えられていて着物によく似合っている彼女……ゆりか。

何かしら良いことがあったらしく、軽くほほえむ。

「よしっ」

「——なーが良しなのゆりか」

「うっぴやあああああうっ!？」

「なんちゅー声出してるのよ……」

……スマホに夢中だったから気がつけなかった、静かに目の前で立っていたらしい巫女衣装を楽そうに着ている親友と、その隣で新品のそれを窮屈そうに着ているメガネを

かけた友人に気がついていなかった様子で、本気で驚くゆりか。

驚いた拍子に手からぼんとはじけ飛んだスマホを。

「わたつ、わたたつ！ ……………ふい……………」

……………器用につかみ取った。

「……………本気で気がついていなかったのねえ私たちに……………でも良かった、落とさなくて。

画面とか割れたら高いものねえ」

「へ？ あ、あー！ そーだよねー!!」

少し裏返った声で過剰なくらいの演技。

でもそれがゆりかという少女の普段だからか特段に不審に思われる様子はない。

「……………あの、ゆりか、さん……………ここで何を……………」

「いやー、つい読みふけてたのよー!」

驚いて落としかけたスマホを握りしめた自称同志の少女は、上目遣いで声の主の親友と友人を見上げる。

「おりよ？ りさりん、そういやなんでこんなところに?」

「あんたがいつまでも来なかつたからでしょ……………もう響さんもとづくに待つてるわよ」

「ありや、そりやおまたせしちやつたね……………あはは」

「それにしても遅かつたわね、なにやつてたのよ? 私たちを呼びに来てからずいぶん

経ってるのにこんなところまで……ねえ？」

「え、えつと……」

「ありや、そんなに経ってたかなあ……あ、ほんとだいつのまにやら時間が進んでおる」  
「んで、なにしてたのよ？」

スマホの画面を見つめ、それからしばらく上を見て考えたゆりかは、いつものおちゃらけた口調で答える。

「ちよいとな、知り合いと話し込んでね。そう、大事なイベについての情報とか！」  
「ただのゲームでしょうが……こんなときにしなくつても」

「ふふん、期間限定は大切なのだよ。りさりんの好きなパズルゲームとかでも」

「そうね、忙しいのね？ んじゃあんたはお揚げと卵抜きね？」

「りさりんひどいっ!?! 鬼、悪魔……えーとえーと……あ、そうだ、さよちゃんもなにか言ってみてよ！」

「え……え？」

「流されちゃダメよ、さよさん。こいつ調子よくつて放っておくとすーぐこうしてサボるんだから。ドーせまたなにかの作品についてとかで盛り上がってたんでしょ」

「ひどいなーりさりん。少しくらいは信用してくれたって」

「あ、あの……」



「信用がないし、あるわけない」

「いやん! ……あ、さよちんごめんねー、私たちついこうやってコントしちゃうの」  
「誰のせいかな」

「りさり」

「つゆだくで良いわねー」

「それただの汁! 汁を飲めと!」

「だし汁っておいしいわよ?」

「そういう問題じゃないやい!!!」

「……な、仲が良い……んですね……」

「そんなに長く一緒なわけじゃないのにどうしてかね。この煽るのだけは得意なちっ

こいののせいで」

「ちっちゃい言うな!」

「……くすっ……」

……傍目には、普段通りの彼女たちの日常が流れていた。

☆☆☆

「うぐ」

狭い。

ぎゆうぎゆうだ。

いくらこたつだからと言ったって、親戚の……田舎の親戚のところにあるそれよりも  
ずつと小さいものなんだ。

……なんでも、今日は手伝いに来ている人が多いからお客さん用の部屋……昔の家つ  
て客間つてのがあるんだね……広い部屋から順に埋まってしまっているんだとかで、布  
団を敷いて寝るだけのところは満室らしい。

だから僕たちはこうして狭いけどテレビとこたつがあるって言うところに案内され  
ているわけで……そんな中運ばれてきたお蕎麦を食べるためにつて5人が足を突っ込  
んだらこうなるよね。

ちよつとでも足を動かすとみんなの足がお互いに絡まるほどに狭いわけで。

……あ、これ、りさかさよだ。

だつて袴みたいな感じだから。

こう、ぎざぎざした感じの裾が足先に触れている。

指先でもぞもぞしてみる。

……逃げた。

おもしろい。

「……さすがに5人はムリだったんじゃない？」

いつもと比べてなんとなく弾まなかった会話もそこに早速に巫女りんが代弁してくれる。

なんかこつち見て笑ってるし、多分今のりさの足だったんだな。

「大丈夫だと思っただけだなー。りさりんのとこ今年はこんなに大盛況だなんて」  
「だから言ったのに。もっと広いところとか早い段階ならまだ空いていたんだから」  
察するにこの夜更かし会は結構急に決まった。

……多分僕がイヴに会ったタイミングだよね……なんか悪い。

「いいのいいの、この場所がいいのよう。わかる？ こうして狭いところの方が落ちつくんだし？ しかもすみっこの部屋っていうのがまたいいのよねえ」

分かる。

「……広いよりは確かに……。けど、やっぱりこれは……」

「さよちゃんのお家は凄かったものねえ。でもさすがにクリスマスと大みそかにお邪魔したら悪いわ」

「だねー、かがりんのとこと私のとこはふつーの家だから狭いしでここ一択なのよ。

それに一体感って大事だよさりん。それにさ、ほら、私たちがちっこいもの同志は

ちっこいから。響、ちよつと横に詰めて？」

突然にゆりかからジェスチャーで寄るようにと催促された。

なんで？」

「いいから」

あ、理由言ってくれない。

そうして立ち上がったゆりかは……何があったのか僕の真横に来て「ちよつと失礼」って足をこたつに入れていく。

……今までは巫女りんとうりかペア以外はひとりずつ四方に座っていた形になっていたのに、僕の横にゆりかが来てしまったもんだから今度はここが狭くなったじゃないか。

というかこたつの1面に対して2つの座椅子では大きすぎてもはや寄りかかれぬ……と思っていたら、なんとゆりかは僕が座っていた座椅子まで半分横取りして来る始末。

体全体で……おしりで押してくるデリカシーの無さ。

まあ学生だし……でもこうやってもおしりがはみ出ないあたり。

むしろ2人で1人分のスペースしか取っていないあたり、僕たちは大人の半分で。

「ほら、私たちがちっちゃいからこうしていてもそんなに狭くないよ？　ねえ？　正直り

さりんの横は狭かったのよ」

「悪かったわね……」

冬の、みんながダウンとかを着ているときの電車の席みたいな感じ。

真横にくっついて座られてからふんわりゆりかの匂いが漂ってきたりお尻から肩にかけて人肌のぬくもりが来たりするけど、さすがの僕も女の子して半年だからそんな気にならない感じ。

嘘、そこそこ気になるけどどきどきはしない感じ。

それも嘘、そこそこどきどきはするけど困りはしない感じ。

これでよし。

「これで実質4人だから問題なしだね！ 足は……みんなであうんの呼吸っていうやつでちよつとずつずらせば大丈夫でしょ」

そう言いつつ、こたつの中で足をばたばたさせているゆりか。

「ちよつと痛いわよー！」

「あら、こりやすみません」

「……かがり、さん。 その、足、……もう少しだけ、えっと、かがりさんから見  
右……いえ、左にずらして、もらえると……」

「あ、ごめんなさい、さよちゃん。 誰の足か分からなくてつついてしまった」

みんなでもごもごと動いているとだんだんといい感じのスペースができてきた感じ。  
「……でもずるいわゆりかちゃん！ 響ちゃんとそんなにくつついて真横で過ごすなんて！ 私もしたいのに！」

「かがりんはほんと響がお気に入りだねー。 だけどかがりん？ ……響は今日は私のもんだ、渡さんよ」

「僕は君のものじゃないんだけど……」

一応で文句を言った僕のことをじつと見てきたゆりかは、今気がついたかのように僕の髪の毛をじーつと見つめつつひと房持ち上げてしげしげと見つめている。

「？」

「いーじゃん響、今日くらいさー。 うわほんとーに長つ、んで蛍光灯に透けるってどんな髪質なん!？」

「……綺麗な髪です……」

「ため息でちゃうわよね——……」

「良いわね——……私も銀髪とか良かったわー」

「響、アルビノとかじゃないのよね？」

「え？ うん……日光に当たるとどうなるわけじゃないからね。 少しみんなよりは弱いけど」

確かに色素の薄い髪の毛と肌、赤い目っていうのはアルビノの特徴。

うさぎさんとかそくだよね。

「……あ、これ、りささんのお母さまから……きつと遅くなるとまた、おなかが空くだろうから、って、来る途中に渡されました」

「あー、ありがと。……っていつてもこれあまりもんのミカンなんだけどね……まあいつか、どうせおそばとお菓子だけじゃ足りないだろうし」

「なるほど。やはりりさりんと響の差的に食欲と体のサイズは比例して」

「なにか言った？ 今からでもつゆだけに」

「いーえなんにも!! それよりほらさっさと食べよおそば!! 伸びてしまいますぞ!!」

「ゆりかちゃんはいつも元気ねえ」

……夏までのこの子たちが戻って来た感じがする。

どうでもいいことしか話してないのになんだか楽しくて、僕も基本聞いているだけだから楽で。

なんでもかお誕生日席だけど今日はそうじゃないし。

そういうものが戻って来た感じがしてちよつと嬉しくて。

◇

ずるずるずると、ただもくもくと麵をすする音だけが聞こえるようになって静かになって、しばらく。

普段なら食べている途中でもひとくち食べ終わるたびに話し始めているこの子たちも、さすがに放っておくとあつという間にだらんとぶよんとしてしまう麵類には勝てない様子。

あと年越しつていう絶妙なタイミングの期限もあるわけだしな。

……お蕎麦もおいしいって言いながら食べてるし、それなら普段会つてご飯食べようつていうときにラーメンとか……いや、ないな。

なんでも女の子と食べるときは基本的にラーメンとかはNGらしい。

代わりにパスタがお勧めだとか……なんでだろうね。

でも確にかがりは大反対だろうし、りさりんも「え？」つていう反応だろう。

さよは反応がわからなくて、ゆりかだけは賛成だろうなあ。

あくまでも僕のイメージだけど、普段の私服の選び方とか制服についたシミとかの具合を見る限りそうそうまちがってもいないはず。

ちよつとだらしのない男子にも負けず劣らずのそれがよく着いてるもんな。

だから子供っぽいんだ、この真横でずずつとしてるこの子は。



「? お揚げいる?」

「ううん」

なんか誤解された……。

でも僕が外食するっていったらやっぱりパスタとかベーカリーとかああいうところじゃなくって、こうしておそばとかラーメンとか定食とかそっちのほうがいいけどなあ……この辺が男女の差か。

でもお蕎麦ってお腹にたまらないからいいよなあ。

だって僕だってお腹に……夕飯は抜いてきたけど、量は減らしてもらっているけど、でも食べきれそうでもないなあ。

ずずずと吸っていて、ふと思う。

……きつねそば。

いろいろとトッピングされてはいるけど……ああ、そういえばここ神社だもんなあ。

きつね、おいなりさま、お揚げ。

もしここに本当に神様ってのがいるんだったら……ぜひ魔法さんのこと退治してほしい。

帰りにしつかりお願いしておこつと。

ちよつと前までの僕ならそんな非科学的な存在は信じなかったけど……なにしろ幼

女だもん。

今は僕自身がむしろ不思議な存在になってるわけだしなあ。

## 39話 去る年と、来る年 6/6

☆☆☆

もう少しで年越しとあつて、先ほどまでよりも増えつつある参拝客の姿。

そんな境内を見下ろす高台の小山。

神社が管理している——つまりは私有地のはずのその一角、特に制限なく誰にでも開放されていて日中でも軽い運動を求める人でそこその賑わいを見せる山の上の、見晴らしのいい展望台まである憩いの場。

舗装されていない遊歩道と舗装されている車道の両方で来られるもの……深夜とあつて街頭の周り意外には灯りなどにひとつつなく、不気味な静けさと吸い込まれそうな深さに包まれている。

当然として登つてくる一般の人間は誰もいない。

そもそも入ろうとしたとして木々に埋もれるような街灯がぼつんとしか見えない完全な漆黒で、さらに「年末年始はご遠慮ください」という看板まであるため常識的な人間なら絶対に入ろうと思うことさえない場所。

しかも今夜は特に晴れてもおらず満月などでもなく、もうまもなく年が明けるこの時間帯にこんなところへ来る人など誰もいない。

……少なくとも去年まではずっとそうだったその場所。

そこを徘徊しているのは全身を防護服、いや、防弾服……傍目に見たとしても戦闘用のもので覆い、ひとつひとつの動作が俊敏でヘルメットから見え隠れする彼らの髪の毛の色は「目標としている幼女」のそれととてもよく似ていたり、あるいは金色だったり白だったり黒だったりする男たちと女たち。

平均的な身長も、眼下の境内で寒い中並んで待つている人々のその平均を遙かに上回っていて筋肉質でいて、使っている言語も違うもの。

口元に備え付けられた通信機器でやりとりを頻繁にしていた彼らだったが1台の車が展望台に……その手前にあるはずの駐車場を無視して車が乗り上げられるぎりぎりの場所まで来て止まると、その前には既に観測班を除いた全員が音もなく整列していた。

車体もなにもかも黒塗りのせいでライト以外には存在しないかのようなその車が完全に止まると、ひとりの男、先ほどの男たちの中でも特に兵装の上等な彼——つまりは武装した兵士たちの指揮役の男が丁重にその扉を開けた。

「……」

異国の言語で礼を言いつつ出てきたのはひとりの女性。

彼女の体格は引退して久しいはずなのに先の兵士たちにも劣らず立派で、眼光は鋭く顔の片側には最近になってから再び若い時分のように化粧をして隠しているが、この場にいる誰もがそこに頬を覆う跡があるのを知っている。

車を降りても少しのあいだ続けていた電話を終え、彼女は改めて整列している彼らに向かい何ごとかを告げる。

彼女が話し終えると指揮役の男がひとりひとりの兵士に……一般人が居ないのをいいことに、夜にしては大きい声で指示を告げていく。

兵士たちはそれぞれ銃身の長い銃を構えつつ、四方に走りながら散っていく。

車から出てきた運転手に外套をかけられつつ、彼女はじつと下を……神社の離れの建物を見つめていた。

☆☆☆

この瞬間だけは、もう20回以上経験しているはずだけど、でも、ちよつとだけわくわくする。

だからこそ……好き勝手して生活リズムが狂っていた時期を除いて、いつも早く布団に潜っていた前の僕だって、昼寝をしないとここまで起きていられない今の僕だって毎年がんばって起きているんだ。

そして。

『……………5、4、3、2、1……………新年おめでとうございますー!』

テレビの前の人たちとみんなが無意識につぶやいていたカウントダウンが終わり、ゼロのタイミングで鐘が鳴る。

たったのそれだけで年が明けた。

ただの暦の上でのシステム上のことなんだけど、でもなんだか特別な気がするこの一瞬が好き。

「……………ふう」

去年から今年も無事に……………あれから魔法さんが発動せず、冬眠も3ヶ月半で終わってくれたおかげでぎりぎり……………かなりぎりぎりでこの瞬間を迎えることができた。

この子たちと。

もう1週間ばかり寝過ごしてたらクリスマスどころかお正月さえ楽しめなかっただろう。

「あけましておめでとう！ 今年も楽しい1年になるといいわねっ」

むしやむしやお菓子をはおばっていたかがりが、ごくんと飲み込んで一番に言う。

今日……昨日の夕飯も食べてきたって言うていたし、そのうえに着物の帯でおなかを締めつけられているはずなのに……お蕎麦のつゆもぜーんぶ飲んで、そのうえにジュースとかも飽きることもなく飲み続けているのにけろりとしているくるんメロンさん。

彼女の消化器はいつたいどんな仕組みになっているんだろ……あれだけ飲み食いしてトイレさえ行かないなんて。

ほんとどこ行っているんだろ？

ラクダみたいな体質なんだろうか。

ちようどコブがふたつあるんだし。

とてもおんなじ女の子とは思えないけど残念ながら最も女の子らしいのがこの子だしなあ。

やつぱり体格に比例するんだろうか……それか別腹みたいなのがあるとか？

「……おめでとうございませう。そうですね、いい年に……今年こそ調子がよくなつて……ときどきでいいので、その。私、体育とか……出てみたい、です。み

なさんと一緒に、軽くでもいいので走ってみたりしたい……です」

「お、抱負つてやつ？ さよちん良いねえ」

ぺこりとお辞儀をして前髪がみんなふあさつとこたつの上に乗るのを眺める。

……髪の毛が伸びてきたからこそわかるんだけど、きつとあれだけ長いと相当めんどくさいはず。

物が見えにくいしいちいちかき上げないとだしで。

切ればいいのについて思うけど、あれだけ目が隠れるくらいになっていると視線を遮れるから恥ずかしがりにとってはめんどくささよりも楽さが勝っているのかもしれない。

僕もその気持ち、よくわかる。

でも髪の毛をかき上げるしぐさが……必要もないときでさえ無意識にするくらいにクセになっているあたり、やっぱり切った方がいいと思うんだけどなあ。

僕と違って切れるんだらうし……まあいきなりは無理か。

「……響さんも」

「ん？」

ぱつちりと彼女のすだれみたいな髪の毛越しに視線が合う。

「早く……元気になれるといい、ですね。 ……お互いに、がんばりましょう」

「……そうだね」



僕の場合は治るもなにもないんだけど……とつさに答えちゃった。

けど原因不明のなにかを抱えていることには変わりないから嘘でもウソでもないし。

「おつめでとー」

……そして巫女りんが甘酒でちよつと……いやこれ酔ってない？

大丈夫？

こういうのって学生はやばいんじゃない？

まあここには僕たちしかいないわけだし外に出なければ大丈夫だとは思うけど。

「そうよねえー、けつきよくー、夏休みの終わりに立ててた計画うー、ほつとんどでできなかったしいー？ ねえー？」

……顔は赤くていつもの元気がとろんとなっていて、着慣れているせいか座椅子を倒してだらしない格好をしている巫女りん。

……普段はゆりかを見張るって感じでもつとしゃきつとしていもんだから……なんだかすぐく新鮮だけど、だらしなきの割には着崩れていない巫女りんがいつもよりも高い声で話している。

というより、これ、甘え声ってやつだったりする？

同世代の男子が聞いたらやばそう……僕でさえどきどきするし。

「私たち4人だけだったりー、クラスで話してたら聞きつけられて一緒に来たりしたー、

他の人とかもいたけどさあ——……」

「ひつく」とかしてゐるし……いつの間に？」

甘酒？

甘酒ごときで酔つ払つちやつたの？

「……響さんがよくなつてえー、また長時間出かけられるようになったらきつとお、今度こそよー？　せつかく仲良くなつたんだしい悲しいじゃない——……」

いつも以上にとりとめの感じのない感じの話し方になつては……まあ中学生にとつては、アルコールが入つていないことになつてははるばるだけ微量は入つてはるばるう甘酒をがぶがぶ飲んだらこうなるのかもね。

あるいはお酒に弱い体質だったりするのかもだし。

僕たちが来てからもときどき呼び出されて抜けて神事とかに付き合つていたみたいだし、ひよつとしたらお神酒とか飲まされたのかもしれないし。

いいなあ、お神酒。

こんな甘酒じゃあな。

やっぱり甘酒は甘酒でしかなかつたんだし。

「そだねーつてりさりん……だいじよぶ？」

「だいじよーぶよお——……慣れてるしいーあははっ」

「こりやアカン。学校にバレたらアカンやつや」

「なあんで関西弁になるのよあつははは！」

「痛い痛い！ 背中ばしばしやらないで！ 縮む！」

「縮む身長なんてあなたにはないじゃないのあはははは！」

「よし、普段からどう思ってるのかよーく分かったよりさりん……覚えてなさいな……」

そう言いつつもぞと抜け出したゆりかは笑いこけているさりんの後ろへ。

「ほれ、お水飲みな」

なんだかんだでやつぱり仲が良いらしく解放しだした彼女。

これって飲み会とかで見る場面なんじゃ……まあ僕はそんなの出たことはないんだけども。

「とりあえず大丈夫っぽいから大丈夫。ん？ 私もちよつと酔っちゃってるかな？」

までもぞと僕の肩につかまりながら入り直してくるゆりか。

ちらつと見てみるけど、裾を抑えて大変そう。

「やんつ」

「……」

やつぱり着物だとそういう動作、難しそうだな。

というか高そうな生地なんだけど、こうやってこたつとかに潜って平気なんだろう  
か。

ゆりかまで巫女服だし……あ、そういえば褒めるの忘れてた。

さつきゆりかだけが居なかったから……なんかのタイミングで褒めとこ。

「……ま、りさりんの言うとおりでさ？」

こつちを向く気配に仕方なく僕も合わせると、すつごく近いところにはつつんさんが  
いる。

「夏祭りとか9月の終わりとかでもけっこーな近場でやってたりするとこあったし？」

そーいうところで浴衣とか着て遊びたかったもんねえ、5人そろって。 ……響にFP

Sで勝てないこのうつぶんを屋台で晴らしてやりたかったし」

「……そんなに負けていたかな、君は」

「別チームでやったときの戦績、帰ったら見てみてよ。 私、わりとボロ負けだから。

響と一緒にチームだとキャリーしてもらえてただけっぽいよ……響、勝つても負けて  
もそんなに動じないもんねー、気にもしてなかったでしょ。 ……ね。 そんな感じ  
だったのに連絡がつかなくなっちゃったもんだから気が気じゃなかったからさ」

「……そう、か」

「うん」

話していてもこうしてしょっちゅう、ちくりとくる。

何気ない、悪気のないはずの会話の中にこう……僕だけがちくりと感じている。

「あ、もーぜんっぜん気にしてないよ？ だって病気だもん、しょうがなかったんだからさ。今のもほんとにただ『こういうことがあったの』って言っただけ。気にしないで」

「……ありがとう」

さつきのさよのに釣られてか、口々に今年の抱負……そのほとんどがみんなで出かけたところとか遊びたいことしかないのが気になるけど、そういうものの話に移っていく。

……この子たちはこうして毎年、少しずつ成長して。

仮説どおりに僕がこのままだったとしたら、もう何年か経ってしまえばきつと——少なくとも見た目は大人と子供の関係になる。

精神年齢的には近くなるけどな………相対的に………けれども肉体年齢の差は開いていく一方。

いつかはお別れの日が来る。

けどどうせこの子たちだったとしても高校に入るタイミング、大学、就職で何回も迎えるんだ、普通のことなんだろう。

僕がそういう友達って居なかったもんだから、今になって急に惜しくなっているだけなんだ。

「……みんな」

そう思ったら口が勝手に動いていた。

「あら響ちゃん？」

「およ？」

「なあーにー？」

「……どうか、しましたか？」

……今日はなんだか楽しさの中にしんみりが入っているからか、ぼそつとした1回で僕の言葉がみんなに届いた様子。

うん。

1年の始まりとしてはいいスタートかも。

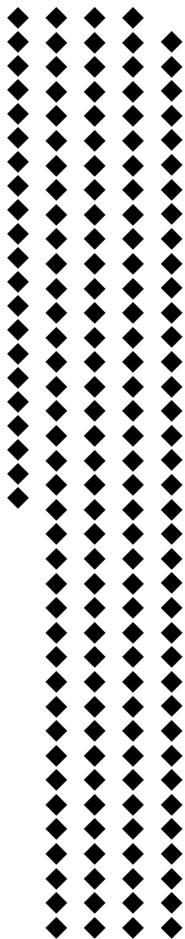
こんなことで喜ぶのもどうかって思うけど、でもちっちゃい声でも聞いてもらえるのは嬉しい。

「……みんなは将来の夢とか——◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆」

☆☆☆

その幼い彼女／彼の姿は複数の……スコープで視られている。  
 そのうちのひとつがようやくに見つけた、わずかな木造の家屋にできた極小の隙間か  
 ら……熱での透過なしにダイレクトに十字の中心が、銀髪の幼子の……顔から頭、そし  
 て背中に焦点を合わせる。

☆☆☆



「……………?」

一瞬……なんだかよくわからないけど、なにか細長いものが僕めがけて飛んでくるよ  
 うな感じがしたんだけど……でも、なにもないよね……僕もちよつと酔ってるのかな。

……甘酒で？

無い無い。

「っ……っ」

一瞬だけ視界がぶれる……というよりはなんだか体に軽くぶつかって来たような揺れたような叩かれたような、そんな感覚。

……変なの。

不整脈かな？

ほら、今日は珍しくお酒呑んでないから……この時間に。

あるいは夜更かししてるからかもね。

「ん？ どしたの響」

「いや、なんでもないよ、気のせいだったみたいだ」

なんか言い損ねたけどせっつかくみんなが注目して聞いてくれてるんだし、聞いてみよう。

「それでみんなには『将来の夢』っていうものが——」



# 40話 「男の子」／「女の子」 1／7

☆☆☆

平地から吹き付ける風で、彼女の外套となびく髪とが音を立てている。

しかしこの程度は寒い内にも入らないと見え、彼女はただただ電波越しに視ている。聞いている。

無線と手元のタブレットの表示からその幼女の動き……しばらく動いてはいないが、それが手に取るようにわかるようになっていく。

顔の片面を覆う化粧で隠してある痣を無意識で撫でつつ、コートの下にはまるで舞踏会にでも出るような場違いな服装をしている彼女は、ただただその表示と音だけを意識して。

ときどき下の境内を眺めて目を休めながら少々の寒さも気にせず立っただけ、ただ待っている。

もしもの場合に備えて。

誰もいないかのように静まっていたその場に、がさ、と茂みからの音が聞こえ、彼女



ただその目が、目そのものが星のように光っていた。

その輝きは眼帯をつけなおしてしばらくして発光するのを止めたらしい。

手元には杖ではなく刃物が……つい今し方まで小枝や草を断ち切るために使い、その前には「障害物」に対して使用していたまっすぐで鋭利な刃物があった。

利き手には長細いその刃物を持ちもう片手にはその鞘を持っていて、つまりは仕込み杖というもので。

彼は体についた枝や葉を払いつつ、きん、とただの杖に戻し、彼女の元へと近づいて行き……隣に立ち、とん、と先を下ろして体重を預け下を見下ろした。

「……………」

いつものようにぼつりとつぶやくような、しかし低く深い声のせいでそれで充分な語り方で。

「……………つはは。……………」

くだらない冗談とでもいうように笑い未満の笑いをする彼女。

それまでずっと手元か眼下から目を離さなかった彼女が、そのとき初めて大きなため息と共に眉間を押さえる。

手渡されたタブレットを受け取った彼もまた画面に集中し、耳に入れてある機器から聞こえてくるふたつの会話を聞き始めた。

「今までは表情を変えることもしなかった彼女がそのとき初めて顔をしかめ、その口からは落ち込んだような声が……切るような冬の息吹に吸い込まれていった。」

☆☆☆

なんかさつき変だったんだよなあ……やっぱ不整脈？

25越えるとだんだんそういうの出て来るって言うし……あ、でも今の僕は子供なんだよなあ。

うーん。

これ以上みんなに注目されたくもないから動かずに体の感覚を探るけど……なにもないよなあ。

なんだか変な感覚……なにかが僕に衝突したような感覚があったんだけど気のせいなんだろうか。

「にしても将来の夢かー。大きく出たねえ響」

おっと、そういえばみんなの視線が僕に集まっていたんだ……さすがに考えごとしちゃ悪いな。

「そうかな。 新年の話題としてはそこまで変わったものでもないと思うけど」

「いや——……ま、こういうときだからちよいハズくてもノリで言えるかあ」

甘酒のせいっていうよりは深夜のテンションなんだろう、みんなと同じようにほほに赤みが出ているゆりかが反応してきた。

もちろん片手にはゲーム機。

……会話をしながらゲームをしながらテレビを聞きながらっていう器用な子だ。

「でも響が話題を提供だなんて珍しー。 ……ね、甘酒ってホントにアルコール入っていないんだよね……？ りさりんはお神酒とか呑んじやっただらろーけど響は……」

「ほんの微量は入っているとのことだけど……それはそうとして、ゆりか、それはどういう意味なのか」

「いんやあ特に意味はないよ？ たぶん」

今は呑んでないし僕だって呑みたいよ。

でも呑めないんだ……持って来てないから。

「んじやせつかくだし最初に反応した私から言ってみよっか！」

「ゆりかからでいいのか？」

「だってえー、せつかくだから響のはラストに聞いてみたいし。

ねえ？」

「え、ええ……」

みんなが頷いている……女の子同士の独特の感性で僕のは後回しにされるらしい。

「私はねえ……ほれ、悲しいことにたぶん何年経つてもたいしておつきくなれないでしょうこの見た目。 だってお母さんもだからねえ……このロリロリしい見た目を活かして今流行りの実況者とか、あるいはプロのゲームマー！ なあに、世の中の男の半分はロリコンなのだ、だからこそこの私の出番なのだよ!!」

「あつはは、ゆりかが男に！ そんなちんちくりんじゃ誰も寄ってこないわよ、ブラだつて」

「あ、ちよいりさりんや」

「むむー!!」

お口チャックされたりさりんのことは……気がつかなかったことにしよう。

「……つていうのは無理そうなので、おとなしくサブカル関係のお仕事したいなつていうふわっふわな感じよ」

ぐいっと甘酒をひとあおりして……酔いはできないのに、けどそうしてゲーム機をちゃんと置いておちやらけた感じがすつと引く。

「……マジメな話ね？ ちよつとは考えたし調べたしやる気だったのよ？ けどさ、あーいう人気商売って個人の人気っていうかビジュアルとキラクターってやつ以外にも資本とか人員っていうバックアップが不可欠なの。 世知辛い話だけど結局はコ

ネと組織力つてことで私は言われたとおりにはやるだけな会社員とおなじことになるらしいのよ。知ってる？ あー言うのつて始めて1年以内にほとんど止めちゃうの。病んだりストーキングされたり囲われたりして」

……この子、本当に中学生？

「なにより一部のトップ層以外は短命な宿命だしなんか変なのがついてきたら精神病みそーだし……飽きられたらそこまでなのだ。ブームつてヤツは読めないもんだからねえ……あと顔出ししたら間違いなく面倒だし」

「ぶはっ……そうねえ、いくら脳天気なあんだでもたしかに大変そうかもー」

「りさりんの評価がいきなり辛辣う！」

「くくく……ふう。今のはそこまで考えてたのねつて褒めたのよ？」

顔は真つ赤なまんまだけどちよつと落ち着いたらしいりさりんのろれつが戻つて来た。た。

「いやりさりん今私のこと、のーてんきつて」

「そーだったつけ？ でもゆりかつてふたりいるから問題ないわよね……あはははは、ゆりかがふたりつて！ あつはははは!! のーてんきがふたつよふたつ!! あー苦し」

「そこで唐突に普通のテンションに戻らないでよ……でもだーめだこりゃ。おつかしいなあ、お水ならたつくさんこれでもかつて飲ませたのに。……りさりんや、ちなみ

に響は何人いるのかね？」

笑い初めてまた顔が……さつきよりも真っ赤になっている巫女りん。

……これ、ほんとうに大丈夫？

りさりん笑い上戸ってやつじゃないの？

「うーん……重なってるう……とりあえず5人くらい！ もつと増えてもいいわね!!」

「5人とな！ みんな聞いたかね！ オリジナルの響自身をここにひとり残しておいで、他4人をひとりずつ配布すればまるっと収まるじゃない!!! みんな、ひびきんズを好きにできるよ!!!」

「ゆりかも落ち着こうか」

「やん、私は素面よ?」

ゆりかは甘酒しか飲んでいないはず……だよな？

いや、ときどき席を外しているし、ひよつとしたら巫女りんのお家の人からこつそり  
?  
?

これが外に漏れたらまずいかも……未成年飲酒がふたりだし。

いや、こつそりな僕を含めたら3人か？

来る前に景気づけについてほんの軽ーくだったから「はーって吐いてみてー?」ってや  
られたらバレちゃう。



「じよーだんよじよーだん。でも私には響はやつぱひとりしか見えないなあ。……  
ねね、響って分裂したりしない？」

「僕を何だと思ってるんだ君は」

「そうよ、修行不足よゆりか！ ちゃんと5人いるもの、もつと鍛えなさい！」

「了解でありますっ！ そしていつかマイ響を手に入れるのだ！」

「……さつきからよく話の流れがわからないの……分かる？ さよちゃん」

「えっと、その……かがりさん。それはですね……」

どうも静かだったかがりは途中から着いて来られなくなっていたらしく、今までの流れをわかりやすいように説明し出すさよと顔をつきあわせている。

ハテナしか浮かんでいないかがりに対して懇切丁寧に、はじめから説明をしているさよ。

がんばれ。

がんばって。

かがりへの説明はかなり根気が要るから……主導権を握れないとすーぐに話題が逸れていくっていう意味合いで。

理解力自体はあるんだけどなあ……なにせくるんくるんくるんメロンなんだ、何かを思いついたら手遅れなんだ。

「……やっぱ、ほんとにぼわぼわしてきてる。……神社のだから手作りなの？ この甘酒。アルコール抜けきってないんじゃない？でももう一杯！」

なるほど。

あ、いや、お酒のことじゃなくてきつきのゆりかの話のこと。

好きなことを仕事にするっていうのはとっても大変だっていうけど、そうやってきちんと考えていろいろと調べて現実を見ながらだったならいいのかもって。

そんな感じで探していくのなら、きつとなにかが見つかるところだろう。

……そして僕も巫女りんとおんなじ感想だったのは黙っておこう。

だって、その……普段のお調子っぷり、いや、子供っぷりが……。

「響？　なんか変なこと考えてない？」

「いや、なにも？」

変なことは考えていないからセーフ。

「そー？　あやしいなあ」

「……………」

ゆりかがやけに人の機微に敏感なのはいつもどおりだな。

「……ま、話を戻すとしまして。……今はまだふわつとしてるけどさ、私、ゲームでも

アニメでも小説でも映画でもドラマでも……っていっぱい好きなものあるからさ、その

中のどれかで活躍じゃなくても貢献とかできそうならどれでもいいのよ。あえてかたくるしく言ってみるなら出版とか制作とか？ 作り手っていうのでも才能さえあればいいかなーって。まーだぜんぜん分らないけど」

「そうか。なれるといいね。ゆりかの好きなことだもんな、応援している」  
「うへへえー」

僕みたいに手遅れになる前に。

できたら学生のうちからしたいことを見つけておくといいねって。

僕も多分やりたいことがないから就活とかしなかったんだろうし……きつと僕みたいな人もそれなりにいるんだろうから。

「んあ、じゃかがりんにバトンタッチい！」

「……えき？ 私？」

少しだけ赤みが増したほっぺたを隠すようにしつつ、照れ隠しからか唐突にかがりのご指名。

さよから説明を受けていて、でも思っていたとおりに全然わかっていなさそうなくなるんさんへ話題を投げた。

「えつと、なんの話でしたっけ？」

「……将来の夢だよ、かがりさんや」

「? どうしてさん付けになったの? ゆりかちゃん」

「も少しメモリ増設したほうが、あ、いやなんでもない、ささつ、どうぞどうぞ」

「違うんだゆりか……メモリ、短期記憶能力はちゃんとあるんだ。」

でもそれがさつき観た番組の何かだったり雑誌とかマンガの目に着いたのをずっと反芻していて駄目なだけなんだ。

「めもり? ……えつと、そうねえ……ちゃんと考えたことはなかったけど、私ならきれいな洋服とかが好きだから、そうなると服飾っていうことになるのかしら?」

うん、そうだろうね。

君は着飾るのも好きだけど着せ替えるのも好きだもんね……店員さんと盛り上がったもんね……その傍で人形してた僕は良く知ってるよ。

「ひとことに服飾と言ってもデザインナーさんだったり実際に作る方だったり、さらに進んでみるのなら特定のデザインの専門学校に通ったり……好きなデザインを作る人が見つければ、その方に弟子入りしたりすることも考えられそうね」

「……かがり? そこにおわしますはかがりさんですか?」

「やあねえゆりかちゃん、私は私よ!」

「んなバカな」

ゆりかが目と口を開けっ放しにしている。

その場のみんな……僕を含めた、かがりを除いたみんながそうしている。

だつてくるんさんがくるんさんらしからぬことを、深く考えもせずさらつと言いのけたんだ。

さつきまでのゆりかの話聞いていただけのこの子が。

……いやいや、この子も一応は中学2年なんだ、一応は……それくらいの知識と思考は持ち合わせているんだ。

ただそれをいつもはゼーんぶ、目の前の好きなことだけに振り分けちゃっているだけで。

まじめにやればできるっていうのは夏休みでよくわかつたしな……となるとこの子には誰か面倒見のいいスパルタなお目付役が必須ということになるわけだけど。

……そうか、弟子入り。

ああ言う世界は厳しいって言うからきつと師匠とかがいれば……!

きつとそのうちに見つかるはず……それもまた明日の朝に祈ってあげよう。

お賽銭を奮発しておけば願いは届くかもしれないんだしな。

## 40話 「男の子」／「女の子」 2／7

つけっぱなしのテレビの向こうでは、知らない芸人の人たちがお酒を片手にわいわいとやっている。

いいなあ……僕の手には甘酒しかないというのに世の中は理不尽だ。

でもこんな時間にお酒飲んだら寝ちやいそうだししょうがないか。

たまには飲まない日っていうのも大事なんだ。

まあ来る前にちよつとだけ呑んだけどあの程度は呑んだうちに入らないからいいんだ。

景気づけの一杯だったんだもん、なんの問題もないよね。

僕の本当の年齢はお酒オツケーなんだ、何も問題はない。

そのお酒も、肝臓がどうこう以前になんとなくの習慣で無意識で飲むようになってしまった。うとなんだかお酒のおいしさと楽しさが減るからこういう日も必要なんだ。

たまに忙しかったり気が向かなかつたりして飲まない日が続いたあとの一杯はまた格別なもの。

だから今夜は素直に諦めよう。

どうせ飲めないんだし。

いや、帰ったら……いやいや今日くらいは、年が明けた今日くらいは止めておこう。厳密にはもう昨日だから帰ってからならいいかもしれないけどって屁理屈が思い浮かぶけど……さすがにここまでこだわるのはアル中っぽいつて感じるからやつぱやめとこ。

ともかく今、ここではお酒は飲まないし飲めない。

だから口が寂しいんだけど食べものは喉を通らない。

かといつてばかばかお茶とかコーヒー飲んでいるとさつきみたいに動悸みたいなのがしてきちゃうみたいだし。

たしかアルコールだけじゃなくってカフェインでもあんな状態になる人がいるって聞いたことがあるけど……まさかそのせい？

それでさつきのあれが？

……いやいや今までそんなのいちどもなかったじゃないか。

だったらすつきの体が揺れたみたいなの衝撃、あれはいつたいなんだったんだろ。

なんかああ言うのって怖いけど……多分ネットとかで調べると「末期です」とか出て縮こまるけど実際には大したことないあれだつて思つておく。

あの後しばらく身構えていたんだけど何ともなかったんだ。

それよりも今はせっかくの新年のお祝い中なんだ。

かがりの話はやっぱり思ったとおりにあつちこつち行っていたけどようやく戻って来たみたいだし聞いておいてあげないと……そもそも僕からの話題だしな、珍しく。

みんながそれをまじめに聞いてくれるっていう奇跡まで起きているんだし。

「……それでね？」

ずいぶんあつちに行つてこつちに行つてつてしてた感じの話がようやく戻つて来たのを感じ取つた僕の耳が彼女の言葉を認識し出す。

「その人に合うお洋服を選んだり、あるいは作つたりもいいわねえ……お化粧とかを手伝うお仕事だつたりエステとかでお肌から綺麗にしてあげたり！ それからそれから！！」

「……あの。 かがりさんは、その……かがりさん自身が綺麗になるのは」

さつきから軌道修正をがんばっていたさよの顔には疲労が浮かんでいる。

「それももちろん好きなんだけれどね？ ……そうね、響ちゃんのおきにはつきり分かつたのよ」

「……くん？ 僕？」

なんで？

「ええ」



ええじゃないけど。

……おもむろに僕のそばににじり寄って来た彼女は……何を思ったか僕の顔をのぞき込みながら、ぱさっと髪の毛をひとふさ持ち上げてくるんとされてふわっとさされた。

ぱさりとほっぺに当たる僕の髪の毛。

「もちろんまだまだ決まってはいいいのよ。けど、去年ね? ……初めての、こつそりのアルバイトで、そのはじめのはじめで響ちゃんを着飾ってコーデイナートしてあげたときにね? 思ったの」

あげた?

ほんとうに?!

「させた」のまちがいじゃ?

「響ちゃんのとくみみたいだね、その人の魅力をその人ができる限界以上に引き出してあげて引き出してみせる……そんなお仕事がしたいわって」

「……そうか」

じゃあなんで今僕の髪の毛ふさってしたの?

まあ多分意味はないんだらうけども……それはそれとしてコーデイナートとかは合っついてそうな気がする。

服を売るところなんだ、来る人の大半は望んでいるわけだからなんの問題もないはずなんだ……僕が例外だったというわけで。

この子だって普通の男相手なら無難に流行りのを進めたんだろうし。

「みんな夢があつていいわねーひっく」

「りさりんだいじよぶ？ 酔った席つてヘンなこと言いやすいから気いつけて？」

真つ赤な顔の巫女りんが……あ、これ完全に場の空気つていうやつにも酔ってるな……お酒で理性が飛びかけたところにみんなで年を越しているつていうイベントでハイになつてる。

眠気を無理やりにコーヒーとかお茶とかおしゃべりでくぐり抜けているつて感じなんだし、場の空気ここまです酔ったとしてもしようがないだろうけども。

みんな多かれ少なかれそうなつているみたいだし。

「なんだか暑いねー」つて言いながらごまかしあつているのがほほえましい。

それにしても巫女りん。

僕を着せ替えし続けたかがりとか、連勝し続けてハイになっているときのゆりかによく似ている。

お酒なんか飲んでいないのにそんな感じになつていいるあれに。

さよは僕と同じでお酒を飲まないとそうはなれないかもな。

彼女だけは……あ、ほっぺた赤くなってる。

まあストーブもついているし、気がつかなかったことにしよう。

「私は、ほおら。知ってのとおりここの神主の長女でしょお？ 順当に行けば、なん

にもしたいことが見つからなければ、多分お父さんを継ぐことになると思うのよお。

女だからそのへんは大変らしいけどお、少子化だしで今はその辺緩くなってきたって

言うしい」

たまたま目が合ったって思ったなら「どう思う？」って聞かれた僕は、ちよつと考えてみて答える。

「……その年なら、まだしたいことが見つかっていないっていうのが普通だよ、りさ」

ここに25になってもしたいことが見つからないニートも居るんだし。

「そういうものが、方向性だけでもはつきり見つかっているふたりのほうが珍しいんだ。

気にしなくてもいいと思う。君ならきつと何かを見つけれられるよ」

「ありがとー響きーん……うへへえ、響さんに慰められちゃったー、ねーゆりかー？」

適当なこと言っただけ酔っ払いだからそれで満足らしく、ゆりかにまわりつき始めた。

「嬉しーい♡」

「響、コイツはもうだめだ、酔っ払っている」

「そんなことないわよー、ちよつとお父さんたちから『りさももう2年なんだしちよつとくらい』って」

「危ない発言禁止!」

「ちよーつとだけ飲んでわぶっ」

「遅かったか……ぬう」

びたつと両手でお口チャックされた巫女りんの発言は表には出せないもの。

今どきはスマホで簡単に録音も録画もできちやうから危ない危ない。

この子たちは大丈夫な感じだけど万が一はあるんだ。

「むうー、ゆりかのけち。 けち」

「落ちつくまでこうしておかねば……にしても酒グセ悪いのね、りさりん」

「本当に飲んでたんだね……お酒。

いいなあ。

家にもよるだろうけど親が飲ませるところだつてあるつて聞くし中学生な巫女りんだし、こういうときくらいはいいんだらう。

家柄が家柄だからバレても「神事のためです」で乗り切れるだろうし、りさりん自身もお酒に溺れる質の子じゃないしな、大丈夫だろうきつと。

「……も、大丈夫? やう、あいこと口走ったりしない?」

「あ——……ちよつと醒めてきた気がするかも」

「後悔しないようにね。 や、マジで」

少しだけ座っていた目が元に戻った巫女りんが解放された。

「ふう。 んでさっきの続きだけどね、私もここに愛着があるわけよ……だってちっちゃいころからこの服装楽しんだし。 一応ね、このへん一帯が昔は家の敷地だったらしいから食べていくのには困らないって言ってたし、お父さんが」

「このブルジョワめ」

「聖職者階級つてそのへんどうなのよゆりか」

「あ、いやテキストに突っ込んだだけだからわかんないやい」

うん、ゆりかって結構適当なワード使って楽しんでるよね。

「ま、とりあえず大学までみんなと行ってみていろいろ勉強してみても経験してみても、なにか見つればそっち行って、そうじゃなければって感じかしらね？ ……そっか、進路調査とかそのうちあるのよねえ……どうしよ」

話し終わるやいなや、電池が切れたようにぱたりと横になる巫女りん。

そんな風は無造作にしても着崩れないというのが普段の経験を表している。

「？」

「……………」

ふと視線が刺さっている感じに反応してみると、さよの目が……片目が前髪に隠れている眼鏡越しのそれが僕に向いていた。

「……………」

「多分言いたいこと考えてるんだろなあ」って同じ属性のよしみで分かったからじつと受けて立つことしばし。

「私……ですね」

「僕でもいいって思うし、決まっていけないなら別にいいんじゃないかな」

仲良くなったって言ってもこれだけの人数の前だから大変だろうし。

「さよちゃん、思い浮かんだことを口にするのでいいのよ？ そんなに深く考えなくても」

そこへメロンさんがいいことを言う。

そうそう、簡単なのでいいと思うよ？

なんかゆりかがすつごくマジメだったからそういう空気なだけだけど、僕は元々「なんかある？」って感じで聞いてみただけなんだから。

「……………えつと、私も、まだ、決まっていけないんです……今まで病院で、本とか……

読むくらいしかできなかつた、ので。 けど」

すう、はあ……と、落ちつくためのひと息。

「……私も。私も、たくさん勉強、して。なにがいちばん、私に向いて……いるのか。たくさん、たくさん……試してみたら、決めたいです。まだ中学生、ですから」

「そうか。えらいな」

「……そんな。本当に何も、分からないので」

「中学生だからそれで良いと思うよ。君たちの学校は中高一貫だって言うし」

特に君は体が弱いんだし焦る必要もないって思う。

「……それで響さんは、どうなんですか？」

「そーだよ、ひびきん。トリはもちろん主役じゃない？」

「そうねえ、そういえば響ちゃんってさよちゃんみたいに病気がちだけど、たくさん本とか読んでいるみたいだしおんなじような感じかしら？ あ、でもいろんなことを知っているわけだし夢とかあったり」

「かがりんストーツプ。……かがりんさんや、人のネタを潰して差し上げるでない」

「え？ ……あらごめんさい、つい」

「そーよ、響さんならもつとなにか、こー……すうこーな目的があるはずにやの！」

「あー、いそがし……りさりんや、お水たくさん飲みなさいな。ほれ、もつともつと」

かがりはゆりかの指摘にわたわたして、さよは巫女りんのあまりの変わりっぷり

に……思考停止中で、巫女りんはゆりかに介抱され直して。  
まるで飲み会だ。

りさりん以外は場の雰囲気と甘酒で酔っていて顔真っ赤だし、話も飛び飛び。

ここにお酒の瓶でも置けば飲み会だと思えない雰囲気。

まあ飲み会なんて出たこともないんだけども。

出たとしたってきつと、僕からは話しかけられずに……そう、ただお酒を飲みながらぼーつとみんなの話を聞くともなく聞いているだけな気がするし。

うん、間違いない。

それで「響君は誰とも話さないのー？」とか絡んでくる人が居なければ家でひとりつきりで吞んでいるときと変わらないんだろう。

悲しいけど僕のことには僕がいちばんよく知っているんだ。

「で、どーなのよ響？」

りさりんの介抱が済んだゆりかが……あ、ちよつと着崩れてきてる。

「えつと……うん。僕も特にまだなにも……したいこととかやりたいこととかは。とりあえずでこのまま療養しながら……」

口が勝手に普段のような言い訳をしている。

……今までなんにも、本当になんにもしてこなかった僕。



こんな状況になってもまだ家にひとりで籠もるだけのつもりで、時間を消費するコンテナツだけは豊富な環境に感謝しながら魔法さんが解けるのを待ちつつ、ただただ生きるだけ。

長くても数年でこの子たちともフェードアウトして、そのあとは。

……また、きつとこれまで通りのニートな生活で歳だけを取っていくような――

「……ダメですっ!!」

さよが唐突に、裏返るような声を上げていた。

「っ!?!」

「さよちゃん!? びつくりしたあ急に」

「あ、ごめん、なさい……」

それも僕の近くまで……顔同士が、お互いの髪の毛が1本1本見えるくらいまで来ていて。

もさつとしてしている前髪のすき間から、レンズが、目が、まつげが、瞳の奥が、はつきりと見えるくらいに近づいていて……巫女衣装が少し崩れていて、その状態でよつんばいになりながら僕に迫ってきていて。

「……………」

「……………」

そんな自分に今気がついたのか、普段に無く目を見開いて……あ、だんだん赤くなってきた……固まっちゃったさよ。

「あらあら」

「あらあらじゃないようかがりん」

「さよさんが響さんに迫ってるう、あははっ」

……なんかこの子の地雷でも踏んじやったかな。

「……はわ、はわわわ……」

唇がふるふるしだしたさよが普段のかがりのように押さえ付けているから僕は動けない。

……なんで君たちっていつも僕の上に乗っかってこようとするの……？

うん、僕がちっちゃくて肉体的には同性だからだね……でもちよつとは遠慮してほしいって思う。

ほら、着崩れてるから君の胸元も下が見えちゃってるし。

もちろん僕はそういうのに興味がないから一瞬で逸らしたけど。

## 40話 「男の子」／「女の子」 3／7

「……私、これまでに何回か……成功率が低い手術、受けたことがあるんです」

さよが聞いたこともない声の大ききでいきなり僕にNOをつきつけて、僕も含めて5人もいる空間なのにしーんとしてちよつとして……なんかいきなり重い話をし始めた。

つけっぱなしのテレビから音はするし、外からも……囃しつていうのかな、あるいは神事とかかな……くわしくないからよくわからないけれども「とにかく神社といたらあれ」つていう音が響いてくる。

「うん。……話す前にとりあえず、少し離れた方が良いんじゃないかな。僕は平気

だけど、君にとつては」

「えっ？ ……あ、あの、ごめんなさいっ」

顔と顔、目と目がすごく近くつて鼻がくつつきそうだったのに気がついたらしい彼女はあわてて離れる。

目線が下の僕をのぞき込む感じだったから前髪がすだれみたいになってたもんね。

普段の彼女のにもこんな近くで人と視線を合わせるのは大変だろうし……僕もちよつと恥ずかしかつたから。

「…………ふう」

ゆりかか誰かのため息も聞こえる……そうだよね、さよがバランス崩して転ぶんじゃないかって心配だったよね。

ちよつと気ままずくなって視線を外した先にいた巫女りんは今のさよの声で飛び起きたらしく、目をぱちくりして……きつとびつくりしたせいで真つ赤だった顔が色づく程度に戻っちゃっている。

きよろきよろとみんなを順に見回してきつきまでの巫女りんみたいな色に染まっている巫女さよさん。

赤くなるのも代わりばんこか。

仲がいいな。

でもなんだかすつごく大変そうな話になってきている気がする……というか本当に唐突だな。

きつといろいろと話す前に考えて、でも口が動き始めると焦っちゃってせつかく順序立てていた話をすつ飛ばしちやって、いちばん言いたかったことだけを先に言っちゃうんだろう。

わかる。

僕もそういう性格だから。

性格って言うより生まれつきのなにかなんだ。

「……それで？」

だからまずは話させてあげよう。

こういうのだけは得意なんだ。

「あ、はい……それでですね、その手術のたびにですね？ 大抵は、手術の前の夜と……白い部屋に運ばれたあとに、必ず言われるんです。自分たち……先生方は全力は尽くすけど、手術自体は必ず成功させるけど、そのあとにいちばん大事なのは、本人、私の体力と、そして……生きようという、意思だつて。体が治ろうとする力つて、そういうものだつて」

慣れないことをしたからか、いつのまにか後ろに来ていた巫女りに勧められてきくと座らされる黒めがねさん。

なんかわたわたして転びそうだったもんね……着慣れない巫女服だし、普段の何倍もしゃべってるからそうなるよね。

「せっかく話しているのに当の本人が倒れちゃったりしたら困るからね。落ちついて、ね？」

「はい。……それですね、響さん」

「うん」

「だから、手術の前にはたくさん、したいことを考えたり、リストアップ、したり……私  
の場合は、その、読みたい本を、たくさん積んでおくことなんですけど……でも、そう  
して、そのあとにしたいことをたくさん考えておいて。……手術が終わったあとに、  
取っておくように、……と。そう、言われるんです」

「……そうか」

ほーっ、と息をつくさよ。

多分言いたいことのうち、まとまってる部分だけは言えたんだろう。

大丈夫だ、伝えたいことは僕に届いたから。

……きつと勇気が要ったんだろう、今さらになつてさらにあわあわしだす彼女を見て  
いると胸が締めつけられる気がする。

僕は健康そのものの生活をずーっと続けてきて……むしろひきこもつて好き放題し  
て体調を崩せるくらいには体がなんともなくなつて平気な人生してきて、さらに魔法さん  
が……たぶんひどい病気とはこの先にもご縁がなさそう、だから病気とかとは無縁かも  
しれなくつて。

ただの想像だけど、でもこの体になつてから1回もカゼを引いていないんだ。

普段なら年に何回かは軽くても引くはずのそれを、この1年……半年で1回も。

だからきつと僕はさらに健康体になつて。

小指をぶつけてもだえるくらいはするけど、階段から落ちるくらいの危ないのからは守られちゃって。

だから、めんどくさいからって、誘いを断るのにちょうどいいからってついちゃった、この病弱っていう入院っていう嘘がずつしりと響いてくるんだ。

でも。

でも、タイミングが揃ったら、いずれは言わなきゃいけないんだ。

だからこの苦しい気持ちも、そのときにぜんぶごめんなさいするために取っておく。

「……あの、急に大声。ほんとうに、ごめんなさい」

「いや、僕の方こそ」

「でも……いえ、だから」

前髪をかき上げて両目が珍しくはつきりと出た状態のさよが、僕を見てくる。

「……だから、そうして手術を乗り越えてこられたからこそ、今、こうして。みなさんと……友だちなんて、入院ばかりで、ろくにできなかつた私が、こんなに、仲のいい、友だちと、みなさんと。……おはなし……できるようになってる、んだと、思うんです」

ふう、と息をつき、ぱらつと落ちてきた前髪をかき上げながら続けるさよ。

「……それで……これは響さんのおかげ、だから」

「僕の? ……いや、僕はなにも」

さよの大変な人生から急に僕の呑気な人生に話が変わってハテナが浮かぶ僕。

「いいえ。夏のあのときに、響さんが、お友だちを……私と、仲良くしてくれるお友だちを、ゆりかさんとりささんと、そして、響さん自身を、繋げてくれたから。……だから、だから、その響さんもって、思ったら……つい、出てしまっただけです」

あれは「たまたま」本屋に出向いて、その日が「たまたま」夏休みの中の登校日というやつの下校時刻に重なって、いって、「たまたま」ゆりかたちに絡まれて。

そこから「たまたま」どうやって逃げ出したもんかと出口の方を見ていたら、「たまたま」さよと目が合って、それで僕の名前がかがりが呼ばれて。

そうして連行された先で「どういう関係?」ってやったらねちっこく聞かれた、ただの偶然っていうやつが重なっただけだったのに。

だからそれは過大評価っていうもんじゃないんだけど……この子がこんなに一生懸命に話していて、こんなにはつきりと目を輝かせて話しているんだ、無粋な真似は止めておこう。

僕だって空気くらいは読める。

学生らしい青春もこんな夜くらい良いだろう。

「……そうだったんだね。言ってくれてありがとう、さよ」



「い、いえっ」

これだけのことを真剣に……僕のことを想って言ってくれるんだ。きっと重度の……心臓とか脳とかの内臓の重い病気なんだろう。

それでも学校に去年から通えているくらいにはよくなっていて……重い病気を乗り越えて学校へ自分から通っているだなんてどのくらいの精神力……心の強さが必要なんだろうか。

僕だったら無理だろうし、多分行かなくても卒業できるんなら行かない。

少なくとも僕がそのときならそうしたはず。

でもこの子は違うんだ。

そんなこの子が僕に言う。

生きる意思。

……この前階段から落ちそうだったときにもこの子たちのことがふと浮かんだんだ。

未練。

しなきゃいけないこと。

したいこと。

「……そうねえ」

「あう、りささん……」

もういつかい真つ赤になつてゐるさよの髪のをほむほむとしながら、もうすつかり元に戻つた巫女りんが言う。

「……その……ね？ 私がここで、この格好で言うのもなんなんだけど……きつといいわよね、友だち同士なんだし。他に誰も聞いてる人なんていないんだし、神様だつてお参りに来る人たちの願いを聞くのでいっぱいだろうし。だから内緒よ？ ……で、そのね？ 私は、私自身は……だけどね？ 神さまの力なんてほんの少しだつて思つてる」

「……いいのか、そんなことを言つてしまつて」

巫女さんだつて言うのになんちゆうーことをこの子は。

「いいのよ、だつてそんなに神さまがすごいんだつたら誰でも好きなだけ願いが叶うはずでしょ？」

うん……まあ確かにそうだよね。

いるかないかつてのは深くは突つ込まないけど、とりあえずで僕自身が会つたり話したりできない存在のことは信じられないかな、僕は。

「でしょ？ たとえばゆりかが響の」

「ち、ちよーっ?!? りさりん?!?」

「あ。……じよ、冗談よ冗談！ この先は言わないから安心して？」

「うう……りさりんのくせに……」

「？」

「な、何でもないからね響！　ほんとーなの!!」

今度はゆりかがさつきまでの巫女ペアのように真つ赤になるのをぼーつと見る。

「だけどね？　ほんの少しのはずだけど、でも違うときがあるの。それはね、ご家族の病気だとか大切な試験とか、そういうのを真剣に……1回でもだけど、何度も来る人……これと言つちや悪いんだけど、今日みたいになんとなくで来ている人たちとは全然違うのよ。　なにもかも」

「あーあ……りさりんが言つちやいけないこと言ってるー」

「茶化さないの、もう。　それに全員っていうわけじゃないんだから……今までたくさん見てきたからその人を見ていればなんとなくわかるのよ、そういうの。　これでも10年以上お父さんの手伝いとかしてるんだから。　でね？　そういう真剣な人たち……神通力っていうの？　そんな才能なんて一切無いか、少なくとも感じられない私でさえね、そういう人たちの迫力っていうのかな……こう、ぶわつてしてるのが分かるのよ。　オーラとか迫力とか気とか、うまく説明できないなにかを」

オーラ。

勘。

あの人もそういうのが好きだった。

「……たぶんね? 『前に進もう、試練を乗り越えよう』……そういう意思がとっても強いんだなって思うの。……なんだか変な顔してるかがりさんにもわかりやすく言ってみると……そうね、マンガとかでよくあるでしょ? オーラとかそういうの。そういう感じ。だからさよさんが言ったみたいな気持ちが大切なんじゃないかって私も思うの」

良い話なんだけど、ありがたいんだけど……かがりはやっぱりついて行けてないのか。

ちゃんと聞けば分かるはずなのにあの子は……。

「よく分からないけれど……そうなの?」

「そうなの。……かがりさんがこの前貸してくれたマンガでもおキツネさまがーっていうシーンあったでしょ?」

「……そうだったわね?」

ちらつと見たら「くるん?」ってしてる。

「……ちよつと! ……なんで『このマンガおすすめだからぜひ!』って貸した側が忘れちゃってるのよかがりさん」

「お、覚えているわよ? ……そのページを見ればすぐに」

「あ、かがりんそれ知ってる！ 暗記帳に書いておいたのにーって、あのががりんが中間で嘆いてたやつ！ つまりは」

「今それはいいでしょう!？」

今度はかがりが真っ赤になっってくるんくるんしていてみんなで騒いで……着物の肩のところを整えたかがりが、まだ顔は赤いけど、でも落ちついた感じになっ僕を見てくる。

「……それなら私も。 響ちゃん？」

「かがり」

さすがにお花畑は引つ込めたらしいかがりが言う。

「……私には、みんなみたいに詳しいことはわからないわ。 ……でも、どんなおはなしでも、どれだけ苦しい目に遭っていてもね？ 最後まで、最後の最後まで自分の気持ちっていうものを失わない人が必ず目標にたどり着けるの」

……でもそれは、ただの作られた話というものだし、そういうのって主人公たちとか以外のモブとかハッピーエンドじゃなかったりしたら。

「もちろん私だって、おはなしと現実とは違つて都合のいい話だつていうのはわかつているわ？ だけど、それでもね響ちゃん。 ……心の熱さ、意思。 そういうものを持ち続けている方が未来へ向かつて……響ちゃんもさよちゃんみたいに、その、体のこと、が

んばれるって思うわっ」

くるんつとしながら、……でも普段と違ってもつとはつきりと、僕を氣遣っているっていう意思を込めながら言ってくる。

——完全な嘘じゃない。

重い病気になつているのと、原因不明で突然に見知らぬ姿、それも年齢も性別も人種も異なる姿になつたのと人知を超える何かに付きまとわれているのと同じや真剣さ具合は全然違うし、きつと僕なんかよりさよの方が大変な人生なんだろうけど……でも。

こんな状況になつて誰にも相談できなくて……しなくて過ごしてきた僕。

お隣さんにさえ結局まだ言つてない、これのことを——多分初めて。

初めて心配されて応援されているって……こんな僕でも分かる。

「そんな資格もなにもないんだ」って思う僕と「はげまされるのってこんなに嬉しいんだ」って思っている僕がいる。

ひとまわりも下の子たちにはげまされて……最近凹んでいた気持ちだが、ちよつとあつたかくなつた感じ。

……そっか。

友達が居るって、こういうことなんだ。

## 40話 「男の子」／「女の子」 4／7

人生経験が無いと顔つきが幼いつて言うけど僕は心まで幼かったらしい。

だって良い大人が中学生に励まされちゃったんだから……それも、あのがかりにまで。

まだまだ子供だと思っていて……実際にそうなんだけど、でもあのがかりだって「気持ちが大切だ」って心を込めて言ってくれている。

……こういうのって子供の方が分かるのかもね。

ムダに長い時間をすごしてきたからこそ知識としていろんなことを知りすぎていて中途半端な経験ばかりが貯まっちゃって、逆にそれが単純なのにすつごくめんどくさい思考回路にしていたのかも。

確かに今言われたような言葉は青臭いし子供っぽいし「現実とは違うんだ」とは思う。

そんなの君たちがまだ子供だから言えるんだって。

でもその一方でやっぱり……生きるっていうことは、何かをするってのは情熱とか熱意とかそういういったものだっていうのもいろんな本で知っているからこそ納得もできる。

……そうだよな。

僕はきつと頭でつかちな子供なんだ。

だから中途半端な知識と経験でめんどくさく考えちゃってダメにしちゃう。

うん、分かってことなんだ。

でもまあ、最近いろいろと……魔法さんがあまりに激しかったもんだから辛くて疲れ  
ていたところもあつたつてのがはつきり自覚できる。

……僕の体感的には世界が極端に変わって1週間だもんな、そりやあまだ心の整理が  
ついていないのも当然だし体も弱つたままなんだから気持ちも弱くなつてたんだらう。

ちよつと具合悪いときとかに見る夢とかはやなものだつたりするし……起きてすぐ  
忘れるけど。

それにしても……階段の件で知つたことではあるけど、改めて僕にとつてこの子たち  
の存在は大きいものらしい。

歳はずいぶん離れているし性別も違うけど、でも友達つてこういうものなんだなつて  
ちよつと嬉しくなつたりもする。

——そんなことを、どや顔つていうのをしながら返事待ちの、やつぱり体は育つてい  
ても中身はまだまだなかがりとみんなに向けて応える。

「……僕から言い出した話だつたのにね。　なんだか励まされているな……みんな、あ  
りがとう。　その気持ちが嬉しいよ」



前の僕だったら恥ずかしくて言わなかっただろう言葉もがんばって言うておく。

次がいつになるか分からないし、次がないかもしれないんだから。

「はわあっ!？」

せつかく気持ちに浸っていた僕の意識がゆりかのすつとんきような声で引き戻された。

……この子もまたくるんさんみたいに変なところあるからなあ……なんというか予測できないっていう意味で。

そのへん常識人の範疇の巫女りんと巫女りきとはちがう気がする。

つまりはまともな巫女ペアと変な着物ペアなんだ。

「ごめんひびきー 私、みんなが……なんか恥ずかしいけどでもすつごくいこと言っていたのに、私だけとっさに思い浮かばなくてっつ」

「ああ……いや別に、気にはしていないよ」

そう言えばゆりかが話す前に僕が答えちゃった形になるのか……あとでご機嫌とらないと。

にじり寄って来るゆりか……あ、そういう姿勢を取ると後ろの髪の毛も肩まで乗つかるんだ、夏から比べるとだいぶ伸びているけど学校は……って違う違う、今はぱつっつんの下を見ていないとまた意識が変な方に行っちゃうじゃないか。

「あ——……私も大したことは、ね。 さよさんに釣られる感じになっただけど、元々は『やりたいことがなければここを継ぐの』って言っただけなんだから」

「……わ、私は、その……同じ、闘病の、病人として、つい……」

2人とも「なんか恥ずかしいけど」ってのに反応しちやつてる……まあそうだよ、漫画とかで出てくるこっぴげずかしい場面だもんね、今のって……。

「ゆりかちゃん、ムリして言わなくてもいいのよ？ 言いたいときに言いたいことが浮かんだときに言えば」

そして反応しないで平然とみかんを剥き始めているくるんさん。

「……なんかかがりんがマトモなこと言ってる……」

「ゆりかちゃん？ それどう言う意味かしら？」

「そんなことよりなるほどお!!」

かがりを遮るように、小さい全身を使ってゆりかが跳ね上がる。

……やっぱりここまでしないとくるんさんを遮れないのか。

でも僕の体力と筋力じゃできなさそう。

「なるほどなるほど、これが青春か！ ならやっぱ私も考えねば響！ 待ってて、今なんか掘り起こすから！ ノートに書きゃったいるんなのか!!」

今の子たちでも黒歴史とかノートに書くんだらうか。

「だからゆりかちゃん、今のそれはどういう」

「ちよい待ちかがりん。私は今、大切ななにかを探しているのだ」

「そうなの？ 大切なら仕方ないわね？」

「ん——……掘り起こせぬう。 そのうちいい感じの出るだろーから思いついたらでいいよね。 私だけなんにもなくてごめんね響？」

「いやだから別にムリを言って言ってもらう必要は……」

「でも、それにしてもさーひびきんや？」

ひとりひとりの顔を見回して……最後に僕の顔をじつと見るゆりか。

「……………」

「？」

……ぱつつんの下の肩がいやーな形になっている。

なんだか非常に不快な笑顔をしている。

なんとというか……にまにま？

によによ？

口元もなんだか小憎たらしい感じになっているし……この子の好きないたずらつばい顔つき。

さつきまでの雰囲気があったのそれだけで吹き飛んでるからいいんだけど、でもなん

だかいらつとする感じの……あー、これを毎日やられたらりさりんみたいに怒りつぽくもなるか。

でもなんだろう、また変なことを思いついたのか？

「実はさ？ 私たちつてば……自慢じゃないけど自慢になっちゃうけどね？ 学年でも学校でもわりと人気なのだよ？」

それって自分から言うもの？

しかも今ここで……場の空気に酔ったままだったりする？

「ねえ響？ この美少女軍団を見てなんとも思わないのかね？」

普段こういう話題をしてこなかっただけになんか新鮮……だけどそうか、褒めてほしいのか。

そういえばゆりかだけまだだったしな。

かといって、この流れ、みんなまとめてってことでいいんだろう。

それなら適当に褒めてあげよう。

普段からかがりに言っただけであげているみたいなのを言えば良いんだよね。

「確かにみんなかわいくて綺麗だね」

「ひゃっ!？」

え？

こんなのでいいの？

ゆりかって案外ちよろくない？

「今でも美しいのにまだ中学生なんだ、将来有望と言うものだと思うよ」

「ちよ、ちよつと響さんつ、待つ」

りさりんもまた顔が赤くなってきた。

「みんな髪の毛や肌にも気を配っているみたいだし、服装だって……ほとんど私服しか見たことがないからかもしれないけど、でもいつも似合った服装をしているって感じるし」

「女の子だからよー」

かがりは変わらない。

むしろ変わったら困る。

「今日の服装……言い忘れていたけれど、ゆりかのその着物も君の雰囲気にはぴったりだ」  
「う、うう……」

なによりも僕に合わない感じのうるさい系とかだらしな系の子たちじゃないって  
いうのが大きいからね。

「……きれいな……はう」

「ちよつとさよちゃん大丈夫!？」

さよは……うん、きつと慣れてないよね、こういうの……ごめんね？

「響ちゃんつてば、私たちのことについては今みたいに聞かないと言ってくれないのよ？ 会うたびに聞いた方が良いわ、ゆりかちゃん」

む、要らないアドバイスが。

「うえへへ……つて、ちよいちよい君たち。今は私と響の会話なの、しやらつぷー」

すぐに戻ってきたゆりかがまたいたずらな口調に……こういうときは変なこと言い出すから苦手なんだけどなあ……。

「……で、あ……ま、響だもんね、そーやってさらって言えるって知ってる知ってる。

うん、知ってた。そもそも響自身の基準がアレだからしよーがないことなんだけど……だってそのフェイスだもんねえ。あとその髪の毛どーなってんのほんとに。

ワカメか？ ワカメなのか？ 透けるワカメなのかあ？」

なんかまくしたたているゆりかの様子が何か変？

「ともかくわれわれ人気のびしよーじよ4人を集めて囲まれてさ？ こんなすぐそばで侍らせてさ？ ほら私とは密着してて他のみんなとも足でくっついてるっていうもはやすごいことになってる響じゃん？」

「ゆりか、君に関しては君自身がくっついてきてるんだけど？」

「こまけーこたーいのよ」

じゃあどうしろと……これが女の子のめんどくさい感じってやつ？

でもゆりかってそういうのとは無縁だって気がしてたんだけどなあ。

「んでさ？ おおみそかに年越しでなんかうれし恥ずかし青春してさ？ ……オールナ

イトになりそうで、つまりは『夜を共に』してるのよ……あ、深い意味じゃなくってさ？」

振り袖をふりふりしながらあいかわらさずわけのわからないことを言い続ける。

「んで病気が……前みたく収まったり良くなったりしたらさ？ お泊まりなんて計画し

ても誰からも嫌がられるどころか楽しみにされてるなんてさ？ ——いやーホント、こ

れがうっかり学校の誰かに知られてもしたらクラスどころか学校全体の男子みんなの

テキだよねえ。 ねえ？ だつてさ」

「びしっ！」とわざわざ口に出して、どつかで見たようなポーズをしながらひと呼吸溜

めて、すうつと息を吸うゆりか。

「——はたから見たらこれ、響っていうシヨタ系将来有望超中性的銀髪……えつとまだ

まだあるけど、ともかくそんな属性モリモリ系美『男子』響『くん』が」

——え。

「ちよつぴしちつこいけどそれはまあ今後に期待するとしてさ。 で、そんな響がび

しょーじよを4人もはべらしてるとか囲つてるとか、そーとしか言いようがない状況

じゃん？　ねえ？　いやー、現実アニメを超えるねえ……あ、いや創作でもそんなにはないよ、こんなシチュ……いやあるか。でもま、現実味のあるシチュって意味ではやっぱなかなかないと思うよ？　ね？　そー思わん？　響？」

ぶわつと体じゅうの毛穴が開く感覚と同時になるべく周囲に変化が無いかって、普段は全然機能していない僕の五感を総動員。

——ゆりかが僕のことを……男って言った。

魔法さんが何かをしでかす可能性に。

ゆりかは僕のこと、男って認識している。

認識できている。

なんで？

どうして？

だってこれまでの人たちは誰ひとり僕のことを男だとは思わず女の子だって、幼女だって思っていて……僕から何かしなければこんな危険なことにはならなかったのに。

そんな僕をよそに、ゆりかは続ける。

「いやー、ひびきんははたしてこの中で誰を選ぶのかにやー、私とっても気になりますにやー？　それともまとめて行っちゃう……ってのは現実っていう制約上なかなか難しいと思います。　まー、内縁のなんちゃらっていうのもあるんだしみんなの同意が



あればあるいは、ねえ？ ……そのへんどーよう？ まずはりさりん、コメントをどうぞ」  
待って……僕が選ぶ？

え？

どうしてそんな話になるの？

だって僕が男だってだけで……あ、そっか。

僕が男だって思っているのなら……この子たちは女の子で僕は男。

中学生で男と女が仲良くしていれば当然にはやし立てられる状況なんだ。

「ゆりか……あんたこそ甘酒で酔っ払ってるんじゃないの？」

「まだまだ顔が真っ赤なりさりんには言われたくないにやー？」

「あんただって今は真っ赤よ？」

「またまたー言いたくないからって」

「ねえ、さよさん？」

「えつと、……はい……」

「……えマジ？ 本気で？ うわホントほっぺた熱い」

「あんた自覚してなかったの？」

「やだあ、恥ずかしっ！ 深夜のテンションってこわいつ。 ……ほっぺコップで冷や

してるから、そのあいだにりさりん、コメントよろ」

……ゆりかが照れているって言うことは本当に僕のことを。

僕のことを……おかしくなったりしない状態で男だつて認識できていて、それは他のみんなも。

「ま、いいけどね。 恥ずかしいついでだし……で、まー私も気にはなつていたのよね。

響さんが誰を選ぶのかな、それとも選ばないのかなつて。 いやまあその、私だつて

年頃だし？ ……あ、響さんが誰かさんみたい恋愛脳とはかけ離れてるっていうのは

知ってるから今ここので言えつていうのは酷かもだけど……いい機会だし知りたいかっ

て言えば知りたいかも。 まー、きつとすぐに『そんな気は誰にも持つていないよ』つ

て言うんでしょうけど、ただの興味本位で、ね。 そう、仮定の話で、もし恋愛すると

したら誰とが良いのかつてつていう話よねー」

「なんだかんだりさりりんも興味津々なお年頃♡」

「女子だから当然でしょ？」

……警戒してはいるけど、ふたりともおかしくなる様子はない。

僕自身に何か起きる気配も、ない。

「ね？ 響さんにとつてはこの中で誰がいちばん魅力的なのかしらね？ 女の子だらけ

のこの空間でたったひとりの男の子の響さん？ いえ……呼び方ずつと迷つてたんだ

けどさ、響さん的には『響くん』つて呼んだ方がいいのかな？」

赤い顔をした2人の少女が僕の目を見つめてくる。

でも僕にはそれを受け止める余裕はないんだ。

……どうして？

なんでこの子たちが僕のことを男だって認識できている？

だってそうさせないための魔法さんのいつものなんじやないの？

考えても考えても答えは出なくて、場の空気ってやつは女の子の味方をしていく。

——この場で男だってはつきり言われて意識されるようになった僕だけを残して。

## 40話 「男の子」／「女の子」 5／7

男。

僕の元の性別。

幼女ではなく男。

男性ということ。

肉体的な女、女性ではなく男性……あるいは少年。

でもそれは今まで誰にも知られる前に魔法さんが処理しちゃってたかもしれないこと。

それなのに、こんな幼女だって分かってるはずの僕を男だって。

ゆりかが言った。

この長い髪の毛とか中性的だけど女の子な肉体の僕のことを男だって。

しんと静まってテレビの中からの声がやけにうるさい中、僕はさらに真っ白になっていた。

だって……ゆりかと、続けてりさが僕のこと男だって……認識していた。

男だって認識している。

いつから？

どうやって？

……いや、考えるのはあとにしよう。

みんなが僕のことにくぎ付けになっているんだ。

普段みたいに見逃してくれる状況じゃないんだ。

「……あ、で、でもムリに答えなくってもいいわよ？」

僕の様子から「あ、これ聞いちゃダメなやつだった！」って顔したりさりんが急いで口を開く。

「だって今のはただの興味なんだし、つまりは応えるギリはないってわけで！ ……

ちよつとゆりか、『響さんに全部言うの恥ずかしいから』って残りを私にお願いって」

「やつぱりさりんも響のこと気になるでしょ！ やつぱなるよね！ さき、このお祭り

騒ぎなこの空間だし言っちゃいなよ!!」

「……コイツ……普段は空気読むくせにこういうときは強引なんだから……」

……ゆりかの策略？

ってことは、少なくとも今より前の段階で彼女たちのあいだで作戦会議があったはずで。

だからそのときに何回も僕の名前と「男」ってワードが出ていたはず。

……なのに魔法さんはなにもしていない。  
なんで？

そんな僕に気がつかないでゆりかとりさりんは普段通りに元気。  
少なくとも魔法さんの気配は、ない。

「響のタイプの女の子よねー。 やっぱいちばんは……てか中2でアレって未恐ろしいってやつよねえ……そこらの女性顔負けのぼでーを持つてて、学校でだつてなんとなく気品みたいなもんがあつて……うん、しゃべらないとそうなのよね……」

あ、うん。

くるんさんはおとなしくしていれば、ね……。

「普段からその着物にも負けず劣らずな感じの華やかなファッションしててさ？ おんなじ制服のはずなのにみよーにふいっとしてて、ぼいんで……ぼいんで！ 先生に怒られない程度のアクセとかつけててさー、ガッコでも高嶺の花になつてるかがりんかね？」

「高嶺の花？ 私が？ ??? それより響ちゃんは」

高嶺の花なんだ……理由は分からないけどお淑やかに振る舞つてる？

いや、この子がそんな器用なことできるはずがないからきつと別の理由。

「まー今は置いといてよかがりん、先に言わせとくれい。 人の話は最後までだよん？」

……てゆーかよく手とか繋いでるよねー。私、見てるんだから……スキンシップも多いの。実はときどきさ、ふたりつきりになったときにかがりんから寄りかかったりして甘えられてんの見たことあるし！ あるし!! ずっるい!!!」

あれは甘えられているというよりは大型犬がじゃれつく感じなんだよ？  
誰にでもフレンドリーなタイプでちよっとお馬鹿さんなわんこが。

「んで、お次は……さよちんかな？ 響からの視線が2番目に多いって感じだし」  
「え、……え？」

「おんなじ病弱仲間、あ、いや悪い意味じゃなくって共通点って意味だよ？ ほら、レンアイにはきつかけが必要だって定番でしょ？ んでさらさらな髪の毛とおさげっていうフェチ心をくすぐる感じだし、しかもメガネにその雰囲気じゃん？ さよちんはあんま話さないいつもかがりんと一緒だから分かんないかもだけどさ、男子からの人気むっっちゃあるのよ？ まさに男心をくすぐってもあそぶ魔性の女って感じ」  
「え……そ、そんなこと……？」

さよは普段通りにおどおどしているのが止まらない。

うん……君は対人関係が僕と似て苦手だもんね。

あんまり嬉しそうな表情してないし、単純に困ってるっぽい。

……普段のゆりかならこういう突っ込んだことは絶対言わないのに。

人がイヤがるかもしれないのに敏感なはずなのに。

「事実だよさよちん。 てかできるだけかがりんとかの仲の良い子と一緒にいたほうがいいと思います、少なくとも学校のなかでは、はい。 だつてねえ、押しにすつごく弱そうだから運動部の男子に言い寄られたら言いにくるめられちゃいそうだし……。 ともかくそんな感じでお互いに体のことを励まして励まされてを続けているうちに……。 なんてのはもはや古典的な青春だよね！ 茶化すわけじゃないけど数少ない響の興味引く属性なのよ」

いきなりの情報量で頭が追いついていなさそうな巫女さよを片目に、さらに加速するゆりか。

「そしてお次は我が親友！」

「やだあんた、ちょっと私まで」

「のけものにはせんよりさりん!! むしろ逃さぬえ！ スポーティーでコミュ力MAXでクラスの中心的なちくしよなりさりん！ もらったラブレターと告白の回数は私を何倍しても追いつけないやっぱこんちくしよなりなちくしよなりで正直女として嫉妬しないわけには行かないです、はい」

「おい」

りさは……まあモテるだろうな。



むしろ彼氏とかいないのが不思議なくらいだもんね。

男受けは多分この中で一番良いって思うし。

「いーじゃん、事実なんだし！ たまにはグチも言わせてよ、りさりんを呼び出してほしいっての何十回経験したことか。ねえあれすつこくめんどくさいんだけどーにかなんない？ そもそも私自身へのつていう期待がゼロってあたりがさらに来るのよ、ねえ？ ……で、こーんな感じで気安い毒舌とか吐くけど」

「誰のせいだと思ってるのよ……」

「そう！ それがまたいいって言うヤカラがわんさかいるんだよねー。うん、気持ち分かる。適度ななじりは快か——とと、下ネタやめとこ。あとみんなとの距離が物理的に近いというのも多いし……さよちゃんと別の方向性の魔性？ いや、ただの魅力がねえ。出るところ出てるし羨ましすぎてとりあえず後で揉ませて♡」

「響さんの前で言う時点で充分にセクハラでしょうが……。あとね、好きじゃない人からいきなり……それも知らない人から告白されても嬉しくもなんともないもんなのよ？ 断るのいちいち心に来るし、断り方間違えると逆恨みされるから気をつけなさいって先輩から言われてるし」

「うらやましい悩みじゃのー。ちったあ分けてほしいのう」

ひたすらに話し続けるゆりか。

ほつぺたに当てていたコップも途中で置いて、いつもどおりの激しいボディランゲージをし出したから振り袖がぶんぶんして、それがなにかに当たっちゃわなかったてひやひやしてきた。

「んで、トリは私い！ え、私？ ……これでも一応は乙女だいい！」

……ゆりか、酔ってるんだろなあ……場の空気か甘酒で。

じゃなきゃここまでにはならないって思うし……普段の彼女を知ってるから余計に。

「もち大穴だけどね、ほらこの通り女の子らしさ皆無だし？ 響にそのシユミがなけりや女としてもカウントされななんだし！！ りさりんのばか！！ あとかがりんもさよちんもついでだあ！」

「あんたね……」

ひと言ずつに僕の方に近づいてきてじりじりと詰め寄られるも……腕でなんとか押しとどめるけど、それでも続けたいらしい。

「でもさー、隣歩いてて顔が近い、じゃなくって目線とかが近いのってこの中じゃ私だけでしょお？ ちつこいの同志だし。いろんな趣味も合うしさー？ ……響って『めんどくさい』って言いつつちゃんと返事返してくれるしさ、実は気があつたりして！あつたりして！！ なーんちゃって！！」

とうとう僕のすぐそばににじり寄ってきて、肩を両手で押さええられて顔も鼻がくつつ

きそうなくらいに近くって甘酒の匂いがして、熱気が押し寄せてくる。

感情が止まらなくなったのか力が強くなってきて僕の腕力が負け始める。

「……ちよつとゆりか、そろそろ」

「んでんで響、ひびきんや響さん？ 君はいったい誰を選ぶ——あいたあ!」

「止めなさいってば、もう」

もう少しで後ろに押し倒されそうだったところで、すつと体重が引いていく。

上を見ると、巫女りんがゆりかの首根つこを……着物が崩れないようにって両手で引つ張っている。

「ゆりか、あんたはまたそーやって強引に！ 響さんの後ろ、今危なかつたわよ!」

「えー？ あ、ほんと。それだけはごめんね響？ ……けどさ、りさりんも気になーって言ってたじゃん！ 響の口が軽くなりそうな今を逃したら多分いつもみたいな感じでふんわりって感じで逃げられちゃってさ、聞き出せないよ?? いいの?」

「たしかにそれはそうなんだけど……それはそれ！ 人の嫌がることはしないの!」

「……みなさん、もうちよつと落ちついて……はう」

巫女りんとゆりかのいつもの感じは変わらないけど、それに酔いついていう理性を吹き飛ばすものに包まれた結果大変なことになりつつあるこの部屋。

うーん。

飲み会とかってこういうもんなんだろうね……行つたことないから分からないけど  
雰囲気的に。

というか、これだけ騒いでなんで怒られたりしないんだろ。

あ、まだ忙しいのかな、みんな。

通りで大声を出してもひとりも来ないんだ。

……けど、そんなことは今はどうでもよくつて。

いろいろな方向に考えを逸らそうつてしている僕自身の意識を無理やり戻す。

ゆりかもりさも……勢いにびっくりしたのかそれともついて行けていないのか、かが  
りとさよは特になにも言っていないから分からないけど、でもなんで。

最低でも2人は僕のことを男だつて認識、できているんだ。

それも、何回も言つていても魔法さんのちりちりすら起きない。

なんで。

どうして。

そればかりがぐるぐると回る。

——飛川奥さんのように、前の僕を知っている人は今の僕を男だつてうまく認識でき  
ない。

いや、認識はできるんだけど魔法さんによつて歪められるんだ。

僕やその人がいくら前の僕について言っても、その言葉、「元の僕について」が発せられた瞬間……「大人」の「男」だっけって言った瞬間に魔法さんが怒るから。

そうしてまるで操られているみたいな感じになるから。

だから彼女たちにとつて……えっと、飛川さんとなじみの銀行の人、あとはご近所の名前は知らないけど顔は知っているっていう人たち……たつたそれだからまだまだ確実じゃないけど、でも「彼女たちにとつての僕」っていうのは、魔法さんのせいできつと矛盾した存在になっている。

「僕が前の僕でありながら今の僕である」っていうどう考えてもおかしい認識になる。

どこにでもいるモヤシな男だったはずの僕と、気をつけないとすぐに顔をのぞき込まれるくらいな銀髪幼女な僕がセットになっている。

同時に認識されている。

成人男性なのにかわいらしくなっている。

それが、とても似合っている。

それで成長しているっていう評価になるほどに。

そういう評価、認識、意識に……魔法さんが無理やりしているんだ。

一方で前の僕を知らない人……猫島子さんやあざとい栗色岩本さんを始めとした他の人。

この人たちなら、僕から「男なんです」って言えば男だって認識してくれる。お酒を買ったときみたいに大人だって認識してくれる。

……これについてはなぜか魔法さんが怒らない。

どろんとしたりしなかったりはするし、ねこみ病関係でまたなにか別のことがあったりするみたいだけどそれは今置いておいて……でも、怒らない。

僕を男だって認識できるんだけど、それはあくまで自己申告でしかない。

僕から言い出さない限り、まずはそう思わない。

だつてこの見た目だもん。

長い髪の毛に細い首、掘りは深くてもやっぱり女の子な顔つきなんだから。

声だつて普段通りに男の口調で話してはいるけど、やっぱり女の子の声なんだから。

……けど1回でもそう言えば、男だつて認識で話を進められるのも確認できている。

これについて知ったのが僕の主観的な時間でたったの1週間とちよつと前なんだし、調べた人数も少ないわけで……10人くらいだよな、確か……つていうことで、たまたまつていう可能性もあるからこれもまた不確定ではあるけど。

だからこそ。

だからこそ、今のこの場で僕が……望んでいたはずの男扱い、それをされていてもなにも起きていないっていうのがとっても不安で。

望んでいたはずなのになにも起きないっていうのが逆に怖い。

……でも、ひとつだけ楽になった。

僕が男なんだって何かでバレてたんだったらひとつ嘘が減っていて謝る回数も減ったんだって思えば、って。

でも本当……なんでなんだろう。

男みたいな服装してたのに女の子だってバレてたのはちよつとシヨックだけど。

……がんばって男らしくしてたのにかわいいと思われてたのかな……結構シヨックだ。

## 40話 「男の子」／「女の子」 6／7

「あ——、ひびきんやひびきん？　おーい」

「……うん」

いつの間にかかなり深いところまで意識が潜っていたらしい。

また飛びかかってきたりしないようにつて巫女りんにも首根っこつかまれたままで、だからこそさらに幼く見える、さっき気がついたようにずいぶん髪が伸びている……つていうよりはなんだかみんな全体的に髪の毛伸ばして……？

ともかくそんなわけで少しは安心できる状態になっていて、だからか僕はぺたりといつの間にか座りこんでいたらしい。

……女の子座りで。

いそいそと直すけど……やっぱり無意識だよなあ……。

「とりあえず、体の方だいじよぶ？」

「あ、うん。　少し考えていただけだから問題ないよ」

ふうつとため息が広がる。



うん……この前のを見ちゃったもんね……ごめんね、心配かけて。

「そっか……よかった。 さよちゃんもそうだけど、重い病気がかってメンタルの影響もすごいって言うじゃん？ だから少し心配だったんだけど……響が大丈夫っていうんなら大丈夫だね。 ……これで遠慮なく続けられそうだね♡ 響」

「そこまで強引にしくたつて……ゆりか、今日のアンた少し変よ？」

あ、なるほど、少し具合がって言えば……だめだだめだ、それは嘘になる。

僕は、今すごく悩んでいるっていう頭の中の状態以外には何も悪いところはないだ。

ちよつとだけ控え気味にはなつたけど、でもあいかわらずの熱気を放つゆりが振り袖を……あ、それもりさりんに抑えられてる。

危なかつしかつたからひと安心。

でも僕の顔を見ているうちに落ちついてきたのか、今度は心配そう……それとも気まずい……っていう表情になってきた様子。

くるくると表情が変わるゆりか。

くるくるといえばくるんくるんかがりだけど、ちらつと見てみた限りなんだかがり様子も別の方向におかしい。

いや、おかしいって言つちや失礼なんだけど普段の彼女からは想像できないくらいに

静かなんだ。

……さつきゆりかに「人の話は最後までさせて」って言われたのをまじめに守っているだろうか？

かがりが？

あのくるんさんが？

ないない。

……ああいや、あるのかもしれない……だとすると相当成長したんだなあ。

首根っこに続いて袖までをがっちりされちゃっているゆりかが、それでも諦めまいともぞもぞしながら言ってくる。

「むー、動きづらい……んで、この話ってさー。将来の夢ってゆー新年になったばかり

だからこそよさそーな話題からの響たちの病気のことについての話になったからさ？

その、なんだか重くなっちゃったワケじゃん。だからこそ軽ーい気持ちでりさりん

と話し出してみただけど……もしかして地雷だった？ だったらごめん、今の忘れて

？ ちよつとしたおふざけなの。 こういうときなら響も口が軽くなるのかなーって

思ったからさー」

「だーから言ったでしょーが……ごめんね響さん、変なこと言い出しちゃって。 乗っ

ちやつた私も悪かったわ」

「いや、僕は」

「そーだぞ、りさりんも同罪だい」

「うるさいゆりか。……ご病気のこともあるし、それにお家でもなんだかあるみたい

だもんね、響さん。ゆりかからその辺さんぎん聞いてたのに、軽率だったわ」

巫女りんが頭を下げてくる。……ゆりかの頭を押しながら。

「いや？ それは構わないし気にしていいよ」

「許されたよりさりん！」

「いや、地雷っていうの踏んじやったことには変わらなさそうだからね？」

「やっぱごめんね？ 響」

「……しかし、ゆりか」

さつきからどうして僕のこと、男って。

「なに？ おわびに、なんでも言うこと聞くよ？ そー♡ なん・で・も♡」

「……あんたってどうして『何でも』って言葉にいつも過剰反応するのよ？」

「いーのいーの。あ、りさりんにもごめんね、一応」

「一応ってあなたね……」

「あ、おふたりとも甘酒お注ぎしましょうか？ いや、響ならブラックコーヒー……お高

めのホットをちよいと自販機から買ってくるべきか。あるいは私たちのヒミツ教え

ちやおーか？ たたとえばまずには気になるりさりんのスリーサイズとか体重とか」

「ちよつ!!」

「ウソ、ウソだつてりさりん！ だから重いってえ!!」

いつものようにふたりで遊びだしたから場の空気がふんわりしてきた……けど、僕は聞かなきゃいけない。

魔法さんのヒントになるかもしれないんだから。

「ゆりか」

「はい響ー、なんでも言ってくださいな。 響が望めばなーんだって……あ、ついでに家来のりさりんも好きにしていいいし」

「はあ？ 誰が家来だつて？」

「君は、君たちは……それをどうやって」

仲が良いのは良いことだしゆりかのが収まったから良いんだけど、とにかく聞きた  
い。

「……ちよつと!!!」

「!？」

そう思ったらやたらとでかい声で耳がびりびりした。

……今度はかがりか……。

「え、かがりん？ なになにに、なんで急におここのの」

「ほら、だからあんた言い過ぎだつて」

「……かがりさん……？」

鼓膜が痛い。

ついでにすつごくびつくりしたから心臓がばくばく言っている。

……もう少しかがりの声への反応が遅れていたら、いつもみたいなの「びっ」とか「みつ」とかどうしても出ちゃう、あの情けない声がみんなの前で出るところだった。

だつて今までの僕の意識はみんな、僕のこととゆりかとりさが話していることにばかり向いていたから。

くるんさんもまた油断できないんだつていうのを……忙しかったばっかりに忘れていた。

いけないいけない、むしろこの子の方が予測できない発言と行動をするんじゃないか。

改めて心に留めておかないと。

で、なんでくるんさんは怒っているんだろ？

今の会話で怒る要素……あ、お口チャックさせられてたこと？

メロンさん、ちよつとでも会話に加われないとすぐに拗ねるからなあ。

とりあえずさつきとなだめて聞いておかないといけないんだけども。

「ねえ、ふたりとも。 ゆりかちゃんもりさちゃんも」

「なんででしょうかり様」

「ごめん、私たち……いえ、ゆりかが何かかがりさんにまで失礼なこと」

「あのね？」

はあー、とすつごくわざとらしいため息……あー、女の人がかかり怒ってるときのあれだ。

注目されなかったのがそこまでイヤだったの……？

「ええ、失礼よ！ だって響ちゃんは——かわいい女の子なのだもの！ 男の子だな

んて!!」

「ほえ？」

「……へ？ あの、かがりさん、なにを」

……あ、あー。

なんかもうこんがらがってきたけど冷静になろう。

うん、りさとゆりかが僕のこと男って思っているのはひとまず置いてくとしてだ。

かがりなら僕のこと、はつきりと女の子だって知ってるんだもんね。

いつも着せ替え人形にしてきてるし……だんだんと遠慮がなくなってきたから目の前で着替えさせられたりしたこともあったくらいなんだ、幼いけど性別そのものとは女だって知っているわけで。

最初の買い物からして下着を見つくりてもらってたくらいだもんね。そりゃあ知ってる。

偽乳のひとつも幕もあつたわけだしってことでブラジャーについても指南されたしな。かわいいのを熱心に勧められたしな。

断ったけども。

すうっ……と、その大きい胸に溜めるように息を吸って……あ、これ、うるさくて長いやつだ。

「……確かに、確かによ？ 響ちゃんはとっても男の子っぽいっていうか男の子らしい性格とか話し方とか、あとはあとは……雰囲気とか！ ええ、いろいろと無頓着なところも男の子みたいなどころがあるけれど！ でも！ そういう子だけど、それでも立派な女の子よ？ 響ちゃんは平気そうだけど、でも我慢できないわ！」

なんか僕のために怒ってるらしいのは分かった。

早口すぎて追いつかないけども。

「ええ、服装も男の子らしいのが好きだし話し方もこうでクール系だから会ったばかり

とか……いろんな人からそう見られてしまうのは仕方なさそうだけど、でも！ これだけ一緒に過ごしてきたのだから分かってるはずでしょう？ りさちゃんも、ゆりかちゃんも、こういう冗談はとつてもよくないわ！ ひどいのよ！ ねえ、さよちゃん！」

すごい剣幕だ。

こわい。

中学生の迫力とは思えないくらいだ。

そしておんなじようにびびってる仲間がひとり。

この状況で話させられるとかかわいそう。

「ひいっ……」

ほら、ひいって怯えてるじゃない……かわいそうに。

「あ、ええ……はい。 その……女子校に行ったり、いえ、うちの学校とかに来たとしても初めは見た目でお姫様でしょうけど……でもすぐに王子様とか……そういう扱いにはなると……はい。 クラスの雰囲気的に……だって、普段みたいに髪の毛、あんまり見えないようにしていたら……でも。 響さんは、普通の。 ……私たちと同じ、女の子、です」

「えっ」

「……え」



なんか変な表現がかなり混じってた気がするけど……話していれば男って見てくれるってことでいいの？

「……その、響さん、ごめんなさい。……いろいろ聞かされて……聞いてしまつて、いて。でも、響さんはかりさんと一緒に、よくお出かけして……お洋服とか、買ったりにして。選んだり、してもらつていて。だから、その。……下着とかのサイズについても、かわいいものとかを、その、穿くか穿かないかつて言うのがあつたり……いつもこんなことがあつたつて、聞いていて……、えっと、その……」

……うん。  
諦めてた。

くるんさんだもんね、あのお着替えの写真以外はみんな筒抜けだった様子。

あの写真まで流出していたらもうこの子たちと顔を合わせられないけども。

でもかがり……なんで君はいつつも、人のことを平気で言いふらすんだ……聞かされるさよもたまつたものじゃないよ、きつと……。

あ、けど、それならなんでさっきのふたりには僕のこと細かく言っていなかったんだろ？

だって僕を下着に剥いて着替えさせたときのこととか話していれば男だつて思わないはずだもん。

………あー、時期の問題か。

確かこの4人がまとまったのは夏休みもまん中くらいのころ。

つまりその前までに僕のお着替えをあらかた楽しんだメロンさんにとっては、それまでに……前から仲が良かったさよに延々と楽しんだことについて口走っていたんだろう。

だからその後知り合った、いや、僕を知っている仲間になったりさりんとゆりかは、言う前に満足していたからお人形さん遊びについては言い損ねた。

たぶんだけどこんな感じ。

なんとなくて想像できる。

だってこの子、言うだけ言ったら満足するところあるから。

「そうなのよ！ それに普段は恥ずかしがって、あと、ご家庭のこととかもあって男子っぽい服しか着てくれないのだけど、でも、しっかりとお願いをすればかわいい服だって！」

それ、お願いという名の強制じゃなかった？

もう忘れたの？

いつもみたいに摂取した情報を都合の良いように改竄しているの？

……まあ、いつもすごい勢いで押されて流されている僕も僕だけ。

精神年齢で言えば倍くらい違うのになんで逆らえないんだろうか……。

……僕の性格以前に、この小さすぎる体がぜんぶ悪い。

そういうことにしておこう。

「さよちゃんや私と会ったりするときにはちゃんとして！ ちゃんとよ？ 私がちゃんと選んであげて、響ちゃんにぴったりなりボンをつけて、スカートとか履いてもらって！ それも、響ちゃん自身のセンスで組み合わせてかわいらしい女の子にもなれるんだから！ それを……響ちゃん自身はあんまり気にはしていなさそうだけど、でもふたりして男の子扱いはかわいいそうよ！」

僕がかわいい服を着させられている。

そんなことまで暴露された。

もう帰りたい。

彼女と出かけるときには女装……精神的には……させられるけど、それ以外は必ず男っぽく見える服装でしのできたのに。

それを、みんな。

もういやだ。

布団に潜りたい。

何もかも忘れてさっさと眠りたい。

なんで僕はこんな目に……あ、そっか。

これがきつと罰なんだ。

僕が嘘をついた代償の。

……みんなにかわいい服とかスカートとかバレて……ここにお酒があれば何も問題は無くなるのにな。

なんとかならない？

魔法さん。

そんなことを念じてみたけど当然ながらなにも答えてはくれなかった。

## 40話 「男の子」／「女の子」 7／7

実は。

僕にはあまりに恥ずかしかったから封印していた記憶がある。

夏のある日、いつものようにかがりに呼び出されて出かけたなら、そこにいてしまった……きつとくるんさんの策略なんだ……さよに、よりによつてあのふりふりのワンピース……じゃないワンピースを着ていたのを見られたんだ。

もちろん僕は帰ってからもものすごく落ち込んだ。

そんなことがあの夏休みにあつたのに……それを目撃しなかつた2人にも自然な感じで伝えられてしまった。

スカートのことでも下着のことも。

もういやだ。

この場にいたくない。

どつか隠れるところないかな。

こたつの中なら……暑そうだからやだな。

そもそも隠れたって意味はないし引つ張り出されるだけなんだ。

なんてことだ。

針のむしろって、こういうこと。

あるいは修羅場？

……いずれにしても僕はこういうの初めて経験するから、どうやって切り抜けるべきかまったく分からない。

どうしよう。

「え、あれ？ でもさ？」

恥ずかしくて顔は見られないけど、でも声の感じから不思議そうにしている感じのゆりかが言う。

「響、私と出かけたときさー、トイレ。男の方に入ってたよ？ ねえ？」

「えっ」

「あら？」

……あー、そんなことも……あつたつけ……って言うかよく見てるね、そうだよね、女の子だもんね……。

普段はなるべく高い階の奥まったところ、あるのなら誰でも使えるタイプの広いトイレを使ってなんとかしてるんだけど、みんなと一緒にいるときは必然的に近いところになるわけで、でも今まではどうにかして入るタイミングをずらしたりして見られないように

はしてきたつもりだったのに。

でも言われてみれば、どちらも空いていれば……最近なら音姫さんがある方を選んで  
いるんだけど、その前だったりたくさん並んでいたり、明らかに女の人がいっぱい  
そんな雰囲気のあるときには男の方に入っているからどっかで見られたんだろう。

いつかは分かんないけど、きつとどこかでトイレの入り口が遠くからも見えちゃう  
ような造りのどこかで……見られていたんだろう。

あー。

それで僕のこと男って……前のこと過ぎて、そのとき魔法さんがどうにかしなかつた  
のか分かんないな、これ。

「それに、町歩いててもさ、男の人よりは女の人に目が行っているし？」

え？

「『響ってクールだけどそれでもやっぱり男の子だなー』って思ってたんだけど、あれって  
もしやファッション気にしてたん？ 女子として？ 響、普段の服装も流行とか気い  
使ってるし、なによりいつも高い服着てるよね？ ブランド……じゃないことも多いけ  
ど、検索したら出てくるそこそこ良いものをさ。それで中性的なファッションしてた  
だけなん？」

「えっと」

それはかがりのせいなんだ……いや、スタイリングをしてきているおかげではあるんだけど。

「なによりさ、私と話す好きなキャラクターとかみんな女の子よね？ まー、こればかりはかわいい大正義を貫いてる私が言えたギリじゃないんだけどさ。女子がかわい  
い女の子なキャラ好きでも良いじゃん！ ……でも響つてば男キャラにはあんまり反  
応しないのよ、だから感性的には私とおんなじで男寄りつてことつて思ってたのよ？」  
こつちからもまたいろいろと暴露される僕。

僕はもう丸裸なんだ。

僕の秘密……全員には知られていなかったようないろいろをひとつずつ開示されて  
いる。

もういや。

なんでこんな話題になったんだ。

そもそもさ、女性を見てるとかいないとか女の子だらけのこの場で言う？

あ、今は普通の場面じゃなかった。

「あとかがりんや。私、響からときどきグチられてたんだよ？ あ、もちろんかがりん  
たちとご対面するまでのことだから告げ口とかじゃないよ？ ……で、それつてゆーの  
は、ん——……たとえばさ、『女子の考え方がいまいち理解できないんだー』とか『肌の



露出は目の毒だからちやんと着て欲しいのにー』とか。あといつも見てて思うけどさ、響はかがりの対応にとつても困つてるときあるし……ほら、ハグしてるときとか固まっちゃうじゃん。だから男の子じゃん？ っと思つてただけだ。ねえりさりん？」

やめて。

もうやめて。

いつこいつこが恥ずかしいから。

「あー、うん。でも響さん……いえ、どうせだから言っちゃうか、悪いことじゃないんだし。んで響さんつて、男の子にしては女性の胸とか腰とかスカート裾……ふとももとかをじーって見たりしないのよね。どっちかっていうと小物とかそういうの見たるし」

今夜はやけ酒に決定だ。

なんでこんなことに。

「だからとつても……うちのクラスのスケベな男子とか、彼女ほしいつていつも言つてる部活の先輩とか、やらしい先生とか……通学するときの大人の男の人とか、そういう人たちと比べると……紳士的つていうのかな？ まあそんなに興味ないだけかもしれないし、なんか安心してできるから……だから私たち、響さんつていう男子が混じるお泊まり

でも大丈夫かなーって話していたのよ。　かがりさんがやたらとしたがってたお泊まりを」

うん、がんばって見ないようにはしてる……だって年下の子供たちだもん、君たち。かがりみたいにいきなり真正面にでんと来たりくっついてこられると無理だけでも。

「そーだよねそーだよね!!　なんてか、男子ではあるんだけど、でも、なんてかその……怖いって感じたりするところないタイプだよね!!」

「まーね。　だからこそ温泉とか……まあさすがに一緒に入ったりはしないけど、でも湯上がりがちよつと恥ずかしいかなーって思ってたけど、最後にはOKって言っていたんだし。　そのくらいには紳士的……理性的なんだけど、ふとしたときの視線ってやっぱり女性に向いているわよねって思っていたのよ。　だからきつと、すっごく女性慣れしててそういうエチケツトとかが身についてるのかなーって思ってたりしたりだったのよ。　……あ、女性慣れって家族とか親戚のお姉さんとかそういう意味だから!」

うん……彼女ができたことすら無いのに遊び人扱いされていなくて良かった。でも恥ずかしい。

引きこもりたい。

「響さんがなんとなく見ている人も年上が多いかしらね?　なんというか、ほら……うちの保健の先生とか体育の女性の先生の先生だとか、あんな感じの……ひとまわり上くら

いな女の子の方向にわね。ひよつとして響さんの周りの女性ってそのくらいの年の人が多くって、同年代よりは年上の方に興味あるのかなーって話してたり、ね」

「あー」  
もう帰ろうかな。

そうだ、具合が悪くなったことにして……いや、嘘はいけないんだ。

じゃあどうしたら。

どうしよう。

「……あ、響さん」

ここまで散々に僕をおとしめて、さらにまたなにか？

……だめだ、恥ずかしさが腹立たしさを上回っている。

「今の、別に怒ってるとかそういうのじゃないからね？ 先に言っておくけど。むしろ、だから響さんって男の子……だと思ってるんだけど、でもこうして一緒にいてもいいなって思っているのよ？ じゃなきゃ、途中で寝ちやうかもしれないこういうところ男の子を招いたりはしないわよ、いくらなんでも。さすがに響さんが……えつと、とにかく、その」

小さいから例え襲ってきてても脅威じゃないって言いたいんだよね？

「その……手とか出したりはしてこないだろうっていう信頼はあるけど、でもやっぱり

その、お母さんとか保健の授業とかで……ほら、女子としての一応の警戒って言うか……あと、恥ずかしいじゃない？」

僕はまな板の上のしらす干しなんだ。

「……その反応だから安心できるのよね。……あ、さっきのだけど、かがりさんやさよさんなら分かるって思うけど、中学に入るころから……ほら、胸とか出て来るから同学年でも年上でも関係なく男性からの視線が気になるでしょ？　それがほとんどないっただけで」

「りさりんやりさりん、私は？」

「さっき言ったみたいなお場所を……人によつてはじろじろと見てくるのって肌でわかっちゃうのよ。……人によつてはやらしいのが」

「だからりさりん、私。ねえ私は」

「まあみんなじゃないんだけどねー」

「りさりん」

「けど、やらしいものでもそうでないものでも女の子らしい部分っていうのは否応なしに見られるものなの。視線がちくちくつて来るのよ。まー女の子同士でもそうではあるし、これはもうしょうがないことなんだけど」

「私……」

「……あんたさつきまで自分はロリで出るとこ皆無って認めてたじゃない」

「それとこれとは別だいっ！ あと皆無だなんて！ 少しは」

「だからもし、クラスの半分くらいの男子たちみたいにまだ女の子にそういう興味が無いんだとしてもよ？ ……そういう、女子と同じくらいに安心してくつろげるというのがあったから。 でももし……その、きちんと見ないようにしてくれる男の人とか、あとは結婚している先生とか娘さんがいる男の人とかみたくない感じ、それだから安心できるっていうのが響さんの魅力」

「え？」

「え？ ……あ、いや待って、今のなし、忘れて響さん！」

「ほほう……りさりんもついに」

「うるさいだまれちびロリ寸胴小学生低学年ゆりか」

「ひどいっ!？」

「なんだか話が行ったり来たりしていたけど、とにもかくにも僕を辱める以外の何物でもない会話が終わったってひと息つこうとしたらゆりかが続けてしまう。

「……で、話まとめると……いや、まとめられないけど？ 響は男の子だけど女の子で、中身男子っぽいけどでも女の子で？ いやでもでも、かわいい系の顔つきではあるけどさ、どこからどー見たって男の子でしょ！ ほら、顔つきでも！」

ほんど？

男に見える？

「……ええと……ゆりかちゃんたち？ あなの」

ちよつと嬉しくなつて「さんざん落とされた後にこれで嬉しくなるつて僕ちよろすぎるな」つて思つたらまたかがりに戻つて来た。

「ええと……2人とも……むしろ響ちゃんのことを男の子だと思つていたのに、私が提案したパジャマパーティーとか……そういえばなんだか複雑そうな顔して話し込んでいたけれども、いいつて言つていたの？」

あ、なんかかがりが初めてまともな反応してる気がする。

「かがりんや、今はそれわき道だから戻して戻して」

「？ ……とにかく、響ちゃんは絶対に女の子よ！ だつて、お化粧とか教えてつて言つてきたこともあつたし、お胸が小さいことを心配していたし！」

だからくるんさんそれやめて。

無作為に個人情報ばらまかないで。

「うえ？ マジ？ ……ね、なんかすつごく複雑すぎて大変なことになつちやつて正直ごめんだけどさ……そのー、無理は言わないんだけどここまで来ちやつたからさ……もし良かったら教えてもらえない？ 響」

ゆりかとその横に来ていた巫女りんが、僕が「男」だと知っていて。

「もちろん女の子よね！ そうよね、響ちゃん？」

かがりとその後ろで僕を見ているんだろうさよが「女」だとも知っていて。

けど魔法さんはまだ、様子見をされていて。

……どつちにしろここまでバレちゃってる。

両方とも僕が男っていう証拠と女っていう証拠を持ち合わせていて、でもどつちも正しいように聞こえるからどつちがどつちなのか分からなくなっていて……で、「あ、これデリケート過ぎる話かも」って今さら気がついたもんだからかがり以外は多分困ってる。

「……………」

男としても女としても見られていた。

多分どつちだって言っても「そうなんだ」で済ませてくれる。

と言うか多分本気でそうなんだって思っておしまい。

——でも、僕は元々言いたかったんじゃないか。

嘘をついてたこと、ひとつでも多く……みんなを傷つけたり困らせたりしない範囲で

謝ってからにしたいって。

……今を除けば、多分もう言える機会はない。





## 4 1 話 勇気と告白と「—」 1 / 5

僕はつい最近に知った。

人間って、僕みたいな怠惰な人間でも火事場の馬鹿力ってやつで一瞬が何秒にも何分にもなるんだって。

階段に頭から落ちてる状態ほどじゃないんだけど……僕にとっては一大事らしく妙に冴え渡った思考が回っている。

顔見知り——いや、友達になった子たちの2人は僕を男だって言うって状態に。

こういうことなんだ。

どういう状況なんだ。

何度かの経験でそれとなくわかってきた感覚を澄ませてみても、少なくとも今は魔法さんの気配はないみたい。

みんながどろんとしたりしていく感じもないし、僕自身についてもぎーつとした感じがない以上、たぶんなんともなっていない。

だから魔法さんへの対処については後回しにできるとして、だ。

この子たちの僕への性別への認識がばらばらだったのに……なんで今、この話題をゆりかがし始めるまでのそれなりに長い期間……何ヶ月も何も起きなかったんだ？

少なくとも……えっと、最低でも10回くらいはこうしてみんなで集まって宿題とか見てあげたり、ずつといろんな話題を話すっていう時間だったたくさんあったんだ、そのなかで……意識してはいなかったけど、それはもう女の子という生きものの性質上あつちこつちに話題が飛ぶわけ。

そもそもかがりはいつつも僕に対して……肉体的にはしようがないことだけど、でもくるんだからっていう理由で僕のことを年下の女の子だっで見ていることが多い節がある。

まあ肉体年齢はほんとうに年下なんだけど、前の僕と合わせて割ればこの子たちくらの年にはなるわけで、つまりは最低でも同学年のはずだ、うん。

不本意ながらも年下の女の子扱いされた僕は、ことファツションの話題になっているときはそれはもう論されるように世話を焼かれる。

それは……ゆりかたちと集まっているときでもおんなじだったはず。

「みんなに見られてるからやめてほしいな」って思ってた記憶があるし。

僕のことを「ちゃん」付けなのは……いや、かがりの性格だったら、もしかしたらクラスとかでもかわいい系っていう男子とか他の男子とかに対しても「ちゃん」って呼ん

でいてもおかしくはない。

接した時間が彼女の同級生たちの誰よりも少ないはずの僕でさえそう思えるんだから、仮に……学校ではきれいな系の花なかがりが誰に対してもそう言うのなら、受け入れられている……のかも知れない。

男でも女でも構わずにちゃん付けするっていうキャラクターが確立しているんだつたら、そのへんは気にされなくなる可能性もあるからな。

まあ「ちゃん」付けは良くないけど今はいいとしてだ、とにかくかわいいを連発するこの子のこと、普段からみんなに対して……僕に対してもかわいいっていう形容詞をあたりまえのように使っている。

かわいってって同級生の男子に毎回言っていたら……これもかがりなら言いそうだし許容されそう……考えても無駄っぼいからほっとこ。

個性で済まされる問題だからこれは置いておいていい。

「ああ下条さんだからね」で済むのなら。

けど——けれども問題はゆりかたちの方。

ゆりかと、りさりんだ。

普段は男としてのアイデンティティを保ちたいのと、なによりも注目されたくなかつたのとで……当時はまだ女の子の子の見た目でほっつき回っていても問題ないって知らな

かったから、ほとんどは帽子とパーカーのフードとズボンっていう格好をしていたわけだ。

でも今みたいに人目のない屋内だったりゆりかの家とかに半ば強引に連れて行かれたりするときには、帽子もフードも外しているんだ。

いくら体温が低くて暑くてもなかなか汗もかかない僕の体だってそれでもやっばり夏だったから蒸し暑かったわけで、あと視界も狭かったからリラックスするときは外していたんだ。

そうでないときは……いちいち動きたびにふあさつとついてきてびたんつてなる髪の毛がうざつたのもあるし、気をつけていないと手とか足で引つ張っちゃって痛い思いをするから、家にいるときはともかく外に出ているときはパーカーの中に髪の毛を収めていたし、わざと大きめのパーカーを選んで腰まで届くようにして髪の毛をしっかりと収納していたんだ。

けど、いくら隠したいっていうのと邪魔だからっていうので髪の毛を、首から下はパーカーの中に収納しているからといってもフードを取れば幼女、女の子としか見えなはず。

だって前髪が長い……のはともかく横の髪の毛も長いんだし、それが服の中まで続いているだろうってのは見ればわかるはずだもんな。

それに顔だって……幼女にしては男っぽい感じがなきにしもあらずって信じたい感じなんだけど、やっぱり男だって主張しなければ誰だって女の子だって思うし感じるもののはず。

少なくとも僕が僕の前に立って話していたら、そう思うだろうから。

で、いつもみたいにゆりかの家とかで、ふたりでマンガを読んだりゲームしたりしてるときみたいにすぐそばにいるとき、至近距離ならまず男の子だとはまちがえないはずなんだ。

つまりはこの時点でゆりかが僕を男だと認識しているのがおかしいんだってわかるんだけど、そのときに魔法さんが暴れなかったのもまた不思議だし認識できているのがおかしいんだ。

だってゆりかだってしよっちゆう、みんなが集まっているときとかに事あるごとに。

今思えばなんだけど、でもなにかと「男の感性だー」とか「かがりみたいな夢見る乙女にはわからない話だー」とか、やたらと僕を男扱いしていた気がする。

なんでゆりかにだけは魔法さんが働かない？

それともこれは働いた後なの？

前の僕を知らない人が僕が男って聞いたら前の僕って錯覚して成人男性って扱いますの……男扱いはともかく大人扱いはされていないんだからおかしいんだ。

理屈が合わない。

……まだ僕が気がついていない魔法さんの仕組みが……ありそうだなあ、だってこの認識の改竄について分かってきたのって最近……僕主観で……だもんなあ。

ちよつと焦点を僕の目の前の子たちに戻す。

ゆりか、かがり、りさ、さよ。

4人の目は僕の視線とびつたり合っている。

……今考えたおかしきいろいろって、今こうして思い出してみようって考えてみてそれでようやくわかるっていうことは……もしかしたらあのときの、ねこみみとポニーテールをテレビで観たはずのあの場面みたいに「僕の方に」魔法さんがなにかやらかしてたとも考えられるわけで。

それを普段通りの認識の改竄と一緒にして見ると……今分かった性別の食い違い、僕に対する認識の食い違い、それにみんなが違和感を抱かなかつたっていうの自体が、魔法さんのせい。

——最近、ほんとうに最近になって……この1週間、いや、10日ほどでようやく慣れてきた魔法さんの気配っていうの、気がつかなかった……気がつけなかっただけで、これまでにきつと数え切れないほどに襲われていたんだろう。

ここにいるみんなも、外に出かけていたときにも……いつなにをしようが構わず

に、誰も気がつかない形でいろんな会話を「違和感のないように修正していた」。

魔法さんにとつて都合の悪いことが起きそうになると必ず。

ずーっと僕を監視し続けて、なにかがあればすぐに。

僕自身の認識や思考にも影響、していたんだな。

日常の中ですべてで。

ゆりか、それに話を聞いていたらしりすが僕を男つて認識していた理由は分からないままだけど、それでもこれまで「ん？」つてならなかったのは魔法さんのせいだと断定できる。

……僕自身の知覚すら改竄されていたらもう自覚すらできない。

それはこの体になったばかりのときにさんざん考えたこと。

みんなから幼女つて見えるらしいから安心していたけど……1周回つて戻つて来ちゃった、僕が僕自身を信じられなくなるつていう可能性のうちのひとつなんだ。

いろいろうじうじ考えるよりもぱつと思いついた直感が正しいつていうのを前にどこかの本で読んだ覚えがあるけど、本当にそうだったのかもしれない。

——でも、今はこうして考えられているつていう時点でその認識は通常のものに戻っているはず。

つていうことは魔法さんが何かしらの原因で……弱まっている？

あるいはずっと隠そうとするんだけど一回でも知られちゃったらそのことに関してはもう魔法をかけないっていうこと？

僕の認識をねじ曲げないっていうこと？

ねじ曲げていた分までまとめて認識できるようになるってこと？

「あの一。響さん？ だいじよぶ？」

「……うん」

「や、その、私ね、えっとね、まさかねっ」

初めて見る感じに動揺しているゆりかがある。

「あのね、私、ほんと、そこまで深刻になるだなんて思ってた……そのつ、ごめん

！」

「いや僕は」

「だいじよぶ、私は、いや、ここにみんな、響がどっちだったとしたって『響』は

『響』なんだって思ってるから！ ねえ？ だから、その……今までと何にも変わらない

から！」

……すつごく心配されて気を遣われている。

遣わなきやいけないのは僕の方だって言うのに。

騙してたのは僕の方なのに。



「うん、今のはお酒の席のことってことで！ だってほら甘酒あるし……未成年がいけないことしない範囲だけど私たち子供だからびみよーなアルコールで酔っちゃったってことで！ ね、大人ってお酒の席でやらかしたことから忘れちゃうって言うじゃない？ だからこの話題忘れよ？ ほら、みんなも忘れるからさっ！ ねっ、ねえっ!？」

「……ま、お酒の席だと問題だから寝不足でハイになってたってことで良いかしらね。私もゆりかに釣られていろいろ言っちゃったし」

「ちよつとりさりーん、ホントに酔っ払ってたのがそれ言うー?」

「……そうね。響ちゃん、困っちゃったものね。分かったわ、おしまいにしましよう」

「……誰にだって言いたくないことは、あります」

僕よりもよっぽど……肉体的にもだったんだけど、精神的にもどうやら大人な彼女たちは急に声の調子を普段通りに戻して軽く伸びをしてみたり、忘れられていたテレビの番組について急に話してみたりし始める。

……困って黙りこくっていた僕とは全然違って。

うん。

この子たちは僕が思っているよりもずっと大人なんだな。

そうだよな、中学生って言えば思考能力なら下手な大人よりも上だもんな。

こんな、アルコールで毎晩止まっているような僕みたいなものより、ずっと。

## 4 1 話 勇気と告白と「——」 2 / 5

僕は「男なんだからもつと強くなりなさい」みたいな言い回しも決めつけも嫌いだ。

男だから何なんだ。

男だつて戦うどころかボールが飛んでくるのが怖かつたりしても良いじゃないか。

男だつて明るく元気に運動しなくても良いじゃないか。

男だつてうじうじとじとしていたつて良いじゃないか。

女だから何なんだ。

女だつてお淑やかじゃなくて元気で男を引つ張つても良いじゃないか。

女だつてかわいいものじゃなくて格好いいものが好きでも良いじゃないか。

女だつて格好いい系の格好をしても良いじゃないか。

そう思う僕でも女の子は、いや、女性との会話はやっぱり苦手。

理屈と感情は別物なんだ。

だつてこつちが話そうとしても、話したいことがあつてもずるずると別のことしか話させてくれないし聞かせてくれないから。

それは今の、この状況でもおんなじ。

しかも相手は4人。

まあそれは諦め切ってるんだけど、とにかく今は魔法さんは手出ししてこないらしいのが分かっている。

もう年が明けて1時間が経っていてこの追及にも20分はかかっている感じが、やたらと僕が「男の子」あるいは「女の子」だっていうキーワードが飛び交っている、今の瞬間にも僕は、僕たちのいるこの空間はフリーなんだ。

だからここまですべても平気なんだ。

僕のメンタルはともかく、魔法さんのあれやこれやには心配をしなくても良さそうって判断する。

それなら、一瞬静かになった今話しちゃわないと。

「それなんだけど」

「そうね……」

僕の言葉に被せるように……あ、これ自分の世界に入り込んでいるときのかがりの声。

当然ながら僕の声より大きい彼女の声、あと微妙にワントempo速かった彼女にみんなの視線が集まっている。

……さよは僕に気がついてくれてるけど、この状態のかがりはしゃべらないと止まら

ない。

終わるまではおあずけだ。

僕はいつもこうなんだ。

「私にとつては響ちゃんやんは響ちゃんだもの。たとえばもし男の子でも……でもあのかわいい下着は……いえ、やっぱり気にはしないし、男の子でも女の子でもどちらでも関係ないわ。ね、響ちゃん？」

今さらつと僕が男で、つまりは生えていて、なのに女もののぼんつ……かがりおすすめの上と下の下着を買ったことについて思いを馳せていたかもしれない事実だけには抗議しなかった。

「……後ね、多分だけれども。響ちゃんがこのこと、いいえ、お洋服を着てもらおうときにも言っていた、嫌いなお仕着せの服だとか病気のことだとか、お家のことだとか。

……そのことと何か関係があつて、だからどうしても言えない事情があるのでしょうか？  
だつて病気のこと、その、なかなか言えないこともあるかもしれないけれども……  
お家の場所や名字についてすら言えないっていうのもきつと、話せない、話したくない理由が……」

あ、名字。

うん、言っていないだけだね……だつて誰も聞いてこないから。

なんか自己紹介とかで名字までって学校くらいだし……僕二トだし……。

「あ、そっかー。そーいえばすっかり忘れてたけど、響さんのお家って何か面倒……あ、ごめんなさい……けど、複雑そうだったもんね」

くるんさんのせいでありさが反応しちゃって、また深読みが始まる。

「……この地域で、ちよつと大きいだけの私の家でさえ。古い神社のうちでもね？」

あ、りさも話し始める雰囲気。

「今となつてはちよつと大きいだけな家だけどやっぱ古いから。だからおじいさんの代までは、それはもー、ぜんっぜん自由つてものがなかつたらしいのよ。学校どころか勉強するかどうかでも……それは結婚相手とかまで全部。生きること自体が生まれる前からぜーんぶ決められててね、いろんなしきたりがあったつてお母さんが言つてたもん。今はこの通り、そこまでじゃないけどね」

「だからお家が大変つてのは分かるの」つて締めくくするのに合わせてさよが口を開く。

「……私も……病気が治るまでは、その、くわしい病名とか、なかなか言えなくて……そもそも理解してもらいにくくて、それに、少し遠慮というか、避けられたりもしますし。だからその……中学に入って仲良くしてくれているかがりさんにまで、なかなか言えませんでした。お家のことはわかりませんが……私、病気についてなら少しは分かります。……仕方が、ないんですよね」

……なんかどんどん深刻なつて来ちゃつて、さつき言おうとしていたことを言う雰囲気じゃなくなつちやつた。

この雰囲気で言うの？

嘘でしょ？

こんな真剣そうな顔した子たちの前で「全部嘘なんです……」って言わなきゃなの？  
無理無理、いくら僕がやつちやつたことでもこの状況じゃ無理。

「……そんな感じなんだ」

……そうして「ねえ、そうなんですよ？」っていう4人の目つきで思わず口から出ちやつた僕の声。

また嘘を塗り固めたのに気がついた。

きつと、半ば無意識で……だつて、こうしておけばこの先にながあつても……また僕が、今度はもつと長い冬眠をしたとしたつて、そのままお別れしたつて大丈夫なようにしたからしょうがないんだつて理屈を後付けして。

それに、怖いんだ。

あの目は嫌いだ。

ぞつとする、どろんとしたあの目。

あんなにぼわぼわしている感じの飛川さんが操り人形みたいになつちやうあれ。

ぐつと手に力を込める。

「……………」

……どうしても話したくない、いや、話せない……そこまで行くと最初から全部説明しなきゃ行けなくて、だから家のことと病気のことをたつた今ついたばかりの嘘で固めたとしたって……男だっていうことはゆりかとりさはもう知っているんだ。

話したとしても……この子たちは、前の僕を知らない。

だから……多分、僕を男だと認識できるはず。

実際にふたりはできているわけだし、できる。

……そうだとは思っている。

猫さんやポニーさんみたいに、ちよつとだけ止まってから理解できるはず。

……きつとそうだととは分かっているんだけど、でも、この子たちの暗くなって濁ってどこを見ているのかわからないような目なんて、見たくはないんだ。

出しかけた勇気がしぼんでいくのが分かる。

……僕はずつとこうやって逃げてきたんだ。

でもそれはしようがないんだ、魔法さんは相も変わらずに不安定でよく分からなくて、なんで怒るのかも……今怒っていないのかも分からないこの存在が、どう出てくるのかまったくわからないんだ。



お隣さんのときもねこみみ病のふたりのときもそうだったけど、魔法さんは怒らせてみないとどうなるのかが分からないんだ。

今度もまたあのときみたいに、まったく想像もできなかったような意図していない方向に……それこそ取り返しのできない魔法が発動したりなんてしちゃったりしたら——こんなに仲良くなってしまうた子たちになにかが起きてしまったら。

この子たちが大切になっちゃったからこそ、言いたいのに言うのが怖い。

「……濟まない、みんな。これは僕の、家の事情のせいであまく……」

僕の口はいつもの通りに嘘で終わらせようとする。

父さんと母さんが死んだときも、周りの大人に「僕は大丈夫ですから」って言い続けたみたいに。

誰かが「大丈夫？」って心配して来てくれても「大丈夫です」って、大丈夫じゃないのに言い続けたみたいに。

叔父さんが「そろそろ仕事をがんばってみたら？ まだ取り返しの付く20代のうちに」って何回も言ってくれたのに「働きたい仕事をいろいろ探しているんです」って嘘ばかり言っていたときみたいに。

「んじゃー、しよーがないよ響。今までだってわかんなくても友だちでいられたんだしやー。」

「そうよねー、実際私だってゆりか以外には神社の家出身だって学校でも言っていないもの。あ、今は4人に増えてるのか。でも別に言わなくなつて友だちではいられるんだし、言う必要だつてないんだから。ね？」

「そうよね！ 響ちゃんは、隠したくて隠しているわけではないのだから！」

「……いつか、話せる日が来れば。そうすれば、私みたいに……ほっと、できるますから。……全部でなくても、いずれ、話せるようになれば、いいですね」

そうしてひとおりに慰められたところで、みんなが意識的に話題を変えて適当な話をし始めたところで……不意に蘇ってくる記憶がある。

それはあの夢、冬眠のときの明晰夢なのかただの夢だったのかは分からないのに今でも覚えているフシギな夢の中、「お姉ちゃん」って呼んでほしがつたアメリカって女の子とのあの会話。

——嘘をついていてバレるまではずっと嫌だけど、バレちゃえばしばらく辛いけど楽になる。

あの子から教えられた、いや、僕の深層心理とでも言うべきものが僕の情けない心を叱咤するように、けどそれだと僕が萎縮しちゃうからアメリカっていう威圧感ゼロな子を演じて教えてくれたんだ。

——どうせいつかはバレるんだから謝る気になつたらさっさと謝つてしまえばいい、

どうせ怒られるのは一緒なんだ……だから自分から白状してしまう。

鉄則ってわかりやすい形で僕が言いやすいようにしてくれた。

他人からそう教えられたからって実践しやすくして。

意識と無意識って本当によくできているんだ。

——ついでに、謝る相手が穏やかなときに謝れば少しはマシなんだとも。

——タイミングを見計らって、あとはがんばれって。

……そのタイミングって、今なんじゃないか。

そう思っていたらいつの間にか嫌なことばかり言われてにじんでいた不快な汗も、すっかりと引いている。

みんなも……努めてかもしれないけど、でも明るく話している。

そして今、いつか話してほしいって言われたんだ。

……だったら、僕は。

## 4 1 話 勇気と告白と 「――」 3 / 5

「……ね、なんか響、うづくまるようにしてない？」

「……あの……響、さん？」

「……もしや、またあのときみたいな発作が起きてきてるんじゃない!? あのとときも『なんだかうつむいてるな』って思ってたらすぐになっただんだけ!!」

「そうだったら大変! あのとときだって苦しそうだったんだし、たとえ響ちゃんが大丈夫だって……あのときはそうだったとしたって、今度は違うかもしれないもの!」

「すぐにお家の方に、連絡を……!」

「……かがりん、あつた、あつたよスマホ! 響のコートの中に!」

……あれ。

さつきから「なんだかあつたかくて柔らかい感触があるな」って思ってたら後ろをりさりんっぽい柔らかいのに抱きかかえられて、首すじが柔らかいそのふたつに包まれていたのに気がついた。

あれ?

僕はいつのまにか座椅子の上からりさりんらしきおなかと太ももの上に座らされて

いて？

目の前にはさよが僕のとにもに体重を軽く乗せていて、僕の首元とさよ自身の手首に……脈拍を測ってたりするかも？

そうして彼女の長い前髪が僕の上に乗っかってて？

え？

何があつたの？

——まさかまた魔法さんが僕を。

「わかつたわ！　まずは響ちゃんの指でロックを解除ね！　……あのときのように、きつとうまく返事ができないだろうから……」

僕を止めていた？

……けど、これはねこねこペアのとくと似ている。

なら、大きな邪魔をされずに言えるはずだ。

ごめんねって。

「……済まない、大丈夫だよ」

「響い！」

「……少なくともあのときのような発作じゃないんだ……それに、もう大丈夫」

「響ちゃん……それは本当なのね？」

「うん、強がりとかじゃなくて経験からだよ」

まだ一回しか前例はないこれだけ……状況が似ているから、多分。

「……脈拍も呼吸も落ち着いて……たぶん正常、です。この前のように、ぜんそく、あるいはアレルギーでのショック症状もありません。発汗も、なくて……確かにこの前とは、ちがいます、ね。あのときは、響さんの白い肌が、真っ赤になっていました、し」

まるで看護師さんとかお医者さんみたいな感じになつてるさよが僕の上方から言う。

「……みんな、心配させてごめん。少し……そう。少し考え込み、過ぎていたんだ」  
体を起こそうとして……さよとりさの体重が掛かっていたのに気がついてもぞもぞしたら拘束が解かれる僕。

「ゆりかなら知っているよね。僕が、長考してしまうところなるっていうことを」

納得できない感じのため息が降ってくる……けども。

「……んまあ、響は突然黙ることがあるけどさ。……あつはははは……あー、おなか痛い。さつすがマイペースひびきん、このタイミングで私たちの声がぜんっぜん入らないくらいにか考えてたん？」

「僕の悪い癖なんだ」

何かを察してくれたらしいゆりかが「そういうこと」にしてくれる。

……うん、これも嘘じゃない……けど、この子たちにとって嘘だって感じるわざとらしい。

それでも何回も「本当に大丈夫？」って確かめられてからようやくよくに前と後ろからの圧が減って、涼しくなって、ついでに「勝手に開けようとしてごめんね」ってスマホを渡されて。

みんながほっとした感じでこたつに潜り直して……またゆりかがくつついてきて、お茶と甘くないお菓子を勧めてきて。

……鉄則のタイミングって言うやつ。

今を逃したらもう来ないだろう。

「……今考え込んでいたのはね」

心臓がぼくぼくする。

きつとこの瞬間に脈を取られたら「救急車をー」って言われちゃいそうな感覚。

「言うべきかどうか……悩んでいたんだ。でも心配してくれてありがとう、みんな」

「そうだったのね。あーもう、心配したけど良かったわ！」

「だねえ。ね、今度から考えてるときは名探偵風に……」

——かがり。

身長も女性らしさも……童顔っていうのと中身を除けば、あとは言動の全てを除け

ば、服装と静かにしていられる間は高校生とも大学生とも言い張れるくらい。

髪の毛はくせっ毛……じゃなかったらしくウェーブっていうものをかけたこだわりくるんだったそうで、それが肩甲骨くらいまでくるんくるんして少し垂れ目で少し抜けていて。

手を繋がれたりなんてしたら間違いなく肩が疲れるくらいに腕が上がって姉妹のように見られたりすることもあるくらいの子。

そのかがりは着られる服がばんつを含めても足りないからっていうのと、初めての女もの、それも女兒のそれをオンラインで買うのが難しくって、なにより状況を知りたかったからっていう理由で出た先で、たまたま着せ替えさせられた出会い。

そのあとにも運悪く……運良く何回か外で遭遇して、話をしたり連れて行かれたりしてもわざわざ振り切ったりしたりで断るのがめんどくさかっただけの関係な子。

「……もしかして今の、私の早とちりだった？　響が熟考してるの勝手にこの前みたいて？　いやあごめんねみんなー、響もさー。勝手に服とか漁っちゃってさ」  
ゆりか。

最近流行りなのかどうかは知らないけどやけに前髪をきれいに揃えることにこだわっていて、目がぱっちりしていて髪の毛は肩まで……今は肩にふんわり乗っかるくらいにまで伸びていて。



話題はとにかくゲームやアニメでどちらかという小学生男子みたいなセンスで、でもマニアックなものも睡眠時間を削ったり勉強と両立させながら、好きなことを好きなだけしている子。

今井さんの芸能界への手引きから助けられて、その前にはバーガーの残り物も……学生らしい感覚で欲しいのかなって与えてみたっていう繋がりがあつたつけ……それからずっとひたすらに話をしたがってきて。

聞いてみればなんていうことはなくって、ただ趣味が合う友だちを探していた、ただそれだけで。

そんな、このふたりとの関係。

押しに負けて……あのときはまだ子供、JCつて子たちに対する耐性が弱かつたんだ……連絡先を教えちゃったんだけど、それだつてすぐに消したりだとか、そういうことだつてやろうと思えばできたのにしなくて……知らないあいだに友達つて言うものに、僕からもなつていて。

だからこの姿、幼女になっちゃってからは女性として、あるいは幼女のままで背伸びして中学生として生きるのに不自然じゃないようにするために、不信感をもたれない程度のふるまいとか話し方とかを身につけるために、情報を得るために距離を置かなかつた。

初めのころは、ただそれだけだった。

「そんなこと、ありません。……退院直後というのは……えっと、とりあえず、ひとまずで、数値や過去の症例、それに本人の感覚から大丈夫だろうけれど……響さんや私のような場合には、大丈夫、かもしれない。一時帰宅、という捉え方のほうが、いいんです。私は、響さんも言っていたとおり、ゆりかさんと、かがりさんの、さっきの対応。まちがって、いなかっただって！　そう、思います」

さよ。

ますます伸びた前髪はどう見ても邪魔つけなくらいになっていてもはやメガネも隠れる始末で、今どき珍しい感じのおさげでおとなしい子。

あの蒸し焼きになりそうな真夏のあの日、この子の好きな本屋って言う場所で知り合った子。

僕の昔みたいな……いや、今でもたいして変わってはいないんだけど……親近感があつてそばにいと落ち着ける静かな子。

「そうよねー。……ほら、さよさんも、今、気づいてる？　……ほとんどつつかえたりしないで、そうしたいって言っていたとおりにおはなし、できていたわよ」

「……あつ……」

「ちよつとだけでも今日……じゃなくてももう昨日か、たくさんの人と話した成果、出てき

たんじやない？ この調子なら三が日が終わるころにはもっともっと自信を持って話せるわね？」

「りきさん……がんばりますっ」  
りき。

運動部らしく、それとも彼女の素の性格で活発でいっつも動いている子。

部活で汗をかくからって髪の毛は首にからなくらいにそろえてあるけど、ほんとうは伸ばしたいって言っていたのを覚えている。

かがりに近いけどかがりよりもっと引き締まった感じがあって力強いって言う感じで、今の僕とは正反対な感じの子。

この子だってゆりかと一緒にいたところで知り合って。

ゆりかから聞いていたからってすぐに……これもこの子の性格なんだろうけどやたらと距離が物理的に近い子。

——初めは僕ひとりだったのに、幼女になってそんなに経たないうちに気がつけば偶然に2人も増えて、これまた偶然でさらに2人も増えた。

こんな見た目とこんな中身なのに、こんなになにもかも隠していて……中学生なんだからそれくらい察していたのに黙っていてくれて、それなのに僕を1人の人間として、男でも女でも関係なく友達と思ってくれている。

こんなの、もう10年くらいなかったんだ。  
だったら僕も……応えなきや。

答えなきや。

「……ふ——……」

多めに息を吸って、みんなの話が途切れるタイミングを見計らって僕は言う。

「……みんな。りさ、さよ。かがり、ゆりか」

「ん？ どうしたの？」

「具合の方は……」

「……響ちゃん？」

「……響」

「……聞いて、ほしいことがあるんだ。さつきまで言わないことにしようと思ってい

たんだ……僕の事情って言うもの。その……今、全部はムリだけれど。でも。聞

いてほしいんだ」

魔法さんもない、邪魔も入らない、みんながそろっている……ここに来る前に偶然

で見つかった、「もしもの備え」もある。

そんな今だからこそ、僕は言うんだ。

「僕は——『男』なんだ」

口に出すだけで大変なことになる魔法さんのことも関係がないかもしれないねこみ  
み病のことも、本当の僕のこととも言えないし言っても困らせるだけ。

でも……性別を、心の性別を偽り続けるって言うのはこの子たちに対して失礼なん  
だ。

「——君たちと同じ女子じゃなくて、『男』なんだ」

だから、言った。

魔法さんがどんなことをしてこようとも……これは、僕が言いたかったことなんだ。

## 4 1 話 勇気と告白と 「――」 4 / 5

『まー、ヒミツがいつぱいあるってのもさ、響らしいって言えば響らしいよねー。 なんか、普段の雰囲気とか話し方とかそーいう、響そのものってゆーか。 属性も設定もマシマシなのが明らかだし、だからこそ私たちも勝手に好きだけ盛れてさ？ しかもそれをどーしても言えないっての。 まさに世をはばかるヒーロー、あるいは闇抱えるヒロインって感じじゃん？ しかも割と終盤まで明かされないヤツってパターンの！』

『ゆ、ゆりかさん……あまり茶化さない方が』

『いいのいいの、こーゆーときにはゆーもあが必要なのだよ』

『ユーモアねえ……まあ明るければ何でも良いわね。 えーと、それって最後の戦いの手前くらいで明かされたりするああいう感じのこと？ 私あんまり漫画読まないから合ってるどうか』

『そーだよりさりん、さっすが話が早いねえ！ だてに便利な布教先第1号なだけはある』

『あんたが次はコレ、次はコレって……いつも私がちようど見終えたりしたタイミング

で新しいの持ってくるからでしょ。それに、今のはあんたの話に乗ってあげただけだっつて』

『知ってるぜい？ りさりん。それ、ツンデレっていうヤツ！』

『……………』

『おりよ、ぐりぐりがこない』

『いくら私だつて控えるわよ……………こういうときくらいは、ね』

『……………そうよね！ だつて響ちゃんだもの、飲み込みがとつても良くつて勉強だつてすぐに追い越されてしまうくらいのおすすめのすばらしい頭をもっているのだもの！ あとものすごい集中力もかしら？ だつて私の何倍もの時間ずーつと勉強したり考えごとをしたり！ ……隠された一族の過去とか因縁とか対決とか先祖から受け継いだ力だとか……………！』

『かがりんストップ』

『いえ、それよりも響ちゃん本人にだけに現れた力とかのほうがドラマチックかしらね？ あと、あと……………権力から隠れていたり、あるいは逆に権力から守られて頼られていたり！ つまりは響ちゃんっていうのは現代に生きる』

『ストップストップかがりん。設定垂れ流すのはお家にあるノートとかにでもやつてちよ。りさりんが言っていたように今はそーゆー雰囲気じゃないのよ？』

『……あら？　なんでゆりかちゃんがそれを知っているの？　私、話したことあったかしらっ？』

『……動じていないどころか黒歴史ノートの存在を自分からセルフ開示だと……かがりんさんつてやつぱすげえ……!!　……ねね、ちなみに今は何冊目？』

『あの、あの……みなさん……』

『む、少し遊びすぎたか』

『あのゆりかちゃん、今はどうとう』

そのような平和な……中学生なりに雰囲気に戻そうと、敢えて彼女たちがしていた会話をぶった切って「彼」が言う。

『……みんな。　りさ、さよ。　かがり、ゆりか』

それを……先ほどから外套を部下に預けたまま、ドレスのような派手な衣装をはためかせている彼女が耳に神経を尖らせつつじっと眼下を見下ろし続け、耳元のデバイスからは中で一番に幼いけれども一番に落ち着いている声で——彼／彼女からの、その告白が流れてきている。

『……え、響ちゃん』

『……言っても良いの？　響』

『うん、君たちだから。　……僕はね。　女としての体を持つてはいるんだ。　かがり



に着替えさせられたときののように、きちんとした……小さいけれども女の肉体を。 うん、肉体的には女性なんだ』

「——ほう」

タブレットを……ふたたびその眼帯を外したからか光を帯び始めた目でにらむようにしながら、耳からの声に集中もしている彼もまた首を振りつつ、杖を軽く砂利に打ち付ける。

その隣で片手で耳を覆い、「彼」の告白を聞こうとしつつ、もう片方の手を無意識に頬へと当てる彼女は、それに気がつく様子もない。

『……だけど、意識や心といったもの。 つまりは僕というそのものは、男で……そして僕自身もまた、男としていたい、男として生きていきたい……そう思っているんだ。少し前までは、それですら迷っていたんだけどね』

『……ああ、通りであの山で遭遇したときに私たちは……はあ……なるほど……』

落ち込んだような声を吐き出した彼女は、頬から手を離す。

『……これ以上は、まだ。 ……うん、まだ。 僕の事情と僕自身の覚悟が決まっているいからすぐには言えないんだけど、でも。 ……これまでは、去年君たちに出会ったほんの少し前までは僕自身の性別に悩むことは無かったんだ。 だからなかなか言い出せなくて……こんなに心配をさせて悪かった』

「ふむ……」

杖を数回地面を突いた彼は彼女へ向き直り、ひたいを抑えている彼女へと話しかける。

「……それで、ああなつたわけか。合点が行った、なるほど、なるほど。……しかし

お前、これは」

「ああ。……野放しにはできないね。私たちが知ってしまったから」

☆☆☆

「……だから」

魔法さんは様子見しているか何かで手を出してきていないけど、でも僕はこうして性別について話しただけでもういっぱいいい。別について話しただけでもういっぱいいい。

魔法さんがどうしておとなしいのか分からない以上、前の僕に関係することは時間を空けた方がよいはず。

すぐがんばって言って良い部分だけ話し切って——顔を上げたらみんなが魔法さんにおかしくさせられちゃって、次会ったときに「なんか聞いたっけ？」とか言われたらめげるから。

だからこれ以上のことは今は言えないけど……言えなかったけど、でもいつかは全部言うんだ。

仲良くなり過ぎちゃって、何年ぶりどころじゃなくて10年ぶりくらいに「知り合い」から「友達」にまでなっちゃった子たちに。

案外に飲み込むのが遅いのか、それともかなりセンシティブって感じの発言に困ってるのかで目をぱちぱちしているゆりかを見る。

「僕を男扱いしてくれていたりさとゆりかは、何も間違っではないんだ」

そんなゆりかとは正反対に……あー、お酒って残っているとちよつとしたことですぐに顔が赤くなるよね……もう1回真っ赤になっっている巫女りんを見る。

「僕を女扱いして……いや、女子、同性として見てくれていたさよとかがりも」

いつもの……僕とおんなじようになかなか表情が変わらないけど、でもその中に複雑そうな顔を浮かべているさよを見る。

『僕』にとつては正しいことを言っただけ。どちらも間違っではないから気にしないで。それも言いたかったんだ」

最後にくるんつとした目をしつつ、首もくるんつとしているかがりを見て……「やっぱり頼りにはならないけど癒やされる大型犬みたいだなあ」ってなんだか安心した。

## ☆☆☆

彼女／彼からの告白がひと区切りしたのを確認し、タブレットを近くにいた部下に預けた彼は彼女へ問う。

「……………」

眼帯を完全に外してポケットへしまいつつ、さらに目の輝きを増した壮年の彼はゆつくりと金属音を滑らせながら再び一本の杖を2つの剣へと変えていく。

その間にも彼からの指示で慌ただしく……………その場だけで今は50ほどに膨らんだ「兵士」たちが動き出す。

「……………」

「……………」

そして指令を受けたひとりが……………運良く見つけた、木造の建物に開いていたわずかなすき間から幼女と一筋の射線が通っているそのひとりがずっと定めていた照準を再度調整した。

——彼らにとって都合のいいことに、先ほどまでの切り裂く風は、ぴたりと止んでいった。

## 4 1 話 勇気と告白と「—」 5 / 5

「ふう」

良かった。

思っていたよりも話せなかったけど思っていた以上に言えた気がする。

僕が男だつて言うの、実は結構怖かったから……だつてお隣さんのあれがトラウマなんだ。

そのせいか今日何度目かに静かになった室内。

またテレビの音だけが響く空間になっている。

まあすつごくデリケートつて言えばデリケートな話だったし……反応に困っているんだろう。

でも本当、あれだけ悩んでいたつていうのにいざ吐き出しちゃえば、とつてもすつきりするものなんだね……ずっと気になっていた歯と歯の間に挟まっていたなにかを取り出せたときみたいだな、そんな感じ。

僕が大人でニートで穀潰しでダメダメでなんか魔法っぽいのに付きまとわれてる……とかまでは言えなかったけど、まあ最初としては充分なはず。

うん、がんばった。

けどやっぱり魔法さんの気配は感じない。

みんなを観察しているけど、びっくりしているようではあるけどみんなの目は普通で、どろんつてしていない。

みんなにもまた、魔法さんは降りかかっている様子。

……この前みたいになんか微妙にかかったら解けるのかな、魔法さん。

ほら、この前はねこみみ病の話でなにも聞こえなくなつて、今回は何か変な感覚あつたし。

「……えっと、ひびきやひびき」

「うん」

ゆりかの発音つて微妙に変。

変つて言うか「響」つて言うとき結構な割合で……こう、何か変な聞こえ方になるんだ。

ぱつつんをわざとらしくふあさつと……あ、これけつこう動揺してるときのゆりかのクセだっけ……した彼女が声をかけてくる。

「まだみんな……こう、すどんつてきてないみたいだから。だからなんとなくわかつた私が先に、代わりに聞くけどさ。それつて最近……いや、けつこー前からマンガと

かではもうとつくにおなじみになって、少し前からはニュースとかでも聞くようになってきたアレのことかいな？ えっと、性……漢字ばかりでわすれちゃった……なんちゃらつてやつ」

「うん、そうなんだ。性同一性障害というもの……に近いもの。僕の場合はもう少し特殊だけど……まあ、その理解で問題ないと思う。なにしろ女の体の中に男の心、精神が入っているんだからな。それもつい最近までは本当に男として生活してきたくらいには完璧な、ね」

「……ほーん？」

いまいちピンときていない様子。

「……君になら分かるだろう例えだけど……そうだな」

念のために魔法さんのことも考えて「例え」って強調して。

「……ある朝目が覚めたら男から女になっていて、その状態がもう戻らなくなった……みたいな感じかな。原因とかはともかくね。そういうマンガとかなら目にしたことがあるんじゃないか？ 本当は少し違うけれど、僕の印象としてはそんな感じなんだ」

魔法さんが怒らないようにちよつと違うアピールも欠かさない。

「あ、すつごくわかりやすい。私、最近そんなの読んだし」

「そうか、なら話は早い。……そう、あの、男から女になってしまった状態がまるで『固定』されてしまったように——けほっ」

肝心なところで咳き込んだじやった……恥ずかしいなあもう。

けどもなんだか違和感がある。

なんだろう。

……胸のあたり？

緊張して話していたし、つばとかが気管支の変なところに入ったかな？

「……みんな、ちよつとごめん。セキが……こほっ」

よくわからない感じに息苦しくなって、息を吸おうとすると余計になにかが欠けていくようで、それが咳をすることでは収まらなさそうな、そんな感覚がこみ上げて止まらない。

「……………」

——嫌な予感って言うのは大体当たるもの。

それがどんな突飛なものだってなんとなくで分かっちゃうんだ。

それは母さんたちの知らせが来た瞬間の学校でもそうだった。

……よりもよって今、か。

タイミング悪いなあ。



僕は少しでも「それ」を知るのを後回しにしようって、みんなに見えないように後ろを向いて、両手を口元にやる。

「—ひびき？」

「響ちゃん？」

さあつと頭から血の気が引いていく感覚。

「ああ2人とも死んじやったんだ」ってあの中学生のあの日に病院で知った感覚。

「……………つ、……………つ、……………」

返事をしようとしても「それ」があふれてくるからできない。

—そっか。

いざつてときに声を出せないってこともあるんだ。

じゃあやつぱり書き残しておくって大切なんだな。

そんなことをぼんやり考えながらけけほけほってしていたら、口元を押さえていた手のひらからなんだか生暖かいイヤな感覚がする。

ちよつとだけちらつと見てみると、そこには——真つ赤に光つてべとつて生

理的不快感を放つ液体。

血。

僕の口から、血。  
血。

なんで？

「……響、さん？」

「あの、大丈夫？」

「……けほっ……うん、大丈夫。 ちよつと、ね」

さっきのもあるしこの前のもあるからどうしても心配されちゃう。

心配させたくないのに。

どうにかして隠し通してここを離れられないかな。

こういうのって事故に遭った直後の人のだよね。

アドレナリンがどぼどぼ出て「平気平気！」って言っちゃうやつ。

そんな、使わないと思っていた知識が頭の中をぐるぐる回っている。

なんで血っぽいものが出たのかはわからないけど、ひよつとしたら鼻血かもしれないし。

ずいぶんと温度差があったし、鼻をかんだときにも切れていたのかもしれないし。  
な。

これは、手のひらからこぼさないようにしておけばいいだろう。

あとでさりげなくティッシュに吸わせてトイレにでも行くついでに洗っておけばいいんだし。

口からは漏れてはいないはず……だから大丈夫。

拭ってみても……うん、汚れていない。

ならそのことよりも、まずはみんなを安心させないと。

そうして隠蔽しようとしつつも「そんな場合じゃない」っていう無意識の警告が大きくなってくる。

「とにかく、大丈夫——」

「大丈夫大丈夫——」って明るく言おうとしてみんなを見上げてみると——なんだかみんなの目つきがおかしい。

みんな……なんでそんなに僕のこと食い入るように見てるの？

なんでりさとかがりは口に両手当ててるの？

なんでさよは真っ青になってるの？

なんでゆりかは真顔になってるの？

そう思ったとたんに抑えきれない勢いで口から漏れてくる生臭くって熱くってどろつとした液体。

「いっけい」

それは止めようもなくって、すぐに口からごぼつと出て来はじめて、それに合わせるかのように胸のまん中あたりにもじくじくじんじんとして、焼けるような感覚が昇ってくる。

そして……ああこれが吐くっていうものなんだ、それもお酒とか食中毒とかで吐くんじゃないかって吐血っていう、まるで本物の病人が……ひどい病気を患っている人がしてしまうっていう知識とか映像化でしか知らないような……ひどい、胸の、喉の奥から止まらない、あれ、なんだか世界が傾いて、あれ、つて、なんだかつい最近にもこんなことがあったような、ああそうであればはこの前の階段の、でも階段のは階段だったからだし、僕の不注意で起きたことだから、今のこれとは、あれ。

そうして僕は倒れたらしい。

人って意外と冷静だし周囲とか自分の状況とか分かってるんだね。

何だか不思議。

あ、けど。

「ひびき!?!」

「嫌っ、響ちゃん!?!」

「え、ちよ、響さん」

「……………あ」

みんなの声が、さっきまで見たいに上からじゃなくって後ろから聞こえる。

——せつかく嘘をいつこ告白できたって言うのに、また心配させちゃうな。

「ひびきっ、ひびきいっ！」

「ど、どうしよ……どうしよお」

咳き込むこと数回、でろでろーって血を吐いちやうこと数回。

ひととおり吐いてちよつとすつきりしたから分かった。

僕は吐きながら……血を吐きながら前のめりに倒れたんだ。

どおりで打ち付けたらしい鼻が痛いわけだ。

口からの吐血ついでに鼻血も出てそう……どうでも良いレベルの惨事だけでも。

あ、おでことあごも痛い。

下が畳なのに……畳って意外と硬いんだね。

なんて、こんなことを考える余裕だけはある。

そう言えばこの前の、階段のときもそうだったっけ。

やけに思考がはつきりして速くなるんだ。

体には力が入らない。

倒れて顔からごっつんするくらいだ、受け身も取れないほどに脱力しているんだらう。

なんでだろ？

あと息がとても苦しい。

……胸の奥から止まらないような、とめどない感じのげろげろのせいで……あ、また。

「……げぼっ」

びしゃと派手な音を立てながら、さらなる血が僕の口から吐き出されてしまう。

ああどうしよう……暈が台なしじゃないか。

あとで巫女りんと家族の人になんて謝って……張り替えとかのお金も必要だろうし

……。

暈って一枚いくらなんだろうなあ。

そもそも暈って一枚って数えるんだっけ？

それにしても鼻が痛い。

なんでこういうときって本体よりも大したことない場所がはつきり痛むんだらうね。

後ろからみんなの声が降ってくるっていう奇妙な感覚もまた気になる。

不思議。

「……………ねえ。響？ ……ねえ。 ……ね、どうしよみんな、どうしたら」

またテレビの音。

遠くでお賽銭とちやりんちやりん。

じやらじやら。

僕が咳き込んで吐く音。

またテレビの音、また——。

「——救急車を呼んでください！」

「え……」

「……りささん！ 119番！ スマホではなく電話の方がボタンを押すだけなので確  
実です！」

「あ……さよ、さん」

「初めに救急と伝えて、今見た状態と響さん——『彼』が重い持病持ちだということと、  
こちらの住所を話してください！ ……119！ 急いで！」

「っ!? う、うんっ」

「担当医か親御さんに直接の方が望ましいので、私も響さんのスマホで連絡を取ります  
！」

「わかったわ！ 待ってて、今すぐに……」

☆☆☆

雲間から月明かりが差し込んでいる。

風も収まり、薄くて柔らかい光だけが降り注いでいるその高台でせり出した広場。

そこには初老とは思えない気迫をみなぎらせる彼女が居り、その前には完全に武装をし、あるいはスーツや白衣などに着替えを済ませた兵士たちが20ほど残っていた。

そこに残っていたのは、まさにこれから銀髪の彼／彼女とこころへ出向くための支度を調べた者たち。

「さて、諸君」

彼女が、大きくはないのによく響く声で言う。

「行こうか。 いや……『いざ行かん同志諸君』……などと懐かしい言い回しも偶にはいいかね？ 奴らの特徴ある言い回しだがこういうときには士気というものは上がるだろう。 ……ああ、ここに居るほとんどは、もうそれも知識としてしか知らないか……

まあ、感傷はどうでもいい」

すでに広場の手前には数台の車が待機しており、ドアもみな開けられていて彼女たちが乗り込むのを待っているだけ。

「この度、また一人……■■■■が確実なものとなった。 よってこれから我々は」

『………良いのか？』

ザツと彼女の耳に入ってくる声。



『まだ■からの連絡は来ていないが』

「なに、構うものか。なにせ」

カツンカツンとハイヒールを地面に交互に乗せ始めると手下の彼らも一斉に彼女のあとに続いていく。

「無い……とは思うが、なにせ人が多い。万が一にでもコレが公になってしまったら

——我々も奴らも、それはもう」

顔をしかめつつ、頬の痣を撫でながら。

「——大層困ったことになるだろう？ 『ねこみみ病なんぞ』とは比較にならぬほどに、な？」

## 4 2 話 予定されていた／いなかった、予定（不）調和

## 1 / 6

僕は動けない。

だけどみんなの声は聞こえる。

だけれども体の自由が利かない。

不思議。

「早くご両親に連絡しなきゃ！」

「ごめんなさい、まずは響さんの指を綺麗にしないと指紋が拾えなくて……何回も間違えるとロック、掛かってしまいますから……」

体はそうなのに頭はこれ以上なくらいに冴えていて……呼吸がきちんできてい  
る。

どうして？

さつきまで苦しくて血を吐いていたのに？

分らない。

何もかも分からない。

でも、みんなが叫ぶように僕を助けようって大変なことになっているのと。

「……げぼっ」

「……大丈夫です、落ち着いてください、響さん」

ときどき息が苦しくない程度に血を吐いているっていうのがこれ以上ないくらいにはつきりと理解できているくらい。

親指と人差し指が冷たくて気持ちいい感覚で拭われて、今度はそれをスマホの画面に合わせられる感覚。

そうしてくれているだろう……さよの、動揺で冷たくなっていて震えている指先もちゃんとわかつている。

でもなんで僕はこうして血なんか吐いているんだろう。

今までどこも悪くもなかったし、そういう兆候だつてなかったのにね。

それに魔法さんがらみでも、こんなこと起きるはずがない。

魔法さんだつたら僕をこうして傷つけるはずが……いや。

元からこの体が悪かつたっていう可能性もなくて……のかな。

それを防ぐための魔法さんでハサミで冬眠だつたり？

そういう前提に立って考えてみるとなんだか全部説明できちゃいそうな気が。

よく分からないけども今のこれは初めて経験するもの。

多分魔法さんの仕業。

魔法さん以外の可能性の方が危ないんだし、とりあえずそう思いたいだけ。

でも今回ちりちりとかもしていないし魔法さんの気配も感じない。

今回は何が原因、トリガーになってこうなったのかがこれっぽっちも分からない。

僕が男だつて言つたから？

それならねこみみ病のときにも口にしたし、そのときにはマンガとかだつていふ言い訳もしなかつたけどこんな風にはならなかつたんだし、やっぱり違う。

けど何度も、セキをするたびに僕の口から出てくる熱い血のせいであちこちが真っ赤で、体もなんだかぬめぬめしている。

生暖かい感じ。

やっぱりいくら力を入れようとしても動けない。

喉から口にかけてをどうにかするだけで、もういっぱいいっぱい。

……体が動かなくなるっていうのも想定、しておかなきゃだつたんだな。

冬眠とか僕が固まったりするので知っていたはずなのに。

「つ……………また指紋が読み取れなくて……………」

「……………響ちゃんの話せる状態ではないし、ロックも使えなくなるわ。落ちついて綺麗にしませう。十分に水気も吸い取つて、落ちついて。指紋はそれから。さよ

「ちゃんも救急車呼んでくれているのだし、どちらにしてもきつと間に合うわ。だから

……ね？」

「……………っ、はい」

「げぼっ」

「どうにか息を整えているのにそれでもこうしてときどき横隔膜が……セキとかしゃっくりとかみたいに勝手に動いて、そしてまた口の中がどろっとして。

……あ、誰かがタオルを当ててくれた。

口の周りの気持ち悪さがちよつと減ってうれしい。

ついでにペロを押し当ててちよつとだけでも口の中から血を出しておく。

けど、吐くって気持ち悪いものなんだな。

「なにしろ僕はこれまで本当に健康な体で、お酒だって失敗したことなかったせいであんなに経験なかったから。」

……………！

ふとももとかおまたあたりが生ぬるいつて感じてもしやっつて慌てて……目で見たり手で触ったりなんてできないからあくまでも感覚で知るしかないんだけど、胸は元よりおなかとかおへその下とかまでぬるっつとしてる。

下半身が濡れているのはどうやら血の様子。

別のものを漏らしたんじゃないやなくてよかった。

……いやいやそれだけの血が出てるっていうのは体にとつては相当まずいことになってるはずで、いくら魔法さんで死ねないだろうっていうのがわかつてはいるんだけど、でも良くはないはずで。

でも体が動かないからか普段以上に意識だけがまともなもんだから、みんなの前で漏らしちゃった疑惑に必死になっちゃったんだ。

ほら、倒れた人とかが漏らしていると危険だつて知ってるし。

「……ひびき……やだよ死んじや」

僕の顔の上からゆりかの声。

そっか、口の周りを拭ってくれていた……タオルで血を吸い取ってから冷たくて気持ちいいのもういちど拭いてくれて、最後に乾いてふわふわしたので拭いてくれていたのは君だったんだ。

ありがとう。

でもそれすら言えなくてごめんね。

「やだ、響……なんで、こんなはずじゃ、響。だって、そんな予定はなかったのに……ひつく、……私が、私が……早く、帰らせつ、なかつたから……ぐすつ」

死んだりなんかしないから大丈夫つて言いたいのにな。

でもそうだよね、誰だって血だらけで血を吐き続けているのを見たら死んじやうんじやないかって心配になるよね。

本当は病気なんかなんにもなくて、さらに魔法さんとかいうありがたい迷惑な何かにまわりつかれているだなんて言っていないし言っても信じられないもんね。

ちよつと顔を見ようって思って目を思いつ切り開けようとしてちよつとだけ開く。

……でもまぶしいだけで焦点が合わないみたい。

あれ、僕、もしかして本当にやばい？

やばめ？

おだぶつ？

幼女の体で？

やっぱりこの体、今の僕、実はなにかすごい病気持ちだったりにしていた？

つまりみんなに言っていた病弱ってのは嘘じゃなくなつて？

「ゆりかちゃん！」

「……ひつく、かがりい」

「使えそうなタオルとか洗面器とかいただいてきたから代わるわ！ 私は気道を確保して喉が詰まらないように……血が気管に入りにくいようにするから体を支えてあげて。

ゆつくり、ゆつくりとよ？

横を向いた姿勢にしてあげて！」

「……ひつく」

「……ゆりかちゃん！ このあいだ保健の授業で応急処置、したでしょう？」

「……ぐす……無理だよお」

「……ゆりかちゃんはこつちに来て。ほら、私の腕の下におんなじように差し込んで。

……そう、それでいいの、もう片手もお願い。私は体の方もするから」

「……うん……」

体がぐにぐにと動かされて、明け方に目が覚めたときによく知っているような体勢にさせられている。

あ、ちよつと息が楽になった気がする。

回復体位とか言うやつだっけ？

あれって本当に効果あるんだね。

「……だめだったわ！」

ふすまの音とともにりさの声が飛び込んでくる。

何とか見ようとしてしてみるけどやっぱり目は見えていない。

なんていうかぼんやりしている。

まるでメガネをつけないときみみたいに。

ああそういうえば今の僕になってからはご無沙汰していたけど、目が見えない、じやな



くて近眼ってこういう感じだったっけ。

今じゃ起きてすぐにメガネをしないとかいう習慣がなくなって久しいんだっけ。

そういうえばメガネ、どこにやっちゃったんだっけ。

ヒゲ剃りと同じくらい触ってなかったから忘れちゃったな。

「っ！ ……響さん、ひどい血……」

「それで何がダメだったの？ りさちゃん」

「あ、うん！ なんてかはわからないけど、でも今うちの電話、使えないみたい！」

「……そんなあ、ぐす」

「私のスマホでも電波、圏外になってるのよ！ 電波塔がこの近くにあるから切れたこ

となんてなかったのに！ ……さよさんはどう？ 響さんのスマホ！」

「はい、ようやく指紋が通って……」

電波。

僕のスマホ。

……もしかしてこれって、僕がここに来る前に頼んでいたあの人たちの……。

「……………あつ、通じました！ ……もしもし、響……………さんのご家族の方でしょうか！

私、そのつ、響さんの、友人、で……………はい、響さん、さつき吐血、いえ、そのまま受け身を取らずに倒れまして。 なんとか反応はしているようなので、かろうじて意識はあ

るみたい、なんですけれど、でも、その血の量が……」

作ったばかりの「家族」っていう連絡先。

もしものことを考えて開いておいた画面。

先に救急じゃなくてこつちに繋げてもらえたみたいで良かった。

「……わかりました、このままでいいんですね。……はい、すぐに用意します。はい、では」

「さよちゃん！ 響ちゃんのご家族と連絡取れたのね？ あ、響ちゃんので電波が通じるなら救急車とかも呼ばなくちゃ」

「……要らないそうです」

「え？ でも、こんな」

「……ご家族と病院の方……響さんがこうして外出しているときは、いつもすぐ駆け付けられる状態で待っているんだそうです。だから準備はできている……って」

「……え。 てことは響さんの病気ってやっぱりそんなに悪いものなのよ、ね」

「それは後で……今、神社前の駐車場から車を回してもらって、こちらに直接乗り付けてもらっています」

「……この玄関先、わかるって？」

「はい、ナビですぐに出たそうです」

「そう、ならよかったわ」

「っ！ お医者さんが来るの？ わかった、すぐに響を運ばなきゃ」

「ゆりかさんだめです！」

「……えっ」

「その吐血量だと、肺などの内臓からの出血の可能性が高い……なんです……その体勢にしたのは呼吸を安定させて窒息しないためなので仕方がないんですけど、それ以上動かしなさい。最初に頭も打ちましたし」

「……ごめん、わかった……」

「あ……いえ、ごめんなさい」

「いいのよふたりとも、みんな、怖くって仕方がないのだから」

「そ……それに、ほら！ もうすぐ来るんでしょ響さんの親御さん！ なら、あとちよつとだから！」

体が下から抱きかかえられそうになる感覚と戻される感覚。

体の上でされている、みんなの会話。

……ずっと寝た姿勢になっているからか、ちよつと眠気。

でも眠るわけにはいかない。

そうじゃないと、次に起きたら何ヶ月後になるかもしれないんだから。

「あと必要なものとか、することある？ さよさん」

「……玄関からここまでの道も歩きやすいように。大人2人が広がって、響さんを……ストレッツチャーなどで運んでも障害にならないように、片づけてきてもらえますか」

「いいわ、みんなは忙しそうだし、ちよつと寄せればいいから私ひとりで大丈夫。今やってくる！」

「……お願いします」

## 4 2 話 予定されていた／いなかった、予定（不）調和

## 2 / 6

「響さん……家族の人がついて来ていたのね」

「そうね。 響ちゃんって1度決めたら譲らなそうなもの」

「……くすつ、そうかも」

「ね？ ……ほら、持ち上げるわよ」

片づけついでに僕の「家族」を呼びに行くと言ってぱたぱたと飛び出して行ったらしいりさと、彼女を追いかけて行ったらしいかがりが話す声や、入り口のふすまをがたがたと外す音が聞こえる。

そしてゆりかは……僕の頭を撫でながらぐすぐすつて泣きじやくつていて。

さよは……静かにしているけど、スマホの中……あんまり見ないでほしいなあ。

まあ、そんなことする子じゃないか。

それよりも、さつきまでよりはだいぶ収まって来はしたもののあいかわらずに咳き込んで止められない血が目の前のたらいかなにかにびしゃつと流れる音と鉄臭いにおい。

げほげほつてひととおり吐き終わったら、さつきまでと同じようにゆりかがそつと僕

の口を拭う。

そのの繰り返しがどのくらい続いているんだろう。

時間感覚がまったくわからない。

だけどきつとそんなには経っていないはず。

「……あ。 そうだ……ね、響のスマホ、電波繋がってたでしょ？ 救急車は呼ばなくていいの？」

待つてゆりか、それは必要ないんだ。

「こうなるかもしれないからどうにかならないか」ってお願いしたあの人たちが来るんだ。

だからその必要は。

「……悩むところですけど……ご家族がまもなくいらつしやつて、医師の方も……恐らくは看護の方も、一緒です。 幸いにも今は年が明けたばかりで、通行量もそれほどはありません。 今いらつしやつている車でも、問題ない……かもしれない。 いずれにしても、すぐですから。 ……響さんの病気を詳しく知っていて……あと、事情のあるというご家族にお任せするのが、いちばんかと。 救急を呼ぶとすれば、ご家族や医師の方に任せましょう。 ……なぜかはわかりませんが、響さんのスマホなら電波が入るみたいですから」

「……うん、わかった」

「そうね、響ちゃんがあれだけ言いたがらなかったんだもの。まずはお家の方よね」

「かがりさん……廊下の方は」

「あとほりさちゃん1人で大丈夫そうなの」

よかった。

ふたりのおかげでゆりかがしぶぶつて感じて諦めてくれた様子で。

だけど……やっぱりどうしても意思が伝えられない。

話そうとしても息がつかえそうになって血が出てきそうになって、少しずつ息を落ち着けていくのが精いっぱいだ。

「……だいじよぶ、響？　ねえ、死なないで、響。……私が。……私が、あんなこと……

あんなこと、言ったばかりに……」

話そうとして息苦しくなってそれをむりやりに整えようとしてひゅーひゅーって感じの呼吸になったのが、すぐそばにいたゆりかにはわかってしまったらしい。

「ゆりかちゃんのせいではないわ。ただ……響ちゃんの体が、響ちゃんが思っていた

より……まだ、だったのよ」

「そう、です……お医者様やご家族の方から許可、出ていたんです。……本当に、タイミングとしか……」

じりじりつて、とつても古い感じのチャイムが鳴る。

……ああ、入り口はたしかに古……古風な造りだったしなあ。

その音とともになにかをどきつと落とす音、そして廊下の木をきしませながら走って行く音。

「……来たようですね、響さんのお迎え。よかつた……。ではかがりさん」

「ええ、ゆりかちゃんに支えてもらつていたあいだに響ちゃんの荷物……コートと羽織り物だけだけど、まとめてあるわ。……あ、スマホもポケットに入れておいてあげた

方がいいわね。渡し忘れたら、あとで響ちゃんが困るものね。響ちゃんから大丈夫

だったつていう連絡、すぐに聞けなくなつてしまうから」

「あとで……そう、ですね。明日にでも、きつと」

「ひびきい……」

さよがそう言い終わるくらいから玄関の方が騒がしくなつてきた。

今までのように子供たちが立ってていたものとは違う、大人の足音つていうものが寝かされてる僕の耳にはよく入ってくる。

荒つぽいつて感じじゃないけど単純に体重とかがちがうつて感じで、なんとなく。

「……こつち、こつちです！ 響さんのところ！」

「急にこんな大勢で押しかけて驚かせてしまい。おまけにうちの子が迷惑をかけてし



まっつて。 ……本当に、済まないね」

「いえつ、そんなことありません！」

「だんだんと聞こえてきたりさと——あの人の声。」

「むしろ、勝手に響さんを……こんな夜遅くまで連れ出した私たちが」

「それはあの子が望んだことだから君たちの責任ではないよ。それを言うのなら、ひとり外に出る……まあこうして近くで待つていたわけだが……その許可を出した私たち『家族』にあるんだ」

「でもつ、連絡が遅れて……なんだか電話が急に使えなくなつて」

「そういうのは後にしようか。今は先に……皆の心配の方が先決だ」

イントネーションが微妙にずれていたりする、なんだか昔のドラマみたいな話し方を  
する声。

「連絡をしてくれて助かったんだ。『響』と私たちは君たちのおかげですぐに病院へ行

けるんだよ。遅くなんてない、非常に感謝している」

「……ありがとうございます」

「——失礼。『うちの子』が……つと」

……つい最近に聞いた、電話越しだったら外国の人だとはとても思えない話し方……  
でもやっぱりちよつと堅苦しい言い回しが多い、あの人が目の前に来た……らしい。

だつてぼんやりとしか見えないし、なによりも首を動かすのも難しくつて足元しか見えていないから。

そのシルエツトもりさのと被っているし。

真つ赤な、元までの……ドレスみたいなスカートが。

「……これはまた、かなりのものだねえ。久々、と言つたところか。……すぐに取り

かかれ」

「はっ」

ぶわつと入ってくる……あのとときも少し感じたけど、外国の人がつけているあんまり臭いだことのない香水の匂いが和室になだれ込んでくる。

「くれぐれもお嬢さんたちを怯えさせないように、ゆつくりと。しかし確実に頼む」

「心得ております……それではみなさん、失礼します」

その人が僕をのぞき込んでから立ち上がったと思つたら、周りに男の人たちが集まつてくる気配。

「口元とお体、失礼します、『響様』」

「廊下で載せるまで血が滴らないように、このタオルを下にして……」

「お嬢さん、ここからは私たちが代わります。……はい、ありがとうございます。安

全のために、少し離れていただいてもよろしいでしょうか？」

「あ……はい。あの、響は」

今までの、ゆりかの……僕と大差ない体格の体に支えられていた感覚から、がっしりとしたおとなの男の人の筋肉の感触に変わって。

「私たちは慣れておりますのでどうかご心配なさらずに。……聞こえていらつしやいますか？ 申し訳ありませんが髪の方はまた後ほどに整えますので、今はこのままにいたします——『お嬢様』」

そうしてもぞもぞと僕の……たぶん下が真つ赤になっているだろう血をこれ以上床に垂らしたりしてりさの家の人に迷惑をかけないように、拭っていく感じにしている。

「準備はいいだろうか」

「問題ないはずです。……担架は4人の方がよさそうだな」

「お前たち……あ、いや、先生方。可能な限り揺らすな。あ、いや、揺らさないで気をつけて……くださいな」

「はっ……いえ、わかりました」

体が下からタオルでくるまれてふわつと浮かぶ感覚とともに、またしても聞き慣れた声が出た気がする。

けど動かされたとたんに乗り物酔いみたいな感じのイヤな感覚がこみ上げてきて、耳

を澄ませる余裕も考える余裕もない。

ただただ我慢しながら耐えるしかないだけ。

「……あの、あの！ 響は。 ……響、すぐに。 大丈夫ですよ！ すぐに、よくなり  
ますよね、響の……お母さん？」

「……お母さん、か。 少しばかりの事情もあり、私は実の母親でも……なによりもそう  
いう年でもないのだがね。 どちらかという祖母くらいだろうか」

「え？ ……え、えつと、ごめんなさい」

「いや、構わない。 それで、心配は要らないよ……こんなことになっているから説得力  
はないかもしれないが、本当に大丈夫だ」

「……本当ですか？」

「ああ。 こういうのは今まで数え切れないくらいに見てきたし経験してきたからね。

ここしばらくは落ちついてたのだがね。 ……そして、響と仲良くしてくれるなら

……これからも友人をしてくれるのなら、もしかすると何度も見るかもしれない。 そ  
れが嫌なら」

「嫌じゃないです！」

「……ありがとう」

ふわふわして気持ち悪かったのが、平たいところ……担架とかストレッチャーとか言

う感じのだろうか、それに載せられてしつかりした枕に首と頭を支えてもらってふわふわしなくなつてからか、一気に楽になった。

……それになんだか急に吐き気が治まってきた気もする。

「ふう……」

……咳も血も吐くのが収まったみたい？

よく分からないけどもほつとする。

まだ体は動かないけども。

「私たちこそ、連絡が遅くなつて」

「いや、だから気にすることはないんだ。事情から詳しく言えない以上、人に説明するときはいつもこうなるのが心苦しい限りだが。とにかくこんな有様だが命に関わることはない。処置が終われば、すぐにでも会えるようになるはずだ」

「ほんとですかっ」

「ああ……すぐにな」

「よかつたわね、ゆりかちゃん」

「うん……ぐす」

「ほつ……良かったです……」

「……ま、外出できるくらいだしね。

びつくりはしたけど、親御さん……ごめんなさ

い、ご家族の方がそう言っているんだから、ひと安心よね」

僕の呼吸が落ち着いたからか、こうして医者……の人たちなんだよね……が来たからか、なんか微妙に演技が下手で僕のおばあちゃんってことにしちやつてる「あの人」が目の前にいるからか、ようやくに落ち着き始めたみんなの声。

一方の僕は落ちないようにするためかぐるぐる巻きにされていく。

……息ができるってこんなに楽なんだ。

そんなことを酸欠っぽい頭の中でぼんやり考えながら。

## 4 2 話 予定されていた／いなかった、予定（不）調和

### 3 / 6

「応急処置及び準備……終わりました」

「ご苦労……さまです。すぐに車に乗せてくれ」

「はっ」

「……響様、今から動きます。少々の揺れはご辛抱を」

「玄関を出る際には細心の注意を払……ってくださいね」

「もちろんです」

僕の胸に聴診器を当てたり脈を測るみたいなことしたりいろいろされてしばし、僕は運ばれるらしい。

……でもどうしよ、なんか元気になってきちゃったんだけど。

元気って言っても「死にそうかも」から「死ななそうかも」ってレベルだけでも。

ちよつと頭を動かして「あの人」がみんなと話しているのを……焦点を合わせて見てもぜんぜん平気なくらいにはなってるらしい。

「……………」

「響様……少々待ちますか？」

「……………」

「承知致しました」

なんとなくて、さつきから僕の体を調べていたお医者さんの中で一番偉そうな人にじーつと視線を送って見たらなんか通じたらしい。

まあ体は固定されているから頭を少し向けるくらいだけでも。

大きく動いたとたんにまたげぼってなつちやうかもしれないし、迂闊なことはできないな。

「こちらでよろしいでしょうか」

「……………」

まだ話せないから「ありがと」って念を送っておく。

届くかは知らない。

「さて、響の友人たち。こんな騒ぎを起こしてしまい、また、心配をかけてしまつて済まなかつたね」

「い、いえ、当然のことをしたまでで」

「そしてすぐに連絡を『彼』の携帯から取ってくれて本当に助かった。けれど——」  
話が尻すぼみになり、さつきまでいた部屋を見回しているらしいあの人。



あ——……いろいろと大変なことになってるだろうなあ……だってこうして全身が血にまみれるくらいなんだから、僕がいたところとか介抱してくれたみんなの服とかも真っ赤なんだろう。

畳は張り替えてやつだろうし、こたつは……上に乗ってる布団を替えるだけで済むならいいけど、なよりの問題はみんなの服。

巫女ペアはともかくかがりたちは振り袖っていうやつだからなあ。

いったいどのくらいになるのか見当がつかない。

ああ言うのって何十万とかするんじゃない？

あ、でもレンタルなら……レンタルでもダメにしたら弁償か。

……魔法さんのことが分かってすぐに銀行行ってみてお金が使えるって分かって良かった。

金額が金額だし、早く返さないとみんな困っちゃうだろうし。

「……あ——……部屋も酷いが」

惨状を改めて見ただろうあの人が、ため息とともに。

「そんなにすばらしい一張羅が。 大変に申し訳ない」

「いえつ、急病ですから」

「そ、そーですよ、響のためですもん！」

「あ、うちのことならいいです。畳なんてどうせ余ってますし、毛布とかも洗濯機である程度落ちるでしょうし」

「……あの、この服、巫女の服は……」

「バイトの人に支給するものだし、たかが知れているわよ。普通の服程度だし袴は真つ赤だから上だけで済むかもね」

「気遣いは有り難いことだが、こういうものはきちんとしなければな。……おい」

「は、( )に」

「とりあえずは……そうだな。 3、いや、4だ」

「はっ」

「あの人」、でかいおばさんまたはおばあさんにずーっと付き添っていた、さらに年配な人がごそつと取り出したのは、紙袋に入った四角い4つの何か。

……え？

いや、ないよね？

いやいや、日常でそんなものがすぐに出てくるなんてあり得ないでしょ？

「これで足りると良いが」

めこつと、鈍い音が畳を凹ませる。

巫女りんは渡されたらしいその紙袋の中身とあの人の顔……あ、ちゃんとお化粧して

隠している……を交互に見て、僕とおんなじ結論に至つたらしい。

さつきまでの影響で顔が真っ赤になる巫女りん。

「えっ……あ、あの、これって……え？」

「りさりんなにそれなにそれ……え、金？ 延べ棒？ ほえー」

「あ、あのっ、こんなもの！」

「私には相場がわからないのだがね、タタミやキモノといったものは高価なものなのだろう」

「い、いえ……あ、2人の着物はそうかもですけど、でも！」

「それと迷惑をかけた分だ。みなで分けてもらいたい。なにせ血だからな、しかも吸い込んでいるとあつて完全に戻すのは難しいだろう」

「え、えと」

みんなより頭2つ分くらい背の高いその人は、ポケットからあのとときのように紙を取り出してあのとときのように鉛筆でさらさらとなにかを書く。

たぶんあの、ちよつと読みづらい数字だけを。

「これでも足りなければ、ここへ連絡してくれ。いくらでも払うからね。『うちの子』のせいだから」

「でも！ ……こんなの、いえ………こんな大金………お金なんですよねこれ、受け取れませんっ

！」

「しかしキモノは」

「これはレンタルですし、そこまでのグレードのものではありません。ね、ゆりかちゃん？」

「う、うん……」

「家だつて古い家ですからこうやって畳とか襖がダメになることくらいよくあります！だから」

「……それならば部屋については同等のものに買換える分。そちらのキモノについては君たちが困らない形で弁償もして、それでも余ったら返してもらえば良いよ」

「でも……」

「頼むからそれくらいはさせてくれないか？ ……あの子のことをよく知っている君たちなら分かるだろう、これだけの事態を起こしておいてとりあえずでの金すら払わないとしたら、そもそもあの子自身が気に病んでしまう。何、使い切らない分は後で返してくれたら良いんだ」

あ、今僕のことダシにした？

いや、僕が助けてもらつてるんだけども。

「……たしかに響ちゃんなら……」

「そうです……ね……」

「失礼しました、紙幣の方向に合いました」

「む、そうか。それなら換金する手間が無い分こちらの方が扱いやすいだろう」

めこつと置かれていた紙袋と交換するように……多分札束が入っている袋。

「今後を願ってくれるなら、うの子が気兼ねなく君たちに会えるようにと想ってくれるのなら。ぜひ、後顧の憂いがないように……だったかな、遠慮せずにそれを使ってほしい」

「……分かりました。それではこのお金、私たちがお預かりします。……早く響さ

んの治療を……」

あ、口に何か被せられてる……いつの間に。

しゅーしゅー言ってるし、酸素マスク的なやつ？

「響さんの容態が回復したら、連絡、待っていると伝えてもらえますか？」

「承知した」

「また無理しそうなので病室でお見舞いしても平気なくらいになってからで構いません。でも、お願いします」

「……1週間もあればかなり落ちつくとは思いますがね。わかった、必ずあの子から直接連絡させよう。……それではこれで失礼させていただきます。ああ、ご両親にも使いを

やっている……失礼、連絡はしたよ。なにしろジンジャの仕事で忙しそうだからね、あらかしと心配は不要とだけお伝えしてある。……しまったな、金も直接彼らに渡すべきだった」

「……大丈夫です、ちゃんと渡しますから」

「そうか、悪いね」

「ではよろしいですか？」

「うん、連れて行ってくれ」

「では動かします、響様」

これもまたいつの間にか調べられていたいろいろが外されて服を整えられていて、ふわっと毛布を掛けられたかと思っただけならすぐに玄関を出て、とたんに外の寒さが伝わってくる。

すつこく寒い。

乾いてない血が余計に冷える。

「ああ、見送りはここままで結構だよ。後片付けや……今は忙しいだろうご家族への、今の事態の詳しいご説明。それに君たちの着替えもあるだろうに……私たちが直接にお手伝いできないのが悔やまれるが、これも事情というもので、どうか勘弁願いたい。……またこれも家の事情というやつで、車もちよつと特殊だね。できるならあまり

近くで見てももらいたくないのだよ……なにもかも秘密にせねばならず重ね重ね申し訳ない」

「……いいえ、響ちゃんのことですから慣れています」

「そうか、悪いね」

「大丈夫……ですから。 ……響、ちゃんが、無事ならっ……」

「……かがり、さん」

「ねえ、ゆりかあ。 ……響さんが、響さんがあ。 あんなにたくさん……っ」

「大丈夫だよりさりん、きつと大丈夫なんだよ……」

「………では失礼するよ。 ……出発してくれ」

そこまで聞こえてぱたりとドアが閉まって僕はみんなから隔離され、暖房が効いていて少し不思議な香りのする車の中に取り残された。

## 4 2 話 予定されていた／いなかった、予定（不）調和 4 / 6

リムジンって現実に存在したんだ……もちろんバスじゃない方の。

細長い、真つ黒だったり真つ白だったりするあれのこと。

この年になって初めて実際に目にした。

というか今僕自身が乗ってるしな。

映画の中とかの架空の世界のものだと思っていたんだけど、こうして実際に乗っている以上には信じないわけにはいかない。

こんなに狭い道ばかりの国でよく乗るよね。

大通りじやなきや曲がれなきそう。

高級感なんだろう、押し返してくる感じのクッション性のある革張りな車内から「世界は広いなあ」とか「お金つてあるところにはあるんだよね」って思う。

大人でも8人くらいは対面で座れそうな感じの広々とした後部座席のような空間。

しかも僕がさつきまで載せられていた脚つきの担架みたいなものがトランクに収まっているあたり、この車が……リムジンっていう存在がどれだけ長細いのがわか



る。

その中に、運転手さんと助手席の人を除くと僕以外には1人だけ、夏のあの山で会ったときから変わらない姿のあの人しか乗っていないっていうのはなんだか贅沢な気がする。

まだまだぼーっとしていたけど少しずつ体の力が……あたたかさが戻って来て力が湧いてくるようになってきた。

背もたれとドアにもたれかる感じになっていた僕は、少しずつ体を起こしてみる。

……うん、もう自分で体を起こしても、なんともない。

気持ち悪くもなんとも。

不思議。

「……………あの」

「……………うん？ もう大丈夫なのかな？ ずいぶんと早いようだが」

「はい。 まずはお礼をと……助けていたいただいてありがとうございます」

頭を下げた僕をしばらく見ていたらしいその人がぼつりと言う。

「本当に……本当に大丈夫なんだね？ 無理をしているとか」

「？ いえ、別に……ほら、こうして」

「……………そうか」

腕を適当にぷらぷらして見るけどあんまり見てくれない。

まあ心配するよね……あれだけ血まみれになってたんだもん。

と言うか服が台無しって言う段階をはるかに過ぎている気がするし。

あ、こんな服で革張りの高級車に乗っちゃって良かったんだらうか。

そう思つて慌ててお尻の下を見たらタオルが何枚も重ねてあつて、さらに言えばそれに吸い込まれている血の量は大したことないみたい。

「……ほっ」

車の革の張り替えとかどれだけお金かかるか分からないから安心した。

でも不思議なくらいに平気だ……もうあのときみたいにえすいたりこみ上げてくる感じつていうものがもうなくなっている。

こうなつたときみたいにいきなり治つたらしい……ほんとなんでだ。

「私たちはすべて分かっている。無理はせずとも構わないよ」  
すべて？

……ああ、みんなに心配かけないようにつて言うやつか。

「改めてありがとうございます。あなたたちのおかげで……病院のこととか友人への説明とか、それも僕があんなことになって動けない状態で、あの子たちの心配をこれ以上させない形で僕を連れ出してきて。あの、話すことすらできない状態で困ること

がなくて本当に助かりました」

けどここからどうやって帰ろう。

まあこの体だと大変だけど歩くしかないよなあ……タクシーとかは血まみれで乗れないし。

いや、コートを羽織って隠せばいけるか。

「服はそこだよ」

そんなことを思っていたら指を差され、見てみるとさつきまで枕にしていたのは今日着て来たコートやパーカーとかマフラーに靴……さらにはぱつと見ても僕のサイズに合っていないそうな……たぶん新品の服。

……え？

僕のサイズの服？

どうしてこんなの用意してあるの？

いやまあ助かるけどさ。

「こうなることがわかっていたかのように」用意が細かすぎる気がするけど……担架とかたたくさんのタオルとかを積んでいるあたり、家族の人とかに病氣の人がいたりするのもかもしれないし、なによりなんだかすごく手慣れている感じだったし……深くは聞かないでおこう、今日の僕は助けてもらった立場なんだし。

「このくらいはなんともないさ。君がしてくれたことに比べたら、な」  
「?」……ああ、あのときの。いえ、ですから僕は本当に」

彼女は、ばさつと脚を組み替えて腕を突き出し、僕が言おうとすることを遮ってくる。  
「君があのとときに気づかせてくれたおかげで、長年悩んでいたものが嘘のように解決したんだよ。なにしろ過剰なくらいの化粧をしたおかげで仲良くしたかった子供たちから怖がられるのが……見られただけで泣き出す子までいたのに今では懐いてくれている。……いやまったく、いい歳にもなってきたし化粧はいいかと止めていたのが……まあもともと好きでもなかったのだが……最低限にしていたのが何だったのかと言うほどだ」

それは良かったんだけど……顔のケガの跡くらいでそこまで言う?

大げさじゃない?

そうは思うけど、あのときのお礼でここまでしてもらえてるんだから甘えておこうつと。

「今はここにいないが奴も……連れ合いの眼帯の爺、奴も同じように喜んでいた。まずは彼のぶんももういちど礼を言っておこう」

「いえ、僕も今日こうして助けていただきましたし」

頭を下げるしぐさをしそうだったから、あわてて遮っておく。

「ふむ。 そういうことならこの話は仕舞いにしておこうか。 ……で、だ」

ふうつと息をついて煙草を取り出したけど僕を見てしまい直した彼女が訊ねてくる。

「その様子で判りはするが……どうかな、体は」

「あ、はい、まだ少しだるいですけど大丈夫です」

「それはよかった。 私の見立てでも……詳しいことは後で話すとしても君の体はどこも傷ついたりしてはいないようだ」

ええ？

「先ほど君を運んだ者の中に軽く全身をチェックしてきた医者がいただろう？ あれから聞いた限りでは直ちに問題のある損傷は見受けられないとのことだ」

「はあ」

あー、でも1回は病院で診てもらわないとかなあ……だってあれだけ血を吐いたんだし。

人間ドックとか、そろそろ受け始めようかなって思ってたしちやうど良いかも。

……あ、でも検査项目的に前の僕じゃなくて今の僕として受けた方が良いのかな。

「そして吐血は君自身のものではなく」

リムジンって映画とかでみる感じにテーブルあるんだね。

そう思っていた高そうなテーブルの上に手を突いてぐいつと身を乗り出してくる。

「君自身は……あれだけの血を失っていたとしたらまず動けないはずだ。しかし家の者が問題ないと判断したし、実際にそうして顔色も戻っているしな。……推測するに、吐瀉物はただの反射で胃から出てきてしまっただけのもの。その嘔吐からまた『君自身のものではない吐血』につながっていた……のだと考えているのだが、どうかね？」

何言ってるんだろうこの人……あんな血、胃から出るわけないじゃん。

いや、胃潰瘍とかならなるのかな。

……ああ違う、この人は大事にしないようにしてくれてるんだ。

だって普通の人ならあのときの僕を見たら救急車呼ぶし。

呼ばないでって言っても呼ぶに決まってるからやっぱ気を遣ってくれてるんだろう。

普通の人ならそういうのはしないだろうけどこの人たちは外国人だ、内々に済ませたといっていのを汲んでくれた違いない。

まあ元旦だし病院混んでるだろうし……どうせあの血も魔法さんがくしゃみしたとかそういうのだろうし、きつと大丈夫だろう。

念のためにまた具合悪くなったら今度こそ病院だけでも、僕には魔法さんっていう元凶が居るだろうって言う確信がある。

「ああそうだ、口の中も気持ちが悪いだろう。これを飲むといい。ちようどいい温度になっているはずだ」

「あ、どうも」

いつの間にかテーブルに置かれていたカップに手を伸ばす。

少し嗅いでから飲んでみたらなにかしらのハーブティー。

飲んだことはあるんだけど銘柄なんて覚えていない。

でも多分かがりに連れられて行ったどこかで飲んだはず。

……みんな今ごろ片付けとか、りさりんのお家の人への説明とで大変だろうなあ。

だつてあそこは血まみれだし……吐いたんだからきつと、さつきまで食べていたものが混じっているっていうひどい有様だろうし。

すつごい迷惑かけちゃったなあ……元気になつたらお詫びに行かなきゃ。

こんなことになるって知ってたら行かなかつたのにね。

……いや、話の流れで性別のことについては説明できたんだ。

たつたのひとつだけだけど、でも僕の嘘について魔法さんの介入なしに言えたつていうのは……いやいややっぱりかけた迷惑がすさまじいだけに……うーん。

「……んく……さっぱりしました」

「よかつた。……しつこくて申し訳ないが改めてどうかね、体の方は」

「はい、どこも痛くはないですし気持ち悪くもなくて……さつきみたいになりそうな気配もありません」

「うむ、元に戻ったようだなによりだな。いくら体に影響がなかったとしても間違つて気管の方に流れていたりでもしたら今ごろはこうしてのんびりと話してなんかいられなかっただろうしな。分かっていて君の回復を待っていたのもある——しかしこの前は驚いたよ。ずいぶんと時間が経ってしまったから私たちのことを忘れていたと思っていた君から、連絡が届いた先日にはね」



## 4 2 話 予定されていた／いなかった、予定（不）調和

## 5 / 6

「そのままだと気持ちも悪いだろうから、シャツとズボンだけでも替えたらいい。安心してくれ、この場には私しか居ない」

「あ、はい」

多分「服に染みこんだ血が天然のお高い革についたら弁償だからね？」って言ってる気がして素直に従ってもぞもぞと脱ぎ出す。

「……タオルで隠したほうがいいかい？」

「いえ、別にいいです」

そういえば今のご時世いろいろ大変だしね、こう言うの……特に外国の方ですごいらしいし、知り合いとは言っても会ったのは2回目だし。

そんな相手の幼女な見た目の僕が着替えるって言うから肉体的には同性のはずのおばあさん……悪いからおばさんにしとこ……おばさんも予防線を張つたらしい。

まあ同性なわけだし相手はおばさんだしで特に意識することもないしで、さつさと血まみれの服を脱いで、まだ折り目がついている服を着て。

「ふう」

すつごくきさっぱりした。

サイズはちよつと大きいけど、でもさつきまでみたいに張り付いてきたりしないし、なによりもちよつと漂っていたイヤな感じの臭いがだいぶ薄れたからすつごく快適。

濡れたあとのなんとも言えない感覚と、なによりも普段から肉々しくて憎々しいお肉とか苦手な僕にとってはあの生臭さがちよつとつらくなっていたから、本当にありがたいこと。

「……本当に平気なんだね」

「はい、まあ」

ぱんつまで真つ赤になっていたのを見られたけどしょうがない。

しいて言えば夜で人通りはないとは言っても外で一回全部脱ぐ方にどきどきしたくらいだ。

帰つたらすぐにお風呂入る。

……しつかし血まみれになってぎすぎすしてべとべとしてるこの髪の毛、ほんとうしたらいいんだろ……お風呂につけていたらふやけて流れるかな？

いやでもお湯が真つ赤になったりするんじゃないかな。

血のお風呂。

まあ今日はしょうがない。

「ところで着ていた服はどうするかね？ よろしければこちらで処分するが」

「はい、特に思い入れもない普通の服……あ、いえ、やっぱり持ち帰ります」

「そうかね」

どうせもうすぐで家まで送ってもらうんだし、そこまで迷惑かけられないし。

「先ほどと比べると幾分楽になった様子だし……話を戻してもいいかい？」

「？ はい」

えっと、何の話だっけ……ああ、この人に連絡を取ったときのことだっけ。

「私たちは、てつきりだな。……もうずいぶんと連絡をもらえなかったものだから

すっかり忘れられてしまつて残念だと話し合つていたのだよ。なにしろ念願の子供

たちとの戯れが可能になったのだからな、それはもう嬉しくてね。だからこそ君に対

する恩義を強く感じていた」

「そうですか」

普段はちよつと怖い感じの声音なこの人も、そういう話になると急に声のトーンが上がつて……やっぱり女の人だなあ、がらつと変わるのつて。

あいかわらずの口調とかイントネーションはちよつと大変だけど聞き取りにくいとかはないし。

「ああ済まない、こちらから話をずらしてしまつて。で、だな。君から連絡があり、なにか起きたのかと思えば……初めの印象どおりの大人びた挨拶もそこそこに『これから君自身になにかが起きるかもしれない、それも外出先で。だから、もし次に連絡したら騒ぎを大きくしない手伝いをしてほしい』とはね」

冬眠まで起きるし、外でも起きそうになつたのはねこみみ病ペアとあつたときで分かつていた僕。

でもゆりかたちちに大みそかの今日……昨日になるのか、に集まるって言われていて。行きたかつたし嘘を少しでも言いたかつたけどもやっぱり魔法さんの機嫌次第じゃどうなるのか分からない不安があつた。

だからたまたまに見つけたあのときの電話番号に連絡したんだ。

あの日に来ていた上着のポケットに入れてばなしだった、あの番号に。外国らしく癖の強い数字だけが並んでいたそれに。

「本当に助かりました」

「いや何、私たちもこういうのには慣れてるしな」  
慣れてるんだ。

そんな感じしたなあ……やけに手際が良いって言うか。

「事情を抱えている者特有のぼやかしたような話し方にも理解がある。問題ないさ」

事情？

何の？

まあいいや、こつちに都合のいい勘違いしてくれてるなら。

実際に魔法さんっていう事情持ちだから嘘ついたわけじゃないし。

おまけに実際にかんりのことになっちゃったんだし。

「こうなる」とは分かっていたんだね？」

「あ、いえ、はつきりとは……少しは予測していましたが、ここまでの大事になるとは思ってもいなかったのよ」

いきなり血をげげげ吐くなんて想像できないよね。

けどまさかあんなときの紙切れがこんなに役に立つだなんて本当、人生何があるかわかったもんじゃないなあ。

今までも……そしてこれからはさらにもっと。

だって魔法さんで幼女だもんな。

この体になってまだ1年も経っていないのにこれだもんな、これから先どうなるのかさっぱり。

「今回の我々は君の役に立てたかね？」

「はい、もちろんです」

「あなたたちの顔が怖いから子供が怯えるんですよ、とりあえずお化粧とかしててください」って言っただけだったのにまさかここまでしてくれるなんてなあ……ありがたい限り。

しかもてつきり部下の人とかを何人かくらい連れて来てくれるのかなって口ぶりだったのに、実際にはお医者さんとかまで用意してくれてただなんて……いくらかかったんだろう。

……ここから「じゃあ手間賃も含めてびつくりするくらいの値段払って？」って言わないよね……？

一応子供に見えるはずだし、そんな危ない人たちみたいなのは真似しないよね？

しないよね？

信じるよ？

「しかしまだまだこれだけでは返し切れていないからな、これからも遠慮なく頼ってくれ」

む。

つまりりさりんに渡したお金以外はチャラってことでいいの？

いいんだね？

「君の忠言……ではなく忠告……アドバイスのおかげで我々の生活はこのところ天国

のようなんだ」

「そうですか」

お年寄りには物事を過剰に捕らえるフシがあるってどこかで読んだことがあるけど、この人たちもそうなんだろう。

あと単純に会社の偉い人たちみたいだからたくさんの人を使うのも「大したことない」って思ってるんだろう。

「関係のない、しかし観察力のある第三者からの意見。しかもその対象と同年代のサンプル……同じ目線からの感想というものは」

今サンプルって言った？

「ときに有用であり、だからこそ価値があるのだよ。君なら知っていると思うが、世の中にはコンサルタントやアドバイザーという仕事が存在している。なぜ彼らは必要とされているか？ 特殊な知識と外部からの視点というものを備えているからだ。」

私たちだけでは発想できない不可能を可能にしてくれるからだ。ともかくはそういうことだ、どうか納得してくれないか？」

「それで……分かりました」

助けてもらった身だし特段反対する理由もないからそれで納得したフリをしておく。

あ、でもさっさとお金のことは言つとかないと。

いくら渡したのかは分からないけど……掛かった分は払わなくちゃね。こういうのって後になるほどもやってするものだし。

「……済みません、さっきのお金ですけど」

「なに、それもまた気にすることはない」

「え、いえ、そういうわけには」

「私たちにとっては端金……言い方は悪いが、その程度のもだからね。ほんの小遣い程度なんだよ」

ええ……あの、金塊つぼいのか最初渡そうってしてなかった？

さすがにお札に替えたのまで見たけど、でもそれだって相応の金額ってことで……それはさすがにおかしいよ。

赤の他人が「この支払いは任せて！」とか言うレベルのお金じゃない。

いくらなんでも社長さんとかだって金銭感覚おかしいもん。

「そんなわけにはいきません」

金額次第じゃATMだと引き出せないし、銀行は休み。

三が日が明け次第、すぐにでも返さないとんだ。

だって……さすがにこれだけの金額、払ってもらっておしまいとかだと……その、怖いもん。



僕をこうして助けてるのに何かあるんじゃないかって思っちゃうでしょ？

「……ふむ、着いたな。この話の続きは降りてからでいいかね？」

「あ、はい」

金額を聞き出してないけどとりあえず着いたんなら……って、あれ。

着いた。

——どこに。

つつつと背中に……急に湧き出た汗がぞくぞくさせてくる。

「……すみません。どこへ送っていただきたいかって」

リムジンに乗り込んだばかりのときはそんな状態じゃなくて、体起こせるようになってからは話したり着替えたりしてたからつい、家の住所とかその近くの適当なところとかっていうのを。

「ああ、聞いていないね」

へ？

どういうこと？

びつくりして顔を見上げてみると、ただ笑っているだけのおばさん。

——車は止まっている。

夜だから暗くてよくわからないけど、でも少なくともふつうの駅前とかじゃなくて

……あ、いや、もう電車もバスも動いていないのか。

じゃあ——（ここ、どこ）？

僕はどこに連れて来られたの？

「着いて来て欲しい場所があるのだがね」

「あの、僕はこのまま家へ」

「いや、そういう訳にはいかないね。 済まないが」

え？

そういうわけにはいかない？

済まない？

なんで？

騙して済まない？

僕の頭はぐるぐるして思考能力を失う。

「頼む……おとなしく来てくれないかね？ なにしろ、ここは」

静かに外から開けられたドアからは、夜の暗がりの中……なにかしらの建物がぼんやりと見える。

そして……1回だけなのに特徴的すぎて忘れられない、おばさんと一緒に居た人の声が聞こえてくる。

降ってくる。

「久しいな。 息災……とは行かなかつたようだが」

「あ、どうも」

かつんつてこの前みたいに杖を地面に当てながら彼が言う。

「我々の息のかかつた施設でね」

「施設」

「ああいや、病院、病院だとも。 もつとも、君がよく知るものとは少しばかり違うかも

しれないが」

病院。

僕がよく知るのとは違う病院。

どんな？

「ここでしばしのあいだ……そうだな、短くて1週間、長くてひと月くらいだろうか。

君には私たちの世話になって欲しいのだがね」

「いえ、その、僕はただ家に」

「もちろん強制ではないのだがね？ ぜひこの場で承諾して欲しい」

「……え——……」

今さら気づいた。

あ、これなんかやばい。  
すつごくやばいかも。

「必要なら保護者の方々への連絡もしてもらっても構わない。君の行動を制限することはないと誓う。もちろん電話してもらって構わない」

……僕を誘拐とかしようってするならまずスマホ取り上げてぐるぐる巻きにするよね。

でも実際にはそうされていない。

……怖いけど今すぐに煮たり焼いたりするわけじゃないって思っているのかな。頭の中がお酒を呑みすぎたときみたいに冷たくなる。

血の気が引いている。

脚が少し震えている。

指先が凍りそうに冷たい。

……海外とかで絶対に人目の着かないところに行かないようにしてあるよね。

今の僕はそれを破って、のこのこと着いて行っちゃった感じなんだ。

「なんなら私が代わりに説明と説得をさせてもらってもいいのだがね……とにかく今から案内するところへ来てもらい、滞在してもらいたいのだよ」

……怒らせちゃまずい。

この人たちが悪い人たちかどうか分からない以上機嫌を損ねることは避けないと。

「それに、ここは君の家から……先の家からは真逆の方向だな。車で少々と離れているし、帰ろうとするとまた時間もかかる。……それならばこちらでシャワーなども浴びてからの方がいいのではないかね？」

自分の家か病院の救急外来の方が安心できます。

なんて絶対に言えない雰囲気。

「夜も遅い。ひと晩ぐつすりと寝てもらつてから明日にでも……さっきの金のことも含めてゆつくりと話し合おうじゃないか？ なあ？」

あ、お金については……あの、ひと晩で何割とか着かないよね？

いくらなんでもこんなに子供に見える僕に……あ、僕の、いるはずの親とかにせびるならできるのか。

……身代金誘拐。

そんな物騒な言葉が思い浮かぶ。

「ふむ。 そうだな、このまま帰してしまうのも忍びないしもう」

いえ、僕はそうしたいんです。

でもあなたたちが今さら怖くなってきたので言えないだけなんです。

誰か助けて。

「できれば君には……君自身から来てもらいたいのだがね」

「NOって言わないでほしいな、めんどくさいから」ってことだね。

心配を感じて振り向いてみれば、真顔になっているおばさん。

怖いから止めて……。

でも今の状況はどうしようもなくなっている。

「はい」か「YES」しか答えられないんだ。

……しかも……何でか分からないんだけど、とつても眠くなってきた。

昼間に昼寝しておいてもさすがに深夜だしな。

……それとも、さつき無警戒で飲んじやったお茶。

脳みその奥から痺れてくるような感覚が襲ってくるのが分かる僕には……うなずかないっていう選択肢はなかった。

## 43話 「魔法」と「変異」と、そして 1/6

よく考えたらちよつとしたことで「ものすごい恩だからぜひ返させてほしい」って付きまとわれるのって事件に巻き込まれるときの鉄板だよな。

何人もの大人……それも明らかに外人で体格が良すぎる人たちに囲まれるようにしてドナドナされている僕は、そんなことを今さらながらに思いながら絶望していた。

けどもいざ建物に入ったら拍子抜け。

ここ、本当にただの病院じゃん……なんか考えすぎた？

よく考えたら別に強制じゃ無いもんな。

おじいさん……じゃなくておじさんもおばさんも、別に僕の手を掴んだり他の人たちが僕を連行されるエイリアンみたいにはしなくてそばを歩いているだけだし。

何かこの人たちが見た目からして怖いし強引だから怖かったけど、その辺は故郷の国では普通なのかもしれない。

そう思いながらリノリウムって言うんだっけ、独特な廊下を歩く僕たち。

そう思わないと怖くってしようがないってのもある。

……暗い廊下の先までを眺めるついでにそつと見上げた先の2人を見て、改めて思

う。

夏休み明け以来に会ってもやっぱり怖いっていう印象のふたり。

頬のケガがあるおばさんと眼帯のおじさん。

おばさんも今はお化粧と髪の毛で隠しているみたいだし、おじさんの眼帯もケガしたみたいなの白いになっていて威圧感が薄れている。

少し、ほんの少しだけはぼつと見の威容が軽減されている感じ。

けどあいかわらずに大きいよなあふたりとも……2メートルは超えてるしなあ。

こつこつこつこつとひたすら歩くばかりなのは怖いから「怒らないよね」って信じつつ沈黙を破ってみる。

「……あの。病院、ですよね？　ここ。あの、僕は」

「快諾してくれて、そしてこうして着いて来てくれて助かるよ」

いえ、ただただあなたたちがとつても怖いから抵抗しないだけなんです。

ほら、人質とかにされたときはおとなしく言うこと聞くっていうあれなんです。

とは言えないひ弱な僕。

「ああ、疲れてきたら言ってくれ。車椅子にでも乗せてあげよう」

いえ、さっさと僕帰りたいんです。

でもあなたたちが怖すぎて言い出せないんです。



「それでだな。ここは何の変哲もない、本当に何もなかったあの病院というものだよ。君の端末で検索すれば名前も出て来るはずだ。ほら、その案内板を見てもらえばわかると思うが」

と、ちよつと先の壁に掛かっている周辺地図を杖で指してくれるおじいさん。

……なるほどね。

大雑把にどの辺かつてのは分かった。

ちよつと安心する僕。

「うむ。故あつて遠回りしてきたから距離に比してかなり遠く感じただろうが、実際には先ほどのお宅からはさほど離れてはいないのだよ」

「そうですか」

なんでそんなことしたんですか。

それじゃまるで警察を撒くみたいな感じじゃないですか。

悪いことしてるんですか？

なんて言えない。

「規模も……まあ中の上という程度だな。評判も悪くはなく、そう……大きな施術もできる程度の、な」

僕、内臓とか取られちゃうんだろうか。

映画とか漫画とかじゃ病院って怖いところだよな。

どうしても怖いイメージがぐるぐるしちゃうよね……。

明かりがほとんどついていなくって、ついていても薄暗い緑だったり赤だったりして。

どんな音でもいちいち不気味に反響する病院の廊下っていう長細いところ。

こうしていると、なんとなくで押されて来てしまった……あのときもそうだった、僕とは縁がないから慣れていなくって不安で……叫び声が反響していた病室を思い出させる。

父さんと母さんのときを思い出させる、あの空間。

大きな事故の後で傷ついた人とか動かなくなった人の家族で大変なことになっていたあの空間。

「……大丈夫かね？」

「あ、はい」

大丈夫じゃないけど怒らせないように。

「不安なことがあるれば何でも言ってもほしい」

……どうしよ。

言う？

言うの？

でも怒らせたなら……いや、ここまで来ちやったらどっちにしろ何かされるならもう手遅れだ。

なら意思表示しておこう。

今のところ怖いだけだもんな、この人たち。

「……ここまで。騒ぎにならないようにしていただけたのには感謝しています」

「なに、たったこれだけのことだ。気にするなと」

「でも」

じつと……見下ろされる感じになっているけどそれはもうどうしようもない。

上から視線が来るのって怖い。

それは諦めるとして、でも言わないと。

じゃないと普通の僕みたいに流されちゃうだけだから。

「僕があのおきをお願いしたのは……友人のところから、なにかがあったときになるべく騒ぎにならないように穏便に助け出してもらおうことだけで。あれだけのお金とかたくさんの人たちとかまでは……あと、ここ。病院まで送ってもらおうことまでは……」

その、後で行きますから」

しどろもどろになって来ちやっただけども言いたいことを言ってみた。

「たしかにそうだね。　そこまでしか言われておらん」

「うむ、そうらしいな」

でも、2人は「あ、そう……」くらいの反応。

僕はちよつとめげそうになる。

「……そうなんです。　病院についてはあの血の量を見たら仕方ないかもしれませんですけど」

訳アリつてことで救急車に押し込まれなくて安心してるけど、でも。

「……あんな大金は、やっぱりいくらなんでも僕が困ります。　三が日が終わったらすぐにお返ししたいので口座とか」

「ところで響くん」

「あ、はい」

「ちよつとこちらへ来てくれないかね？」

「え？　あ、はい」

なんか遮られて……怒ってる感じじゃないからほつとするけど、僕の中でふとした疑問が浮かぶ。

あれ？

そういえば僕、名前とかこの人たちに名乗ったっけ？

あとあのとき僕女の子だつて言つた気がするんだけど……最近の記憶と混じつたかな。

それから2人はあんまり答えてくれなくなつちやつて、けど、おばさんが先導して僕が後ろに、さらにその後ろにおじさんっていう囲まれた感じがしなくもない状態のまま、おじさんの杖がカツンカツンと廊下の先にまで響き続けるのを聞きながら歩くことしばらく。

遠く廊下の先にまで飛んでいった音が跳ね返ってくるから、なんだか不気味さが増してきた。

帰りたい。

だめ？

だめっばい。

おじさんの後に続いている人たちが減つたけど、それでも何人分の足音がうるさいくらいに増幅されている。

初めは怖かつたけど何分か歩いて慣れて来た感じの音を聞きながら「思つたよりも病院つて広いんだなー」なんてあたりまえなことを思いつつ、だんだんと僕が知っている病院つていう感じの待合室とかが出てきて、でもそこも真つ暗に近くつて余計に気味が悪くつて。

「あー、僕たち裏口っぽいところからぐるつと正面口っぽいところに来たんだなあ」って思つて。

そうして案内された先は。

「えつと……ここつて、診察室……いえ、検査とかするところでしょうか」

ドラマとかでしか見たことがない大きな機械とかがある、手術室にも似た印象の広い部屋に通された。

「ああ、そうだよ。そういう認識で構わない」

「いえ、ですから僕はこういうのは」

「これは要らぬ世話なのだ、今この瞬間ももちろん思っているし君の体に何も無いのだらうとは半ば以上に確信しているのだがね」

あのスプラッターぶりを見てそう言い切れるのつてすごい。

外国の人つて頑丈そうでもんね。

……さすがに何か違うつて分かつてるけど、ほら、僕逆らえないから。

「あれだけの反動というものを目にしてしまったからには見過ごすわけには行かないんだ」

反動？

なにそれ？

「念のため。あくまで念のために。そして君の安全と私たちの安心のため、ここで一通りの検査というものを受けてもらいたいのだよ。病院で経過の不明な怪我をしている患者にする、ごく普通の検査……MRIだとかエコーだとかね。そのくらいなら良いのだろうか？」

何が良いのかはさっぱり……だけどとりあえずひどいコトされるわけじゃなさそう。

そうだといいな。

そうだって信じてる。

この人たちもなんか訳アリ……外国人だもんね、ただの偏見だけでも……だからこそ訳アリ仲間っぽい僕のことちよつとだけ面倒見ようって思ってくれてるだけだって思いたい。

切り刻まれたりしないでね？

そのへんに注射器とかたくさん置いてあるのも見ないフリ。

「なに、隅から隅までというわけではないさ、せいぜいが人間ドックくらいだよ……

ああ、君の歳ではまだまだそういうものとは縁がないか」

「そうですね」

「安心するといい、君」

安心しようって努力してます。

おじさんがしゃがんで来て頭をぽんってしてくれているけれどその手までが大きいもんだから、それに眼帯って前みたいなおつきい黒光りなものじゃなくなっているっていつてもやつぱり怖いっていうのもあって、ぜんぜん安心できないけども。

「今から君を診る人員……スタッフはすべて我々の息がかかったものだけだ。一般の者ではないからたとえ何があってもその情報を漏らしたりはしない。なにしろ我々の——口外できない事情をその身に宿しているか、あるいは知っているか、その身内で固めているのでな。大丈夫、情報は外には漏れない。いわば血の結束。だからまず心配は要らないよ」

「どんな翻訳の仕方したらこんなめんどくさい言い回しになるんだろ」って思いつつても、僕が安心してようって思っていた感じに僕を心配してくれているらしきとも感じる。

「まあ、もちろん君のご両親、あ、いや、保護者や関係者……そういったところに診てもらってもいいし、むしろその方が本来はいいのだろうが。なあ？」

「うむ、確認させたがやはり無かったな」  
「？」

「ああ、いや、君の名前が我々の名簿になかったというのがひとつ。さらには君……たちが今まで私たちに知られていなかったというの、もうひとつ。そしてなにより君自身が……これまで、君がその歳になるまで頼ってきたはずの保護者の方たちではな



く、あえて私たちに『判って』連絡してきた。つまりは、そういうわけだよ」

「どういうわけなんでしょう？」

「なんかすごい勘違いしてる気もするんだけど、今はその方が安全っぽい。」

「だから事情を知るものによる検査を。君の体に大事がないと確認する、そのための体制が整っている環境にあるのだとは思えなくてね。どうだろうか？ 受けてはくれまいかね？」

「……………」

よく分からないけども、とりあえずNOって言ってもダメそうってのは分かった。

それにどうやら本当に普通の病院みたいってのもあるしで、僕はちよつとだけ警戒心を……解いて置いた方が楽なんだろうなってなんとなく思いながら従うことにした。

「りさりんに渡した分のお金、腎臓で返してもらおうよ」とか言われませんようにって願いながら。

## 43話 「魔法」と「変異」と、そして 2/6

結構危険な状態かもしれないけども、何故か眠気に襲われ始めた僕。

……今日はすごく夜更かししてるもんな……みんなと集まって……僕だってそれなりにはいしゃいでた気がするし、たくさんセキと血を吐いて相当体力を消耗したんだ。

でも変な具合の悪さとかはない純粋な眠気だから多分僕の体が眠いだけ。

まああの血だって魔法さんがうっかり出しちゃったものかもだしね。

あの量を本当に吐いていたらこうして普通に立ったまま歩いたりなんてできるはずがない。

だから僕は大丈夫なんだ。

そう、思っておく。

現実逃避かもしれないけどね。

でも魔法さんが居るから死にはしないんだろうって根拠のない自身で無理やりに「大丈夫です」って言って早く帰って早く寝たい。

「あの、伺いたいことが」

「そこまで遠慮することはない」

「そうだ、私たちは君の仲間なんだ」

「……わかりました。それなら……おふたりのお名前。聞いていなかったと思つて」

コードネームとかだったりしたら意味ないだろうけども、一応誘拐犯かもしれない相手の情報は聞き出しておこう。

今なにもされてないんだから大丈夫なんだ。

大丈夫だつて信じてても良いんだよね？

「む……そうだったか？」

「ああ、そういえば先日はともかく今日はこれまで話してはいないのう。お前、車の中

で言わなかったのか？」

いえ、あのときも聞いたりしてなかったつて思います。

僕がただ忘れてるだけかもしれないけども。

僕は僕自身の記憶力には自身が無いんだ。

「……忘れていた。失態だ」

「まったく。……いやそうか、近頃は子供たちとばかり遊んでいたから……あの子たちは何度でも名前を聞いてくるから、それで思い込んでおったか」

言外に「幼女のくせに子供っぽくない」つて言われた気がする。

「儂がイワンで、コイツがマリアだ。覚えてくれたまえ」

おじさんがイワン、おばさんがマリア。

……何と言うか普通？

普通すぎて逆に怪しいけど……まあいいや、覚えやすいし。

ほら、外国人の名前って覚えにくいもの多いから……例えばあの夢で会った子たちのか。

えっと……アメリカ、タチア、ノーラだっけ。

あとソニアって名前も聞いた覚えがある……なんで覚えているんだろ。

僕の無意識が作り出した適当な名前だけど「せっかく考えたんだから」って、これまた無意識に覚えちゃったんだろうか。

「あと、さつき気になったんですけど……えっと、さつき言っていた僕が血を吐いたあれみたいなものを」

「ああ、我々は『反動』と呼んでいる」

反動？

何の？

「……それで、そちらでも反動というものについて知っていて……詳しい方がいるんですか？」

僕はまるつきり知らないけどもなんか知ってそんな雰囲気この人たちに聞いてみる。

まあ知ってるはずないよね、だって魔法さんみたいなものって僕にしか起きないっぽいし。

「無論だとも」

「そうだよね……って、え？」

「むしろ我々ほど知り尽くしている勢力はないだろう」

「まああちら側も、我々の……半分程度には知っているとは思うがね」

「え、知ってる？」

「ってことはホントにこの人たちも僕みたいに魔法さん絡み？」

「適当な嘘じゃなくって？」

「……ねこみみ病のときにNOを突きつけられて凹んでいた僕だから、気持ち的にすぐに飲み込めない。」

「時流というものは我々に対して厳しいから……おつと済まない響くん。年寄り  
は、つい話が長くなる」

「いえ」

「そういえば、どうしてあなたたち……イワンさんとマリアさんは僕の名前、知ってい

るんですか。

そう聞こうかって思ったけど、多分僕が倒れているときにみんなと話したから知っているんだらう。

「それでだな。これでも我々は……恐らくは、隠れている部分も含めたとしたら今のところ最大の勢力でね」

隠れている。

最大勢力。

「先のような反動について熟知している者も……この国にもそれなりに連れてきているのだよ。この国にもともと居た奴らは……いや、今はいいか」

外国から来た。

もちろんこの国にもいる。

ねこみみ病がメジャーになる、多分ずっと前から。

ねこみみ病に似ている感じだけど決定的に違うこれのこと。

「それよりも、先の君のあれは少々……いや、かなりの部類に入ると思うのだがね。深くは訊ねないで置こう、なによりも君自身が大丈夫だと言っていてそうして動いているのだから」

よくわからないけど、でも、さつきみたいなの……魔法さんでとんでもない量の血をい

きなり吐いて、ちよつとしたらこうしてけりりとしているっていう現象について、この人たちは知っている。

僕よりも、ずっと。

だから僕を助けてくれた——ん、時系列が逆な気がするけども……ダメだ、本格的に眠くつて頭が回らなくなってきた。

こんなに大切そうなときに、よりによって。

「あれは僕たちですら滅多に目にしたことがないほどの反動だったから興味はあるのだがね……しかし反動……そちらではどのような呼び方は知らぬが、それとその元となる変異や変質について、ほんの少ししか付き合いのない、あるいはまったくなかった我々に話すのは君自身では判断しかねるだろう？」

話し方からすると複数のグループがあつて……で、この人たちは僕がそのひとつに入っているって思っている。

——そっか。

僕、ひとりぼっちじゃなかったんだ。

ただ、気がつかれなかっただけなんだ。

「許可も要るだろう、だから今は聞かないでよくよ。我々が君を助けたのは僕らが君から助けてもらった恩があるのと、君の惨状を目にしてのほんの善意——同志を窮地か

ら救い出すためなのだからのう」

え？

同志？

なんだか聞き覚えがあるからちよつとだけ意識がはつきりしたけど、すぐにゆりかの、いつものなにかに影響された口癖だつて気がついたら一層に眠くなつてきた。

関係あるはずない偶然つてあるもんだから……だめだ、本当に頭が。

「お前、それはもう古い言い回しだぞ」

「ああ済まない、これもまた年を取るとつい、な……それで響くん」

「はこ」

眠いんです。

「いつか。いつか君の気が向いて、君の保護者の方たちの同意を得られたときに改めて尋ねることとするよ。無論、話してもらつたとしたら……君にとつての機密事項を教えてもらつた以上、儂らのものも教えることになる。だから今は……ただ、少しばかりのおせつかいで君の体に、現代医学的には問題がないことだけを確認するだけに留まらせることにするよ」

「はこ」

あれ、そういうえはどうして僕はここに居るんだっけ。



眠い。

あ、MRIとか言ってたんだ。

でもなんで？

……ああ、僕はさつき血を吐いたんだもんね。

……やばいやばい、かつての学生時代を思い出すような眠気だ。

午後いちばんの授業で眠気と戦いながら新しい知識を詰め込むっていう、あの感覚。今は眠くなったら寝るっていう生活だからこういうのとは離れていたわけで久しぶりすぎて耐えられない。

もうどうでもいいや、とりあえずその検査とやらを受けさせてもらってさつきと寝よう。

さつきまで警戒していたつてのは理解しているのに眠すぎて何もかもどうでも良くなっている僕が居る。

眠くさえなければなんとかなったかもしれないけど眠いんだからしょうがない。

「では、君の体を調べても？」

「お願いします」

そう言えば「腎臓とられたりしないよね」とか「売り飛ばされないよね」とか思ってたなあって何秒かに1回シャットダウンしたがる頭が言う。

そんな僕は、気がつけば何人もの……10人を超えるかもしれない白衣の人たちが現れていて、囲まれていたらしい。

でも眠い。

もうどうでもいいや。

良くないはずなのに僕はもう限界。

こういうところで幼女な体が足を引つ張る……眠い。

「やあ、皆久しいね。早速だが今日はこれからよろしく頼むよ」

「僕らの大切な客人だ。くれぐれも丁寧に扱え」

「はっ。それでは私たちが担当致します」

「……ふあい……」

気がついたら僕の腕は両脇から取られていて歩かされ始めている。

「眠ってしまったわれても問題ありませんからね」

「ふああい……」

なんか良い匂いがするって思ったら僕を歩かせているのは女の人たちらしい。

……あ、だめ。

そうだって分かつちゃうと途端に安心しちゃって――。

## 43話 「魔法」と「変異」と、そして 3/6

結果を言えば——僕は無事だった。

あの2人とその仲間たちが実は怖い外国の人たちだったとか、それで恩を売ったところで「じゃあちよつと素敵な場所に行こうか」とか「子供の臓器って人気あるんだよ」とか「可愛い子供は欲しい人がいっぱい居てね?」とかそういう怖いことはなにひとつなくて、僕は平和そのもの。

イワンさんとマリアさん。

名前で呼ぶようになった程度には仲良くなった気がする彼らは結構お茶目。

なんでもあの夜、僕が眠いって気がつかないままに連れ回して話し続けてたらしい。

幼女を何だと思っているんだあの人たち。

だからひと晩経つてもまだ夢の中……あ、文字どおりの意味で魔法さんのせいじゃなくてね……翌日の夕方まで寝てすつごくすつきりした後で「あのときは眠くて死にそうでした」って言ったらマリアさんが悲しんで落ち込んでいて、イワンさんが爆笑していた。

笑うことはないのにねえ。

それでうとうとしてたつて言うか9割方寝てた僕はいろんな検査されたらしい。たまに起こされる感じだったから寝ながら面倒見てもらっていたようなもんか。

ひとつが終わったら「はい次の部屋」って感じで明け方までいろんなことをされていたのだけをおぼろげに覚えている。

「もう丸投げした以上はがんばらなくてもいいや」って眠気と戦う力も意志もなくなっていたせいだ。

かろうじて覚えているのは「とりあえず検査室って寒いなあ」っていうのと、真つ先に……眠かったからあのとときはなんとも思わなかったけど、ばんつまで丸ごと履き替えさせられて……まあ血まみれだったし……それであちこちに抱っこされながら移動させられて。

僕がすつぽりどころかちまりと入る機械の中で変な音がしたり、あるいはぶるぶる震えたり。

中にはヘッドホンみたいななにかをつけさせられてすごい音がする機械の中に入れてられたりしたつけ。

眠かったから断片的だけでも。

一応は毎回どんな機械かとか言われていたのは覚えているんだけど、それがなにかなんていうのは意識の範囲外だった。

検査してる人たちとか寝てる僕を抱っこして連れてくれた人たちは分かっていたんだけどね、僕が眠いって……そりやそうだ。

そういうのを、着替えのときから面倒を見てくれたらしい女の人たち……お医者さんだったらしい……から聞いて、なんとなく覚えていた断片的な記憶とくつつけてみただと曖昧だ。

僕は別に男の人でもよかったんだけど、運んでくれたり寝かせてくれたり着替えさせてくれたりしたのはみんな女の人だったそう。

なんでも「淑女の肌だから」とかなんとか言っていた。「あの人、そういうのにうるさいの……」とかかなんとか。

まあ今の僕は一応女の子ってことになるんだから……いや、ただの幼児なんだからどっちだってよかったって思うけどね。

お医者さんって異性の体とか見慣れてるだろうし、僕男だし。その結果は、全くの健康体。

「血液とか調べたかったんだけどね」って苦笑しながら言われたけど、採血とかだけじゃばって起きて「絶対やです、断固拒否です」みたいなこと言ったらいい。

僕は眠くてどうしようもなかったから多分魔法さんが乗り移ったかなんかしたんだろう。

憑依とかもはやなんでもありだね魔法さん。

だから結局なんにもなかったんだけど、でもあれだけ吐いたんだし全身をきちんと調べてもらったのは結果的によかつたんだろう……僕自身が一番安心したんだし。

調べてもらってよかった。

あのときに調べてもらえなかつたら「今の僕が盛大に血を吐くような病気を抱えていたらどうしよう……」って今でもずつともやもやしていただろうしな。

とりあえずはなんともない、痩せすぎではあるけど健康な……幼女の体だつていうのを伝えられて、嬉しさと残念さを混ぜたような感覚になったつけ。

そしてそれからは予想どおり「もつと食えもつと食え」って感じて事あるごとに食べさせようとしてくるようになったちやっっているのは仕方のないことだろう。

うん。

あの日から僕、この通り病院に入院させられてる……しかも個室で。

「個室つてお高いんでしよう？」って聞いたけど「子供は気にしなくても良いよ」って言われてちよつといらつて来たから遠慮なく食つちや寝な生活を楽しませてもらつてる次第。

……「病院食はマズカろう」なんて言っているいろいろ持ち込んできているのははたしていいことなんだろうか……まあ僕は病人じゃないらしいし、念のための様子見つてこと

らしいからいいんだけども。

「立場があると誰も突っ込んでくれない」って言ってたけど、偉い人に真正面から言えないよねえ……病院食を毎回食べきれない僕に看護師の人が困ってるし。

本当はこれ以上借りなんて作りたくはなかった……結局りきりんへのお金とか検査代とか入院代とかの話しようってすると逸らされるし……けど、今の僕がどんな状態なのか不安だったのは僕もおんなじだったからひと息つけた感じ。

それに……今まででできるだけ人に頼らないようにしてきたからこそ、こうしてだらだらと。

冬眠期間を除いても半年以上、入れたならもうすぐで1年になるっていうこの長い時間。

去年の今ごろまでの僕にとってはたいしたことがない、けど今の僕になってからはとつても長い時間、ずっと、ただひとりで悩むだけだったから……どこかでそれを変えないといけないって思っていたんだ。

その相手がたまたまこの人たちだったってだけ。

変な縁から僕の魔法さんと何かしら近いものを持っているらしい人たちと知り合えたからなんだ。

魔法さんが本格的に暴れ出した夏休み明けからのことを思う。

うだうだぐじぐじぐねぐねもぞつて考えてないで、さつさと思いついてお隣さんについて、よく落ちついて考えてみれば、昔のことを言えばとりあえずは今の僕が前の僕だつて信じてくれるだろう……実際は魔法さんのせいであんなにうなるんだ……つていう人が、いや、お父さんとお母さんと娘さんつて言う3人もの人たちが、家から出てほんの10秒くらいのところをいたりするんだ。

よくよく話していけば、いずれは……特にあの奥さんだしな、まず信じてくれて「じゃあどうしようかって」いう流れになつたんだつて簡単に想像できる。

おんなじことは親戚の叔父さんにも言える。

結局まだ連絡は取つていないけど、でも、家まで来てもらえば、結果的には魔法さんですぐに前の僕だと認識してくれたはず。

そこから僕が幼女になつちやつていっているつていうのまでを認識させる方法はわからないけど、でもとりあえずはきちんと大人……いや、僕は社会経験どころか人間関係ゼロだから実質的になんにも知らないわけで、つまりはまだ体だけ大人になりはしたけど中身はまだ高校生程度で、だからこそ社会つていうものをよくわかつている大人の力を借りてどうにかできた……かもしれない。

実際戸籍とかいろいろはどうかなるつて今なら分かつてゐるんだし、僕を知つてゐるあの人たちに助けてもらいながらもつと平和に生きていたかもしれない。



後知恵ならなんとも言えるっていうのは知っているんだけど……こういうのって考えちやうよね。

今から思い返すと、なんであんなに隠れて秘密にしてじーつとしているのにこだわっていたのかかわからない。

まあ単純に怖かったんだろう。

僕自身が弱虫なのもあつたけども、なにより明らかに非現実的な何かに襲われていたって言うあの状態が。

うん、しょうがない。

記憶を失つてまた同じことになつたらきつとまたおんなじようにするだろう。

それが僕って言う人間だ。

……入院中にマリアさんとイワンさんにいろいろ説明されたけどもそれはまたあとで。

それよりも今は2月になっている。

2月。

そうしてあのおおみそかを祝つて、お正月をスプラッターで飾つて抱っこされたままでの検査つていうのを終えてから、気がつけばもう1ヶ月が過ぎてとうとう2月だ。

2月。

1ヶ月も外に出ないひきこもり生活だったんだ。

寒さがいちばん厳しい2月のはずなんだけど病院にいる限りは生ぬるい感じの空調で、特段の寒さは感じないけど今は2月なんだ。

いろいろとありはしたけど、それでも今までのように家の中にいるだけの時間が長かったのに比べたら……とつても早かった気がする。

形だけの入院っていうのをして、こうしてひと月ちよい。

半月を過ぎたころからはわりと自由にさせてもらって、ちよつと出たりもしたし家にも戻ったりはしたけど、こんなにお世話になっちゃっている。

検査と入院と個室と。

何度も言うけども気になるからしようがないあのときのお金も結局受け取ってくれない、というかそもそも銀行へも行かせてくれない。

それでも「まだ借りがあがる」って相手の方から言ってくるんだけど、本当なんだろうか。

……いや、僕はあの人たちを……少なくとも僕の嫌がることをしてくる人たちじゃないって信じることにしたんだ、この考えは閉まっておこう。

マリアさんはよく話す人ってのがよく分かったんだけど、それはおしゃべりな女性ならしょうがないものだしイワンさんはそこまで話さないし、話すとしてもゆつくりだ

から聞き取りやすくって。

あと、年上の人たちとだと今までみたい……みんなと話しているときみたいに気張らなくてもいいし。

肩肘張らなくてもいいっていうのと同時に今どきの中学生の知識とか常識とか興味に合わせ続けなきゃならないっていうのがまったく嫌いだから、それはそれは快適だった。

むしろ、存分に甘えろって顔をしているから、いつのまにか僕の方が……完全に子供扱いされていて、だからとても楽で。

「……む」

そんなことを考えながら……1ヶ月ぶりくらいにみんなと会う時間までもう少しの  
はずなんだけども。

今日何回目かに見つめる病室のドアの向こうの音に耳をそばだてる。

……鍵をかけていなくて、ドアを閉めているとは言っても、繁に歩いてくる音がして、いつ人が入ってくるかわからない環境っていうのはやっぱり慣れない環境。

やっぱり僕にとっては、誰もいないあの家の中のあの部屋がいちばん。

機械の音だっというるさいし、いきなり耳元にナースコール的なので話しかけられるし。

枕元の機械から伸びているコードの先は僕の胸。

今は進んでいて心電図とかの機械って病室には無いらしく、全部向こうで管理しているんだとか。

だからその機械から伸びているコードの先の吸盤、それが張り付けられていてお風呂のたびに痒くなる胸のあたりをなんとなく見ていたら、今度こそこんこんとドアがノックされる音。

そしてノックの後すぐに慣れた声が出てこないっていうことは……みんなだ。

「……………」

って言っても当然ながら僕の声は届かないから、しばらく待っているとスマホの方に連絡。

文字の方でも「どうぞ」って……送ったとたんにながりと開けられたドアからは、ゆりかが飛び込んできた。

「ひびき、おひさっ！ ……………ホントに元気になってる！ 良かったあ…………」

小さいのと対比するように、レモンに対するメロンのように、かがりも入ってくる。

「ぎげんよう、響ちゃん。 ……良かった、ほっとしたわあ…………ようやくあれから時間が経ってようやくこうして会ってもいいって言われて来てみたけれど…………本当に顔色もよさそうで」

ゆりかとかがり。

せつかくの大みそかを盛大に台無しにしちやった僕は、彼女たちと1ヶ月ぶりに再会した。

## 43話 「魔法」と「変異」と、そして 4/6

「久しぶりだね、ふたりとも。あなときは迷惑を……せつかくの年越しだったのに」

「だーかーらーひびきー、それもう禁止ー」

「そうよ、このあいだからのチャットでその話はたくさんしたでしょう？」

ああ、この感覚。

話を最後まで聞いてくれなくて遮ってくるこの感覚。

結構懐かしいと同時に、この子たち特有のものかもしれないって思い始めてきたもの。

「……文字でのやりとりと、こうして実際に会って話すのでは違うだろう？ だから分かつてはいるけど、でもー回は言っておきたかったんだ。もちろん、今はいないさよとりさにも別の日にね」

「もー、ほんつと生真面目なんだからー響って。とにかく迷惑じゃないからね！ 以土ーこの話はおしまい!!」

「急病の方がいたら助けるのって当たり前よ。響ちゃんは私たちの大切な友達だもの、それに前から病気があると知っていたのだもの。大変ではあったけど何とも思っ

ていないわよ。 ね?」

「もち。 ……そうしてさりげなく恥ずかしいセリフ言えるかがりんマジかがりん」  
「???」

学生、女の子な感覚としての友人。

……そうだな、こういう距離感なのがそういうものだったな。

遠慮がないのがいいというか、でももうちよつとだけ遠慮はしてもらいたい感じの。  
あのとときに勇気を出して男だつて言っているつていうのもあるからいくらか気も楽  
だし。

でも、友だちというものがそういうものならそろそろ慣れないといけないんだろう  
な。

「ありがとう。 嬉しいよ」

「そーしてさらつと流せる響もすつげ。 で、そーいえば今日の面会つてどのくらい居  
ていいのかとか聞いている? なんかドラマとかじゃ医者さんが入ってきて『そろそろ  
患者様の御体にお差し支えがありまするゆえ……』とかいう場面あるけど」

ゆりかがボケ始めた。

少し落ち着いてきたらしい。

「いや、特にはないよ。 あれから随分ここにいるし、僕の体もすつかり安定している

し」

「そう、良かったわね。けれど私たちも響ちゃんを疲れさせたくはないし、ほどほどのところで切り上げるつもりよ?」

「そう言いながら、僕が指さした先にある折りたたみのイスを引つ張ってくるふたりは制服……冬服らしい格好。」

……ああ、学校帰りだね、夕方に近い昼間だから。

夏服はよく見てたけど冬服は初めてかも。

そして当然ながら彼女たちは「ほんとに同い年?」って誰だっと思うくらいいろいろと差があるもんだから、悲しいほどにサイズの違う制服で。

「響」

「何も」

「なんかへんなこと考えてない?」

「ゆりかはいつもそういうことを言うね」

「言ってみただけだよん。カマかけに反応しないタイプだからホントかどうか……」

ゆりかは比べられることには鋭い、気をつけておこう。

「てゆーか。分かってたけど個室ってすごいねえ」

「そうねえ……ドラマとかだと個室が定番だけれど普通は何人かだっただけ聞いたわ? さ



よちゃんに」

む、そう言えば今の僕は一応入院してるからさよともあるある話ができるのか。

「ねー。しかもここ、なんだか広い気がするし。あ、確かここって角っこだから、つ

まりは特等室ってわけ？」

「響ちゃん、事情があるのだから。それに響ちゃんは静かなのが好きなのだし自然

じゃない？」

「まーね。もはやなにが起きても驚かねえ」

「そうねっ、あのお正月以上のことなんてそうそう無いもの」

うん……同級生がスプラッターになるとか滅多に、いや、絶対に無いよね。

「そうだわ、誰もいないのだし、イス、もうひとつお借りしてコートとカバンを置いてもいいかしら」

「ベッドの足元に置いてもらって構わないよ。どうせ半分くらい余っているんだ、身

長的にね……」

「小さくたって良いじゃない。ねえゆりかちゃん？ 可愛いわよね？」

「私を見て言わないでよ……あ、で、響。ほんとは今日、みんなで来ようって思ってた

んだけどねー？ りさりんとさよちゃんも」

「部活なら仕方ないよ。それに、別に今日じゃなくても僕の方はほとんど毎日大丈夫

なんだ。事前に面会の連絡さえあれば平気だつて伝えてほしい」

「りよ。でもやつぱ面会オツケーになりたての今日に来られないのが心残りだつたみたいでねー、特にさよちんのほうがさー」

「さよちゃんは、さよちゃん自身のことでもあつてずーつと心配していたものね」

まああれを見れば……ただでさえびつくりするのに持病持ちのあの子だつたらなおさらねえ……。

改めて申し訳なく思う。

あの後が大変だつたつてメツセージで聞いたし。

でも僕としてはあのとときに行つてみて、言つてみて。

それで良かったつて思っているんだ。

そのあとにこうしてこの病院に来ていろいろ知つたことも含めて。

でも……せめて。

せめてもつと穏やかなものだつたらよかつたのになあ……なにしろ血の海からの担架だつたんだし。

あんな経験、確かに人生で1度2度つて程度だろうね。

「連絡が来たタイミングがね……私たち学生にとつては先輩とか先生には逆らえないからさ。ほら、ふたりとも部活と委員会の……えつと、なんて言うんだっけ？」

「できるだけ来なさいっていう日だったのよね」

「そだね。ま、明日とか明後日にでも来たいって言ってたし、そんなに焦らなくて……  
いいんだよね？」

「ああ、もちろん」

2人とも話しながらもきよろきよろと病室を見回している。

うん、ドラマとかで見るとは結構違うもんね、分かるー。

「今日はただ都合が悪かっただけだし、これからいくらでもこちらに来られるものね！

それこそ毎日でも響ちゃんとお話して！」

「いや、毎日は」

「そだよかがりん、響の方もともかく毎日は私たちも大変でしょ」

「そうかしら？ 来るついでにお菓子とか買ってきたら夏のときみたいな感じになるんじゃないかしら？」

「……………」

どうしょこの子？

そんな目で僕を見てくるゆりか。

……うん、君もこの子のことよく知ってるもんね……1回言い出したら聞かないって  
性格を。

「……そのへんは主治医に相談しておくよ」

「ええ！」

「……ああそうだ。こつちも改めて言っておかないとな」

「こつちつて？」

「うん。あの後始末をりさの家の人たちにも手伝わせてしまったんだよね。ずいぶ

んどご迷惑をかけたから」

「いやー、だーかーらーあれはしょうがないってひびきい」

「そうね、りさちゃんのご家族もそういうことなら仕方ないって言っていたわ？」

「いや、それはよくない。ご迷惑をかけてその僕が行かないなんていうのは。……

退院したらご挨拶に伺わないと……あれだけのことになってしまったんだし、謝るついでに僕がこうして無事だということも伝えておかないと先方も困るだろう」

考えてみる。

娘のところに泊まりがけ……みんなそのつもりだったらしいし、多分僕も何もなければ普通に寝落ちしてただろうし……来ていた学生たちが騒いでいたと思つたらなんかスーツを着た外人が謝ってきて、行つてみたらその部屋がスプラッターになってみんな血まみれの格好をしていて。

その渦中の僕とその「両親」がお金だけ置いて居なくなっているって言う状況だった

んだ。

僕の家でそういうことがあつたら絶対にもやもやするしどうしても行かないといけない気がする。

「……マジメさんだねえ。あれよ、あの後響の……えつと、家族の人だよ。家族の人たちがつかい来て挨拶してたつて聞いたけど」

「それでも」

「あ、響もそーゆーとこあつたねえ……なら退院したらみんな遊びに行くついででいいんじゃない？」

「ええ、そうね。普段は人も居なくてヒマだと言つてたし、そういうときに……お休みの日とかに適当に遊んだりするついで良いと思うわ。あ、もちろんお医者様が言いと言つたらよ？ 今度こそ、体が夏くらいには落ちついてからよ？ 響ちゃん」

「……うん、そうだね」

僕の心は大人だからやらかしたら僕が謝りに行かなきゃつて思うんだけど、他の人にとつてみれば僕は病弱でいきなり吐血するほどな子供なんだ。

確かに「本人が顔も見せないなんて……」つて言うのとはちよつと違うのかもしれない。

「ところでき、響」

「ん?」

学校帰りでお腹が空いたからって、たぶんかがりの発案でだろうけども軽いお菓子っていうものを用意していたふたり。

もちろん僕は遠慮した、というか入院してるから食事制限あるよねって感じで分かっていたらしく、分かっていたくせに3人ぶんのお菓子を買ってきて僕の分までをむしやむしやと食べているかがりのくるんをぼーつと見ていたら、ゆりかが尋ねてきた。

いくらでも口に吸い込まれていく。

すげえ。

「ちよいちよい、響や。久しぶりのインパクトで気持ちは分かるけどさ」

「あ、うん」

「病気。今は楽になってるの? いや、あのときと比べると……クリスマスんときの退院のときと比べてもずっと顔色いいし、なによりほっぺとかが元に戻りつつあるからそう思ってるんだけど」

「そうよね、だいぶ響ちゃんらしくなってきたわよね!」

「ちよつとかがりん、食べ終わってからにしてよう」

「あら、ごめんなさい」

ほっぺが膨らんでいるの、今は僕じゃなくってかがりだもんね。

しかしあいかわらずの食への執念。

それがあるからこそまで育っているのか、それともそのせいで中身を置いてきぼりにして育ってしまったのか。

実に興味深い。

ゆりかや僕との比較対象としては。

「ひびき」

「うん、もう大丈夫。1ヶ月様子も見たし落ちついているよ」

「なーんかやな思考が来てた気がするう……けど、そっか」

……もしかして僕の考えてることってだだ漏れ？

かがり？

かがりみたいに？

「？」

あ、「くるん？」ってされた。

……僕ってこの子みたいに見られてるのかなあ……。

「1ヶ月もずっと横になつてこうしてモニターされて、味気のない入院食ずっと食べながら過ごしていたからね。最近では廊下や中庭まで好きに出てよくなっているし、安心してもらつてもいいよ」

正確には悪いところはあの晩に引っ込んだんだし、魔法さんのせいだし、もうとつくに外出してぶらぶらしても良いんだとは思う。

でもこう言っておかないと変に思われるからって、あの人たちに言われているし。

まあ実際あれだけの血を吐いたりしたら1ヶ月くらいは絶対安静なんだろうし。

「……ごくんつ。本当に良かったわね、響ちゃん」

「かがり」

たったのこれだけでももうペロりと平らげたらしいくるんさん。

本当、あつという間に。

……感心するくらいによく食べるなあ……食べるからこそそのかがりではあるんだけど。

ど。

「実はね？ 私も、クリスマスするときからずーっと心配だったの」

「……君がか」

すつごく意外。

「ええ。だって響ちゃんは『元気だ』って……ふらふらしながら言っていたから説得力、なかったもの」

「あー、だよねえ。どー見てもヤバい感じだったし。大みそか誘うかどうかってすつごく悩んだもん」



確かにあのときは家から歩いて10分の駅前まででさえタクシーを使わないと動けないくらいだったんだし、がんばって平気そうに見せていたのは筒抜けだったらしい。ま、過ぎたことは仕方がない。

それにあのときは魔法さんのせいで冷静な思考……というよりは感情か、が欠けていたんだから。

つまりは判断能力が鈍った状態だったっていうことで本当にしようがないこと。

だって時間が飛んだんだし、寒かったしガリガリだったし冷蔵庫だったし。

……あ、結局冷蔵庫は中身を空にしたままにしていたら無事に使えるようになっていた。

もつとも、最近はあるまり使っていないけども。

「でも誘っちゃったから私たちもすっごく悪い感で……ねえ？」

「ええ……どう見ても顔色も悪くって、顔まで……ずいぶん栄養を取れなかったみたいだって、大変だったんだなって、ひと目でわかるくらいだったもの。なんと言うのかしらね、生気のような、そういうのがないように感じて不安だったの。それがお正月のあのときにひどくなってしまって……いえ、ぶり返してしまって」

「いやー、クリスマスときばったり会ったときには一瞬、ゆーれーかとも思いましたぞ。んで大みそかはちよつと顔色良いからすぐに帰らせなくても良いかなって思っ

たらあれだったしなー」

そんなにひどかった？

そう思っていたら、席を立ったかと思っただけで近づいてきてほっぺとか腕とかをぶにぶにと触ってくるくるんさん。

いきなり触ってくるよね、女の子って。

しよっちゆう触るよね、女の子って。

女の子って言うかほとんどかがりなんだけどね。

「ええ、やつぱり！ あのとときは全然違うわ！」

「……そうだね」

こうして断りもなく気の向くままにべたべた触ってくるのはやつぱり大型犬。

初めのころは嫌だったけど、もう、とつくに諦めているから好きにさせている。

位置関係と体のサイズの問題と、その一部の問題で、どうしても顔に迫ってくる圧を感じつつくるんくるんがかかってくるっていうこれはもはや懐かしい感じ。

ほんつとうにかがりは気にしていないんだな、男っていうの。

流石に忘れてはいない……よね？

僕がちゃんと男なんだって言ったの。

忘れてないよね？

いくらかがりでも性別別って言う決定的なことを……まあ肉体が女だつていうのは下着の上から見られてるんだし、さんざん着せ替えとか髪の毛いじりとかされたからの印象を引きずっているのかもしれないし、そもそもこの子だし。

慣れたし僕はどうでもいいんだけど……でも、やっぱりこの圧が迫ってくるのは勘弁してもらいたい。

ほら、ゆりかがすごい目で見てくるし……嫉妬しても胸は育たないって思うよ？

そんなダブルメロンさんが僕の髪の毛を手元にとつて眺めつつ言う。

「……響ちゃん、明らかに具合が悪そうで、退院したつて言つても一時的なものだつて聞いていたのに……それなのに連れ出してあんなことになつてしまつて。だからみんな、もう響ちゃんと……少なくとも外でこうして会うというのを禁止されてしまうのではないかつて、ずっと心配していたのよ。……そうならなくて良かったわ」

僕の髪の毛を触つていたと思つたらさりげなく三つ編みにしながら落ち込むつていう器用なことをしているメロンさんと、座つたままそれをじーつと見つめているレモンさん。

なんだか既視感のある光景。

なんでかがりはどこでも髪の毛をいじりたがるんだらうな。

まあ実害はないからいつか。

「……今度こそ。今度こそ、前のような仮の退院じゃなくて、今度病院を出るときは安定してからだとも言われているし、だからこそこうして段階を踏んでいるわけだ。

……もう、気にする必要はないよ」

僕はまた嘘をついた。

けれどもこれは意識しての嘘、意図があつての嘘……この子たちのための嘘。それくらいは冷静に判断できるようになった僕がいる。

「そうなの？」

「ちよつと安心だねー。……で、かがりん。いつものことだし、響も気にしていないのがすつごく気になるんだけどさ？ とにかく…………ちよつと近すぎない？ いち

お、君たち男女なのよ？」

「え？ ……あらごめんさい、今日は髪留め、持って来忘れちゃったわ」

「ちがう、そうじゃないのよ。お願いだから意識してよ……中2なんだから」

「??」

「あ、ダーメだこりや……響も大変ねえ」

「……もう慣れたよ」

「お劳しい響上……男子にこのダイナマイトはさぞ毒でしょう」

「そういうものを完全に気にならなくなる程度にはもみくちやにされたからね」

「おおおう……響の男の子が破壊されとる」

「???」

ゆりかには分かってもらえるこの気持ち。

実は歳が離れすぎていて……胸が大きかったりしてもそんなにドキドキしないんだけどね。

「……そうだ、ふたりとも」

「なあに？」

「響ちゃん、この部屋に髪留めは」

「かがり、それは後にできないか？」

「そう？　せっかく上手にできたのに。　あ、髪の毛の手入れ、看護師さんとかがしてくださっているのね？　とつても綺麗な状態よ！」

ああ、この、自分に興味があること以外はおろそかになるあたりはととても懐かしい……。

「いやいやかがりん、今はそーじゃなくてさ……てゆーかがりん、響から説明あったでしょ、あのインパクトで上書きされちゃったけど。　響、中身は男の子なんだからそーゆーの、そろそろ止めたげたら？」

「でも、かわいくしたいし……」

「だーから響つてば男の子で」

「あら、今は多様性の時代だから男の子でもかわいくしても」

「……ひびきー！　へるぷみー!!　私ひとりじゃむーりー!」

「……かがり、それは今は良いから」

「そうよね、良いのよね!」

「うん。……あ、いや違う、今のは」

「今度来るときにはいーっぱい!　リボンとかヘアピンとか新しい髪型とか試してあげるからー!」

「すげえ、一切動じてないし通じてない……強引に行こ、それでひびき、どしたん?」

「……君たちにも。　後日来てくれるだろうさよとりさにも説明するけど。　実は僕は

ね」

この子たちのための嘘。

僕が……いつどうなるか分からないって言う爆弾を抱えてる僕が。

魔法さんが次はいつどんな感じに暴れるのか分からない僕が。

この子たちにとって、最も自然で納得しやすく迷惑の掛からない理由って言う嘘をつく。

「——春になったら。　春になったら、海外へ越すんだ」

## 4 3 話 「魔法」と「変異」と、そして 5 / 6

「か、海外つて……響ちゃん、それ、ほんとうなの……？」

「ああ、そうなんだ」

本当じゃない。

本当じゃないけど、でもこれは必要な嘘というもの。

「え……う、うそ……ここでの治療じゃ限度があるから……いや、施設が足りないからつて、海外の病院で本格的に治療する……つて、そんな急に……」

そういうことにした方がお互いにとって良いんだ。

だから僕はまたひとつ、嘘をついた。

けど今度の嘘は……今からしようとしていることを思えば本当に必要なもの。

「つてことはひびき……私たち、響と当分」

「会えないことにはなるね。少なくとも、発つてから戻ってくるまでのあいだは、ね」

いつもと違ってゆりかの方が動揺してしまって、それで落ちついてもらうまでが大変だった。

それこそ、ぐしぐしははじめたゆりかをなだめるためにかがりがあやすつていう光景

があつたくらいには。

もちろん僕は何ができるわけもなく、ただ気まずく窓の外を眺めていただけだけでも。

だつてこういうときにどんなことを言えばいいのかわからないし慰め方つていうものも知らないんだもん。

だからつい、かがりに任せつきりにしちやつたんだ。

……年上なのになあ、僕つて。

「すごく残念よねえ……せつかく病室を教えてもらったんだから、これからなるべく毎日来ようつて」

「かがり。 毎日は遠慮してほしいと言つたよね？」

「だからなるべくなのよ？」

何が「だから」なのかはさっぱり。

「お見舞いしたりして響ちゃんと外でまた会える日が来るのを楽しみにして待つつもりだったのに、ここを退院したらそのまま外国でしよう？ 簡単にはお見舞いできなくなるのね……」

まあ学生じゃなくても気軽に海外にお見舞いなんか行けないよね。

そのための海外に行くつて言う設定なんだ。



「そういうわけなんだ。だからこそさっき言ったように次こそが本当のお別れなんだ」

「……お別れ……ひびきと」

「ゆりかちゃん、大丈夫？」

「……ん。もう……平気」

少しだけ泣きそうになっていたゆりかも、もう元通りになりつつある。

ぱつつんの下の目も口元も……見た限りではまた泣き出しちやいそうな気配はなさそう。

「……少なくとも、あちらでの検査を待つのに数ヶ月。下手をすともつとかかるかもしれない。そういうのはどこかで聞いたことがあると思うけど、とにかくいきなり行ってもすぐに治療を受けられるわけじゃない。そして、……治療を受けられて回復したとしたって、状況次第では……学校だって現地のものになるかもしれないし、あつちで暮らすことになるかもしれないんだ。つまり。……もう、ここへは戻ってこない『かもしれない』んだ。何もかも曖昧な状態で言うのも心苦しいんだけど」

「でも……それが、響のためだから。なんだよね？」

「……うん」

「……そっか！ ね、響？」

今度は泣きそうにはならなかったゆりかが、ぱつと笑顔になる。

……気持ちの切り替え、いつ見てもすごいな。

女の子って本当に喜怒哀楽が激しくて変わるのも一緒。

……いや、今のゆりかは「僕を不安にさせないように」って、あえてそう振る舞っているだけなんだ。

こんな僕でもそれくらいは分かる。

悪いことをした気持ちだが、罪悪感というものがこみ上げてくる。

けど、これは伝えなきゃならないことで。

さんさん言うかどうか迷っていた嘘についても、やっぱり言わないことにはいつまでも片付かないんだ。

だから、言えるのなら言えるうちにさっさと行ってしまわないと後悔する。

それが、僕が……前の僕から今の僕になって、どこにでも居て誰からも気にされないその辺の男Bだった僕がどこにでも居なくて誰からも気にされる幼女Aになって、身染みて実感したことなんだ。

普通の人ならとつくにわかっているはずのことを、僕はようやく……こんな目に遭い続けて、ようやくにわかって実感したんだ。

ひとまわり以上に遅れてようやく。

僕はようやくこの子たちくらいのこと……中学生の精神年齢になったんだ、きつと。

「……そっかそっか。 ひびき、とうとう病弱から海外治療っていうスーパードワールドワイドな存在になっちゃったかあ。 あ、もちろんちゃんと治るんだよね？」

「うん、きつと」

「なら暗いのはやめやめ、だね！ あ、あとありがとかがりんも。 だけど勝手にそのでかいのを押しつけてきたのは許さない。 脅威な胸囲の格差だ」

「ゆりかちゃんが元気になったのはいいのだけれど……大きいもの？」

「あ、ダメだ、この人ほんつとと理解してない……自分の体が凶器だつてことをさあ。

……響も大変だったねえ……こればかりは同情するよう。 オンナでも意識しちゃうよねえ」

「……分かってくれるか」

「分かるよ……知識としては知っていても分からない辺りがマジかがりんなのよ……」

「……」

「あちらだと僕はたいして珍しくもない見た目になるから、そんなことは無いよ」

「いやいやなに言ってるのさ、それ以外のところでも属性もりもりなクセして」

「……そうか？ かがりもそう思うのか？」

「そうねえ……多分？ 響ちゃんって言ったら響ちゃんってくらいだし？」

それってどういう意味なんだろう……くるんさんのくせに。

「……んー」

と、じつと腕組みをして難しい顔をし出すゆりか。

「……………ん——……」

ものすつごく考えてる。

なんだろ。

「……んー、それだったらさっさと言つといたほうがいいのかなあ……でもなあ……ん

——……」

「あら？ ゆりかちゃん、何かすぐに伝えなければならぬこと、あつたかしら？」

「あ、いや、そういうことじゃないんだけど」

「あら、響ちゃんがいなかったときのこと？ たえば秋にみんなで響ちゃんの代わりに遊びに行つて、あ、もちろん写真とかお土産とか取つておいてあるから安心してね？」

うちにたくさんあるから今度持つてくるわね！ みんなが揃つたら見ましょ！ あ

とは学校での行事のこととか、あ、学園祭のことでもお話したいこといっぱいあつて

！ あとはね、あとはね？ みんなで響ちゃん大丈夫かしら、今どうしているかし

ら——って言い合つたりしながら、お泊まり会……2人ずつばらばらにしたりしたことと

か？ あと、それともそれとも」

「かがりん」

「!?」

「ひゅいつ!?」

ゆりかの声が冷える。

そんな感覚。

いつもより低いって言うかドスが利いてるって言うか……ゆりかが本気で怒ったときはこういう声になるんだってのが病室に響く。

決して大声とかじやないのに響く。

だから僕までひやつとした。

かがりのくるんがへによつとなっているあたり……たまたま僕からは見えないけど、どうやら顔つきもそれに迫っているらしい。

「今から私の話が終わるまで、お口チャツク。いい？ ちゃーんと覚えた？ かがりん。1回しか言わないよ？ 破ったらさすがの友達でも結構怒るからね？」

「はい……」

かがりが一瞬で黙るっていう奇跡が起きた。

そりやそうだ、怖いもん。

こつちに向き直りつつ「はあ……」とため息みtainなものをつくゆりか。

「……べつつかかりんなら聞いててもいいからさ——……お願いだからお口だけは挟まないでね？　話し終わるまで。ほんつと。……私が響にきちんと、話したいことをぜーんぶ言い終えるまで。……いい？　わかった？　あんだーすたん？」

「……………」

「あ、返事くらいは良いからね？」

「……わかったわよう……ねえ響ちゃん、ゆりかちゃん、ときどきこうして怖いの。なんでかしら……」

それは仕方がないんじゃないかな。

きつと常日頃から何かしらやらかしてゐるんだろうし。

「んじや、ここからはお静かに……んで、えつと。　そんでね？　響。　んー、せつかくだし今言つとかないと、次言えそーな雰囲気と、あと勇気とか？　そーゆーもんが揃うタイミングが来るかわからないから、も、言つちやうね？　言つちやうよ？」

「う、うん」

「今だけはいつともみたいに聞いている最中に窓の外のちようちよとか眺めてないでね？」

僕、そんな不思議系って思われてた……？  
否定できないけども。

ぱつつんの下からきらりと光る汗が見える。

「えっと、先に言っとくけど。……響にとっては迷惑かもだけど、てかたぶんそうなんだろうけど。でも、私にとっては大切なことで、これ言えないまま、伝えないままでお別れになっちゃったりしたら、たぶん、絶対後悔するから……ごめ、なに言ってるかわかんないかもだけど、聞いてくれる……かな？」

「……それはいいけど。少し息を整えた方が」

「……ん。ありがと」

深呼吸を何回かしながら……走ったあとみたい、ゆっくりと落ちつくのを待っているらしいゆりか。

「……そんなに大事なことってなんだろう。」

「!」

がんばって口を閉じているらしいかがりと目が合った。

「!!」

なんか目が輝いている。

「……がんばったままにできるかな、この子。」

「!!!」

見える。

見えない尻尾が千切れそうに振り回されてるのか。

……途中で話に突っ込んできそう。

多分来る。

そんな自信がある。

「……ふう。　　もー大丈夫かな。　　あ、いや、まだまだ緊張してるけど、でもこれ以上先

延ばしにしたら、やっぱまた今度でつてなっちゃいそうだし……今言っちゃうね？」

「……うん」

そう言うと、ふっと力を抜いて……自然な感じになる彼女。

そうして——夏に、ゆりかの家で一緒に過ごしていたときとかにふとすることがあつ

たような表情で……口を開いた。

「実はね、響。　　私ね？　　……私は、関澤ゆりかは。　　初めて会ったとき……たまたま

響、君と会って、一瞬だったけど顔を見て目が合った瞬間から……君のことが、好きだつ

たんだ。　　たぶんね。　　……んで、今でも……けっこー、好き。　　……なんだよ？　　気

づいてた？」



# 4 4 話 彼女からの、告白 1 1 / 4

「？」

ゆりかが言った。

僕のが好きだって。

「……………??」

いや、理解はしているんだ。

僕が告白って言うのをされたんだって。

でもあんまりに突然なこと、そもそも僕はそんな資格となくなつて、だいたい本当の年齢が10くらい離れているって言うかそもそも今の僕でも幼い上に女の子なんだしどうして今言うんだとかでぐるぐるしてるんだ。

「……………」

顔がちよつとだけ赤くなつていて目元の感じが柔らかい感じになつて、さつき泣いてたから目じりも赤くなつてて……普段は絶対に見ることがない彼女の様子を見れば、いくら僕でも理解はできる。

でも感情が追いつかない。

……追いついてもどうすればいいんだっていう気持ちもあるし。

僕と大差ない見た目で普段が普段だから無意識に小学生くらいだと思いがちで。

そんな彼女が今はなんだか別人みたいな雰囲気。

僕が初めて目にするような……これまでの人生でも見たことのない感じのそれ。

りさりんとかとしゃれ合っているときみたいに、あるいは冗談を言うときみたいに……体をわざとくねくねさせてほっぺに手を当てるみたいなのはしていなくて、ただただ僕を見つめている。

「……………」

ゆりかは、静かに僕を見つめている。

……僕の反応を待っているんだろうか？

いや、そうなんだろうけど、そうだとはわかっているんだけど、でも。

でも、僕のことを……異性としてか同性としてかは置いておいて、中学生らしい恋愛感情って言うのを抱えている……らしい。

けどゆりかは……かがりとおなじように自分じゃなくて周りの子のそれとか物語の中の恋愛っていうのを楽しむ傾向があつて、だからこそゆりか自身のそういうのを口にするっていうのは想像したこともなかった。

……僕だつてずっと、ゆりかのことを、かがりみたいな女の子らしい女の子とは違つ

て、もつと……どっちかっていうと小学生の男の子相手にしているようなそういう感じで接していたわけで、つまりは完全に予想外で。

女の子っぽい感じなんてぜんぜんしなかった……いや。

この顔が、この表情が、この目が。

女の子の……恋心っていうものを込めたものだったのか。

そう言えばそんなこともあったな、って感じにほんの何回か見たことがあった。

この、ちよつとばかり普段とは違う雰囲気「女の子」だったんだ。

ときどき……2人で居るときたまーにしている不思議に思っていたこれが、まさかそうだったなんて……しかもそれを向ける相手が僕だったなんて。

分からない。

僕には恋愛のことなんて全く分からないんだ。

だから混乱する。

25にして初恋すら未経験なんだ、今後そんなことはないだろうって思っていたから。

今は幼女だからそういうのとは絶対に縁がないって無意識で思っていたから。

頭がぐるぐるしてくる。

久しぶりに顔を合わせて安心させて「この後に僕が居なくなってもそんなに心配しな

いでね」って言うだけのつもりだったのに、いきなりゆりかが変なことを言い出したんだ。

いや変なことって言うのは失礼なんだけど、でもかがりならともかくゆりかがこういうことを当事者として言い出すなんてなんだか不思議すぎる感覚だから。

「……………」

いや、冷静になろう。

誰かが僕のことを好きになるなんて……人としてならともかく恋愛の意味でなくて、そんなことがあるはずがない。

だって僕にはなんにもないんだ、そうだよね、あり得ないんだ。

今の僕はこの通りにこんな小さい心は男で体は女なキメラだし、友達にしても家のことを一切に……肝心なことは誰にも言えないんだし、なにもかも普通じゃなくてすべてが嘘まみれなんだよ？

だからきつと違うはずだ。

だつたら……つまりは逆だつたり？

「僕のこと実は苦手だつたんだ」とか「嫌いだつたんだ」とか言っているのを、そんなかなりショックなことを言われた僕の脳がとつきに真逆の認識をしたとか？

だからゆりかは実は僕をそこまで友人とは見ていなくって、こんなめんどくさいこと

にもなっていてあんな迷惑をかけたんだ、こんな僕とは「いい機会だし……」って距離を置きたいとか？

よし今夜は吞んで忘れよう。

さすがの僕でも面と向かって嫌いですって言われたらしよげるに決まってるから。

「おーい、ひびき。戻ってこーい。多分また全然別なこと考えてるよキミ」

「……ゆりか？」

「うむ、私がゆりかだ。そして君が響。まずはOK？」

「……うん」

「あとちなみにコレ、告白シーンね？ 他の何物でもなくってきちんとしたヤツ。他

意とか含みとか企みとかからかうとか言い間違いとかが相手間違いとかが聞き違いとか、

そーゆーベタなのないからね？」

「……ゆりか」

「ひびき」

「君は僕の考えを読めるのか？」

「……ほんつと、普段はどこぞの名探偵って感じに頭いーのにどーしてこーゆーときは

ダメなのか」

どうやら読めたわけじゃないらしい。

まあそうだよ、もし読まれてたら僕が幼女になったニートですぼらな成人男性って分かるもんね。

「よし、こんせんさすつてのは取れたね」

「……そうだね？」

でもやつぱりおかしい。

何かが間違っている。

人間的魅力なんて皆無な僕にどうして、まだ未来のある少女の彼女が。

……こうして気がついたらゆりかがずいぶんと近くに来ていて目の前で手のひらを振っているんだし、さっきの考えで正解かも。

でも、もしそうだったとしたら……10年以上ぶりに友達って感じられる……年下だけど、さらに言えば女の子たちだけど、そんな子たちができたと思ったら相手の方から「距離を置きましょう」って言われたんだとしたら、僕は。

「ほいつ」

「!？」

目の前でぱん、と軽〜く両手を合わせられて意識が引き戻された。

……たしかこれって猫だましかいかいうものじゃ。

「今度こそ戻って来た？」 響。 いつもみたいに思索にふけるのは話聞いてからにして

ちよ。なにげに緊張してるんだからさ、私も。告白って、する方は死ぬほど恥ずかしいのよ? いい?」

「あ、うん……」

ふう、とため息をつくときベッドの端にぽふつと腰掛けて、少し頭を傾けながら見下ろしてくるゆりか。

「……やっぱ一回言っただけじゃ通じなかつたねえ……さすがは響。ま、知ってたけど? だって響、別のことを考え出すときとーに返事すること多いし。あと視線がその辺のテキストなものをつらつき始めるからみんな知ってるのよ?」

バレてた?

よくかがり相手には使っているオートでの会話っていうの。

ちらりとかがりを見てみる。

「?」

すつごく楽しそうな顔してるけど、やっぱりくるんってしている。

良かった、彼女にはバレていないらしい。

「で、さ? 改めて……はつきり言うしかないかあ、これむっちゃ恥ずかしいんだけど、でも響だしねえ……いい? 私の言う『好き』は友情のとかじゃなくて、もち恋愛の意味。だって私は響が男の子だってはじめっから思ってた、んで半分は事実だったん

だし問題ないって分かったし。……ま、女の子でも多分……言っただろうね。そんなときはもつと言うの迷っただろーけど……つまりはライクではなくラブよん。本気でガチの」

うん、さすがにここまで言わせたらもう誤解の余地はないよね。

というか最近の子って進んでるんだね……ああいや、僕が子供のころからたまにクラスの子がそういう話してたから多分僕に縁がなかっただけで昔からそうなんだろう。

「……とりま何か返事ちようだい？」

「……え、えっと。まず君は、あのとときの僕の……年越しのときのあのとときなので、僕が。

心は男だけど体は女だっっていうことは理解しているんだよね？ あと面倒なことをこれでもかと抱えているっていうことも」

「あ、そっち……響らしいかあ。うん、それも込みですよ？ もちろん」

なんか脱力してるゆりか。

なんでだろ……最重要な大前提を確認したのに。

「だってさー、あのとときもそうだったけど……てゆーかめつたにフード外してくれないからわからなかったけど、でも今ならこーして」

ゆりかが被さるようになって……いつものかがりみたい……手ぐしで僕の髪の毛の先の方をすき始める。



「長い髪の毛だしまつげ長いし、綺麗っていうよりはもはや美しいって感じ。 んで私よりも幼い系でクール系な女の子なんだよね……体の方は」

「……まあ、な」

なんとなくで僕も、いつも視界にちらちら入ってくる横の髪の毛を指に絡めて目の前に持つてきてみる。

「……それ！ ほんつと、どーやったらそんなナチュラルな感じの髪の毛が生えるのか……光に当たつてるとなんかプリズムみたいなのが浮き出てるし、ほんとなんなのさ！ ずるい！ 羨ましい！ やっぱり生まれって大切……」

「ゆりかの髪も綺麗だと思うけど？」

「……そう……そう……そう……そう……そう……」

「？」

「……なんでもない！ で！ そんな響だけど、私、ついこないだまではそーだつて知らなかったからさ！ はじめっからちっこい男の子だと思つて、いや、思い込んでいたの。」

私には年下属性あんまなかったはずなんだけど……人生って分からないのよ」

ゆりかも肩の方から髪の毛を引っ張つてきて、それを僕とおなじように持ち上げて陽の光に照らしている。

黒髪が、陽に当たつてるところだけ少しだけ茶色っぽくなっている。

「だからさ、男の子だって思っていた以上……年聞くまでは小学生だって思ってたから、よっぽどのがなきや仲良くなれないだろうし、ほら、さすがに小学生相手だと世間体がーとか以前に接点皆無でしょ？ でも同い年だって……学校通ってたら同じ2年だって知ったから。——会ったその日からずっと、うすうすこういう気持ちがあつたんだからさ……こうして本気で好きになっちゃったとしたって、仕方ないじゃん？」

いつもだつたらもう片方の手でおんなじことをして「ヒゲ！」とかしそうなのに、そうする気配もなく、ゆりかは、ただただ真剣に僕を見下ろしながら語ってくる。

「……だって。だってさ？ 初めて会ったときから……私が響のことなんにも知らなかったときからさ？ その。……気になつてたんだもん。まさかのこの私がほんのちよつぱり、それもただの偶然でこうなっちゃつたの。あはは、こういうのってほんと理屈じゃないんだねーって」

## 44話 彼女からの、告白 1 2/4

ふわりとゆりかが見下ろしてくる。

ただどいつもものように身長差で見下ろされてる感じはしない。

ただただ真つ正面から……真剣に僕を見つめている。

「私ね。 私はね?」

そんなゆりかがいる。

「昔っから男っぽい性格だったんだ。 小学校までは髪の毛短かったんだよ? 今からじゃあんま想像できないだろうけど、相当男の子っぽかったの。 だつて髪の毛……響ならめっちゃわかるだろうけど、めんどくさいじゃん? だから短くして男の子だつてよく間違われたくらいにさ。 それはもう男の子たちと遊んでいたら女の子が混じっているってぜんっぜん気がつかれないくらい。 まー、声変わりとかもまだな時期だしさ、小学生って」

「ぱつっんとは言え髪の毛は肩まである今の彼女からは……うん、確かに想像できない。」

「けっこーな割合でさ、中学になって制服着るまでは私のこと男だつてずーっと勘違い

してたご近所さんがいたくらいにはね。あれはちつとばかり傷ついたなあ……んで、そんなちつちやいころからずつと、私は他の子……女の子たちとはズレているなつていう自覚もあつたくらいに、違つたの」

やつぱりこうして自分のことを話すのつてなんだか恥ずかしいんだろう、頻繁に髪の毛をいじいじしつ。

「だから当然髪の毛になんてきよーみなかったし、外で走るのに邪魔にならないようにつて理由でも短かつたんだし。冬ならともかく、夏はねえ——……服装だつてシャツとズボン、普段の響みたいな格好でさ。『私は私のままでいいから、せめて見た目だけは女の子らしくして』つてお母さんとお父さんから言われなかつたら多分今でもだつたかも。『中学生になつたんだから、せめてカッコだけは女の子らしくして、お願いだから』つてさ、何かあるたびにものすんごく落ち込みながら言われてしぶしぶなのよ」

男子に混じつてゐる女子、あるいはその逆の子だつて……そういえばいた気がするな、小学生のころ。

そういう子たちとはなんだか波長が合つたからかそこそこに話とかしていた覚えもあるし。

でも僕にとつてゆりかつてそうは見えないんだけどなあ。

いや、もちろん話していると「ああそんな感じもあるよな」つてときはあるんだけど

も。

特にゲームとかマンガとかの話をするときには。

それもきつと「女子」って記号の男子よりは長い髪に女子の制服、スカートを身につけているからなんだろう。

ちやうど真逆の僕が良い例だ。

「最後まで抵抗あつたのがスカート。外に出る日はほとんども履かなかつたくらいだからさ……今考えるとありえないって思うけど、とにかくそんな小学生だったの。つまりはついこないだまでってことで。……だつてさ、休み時間とか放課後とか男子たちと校庭とか公園とかで走り回ってたかつたんだし、しようがないじゃん？ ゲームするときだつてあぐらかいてたし。いやー、スカートで走り回つてたりしたら先生とか他の大人とか、なによりもお父さんがうるさかつたなあ……。んで言うこと聞いて素直にホットパンツ……あ、短パンにしてたらそれはそれでイヤだつて。めんどくさいよねえ、男とか女とかつてさ。別に好きなカッコしても良くない？」

そう言いながら生地が厚くて長めな冬服のスカートをつまんでいる。  
冬つてスカートだものすつごく寒そうだな。

僕には耐えられなさそう。

いくら制服とはいえ、せめて冬くらいズボンにしてあげたらいいと思うんだけど。

いや確か「どれだけ寒くつてもスカートでがんばるっていうのが女の子なのよ！」ってかがりが言っていた気がする。

力説していた気がする。

なにがそこまで「かわいい」へ向かって女の子を駆り立てるのは知らないけど、でもとにかく大変なんだなあ、女の子って。

「んでね、私……中学になってしばらくするまでは、とにかく話し相手とか遊び相手って男の子ばかりだったの。だって私、ゲームだってマンガだってアニメだって……それも少年マンガとかそういう系が好きなんだし。当然少女マンガとかが好きな、かがりみたいな女子たちとは距離が開くワケじゃない？ 話も合わないし。いや、合わせられはするけどね？ 別にそういうのが嫌いってワケでもなかったから……だからいっつもマンガの回し読みしたりゲームで対戦したり外で走り回ったりっていうのを続けていたんだ。ほんとうに……ギリギリでおととしくらいまでは、ね」

ばさ、とスカートから手を離し、はあ、とため息をつく。

「ま、わりと好き嫌いな方だからさ、女子ともふつーに遊んだりはしていたんだけどね。でもねえ、だんだんと……そーだね、小学校の高学年くらいかな？ なんかやたらとオシヤレに意識しだしてだんだん態度も大きくなっていったって、仕切るような子たちが出てくるようになって。それからだんだんはつきりとグループっていう

のができてきちゃってさ。響ならわかると思うけど、ひとことで言えばギャルっぽい雰囲気ってヤツ。ああいうのが出てきてだんだんと世知辛くなってきたのだよ」

僕には特にそういう経験がない。

それはきつと周りを特に意識していなかったからなんだろう。

だけど人の機微に敏感なゆりかには、そういうのがきつとはつきりとわかつちやつたんだ。

それも同性のだしな。

女の子は男よりも早熟だって言うし、だから小学校高学年くらいからすでに多感な時期だ、思うところもあつたんだろう。

「で、そーゆー子たちがやったらと男と女ってヤツを意識しだしてさ、それがだんだんとクラス中で学年中で広まっていつて……まー、他のガツコ出身の子に聞いたりしたら別にそーゆーこともなく平和に卒業してきたっていうのもけっこういたし、たまたまなんだろーけど。でも、私のところはそーだったの。だからだんだん話し合わない子が増えてきて、放課後まで付き合う子っていうのが、だんだんと減っていつて」

ふう、と息をついているゆりかからちらつとかがりを見てみると

「！」

……ものすごくそわそわしている。

「!!」

もちろん体を揺らしたりはしていないけど、でも、その……表情が「話したい話したい話したい!!」っていうので満ち満ちている感じだし、なんだか力がみなぎっている感じ。

だけでもそれを懸命に抑えているのは偉い。

ちよつと、いや、かなり感心しているくらいだ。

後でゆりかの話が終わったら褒めてあげよう。

かがりには忍耐の経験が必要だろうからな。

「話したくても話さないでいる」っていう経験が。

今この瞬間、ここまでガマンできているっていうこと自体が奇跡みたいなものだろう。

言いすぎかな？

いや、正当な評価だろう、きつと。

「んでね、中学に入って顔ぶれががらつと変わってほとんど知らない子ばかりになったわけだけど……最初から男と女に完全に分けられちゃってさ、今までとぜんぜん違うもんだから。ほら、制服からして別々だし、小学校のころと違ってなんだかみんな『女子は女子、男子は男子と話すもんだ』っていう雰囲気になってたからさ？ あ、いや、



ギヤル系はいないからそのへんは楽にはなっただけだね」

ぱつつんをひと房持ち上げて、ぱざりと手放して。

「でも、運が悪かったのか……多分大抵の女子がある程度異性として意識してる男子がいるっていう環境になっちゃったからなんだろうけどもさ。前までの調子で男子と話したりしてると急に遮られたり割り込まれたりすることが多くなってる。『あ、これ、話しちやいけないヤツだ』って相手が増えちやつてさ……やー、今思えば危なかったわー、女同士のいろいろが怖いって今なら知ってるから……良い子で助かったわけ。」

今でもその男子と絡みさえしなけりゃフツーに仲良くやれるくらいだし」  
これだけまとまった話をしていたから疲れてきたのか、持つてきたジュースをぐーつと飲み込むゆりか。

「!!」

その隙に話し出そうとしていたかがりへ目配せ。

ちやんと意図を理解して、くるんがしゅんとしているかがり。

偉い。

後で撫でてあげよう。

かがりもこうやって「ダメなものダメ」っていうのだけは理解できているんだよな。ただそれを我慢できなくて、それで「自分も自分も！」って止まらなくなるだけで。

いや、それが問題なんだけども。

あと話し出すと人の話も合図もまるで無視、いや、気がつかなくなるのも問題だ。

ついでに言えばごそごそとカバンの中からお菓子を……まだ持ってきていたのか、を取り出すのも問題だ。

こういう割と、いや、女の子としてはとつても真剣な話をしている最中で……もちろん音は静かにしてはいはするけども……でも話を遮っていないでお口チャックができて、ただその1点だけは評価できる。

ほんとうに。

……ゆりかとかがり。

足して2で割ったらちようどよくなりそうだ。

心も体も。

「肝心のさ、話が合ってマンガの展開とか推しのヒロインは誰かとかだったたりゲームの話とかで盛り上がる……話してもいい系の男子たちでさえ、つまりはその、小学校のころのギャル系たちとおんなじで色づいて来ちゃってさ？ まあ中学になっちゃったらしようがないよね。放課後に教室に残って話したりするとみよーに意識されちゃってねえ。だつてその、目つきとか雰囲気とかがちよつと、ほら……変わるじゃん？

そーゆーときつて。もう何回もそーゆー女子見てきたし、察せられちゃうのよ。私

の……えっと、ないムネと会話してたりして笑いこらえるの大変だったりしてさ」

「飲む？」ってペットボトルを出されたけど、丁重にお断りだ。

だって甘いもん。

「……ちい、せつかくの間接が。ま、甘いからしよーがないかあ。で、そーゆーところが違うんだよ、響は。ま、そのへんはもーちよつと待ってね、もー少しで話、終わるから。せつかくすつごく恥ずかしいことしてるんだから最後まで言わせてね？  
そのままお口チャックよー？ かがりん？」

「っ！ っ！」

こくこくこくこくとすぐ反応しているくるんさん。

「うん……さつきから響がお口チャックさせてくれたの知ってたけどね。あとちよつとがんばって？」

同い年からもこの扱い。

うん、いろんな意味で安心だな、かがりは。

## 44話 彼女からの、告白 1 3 / 4

ゆりかからの堂々とした告白。

それが少しだけ途切れた静寂が……少しだけ離れたところ、かがりのお口の中でもぐもぐしている音で少しだけ邪魔されていて、だけど僕にとってはちよつとばかり心強い。

……といふかなんでゆりかはかがりがいるような……静かにしてこそいるけどいつガマンできなくなるかわからないような子がいる状態でこんな大切な話をし出したんだろう。

だって、分かっているはずなのにな。

かがりがこういう……恋愛っていうもの命っていう感じでも過ごしていて静かにできなくて、話すことと食べることが大好きな子だつてというのが。

まあ結果的にはこうしてまだぼりぼりつて感じのくぐもつた音が聞こえてくるし、くるんくるんしてはいるけど……おとなしくはできているからいいのかな？

……あ、そっか。

僕が、初期の僕が女子とのコミュニケーションみたいな本を漁つてたときにあったあ

れだ。

女子は告白でさえ……漫画とかで本当にあるみたいに親友とかを連れて来て立ち会わせる。

あれか。

あれだな。

僕にその感覚はぜんっぜん分からないけども、そうだと理解してみると理に適っている。

そういう意味ではゆりかも男っぽいって自分で言いはするけど女の子、なんだな。

「で、これで最後。だんだんというんな理由で減っていった話し相手とか遊び相手

……私がいちばん楽しいって思えるシユミが好きっていう相手がね。いなくなった

んだよ。 トドメが来たの」

「いなくなった？」

「うん。 ……今度は男子側の問題でねえ」

「いなくなった」って聞いて少しばっくりしたけど物理的にというわけじゃない。

当たり前前のことだって分かっている、こういうのっていきなり言われるとびっくりする。

「前だったらなんにもなかったはずの、フツーに友達やれてた子たちがさー、おんなじ話

題で盛り上がれて休みの日とかには誰かの家とかでゲームとかして遊べたその子たちがさー。もちろんほとんど男の子だったわけだけどさー。……思春期ってやーね、急にみんなよそよそしくなって距離取りにくくなるとげとげしてくるんだから。

あ、今ひびきにこくはくちゅーの私もか。まいつか、それはそれで」

とげとげ？

「んでね、男子たちと……今まで遊んでたよーな子たちと放課後にちよつと遊んだりしてるだけで、たったのそれだけで意識されちゃってみたいでね？ 私がいちばんどーでもいいって思ってたような女の子っていう属性で。『なーんかたまに変な感じになるなあ』っての感じるようにはなっていたんだけどさ……私としては同性の？ いや、私が男子寄りだからもち『男の子の友達』って思ってた子とかがさ、いきなり告つてきたりしてね。それもそんな気配まるでなかったじゃんって子たちからも立て続けに……あ、響もごめんね？ たぶん今の響もそのときの私とおんなじような感じだろうけど、せつかくだから最後まで言わせて。お願い、ね？」

「……もちろん」

「ありがと。そういうとこも……好き」

「そう言われて反射的に目を逸らした先。

!!!」

くるんくるんしているかがりをちらつと見て落ちつけた。

でも……目が、彼女の目がものすごくらんらんとしている。

くるんがくるんくるんくるんくるんくるんしている。

体が前のめりになってつま先立ちになって、そして口の中と手元が空っぽになっている。  
る。

……そろそろ限界そうだ。

終わるまで持つんだろうかこの子。

「そーゆーのが何回かあるときさ？ 私としては当然その気がなかったわけだし、必然的にその、お互いに距離が開くワケじゃない？ 告白して、してもされても以前の関係には戻りづらいワケなんだし？ ……っていうのも覚悟の上の今なんです、はい。ま、それは話し終わった後のひびき次第ってことで。で、そうこうしているうちに私とおんなじような話題で楽しめる子っていうのはほんの一握りの女子だけになっていって、その子たちともあんまり話せなくなっていくちゃって。だって、次々と色づいて来ちやつたもんだからさ。なーんで中学になった途端こうなのかねえ、ほんと」

ふう、と息を吐き、すう、と吸って。

「結局ね。 去年の今ごろ……いや、もうちよい後か、まではね。 りさりんとかの、ふつーに性格とかが合って少しだけマンガとかゲームとかそーゆー話題にもついてきて

くれるような女子しかいなくなつたの。や、ぼっちとかそーゆーのじゃなくなつて学校でフツーに話せる子ならいたよ？ いたけど休みの日とかに遊べる子が減つたつてこと」

去年の今ごろ。

つまりは1年前くらい。

——そういえば確か、かがりとゆりかにはじめて会つたのつて。

「……重くなつちやつたけど！ けどね!! あ、あとかがりんはもちつと我慢してね？

「これからが大切なところだから!!!」

!!!

ゆりかがぐ、つと指でサインして、かがりがすつごく嬉しそうな顔をしながらおなじのを突き返して。

さすがゆりか。

真横にいて顔を見ていなかつたとしてもくるんくるんしていたのを察していたか。

「てな感じでさ。 去年の春休み……あ、もうすぐだよね、今年のも……は、そーゆーモ

ヤモヤしたのとか、あとはそれまでみたいに友達んちで1日中ゲームとか……まー、りさりんとかともできたけど、でもやっぱなんかちがうし。 あ、これりさりんに言っちゃダメよ？ すつげー怒られそうだから。 んで『せっかく時間があるから』つてい



つもみたく宿題だけ先に終わらせてから、ワゴンでまとめて手に入れてきた古いゲームとかしてたの。古い機種のとかパソコンのとか。ちようどたまたま安くなつたギャンルゲーっていうの、暇つぶしにね」

ギャンルゲー。

この子たちの年齢どころか僕の年齢的にも古いジャンルのそれ。

ゆりかがよく話題に出していたっけ。

僕は全然したことがなかったからあんまりついていけなかったけど、よく「この中ならヒロインはどれがいい？」とか聞かれていたっけ。

「で、そのギャンルゲーなのだよ。当時は結構流行った感じの、今やつてもそこそこおもしろくってヒロインが多くって、っていうタイトルの。ちつと調べれば私だつてなんとなーく知ってるって感じのさ。それの、あるタイトルの……ある子のルートを進めて、お腹が空いたけどお母さんいないしお金はもらつてたしでお昼に出て、その先で——まさかの、つい昨日今日で攻略中にあつたようなシチュまんまな場面と、ヒロイン……じゃなくて男の子だからヒーローだよ。そう、会つちやつたんだよ。出会つちやつたんだ」

そうしてゆりかは「ふへっ」ってあいまいな笑顔を浮かべつつ、僕がなんとなく察したその続きを口にする。

「今思えばさ？ 性別は反対なんだけどそのお相手が君なんだ。つまりは君が、私にとつてのヒロインだったのだよひびき。あのときのかなーり混んでたお店で『知り合いないのに相席にさせられちゃう』っていう、これまたゲームであった場面そのまんなまでね。もつとも響はそれ、忘れてたらしいけど……思い入れもない他人だったんだから、しょーがないよね」

「……!!!」

とうとう両手で口を押さえだしたかがりが視界の隅で震えている。

ステイ。

そういう目を向けたら、こくと輝く瞳。

精いっぱい我慢しているんだろう。

えらいね。

でもここで邪魔したら間違いなく大変だからね？

僕のせいで2人が友達止めるとか気まずすぎるからね？

「いかにも事情抱えています的なカツコ。ま、お肌が弱いつてゆーのと、あとは多分この前聞いた性別の件のせいだっていうのは今だから知ってるんだけどね。でもあのときはね……私よりも小さいから小学生かなって思ってた。そんなくらい小さくて顔もほとんど隠れてて、だけどなんでか知らないけど目立っててそのときお店に居た人たち

から見られてた響。 実際には、一瞬だけど見ることができた、ものすつごく……なんていうのかな、美しいって感じの顔」

小学生……いやまあしかたないんだけど。

「そんな子から『食べきれないからいる?』って聞かれて、全然食べてない……ゲームの料理とは違ってポテトだったけどそれをもらって、食べているのをちよつとだけ見つめられてさ。 それって、そのつい何十分か前まで進めてたルートの子との出会いの場面そのものだつたんだよね。 だからなんていうかその、舞い上がつちやつて。 まー落ちついてみれば実際にはシチュ、細かいところがいろいろと違ったのよ。 響と連絡取れなくなつてなんとなくでプレイしてみたら、けっこー思い違いしてて。 だけどそのときの私はそれはそれはもう嬉しくなつちやつてさ。 あ、勘違いしてたの寝不足だつたつてのもあるかも」

ポテト。

フアストフード……ハンバーガーのセットの。

あのときの食べきれなかったあれ。

重い荷物に耐えきれなくなつてたまたま入つたあのお店のを。

捨てるのがもつたないからつてなんとなくであげたあれ。

——でもどうして僕はあのとき『見ず知らずの小学生にも見えた子のゆりかにあげよ

うって思っただろう?」

「いやー、あのときはほんとう舞い上がってましたなー。だから私あのあと『ついに妄想を具現化したぞお!』なーんて同好の士っていう感じの友達に連絡しちゃった。

あ、りさりんのことね? だってりさりん実はギャルゲーとかいける口だし……ま、もちろんお返事は『ちゃんと寝なさい』だったけどさ」

前の僕から今の僕に変わった、あの日のあの朝の次の日。

事実を確認するために家を出たその日に、今の僕になつてすぐに——出会っていたんだな。

「でもさー、やっぱ第一印象ってなかなか消えないよね? あと美化されるし。てなわけでそれからもずっと……そのゲームをクリアし終えて続編とかまでやって学校生活が始まっちゃって。んでなんとなくそのゲームのそのキャラ……あ、この子もまた響そつくりなんだよねー、ギャルゲーだから女の子だけ。その子によく似てて出会いがびつくりするくらいなタイミングだった響ともあのお店に行っても当然に会えなくって。だんだん忘れかけてただけ……そこで2回目!」

びし、っと指を突きつけてくる。

「悪い人たち……じゃ、なかつたんだよね? だけど響が困るくらいにごーいんな感じですか? 悪い人たち……あ、ゲーム中だと『特殊な事情を抱えてるその子』を連れ去

ろうとしていたヤツらなだけどき、ともかくそーゆー場面に遭遇しておんなじようにして助け出せて。ほんつとあのシナリオのあの響似のヒロインとピンポイントでおんなじ場面を体験しちやつたからさ、いやー、そりゃーももつかい舞い上がったね、舞い上がりましたね、このときはまえのときいじょーに！」

語っているうちに……まあ内容が内容だしな、顔が赤くなってきたいてうっすらと汗が垂れてきているゆりか。

「ぐーぜんだつて思つてたけど、それも2回も立て続けに起きればそれは必然とか運命じゃん。そー思っちゃつたのだよ。だつてあのころはまだゲーム消化し終えてなかつたからさ、つまりはギヤルゲー思考に染まつたわけ。んであのときにどさくさで手を繋いで引つ張つたりして、響が私の妄想なんかじゃなくなつてちゃんと存在する人なんだつて確かめたりもしちやつたし！ 私よりも小さくて、でも話してみたらまさかの同級生で。……これで私は、もう。それから、これまで……変わっちゃつたと思つていた、みんなに。心の底では恋愛脳つてバカにしたみんなに、追いついた。追いついちゃつたんだ。……もしかしたら私つて、みんなより少し遅れて思春期になつたのかもね。そんな感じ」

## 44話 彼女からの、告白 1 4 / 4

「やー、あんときはほんっと、舞い上がっては落ち込んでって忙しかったのよー。響が本当の存在だつて実感するまでさー」

大みそかの……僕があんな風になる前のときのように顔が真っ赤になっていて、走ってきた後のようにぼつぼつと汗がにじんでいるゆりかがヒートアップしている。

「ここまで来たら言いたいこと全部言わせちゃった方が良いな」って思つて黙つておく。かがりが邪魔し出したらおしまいだね。

「だからさ、響にとつては迷惑つていうかうざかつたかもしれないしそうだったんだろうけどさ？　かんつぜんに私ったら『響を攻略するんだ！』つて沸いちやつててさ……だからああしてがんがんメッセージ送つてとにかく私のこと知ってもらつて、ついでに響のことも教えてもらつて仲良くなれそうな話題を探つたりしててさー」

それが、みんなの中でも飛び抜けて多かつたメッセージとかの理由。

どうでもいいようなこととかゲームとかアニメとか好きな芸能人とか、とにかくなんでも……今思えば手当たり次第に脈絡もないような会話。

あのかがりですえまだ一貫性があつたくらいだからな。

……そういうことだったのか。

ただ話し好きで、友達みんなと朝から晩までやりとりしていないと気が済まないタイプの彼女なんだって思っていた。

彼女たちの授業中とかに「だるい」とか「ねむい」とか送ってきていたのもあつたくらいだし、適当に流し見しちやつていたんだけど……そつか、そういう感情があつて、だからこそ僕を知りたくつて、知つてもらいたくつて。

「そーゆー状態がしばらく続いてさ、返つてきたメッセージとか眺めてたら……あることに気がついて、んで自己嫌悪。だつてさ、これじゃあさ……小学校からなんとなく雰囲気変わってきてやだなーつて思つてた子たちとおんなじ思考回路じゃんつて、気がついちゃつたから。私、そーゆーのとは違うんだつて思つて、だからこそもやつとしたまま過ごしてたつていうのはさつきまでのとおりなだけどさ、だからこそこう……ずばつと心に来ちやつたんだよ。なんてゆーか、その……気がついちゃつた。私、内心バカにしてたつて。そういう子たち。そのバカにしてたみんなと私も結局はおんなじで、ただ私が……そーゆーのに目覚めるつての？ す、すつ……好きな相手を見つけるのが遅かつたつていう、ただそれだけなんだつてさ」

僕もそういう気持ちは分かる。

みんなよりも気がつくのがだいたい遅れていて、だからこそみんなからは何年もずれ

て、遅れて気がついたようなことってたくさんあるから。

「…………ふう。ま、それもしばらくはスマホ越しのやりとりで満足してただけだね。なんだかんだでときどきは会ってくれてたしき？ だけど問題はかがりんよ…………話聞いたらすでに響とおんなじくらい前から知り合ってた仲良かったことで、ちよつと焦つてきちゃったのよ」

実際には、ほんの1時間くらいの差で知り合っただけ。

たつたのそれだけだったんだ。

前の僕が今の僕になってから30時間も経っていないときに僕はこの子たちと。

「あ、静かにしてくれてありがとねーかがりん。けど、もーちよい我慢できる？

…………ん、ありがと。でさ、響のことしか頭になかった私にとって、私以外の…………それも同級生の女の子の知り合いがいろいろでつかくて男の子好きな感じのかがりんで、さらにさらに言えばこれまた私とおんなじように一緒に買い物とかカフェとかでデートしてたりしてたつて聞いて嫉妬つてヤツしちやっただ」

「？」  
我慢できているのはえらいけど、このへんになるとあまりピンときていない様子のくるんさん。

このへんはやっぱりくるんさんだなあ。



なんだか見ていて安心する。

普段から恋愛もの、飽きるほどに飽きずに貪っているのになあ。

「まーね、響にその気が……今でもたぶん、いやほとんど絶対にないっていうのはもちろん理解してるけどさ？ でもね、そのときは……響といつも距離が近くって頻繁に手とか肩とかでくっついてることが多くって、響もそれを嫌がってなくなつて。だから私。まーそりやもー焦るよねえ、そんなの見ちゃつたらさ。私、遅れてるつて。

かがりんにまで『先越されてて響が落とされそう！』つて相談したりさ。そんなときに焦っているいろいろ恋愛もの読んだりしたら、これつてまるで恋する乙女そのものじゃあなつて気がついて、これまた自己嫌悪して。で、それもさらに恋愛脳そのものだってわかっちゃうつて2度ダメージ受けちゃつてさ」

とうとうハンカチを取り出してこめかみを軽く拭っているゆりか。

そして隣ではものすつごく楽しそうな顔をしてわくわくしているかがり。

「ふいー、一気にしゃべると疲れるねえ。けどせつかくだしあとひとこと話させて？

ここで言い終えられなかったら……その、困るし。で、そのあとは私なりに……参考文献、かつこ主にギャルゲーとマンガかつことじだったけど、そーゆーので必死に響に近づこうつてがんばった。『かがりんとそれだけ出かけてるんだから私とだつて！』とか言つて連れ出したりしたし……つてか、あのとき本当に外で病気悪くしたりし

ないでよかったよねえ……。あと、小学生以来に男の子を部屋にまで上げたり。これ、ものすつごく覚悟してただけだね。だって、ねえ？ 意識してる子を連れ込むってヤツじゃん？ まー、響はちっちゃいから思ったよか緊張しなかったし、それに響だし多分心配なんて必要ないってわかってたからできたんだだけね。お母さんだってまさか私が……。言っちゃ悪いんだけど、小学生、年下に見える響を意識してるだなんて想像すらしなかったみたいだし」

くるんが収まらなくなってきたている。  
荒ぶっている。

「あ、あれは焦ったなー。あ、あれつてのはかがりんが。恋敵だって勝手に思い込んでたかがりんが響を交えてのお泊まりしようとか言い出したりしたときには、めっちゃ、ね。だからこそ、それからはもつともつと距離を詰めて響に意識させてその先に行こう——そんなこと考えながら夏休みを終えたワケなんだけど。そこで響が……入院しちやった。それも、いきなり」

冬眠。

僕がこの世界に居なかつた3ヶ月。

「なんとなくそうかもとは思ってたけど、でもショックだった。だって急に既読もつかなくなつたし、休み明けの最初のおやすみの日に約束してたところにも来なかつた

し。……嫌がられるって知ってたから控えてた電話もダメになつてたし。もちろん病気関係だろーってのはわかつてたけど、でもそのときの私はね、もしかしたら響に……私視点ではかなり強引に迫つてたせいで嫌われたんじゃないかって思つてもいいたりいて」

ふう、と、息を吐き出して。

「でも、ずーつと嫌われたかもつて落ち込んでた秋も冬の初めも……クリスマスときの響からの連絡で一氣にどーでもよくなつて。でもいざ会つてみたらものすんごく具合悪そうで、つらそうで。でもでも、これからまた会えるようになって、あと私を嫌つてじゃないっていうのをきちんとわかつて『じゃあこれからまた、少しずつ近づこうかなー』なーんて思つてたら……今度は響が女の子、あ、いや、女の子だけど男の子で、男の子だけど女の子でつてのを聞いて。あのとき、みんなと話しながら頭の中はぐるぐるしてたけどさ? 『響がたとえ女の子のカラダ持つてたとしても、中身が響自身男の子ならこの気持ち、持ち続けているのかな』……そう思つてたら急に血を吐いて倒れて。だから、頭の中は完全にぐちゃぐちゃになつちやつて、あのとき私、なんにもできなくなつて。改めて響がどんだだけ大変なかつてのを知つて、でも今日無事な姿見られて、でも今度は……きちんと治すために遠くへ行く。そう聞いたから……言つちやつた」

ゆりかが話し終えてしんとする病室。

ゆりかはほっとした顔をしていて……あ、だんだん顔がさらに赤くなってきたているな、後ついでにそわそわしてきている……かがりはゆりかのその顔を見て……あれはコイバナというものを話しているときの顔つきだから、まりはものすごく興奮していて、今にも爆発しそうな雰囲気です。

どう答えていいかわからないしどつちかが何かを言い出しそうだから待ちの姿勢でいたら、先に声を上げたのはゆりかだった。

「……はっずー！ これマジではっずい!! なにこれなにこれ、告白ってこんなにこっぴどくかしいもんなの!? いや資料ではさんざ知ってたけど！ むしろその場面を見て喜んでたクチってかそれが楽しくてギャルゲーとかハーレムものとかプレイしたり読んだり見たりしてけど!! いやこれマジびっくりするくらいはっずいよ!! 一気に話してるときはまだマジだったけど！ いや途中からはふんばってただけだけど、でもでも息は苦しくなるし汗かくの止まらなくなるし話そうって思ったことよりも勝手に口が動いてなにがなんだかわかめになってたし!! ごめんね響！ あと静かにしてくれてありがとかがりん！ でも私、当分アニメとかマンガとかで主人公に恋してるヒロイン見れないじゃん！ だって今のこれ思い出しちゃうし！ あ——もう！」

「ぬうう」とか「なああ」とかよく分からない悲鳴を上げながら僕の足元の布団に顔をう

ずめるゆりか。

それが彼女なりの誤魔化し方なんだって知ってるから黙っておく。

……って言うか、これ、ここからどんな返事とかわいたら良いのか分からないし……ほ  
ら、僕って経験ないから……どうしよ。

## 45話 彼女からの、告白 2 1 / 7

「あー恥ずかし。　　もー恥ずかし。　　やんなつちやうくらい恥ずかしいねえ、告白って。イヤ、ほんつとマジで。　　……こんなのマンガとかギャルゲーとかのヒロイン特有のカワイイのを見るための演出だつて思つてたけど、いざこうして体験してみるとわかる！　　カオ真つ赤になつてたりもじもじしてたりひゃーとか言つてたりしてるの見て悶えてたクチだけでも!!　　めつちやわかるコレ、すんごいの!　　……あ、コレしばらく、いや、もしかしたらけつこー先までギャルゲーでヒロイン攻略とかヒロインが一途な作品とか厳しいかも。　　うあ——……」

ひととおり言い終わるなり僕から顔を背けつつベッドから腰を上げて歩いて行つた先の窓を開け、外を見るようにしながら背を向けているゆりか。

「ふいー」とか「にゃー」とか、いつもどおりな感じの奇声を上げている。

あれはゆりかが悶えているという状態なんだろうか。

たまにこつちをちらつと見ては「やんつ!」とか言つてくねくねしているし、一見普段通り。

けどこんなことを考えている僕もまた、知識とかでは知っていたけどそれを直接僕自身に向けて言われるのは初めてなわけで、つまりは僕もまた動揺しているんだ。

そんなことを言ってもらう資格なんて、権利なんて……僕にはないのね。

けども、答えられないのはしかたのないことだけでも、それでも返事はしないと。

ゆりかにとつても僕にとつてもちゆうぶらりんになつちやうから。

「……ゆりか」

「ひゅやいいいっ?! ……あ」

……いきなり声をかけた僕も悪いけど、それにしたってどんな声……どつから出たん  
だろ今の声。

初対面のときにも奇声上げてたけどもこれほどじゃなかった気がするし……聞かなかつたことにしよう。

「……うわこんな声出るんだ、私の口から。マジ恥ずかし。今日1日で何年分の恥ずかしさなんだコレ」

そう冗談っぽくは言ってるけどもさつきからの真つ赤な顔は変わっていないし、僕からは触れないであげたほうがいいだろうな。

「えっと、まずは……その、僕のことを」

なんか気まずい感じが薄れたから口を開く。

……これを見越してわざとおどけたのかな。

「性別のこととかをきちんと言っていないかった僕のことをそこまで好意的に想っていてくれたのが……とても嬉しい。嬉しいんだけれども」

「嬉しいんだけど」……なんて言おう。

なにか言わなきゃって思ってたあたりあえずで話しかけてみたけど、その先が出てこない。

だってこの歳になって……今までが今までだったわけで当然ながらこんな経験なんてないし、つまりはどう断ればいいかなんて……かがりに勧められて読んだりしたマンガや本でもこういう場面に興味がなかったから流し読みだったし、今までだってそもそも興味がなくて触れてこなかったからどうすればいいかなんてさっぱりだ。

でも、受け入れるっていうのはあり得ない。

僕はそもそも別の人間の姿になっているわけで、ゆりかはこの体に入っている僕が……好きになったわけで。

同世代って言い張っている幼い体と……元の僕の体とじゃ全然違う。

いろいろと受け入れられる理由がない。

僕自身もそういう感情を解していないんだし、断る以外の選択肢はないんだ。

僕を好いてくれている、つまりは人として好きで、さらにそれより先の好きって言う



わけで、しかも男として……同学年として好きって言うてくれるその気持ちは嬉しい。それくらいは僕だって感じられる。

「うおーい、ひびきや、戻ってこーい」

「……あ、うん」

「いーのいーの、それもまた込みで……えーい、恥ずかしいでだ、今日は遠慮なんてしねえ！ ……それも、響の……み、みりよくってヤツなんだからさ……あ、やつぱらずかし。 ……こほん。 でさ、響。 今のね、答えなくてもいいからね」

「……え」

「今のは告白。 そ、コクハクってやつなんだけどさ、どっちかっていうと気持ちの、私の気持ちをきちつとしておきたかっただけの告白ってやつだから、あんま気にしないで？」

「……ゆりか、それはどういう」

「えつとき、だつて響、もうしばらくしたら遠いところに行って、あ、この言い回しなんだか不吉っぽい？ なら物理的に私たちと離れちゃってさ、それも当然……月単位、年単位なんでしょ？ で、恋愛ってさ、現実には遠くで続けたとしても……その、直接触れ合わないと。 あ、やらしい意味じゃなくてね！ あ、ごめ、私なに言つてんだろ、今のはナシナシ！」

うん……まあ中学生、それも女子ならそういう知識もあるよね……。

少し気まずかったから、両手を突き出して顔と一緒にぶんぶんと振り回しているゆりかから目をそらしてみる。

「……………」  
……ものすごいにやけ顔をして恋愛ものを読んだり語ったりしているときの。

いつもの表情をしているかがりと目が合った。

「……………」  
ふいつて目を逸らして元通り。

この子の今も見なかったことにしてあげよう。

だつてくるんくるんくるんしていたし。

「で、話戻すけどそういう……いろんな意味で遠いところで想ったままだったり、もしも……ほんつとーに万が一で受け入れてくれたりしてもそれはそれで大変なわけだね？

もちろんお互いに。それに、年単位とか中学生にはつらいよ。下手すりや次会うのとか高校生になつちやうかもだし。だからさ、せめて。答えはいらなからせめて私がつつと感じて……多分もうしばらくは持ち続けるだろーこの気持ち。好きだつてキモチ。これだけは……響にとつては迷惑かもって思ったけど、でも伝えておきたいって思つちやつたから。身勝手でごめんね？」

そう言いながらいつものように雰囲気が悪くしないための笑顔を始めたゆりか。

……そんな彼女の顔を見た僕の片手が勝手に上がって、僕の口が勝手に開く。

「いや、君の好意なんだ、身勝手っていうことはないよ。それだけは絶対にないんだよ、ゆりか」

「え？ ……あ、あう」

「それは人としてとても大切な気持ちなんだ。少なくともそれを言った君と言われた僕が言っているいい言葉じゃない。身勝手なんかじゃない、大切な言葉だよ」

「……そーゆーこと、さらって言うから、もう……」

なんか心にズキってきたから「告白は悪いことじゃないんだよ」ってことを言いたかっただけなんだけど、変な感じになっちゃった。

「……うふ、うふふふ……」

ゆりかはまた赤くなり直したし、かがりからはとうとう奇声が上がりを始めた。

もう持たなそう。

「……ありがとね、響。あ、あとねあとね？ 響が良くなるの、良くなって走り回れる

ようになって背も伸びて、大きくなれるまでのあいだ……たぶん何年も覚えてなんていられないだろうけど、でも、少なくとも本格的に治療っていうのを始めてから2、3年。

あ、いや、そりゃあ私だって短いほうがいいって思ってる、願ってるけどさ、長くな

る可能性だつてあるわけじゃん？ だからさ……少なくとも、今ここに」  
頬に少し赤みか残っているけど……普段のゆりかの、ほんのちよつぴり笑顔が浮かんでる表情になつて。

「ここにひとり。私、関澤ゆりかつていうひとりの女の子がこうして、響のこと……事情があつてもなくても、私としては男の子だつて思つてる響のことを好きな私、つていう女の子がいるつてこと。それを覚えておいてくれたら、あつちに行つてつらい思いしてても少しははげましになるんじゃないかなつて、そう思つたのもあるの。あ、もちろんこれはついでだけど本気だからね」

……多分そのためにわざわざ告白なんてしてきたんだろう。

それくらい……僕にだつて分かる。

こんなに年下の女の子なのにこんなに年上の僕が思いも付けない形で勇気づけてくれたんだ。

……そつか。

これが、本当に嬉しいつて言う感情。

海外での治療つていう嘘の言い訳を聞いて、信じてくれたから。

「あー死にそ。 もー死にそ。 恥ずくつて……んがー!!」

恥ずかしくて死にそう。

……うん、分かる。

だって僕も……さすがにこれだけの好意をぶつけられたら……顔くらい熱くなる。

はたしてこれは顔に、表に出ているんだろうか。

ゆりかは絶賛悶え中だしかがりはそれを観察するので精いっぱいらしくって、ふたりとも僕の方を見ていないからわからないけども。

いつも雰囲気を明るくすることに忙しくって、でもそれを楽しんでいる彼女が突然にこうして長々と……一気に僕のこととゆりか自身のことを語ってくれたのには、僕を……重い病気を治療するんだって思っている僕のことを心配してのことで。

実際にそれに近い感じになるのかもしれないだし、確かに不安な気持ちはあったんだ。

これからについての決心を固めたときから。

けど今ので少しは楽になった気がする。

……これが、友達。

仲が良くて大切な人から言われる言葉。

今まで考えもしなかったこと。

前の僕のままじゃ多分死ぬまでそういう機会がなくて、だからこそわからずじまいで終わっただろうこと。

そして今の僕になってとつても大変だったけど、でも冬眠も入れてもたったの1年足らずで……前の僕のままだったら適当に過ぎして終わっていたはずの1年っていう短かった時間で、僕は。

たくさんのことを、手に入れたんだ。

この後どうなるのかわからないけど、でももしも……いや、連絡はそのうちに取れるかもしれないんだから文字越しにでもこの子たちがこれからどうやって成長していくのかを知って……直接会わない以上にはだんだんと疎遠になっていく、それまでは。

もしも……とつても運が良くって再会できたとしたら、その成長っぷりを見て……また、一緒にこうして話せるかもしれないなくって。

そういううって良いなって気持ちだが、あのとときすでに僕の心の中にあつたから。

「あふ。少し引いてきたかなってかがりん近いよ離れてっ!!」なにしてんのかにその顔超こわいんだけど!!」

「あら……ごめんなさい……でもね、でもゆりかちゃんか、響ちゃんが。うふ、うふふふ……」

「……ひびきー! へるぷみー!!」

……ゆりかが抱きしめられてはぐばくされて悲鳴を上げている。

感情を抑えられなくなったかがり。

そんな彼女と彼女に抱きつかれたゆりかを見て、ちよつと笑いがこみ上げる。  
……彼女もまたきつと、僕にとっては大切な友人なんだろう。

## 45話 彼女からの、告白 2 2 / 7

「ちよ、だからいい加減離れて……も——……」

かがりをやつとこのことで引つpegしたらしいゆりかが荒い息をしている。

うん……かがりつて結構力あるもんね……振りほどけないの僕だけじゃなかったんだね……。

「あーあ、ガマンできててえらいなーって思ってたこれだよ。でもあんがとね、ここまで口挟まないでくれて」

ゆりかの口がひくひくしている。

目もちらちらと僕へ助けを求めている。

あのすつごい笑顔を至近距離で見たら、そういう反応になるよなあ……。

わかる。

すぐわかる。

だって着替えさせられたあとすぐっていつつもこんな感じだから。

それも着替えるたびにだ。

ああなっているかがりは半分トリップしているようなものだから別に放っておいて



も害はないんだけども、ひたすら耳元で何ごとかをささやきながらほっぺをすりあわせ  
てくるから怖いんだ。

「……かがりはもう少し離れようか。 ゆりかが落ち着かないって言っている」

「んー、しようがないわねえ」

そう言ううちやんと離れるかがり。

聞き分けが良いのも僕的には良い子って感じ。

「……それで、ゆりか」

「んう、なんだい響や。 おはなしはもーおしまいよ？ なるべく覚えといてほしい

なってだけ、だから答えとかは要らないって」

「いや」

「ふい？」

僕の半分くらいしか生きていない彼女が、こんなに小さな女の子が……今の僕の方が  
ちっちゃいけども……ここまで言ってくれたんだ。

「僕には」

きちんと応えなきやいけないんだ。

それがたとえ先延ばしのものであっても。

「恋愛的感情とか、そういうのはよくわからないんだ。 だからその気持ちに応える

ことはできない」

「……………っ！」

初めて見る……ゆりかが泣きそうな顔。

「……そ、そうだよね……わかってるってばさあ、だからさつき予防線も」

「だけどね、ゆりか」

この歳になるまで……学生時代というものを一応は経験してそれなりの人と接して、それからそこそこ生きてきて。

それでも僕にとって誰を好きになるとかいう気持ちは……純粹に人として好きだったという気持ちなら叔父さんとか飛川さんたち、あるいは近所の話し好きのおじいさんたちみたいに抱いたことはある。

……でも、話に聞くような、恋い焦がれるという気持ちは今までいちどたりとも抱いたことがないし、それに囚われたこともない。

だから多分。

下手したら一生このままなのかもしれないけど、でも、これだけは伝えておきたいんだ。

「ゆりか。僕はその気持ちだが、とても嬉しい。きつかけがどんなものであっても見

た目がどんなものであっても、僕を好いてくれて……それを僕に向けて言ってくれたの

が、嬉しい。 そうした気持ちを僕に抱いてくれたこと、それ自体がとても嬉しいんだ。

……この先にながあつたつて、僕は今の君の気持ちを忘れないよ」

「……あら。 あらあらあらあら！」

「……………ひ、ひゆえ……………」

たとえなにながあつても……………この先二度と会えなくなつたとしても、みんなといて楽しかつたつていう気持ちと一緒に、ゆりかのその気持ちを受け取つたつていうのも思い出としてきちんと閉まつておきたいんだ。

ゆりかのぱつつんの下の目を、改めてじつと見る。

陽の光が差し込んで茶色っぽくなっている、その目を。

「もし未来で。 たとえそれが近くても遠くても……………僕が、君が僕に持つてくれたような気持ちを理解したら。 頭で理解するんじゃないやなくてきちんと理解したら、たとえそのときに僕や君に別の……………好きな人というものができていて、あるいは結ばれていたとしても」

まあ多分そうなるんだろうけども。

だって人は1年でこんなにも変わるんだから。

「たとえ君が僕に対するその気持ちを薄れさせてしまつていたとしても、懐かしい記憶になつていても。 僕が理解して再会したときには……………今こそこんなにとつつかず

の僕だけど、きつと、今の君の気持ちに対しての答えを絶対に届けるよ。『あのときはありがとう』って」

◇

……僕が返事をしてからしばらくのあいだ、部屋はずつと静かだった。

ゆりかまかがりも身じろぎもしないでただただじつと僕の方や手元を見つめていて、さつきまでのが嘘のように静かになっていて。

話に夢中だったから今まで聞こえていなかったような、いつもの……入院してからいつものになっている、廊下の外から聞こえてくるアナウンスの音とか廊下で歩いている音とかそういうものが聞こえるようになって来たくらいには静かになっている。

けども反応がないな……ちよつと変だったかな。

僕だつてとつきのことだったからきちんとした答えにはなっていないかっと思つた。

だけど、それでもこうして目の前で話しているとそこそこの筋が通つていなくたつて意図がちやんと伝わるんだつて、この子たちと触れ合つて知つたんだし……多分問題は無いはず。

目の前で、手と手が触れ合う距離で話しているとなんとなく分かることがあるつて、この歳になつてようやくよく知つたんだ。

「……………」

それにしても静かだ。

普段からこうだったたら毎日でも来てくれていいのにつて思うくらい。

そんなゆりかはいつの間にかそっぽを向いていたらしい。

一方でかがりも……なんだかぼーっとしたような表情。

かがりはいつものことか。

なにかしら変なことを考えているんだらう。

どうでもいいか。

「素晴らしいわっ!!!」

「!？」

「お、おう？　かがりんや、まずは落ち着こ？」

「静かで安心するなー」つて緩み切った心にかがりの奇声が刺さる。

毛穴がぶわっと開く感じがする。

本当にびっくりした。

君、ここが病院だつて忘れてない？

僕が入院してる設定忘れてない？

「……まさか。　まさかまさか私が！　現実で！　目の前で！　それも、お友だち同士

が！」

あ、これ止まらないやつ。

「マンガとかドラマとか映画とかでなく本物の愛の告白！ それも、それも……情熱的な告白と紳士的なお返事という局面に思ってもみなかつたわとつても嬉しいわすこいわ涙が出てきちやうわだつて今日今この場でふたりに立ち会えただなんて私感激よ!!!」

「すげえ……一氣に言いおつたよ」

「すこいよね、この子。知つてた」

この子に耐えられる君もすこいって思うよ。

僕は無理。

心臓弱かつたらショック死するくらいだもん。

そんなかがりは……思いつきり勢いをつけて立ち上がったせいでイスが倒れそうになつて、慌てて後ろへくるとして……なんとか大きな音を立てずに済んだ様子。

「あ、よかつたねかがりん、立ち上がつてイス倒してド派手な音出さずにすんでさ。」

……ま、かがりんはかがりんだからね、恋愛命なんだしこーなるのは知つてたよ」

「あらそうなの？ ゆりかちゃんさすがね？」

これ、わからないで適当に返事しているやつだな。

詳しいことを説明するといつもなるやつ。

わかっていないからきちんと説明しないとくるんくるんしたままになるやつ。

……だから少しでもわからないことが出てきたらすぐに考えるのを止めて、なんとかで流すクセをどうにかしたほうがいいんだって夏休みのときにあれほど……。

……さすがに高校生くらいには治るよね？

治つてくれないと僕が心配だ。

この子の将来が不安すぎて。

やつはこのまま残ろうかなって思うくらいには心配。

「そんなにはじけてるのに最後まで黙つててくれたかがりんマジ天使。……だから途中でもしやもしやしてたのは見逃したげる」

うん、そうだよね……友人の告白の場面でおかしもしやもしやするって相当の度胸だよね……映画でポップコーン食べてる感覚だったんじゃないかな。

「でも思ってたとおり、告つてとつてもはずかっただけ。でももうひとりこの場にいるっただけで、そー意識してただけで……ときどき音が聞こえてたおかげで、ちよつとはマシだったかも。今だからわかるけど、響とふたりつきりだったら私、途中で止めたりチキンしてたかもしれないし」

「チキン？ あら、そういえば響ちゃんはずいぶん普通にご飯をここで」

「かがり、ゆりかの言うチキンは恐らく食べもの話じゃないよ？」

「ぐう」と鳴るかがりのおなかの音が抗議している印象。

……この子を同席させてよくもまあ無事に終わったものだ。

本当に。

奇跡的に。

何%の奇跡なんだろう。

小数点以下？

「んで、響」

「……何？」

今はどうでもいいかがりのことは置いておいて、ゆりかだ。

ふわっと髪をかき上げて……あ、汗かくとそうしたくなるよね、涼しい風が入ってきて汗が乾く感じになって。

「さつき『けっこー好き』って、なんだかめっちゃくちやにあいまいな感じで言ったけどさ？ あれが今の私の本音なんだよ」

「本音……？」

「……??」

「そ、本音。 てのも響と私たちには『時間』ってゆるいものが、タイムリミットがあるわけじゃん？ 海外に行っちゃうってゆるーとんでもないの。 だから『今しか言う機会な



いな、ならついでに私の気持ちみんな言っちゃえ』ってなったんだけどね。でもさ、そもそも私さっき言ったみたたく響に会う、たつた1年前までカラダこそ女の子……いちお、かがりんよりは思いつきしひびき寄りのお子さま体型だけさ……だけさ！ そのなかのいのかさんとはい比べものにならないけどさ!!」

「落ちつくんだゆりか。女性の魅力は顔や体じゃない。心、精神。価値観、人そのものだよ。……少なくとも僕にとってはそうだから無闇にそう悩まなくてもいい」

「嘘」

「僕が1回でもかがりに抱きつかれて鼻を伸ばしたことあった？」

「あ、ないね。むしろ飼い主に頬ずりされて嫌そーな顔してる感じだった」

だろうね。

「……どうして私がそこで出てくるのかしら？」

「………響」

「今度は何？」

ゆりかが脱力している。

「……ひよつとしてこの子のせいで今みたいになってる？」

「元からただ否定はできないね」

「……男って性自認、だっけ？ あるのにないすばでーに抱きつかれてもあの顔だもん

……大変ね」

「ゆりか」

「はいよ」

「君は、精神年齢がはるか下の男子から下心無しに抱きつかれて男性的な魅力を感じるか？　じゃれつかれてそう思えるか？」

「うん……そうだね。　私が男だったとしても……あんなたわわがあつても無いねえ……」

だよね。

良かった、僕が感覚が正常で。

## 45話 彼女からの、告白 2 3/7

「……こほん。で、話戻すとだよ。去年までの私はかんっぜんに恋愛とかにはキョーミない感じだったし、オンゲーとかじゃ女って分かれるとめんどくさいから男で通しても違和感ないらしいくらいには男っぽいとこ多いの。キャラクターとしての好きとかいう相手はみんな女の子だしねえ、今でも。美少女も美女も良いものなのだ」

さっきの続きが聞けるみたいって悟ったらしいくるんさんがくるんってし始めている。

「でもね？ 私が響に……はじめっからどきどきして、明らかに友情なんてもんじやない気持ちを持つてるのはわかりきってたんだし、事実夏休みまでは本気でそーゆーもどになっっちゃってたんだけどさ？ なっっちゃってたんだけど、でも今こうして……いろいろあつて、時間もあつて、少しアタマ冷えて、冷静になつて考えてみるとね？ ……これが物語とか友だちのノロケとかで聞くような、燃え上がるような恋つてやつ」

「お友だち!? ねえゆりかちゃん、それは誰のこと」

「かがり、人の話は最後まで聞くようか」

「そう言えばそうね！」

告白っていう、かがりにとっては大好物で……きつと、このあと何回も何回も思い出して何回も何回も何回も人にどんどん盛っていきながら話すくらいには楽しかっただろう会話を聞き終わって、その感想を朗々と述べだしていたくるんくるん。

また話し出しそうだって思ったなら「ほい」ってゆりかから渡された飴を……ためらいもなく口に放り込んでおとなしくなった。

……ゆりかが持つてきていた飴ちゃんでおとなしくなるあたり、この子本気で……。

「よし。でね、話は戻すけどさ、燃え上がるような恋ってさ？ ……私が最初っから響に持つてるこれって、ホントにそーゆーものなのかな？ そー考えてみるんだけど、今でもまだはてななんだよね。あ、もちろん好きだよ？ 好き。まちがいにゃなく好き。確実にらぶではあると思う。けどさ、好きになつてその相手のことしか頭になくなつちやつてどうしようもなくなつちやうつていう。そういうものかかって聞かれると違うんだよね。……ま、付き合ったりするつていう関係とかいうのを想像してみたら響しか思い浮かばないし、そこそこは好きなんだろーけどさ。……あ、ごめんね響、告つておきながらこんな変な感じで」

「ううん、程度のこととは置いておいて、僕のことを人として……男として好いてくれていいよ。ただそれだけでも嬉しいものだから気にはしないよ」

「……………うにゃ……………」

……そう言えばゆりかつて普段からいろんな感情、喜怒哀楽っていうものに。

わざとりさりんとかに向けておちやらけて怒られたり……っていう意図して場の空気っていうものを変えたりできるくらいには人の機微に敏感な子だって知っていたけど、そんなこの子でも恋愛っていうもの、好きという感情についてはわからないものなんだね。

女の子という生きものなのに。

まあゆりかもまだ中学生だし、僕なんかさらに10年くらい生きてるのに女の子の一種である幼女になって……それでも好きになる感情を理解もしていなければ体験もしていないから言える立場じゃないけど。

「……ゆりかちゃん、そんなの気にしなくてもいいのよ？ 響ちゃんが今言っていたように」

と、甘いものを口にしてところどころとしているからか、いくらかは落ちついた様子のかかりが……普通に話し始めた。

「ゆりかちゃんのそれって、一目惚れっていう恋愛の基本そのものなのよ？ それに理屈なんてないわ。衝動だもの」

？

大丈夫？

その飴ちゃんでおかしくなっていない？

「だって好きって気持ちには女の子の、いえ、男の子だって自然と湧き上がってくるものなのだから。その強さだって感じ方だって、人それぞれなのよ。それに、性別。響ちゃんの。それだって最初から異性として……いえ、たとえ同性だったとしたって、響ちゃんが心まで女の子だったとしてもよ？　そうして意識していたのなら、それを自覚していてもいなくてもそれは恋なのよ！　最近は同性婚とかも認められてきているし、たとえ女の子同士のもそれでも問題はまったくくないはずよ！　いえ、無いの!!」

途中で飴をカリッと噛んじやったと思っただけなら急にヒートアップした。

「やっぱ恋愛マスターなかがりんもそう思う？」

恋愛マスター？

この子、今まで恋愛とかしたことないって言っていたよな。

「それでね？　さっきのゆりかちゃんのことだけけど。ゆりかちゃんは響ちゃんのこと、出会った日からずっと考えていて『今どうしているんだろう』って考えていて。そして響ちゃんのことを……私は女の子だと思っていたし、洋服や下着のこととか女の子として意識しなければならぬことを聞かれたりして、だからこそ女の子だと思っていたけれどね？」

多分君は僕が男でも着せ替え人形にしたって思うよ。

「ついこのあいだまでは私……響ちゃんのこと、いつもドレスとかを着せられて女の子らしい扱いをされすぎていて、それで男の子っぽく振る舞っていて……でも、でもやっぱりふつうの女の子に憧れている、ちょっと小さいけれどでも立派なレディーだって……あらごめんさい、心は男の子なのよね」

「……そうしてときどきで良いから配慮してくれるだけで嬉しいよ」  
「ひびきー、そーゆーのはもつと強く言った方が良いって思うのー」

「ともかくそれでね？ ゆりかちゃんは、私が響ちゃんのお世話をするために触れていたりしていた私を見て、嫌な感情、焦りや不安といったものを覚えていたのでしょうか？ あ、お世話していたのはよく見ておかないとすぐに枝毛をほったらかしにするし服がズレていたりするし、脚を開き気味に座っていたりして心配だったからなのだけど……そうやってお世話をしている姿に嫉妬していたのだから、それはもう好きということなのよ」

「……かがりがここまできちんと話しているの、滅多に……ほとんどない気がする。」

「おお、ダテに毎日恋愛もの読み漁ってるだけのことはあるねえ。すげえ、わりと考察がガチ……あ、でもさ、前にかがりんさ、『好きっていう気持ち、そうやってわかっただけかかがりん自身はまだ経験していなくてイマイチわからん』って言ってたけど、今はわかるん？ いや、ふと思っただけなだけだよ」

「……あら。　そう、ねえ……」

「ま、いいや。　私もこの感情が、響に対するこのキモチが恋だって、好きだってはつきりわかったし。　てことで響、私は響のことフツーに……ってのも変だね、　けっこーじゃなくって大分かな。　大分、かなり好きだよ」

「……うん、ありがとう」

大胆に告白し直すゆりか。

女の子ってすごいね。

もし僕が逆の立場だったらこんな風には絶対言えないもん。

「あとありがとね、　かがりんも」

「ええ、　いいのよ。　だって……」

かがりが、さつきまでとはまた違う感じの変な顔をしている。

いや、それはいつものことだけど……かがりが口に出さないと感情を頭の中でぐるぐるしているときは表情も一緒に動くんだ。

この感じ。

この子の保護者をしていた僕には分かる。

これは何かに思い至って考えて、喜んで落ち込んで、はつと気がついた様子。

「どうしたんだ？　　またお気に入りのシーンでも思い出したのかな」



「え、またって……こーゆーのよくあるの?」

「うん。みんなといるときにはなかなか見ないけれど」

「え、ガツコでもみんなと……りさりんやさよちんと集まってるときでも、こんな力オシてるの見たことないんだけど」

「そう? よくしているよ?」

「おお、ここで衝撃の事実」

「どうやら一応は無意識で制御しているらしい。」

「だって意識していたら今みたいにこうしてくるくる表情を変えたりはしないだろうし、学校で高嶺の花なんてものにはなりっこないしな。」

「いくらおしやれで話し方も意識してお嬢さまっぽくて、がんばってくるんくるんさせられても……肝心の顔がこうまで崩れていたらやつぱり僕と同じような印象になるだろうし。」

「けど、だったらなんで僕の前だけでこうなるんだろう。」

「いや、今はゆりかもいるけどさ。」

「……どうでもいいか、どうせかがりだし。」

「……話が逸れちゃったけども、さっき言ってくれたこと、本当にありがとう、ゆりか。」

「……そうだ治療を終えたときに、もしもの話だけでも」

「わかったわ！」

「!?」

「かがりん、ここ病院、ここ病室、落ち着こ？」

「あのね、あのね？ わかったのよ！」

「分かったって何が……あ、なんかヤな予感ちよいタンマ今言われたら」

「私も響ちゃんのこと、好きみたいなんだって分かったのよ！」

「は？」

「……ええ——……私が告った直後にそれ言っちゃう——……？」

# 45話 彼女からの、告白 2 4/7

「かがりーん……?」

「? どうしたのゆりかちゃん?」

かがりが変なことを言い出した。

かがりもまた僕のことを好きなんだって。

くるんもいい加減にしないとね?

いやさすがに聞いて即座に否定というのはよくないな。

いくらくるんさんでも何の考えもなしにそんなことを、かがりにとっては一大事のはずの恋愛というものをそんな思いつきで言うはずがないじゃないか。

ないよね?

ないって思う。

ないかもね。

いや、疑わしい。

ただの思いつきかな……だって普段が普段だから。

「……かがり?」

「何かしら？ 響ちゃん」

「うっそでしょお……」

ゆりかがものすごく凹んでいる……そりゃあそうだ。

「？」

そんなゆりかを不思議そうにくるんってしているし、特に何かを考えているような顔もしていない。

……まずは確認だ。

本人の意志って言うのが大切なんだ。

……もつともそれは一般的な人間の一般的な精神状態が大前提なんだけども。

「かがり、落ちつこう……いや、目を覚ますんだ」

この子はよくトリップして錯乱する。

「ここは現実で、僕たちはこうしてここにきちんとして、実在の存在で。そして今までの会話はすべて現実に起きたことなんだ。君の白昼夢の中で起きた、少女マンガか

にかの一場面じゃないよ？」

「わかっているわ？ 響ちゃん、少し酷いわよ？」

「もちろんただの確認だよ」

わかっているらしい。

ほんとお？

……ほんとはってことになっておいてあげよう。

「かがりん」

「ひやいつ?! ……なんで響ちゃんはともかくゆりかちやんがそんなに怖い顔をしてるの!?!」

え、本気でご存じでない？

君、休みの日は一日中少女漫画とか恋愛ものの小説読みふけってるって言ってた気がするんだけど？

今の君の立場はその恋愛もので言うのと立派な泥棒猫ポジションなんだけど？

「今の。私がココロ込めてがんばったの。ねえ、がんばったんだよね？ いくらかがりんでもわかるよねえ？ 乙女の一大告白ってどんだだけ大変なのか、恋愛博士なかがりんには。ねえかがりん？ ……いや、下条かがりさん」

ゆりかがおつそろしい声を出し始めた。

やっぱり女の子って怖い……なんでそんなに急に気分を変えられるんだ。

一貫性というものがいいのか。

なかったなあ、そういえば。

だからこそこんなに苦労してきたんじゃないか。

「なんで急に丁寧に呼んで来るの？　呼び方が変わっているわよ？　何でそんなに怒っているの？　怖いわ？」

ゆりかは素が男っぽいからかかなりマシなほうではあるのに、それでもこれだからなあ……まあ今のは完全にかがりのせいだから擁護することすらできないんだけども。

うん、まあ僕が口挟む場面じゃないなあ。

「もうっ、ふたりして！　私、ふざけたりなんかしていないわ！」

「それなら今のは何ですか下条さん」

「かがりって呼んでちょうだい？　今のだって思ったことがつい……そう、つい口から漏れてしまっただけなのよ」

「ほお……へえ……」

この子のこういうところ、結局は治らなさそうだなあ……一応夏にそういうことがあるたびに言ってきたつもりだったんだけど結局ダメだったなあ。

でも今回ばかりはさすがに見過ごせないしダメ元で言っておかないと……この先のゆりかとの関係すら危ういかもしれないし。

というか喧嘩になってもおかしくないもん。

ゆりかが一方的に我慢する関係って言うのもまたあとで拗れそうだし。

僕のせいで別れた後に友達じゃなくなるのとか勘弁。

ほら、女の子の友情って男の取り合いで……とか言うし？

「その、かがり。今から言うことを落ちついて聞いてほしいんだけど」

「なにかしら響ちゃん？　ね、ねえ、先にゆりかちゃんか怒っているのを一緒に止めてほしいのだけれど」

ゆりかに目配せをして「任せて」って伝えて怒りを鎮めておく。

「かがり。君はずつと前から……出会ったばかりのころからずつと君は、恋愛ものことについて、あるいは友人のそれについて延々と語ってきていたけど」

「あ、やっぱそーなんだ」

「うん。それはそれはもう」

「でもそれはー！」

くるんがくるんとなり。

「話が終わるまで我慢してくれかがり。人の話はおしまいで聞く。そうだろう？」

「？」

「むう……はあい」

くるんがへによんとなった。

「こまでしおれていれば少しは持つだろう……多分。」

「さて。……ゆりかからはたった今、僕へ……出会ったばかりのころから異性として

意識してくれていたという話をされた……してくれただけでも」

「うえへへへえ……」

あ。

今の照れてる声でちよつとどきつてした。

「……ばかりだけれども、それに横入りしてきたのが君なわけなんだ。それは恋愛つて言うものを知識だけでしか知らない僕でさえルール違反だとは知っているよ？ ゆりかがこんなに怒っているのもそのせいだよ」

「響ちゃん、なんだか少し怖いわ？ もっと優しく教えて」

「で、だ」

いや、僕だつて叱るみたいなことはしたくないけどもゆりかの気持ちが取まらないからね？

それは君のせいなんだつて教えないと行けないからね？

「君は『好き』っていう気持ち自体を、ついこのあいだまで……あ、いや、夏休みの終わりにくらいに君の家で聞かれたあたりまでは少なくとも知らなかったはずだよね？ だからこそああして僕に聞いてきたわけだろう？ 『好きつてなんだろう』つて」

かがりは恋愛のこととなるといきなり饒舌になつて止まらなくなつて、そればかりに意識が向いちゃつて……そのせいで他のことがみんなおろそかになつて、それでよく



提出物とか宿題を忘れたりしたりして。

そういう欠点こそあるけども大事な「恋愛」について人並み以上に知っている、興味があるからこそこんな場面でふざけて茶々入れたりする子じゃないと思う。

思うんだけどさ。

……あー、そっか。

告白っていう大好物な場面に当てられて「私も私も！」っていう気になっちゃっただけなんだろう……だってくるんさんだし。

……本当に君、中学2年なんだよね……？

発育が異様に良いだけの小学生じゃないよね……？

「そのとおりのよ響ちゃん！ 私、恋愛、恋心、好きっていうものがそれはもう、一晩中でもお話しできるくらいなんだけれど！ あ、よかつたら今度ゆりちゃんともパジャマパーティーで響ちゃんとのことについて語り明かして」

「下条さん。また私たちに怒られたい？」

「もう、そうじゃないんだって！」

「……ならなんなんだ……まずは脱線しないように続きを頼むよ……」

「……ひびき……その。夏休みに勉強教えたって」

「……までは大変じゃなかったはず……多分」

とりあえずかがりの本場のくるんさんぶりを見たからか、ゆりかの怒りは収まってるみたい。

それどころか僕に対する同情的な視線を感じる。

「確かに、確かによ？」　つい先ほどまで、いえ、ゆりかちゃんの告白を聞いてそれが終わって響ちゃんの言うことも聞くまではね？　私、好きって何かがまだ……響ちゃんからアドバイスをもらったあのときからずっとね、こう、なにかが喉から出かけているみたいな感じだったのよ」

ふむ、一応考えてはいたんだ。

「だけれどもね、その『好き』の少し前の段階。恋愛もので言う意識しだした段階。

ゆりかちゃんなら、響ちゃんと初めて出会った後の2回目までの時期になるのかしら？」

「え、そこまで細かく分かんのか？　やべえ、さすが恋愛マスター」

「ゆりかちゃんがそのあたりまできつと感じていただろう感情。響ちゃんのことか異性、いえ、同性だったとしても……だって昔から女の子同士でも男の子同士でも好きになる人たちはいたんだもの。で、私、それを持ってみたいなんだから理解しちゃったのよ。　つい数分前、ゆりかちゃんが告白したのを聞いていたときに」

「え？　マジ？　かがりんが？　響に？　冗談じゃなく？　え？　その様子だとガチで

「？」

「ええ。私が響ちゃんに『恋愛ってどういうものなんでしょう？』って尋ねたときに言われたのよ。好きになるっていうのは結果で、探すものじゃなくて。すぐ傍にあって、何かの拍子に好きだったって気が付くものなんだって」

「ほえ……ひびき、そんな詩的なこと言ったのね……ひびきらしい」  
受け売りなんだけどね。

「でね？ 私ね、あのとときの言葉がずーつと頭に残っていて、だからどのようなおはなしを読んでも響ちゃんの言っていたことが浮かんできてしまつて。だんだんと……いえ、初めのころは違和感があるとしか分からなかつたの。今まで大好きだった、普通の男の子と女の子の恋愛ものを……特別に好きだからって何度も読み返したようなものでさえ、あまりどきどきできなくなつていたりしたわ」

かがりの口が滑らかなになつてペースが上がってくる。  
熱が籠もつてきたらしい。

「代わりにね、今まで『そういうものもあるのかしら』って思っていたような、年上の男の人とのロマンスのようなおはなし。学校の先生とか執事さんとかとの恋愛もの、振り向いてほしい女の子が一生懸命に振り向かない男の子を振り向かせるというおはなし。そういうものが好きになつてきたのよ。今までこんなことなかつたのに気が

ついたらそうなってしまうていて、『私、おかしくなってしまうたのかしら』って思っていたのよ」

「だけれどね、あるときに出会ったおはなしで分かってしまったの。男の子らしい……格好良くって女の子に人気なタイプの女の子で、マンガとかでは他の子から『王子さま』とか呼ばれるような子。そういう子と女の子らしい女の子との恋愛もの。ゆりかちゃんがたまに話しているような百合というものなのかしらね？　そういうものに一番どきどきしてしまうことに気がついたのよ！　私、そんなこと今まで全然なかったから随分と悩んでしまったわ？」

「かがりんちよいと待って、分かった、分かったから。もう怒らないから……せつかく私がかんばって告ったのを」

「あのときはとっても悩んだわ！　だって私、これまで男の子たちに数え切れないほど告白されてきたのにもピンとこなかったのって、もしかして、その……女の子が好きだからじゃないかしらって。本当にそうなのか確かめようって、ゆりかちゃんにおすすめてもらった百合というジャンルの中でさっき言ったような組み合わせのものを」

「おっふ、まさか布教できるって喜んでたあれが」

「そう！　読んでみたら、それはそれはもう！　本当にどきどきして……このときに

なって初めて、キャラクターたちの恋愛模様を楽しむのではなくて私がその女の子になりきって、格好いい女の子を見ている女の子になりきって、恋をしている気持ちを少しばかり体験したの。『ああ、こういう感情が恋なのかしら』って」

ヒートアップし過ぎたらしくるんさんは物理的に近づいて来ている。

「あれはたぶん……いいえ、今のゆりかちちゃんの告白を聞いていて響ちゃんのお返事も聞いていて、それではつきりと分かってしまったのよ！ 実感してしまったのよ！ 私、気がつかないうちに、きつと……お着替えを手伝ってあげたりしていたから女の子としか思っていないなかった響ちゃんの中の男の子というものに、知らないうちに惹かれていて、つまりは好きだということに」

「……やぶへびだったかあ……自分でライブ作り出したおバカな私です……」

「——でもね？ 私のこれはゆりかちちゃんほどではないと思うの。だからゆりかちちゃんから響ちゃんを取ることはないって思うわ？」

「ほえ？」

「だってね、今こうしてお話しして……つまりは告白になるのよね？ これって。

だって響ちゃんを見ながら響ちゃんのが好きって言っているわけなのだし。

だけどゆりかちちゃんのようにはね、さっきのゆりかちちゃんみたいにはどきどきしていないの。もちろん少しはどきどきしているわ？ これが夜だったら眠れなくなるくら

いにはね？　もし今すぐにお付き合いしたいお相手を選ばなければならないなら響ちゃん以外には……学校のお友だちや先輩たちではなくて響ちゃんしか考えられないくらいには。だからこれはきつと、ゆりかちゃんか響ちゃんのことを『結構好き』なら、私は『少し好き』なんだと思うわ」

「……………えつと？」

「つまり恋愛漫画なら私は意識し始めて枕に顔をうずめるヒロインで、ゆりかちゃんはそれから随分進んだステップで……何回かデートしたりしている段階のヒロインと違うことよ」

「あ、うん………詳細な分析ありがと………」

## 45話 彼女からの、告白 2 7/7

「ふふんっ、どうかしらー」

ふんつと鼻息荒く僕の反応をくるんくるんしながら待っているかがり。

そして顔を覆ってふさぎ込んでいる感じのゆりか。

控えめに言って大惨事だったのは僕にだって分かる。

かがりが「早く早く！」って僕の返事を待つてるらしいけど、じーつと見つめられるのは困るからちよつとだけ下のほうを見て……あ、陽の光が移動している。

そこそこ時間、経っていたんだなあ。

……思ってもみなかった。

ゆりかのそれにももちろんかなりびつくりさせられたんだけど、完全にあり得ないって思ってたかがりからまで告白されるだなんてね……どうしょ。

こんなにもちゃんと話せてたんだし……ただの思いつきとかってあしらっちゃうのはさすがにひどい。

かがりのことは、今までずつと……ゆりかたちみたいにならないうちに年相応にしつかりした子たちとは違ってちよつと危ないところのある子って……主に自分で自分をコントロールで

きないフシが多々見受けられて、なのはどうやら親御さんもそれをたしなめるどころか溺愛しているフシがあるっていう子で。

精神年齢だつて気づかないとかの面で、あと勉強とかを戦略的にこなせるゆりかつていうちよつと高めの子と足して2で割つたらいい感じになりそうだつて。

体つきとか身長とかもそうなんだけど、でもそんな感じの子だつて……今まではずつと、こうして話されるまでは思っていたんだ。

だけどそんな彼女も彼女なりに考えていて、ゆりかを見て聞いて僕のことを……そう思っているんだつてはつきりと自覚しているのは真実なんだろう。

子供の成長は早いね。

ほんのきつかけですぐに、こうして変わるんだ。

僕みたいに成長期がおしまいになって……たとえ30になったつて40になったつておじいさんになつたつてそんなには変わらないだろう僕とは違って、この子たちは成長期なんだ。

どう返事したものかと考えていたら、ゆりかがびくつと起き上がつて僕も少しだけびくつとなる。

「ぬーん、やぶへび。へびをつつついちゃったよう、かがりんの心をさ、最後のひと突きをさあ……よりもよつて私が、恋敵つてのを作り上げちゃったよお……どうしょ」



君には本当に同情するよ……僕相手であつてもライバルを自分ででなんてね。

「マジかあ……マジなのかあ!! んもー、ヘンな雰囲気になつて告るの土壇場でできとーに流しちやつたり、そーゆーのがイヤだつたつてもあるしチキンつた可能性があるからつて……なによりさ、どーせ、どーせさ? 『いつかはかがりんにロツクオンされて聞かれて私自身の口から今のを再現させられるよりはマシかな』なんて思つたのがまさかの失敗だつたとは……あ、よく考えたら今みたいにかなーり再現度高い感じで見んなにも広められちゃうのかちくせう! なんてこつた!」

気がついたらさつきまでみたいにじーつと見てくるのを止めていて、話し終わつて満足したからかぼわぼわしているかがりに向かつて席を立ち、じりじりと近づいていくゆりか。

「ま、どーせ初恋つてのは初恋のまま甘酸っぱく終わるつて相場が決まつてるんだし、しゃーないかあ。でも策士であると評判のこの私がしてやられるとはね。裏目だよ裏目」

ゆりかに気がついたのかどうかはわからないけど、かがりがぼわぼわから戻つて来て……表情がなんだか優しい感じになつていて。

「ふう。それで響ちゃん」

え?

あ、答えだよね……一応告白なんだし。

でもどうしよ、ゆりか以上に答えにくい。

ゆりかに対してはなんだかすらすと答えられたけど、かがりの今の告白に対してはどう答えたらいいかまだ思いついていないんだ。

一応はきちんとした女の子と見ていた……まあ言動は子供っぽいところが多分にあるけど、それでも精神年齢的に女の子だつて僕の無意識が感じていたゆりかと。

着替えさせてくるのと言いだれ回されると言い、僕ががんばらないと集中してくれない勉強や興味ない本の読書と言いだ話したら止まらないのと言いだ……手のかかる生徒つて感じだつたかがりがいきなりだもん。

本当になんて応えたらいいのか思いつかない。

「これで、ふたり。 ね？」

「？」

「ふたりの女の子……ゆりかちゃんに続いて私もね？ ……下条かがりという女の子まで響ちゃんのことが大好きで、男の子として見ている。 響ちゃんが無事に元気になつてお外を自由に、なんの心配もなく出歩けるようになって。 そして『できるならこちらに帰ってきてほしいなあ』……そう思っている女の子がふたり、できてしまったわね

？」

え。

「……この子、まさかそのために……？」

「くすつ、響ちゃん、学校に行けるようになったらそのかわいらしい見た目で『お姫さま』って呼ばれても、しばらくしたらきつとやっぱり『王子さま』って呼ばれてしまいうね。だって、こうして私たちの言葉を受けてもそうやっていつもの通りなんだもの。高嶺の花ね？」

いや、高嶺の花……の男バージョンはなんて言うんだろ。

「だからね、響ちゃん。例えあなたが海の向こうに行ってしまったとしても、遠く離れてしまっても、ここからこうしてあなたが元気になることを心待ちにしている女の子……いえ、乙女がふたりもいるのだということ覚えておいてくれるかしら？ いえ、乙女ならあとふたりもいるのだから4人の女の子が、ね。響ちゃん、モテモテね？ これで元気になれたら、さよちゃんに聞いたようなお菓やりハビリなどもきつと乗り越えられるわ！ だって女の子を4人も待たせているのだから！」

「……かがり」

「ちくせうちくせう！ 何さ何さ、せつかく告るついでにいいこと言つてひびきを勇気づけてポイント稼ぎしたというに！ よりにもよつてかがりに後から全部かつさわれたよ！ トンビだよちくせう！」

あ、うん……そうだよね。

君の告白の理由も聞いたけど、きつと無意識でだろうけどもそれを上書きする形で励ましてくれちゃったもんね……。

ずいぶん近くまで迫っていた……いつものように僕の目の前に迫っていた圧力のあるふたつを、むんずと両手でつかんで僕からかがりを引き離すゆりか。

「あら？ どうしたのゆりかちゃん」

「やつぱかがりんをフリーにさせちゃならんかったねえ。それがこの結果だよ。怒りのあまり、告るついでにダブルメロンってゆー武器をへーぜんと使ってるかがりんのこれをもぎたくなってきた。もいでもいい？ もいでもいいよね!! ねえ!! もいでもどーせすぐに生えてくるんでしょ!」

「なにを言っているの……ちよつと痛いわ、手を離してちょうだい?」

「いや、離さない。ひびきの目の毒だしなによりもそれ超ほしい。半分くらいは分けてくれない? ねえ?」

ゆりかが暴走している……まあゆりかの告白って言うのをダメにしたのもかがりの暴走なんだけども。

いや、かがりなりに僕のことを想ってって分かってるけど……さすがにゆりかの心情を考えちゃうと、ねえ?

「ちよつとセクハラは止めてちよつたいいゆりかちゃん！ どうしましょう、ゆりかちゃん  
の目が怖いわ響ちゃん、助けて！」

きつと、こうしてじやれ合っているのも僕を元気づけるっていうのと……あとは多分  
雰囲気に戻すためのもの。

そう思っておこ。

なんかいろいろと台無しだから。

「なーんで動かすだけでこんだけすらいむみたく動くの？ これほんつとーに私とおん  
なじムネってヤツなの？ いやおっぱいか！ おっぱいだなこれ!! ちくせう、私には  
存在しないものだコレ！ どーあがいても谷間つてもんすらできない私への侮辱に他  
ならないよかがりん！ いや、メロンとかスイカとかそんな感じのなにかを蓄えている  
ばいんばいんよ！」

「そう言われるの、あまり好きじゃないから止めてつてばゆりかちゃん！ つて、ひゃ  
んっ!? ちよ、ちよつと!？」

「重くて柔らかくて……いいのう、持つものは。持たざる私にはけつっして持ち  
得ないものだ。だから許されぬのだ」

……もう、せつかく君たちの言葉で感傷に浸っていたのにどうしようもない騒ぎ方し  
てるから覚めちゃったじゃない。

「ふたりとも」

「なーに、ひびきん」

「なにかしら響ちやん」

ゆりかほかがりの胸を……制服の中に腕を突っ込んでかがりのを掴んでいるらしいゆりかと掴まれているらしいかがりが、それを忘れたような顔をしてこちらに振り向いてくる。

反応早いなあ。

やっぱりただのおふざけか。

女子のそれって男子よりスキンシップ多いからなあ。

「そろそろ静かにしないと……隣室の人や病院の人たちから怒られるよ？ 次からの面会、できなくなるかもしれないんだけども」

「ごめん」

「ごめんなさい……」

すつと手を引き抜いたゆりかと、その弾みで持ち上げられていたからか「とぶん」つて音がする幻聴とともにひとへはねしたかがりのそれ。

「あと君たち……告白してくれた以上は当然、僕の内面は男だって本気で思ってくれているんだよね？ 男だって」

「あ、はい」

「え、ええ」

「つまり僕は男子。男子の前で今のようなことをするのは少しだけだけないと思うよ。まあ僕は肉体的には女子だからそこまでの抵抗はないんだろうけども」

「……!!」

「あ、かがりん、顔赤くなれるのね」

「もうっ！ ゆりかちゃんひどいじゃない！」

「いや、告つたのに上書きしてきた泥棒猫にや言われたかないけど……」

お互いに怒る理由があるからか、さつきよりは控えめな声で言い合うふたり。

かがりは顔を赤くして胸を押さえながらゆりかを追い回し、ゆりかはぼかぼかと叩かれながらうろちよろと逃げ回っている。

……こういうところは年相応。

年相応の女の子というもの。

……けど、多分子供の方がこういうのは素直なんだろう。

僕は……ふたりには気が付かれない程度に熱くなっているほったを冷まそうって、開けてある窓からの景色を見るフリをしていた。

## 46話 彼の、準備 1 1 / 6

家もまた生きているらしい。

あくまで比喩表現だけど、そういうものをどこかで目にした覚えがある。

なんでも家っていうものは……本当かどうかわからないけど……人がしばらく留守にしているだけで変わるんだ。

木の匂いが強くなったりくぐもったような臭いが漂ったり、ほこりっぽいとかかびっぽい臭いになったり。

そういうものが強くなっていた、僕の家。

元旦つて言うおめでたい日に血を吐いてイワンさんとマリアさんに頼った先で入院して、しばらく空けていたから。

……この家には20年以上住んでいる。

そのうちの15年ほどはずっと、1日のうちの半分以上を……まあ旅行とかでそれなりに空けたりはしていたけど……ここが僕のすべてだった。

だからそれだけのあいだ、ずーっと僕が住んでいたわけなんだけど。

「変わっちゃってたな……けほ」



もちろんその理由も、科学的な理由というものもまた知っている。

まずは単純に換気してないから。

長期間家を空けるのなら絶対に窓なんて閉めっぱなしなわけで、だから空気が変わらなくて臭いが変わるといのがひとつ。

あとは……文化的にほとんどが石造りの家はどうなるのかは知らないけど木造の場合。

僕たち生きものから出て漂う、肌や息に含まれている油っていうものが壁紙や木の床、そういうものに吸い込まれたりして、つまりは僕たちが自然と吐き出す老廃物を吸い込んで……考え方はなんかヤダけど体臭を吸収して嗅ぎ慣れるような、「自分の家の匂い」になるんだとかいうのある。

らしい。

他にも理由があつたと思うんだけどそこまで知りたいわけでもないし、ほんとかどうかはわからない今みたいな理由でもそこそこに満足しているからどうでもいいや。

「さむっ」

こうして家の中へ……ほとんど一か月ぶりに入った家の中に入って窓を開けて、2月の空気を感じつつ……寒いけどちょっとだけ家全体の換気をしていながら感じている感想がそれだ。

しっかし見事なまでに踏み台だらけだなあ……家の中のどこへ行っても必ず、今の僕になったばかりのときに仕入れた便利で必要不可欠なそれがてんとしている。

僕が必要だったから用意したものはあるんだけど、最近は見えていなかったからなんだか違和感がある。

まあいいや。

冬眠、3ヶ月も意識がなかったときでもこんな感傷は抱かなかつたのにねって思う。

まああのときはそれどころじゃなくって、立て続けにいろんなことがあつたからわからなかつたのかもしれないけど、あのときでさえここまで匂いついていうものが気になるっていうのはなかつた気がするのに。

不思議だ。

あのときは一応、僕の体自体は部屋にあつて最低限の呼吸をしていたからなんだろうって思う。

それに僕自身がずっと家にいたっていう意識もあつたんだろうなあ。

——それよりも時間がもつたいない。

時間はもう限られているんだ。

持つて帰ってきた荷物を適当なところに置いて、買つてきたものを用意して。

じゃあ、はじめよう。

邪魔な髪の毛を後ろで縛って服の中にしまい込んで、僕はゴミ袋をばさばさって開け始めた。



画面の中。

ねこみもとポニーテールっていう目の前で座っているふたりがその中で歌って踊って間奏でアピールをして、もう一回おなじことを繰り返して……そういうのをちよつと見てたら数分間のライブっていうもののうちの1曲が終わった。

音が完全に止まないうちから拍手の音に続いて聞いていた人たちの声が反響して聞こえてきて、映像が止まる。

知らない人とかのそれとは違って、知っている人たちの……まあ今は目の前にいるからさらになんだけど……だから迫力があるというか吸い込まれるというか。

うん、応援したくなって楽しくなる気がする。

これもまた不思議なもの。

「どうかな、響くん。それ、おとといのなの」

「……えへへ、知り合いに観てもらおうとききて、やっぱり恥ずかしいですよ」

顔を上げたら栗色のポニーテールさんと目が合って、その隣を見ようとしたら……ぱつと背けられた。

ねこみみさんは恥ずかしがり屋さんだもんね。

横顔しか見えないから代わりにその上の黒いねこみみを見る。

……今日は触らせてくれるんだろうか。

それが重要だ。

さすがに1番じゃなくて2番目だけど。

でも触りたいし。

「えっと。……あまり僕はこういうの観る機会はないんですけど」

とりあえずライブつてのを録画だけど観たんだから感想だ。

だって本人たち目の前にいるし。

「すごいですねライブつて。おふたりの周りをちらつと映しただけでもこれだけの人が集まって、光る棒とかを振っていて。もちろんおふたりも……10曲以上なんです

よね、通しで。それだけのあいだずっと歌って踊って。なんというか、ものすごい体力と人に見られ続ける耐性……度胸？ それが必要そうって思いました」

きれいな衣装を着て、上からの光できらきらと光っていて。

その上に……その練習からも含めると考えられないほどの時間を、こうして人に見ら

れていなくつても歌って踊つてを繰り返して続けて。

……たとえ練習だけは人に見られないとしても僕には無理だな。

そもそもがもやしを受け継いだ貧弱だし。

やっぱりながあつても絶対にもやりにやりたくないお仕事だ。

そう、ここに深く誓う。

「おやー？ 私たちのかわいさはー？」

「あ、はい、おふたりともとても素敵でした」

「あ、ありが」

「綺麗な衣装と……髪型も凝っていますよね、それでずっと歌いながらいろんなポーズを取っていて。おふたりは今でも美しいですけどこの瞬間はもっと輝いているって

思います。僕からしてみれば大胆な衣装ですけどそれが」

「ひ、響くんストゥップ！ もう充分だから！」

「にや、にや……っ」

もう良いの？

案外さらつとでいいんだな……それもそっか、普段から言われ慣れてるもんね、きつと。

「……あー。ハ、ほんっ」

ん、ちよつとポニーさんが赤い……怒ってないよね？

「あ、ありがと……ま、まー大変といえは大変ですねー」

「普通の人の体力では無理なんじゃないですか？」

「そーですねえ。本番も、完全に終わるまではハイになっているのでなんとかなるんですけど、それから何日は私たちでさえだるですし。ツアーみたいなイベントのときはぶつ続けで生まれませんし、その前ももちろん何十回も披露しますし……その前にはカタチにするための練習もイヤってほどしますし？ 体力仕事ですなえ」

10年もそれを続けている岩本さんでさえそういう感想があるんだ。

「ですけどね、体力なんかはやっているうちに……ま、いろいろと鍛えさせられるんです。強制的に。いえ、やっているうちに楽しくなってきたから、それに合わせて体力もしぜーんとついて来ますし？ それに体動かして歌うのって楽しいんですよ。振り付けしながらカラオケしていい感じに歌って踊れて、それを人に見てもらっている感じかな？」

あざといポニーテールさんは首をかしげながら僕を観察している。

その隣をちらつと見てみるも、まだねこみみしか見えない。

「！」

……あ、目が合った……って思ったらすぐにまた逸らされちゃって、代わりにしつぽ

がくるんとしているのが見えた。

ねこみみとしつぽ、いったいどっちを。

いや、ぜひぜひ両方を。

「んくんく……ぷは。ま、それが本気で楽しめるのは若いうちですけどね」

そういうこと言うからおばさんって言われるんだよ？

あ、いや、僕の感想じゃなくてネット上でのお決まりのヤジ的なやつで。

「この前言ったように、若返る直前なんかはだいぶキツくなつてましたしね。とりあえずは大学を終えるくらいで変わり始めて……はあー、ほんつと、こうなつてしみじみと感じていますけど、若いってというのはとにかくそれだけで素晴らしいのよー」

「……だからそういうのがオバサンっぽく」

「なにか言ったのかなあ、みさきちゃん」

「いーえ、なんにも言っていないですよ？」

「そう？ ならいいけど」

「……にや」

ある日に「ちよつと会えますか？」って聞いたたら「いいよ？ 今？」って軽いノリで会つてくれたふたり。

……よくよく考えると今をときめくアイドルさんつてやつだし政府の広報とかして

て結構忙しいのに良く会ってくれるなあ。

まあいいけど。

「それでね、私も今でこそ……物理的に若くなつたからこそ体が軽く感じるので全力で楽しめるようになって、戻ってますけどね？ ……あと何年かでまた来ちゃうだろう学生時代の終わりを感じ始めたら、今度こそ早めについてお願いしてるの。だって私たちってばこんなことになつちやつたし、今後は歌だけに絞つてその分をねこみみ病関係のお仕事にするんです。みさきちゃんはともかく私はもうアイドルつてのを充分やったかなー、そう感じてるから」

「ー」

よく見ると、お店の空調で島子さんのねこみみが、ねこみに生えている毛が……ふわふわとしている。

ふわふわ。

目が良くなったからこそ、近視と乱視がなくなつたからこそ。

背が低くつて見上げるのが自然になつてからこそわかつた、その事実。

「……!!」

どうかしてあれを、今日も。

「やーな話聞かさないでくださいにや。 ていうかそれ、事あるごとに言ってるじゃな



いですか、ひかりさん。 そんなことばかり言っていると未だに狙っているあの人……ああ、響さんはご存じでしたにや？ そうですにや、今井さんみたいですにや？」「うげ」

今井さん。

悪魔さん。

あの人、冬眠の時期でも……なんの返事もしなくても週1以上のペースで延々とメールを送りつけてきていた、正直に言って今でも怖い感じの。

「良いんですかや？ 今井さんですにや？」

「良くない」

「ですよね」

あ、身近な人たちからもそういう評判なんだあの人……強引だもんね。

「でもね、分かるのよ……今ならちよつと。 だってね？ つい。 つい……なんでか知らないけど響くんには言いたくなっちゃうのよ、今みたいなの。 なんてかしらねー、聞き上手だからかな」

「ただ聞いているだけですけど」

「それがなんか違うのよねー。 みさきちちゃんもそう思うでしょ？」

「言われたらそうかもですにや？」

そうなの？

僕、ほとんどの会話は素通りしてるのに。

……こういうのって意外とばれないんだね。

大切な特技として秘密に取っておこう。

## 46話 彼の、準備 1 2/6

「ま、私にはそういうのは無縁ですにや。 多分」

ねこみさんが声を上げる。

「なにしろ私はケモノ化、それもネコ科の猫ですにや。 むしろ今のお偉いさんから頼まれるテレビ解説とかが多くなっちゃってなかなか体を動かせる機会がなくなっちゃって困っているくらいなんですにや。 体が鈍るっていう感じで、だからこう……むずむずして。 お休みが少ない時期だと夜とかくらいにしか思いっきり走ったりできませんし、かといってマシンを使うのもなーんか違う感じがして。 なんですすかにや?」

「ネコ科としての本能なのかしらね?」

「かもですにや。 あ、この前の長めのコンサートとかでも……リハーサルではもちろん本番でも最後の方まで息が上がらないあたり、ねこみ病の恩恵を感じていますにや。 疲れっていうものも徹夜とかしない限り感じないですし。 そういう意味では嬉しいですにや?」

いいなあ。

その体力と筋力、僕もほしい。

分けてくれないかな。

無理？

……冬眠明けよりは断然にマシだけどそれでもまだまだ力が出ない僕。すぐに疲れるって感じる人が多いし。

!!!

それよりも話に乗ってくるとゆらゆらしてくるしつぽが気になる。

神経が通っているのは触ったときに充分にわかつてはいたんだけど、改めて……こうして先のほうがあっちに行つてこっちに行つてををしているのが視界に入るだけでわかるし……やっぱ触りたいし。

ダメかな？

「そーんなこと言つてたらピンチヒッターとしていろんなところに駆り出されちゃつてですにや、ますますお休みが取れなくなつて最近は少し辛いのですにや。身体は疲れなくなつても心が疲れるのですにや……」

「あちこちでそういうこと言うからねえ」

「お仕事上言わなきゃならないときがあるから仕方ないとは言つても……さすがに番組の企画で12時間をぶつ続けでハードなことやらされたときには、体までヘトヘトになりましたにや」

「でもすすきりしたって言ってなかった？」

「あ、満足しましたけどにや？」

「……それは大変でしたね。あと、おめでとうございます？」

「ありがとですよ！」

「みさきちゃん嬉しそー」

しつぽまでへによつてなつておじぎをした島子さんは、しばらくお茶をすすつていた。

◇

そしてまた始まった岩本さんの、ありがたくつて共感できる老化つていうものの愚痴を聞いてしばし。

多分20代同士の飲み会とかだところこういう話題になるんだらうなつて感じだったけども……そろそろ頃合いかな。

「……ところでおふたりに訊きたいことがあるんですけど」

「その感じ、まず間違いなく今井さんが『そういう雰囲気になつたらすぐに連絡して！』つてうきうきしてた感じのことじゃないよね」

「ええ、まあ」

「一応頼まれててさー。ま、社交辞令つてことで。あ、社交辞令つてのは」

「せんばーい？」

「……あ、ごめんごめん。さすがに中学生なら知ってるよね」

「子供は大人が思うよりも大人なんですにや」

「本物の高校生なみさきちゃん言うことだから納得ね！」

僕が今知っておきたいこと、知らないといけないこと。

「えつと……ねこみみ病が発病したとき。何となくでもはつきりとも自覚したら

……こうして知られるようになった今つてどうしているんでしょうか。その、最近発

病した人たちがです。いくらなんでも発病、いえ、発症したらすぐに通報とかが入っ

て、国とかから手紙が来たりお役人の人が来たりはしないんだとは思いますが」

調べたけどなんだかそういうところについて詳しく書いてあるとこがなかったんだ。

だからこうして当事者たちの中でもよく知ってるだろうふたりにコンタクトを取っ

ている。

というのも僕の魔法さんとのすりあわせ。

魔法さんつていう姿を変える以外の力がある以上、今の僕のこれは多分ねこみみ病と

は似て非なるもの。

でも魔法さんは僕がアクションを起こさないと認識を阻害する魔法をかけないから、

つまりはなにかの拍子にそういうところからの連絡があってもおかしくはないのに。

それだけ隠れられていたっていうことかな？

そう思つての質問。

「あ、響くんも気になります？」

「ええ、一応は」

軽い感じ。

多分教えて良い内容なんだろう。

「ならおはなししましょうか。 SNSだとかに自撮りとかを投稿したり、他の人に撮られて上げられたりして目に留まつたりしなければ……あるいは見た目が変わって大騒ぎになったりしなければですけど」

そう言えばスマホのニュースとかでは週1くらいでそういうのがあるね。

SNSだと「見て見て！ 生えた！ 若返った！」って感じで堂々と自撮りしてるのよく見かけるし。

「ねこみみ病だつて気がついた人となんとなくそうかもかもしれないかもつていう人たちからの連絡で、お役所も手一杯だそうで。 なので基本はねこみみ病になつた方かそのご家族、あるいはご友人からとかの連絡……つまりは自己申告ですね。 と言つても回線混み合つてるので、あと実際にお役所の方が訪問しないとわからないので結構待つことになつちゃうと思うけどね。 あれよ、お問い合わせダイヤルとかつてすつごく待つて

しよ?」

「あーいうのって私たちみたいに時間が無い人には辛いのですにや……」

「ねー」

そうだね、僕みたいに1年中家に居るようなのとは全然違うもんね。

「特に若返り。私みたいに自分とかご家族しかわからないくらいの違いしかなかったら。成人しちやえば数年の違いなんてそうわかるもんじやないし……だから違和感あつても自分じやよく分からなくて。丸1日とかコールし続けてようやく繋がった担当の人に話したりしてつていう流れでしょうかねー。ちよつとだけ見た目が変わるだけの人とかは聞いたら満足してそのままつていうのも多いそうです。病気とつて診断が出るとなんかほつとしますもんねえ……もちろん軽いヤツの話ですけど」

む……確かに。

たとえば前の僕が多少若く見えたりしていたつて、それが魔法さんにかかつていなくて「これ、ねこみみ病かも?」つて思つても「ちよつとお得かな」程度で終わりそう。だつてめんどくさいし、お役所関係の手続きつて。

それに特段困るわけじやないし。

ケモノ化みたいに生えたり、若返りで高校生が中学生とかなら大変だろうけどね。

「ケモノ化の方は……まあ届け出ない訳には行かないですにや」



うん、そうだろうね……生えるんだもんね、男にも女にも。

「みみとかしっぽ、羽とか角。私みたいに生えてからしばらくはらく自覚できなかった……理由は不明なんですにや……として、いずれは誰かが気づいてって流れになりますしにや。もちろん自分たちですぐに気がついて連絡……まあこつちの場合は直接お役所に行けば最優先で取り扱ってくれるみたいですし、若返りとはちがって一目瞭然なのでシンプルといえばシンプルですにや」

「ほんと不思議よねー、みさきちゃんとか家族の人とかが初めに気がつかなかったっての」

「ですにやあ。実際、私みたいに自覚がないまま出歩いていたりしているときに町中で指摘されるっていうのも多いみたいですし、よくわからないものなんですにや、ねこみみ病って」

島子さんのしっぽが、はてなっぽい形になっている。

先の方、ちょうど僕の腕がすっぽり入りそうになるそこに僕のをに入れてみたらどんな感触なんだろう。

二の腕あたりを入れてみたらすつごくこそばゆそう。

けど、ぜひ試してみたい。

「まー、ねこみみ病ってひとくくりにするのが乱暴っていう意見、私は納得できるなー。

だって、こんなに違うんだからさ、私たち

「私たちケモノ化だと明らかに感覚までも変わりますからにやあ。ま、見た目のインパクトほどじゃないですけどにや？」

そうしてねこみみをふるつとさせる島子さん。

器用っていうか、そういう動きが自然とできる感激。

「けど確かにわかりやすさっていうか納得のしやすさって『良く分かんないけどなんか変わったからねこみみ病なんでしょ』っていう単純さは大事よねー」

「あー確かに。いちいち動物ごとに名前変えられたりしてもそれはそれで困りますからにやあ」

しつぽ……じゃなくて、聞きたいことはそうじゃなくて。

「……ねこみみ病になったことで日常生活に支障が出てきたりしたらどうするんですか。たとえば……学校とか会社とかで、見た目が変わったせいで他の人との関係が難しくなったり。……島子さんの前で言うのも悪いんですけど、受け入れてもらえなかったり。この前聞いたように……迫害に近いことになったりしたら」

姿が変わって今までの暮らしができなくて……なんとかしようとしても今までとあまりに違いすぎるせいで、それすらできなくて。

そう。

前の僕から今の僕になったように。

どこにでもいる普通の背の普通の黒髪の普通の顔の男から、珍しい顔をした銀髪の幼女になるっていう変化があったとして。

……魔法さんがかからなければ、いや、今だっというかからなくなるのかわからないしそうなたら前の僕に戻りそうなもんだけど、そうじゃなくて。

魔法さんが僕のことを忘れてほつたらかしにしてこのままの姿にしたままで消えちやつたとしたら、もう……誰も僕を前の僕だつて扱つてくれなくなつて。

身寄りのない、どこから来たのかわからない子。

少し前までは「自分は失踪したはずの男だ」つて主張している頭のおかしい子。

そうとしか思われなくなるから。

だからこれまでお巡りさんから逃げ回つてたんだ。

飛川さんとか叔父さんとか……よく話せばわかつてくれそうな人はいるけど、でも魔法さんの助けがなければそれは確実じゃない。

それをお巡りさんとかが信じてくれるかも不明……まあねこみみ病がメジャーになつてきた今ならなんとかなるかもだけでも。

魔法さん。

かかり続けるんだとは……半ば諦めていると同時に現状で困ることがない分安心し

ちやつていた部分もあるんだけど。

僕を前の僕に戻してくれないまま、ある日突然に消え失せちゃう可能性。

それがある以上、公権力のトップ……「その筋の情報」つてやつに近いところにいるふたりからいすいと聞いておかなくちやならない。

この先の僕の身の振り方を決めるために大切な情報なんだ。

## 46話 彼の、準備 1 3/6

「響くんのことだから興味本位じゃないだろうけど……うーん、どこまで話して良いんだっけ？」

「最近はあるまり話さなくなりましたから忘れましたにやあ」

この2人はねこみみ病については特殊な立場。

表に出ている情報もそうでないのも知っているはず。

そう思って訊いてみている。

「ま、いつか。 響くんはネットに安易に書き込んだりする子じゃないっていうのはわかっているし……もしそうだったら私たちのこと、あのときはすっかり出回っているわけだし？」

「そーいえばそーですにや」

そっか、今はSNSの時代。

友達に話す感覚で全世界に広めちゃう世代だもんね……今の僕の見た目的にも。

「あ、ごめんね？ 一応、一応なんだけどね、スタツフの人が『そういう可能性も否定できないから』って。 だからあの後しばらく響くんのこと疑って、ネットの……私たち

関係の書き込み、熱心に調べちゃったから」

「いえ。アイドルのセキュリティ……安全と、あと機密を考えたら当然だと思います。別に気にしません」

あんなに乱暴に追いかけてくる人たちもいるくらいだ、この子たちの弱味を知りたいっていう人も多いだろうし。

そういうお仕事だしな。

「よかった。あ、それで、ねこみみ病で困った場合なんですけど、これは……私たちでも全部は知らせられないから、私たちが知ってるくらいしか話せないんだけど」

この子たちでも知らないことが。

……つまりこの子たちが「知らせられてない」って知っている程度には……めんどくさいものがあるんだ。

「で、困ったことになった場合には本人か周囲の方からの連絡で係の人が駆け付けて手助けして。さらに認められれば特例措置が発動するらしいですね」

「らしいですよ……特にケモノ化の場合だと」

特例措置。

なんだか物騒な響きだけど、逆に言えばそれで守られる側にとつてはとっても頼りになりそう。

「たとえばです、ね、最悪お家にいらなくなる……なんてことが。あ、ご家族の問題だけじゃなくって、その、ご近所さんとの問題とかで、ね？ そうなったら本人だけでも一時的に保護してあげたり、ご家族ごといろいろと変えてお引越、な……って感じで……まあドラマである『なんとか保護プログラム』みたいな感じだそうですね」

「外国だとその辺もつと進んでるって言いえますもんじゃー」

「あー、懐かし。昔、探偵もののドラマに出たなー」

ポニーテールをもしやもしやしている岩本さんはすごく懐かしそう。

……僕よりちよつとだけ年上だから子役としてとかヒロイン役とかかな。

「昔って私が何歳のときですかにや？ 10歳超えてましたかにや？」

「……みさきちゃん？」

あ——……そっか、そうだよ、ね……これこそが世代の違いってやつだよ、ね。

この2人は一見同じ高校生同士だけでも片方は僕の世代なんかも、ね。

「じー」

「年齢のことはね、……あ」

「……ふにやつ!!」

またコントになるのかなって思ってたじーと見ていたんだけど……なぜか2人とも同時に下を見て黙り込む。

「？」

「……え、えーつと！ 続きですにやせんばい！」

「っ！ そ、そうだったわね！」

よく分からないけど……ふたりしてぴったり息が合った動きだったあたり、またコントするつもりだった？

「こほん、滅多にないことのはずなんですけどにや、困ったことに……変わった本人がそれを受け入れられなくて、いろいろあつて、それで入院……メンタルのケアをするために、することもあるそうですよ？」

「そういうのってケモノ化だと深刻なんだつてね——……。まあ、若くなるだけなら基本、嬉しい以外にはなんにも起きないしね。学生だとちよつと困るかもだけど。

まあ女性からの『自分だけ若くなってずるい！』っていう妬みはしつっこいけど。あとババアネタが定着したのもムカつくけどそのくらいだし」

女性の年齢の話にはお口チャツクだ。

「んでケモノ化は……この国じゃまだ、少なくとも教えてもらえる限りではないみたいですけど。外国では……そのヤな話でごめんなさいですよ？ 生えたのを本人と

か家族とか周りの人たちが『取らなきゃいけない！』って無理やりに取ろうとして大ケガをしたり……だって体の一部になっちゃっているんですからそうなっちゃいます



にや？ 人の耳とかだつて引つ張つたら痛いですにや？ ましてや刃物を使ったりしたら血もどばどばですし……そういうことですにや」

想像したらおしりがひゅんつてなつた。

岩本さんも顔をしかめている。

島子さんのしつぽが蚊取り線香のようになってる。

「……はい、痛いはやめやめ!! 私だつて嫌いなんだから……いい感じの方もね！ コスプレなんていう文化が、一般的に好意的に受け入れられ……過ぎてるとは思うけど、ともかくそのせいで『ある日突然コスプレに目覚めたみたいだったから……』つていう理由でぜんぜん発覚しなかつたケースもあるんだっけ。SNSとかに挙げてても普通の言動のせいではなかなか気がつかれないとかね。特に女の子たちの間じゃそういう冗談が流行つてるらしいし。……のんきだけど、このくらいでちょうど良いのかもね」

「幸せの代償ですにや？」

「みさきちゃん、それはなんか意味ちがくない？」

「そうですかにや？ ……響さんはどう思いますにや？」

「……えつと」

ある日から耳とか尻尾を生やして平然としているのがコスプレで済むのかつて思う

けど、多分その程度にはねこみみ病が浸透していて……よくみんなコスプレとかするんだらうな。

「……少なくとも見た目が変わっても否定的に捉えないっていうのはいいことだと。

たとえば平和ぼけでも、それはいい方面の鈍感さっていうもので……言い換えると『寛容さ』とかいうものになるんだと感じます。 完全には無理でしょうけど、ねこみみ病は

ただの変化なんだって、見た目が少し変わったただけなんだって、みんなが知るのなら……ねこみみ病になった人も周りの人も多少は、幸せになると思います。 そういう意味では確かに恵まれていますね」

誰がいつ何になるのか分からないって言うねこみみ病。

次は自分からしれないんだからそうして怖くない方がいいって思う。

移る病気とかでみんなが疑心暗鬼になるよりはよっぼど。

「やっばこの子、絶対頭いいって、普通の中2じゃないって!」

「だから聞こえてますにゃー?」

「いーの、さつきちよつとばかしネガティブなこと言い過ぎちやつたからこのへんで挽回しておかないと」

「……ってことらしいですにゃ」

「いえ、別に僕は」

……そうだよね、年齢詐称してるのって大人からなら分かつちゃうよね。

「というわけで、そういうトラブルがない大半のケースでは、普通はお役所を経由して書類……ねこみみ病関係者用ですね、それを書いておしまいです。 私たちのときは症例が少なかった時期だったのいろいろと調べられましたけど。 ねえ？」

「あ……。 あのとときは、ほんつとたいへんでしたにやあ」

「ま、今なら集まったデータと照合してサクッと当てはめて『はいおしまい、困ったことがあつたら直通電話で相談してね！』でおしまい。 さっきも言ったような困ったことがあつたりしたら、こつそり匿つてお引越したりして、これまでとおんなじような感じに暮らせるように……学校とか就職先とかを提供してくれる。 だよね？」

「はいですにや」

「なんかおかわり欲しいわねー」っていいながらメニューを開く2人……うん、女性は甘いものなら無限だよ。

そんなことよりもしつぽが揺れている。

ゆらゆらと。

ゆらゆらゆらゆら。

そうか。

こうしてみみとかしつぽが生えたりすると感情まで分かりやすくなるんだな……そ

う考えてみるとちよつと大変なのかも。

けど、どうせなら……どうせ幼女になるくらいなら、僕にもそれが生えたりしていたらみんなに感情を……主に困っているときと怒っているときのを伝えやすかつたかもなあ。

いやいや、もしそうなっていたら家から出るのがもつと遅れて、そのせいでかがりたちに会えなかつた可能性があるんだ。

だつて「絶対に人に見せられない！」つてなつただろうし。

それとも「これはどうしようもないから素直に誰かに頼ろう」つてなつたかな？

どつちにしても、銀髪ねこみみしつぽ幼女とかにでもなつたら……きつと想像するまでもない扱いになつたはずだ。

絶対小動物扱いされてはずだ……あの子たちに。

だからこれでいい。

うん。

あ、そうだ。

「……もうひとついいですか？」

「ん？ 今日の影響くんは熱心ねえ」

「興味持ってくれて嬉しいですよ」

「…………その。岩本さんと島子さんがねこみみ病だつて分かつたときと、そのあとのこと。いろいろな大変だつたつて言っていましたけど、それについても…………おはなしできる範囲で聞かせていただいても…………？」

ねこみみ病の一般的な扱いとか、ちよつと大変な場合とかのことは分かつた。

…………なら、もし「実際になつたらどうなるのか」。

自分が若返つたり何かが生えたりして姿が変わつちやつたらどんな感じに保護…………もとい調べられるのか。

この子たちは、ねこみみ病がメジャーになる前にそれを経験したはずだ。

だから…………前例がないかもしれない、数が少ないかもしれない場面だつたらどうなるのか。

そう、例えば「男が銀髪幼女になつちやつたりした場合」——どんな扱いを受けるのかつて。

## 46話 彼の、準備 1 4 / 6

「私たちのときのことね……まず私たちはほとんどおんなじ時期になった……みたいなんです」

「みたい？」

「そ。でも私の方はホントじみーなので、先にみさきちゃんのインパクトあるのを先に聞いた方がおもしろいんじゃないかな？」

「うえー、私のからですか？ まずはひかりさんの無難な方から行きましょうにやあ」  
「ほーら、響くんがせっかく興味持ってくれてるんだし、どうせ話すんだからいいでしょ。ほらほらっ」

2人は同時期にねこみみ病に……けど、うん。

確かに若返るのと生えるのとどっちが派手かって言われたら生える方だよな。

「じゃあ私のなんですけどにや、その……大変だったんですにや」

ねこみみとしっぽのへにやり具合から本当に大変だったんだなって分かる。

触りたい。

「……えつとですにや。私はずもともと、前からこんな感じのコスプレするキャラで

……猫のおみみとしっぽをつけて語尾を猫っぽくして……あ、おみみはカチューシャでしっぽは腰周りにつけるっていう、よくあるやつですよ。それがお似合いだつて事務所から言われて……もちろん踊つていても取れないようにつてきちんと作つてもらつたものですよ。カラーリングも形も大きさも今のこれとおなじだったので、不思議な偶然でおなじのが私の体に生えたからやややしかつたんですよ」

……それは、偶然なんだろうか。

たまたま前から付けていたのとおなじに？

そんなのは都合が良すぎるような気がする。

「私、これでもアイドル……当時はまだ駆け出しだったけどそれでも女の子だからって、車で送り迎えしてもらつていたんですよ。で、レッスンとか収録の後って疲れてるもんだからそのまま付けて帰つて、家でもそのままとかよくあつたので……だからねこみみ病になつてもしばらくはホンモノがこうして生えていても、だーれも気がついてくれなかつたんですよ。『役作りなんだな』つて。学校の友達でさえ、学校の先生でさえ……スタッフさんたちでさえ。——お母さんでさえ。そしてなにより……私自身でさえ、にや」

……他人ならともかく家族、さらには自分の耳の上にねこみみが生えて、しっぽつていう尻……尾てい骨辺りなんだろうか……の上から生えているそれがあつたら違和

感があるはずなのに？

「それで……体が本物の猫ちゃんみたいになるって言う、筋力とか瞬発力とか運動神経とかが明らかに変わっているのに気がついたのは……正確な日付がわからないもんですからたぶんなんですけど、ねこみみ病になってからひと月くらい経ったころですにや」

「自分がそうなってから気が付くまでに1ヶ月かかる」……それはなんでなんだろう。

あ。

しつぽが90°に近い直角になっている。

なかなか珍しい形だ。

「しかもよりもよって……よりもよってそれが番組の収録中だったんですにや。

いえ、だからこそ分かった日ははっきりしているんですけどにや」

「……なるほど。と言うことはカメラが回っていたり？」

「そーなんですにやあ……あー、恥ずかしいですにや。町中で人がたつくさんいて

……生放送じゃなかった分まだマシではあったんですけどにや、そうしてみんなの前でやらかしちやったもんですから『さすがになんかおかしくない？』って気が付いてもらえたんですにや……いやー、あのときのことを思い出すだけでなにかを引つかきたくなりますにや」



「引つかく?」

「あ、いえ、ただの衝動的なものなので、気にしないでくださいにや」

「あれはみさきちゃんもびつくりだし、私たちもつとびつくりだったからねー」

「……その場面には一緒に?」

「ええ。 私たちどころかギャラリーの人たちも、すごいこと起きてるのにスマホとかで撮るのも忘れてみーんな口あんぐりしてましたから。 ロケ中だったからね……ほら、普通の商店街を食べ歩きするっていうよくある感じの番組の。 お店とアイドルな私たちの宣伝っていうごくごくありふれたものになる……はずだったんだけど……この子ね? ——通りがかった猫さんとの大げんかっつてのを始めちゃったの」

「……猫と? 猫って動物の?」

「ええ、地域猫っていうのだったらしいの」

「ヤツはタフでしたにや。 強敵でしたにや」

猫と喧嘩。

……心まで猫に?

つまりねこみみ病……のケモノ化は、心までが別の動物になるってこと?

「初めのうちは……動物の動画とかで観たことある? 猫同士のケンカつての。 ……」

そう、ならわかるだろうけど、あんな感じでにらみ合ったかっつて思ったら声上げはじめ

たの。通りがかつた猫さんと目を合わせたって思ったら、お互いに。猫さんと、みさきちゃんっていう人間の女の子が。次のお店に向かうアドリブパートだったから『あー、猫系アイドルのアピールかあ……』ってことでちよつとの間ほほえましく思ってたんだけどね。でもほら猫のケンカってだんだんヒートアップしていくでしょ？ そんな感じにしていくなんだから『ちよつと役に入り込みすぎかなあ』って思いながら適当に合わせて実況みたいにしていたんですけどね？」

島子さん、気がついたらねこみみとしつぽがぺたんとなっていて顔を背けたままになつていた。

……この子、やっぱり恥ずかしがりだよなあ。

それなのにアイドル。

しかもコスプレ系アイドル。

なんでそんなものになろうとしたんだろ。

事務所？

事務所の意向？

逆らえないの？

芸能界って怖いのか？

「それが発端で……あ、ケンカには勝つたらしいんだけど」

「勝ったんですにや」

「……謎の対抗心はともかくね、勝ったらしいの。 けどしつぽ巻いて逃げ出したその猫さんを……みさきちゃんが追いかけて始めちゃってね。 それもものすんごい速さで。 四つん這いでされたらパンツ……ごめん、下着が見えちゃうところだったわねえ」

「んなのしてたら今ごろは引きこもってますにや」

「そ、だから普通に走る……んだけどものすごく速くてね。 あれがケモノ化の瞬発力なんだって後で知ったけど、そのときは追いかけるので精いっぱいだね……商店街のアーケードを猫っぽい声上げながら全速力で突っ切って、それでひびった猫さんが路地のビルを駆け上り始めて。 これで終わると思ったたらこの子、ビルの……配管ですかね、ジャンプしてそれに掴まったかって思ったらそれを使ってすいすい登っていちやっただですよ。 あっという間に、手の届かない高いところに」

ビルを、登った？

それも、聞いた感じだとロクククライミングみたいに？

この島子さんが？

それなりの恥ずかしがり屋さんで、なのになんてか人に見られるっていうお仕事にっいちやっただこの子が？

「にやあああああ……あああああ……」

「あー、最近話すの少なくなっていたから忘れてたけどインパクトあるわねえ、これって。……ていうかみさきちゃん、なんでそこまで恥ずかしがつてるの？　こんなのテレビでも何回もその場面ごとやったじゃない。　あ、パンツは」

「言わないでくださいにや!!」

「でも一時期そればかりネタにされてたわよ?」

「うう……」

……スカートだったとしたらカメラに映っちゃってるんじゃない。

そういうのってテレビじゃモザイクかけられるんだろうけども……なんだかいかがわしくなっちゃう気がする。

どう処理したんだろ……帰ったら探してみよう。

「また話す機会とかあるかもだし、慣れたほうがいいわよー。　配管を伝つてすいすいっと……それも途切れていたりしたらそこからジャンプして別の出っ張り使ったりして登るもんだから肝が冷えたのよ……途中でずり落ちたりしてましたし。　ようやく屋上にたどり着いたと思つたら、みさきちゃんに追い詰められた猫さん、壁伝いにささっと降りて行つちやつたんです。　降参つていうよりも『人間がここまで追いかけてくるのか』って思つたんでしょねえ、かわいそうに怯えて。　さすがにもうおしまい

かなって思ったらこの子——その猫さん目がけて飛び降りたんですよ。 ビルの屋上から」

「…………え」

「なんのためらいもなくね、『にやあああ!』とか叫びながら……それはそれはもう勢いよく、ね。 体、広げるみたいにしてき……あ、今でも思い出すだけで汗がじんわりする」

ビルって言うからには3階以上の高さなんだろう。

……そこから人が飛び降りて平気。

それが、ねこみ病のケモノ化?

「文字通りに飛び降りです。 だから私たち、みんなもう真っ白になって、周りで見ていた人たちも悲鳴を上げてもうダメだって思って。 ……いたのにこの子、くるくる回りながら上手——く着地できちやっただんです。 両手と両足でしつかりと、こう、しゅたつて感じですね。 もっとも、あのときはみんな目をつぶっていたから後で映像を見てから分かったんですけどね」

「その節は本当に本当に迷惑おかけしましたにや……」

「で。 ぴんぴんしてるから『大丈夫?』って近づいたら……この子、なんか怯えたみたいになっちゃって。 脚ががくがくしてるから大丈夫かなって手を取った途端に暴れ

出しちゃつて。それもわけわかんないことうにやうにや言いながら」

島子さんはさつきからずつとこつちを見てくれない。

あ、ねこみも聞きたくないからかべたんとしたままだ。

「そー、まあ暴れるくらいだから元氣だつてわかつてみんなほつとはしたんだけどね……それからまた大變で、暴れるつていうか興奮しててねー。人の話を聞けない感じで抵抗してきて、なんとか足止めするので精いっぱい。錯乱していて何するか分からないからつて、緊急事態だからつて男の人のスタツフにも手伝つてもらつたのに、それでも落ちつくまで何回かすり抜けてどこかへ行こうとしていましたから」

ビルから飛び降りても平気な力の受け流しに、衝撃に耐えられる身体能力。

どう見ても普通のJKさんなのに成人男性の腕力を……あ、火事場のつてやつで錯乱とかしてたらそれは不可能じゃないかもだけでも。

「話しかけても通じなくて、手で引つかこうとしてきたり足使つてきたり。目も私たちの目とぜんぜん合いませんでしたし。いや、合わそうともしていなかったって感じかな。——まるで『みさきちゃんとしての意識がない』つていうか」

意志がない。

意識が通常ではなくなる。

それは飛川さんや町で実験した人たち、さらにはこの子たちと話していたときの僕と

も似たような——。

「……今でも思い出せませんのにな。あのときの。あの映像、観せられたときにはなにかのドツキリかかって思ったくらいで……『今度はこういうネタでやるんですかにかにや？』って聞いてちやつたくらいですにや」

「……今までのみさきちゃんとはちがう誰か……ナニ力になつちやつたつていうか、中身がほんものの猫さんになつちやつたのかもつて、こういうときつてどこに連絡したらつて大変だつたんです。ほら、キツネ憑きとか聞いたことあるでしょ？」

キツネ憑き。

自分が自分でなくなつちやう、あれのこと。

「そのとき私もずいぶん引つかかれたんですけどね」

「だからごめんなさいいつて何度も何度も謝りましたにや……」

「うん、謝られた。でも、それはそれ。今は事実を話す場だから」

「ひどいですにやあ……」

「でね？ ぴたつて止まつたかつて思つたら、おめめばちくりして『あれ、もうロケ終わつちやつたんですか？』つて聞いてきたもんだから拍子抜けしちやつたわねえ。

怒つてもピンとこないみたいで、聞いてみたらさっぱり覚えていないつていうからカメラさんのを観せて、それでよーやくに……とりあえずなにか変なことしかしたつてこ

とは納得してくれてね」

「……たくさんの人が、通りがかりの人までもありえない動きを見たからですよね。人をはるかに超えたような、そういうものを」

人知を超えた力。

魔法さん。

もし魔法さんに認識を歪める力がなかったとしたら。

「そういうことです。地上10メートルくらい……いえ、それ以上へ登って自分から落ちて。下はただの道路、それでなんともない。せいぜいが手のひらが赤くなつた、その程度。……それでただの女の子が平気そうにしているのはちよつとどころじゃなくおかしいので、みんなして途方に暮れましたよ。『これ、どうすればいいの？』って。ねこみみ病が知られていない頃でしたから手がかりも何もありませんし……まだ白昼夢とかみたいなのだって思った方が納得できるくらいのも出来事でしたから」



## 46話 彼の、準備 1 6/6

「みさきちゃんも我に返ってちよつとして、『これほんとどうしましよつかねー』って言いながら応援とか呼んでいるあいだにも……スマホ向け始めた周りにいた人たちとか集まってきた人たちで困っちゃって。『いざとなったらお巡りさん呼んでひと目の着かないところへ連れて行ってもらわないとね……』って話してたの」

「話し疲れたから食べるね？」って言いながらケーキを、甘ったるそうなそれをおいしそうに食べた岩本さんが続ける。

話しているだけで2個も消費した彼女。

隣の島子さんも甘いもので立ち直っている。

「この紅茶もおいしいですよにゃー」とか言っているし、その紅茶にもミルクと砂糖がどばどばだ。

ねこみみも元どおりな感じ、けど微妙にしつぽの揺れ方が違うあたりまだちよつと恥ずかしいらしい。

そして僕はもちろんコーヒーだけだ。

「ブラックなんてよく飲めるねー」とか言われたけども逆に甘いほうがダメなんだから

しようがないんだ。

こういうところでも男って言うアイデンティティーが強化されている気がする。

まあ女の人でも甘いのが苦手な人もいるだろうけども。

「電話してる間にも増えてくる野次馬さんたちに囲まれてどうしようどうしようって困っていたら、運良くお役所の人が入ランチで商店街のお店に来ていて、みさきちゃんが全力疾走していると見てて、ねこみみ病関係の人……当時はまだ窓口とかは病院以外なかったらしいの……呼んでくれていて。んですぐにお巡りさんとかも来てくれたんだけど、そのお役所の人たちが説明とか心配とかしてくれたの。それで安心したって思ったら今度は仰々しい車が何台も来て私たち全員詰め込まれてね……あ、もちろん普通にね？ 物々しい感じじゃなくて。けっこー走ったかって思ったらみさきちゃんはそのまま検査。私たちは細かく聞かれたっけ、みさきちゃんのこと」

なるほど……その時点で。

2年くらい前だつて言っていたな、そのときにはすでにお役所……つまりは国も、いや、世界中でねこみみ病のことを把握していて、そういう部署みたいなのができているくらいには、ねこみみ病の人が出てくるケースがあつたつていうことか。

その関係者の人が偶然にいてくれたから何とかなつたけど、そうじゃなかったらこの子たちも大変な目に遭つたのは予想できる。

窓口って言うのはそれだけ大切なんかもん。

でも——2年前。

あの朝よりも、さらに1年も前のこと。

僕がなんの不自由もなく普通に生きていたころ。

父さんと母さんが残してくれたいちばんのもの、僕の体っていうものをまだ持っていたころのことだ。

……魔法さん、そろそろ1年になるんだし、返してくれないかなあ僕の体。

今の体は返すからさ。

「あのときはまだまだまだ事情も飲み込めていなかったのでお役所の人からねこみみ病っていうものを……あ、そのときはまだ違う呼び方で教わりましたけどにや……『これから怖いことになるのかにやあ』って検査が全部終わるまで心配しっぱなしでしたにや。町から外れてもまだ車が走って周りが森しかない研究所みたいなところに連れて行かれて検査ばつかりの日。 生きた心地がしませんでしたにや」

今でもそうなのか、それとも当時はまだ「稀少な研究対象」ってことだったのか。

「付き添いで乗っていただけの私も怖かったなあ……なーんかいろんな説明とか受けて、着いたら着いたでみさきちゃんとは別の部屋に案内させられて守秘義務とかの書類、いっぱいサインさせられたし。 別に怖い人が出てきたり脅されたりはしなかった

けど、淡々と『法律ではこうなっていますから』って言われ続けてねー」

「私の方は完全にぼつちにさせられたので死ぬほど怖かったですにや。……せんぱいくらいは着いてきてくれたら良かったのにやあ」

「しようがないじゃない！ 『みさきちゃんだけ別の部屋に』って本物の銃持った人たちに言われたんだから。あれって警察とか自衛隊とかじゃなかったみたいだけどもんだっただらうね？」

銃。

それが建物の中でも民間人の前で装備するほどに秘密だったのかな。

「まー、ちよつとすれば『身の危険がない代わりにいろいろなデータがほしい』っていうだけだったわかったので、それでようやく安心できたのですにや。一応は休み時間とかご飯とか、娯楽も本とかのネットに繋げないものなら好きにしてよくってお部屋もそこそこ広かったですし、生活環境には文句なかったですにや。で、そういうところで何週間か大きな機械とかでたつくさん調べられたり、走ったり飛んだり体力テストみたいなのかいっぱいしましたし。ずっとモニターのための吸盤が張り付いたまま機械で監視されていましたけどにや？ 周りの人はみんな女性の方だったのでイヤじゃなかったしお友だちにもなれたのでいいんですけど……でも、ずっとそばにいられて、つきつきり。つまりは機械にも人にも監視……観察ですかにや、されていたんで

すにゃ」

……この顔を見る限り、甘いものを食べた後の女の子特有のほんわかした顔を見る限りだと……酷い目には遭わなかった様子。

尻尾も怖いものを思い出している感じの曲がり方じゃなくて、ご機嫌な猫の揺れ方してるしな。

もちろん言わないで隠してる可能性もあるけども。

でもそこまで疑つてもしょうがないしな。

「まー、検査とか以外は好きにしてよかったですし、疲れたらその検査だつてストップしてくれませんか？ お昼寝だつてできてご飯もおいしくつて……不満といえばお外に出られないことくらいでしたかにゃ。あとSNSできないの……は逆に楽しんでたけにゃ。お母さんたちもよくお見舞い……つていうのも変ですけど来てくれていましたし。芸能活動は中断つてことでいろいろできなかつたのは痛かったですけど、今はそれを補うどころかそのおかげでつていうところもありますし」

「その……お仕事は目指していた感じですか？」

「にゃ？」

「ああいえ、島子さんがしたいアイドル活動つていうのと同じ方向性なお仕事なのかなって思いました……今の活動が」

「……あー、なるほど。ご心配ありがとうございます。まー、広報のお仕事も堅苦しいだけですし、それ以外ではこれまで通りで来てますから不満はないですよ？」

「そうですか」

そういう自由はある辺り、そこまで強制はされてないのかな。

……そうだよね、ねこみ病ってだけでたくさん居るもんね、初期ならともかく。

「あ、そういえばそこでのネットだって絶対ダメなわけじゃなくて、機密保持とかで書き込みだけがダメだったんですよ」

「それはみさきちゃんみたいなケモノ化で、しかも身体能力が抜群に上がってるっていうのが国内ではまだ数件だけだったかららしかっただし……しようがないんじゃないかなって思えるわよね。今じゃああ言うのってもうないらしいし」

「当時はいつ解放されるのか分からなくてじりじりしてましたにや」

「そうよねー。事務所のみんなも心配してたし」

「せんぱいも？」

「もちろんよ？」

「本当ですかにやー？」

「本当だって。その後私も似た感じになったし」

似た感じ……ああ、そうだよね、この人もねこみ病だもんね。

僕的にはもつと興味がある若返りの。

「私のときは大したことがなかったのであんまり話すことはありませんねえ……若返りとケモノ化を比べるのもアレですけど一応はおんなじねこみみ病の仲間なわけで、みさきちゃんみたいにしつつこく調べられるかもって思ってたんですけど」

「ずるいですよあ」

「別物だからしょうがないわよ。私はただの若返り……って言っても実際にはこつちの方がみなさん血まなこになって研究しているみたいですけど。だって永遠のテーマですもんねえ、若返りですから。大体の肉体年齢とかを調べて簡単な検査とか運動とかをしておしまいだだったので、みさきちゃんより後に入ってちよつとだけ同室でグチとか言い合って、そんで先に出ましたもん」

「ほら見てください響さん。ひかりさんって、こういう薄情な人なんですにや」

「いや、あれは私にはどうしようもなかったんだけど？」

「仲間なら付き合って欲しいのですにや」

「えー、やだよ。あそこ自由なかつたもん」

ねこみみ病で……珍しいケースだと長期間。

そうでなくても調べられる場合には短期間でも……隔離される。

自由を奪われる。

でも代わりに……自分の体に何が起きているのかはちゃんと分かる。

「ただ、私の若返りってば10年っていう長いじゃないですか。普通は4、5年って感じらしくって。それも私の年齢……前のですよ？ 前のですからね？ それからみさきちゃんとおんなじくらいまで、JKっていう年齢までっていうのは前例がないらしくって、やたらと外国の方がいらしていたのが少しイヤでしたねえ。休憩時間とかに押しかけてきて『外国でなら生涯を保証するから来て欲しい』だなんていろんなことから言われて参っちゃいました」

若返り。

多くの人が望んでやまないもの。

——岩本さんの10年でそれなら、僕のこれはいったいどうなるんだろうね。

15年くらい、いや、多分それ以上の若返りは。

「まー、私たちはねこみみ病の初期でしたから。けど初期の初期よりかはマシだって聞いてまだよかったなって思ってます」

「とつても贅沢な暮らしさせてもらいましたからにやあ」

聞いている限りだと……多分この国でなら、そこまで酷いことにはならないのかもしれない。

けど。



じんわりしてきた手のひらの汗を、ズボンに吸い込ませながら。

「…………ふと思っただけで、あくまで仮に、なんですけど」

今日も全然魔法さんの気配はないんだけども念には念を入れて。

「今確認されている以外のねこみみ病の症状…………みたいなのが新しく出てきたら。そうしたら、どうなるんでしょうか？」

「んー？ 新しいの？ ……あー、まーそのうち出てくるんでしょうかねえ？」

「どうですかにやあ。ねこみみ病のいちばん最初の人…………あ、それぞれですけど、ってどんな感じだったんでしょかにや？ せんぱいは聞きましたかにや？」

「ううん…………ごめんね、そこまで聞いたことがなかったっていうか思いつきもしなかったわ。すごいね響くん、そこまでぱつと頭回るなんて」

知らないか…………できたら知っておきたかったけど、ここでさらに「じゃあ知ってそうな人に聞いてみてくださいますか？」とかまでは厚かましいって以前に「なんでそこまで？」ってなるだろうし諦めよう。

「私たちのときにはまだねこみみ病、公表されてなかったんですよね。『社会の混乱を防ぐために、そのタイミングまで秘密にしておくように』って書類、たつくさん書かせられましたし」

「私もインタビューとかで『最近1日中この格好をするのが好きになっちゃったんで

す』っていろいろの何回もさせられましたにや。あ、一応少しはこれ以上知ってるんですけどにや、一般人な響さんとかには教えちゃいけない情報とかもあるんで……その」

「いえ。守秘義務とかあるんですよね」

「そんな感じですよにや。言える範囲ならそうですにやあ……昔。私たちが生まれる前の時代からちよつとはあつたらしいのですにや、ねこみみ病……ケモノ化。でも昔なら目立つたら最後、物珍しきとか迫害つて感じでお金と交換でどこかに連れて行かれるかさらわれるかだつたり……あんまり言いたくない感じの目に遭つていたそうですにや」

「……そうですか」

僕でさえ、ちよつと考えたら想像できちやうんだ。

きつと、考えたくもない人生になつちやつたんだらうな。

それを思うとこの時代で僕たちみたいになつた人は幸運な方なんだろう。

僕のなんか魔法さんがついてるから言わなきやバレないくらいだし。

「そういう人たちはなんとかして長老とかの物知りな人……悪意がなくなつてなんとかしようとしてくれる人を頼つて身を隠すくらいしかできなかつたらしくつて。おんなじような人が集まつた隠れ里とかそんな感じの場所で静かに過ごした、そんな感じらしいですよにや。ほら、天狗とか猫娘とかつて妖怪とかつていかにもケモノ化、です

「いや？」



「……………」

家の大掃除をしていた僕はタオルで首すじを軽く拭う。

思ったよりも疲れたし時間もかかった。

というかこんな寒いに、換気のために窓を開けっぱなしにしているのに、夏でも汗をかきにくい体質になっているのに……それでもこんなに汗だくだ。

筋力と体力不足っていうのはこんなにも厳しいもの。

けど時間を掛けただけはある程度はクリアだ。

鏡には、体じゆうを動かし続けていたからか顔が赤くなっていて汗をかいていて、そのせいで髪の毛が顔とかにうざったいかんじに張り付いていて、まだ肩で息をしているっていう銀髪幼女が……ふらふらしていた。

ああ、危ない危ない。

すぐに仕分けのために敷いてあるタオルの上に腰を下ろしてひと呼吸。

これだけ貧弱なんだから気をつけないとな。

この前のことを思い出しながら作業に没頭していたからつい今の僕はひ弱なんだから忘れちゃう。

こんなことで「僕の危機だ！」って魔法さんが思っちゃってまたなにか新しい魔法でも起きたら困るし。

「……ん」

顔を上げる。

そこにはごみ袋が10個くらいぎゅうぎゅう詰めになっている。

それだけ物を捨てることになった。

ほとんどが使っていないけどもつたいないものばかりだ。

捨てるのはヤダけど「じゃあ使うの？ 何回も？」って聞かれたら「そんなことないけど……」って感じの。

家の中はほとんどそんなものばかりだったな。

こんなことは前の僕のとくにやっておけばよかったって思うけど、そもそもつい最近まではどうしても必要なもの以外は捨てるっていう発想すらなかったんだからしようがない。

こんな感じで家に帰ってくるたびに少しずつやっていけば、あと何回かで終わるはず。

大掃除が。

年末にするはずだった大掃除が……どうしても必要なもの以外をがんばって捨てるのが。

だって、こうして家の中をきれいにしておけば心置きなく僕はこの家を離れられるんだから。

魔法さん。

ねこみみ病。

若返りとかケモノ化。

最初の頃——同じような人が少なければ何ヶ月も拘束されるらしいって聞いておいたから。

——もし僕のこれが前例の無いもので「隠さなきゃ」ってことになって……僕が居なかったものにされちゃったとしても、叔父さんに迷惑をかけないようにしたいから。

「……………」

怖い。

もちろん怖いよ。

でも……こうしないと、先に進めないのはこの1年で分かったから。

だから、そろそろ勇気を出すんだ。

## 47話 01 / 01 ↓ 06 ↓ 1 / 6

さて、僕が1月からずっと「入院」しているのには理由がある。

あ、いや、もちろんあの強引な外国人のおじさんとおばさんが「心配だから」ってなにかと引き留めてきたって言うのもあるんだけども。

それはあの日……元旦の日にみんなに迷惑をかけた後の病院のことからだ。

僕が眠いのには検査を受けさせられてそのまま寝ちゃったときのこと。

「……むう、起きてはくれないか」

「どうやら心から寝ているようだね……世話を頼んだ彼女たちも『全然起きなかつた』と」

眠すぎるのにしょっちゅう移動させられて子供みたいにぐずりたい気持ちをごらえていた記憶が、彼らの声とともに戻って来ていた僕。

「検査も終わったことだし、きちんとした形で眠ったほうがよいと思うのだがのう」

「無理なのではないか？ いくらこの子が大人びていようが、この年では眠気にはな

看護師にでも任せるか……」

怖いかもしれない場所なのに本気で寝ちゃったって慌てて目を開く僕。

「……!？」

僕はもう1回目を閉じた。

……だつて見下ろしてきていた2人の目はすごい至近距離で怖かったんだもん。

誰だつて起きて目を開けたらしわしわの顔が2個に片方が眼帯な顔が30センチくらいのところにあつたらびびるでしょ？

こういうのは心の準備つてのが必要なんだ。

「……おはようございます……」

「おお、起きてくれたかね……起こして済まない、ずいぶんとぐつすり眠っていたから忍びなかつたのだから。そろそろ髪や肌についた血を流したほうがよいと思つてな……時間が経つとこびりついてしまうものだから」

ん。

そういえば、あちこちが引つ張られる……乾いた血で……感じがするし、ちよつとやな臭いもしている。

「……首から下の髪の毛も、みんな首に……肌もぱりぱりします」

「そうだろうね。乾かない血も乾いた血も不快なものだからね」

「うむ、人間の本能的な感覚だから仕方ないのだよ」

でもなんでこの人たちはよく知ってるようにうんうん頷いてるんだろ……いや、考え

ないでおこう。

裏社会とかは僕知らないし考えない。

怖いのは苦手なんだ。

起き上がってみるとベッドに寝かされていたらしいのが判る。

あの検査室じゃないんだなって。

どこかわからないけど保健室を思い出させる感じの部屋。

「軽く拭いて着替えただけなんだ。あのときは軽くの説明と、なによりも急いでの検査が必要だったからな。大丈夫だと君が言っていたとしても不安だね」

まあなんか魔法さんに近いフシギなものについて知ってるとしても、あれだけのスプラッターはそうそうないよね。

「……ありがとうございます。僕自身も心配ではあったので」

話しかけた人の認識をいい具合にしてくれる魔法さんがいたとしても、病院で精密検査とかしたら数値とかは変なことになるだろうし。

もし「成人男性なのにまるで幼女の体重しかありませんけど!?!」とか騒ぎになったら大変だし……そう思うとこの人たちの馴染みのところで調べてもらえたのは有り難いことだっと思う。

「血は乾ききってしまったえばまだ良いのだが……今の君みたいに暖かくして寝かせておい



たまたまだと生乾きの部分もあるやも知れん。……事情があるとはいえ乙女の体だ、気になるところもあるだろう？」

うん……乙女じゃないけどね。

でも髪の毛から鉄つぼくて生臭い臭いだもんね。

いつもならちよつと動かしたらシャンプーとか僕自身のいい匂いで良い気分になるのに。

だから多分貰った服で隠れてる体も臭ってるはず。

だってぱんつの中まで真つ赤だったんだからな。

犬みたいな臭いを通り越している幼女とか……。

「風呂のほうは？」

「もう予約は入れてある。……ああ、こんな病院でも介護用のものがちようどあつてな、湯船があるからきちんと暖まれるだろう。君自身でできそうなら君だけで、必要なら介助の用意もある」

お風呂を貸してもらえてただけでちよつと嬉しい僕。

そう言えば昨夜はあんなことがあつたからお風呂に入らないで寝ちやつたし……お風呂に入らない日なんて何年に一回つてくらいだもん、そりゃあ気持ち悪い。

生理的な気持ち悪さだ。

「手伝いは？」って何回か聞かれたけど全部お断り。

だって、そもそも前の僕だったところから……男だった頃から裸なんて、同性の人たちにも見られたくない性分だったんだ。

温泉とかでも見られたくないって本気で思うタイプ。

なんで平気な人って本当に平気なんだろうね……僕絶対ムリ。

男のときでも男のそれを見られないようにがんばってたもん。

「なら入り口まで案内しよう。……これからしばらく着てもらおう服や、血で汚れてしまった……君が着ていたものと似ている服装も用意しておいたから安心なさい。

どちらを選ぶのも君の自由だ」

お家帰るって自由はないんだよね。

「君が検査を受け始めてから……そして寝始めてからおよそ10……12、いや、15時間ほどと言ったところだ。ずいぶんと気持ちよさそうに寝ていたから起こすのがためらわれたのだがね」

血がついたままでこんな感じにはさばさぱりぱりしているまんまじや痛んじやいそうだし、臭いも染みついちゃいそうだし。

せつかく今まで僕が、めんどくさくてもまじめに……調べたり、かがりから教え込まれたりしてからはずっといいねいに整えてきたんだ。

それがなにが悲しくて……シャンプー以外にコンディショナーっていうのも使って、タオルでぼんぼんって水気を取ってからドライヤーで長い時間をかけてゆつくりと乾かして、さらには枝毛に警戒して……っていうのを半年以上も続けてきたのにひと晩で台無しになるんだって。

あ、なるほど。

これが女の子が髪のを大切にする理由。

じゃあもちろん洗う。

それもなるべく早くに。

……魔法さんのおかげでそこまで痛まないはずとは思うけど、念には念を入れて。

しょうがない、丹精込めて育てた盆栽みたいなものだ、手塩に掛けるっていうものなんだからやっぱりしようがないんだ。

「……ではお言葉に甘えて」

「うむ、それがいい。……ここは肉体的には同性のお前の方がいいだろうな。儂は

先に用事を済ませてくる」

「わかった。それでは響くん。ゆつくりと起き上がってくれるかい？」

結局この人たち、なんで僕の名前知ってたんだろ。

あと僕が男だって分かってるっぽいし。

けどここで聞いて怒らせちゃうと怖いから黙っとこ。

今の僕はこの人たちのご機嫌を損ねると居なかったことにされても不思議じゃないんだもん。

◇

廊下に出ると、来たときとは全然違って普通に人がたくさん居てちよつと安心。

明るい廊下、ひっきりなしの放送の声と音、靴とかスリッパや話し声。

どう見ても普通の病院の廊下で順番を待っている感じの人がいっぱい居て、紙切れ片手に迷子になってる感じの人も居るくらい。

窓の外はちよつと夕方になりかけ……ほんとにずつと寝てたんだな。

看護師さんたちとかお医者さんとかともすれ違うけど、特段僕が見られるわけでもないみたい。

本当に秘密ってことで連れてきてくれたんだなって思うとちよつとだけ警戒心が薄れる。

でも改めて僕は臭い幼女なんだって意識すると、道を曲がったり立ち止まったりすると自分から臭ってくるのが分かって悲しい。

……これが昨日からずっと僕の体から出ていた臭いだって思うと、さっきまで一緒だったあの人たちとか僕を調べてくれた人たちにも嗅がれていたんだって思うだけで

すつごく恥ずかしい感じがしてきちゃって。

男だって汗の臭いとか体臭くらい気にするんだ。

ましてや今の僕は肉体は幼女なんだ。

こんな感情が出てくるのは普通だよ。

うん。

◇

あつたかいお湯で体を、頭のとつぺんからじゃーつと流す。

体は寝起きだからあつたかいし、なによりもお湯をこの臭いで染めたくないからつてさつきからシャワーを髪の毛にかけている。

でもなかなか落ちない。

髪の毛の毛も顔に着いていたのもお肌のも。

特に髪の毛はあつちこつちで束になってこんがらがって固まっているせいで、お湯をかけながらゆつくりとほどいていく作業で忙しい。

こんなことなら先にお湯に入ってから洗ってほぐしておけば……いやいやお湯が汚くなるのは僕が生理的にやだし。

髪の毛をほぐしてから洗って、痛んじやうってわかっていてもやっぱり臭いのはやだから2回3回洗って、効果があるかどうかはわからないけどトリートメントとかコン

デイシヨナーとか置いてあるものを何回も塗りたくる。

体も、特にお腹とお股、ふとももについたペンキみたいな血を落としていく。

置いてあるスポンジでごしごし……すると痛いから優しく優しく。

いちばんの難敵はおへそとお股。

だつてシワとかへっこんでいるところに血糊みたいにごびりついちゃっているせいでなかなか取れなかったんだから。

平べったいところなら簡単に取れるのにね。

けど結局お股の汚れは中途半端で終わり。

だつて指突つ込むのとか怖いもん。

男だつたらいくらかマシだったかな。

いや、男のだつてしわしわだし大して変わらないのかな。

そんなことを考えながら僕は、お湯で固まった血をほぐす作業と掻き出す作業を続けつつ……赤つて言うよりはピンク色に染まった水が吸い込まれていく排水口をなんとなくで眺め続けた。

あんなに血を吐いたのにこんなにけろりとして体の汚れなんか気にできる余裕があるんだなあって不思議に思いながら。

## 47話 01/01↓06↓ 2/6

「ふうん」

お風呂は良いよね。

体があつたかくなつて臭いがなくなつて匂いになつてさらさらして。

僕はお風呂が好き。

どれくらいかつて言うときから夏は朝晩に入ったりするし、温泉じゃあ1日に5回とか6回入るくらい。

けど病院のつて言うから身構えたけど予想以上に良いものだった。

浴槽は普通だったけど、僕の体に対しては大きすぎるつていうのは変わらなかったんだけど、あちこちに手すりがある。

おかげで踏み台いらずで、お湯は結構抜かないと厳しかったけど……それでもなんとか気持ちよく浸かることができた。

「むいふん」

すつごく満足。

今なら大抵のことにはYESつて言っちゃいそうなくらいに。

そして服は渡されたのを着ている。

映画とかドラマで入院している人がよく着ているあれだ。

名前は知らない青つばいやつ。

まあ着る機会なんてそうそうに無いんだしせつかくだし。

こういう特別な服と違ってちよつとわくわくするよね。

着た感覚としては温泉に行ったときとかによく着ている浴衣と大差ないもの。

ただ、前の僕で浴衣を着たときには感じなかったふとももが擦れる感覚っていうのが気になるといえば気になる。

なんでだろ？

あ、腰のところできゅつと締めていないからどつちかかっていうとワンピースを着ているときの感覚に近いから？

それにふとももがつるつるだもんね、今の僕ってば。

けども今の僕でもきちんと着られるものが常備してあるってすごいね。

丈が合っているから、きつと今の僕の肉体年齢に近い子供用のはず。

まあ病院なら子供も入院とかするだろうし当然かもね。

そうじゃなかったらだばだばで身動き取れなくなるもん。

お風呂から上がって髪の毛を乾かしたりしていたら、いつもよりも長く……気が付い



たら1時間くらいかかって体をきれいにして、きちんと髪の毛もできるかぎりのケアっていうものをして。

途中で何回も外から「大丈夫ですかー」って聞かれて「がんこな汚れ落としてるの  
でー」って言ってたから大丈夫だっと思う。

それで出たところで待っていた看護師さんに案内されて、またこうしてベッドに戻されたわけだけど……さっきのベッドが綺麗になつてる。

さすがにそうだよね……残っていた血とかで汚れていたシーツとか枕とかが変えられてるのがなんとなくわかる。

こういうところでも迷惑を……って、もう今さらだね。

ここまでお世話になつてるんだから大した違いじゃない。

まあ臭いのは勘弁だしありがたいんだけど。

……臭かったんだろうなあ、僕。

やだなあ。

「！」

そんなことを考えながら周りの設備とかに目を向けていたら、かちやんと開いたドアからマリアさんが顔を出してきた。

あ、頭がドアの上の枠すれすれだ。

2メートルあるんだろうか……あるんだろうね。

僕と1メートルくらい身の身長差だもんね……すごいね、人間って。

「……ふむ。風呂が好きかな？」

「あ、はい」

「サウナも良いものだが湯に浸かるのも良いものだからね。分かるよ。血色も良く

なっているし安心した」

おばさんはずいずいとして来る。

……身長と体格とですごい威圧感。

でもさつきまでよりは怖いつて感覚は薄い。

この程度で単純だね、僕って。

と、お礼だ、お礼……言い逃しちゃうとなかなか言えないものだから先に言っておかないと。

「はい。ありがとうございます。おかげでとつても……生き返った心地です」

「そうかね。それはよかった」

「それで、僕の体は。……半日も寝ていて申し訳ないですが、聞いてもいいでしょう

か。その……『変異』での『反動』……は、大丈夫だったんでしょうか」

「ここに連れて来られるときに聞いた単語を使ってみる。」

僕は知ったかぶりは得意なんだ。

良くないってことばかりが得意なんだ。

「ああ、心配はないそうさ。まずはそれが聞きたかったのだろうか？」

「はい、ありがとうございます」

多分「変異」ってのは魔法さんっぽい何かで「反動」ってのはげぼげぼ血を吐くことなんだろうね。

問題はどれだけ近いものなのかだ。

「あの検査は簡易のものだったが、逆に言えば十数時間前の君が本当に危ないのかどうかを調べたということ。そして君には健康上の問題は無いと判明したそうだから安心するといい」

「そうですか」

あんなに瀕死になったりはするけど僕は死んだりはしないらしい。

なんか不思議。

まあ魔法さんだし。

「……だが、あくまでそれは応急的なものに過ぎない。明日からは……さすがにこの後すぐということもないか。今夜は休んで貰い、明日からは何日か掛けて負担をかけるような詳細な検査も受けてもらう予定だよ」

「ぼーん」って音がして……聞き取れないけどなにかのアナウンスが聞こえて「ああこは本物の病院なんだな」って実感する。

「けど、やっぱりそこまでは」

「頼むよ、響くん」

ベッドに座っている僕に向かってのしかかって……じやない、屈んできて両肩に手を置いてきてのぞき込んでくるおばさん。

「心配なんだ」

怖いけど表情はどう見ても心配しているもので、声音もまたものすごく真剣。

……こういうのを演技だっと思って思いたくない僕が居る。

「本当は……本当はね、君の保護者の方々の立ち会い、あるいは君たちが世話になつてい機関……いや、呼び方は違うのかもしれないのだけれども、とにかくそちらでしてもらうほうが良い。君の機密を守る、我々に知られないで済むという理由から良いはずなのは理解しているのだよ。……しかし君を連れて来たときにも言っただろう？　なんらかの事情があつて君はそれを、そちらのほうで今現在は受けられない状態にある。そうなんだろう？」

ゆっくりと諭すように語りかけられる。

それは父さんたちが居なくなつてからいつも大人たちに、クラスの委員長みたいな子

たちから言われていた感覚。

トラウマを負っている病人の僕を氣遣う雰囲気。

僕の直感「今は知ったふりをして通したほうが良いんじゃない？」って言っている気がする。

「……ええ、はい」

何となく氣まづくって目を逸らしながら。

嘘はいけない。

それはさんざん理解してきた。

けど、僕の中のおよく分からない感覚——それこそ今井さんみたいな「勘」が告げている。

この人たちのことは信用し過ぎちゃいけないって。

じゃあ誰を信用したら良いんだろうね。

けども同時にこの人たちは僕に危害を加える気はないんじゃないかとも。

「君の髪は本当に綺麗だね……羨ましいよ。映画などに出たいかね？」

「断固として拒否します」

「ははっ……まあ私たちは表舞台に立つてはいけないからね。冗談だよ」

でも僕は知るって決めたんだ。

前の僕から今の僕になってから半年……もうすぐ1年か……だらだらとした結果がこれなんだから、もういい加減に警戒が過ぎるのは止めなんだ。

それに、この人たちは……少なくとも今までのところ完全な善意で僕を、ここまで手助けしてくれている。

善意っていう貴重なものを与えられているんだから、少なくともこの人たちが僕のことをうざったいって思うまでのあいだは甘えておく。

今まではそう言うのを全部、気がつかないフリをして差し出された手をペしって振り払っていたから。

「それでは明日から順に君の負担にならない程度で頼んでおく。うむ……とりあえずは風呂に入ったことで疲れも眠気も襲ってくるだろう。少し早いが寝たほうがいい」

そういうえば、ぼーっとマリアさんを見ているうちになんだか眠くなってきた。

「そうだ、食事は必要かね？」

「いえ、食べなくても平気です。僕はもともと食が細いですし、むしろ今は眠気が勝っていますし」

「ならばゆつくり寝るといい。明日から別の部屋に移動してもらおう予定だからここで我慢してくれ。ドアさえ閉めたら静かなはずだし……なにかあればそのボタンを押してくれば人を寄こす」

あ、ここで寝るんだ……狭くって保健室っぽい雰囲気な部屋だけど。

「ああもちろん、君がここに居るのはイワンや私、事情を知っている者だけだから安心するといひ。この部屋の入り口にも目立たぬよう警護を立たせておく。いざというときには大声を上げてくれ」

え？

いざつてときが来る可能性あるの？

なにそれこわい。

「明日からの詳しいことはまた顔を合わせたときにしよう」

そうしてマリアさんが出ていって、ひとりになつて。

……「いざつて例えばどんなときですか」つて聞き損ねたなあ。

体も頭もベッドに預けてぼーつとしてしていると眠気と疲れが襲つてくる。

疲れ。

それはもちろん精神的なものが大半。

「ふう……」

もそもそと布団の中に潜る。

部屋の電気はつけっぱなしで、でももう起き上がるのがだるいからつて。

僕の呼吸の音と温かさだけを感しながら、ただただぼーつとする。

漂つてくるいい匂い。

……このシャンプーとかトリートメントの匂い、好きだな。

明日にでも聞いてみよう。

そんなことをぼーつと考える。

自然な眠気ついていうものを感じながら。

こういう眠気つてとつても気持ちがいい。

……お酒、飲んでいないしな。

今夜は……いや、昨日から珍しく。

そういえばこうやってお酒を飲みたいっていう気持ちがない日もそれなりにあるんだよね。

やっぱり酒浸りつてただの習慣で、止めようって思うよりもそれ以外のなにか別のところがあるうちには自然と収まるんだろう。

だんだんと思考にノイズが入ってきて途切れ途切れになってきている。

頭の芯から白くなっていく感じ。

だつておおみそかで「嘘を告白するんだ」つて緊張して行つて、タイミングを伺い続けて将来についてみんなに励まされて……「僕は男なんだ」つてようやくに言えて。

魔法さんも邪魔してこないし受け入れてくれたみたいだしつて安心した……と思つ



たら息ができなくなつて、苦しくなつて血を吐いて。

「気持ち悪いなあ」つて思つていたらマリアさんたちが来てくれて、とりあえずの説明つていうものをしてくれて、車の中で着替えて病院に連れてこられて。

もう眠いのにな歩かされてよくわからない説明をされ続けて「もういいや」つて検査も適当に受けて……途中からは完全に人任せにしちやつて。

普段の僕だったら絶対にしないようなことばつかりを、ほんの1日でまとめてしたんだ、そりゃあ疲れる◆◆◆◆◆……ん。

また、この感覚。

魔法さんの――。

――そして僕はまた、居なくなつた。

## 47話

01 / 01 ↓ 06 ↓

3 / 6

ちりちり。

ちみちみ。

縦線、横線。

トンネル。

光。

闇。

知っている変な感覚が入り乱れた先には真つ黒な……いや、真つ黒じゃない、黒の中にいろんな光が入り乱れているようなそんな不思議な空。

その中に大きな月が浮かんでいる。

まん丸の大きい月が。

なんだかきらきらしている気もする。

青っぽい気もする。

僕の知っている月じゃないみたいだ。

目を横に向けると、下は……一面の血の海だと思う。

赤黒いっていう感じで、つい最近嗅ぎ慣れた血の臭いっていうのがむわってくるんだ。

つい最近に経験したばつかりの血だらけっていうもの。

けども今のはそれよりもずっとずっとひどくって悲惨な感じになっている。

ときどき体が揺さぶられてそれと同時にになにかが聞こえてくるけど、それをなかなか聞き取れなくなつて。

けどその音……いや、声の主が近づいてきたらだんだんとはっきりとしてきた。

「……びき……びき!!」

この声……覚えてる。

あの夢で会ったアメリカっていう子だ。

たったの半月前に会ったばかりの子。

また、この夢。

でも僕の知覚は元日の深夜にみんなの前で倒れたときみたいに目はかすんで、焦点が合わなくてよく見えない。

でも月のはつきりと見えている違和感。

血の海も……かなり遠くのほうまで広がっているそれとはつきりと見えるんだから、

これは近視に近いもの？

……そうだ、確かメガネが必要だった前の僕するときにはお風呂とかではこうして曇った感じになってぼんやりとされていて、なんとなくの形とか色とかで判断するしかなかったんだ。

僕の体感では半年とちよつと、現実世界ではもうすぐ1年前になる懐かしい感覚はこのせいだったんだ。

じゃあ僕は元の体に戻った？

それにしてはなんだか僕自身が小さい気がする。

「……死んじやだよー 起きてよ響!! 目を……ちゃんと私を見てー!」

あいかわらずに声ははつきりと聞こえる。

月も見える、星も見える、ふわふわ浮かんでいるなにかもぼんやりと見える、血の海も見える。

けど、肝心のアメリカ……黒髪に黒い目で今の僕を少しだけ大きくしたような子が、その子の顔が、目が、はつきりと見えない。

「大丈夫だよ」って言いたくても声も出せない。

「なんか大丈夫そう」って言ってほっとさせてあげたいのに。

息をしているので精いっぱいらしい僕。

あのときに倒れたときとは違って……いや、この血の海的にはすでに吐き終わって

るからか、今吐きそうな感覚がしてこないのだけは楽って感じ。

「……あなた、あんなにムチャしてっ！ あんなに前に……いくら必要だったからって、犠牲を出したくないからって前に出るから！ 過信しすぎなのよ、もう……ぐす」

ぼたぼたと温かい感触がほっぺたに……あ、気がついたら「僕」は仰向けにされていて、だから月が見えて、でもなんで下も同時に見えているんだろ。

けどそんなのはどうでもいい。

それよりも「僕」を心配して泣きじやくっているこの子だ。

「今、みんなが来るからね？ ……ほんとにもう、前線で指揮を執らなきゃって言っても限度つてものがあるんだってばっ……あなたって昔っからいつもそうで……」

この前とは違ってなんだか物騒な展開の夢。

きつと寝る前のマリアさんたちのよくわからない説明とかが倒れたときの記憶とごっちゃになっているんだろうな。

あのときだってよくわからない感じの夢だったんだ。

……きつと、この夢っていうものは僕がしたいこと、言いたいことを抱えているとき、いろんなものが頭を埋め尽くしていてごちゃごちゃでどうしようもなくなつたときに出てくるんだろう。

だって前だって魔法さんでお隣さんがおかしくなつちやつたり、それで僕が実は隠れ

られていなかったってわかつちやったり、普通にしていれば魔法さんが働くから前の僕じゃなくなつた今の僕でも平気で生きていられるって知って、ヤケになつてたときで。

それでみんなに嘘をたくさん重ねたことがずしんとのかかっているっていうのが耐えられなくなつてきたタイミングで見たものだったんだ。

今だつてそう。

みんなに心配を掛けて魔法さんの暴れつぶりを目の当たりにしていて、きつと心はまだ動揺しているんだろう。

「……ぐす、ぐす」

抱きついて泣いていて温かい液体……涙がぼたぼた落ちてきているこの感じ。

倒れたときに僕の頭を抱えて泣きじゃくっていたゆりかるときそっくりだ。

けど、あのとき。

……もしもあのときにこんな感じで言つて、少しでも安心させてあげられたら。

「……けほつ。大丈夫だよ、アメリカ」

「響」

せめてあのとき、「僕自身は死ぬことはないんだ」って、「魔法さんっていうなにかで守られているんだ」って伝えられていたら。

「急所は外れているし内臓にも異常はないだろう。うん、大丈夫だ、すぐに治療を受け

れば……死にはしないさ」

すらすらと……なんだか少し違う感じがするけど、でも今度は声がちゃんと出る。意志を伝えられている。

あのときにはできなかつたことだけど、せめて今、夢の中くらいではしてあげたい。この変な夢もそうすればすぐに醒めるだろう。

醒めると良いな。

「……でも。でもでもっ、響、私を安心させようとしてやせ我慢してたりっ！ だつていつもあなたはそうだからっ……何でも一人で抱え込んで。男の子だからっ」

血を吐いて倒れて、それが止まらなくなつて……そんな状態の僕が大丈夫だつて言つていても、あのときのゆりかもみんなもきつと信じられなかつた。

だからこの子も泣き止まないんだ。

「……ねえ、止まらない。止まらないよう、響の血……。『胸の傷』から出てきてる、その血が……ぐすっ」

胸？

……ああ、確かあのときも口からとは別に、胸のあたりからもじんわりと熱いつていう感覚があつた気がする。

それをこの夢の中では、「あのときにこうしていれば」って思つて観ているだろうこの

夢では、そういうことになっているらしい。

だからこそ、吐くのが止まらない代わりに胸にできたことになっている血が止まらないことになっていてるからこそ、こうして話せるんだ。

あのときもそうだったなら、あそこまで苦しかったりはしなかっただろうに。

まあ夢だし、そのくらいはいい方向に変わっているんだろう。

きつとやなああの体験を思い出しちゃった脳みそが勝手に作り替えているに違いない。それにしても、空がとってもきれい。

星空なんていつのころからか見なくなっていたから、とっても新鮮で。

明かり……いや、そもそも地上のどこにも光を出すものがなくなつて、水平線が見えて。だから明るくて大きい月が浮かんでいても星がいっぱい無数に見えて。

他には何も見えないからわからないけど、でもきつとここはあのときのあの砂浜で、つまりはあの島で、だからここは冬眠のときに見ていた夢とおんなじ場所だ。

「……響!? ねえ、しっかりしてよ響!! こつちを見て、寝ちやつたらダメなの! こういふときに寝ちやつと……っ」

周りを見ていたらのぞき込まれてきて、アメリカのシルエットと落ちてくる涙と髪の毛の先っほだけがわかる。

けどアメリカだろうこの子の顔はあいかわらずに焦点が合わなくって見えないんだ。



そもそもが明かりが月と星だけっていう暗さなんだし、さらに上からのぞき込まれて  
いるんだから例え目がちゃんと見えていたって変わらないはず。

……あ。

そんなことを考えていたら、ふと浮かぶ考え。

……あのときは気が回らなかつたけど……まあ僕自身のことと精いっぱいだったか  
ら後知恵だし、どうしようもないことだったんだけど……考えてみたら、あのとき。

車に乗せてもらってから着替えたりしてマリアさんとおはなしする余裕はあつたん  
だし、あのときにひと言でもいいから誰かに電話で連絡さえしておけば……きつと今も  
すごく心配しているだろうみんなも少しは安心してもらえたかもしれないのにつて。

……泣きじやくつて、だんだんと泣き声が大きくなってきたアメリカ。

夢の中の存在、つまりは僕の一部だとはわかつていてもこうして泣いているのを放つ  
ておくのは気まずいし、きつと起きた後もなんとなく罪悪感みたいなものが残り続け  
ちやいそくだ。

だつたらせめて……うん、手は動く。

あのときとは違って、すつごく重いけど、でも、腕を上げられるみたい。

よく見えないからなんとなくで触れたところ……アメリカの髪の毛だつたんだけど、そ  
れに気がついたアメリカが……たぶん涙を拭いっつ聞いてくる。

「……響、どうしたの？ なにか言いたいことあるの？ 大丈夫よ、もうちよつとしたらすぐにみんなが来るから、だからきつと！ ……あ！ ほら見て、あつちのほう！ もう救助がっ」

「……アメリ、姉さん」

そういえば「お姉ちゃんって呼べー！」って言っていた気がするけど、でもなんとなくでこんな言いまわしになる。

「姉さん。『僕たち』はもう大丈夫だよ。それに傷も今止めたから、もう心配は要らない。だから安心してくれ」

勝手に口が動いた感じになったけど「もう大丈夫だよ」ってニュアンスは伝えられたはず……それにしては変な感じだけでも。

まあ夢だから思い通りに行かないんだよね。

心理学の本とかでそういうのを見た覚えがあるんだ。

……む。

だんだんと周りが、お月様までもがぼんやりしてきて『僕たち』の言葉を聞いたアメリがなにかを言っているみたいだけど、あんまり聞き取れなくなってきた。

さすがに2回目だ、もうわかる。

この夢は覚めるんだ。



目が覚めた。

うん、きちんと夢のことは覚えているし意識もはつきりしている。

冬眠明けとおんなじだね。

最後にはあの子も……夢の中の存在ではあっても、アメリカも笑顔になつていた気がするしなんかほつとする。

セルフヒーリングとか言うやつなんだろうか……やつぱちゃんとう母さんたちの事故の後に通つてたメンタルクリニック、行った方が良かったらね。

まあただの悪夢……でも無いんだけどさ。

……あ。

それよりもみんなに連絡しないと……冬眠明けとおんなじで夢で考えてたこととか忘れはしないと思うけど、早いほうがいいだろうし。

あ、そういえばスマホ、別に電波とか気にしないで良いって言われたっけ。

よし、それなら早速。

「……びびびびびびび!!」

「!？」

体を起こそうとして腕を動かしたら何かにつ張られる感覚とちくつとした痛みが来て、しかも大きな音が近くから……アラームかなにかが聞こえてきたもんだから思わ

ず声が出そうになった。

起きたばっかりなのに心臓がばくばく言っている。

もう、何……また検査？

安眠を妨害された系の不愉快さに目を開けると……あれ？

「……………」

うるさい音に眉がぐつとなりつつ天井をにらんでみる。

……寝る前と、違う天井？

つまりここは別の部屋っていうこと？

けどなんでまた、寝る前と起きたときで部屋が変わるんだ。

……また検査とかで寝ぼけたまま抱っこされていたんだろうか。

けど、それにしてもうるさい。

寝起きの人間に聞かせていい音じゃないだろう。

僕は幼女なんだぞ、過保護くらいがちょうど良いんだぞ。

そのうるさい音は右側のすぐ近いところから繰り返し出ているみたい。

ちらつと見てみるとコードがいつぱいついていて、パネルとかボタンがごつい感じに

なっている、映画の病院のシーンとかでよく見る機械がある。

……こんな機械も、あの部屋にはなかったはず。

そして慌ただしいばたばたって感じの足音と硬い靴の音……この感じはドアの外から近づいてくるもの。

ノックもせずにはボタンと開かれたドアからは——マリアさんと看護師さんたち。ずいぶん慌てた感じだけど、なにかあったんだろうか。

「！……ふう……良かった。君たちは席を外してくれたまえ」

マリアさんはせっかく来た看護師さんたちをドアの外に追いやって、ぱたんと閉める。

なんで？

「……起きたのかい……意識ははっきりしているかね？」

「え……ええ、まあ」

結構良い感じに寝た感覚があるからすすっきりしてるんだ。

「……ずいぶんと久しぶりだね、響くん」

久しぶり？

……ああ、「よく寝たね」ってこと？

この人たちの故郷の国での言い回しか何か？

「大事が無くて、本当に良かった。……いつ目が覚めるのか分からなかったものだからね」

どういふこと？

「響くん。君はね——あの晩から5日。5日も目を覚まさなかつたのだよ。医学的には一切の問題が無いのに……ね」

え。

……また明晰夢を見て、それで何日も経っていて。

まさかこれって……プチ冬眠？

## 47話 01 / 01 ↓ 06 ↓ 5 / 6

プチ冬眠とか何バカなこと考えてたんだろ僕。

多分また冬眠したって聞いて動揺したんだろうな。

今度は痛かった方の手を使わないようにして体を起こしてみると、腕とか脚に何本のコードが張り付いている。

吸盤……心電図とかの？

コードだらけで今の僕はまるでロボットとか人造人間的な感じになってる。

研究所で生まれたての的なの。

なんかとつても動きづらいつて感じるけど、別に拘束とかされてるわけじゃないしでぼけーつて座ってる。

……するつと拘束とか出てくるあたりにマリアさんたちの強面に対する僕の印象がうかがえる……いや、だつて信用したいけどなんか怖いし？

人は見た目なんだ。

「……まず、気分は問題ないかね？ 5日間も寝ていたのだからね」

「あ、はい。大丈夫だと思います……普通に」



「……その程度なんだね、君にとっての『反動』は。しかし心臓に悪いな……こういうのは、いつ見ても」

あ、確かに人がいきなり何日も寝ちやったら昏睡つて訳で心配もするか。

「いや、君は悪くはない。悪くはないんだが、私たちにとってはだね、ここまで強いそれは遠い昔……そう、故郷を出て以来だから」

……つて言うことは、この人たちも僕みたいな人を1回は見たことがある。

「響くん、改めて……良いかね？ 君はあの晩から5日……5日だ。つまり今日は1月の6日となる。世間では正月というものが終わっているという日付なのだよ」

魔法さん。

今度はなんでなの？

冬眠、それもあのときは3ヶ月だったのに比べるなら5日つていう短い時間で済んだのだけはよかったんだけど……でも、それがまた起きちゃうなんて。

……薄々感じてはいたけどなあ……あの夢を見始めたときからなんとなく、そうなんじゃないかって。

僕が変な夢を見るのイコールで冬眠。

寝るのがちよつと怖くなる。

「君はあの晩……記憶がはつきりしているのか分からないから簡潔に話そう。君は私

たちと一緒にこちらに来て簡易な検査を受けてもらい、その翌夕方に風呂に入ったりしてもらって軽く話した後すぐに寝入ったと報告を受けている。ここまでは覚えてい  
るか?」

「はい……それから?」

「うむ。それからひと晩経ち、昼になつても起きてこないと連絡を受けたが疲れから  
だろうと待つていた。しかし夕方を過ぎ……さすがに寝過ぎだからそろそろこちら  
から起こそうとしてみたのだけれど、一向に目を覚ます気配がない。……だが君の年  
齢を考えたなら血を吐くという反動とあの騒動での疲れは大変な負担だったはずだ。  
だからともうひと晩待つてみた」

……なるほど。

冬眠に入ると、普通に起こそうとしても起きられないんだ。

「そして翌日。3日になるのだね、1月の。その日の昼を過ぎても起きようとしな  
い。だから声をかけたり体を揺すったりして起こそうと試みたのだが、それでも効か  
ない。これは通常ではないと調べてみたところ、君の脳波も心拍もともに深い眠りに  
ついている人間のそれのままだ。それも生命維持機能も限界すれすれのところで――  
つまりは尋常ではなかったのだよ。まるで冬眠だ」

そこまでしても起きないととなると本当に冬眠って感じなんだな、魔法さんのこれっ

て。

「……判断には非常に迷ったが」

僕の体から吸盤をぺこっぺこっぺこって外していく。

「体温もかなり低くなつてはいるものの、心拍も呼吸も低いところで安定している。

そして君は私たちを頼つた際、このことについてなにも言わなかった。だから私たちの判断の下で君のバイタルを監視しつつ、異常があるまではなにも手を加えないと決めたのだ。せめて点滴くらいはしようと言う意見もあつたのだがね……」

点滴。

つまりは針。

それが僕の体に入ってくるっていうこと。

それは僕の体が傷つけられるっていうこと。

僕を攻撃しているって認識するのか、それとも見た目を著しく変えるっていうのに当てはまるのかはわからない。

でもそうされた場合、魔法さんが働いて点滴のセットごと吹っ飛ばなんてことにもなりかねなかつたから危ないところだったのかも。

高い機材が置いてありそうな病院の中で針が飛び回ったりしたら大変なことになつていただろうし。

もちろんそうならないかもしれないけども冬眠中は魔法さんが僕の体をコントロールしているわけだから、そういうのを止めることすらできないしなあ。

……この人たちは、詳しく聞かないでくれてはいるけど、どう考えても魔法さんに近いそのことを知っている感じなんだ。

だからそんなことが起きたとしたって大丈夫なはず……だったのかもしれない。

もしそうなっていたらしょうがないからって全部話していたかも。

でも、そうはならなかったんだ。

「……その顔色だと、特に具合が悪いとか脱水だとかも無さそうだね。……悪いが君が気がつく前に先に話してしまうと、一応君には寝たきりの患者用の……はつきり言うてしまえば、おむつというものをだね」

え？

おむつ？

子供どころか赤ん坊みたいにされてるの？

え？

「ああ、安心してくれ。医療従事者ではあっても女性に頼んだよ」

いや、そっちの心配はしてないけどさ。

ごわごわとかはしていないけど……え？

「そのような感じで、君に対してはそれ以外のことを……寝返りの世話だけは数時間おきにさせておいたが、それ以外のことは本当になにもしていない。した方がいいという意見も多かったが、君からそれを頼まれていないということを押し切らせてもらった……なにしろ排泄さえ確認されなかったからね。それは正解だったようだ」  
人は水分を摂らないと3日で死ぬ。

それを知らないはずはないのに、それでもあえて僕に何もしなかった。

……魔法さんみたいなので動かない人は死なないって、知ってる……？

「……落ちついてるね。ということはそれは、その強さの反動は——良く、あることなんだね？」

「えっと……はい。このタイミングでまたなるとは」

「……そうかい。幼いのに君は……」

冬眠。

いずれまたなるんじゃないかっていうのはクリスマス前に目が覚めてからなんども考えていたことではある。

けどまさかこんなところで……いや、運がよかったんだよね、きつと。

もしこれが年越しのときとか倒れたときとかだったらあの子たちにもっと心配させたはず。

まあ血を吐くのとどっちがって感じだけでも……いや、さすがに血を吐く方がインパクトでかいよね……。

今回の何が原因なのか分からない。

ただの偶然なのか何かしらのトリガーがあるのか……定期的に来るのかも分からない。

い。  
だけど今回はたったの5日っていう、前回から比べるととっても短い……けど、よく考えてみたらやっぱり寝て起きたら何日も経っていたっていうのは困る。

でもでもあのとときみたいにく月っていう季節まるまる飛ばすなんてことにはならなかったんだ。

……この違いは何なんだろうね。

「反動はね。　そもそもそんなに長引くものじゃないんだよ」

マリアさんが言葉を選びながら言う。

「君が他の人……同じような人たちのことをどこまで知っているかわからないから、もし知っていたら済まないけれどね。　しかし、よほどの反動というものを抱えている人でも複数の日を跨いでのもそれというのは……私でも見たことがないんだよ。　長年の経験で多くのそれについて知っているからこそ、余計に君が心配になる」

「……そうですか。　」迷惑を「

「いや、迷惑なんてことじゃないんだ。ただ単純に心配で……そう、誰だつて、例えば路上にうずくまつて苦しそうにしている人がいたら心配にもなるだろう。それが知り合いや身内だったとしたのなら、なおさらだろう。それと同じなんだよ。ましてや君は、私たちと……」

そこで口を閉ざしちやう彼女。

あれ？

その先つてあれかな？

「……まで聞いたら仲間になつてもらわないとねえ……けけけ」つて感じなの？

「通常であれば反動の後にはひと月も安静にしているなら自然に、完全に治まるものだ。

精神や肉体に過剰な負担をかけてはならないだよ。西洋医学的に言うならば絶

対安静というものだ」

そうなの？

あ、だから……冬眠明けにはビルの中で逃走劇を手伝つたりしたし、その後は雪かきとかしてたりしたから？

「君の場合にはそうもいかないのかもしれないがね、私たちとしては最低でもそのくらの期間。つまりは2月の頭くらいまでだね、それまではここにいて私たちの世話を受けてもらいたいと思つている。無論、強制ではない。君が数日で出たいと言え

ば、君の意思を尊重する」

僕の両手をぎゅつと包み込む……冷たくってごつごつしててしわしわのお手々。

……やっぱりこの人たちは魔法さんみたいな何かを知っている。

それはねこみみ病って言うのとはまた違うものつても分かる。

だって僕が血を吐いたり何日も寝ちやつたりするのを「そういうこともあるよね」つ

て感じなんだから。

つまりは普通の人たちじゃない。

僕はこの人たちとおんなじ？

それとも違う？

——それを知るには聞かなきゃいけないって、そうになると僕はこの人たちの面倒になるって簡単に予想がつく。

けど、魔法さんが何をするか分からない。

これを口にしたらどうなるのかが。

「もし君自身と、君の保護者の方たち……連絡してから判断してほしいところだが、そのどちらが良いというのであれば。どうか、私たちが安心させてもらいたい。でき  
るならここで先の期間は経過観察をさせてほしいのだよ。欲を言うのなら君の『変  
異』や『変質』についても尋ねたいところだが……こちらは無理には言わない。と



にかくここにいてほしい、面倒を見させてほしい。ただ、それだけなのだよ」

マリアさんもイワンさんも、たったの1回しか会っていなかったはずの僕を助けてくれて、ここまで心配してくれている。

心配させている。

でも僕自身も心配なんだ。

「また数日後に何か起きるんじゃない？」って。

「また何日から何ヶ月寝ちやうんじゃない？」って。

「起きたら血まみれで何ヶ月経ってました」って。

……僕は、決めた。

人を頼るって。

「わかり、ました」

「本当かね？」

「はい……でも、申し訳ないですけど、僕のこれのことをお話することはできないと思います。でもここで静養……安静にするくらいなら僕の方からお願いたいくらいです」

もし今度別の何かが起きても、誰かが傍に居てくれる。

迷惑を掛けたくないって気持ちより、そうして安心できる気持ちの方が濃いなだ。

……相手から「いいよ」って言ってくれているなら、甘える。それくらいはしても良いのかもしれないって。

「さらにお世話になりますし、また迷惑を掛けてしまうかも」

「迷惑ではないよ……ともかく良かった。ああ、すぐにあいつも連れてくる。きつと喜ぶだろう……少し待っていてくれないかね？」

そう言い残したマリアさんはものすごい大股で……頭をドアの上の枠にぶつけそうでひやつとしたけど大丈夫だったみたいで、あつという間に部屋から出て行った。

……世話焼きっていうのなんだろうな、あの人たち。

事情があるにしても、見ず知らずの僕をここまでなんだもん。

——裏に何かがあるのかもちらつとは考えるけど無視する。

……そういえば飛川さんも叔父さんもこういう感じだったっけ。

いや、思えば学校の人たちも近所の人たちも……父さんたちの事故を知っている人たちは、そんな感じでよく話しかけてくれていて。

僕はそれに気が付けなかったから何度いろんなこと言われても「結構です」っては何のけちやっていたんだ。

けどもそれはあの人たちにとって……悲しいことだったのかもしれない。

それは今までに、前の僕を気遣ってくれていた人たちみんな、ひよつとしたらそれで。

……だから僕は初めっから間違っていたのかも知れない。

だけど今、それを……僕の意志で初めて理解して、受け入れたのかも知れない。  
僕を心配する気持ち。

僕はこんなことになってからようやくやくに、気恥ずかしいその気持ちを受け入れられる  
ようになったんだ。

ちよつとだけ、大人になれたんだ。

## 47話 01 / 01 ↓ 06 ↓ 6 / 6

僕は鬱々としていた。

病院のベッドの上で。

病室って言う無機質な空間……いや、私物と貢ぎ物で結構僕好みになって来てるけども。

でも僕は凹んでいる。

ああ、また来る。

今日も絶対に来る。

来ちゃう。

「はあ……」

お年寄りには朝が早いからなのかは知らないけど、午前っていうこのタイミングで……平日だからみんなからのお見舞いもないってわかってるからか堂々と来るんだ。

あと「悪いなあ」って思っちゃって断り切れずにずるずる来ているからとつくに最初  
に言われていた1ヶ月って言うのは過ぎている今日このごろ。

だから来ちゃう。

それはもうほとんど確実。

隅っこの病室だからこそあんまり人が通らなくて……だから近づく足音が僕に向けてきているんだってわかつちやうんだ。

読んでいた本にしおりを挟んでばたと閉じて、ドアのほうを向いておこう。

ふたりぶんの足音はドアの前に来て止まって、軽いノックだけをしてがらつと開けられる。

うん、病室って鍵とか無いからね……それだけで僕にはストレスなんだ。

「やあおはよう響！ 今日もいい天気だな、うむ！ いつもどおりに知性と美が輝いているな！」

やっぱり外国の人の語彙って特殊だよな。

「……マリアさん、おはようございます。 はい、今日も快晴ですね。 外は寒そうですね。 外は寒そうですね。 外は寒そうですね。」

のそりと入って来るマリアさん。

イワンさんの方はさらに背が高いたらドア枠をくぐるようにして入ってくる。

「ところで響！ 今日新しい店がオープンしたと聞き、朝一で並んで買ってきたぞ！

若者に人気だというスイーツを！ 今日も皆で食べようではないか！」

ああうん、今日もお元気ですね……あと結構にミーハーですよ……。

おじいさんとおばあさんだところは行かないだろうし、やつぱりおじいさんとおばあさんな年齢なんだろう。

「ああもちろん、響とこいつのものは甘さ控えめとビターを選んできたぞ！」

「……ありがとうございます」

ものすごい笑顔で近づいてきたマリアさんが枕元の机に紙でできた箱……たぶんケーキ系の柔らかいやつなんだろうな、それを自信満々で置いて僕を見てくる。

まるでおばあさんと孫だ。

僕はふたりのお孫さんとかじやないんだけどなあ……。

どう考えてもそんな扱いだよなあ……。

最初っから僕のこと気にかけてたのって、もしかして猫かわいがりする孫が欲しかっただけなのかもなあ……。

ほら、最初会ったときも「怖がらないでくれた」ってのが最大のポイントだったみたいだし。

「……なあ響。嫌なら嫌だと、はっきり言っても構わんだぞ？ 最近のマリアは

少々浮かれすぎているからな、びしつと言わねばならぬのだ」

「なにを言うイワン。こんなにかわいい響の世話ができるのだぞ？ それに響は嫌

がつていない。なあ響？」

どっちももうちよつと距離を置いて貰えと僕とつても嬉しいかなつて。

でも何回言つても聞かないから多分通じないんだよね。

おんなじ言語を使つていても。

「待つが良いマリア。響は儂と今話し始めたのだ、しばしのあいだ待つてもらおうか？ なにしろお前は話し始めるとなかなか終わらないからな、先に儂に譲るのが筋というものだろう？」

いつも通りにケンカするほど仲が良くなりそうだ。

僕は目を逸らして枕元の箱を開ける。

あ、美味しそう。

「おいおいイワンお爺さんや？ 先ほど貴様の部下から泣きが入ったぞ？ お前、今朝はなにやらの用事があつたらしいじゃないか。それを丸投げして私たちの会話に無理に合わせなくともいいのだよ？ そのぶん私と響だけで盛り上がるからな。なあ響？」

あー、こういうときはブランデーか赤ワインが欲しいなー。

「はて、なんのことかかう？ そもそもとして儂と響の会話に……それも、貴様のようにただべらべらと話しているのではなく、静かな会話という上品な時間に無粋は要らぬのだがのう」

この人たちつてば素で怖いんだよな。

「そのせいで貴様の代わりに私と私の響との時間がわずかでも取られたのだからね？　それはどうしてくれようか？　なあ響？」

「お主はいつも、いつもそばにいないか、僕の響のところ。女同士ということを利用しおつてからに……でも僕だつて！　僕だつて、たまには響とお前抜きで戯れたいもん！」

何がこの人たちをここまで駆り立てるんだらうね。

「いい年した爺さんが、その話し方。恥ずかしいとは思わんのか？」

でもマリアさん、あなたもイワンさんがいないときたまに「でちゆね」とか言いますよね？

僕、そこまで幼く見える？

いや、肉体年齢的には……あと外国人的には幼く見えるんだらうけども。

「はて、知らんなあ？　さて響、マリアにもうすぐ来るだらう電話が始まつたら昨日の続きを話してやろう。君は頭がいいからすぐに理解してくれるし、しっかりと覚えてくれるから話し甲斐があつて爺さんは嬉しいよ。ああもちろん、昨日話した——」

スイーツつていう存在の中で比較的マイルドな味のそれを僕が口に入れているのを30センチ未満の至近距離で眺めてきているおじいさん。



怖いんだけど？

でもいつもだから慣れちゃってる僕がいる。

「おい、お前」

『ロマンノフの財宝』、あるいは別の呼び名でも良い。とにかくは失われたはずの莫大な財産だ。大変にロマンのある話だし、それらしき信憑性もあるかのように聞こえる話なのだがな、それらの内世間に流布しているものは皆嘘っぱちであつてな？」

徳川の埋蔵金とか言うよねえ。

そういうのつてどこにでもあるんだね。

でも実際ほんとにあつたりするのたまにあるらしいから全部が嘘じゃないって思うよ。

「しかし実のところ……これからが今日の本題だぞ響。実際にはそれに類するものを

……もちろん一般人が戯けた夢想をしているものではないのだがな？ それを農らがな？」

「この糞爺が」

「……はて、可笑しな言葉が聞こえたのう……それは、お前からかの？」

そうして始まるふたりの威圧感と筋肉の応酬。

僕が「そろそろ止めて？」って言うまでのじゃれあいみたいなもの。

仲が良いほどにやつなんだろうね、きつと。

それとも部下の人たちがいる前じゃできないから？

まあどうでもいいけども。

ぎやいぎやいしているふたりを見上げながらもぐもぐする僕。

ちらちら僕を見ながらだし、多分この辺も僕を気に入っている理由なんだろう。

だつて身長2メートル超えの筋肉たるまたちが傍でケンカしてるんだもん、なんか猫かわいがりされてるっていう立場じゃなきやこうして安心しててもぐもぐできないもんね。

廊下とかでの言い合いを止めたりすると、お付きの人とか護衛の人たちが僕のことすごい顔で見てるし。

……そんな僕たち。

もう2月も半ばだ。

つい何日前にお見舞いに来たあの子たちにチョコをもらっちゃったっていうのがあつても、僕はまだ居座っているんだ。

つまりこの入院はもう、1ヶ月半になるということで。

……さすがの僕でも毎日こうして話していればほだされる。

知人から友人に……この人たちの場合は家族みたいに感じるほどに。

15年ぶりくらいにそういう感じがするから居心地が良くなって、だから引き留められるたびにずるずるとここまで来ちゃっている。

でも、家の方もあらかた片付け終わって準備も整っているし……そろそろお別れしないって思う。

こういうのっていつするのかってきっぱり決めないと……いつまでもこのままでいいやって思っちゃう悪いクセがあるってよく知ってるから。

この人たちとも「退院」でお別れ。

あの子たちとも「引越し」でお別れ。

あの家とも——あと1ヶ月で、お別れだ。

……あ、そうだ。

僕があの家から出て行っても魔法さんはあの人に留まるんだろうか？

それとも僕に憑いてくるんだろうか？

多分憑いてくるんだろうね。

誤字じゃなくって。

まあ憑いてこないならそれはそれで良いこと。

それは、1ヶ月後に分かることだ。

## 48話 彼の、準備 2 1 / 7

家の中が静かになった気がする。

いや、多分これは僕の勘違いとか感傷とかじゃなくって本当にそうなんだろう。

だって物がなくなっただけだから。

まずは玄関。

どうせもう使えないのと使えなくなるのと踏ん切りをつけるのとで靴箱やクロ―ゼツトは空っぽ。

高かったしもつたいたいって思っていたちよつと高めのコートとか靴は今の僕には要らないもの。

僕自身やかかりが選んだ……8割方がりだけ……今の僕が着られて履けるそれらも外に出るための1揃いだけ。

玄関の外まで掃き掃除もしたし、これで誰かが家を尋ねてきても空き家だと思えるくらいにはなつたはず。

次に廊下。

案外といろんな物を棚とかで置いていたんだなあと感じる。

なんにもないって無意識に思っていたけどそこそこにものがあった、この長細くてかくつと曲がってさらには上の階へと続いているこの空間もモデルルームみたい。

もつとも、あの僕が落ちた場所……魔法さんが守ってくれた代わりに床と壁がばりばりになつちやつたあそこはどうにもならなかったからそのまんまだけども。

居間や台所もウィークリーマンション程度には物を残したけども、それ以外にはなにもない感じにした。

意外にも数年どころか10年前のお手紙とか書類が残っていたりして、片づけるのに時間がかかったところ。

あとは、父さんたちの後の片付けで気がつかなかったような古いものとか。

テレビの裏の配線もお掃除が大変だったし、いらぬコードとかがくつついたまんまになつているのを発見したりしたし、適当に置いていたり母さんたちが置いていたりした飾り物とかも、どうしてもつていうの以外はみーんな家から出しちやつたから本当に生活感つていうのがなくなっている。

台所だつて調味料とか以外は処分したし、なにげに汚れとかを落とすのにいちばん苦労しただけあつて見違えるようにきれいになつている。

これなら誰かが来てすぐに住んだつて、食材さえ買ってくれば文句はないだろう。  
うん。

これなら大丈夫なはず。

納戸。

父さんたちが死んでから適当に押し込めていた物もみんな引つ張り出して、ひとつひとつ選んで……結局僕関係以外の物は捨てられなかったんだけど、そうして整理して、いっぱいだった部屋も4分の1くらいにまで物を押し込むことができた。

いちばん多かったのが僕の服とかだったけど、それもみーんな捨てたからすつきりした。

小さいころの服とか……今の僕になったばかりのころこそお世話になったけど、今はもういらぬもん。

あとは学生服とか昔着ていた服とかカバンとか、なんとなく捨てられずにいたものも……まとめてみんな捨てた。

おかげですつきりしたし後戻りできない感じが漂ってくるし、これでよかつたんだらう。

人によつては大学生になるときに家を出るんだ、それを考えたら僕のそれは遅すぎるくらいだもん、踏ん切りつてのが必要なんだ。

階段を上った先の2階も廊下から綺麗。

僕が使っていない部屋は父さんと母さんのだからさすがに掃除するだけだったから、

ここも納戸同様に少しの捨てられない物はあるわけで。

あとは叔父さんや次の家主に任せよう。

他人任せだけど、家を引き払うっていうのはそういうことなんだろう。

持っていていける可能性のあるものはリュックひとつぶんしかないんだしな。

そして、今朝使った櫛とかの必要最小限のもの以外はなくなった洗面所に続いて僕の部屋。

本棚は空っぽ、押し入れももちろん捨てられない物以外は空っぽ。

本当に必要かって考えたら要らない物ばかりだったところもみんなすつきりしている。

捨てるときにはものすごく爽快だったつけ。

子供のころに使っていたおもちゃとか文房具とかあつたけども、全部僕以外に価値は無いものだから捨てた。

服だっかがりに選んでもらった物だけは残したけど、それ以外は何も無い。

今日出て行って、そのあとに帰ってこないかもって枕カバーとかシーツまで今朝のゴミで捨てた。

もう後戻りはできなくなっているし、そうしたんだ。

……改めて見回すと、要らない物ばかりに包まれて暮らしてきたんだね、僕って。

この家で、父さんたちがいなくなつてからも15年ものあいだ、ずーつと……ただ暇を潰すただけに生きてきただけ。

でも、そんなのも今日でおしまい。

今日の夜にはきつと、ここじゃないどこかにいるんだ。

……掃除したときはすつきりしていたけど、いざこうして慣れきっていた家の中ががらんとしちやつていっているのを見ると、よそよそしく感じるようになっていると寂しさつていうものを感じる。

けど掃除して捨てているときにはそうは思わなかったんだよなあ。

やっぱり体を動かして……顔には出ないけど気分がハイつていうものになっていると判断力が鈍るんだろうか。



「家の中、もう1回確認しとこ」つて、多分心残りがあつたせいで出かけようつて思つてからさらにぐるつと見回しながら歩いてきて、ベッドでしばらく……もうシートもないからさらさらしていないけど、横になってぼーつとして。

することもないけど動きたくもないつて具合だったから、この1年ですっかりとクセ



になっちやった、の毛いじりをしていた。

……陽の光に当たると透けるし、なんだか虹色っぽくなる今の僕の髪の毛。

触り心地がいいもんだから、こうしてくるくると持ち上げて触るのがいつのまにかクセになつていて。

あ、枝毛。

連れて行かれた先で……当分は忙しくなるだろうけど、そのあとに髪の毛、何時間かかけてきれいにしたいなあ。

それくらい自由はあるだろう、たぶん。

この国の人権意識って言うのを信じよう。

数分で腕が疲れてきたから力を抜いて、腕がどさつと落ちて跳ねてまた落ちて髪の毛もぱさつと……何本かが顔にかかったから、ふつと息を飛ばして横にやる。

いつもの僕の、なんにもやる気がしないときの暇つぶしだ。

だけどまさか身辺整理っていうものをするだけで……いくら体力もないしたくさん寝なきやいけない体だからって、時間がかかるとは言っても、それだけで1ヶ月近くかかるなんてね……おかげでもう3月だ。

だからだらしていたつもりはないんだけどな。

退院してから2週間。

外はすっかり暖かくなってきた。

もう少し遅かったら掃除をするたびに汗をかいて大変だったにちがいない。

けども、そのおかげで気持ちの整理をつけることもできた。

ひとつひとつを手にとって考えて、でもやっぱり捨てる物だなんて感じる物が大半だったから、きつと僕にとつてはいいことだったんだろう。

大切な物は捨てられちゃうかもしれないけど、でも誰が見ても「思い出の品なんだな」って分かるようにはしてあるんだし、捨てる前に叔父さんのところに持って行つてくれるって信じたいところ。

連絡先も残しておいたし、常識的な人なら……機密とかにならないんだつたら、きつと届けてくれはするだろう。

……それ以外には、リュックの中身と今着ているものと、後で履くもの。

それと、今までの記憶っていう僕自身の中にあるもので充分だ。

思い出。

こうして振り返つてみると「そんなに悪くもなかったな」って思える前の僕としての人生と、たったの1年にも満たない期間だったけど、でも、今の僕として生きた新しい人生。

ちよつとばかりおかしなことにはなっていたけど、でもきつと……こうならなければ

決して体験することのできなかつたなにかを手に入れることができたんだ。

だって、もし僕が前の僕のまま、男のままだったら多分今も……これまでの10年とおんなじ生活だっただろうから。

こんなにも知り合いが増えていろいろ考えることなんてなく、ただただ毎日を消費していただろうから。

ふわつと、開けっぱなしの窓から入ってくる風が暖かくていい匂いを運んでくる。

そういえばもう丸1年のあいだ、こうしてカーテンを開けて窓を開けっ放しにするのってなかつたんだ。

無駄に考えすぎて隠れようって思い込んで、気持ちよかつたはずの去年の春も夏も……秋はどうしようもないけどあと冬もほとんどいなかつたことになるんだし。

明るい光と気持ちいい風。

そういうものを今の僕になってようやくにこうしてぼーっとながら感じていられるんだ。

それがとても新鮮で嬉しいものだっていうのを、改めて感じる。

片付けをし始めてからは暇つぶしにネットとかをする気もなくなっちゃつたし、かといつて本もほとんど処分しちゃつたし。

それになんだかお酒を飲む気分にもなれなくて、だからぼんやりとものを考えて

……思い出す時間が増えたんだ。

僕には、それだけでいい。

もう心残りは無いな。

うん。

そろそろ僕もひとり立ちつてのをしなきや。

普通の人は誰だつてそうするんだから。

ちよつとだけ遅くなつちやつたけども、まだやり直せるだろうつて。

僕はいつものように、そして最後かもしれないベッドからずり落ちるような降り方を  
して、これだけはつていうものを詰めたりユックを見て、もういちど中身を出して確認  
する。

いろんな書類……権利書とか口座関連とかハンコとか。

「遺書」だつたり「遺言書」だつたり「保険」だつたりとか。

……うん。

外に出るためのものは、揃っている。

これで大丈夫なんだ、きつと。

家の中を何回行つたり来たりして、無駄に上り下りもしてつて未練がましくしていた  
けど、先に体力の方が尽きそうになつてようやくやくに諦めがついた。

これ以上動き回っていたらこの先の予定がおじゃんになる。  
ここらが潮時だ。

「……………」

わかつているんだ。

現代の社会でこんなことになって、国の保護を受ける。

酷いことはされない。

わかつていたんだ、大丈夫だっていうことは。

むしろその後のほうが大変だろうっていうことくらいは。

少し息が上がっちゃって、寝心地のよくないベッドの上でゼーゼーとうるさい息を整えるまでしばらくまた髪のお世話になって。

枝毛の数を20くらい見つけてげんなりしたところで気分転換終了だ。

「……………行こう」

日記帳だけを机の上に出しておいて、広げておく。

こうして踏み台を使ってイスに座るのも最後かも。

いや、帰ってきて書くのがあるからあと一回あるのか。

それで同じように……結局手書きとデータと両方ですつと記録してきた、僕の几帳面さを発揮した日記を書くためにパソコンもまだつけたままにしておいて。

ん。

ハードディスクの中身とか履歴とかのこと忘れていた。

けど……ま、いつか。

普通の男ならきつと気になるどころか「万が一のことがあるなら絶対消して！」つてなるだろうけども、でも悲しいことに僕は前の僕のと時から恥ずかしいものなんて興味があつたから見てこなかつたんだし、だから他人が隅から隅まで見たとしたつて何のおもしろみもない中身だろうから。

見られたくないデータつていうものがそもそもないんだから。

せいぜいがこのパソコンで楽しんだ娯楽くらいかな？

けどそれだつて大したことないんだ。

そういつた類いのものがひとつもないんだ、調べる人はさぞがっかりするだろうけども、遺品整理をする叔父さんとか調べる誰かに負担をかけないつて考えるのなら悪くはないんだしな。

とん、とイスから降りて、とんとん、と階段を歩いて、とんとんとん、と手すりに掴まりながら階段を降りていく。

そうして玄関まで来て靴を履いて。

鏡で髪の毛だけを軽く整えてから、僕は、手を伸ばして鍵を回す。

…それじゃあ、行こう。  
みんなにおわかれを言いに。

## 48話 彼の、準備 2 2 / 7

まずは喫茶店。

収録があるらしくって朝一でしか会えないっていうことだったから、こうしてまだほとんどお客さんがいない中、僕たちは会っている。

「……じゃあご病気でご入院っていうことで？ いや、びつくりしたけどよく考えたらなんかそんな雰囲気ある気はしていたんだよ、響くんって」  
「そうですか」

今朝はいつものポニーテールじゃなくて下ろしたままで、僕としてはこっちの方が年相応……中身に似合っているって感じる髪型になった岩本さん。

サングラスと帽子のセットをしているし、服装も地味。

「屋内でもサングラスとか見えづらくないの？」って聞いたけど、それ用のだからほとんど暗くならずに見えるからいいんだとか。

まあここまでの格好をしているなんてのはきつと、これまでとは違って個室とかじゃ



ない普通のチェーンの喫茶店だからだろう。

大変そうだな、有名人って。

好き勝手に出歩くことさえできなくなるんだから。

「ということは、しばらく……じゃないんだよね、当分のあいだ会えなくなるんですね？」

「はい。……まだなんとも言えませんが、そんなにかからないかもしれないし、場合によつては……年単位でかかるかもしれないです。いろいろと教えていただいたりしましたし、なによりもせつかくお知り合いになったおふたりにもご挨拶をしておこうと思ひまして」

片付けをしたとはいえ、僕の性格上すぐにこのあとのことをできるかって考えたら、尻込みしたりめんどくさがったり昼寝しちやったりお酒飲んじやったりして「また明日でいいや……」っていうことになりかねない。

だったらいつそのこと今日は予定を詰めちやつて、できるだけ外で過ごす。

そうして帰ったらすぐに連絡してつてしたほうが確実に僕自身を動かせるつて考えたからこそ、まずはこのふたりへ会いに来たんだ。

人に迷惑かけるつて考えると、僕の習性上絶対に遅れたりできないからな。

嫌つてくらしいに僕自身のことをわかっているのが功を奏したつていうやつだ。

僕のことは僕がいちばん知っているんだから、それを使わない手はない。

「ご病気、持病ですかにやあ。体の線が細いなあ、中学生にしてはずいぶんと小さいにやあ、そう思っていたんですけど……そうですか、ご病気でしたかにやあ。病院に通つてる子は私の友だちにもいますけど……まあ響さんほどじゃないでしょうけど、いろいろと大変なんですにや？ 会えなくなるのは残念ですけど、もう会えなくなるっていうことじゃなさそうですし、なによりもご病気、治るのならそれはとつてもいいことですにや」

今日はとつても残念だ。

なぜなら島子さんが……収録って言っていたし、予定があるからしようがないんだろ  
うけども……肝心のねこみみとしっぽが隠されてしまっているから。

しょんぼりだ。

僕はしょんぼりしている。

ねこみみは大きめの帽子……ベレー帽っていうのなんだっけ、その下で恥ずかしがっているときみたいにペたんっしてしているんだらうけど、しっぽはどうしているんだろ。

少しダボダボ系なパーカーを羽織っているし、腰とかおなかに巻き付けたりして隠しているんだらうか。

本当に万能だね、パーカーって。

その気になればフードの中におみもしませうだし。

今まで僕もさんざんとお世話になったんだしな。

だから今だつてこうして僕も羽織っているわけだし。

……今の僕になったばかりに出かけた先のがりに選んでもらったものだったというのもまた……安心するんだ。

「……あの、それで……」

「あー、ひかりさんですよ。ごめんなさい、ときどきあーなっちゃうんですよ」

あいさつを済ませて島子さんと話していたら聞こえてきた、ブツブツ言っている感じの声。

よく聞き取れないけど、なにか良くないことがあつたらしい。

なんだろう。

「……ひかりさん？」

「……」

「言っちゃいますにやー、いいんですかにやー？」

「……」

返事がない。

何かに相当なショックを受けている様子だ。

「よし、イヤだつて言わなかつたらそれは同意ということでもいいですよ？」  
それつてなんか悪徳セールスっぽいけど良いんだらうか。

「沈黙が答え。よし、許可取れましたにやつ」

……島子さん、なんか普段とは違う感じで、少しいたずらっぽい目つきになっている。  
猫っぽい印象の目に。

一方の岩本さん。

うつむいてなにかを唱えている感じだから控えめに言っても怖いんだけど島子さんも特に気にしてる様子はないし、よくあるのかな、こういうの。

芸能界も大変なんだらう。

そつとしておいてあげない？

「じゃー言っちゃいますにや。あ、響さんも、私が怒られそうになったら擁護、お助けしてくださいにや？」

そこまで言うんだつたら、人の嫌がることはしないほうがいいと思うんだけど。

「あのですにや、ひかりさんつたら……本気じゃないのは当然ですけどにや、ひかりさんは響さんのこと、けっこーお気に入りですにや？ お顔もそうですけど、なによりも話し方が好きだとか聞き上手だからとかで。えつと、なんでしたかにや？ ……あ、

あれですよ。 あんなに年上って言っても平気そうだったのが嬉しかったって言うてましたにや」

お気に入り？

僕が？

何で？

「……ん？ ち、ちよつとみさきちゃん!? なに言ってくれちやつてんの!」

あ、戻つて来た。

「ちやーんと確認しましたにや! 『言つていいですかにやー?』つて。 ねつ、響さん?」

がばつと起き上がつて詰め寄る岩本さんを軽くいなす島子さん。

「えー、だつて私、いい加減うざつたいつて思つてましたし」

「えっ」

「ヒマさえあれば響さんのこと話してるひかりさん……トシを考慮してくださいにや。

前のから考えると何歳差になると思つてるんですかにや、シヨタコンもこじらせたらビョーキですよにや。 何度も何度も『響くんがー』つて同じ話をされる身にもなつてく  
ださいですよにや。 ねえ響さん?」

女の子との会話に慣れてきた賢い僕は否定も肯定もしない。

「僕が悪い」って流れにさせられたこと、何回あったって言うんだって感じだから。

「え？ 私、いいって言ったつけ……それに、そんなに話してなんか」

「いましてばー、こーいうの、話してるほうはわかりませんが話されているほうは耳タコになるんですよ！ あと許可はちゃんと取りましたにや。ウソついてないですよ。ついてたらこんなに強気になれないですよ？ にやあ？」

どや顔つていうのを……島子さんがしているのは初めて見たけど、それを見て本当らしいって分かかって気の抜けたような顔をしている岩本さん。

力関係が逆転している。

けど、こういうおふざけをして平気な辺り、この子たちも仲良いんだね。

「ずず」

前の僕だったらこういうのも「ギスギスしてる……」って感じて勝手に居心地悪くなってるけど、この1年でちよつとだけ経験を積んだからかどんと構えてお茶をすすめる程度にはなったんだ。

## 48話 彼の、準備 2 3/7

日ごろのストレスを吐き出してふしゃーっとなつてゐる猫島子さんと、少し顔が赤い、けど髪の毛を下ろしているせいでもやっぱり違う印象を覚える岩本さん。

髪の毛を下ろすだけでここまでおとなっぽく……元の感じになるんだから、僕の好み的には普段からそうしていればいいのにつて感じの岩本さん。

いつものようなポニーテールがなくなつて雰囲気さがらりと変わるし、僕としてはこっちの方がいいのになつて思うんだけど、そこはそこ、女性という年齢を極度に気にする種族なんだからしようがないんだろう。

けどこうして下ろしていると肩まで完全に隠れるような、長くて少しくせつ毛のある栗色が新鮮だ。

「……ま、まあいいじゃないみさきちゃん！ それよりほら、ね？ あんまりそう大きな声になつちやうとさつ、人目引いちやうし！ ね？」

「大体ですにや、響さんが……響さん、ごめんさいですにや？ 体が女の子なのは、まあ、なんにも言いませんですにや。先輩の方たちや知り合いの方たちでも男性同士

とか女性同士のカップルだっていますし、響さんの心は男の子なので、そのへんはまったく問題ないんですにや」

「そ、そうでしょ!?! だから響くんのこと言つたつて!」

「最近では性別とかのことつて見た目よりも中身つていう風潮ですし、私自身もそう思いますからそこは別にいいのですにや。たとえひかりさんが響さんみたいな子に懸想してたつて誰にも文句は言えないのですにや……だけど、だけどですにや! トシを考えてくださいですにや! いくらねこみみ病で若返つたとはいえ中身は元のままなんですにやよね? だからつまり、えつと……15くらい!?! 15くらいも年下の、しかも中学生の男の子のことずつと話してゐるだなんてやべーですにや。27と13ですにや! あ、これ倍を超えていますにやあ!?!」

「ごめん、僕つて実は25だから歳の差はたつたの2なんだ……」つて言つたらどんな反応するんだろ。

「正直ドン引きしてましたにや、だつて犯罪ですにやよ? やべーですにや、やべーんですにや。すつぱ抜かれたらおしまいですにや!」

ねこみみとしつぽが服の外からでも激しくもぞもぞつて……たぶんこれ島子さんも興奮しすぎて今は芸能人だつて隠しておかなきゃいけないつてこと忘れかけているな。

「え……ええーつとね、響くん?」



髪の毛をばさつと広げながらこっちに振り向いてきた岩本さん、だから汗をかいて顔も真っ赤だ。

ハンカチで拭くほどに汗が出ている。

……この後のこと、大丈夫なだろうか。

まあ楽屋とかでお化粧し直すんだらうから平気なのかもしれないけど。

女の人って大変だよ、外に出るときは必ずお化粧って……男の方がやっぱり楽なんだ。

「みさきちゃんは何？ そのね？ ちょーつと大きさに言ってるだけだからね？ ね？

それにほら、狙ってるって言われちゃいましたけど、その……あ、あれですよ！」

「あれってなんですかにや」

トーンが下がった。

わりと本気で怒っているらしい島子さん。

あれ、さつき仲が良いって思ったけどもしかしてやっぱり上下関係厳しいの？

「響くんってクールで知的な雰囲気だし、芸能人、有名人だからっていうので態度を変えたりしなくて……なんていうのかな、色めがねがないっていうの、で、将来有望そうだよって感じのこと話してただけでね！ 一般論！ 一般論で褒めただけなのよ!？」

「ごめんなさい、それただ全く興味がありません……恋愛関係と有名人への嘘ばっかしですよ。ひかりさん、実は年下がタイプで、だからアイドルは恋愛禁止以前にそもそも本気になれる人が近くにいなかったの、だからつまりは響さんくらいの幼い……ひかりさんにとってはですからにや? だからつまりはシヨタコンなのってお酒の席で自分から言っていましたし? あとは『中学生の男の子が喜ぶ話題ってなんだろう』とか『響さんって年上の子でも大丈夫なのかなあ……うふふ』と『世代が違ってても話合うかなあ……はーと』とか全力で女の子の子にしてからに! 誰がどう聞いても15ほども年下の中学生な響さんを狙っているとしたか思えない発言ばかりでしたにや! 響さん、気をつけるですよ……こういう人が犯罪するんですよ!!」

ひたすらにやあにやあ言ってる島子さん。  
うん……女の子ってストレスとか溜めるよね……。

「はあ、まったく情けないですよ。だって精神年齢27歳のオバあいたたたた!」  
午前の喫茶店だからこれだけ騒いでいても店員さんが来ないくらいにはお店はがらからで、だから聞かれてる心配もないからいいけど……女性って、女の子って、年齢に全然関係なく本気で恋愛っていうのが好きなんだな。

それはもう本能レベルで。

今の僕になってからは……主にかがりのせいで慣れはしたけど、でもこういうのを見

ていてもやつぱりどうしても「ああ悲しきは女性の本能な恋愛脳……」ってしか感じない。

……恋愛に耐性のないどころか人間関係すらゼロだった僕にとつて、この1年は疲れのほど有意義なものだったっていうのがよくわかる。

ほっぺを掴んでいる岩本さんと猫ぱんちを出して応戦している島子さんをみて、そう思う。

だつてそもそも褒められるのに慣れていないから、しかも相手が女性だつたら……褒められたら顔には出なくてもきつと舞い上がっちゃうだろうし浮かれちゃう。

それが経験の無い男の悲しい性なんだ。

それがたとえ社交儀礼だったとしても、僕を上手く利用しようとするものだったりしても、そういうのを薄々わかっていたとしても。

女性に好意を向けられるような発言とか……それこそ今みたいなものを聞いた時点できつと僕にはどうしようもなくって、流されるだけになっていたはずだもん。

僕の中身は中学生から成長してないんだから。

まあ肉体が幼女だつていうのがブレイキになつていていうのが大きいんだろうけど、でもこういう経験、耐性は言われ慣れるしかないんだろう。

「——そのへんでよろしいですかー？ おふたりともー？」

「!？」

「ひえっ!？」

「にゃあ!？」

僕も声が出そうになつたけど、さつきからぼーつとふたりを見ていただけだったから喉で止められてよかつた。

お腹の中がぎゅつてなる感じの女の人が怒っている系統の声。

その主は悪魔、じゃなくって今井さん。

……苦手意識が抜けないでいてもしょうがないよね……うん。

第一印象は大切。

それを痛感する。

いくら僕がこつそり呼んだお相手であつても、苦手なものは苦手なんだ。

「外出時には、それも予定があるときにはどんなときでも連絡が取れるようになって、いつもあれほど言っていますよねー? 特にひかりさんはなーにをやっているんですかー? この前にも大変だったの、もー忘れたんですー??」

「え、ええつとね? ちおりちゃん、違うの」

今井さんの下の名前。

……そうだよ、岩本さんの方が年上だもんね……今は若くなつてるけども。

今井ちおり。

通称悪魔さん。

「おふたりは立場が立場なんですから気をつけてくださいって何度も何度も言ってますよねー？ 今は護衛の方も増やしてもらっていますしなんとかなるはずではありませんけどー？」

「そ、そうですよにやちおりさん！ だから、ちよつとスマホから意識が外れていたくらいで」

「け——れ——ど——も——？ 騒ぎになるだけでもSNSとかマスコミとか政府の方とかに對する対策って、ゼーんぶ私たちに来てしまうって。 どれだけ大変なのかって、電話の相手だけでも死にそうになるんだって……何十回も、言ってますよねー？」

本気で怒った女性は、こわい。

怒りがこつちに向いていなくってもおなか冷たくなるのを感じつつ「やっぱり今井さんは要警戒な人だな」って思いながら……お説教モードに入って静かに怒り始めた今井さんと怒られる体勢になった岩本さんと島子さんを、気配を消しながら見守ることにした。

ないとは思うけどこつちに飛んでこないようにって、ちらちらこつちを見てくるふた

りと目を合わさないようにして。

ごめんね。

でも怖いものは怖いよね……ほら、今の僕は幼女だから余計に怖いんだ。  
だから許して？

## 48話 彼の、準備 2 4/7

悪魔さん……じゃない、今井さんの印象って最初と今とじゃ別物だ。

「おふたりの安全も考えてのことなんですから……」

「で、でも、私たちちつてば24時間の警護が」

「民間人相手だと数でダメって言うのはこの前知ったはずですよ？　うちでも警備の人を雇ってるんですからちやんと……」

「に、にやあ……」

あの今井さんが怒るのも初めて見た。

論すように静かに怒るっていう感じの人なんだね。

淡々と事実を挙げて、やっちゃいけないことをひとつひとつ論理的に問いただして「どれだけの迷惑がかかるか」とか「この前みたいに運がいいとは限らない」とか、終始こんな感じだからへタに怒るのよりもずっと怖い。

女の人って高い声で怒る人が多いって印象。

だからこそ冷静に怒る人って余計に怖いよね。

たとえそれが僕に向けてでなくっても、怖いものは怖い。

僕はその辺の小学生に絡まれるだけでも怖いメンタルなんだ。

しかも今は小学生な肉体になってるからなおさらに腰が引ける悪循環。

だから岩本さんも島子さんもすっかりとしよげている。

……岩本さん……今井さんよりも年上なはずなのにね……元、だけでも。

そのお説教は数分だったのか、それとも10分の大台を超えていたのかはわからない

……聞こえないふりしてスマホに熱中するフリしてたから。

けどそれが終わった途端に今井さんが声を一瞬で普段のものに変えて話しかけて来る……やっぱり女の人って怖い。

あんなに低くて静かな声で起こってたのに、次の会話ではきやるんってしてるんだもん。

「さて、響さんは通報もとい岩本さんたちがここに居ると教えてくださってありがとう  
ございましたあー！」

やめて、告げ口したって言わないで。

「……いえ、連絡が取れないということでしたし……萩村さんも心配していましたから  
……」

一応正当な理由を主張してみるけどもねこみみ病ペアは放心したような目で見てくる。



やめて、見ないで。

「誰がやったのこれ」って先生が聞いたなら「この子たちです」って言っちゃったときみたいなことになってるから。

僕はたださつき、2人と話してるときに今井さんから「そろそろお迎えの時間なんだけど……もしかして島子さんたちそっちにいない？」って聞かれたからそれにお返事したに過ぎないのに。

「……………じー」

「……………じー」

ふたりから凝視されている。

「……………ふいつ」

僕はそつと目を逸らした。

「おふたりともおー、車で待機していても全然来てくれませんしいー、連絡も何回もしたお電話にも気がついていないみたいで困ってたんですよー。GPSと事前の相談とでおおよその位置はわかっていたんですけどね、けど緊急時以外は政府の護衛の方にも連絡つきませんし……」

話しながらだんだんと僕に迫ってくる今井さん。

少しずつつおしりを後ろにズリズリしていくのに、どんどんと近づかれる。

うん、これは懐かしい感じの今井さん。  
もう怒っていたときのことは忘れよう。

うん、忘れる。

髪の毛を後ろで縛っている彼女はそろそろ僕の顔に前髪がかかってくるそうだった。うとところまで近づいて……上から迫ってきて、目をのぞき込まれる。

かがりみたいなの近づき方。

女の子つて上からが好きだよね……。

「でもー、あいかわらずに響さんつて……いえ、なんだか以前お会いしたときよりもずつとずつと輝いていますね……！　輝かしいオーラを感じますっ」

「そうですか」

「どうですか？　最近心変わりとかされませんでしたか？　ほら、こうして現役アイドルであるこのおふたりともこうして会っていらっしやいますし、ひよつとしたら」

「いえ、それとはこれっぽっちも関係のないお話を聞いただけです」

「そこをなんとか？」

「なりませんね」

「しかし私の勘によるとですね……可能性、以前よりもだいぶ高まっているのでこれはもう押したらいけそうなの……響さん、ちよつとまたライブ映像でも」

「——今井さん？」

「わわっ!? ……はー、萩村さん、脅かさないでくださいよ——……」

お化粧の塗り具合がはつきりと見える位置まで近づかれてしまっていた今井さんがぐつと離れて立ち上がり、後ろにいた……相変わらぬの大きさだね……萩村さんへ振り向く。

「今井さん……以前にも話し合いましたよね……? 覚えていますよね、響さんからのアプローチがない限りはどうするのか」

もつと言つてあげて、この人しつこいから。

多分押しに弱い子とかつてこういう人に連れられたかれちやうんだらうなつてくらいだから。

「わかつていますよう、今のはかんたんなご挨拶だけで」

「今の、どうみても勧誘する気満々だったわよね? それも事務所に連れて行きそうな雰囲気です。ねえ？」

「ですよ。……病気のことも……響さんがいいつて言っていましたから後で話しますけど、それを聞いても『じゃあ退院した後ならいいんですよね!』つていう感じで強引に話を進めそうな心配がしましたにや」

ねこみみ病さんたちは僕の味方になつたらしい。

四面楚歌になってようやくに諦めてくれたらしい今井さんが離れて、代わりに萩村さんがしやがみ込んで話してくる。

この前もそうだったけども……子役さんとかのお世話とかもしているのかな。

子供の相手になれている印象……僕は子供じやないけどね。

背も高くてガタイもよくなって少し顔もごっごっしてゐるからこそ圧迫感を減らそうと  
しているんだろう。

普段から堂々と上から迫ってくるマリアさんたちとは全然違うもん。

今井さんもイワンさんもマリアさんも萩村さんを見習うべきだ。

「クリスマス……の頃以来なので、もう3ヶ月近く前になりますか。あるときに手を貸していただいたつきりで忙しさでお礼もできず」

「いえ。お礼ならあのとときにもごちそうしてもらいましたから」

……二言三言話して、ついでに今来た今井さんと萩村さんにも簡単に、しばらく会えないつていうのを……詳しいことは岩本さんたちから聞いてくださいつて伝えて。

それを聞いた今井さんが近づいてきそうになつたけど、萩村さんに止めてもらつて。

優秀なボディガードだ。

「ではそろそろ行きましょう。ああ、そういえば2時間後に予定していました収録はキャンセルです」

「ほへ？」

「にや？」

「あら？ なにかあつたんですか？」

「はい、広報の仕事が……また政府の方から直接、今井さんが出た直後に来たので。それもこれから出向いた先ですぐに打ち合わせだそうです」

「えー、またですかあ……スケジュールの調整、忙しそうですねえ……」

目に見えてしよげた感じになる今井さんを見て僕は元氣になった。

「まーたですか。嫌ですねえ」

見ていないうちにまとめたのか、いつものようなポニーテールに仕上げている岩本さんが立ち上がる。

「これだから広報のお仕事は好きじゃないんです。もちろん必要なことなんでしょうけど、こっちの都合を無視していつつもこうですもん。いくら契約しているからとは言つても一方的っていうのはどうかと思いますよ？」

「ですにやあ……けど、やるからにはがんばらないとですにや。ね？」

お別れの雰囲気。

僕はゆつくりと体をズラしてイスから滑り降り、ちゃんと着地。

「やだ、今のかわいい……！」

「こら、男の子相手ですよ」

足元を見ていた顔を上げると、いかついけどいちばんまともで話しやすい萩村さんとやっぱり近づいてほしくない今井さん、今日はねこみさえ見せてもらえなかつた島子さんとポニーテールがふわふわしている岩本さんが、僕を見下ろしていた。

……ああ、大人と高校生と高校生になった人に囲まれると、ここまで圧迫感が。改めて今の僕の小ささを実感する。

「それじゃあ響くんっ」

いつのまにかお会計の紙をレジに持って行っている今井さんの後ろ姿を見ていたら、岩本さんが上からのぞき込んできていて。

「ご病気、よくなったら連絡くださいねっ！ ……聞いた感じだと結構かかる大変なものみたいですけど、きつとよくなるって信じていますっ。何年後でもいいのでまたこうやって元気な顔を見ることができたら、私、とっても嬉しいですっ」

「ですよあ。がんばってください……いえ、上手く行くことをお祈りしていますにや」

島子さんもまたかがんできていて服のあいだからちらつとしかぼが見えて、僕はちよつと満足した。

「……あれ？ 待って？ むしろ何年か経った後なら相対的な年齢っていうものが縮

まって、つまりは年の差でもそんなに問題なく……」

そんなこと言ってるからシヨタコンって言われるんじゃない？

いいの？

「はいはい行きますよひかりさん。 煩惱をご本人に垂れ流すと嫌われちゃいますにや

？ ましてやこの場面で」

「……あつ!？」

変な顔になっていた岩本さんを立ち直らせるついでに、ちよつとだけしつぽをぺろつと出して見せてくれた島子さん。

……さすがに触らせてはくれないみたい。

ただどこかで満足だ。

## 48話 彼の、準備 2 5 / 7

よし、いろいろあつたけどねこみみ病&芸能関係の人たちとは良い感じのお別れができた。

「ちよ、ちよちよちよちよつと待つてください響さん響さん!？」

良い感じのお別れって思ったのを早速にぶち壊す今井さん。

「響さんがご病気つてどういうことですか！　なんでおふたりは知っているみたいなんですか！　なんでそれを話してくれなかったんですかあとなんだか今呼び方も変だったような気のせいでしょうか！」

躁鬱激しいね……きつと地だよ、これって。

「ほらほら、急ぐんですよねー？　話せる部分だけはお話しますから行きましょ、今井さん」

息継ぎもせずに話し始めようとした今井さんを遮るように、岩本さんと島子さんが息をそろえて腕を組んで彼女をホールド。

どうやらみんなにとっての今井さんってそういう認識らしい。

うん、これからもがんばってみんなを制御して？



「ち、ちよつとふたりとも!？」

「さー急ぐわよー」

「急ぎますにやー」

「もう! 響さん、それではまたお会いしましょう! ご連絡は、ご連絡が来るの、いつまでも待つていますからね——!!」

「そうですか」

あ、最後の会話なのにいつももみたいに適当な返事しちゃった……けどまあいいや。

とうとうドアの外まで引きずられて行った今井さんをぼーつと見ていたら萩村さんと目が合う。

「それでは私も失礼します……そして私からも。ご病気がだそうですが……ご快復を祈っています」

「みなさんもどうかお元気で。そう伝えてください」

やっぱり男相手は良いね、楽だから。

けどまあ、あの人たちはみんないい人だったな。

ひとりを除けば。

いや、あの人だって「勘」っていうものに惑わされさえしなければ勧誘がうざったい程度の人っていうのは知っているんだけども。

だけど今見たようにあいかわらずだったし、やっぱり信用できないかな。萩村さんっていうストツパーが居なきやふたりきりになるのは危険。

そんなことを思っているうちに元の静かな雰囲気に戻って、お店が完全に静かな状態に戻ってからひと息。

……目の前には目を覆いたくなるようなプレートがある。

なにかしらのキャラクターが描かれちゃっていて、いかにも「お子さま用ですよ」という感じのそれが。

今の僕がお店に入ると勧められるそういうものが、目の前に。

お子さまランチ。

来たばかりのときに「朝なのにあるんだなー」ってぼーっとしているあいだに岩本さんが島子さん……たぶん岩本さんが勝手に頼んじやって、しょうがなく少しだけ口をつけただけだったそれ。

……やっぱり子供扱い。

これだから女の人は苦手なんだ。

最後の別れにケチが付いた感じで僕はぶんすかしながら頬張った。

……味付けが……味付けが、完全に子供向け……。



「今まで大変お世話になりました。 イワンさん、マリアさん」

お子さまランチとの格闘から意識を逸らすため、病室を引き払う……退院するときのことを思い出す。

半月ほど前のこと。

「もう約束の1ヶ月が経っているし、体もずっと安定しているし、反動……魔法さんのなにかが現れていないでしょ」って説得し続けてようやくよくに解放された、その日のこと。

持って帰るものなんてその何日か前から少しずつ運んでいたから、その日の僕は本当にスマホくらいしか持たない感じであの病院を後にすることになっていた。

「教えていただいたこと。 よく考えて、これから結論を出そうと思います……わぶ」

目の前が真っ暗になる。

顔が、体が、包まれる。

押される。

苦しい。

……これまでもよくあった、マリアさんからのハグ。

イワンさんもしてくるけど彼の方はおそろおそろって感じだし、なによりもマリアさ

んから今押しつけられているような圧迫感のあるものがないからずっとマシなだけで……とにかくこれは苦しいもの。

胸もでかすぎると大変だよね……かがりの将来が非常に心配だ。

だってブラジャーって意外と硬いもんだからこうして顔に押し付けられると痛いんだもん。

あの子もマリアさんと同じように無意識にするからなあ……。

けど、これも愛情表現なんだろうって我慢している。

僕は偉い。

けども……結局お金も払わせてくれなかったし、こつそり渡そうとしてもダメだったし。

あの後りにさ聞いても「響さんのご家族がねー」ってはぐらかされて絶対に教えてもくれなくって、ゆりかとかがりに聞いてもやっぱりダメで、さよをちよつと押し気味にして聞いてみたらもう少して聞けそうだったのにかがりに怒られてダメで。

だから……あのとき血で汚しちやつたお金と検査とかにかかったお金、入院で掛かるはずのお金……これは「お願いだから！」って言われたからまだしも……それをぜんぶ肩代わりされちやつて、どれだけ言つても払わせてくれなかったこのふたりには頭が上がりないっていう状態になっちゃっている。

善意とはわかっていても、好意は受けなきや相手に悪いつてわかっていても、やっぱり不安なもの不安。

けどそれを言い始めてもはぐらかされるし、そのうちにいつものような会話に持つて行かれちゃうから、もうこのままでいいんだろう。

善意は受け取る。

今まで全部「大丈夫です」で切り抜けて来ちゃった僕にとっては大変なことだけど、これも10年分のなんだつて割り切ることにした。

まあ利息とか付けられなければ返せる……よね？

大丈夫だよね？

お金を持っている人にとっては端金なんだつてのは嘘じゃないよね？

「……………」

そんなことを考えながら「そろそろと息が辛くなってきたなあ」つて考えていたらマリアさんからのハグから解放された。

よく見てみると、いつもは結構お堅い感じの服装なのに今日はラフな感じの格好をしているあたり、こうしてぎゅーつとするのを初めから決めて着たんだろうな。

いつもの何割か増しで長かつたし。

ちなみにいつもは上着を脱いでからこうされる。

だから余計に人肌っていうものを感じるっていうか、困るんだ。  
もう慣れっただからどうでもいいけど。

まあ銀髪幼女だしね、この見た目がどうしても庇護欲っていうものを引き出すんだろ  
うしなあ。

「うむ、響が元気になってくれてなによりだよ」

そういえばこの期間、お互いに呼び捨ての仲になった……僕からは無理だったから向  
こうからだけでも。

おかげで中庭とかで話しかけて来る他の患者さんとかからは「優しいおじいちゃん  
おばあちゃんねー」って言われる。

ごめんなさい、僕の祖父母も両親も天の彼方なんです。

「君の反動も完全に収まったと思つて良く、さらにはそのあいだにたくさん話すことが  
できて私たちは満足だ。それに、私たちがしたことを君が気にすることはないさ。

我々は結束が固いからな。同じような変異や変質……もつとも、君の場合は特殊だろ  
うがね……それに悩む同志……じゃないな、仲間を見つけたとしたら、どんなことがあ  
ろうとも全力で手助けする。当然のことなのだよ」

相変わらず微妙なアクセントとか語彙の違い、あとはこの人たちの事情つてやつで分  
からない会話もあつたりする。

けどスルーして良いっばいからそうし続けて3月だ。

話しながら立ち上がるマリアさんとずっと目を合わせ続けているけど、だんだんと首の後ろのほうに負担がかかってくる。

……やっぱりでかいなあ、ふたりとも。

かといつて後ろに下がるとなんだか失礼だし。

「響も……いや、外で会うときには響くんと呼んだ方がいいのかね？」

「良いですよ。僕は困りません」

「そうか……ならこれまで通りに」

「うむ、嬉しいね。……もし、もし君が仲間を目にすることがあったら。その彼また

は彼女が、その発現に明らかに戸惑っているようだったなら……ぜひ私たちに連絡を寄

こしてほしい。その後のことは私たちが君にしたように、丁重にもてなすからね」

僕がそういう場面に遭遇するとしても多分、よっぽどのがなければきつと「ねこ

みみ病」の方に行くだろうけども。

「響」

今日は少し透けた感じの眼帯をしていて、そんな違和感のないイワンさんが僕を見

下ろしてくる。

「この国も……いや、先進国を始めとした多くの地域で、世界はようやく私たちの知る

『これのほんの一部』について『ねこみみ病』などというものとして認めるようになった。ようやく……現代に入ってずいぶん経ってからようやく認められつつあり、人権も保障されるようになってきたと言えよう」

もうすっかり慣れて、どアツプで目覚ましに見せられてもそこまではびつくりしなくなってきたイワンさんの顔を見る。

「しかしだな。君もよく承知だろうが、人類が……これだけ暇さえあれば互いを攻撃し、暇がなくなれば人を数としてしか見ない殺し合いもする……そんな人類というものが『彼らとは違う我々』というものを、そう簡単に受け入れられるとは到底思えないのだよ」

そういう話になりそうになるたびに「僕怖いのは苦手なので」で回避はしてきた。

けど、このふたりは「初期のころにねこみみ病としていろんな国で『保護』された人たち」についてのヤな過去を知ってるらしい。

「外見が多少……創作物などで見慣れたものに変わる程度ならあの程度で済むのかも知れぬ。しかし著しく変わったたりしたり、あるいは……変質で特異な力というものを獲得してしまったりして、その制御が困難だったりする場合にはどうなるか。……想像は難くないだろう。君なら理解できるはずだ」

うん。



だから僕は怖がって、だから徹底的に隠そうとして隠れたんだもんね。

実際にはだだ漏れだったけどね……主に隣さんとかね。

「くれぐれも。今一度しつこくとも言わせてもらうが、奴らのところには行かぬように。これは私たちからの、大切な忠告だ。そこまでの反動を起こすのだ、仮にそれが権力のある者たち、それも己の利益にしか興味のない輩に目をつけられたなら格好の実験材料とされ……ただ生きているだけ、そんな運命にもなりかねん。くれぐれも気をつけるようにな」

そう、論すように言われる。

入院中に何回も聞いたようなこと。

国家とか組織って言うものがいかに残酷か。

システムの中では人なんてただの部品でしかないって。

だけど僕は決めたんだ。

……まだなにか言いたそうだからじっと待っていたけど、なんだか動く気配がない。

「……な、なあ響」

「なんでしようか」

まだ続くらしい。

けど、またこの……孫をあやすような声。

……またあ？

「なあ、そのな？　もちつと儂らのところにおることはできないだろうか？　のう？  
だつて儂ら、響のことがすつごく気に入っちゃったんだもんつ」

「これでさよならです」

「そこをなんとか、響」

「それで入院もただの検査から伸びましたよね」

「それはだね、君を助けようと」

エンドレスの会話。

でも今日だけは無理やりにでも区切つて帰るんだ。

家から出るために、家に帰るんだ。

## 48話 彼の、準備 2 6/7

強靱な肉体。

筋肉が、こういう温かくなってきた季節からは服の下から形を主張していて、背もとつても高くつて、こう……すぐみつていうものもあつて。

イワンさんとマリアさんはご自分たちのお顔がそんなお体に乗っていて、一般的な子供に対してどんな風に映るのか、もういちどしっかりと自覚したほうがいいと思う。

「そうだ、思いついた！ 庇護下に入れば良いのだよ！」

イワンさんが叫ぶ。

庇護？

何の？

「うむ、そうだ！ なんなら保護者の方たちやご家族の事情なども、それがどれだけ込み入つていようと、その一切合切を受け入れることができるぞい！ そして、そしてだな、適当な親戚同士を番いにして、あ、いや、今のはナシだ響！ ナシだからな！」

……こうして会話のところどころで平然と他人たちをどうするつて出てくる辺りが怖すぎる。

「適当に戸籍などをごまかしてもいい、なにせ本人たちの意思が重要だからな！　そして農らが響の本物の爺さんと婆さんに！　どうだ響！」

そう言いながら鼻息がかかるまでに迫ってきたイワンさんのお顔が片手で押されたかと思うと、今度はマリアさんのお顔がどアップになる。

「そうだ、君はそれほど大切なのだよ響。　私たちがこうして……ほら、この痣がはつきりと見えているだろう？」

「ええ、まあ」

昔……事故にでも遭ったんだろうか、にできたであろう傷が元になった痣。

なんにもケアしていなければ、そりや見える。

なんで今日に限ってお化粧していかないのかよくわからないけど。

せめて前髪をその部分だけ伸ばして隠せばいいのにーって思うし、さんざんに言ったんだけどな……聞かないんだ、この人。

「だろう？　そのようにカムフラージュをしなくとも……優しい話し方と声音を選び、少し力を入れると潰れてしまいそうな小動物を触るような意識でなくとも、自然体でいても……ここまで怯えずかわいかわい孫のような子など見たことも会ったこともないのだよ!!」

いや、怖いって毎回思っているんだけどね？

言わないし態度に出さないだけだからね？

僕の優しさだからね？

「無理は承知なのだが、どうかいまいちど頼む！ 私のことを婆さんと！ そして、いずれは法的にも……」

「だからお断りします」

この人たちに対するためにはとにかくばつさりとが1番。

「そんなことを言ったらおふたりののお孫さんがかわいそうですし……こんなこと、万が一にでも聞かれたら怒られますよ？」

「あやつらはかわいげがないのだ！ もっと孫らしい響がいいんだもんっ」

「もんっ」じゃないよ、いい歳して……。

◇

「おや」

手元の旗が乗っていたプレートは8割くらい食べ切ったらしい。

すごく珍しい。

さつきからメッセージの着信が荒ぶっているスマホ。

そこに表示されている時間は、あの子たちとの待ち合わせの時間。

……じゃあ次、行こっか。



来るたびにストレスを感じて、今の僕がどれだけちっこいのかっていうのをいやつていうくらいに自覚させられる、駅の周りっていう繁華街。

けど「これで最後なんだな」って思ってた見ていると、新しいお店ができていたり工事中になっていたり、なんだか綺麗になっているところがあったりして意外と飽きない。

それに小さいのにはもう、いい加減に慣れたし。

フードの下に帽子をつけていう格好から、視線が煩わしいときだけフードのみを被るっていうのになつたっていう僕自身の変化も感じる。

そうすると当然に顔は見えちゃうんだけど思ったよりもじろ見られないし、あと僕の視界もぐつと開けるし……もう顔を隠す心配はなくなるから。

フードを取って髪の毛を見せびらかすようにすると知らないうちにスマホを向ける人が出てくるから、こういうところでは絶対に被っていないきやならないけど。

大変に失礼な人たちって意外といるんだよなあ……でも多分今どきのそういう人たちは失礼って思いもしないだろうね。

やっぱり目立つもんね、この髪の毛。  
銀色だもんね。

しかも陽の光で虹色っぽくなるし。

なんなんだろうこれ。

……こういうのも最後、かもね。

「あ、いたいた。 おーい、響さーん！」

「お待たせ……ふう、しまし、たあ……」

顔を上げるとそこには元・巫女ペアのりきとさよ。

今日も動きやすそうなショートパンツっていう短パンの一種を着こなしているりきと、長い髪の毛に合った丈のロングスカートを履いているさよ。

このふたり、見事なまでに服装まで反対向きなんだけど、気がつけば一緒にいることが多い。

友人関係って不思議だね、似たもの同士と真逆がくつつきやすいから。

ゆりかとかがりもまたメロンとレモン、いやレモンとメロンだし、話も合わないはずなのにそれでも一緒によく話しているのを目にしていたあたり、人は反対の性質も求めるんだろう。

体格とか性格とかそういうものを。

そもそもその組み合わせ……ゆりかとりさりん、かがりとさよってという組み合わせもまた正反对だしなあ。

そういうのって、なんだかおもしろい。

「よかったわ、急いで来たから間に合った……ふう。 さよさんは大丈夫？ 少し小走りだったけど」

「はっ……はい。 少しずつ体力……つけて、いるので……」

息が荒そうっていうよりは体が運動についていけないときの僕とおんなじような感じだし、大丈夫って言うてるから本当に体は大丈夫だって信じる。

けど、今日のお別れ。

みんな予定があるんだし、無理しなくてもいいって言ったのにな。

お別れなら病院でとっくにしたんだし。

でも、きっと最後に会えるタイミングで会いたいんだよね。

今ならその気持ち、僕も分かる気がする。

「お迎えはまだなの？」

「うん」

「……よかったです。 このあと空港へ向かわれるんです……よね？ 時間とか

……」



「うん、まだ大丈夫。それにこのあとすぐじゃなくてね、荷物を取りに1回家に戻るんだよ。だから余裕はあるんだ」

空港とか本当は嘘っぱち。

だけど、嘘ではあるけど場合によっては本当になるかもしれない。

そんなものだからウソにもならないかもしれない。だからそんなに心は痛まない。

お迎えがあるっていうのも本当だし、その時間を時間内に合わせるために決めているっていうのもある。

「走ってきたから暑いわねー」

ふあさつと髪の毛を持ち上げるりさりんと、さりげなくスカートをひらひらとさせているさよ。

髪の毛をばさってしてうなじがひんやりするのも、スカートをばさばさするとすーすーしてふとももが冷たくなって気持ちいいのも分かるー。

そうなつちやった、元・男の僕。

いつ戻るのかは全然分らないけども。

「……そうね、お迎えが来ちゃうときつと慌ただしくなっちゃうだろうし、先に言っておくわ」

りさりんが……身長差からちよつとだけ屈むようにしてくれないと会話ができないから屈んでくる。

ごめんね……僕ちっちゃいからね……中学生つて言い張ってる小学校低学年なミニママボデイだからね……。

「響さん、お元気で。で、元気になって帰ってきてくれると私、嬉しいわ！ 今度はみんなと一緒に、5人そろつての旅行とか！ ……えつと、私たちは良いんだからつまりは問題ないつてことだし？ 響さんさえイヤじゃなければ、こつ……今度こそお泊まりとかもしましょう？ みんな大賛成なんだしっ」

お泊まりつてワードで顔が赤くなる初心なりさりん。

いやまあ中学生女子がこんな見た目だろうと同級生の男子とお泊まりつて考えたらそうなるよね……ほら、かがりの持つてた少女漫画でも結構過激なシーンとかあったし……。

「私たちみんな、響さん自身が男の子でもイヤじゃないし。まあ何度も言ったからわかつてると思うけど、念のためによ？ それに結局さ、夏休みはまだ知り合つてそこまじやなかったし、そこからはみんなで出かけるつていうの、できなかつたじゃない？ 仲良くなったこの5人そろつて電車とかバスで日帰りで遊びに行くのとか、誰かのお家でみんなで……あ、それは病室でやったわね。とにかく、まだしたことないこと

いっぱいあるから！」

りさりんは意外と恥ずかしがり屋さん。

だからこうしていつものクセがさらにマシマシになって、早口でぱつと伝えて来る。

けど、それは嬉しいこと。

一気に話したから苦しくなって顔がとうとう真っ赤になってそっぽ向いて「今日は暑いわねー」ってつぶやきつつ息を整えているりさりん。

そんなりさりんを見ていたらくいくいつて肩のあたりをつままれていて、振り向くとさよが近づいていた。

……風が吹くたびに、前髪が長すぎるせいで隠れがちな目が見える。

うつむき加減な、眼鏡越しの目が。

「……響さん」

「うん」

「また一緒に、本の感想とかお勧めの紹介とか……お話し、しましょう」

「うん」

「私、待っています。……もちろん学校のお友だちやゆりかさんやかがりさんと……するのにも楽しいんですけど。えっと、なんといいですか、その……響さんとだと、似

たような本と照らし合わせたりしての考察とか、そういうもので……えっと、読んだあとも楽しむことができ、楽しかったんです。……また新刊と一緒に読んで、感想とか言い合ったり……しましように。……ふあ……」

無理にりさりんに合わせる必要もないのに、それでもがんばって気持ちを一息に……出会ったころからすれば相当に聞き取りやすくなつたさよの声を聞いた。

息継ぎがこれでも足りなかつたのか、それとも緊張しすぎたのか酸欠になつてよろめいて、あわててりさりんに抱きかかえられるのを見て……この子からも大切な友人って思ってもらえてるんだな。

そう思つて僕はがんばつて、顔の表情を変えないようにした。

## 48話 彼の、準備 2 7/7

杉若りさと友池さよ。

どちらも平均的な中学2年生の身長……りさは少し高くてさよは少し低いけどそれでも僕からしてみれば大きくって、いつもどおりに上を向きながら、少し見下ろされながら、春休みのことや新学期のことなんかを聞く。

思い出話は病室でさんさんにした覚えもあるし、なによりもなんだかじめじめしてくるしって気持ちは一緒みたい。

「次会ったらこうしたいね」って未来のことなら、いくらでも明るくできるよね。

……そうして時間が迫ってくると、僕よりもふたりのほうが焦ってきたのが目に見えるてわかる。

ゆりかとかがりはまだ来ていないけど……なにか用事があるんだろう。

「絶対見送りに来る」って言ってたし。

でもお別れはもう済ませてる。

だったら良いよね。

じりじりと時計と周りを見ているふたりを見ている僕のほうもまた焦ってきちゃい

そうだし、お迎えに頼んだ車も待つてるし……そろそろかな。

「……りさ、さよ」

「ま、待つて響さん！ もう一回！ もう一回電話してみる！」

「けど、どうしてか取ってくれなくて……」

「……ふたりとも、今日はありがとう。時間はかかるかも知れないけど、それがいつま

でかかるかも分からないんだけど、でもまたいつか、必ず会いに来るよ」

スマホを両手に……さつきまで笑つてた顔が焦りでいっぱいになっているふたりに言う。

「いっそのこと何年も経つてしまつて、みんなが大人になってしまつていたとしても。

それならそれでそのときにはお酒の席でも思い出話とかを聞かせてくれると嬉しいかな」

13歳……いや、確かみんな14歳になっているんだっけ。

この子たちはもうすぐ、たつたの2週間で中学3年生になっている。

だからあと……たつたの6年。

僕にとつては短くつて、みんなにとつてはこれから大切で長い時間が経つていたら、逆に僕にとつては接しやすくなるよね。

もちろん早いに越したことはないんだけど、こればかりは分からないものだから。

岩本さんも言っていたけど、相対的な精神年齢ならきつと近くなるんだ。

……最悪にはもう2度と会えないんだけど、それは考えなくてもいい。

きつとあたりさわりのない内容の連絡くらいはできるだろうし。

「……もう、さらつとそう言うんだから。 やっぱり響さんって男の子なのね」

「はわ……」

僕もちよつと感傷的になってるみたい。

「それにしても……なーにやってるのよ、ゆりかつたら……かがりさんに振り回されてるだけだと思うけど……。 いや、逆もありえる？」

「うーん、どうだろう。 ゆりかはこういうときはしつかりしているはずだから」

「……下条さん、気分が乗るとなにも聞こえません、から……」

みんなの共通認識が光る。

「『先行つてて、すぐに追いつくから！』って言うから、アイツがそう言ったから私たちだけで急いで来たのに、このままじゃあの子たちの方が響さんにお別れ言えないじゃないー！」

かがりが何かに。

こういう肝心なときにでも気分屋だから何かに気を取られちゃって、ゆりかが止めようとしても聞かないっていう光景が想像しなくても見える。

あの子、とうとう最後まで……何回か来てくれたお見舞いでも結局いつつもだーつと話すのが止まらなかつたり、思いつきでそのまま出て行っちゃったりしていたからなあ……。

「……すみません、響さん。少し、連絡……入れてみます。きつと、そう離れたところへは行っていないはずなんです……なので多分、レジが混んでいるとか、人が多すぎて来るのが遅れているだけとか、きつと」

「……それなら、もうちよつと」

「びびびびびびびび」

僕のポケットの中からアラームの音が響いてきた。

……お迎えの車の時間。

一応の目安のものではあるけども。

「……響さん、それって」

「済まない、時間だ、ね」

「……そう、ですか……」

もちろん本当はもつとふたりとも、最後になるかもしれないだし話したい。

かがりたちとも……僕のことを、嘘だらけの僕のことを……肉体が女だつて知っていても、こんな異質な銀髪幼女な見た目の中に僕が入っていても、それでも好きだつて



言ってくれたふたりのことも待っていて話したい。

それが例え年頃の少女特有の……恐らくは僕の中の大人の男っていう部分になんともなく惹かれただけで、成長すればなくなるものだって分かってはいても。

僕がそれに答えることはないんだとしても。けども時間は有限なんだ。

無駄にしちやいけないっていうのは、この1年間で嫌っていうほどに知った。

ここまでにたくさん使っちゃったけど、未来なら変えられるって分かったから。だからこういうときには潔く、時間のままに行かなきゃならないんだ。

その方がきつと、この子たちにとっても良いはずなんだ。

「……大丈夫だよ、ふたりとも。あのふたりにも病室で……帰るときにはいつもお別れを言われていたし、僕からも言っているんだ。さよとりさからもしてもらっていたようにね。だから僕は行くよ。今日は来てくれて、ありがとう」

「……ええっ！ 『またね』、響さんっ」

「……『また』いつか……お会いしましょう、響さん」

「うん。『またね』、ふたりとも」



『別れは済ませたんだし、ここですつきりとさよならしよう』って言つてふたりと別れて5分くらい歩いて着いたのは、駅前のローリーのすみっこのほう。

そこには……最近はいつとも病院と家の往復と、それにここに来るときにもお世話になった黒塗りの車。

萩村さんが使っていたものよりも高そうな……いや、乗り心地からしても確実に高いんだろう、けどリムジンっていうほどじゃない車が見えてきたと思つたら運転席から人が出てきた。

いつも運転してくれている人。

マリアさんたちの部下の人。

なんの部下なんだろうね。

結局怖くて聞けなかった。

『お嬢さま』、ご準備の方はよろしいのですか？

「はい。待つていただいて、ありがとうございます」

「いえ、これが……今日までの、私の仕事ですから」

そう言いながらドアを開けてくれて、それにすっかり慣れちゃった僕を感じながら乗り込む。

この高級感あふれる車での送迎も、これで最後だ。

初めは申し訳ない気持ちでいっぱいだったけどそのうちに慣れて来ちゃって、いつの間にか当たり前って感じるようになっていっちゃっていただけ……これで、最後。

僕が大きな音が嫌いだって知っているからそつとドアを閉めてくれて、運転手さん自身もまた座席に乗り込む。

もう、何十回と見た光景だ。

「……いつもいつも。最後の今日までこうして送っていただいて、ありがとうございます。とても助かりました」

「いえ、私はただ命令されたままで。それに、お嬢さまをお迎えしていますと普段のような物騒な会話が聞こえてきませんから、私にとつては癒しなのですよ。響さんもまた知的な会話をされますし。私も楽しかったです」

ああ……僕が知的かどうかはともかく、イワンさんたちを乗せていたらそんな感じになるよね……やっぱり薄々どこるか割とはつきりと感じているマリアさんたちのご職業、なにやら恐ろしいものなんだろうな。

だけども僕は、この人たちとは別の道を行くって決めたんだ。

だからこそ僕のことについてもほとんど言わなかったし、イワンさんたちのことについて聞かなかった。

そして僕もまた聞かれなかったんだから……あちらも僕の気持ちが分かっているんだろう。

お互いに似ていて、ひとこと言えば仲間にしてくれる。  
でもそうはしない。

それでいいんだ。

「では出発してもよろしいでしょうか？ たしか行き先は——……」

「……どうかしましたか？」

運転手さんがいつもみたいにすぐに出発しない。

「……響さま。ご学友の方々……病院へよく来られていた方たちが走っていらつしゃっています。いかがしますか？ このまま車の窓からご挨拶されるか、それとも……」

……ぎりぎり。

車が走り始める前。

よく間に合ったね。

「……すみません、あと5分でいいので待ってもらってもいいでしょうか？」

「もちろんです。承知致しました……が、5分でよろしいのですか？」

「はい、あんまり長くてもこの後に響きますから」

「そうして車を降りて……そういえばこの車で送り迎えしてもらって多分初めて自分でドアを動かした気がする……ふたりが走って来るのを待つ。」

「ゆりか、かがり……そんなに急がなくなつて、君たちとはもう何回もお別れを済ませているじゃないか」

「……せーふっ！ ぎりっぎりせーふだよひびき！ あつぶな、あと1分、いや30秒遅れてたらあうとだつたじゃん!! ぷは——！ ひっさびさに全力出したー!!」

「そうひと息で言い切ると……相当に走ってきたんだろうな、息を整えはじめたゆりか。」

「ぱつつんの乱れを気にしていないことから、その急ぎっぷりがよくわかる。」

「……ただ……その後ろからよたよたと近づいてくる方の子は。」

「かがり……は、大丈夫?」

「……ごめん、なさい、ひびき、ちゃん……ちよ、ちよつと急に走つたものだから、わき腹が、痛くつて……」

「ゆりかに合わせて走つちやつたんだろうかがりはとても苦しそうにしていた。」

「息も絶え絶えだし、これ、かなり遠くから走ってきていたんじゃない。」

「……あと5分あるから大丈夫だよ。まずは落ちついて。そんなに息苦しうじや別れるものも別れられないよ」

「ごめんなさい……けれど良かったわあ……」

もう息が整ったゆりかと一緒に、二言三言話しつかかりが治るのを「こういうのもこれで最後なんだな」って思いながら、ゆりかとふたりで待っていた。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春 1 /

10

「かがりん？ もうちよい運動したらー？ 走ったの500メートルもないよー？」

「だ、だつて大変なんだもの……髪の毛のセットとお胸が」

「……そこまで私を愚弄するのがりん」

「違うわよ？ ……ふーっ、ようやく……」

走ってきたゆりかとかがりの息が整ってくる。

なんとなく懐かしい雰囲気になって、それで、なんとなくでみんなで同時にため息を  
ついて、少し笑つて。

僕はふたりを見上げる。

……そんなに首が疲れない、僕よりも少し大きいだけのゆりか。

大人と同じようにつて言うか多分岩本さんよりも背が高いかがり。

ふたりともおしやれしているんだろう、かがりはともかくゆりかも初めて見る服装になつている。

走つてきて崩れちゃつてるけどね。

でも、お別れ。

そうだね、最後になるかもしれないんだし女の子だったらそういう発想になるよね。

いわゆるおめかしというやつで、だから彼女たちは僕とさよならするために精いっぱい準備をしてくれてたんだ。

そういうの、前の僕だったころには服装なんてどうでもいいものだったけど……今は違う。

今の僕になってこの子たちに会って……とつても大事なものなんだって知ったから。知らされたとも言うけどね。

もつとも僕の格好はいつもどおりなんだけど……男としてはこれでいいのかもって思う。

「かがりん、もうだいじよぶ？ ほれ、これで汗を拭くのだ」

「ありがとう、ゆりかちゃん。私、今日に限ってハンカチを」

「いや、しょっちゅう忘れてるじゃん、ときどきお財布とかスマホとかまで」

普段から……いわゆる女子力っていうものが子供っぽいのに、それでも一見して高そうながりよりも実は高いゆりかがハンカチを差し出す。

「そうだね、勉強を見てあげるはずなのに手ぶらで来たこともあったな」



「え、それマジ？ ……かがりんのことだ、ただ単に勉強したくなかっただけとか」

「うん、あのときはさすがに僕も驚いたよ。ただ遊びに来たのかと。いつものように」

「『宿題やったけど持ってきてない』っていうのに通じるなにかがあるね。いつものように」

「おや、かがりはそういうことをしたことがあるのかい？」

「いや、ただの想像だけど……それっぽくない？」

「うん」

「だからそれは違うんだってばっ！」

「違うの？」

「違うのか？」

「もちろんよ！ あれはお家で、お外ではなくお家で勉強するものだとばかり思っていたからだって響ちゃんも、この話聞いたゆりかちゃんも知っているでしょう！ あと、私だってそんなこと………したこと、ない、わよ？ 中学になってからは………」

「小学校ではしてたんだ………」

「冗談だったんだけどね………」

「もうっ、ふたりしてっ」

そうして、軽く話してから。

「……ふたりとも」

順に見上げて……さつきまでは外にいたせいで被りっぱなしで忘れていたフードを取って……あ、りさとさよ、ふたりと話したときにも取ったほうがよかったかな、せめて話している間だけでも……髪の毛がふあさつと出て、風に流れるのを感じながら言う。

「最後のお別れ……もちろん、いつかまた戻ってくるつもりではあるけど。ともかくこれを済ませられて良かったよ。なにしろ君たちは僕が『この姿』でいちばん親しくした、いや、してくれた『友人』で、だから……こうして最後に顔を合わせることができて。僕は、とても嬉しいよ」

いちばんに言いたかったことを、いちばん先に言っておく。

この後すぐにでも……いつでも運転手さんに声をかけられてもいいように。

何回も予想しない力に襲われてしたかったこと、キャンセルされてきたから。

「……響ってさ。普段はテックトナー話し方って言うか話聞いてないことも多いけどさ？　よくちようちよ追っかけてるし……視線で」

「いや、ゆりか。それは誤解だ」

「そう？　ねえかがりん？」

「響ちゃんって純粋なのよ！」

「……それはフオローになつていないよ」

「あはは……なんか猫みたいになんもないところをじーつと見てて私のほうがびびるときあるしき。 だけどこーゆー、なんていうかバシツと決めなきやいけないっていうの？」

こーゆーときにはいきなり劇場版って感じになつて……かつこよくなるからさ。  
ギヤツプすごいよねえ」

「劇場……ええ、まるで映画に出て来そうな雰囲気を出して素敵なことを言うのよね」

「ん、まあそれも当たらずともなんとやらだねえ」

くねくねといつものように体をよじりながら話すゆりかと、わからないことがあると適当に解釈して……けどそこまで外れていない返事をするかがり。

半分の確率で暴投するけども。

……この1年で、何十回も見てきたやりとりだ。

「ねー、響？ そーゆーところ。 響ならわかつてると思うから念のため、念のためだけどさ？ 氣いつけとかないと、あつちでもそんな感じでタラシーな言動ばつかしてたら、こーう……同じ世代の女の子とかお姉さん方にぱくりつてただかれちやいそうだから、なるべく控えるよーに。 いや、わりと本気で、マジだよ？ ほら、海外つてそういうの積極的つて言うしさ……そのさ、とりあえずでただかれちやう的な？」

そんなのは絶対ないって思う。

あるとしたらむしろ男からの気をつけないとって感じなんだけどね。

「私たち、そーゆーのに耐性ないんだから……帰ってきたら『彼女できてましたー、食べられてましたー』ってのにはさ……お願いだからやめてね？」

「大丈夫だよ、安心してくれ」

「安心できぬ……余計に。心配つて言えばそれくらいしかないってくらいには響いてしっかりしてるしさ、だけどそーゆー方面には疎いし実力行使なんてされないよう、ほんつきで気をつけてね!? ほら、海外つて女同士とかの抵抗とかも薄いつて言うし! しかも中身は男の子だし! いやマジで! ……あ、ところでこれ、どぞどぞ。些細なものなんだけど良かったら持つてって?」

ゆりかから渡されたものはずっしりと重い。

思わずよろけちやっただけ……ぎりぎり大丈夫な重さだ。

5分も持つていたら腕と指が痛くなるだろう。

「……だいたいよぶっ」

「うん、平気……中身は新刊……?」

「そーそー、せつかくだからってテキストによきそーなの詰めといたよ!」

本って重い。

袋自体も……紙袋自体も大きいし、20冊くらい、いや、それ以上は入っているだろう。

……これを買っていて遅くなったんだろうか？

「……そういえば移動中やあちらでの暇つぶしのことをすっかり忘れていたよ。今朝までずっと忙しかったから……ゆりか、ありがとう」

家にあつた本は一部を除いてみんな捨てちゃったし、これからも忙しいだろうって思つて何も用意していなかったんだけど……よく考えたら多分ネットは使えない、私物も制限される。

そんな中「こういう普通の本ならいいよ」って言つてくれるかもしれないだし、本当にありがたい。

「友だちからの贈りものなんです」って言えばさすがに捨てられることはないだろうし。「いいっていいって！ 響が、聞いたことあるけど読んだことないって言つてたのとか、響が入院してから出たのとか、そーゆーの中からよさげなものちよくちよく集めてたんだよねー、いつか渡そうって。ま、私がなんとなくよさそうって思つたものだったなら響もそこそこ楽しめるはずだし？ それに重くつてごめんだけどさ、逆に言えば文字数はたんまりあるんだから……そーね、あつちに着いて落ちつくくらいまではいけるんじゃない？ SFとかミステリーものつて読むの時間かかるし、響、そういうの2回

3 回読んだりするじゃん？」

腕時計をちらちら見ながら、ものすごい早口でまくし立ててくるゆりか。

……そうだね、時間ってあつという間に過ぎるから。

「まつ、私のは昨日までに集め終わってて渡すだけにしておいたからさ？ ほら、いつもみたくやることはさつさとやつちゃうポリシーだしさ？ あ、いくつか私も読んだのとかあるし？ ……だーけーどー、かがりがたいっへんでさあ」

「あ、ちよつとゆりかちゃん、それは言わないでつてー」

「やだねー、このせいで危うく渡せなかったんだから。このくるくるさんつたら今朝までまーだ決められなくて、つてか昨日ぎりぎり決めてただけど、そこでまたやらかしたの。『もうー回お店見て回って決めるわ！』つて、そんで選ぶのにまた時間がかかったのよ……『もーいーじゃん、もう大体決めてるんだから早く選んでよ』つて言ってもぜんっぜん聞いてくれなくてさー。いやホント、かがりんがもう少し悩んでたらこうして渡す以前に会えなかったわけで。つまりはメロンが悪い」

早い早い。

さつきよりもずっと早口だ。

……だけどそれを聞き取ることができくらいいには、僕も慣れたんだ。

「だ、だつてっ！ せっかく、せっかくなのよ!? せっかく響ちゃんにびったりなものを

……少し遠出した先でようやく見つけたって思つて安心したら、あ、きちんとプレゼント自体は用意していたのよ私も！」

「かがりんつて映画とかじゃ絶対足引つ張るブロンド女子なポジよね……」

「そうだね」

「? ブロンド……? あ、けれどね、けれども駅に着いたら昨日買ったのを忘れているつて気がついて! 家に帰つて取つてくるのとここで探すのとどちらが早いかつて言つたら断然にこちらで、だけれども響ちゃんに似合いそうなの、なかなか見つけれなかつたのよ!」

真つ赤な顔になつて反論するかがり。

くるんくるんがくるんくるんしているのを久しぶりに見た気がする。

「かがりんやかがりんや? そこで、お家に引き返すついでにお家の人とかに持つてきてもらうとか、あるいはそもそも時間がないんだから妥協して似合うんだつたら一品モノとか高いの比べずにさ、素直に安い、フツーのお店で買つても響、喜んだと思うよ?

時間が大事だつて知つてたでしょ? 私、なんつどもそー言つたよう?」

「ダメよダメ! 今日はお母さん出かけているし、バスは渋滞になつたらおしまいで響ちゃんに会えないかもしれないのだし、それにせつかくだからやつぱり思い出の品にしたいと思うじゃない!」

「その結果がこれだがね。イヤ、マジでピンチだったのよ？ 私たち  
「うぐ」

そうしてでも選んでくれていたのは嬉しい。

嬉しいんだけど……かがりの未来が、将来が、非常に不安になる。

やっぱり夏休みに鍛えたくらいじゃ足りなかつたか。

けど、こうしてゆりかたちと一緒に成長していけば……いつかは大丈夫なはず。

……大丈夫な、はずだ。

大丈夫だって信じてる。

大丈夫かな？

ダメかもしれない。



## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春 2 /

10

「……あつ！ ちよ、ちよいとちよいとかがりん、時間、時間！ 遅れた件はもーいいから、挨拶さつさとしとかんと！」

「あ、そうよね、お車の人も待たせてしまっているものね。 ごめんなさい、響ちゃん」「いや、いいよ。 時間には一応余裕は持たせてあるから」

そうして彼女もそつと、手に持っていた紙袋を渡してくるかがり。  
身構えたけども今度は軽い。

「はい、響ちゃん、私からも。 もう春も進んできて少し暑い日も出てきてしまったから、すぐにシーズンが終わってしまうかもしれないけど。 響ちゃんいつも寒そうにしてるから、こういうのがいいと思って」

僕が寒そう？

あ、いつもの服装か。

今の僕を見られたくないからって、幼女だって知られるとまずいからって。

そう思い込んでいたから冬まではずっと……かがりにスカートを着せられて連れ回された一部を除いてほとんどはパーカー姿でフードも被ってた。

今の僕の体は暑くても平気みたいだからって真夏でも似たような格好で過ごして、みんなには肌が弱いって言ってた。

冬も冬でもこもこの多いコートを買ったし、外に出るときはブーツだったから。

……肌が弱いつて設定のこと、多分この子忘れてるんだろうな。  
でもいいや。

紙袋の中を覗くと薄い色の布。

「薄手のマフラーか」

「ええ、ようやくに見つけたのよ！ 響ちゃんにぴったりなもの」

「おかげで渡せないところだったけどね？ 反省して、かがりん」

「反省してますってばっ」

簡単な包装の中には、今の僕によく映えるマフラーが入っていた。

タグも切つてある、そのまま使えるようにしてあるものだったからひと言断つて、ふわりと羽織る。

「やっぱり！ 似合っているわっ！」

「おー、これはもはや主人公。ヒーローもメインヒロインもいけますな。つまりは

ダブルでおトク。いいねー、そーゆーの」

喉に感じる、柔らかい感触が心地よい。

うん、春秋とか夏の冷房などでも使えるストールとは違っててもこもこしている感じ。

「ありがとう、かがり。この体は体温が低いから気がついたら冷えているんだ。よ

く考えたらこの先も……移動中なども冷えそうだし、とてもありがたい」

これもまた、取り上げられたりはしないだろうもの。

……大切にしないとな。

「よかったわ、気に入ってもらえて。お家に置いてきてしまったものに比べたら少し

残念だけれども……それもまたよく似合っているわ！ 男の子でも女の子でもどちらの格好をしていても合うものだから、よければ使ってちょうだい」

「うん、多めに巻けば冬の初めくらいまでは使えそうだし、緩くすれば夏でも。大切に

使わせてもらうよ」

喜んだかがりが思わずという感じでゆりかにハイタッチを仕掛ける。

かがりがそういうことをするなんて初めてだったからか、ゆりかもびつくりして反応が遅れたのもあって、身長差で上手く行かない。

今度はきちんと「ぱんっ」と手のひらを合わせたふたり。

そんなふたりを見て、両手で持ち直した本の重みと首を包んでいるふわふわを感じながら僕は言う。

「改めて、ありがとう。ゆりか、かがり。最初に出会った君たちから最後にこうして話をできて、贈りものまでもらつて。僕は……」

なにかを言おうとして、けれどもそれを思ひかなくて。

けど、もうちよつとでいい感じの言葉が出て来そうになつたところで、車からふぁんつと軽いクラクションの音が鳴る。

……時間なんだね。

多分5分どころじゃなくて10分くらいは待つてくれていたんだろう。

かがりが落ちつくまでに少しかかったし、その後にもけっこう話していたな。

その音を聞いてじゃれあいを止めて、とたんに悲しい顔に……けど一瞬でそれを飲み込もうとしてやつぱり無理だった、女の子なふたり。

うん。

そういう年相応なところはこんなにも。

性格も反対で年齢詐欺さも反対で……でも、やつぱり中学生の女の子たち。

「……時間、みたいだね。僕は行かなきゃ……だから、ふたりとも」

運転手さんが出てきて、けど、無言で後ろの座席のドアを開けてくれるのを横目で見

ながら、別れを告げる。

「……また、いつか。 早いかもしれないし遅いかもしれないけど、でも、きつと」

泣きそうだけど、でも精いっぱいの笑顔を作ろうとしてくれている、かがりとゆりか、ふたりの女の子を見上げながら。

「……また、もういちど。 今度はきつと……そう。 今度こそは『事情』で伝えられな

かった、嘘じゃない、本当の『僕』と」

向き合ってほしい。

「……………っ！」

駆け寄ってきて……普段みたいに遠慮なしのじゃない、包み込むような抱きしめ方をしてくるかがり。

「……………また、ね」

普段みたいに僕が文句を言うまで離さないのとは違ってすぐに離れて、今度はゆりか。

ふたりの柔らかさと匂いを感じて「絶対に覚えておこう」って思つて……そのまま振り返らないで車に乗る。

抱きしめられたときに上から温かいものがぽつぽつ来ていたし、そのあともあんまり顔を合わせたがらなかったから、これでよかつたんだろう。

そうして静かに動き出した車の振動を感じながらマフラーをもこもこしたままうつむいていた。

「……ロータリーを出ました」

少しして見上げた窓の外は、もう駅前から離れていて、人もまばらになってきている。あの子たちは——もう、見えない。

別れは済んだんだ。

みんなと……りさとさよ、かがりとゆりかっていうみんなと。

それも、とつても良い形で。

……うん。

ちゃんとした形のお別れができるって、幸せ。

そう思う。

◇

運転手さんに頼んで家へ帰るルートからすこし外してもらって、懐かしい場所に降りてもらった。

そこは、かつての前の僕がよく散歩やジョギングに来ていてなじみ深くって。

今の僕になっても、女の子な格好に慣れるために歩いたり体力をつけるためにときどき来ていたりした。

けどいつもへばつちやつて帰りが辛くって、その上今井さんとぼったり会つちやつたりした、あの運動公園。

季節は春、1年前のあの日のあの朝と同じくらいの日付。

気温も……今の僕になってから初夏まではまともにも出なかつたからわからなけれど、でも、きつとこうして花の匂いも木々の緑の匂いも、風が吹くたびにひらひらと飛んでくる桜の花びらも、きつと、あのときと同じはず。

僕自身は1回も来たことはないけど、でもちよつと遠くを見ればそうした見慣れた景色が広がる公園の駐車場に……僕の家への道にいちばん近いところに止めてくれた運転手さん。

「僕は別にもつと離れたところでもいいです」って言ったのに「これが仕事ですし、最後ですから」って言うてくれて、こうしてドアを開けてくれて、いつもみたいに手を取ってくれた。

「……本当にこちらでよろしいのですか？ お時間が押している、そう伺っていましたか」

「はい、でもここから歩いて帰るくらい時間はありますから……どうしても見て行き

たくつて」

「しかし私は、お嬢さま……響さまを……自宅までお送りするようにと」

たしかにマリアさんたちは「僕の安全が大事だから」とかなんとか言つて絶対に反対しただけど……でも。

「済みません。マリアさんたちに『僕の気分が急に変わつて予定を変えたんだ』つて伝えておいてください。これから……少なくとも当分は帰つてきて見られないだろう見知つた風景を歩いて、目に焼き付けて帰りたいんです」

「……承知しました」

「……まで送つていただいて本当にありがとうございます。あのおふたりにも、よろしくと伝えておいてください」

ためらいながらも僕の意志を尊重してくれて、本の入った袋を手渡してくれて会釈をする彼。

……その姿勢が90。近いのはいい加減に止めてほしいって何回も言つたけど結局止めてくれなかつた運転手さんは車の中に入り、僕が手を振るのを見てから静かに駐車場を後に行つた。

……ほつんと、風の音しか聞こえない駐車場に僕ひとり。

……これでひとりだな。



こうなる前の僕の、当たり前の時間。

最後の最後に、車の中からの眺めをぼーっと見ていたらふと思いついた、こうして懐かしい場所を歩きながら帰るっていうもの。

最後かもだもん。

これくらい良いよね。

僕は……歩いているうちにほどけちゃわないようにってマフラーを少しきつめに巻き直して、どうせ今晩からは使うこともないだろうから限界までがんばろうって、本の重さを意識しながら歩き出した。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になつた日／春 3／

10

僕はこの運動公園がお気に入りだった。

どんな格好でも何時に来ても……社会人や学生が来ないような時間帯にぬぼつてした男がひとりでも来て、注目されない場所だったから。

ほら、今のご時世的に怪しい男がそのへんほつつき歩いてたら適当な理由で「事案」つて言われちゃうし？

で、もう何年も、よつほど天気が悪いかじやない限りには……少なくとも入り口の周りくらいまでは歩きに来ていたこの公園。

人が多いからこそ逆に僕っていう存在が薄く感じて、自然の色や匂いつつていうものの気持ちよさを実感できることも、もう2度と来ない……かもしれない。

そう思うだけで、変わっていないはずなのに変わって見える。

この季節は掃除が追いつかないからたくさん葉っぱや花びらが重なっている上をなんとなくさくさく音を立てて歩いて、そんな感傷に浸ってみる。

……どうせ歩いて数分で出口だし。

そんな気分で、僕はさくさくさくさく歩く。

◇◇

初めは戸惑った。

だって普通の男が、ニートだから普通よりマイナスな男が銀髪幼女だもん。

「この姿になったのって夢じゃないの?」とか「僕の頭がおかしくなっちゃったんじゃないの?」とか「僕の認識だけがおかしいんじゃないか」とか「とうとう僕は来るって自分を幼女だと思い込む末期症状なんじゃない?」とか考えたりもした。

だから恐怖を感じて。

けどそのすぐ後に……いろいろと確かめるために出かけた先で、かがりとゆりかに出会って。

少なくとも今の僕は今の僕として、誰からも幼女だと見られるものになっちゃったんだってわかって。

で、人はすぐに慣れるもので。

顔からなにか性別まで変わっちゃったとしても慣れちゃって。

家の中でさえ生きていくのに苦労しているうちにだんだんと慣れて、そう時間が経たないうちに元の生活に近いものになったんだ。

見た目のことも、女の子になっちゃったもんだからいろいろ困ったりもしたけど、そ

れすらも懐かしい感じで。

……それで慣れたと思つたらハサミが飛んでびっくりして、今井さんに追い詰められて萩村さんが役に立っていなくて抑え切れていなくて、それでゆりかに助けてもらつて。

その萩村さんに偶然声をかけられたから送つてもらつた先でかがりに襲われて。

本当に……本当に、大変だった。

親がいなくなつてからひたすら避け続けていた人間関係が、あつちから来たんだから。

それからさよやりさとも出会つて、4人とも仲良くなつて……僕から友達だつて思えるようになって。

「今の僕としての生活も悪くないかも」つて思っていた矢先に冬眠して……その前にマリアさんとイワンさんにも会つていたんだっけ。

そうして岩本さんと島子さんを助けてねこみ病つていうものを知つて、ねこみみとしつぽを堪能して柔らかくつて、それで僕自身が男だつていうのをみんなにも明かせるつて決心がついて。

それで年を越して嘘をひとつ話してほつとしたら……結局謎のままになつちやつた「反動」で派手に血を吐いたりして。

病院に連れて行かれたと思ったたら調べられて、また冬眠して入院して。

そして家を……今の僕でさえ居心地が良すぎるせいで決心がつかなかった家の中を空っぽに近い状態にまで、きれいさっぱりにして。

今日、みんなとおわかれして。

……確かに大変だった。

けど、大変なことは大変だったんだけども、この大変だった1年は……僕としては9ヶ月くらいの1年なんだけど、とにかくにも密度が濃くって。

前の僕が今の僕になってからの1年は、少なくともここ15年くらいの……父さんと母さんがいなくなつてからの僕の人生っていうものの中で……多分。

いや、きつと、いちばん充実した時間だったんだろう。

今なら。

こうして空っぽになった家に1回だけ戻る、今だからこそそう思えるんだ。

◇◇◇

——学ばず、働かず、ただ生きているだけを生きる。

「ニート」って呼ばれる生き方は、言われているほど悪いものじゃないって僕は思う。

ゴミとかひどいことを言う人もたくさんいるけど、そんなのは気にしなくていいんだ。

だつて、僕たちは毎日毎日をただ生きたいように生きていくだけなんだからさ。

イメージと評判は底辺に近いけど、その生活は年を取つていけば「充実した老後」とか「晴耕雨読」とか、時代が違えば「隠居」だったり、あるいはもう少し贅沢に過ぐすなら「貴族の暮らし」つて言つても過言ではないものはずだし。

最近は一リーリータイアとか言つて目指す人も出てきたくらい。

時代が追いついて来たんだ。

「高等遊民」……そんな言葉で呼ばれることもあつたらしいし。

他人に振り回されない生活つていうのはそんな感じにいいもので、あこがれで、理想。

世間体さえなくて「働きたい人だけ働けばいいよ」つていう世界なら、きっと多くの人が選ぶはずの素敵な生活。

——そんな生活を、僕から捨てる。

無事に成長するかもしれないけども一生幼女のままかもしれないし、もしかしたら前の僕に、元の僕に……ある朝起きたら戻つてあるかもしれない。

どっちにしてもお金も戸籍も何から何まであつて、何十年か後まで生きていくのには困らない、居心地が良すぎる場所。

けど——それを捨てて、別の道を選ぶ。

そう思えるほどには変わったんだ。

前の僕から今の僕に変わったからっていうのもあるんだけど、多分、そうじゃなくって……ようやく外にちゃんと出て、いろんなことを知ったからなんだ。

母さんたちが居なくなつたからって閉じこもつてのが魔法さんに幼女にされたからって、嫌でも知ることになつた。

結局のところ僕にかかつている「魔法さん」。

「ねこみみ病」、「変異」……または、そうじゃない「何か」。

それについて分からずじまいのままなんだ。

似ているようで違つて、けどやっぱりどこかでおんなじなにかがあるって感じる、これらの「見た目が変わる」っていう謎の現象。

でも僕は、大變だつた分いろいろ知つた。

だからある程度どんなものかは分かつている。

そしてこれから起きるかもしれないことについてもなんとなくの予想、仮説もいくつか立てられている。

そこまでしか理解できていない……とも、言える。

だけど、改めて考えると。

僕の、今の状況を客観的に整理してみると。

さんざんにノートに書き続けて「ああでもないこうでもない」って、独りでいろいろ

と考えた末での結論として、だけでも。

僕の言動ひとつで僕自身を「幼女」としても「元の男」としても……「どちらでもあつてどちらでもない」状態としても認識させられちゃう現象。

日数に関係なく「健康に問題がない範囲」で「冬眠に近い状態になつて」眠りこける現象。

どこも悪くもなくつてケガひとつしていないのに、あんなにどばどば血が出てきて一時的にしても体が動かなくなるっていう「反動」つて呼ばれていた現象。

認識と冬眠と反動。

あのときはとても大変なことで、魔法さんに振り回されてもうさんざんだつて思つていたけど——その程度なんだ。

もちろん大変だよ？

大変なものなんだけど、でも病院をぶらついているときに見ちゃったように……本当に重い病気を持っていて、それでずっと病院で、命を守るために戦い続けている人とか。そういう人たちを遠くから見ても僕自身のこれと比べると……生温いにもほどがあるんだ。

誰だつて自分のことが一番大切で、自分のことが一番に感じる。

良いことも悪いことも。



だから僕みたいに閉じこもっていると他人のことが分からなくなって、比べられなくなつたんだ。

でも、今は違うんだ。

僕は別に苦しくも辛くもない。

ただ幼女になつてはいるだけ。

ただ、それだけだつてはつきりと自覚できているから。

魔法さんっていう、ふと夜中に怖くなる程度の存在はあるんだけど……それは僕を死なせようとするものじゃなくつて、むしろ生かそうとしているっていうのはとつくに分かつている。

なんで銀髪幼女っていう生きにくいことこの上ない姿にしたのかはわからないんだけど……でも、ちよつとくらい不便なのつて、誰だつて抱えてるんだ。

だからこの体と魔法さんとは「そういうもの」だつて思いながら付き合つていくしかない。

ただそれだけなんだ。

……たつたの1年。

それだけで僕、何歳も成長できた気がする。

やっぱりお家の中で好きなことだけしてる生活も……いや、とつても素敵で快適だつ

たけども……それだけじゃ、だめなんだね。

49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春 4／

10



……今日はあの日みたいに陽の光がほかほかと体を温めて、緑の香りがして、気持ちいい風が吹いて、とても気持ちいい——春の穏やかな日。

小さくなったからなのか体質なのか前に比べると冷えやすくなった体も、この天気とあの子にもらったマフラーとでちょうどいい感じに温められている。

ふだんは青白い印象の今の僕の顔も、きっとほのかに色づいているはず。

ぼんやりと、元の体での今までのことと、今の体での今までのこと……そしてこれから先のことを考えて思い出しているうちに、いつの間にか家の前まで来ていた。

……早いな。

本当に、時間が過ぎるのは、早い。

いざとなると本当に時間が過ぎるのが、早い。

十数分の距離があつという間に感じてしまう。

きつといつも通り、半分以上はまた思考に沈んでいたんだろうけど。

……そんなのはニートをしていたこの数年でしつかりと味わってきたことだ。



病氣と付き合う。

そういう概念があるって知っていて、そしてあの病院で実感して。

だから僕は「気まぐれな魔法さんっていうものに取り付かれちゃった」とでも思っ  
て過ごしていくしかないんだろう。

そういう病氣の人は、いっぱい見た。

たとえば昼間でも何をしていても、なんの理由もなしにいきなりに耐えられない眠氣  
が襲襲ってくる人とか。

体が悪くて、あるいは悪くもないのに息苦しくて大変な人とか。

そのせいで体を激しく……ジョギングとかでさえしちゃいけなくて窮屈きうくつそうな人  
か。

それに比べれば僕のこれだって……魔法さんだって、せいぜいがちっこい、見た目が  
目立つだけ。

貧弱、いや、冬眠とか血を吐くこととかを考えると病弱びじやくって言ってもいいのかもね

……だけでも、その程度だ。

別に死ぬとかだったりとつても苦しいとかいうものじゃない。

ただちよつと、見た目が変わってたまに変なことも起きる。

その程度なんだ。

冬眠したり血を吐くのだって説明さえしておけば良い。

僕はそういう珍しい病気を抱えてこそいるけど、それで死ぬ訳じゃないんだって  
ことさえ周りの人たちが分かっているのならなんとかなる。

魔法さんが怒ったりしてもびっくりする程度で済んで……あのときみたいに悲しま  
せるっていうことは、ない。

イワンさんたちのように。

その範疇に過ぎないんだ。

家の中でずーつとうだうだと考えてはいたけど、結局のところ僕に起きていることは  
とつても単純なこと——。

「あ」

背伸びをしながらドアの前で鍵をかちやりと回したところで思い出す。

……忘れるところだった……これだから僕は。

いくら忙しかったって、なんとなくこうして感傷に浸っているだけだったとしても

……さすがにあの人におわかれを言わないで出て行っちゃうのは失礼だもんね。

僕は鍵を反対に回して閉めて、それからお隣さんの飛川さんのお家へ。

実に何年ぶりだろう……僕の方から敷地に入って、そして、かつては押し慣れたチャイムを鳴らす。

「……………くっ……………」

……背伸びしないと押せないそれを。

「……………あら、響くん？ 今日はどうしたの？」

すぐに出てきた飛川さんの奥さんは、やつぱりいつ見ても……格好と髪の毛が明らかによそ行きじゃないのに、ほとんどお化粧もしていないのに、前の僕よりもほんの少しか上じゃないって感じ。

この人のことを知ったらきつと、岩本さんが愕然とするだろうこと間違いなしだな。

なにしろ彼女よりも数個上のはずなのに、これで中学生のお子さん……さつきちゃんがいるんだから。

けど、世の中は不思議に満ちているんだ。

この人だって、ひよつとしたら……気がつかないうちにねこみみ病で若返っている可能性だってあるんだ。

僕はそもそも人の顔をじつくりと見るのが苦手……だったからよく見ていなかった

せいでわからなくなつて、だからねこみみ病のあのふたりだったり、あるいは僕があの朝を迎えたあたりで自然と若返つていたりしてもおかしくはないんだ。

それに飛川家のみんなは……なんていうか、ふんわりとした感じの人しかないからな。

気がつかないか、たとえば気がついたとしても喜ぶだけでおしまいだったのかもしれない。

……うん、この人たちならきつとそうだろう。

けど、今日話すのはそれについてじゃない。

「今日は春らしくていい天気だからお散歩してきたのかしら？ でも響くんからうちに来るのは珍しいわねえ……なにか相談でもあるのかしら？ あら、それともお茶していいく？ ……またまたあいにくと、さつきは夕方にならないと帰つて来られないけど」

「すみません、飛川さん」

◇

「……ええっ!? 海外に?」

「かもしれない、だけです。まだ相談中で。でもとりあえず一旦家を」

「ひよつとしたら海外で住むことになったり、お仕事も?」

「はい。これも、もしかしたら……ですけど」

帰って来ないかもしれないんだ、多少盛ってそれらしく説明を済ませる。

大丈夫、この人は基本的に疑われない人だから。

……僕がニートしてたときもいろいろすんなりごまかせてたもん。

「あらあら、それにしてもいきなりなのねー？ もっと早く教えてくれていたら、おわかれ会とかできたのに。だって、さつきだって響くんに会いたがっていたんだし」

「ごめんなさい。いろいろと……いろいろと、急だったので」

ごめんなさい……飛川さんのこと、かんっぜん忘れていたんです。

ゴミ捨てるのときにも何回も会っていたし、スーパールの帰りとかにもすれ違つて雑談とかもしていたし。

それなのに忘れていた。

肝心のお隣さんっていうのを。

さつき鍵を回すときに「そういえば後ろから声をかけられたのが魔法さんが認識まで変えちゃうんだって知つたものの発端だったんだっけ」って思い出さなかつたらご挨拶すらせずに出ていくところだった。

……反対側はずつと空き家だからどうだっていいとしても、昔からの顔なじみでよくお世話もしてくれていたのにな。

僕はいつもこうだ。



「えっと。それで、ほとんどの片付けはもう終わっているんですけど、大きなものとかはそのままでし、なによりもこの後どうなるのか、まだわからなくて。早ければ……そうですね、明日明後日にでも業者の人やや親戚たちが来たりしたり、荷物の出入りがあるかもしれないんです」

きつと掛かるだろう迷惑について説明しておく。

叔父さんの方にはメールでお願いしておいたけど……何でそこまでしておいて忘れてたんだか。

「なので、少しうるさくなるかもしれませんが……えっと、僕のことを聞きに来る人がいるかもしれませんが」

途中からは準備していないことばだったからしどろもどろになっちゃったけど、飛川さんは特に気にしていない……の、かな？

「それはいいけど……寂しくなるわねえ」

「……はい、飛川さんにはとてもお世話になりました」

特に、父さんたちがいなくなつてからの1年くらいは。

「けど、いいことなのよね、きつと」

彼女がしやがんで僕と目線を合わせてくれる。

……子供じゃないのに子供になつたからしょうがないんだ、うん。

「響くん、あれからずっとお母さんたちのことでふさぎ込んでたから。私たちがやなんにも助けてあげられなかったけど、でもだんだん元気になってきて……このところはお仕事もときどきだったけど、でもようやく見つけられそうだなによりね！」

あ、撫でないで……なんかくすぐったいから。

……あ、撫でられるとなんか変な感覚。

「それにしても、こつこつ外国語をがんばって！ それで引越して住むだなんて……ときどきふらつと旅をしてきたりしてたから知っていたけど、おとなしそうな顔してワイルドなんだからー。きつとご近所じゃ、当分のあいだは響くんの話でいっぱい！」

「……噂、ほどほどにしてくださいね……」

魔法さん……病気っていうことは言わなくって「あくまでも長期間いなくなるかもしれない」っていうのと、きつと心配するだろうからって「お仕事が見つかりそうだから」っていう感じにぼかして説明した。

嘘ではあるんだけどここで心配させるのは悪いから。

これは必要な嘘。

今ならちゃんと割り切れる。

「ねえねえ、もつとくわしく聞かせてくれないかしら！」

「！……すみません、時間が……」

撫で撫でしていた腕が僕の腕を掴みそうになって、慌ててすり抜ける。

かがり相手に鍛えたすり抜けだけでも……飛川さんってばこういうところあったんだよね……うん、女の人だからね……。

かがりに鍛えられていなかっただら連れ込まれていたところだった。

はた迷惑も極まりないあの子だったけど、こういうタイプの女性に対する耐性ができたことについてはありがたく思う。

さんざんに振り回されたけども。

本当に大変だったけれど。

「あらあらそうなの、今日……って言うか、もうすぐに出ちやうの？」

「はい、家に戻って支度したらすぐに迎えが」

「そう……残念ねえ。さつきも会いたがっていたのに、よりによってねえ。あと1、

2時間で帰って来るのに」

「いえ、僕が急すぎるのが悪いんです。本当なら何日か前には来なければならなかつ

た僕が」

「いいのよ、きつと。……帰ってきたりはするのよね？ なら、そのときに来てくれれば

ばいいわ！ きつとあの子、成長した響くんにびつくりするわよ？ ……ね、響くん

「？」

目の前が暗くなつたつて思つたらハグされる。

「……………」

……顔に胸を押し付けられる感覚にも慣れてる僕自身がいる。

「がんばつてきて。私もさつきもうちの人も、それに近所の人たちも、みーんな響く

んのこと、応援してるから」

「……………ありがとうございます」

そのあともなかなか離してくれなくつて、「なにかお菓子でも持つて行く？」とか「小さい頃に撮つてある写真とかある？」とか、そんな感じの……僕が中高生だったころにはしよっちゆう聞いていたような、昔懐かしい会話をして、挨拶をして。

「またね、響くんっ」

「はい、お元気で」

僕は彼女とも別れて、ようやく家に入った。

最後になるかもしれない帰宅をした。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春 5／

10

「ふう」

男だった前とは違って腕を上げなければ開け閉めすらできないドアを開け、ずっと住み続けた僕の家へ、最後の足を踏み入れる。

外の明るさから一転、暗い玄関からの廊下に目が慣れてくると……ほとんど物が何もなくなつた寂しい光景が見えてくる。

少し前からどこかよそよそしさを感じさせるようになった、僕が生まれてからずっと住んできた家。

それなのに、今となつてはどこかもう、他人の家のような感じさえ受ける。

ドアを閉めて鍵をかちやりと回す。

僕が戸締まりをするのは……少なくとも内側からこうするのはきつと最後だろうってわかつているからか、なんだかこの音すらもいつもよりも大きく感じる。

不思議なものだね、五感って。

僕自身の体調とか意識とか感傷とかで、こんなにも変わるんだから。

今までぜんぜん気にしていなかったけど、こういう……ひとりしかない家に戻ってきて、玄関からしてもなんにもなくて。

よそよそしいを通り越してよそのお宅にうっかり邪魔しちゃった、あるいは時間外の展示場、またはたまたま鍵を持っていた空き家に来ちやっただような……そんな感じがする。

知っているのに知らない、現実なのに非現実。

そんな感じ。

家の中に入って、しばらく佇んで、思う。

……前の僕にとっても少し。

今の僕にとってはものすごく広いこの家が、持て余すほどに広いところが、僕の……二トトとして生きて終わろうって考えていた空間なんだって。

紙袋とマフラーを玄関に置いたままにして、僕自身のとたとって音、あるいは歩いてきて疲れているからかよたよたって感じの軽い足音を聞きながら廊下を過ぎてお風呂へ向かう。

だって今日はお風呂吕に入る暇も……許可も出ないかもしれないんだから。

まあ考えすぎだろうけども気を落ちつけるためにも、ね。

最低限のものだけは残してあるお風呂吕に入るべく居間へ向かい、パネルの下のボタン

を背伸びをしながら押して追い炊きの電子音声を聞く。

「……………む」

あの子たちからの通知がすごいことになってる……まあ当然か。

今どきの子たちは余韻よりも繋がりがだもんね。

いろんな写真とかが送られてくるのを見つつ、あつまつたつていう音が鳴るまでのあいだにふと、魔法さんのことも考えてみる。

魔法さん。

またはねこみみ病、それとも変異とか変質とかいうもの。

魔法さんは結局そのどれに該当するのか、それともまた別ななにかなのかっていうのはやっぱりわからない。

けど僕の感覚としては「どっちでもあつてどっちでもないもの」、そんな気がする。

あくまで感覚だけど、こういうときの直感っていうのは早々外れていないってどこかで読んだことがある。

魔法さんで今の僕になっちゃってそれなりの時間と苦労をしてきた、今の僕。

僕にとつてはもはや、今までみたいに大げさに悩んだりこわがったり落ち込んだりするものじゃなくなっている。

それなりに魔法さんについて知って、それで得た結論がこれだ。

それにねこみみ病……見た目がけっこう変わるっていう魔法さんと似たものだった、まだ確認されていなかったり秘密にされていたりするケースだって。

僕のようになった人やその周りの人が秘密にしているだけで、ねこみみ病の一種として歳が……僕の場合には15くらい若返りをして、別人に、別の人種っていうもの見た目になって、そしてなにより……性別まで変わるっていう、すごくまじまじにセツトで現れるっていうケースだって。

世界中で僕ひとり、他には誰もいない。

なんてことはやっぱり多分無いんだ。

だって僕はそんなに特別な人間じゃないから。

もし仮にいなかったとしても——今後現れないっていう保証はどこにもないんだ。

だってねこみみ病だって、こうして世界で一斉に広められるくらいに増えてきたのだから最近だっていう。

それだって原因は一切に不明で、ただねこみみ病になるっていう結果があるだけだ。

今の科学だって何でもかんでも分かるってわけじゃない。

理由が分からないけど結果は分かっているってものもいっぱいある。

いや、多分そういうものの方が多いはずなんだ。

だから今後いつ現れるか……あるいは僕よりも前から現れているって分かるかなん



て分からない。

まあこんなにしつつこい魔法さんに年がら年中まわりつかれるっていうのはないかもだけでも。

ストーリーカー気質な魔法さんにね。

◇

僕にとって運が悪かったのは、家族がいなくて……「叔父さんのところに来ないか」っていう提案も蹴ったからひとり暮らしで。

学生時代に……少ないながらも話の合う友人っていうものになっていたはずの人たちとも連絡を取らずに自然消滅させちゃっていて。

かといってお隣さんに頼るっていうことも……思い浮かんだのに、めんどくさいしなによりも迷惑をかけるって止めちゃって。

で、無職で。

大学は卒業したのに働きもしていない、いや、厳密にはときどきしか働いていない、けどなにかのスキルを手に入れるためにそうしているわけでもない、ただただめんどくさいからだからだらしたいっていう怠惰な理由でニートをしていたっていうことで。

もし誰か一緒に暮らしてたり週に何回か会うくらい仲がいい人がいれば、幼女になつてから何日の内に誰かに知られて。

叔父さんや……家族のような人がいれば、絶対になんとかしてくれようとして。

そうでなくとも友だちとかに頼ったり……僕の場合でも連絡先さえ消していなければ、総当たりで「急で悪いけどどうしても相談したい、助けて」って頼めば誰かしらは応えてくれていたはずで。

悲しいことにその全員から「やだ、だるいし」って言われたとしても、お人好しの飛川さんに頼めばなんとかなったはずで。

なによりも魔法さんにかかつてすぐに自分を疑ったりして無駄に考えすぎてこんがらがっちゃうってこじらせちゃった僕の性格っていうものが悪かったんだ。

その証拠に……マリアさんたちは例外だろうけど、でも頼ればきつと10人に何人かくらいは助けてくれるだろうっていうのは……これまでの、今の僕としての生活でよくわかったから。

だから初めの頃こそ「なんで僕ばかりこんな目に」とかいろいろ、本当にもういろいろ考えたりして、それでめんどくさくなつて忘れようとしていたけども。

こうしてみると僕だけが、世界で僕ひとりだけがこんな特別な目に遭っているなんてありえないし、そもそもとして悲劇のヒロイ……じゃない、ヒーローみたいな感傷もあつたんだろう。

だから僕は特別ななんかじゃない、ただの普通の人間。

元男、現幼女っていうただの人間。

……なんだかおふろがやけに遅いなんて思ってたパネルを見上げてみたら、とつくに  
あつたため終わっていた。

「……入ろ」

がらんとしている洗面所で服を脱ぎはじめる。

……この服ともここでお別れ。

フード付きの大きめのパーカー。

その下の無地のシャツ。

特徴のないズボン。

この1年、外に出るときのほとんどでお世話になったこの格好。

もちろん着替えは数着用意してはあるけども、でもそれはかがりに選んでもらったものにするわけで、僕が選んだ……ずっと着ていたおかげでそろそろくたびれ色あせてきたこれは、ここに置いていく。

せつかく家を出るんだ、どうせなら洗ってあるのを……友達に選んでもらったもの  
身につけていきたいから。

ちなみにはんつはワゴンで買った安物のお気に入りに入り。

「……………」

そうして服を脱ぎ捨てた僕。

凹凸のない平べったくて細い体。

長い銀色の髪の毛を体の前に、手のひらに収まるくらいの量を抱えて後ろから持つてきて……ぐいっとおまたの前に持つて来ちゃえば胸も隠せて男か女か分からなくて、けど明らかに北国の生まれの幼い子供っていうのだけはわかる。

裸なのに色気がないどころかちゃんと食べているのかって本気で不安になっちゃうような幼子。

もつと成長して女の子らしい体つきになっていたら、お風呂のたびに罪悪感があったり、あるいはずっと不安だった生理っていう元・男としては絶対に関わりになりたくない現象に悩まされることのない、銀髪幼女。

そんな僕が鏡に映っている。

「……これが、僕」

首から下にはうぶ毛しかない、そのうぶ毛すらもほとんど透明で見えないつるつるな僕。

男だった要素なんかどっか行っちゃった僕。

これが、僕なんだ。

今の僕の頭から重く垂れている髪の毛。

蛍光灯の下で見ると間違いなく銀色に見える……けどお日様の光の下だと虹色っぽくなる、そんな不思議なもの。

色素がなくなつて細すぎるっていうのがあるんだろうね。

そんな髪の毛が前髪は乾いていれば目にかからない程度、横と後ろに流れる分はおしりに乗るくらいまで伸びている。

当然にこれは手入れをしようとしまいとそこまで伸びもしないし、逆に切ることもできない。

もつとも、気がついたら10センチ近く……冬眠から半年近くだもんなあ……伸びているんだから切れないわけじゃないんだけど、魔法さんが「その長さまでなら良いけど？」って見守っていて、どこらへんから「あ、それより短いのはダメ」って怒りだすのか分からないからなかなか切れないだけなんだけども。

だつて怖いし。

一定以上よりも短く切れないのは初めの頃にハサミが飛んではつきりしたし、明らかに邪魔なくらいまで伸びることも多分ないっていうのは1年間ほつたらかしでもそこまで長くなつてないから分かるんだ。

だつて後ろとか横はともかく、前髪は長くなれば気になるはずだもん。

うる覚えだけど人の髪の毛って1ヶ月で1センチだから1年だと12センチ。

後ろはまだ良いとして前がそれだけ伸びたら前が見えなくなっちゃうはずだし。

よく分からないけど魔法さんなのこだわりなんだろう。

僕にとってはどうでもいい……あ、いや、さよみたいに両目が隠れるくらいだといちいち顔を傾けたり髪の毛を払ったりしなきゃいけないから大変そう。

ヘアピンっていうのを使えばなんとかなるけど、そんなますます女の子っぽくなるものは避けたいし？

だからつまりは床屋……いや、さすがに今は女の子だし美容院に行ったほうがいいっていうのはわかっているけど……散髪に行く必要は、少なくとも魔法さんが前の僕に戻してくれるまではなくなっただっていうことで。

まあ自分で切るのには慣れてるから別に人に頼まなくてもいいんだけど……いや、女の子はダメなのかな。

そんなどうでもいいことを考えながら僕はお風呂に入る。

まるで……覚悟をして戦いに行く前にしてたつていう「禊」ってやつみたいに。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になった日／春 6 /

10

髪の方が伸びない。

つまり僕が——これから歳を重ねても成長できないっていう可能性が高まったって  
いうことで……だからずっと、この幼女の姿のままっていう未来が見えちゃうんだだけ  
も。

それはそれで僕にとっては都合がいい面もある。

まずもって、ある朝起きたら前の僕に戻ってるっていう可能性を捨てられる。

つまりは毎晩「いつ成人男性に戻れても良いように」って選んでたぶかぶかなパジャ  
マとか、シャツとぱんつだけな格好じゃなくても良くなったってこと。

肌がさらさらするから気持ちよかったんだけど、パジャマだとズボンはずり落ちる  
しシャツ&ぱんつだと朝寒くて目が覚めるしでなんだか微妙に良くない。

さらにはこんな幼女な体……おまたに二重の意味で生えていないから完全につるつ  
るですつきりしてるし洗いやすいし、胸だつてないから性差を気にしなくてもなんとか  
いられる状態なら僕の中の男も「まあぎりぎりセーフかな」って言ってるし。

あととは将来。

女性にとつては当たり前な、けど25年間男だった僕にとつては嫌な生理っていうのにならないから。

だって考えてみてよ……こんなところから毎月血がわんさかと出てくるなんて想像するだけで嫌だし、あれっておなかが痛くなったり気分が悪くなったり怒りっぽくなったりするらしいし、つまりは少女にならないで幼女のままのほうがいいって決まってるでしょ……？

そういうわけですっかり僕の体として使い慣れたこの体、もう鏡を見ても恥ずかしく感じることもなくて……いや、あんまりないし、恥ずかしいはずのところを見ても……まあ僕にその趣味がないからだと思うけど、僕自身の僕が持っている体の一部だとしか考えられなくて、感じられない。

もちろん僕は僕。

意識は大人の男のままなんだけども、こうして裸になってお風呂に入るときには僕自身のことを「小さな女の子の体を持つてるな」って思っていること自体は認識しているし、毎回なんとなくそう感じているのはふとしたときに自覚できる。

そういう矛盾した気持ちでもやもやすることも少なからずあるけど。

それでも僕は男だし、つるつるっていうのもあるし。



男の性っていうのは一応あるわけで、だから少しだけ、ほんの少しだけ鏡や湯船で直接見たりするときに嬉しいっていう感情が浮かんでくることは浮かんでくる。

けど、それだけだ。

軽く体を流してから踏み台を使って湯船に入って「今日くらいはいいや」って髪のごとお湯に沈むと、銀色のすごい量の髪の毛がわーって広がる。

あ、このタイルのところ。

よく見たら、びっしりとカビが。

……見なかったことにおこ……叔父さん、ごめんね……。

なんとなくいつもみたいに体を、肌をくすぐるように触って気持ちよくなる。

一応は女の子だから太ることができればそれなりに女の子らしい感じになるんだろ  
うけど、今のところはまだまだ肉をつけている最中。

だけど初めの頃から腰骨が、腰っていうものが男のときよりも横に広い気がするんだ  
けどこれはどうなんだろう。

ただの先入観なのか、それとも女の子っていうのはこの歳でもすでに骨盤っていうの  
が男よりも広いんだらうか？

なんとなく興味はあったけど結局として調べなかったくらいだからどうでもいつか  
けど。

将来。

万が一にも……前の僕に戻ることもなく女の子として成長してきたとしたら、出るどころが出てくるようになってきたとしたら。

生殖ができる体になって……そして、前の僕にはなかった性欲っていうものが出てきたら、そういうものが変わるんだろうか。

案外男に欲情……。

「うげ」

うん、しないだろう。

すごい嫌悪感だ。

具体的に言うところほろ酔いを過ぎてがぶがぶ呑んで一気に「うげえ」って来ちゃう感じ。

これで安心だね。

◇

髪の毛をシャンプーで丹念に洗う。

そして流す。

流したらトリートメントをつける。

染みこませるっていうのをする。

僕は生まれてからずっと……普通なら中学生くらいで出てくるはずのそういう感情も本能も衝動も、今に至るまでついぞ感じるものがなかった。

だから逆にそれに期待している僕自身っていうのもあるのかもしれない。

だってみんながそれに夢中になっているように見えるのに、僕にはそれがなかったから。

そんな寂しいことはないもんな。

まあそもそも好きになった相手すらいらないんだからどうでもいいんだけど。

……そんなことは体が大きくなり始めて、明らかに幼女から少女になって初めて考えればいいか。

それまではむしろ今のままっていう可能性のほうが高いんだし、考えるだけ、期待するだけ損だ。

今までとおんなじなら、それでいいんだから。

結局として去年から一センチも伸びていない身長のこともあるし、冬眠からなかなか戻らない体重のこともあるんだし。

無意識でコンディショナーを馴染ませ終わってすすいで、体も……ちやんと、体の真下についてる2つの穴まで適度に綺麗にして、これではつちりだ。

◇

「ふう……」

温かくなって汗を流して、さっぱりした。

これで今夜はお風呂に入れなくてもなんとかなりそう。

この体は汗、ほとんどかかないけど、それでもこの腰まで伸びている長い髪の毛を洗わないで寝るといふのには抵抗あるし？

「さて」

これからは忙しくなるだろうし、ずいぶんと緊張もするだろう。

最後になるだろうお気に入りのお酒のコーヒーも飲み納めと行こうかな。

……この後が控えているからだめだけど……ほら、一応僕って法律上は……成人になるのか未成年になるのかは分からないけど、多分倫理的にも道德的にもこの見た目でお酒はダメって言われるはず。

だからコーヒーで我慢だ。

「あ」

……洗濯物。

着ていた服はいいとして濡れているこのタオルたち。

「……いやいや」

どうでも良いことばかりが思い浮かぶなあ……。

どうせ帰って来られたのなら僕自身でなんとかするし、帰って来られないんだったら次に来た誰かによって処分されるんだらうからどうでもいいんだ。

「ふむ……良し」

下着だって……シャツはともかくばんつは柔らかくて白い、おまたにちようど当たる部分……クロッチが汚れやすいのが嫌いだから、普段からトイレの後にトイレットペーパーを当てているもんだから、半日ほど履いていたこれを間近で見ても汚れは見られないし特段恥ずかしいことはないはず。

今日着ているのはかがりに選んでもらった春らしいコーデというやつで、つまりは去年の今ごろに初めて選んでもらったときのもののひとつ。

「よし」

髪の毛も乾かしてきちんと整えて。

身支度は済ませ終わった。

ふと、なんとなく鏡に近づいて洗面台に身を乗り出し、じっと僕の目をのぞき込む。

「……………」

薄い色の瞳。

その周りのまつげも眉毛もまた銀色で、生えていないようにも見えるくらいの細いそれら。

そういえば人の脳みそって男性と女性でちがうって言うけど、僕の場合はどうなんだろうね。

結局に女の子らしい話題っていうものには意識しないと楽しめないくらいには男だし、普段感じる感覚としては男としての視点は残ったまま。

町に出たときなんとなく見ちゃうのだって女性だし、なんとなくで近くの女性の胸を下から見上げちゃうし、かなり視線に近いところにあるスカートの下のふとももだって気がついたら見ている僕がいる。

だから意識は男。

なんだけど、これからはどうなるんだろ？

もし成長したらそういうところが変わっていったりするのかな。

成長しちやつたとしたらどう転ぶかがわからないっていう不安感がつきまとうんだ。

そうなるとしても、できれば女性を……あくまで好きになるとしたらだけど、そういう対象が女性のままでいてくれるとありがたいところだけど。

そこは魔法さんの気分次第なんだろうな、きつと。

だって魔法さんは気分屋だもん。

まるで魔女のお供の猫みたいにさ。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になつた日／春 7／

10

冷凍してあるコーヒー豆と、お気に入りのコーヒーミルとカップ。

……コーヒーカーップだけは今のちっちゃい手で持つていても指が痛くならない、新しいのに買い換えただけども。

まああつても問題ないだろうつてことで取つておいたこれで一杯だ。

挽き立ての粉にお湯を少しかけて蒸らしはじめるといつもの香りが漂ってくる。

今日は……今は落ちついていいるからか、僕的に一番おいしくなる量のお湯で蒸らすことができていいる。

うん、最後としてはいい感じ。

……今までの情報から、魔法さんは特殊なものだつて分かつてる。

だつてねこみみ病と変異……島子さんたちのそれとマリアさんたちのそれは、おんなじような力によつて起きていいる。

科学的に説明できない不思議な力が起きてるつてことは。

けどマリアさんたちが少しだけ話してくれた……変質とも呼んでいたつて、それとね

こみみ病の生えたり身体能力が高まったり若返ったりするっていうそれらとは、どうも違う気がするんだ。

魔法さんのことは置いておくにしても手上手く表現できなくてあいまいだけど、僕の直感的なものを言葉にしてみると。

「……………」

僕が、明らかに致死量って感じの血を吐いたあとすぐにけろつとしてたのを見たマリアさんたちは、これを「反射」って言ってた。

何の反射なのかは知らないけども、マリアさんたちにとっては当たり前だって感じだったそれは、ねこみみ病の方では聞かなかった。

そもそもそんなものがあれば今ほどにはふわふわと受け入れられるっていうのはないだろうし。

「ずずず」

注ぎ終わったコーヒーをゆっくりと飲む。

……魔法さん、ねこみみ病、変異または変質というもの。

僕の直感で、少なくとも魔法さんだけはその根本が違う。

なんでは分からない。

そもそも生えちゃったり若返ったりするねこみみ病と、長期間寝ちゃったり血を吐い



ちやったりする変異とは明らかに違うもの——のはずなのに、僕の中の直感はおんなじものって言ってる。

そう感じる。

根拠なんてない。

けども僕はそう思うからそうだって思っておく。

「ずんづん」

底に残ったコーヒーを飲み込む。

最後の香りだ。

◇

僕はねこみみ病について聞いたときから……詳しく聞いていたときから、そしてマリアさんたちの話を聞いてまぜまぜして考えたときから、ずーっと気になっていたことがあるんだ。

岩本さんや島子さん、そして僕みたいに見た目が変わる現象っていうのもマリアさんたちのも、昔からあったものらしいって雰囲気。

マリアさんたちのおいとおくとして、ねこみみ病っていうのは隠すようなことじゃなくなつて、それどころかより広めようとしている。

「だったらなんでこのタイミングなんだろ」って。

島子さんたちがねこみみ病になったのは、島子さんの場合はたしか2年くらい前で、岩本さんも多分そのあたり。

で、その前から居たはずの生えちやった人たちとか……多分国とか地域ぐるみで隠してきたんだろうけど、それが隠すことができなくなるほどに爆発的に増えてきたんじゃないかって予想する。

だって僕だってその1年後になったんだもんね。

仮にそうだとするなら、僕がこうなったのだって……魔法さんが襲って来ているのだって、その流れのほんの一部。

ならなんでそのくらいおのときに今みたいにしてなかったんだらうって。

まだ隠せるって感じだったのかな。

去年の夏の終わりから急に、それも全世界で一斉に報道され始めて、どこでも岩本さんたちとおんなじように特別にかわいかったりかっこよかったりする人が広告塔として祭り上げられているんだ。

それは、ごくたまに見た目が変わる人がいるっていう昔とは明らかに異質。

本当、何が起きてるんだらうね。

そういうのも「そっち側」に行ったら教えてくれるんだらうか。

そう思うとちよっとだけ気が楽になる。

◇

うん。

今日もいい天気だ。

春らしい、いい天気。

去年の今ごろからしばらく遠のいていて、けど最近また感じられるようになった、春っぽい風が家に入ってくる。

僕の銀色の髪の毛を、ふわりとなびかせる。

風が吹くたびに髪の毛がふわっと浮いて、止むたびにぱさっと落ちてくる。

その繰り返し。

……さてさて。

「魔法さん」

そのへんにいるのかな？

「……………」

当然ながらに返事はない。

それとも遠隔で魔法をかけ続けていて、なにかがあるたびに急いで戻ってくるタイプなのかな。

かけたらかけつきりな「いわゆる魔法」っていうやつで、やっぱり意志とかはないの

かな。

つまりはただの現象なのかな。

僕としては何かにずっと傍にいられるなんてストーリーカーを通り越したなにかだから、できればただの現象であってほしいし、意思があつたとしても基本はどっかに行つてくれている方がありがたいんだけど。

「……いたい……」

ひととき爽やかな風が吹いてきたつて思つたら目がちくつてした。

なんでこんなときに……まさか魔法さんの仕業？

「ないない……でもいたい……」

涙が出るからくしくして目じりを拭つていたら楽になる。

ゴミか何かが涙と一緒に流れたらしい。

すぐに出てくれてよかつたけど、これじやまるで僕が感傷で泣いちやつたみたいじゃない……なんか恥ずかしい。

けど、魔法さんのこれ。

僕が幼女になつちやつた、これ。

これは冷静に考えると大したことじゃない。

いや、大したことではあるんだけどもこういうのつて確率だからだ。

そもそもがねこみみ病とかになるのだから何千分の一、何万分の一……それ以下の確率はなはず。

多めに見積もってもそうなんだから僕の場合にはもつとなんだ。

ただサイコロを振ってたまたま1とかが連続で出ちやうつていうすつごく珍しい確率が起きたつてだけ。

確率つていうのは大きい目で見れば収束するけど、一部分を切り取ると思いつきりぶれるときがあるつていうのをどこかで読んだし、僕はただ魔法さんに目を付けられた。

ただ、それだけ。

なのに僕は必要以上に怖がつて1年もここに居た。

他の人つていうものを信用してこなかったからこそ、家族がいらないとはいってもそれ以外の誰にも相談すらしなくつて。

「助けて」つて、ただそれだけを誰かに言えていれば。

ほとんどの人は「お嬢ちゃん、悪戯はほどほどにね？」だろうけども……ひとりくらは僕のことを助けてくれていたはずなんだ。

そういう人たち、繋がりのある人たちに頼つたりしないで、ただひとりで家に内に引きこもつて頭の中でぐるぐるぐるぐる考え続けて。

ただの僕の中で……情報も少ない、そもそもが独りよがりて悪い方向へと考えるクセ

があるって知っているのに僕ひとりの頭の中だけで全てを完結しちゃって……そんな僕が頭の中だけで生み出した、より悲惨な未来っていうのに怯えきって。

今までの15年と同じようにただただひとり引きこもって、隠れていたんだ。

……まあ、こうして情報も経験もそろっている今だからこそ言えることではあるんだけども、それでもそう思わずにはいられない。

きつと僕がこのことを話すときにはものすごくもどかしく思われるんだろうな。

「なんでもっと早く誰かに言わなかったんだ」って。

「なんで叔父さんとかお隣さんみたいに昔から知ってる人を頼らなかったんだ」って。

でも、これが僕なんだ。

僕だったんだからしょうがない。

「……………よし」

僕は、廊下へ向かう。

見えてくるのは、とうとうに一切の手を加えないままになっちゃった……もちろん手とか掃除機とかで細かい木くずとかは片づけたけど……ひしゃげている壁と、もこもこしているときの僕くらいの大きさのクレーター状に、まん丸に凹んでばらばらになっている床。

ちゃんと気をつけていさえすればそこに足を滑らせて痛い思いをすることもないか

らつて、とうとうに放置しっぱなしのそこを見ながら手すりに掴まつて、1段1段、1歩1歩と階段を上る。

こうして毎段ごとに脚を高く上げないといけなくつて、危ないからつて両腕でしつかりと手すりにも掴まらなきやいけない、僕の家……少し急めの階段を上るのも、これで最後。

2階へと上がつて廊下を歩いて、僕が僕を、前の僕が今の僕を初めて見た鏡の前を通り過ぎて。

銀色の、体に対しては明らかに長すぎるだろうつてしか思えない髪の毛が後ろに少し浮いていて、体は頭に対して小さくつて、がりがりで凹凸がなくなつて。

そんな僕を、去年かがりに選んでもらつた女の子らしい格好。

「こんな風にして着れば町にいる普通の女の子として見てもらえるわ？」つて言われるままにセットで買つて、後で「やっぱりこれはかわいい系の服装だったんだな……」つていう、わりとふりふりのシャツに羽織りもの、その下にはひぎ上のスカートにタイツつていう、もう慣れきつた格好になつた僕を見る。

……うん。

今日も幼女な僕は立派に女の子している。

## 49話 「あの日」と、彼が、「響」になつた日／春 10

## ／10（終）

僕の部屋。

居心地が良かった——良すぎた僕の部屋。

物心ついてからこの歳になるまでずっと、世界で一番安心できる場所だった。

そんな僕の部屋は、僕の部屋だった場所へと変わっている。

もう無駄に集めていた本がなくて、本棚は下のほうにほんの少しだけの捨てられないものだけ。

床に落ちていているものも踏み台以外にひとつもなくって、あちこちに置いたり壁に掛けていたりしたものもみんななくなっていて。

クローゼットの中もほとんど空っぽ、掃除も隅まで背の届く範囲で終わらせてあって、ベッドだつてもうシーツすら敷いていない。

机の上も乗っているモニターとか以外には日記帳とペン、ただそれだけだ。

寂しいと言えば寂しい。

けどいつかは……大半の人はこの歳になつたなら働くために、あるいは新しい家族と



一緒になるために出ていくものなんだ。

まあ今って僕みたいにずっとつてのもそれなりにいるらしいけども、基本的に自分の部屋つてのは、自分の家つてのはいつか出ていくもの。

その未来が、ようやくに現在になった。

遅すぎたけど、でも、ようやくに来たんだ。

ただ、それだけなんだ。

「よつと」

机から取り出したのは日記帳。

ついついのサボり癖のせいで昔からちよつと書いては何ヶ月後になるそれを、それなりにがんばって書いた去年からの1年分のいろいろが書いてあるそれ。

日によっては眠かったりだるかったりペンの握り加減がイマイチだったりして安定しない筆跡。

コーヒーとかお酒をこぼしたりしてちよつと汚れてるページとかもある。

こういうのって、裁判とかじゃ客観的な証拠になるって聞く。

だから、少なくとも僕が狂言を言っている幼い女の子だっと思われないうに……最低でも1年間は今みたいなのが起きていて、起こる前は大したことをしていない男だったって言う証拠として持つていく。

他に持っていくものはもう、なにひとつない。

この家の中でどうしても必要なものはリュックに収まるだけ……あ、玄関にあるゆりかたちからのプレゼントもあつたつけ。

とにかく、それだけなんだ。

こんなに広い部屋で、こんなに広い家で本当に必要なのは……僕にとつて本当に必要だったものは、この腕に抱えているものとそれらだけ。

「……む」

……あの朝、この体になって最初に見た時計はあのとときと同じ、ちょうど3時を指している。

偶然、あるいはデジャヴ。

こういうのって良くあるよね。

3時。

それも、ちょうどびつたりの。

普段見たとしても「そろそろお昼寝の時間かー」くらいにしか思わないけど今日は眠くなっていないし、なんだか不思議。

こんなことをかがりに言ったりしたら「きつと運命だわ！」なんて言いそうだけど、僕も少しだけ……今は、そう思わなくもない。

いくら寝坊したってそこまでは眠れないだろうっていうこの時間まで寝ていた僕は、あの日のあの朝／昼下がりを目を覚ました。

目を覚まして、まずは……ああそうだ、メガネをかけなくても壁に掛かっている時計の針がくつきりと見えて、部屋の中が見渡せて、近視と乱視が治ったってびつくりしたのが、3時ぴったりってこの時間だ。

ただの偶然だろうとはわかっている。

わかっているけど……予定にはなかった、途中で車を降りての散歩とか飛川さんとの立ち話とかお風呂の時間……こういったものを終えたあとで部屋に入ってきて日記を書いて、それでなんとなくで見上げてみたら3時ちようど。

……確かに運命だつてはしやぐ気持ち、今ならちよつとだけ分かる気がする。

そういうえば日付だつてあの日からちようど1年くらいだしな。

……3時1分。

そういえば……前の僕から今の僕になる前は、その直前は変わらずに退屈で無駄な日々を満喫していたもんだからそんなに日付なんか気にしていなくて、ときどきゴミ捨ての曜日を間違えちゃうくらいに曜日感覚まで薄れていた。

気がつけば1日が、1週間が、1月が、1つの季節が……1年が過ぎていてって感じが違ったから。

ニートなんてそんなもんだらうけども。

だからもしかしたらあのときだって、あの日のあの朝……お昼をとくに過ぎていたけど僕の感覚的には朝だ……の眠る前っていうのは、ひよつとしたら数時間じゃなくって1日とか2日とか、あるいはそれ以上の期間……それこそ冬眠みたいに寝ていたのかもしれない。

だって身長も体重も年齢も半分以下、しかも見た目は全て作り替えられていて、これで記憶まで失っていたらどうしようもないくらいだったんだ。

魔法さんがその時間を使って僕の体を変身させていたのかもしれないんだから。今となつてはそれを確かめる術はない。

一緒に住む家族も、意味のない会話をする友達も居なかったから。

——そうだとしたら、あの日を迎える前に前の僕は1回死んで。

あの日を迎えて、今の僕へと生き返った／生まれ変わった。

そうなのかもしれない。

そうじゃないかもしれない。

いや……きつとそうなんだろう。

そう思うし感じる。

3時……5分。

感傷に浸っているヒマはないよね。

ぐずぐずしてたら決心が鈍ってまた明日にしちゃう。

スマホを取り出した僕は数分かけて……最後になるかもしれない、みんなから来てい  
るメッセージに「とりあえず今日はこれで最後」って返事をしておいて。

「……ふう」

指の先がじんわりしている。

そうして僕は少しだけためらった後に——「その番号」を押した。

その電話は岩本さんからこつそりと聞いておいた——「ねこみみ病」専用の、直通的  
番号。

直通だけあって、ほんの2、3秒でがちやつと繋がって。

『——はい、こちらは通称「ねこみみ病」または「NEKO」の緊急相談窓口です』

『この番号は、ご家族の方、またはお知り合いの方、あるいはご本人さまがこれらに該当  
し、かつ緊急性のあると思われる事態である場合に紹介されるものとなっております、それ  
以外の方は別の番号で対応させて頂いております』

『なおお電話口でのご相談を受け、緊急性が低いと判断された場合にはご紹介の有無に  
かかわらず、別の窓口を紹介させて頂くこととなっております。どうかご了承くださ  
い』

『——このお電話は、緊急、差し迫っている方についてのご相談、あるいは救助要請で間違いないでしょうか?』

僕はもう、止まったままじゃない。

僕は、前の僕から今の僕に、生き返った／生まれ変わったんだ。

そう思ったら緊張してばくばくしていた心臓も落ちついてきて、体の火照りも収まってきた……もうひと息ついてから答える。

僕は、元の体での15年という時間を、この体でのたった1年ぼっちの時間で乗り越えたんだから。

きつと、大丈夫。

またいつか、あの子たちにも会える。

「緊急ではないかもしれませんが、多分すぐに診てもらってどうすればいいか聞かないといけないものだと思います」

『……お声からするとお若い方とお見受けしますが……若返りでしょうか。なるほど、10代の方で数年でしたら……それともご自身、あるいは周りの方にとつて嫌悪感のある生きものへのケモノ化でしょうか。それとも……』

電話口の女の人の声が厳しいものになっていく。

……そっか、子供だと確かにお急ぎだし、生えちやったものが苦手な動物のだったり

してもなんか拒否反応出そうだよね。

猫アレルギーでねこみ生えちゃったとか？

——だけど僕は違う。

「いえ、そのどれでもありません。僕は——恐らくはねこみ病ではあると思います。

それで多分、いえ、きつとまだ数が少ないか、あるいは未確認のものかもしれないです」

『未確認……ええと？』

悪戯と思われぬように、冷静に。

いつも通りに考えて置いた文章を読み上げる。

「僕は、体の全部が変わりました。黒い髪と黒い瞳から薄い色の髪と目になって、顔も完全に変わりました。完全に別人なんです」

『……えっ？ え、ちよつと待ってください、そんなことが』

「年齢も15くらい……いえ、多分もつと幼くなっています」

『じゅっ……わ、分かりました、それではすぐに』

「もうひとつだけあるんです。——ねこみ病ではあり得ないって言われている性別

も、変わりました」

「つまりは男から女の子へと——完全な別人に」

『……………ふえ?』

相手の人の声の感じから「多分僕みたいなのは初めなんだろうなあ」って思う。

「僕ひとりでは何もできそうにありません。なので保護をお願いします」

『……………』

……………あれ?

返事がない。

もしかして切られた?

え?!

嘘?!

僕、こんなに本気で電話してるのに?

「あの……………?」

『ひやつ、あ、はひつ、大丈夫です!』

大丈夫そうじゃない女の人が返事を返してくる……………大丈夫かなこの人。

『……………じよ、冗談……………ではありませんよね、もちろん……………ちよ、ちよつと待っていてください

い今詳しい者に訪ねてつてきやあ!』

なにかが……………音的にガラスだからコップかな、それが遠くで割れた音が聞こえてく

る。



……意を決して出向いた先で拍子抜けの対応。

これもまた、去年経験済みだ。

僕は静かに待つ。

「大丈夫ですか？」

『はいいい私は大丈夫ですつ、すみませんすぐに繋がりますのでえー！』

「急いではないので大丈夫です。僕がこうなったのは……ねこみみ病になった日からはもう1年経っているんです」

『いち、ねん……あ、はい、わかりました、ゆっくりとです、ゆっくりと……はい、繋がれたまま急ぎ係の者をご自宅へ向かわせますので、ご事情を詳しく伺えますか？ 早ければ30分ほどで着くと思います』

あ、事情聞く前にもう来るんだ……じゃあ今の僕のを一応は信じてもらえて、しかもあつちからしても急ぐ必要があるってことなんだね。

『それが本当なら……失礼しました、もちろん本当ですよ。あなたのことは最優先で保護しますから安心してくださいね！ 大丈夫ですから！』

……この先は聞かれるのに任せて答えていればよさそう。

そう思ったら力が抜けて……緊張が抜けて、ぽふっとシーツのないベッドにおしりを落とした。

この1年で慣れたようにスカートをももに張り付かせながら座るっていうことをしなかったから、直の感触でふとももの裏がざらざらするけど別にいいや。

だって電話が終わったらきつと……荷物をまとめたあたりでお迎えが来るんだろうしな。

……お迎えってそういう意味じゃなくって、普通のお迎えだ。

『あ、先に〆住所をお願いできますか?』

「はい、住所は——」

そうして僕は……一番嫌がって、いや、恐れていた、国、国家権力というものに僕自身の経緯や住所、そして名前を伝えて、長い長いひとりぼっちのニート生活から、引きこもっていたこの家から、この部屋から——出ることにしたんだ。

だからようやくに——15年も経って、幼女にもなってようやく僕は、本当の意味で引きこもりなニートから抜け出したんだ。

銀髪幼女になって1年経って。

……笑っちゃうくらいののろま。

だけど、これが僕なんだ。

きつと何回やり直したとしても多分同じになるだけ。

『大丈夫ですからね! すぐに慣れてる者たちがそちらに……』

びつくりするほど落ち着いている僕。  
遠回りしたからかも。

そう考えると1年ものたのたしていたのも悪くないって思う。

僕は——ようやく、ちよつとだけ大人になったんだろう。

多分、父さんと母さんが居なくなつた中学生から高校生くらいには、  
見た目幼女だけど高校生だつて言い張る幼女つていう感じには、ね。

# 50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1 / 2

緊張するとトイレが近くなる。

知識としては知っていたけど、実際に女の子の体になって実感した女の子の、女性の生理現象。

さらに言えば僕は幼女。

膀胱だつてさらに小さいし、我慢するための筋肉だつてさらに貧弱だ。

この1年で……厳密には半年と少しですっかり慣れてはいるけど自然の摂理には逆らえない。

油断は禁物。

まだ失敗してないからこそだ。

そういうわけで電話が終わってほっとする間もなく、いつものように急な尿意に襲われてトイレに急いで派手な音を立てて……楽になってほっとして。

それで荷物をまとめようとして、ゆりかの本がかなり多かったからリュックひとつに

収まらなくなつて、どうにかそれをリュックと紙袋ひとつにうまく詰め込んでほつとしたところで――。

「ぴんぼーん」

……スマホを見てみる。

通話が終わつてから、10分と少し。

思つていたよりも早いっていうか……早すぎない？

すぐに来るとは言つていたけど、でも……本当にお役所の人？

なんか盗聴とかされてて変な勢力から襲われたりしてない？

ほら、若返りで性別が変わつたつて言つたし……。

……ちよつとどころじゃなく不安だけでも……出よう。

ここでもたもたしててもしょうがないもん。

廊下に出てドアを見る。

今の僕の背じゃドアの上の……なんであんなに高いところか作らないんだらうね……のぞき穴からはドアの向こうが見えない。

インターホンも相手がちよつとでも横にずれると顔が見えなかつたりするし、何人か居ても分からない。

なんとなくさらに不安になった僕は小走りで廊下を走り抜けて2回3回と鳴る音に

焦らされつつ、もう戻らないと思っていたはずの2階の僕の部屋へと戻って、踏み台とイスを経由して机の上によじ登って……息が荒くなっただけ、それにも構わずに家の前を見下ろす。

……髪の毛を手で踏んだ、痛い。

「……………」

外に止まっているのは、普通の車1台だけ。

立っているのは……スーツを着た男女だけ。

角度的に上半身は見えない。

髪の毛をばさばさと振り回しながら左右も奥も確認したけど、見える範囲にはパトカーとかお巡りさんとか……護送車とか銃を持った人とか、そういう物騒なものは見当たらない。

逆光かつ真上からだからよく見えないけども玄関のドアの前で立っているらしい、どこでも見かけるようなスーツの人たちがきつと、呼ばれてきた人たちなんだろう。

……うん、大丈夫だっと思おう。

早いつて言うのも悪いことじゃないもんね。

きつと近くに居たとかなんとかあるんだろう。

そう思っつて心臓のばくばくを抑える。

転ばないようにゆっくりと降りて玄関まで進んで電気をつけると、チャイムの音……  
5秒に1回くらいにまで早まっていたそれが止まった。

……正直に言つて怖かったんだけど？

ほら、その音だんだん早くなつてたし。

なんでそんなにぴんぴんぴんぴんと鳴らすんだらうか。

いやまあ返事をしなかつた僕も悪いけど……きつと「大変なことだから！」つてあつちも焦つてるんだらうつて思つておく。

でも、このドア1枚隔てた先にいる人たちがどんな人たちなのか——僕は開けないと分らない。

開けたらすぐに銃を構えられたり拘束されたり、何人もどこどこか入ってきたりは……しないしない、いい加減に過剰反応は止めにならないと。

それで1年も無駄……じゃなかつたけど、でも遅れたんだから。

……じゃあ。

「ふう」

息を吐いて決心して、腕とつま先を上げて……これもまた無意識で心配だつたんだらうな、チェーンも外して。

鍵を回して、ドアを外に開いた。

「……………えっ」

僕はびっくりした。

目の前の人たち……目線は大分上だけでも……すつごくびっくりしてる。

……見間違いとか思い込み……じゃない、よね？

玄関先に——ドアから少し離れたところに立っていた人は男女のペア。

背の高い男の人と、ハイヒールを履いても男の人と比べるとずいぶん小さく見えちゃう女の人。

——男の人は前の僕と同じくらいの年ごろで、顔も体もいかつくって、でも実は背の低い子供——僕みたいな子相手でもきちんと膝をつけて目線を合わせて話す人だって、優しい人だって。

優しすぎるせいか暴走した女の人の勢いを止められない人だっていうのを、僕はよく知っていて。

——女の人は前の僕よりも幼く……若くって、男の人と同じように普通のスーツを着ていて、それで後ろの髪の毛を——今日は、僕から見て右側にちよつとだけ垂らしている。

「勘」ってやつさえなければ普通におはなしできる人なのかもしれないっていうのを知っていて。



……そっか。

そういえばそうだったよね、この人たち。

だって関係者だもんね……「ねこみみ病」の。

しばらく口を開けてぼけーっとしてた僕の前の2人はというと……ちようど日陰になって僕が見えづらいらしくって、しかもカバンから書類とか首から提げた顔写真入りの身分証とかを出しているタイミングだったらしくって、僕のほうをちらちらとしか見ていない様子。

慌てた様子なのはきつと、僕が予想以上にちっちゃかったんだらう。

電話で教えた僕の情報からは普通の成人男性としか思えないもんね。

先に用意し終わった大きな男の人——萩村さんが腰を低くして、僕の目線に合わせるようにしてから初めて僕と目を合わせて話し始めようとして。

「初めまして。私は『通称ねこみみ病』対策本部所属、萩村と申します。この度は大変な思いをされて、……………」

そのままお口が開いたまま、僕と同じように止まった彼。

まじまじと……きつと、傾きはじめた陽の光で明るいの慣れていたんだらう彼の目が僕の目を、姿を、ようやくに認めて。

あ、そういえば今の僕は……みんなと会ったときはズボンの上にはパーカーっていう

格好をしていたけど、今はふわふわのシャツにスカートっていう格好。

それに、いつも隠していた髪の毛を……彼にはたぶん初めてのお披露目だったはず……そのまま出しているんだもんな。

そりゃあ気がつくのにも遅れるっていうものだろう。

でもこの至近距離で顔を見たら僕って分かったらしい。

ちよつと隣を見てみたら女の人——今井さんの方もまた、ぼけーつと固まっているし。

もちろんお口も開いていて……なぜか顔は真っ赤になっているけど。

女の人だし、やっぱり小さいのが好きなんだろうか。

「……あなたは、響、さん。私の知っている……お世話になっていきます響さん……なのです、か？」

なんとか復帰したらしい彼に向き直って、僕は言う。

「はい。今朝方振りですね、萩村さん」

「……本当に、響さんが……」

「あ、そういうえば電話では名字で対応してもらってしまいましたし……電話口の方が『今はそれだけでいい』っておっしゃっていたので。……表札も名字だけですし、しかもこつ

ちの、女の子としての格好をお見せするのは初めてですね」

袖をふりふりとして、髪の毛を手で掬って見せてみる。

ついでにすーすーする、スカートも。

知らないお役人の人か、あるいは警察の人とかが来るのかって思っていたら知っている人だった喜び。

僕の口も普段より少しだけ軽くなったみたい。

「……え、響さん……響さんが、その」

「あ、ち、ちよつと萩村さんっ」

名札とクリアファイルを両手に固まっている萩村さんを押しのけるようにして……あ、復活したんだ……今井さんが僕をかばうようにしてお尻を向けてくる。

「！」

僕は慌てて1歩、2歩下がる。

……身長差だもんね、しょうがないよね。

けどこんな状況で彼女のお尻に押されて転んだりもしちゃったら、すつごく申し訳ないし？

「お相手はこんなに小さな女の子……になられてしまっているんですから、離れてください、驚かせてしまうじゃないですかっ！ ほらほら、もつと離れて離れて！」

ん？

あれ？

……ああ、僕のことまだ気がついていないのか。

今井さんが僕を萩村さんからかばうっていういつもの真逆の展開に脳がエラーを起こしそうになる。

「え、ええつとですぬ今井さん、その方は」

「聞き取りよると症状は深刻なんです！　ねこみみ病の『たくさん重なる』っていう新しい症状の可能性があるから、冷静でなくって錯乱している可能性もあるからって！　成人の男性の方がこんなに小さく可愛くなってしまうんです！」

あれ、僕冷静に対応したはずなんだけどな……伝わってない？

「だから顔も怖くて体も大きくて怖くてとにかく威圧感のある萩村さんじゃなくって、先に私が話をした方が良いって！」

ああ、それは萩村さんの知り合いみんなの意見だったんだ……かわいそうに、いい人なのに……多分今井さんよりも。

「だから私が話しますから離れて離れて！　……ごめんなさいね、怖い思いをさせてしまっています」

「いえ」

いつ気が付くのかなあ。

あれ、でもさつき僕を見てフリーズしてたような……あ、顔、見えてなかった？

それとも髪型も服装も変わっちゃってるから僕だつて気づいてない？

……そうっぽい。

「もう大丈夫ですからね、安心してください。私たちが、こういうことに慣れている私たちが来ましたから。それでですね、えつと……あれ？」

「今井さん、どうも。今朝方振りです」

しゃがんできて肩に手を置いて一気に話し始める彼女をぼんやり見ながら話を聞いているうちに……ようやく気が付いたらしい。

なんかちよつと笑つちやいそうになりながらもご挨拶。

顔がちよつと赤くなつていてびっくりしてるついでに今井さんのこんな顔初めて見たけど、なんだかお得な気持ち。

「え……あの……響さん、ですか？」

「はい。去年の今ごろ……いえ、あれはもう少し後でしたね。勧誘されたりした響

です」

ついでに言えば、今日になつてもいつも通りの勧誘メールが来ていたけども。

病気で入院するつて言ってるのに退院した後のスケジュールとか勝手に提案されていたし……この人は本当に、もう。

「……本当、です……この瞳、この髪の毛、このお肌……響さん!」  
「はい、本人ですね」

ついでにこの突っ走る感じは間違いなく今井さんですね。

「じゃあやつぱりさつき電話を受けて車に乗り込んだときに感じた『勘』ってば、また合ってた……?」

なにそれこわい……何で僕と会う前にそれ反応するの?

やつぱり魔法さんのもの?

……けど。

だけど、そういうのをよく知っているからこそ僕は。

「萩村さん、今井さん」

いつの間にか髪の毛をさわさわしてきていた今井さんから数歩退いて、2人と目を合わせる。

「……あなたたちで、よかったです」

本当に。

「さつきまでは……ドアを開けるまではどんな人たちが来るのかって、どんな扱いを受けるのかって、実は心配だったんです。けど、よく知っているあなたたちの顔を見て

……安心したんです」

「響さん……」

2人の後ろにある車は……これだけ早くに来たんだから、きつといつもの事務所関係のお仕事の出先からのもの。

この近くを通りかかったところで電話を受けて来たんだらう。

もともとねこみみ病関係のお仕事だしな、こうしていちばん近い位置にいた2人が呼ばれたっておかしくはない。

車だつて目立たないごく普通のものだし前に見かけたときみたいな護衛の人たちもいない。

けど、これだつて偶然で。

——偶然とは、得てして重なるもの。

それを僕は、この1年でたくさん経験した。

「……今までこのことを隠していて、申し訳ありませんでした」

「……いえ、事の重大さを考えたら当然です」

「そうですよ、今だつて上は大騒ぎでしつちやかめつちやかで」

ああ、やつぱりそうなるんだね……つて言うことはやつぱりこれは、よつぽどレア。

——だけでも、「いつか来るつて想定はされていた」ものなんだ。

「でも、おふたりが一緒にいてくれるのなら安心できます。ああ、そうです。今井さ

んの勘の通りに……これからもきつと、長いお付き合いになるんでしよう。だから」  
滅多に僕自身の顔を、表情を意識しない僕だつてこれだけの期間——1年ものあいだ  
女の子たちに囲まれていれば、自然と簡単な笑顔くらいは作れるようになってい  
るんだ。

だから、精いっぱい笑顔を作つてみせる。

「——これからもどうぞ、よろしくお願いします。 何回も伝えたように、注目されるの  
は苦手なのでアイドルとかにはなりませんけどね。 今井さん、萩村さん」

そう口にしてペこりとあいさつをすると……前に落ちる髪の毛の感覚と一緒に、ふ  
わつと吹いた風が春の——あつたかなくて気持ちよくて、それでいい匂いの風が、僕  
を……ひと撫でしていった。



50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう  
1. 1-1. 8/2

☆☆☆

その存在が確認されてからはずっと、外出時にはパーカーとズボンで姿を隠しつつ歩き回っていた「彼」。

つい1時間ほど前に隣の家の、飛川家の妻との立ち話をしていたときまではその格好だったが、それを経てからずっと家の中にいた「彼女」——もとい「彼」は、彼女たちが着飾りたいと思っていた通りの服装になっている。

「安全のために用意した車でそのまま帰宅する」という予定を変えたらしく……衝動的な予定の変更は彼らしくもないが、きつとそれはこの先のことを思つての感傷にでも浸っていたのだろうと推測できる……ともかくも彼の体格、少女とも呼べないほどに小さい彼の足では結構な運動量だったはずの数十分を経て戻ってきた彼は、先ほど会つていた少女からの贈りものであるマフラーを大切そうになびかせつつ別の贈りもの……

紙袋の中の本だと報告を受けている、それを重そうに振りながら歩いて家へ戻った。

しかし「彼」は、家の中で休んでいただろう彼は——「彼女」としてドアを開け、出てきた。

このときばかりは、普段は顔色ひとつ変えることもなく……いや、保護している子供たちと戯れているときや「彼」の病室を訪れる前後には相当に破顔していたが……「彼女」としての姿をした彼を眺め、「孫にしたい理想の彼」と言う幼くも大切な存在を見てしまった壮年の男と女。

男は愛娘や孫を見るときよりも、他の誰を相手しているときよりもふやけた顔になり、女に至ってはその姿を目に入れてからはしばらく静かに震えていた。

薄い色のシャツの上にカーディガンを羽織り……羽織りものはともかくとしてシャツはどうみても女性もの、子供向けでありながらも清楚なもので、下にはいつもの細身のズボンではなくスカート。

2人して声を上げてしまうほど驚くくらいには、普段の彼からは想像できない格好をしていたから。

男と女が彼——響を監視し始めてから今まで一回たりともこのような出で立ちをしただことはなかっただけに、その破壊力はすさまじいものだった。

しかもあれだけ外では隠したがっていた髪の毛……その美しい、彼女らの故郷でもそ

んな色合いのものは見たことがないような髪を出して、特に結ったりすることもなくただストレートに下ろしているだけの、美しい髪を出している。

その髪と服とで、彼と彼女の感情は激しく動いた。

ついでに何人もの兵士たちが同時に彼を見たが、やはり誰しもが驚きに思わずという感じでスコープから目を離して顔を上げ、互いに信じられないという顔を確かめ合い、軽口を叩こうとして……理性を保っていた彼からの一喝で慌てて監視に戻った。

そして今、彼女の格好をした彼——響は「彼女たちの物にしたい響という少女」は、憎き組織の手下と対峙している。

が、憎いというのは彼女たちの感傷であって響にとつてはそうではなく、むしろ仲の良い……信頼できる相手であるのは周知されているし、なによりもその表情を見たらはつきりとわかるもの。

それはこれまでの報告で何度となく来ていて……もつとも彼は相対している2人のうちの女性の方には少々以上の苦手意識を持っているようではあるのだが、それは「女性との縁が少なかった彼の男性としての人生」によるものだと解釈された。

だから突発的な事態が起きようとも、響と対峙している2人は負傷させずに捕獲するようにという指示まで出していた。

ともかく彼、響はそのうちの1人——名前は萩村茂紀、「ねこみみ病」対策本部などと

いう実に馬鹿げた部署に、芸能事務所という隠れ蓑を背にした宿敵の犬どもに所属している彼に話しかけている。

聞くところによると、響は彼に、萩村という男に對しては、接觸機会こそ少ないものの頻度としては友人に對する物と同等以上で笑顔を見せるといふ。

元の年齢も近く、なによりも元の性別が同じだからであろうとは既に出ている結論だが、それでも監視員にとつては警戒すべき相手として映っている。

もちろん響の精神的な健康のためには彼との交流を妨げてはならないのではあるが、それはともかくとして一応は女性の体を持つことになっている響に近づく成人男性だ、それに訓練も受けている人間でもあるし警戒は怠ることができないのだから。

そのうちに萩村を押しつけるようにして響に近づいたのは、もう一人の女性。萩村とはほぼ同じ役割を持つ、今井ちおりだ。

彼女の専門は何でも屋、そしてスカウト——「両方の」だが、彼女の方はたいした脅威とは映っていない。

所詮は新卒で仕事を得られず望んではいない形で入り、巻き込まれた形で萩村の手伝いもしているという彼女。

少女の枠を未だに出していない小娘であり、なによりもごく一般的な女性としか形容のしようがない人間。

たとえ方が一があつたとしても「響」にとつては、元男性の響にとつては悪いことではないだろうし、なによりもそれを望んでいる人員……派閥が存在する。

もつとも彼にとつては、先日にも告白という物を——そのあまりの幼さと稚拙さと甘酸っぱさに悶絶し、狂わんばかりにその音声を繰り返し再生していた者が複数いたらしいが——彼のためにした彼女らがふさわしいと思う者が大半とのアンケート結果だ。

少女たちからの告白を受けた響の、その見た目に反してあまりにも紳士的で理想的な返事だつたことがトドメだつたようだが。

ギャップというものは、かくも人の心を射止める。

それも男性から少女になつた彼女だからこそその魅力。

ともかくも肉体年齢的には彼女たち……ややくしいため中学生たちと呼ぼう……の方が相応しい一方で、精神年齢的にはどう考えてもあの知性からして同年代の、社会経験を積んだそこの同世代よりもひとつ以上に飛び抜けている響というアイドル。

今そこで響の美しくて貴重で宝物である髪を雑に触っているため一斉に殺意が注がれることとなつている今井や、あるいは広報としてのマスコットとして活躍させられている岩本ひかり、島子みさきなどの方が相応しいだろうか？

いずれにしても相手を選ぶのは響自身なのであるから、それを連日カップリングとい

うものを議論している者たちには冷たい目が注がれているが、しかしながら響を監視している誰もが……なんとなくでも、相応しい相手を吟味しているのは確か。

これらの一般人の域を出ないただの小娘どもよりもっと相応しい……知性的にも容姿的にも、そして属する世界的にも……相手はごまんといふのだから、さつさとちららと引き合わせたといふのが全員の一致を見ているのだが、今のところは彼自身の自由意志を尊重している——らしい。

なぜなら響もまた、彼らの一員——それも、仲間となつたのなら間違ひなく上に立つ存在なのだから。

響自身は知らないままに多くの人間が……すでに彼の未来というものを楽しみに行っているというのはあまりにも情報が非対称だが、現時点では仕方のないこと。

……響の将来の相手はともかくとして話はまとまつたらしく、動きが見えたため馬鹿げた話をしようとしていた監視員たちも一斉にその動向を注視する。

響は「ねこみみ病」などという無意味な——いや、これは彼自身が選んだことなのでから無意味とは失礼か……ならば彼の所属する正当な国家というものにその身を委ねることに、合意したらしい。

病院を辞してからは何週間もかけて熱心にゴミを出していた様子、それと今出てきた彼がリュックサックと紙袋ひとつだけ……直前で渡されたというマフラーも身につけ

ているか、彼らしい……しか持たずに車に乗り込んだところを見ると、本気で身辺整理をし、覚悟をして家を出たのだろう。

——彼の両親が■■■■で亡くなってから心的外傷後ストレス障害、PTSDというものに精神と肉体を侵されて以降は長く独りでいたという過去を持つ彼が、意を決して変わったのだ。

それ自体は祝福せねばならない。

永く独りでいて……誰からの支援も得られずにいた彼が。

突然に両親の……あまりの姿を見せられたというPTSDを抱えている以上、誰か……医師、親戚、教師など、彼の身近にいた誰かが半ば強引にでもしなければならなかったはずの支援というものを一切に受けられていなかった彼が……今の姿になり、自力で悟り、そしてそれを振り切って未来を選んだのだから。

彼を一方的に知る全員が、彼の門出自体は祝福している。

彼の意志に対しては祝福、している。

しかし。

「……やれやれ。やはりというか分かっていた結末ではあるのだが……それでも君はそちら側へと行ってしまったのだな」

「今さらかい？ 随分前からこうなるとはわかっていただろうが、爺」

スコープ越しではなく、眼帯を取ったその目で直接に——百メートル単位で離れている彼らを見てため息をつく男性、イワンと名乗った彼と、彼のぼやきを聞き流す……彼女の方は双眼鏡越しに眺めている、マリアと名乗った彼女。

彼らは高層ビルの1室から、彼らの部下とは別行動。

数人は手元に置いていて今し方一喝されたところだが……響の旅立ちを見守り、警戒していた。

「それはもちろんだがな。　だがな響、君の性格からしてそうなるとは思っていた。

思っついのはしたのだが、いざこうして目の当たりにすると……そうだな。　息子が、いや、孫が……いやいやそれも違うか。『その程度のものなどよりも』大切な存在が間違ったところへ行つてしまった。　そう感じてならない。　とても残念だよ」

「いい加減にその目越しに話しかけるのを止める爺。　なにが君だ……耳障りだぞ。

鳥肌が立つ」

全員が車に乗り込み終わり、走り始めてからようやく諦めたのか眼帯を付け直した……爺と呼ばれたイワンがマリアに振り向く。

「良いではないか。　偶にはこういう感傷というものも。　なにせあの子のことなのだからな」

「……それもそうだな」



「だろろう?」

彼女も双眼鏡と……自らの体を後ろのソファへと投げ出しつつため息をつく。

「ま、仕方ないものさ。人の性分というものは……よほど特別なことがない限りにはそうそう変わるものではないからな。彼の性質というものは、この冬でよく知ることもできたから、納得はしているさ」

「ふむ、お前が言うと言得力があるな」

彼もまたその隣に腰を下ろし、透明無色の液体をグラスに入れ、ぐいつと煽る。

「今日は彼の門出だ、その軽口も見逃してやろう。……それに、だ。変わらないのなら、変わらせるまでさ。だろろう?」

「ああ、もちろんだな。既に布石は……当に、打っておるしな」

「人員は?」

「買収済みの者と引き寄せた者。それに潜らせた者ですでに充分すぎるほどだろう。やり過ぎてても勘づかれるし、の。彼に危害を加えぬ内には何もせんようにしておく。情報だけは抜かせてもらうがな」

「そうか」

「ああ。特に響の私生活については」

「最重要だな」

「だろう」

彼女からふいと差し出された手にそのグラスが手渡され、彼女もまたそれを煽り、真上を……なにもないはずの天井を、ただの無機質な電灯しかないはずのそこをじつと見つめつつ、話しかける。

「――変わらないのなら、変えるまでのこと。ただ、それだけなのだよ。……なあ

? お前もそうだろう?」



「……ええ、そうね」

そう落胆した声を上げたのは、ある少女。

彼女の周りは――彼ならば「どろんとした」と表現するだろう彼女のその目以外は霞がかつていると表現されるだろうか、それとも彼が思っていたようにアナログ放送で言う砂嵐、あるいはすり切れたビデオデッキを再生したかのような、そんなもやのようなもので包まれている。



そうしていつまでも……ぎらぎらと、ぶつぶつと、唱え続けていた。

# 50話 幼女にTSしたけど、ニートだし……どうしよう 1. 9-2/2

漆黒の宙に広がる無数の構築物。

それらは様々な形をしていて……円形のものや円盤状のものや円錐状のものが多く、色が大ききさも一貫性がなく、ただただ仲良く、ぶつかるにはあまりにも離れすぎている距離を置きつつ宙に浮いている。

星々とは違って自らが人工的な光を放っている——そして光で頻繁に通信をしている。それらは、人が造り出した物という1点だけで共通しているもの。

それらは基本的には静止しているが、それらよりもさらに小さいものたちもまた光を放ちつつ高速で行き来しているのが……近くまで寄ればよくわかる。

その小さいものたちも数え切れないほどにあり、行き来も頻繁。

よくぶつからないものだと感じるほどの量だが……そこは3次元の宙、しかもそれぞれの静止している構築物たちはそれなりに離れているわけで、だからこそ事故などは起きないのだろうと予想される。

その構築物たちは……現在の拠点としている恒星の周りに点在する星々を——いく

つかの都合のいい惑星の周りを周回する軌道に乗っているものが大半であるため、厳密に言えばただ宙に止まったまま浮いているわけではない。

星の動きが緩慢だからこそこうして止まっているように見えるだけで……時間単位で見ると、みな少しずつ規則的に動いている。

さて、その中の惑星のひとつ、いちばんに構築物が群れるように張り付いて大人気のその星。

外からはきらきらと光るちりが輪のようになって見えるように見えるほどにまで特別に密集しているその惑星には、全く手を加えずとも居住可能な穏やかな大気と水と、そしてなによりも少ないながらも陸地があるために……原生生物が、知的生命体がいなかったために。

これまでの長期間……何世代ものあいだずっと無機質な材質の中に再現した自然というものをむさぼるしかなかった人々が、大挙して訪れている。

もつとも人口があまりにも多すぎるため、実際に降りてこられるのはほんの一握りに過ぎないのが不満の種だが、似たような……一部の区域だけを覆って人工的に似たような自然という物を造りだした惑星も複数あるために、そこまでの騒ぎにはなっていない。

そしてこの大人気の惑星は……ここから移動してしまう前に、せめて1回は訪れた

い、そして住みたい。

それが無数の構築物たちの中に住んでいる人々の共通の、憧れの夢となっている……らしい。

大気と海があると言うことは青を基調として白い雲に覆われた部分があるところにあるわけで、さらには点在する陸地のおかげでただの青と白の2色だけではないその惑星の……綺麗で、まるで「地球」のような惑星の、けれどもあきらかに渦を巻く雲と陸地が少ない……その、赤道付近にある小島のひとつ。

そこで、幼い少女が声を上げる。

いや、金切り声を。

「まったくも——！ なによなによ、いつつも！ もうっ、あなたって子は——」

「……姉さん」

「なに——」

「うるさいぞ、迷惑になる」

「だーれが迷惑になるのよっ！ どーせ防音が張られているんだから誰にも迷惑はかけないわよ——」

「違うよ、僕が迷惑なんだよ。僕はうるさいのが苦手なんだって」

「……っっっ！」

「わかつてくれた？　いつも言っているけど僕は姉さんみたいに」

「私の話を聞きなさいったら！　私はあなたのお姉ちゃんなのよお姉ちゃん！」

「……はあ……」

言え言えほどにエスカレートしていき、言いたいことを話し終えるまでは何をしてもどう言っても……逃げてでも無駄。

しかも今は……いや、先日から今まで、そして自分には逃れられそうもないため、選  
択肢はただひとつ。

耐える。

ただそれだけ。

「姉」を持つことになってしまった「弟」の宿命だ。

——見渡すかぎりに海と水平線しか見えない小島でありながら、小島といいつつもそこそこの面積を誇り、さらにはいろいろと条件がそろっているために「連合艦隊」——呼び方は出身ごとに異なるが、ともかくもその中のエリート層だけが足を踏み入れることができるその浜辺に構えられた基地の中で、幼い……外見からすると13、4くらいであり、さらには女性らしい膨らみもまだ少ない少女たちが姦しい。

片方はベッドで管に繋がれて寝たきりになっていて、片方はそんな彼女を見下ろすように仁王立ちしたままに……さつきからずっと怒っている。



ずっとずっと怒っている。

怒り狂っている。

女性の怒りとはこういうものだ。

ついでに言えば同じような話が何度も繰り返されているのだが……怒り猛っている姉の怒りはまだまだ取まらないらしい。

なお、それを指摘すると手をつけられなくなるため「弟」は……諦めきっている「彼は、少しばかりの抵抗として同じような返事をし続けるしかない。

「だーかーらー言っただじやない！」

ばんばんと机の上を叩く彼女。

「あれほどに言っただじやない!! なんつかいも、口酸っぱくして言っただじやないの！」

ばんばんばんばんと机の上を叩く彼女。

「なーんで話聞いてくれなかったのよ! 聞いていてくれたならそこまでなることはなかったでしょーに!」

「だから、うるさいと言っているんだけど」

『『だから』は私のセリフよ! ちよつと黙りなさい!! 『だから』禁止! 姉の命令は絶対なの!!』

「……病室に押しかけてきて繰り返す言葉がそれなの……」

ぎゃんぎゃんという表現が相応しい騒ぎ方をしているのは、腰まで届く黒い髪をストリートに下ろし、その黒い瞳をベッドに横たわる「弟」——または「妹」に対して……半分以上は心配から、もう半分はいつもの彼女のクセで怒っているうちに怒りが湧いてくるといふ性質によるもの。

それを理解しているし……そもそもとして「女性とはそういう生きもの」なのだとはとつくに諦めているために、黒髪の少女が怒りすぎない程度に愚痴をこぼしているのは……まったく同じ顔とまったく同じ体格を持っている、けれどもその体毛が銀色というだけの少女。

あとは体じゆうに管をつながれて横たわり、光を浴びせられているのも違いとしてはあるだろうか？

傍目には痛々しいのだが、本人は……痛みもないことだし情報さえ読んで静かにしていればそれで満足な性格の彼女は、一切と気にしていない。

……その姉は真逆の性質を持っているからこそ、ここまで苦労しているのだが。

「ねえ聞いているのソニア……じゃなかった、えと、『響』！ こっち見なさい！」

「聞いているよ……僕がしでかしたことがどういふことかも、よく、ね。 さつき説明したように」

「それがわかってないからこそこの状況なんでしょうがー!!」

少女の怒りはまだまだ収まらない。

——まるでくるんとしていた彼女みたいだな、と「彼」は思う。

「だから! もう!! ほんとにもー!!! わかってるの! ねえ!! 連合艦隊の最高司令官のあなたが今ここで倒れちゃったもんだから! あなたが本調子に戻るまでのあいだにどんだけの被害が出ると思ってるのよ! ついでに私たち、いえ、みんなにすっごく心配させたんだし!!!」

「すっごくーく!」のところでどうとう音が防壁を破り、廊下や隣の部屋へと漏れたことは……経験上、間違いがない。

「妹」「ソニア」そして「響」と呼ばれる彼女は見えないうようにため息をつきながら、そろそろわかってほしいと説得の方向性の切り替えを試みる。

「頼むからもう少し静かにしてよ姉さん。それに済まないと何度も言ったよ。あのときはこうするしかなかったんだって」

「それもわかってるから怒ってるのよ!! わかっているの!! だけどあなた自身を削ることをして、もう少しで死んじやうかもしれなかつたっていうのに! あーもう! 私はね、分かる! ソニア、ひびき! ……とにかくも怒ってるの!」

どうとうに勢いが落ちた姉と、それでほんの少しだけ安心した妹。

ふい、と、お互いに……少しだけ、顔を背ける。

「響」と呼ばれた彼女は——見た目こそ何年か分だけ成長しているものの、けれども別のところ……遙か遠い遠い場所で、1年ほど前に突如として今ここにいる「響」の幼かったころの外見になってしまった——させてしまった、同じ名前を持つ彼だった彼女とそっくりな彼女。

「いつものことだ」とため息を……まだまだ怒り猛っている姉に気がつかれないように、そつと、もう一度ついた。

——幼い方の「響」という少女と自認する彼だった彼女と、そっくりそのまま、同じように。

姉を持つ妹という身分と、ひとまわりも年下の女子に振り回される男性だった少女という身分は——中身がほとんど同じだからこそ、同じ反応をするしかない。

魂とは、そういうもの。

「もー、こーなつたらしよーがないわ！　いーかげんに言うこと聞きなさいな！　あなたはあの子……あの子も『響』だからややっこしいことこの上ないんだけど！　なんとなかならなかつたの！　とにかくあつちの子に迷惑かけたくない、その一点張りだったけどね！　もう決めたから！」

「……姉さん……まさか。それは止めてほしいと、あれほど」

銀色の少女……「響」と呼ばれた少女の上ののしかかるようにして黒髪の、姉の方の少女が迫り、有無を言わさない雰囲気を出し始め……妹の方は察する。

こうなるともう言うことを聞いてくれないということを知っているから。

……数ヶ月前に全身で攻撃を受けて力尽き、遠くにいる「響」へも届いてしまった申し訳なさでいっばいの、先日の戦闘のことを思い出す。

……あれからしばらく様子がおかしかつたし、きつとあれがトドメだったんだろうな。

うっかりと、倒れたあとの会話を覚えていないと言ってしまったのもまずかつただろうか。

……ひよつとしたら「また」、あちらの「僕」に助けられてしまったのも知られてしまっているのだろうか。

必要だったとはいえ、だからこそ迂闊だった……と、「ソニア」という名前も持つ妹は、頭を振る。

「全滅したら、それまで。でも逆に言えば、全滅する前にあなたが間に合わなかつたらそれまでなんだもん。もーガマンの限界だわ！ いっつもぎりぎりでも対処してたら私の心臓が持たないんだから！ えつと、それで？ 最近合流して……えーつと」

「……数はいいじゃないか。とにかく大所帯になったんだよね？」

「もー多すぎてよくわかんないけどタッチアかノーラなら知ってるからいいわよね！  
……つて違うわ！」

「いつも忙しいね姉さん」

「その途方もない数の命とあなたを守るためには代えられないの！ 分かるわね！ だから——」

これ以上抵抗しても無駄だと、首の力を抜いてまくらにほすつと頭を沈ませ、ふわつと銀髪が散らばるのを感じる「響」。

それに合わせてもつと顔を近づけて……息がかかるほどにまで迫り、黒髪が銀髪に混ざるようになった状態で黒髪の少女は、姉として……妹である最高司令官に、命令を下す。

序列を完全に無視しているが、逆らえる者は誰ひとりとしていない。

なぜならば当の……最高司令官、最高指揮官、最高責任者の「響」が同意する意見なのだから。

逆らえば他の大多数から、ただただ見捨てられる。

それまでなのだから。

「あそこ……えつと、なんて名前だったかしら」

——ここで黙っていたら気が逸れるかも、と考える彼。

「……あなたが言わなくても2人に聞けばわかるわよう？」

「……地球、だよ」

——無駄だったらしいな……今日の姉さんは手強い、と考える彼。

そこから顔を背けようとして片手でほっぺを握られ、最後の抵抗も無駄になる。

——少し、痛い。

そういう想いを込めて黒い両目を覗き込むも、効果はなかった様子。

「そう、それよー！」

もうひとりの「響」のいる世界の名前を聞き、しばらくのあいだ……1度だけ、いや、姉である彼女が気がついていないだけで厳密には2回も来ていたのだが……いずれにしろこちらへと訪れ、そして彼女と少しばかりだが話をしたあちらの「響」の事を思い出して静かにしていた黒髪の少女……アメリ。

妹が幼い姿になり、さらには……とても素直になつて口答えもせず、まるで妹のはずなのにかわいい弟のように感じたあのときのことを思い出し、今までの怒りしか浮かんでいなかった顔から一気にごきげんな顔つきになる彼女。

「やっぱり来てもらいたいのね、だってかわいいんだし。あ、もちろん私たちを助けてほしいんだけどね！」と言いつつ、目の前の妹のほっぺを、ほほをわしづかみにしながら宣言する。

「だからチキユウのあなたにもう1回だけでいいから『力』を貸してもらおうのよ！——  
いいわよね？ 『響』。拒否権はあなたにはもうないわ！」

——じゃあなんでもいいいち聞くん、と思う彼。

「だつてそうでもないよ……私たちは……私たちがあ……」

「……分かつているよ……必要だつてことは。でも……はあ……」

見つめ下ろしてくる黒い瞳から薄い色の瞳を……顔を固定されているためにわずかに  
しかできないながらも逸らしつつ、銀髪の少女は思う。

——済まない、あちらの「僕」。

君に再び迷惑をかけちゃうけども——もう防げないんだ。

1回切りのはずだったのに、もう3回も。

初めに「力」を貸してもらおうときには、そう言っていたのにね。

だからこそ同意してもらったというのに……このザマだ。

——本当に済まない、と。



一方で、そこから遠く遠く離れた場所で、ぱんぱんに詰まったりユックと紙袋を片手



にマフラーと髪の毛をいじりつつ……彼だった彼女の響は、なじみのあるふたりと再会した喜びを胸に、嘘をつかなくていい相手が増えて自然な笑顔を……控えめな笑顔を覗かせながらそんなことも知らないで、ただただ……車の中で揺られていた。

いずれ、もうひとりの自分と……記憶のある状態で再会することになるなどとは思ってもいない、「魔法さん」程度の存在と1年間かくれんぼを続けていた「響」は、ただただ嬉しさに浸っていた。

## 46. X話

最初はものすごく強引な「念のためだから！」で運ばれた病院から退院するまで、してから家を出るまでのいろいろなことを思い出す。

例えば外というのは魔境だっというもの。

僕は現在幼女って生物になってる。

だからいくら出かける前にしっかりとトイレを済ませたとしても、ただでさえ小さい体の小さい膀胱と筋肉、タイミングが悪ければどうしてもトイレに行きたくなってしまうことはあるわけで。

まあよく考えてみたら誰かと外に2、3時間くらい出かけても「ちよつとトイレ」っていうのはいくらでもあるわけで……ただ単純に僕が誰かと出かける機会が10年くらい無かったからすっかり忘れていただけなんだ。

「ん。……ごめん、ふたりとも」

「どしたの響？ もー帰らなきゃとか？ 具合だいじよぶ？ 休む？」

ゆかりとかがりと出かけた先。

前を歩いていたらゆりかが振り返ってくる。

肩まで乗っかるようになった髪の毛をふわっとさせながら。

「いや、そうじゃないんだ。ただ、少しトイレに寄らせてもらいたいんだ」

「あら、響ちゃんも？」

「？」

も？

……嫌な予感がする。

「ちようどよかったわ、私も行きたいのよ。一緒に行きましょう！」

いつものとおりに僕の手を握っていたくるんさんがのぞき込んでくる。

かがりと並んでいるといつもこうだ。

「いや、かがり」

「ゆりかちゃんはどうかしら？」

「待って、僕はひとりで」

行きたいのに。

そう、今までだってなんとかみんなとタイミングをずらして来たんだから、今度だつて。

「んー、そだねえ。肉体こそ、幼じ……女の子な響でも」

「……ゆりか。今どんな呼び方を」

「ただ中身は男の子なひびきと、純粋に乙女なかりんを……そんなにもいかがわしい場所にふたりだけ行かせるだなんて許せない！　ので私もご一緒させていただきませうよ」

それはさらにまずい。

なんとしても阻止しなければ。

今までは抑えられていたんだ、説得すればきつと。

けどもふたりとも標識を探してきよろきよろし始めた辺り、僕といっしょにトイレへなどというとても困ることをしでかそうとしている様子。

なんとか……そうだ。

「えっと、ふたりとも……僕が、中身は……精神的な性別は男だと知っているんだから一緒に行くのは嫌だね？　だって男とだよ？」

そうだ。

思春期の、それも勢いと心遣いとはいえ、僕に告白までしてきたふたりなんだ。こうして性別を意識させればきつと、恥ずかしくなるはず。

よし、これでクリアだ。

「べつにー？　だってひびきんだし」

え？

「気にならないわ？　だって響ちゃんだもの」

「なんで？」

「……僕は気にするんだけど……」

「なんでふたりはこうなんだ。」

年ごろの女の子なんだ、少しは羞恥心というものを持ってほしいところ。

「まーまーひびき、どーせならいっしょに行つとこーつて。あつち行つて無事に帰つてきて、んで学校通えるようになったら絶対に休み時間のたんびに連れシヨンに」

「ゆりか。下品だよ？」

女の子がそんなこと言つちやダメでしょ……しかも男相手に。

「幼女だけど。」

「もー、ひびきは潔癖なんだからあ。女の子同士ならあたりまえのことなんだよ？」

「いっしょにトイレに行くつての。毎日のように、休み時間のたんびにすることになるんだからさあ……生理現象なんだからしょうがないじゃん」

「学校に通う予定は毛頭ないけど、でもそつか、この体で社会復帰するならそういうこととに……なんかやだなあ……。」

「……私はまだちよつと恥ずかしいけれども」

「おや、かがりがゆりかよりまともな感性を抱いている奇跡が。」

「でも休み時間とかなら男子女子関係なくそうするのが当たり前になるのだし……今のうちから慣れておいたほうがいいと思うわよ？　ほら、響ちゃんって今までずっとそういう機会無かったって言うし」

む、まずい……僕の偽りの経歴がここへ来て。

「それに響ちゃんの場合には学校側も配慮してくれるだろうから、共用トイレとかそういうところを使うのでしょうか？　だからそこまで恥ずかしくないわよ！」

「……女子トイレじゃないなら、まあ……」

気がつけばもう片方の手をゆりかに握られていて有無を言わさない感じになっていた。

1対2だと不利だ……やっぱりと出かけるんだったら、気分がころころ変わるし年下の女の子みたいにかわいがってくるっていう女性となら1対1じゃないといけなみたい。

たぶんそれでも負けるけど。

とは言え左右から腕を軽く前に引っ張る力が加わっている。

僕は連れて行かれている。

もはや逃れられない。

「それでは行きましょう？　お手洗いはここから……」

両手を引かれる僕。

どこからどう見ても「年上の女の子たちから心配されている女の子」って様子になっている僕。

……今まで隠していた性別のことを告白した途端にこれだ……いや、しようがないんだけどさあ……。



『現在使用できません』

そう書かれた紙が……僕が普段から使っている、男女どちらのでもないトイレの扉に貼ってある。

無慈悲に。

それを見たせいか尿意がさらに増してくる。

やばいかも。

「あらあら故障中かしら？ お掃除中ではなさそうだものね？ ……響ちゃん、他の階、間に合いそうかしら？」

「……………」

「ちよいマズい感じよねえひびき……うん、女の体ならしやうがないよ」  
だつてもうすぐ出せるつて思つてんだもん。

だからこそそのんびり歩いて来ちやつたんだし、出す準備をしていた体もシヨックを受けていて余計に危ないことになってきている。

こういうトイレつて、フロアに多くて1か所2か所つてところ。

たまたま今まで運が良すぎただけでこういうことだつてあり得るんだ。  
今までが良かっただけ。

……漏らさなかつたのも、ただ運が良かっただけかもね。

「あちゃあ——……じゃー、残念だけどひびき、こーなつたら私たちとホントにいつしよに入るしかないねえ」

「いや、でもまだなにか選択肢が」

「いやいや無いでしょ。でもって真横の女子トイレは……ん、いつものとーりにちよーつと並んでるけど、このくらいなら2、3分で入れるだろうし？ スマホ勢がぎよーさんいらつしやらなければ」

スマホ勢？

「女の人はね、個室だからつい見てしまうちのよ。だから時間が掛かるの」

……あ、そういうこと。



けどそんなことはどうでもいいくらいに膀胱が張り詰めてきた気がする。

「ま、まあ！ 元気になつたらいいはずは乗り越えなきやかもな試練だからさ！ ほら！ 男子トイレと女子トイレしかないっていうところで、今みたいにどーしてもって可能性あるし！」

もう我慢の限界が近い。

「ほら冷や汗かいてるじゃん……だからひびき、早く行こう？ どーしてもならさ、『この子、もーガマンできないみたいなんです！』って言つて順番譲つてもらえばいいし！」

響のフェイスならだいいじよぶだいいじよぶ！ だから響、私たちと、新しい扉を！」

「しようがない」

「うん、んじや並ぼ」

「男子トイレに行つてくるよ」

「うん！ 男子トイレに……え？」

「えっ……響ちゃん？」

「こうして髪の毛を収納して」

僕が性別をげろつてしてからは外でもできるだけ髪の毛を出してほしいって頼まれるから仕方なく出してたそれを、くるくると丸めてセーターの中へ。

中でふあさつと広げてなじませて違和感が少ないように見せるのがコツだ。

「で、上着を腰に巻けば」

コート……春ものの、かがりが持つてくれていたそれを手に取って腰に巻く。よし。

「顔が出ていても男に見えないこともないからね。これで問題ない」

窓ガラスに近寄ってみても……うん、ぱつと見なら男の子だと見てもらえる。

というか夏はずつとこれで通してたから大丈夫って知ってるし。

どうせ男のトイレなら誰も気にはしないはずだし。

今日がスカートじゃなくって本当に良かった……ほら、くるんさんって妙なこだわりあるから……。

「それじゃ行つてくるよ。終わったら……そのベンチのところで待つているよ。じゃ」

「あ、ちよー！」

……腰に巻くときに締めすぎたのか膀胱が厳しいことになっている。

ゆりかが何か言いたげだったけど、僕は急いで誰も並んでいない男子トイレへ。

「響ちゃんにしてはいつになく俊敏ね……よっほど我慢していたのかしら……」



男子トイレに音姫さんなる救世主はいない。

だから偶然に発見したんだ。

なるべく前に、だけどこぼさない範囲で座るようにすると、しゃあああつて出る音自体は防げないものの下の水に叩きつけられるすごい音は防げる。

だから外でする恥ずかしさもずっと前に比べたら平気だ。

まあ漏れそうだったおまたの解放感からそんなのはどうでもよくなってるけども。

全身の筋肉が弛緩して思わず身震い。

それにしてもやつぱり……肉体的には何ら問題はないんだけども、女の子たちと女子トイレに入る、いや、女子トイレっていうあの空間を訪れるっていうのには抵抗感が抜けない。

精神的に。

ま、そんなときにはこうして男の方へ入れればいいだけなんだし、少なくともふたりに  
は僕の精神は男だつて伝えてあるし。

だから、これからもこうすればいい。

うん、実に簡単なことだったな。

なんであんなに困ったんだろうね。

きつと漏れそうだったからだ。



すつきりしてしばらく。

解放感に浸っていた僕は、座っていたベンチの前に立つ2人の影に包まれる。

「ん、2人とも……結構時間がかかったね。 やっぱり女子トイレ、それも列をなしているのは危険だね。 今後僕はこういうときには今みたいに男子トイレに」

「ずるこ」

いつになく低い声になっていたゆりかの声にちよつとびくつてなった。

「……私たちのじゆんすいなおとめごころを弄んだだけじゃ飽き足らず!」

「待って、何の話?」

「トイレの! あの耐えがたい女特有の列をスキップしやがってからにいい! ずるこ!」

「ずるこ! ずるこ響だよそれは!! そうだよいたんだよ、結果的には正解だったんだよ!」

「だよひびきにとつては! だけど! スマホ勢が何人も雰囲気的にいたんだよ! 開

「かすの扉だったの!! だから響にとつてはいいことだったんだけどでもそれはそれと

「してやっぱりずるこだよ!」

こどもっぽく怒ってほっぺを膨らましていて、さらに幼く見えるゆりか。

……だったらなおさら僕の選択が正解だったんじゃないか……なんて理不尽な怒りなんだ。

「響ちゃん」

かがりの声もちよつと低くなっている。

これは……抜け駆けに対する怒り……？

「私も……珍しく響ちゃんがずるいつて、そう感じてしまったわ。だってそんなに簡単に……私たちがこれまでも、この先もずーつと苦勞するこれを男の子や男の人みたいに樂をして！」

「だから僕は男」

「ずるい」

「ずるいわ」

「えつと」

「こーゆーとき心は男つて便利で良いよねー」

「良いわねえ……だって10分以上お得だったんだもの」

「……えつと……」

「ずる」

「ずるいわ？」

じとつとした2対の視線。

「……………ごめん、ふたりとも」

とりあえず謝る。

かがりに対して普段からしている降伏宣言。

「……………ま、いつか！ それよりかがりん、ひびきの髪の毛出しちゃらんと」

「あら、そうね！ 響ちゃんつたら恥ずかしがり屋さんだからすぐに……………」

腰に巻いていたコートを解かれ、髪の毛も出させられているのをされるがままにしながら思い起こして思い至る。

ぼーっと天井を見つめながら。

……………なるほど。

今僕がしちやったのは、肉体的には「女子」っていうカテゴリーな僕が「女子」としてはずるいことをして楽をしたこと。

それも女子な2人のまん前で。

事情と理由は分かかっていても、どうしても気分的にはそうなるんだ。

しかも結果としてふたりはずつと立ってじりじり待っていたのに対して、僕はさつさと楽になって座って足をぶらぶらしながら待っていられたんだし……………まあ気持ちには分

かる。

分かるけどもめんどくさい。

……僕が男だって分かってくれているこの子たちでさえこれだ。

男に戻れなければ、肉体的性別に従って女性に囲まれた中で生きることになる。

そんな女社会で僕は無事に過ごしていけるんだらうか？

ほら、今みたいに女子って世界は同調圧力すごいって言うし。

……やっぱり男の方が楽だったなあ……いろいろと。

けど戻る見込みは今のところない。

もう諦めよう。

トイレは終わったのに来るときと同じように両手を引かれながら歩く僕。

そんな僕を見たお店の人とかにくすくすと笑われたりしながら、僕は考える。

やめて。

僕は可愛いつて褒められても嬉しくないんだ。

だからそんな温かい目を注がないで。

……とりあえず、念のためについて見つけておいた限定のお菓子っていうものを置いて

いるお店。

それを紹介してあげてそれで満足してもらって機嫌を直してもらおう……じゃない

と事あるごとに今のを引っ張り出されてみんなの前でけなされるんだから。



## 46. X2話 警戒心

しつぽがゆらゆら、ポニーテールがゆらゆら。

「そういえばさー」

「はい？」

僕はできることなら誰もいない空間でぼーっとしてたい。

その次ってことなら人と会っていても静かな時間が続く方が良い。

そういうわけでねこみみ病ペアと会っているあいだに起きた不意の静寂。

せつかくゆらゆらしてるのを見て楽しんでたのに岩本さんが話しかけてきた。

幸せな時間って続かないんだね。

「私たちが響くんとはじめて会ったときっていろいろと衝撃的でしたねえ、ドラマチックでしたよねえって思い出したの。 私たちがあつちこつちさまよつた挙げ句の……

何階でしたっけ？」

「6階ですね」

「あ、そうでしたか。 響さんはよく覚えていますにやあ」

……なんで僕、女物の服のフロアのこと、とつさに言えるんだろ……いや、良く行つ

てるからだ、きつと……。

「ともかくそこまで追い詰められるくらいには協定違反って感じの人たちから執拗に……もーストーカー以上にしつこく追いかけて回されててねえ」

「そうでしたにや。もう逃げ場もなくなつて体力も尽きてきて……にやあ、私だけならどうとでもなつたんですけどにや？ 息は切れてきていましたけどまだまだ平気だったので。でも、ひかりさんを見捨てるわけにはいかないからって、ひとりで逃げるなんてできなくなつて」

「ありがとねー、あのととき見捨てたりデコイにしないでくれて」

なんか物騒な単語。

「にやつ。で、観念するしかないなーって思つてとこで出てきたのが……まさかのまさかですよ！ ちっちゃい子が……あつ」

「……………」

じつと島子さんの黒い瞳を見つめると、その上の耳がへにやつてした。

うん、許す。

「…………ごめんなさいですよ……あのとときは初対面でしたし、そう思うしかなかったのでしょうがないんですよ」

「事実ですよ、僕は気にしていませんよ」

そう、気にしてなんてない。

だって僕は島子さんよりは年上なんだから。

「で、逃げて逃げて逃げて逃げてーつてして根負けして参っちゃいそうだったあのときに、ぱつと目が合ったと思つたら手招きしてくれて助けてくれようとしてた響さんの存在が。ただただ、それだけで……すつごく心強かつたんですにああ、つて」

「そうねー、ずつと大変だったからこそ、ようやく匿つてくれそうな子が見えてね——  
……」

そう言いながら店員さんと呼んでおかわりのパフェを頼むふたり。

見ているだけで胃もたれしそう。

「いえ。僕はあのとき、ただ……おふたりにもおはなししたこの体のこともあつて、いろいろと……ただ面倒なことを避けたかつたんです。ただそれだけです。僕のためだったんです。たくさんの人から追いかけていると思われあなたたちを僕が隠してしまえば大丈夫だろうっていう、僕自身のことだけを考えた行動で」

「それでも私たち、助かつたんだよ？ ねえ？」

「ですよ。むしろそうやって本音つてことでいいですよ、それ言ってくれるのがマジメな男の子っぽくてかつこいいですよにああ」

……罪悪感。

あのとき本当「うるさい人たちがどっかに行ってくれればいいや」って、ただそれだけだったのね。

「だって敵……って言ったら失礼？ いや、あれだけのことをしでかしてきた人たちですからいいですよねえ……追いかけてくるそういう人たちや、道すがらにスマホとかを向けてくる人たちばっかで心が折れそうっていう状態だった私たちだもん」

「下手に有名人ですとあんなに必死でも撮影かと思われちゃうんですしやあ」

「で、そんな私たちの前にたつたひとり。 たつたのひとりですよ？ 頼めば助けられる人たちもいたんでしょうけど、頼む前から……走っていましたし、息も切れていたのでムリだったんだけど、そんな中でひとり、積極的に味方になってくれる子……あ、イヤそんな顔」

一応僕はあなたより2つ下程度なんですけど。

そう言いたいのを我慢してるのがバレたらしい。

「そういう人が、男の子が現れたのよ。 わかる？ あのときのインパクトって普通に初対面で会うときのなのよりもずーっと強烈だったんですから」

まあ確かに……僕からしても衝撃的だったから忘れないもん。

「そんなわけで、いまだに私たちのあいだで響くんって言ったらあのときの手招きしてくれているあのときの響くんなんだ。 だからかなあ？ 響くんの中身が……心が

男の子だって言われたときも違和感があるどころか……えーと、しつくり来るって感じ  
で。 ね?」

「あ……そうですよね、わかりますに、やあ——!?!」

ねこみみとしっぽがぴんと上を向くついでに絶叫。

何?

どうしたの?

その辺でネズミでも見つけた?

「そのことでお礼ついでに言おうと思つてすっかり忘れていたことがあるんですよあ  
あ!!」

今の会話で叫ぶ要素あったっけ?

「響さんは多分気がついてないっていうか、だからこそ心配なので伝えておかなきゃつ  
ていうかなんですけどにや!」

「あ。もしかして、あのこと?」

「はいですよ!」

「まー、心が男の子だったんだつたらしようがない……のかな?」

「?」

「わ、そうやって首かしげるの可愛……じゃなくって。 あれは響くんが女の子だけど

男の子で、男の子だけど女の子だからこそなんだろうけど……だけどやっぱ、心配だしねえ」

「……えっと。すみません、お話が全く見えないんですけれど」

「あ、ごめんなさいですにや」

「……」

「……」

「……」

沈黙。

「……」

「……ちよつとみさきちゃん！」

「え？ ひかりさんが言うんじゃないんですにや？」

「なんか急に恥ずかしくなつて来ちゃつて……お願いっ！」

「もー、わかりましたにやあ……響さん、おはなしと言うのはそのですにや」

「はい」

なんかあつたかなあ……こんな気まずそうな前フリされる話つて。

何？

あ、もしかして毛糸ぱんつ被つちやつてた件？

「……いくら私たちを守ってくれようとしていたってというのがあったってしても、いくらそれらしくしようとしてたって言ってもですよ」

しつぽの毛が逆立っているのが興味深い。

「ああやって人前で……男の人が来るかもしれないところでわざと肌を晒すなんて何考えてるんですか響さん！ にゃ!!」

「え？」

「え？ じゃないですよ！ いつもあんな感じだとそのうち犯罪に遭つても不思議じゃないっていうかほんつとに危なっかしいですよ！ 響さんつてあれですよ、普段はすつごく頭良い風ですけど実はいろいろ抜けてる感じですよ!？」

犯罪？

肌をさらして？

え、だってただあのときはそうすればびっくりするだろうって。

「……………ああ」

「今のそんなに熟考要るの!？」

「危なっかしいですよあ……」

「いえ、あのとき僕は少しだけ胸元を出しただけですし……下も脱いでいましたけどシャツの裾で下着はきちんと隠れていましたし。そもそもこの僕は子供ですし……」

だからそうおかしい服装ではないと思っただけです」

見たらびびったりはするだろうけど……その程度でしょ？

「……あのね、響くん」

「はい？」

島子さんたちが……甘味をほおぼるのを止めてまで身を乗り出してくる。

あ、これ、怒ってるやつだ。

よく、何回も何十回も経験した「おこ」の予兆。

僕はびんと背を伸ばす。

「私たちが言うのもね？ 響くんに言うのもアレだけどさ？ ……人って見た目が全て

なのよ？ 特に若いうちは。 だからそんなに簡単に乙女の柔肌を」

「いえ、僕は」

「たとえ男の子だったとしても見せちゃいけないの！ 肉体は女の子なんですよ！」

「む」

確かに一理ある気がする。

「む、じゃないわよ……しかも、どこからどう見てもどこぞのお嬢さまって感じの雰囲気と見た目を持ってて、どんな格好をしていても女の子の人だってきつと」

「……せんぱいはシヨタコンの上にロリコンまで」



「事実なんだからいいでしょみさきちゃん! とにかく! 女の人でさえ目を惹かれるその容姿なんだから気をつけた方がいいって言うわけ! 分かった!」

一理あるけど……そこまで?

「……私たちは教えてもらったからこそ響さんが男の子だって知ってはいますけどにや? でも一般的に考えて響さんのような子でもすにや? その……あられもない姿というものをしてるのって普通の人はもちろん『その筋の人』っていうのにも見られたりしたら大変ですにや。ヤバいんですにや」

あー。

なるほど……ロリコンさん。

なるほどなるほど、確かに僕にはそういうのは無かったけどそうじゃない男もいるもんね、世の中には。

「ともかくそういうわけですにや。私たちの経験則で言うのなら……そうですにや、ちよーつと露出の多い衣装でテレビとかに出たりしたあとに湧いて、もとい出ていらっしやるような少しヤバい方向性のファンの方とかみたいのが出て来ちゃったりするかも、なのですにや。ご理解はいただけましたにや?」

芸能界って大変だね。

「特に駆け出しのころとかつてこちら素人、お相手も素人っていう場面が……距離感

間違えちゃって思い込んだ人とかってというのは、その。 ……えっと、とにかく怖いので気をつけてくださいにや。 はい」

「分かりました……けど良いですか？」

とりあえずは納得したけども、やっぱり思い浮かび続ける感想を投げかけてみる。

「僕みたいな子供に、少女以上の女性に向けるような感情を抱く男性なんていないじゃないですか？ だって子供過ぎるでしょう、今の僕の見目って」

実際僕も幼女になったからこそちよつとどきどきする程度で済んだんだもんね。

これがもつと……小学校高学年とか中学に入るくらいに発育だったらこれどころじゃなかったかもだし。

「……………」

「……………」

「……ねえ」

「にや」

「どうするっ…」

「どうするって……やっぱ言わなきゃダメっぽいすにや」

何がダメなんだろ？

「……あのね、響くん……？」

「はい」

「男の子な響くんに女の子な私たちから伝えるのもなんだけどね？」

「にじゆうななさいが女の子って」

「今は良いですよ！ ……とにかくです、すこーしだけ情操教育っていうのをあげますね……？ ていうかしないとヤバそうだから、本気で。 ご家庭の方針でもさすがに危なさ過ぎるって思うし……」

「いや、僕は大丈夫ですから」

「私たちを助けると思ってた聞いてくださいにや！ じゃないと、中身が男の子だからその警戒心ゼロっていうその無防備さでどんなヤカラを吸い寄せたもんじゃなかったもんじゃやないのですにや！ ほんつとに心配なんですにやあー！」

「うん……犯罪に遭ってからじゃ遅いもん、お願い響くん……」

「……わかりました」

しぶしぶと納得した振りをしておくかないみたい。

だつてこうしてヒートアップした女性は、とにかく話を聞いてあげて満足させてあげるしかないんだって知ってるから。

良く分からないけど2人にとってはダメな答え方しちゃったらしいから。

だからしおらしく素直な姿勢が大事なんだ。

「こほん。 はい響くん、この資料」

岩本さんがクリアファイルを渡してきた。

え？

「えつと……これは？」

「うち……の事務所に限らなくて、知り合いの子たちや先輩方が遭いそうになったり実際に遭った、セクハラから……その、ギリギリのところ助かった際どいケースまでまとめてきました。 たぶん響くんはこうでもしないと分からないかもーって思ったから……実際にそうだったけど」

目の前にはクリアファイルから出てきた、レポート風の……几帳面な資料というものと、その先にある2人の視線。

……諦めよう。

2人は僕を心配してくれているんだ。

それに女としての先輩だもん、僕に足りない何かをここまで言うんだ、きつと大切なことなんだろうし。

「いいい？ 女の子は男の子より……肉体的な意味でね、肉体的で！ 気をつけなきゃいけないの」

「良いですかにや？ 基本的に男はオオカミさんなのですにや。 女の子をばくりと食

べちやいたいつて言う……」

☆☆☆

「じゃ——」

喫茶店の一角。

通りがかつた人が聞いたらぎよつとするに違いないような話をしだした3人から、少し離れた席に座る2人。

そのうちのひとり……今日はオンのために髪を結っている彼女、ごく普通の会社員の格好をしている今井ちおりは、わざとらしい声を出す。

「じい——……」

その対面に座る彼、筋肉質で強面な癖に目の前の女性に強く言えない萩村茂紀はため息をつきながら言う。

「……口に出して言っても駄目ですからね、今井さん。響さんに愛想を尽かされますからね?」

「わかつてますつて。だからこうして見ているだけですよ? ねー?」

その目つきは——まるで肉食獣のよう。

こんこんと説教をされはじめた銀髪幼女へ向いていたその目つきは……ちようど「彼」が両手に持つ書類に書かれている「危険人物」たちの特徴に少し似ていた。

## 46. X3話 偽乳と牛乳 1/2

「まーだまだ寒いよねー」

病院の中はあつたかいけど外は寒い。

まだまだ冬のお見舞いに来たゆりかが手をすりあわせている。

「あ、そーだ、今日はまだかがりんしか来てないしき、聞いときたいのよ、今のうちに」  
折りたたみのイスでぎこぎここと鳴らし始めていたゆりかが、がたつと前のめりになる。

ぱつつんがふわつと浮かぶ。

「なあに？ ゆりかちゃん」

彼女は基本的に気分屋だ。

ただしその隣に居るくるんさんがはるかな上級者だから霞んでいるだけ。

「んとさ……もー響もこーいう話題慣れてるだろーし、当事者しかいないからぶつちやけるけどさ？」

そんなゆりかがこんな前置きつてことはちよつと恥ずかしい系？

でも前置きしてくれるだけマシだね。

隣でパン菓子を頬張ってる子なんかは絶対そういうの無いから。

「なぜに、どうして。　なんで！　なんでかがりんはひびきにひつたすらに服着せたがってたのさ！　ひびきによると、それはそれはもー果てしのないものだったって言うじゃん？　なんだってそんなことしてたのかがりん！」

「あら、そんなこと」

そんなこと？

僕がどれだけ男としての自意識を削られたのか知らないんだね？

「だって響ちゃん、かわいいじゃない？」

「え、そりやあまあそうね？」

「ええ！」

「……………」

「……………」

「……………あ？　おしまい？」

「ええ！」

うん……………きつとそうなんだ。

「この子にとって「理由」なんてのは「そのときの気分」ってだけだもんね……………」

「いや違うのよかがりん、そうじゃないのよ……………それは答えになっていないのよ……………」



「あら？　そうかしら？」

ぱつつんがくるんに対して困惑している。

うん、突っ込みつて大切だよ。

けどもゆりかはまだかがり歴が浅い。

彼女の言動を理論立てて説明できるのはこの場で僕しかいないだろう。

「ゆりか……いや、それで正解なんだよ」

「え、うそ。 たったそれだけってのはないでしょ」

「いや、あるんだ」

「え、ええ……」

なんだか衝撃的な表情をするゆりか。

彼女の視線が向かった先には……頬張っていたのを飲み込んでとろけているかがりだ。

「それにだよ、それはもうとつくに……かがりに捕まったときから諦めていることなんだ。 よりにもよってこのかがりがある店で、このかがりに向けてコーデイネートっていうものを頼んだのが運の尽きだったんだ。 ただそれだけなんだよ」

「おお……ひびきが煤けてる……」

「それに、かがりはかがりだからね。 『自分ももちろんだけれど、他人も見境なく着せ

替えたい、着飾りたい』っていう欲望、それ以外の理由も感情も持ち合わせていなかったんだろうし持ち合わせていないんだろう。　かがりだからね」

「ありがとう響ちゃん！」

僕はどうしてお礼を言われているのかを理解するのに数秒かかる。

……とりあえず何も考えないで脊髓反射で話すのはやめた方が良いって思う。

「私たちが初めて会ったときのことよね？　ええもちろんそのとおりよ！　だってかわいかったんだもの！」

「そ、そう……ホントにそうなのね……」

「……かがりだからね」

「おお、響が死んだ目をしていらっしやる……ま、まあヒガイシヤな響がそう言うんなら良いんだろうけどさあ」

「うん。　最初から諦めさえしていれば大抵のことは受け入れられるんだよ」

「これが諦観というやつか」

「そうとも言うね」

僕のため息に心底同情してくれているらしいゆりか。

なんかいたずらしようとしてたらしい彼女が真顔に戻る程度には深刻な悩みだ。

「でも……はあ——……去年の夏は至福だったわあ」

それに気がつかないかがりがうつとりしたまま抜かし始める。

「響ちゃんのお洋服をいいーっぱい選んであげられたの……響ちゃんが元気になつて帰つて来たらまたたくさん選んであげられるのよね……それも楽しみよ……」

くるんくるんくるんしているかがりと、それを引き気味で見つめているゆりか。

そんなふたりを見ているうちにふと思ひ至る。

……いつになるかは分からなくても、この子たちと……どんな形でも会うつて決めたけど。

もし久しぶりに会つたとしたら……成長できたとしてもできなかったとしても、そんなこととは関係なしに手を引かれて連れ出されて着替えさせられて、いちいち感想を求められて買わされてつていう未来が待つているつて。

女ものは流行り廃りも早いし、そのときに着ている服を流行遅れ……「かわいくな」つて決めつけられて服屋へ直行させられて着せ替え人形。

うん、考えなくても分かる未来。

前ならまだしも今なら、僕のことを見た目はともかく中身は男だつて知つていくせにこれなんだ。

そのときにそう主張したつてきつとこの子には通じない。

「分かつたわ！」つて自信満々だけでも……多分本当には実感していないんだろうし。

……どうか、どうか男に戻れますように。

着せ替え人形は……こう、心を侵食してくるんだから。

「ま、お着替えの件はいいとしてさ？ ……ハイライト消えてるけど、てかだいじよぶひびき」

大丈夫じゃないけど慣れてるよ。

「響自身がそこまで気にしてないって言うんだから良いのかなあ……だけど、だけどさ？」

かがりが自分の世界に閉じこもってぶつぶつ言っていただけの空間に、ゆりかからの意味のある言語が戻ってきた。

「私、ちよいと気になってね？ ……これ、かがりんが席外してるときに聞いちやったんだけどさ……ね？ 響から聞き捨てならないコト、聞いちやったんだけど。 ……ちよ

いとねえかがりん。 かがりんってば、そろそろ目覚まして？ ね？」

「あら、ゆりかちゃん」

「うむ、私がゆりかだ」

トリップしていたかがりの意識も戻ってきた様子。

「かがりん？ ……響ってさ、はた目に見たら私未満の小学生で……それも初めの頃みたくだぶだぶなカツコばっかしてたら……いや、こうして顔を出しても下手すると幼

女

「……………」

じつとゆりかを見つめる。

否定はできないけど抗議はするんだ。

「……………」じゃなくて低、じゃなくて高学年くらいの小学生。　　こーして体に合った服着て顔と髪の毛だしてたら低学年にも見えちゃうことあるでしょ、ひびきって。　　そんなひびきに対して、かがりんってさ?」

いいんだ、ちいさくたって。

それでも生きていけるんだから。

「……………」かがりんってさあ——……………」

……………」ゆりかの様子が変わ?

具体的には目がどんよりと……………」ちよつとびっくりしたけど魔法さんの影響じゃない感じに曇っててハイライトオフってやつで。

そんなゆりかは……………」そんなにも恐ろしい目をおかがりに向けつつ、イスごとじりじりとなじり寄っていく。

「……………」事もあろうに。　　……………」こともあろうに!　　響に、どつからどー見てもよーじよばでない響にブラっていうものをつける提案をされたそうじゃないですかこんちくしょう!

うらやまけしからん！」

女の子の間では胸のサイズは致命的らしく、ゆりかが普段とは違う感じに暴走している。

……ちなみに今のは何に対しての怒りなんだろう。

「それも子供用のやつ……私、今でもほとんどそれしかつけてないけどそれならともかくだよ！ 盛るためのソーユーモノをオススメされたそうじゃないですかねえかがりさん！ てかよく響の体のサイズのもがありましたねなんででしょうかねこんちくしょう！ 設計した人もオツケーした人も売り出した人もヘンタイですねこんちくしょう！」

「え……ええと……」

そんなゆりかにかがりがたじろいでいる。

実に珍しいものを見た気がする。

「ねえなんで？ なんでなんで？？ どうして？ 貧乳ってそんなに罪深いモノなの？

修正しなきゃ行けないものなの？ 罪なの？ ねえ教えてよでかいかがりさん……」

「ちよ、ちよつと待ってゆりかちゃん、なんだか怖い感じになってるわ!」

「だって怒るよ？ あたりまえじゃん？ そーんなでつかいのふたつ抱えてるかがりさんにはわからないでしょー？ 深い悲しみを。知らないんでしょー?」

「……大きいの？ 悲しみ？ ………………??」

……かがりつてすごいよね。

この状況でもそれに思い至らなくて悩む仕事をするもんだから、腕を組んで胸が動いてゆりかの視線が刺さる感じになってる。

……わざとじゃないよね？

そうだよね？

もしそうだったとしたら僕は人間不信になる自信があるんだけども。

「と、とにかく怖いから怒るのやめてちょうだい！ それに下着のことなら響ちゃんから頼まれたもの！」

「む」

捏造されそうになったから反論。

こういうときに否定しておかないと事実つてことにさせられちゃうんだ。

「僕はブラジャーなどというものは要らないんだと言つたと思うけど？ そもそも胸がないんだ、肉体年齢は……2人が見る通りに幼いんだから。だから要らないって言つたはずだよ」

そう、ないんだ。

裸になって思いつきり腕を前か後ろに反らさないと確認できない程度には。

というか今思えばあれはただの常識的な範囲の脂肪。

男でさえうつつすら乗ってる感じの脂肪なだけで、あれは胸じゃない。

せつかく女の子になつたつていうのにそれすらないんだよ？

じーつとかがりの胸を暗い瞳で見つめているゆりかの袖をくいくいと引っ張って意識を戻してやる。

「んあ……？ ひびき……？」

「ゆりか、落ち着いて。それは仕方のない話なんだよ」

不毛な会話なんだ。

「響。巨乳に辱められたんだよ？ いいの？ 復讐しなくて。やらないの？」

どんな字を書くかは分からないけどやらなくていいって思うよ。

「どうしてそこまで気が昂ぶっているのかは知らないけれど、でも落ち着こう。かが

りに対しては何を言っても」

「でもさ！ それにしたって!!」

くわつと……今度は僕の方を見つつ、やり場のない怒りのような感情を発し始めたゆりか。

……友達との間で胸のサイズとかな会話があつたと見た。

女の子って大変だね……胸って服の上からでも分かっちゃうからさ。



男なら……ほら、プールとか温泉とかでもなければ基本的に気にならないものだし。

「これ！ 巨乳だから！」

さすがのかがりでも「これ」呼ばわりはやめてあげよう？

「だから私、そもそも知り合ったときからさ！ 私のような悲しみを背負った仲間たちと——あ、たくさんいるんだよ？ 私たちみたいに、もう諦めかけてるそんな仲間が。

そりやあもう、たつくさん」

中2でそこまでとは思うけど、思春期にとつては大変なのかもね。

ほら、発育次第だけでも女の子って小学校高学年から胸の大小が明確になってくるし。

「ときどきかがりみたいな『我らの敵』に対して『そのダブルメロンが縮まないかなー』とか『こつちに半分くらい来ないかなー』ってな感じの儀式してたりするだけどき？」

「え？ ダブルメロン？ 縮む？」

「おのれ、そうやってとぼけてからに……」

とにかくゆりかはかがりのかがりたるその部分をけなしたいらしい。

なんでかは知らない。

……けどさ、なんでこの子は僕っていう男がいる場でそんなこと言い出すの……？

実はやっぱり君も僕のこと男だつて本気では思つてないでしょ……？

## 46. X3話 偽乳と牛乳 2/2

「……つまりゆりかは胸がコンプレックスなんだよ。そうやってかがり、君がわざとでなくても腕を組むと強調して煽っていると感じられるように」

「? ……………えっ」

ここまで言うてようやく自分の胸の話題だったのに気がついたらしい彼女。

ゆりかはともかく僕からもじつと見られていてさすがに恥ずかしくなった様子。

胸を隠すように抱いて目を逸らしたメロンさん。

……なんだか初めて女の子らしい反応を見た気がする。

「……まあもういいや、怒りを抱いてもしよーがないつてのはよくよく分かってることでしよ……許せはしないけど。んでさ、話は変わるけど。いや続きみたいなものだ

けどさ」

「……まだ続くの? 僕は出ていった方が」

「まあまあ、これからが本題なのよびびき」

本題?

でも僕は必要ないでしょ?

なんならこういうのは君たちふたりだけのときにしてくれないかな……なんで女の子ってこう、他人を巻き込むの……？

「そんな仲間たちでもさ……なんての？ 偽乳とか言ったりするソレ、パッド入りブラ。悲しみの余りに思わず自分でつてのはあるけどさ、でもソレを誰かから勧められた子なんていなかっただけ？ あ、もち私も含めてね……お母さんにだつて言われたこととすらないよ。ちなみに自分からつけてた裏切り者は処したけどそれは置いとくとして」

裏切り者？

……いけないいけない、今のゆりかに構うととっても良くなさそうな雰囲気。

空気に徹していよう、空気に。

僕は空気だ。

反応してはいけない。

女の子同士のこういう会話、「僕は聞いてませんよー」って感じにしつつもその場に置物になるって言う高度な技術が必要なんだ。

「かがりんはいったいどこからそんな冒険的な考えをお持ちになったの？ ぱつと見、小学生でブラが要るか要らないかって年齢に見える響に、ホント、ドーやったらそうしよつて思えたん？ それは犯罪者の思考だよ？ ねえ？ それともそのお店になんか

そーゆーいかがわしいマニユアルでもあったの？ ねえ？ ねえ?!

「だつてかがりだから」つて思つてたけども、確かに気にはなるよね。

「え？ マニユアル？ そういうものは特になかつたわよ？」

「んじやなんでなのさかがりん！ あてつけか！ あてつけなのか!!」

「あてつけでもなんでもないわ？ それに私は早くから必要になつたから」

「ぐぬぬぬぬぬぬ」

「なつたものは仕方がないでしょう？ ……だから自然と着けていたから、誰かに特別

に聞いたわけではないのだけれども、でも、書いてあつたもの」

書いてあつた？

聞いた、じゃなくつて？

……まさか。

いやいや。

けどかがりだからもしや。

「……かがり。一応聞いておくけれど、どこに？ 書いてあつたつて」

嫌な予感はあるけども聞いてみる。

「それはもちろん私が大好きな少女漫画によ！ 一般常識つて書いてあつたわ！」

「ふあ!? マンガあ!?!」

その大きなメロンを張り出すようにして満足げな顔をするメロン。

「恋愛漫画や小説でお胸の大きさに悩むヒロインの女の子が……そういう場面があったのよ。だからお胸が小さい子ってそういうものなのでしょう？ だってあのときの響ちゃん、お胸のことを気にしているように見えたものだから。だから漫画の女の子たちみたいに不便でない程度に盛ることのできる可愛いブラを」

していないしていない。

いや、あのときはしていたんだっけ？

……ダメだ、思い出せない。

「お勧めしてあげたのー！」

お口が開きっぱなしのゆりかと目が合う。

「それに、そういう説明をしても響ちゃん、別に嫌だとかも言ったりしなくって私が選んだかわいいいものをいくつか買ってくれたもの！ だから良いお仕事をしたのよ！」

「いやいや……いやいや、いやいやいやいや!？」

……確かにあのときは、女の子の体になってどんな反応すれば良いか分からないもんだからって諦めきって着せ替え人形になっていた。

当時はかがりの言うことが正しいんだって。

服屋の店員さん、しかも高校生に見えたこの子の言うことが、女性の……たとえ小学

生に見えたとしても一般的なことなんだと思っていた。

だからこそパッド入りのあれを初めの頃に何回か着て、そうしたらなんだか不思議な高揚感があつて、でも慣れてきたらすぐに飽きてダンスの奥にしまい込んであるあれを勧められるままに買ってしまったわけだけでも。

どうも、ゆりかの反応を見る限りでは……普通じゃない。

僕は女歴がもうすぐ1年になるのを前に衝撃を受けた。

「いやいやいや、だからねフツーは……って言つても響みたいな上流階級っぽい、てか確実なところは置いといて……あ、いやたぶんどこもおんなじだわ。うん。一般的にはどんな環境だったってフツーの女子はパッド入りブラなんて……コンプレックス解消のために自分から選ぶ以外にはないからね？ いや、マジで。そんで人には絶対言わないし。あ、見栄とか見栄えってのもあるけどそれは裏切り者だ」

「え？ そうなのゆりかちゃん？ ……い、いえ、でもお友だちの中にもそうした方がいいからってお姉さまやお母さまに言われてしているっていう子が」

「それ家族だからね!!」 秘密、言つても平気な距離の人たちだからね!!」

「……え」

それを聞いて固まるかがり。

僕はずいぶんと前から固まっているけれども。

かがりから僕を隠すように、すすすすーと背中を向けながら……両手を広げながら近づいてくる……後ずさってくるゆりか。

「……ま、まあ、響が同級生だつて聞いていたつて。どー見てもロリロリしい、あるいはシヨタシヨタしい響に胸、盛るなんて発想したかがりさんが。うん、私よりも背の低い響に対して……つまりは銀髪ロリ巨乳に仕立て上げようつてしてたつてゆ——……えつと、その。つまりはやっペーお人だつてわかつて……ね？」

こつんと背中が僕のおでこに当たつたと思つたら振り返つてきて……なんだか悲しそうな顔をしながら僕を抱きしめてくるゆりか。

……なるほど、レモンだ。

あるとは分かるけれども……ブラジャーの柔らかい丸み……ああ、パッドじゃなくつて形を守るためのそれでできている丸み、だつてレモンさんだから……それを顔に、目元にふたつ感じる。

頭の上から悲しそうな声が降ってくる。

「……私。正直。少し。ちよつとだけ。……ううん、いや、やっぱりね、それつて……ヒク、か、なあ……？ ……ね、ねえ響？ 他にはヘンなこと、されてないよね？ 響が無知だからつて、そんなときは今よりも警戒心なかつたからつて言つて体許したりしてないよね!! 例えば剥かれて下着をかがりの手で穿かされたりとか着けられた

りとかしてないよね!」

なんか本気で心配してるっばいゆりか。

……かがりつて純粹過ぎるからそういう危ない気質は持つてないって思うよ。

けども嘘は良くないこと。

どうせいずればれるんだ、ひと思いに言つてあげよう。

「うん。上だけだけどね。ブラジャーのつけ方というものを教わったときに脱がされた。ああ、下は流石に断つたよ」

「響ちゃん!」

女の子同士でも体育のときとかプールとかでお互い見たりするんじゃないかなとは思うけども、さすがに初対面とかそれに近い状態するのは女の子同士でも普通じゃないっばいね。

「ねえ、かがりん? 響のこと、つい最近までは女の子だつて思つてたんだよね? 幼女だつて思つてたんだよね? なのに知り合いの段階から……一見さんの状態でハダカに剥いていたりしていたの? 私、ブラ初めて買うときだつて何個か持つて来てもらつたくらいだつたよ……?」

くるりと回つて僕を見下ろしてぱつっんな髪の毛が僕の顔にかかるくらいまで近づいてきたゆりか。



「ね、響。ほんと。念のため。念のためだよ？ 今後はね？ そ、その……かがりんとふたりつきりになるのだけは避けた方がいいかも。いや、マジで。ホントマジですよ？ ……響が男の子だって知ってる今だからこそ本気で。私からの忠告。うん。なんか危険な香りがするの……」

かがりはかがりだから問題ないと思う。

ゆりかの考えているような「そういう危ないこと」なんて起きるはずがない。

この子の場合はただ単純に着せ替え人形をしただけ。

お人形さん遊びをしたいだけ……つてのを言ったらまた大変なことになりそう。

「……大丈夫だと思っけど」

「その油断！ だって響だから！ その隙の多さが乙女……あ、いや、えと……乙女の反対な表現分かんないけど、とにかくカラダの危機なんだってば！ つまりは貞操の危機つてやつなの！」

何がどうなつてこんな話題になつたのかは分からない。

けどかがりは大丈夫だっと思う。

……でもかがりの近さは普通じゃなかったみたいだから気をつけはしようっと思う。

あのゆりかがここまで本気で心配してるもん。

## 46. X4話 女装？ その1

静かな休日の午後。

病室にはベッドで寝転ぶ僕のほかに、器用に椅子の中で丸まるようにしてページをめくっているゆりか……ああ、体が小さいからできるのか……が、ぱつつんを斜めにさせながら収まっている。

その隣の椅子には、さよが……こちらはぴしっと姿勢を正して90°。な格好で……ああいう座り方って重心がうまく行くから思ったよりも疲れないんだよね……髪の毛を背もたれの後ろに流しながら、文字に意識を向けている。

そして僕もまた、せつかくだして遠慮せずにベッドに横たわったまんまっといういつもの読書の姿勢で、腕が疲れたら向きを変えるっていう感じでわりと頻繁にころころとしている。

……静かな空間にぺらぺらとめくられる紙の音と、ときどきの衣擦れの音。

ただ、それだけ。

3人も居るのに誰もしゃべらない時間が流れる。

……ああ、嬉しい。

この子たちと、この子たちだけと一緒のときだと本当に嬉しい。

だってこんなにも静かにして過ごせるんだから。

10年近く、必要のないとき以外は外にも出ないし口を利かない生活をしていた僕にとつては天国だ。

まるで図書館とか静かな人しかいないときの喫茶店みたい。

ああ、快適。

……いつものようにかがりがいると、それだけで場が「話すもの」になっちゃって、声が途切れることなく満足するまでうるさいもん。

りさもりさでやっぱりおしやべり好きっていう「いわゆる女の子」だし。

その点、このふたりなら僕とおなじく本が好きっていう性質を持っているから読書の時間ってなると基本、話さなくても平気だもん。

……ゆりかが今日持ってきて積んでいるのはマンガだけど、それでも静かにしてくれていてなにより。

もう1回ごろんと寝返りを打つ。

ちらつと来る視線が2対。

でもすぐにまた紙に夢中。

もちろんゆりかも相当のおしやべり、最初の何回かのお見舞いではいつもどおりに、

かがりとおんなじように話すのが止まらなかつた。

なにしろ半年分の「話さなければならぬこと」があつたもん、しょうがないよね。けれどもそれが一段落してからは、来てしばらくの雑談を終えるとさつさと読書モードに入ってくれるのが嬉しい。

何回か招かれたゆりかの家での過ごし方に似ている気がする。

こういうのって良いよね。

みんなで静かに過ごすのって。

かがりが来てしまうときだけが特別なんだ。

話題が尽きることがなくなつて口が疲れるっていうこともなくなつて、しょっちゅうお菓子を取り出しては食べるっていうのが止まらない彼女だけが。

「……ふいー。あ、響?」

椅子の上で体を静かに起こして静かに声を上げるゆりか。

読書中って静かなのに慣れているから、そうして音のトーンを抑えめにしてくれるのがすごくありがたい。

うるさいのが苦手な人相手の接し方っていうものを熟知している。

さよと僕っていう、人よりも本の方が好きな質の人のことを。

隅っこでじゅめつとしてるのが好きなタイプを理解してくれているだけで奇跡なんだ。

かがりとか、本を読んでいてもいきなり起き上がったては普段のトーンと早口でにじり寄りながら話し始めて止まらないもんな。

あの子にはもう少し……いや、かなり、なにかが足りない。  
全部かもしれない。

突き詰めるとデリカシーってやつなんだろうけれども。

「コレ読んでてちよい聞きたいこと思い出したんだけどさ、今いい?」

「うん」

しおりを挟んで本を枕元に置いて、もうすっかり慣れた、痛まないようにベッドの中に収納してあった髪の毛を片手で引つ張り上げながらもぞもぞと体を起こす動作。

……ほんと、切れないもんかなあ……この髪の毛。

いつか切つてやる。

いつか、必ず。

魔法さんをどうにか説得してだ。

「あー、えーと……コレ、響がヤーな話題だったりしたりしたらスルーしてくれてぜんぜん平気なんだけどさ? いや、ほんとにね?」

ふむ、ゆりかが予防線を張っている。

となると病気とか性別とか身長的な話かな?

こういうのを普通に話せるようになる、なんか友達って感じがして良いよね。

「ありがとう、んじやね? ……響ってさ、中身は……心は男の子なワケでしょ?」

「そうだね」

「てことはさ、響にとつてはスカートとかな女の子な服装ってさ? それこそ去年かがりのところ行くまで着てたような服装ってさ? てさ? それって『女装』ってことになるのかなーって」

……………。

よし。

なにも問題はない。

ないんだ、うん。

大丈夫、僕は大丈夫。

大丈夫って思ってるんだから大丈夫に決まって大丈夫なんだ。

「……あの、ゆりか……さん? それ、今聞くこと……なんですか? 響さん……驚かれています……けど」

「だからヤーならスルーしてつて言ったのよ? さよちん。響ならそのへん華麗にスルーしてくれるはずだしさ。それにほら、響ってなんてゆるかけっこーに重い話題とこでも平気なところあるからさ、こうしてとりあえずで聞いてみることできるのよ。こ

れがつーかーってやつ」

「えつと……ええと……」

ゆりかと僕をわたわた髪をぶんぶんと振りながら見てくるさよと「あくまで聞いただけけど?」って感じの表情をしているゆりか。

……うん、デリケートって言うかセンチティブな話題ってむしろそうやって聞く方が変な感じになりにくいよね。

ゆりかは見た目に反して、予防線を張るとか人に気を遣うとかそういう面では見た目よりもずっと年上だからなんだろう。

僕とおなじく小学生に見ることもできる、その外見よりは。

「ひびき、怒ってる?」

「………ううん、別にいいよ。性別……性自認というんだけど、それを伝

えた時点でいつかそう聞かれるものだと思っていたから。覚悟はしていたから」

「そー? ホントに大丈夫ひびき。私が言うのもただけどやな思いはさせたくない

し、あくまでキョーミだから断ってくれてもいいのよ? 聞かなかったことにしてくれ

てもぜんっぜんいいよ? ……ホントにいいの?」

「うん」

「……響さんが、そう言われるのでしたら、私は何も……」

ゆりかがわずかにほっとした表情を見せる横で真つ赤になっっているさよ。  
うん。

大丈夫。

本当ならあの大みそか……の告白のときに聞かれるって思っていたし、だから僕は大丈夫。  
大丈夫。

完全に……このタイミングで、読書してほんわかしていたところに突然に振られてきたけれど、けれどもまだ大丈夫だ、大丈夫。  
大丈夫。

だいじょうぶ。

……だいじょうぶないかも。

「いやー、だつてき響、今こそ入院してる人の服……なんていうんだっけ」

「病衣とか入院着とか呼ぶらしいね。呼び方はどうでもいいと思うけれども」

「そー。んでさ、そうじゃないときの……えと、ふつーの、普段の響つてさ。私たちと会うときはほとんどいつものあのカッコだったじゃん？ パーカーと帽子とズボンと靴しか見えない、あのカッコ」

「そーだね」

家から出るときに銀髪系少女誘拐拉致監禁極悪非道って思われなかったために少年って



なんとか見られようとしてたからね。

「けど、かがりんと出かけるときとかにはさ……私にも見える見える、そーとーにごーいんに……いや、ダダこねてかな? スカートとかの女の子なカツコさせられてたんだよね? ……だよな? さよちん。かがりんからのいつも通りに妄想で誇張された部分を省くと大体そんな感じでしょ?」

「え、あの。 ……あう、あの、その」

あ、ぱつつんをいじりながらの、僕の顔色見ながらゆーつくりと話してる感じのこのゆりかの態度。

なるほど、あれからこういうのを全然聞かれなかつたって思っていたけど……みんなから遠慮されていただけ、か。

当然か。

かがり以外ならその辺りの配慮は……中学2年生でもできるんだから。

中学生って、とつくに成人した僕からすると子供だけでも実際には人生経験分以外の精神年齢ってそんなに変わらないし、ましてや女の子は早熟だし。

かがりは……そもそも僕のことを未だに女の子だって認識している感じが残っているしお花畑に生きている子だから例外ってことで。

「……気にせずに話してくれて構わないよ、さよ。 どうせ君には見られているんだし」

「いいなー、見たかったなー私も響のかわいいところ」

「見ても大したことはないよ」

「……いやいや、んなことないでしょ。でしょ？ さよちゃん」

「え、えつとお……」

……黒めがねさんが否定しない。

「それでそれで？ そんなときの響って、どんなんだったん?? ね、ね??？」

「あ……えつと、ええ。 すぐく——すぐ綺麗で美しくて。 まるで雑誌のモデル……」

「ええ、映画やドラマで出てきそうな……そのような感じで、とても素敵……でした」

「へえ——……いいないないな」

……あれは。

あれは、人生の汚点だ。

やっぱりどんなことがあるうとも人に見られる場所、家の外で女装だなんてすべきじゃなかったんだ。

いくらかがりに唆されて拐かされて強制させられても断固として拒否すべきだったんだ。

嗚呼。

1回見られたものは、何度も見られたものは、もう、どうしようもないんだ。他人の記憶は消せないんだ。

ああ。

あの、初めて外に出た日に戻りたい。

僕は割と「過去に戻つたら」って言うのを寝る前とかに考えるタイプだけでも、普段以上に悔いている感じがする。

ああ、戻りたい。

戻つてあの記憶と記録をこの世から抹消できたなら。

僕は努めて表情筋を普段通りに脱力させて、かつ熱くなつてくる顔を冷ますように……今読んでいた本の哲学的な部分のことを必死で考えていた。

## 46. X4話 女装？ その2

女装。

女装。

……女装。

女の子にはなってしまったけれども、でも主観的には女装。

男の意識で女の子の格好をするって言うのは、女装。

僕にその気がなかったと言えば嘘になるのかもしれない。

だっているんな服を……かがりに無理やりに着せられなくつても、ときどきなんとなく買つては着てみて「似合うなあ」って思っていたし。

つまり僕は心のどこかに女装願望って言う変態的な嗜好を……？

「ねー、確かかがりんとひびきんが初めて会つたのつて」

「……君と出会う、ほんの少し前だね」

「あ、そーそー。そんでさ、そのとき会うきつかけになつたのがかがりんがバイトしてた服屋さんで、んでお家で着せられてたお嬢さま系な……ひらひらのついたかわいーやつか清楚って感じのやつかは知らないけどさ、そーゆーのがキライだからって、せめて

ふつーの女の子っぽい服がいいから選んでって感じだったって感じだったけ？」

「……そうだね」

男ものも頼んだはずだったと思うけどなあ……。

そんなぱつっんは結構気まずそうに、でも止まらないって感じに続けている。

うん、こういう話って楽しいよね……聞く方は。

「でもでも、かがりんと会うときだつて『よつぽどじゃないとスカート履いてくれない！』つてグチつてたところからすると、ほとんどパンツルック……ズボンだったんだよね？」

「……ある程度なら女性、女子なファッションの語彙も分かるから平気だよ」

「あ、そつか。イントネーション違うけどズボンのこと『パンツ』つて言ったりするのもっ……」

「それは結構普通の男……男性でも知ってるとは思うよ」

「へー、そうなんだ。あ、で、普段は完全に男の子ーって服装ばつかなんだよね。だから……ま、響のその話し方とかクールさとかもあるんだけどさ、普通の響を見ると男の子にしか見えなかったわけよ。髪の毛隠されてたのがいちばんでかいかな……フードとか取ってもさりげなく後ろの毛がうまーく隠れるようにしてたし」

「ん……まあね」

まくし立てるゆりかと、まーだあわあわしているさよ。

けど、こうして僕自身のことを分析されるのって……その。

むずがゆいというか、なんというか。

「そんなだから私たち……りさりんも、響が男の子だって疑いもしなくってさ？ でも

『響が女の子なんだけど男の子だ！』って聞かされたときからずーつと気になってたの

よ。心は男の子、けど今まではずーつと女の子お嬢さま扱い。だから響、どっちの

カツコがいいのかって」

「……もちろん男のものだよ。僕自身の……肉体ではなく心の、魂の感覚は男だから。

性自認っていう言葉もあるらしいけれど、とにかくそういうことなんだ」

「……えつと。……そういうことでしたら、響さんにとっては……あの、女性の格好と

いうものは……」

「……うん。前はともかく今は『女装』っていう感覚になるね」

なるべく嘘はつきたくないし、それに事実なんだ。

いろいろとしているうちに薄れてきてはいるし、もう10回以上も外で……スカート

の頼りなさに困りながら、人の視線に困らされながら、女の子として歩かされた経験か

ら慣れてきてはいる。

だって初めの頃なんてスカートに脚を通すのだって、ひらひらひらひらするしふとも

もに擦れるし頼りなさ過ぎてどうしようもなかったし。

子供用でも、無くなっちゃった分敏感らしい前の部分にびったり張り付く感覚で飛び上がった女の子用のぱんつを穿くっていうのだけでもずいぶんと恥ずかしい思いをしたもんだし。

女ものを着て女の子な姿をして鏡を見るだけでも女装してるって感じられて恥ずかしかったし。

外に出るのだってものすごく勇気が要った覚えもあるし。

「これは必要なことで大切なことなんだ」って自分に言い聞かせないとできないことだったんだから。

でも、慣れっていうものはすごい。

今じゃこうやって指摘されなければそこまで意識しないもんね。

「けどさー、それでもお家に帰ったらお嬢さまなんですよ? あいかわらずにひらひらひらひらしててふりふりふりふりしてお淑やかーな感じの」

「……そうだね、半分くらいはね」

お嬢さま設定。

今さら「爺やかとお抱えの運転手とかなんていない普通の一軒家でひとり暮らしなんだ……」なんて言えない感じだし、このままになっちゃいそう。

どうでもいいことだからそのまんまにしておくけれど。

「……つまり響さん……お家の方……いえ、ご家族、ご両親にも男性……だと、思っ  
て見てもらえるようになったということですか……それは、とても良かったです……」

うん……普通の家なら家族がいるもんね……僕はいいけど。

いや、一応今はマリアさんたちが保護者って感じで通してるけどさ。

「ふーん……あ、でも、ソーだってことはさ、女の子のカッコしててもそこまでヤじゃな  
いんだ？ だってかがりんとそーゆるーカッコしてよく出かけてたらしいし」

「頻繁にじゃないよ。 かがりがわがままを言っつて駄々をこねて仕方がないときだけだ  
からね？」

「なるほどなるほどお。 つまりはあれかい？ 響にとつては、前からそーだし慣れて  
るけど、少なくとも今の響にとつてはスカートとかワンピースとかが女装って感覚になるの  
は変わらんとというワケね？」

「……………うん」

「いいないいなー、いいないいなあ——……私も女の子ーな響、見てみたかったなあ——  
……。 ね、ね？ さよちゃんもそうは思わないか！ 改めて今見てみたいって思わない

!? 考えてみたまえよさよとん！ この、ひびきのこの見た目で！ 響のホントの性別  
知ってるからこそ、こーんな長い髪の毛でも男の子だっつてしか見えないでしょ？」



「……………え……あ、はい」

「なのになのに、こーんなキレイ系クール系シヨタっ子なひびきが、かがり仕込みのかわいー服着てるのって……ね……? 見たく、ならない? ね、ねえ?」

「え……えつと……そう、かも……」

「だよねだよねー、あー見たいなー、せめてりさりんと私っていうまだ見てない哀れな女子たち的には見たいなー、見たことあるさよちんもまた見たさそうな顔してるなー」

「え……ええと……ええつと……」

……ゆりかの目がおかしい。

直接的な表現にすると、かがりの目と同じになっている。

つまりこれは……避けられないと見た。

もちろん僕が本気で拒否すれば済む話なんだけれど、それまでする気力がない。

そこまでする理由もない。

なによりもかがり……ときよには見られているんだし。

女子は、いや、女性は——不公平には敏感に反応するという。

……つまりこれは、そういうことだ。

放っておくといつか爆発するあれ。

爆発物をほったらかしにして別れるわけには……いかないよね……。

「……いいよ。今度……持って来てもらって、お見舞いのときに」

「え、いいの!? え? え?! マジ!? マジで?? 私てつきりお断りかって思ってた! やったね! やっぱこういうのって言ってみるもんだね!!」

がたつとイスから立ったかかって思ったらすぐそばまで来ていたぱつつんさんの下からの鼻息が熱い。

ついでに言えば遠くのはずの黒めがねの中の目も輝いているように見える。

……そこまで僕の女装が見たいの……?

あ、女の子だから単純にかわいい服を着ているのを見たいってのもあるのかな。

「……着ること自体には慣れているし、女装感はあるけれども……だけど君たちは僕のことを男扱いしてくれるんだ。そんな格好をしたとしても。それならいいんだ、君たちがそれで満足してくれるのなら……」

流れでOKするしかない圧力でOKしちやっただけども……ま、まあ、大丈夫。

少なくともかがりのように……夏のかがりのように、徹底的に「小さい女の子」扱いはされないのなら僕のメンタルはまだまだいじょうぶかもしれない……かなあ?」

「……で、ですけど。響さんはそういう格好をするのも……えっと……その」

「男の格好の方がいいのは当たり前だけれども、女ものを着けていても男扱いをしてくれるのなら、そこまでは気にならないかな……だって肉体的には女なわけだし。君たち

なら茶化すようなことはしないでろうし」

女歴。

自分で思いついておいてなんだけど変な表現だけでも、冬眠していた期間も含めれば1年近く、そうでなくても半年も経っているんだ。

落ち着いて考えてみれば、もう今さらって感じもする。

「!!.. じゃ、じゃさじゃさ!!.. 着てもらおう服ってリクエスト可能ですかそうだと私とってもうれいんだけど!? だってだって私にとつては、あ、りさりんもそつか、とにかく響のスカート姿とかつてはじめてになるんだし、響さえいいんだつたらホントにいいんだつたらかがりんイチオシのベストとかリクしたい超したいコスプレとかもしてもらいたいそのくらいは私たちがお金出して買ってくるから良いでしょ良いでしょひびきねえひびき!!..」

「.....いいよ」

「いよつしやあ響がキゲンよさそーな感じだからって言いだしてみてもよかつたホントによかつたあー!!」

ちいさい全身でガッツポーズを取るゆりか。

.....僕は、見た。

さよも、後ろを向いているけど.....ぐっとしているのを。

「ならなら、さっそくにかがりんにご相談を……あ、ちよいタンマ、響がかわいいーカッコしてるともつかい想像してみたらわりとヤバめ、タンマタンマ、鼻血出そう」

のそのそとイスに座り直して突っ伏しているゆりかを、いつになく俊敏な動きで心配しているさよ。

「……ごめん、心の準備できるまでもちつと待つて。ドキがムネムネでヤバいの」

「……そこまでのでしたら……えつと、無理をしない方が……」

「いや、無理じゃないの。いんや、無理をしてでも見なきや行けないの……それが可愛いものを愛でる私たちの宿命だから……」

……もう遅い。

場の雰囲気と罪悪感とが混じって「いいよ」って言っちゃったんだ。

もう発言を無かったことにはできないんだ。

ああ。

やっぱり僕って押しに弱いちよろい男なんだ……近い内に女装させられるけど。

## 46. X5話 女装…… その1

「僕がしているのは女装か否か」っていう切実になっちゃった話。

それはあつという間に広がった。

女の子だもんね……そうだよね……。

病室が狭い。

厳密に言うとな僕の周りだけが狭い。

狭っ苦しい。

僕は囲まれてもう逃げられない。

スマホの中に保存されている写真と、ここにいる僕とを何度も何度も見比べられてる。

帰りたい。

「ほほう……ほーほー……ひびきがねえ……」

「すごいわねー、男の子だとしたって……かわいらしくて素敵だと思うわ？ ねえ？」

「……え、ええ……素敵……です……」

「でしよう!? そうでしょう、このときの響ちゃんはっ!」

個室で、しかもすみっこの特別な扱いのここだって、さすがに姦しい5人が揃えば狭くはなる。

しかもみんながベッドの周りに椅子を並べて至近距離で取り囲んでベッドから降りられないようにしているもんだから、そりやあもうね……。

自信満々のかがりの顔が特に近い。

近い。

うざったい。

「もう、響ちゃんったら照れちゃって！」

憎らしいくるんくるんに囲まれたほっぺをぐいって押したらなんか喜んだ。

この子はもう駄目だ。

僕の痴態な黒歴史な写真を僕にいちいち見せてくるために、みんなよりもずっと近づいてくるもんだからとにかく近い。

押してもさらに喜んじやうあたり本当に駄目な子だ。

気を抜くとすぐに、くるんっしてしているまつげが見えるくらいのゼロ距離にまで迫ってくる。

この子はこう……どうしてここまでべたべたしてくるんだ……。

「……………」

なすすべもない僕はぼーっと見渡す。

さよは席に座ったまま、かがりが見せに来るのだけを待つてくれている良い子。そこまで騒がないし。

それだけでも救われるっていうものだ。

続いてはりさ。

いつものようにゆりかとかくつついては彼女と一緒に画面を見ている。

彼女もまたじつくりとは見るけどもそこまで騒ぎ立てたりはしないから、まだいい方。

表現もいくらかマイルドに選んでくれるし。

うん、この子たちはいいい子たちだ。

問題は——いつもものふたりだ。

その片割れのゆりか。

とにかくもまあ、服装が替わるたびに思いつく限りの似ているキャラクターを挙げてそれをネットですぐに探し出して僕に見せてきて「髪の毛も同じようにしたらクオリティ高いコスになるよ!」とか何とか迫ってくる。

もちろん冗談じゃない。

でもゆりか自身は本気みたい。

コスプレとかでいちいち探しているし。  
止めて。

構わないで。

……そしてこの写真を見せている元凶。

彼女に撮られさえしなければ、そしてそれを思い出してきたりなんてしなければ……  
そもそもこんな目には遭っていない、くるんくるんくるんとしていた彼女。

かがり。

やっぱりくるんメロンだ。

「けど響さん……普段の、私たちと会っていたときのいつもの響さんからは想像もでき  
なかったけどね？ こうしてかわいらしい服を着ていると、見た瞬間にびっくりしちゃうくらいにかわいらしいわねー」

「でしようでしょう!?! りさちゃんもそう思うでしょう!?!」

「ええ。 確にかがりがりさんが言うだけのことはあるわねえ……」

そう、りさに精査され。

「あ……わ、私、は。 こちらの響さん……え、あ……はい、そちら、です。 ……の、  
響さんが……えつと……いちばんだと……はい」

なんだかんだで見せられたら普段に無く食い気味なさよ。



配慮なのか好みなのかは知らないけども「女装」の中でも比較的マシなのを選ぶ良い子。

「あらあら、さよちゃんはシックな感じのお洋服な響ちゃんが好きなの?」

「ええ……はい。なんと、なく……ですけれど。その……怖い感じが……」

「……え? あのさ、かがりん、マジ? マジでこれ響なん? ウソじゃなくて? 加工とかじゃなしに? うそーん」

騒ぎ立てた片割れのくせに、いざ見てみると何回もかがりに訊ねているゆりか。

「そうよ? どれも同じ日に……こんなこともあろうかって、先輩方からいただいたいたものも含めていろいろ組み合わせて着てもらったのよ、響ちゃんに」

なんでこんなことがあろうことになっちゃったんだろうね。

「だってこのときの響ちゃん、ほんつとうに素直に着てくれそうな雰囲気だったから、前からずっと考えていた順番で、上なら上、下なら下、ワンピース系はワンピース系でっ感じてね!」

「長い長い長い! あと近い近い近い! 胸で圧死するようこんちくしう!」

かがりに押し潰されそうなゆりかを見てちよつとだけほっこりする僕。

「けど……や、ほんと。お顔はどれどれ……ううむ、確かに今ここにおわします響とおんなじだけど、だけど……へえ——……髪の毛いじって服も選ぶとここまでなる

のかー、へ——……。 あ、これ。 なんか、あのゲームで出てきた感じに似てるかも」  
あのゲーム？

……ああ、ゆりかが僕に接触してくるきっかけになったっていう。

そのせいで僕はたいへんな目に遭っているんだ、発売元には責任をとって欲しい次第。  
第。

「それで、ゆりかちゃんはこの響ちゃんがお好みなのかしら？」

「むっちやくちやお好みですががりさま!!」

ゆりかがますますうるさい感じになりつつある。

かがりは最初からぜんっぜん変わらないうざったさ。

「それでねそれでね!! 響ちゃんはね、素材がね! なんにもしなくたっていいものだから、それはもう映えるのよ! 分かる? 顔つきも体つきも、モデルさんとか西洋人形さんとかのそのままなものだからイメージ通りに着せ替えできるの! だからどのような服だっけいちどは着せてみたくなるのだし、実際にしたのよ!」

されたのよ……じゃない、されたんだよね。

「ええ、多少大きくてもそれはそれでそういう着こなすという感じになるっていいわよねー、それでそれで、どれでも平然と着こなしてくれるものだから私も張り切ってますって、手当たり次第にバリエーション豊かに組み合わせるみて後で選別しようかって

思っていたのだけれど、実際にして見たらどれも消せないくらいに似合っていて！ おかげでその日のお昼を挟んで何時間も楽しい時間が過ごせたのよっ」

僕にとっては正に地獄の数時間だったけどね？

かがりが突出してひたすらに口開いているけれど……よりもよつてこの4人が次から次へと僕の黒歴史とも呼ぶべきあれを眺めて感想を言い合っている。

……本当にどうしよう、これ。

こんなことになるだなんて思ってもいなかったから、諦めて「いいよ」つて言っちゃったばかりにこんな事態になっている。

なんで僕ってこんなに年下の女の子に対してはつきりNO言えないんだろうね。

僕も不思議。

……写真。

一昔前の表現だと写メってやつになる。

僕の上の世代なら通じて、その下には通じないときもあるちよつと古い共通言語。

あの夏、かがりに頼まれて……いや、迫られて断れなくて仕方なくいやいやに諦めて被写体にならざるを得なかった写真。

かがりがなぜか自室のベッドの下の引き出しに持っていた、僕の体にぴったりのサイズがほとんどだった服の山。

なぜか。

なぜだ。

それを順繰りに……後半からは、いや、前半の途中からかもしれないけれど、とにかく僕の記憶から抹消されていて気がついたら家に帰っていてズボン脱ぎ捨ててクツシヨンに埋もれていたのを僕自身が僕自身で発見したほどのダメージを負ったんだ。

つまりはまた「お人形さん」させられたわけだ。

つらい。

悲しい。

こういうのって「つらみ」とか言うんだってね。

しかもよりにもよって僕を良く知る残りの3人に、今この場で、当人の目の前でご開帳するっていう拷問を受けているんだ。

つらい。

帰りたい。

けど今はここが寝床だからもはや逃れられなくって。

それに……どうせいつものように僕の周りにはみんなに囲まれていて逃げられやしないんだ。

いつものように。

……全員が揃う前に、かがりとふたりきりになれたスキに「どうしても!!」って僕なりに精いっぱい凄んで見せたのがよかったのか……いやなんか変な顔していたあたり凄めていなかったんだらうけども、あまりに恥ずかしすぎるものは別のアルバムに入れておいてもらったから致命傷は避けられている。

それ以外の写真をこうして見られているだけでも充分に致命傷だけでも。

だけど僕は、初めてこの身で理解した。

証拠つて言うものは、写真つて言うものは……なによりも人を脅して言うことを聞かせるのにこれ以上なく効果的なんだ。

ひとたびそれを誰かに握られたが最後、すべての恥をひけらかす覚悟がないと言いにりになるしかないんだ。

そう、今の僕のように。

初めはベッドの中で、せめて視線は遮ろうって思っていたけれど写真が変わるたびにベッドに乗っかって、僕の上に乗っかって真っ先に見せてくるもんだから……だから今はこうして体育座りをしてぬぼんっっているんだ。

もうどうにでもしてくれっって感じの鯉みみたいな気分で。

それもこれも僕が男だっって会話を改めてしちやっただがゆえに、みんなも僕もそれを意識しちやっっているからなんだ。

つらい。

ああ、こんなことになるんだつたら家に帰って女物を……かがりに用意されたものよりも僕がぎりぎり大丈夫な女成分抑えめな服を取ってくるんだつた。

そうすれば……ああいや、それだと駄目かもつて思つたんだ。

かがりが好きそうな感じに上はふわつとしたシャツに厚手の羽織り物、下は上のデザインに合わせたスカートにタイツつていうのとか。

だけでもヒートアップしているかがりに一蹴されて「家に取りに行つてくる」つて言われたが最後、どんな格好をさせられるか分からなかつたばかりに提案しちやつたんだ。

——「夏休みにかがりの部屋で、好き勝手に着替えさせられたときの写真が残つてい  
るよね？ それでいいよ」つて。

消してくれてるつて言う淡い期待はすぐに消えちやつた。

あれは正に、女装つて意識が強かつたがゆえに……恥ずかしかつたから、かがりによるといいはにかみ具合だつて太鼓判を押されちやつたときのものだから、今見せられると余計に恥ずかしいんだ。

それなのに家に帰るのがめんどくさいのとダメだしされるのもまた嫌だからつて、写真を見せれば話が早いじゃないかつて言つちやつたもんだから。

……あのとときの僕はおろかだった。

愚者だった。

そのせいで……ほら、今の僕はこんなにも後悔しているじゃないか。

なにが悲しくて中学生の女子たちに……ひとまわりも年下の子たちに僕の女装姿を見られなきやならないんだ。

……いや、どつちにしろそうさせられてはいたんだけど……なんていうか、こう、覚悟ができるかどうかって違いがあるんだもん。

あのとときの服装。

かがりが指示するのに合わせて体を動かしながら着飾られていたときのだから、それはもうふりふりつてした赤とピンクと白がメインで、リボンなんかつけられていた覚えもあって……そんなコーデイネートだったんだから。

それを見せられた僕の身にもなつてほしい。

時間は巻き戻らないって知ってはいるけど、でも思わずにはいられない。

願わずにはいられないんだ。

戻りたい。

この惨劇が起きる前に。

具体的には僕が押しに負けて、めんどくささに負けて「写真でいいじゃない？」って

提案しちやう前に。

ああ。

僕はもういちど膝小僧のあいだに……病院の服だからスカートっぽくて、だからまくれ上がらないようにっていう無意識の仕草をしていたっていうのにまたまたダメージを受けつつ……ほすつと、顔をうずめた。



## 46. X5話 女装…… その2

ああ、もう僕はダメだ。

こんな写真を回し見されて正常な精神でいられるほど、僕は強くないんだ。

いや、弱いんだ。

そうなんだ。

中学生のこの子たちなんかよりも、ずっとずっと。

それこそ、この見た目のとおりに。

いや、下手をしたらこの子たちよりずっと幼いんだ。

だって幼女だもん。

それもそうか、だって今の僕はこの子たちよりも幼いんだ、だから。

「……あー、かがりんや、それとみなさん。私もノっておいてアレなんだけど、そーろ

そろ褒めちぎるの止めて差し上げないとひびき死んじやいそうよ？ 恥ずか死つてや

つで」

がたつと音がしたから見てみた方向にはすごい目してるさよ。

「や、だからほんとにとって意味じゃないって……こんな気の抜けた良い方で危ないわけないからさよちゃんは安心して？」

いや、ここ病院だし……場所が悪いって思う。

とりあえずゆりかが……ようやくに、遅すぎるけれども助けを出してくれた。

僕は果たしてどのくらいの時間辱められていたのかは分からないけどね。

遅かったけどね。

君にも堪能されたけどね。

ああ。

「あ……え、えええええつと……響さんごめんなさいっ！……あの、私もあまり……顔、とか、見られ、たく……ない、という気持ち、分かっている、はず……なのに。なのに、私、は……」

「……いや、いいき。気にしないで、さよ。そう、これは僕が招いたもの。うん、良いんだ……」

さよの方が危なっかしいからちよつとだけ辱められた記憶が薄れる。

いきなり顔を赤くするほどに血圧と脈拍が上がっているさよは本当に体悪いんだからよつほどに心配なくらいだし。

「でも、別に気にすることないんじゃないの？ 響さん」

僕のことを随分と堪能していたりさりりんが割り込んでくる。

「だって響さん、去年までは女の子としてやってきたわけでしょ？ もちろん肉体的にも、れつきとした女の子なんだし」

ごめん、これ言っちゃうとーから説明しなきゃだから言っていないんだけど、僕男として生きてきた正真正銘の男だったんだ……証拠は物理的になくなってるけども。

「だから心が男の子だったとしたって、おかしなことはないんじゃない？ あ、私も響さんのそういうのについてちよつと調べたけど、今ので傷ついたらごめんね？ そういうとき、ちゃんとやってね？ 私、どこまで響さんのそういうのについて話したらいいか分からないからさ」

「おー、りさりりん。なんだか今日のりさりりんは知的だねえ」

「知的じゃないって……茶化さないの、もう。で……まあ、普通に、女の子としての普通としてスカートの服装とかもしていたはずなんだし、今さら特段そこまで恥ずかしがる必要は……いえ、ちよつと待って」

スカートなんて穿いたのはこの1年になってからです。

その前に穿いたら女装趣味ってことです。

でも今はスカート穿いてるから立派な女装家です。

……男に戻ったときにクセが残ってたらどうしよう。

「ねー、ゆりかー？」

「あい？」

む、急にりさりんの声が高くなった……これ、女性が怒る前のやつだ。

「ちよーつと、こつち来なさい？」

「なんで？ なんかりさりんの顔こわひ」

「いいから。 じゃないと本気で引きずってくわよ？」

「はい、わかりました」

「ほら、抵抗しないでさっさと来る」

「はい」

「ホントに分かっているでしょうね？」

「ハイ」

「……みんなはちよつと待つててねー？」

そう言い残したりさりんと首根っこ捕まえられた感じのゆりかが病室から出行って扉が閉まって、みんなイスに座ってくれて……僕の周りと部屋の密度が下がってほつとしました。

つて思ったらすごい声。

「なによ女装って!!」

「りさりーん、ここ、病院。他に人、いる。中、入って、静かにする」

「なんで急にカタコトになってるのよ……まったくもうっ、だからっ！」

静かになつたつて思つて僕と同じように明らかにほつとしていたさよと……ハテナが頭の上でくるんくるんしているだけのかかりを見ていたら、出て行つたはずなのにすぐに戻つてきたふたり。

もつとも入つて来たときとおんなじように母親に怒られている子供、いや、母猫と子猫みたいない状態になつているりさとゆりか。

……冗談じゃなしに、比喩表現じゃなしに……ゆりかが首根っこ、襟を掴まれてぶらんとしている。

「そんな話の流れだつたら気にもするでしょ、常識的な人間だつたら誰だつて！ ましや響さんなんだし！ あんたあんかよりもずつとずつと頭よくて常識そのものな響さんなら!!」

……あ、そっか……りさりんとさよはさつきまで居なかつたから、僕が女装してるつていう話題知らなかつたんだ。

知られたくなかつたけども、今さら後悔してももう遅いよね。

「だからりさりんうるさいよう、耳元で廊下の端っこまで響く声出さないでよう、あとあといい加減に襟引つ張りながら歩かせるの止めてよう、チョークだよこれチョーク！」

「そういうデリケートな話題は絶対に避けなさいって、あつれほどさんつぎんに言っておいたでしょ!？」 お正月に響さんから聞いてから、みんなで調べて!　なのにここでそれ蒸し返したってこと!？」 そりゃあ、あんな顔するわよ!」

「だってえひびぎがいいって言つたんだよう、ひびぎんがあ!　平気そうな顔して!　あと今回の写真な主犯はかがりんだしさあ!」

「人のせいにしない!」

「せいじゃないもん!」

僕のことを想つてなのは分かっているから、それ自体は嬉しいんだけど……その……やっぱり声が大きすぎるんだけど……?」

運動部だからなのかなあ……いや、嬉しいけどさあ……。

やたらと熱くなっているりさと、珍しくしゅんとしているゆりか。

そしてあわあわとして言葉にならない言葉を発しているさよ。

……ひとり、こつちからは興味を完全に失いつつ僕の写真と思しきものを見つつ「えへえへ」って何とも奇妙な鳴き声を発して自分の世界に戻っているかがり。

つまりはとつても混沌としているのがこの病室という空間だ。

いや、5人も集まるところなりがちだった気もしないでもないけども。

……どうしよう、これ。

僕の話なのに僕の手から離れっぱなしの、この状況。

「その前の話よ、前の！ なによ女装って！ 響さんの性同一性……とかいうものは本当に大変なものなんだって分かったから避けましょうって、言っておいたわよね！ あのとさきー！」

「だってえ、りさりん」

「だって何もないわ！」

「ふええ……」

「ふええでもないっ」

「びい……」

「……ゲンコツいつとく？」

「ひえっ」

うん、やっぱりこの中じやりさときさは常識人だね。

いやまあふざけてないときならゆりかとかがりもまともな方だとは思うけど……ほら、結構いつもふざけてるからさ……。

まあ調子に乗りがちなゆりかと、どうしようもないかがりは今少しの成長が待たれる感じかな。

りさが怒り続けていると、いつ病室のお隣さんが……隅っこだからまだ大丈夫かもし

れないけども怖い人が来たりしたら僕が怖い目に遭う。

それは嫌だ。

「……………いいんだ、りさ。ありがとう、怒ってくれて」

「響さん？ ……いえ、ここは誰が見てもどー見てもこんのバカゆりかが悪いんだから、締めるときはきちつと締めないよ！」

りさりんの後輩は大変そう……面倒見は良くても厳しそうだから。

「ううん、ゆりかとかがりは悪意があつてしていたわけじゃないんだ。あくまで友人として……多少の盛り上がりもあつただらうけれど僕を貶めようとして言っていたわけじゃないんだ。それが分かっているから大丈夫だよ」

「そう……かもしれないけど、でも！」

なんで急に声小さくなつたつて思つたら丁寧に話してるんだろ……けどりさは本当にいい子。

友達のためにこうして怒ることができる。

とても貴重な存在。

「この先……の学年だつたり、高校だつたり。大学……社会。そういうところ、もつとたくさんの人がいる世界に出たらそういうわけにはいかないんだよ」

僕は僕自身の人生経験がほとんどないから本とか映画とかからの借り物で言う。



「今だって、僕のような人に対する偏見……いや、知らないというものや誤解や歪められた情報しか持たない人たち、知っても理解はできない人たちが大半を占めているんだ。だからこそそのうちきつと興味本位や悪意を持って、初対面で嫌なことを言ってくるというのが増えてくるはず。それこそ、あからさまな嫌みとかだつたりね」

僕自身は嫌なことに遭つたことはないけども小説の中じゃ意地悪な人はこれでもかつて居るんだ。

きつと現実ならそうなんだろう。

「そつ、そんなことないです！ 響さんに対してそんなことする人なんて！」

「そ、そだよひびき、世の中そんなに恐いものなんかじゃ」

「うん、もしかしたら違うかもしれない。だけれどもきつと確実に、僕たちの想像できない思考回路を持った、自身の感情を優先して動いている人というものは存在するんだよ」

……「この子たちは結構純粋な女の子たちで、見た目も良いから悪い男に引つかかるかも」、そう思つたらちよつと大げさに言つておいた方が良かったと思う。

「みんなは小説とかドラマとかアニメ、映画も好きだけど……その中に、創作だとしてたつてそういう習性を持つ人がいるっていうのは知っているはずだよ。それが現実にも……そこまでではないにせよ、いるということもね。創作は、現実を越えない。

悪意は、悪意から生み出されるものじゃない。そのモデルとなる人物たちは現実  
に、確実にいるんだよ」

女の子になって分かったけど、女の子はとにかく人から見られる。

まあ僕がこの通りの洋物幼女だからかもしれないけども、それ抜きにしても男だった  
ときの何十倍って感じ。

この子たちもきつとそう。

だから「危ない人に着いてつちやダメ」って感じのこと言つたつもり。

「……あの、えつとね？ 響ちゃん」

そういえばますます静かになっていたなって思つてたらかがりが静かだったのか。

どおりで話の途中で唐突に遮られずに楽だったわけだ。

そうだよね、僕がこれだけ長く話すのなんて滅多にないもん。

「その、ね？ 響ちゃん、ものすごく……何と表現するのかしら、ナーバス？ シリアス  
？ それとも神経質？ そう考えているみたいだけれど……少なくとも私は響ちゃん  
のこと、たとえ社会に出たって誰も性別のことでなにかを言つてくる人はいないと思う  
のだけれど……？」

「？」

くるん？

かがりはそんな暢気な反応を返して来る。

……こういうのがほほえましいんだけども、男って言うのは獣。

警戒して損することはない……けども、さすがに言い過ぎちやつて部屋の空気が冷たくなつてた。

そんな中をくるんくるんしながら一瞬で吹き飛ばす感じのかがり。

……一瞬「かがりがいて良かった」って言いかけたけどもよくよく考えたらこの状況そのものがかがりのせいじゃん。

君が何とかして？

僕はまたベッドの上で体育座りして待つてるから。

## 46・X5話 女装…… その3

くるんがくるんくるんしたおかげで僕が作り出しちゃったイヤな空気は薄れたけれども……やっぱりくるんだから何言い出すのか分からない恐ろしさがある。

そんな緊張を感じつつ口を開く。

思わずで言っちゃった、きっと僕が将来……ニートを止めたなら遭遇するだろう社会の理不尽というものについて、念のために。

この子たちが心配なこの気持ちで言うのがきつと、親心とかさういう……。

「しかしかがり、世の中には陰口や因縁や偏見というものが」

「あのっ」

「ここでさよが……かがりの後ろにくつつくようにして、いつの間にかそばに来てい

る。さすがはいつも……読書を邪魔されてでもかがりと一緒な子だ、かがりの暴走を止めようとしてくれているんだ、きつと。

そうだ、君も言っただけ？

世の中にはヤな人だつて居るんだつて。

「わっ……私も、そう、思いますっ。最近……えっと、あくまで学校の授業とかニュースとかで聞きかじった……範囲です、けれど。でもその、響さんのように、体と心の性別が違う……と、いう方だつて、たくさんいるつて。なので……扱いは変わつてきている、つて」

あれ？

そっち？

あ、いや、そうだよ、元々は僕の女装についてだもんね。

肉体的に見れば正常だけでも精神的に見ればアブノーマルなやつ。

「……さよ。それはあくまで、そういうことをきちんと考えられる人に限るんだよ。世の中にはそうでない人たちだつてたくさん」

「私もふたりの言うとおりでと思うわよ？」

「ちよつとごめんね？」つて言いながら僕の頭を撫でてくるりさ……いや本当なんで？  
やっぱりちっこいから？

手頃な低さにあるもふもふだからもふりたいの？

「ネットとかSNSとか、そういうとこだけでもないけどほんつとに性悪な人つてのはどうしたつているんだから、そういう人たちは例外つてこと考えなくていいんだつて

思うの」

……部活とかじゃやな子いるでしょ？

「だけどそういう人はあくまで例外。大多数の人はなんとなく『性別が違うだなんて、そういうものなんだー』って思うだけなの。やなこと言われちゃったりしたら『あー、その例外の人たちかー』って思つとけばいいのよ。私だって『レギュラーだから』とか……えつと、む、『胸がでかいから』とか『告白されたからー』とか私のこと話しているのをトイレで聞いちやったことだつてあるし」

あー、女性つてトイレでそういう話するんだよね……男みたいに興味ない相手のことは興味ないつて感じじゃないから。

「あ。 やっぱそうなん？ なんかやけに凹んでるときあつたけど」

「ええ……たまにね。それが表面上は仲いい子だったりするから女は……いえ、きつと男子だつて少ないとしてもあるんですよ。とにかくあるの。絶対に消えはしない。 だけどそれは『普通』じゃないの。それが上級生だとか先生だとかだつたりしたら無難に『あーそーですか』つて流して避けときゃいいのよ。 キリがないし、どうせ飽きたら別の子に移るんだから」

りさが普段のかがりくらいに近づいてきている。

いつもの……なんて呼ぶんだろう、「汗拭きなんとか」……みたいな香りはしなくつ

て、髪の毛から漂ってくるシャンプーの香りがふわつと来ている。

「むぎゆ」

ついでに頭をなでてた手が重くなって変な声が出た。

「思っているほどには響さんが心配する必要はないわ。私はそう思う。初対面だとか会つてすぐだとかだつたらよそよそしくとかはされるかもですけど、何回か話すうちに『ああ響さんつて子は女の子の見た目だけど中身は完全に男の子だな』つて思つてもらえると……思いますっ！ つてことでこういうのはこれでおしまい！」

「あらやだ、かがりん積極的」

「……誰のせいだと」

「ワタシノセイデスユルシテ」

「……調子には乗らないでね」

僕から離れた彼女はぱんぱんつて手を叩いておしまいの合図。

「あい。……ひびき、さっきのはごめんね。んで私も同意見。……これもカチン

ときたらごめんね？ 響は……えと、ものすんごくSSR……レアな見た目なんだか

ら、ちよつかいかけてくるのは嫉妬に駆られた女子とか熱烈にアタックしてくるロリコンな男とか……女子もいるだろうなあ、男子よりずっと……くらいじゃないかなつて。

つまりはキレイ過ぎるのが——……今のカチンつて来た？」

「ううん」

「そ、よかった!」

とりあえず男からは距離を取ろうって思ったくらいだから安心して?

「けどさーひびき、女装って言ったのは元々はあれよあれ。りさりんが『ツンデレ運動部』とかかがりんが『どたぶんくるんメロン』だとかさよちんが『魔性のメガネっ娘』とかそんな感じの、仲良くなったからこそそのじゃれあいつつもりだったのよ」

「……ゆりか、あんたさ、ここに來るとき。ロビーとかでおじいさんおばあさんに囲まれてさ? 『ちっちゃいねえちっちゃいねえ何年生になったのかな? もう高学年かな?』とか『お姉ちゃんとかお兄ちゃんのお見舞いかい? 偉いねえ』って撫でくりまわされてたときの気持ち、思い出せるかしらね?」

「あ、おつけー万事了解ですやなものはやですねはい!!」

ぼーっとし始めてちよつとしてから気が付く。

……これが世代の違い……価値観の違いってやつなんだって。

今ならトランスジェンダーとか普通に記事とかで出てくるけども、僕が子供のころはまだそういう言葉すら知らなかったし。

みんなの反応が思っていたものと違ったから不思議だったんだけど……そう考えてみるとなんだかしっくり来る感じがする。



なんかやけにみんなが軽いから何でだろうって思ってたら……そっか、時代なんだ。

僕の価値観が形成されただろう中高生な時代は、この子たちのその10年も前のこと。

当時はまだ体と心の性別が違うなんて笑われるか疎まれる。

それが嫌なら隠すって空気だったって思う。

少なくとも今みたいに週に1回はテレビとかネットで……ちようど僕がそう説明している、限りなく事実に近い嘘の「性同一性障害」みたいなものが入ってくる程度には今と昔とじゃ概念を知っている人自体の数が違うんだろう。

授業でやったりもするらしいし。

だから本当に時代が違うんだ。

そうだ。

僕はさんざんに思い知ったじゃないか。

僕がひとりで居たがっていたこの10年、そのあいだに僕は世間に取り残されていたんだって。

浦島太郎。

……女の子のそれはなんて呼べばいいか分からないけども、ある意味で僕はそれなんだ。

玉手箱を開けちゃったら煙がぶわつと来て、それで……この子たちよりもちつちやくて髪の毛も目も肌の色も性別も変えられちゃったっていう感じ。

そう分かるとちよつとだけほつとした。

友達っていうのは……これだけ歳も性別も違うとしたって必要なんだね。

じゃなかつたら僕は今もきつと、今の僕になつちやつたことに怯えてひとりさみしく

……いや、そうも感じずに、あの家の中に引きこもっていただろうから。

「じゃあー！ もういちど見直したところで響ちゃんのベストショットを決めましょう！

ここはトーナメント方式で！」

なんかちよつとじーんってしてたら全てを帳消しにする爆弾発言。

「……かがりーん、それ、昨日読んだマンガとかに影響されてない？ あとこの流れで言

うコトなんでしょーか。 やっぱすげえ」

「？」

「……え、えつと……で、では、私は、その。 こちらの響さんが、やはり……その」

あ、さよも乗るんだ……いや、良いけどね……きつと子猫の写真見る感覚なんでしょ

……？

「かがりんってばどーせどーせいいつもみたいにさ！ 最後には自分が選んだ響ってこと

にするでしょー！ ぶーぶー、権力の横暴だー」

「あ、そうよ、響ちゃん自身の意見も聞いておかないといけないわね！」  
やっぱりどう考えても、絶対に。

かがりに急所を握られているっていうのはよくないことだ。

普段の心理的にも……こうしていきなりにみんなに見せちゃうあたりも。

あ、いや、一応僕の許可は取っているし、そもそも僕が口にしちやったのが発端ではあるけど。

そもそもかがりが話題を持ち出さなければこんな目には遭わなかったんだし、うん。  
やっぱりかがりが悪い。

ダブルメロンさんが、どう考えても悪いんだ。

……お別れする前に、どうかしてあの写真を消させなきやならない。

じゃないとヘタすると「ねえ見て見て！ 昔こんな子とお友達だったのよ！」とか  
言つて次々と友だち知り合い家族その他もろもろにいちいちあれを見せて回られかね  
ない。

そういう未来が想像しなくたって見えるんだもんな。

だから消させなきや。

けどどうやって？

……それが難題だ。

彼女にとって、僕のあの写真以上のものを提供するとなると。

目の前で、新しい服をリクエスト通りに着てやる？

……写真のストックが増えるだけで、僕の黒歴史を量産するだけだ。

お出かけに付き合う？

……新しい服を買わされて着させられて、おんなじ結果になるだけだ。

宿題を見る？

……それが彼女にとってはごほうびになんてならないって知っている。

あれ？

もしかして僕、もう……取り返しつかないことしちゃったんじゃないか……。

「……響さん、いつもみたいになってるけど怒ってるのか……じゃないわよね？」

「だ、大丈夫かと……」

「だいじょーぶ、響はやなときはつきり言うから。多分かがりんのががりんさに驚愕

してるだけよ」

「よく分からないけれども響ちゃん！　ねえ響ちゃん！　響ちゃんはこの4枚の写真の

どれが1番……！」

## 46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その

1

ここはとある中学校の、とある2年生の教室。

その一角で……一応に他の生徒からは聞かれないようにと配慮しながら隅に寄りつつ、けれどもそこそこの声ではしやぎたてる小学生のような……小さい、とても背の低い生徒がいた。

教室をまちがえたなどではなく、れっきとしたこのクラスの、この学年の生徒。

彼女はまるで新入生のようにぶかぶかな制服を、けれども服自体はしっかりと1年と少し分の時間相応のくたびれ方をしている制服を……なまじ袖などが余っているものだから自然、彼女の好きなキャラクターたちがしている「萌え袖」というものを何もせず自然と再現している。

もつともそのせいでノートを書くときには指先以外が隠れてしまうのだが……冬服であろうとなかろうと、長袖を着ている限りには「それもまた萌えなんだって！」などとひとまわり古い表現を友人に言いつつ、やはりいつも書きにくそうにしている。

そんな彼女。

関澤ゆりか。

低身長、「これは制服がだぶだぶなせいなので長く見えるんです、仕方ないんです、ウソじゃないです」などという方便で校則をぎりぎりはみ出した長さまで伸ばしたストリートかつ前髪だけぱつつかんというヘアスタイルをし、これもまた幼く見える要因のひとつであるぱつちりとした目つき。

彼女の髪がこの形に落ち着いたのは、ごく単純。

自分よりも頭ひとつぶん以上背の高い人間と立った状態で話しているとかなりの上目づかいとなり、毎回邪魔になるからだというもの。

ただでさえの低身長、視線は上に向きがちであり、誰彼……知り合いであろうとなかろうと頭の上から手を置かれて撫でられがちな彼女だ、小学校のある時点まではふつうに長めだった前髪をこうして落ち着いたのにも必要に駆られてのこと。

そんな短めぱつつかん、いつも誰かに話しかけていなければ気が済まないような性格の彼女は、この休み時間もまた友人を追い立てるようにして教室の隅にイスだけを持っていき、持つてこさせ、話し込んでいる。

「……ね？　ねねねえー？　いたでしよいたでしよ、もーそーじゃなかったでしよ現実だったでしよゲームとかマンガとかじゃなかったでしよ私せいじよーだったでしよ

ねえねえねえりさりんこの前つから言つてたのは嘘つぱちとか夢遊病とかじゃ

「やかましい」

「ふぎやんつ」

手刀が、ただでさえ小さい彼女を更に縮めんと落とされる。

「あいたー、ひどいよりさりーん……んでさー、ほんとだつたでしよほんとだつたでしよ!!! 響つてゆー、とーつてもちつちやい」

「あんたとどつこいね」

「ひどい……あ、待てよ。ある意味でそれは好都合かも」

「やっぱりあの子の方が小さいわね、頭ひとつぶん以上は」

「あーん、すぐ手のひら返すと嫌われるぞーりさりーん? ……んで、そんなちつちやい子なのに同学年の子、いたつしよいたつしよ!」

「ちよ、こつち来ないでよ! はいはい、ほんとうだつたわね。疑つたことは悪かつたわ。ならその話はおしまいつていうか暑つ苦しいわよつ!」

関澤ゆりかが……対面に座つていた彼女がすすつとイスごと寄せてきて、座つたまま彼女の片脚を……閉じている脚のあいだに割り込ませようとしてきたところで必死になつて止めようとしている友人。

杉若りさ。

ふざけてスカートをめくろうとしてきたところで脳天に向けてもういちど、今度は力を込めて腕を振り下ろせるくらいには座っていても身長差とリーチの差がある彼女は、関澤ゆりかに友人にされたうちのひとり。

同学年の中でも背が高く、クラスの女子の背の順でも最上位くらいを維持し続けており、体型も……放課後や休日の部活動を熱心に行っているせいで体が鍛えられているゆえに、バストが男子の目を引くというのがここ数ヶ月の悩みである杉若りさ。

なお、彼女の制服は……対面の少女のものとは違つてきちんと体に合つており、理想的な姿となっている。

特に、シャツ姿になると嫌でも強調されてしまう胸部は、年ごろの彼女にとっては嫌なものではない。

そして「冬でも髪が長いと蒸れてイヤなのよ、汗かくから」と、髪は短くはないもののミディアムに留まり、かといつておしやれに興味がないわけではないから、こだわりのヘアピンを毎日替えている彼女。

なお、彼女の瞳は……つり目と表現するか、あるいは目力が強いというか、とにかく強い感情が何かと人目を引く。

……特に怒りに関しては「声を低くしていなくても恐い！」とは、セクハラをしようとしてきている目の前の「ちっこい友人」から言われ、そのとおりに叱つてあげた仲だ。



「わっ!? こ、こらっつ、だからっつて立ち上がってひつついてこないでっつてばっ! ……分かった、分かったよっ。ゆりかがとうとうアニメとかゲームの世界に行っちゃったんじゃないかって、響さんっていう子がちゃんといるんだって! アレは心配してのことだったんだから! 昨日実際に会ったんだし、信じた以前に確認したわよっ」

「むふーっ」

すとん、と、小さな体全体で抱きつこうとしてきていたゆりかは腰を下ろし。

「はいはい。 ……けど、さ。あの子、ほんつとにあんたの空想上の存在とかじゃなかったのね。この前それ聞いたとき、実は保健室の先生に相談しちゃったんだけど」

「あ? りさりん?」

「……その流れであんたのお母さんにも連絡行っちゃって、だから私があんたの妄想……響さんについてのこと、逐一報告ってことさせられてただけど……」

「なんですと!!」

がたん、と、小さな体全体で立ち上がり、両手をわなわなと震わせるゆりか。

「悪かったって! だけどきちんと……ものすごく美化したわけでもなくって本当にあのとときの表現そのまんまの子っているのね。比喩でもなんでもないって、初めて実感したわ。その……なんていうか、ため息が出るっていうか、ほんと、なんていうか……そう、あり得ないくらいに整っていてね。 ……褒め言葉でだけど、人っていうよりは

『人形みたいに全てがあるべき場所にある』って感じの顔で。フードから漏れていた髪の毛も輝いているみたいだったし。ほんとう、男の子なのに綺麗としか表現できないわ。あの子、響さんのこと、『実は動く人形なの』って言われた方がまだ安心できるくらい」

「あ……あのー？ いんろいんろと初耳なんですけどお——……」

「だって言っちゃダメって言われてたもの」

「や、そうじゃなくてさあ……けど、あー、どーりで最近お母さんもお父さんもものすんごく優しくなったわけかー、なーんにも理由ないのにいきなりお小遣い倍以上にしてくれて『お友だちどんどん連れてきていいのよー』、『遊びに行くときには使いそうなお金出してあげるからねー』とか言ってきたりー、友だちの名前とか聞いてきたりー。私がイマジナリーなフレンドを創りだしたって思われてたのかー。あーあー悲しいなー傷ついたなー凹んだなー、親友だって思ってたこんちくしょうなりさりんに裏切られてたんだもんなー、これは責任取ってもらわないとなー??? なー???'」

よよよ、と、いつものように演技過剰な……全体的に小さいからこそ映える演技というものをして、悲しんだフリをして。

そして「ちらり」と声に出して、りさを見上げるゆりか。

彼女たちは、イスに座っていても身長差は歴然としている。

いや、そもそも使っている机とイスのサイズ自体が違うのだが。

「ゆりか……あんた、よくそこまで口回るわね……そりやあナイシヨで人に相談したのは悪かったわよ。 けどさ？ ゆりか」

「なあに、今セキニンの内容考えてるとこなんだけど。 あ、そだ、お詫びになんだけど」

「あのさ？ ……響さんのことを知らないっていう前提で考えてほしいの」  
「ほ？」

「茶化さないで。 私の立場になって……いえ、別にあんたが私にこれから言うことを突然に言われたって考えてもらってもいいわ」

「ふい？」

すう、と軽く息を吸って放つ彼女の言葉は——正論だった。

「ねえ。 ……あんたが言っていたように、自分がプレイしたあるゲームに出てくるヒロインみたいな見た目と言動と格好をした男の子とさ、突然に会って。 で、うろ覚えではあるけどおんなじような反応を試してみたら、2回も……2回もよ、そのゲームのシナリオとおんなじような展開になって？ つまりは男女は逆だけど、そのストーリーそのものの流れになって？ で？ 同い年の男の子なのに、あんたよりもちっちゃくって？ あのときも、テーブルが高そうでもっとも大変そうだったわね？ ……それでもって、友池さんよりも頭が良さそうなんですよ？」

はあ、とため息。

話し疲れたのか、それとも、そのあまりの「偶然」にどう反応していいのか分からないのか。

途中からイスにすくと座り直して、あー、とでも言いたそうな顔つきになったゆりかを眺めながら、りさは続ける。

「……正直に言つて、よ？ そんなの……つて言うのは失礼だけど……あんたみたいな女の子とかが理想の異性のこと、なんか妄想癖こじらせて」

「あいわかった、もういいよりさりん……言いたいこと分かったから……」  
「りさりん、理解はあるんだけど感性は一般人だからなあ」と思うゆりか。

一方で、やはり他人から聞かされると「何のキャラ？」と聞きたくなるのも理解できず少し落ち込んだ。

「それによ。あの子……も失礼ね、あの人、同い年だとは思えないんだけど」  
「そりやちつちやいし」

「じゃなくて。……話す内容も雰囲気もよ。まるで先輩たちや先生たちとかと話しているみたいなき感覚なのよ。頭が良いって言うか精神年齢が高いって言うか……そりやあもう、クラスの男子たちなんか比べられないくらいに」

彼女たちの会話に聞き耳を立てていた一部の男子たちが悲しい顔をした。

「りさりんひどいねー」

「うっさい。でも……やつぱり納得行かないわ！ なによあの顔つきと髪の毛！ 女の私でも嫉妬すらできないって、もはやいろんな壁越えちゃっているっての！」

「おおう」

「お肌は透き通っていて荒れたところすらないし！ 目は薄ーい色でガラスみたいだったし！ ついでに髪の毛も!! なによあれ!？」

「あー、それは分かる。それについてはすつごく分かるよ。気持ちはすつごくね……だから落ち着き？」

「どうと、と……ゆりかに勧められたゲームを遅くまでする生活が数日続いたせいで出来てしまったニキビというものに、乙女としてかなり深刻に受け止めているりさが叫びそうになったところをゆりかが抑える。

「ふう……悪かったわね」

「いいのよ、私たちの仲じゃん。だ・け・ど？ やつぱりさりんも響に会っただけでメロメロだねえー」

「んなつ!! そんなわけないでしょう、あんたじゃあるまいし!!」

「そーお？ だけどりさりん、ドロッドロした展開にならないよーにクギ刺しとくからね？ 響を見つけたのは、先に会ったのは私よん？ 男を取り合って親友が！ とかは

やだからねー?」

「はいはい、お好きにどうぞ。人の恋路を邪魔するつもりなんてないし、そもそも私はそういうの、興味ないからね。　　とうか取るとか以前にあんた、まだそこまで親しくもないでしようが」

「言質は取ったぜい?」

「はいはいお好きにどうぞってばー」

彼女たちの姦しい会話は、一部の凹んだ男子たちを巻き込みつつクラスの喧噪に紛れて窓の外へと流れて行った。

その会話はたった1回きりで……決して繰り返されることのない。

彼女たち以外の人間には知られることもなくこの世界から消えるはずのものであった。

## 46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その2

少女たちの姦しい、彼についての会話は続く。

「でも、安心したなあ」

「なにがよ？」

ちゅーつと紙パツクのジューズを……同時にすすったあとに話し出すふたり。

「だって、しんゅー同士でひとりの男の子取り合うってゆード定番中のド定番なドロドロな展開にならなくてよかつたなーって。私の苦手な恋愛要素オンリーな少女マンガみたいにならなくてよかつたなーってさ。や、ほんと、あーいうのマジ勘弁ってやつだもん」

「いや普通、一目惚れなんてのはないでしょ、現実じゃ。少なくとも私はないし、それ以前によく知りもしない相手を見た目だけで好きになる気持ち理解できないからね？ 私。前にも言ったかもだけどさ」

辛うじて耐えていた最後の男子が力尽き、声の届かないところへとぼとぼと歩いて行くのを……友人の真後ろで起きていた悲劇を見ていたゆりかは、そつと目を逸らす。

「わー、りさりん正直過ぎー」

「大体私もあんたに勧められるゲームとかしても……恋愛シミュレーションとかはやらないの。知ってるでしょ？ つまらなくて投げちゃうのよ」

「それはもー。だからラヴ系のマンガの布教とかも諦めたんだもんね。もつたいないけど、こればっかりはなー」

ほい、と空になった紙パックを狙いを定めてから投げようとしたゆりかの手が、がしつ、と掴まれ……むしり取り、しぶしぶといった様子で自分のそれと一緒に、きちんとかごみ箱へ捨てに行くりさ。

「ご苦労。 うむ」

「ご苦労って、何様のつもりよ……つたく。 ……けど、まさかねえ？ そういうのといつちばんに縁が遠そうだったゆりかが……ねえ？ そうなるとはねえ……」

「まあねー」

ふんす、と、無い胸を張って……恋心、というよりは好奇心で輝く瞳をりさに向けるゆりか。

「だーってさ、あんの超ミステリアスな存在だよ？ 見た目も1回目も2回目もゲーム通り……春休みに徹夜だったし、もーけっこう忘れてるけど『そうだった』ってゆーのはよく覚えてるし。 だからさ、ゲームってゆー……どっかのチームの人たちが



作った創作上の世界が、どこまで現実に再現されているのかっての、私になぞって  
 ことで試してみたくって。 あ、もち、響……現実のね？ 自身にもすんごくキョーミ

あるけど」

「違うわよ」

「へ？」

「普段はさ、あんまり外に出さないようにしているみたいだけど……ゲームとかアニメ  
 とかマンガとか、そういう世界にだけ興味あるって感じのあんたが。 それもまさか私  
 よりも先にそこまで気になる男子を見つけたって言うのによ。 しかもキャラクタ  
 とかじゃなくって……きっかけはそれだったとしても、現実の男の子に興味持ってい  
 うのが、すつつつごく新鮮だからよ」

「……………あのー？ りさりん??」

「なあに？」

「……私さー、響のこと、そりゃー気になっただけはいるよ？ 気になっただけど  
 りんが思ってるのとかじゃなくって、その、えと……好きとかそういう話じゃ。 さつ  
 きのだって冗談だし。 あ、なんならりさりんも」

「……。 照れ隠しなあんたもまた新鮮ね。 あのさ？ ゆりか、あんた、響さんの話す  
 るときの顔……自分で、鏡で見たことある？」

「わつつつ?」

ずい、と迫るりさと、すすすと引こうとして……背もたれに阻まれ、いつもの逆の格好になったふたり。

……なお、その光景にクラスの男子諸君と一部の女子たちが注目していたわけだが、話に夢中な彼女たちは知るよしもない。

「……へーい。その、か・お♥ あんたが『攻略したぞ!』ってスパムみたいに送ってくる写真とか、勧めてくるマンガとかのヒロインたちの顔ってやつ。わーたーしー、ゆーりーかーのー、そーゆー顔と、とーつても似てるなあーって思うんだけどなー?」

へー、ほんつとにそーなるんだー、私初めて見たなーいいものねー実にいいわー! 恋バナ好きな子の気持ち、ちよつとだけ分かるわねー!」

「ぬ、ぐ、ぐ……」

「……………」

「……………」

「…………ぷつ。 あつははははつ! ……あー、いつものしかえししてやつてとつても気分がいいわー」

「…………はつ!? お、おのれりさりん! 私を惑わしおつて!! くん! くん!! 最近調子に乗りおつてからに、くんのつ」

ぼかぼかとりさの胸を軽く叩いているその光景に、さらにクラスの注目が集まっていた。  
それは揺れていた。

揺らしている方のそれらは揺れる余地もなかった。

「……はー、嬉しかったから今まではチャラにしてあげるわ。 だけど、どっちだったってしても私は応援するわよ？ だって、いくらゆりかがちんちくりんだったってしても……告られたりしても当たり前障りない感じに断ってたあんただもん、てつきりそのままあれとも付き合わないで華の中学生活、いえ、学生生活つてのを華のない画面の向こうとか紙に費やしそうだったんだもの。 いえ、もしかしたらこのままずっと趣味に生きて……」

「りさりんひどーい……私、傷ついちゃった」

「嘘ばっか」

「およよ」

「感情が籠もっていないわね。 あと、ソレは古いわ」

「ちっ」

「……けど、気をつけなさいよっ」

「なにをさっ」

「もつと仲良くなるんだったら、距離感には、ね？ 響さん……私はまだ1回しか会っていないし、ろくに話もしていないけどさ。あの子、会話の節々で……なんていうのかしらね、こう、言いたいけど言えない？ みたいな、そんな表情してすつごく慎重に言葉選んでる印象だったもの。もちろん下条さんはまったく気がついていなさそうだったし、友池さんは……気が付いているかもしれないけど、でも、よく見てないと分からないような」

「わーかってるって、そんなぐらいは私にだって」

もういちど、鼻息荒く宣言するゆりか。

「だいじょうぶだいじょうぶ。私、地雷回避しながら、あ、だけどゼツタイに必要なとこだけはうまく聞き出しつつ好感度上げるの、得意だからっ」

「それはゲームの話で……しかも画面の向こうの相手は女の子でしょ？ 現実の男の子の好感度の上げ方、知ってるの？ 現実でだーれとも付き合ったことないあんたが」

「あ」

「そもそもそうやって威張るなら……なんだっけ？ 乙女ゲー？ そつちで男の子攻略しなきゃ行けないんじゃない？」

「……！！」

「でしよっ」

「……私、乙女ゲーやる。 とりま帰りに本屋で売れてるそれ系のマンガとかも。 あ、またワゴンも漁って」

「冗談に決まってるでしょ……素直に恋愛ものとか読みなさいって」

もう1回ゆりかの頭上にりさの……今度はわりと手加減のない手刀が、ごっつん、と振り下ろされた。

……なお、後日にこの場面のことを聞かれたゆりかが適当な言い訳をしたせいで、さらに脳天にもういちど落とされて身長が縮みそうになったとか。



「……ってことがあったのよねえ。 懐かしいわ。 ねえー?」

それが、話のターゲットになっていた僕が夏休み、彼女たち4人と遭遇して少しの時機で起きた会話。

らしい。

けどもそれは、この病室で再びに繰り返されていた。

しかも女子特有に会話の全てをほぼ完璧に再現してまでのそれが。

つまりは拷問だ。

うん、さすがに可愛いそう……。

「もー、これだけいろいろあつた今からしてみれば、とおーっても些細で平和でかわいらしい場面だったわねー。あ、そういうえば縮んでた？ 背。なーんて冗談よ」

ひととおりの……たびたびに止めにかかるゆりかをリーチの差で軽くいなしてずっと話し続け、ようやく話を終えて……しまったりきは、ぐっと伸びをしている。

で、その話をされてしまったゆりかはと言うと席に突っ伏してなにやらうめき声のよなものを発している。

「ぬううううん……ぬぐ」

「ふう、すつきりしたわっ」

そして僕はというと……いきなりこんな話をされて、すごく、ものすごく困っている。だって、いつもみたいな何でもない会話するんだってばっかり思っていたからさ……。なんでこんなことになってるの？

それになんて僕を巻き込んだんだ、りさりんは。

「おお……お お お お……あがあああ……」

ゆりかは、女の子が出しちやいけない声というものを上げ続けている。

うん、たしかに出さないほうがよさそうなものだな、これは。

そしてりさりんは、優雅に……冷めた紅茶を飲んでる。

優雅じゃなかった。

それで僕は困惑している。

「……りさ」

「なんですか？」

そう言えりさって僕に対してはですまずで話すよね……別に良いけど。

「……どうしてそれを、今、この場で、僕を巻き込んで話す必要があつたんだ？」

「僕を巻き込んで」ってところを強調したつもり。

だつて変なことに巻き込まれたくはなかったのに。

りさって、秘密なんて文字が脳内に存在しないかがりとは違って、常識的だったはずなのに。

だから言つちやいけないようなことはしっかりと分かっている子で、だからこそ……こうして他人が悶えるような話は漏らさない、はずなんだって思っていたんだけれども。

「ぬお〃お〃お〃お〃……りさりんからのふれんどりーふあいあ……」

「……それも、当人の前でするなんて」

僕は疑問を投げかけた。

——けれども返ってきたのは「ん？」って感じの、この上ない笑顔だった。

きっと同級生どころか学年の男子を虜にするようなそれなんだろうけれど……僕にとっては、その。

背筋がぞくぞくつてする感じの、とっても怖いものを感じるものだった。  
うん。

僕は、聞いていた。

「りさりん、怖いんだ」つて。

「煽り加減を間違えちゃうと恐ろしいんだ」つて。

当の……未だにうめいているゆりかっつていう、被害者から。



# 46. X6話 教訓：女性を怒らせてはならない その3

「ふふ……久しぶりに良い気分♪」

「あ〃あ〃……あ〃あ〃あ〃……」

目の前は地獄だ。

りさり……いや、りさの笑顔がこわい。

笑顔なのに。

それもとびきりの……いや、とびきりだからかもしれない。

ゆりかがテーブルに突っ伏して動けない以上、彼女の視線は僕に向きっぱなし。

大好きなデザートにも目もくれていない。

……气まずい。

「……ええと」

「なーに？ 響さん♪」

「あ、うん……りさは、その。そういうことを、秘密を勝手に話すような人じゃ無いっ

て、思っていたんだけども」

「ええ、そうです。普通なら……ね？ 私、これでも口が固いから相談とかよく持ちかけられるのよ？」

りさの話し方が……なんだか不自然だ。

「……なら、どうして」

ちらつとゆりかを見やる。

……まだ復帰できていないらしい。

よりにもよって僕の目の前で、僕に向けて……何回も何回も遮られようとするたびに頭をわしづかみにしたり店員さんと呼んだりして話し続けていたんだもんな。

ほんと、なんで。

「いいの。だってコイツはね？」

怖い。

かつての僕に付いていたものがひゅんってする感覚。

「学校で私に、すつごく恥ずかしい思いさせたんだもの。当然オカエシはしないとだもんね？ それに今となってはほほえましいじゃない、ゆりかのこの、いつもはゲームとかしか頭がない帰宅部なこの子の、淡い気持ちっていうの」

目がどろんって……してはいないけど、でも限りなくそれに近い感じになっているりさ。

……これ、魔法さん関係ないよね？

だって、僕に關係……はあるけど、でも、メインはゆりかの……なんだから。  
ないよね？

「……なら、ゆりか」

「……あい——……」

「苦しいところ悪いけれど。君はりさにいつたいなにをしたんだ……いや待つて良いんだ話さないで、口を開けないで、それはりさが嫌だっただろう話題だから」

口にしかけて慌てて止める。

……危ないところだった。

僕までがりさの地雷つていうのを踏むところだった。

ゆりかたちが僕に対して……その、告白……恋心の、を僕にしてきたのは女子たるゆりか……ゆえに女子たちには、それも、いつも一緒にいる親友つていうものなりさにはとうに知られているはず。

それは分かっていたんだけど、というかがり自身がそれを盛りに盛つて触れ回つていて、彼女たちの学校のかなりの女子たちには既知のことらしいんだけども。

だけど、興味自体はある。

この、表情が……ゆりかほどではないにしてもころころと変わる、クラスの中心にい

るような女子の代表みたいなりさりんっていう女の子が、どうしてここまで笑顔で怒るほどのことがあったのかっていうこと自体には。

「ただどそれを聞いちゃいけないんだ。」

「僕は知っている。」

「女子は、女性は、女の子は。」

「……あるときまではとつても優しいけど、ある瞬間からいきなり怒り出すっていうその境界を持つていて、それを越えちゃならないんだって。」

「いくら僕だって、それくらいは知っているし……体験もしている。」

「だから僕はおとなしくしていよう。」

「いやあー、ちよつとねー」

「と、思ったのに。」

「ゆりかがむくりと起き上がって、口を……開いちゃう。」

「いや、だからゆりか、ちよつと待」

「……ゆりか、あんた、ちよつと待」

「ちよーつとき？ 体育のあとの休み時間でさー。教室で、その、ね？ なんか、みんな

なわいわい話してたのに一瞬だけ静かになるって瞬間ってあるじゃん？ でしょ？

んなときに私、言っちゃったのよ。そんなときまでのうるささに負けない程度に、だけ

どりさりんだけに聞こえるって声で……けど、静かになってたら教室の隅から隅まで届いちやうよーな声で『りさりんのカップ、またひとつ大きくなっただ！ 順調に育ってるねえ！』っての。『うらやましいこんちくしょう採ませろー』って！」

「……………」

黙りこくついているりさりんが、視界の隅を見るのが恐いから……静寂が舞い降りて「およ？」とか言っているゆりかだけに視線を当てながら、それでも僕は言わなきやらない。

「…………ゆりか」

「んい？」

「それを……女子にとってはデリケートこの上ないことを口走ったからこそ怒られて、だからこそそつい今し方のように……君の秘密っていうものを僕に晒されてしまった君だけ」

「あは♥ 恥ずかしいよねえ、けど告ったときに比べたらさ」

「その話を。 ……その話をもう一度、男子な僕に対して言ってしまったのもよかつたのかなって」

「え？」

「だよね？」

「え？ ……あ」

「……………」

ファミレスっていう、僕たち以外にも人がいる空間。

だから大声で怒ったりはしないだろうとは思うけども……怖い。

いくら大人だろうと男だろうと怖いものは怖いんだ。

だからりさりんを見ようとして断念して下を向く僕。

あ、なんだかトイレが近くなった気がする。

けどこの雰囲気で「ちよつとトイレ」とか言い出しづらいし。

困った。

どうしよう。

「あ、あのー。 りさりんや？ これは、そのですね……えーと……」

このエリアだけが、まるで急に外から遮られたかのような感覚。

誰も言葉を発しない。

いや、発せない。

見えない緊張が膨張していく。

だけど……かたかたと振動が響いてくる先だろうゆりかからは、震えの混じった感じ

の音が発せられる。

「そのー、ですね？ りさりん……いや、りさ……じゃなくって、りさ様？ これはつい、そのー、えと。 そ、うっかり！ うっかりミスってゆー、りささまが試験でやらかすような、どうしようもない、避けようもない事態ですね？ なのでどうか」

「——そ。 うっかり。 ねえ？」

「はい、なのでどうかどうか」

「なるほど。 ……ね？ 響さん？」

「……何、かな」

呼ばれた以上には顔を上げて反応しなければならぬ。

怒れる猛獣を前にしたら、しっかりと視線を合わせて背を向けちゃいけないんだって僕は知っているから。

そんな……今日は朝に運動でもしてきたのか、いつもと違って髪の毛の整え方が少しだけ甘い感じのりさは、さっきまでよりもずっとずつとずつといい笑顔。

「それじゃあー、ゆりかが響さんのこともつともつと意識してきてー、私に相談してきただっていうとおつてもレアなときの話もー、わたしー、うっかりしちゃうわねー？ ええ、だつてしようがないものねーうっかりならー。 うっかりだものねー？ もちろん大丈夫なんですよー、ねー？ うっかりさんなゆりかちゃん？」

「あ？ ……いやあああああ!!!」

ああ。

これはもう、戻れないところまで行っているのか。

女の子が不穏な話をしていたのに笑顔しかなかったときは絶対に危ないんだ。

「それじゃあー、そうねえー？　まずはー、あ、そうそう！　初めの頃ね、響さんの連絡先ムリヤリ聞き出して送りはじめたときのメッセージの数々のことからねっ？　ゆりかつたら、そのあとに毎晩みたく『こんなを送って嫌がられないかなあ……だつて返事あんまりくれないしそっけない感じなんだもん……』とか電話してきていてねー？　それだー」

「やあああああ!!!!　お願いだからりささん止めてええええ!!!!」

りさのとびつきりの笑顔と、席を立ち上がつてりさのところまで行つて肩を掴んでぶんぶんしているけれどまったく動じていないから止められないゆりか。

……やはり女性とは、僕たち男とは異なる生きものだ。

それは特に、こういう怒り方つていうのに如実に表れるんだ。

だから同時に僕たち男はそれを熟知して触れないようにしないとイケないんだ。

だつて怖いもん。

ひとまわりも年下の女の子でさえこの怖さ。

これが同年代だつたなら……この体にこの身長、なおさらに怖く感じてしようがない



はず。

女性は、女の子は恐ろしいんだ。

僕は改めて覚えておこうって誓う。

1度怒り出すと人の秘密をこうして暴露し合う……投げ合うなんてする、どう考えてもお互いが傷つくしかない泥仕合を、キャットファイトっていうものをして始めて応酬が止まらない悲劇。

うん。

僕は気をつけよう。

きつと他の同世代の男たちならとうに知っているはずのことだろうけれど、だから僕ははずつとみんなからは遅れているんだろうけれど。

でも、今、こうして身に染みている最中なんだ。

これからは肝に銘じないといけない。

人生経験、社会経験……対人関係に特に乏しい僕は、少ない学習からなんとかして応用へと持っていけないとんだから。

まずは沈黙は金っていうのを改めて座右の銘にしよう。

だからこそこうならないように、相手が知っているって確実に分かっていることにだけしか言及しないように……しっかりと覚えておこう。

「あとはそうねー、あ！　ねえねえ、ゆりかつたらね、響さんと上手く行ったらデートはどこにしようとか」

「やあああああ！　悪かったの、私が悪かったのおおおお！」

うん。

だつて……僕はきつとこれから、そういう女性たちのあいだで生きていかなきゃならないんだろうから。

なにしろ女の子になっちゃったんだもん。

だから今からしつかりと将来のことを考えて……間違えてうっかり踏み抜かないようにしないとね。

じゃないとかなり本気で泣いてる、真っ赤でぐずぐずなゆりかみたいになっちゃうから。

## 46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その1

「……………」

女の子同士の血で血を洗う戦いは熾烈だ。

中身は男な僕は、ただじっとしているだけ。

ゆりかとりさは、ぜえぜえって肩で息をしている。

ファミレスっていう公共の場で、静かなキャットファイトみたいなものを繰り広げたふたりは、ただただ……なにかをことごとく失ったような表情のまま、荒い息を抑えていつている。

もちろん僕はスキを見てその場から逃走。

僕の心臓のぼくぼくが落ち着くまで隅っこでじっとしてた。

で、機会をうかがって戻って来て……座ってもまだふぎやって感じだったから静かに、ただただ静かにコーヒーをちびちびとすするフリをしていただけ。

だって、そうでもしないと僕に飛び火しそうだったんだもん。

そんなの怖いじゃん？

——女の人の怒りっていうのは大変に理不尽。

むかむかしているっていうお腹で発生し続ける感情がある限りには、どんなちっぽけなことでもさえも壮大な怒りに変換されちゃうんだから。

しかも僕の苦手な言葉っていう暴力で。

それを僕は学習したんだ。

これまでの観察で。

だから、静かに静かに。

視線を合わせないようにしてできるだけ気配を消して、貝のようにしていたんだ。

まあ普段からこんな感じな気もしないでもないけれども。

普段以上に気を配ってふたりの意識に入らないように、なんか……こう、がんばって  
いた。

そんな感じの、とつても長く感じられた数十分だった。

疲れた。

もう帰りたい。

しばらくにらみ合っていたふたりだったけど……ようやくに休戦協定が言語外で  
成ったのか、おもむろにゆりかが顔を上げる。

……疲れ切って、今にも倒れそうな様子になって。

「りさりん」

「……何よ」

「争いはね? ……分かったでしょ、なんにも生み出さないの。コストだけかかって得るものはほっとんどないの。得たとしても、ほんのちよーつぱり。だからもー止めよ? 私も悪かったっていうか、私がそもそもの原因なのは反省してるからさ」

「……………」

「ほら、響も」

「!?!」

僕を巻き込むつもり!?

「さっきトイレから戻ってきてから時間経ってるし、私たちのケンカに付き合わせちゃ悪いよ。せっかく来てくれたんだからさ」

あ、そういうこと……僕をダシにケンカおしまいってことね。

まるで「子供が泣いているわよ」って夫婦喧嘩を止めるみたいな……いや、止めておこう。

その場合、僕が子供役になるもん。

せめて大人側で居たい僕としてはNGな発想だ。

「……………ふう、分かったわよ。周りに人がいなくて歯止めがきかなくなっちゃったのと

……ええ、分かっているわ。ちよつと、ここのとこストレスが溜まっていたから、つ

い口が止まらなくて。私こそごめん」

「ふう……」

ようやくほつとため息をつける。

ふたりの、はたして僕が聞いてもよかつたのか分からないような話にまでさかのぼったりしてのケンカを聞いていて、おなかの奥がきゅーつと冷たくなつて嫌だつただけで、これで落ちつけそう。

「あ、やつぽそうだったの？　どーりでりさりんにしては珍しく、初めつからドストレートで、がーつて怒つてくるつて思つた。　んで私も負けじと言ひ返しちやつた」

「あんたはそもそも普段から遠慮なさ過ぎるのよ……だもんだから今言つちやつたみたい、イラツとさせられるのが積もつていたつてもあるわね」

「それについてはまことにもうしわけなく。　あ、いやマジで」

ふうつ、と息を吐き出したかと思つたらくるつてこつちを見てきたりさ。

彼女の顔はいつもの、元氣な体育会系でギャル系の子とかとでも平気で話を合わせられそうなものになっている。

「響さんもごめんささい。　途中で気を利かせてくれて、席、外してくれただしよう？

おかげで……どのくらい聞かれちやつたのか、あ、いえ、私たちが聞かせちやつただけど……多分いちばん聞かれちや恥ずかしい感じのところを聞かれずに済んで、ほつと

してるの。 ありがとう」

何それちよつと気になる。

「響がいなかったときの最後の方……聞かれなくてホントよかったねえりさりん。 それもこれも、響がなにげなく『トイレに行くから』ってりさりんに勇気出して言ってくれたおかげだよ。 ありがとう」

あれを褒めてもらえるのは少し、いや、大分嬉しい。

すつごく怖い顔と声。

もちろんファミレスって場所でかなり抑えられてはいたけれども。

僕は今まで、この歳にもなつて女子、女の人がここまで本気で怒っている場面を目にしたことがなかったから、すつごく体が縮こまっていたんだ。

で、そのせいか尿意がかなりの危険水域に達してきて、さらにはなんか聞いちやいけなさそうな話題にまで飛んでいたから、もう我慢できないって気持ちを勇気に変えて言えたんだ。

おかげで漏らさずに済んだ。

これで漏らしたら「女子のケンカを前にして漏らした男」っていう、また引きこもりたくなる精神的苦痛を負ってしまうもんな。

そうになったら、たとえば僕でも立ち直れない。

少なくとも年単位でこの子たちに会えないだろう。やっぱり、逃げる勇気が大切なんだな。

伊達に少女になってから1年も引きこもってないんだ。いばることじゃないけども。

「つてーわけで話題変えて雰囲気戻そつ！　せつかく響が会えるつていう貴重な日なんだしっ」

「そうね。　もう30分も無駄にしちやったもんね」

「うげ、そんなに」

「通りで喉がカラカラよねえ」

怒っているつて言つても、よくもまあ機関銃みたいに言い合えるよね……30分も。僕だつたらがんばつて5分だし、終わつたら寝込む自信あるけども。

「……2人とも、もう仲直りは」

「一応ね。　これくらいのカンカじゃー、言いたいこと言い合つて疲れたら元に戻る仲だからねー、りさりーん♥」

「こら、顔近づけないですよ。　……今日はもう、いえ、これからも調子に乗つて煽つてきたりしないですよ？　あと、さつきみたいなうっかりも！　ったく……」

「ふむ」



こうしてころっと気持ちがちり替わるあたりがすごいなーって、いつも思う。なんていうか、嫌なことがあったとして。

僕だったらしばらくもやもやしっぱなしで、たとえばどうにかして怒りを発散したりしてもなかなか元には戻らないんだ。

声に出したり物に当たったり……ほとんどしたことはないけども……しても解消できなくて、おなかがいっぱいになったり体を動かしても駄目。

結局は寝ちやうか……大人になってからは「お酒」っていう良い手段ができたんだけど、それ以外ではなかなか収まらないもんなあ。

なのにこの子たち……いや、記憶にある限りの母さんもそうだったか……いきなり怒って、怒り散らして。

で、すつきりしたらすぐに機嫌がよくなるっていうのは……女性の性質、なのかな。もちろん個人差はあるだろうけど。

実際にさっきのケンカだって、かなり怒っていたのはりさの方。

ゆりかの方はそれなりのことを暴かれてもそこまで本気じゃなさそうだったし。

例えばさよとかも……ああいや、お正月のときのあれとかを見るに怒るときは怒るか。

それはそうだよな。

人間なんだから。

今のも、あくまで男女でそういう傾向が強いついていうだけなんだから。

……あれ、そういうえばかりは？

「……………」

「ようやくひびきが百面相するようになったのね」

「さつきまで……多分表情ひとつ変えないでじっとしていたものね……悪かったわ」

駄目だ、いくら考えてもあの子が本気で怒る場面が想像できない。

何なら怒るんだ？

おかしを取り上げて目の前で食べてやったりしたらか？

しかし……うーん、あの子はなあ……。

それにしても、こうしてケンカをできるっていう友人関係っていうものには少し憧れてる。

だって僕にはそんな人……あの後にふさぎ込んだ挙げ句の世捨て人的な生活をしていたせいで全然いなかったもんな。

まあ僕の性格上今みたいな言い合いはしないだろうけども。

む？

そういうえ僕……本気で怒ったらどうなるんだろ？

チワワみたいになるんだろうか？

「それで、平和……平和な話題ねえ。 うーん……意識してみるとなかなか思い浮かばないものね。 普段はなんにも考えなくっても勝手に話してるのに」

「僕は無理にそうしなくても……静かにお茶を飲むというのもまた楽しいと思うよ」

「おお………なんかオトナ………」

会っているからと言ったって、なにもずーつとずーつと話し続けている必要はないだ。

それが、この子たちにはどうも理解できないらしい。

ああいや、ゆりかとならお互いにゲームをしているとき、さよとなら同じように本を読んだりしているときには話さないで過ごせるから違うんだけれども。

一応はりさりんも漫画読んでは静かだし、かがりも恋愛漫画なら夢中になってくれるか？

「あ。 ひとつあったわ、そう言えば」

「ほう。 りさりん、その心は」

「犯罪か否かってやつ。 覚えてるでしょ？ ゆりか」

「犯罪か否か……？」

「響さんと初対面の頃のあの話の続き」

「……あー、あれ」

「そ、あれ」

なんで平和が犯罪？

犯罪が平和なの？

哲学的な話？

僕、そういうの興味ある。

「……僕には、その語彙自体が非常に物騒だっと思うんだけど？」

「あ、これはもちろん比喩……でもないかしらね、でも今は問題なくなったものなんだし、これ自体はゆりかだっって平気だろうから。　　そうでしょ？」

「まーねー。　　もークリティカルなところは聞かれちゃったしい、今さらなんだけど……」

あ、やっぱ思い出すとうあーっってなる」

「でも良いのよね？」

「あいあい。　　罪滅ぼし的にどうぞ」

「ならよし！　　それじゃ話すけど——」

どう見てもよさそうじゃないけどゆりか自身が「いい」って言っている以上僕には止める権利はないし、なにより話す気になっている女子の話を止めることなんて僕にはできな

僕の気が弱い……いや。

こういうことでさえ「そこまでのことじゃないよね」って思っっちゃうこういう性格は、どうしたって。

体が変わったって変わらないんだから。

## 46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その2

そこそこ広めの部屋は、壁がほとんど見えない状態。

壁の下半分は本棚やラック、上半分はポスターで埋まっており、部屋の中央付近にはその小さい体に対してはあまりに大きいテレビとその下に据えられているゲーム機の数々、そして部屋の隅には机がふたつで囲まれている。

「それで、ゆりか」

「んい？」

「好感度……上げるってのは、まあいいとしてさ？」

「話が早くて助かるぜいりさりん。 さすが私の」

「それはいいから……あんたたち。 見た目はどうすんのよ」

「ほい？」

片方は普通の学習机で、もう片方は大きなモニターなどが乗ったラックと足元のデスクトップパソコンという、どう見てもごく普通の中学生女子のものだとは思えない内装の部屋。

隅にはうずたかく積まれている映画やアニメ、ゲームのパッケージや漫画本でできた

タワ―が数本。

なおその大半は彼女が少ない小遣いで娯楽を集めようと、中古で買い漁ったものばかりだとは彼女の自慢だ。

その部屋、ゆりかの自室には、学校帰りに引き込まれたりさが呆れた顔でベッドに腰掛けている。

「……はあ、それにしてもあんたの部屋は……人を呼ぶなら、もつと綺麗にしなさいよ」  
「……りさりんひどいよ！ いくら親友でもあんまりだよ！」

「え、え？ なにがよ？」

「そりやー分かかってるよ、あの響と私とじゃぜんっぜん釣り合わないってのは！ でもはつきり言われるとぐさつと来るんだい！」

「あ、そつち？ ……いえ、そういう意味じゃないの、見た目ってのは」

「いーのいーの、そんな慰めいらはないって。そーだそーだ、きつと響ならおんなじとこ出身の釣り合い取れたかわいーくてほんきゅっぽんな彼女さんを」

「じゃなくてって言うてるでしょ！ とうかあんたもモテる部類なんだからいいじゃない！」

「へー、学年でも人気のりさりんさんがそんなお世辞を言うなんてねー、へー。『も』つてとこから自信っていうか自慢が染み出してる感じがまた」

「いい加減にしなさいよ?」

「ごめん」

「つたく」

部屋の端と端。

りさは、すっかり慣れたゆりかのベッドの上でスマホ片手に。

ゆりかはその反対側にあるパソコン用机の前で、マウスをときどき動かして。

彼女たちにとつてほどよい距離感の中で、昼間の続きの会話をしている。

「……で。今のは単純な意味での……文字どおりでの見た目ってことよ」

「どゆこと? 単純って」

「……はつきり言うतोよ……まずもってゆりかかってば、高学年に入ったころ……4、5年くらい前からほとんど背、伸びないのよね?」

「えーそーよ……。なーんでだろーねー? 悲しいねー? ……これでも途中からは気にしてきちんと睡眠だつて取ってるし、運動はもちろん……特に小学校頃は休み時間とか放課後にすっごくしてたし牛乳だつて余ったのじゃんけんで勝ったときはいつも余計に飲んだしー? ぶら下がりがだつて、ほら。お父さんに頼んで、ほら! ほら! 部屋に買ってもらつた懸垂用のぶらーんつて毎日してるし」

「はーい、そこまで。 あんた、よくそこまで口回るわね」



「グループじゃない子たちとも平気で話してきりさりんには言われたかないやい。

ふ、持つものには持たざるものの気持ちなど分かりはしないのよ……」

「で。私から言つてなんだけど、あんたの身長はどうでもいいのよ」

「ひどひ」

「だってせいぜいが知らない人からは小学生に見られるだけでしょ？ 特に制服着てる

ときなんか、どこぞの私立小学校の高学年だとか。ランドセルじゃなくてもそう見ら

れるじゃない、よく」

「おうふ。事実の羅列が私を襲う」

人は、悪意がなくても人を傷つけられる。

りさは、ゆりかの傷口をぐりぐりと抉り続ける。

そしてゆりかはその度に落ち込んだり怒ったりする……フリをする。

りさも、それを知っている。

あくまでも冗談で済ませられる範囲で繰り返される応酬。

そんな2人の友人関係。

幼なじみなどでもなく、席が近かったわけでもなく。

クラスでの……学校での「グループ」も違いは趣味も違い、性格も見た目も、健康的な体つきと未成熟な体つきという違いがある彼女たち。

そしていつの間にか仲が良くなって……こうして放課後や休日にも会い、ばらばらのことをしながら時間を潰す関係。

ゆえにお互いに攻撃し、されてもある程度のところまでは許し、別の機会に同等の反撃をしてチャラにする。

例えばゆりかが今日こうしてさんざんに「ちいさい」ことを言われているのは、その直前にりさの「大きくなった」ことについて言いふらされたりしたものや、後日に体操着に抱きついて感想をまくし立てたり……もちろん多くの男女が揃っている場面で……したり。

「……ま。私服も子供っぽいシユミだからいつつも小学生に見られてるけどね。せめて中学生らしい服くらいは選びなさい。こーんだけいろいろ揃えられるんだからお小遣い、けつこうあるんでしょ?」

「ぐぬぬ……おじいちゃんおばあちゃんおばちゃんが私の敵だい」

「あらいいじゃないー、モテモテよ?」

「好きでもない相手にモテてもいいことないって、それ、いつつもりさりんが言ってることー」

「ちよつと方向性違うって思うけど……まーね。けどまだ中学なんだから背、伸びるわよ。きつと……ええ、たぶん」

「あ、やっぱ厳しいのね」

「だからまずは、今度私が着いていつてあげるから……せめて小学生に見られない服装揃えなさい。ね？」

「あーい……けどりさりん。なんか今日のは辛辣すぎない？ 私なんか悪いこと……したわ、そーいや。したよね」

「そうね、したわね」

「……まだ怒ってる？」

「今のですつきりしたし、もういいわ。んで話戻すと」

「がば、とイスから立ち上がり……くるくると回り続けるそれを背に対面のりさの元へと走り寄り……さつと、りさが避けたところにあつた、彼女が腰掛けていた枕に向けてダイブするゆりか。」

「ダイブし……そのまま動かなくなることしばし。」

「パンツ」

「お金取るよ？」

「んな安物で擦り切れて……いつから穿いてるのそれ」

「んー、多分小学校の」

「女子力低っ！」

「どーせちんちくりんですよー」

その衝撃でめくれ上がったスカートを戻してやりつつ、りさは続ける。

「……もう。いつもならこの程度、教室とかで言っても平気でしょうが」

「だってー、りさりんだしー」

「それがどういう意味かは聞かないでおくわ」

「それがええ」

おもむろに座り直すと、抱きまくら……なぜかカバーが掛かっていない……を取り出しては抱きしめ、じいいつとりさを見上げるゆりかと、床から引つ張り上げたクツションを背に壁に寄りかかるとりさ。

「ゆりかのことじゃなくて……いや、それもあるんだけどさ。問題は響さんよ、響さ

ん。あの子……いえ、あの人……いえやっぱりあの子ね。あの子、あんたよりも

ずつと背が低いのよ?」

「あ」

「背の低いあんたでさえ、歩いているときはのぞき込まないと顔が見えないんだっけ?

私も本屋ではぱつとしか見なかったし、なにより立ち上がってからはずつと背の高い下条さんが横にいたから分からないけど……あんたよりも頭ひとつぶん小さいわよね。

うちの学年の背の順でほぼ先頭のアんたよりも、さらに、ずつと」

「あ——……たしかに、ねえ」

「つてことは、よ?」

「なんぞ? りさりん」

ふう、とため息をつき……少し迷ったものの、結局りさは思っていたことを口にする  
ことにしたようだ。

「響さんとあんた。 万が一、億が一いい仲になれたとしても」

「億が一……しどひ」

「だーってほとんど接点がないじゃない。 で、そうしたとしてもよ? どれだけそれっぽい服装にお互いにして出かけたとしても……手、繋いだりしていても——小学生の姉と弟にしか見られないわねって」

「ごふっ」

「小学生同士の」

「ちよ、りさり」

「世間一般的にはロリなあんとと、世間では……はつきり言っちゃうと低学年な響さん。

ロリの反対は……えっと、シヨタつて言うんだっけ? それ。 好意的に見てくれる

人がいたとして、気がついてくれる人がいたとして、あんたたちがそれを言っただけと回ったとして。 どう見ても『ほほえましい小学生同士の姉弟のおでかけ』よね……顔とか髪

の毛の色で姉弟じゃなくても知り合いのそれに近い感じの。誰が見ても『あら仲が良いわねー』って感じの」

「ちよつと待つ」

「そうねー、たとえば響さんが『おねえちゃん大好き!』とか言いながら抱きついて、あんなに『私も響が大好き!』なーんて言ったりしても……いえ、余計にね、これ。どー見ても、間違つても彼氏彼女とかそーいう関係じゃないわねえ。思いつきり好意的に、事情を知ってる人から見たとしても……やっぱり小学生同士の仲良しさんね。」

あ、小学生同士の微笑ましい仲には見えるから安心してね?」

「あの、ちよつ」

「けど普通に見てみるとよ? 響さんとあんな、遠い国からの親戚とかものすつごく珍しい繋がりがない限りには、血が繋がってないっていうのはひと目で分かるんだし、つまりは赤の他人。それに……仮にでも手を出したりしたら」

「手を出す? ……あ、あらーりさりん、だいたんなこと」

「『犯罪』よね、それ。かなりの年下をたぶらかしたって感じで」

「ぴいっ」

「だつて……いえ。そんな中であなたが中学生だつて知られたら、どう見ても小学生、よく話さないとまず同い年だつて信じられない響さんを、いろいろして拐かしたって見

「られても……しようがないわよねって」

「とうとう声を上げられなくなったゆりかは——抱きまくらに張り付いて微動だにしないくなる。」

りさも言い過ぎたと気がついたが……いちど口にしてしまった、それもケンカなどではなく素面で話してしまった、伝えてしまった事実……今からながら慌て。

「……あ。えっと。あ、そうよ！ 響さん、お家の方でもなにか事情とかいうものがあるんでしょ？ だから大丈夫よ！ 何が大丈夫かは分からないけど大丈夫っ!! あ、そうそう!! 仮に、億が一にでも両思いになつてあんたかあるいは響さんかのどっちかが乗り気になつてそういう関係になりでもしたら、その次の日とかには黒塗りの車何台かから黒服サングラスな人たちがわーっここに来たりなんかして——」

「りさりん落ち着いてええええ、暴走しないでええええ、んでもって私も考えてたよーなこと言わないでつてば、分かつてゐるつてば——!!」

顔が真っ赤になり、どこかうわの空で話し始めたりに向かい、抱きまくらを放り投げて抱きつき正気に戻そうとするゆりか。

しかし悲しいかな、りさの暴走という名の妄想は広がって行き、さらに悪い方向へと話は進んでいき——最終的には2人とも轟沈した。

中学生女子な彼女たちの、限界までの恥ずかしさをもって。



## 46. X7話 犯罪か否か（少女たち視点で） その3

女の子は1回話し始めると口がくるくると回るから、その声を遮るっていうのはとても難しい。

いや、遮ること自体は僕だってできる。

できるけれども……それをしたら最後、きつと機嫌は悪くなる。

そんなもんだから……普段から口数の少ない僕なんだ、普段からおしゃべりで生きているような子たちの会話を遮るなんて芸当、できっこない。

もともとそういう性格なんだ、ガワが変わって女の子になったとしてもそれは変えられない。

だから僕は、あんまり聞いちゃよくないだろうって分かっている……止められなかった。

だから、最後まで聞いちゃったんだ。

ふたりの……いや、ゆりかの、それを。

どこまで本当かは……ゆりかやかがりならともかくりさのことだ、大した誇張もなく話していたんだろう。

だからこそ……その、ゆりかが僕と付き合うとかそういう話への反応に……ものすごく困るんだけども。

え？

これ僕にどうしろっていうのりさりんさん？

どんな反応ほしくてこんな話し出したの？

もしかしてノリなの？

かがりなの？

くるんなの？

「つてことがあったから、ゆりかには『とにかく絶対に慎重に進めるように！』つて言い含めてねー。まずはスマホ越しに嫌がられない程度に。嫌じゃないかってその都度に確かめつつ。たとえばアクション起こすにも、まずは響さんの事情を少しでも教えてもらえる程度の仲になってからにしなさいな。そんな感じでアドバイスしてたのよ」

「」

しゃべり倒して満足した様子のりさりんと、その横で——微動だにせずうつむいてるゆりか。

彼女のことは……今はあまり見ないほうがいいだろう。

そんな感じだから再びの静寂が戻って来て、同時にファミレスっていういろんな声や音がずっと響いている空間の喧噪が戻って来た。

けれども……さすがは「女子」っていうもの。

あの時点で……ゆりかが僕と2回目に会って、それからメッセージの絨毯爆撃が来始めたあのときにはもうすでに。

この子たち4人がばったりと会つちやって、説明したりした頃にはそんな会話をしていたのか。

……女の子は小学生のときからませているって言うけれども。

中学生でも……僕、普通の中学生だったころって本に興味があるくらいしかなかった気がするのになあ……。

単純に僕が幼かっただけ？

あるいは時代の違い？

……いや、女性がおしやべりでこういう話題が大好物なのは古今東西万国共通。

かがりを見れば誰だって分かるものな。

つまりはそういうこと。

どういふことか分かんないけども。

「ね。ね。……りさりん」

「ん？」

「やつぱこれ、ちよーハズいんだけど。それも、へ々に隣から延々と他人の視点で聞かされるつてのが、こ——……」

「我慢しなさいよ。いいつて言つたわよね？　そうよね？　確認はしたわよ？　了解も。　そうでしょ？　ゆりか？」

「……あのさ。　りさりん、いえ、りささま、やつぱりまだ怒つていらつしやる……？」  
「いえ？　でも、言つたわよね？　そうよね？　私、なにかまちがつているかしら？」  
「そんなことはないです……あい……」

あと。

僕はこういう駆け引き……未だに怖い。

もちろん顔にも出さないけど、でも怖いものは怖いんだ。

なるべくなら避けたい。

僕も、話が始まりそんな気配を察した時点で帰りたいんだ。

まあいつも通りに無理だったけれども。

……これはひよつとして。

女性に……対人関係に慣れていないっていうのもあるんだろうけれども。

これって、僕、小さいころにおいたをして母さんに笑顔で問い詰められたりしたこと

が影響しているのかなって。

声こそ荒らげて怒られたことはないけれど、こういう怒り方をしていた気がする。もう10年は前のことなのに。

いや、小さいころの経験だからこそかな？

……とにかく何か反応しなきゃいけないんだったら。

「……ふたりとも。もうひとつだけ、いいかな……」

「なーに？」

「響っ！ どうかこの空気を変える一手を！ なにとぞなにとぞ!!!」

「僕は。……そんなにも幼く見えるんだらうか」

「……えっ」

「え？ あ、もしかしてもものすごく気にして」

「みんなして小さい小さいというけれども、いや、自覚はしているんだ。しているんだけれども、でもどうしても気になるものはなるんだよ。僕は……そこまで小さいんだらうか。幼いんだらうか。どれだけ背伸びをしても無駄なんだらうか」

いろんな人に聞いて回っている気がしないでもないけれど、ふたりへも問う。よりにもよって僕のこと「シヨタ」とかのたまってくれたふたりに対して問う。

そんなふたりは固まっている。

ゆりかは助けを求めるようなポーズをしたまま、いい笑顔のまま。りさは……すつごくあいまいな笑顔のまま。

ふたりとも、口が半開きだ。

「教えてくれる？ ふたりとも……僕の友達なんだよね？」

「……え、えつと」

「……えと。響、つて、えと、ね。……ちつこい私とかでつかいりさりん、それよりもいろいろとでつかいかがりと比べると……その。誰が見ても中学生だつて分かるさよちゃんを中心に、全員身長がけつこう離れてるから……その、うん。余計に、……かな。うん」

ごまかそうとしてくれたりさ。

はつきり言ってくれるゆりか。

彼女たちなりに真摯に答えてくれたらしい。

そっか。

僕、そんなに……そうだよね。

ごまかしにごまかして高学年だもんね。

こういうときにははつきりと言ってくれるゆりかのような存在が、とてもありがたい。

他人からの……それも背の低さをコンプレックスにしているような、おなじような悲しみを背負っている彼女からなら客観的な意見を聞くことができ、とても参考になるから。

ああ。

そうだ、僕は……今の僕は、小さいんだ。

幼いんだ。

それはもう、子供と普段から接しなくなつた年代以上の人たちからは……歳を取れば取るほどに、特に公園でよく話しかけてきたりするおじいさんおばあさんたちになればなるほど僕の容姿がより幼いものに見えるらしく——はては園児だと、本気で親を探そうと気合いを入れたりしたこともある。

忘れたかつたから忘れていたけれども、でも何回もあつたけれども必死に忘れていたような、そういう出来事が……僕の頭の中でフラッシュバックしてくる。

それらはこの子たちに嘘をついた罪悪感で潰れそうだったあのときよりもずっと苦しいもの。

ああ。

そうだ。

そうだった。

僕だつて……今の僕を鏡で見た段階でも、お風呂に入って観察したときでも……紛れもなく幼い体、どう見たつて小学生、下手をすると園児でもおかしくはないって思っていたじゃないか。

ましてや髪の色から骨格からなにからなにかまでみんなが違うんだ。

そうだ。

それが普通の視点なんだ。

だから別に特段にあえて今さらに胃が重くなる思いなんてする必要はないんだ。

「——びぎ。ねえ、響?」

顔を上げてみたら、いつの間にか傍に……定位置の誕生日席に座らされている僕に手が届く距離にまでふたりが来ていて。

「そんなに気にすること……そうだよ! 響はずつと入院してたんでしょ! たしか体動かさないと成長ホルモンが出にくいから背が伸びにくいって聞いたことあるし!

私は動かしてもそうだったけどね!! だからだからなんていうか、そう! 元氣出してよ響、私たちはちっこい同志じゃないか! だいじよーぶ、これから運動すればきつと!! あ、今度オススメの牛乳教えたげるから!」

「え、ええそうよっ! それに響さんみたいに落ち着いていて頭がよくって、そういう魅力で好きになる女性もいるんだし! むしろ幼……小さいほうがいいって女性だつて



きつといるんだから! そうよ! ええ、そうだわ! いろいろ相談にも乗ってくれし、よくものごとを知っているからこそすぐに正解を教えてください! なのになのに他の男子みたいに自分の自慢ばかりするわけでもなくつてムネばつか見て来なくつて、他にはええと……話を聞いてほしいだけなのに自分の意見を遮るように言ってきたりする人に比べれば見かけの歳なんて!!」

「——ほう……?」

ひゅつと怖い気配がする。

どこから?

……ゆりかからだ。

「……おんやあー? りさりん。私との約束、まさか反故にしようとか企んではおるまいな? 私たち、シンユウだよな? ……人の、取ろうとしたりは……」

なんだかどうでも良さそうな理由だったから放っておいていいか。

でも2人の必死な感じの援護は、なんの励ましにもなっていないかった。

むしろ僕の心はより傷ついた気がする。

……お酒だ。

うん。

帰ったらお酒を呑もう。

うんと呑もう。

お酒を呑んで……悲しいことに前の体でも前後不覚になるっていうのはできなかつたけれど、今の体だつて眠くなる程度には呑むことができるんだ。

それで……適当な映画でも見ながら呑んで、眠くなったらさつさと布団に入つて眠つて……みんな忘れちゃおう。

そうだ。

それがいい。

だつて……こんなにも年下の子たちに幼いつて断言されちゃつたんだから。

「ちよ、ゆりか!? ひ、響さん! 響さん落ち込んだままだから!」

「その前に泥棒猫さんについて、ちよーつとオハナシ、しないとね……?」

分かつてはいるんだ。

理解はしていても……何度だつて思う。

理解と納得は、別物なんだから。

そうだ、僕は小さい……ゆりかにも言われたことがあるんだ。

まるで「銀髪幼女」だつて。

だから大丈夫。

何が大丈夫かなんてさつぱり分からないけど、多分何かが大丈夫。

僕が男だつて言う確固たる自我が残っているうちは大丈夫。

もしそれが無くなったら？

…完全に幼女になつてゐるだろうからもうどうでも良くなつてゐるはずだもん。

## 46. X8話

## 響Ⅱロリorシヨタ??

## その1

「てな感じでさ? ひびきって犯罪臭がするかどうかって話題があったんだけどさー、ふたりはどー思うのかいな? あ、ぜひぜひホンネで!! ね? ね??」

「ええと……? ……良く分からないわ?」

「あ、……あう」

ゆりかは元から、とことん物事を楽しむ子。

それは趣味然り、そのための勉強や家の掃除などの手伝いをしっかりすること然り、始めから終わりまで全てにおいて。

つまりは常に全力投球というわけで。

当然ながらに彼女にとって「楽しい話題」があつたのなら、絶対にそれを余すことなく楽しみ尽くすのは道理だろう。

だから僕たち3人の間だけでなんとか収まっていたのが……こうして広がる。

うん、女の子だもんね……うん、諦めてたよ。

「ほら、ほらほらあー。響にも許可取ってるしさー? ねー? ひびきー?」

「……うん」

何かの会話の表紙で「良いよね？」って聞かれて、で、いつものごとく聞いてなかったけど聞いてたフリするために「うん」って言っただけなんだけどね。

でも今回は僕が悪いっぽい。

それにどうせ同じだからって気にしてない。

気にしてないから大丈夫。

僕が女装してるとかそういう話のときに居なかった、かがりとさよ。

彼女たちへ伝わるのも……どうせ時間の問題だっただろうしね、もう良いよ。

下手に知らないときに共有されてかがりに突撃されても、それはそれで困るし。

「やー、しっかしすげえ髪の毛。あ、蛍光灯だと完全に透けて見えるー」

いつも以上におちやらかした感じなゆりかは、僕の隣で僕の髪の毛をばさばさしながら楽しんでいて、とにかく落ち着きがなくて。

今日は珍しくお誕生日席になっていない僕の反対側には、くるんなかがりいつもの眼鏡じゃないさよ。

「ゆりかはロリで僕はシヨタ」みたいな会話になったときの場面を、女子や女性特有のすごい記憶力で見事に再現されてから少し。

僕が忘れかけていたところとかまでほぼ一字一句っていう感じに再現してのけたゆりかっつてすごいね。

まあ、ゆりかのことだから結構に盛られているところもあつたけれども……とかく女性  
性は脳の想像上エピソード記憶っていうやつだったかが優れているらしい。

けれども記憶力がすごいが故に恋人や夫婦の間ではそのせいでいさかいが絶えない  
と聞く。

なんて恐ろしいことだ。

女性は「どうして自分と居たり話した場面を覚えていないの!？」って怒って、男は「そ  
んなこと言われても覚えていないものは覚えていないんだ!」って感じになるらしい。

うん、分かる。

すつごく。

なにしろ目の前にいるダブルくるんさんはその代表例だもん。

何度もそれで……初めのころは軽い感じだけでも怒られたつけ。

勉強で教えたこととかはすぐに忘れちゃうのになあ、この子……。

「？」

ぱちりとかがりと目が合って……そして彼女はいつもどおり「くるん？」してきた。

多分何も考えてないんだろうなあ……羨ましいなあ。

……今日のゆりかは……ファミレスに着いてみんなのジュースを「いい感じ」に作り

上げたあとに席に座った彼女は、話し始めた。

あのときの……りさとのあれこれがあったときの、あの話題を。

だけれども本当のことは言っていない。

彼女は上手いこと彼女自身が恥ずかしいような場面は話さず、けれども辻褄の合うように、だけれども嘘を言わない範囲でごまかして「ゆりかと僕が並んで歩くと小学生同士みたい」だとか「ゆりかは自称年齢詐欺ロリで、僕は年齢不詳ロリかシヨタ」っていう感じに話したいことだけを話している。

「それでえ?? どーよどーよおふたりとも?」

「そうねえ——……」

「わ、私は…………」

それにしても、こここのところみんなが良い意味で遠慮がなくなってきたのを感じる。

なんて言うか……壁がないっていうか、話そうとしてぐつと抑える感じとかが消えてきたっていうか。

僕の事情……嘘だらけではあるけれども……を知って、そこその時間が経ったからかな。

だからこそゆりかも結構積極的に話を振ってくるようになってるんだし。

まあ今日のはやり過ぎだって思うけれど、でも無遠慮ってわけじゃない証拠に新しい

1歩を踏み出そうとするときにちらちら僕のことを見てきて、軽く話を振って「いいのかな？」って確認するような感じだから、別に嫌な気分になることはない。

ないんだけど……なんというか、こう……単純に恥ずかしいんだ。

僕のことについて、僕が話題の中心になるっていうのは今までほとんど経験して来たことがなかったから。

けれど今では慣れつつある僕も居て、なんだか少しだけ……この歳になって成長できた感覚がある。

不思議。

「……え、と。つまり……響さんが、い、一般的に見て、客観的に……その、漫画などで出てくるようなロリータ、とか、ショタ……と、いうようなもの。と、いうこと……ですか……？」

「そーそーそのとーりだよさよちーん。ザツツライツ！ だつてさだつてさー、気になるじゃん？ 響知らない人が響見て響のこと見たとき、どーんな感じな反応になるのかなーって。もちろん面と向かつては言わないだろうから心の中でさー」

くるんくるんしているくるんはくるんのままでくるんだから置いておくとして、さよはさつきからずーつと僕たちの顔を順繰りに見続けていて、くるんさん不在のままに会話らしきものは続いている。



……さよには悪いけれど、できればこのままくるんな沈黙が続いてゆりかがさつと場の空気を読んで別の話題に変えてくれたら良かったんだけども。

「ねね、響だつてそーでしょ? 一般的な印象つての……あ、もちいつもみたく顔とか隠さないで、堂々としてるときの印象つてのをさ? ま、ここには事情知つてる子しかないけどね。しかもみんな女子。ハーレムじゃよ、ひびき?」

「——こら。なにやつてんの」

「あう づつ!? ……つたー、ひどいよりさりん」

「私が目を離れた隙にまーたその話題とか……もう。で、さつさと席詰めなさいな。

どうせ私がちよつと外に出てたから響さんをムリヤリ居心地悪いところに引つ張ってきたんでしょ。……あ、ごめんなさいね響さん、さ、いつもみたいに奥にどうぞ」

「……うん、ありがとう」

りさがなんか気を利かせてくれたんだけど……いや別に僕、お誕生日席が好きなのわけじゃないんだけども?

何でそう思つてるの?

だけど善意からみんなが勧めてくる手前、断ることはできない。

そんなわけで僕はすすごと定位置に戻されることになる。

初期位置の定位置のいつもの陣形に。

僕がお誕生日席でみんなと店の人とか通り過ぎる人からの視線を浴びて、目の前のテーブルの左右にふたりずつが座っているという。

僕が口を開くと4対の瞳が左右から飛んでくるという、僕にとってはこれ以上なく苦手な場所へと。

そうして足が床につかないから手とおしりでずりずりと進んで、奥に着いたら今まで座っていたクツション3枚をゆりかから「これが響のぬくもり……」とかこの子の未来が少し不安になるようなつぶやきとともに受け取って、座高をかき増しにして。

で……結局はいつも通り僕はお誕生日席。

……だからなんでなんだろ。

でもなんだか落ち着くような気もする感じがして来ちゃっている今の僕の定位置。だけれども僕の精神はちっとも落ち着かない。

だってロリとかシヨタとかいうワードを、こんなに幼い女の子たちが口にしているのにまだ慣れないんだ。

なんていうかいかかわしいっていうか、こう……上手く表現できないけれども。

親戚の子たちが久しぶりに会ったら……って感じ？

もう「小さい」って言われること自体には慣れっこだし、肉体年齢はこれでも盛りに盛っているから文句は言えやしないんだけれども。

……だけでも、嫌なものは嫌だなあ。

それをはつきりと言えない僕自身もまた、いつも通りに嫌なんだ。でも事実だしって思う僕自身も居て、つまりはよく分からない。

強いて言えば、この体のこと。

今の幼女な体のことを僕自身なんだって当たり前前に思っているっていう事実を意識するから嫌なのかなって。

「じゃー、ひびきも気にしてないってことで本題に入りましょーっ！ さてさて、響ははたしてロリかシヨタか。 一世一代の討論を！」

「んなことせんでいい。 適当でいいじゃないの」

「だめだなー、そんなことだからりさりんは……あごめんなさいりさりんさまですからそのこぶしをそろーりと下げてくださると私私とてもとても」

「……はあ——……」

ため息をつきつつも「まあいつものゆりかよね」って顔をしているりさ。

「そういうことならまずは言いだしっぺからね」

「えー」

「えー、じゃない。 さよさんたちまで呼びつけたんだもの」

「うえー」

「あ……あの、私たちは別に……」

「いいのよ。人集めといてハイどうぞ、なんてズルいじゃない」

結局話の流れは変わらず。

僕がそのどつちに当てはまるかっていうものになっちゃうれしい。

なんだかんだ言つて、こうしてゆりかを叱っている風なりさだつて実はずっと顔がにやけているしなあ。

ストッパーが居ない。

この子たち、僕のこと話すときはやけに熱心だからなあ……なんでだろ。

## 46. X8話 響=ロリorシヨタ?? その2

「んじや行きましよー、私の推しは、もちろん男の子!」

僕がロリかシヨタかって言う究極過ぎる二択について、ゆりかが言い出す。

「数年後には華麗な通りすがりの美少年になることー間違いなしのシヨタっ子だね!

や、私たちが長いこと響が男の子だーって思ってたからってのもあって、今でもそんなに

印象変わらないってのもあるんだけどさ」

がし、と肩を掴んでくるほどに近づいていたゆりか。

いつの間に。

そして顔が近い。

「ぬふふ……」

しかしあいかわらずのぱつつんスタイル。

流行っているんだっけ?

ちよつと前から?

あ、いや、ちよつと前って何年前だっけ?

……いけない、歳を取るとつい時間感覚が。

まだまだ20代……だったのに、この始末。

けどまあ女の子のこういうヘアスタイルって良く見かけるし、人気ではあるんだろう。

男と女の流行とかかっこいいとかかわいいの感性ってことごとくに違うよね。

男受けとか女受けとかいうやつ。

「リアルでも女子の僕っ子はいるけどさ、響みたく話し方までホントにさ！ マンガとかアニメみたく演技みたいな話し方ってやつじゃなくて、なんて言うのかな……そう！ クール系男の子って感じですごく自然だし？ なにより食いつきのいい話題って男子と話していて盛り上がる系のものだしねえ。 つまりは男好みのってやつ。

思考回路のベクトルがちがうのよん、ふっの女子とは」

「ね？」とか首をかしげながら言ってくる。

男だった僕の評価は多分「影が薄くて居るか居ないか分からない眼鏡男子B」。

口数は少ないし人と目をあまり合わせなくてすれ違うときに初めて声をかけられて気がつくとかザラだからしょうがないよね。

だから影が薄いとかなんとか言われてたはずなんだけども不思議なもの。

中身は全くおんなじなのに、見た目が変わると一転「クール系」って言う評価らしい。 やっぱり人って、見た目なんだね。

そう思うと男としての僕がどこかで凹む感じがする。

「響がいつもの格好、中性的な服で話しかけてきたらさき? ちよつと話したら男の子、つまりはシヨタっ子だつて思うんじゃない? 超ロン毛の。なんかミステリアスなフニキのつて。そでしよ? でしよ? いや、思え!! 思うのだ皆の衆!!!」

「ゆりか?」

「はいっ!?!」

「押しつけは止めなさい」

「あい」

「分かった?」

「はい」

「ほんとうに? なんならまた」

「ヤメテクダサイ」

「よしっ。あ、とつても悩ましいけど私はゆりかに一票」

なにが「よし」なのかは分からないけども一瞬で会話の流れが戻ったらしい。

女の子の会話つてすごいよね……脈絡が吹っ飛んだり再生したりするもん。

「シヨタ……つていうのは響さんには失礼だと思っけど、ロリとどつちかかって聞かれたらそうなるわね。ま、シヨタつて言うよりも背は低いけど同年代の男の子つて感じか

しら。　　なんだか大人びているから小さいけど小さいって印象は……話したらないのよね、不思議と」

僕のことを小さい、ちっちゃい、ミジンコみたいと罵ってくるものの、僕にひつついていたゆりかをひつpegがしてくれて、おとなしくしてくれたりさは普通に優しい。

やっぱり、りさはいいい子だね。

小さいっていわれたけども。

「りさりんりさりん、その心は」

「心? ……あ、理由ってことね。　　んーと……だって仕草とか雰囲気とか……あーもう、なんだか上手く言葉にはできないんだけど、そういうもの。　　もちろん見た目だけじゃ女の子にしか見えないけど傍にいれば分かるっていうか?　　フードで髪の毛とか隠していれば、んでその状態でちよつと話すなら……まず男の子だって思うだろうしさ、私も」

少なくとも2人。

ゆりか以外にも、僕のことを男だっと思ってくれる人がもう1人は居る。

だから……僕のことを真剣に話されて恥ずかしいけれど、今日ここで言ってもらえてちよつとほつとする。

けど、仕草ってやつ。



僕は「なんか恥ずかしいから……」って、初めのころは「見た目通りの女の子だ」って思ってもらおうとしていたからこそ、いつも脚を閉じているとか、そういった女らしい動き方とか態度とか……仕草っていうもの、ちよつとは試したものの、ついぞ熱心に研究とかはしなかったからなあ。

つまりは女の子としては「がさつ」、だけど男としては「まあ……普通？」な感じになっているんだろうか。

……男として見てもらえるっていうのが嬉しいけども、今後女社会に溶け込めないかもっていう不安も出てきた。

いやだって、女性って同調圧力っていうものが強いから。

僕みたいな、ただでもトンデモな存在はそれに合わせないといけないだろうから。

ああもう、体さえ元のものだったなら。

「……あの？ ええと、響ちゃん？」

おや、静かだったかがりじゃないか。

「ん？ かがり、どうした。何か追加で食べる？ それなら好きに頼めば？」

横からかがりが口を挟んできたから反射的に答える僕。

「いえ、違うの……その」

「あ、僕は今日は小さい皿の物しか頼まないから残り物はないと思うよ。残念だった

ね」

「いえ、そうでもなくて」

「なぬ!!? 響の口をつけた残り物ですと!!! かがりさまかがりさま、ぜひぜひお情けをちょうだいしたく存じますですというかずるいよかがりんいつもいつも響と一緒にでそーゆーことふつーにしてて!!!」

「え? あ、あの、えつと……」

「あの、ゆりか……さん、お、落ち着かれて……」

「はあ……コイツは……」

せつかく僕が感傷に浸っていたのに、まーたいつものように、いつものごとく、当然のように、かがりがくるんつと口を出してきたばっかりに、これだ。

なんかいつもと比べると少しだけおとなしい感じだけど、でもやっぱりかがりはただのくるん。

だって、たったのひと言でこうなるんだから。

……あー、さつきまではお腹が空いていたから静かだったのか、なるほど。

……動物や子供みたいだね。

……ということはやっぱり普段から餌付けをしていたのは正解だったのか。

……だっておかげで少しは僕の言うことに従ってくれるんだから。

ゆりかが反応してぎやあぎやあ始めて、さよが周りを気にしておろおろしだして、かがりはくるんってして……りさはゆつくりと騒ぐゆりかの後ろに回っているけども。

僕は知らない。

見なかつたことにしよう。

うん。

とりあえずはメニューをそつと、さりげなくかがりの元へ滑らせておこう。

食べものに満足してさえいればこの子は満足な子だから。

良いじゃない、そういう子がひとりくらい居たって。

## 46. X8話

響||ロリorシヨタ??

その3

「響ちゃん……ええとね？」

「？」

なんだかがりの様子がおかしい。

甘味が足りないの？

早く頼みなよ。

「あの。 その……何度も聞いてしまって悪いけれど、響ちゃん、こういう話をこんなところ……人に聞こえてしまうかもしれない場所です……でもいいのかしら？ ええと、こういう話題でも……」

む。

かがりが至極常識的過ぎることを口にはしている。

「なんだ……かがり、僕に甘いものを頼ませて多く残させて自分が食べたいっていう理由でもじもじしていたわけじゃないのか」

「違うわよ！ もうっ、響ちゃんは私のことをどのような目で」

「ん。 食欲の秋だね」

「ひびきつたら詩的ー。 んじゃ私は無難に食べてよく育つ……よく……ぐぬぬう……」

「自分で言つといてあんたは……でもまあ、そうね。 いつも食べているわね、かがりさん。 それでよくそのプロポーシヨン維持できるなあつて思うわ」

「えつと……その、虫歯になるから……い、言えませんっ」

「みんなひどいわっ!？」

かがりのくるんが心しか尖っている。

……やっぱり、この子たち同じ女子中学生基準でも食べ過ぎだったんだね。

僕はてつきりこれが女の子の標準だつて思っていたから困つてたんだ。

だつて、特に最初の方なんかは「女として生きるかもしれない」つて思っていて、その参考を一時期はかがりにしていたもんだから……これだけ甘いものとかを食べなきゃいけないのかつて思っていたから。

あと……やっぱりでできているんだね、虫歯。

そりやあそうだよね、会つてるときはほとんどなにかを口にしてるし。

それで太らないのが本当に不思議なくらいだ。

栄養を妄想で消費しているんだろうか？

あ、でも、身長が高いから基礎代謝的なのは多いのかもね。

そうしてひととおり……被害担当はさよで、それに割って入る感じのりさがいて、その場面をスマホで撮っているのがゆりか。

そんな、年相応のはしやぐっていうものをお店の人に怒られない程度の声で繰り返すこと数分。

ひたすらにみんなにさっきの発言について問い詰めて、それでとりあえず満足したっていう感じなかりは、ふう、と髪の毛を触りつつ、落ち着いた様子。

「……さて、それでは私も言わなければ、ね。響ちゃんのこと。私としては、響ちゃんには『小さな乙女』という印象よ」

「あ、戻すのね話題。いや、私はいんだけどさ……さすがはかがりん。てことは、つまり『ロリ響ちゃん』ってことだね？　ロリっ子だね？」

「ロリータ……そう、ゴシックもとても似合いそうで」

「……あの、その、また脱線……し、そうになって……」

「たとえ普通の格好だって……最初に会ったときには、ええと、ストリート系みたいな格好だったけれど、それからは今みたいに。——そう。響ちゃんは、完

成されすぎているのよ。完全なロリータなのよ」

「おお……また新しいかがり語録が」

「語録？」

「あ、あの、あの……どうか落ち着かれて……」

かがりが、目を閉じて黙る。

これは、非常によくない。

なにかが起きる前触れだ。

かがりが普段とは違う反応を見せるような、こういうときっていうのは。

「そうよっ!!」

あ。

がた、と席を立とうとして思いっきり太ものあたりをテーブルにぶつけて、上にあがる食器がみんなガチャンって音立てて、近くの席の人がそんなかがりを見つめ始めて……口を開きかけているかがりを、すすす、と静かにきちんと席を立て、すとんと座らせるりさりん。

さすがに目立っている気がついたのか、いつになくおとなしい様子。

……もう慣れてきているなあ、この子も。

いや、みんなが……かがりの奇行に。

やはりこの子は基準じゃなかったんだな。

そしてさよがまだあったかい紅茶を差し出して発音しかけていたかがりの口をふさいで、ごくごくと飲ませてほうつとひと呼吸するくらいはあって。





願いされたときにその上までは見たことがあるから分かっているの、いつも見ているから分かっているのよ理解しているのそれはそれは極めて美しいの」

「あらもう少し説明しないといけないのよね、話は人が聞いて分かりやすいように前提というものを先に話してから本題に入らないといけないと響ちゃんから夏休みのときにも散々に教わったというのに私ったら、ええと響ちゃんの容姿が美であって完成されているというのもまるでそうなるようにって設計して創られたようなお人形さんのようだという意味よ分かるかしら、たとえばみんなだってお家にお気に入りのお人形さんが何人もいるでしょう? いなかったとしても昔はお部屋にいたはずだしゆりかちゃんみたいにマンガやアニメに出てきているようなお気に入りの子でも全然に構わないわ」

「だから隠していてもどこかに染み出しているような美しいかわいらしいという印象以外には表現できないのだし見つけ出せないのよ、もちろんおはなししているときには男の子らしさもあるのだし、あ、だけれども響ちゃんってどう表現したらいいのか分からないけれども不思議なのよ、男の子らしいのに女の子らしくもあって女の子らしいのどこか男の子らしいというものが伝わってきてときどき頭がどちらかしらと考えてしまおうの」

「……………」



男性もご年配の方も物心つかない赤ちゃんだつてひと目で見て分かる完成形の器というものに、これもまた完成された男の子の魂が完成された誰かに吹き込まれたようなそのようなイメージを持つてくれたならよく分かると思うわ、ええそうね言うなれば童女、いえ、ゆりかちやんがこの前言つていたわね幼い女の子つまりは少女というのかしらそれとも先ほど言つていたようにロリータ、あるいはロリと言うのかしら」

「……………」  
ゆりかを見る。

「……………」  
心持ち顔を背けられた。

あとで問い詰めよう。

「そのような、ええ、ロリと言う完成された小さな女の子の体の中に少年、いえ、これもまた先ほど言つていたようにシヨタというのかしら……ではないわねそれはふさわしくない気がするわ? ゆりかちやんには申し訳ないのだけれどもだつて私のどこかがそれは違うと叫んでいるのだから私にはシヨタとは表現できないの、ならどう言えばいいのかしらね、男の子、男性、少年、青年、男の人ああ思いついたわしくり来る表現がそう青年よ!!! 私たちよりも年上の高校あるいは大学にいて穏やかで線の細い男性な青年という人よ! それを無理がないようにいえむしるびつたりとそこに合うよう

に収めたというような感覚ねえそうよ私にとって響ちゃんやんは青年さんで青年ちゃんなのよ！」

一瞬とひやりとする。

……かがりは完全なる感覚派な子。

いつもいろいろと足りないって思っているけれども、勉強を教えたりするときには嫌というほどに前を向かせないといけないもんだから、いつもいつも振り回されているもんだからついつい忘れがちだけど……この子だって決して頭は悪い方じゃない、むしろいい方ではあるんだ。

ただ興味がすべて、そういう方向に向いちやっっているっていうだけであって。

それが全てを台無しにしているんだけれども……それは置いておいて。

だからつまり、かがりは普段から僕のことをよくよく観察しているっていうことで、だから僕の本質の一部を……今言っていたように理解しているんだ。

だから、ひやつとして手に汗がじわつとにじんだわけだけでも。

でも、心配することはないだろう。

だってどうせ、今話し終えたら……いつものかがりのこと。

どうせ完璧に忘れちゃうんだろうから。

ただただ自分が思っていることとか話しているあいだに思いついたようなことを

しゃべり倒して、それですつきりして満足するだけなんだろうから。

うん。

僕は詳しいから分かる。

いつもだから。

あの……夏休みにかがりとふたりきりの日っていうものを何日も何日も経験したら、そりやあもう慣れないほうがおかしいんだから。

## 46. X8話

響Ⅱロリorシヨタ??

その4

「……その様子だと、みんな納得してくれたみたいね！」

絶句という言葉を理論上には知らないらしいかがりが言つてのける。

「あら響ちゃんもかしらそれはとても嬉しいわ、だって響ちゃんつたら普段から自己評価というものがとても低いのも、この際にきちんとあなたの子だろうと女の子だろうと関係ないすばらしさというものを自覚しておかなければね！」

かがりが止まらない。

いつものことだね。

もうとつくに慣れてる。

……これが、たかが半年過ぎた程度じゃ治らないものなんだっていうことくらいは知っている。

だから僕は黙っている。

僕にとって害はないし？

いや、いずれは治さないといろいろと不味そうだけでも、それは彼女……の周りの人たちに任せよう。

とにかく彼女がそんな調子なもんだから、もちろんみんなもあつけにとられたまま立ち直ることができないでいる。

ゆえにかがりの独壇場はまだまだ続くんだろう。

……こつそりイワンさんに連絡取って、電話、かけてもらおうかなあ……。

「だから私はさらに細かく教えておいてあげなければならぬのよ響ちゃんさよちゃんゆりかちゃんりさちゃん、アンバランスゆえにパーフェクトな響ちゃんのことを」

「——下条さん」

僕の耳にかすかな声。

その主を探すと……さよ。

いつも通りにそわそわともおっかなびつくりともしていない、さよが居た。

普段なら、声が通らないからって服を引つ張ったりして注意を引いたりしているのに。

その動作、僕にもよく分かるのに。

けれどもくるんさんはそれに気がつかない。

「だけれども、それだからまたいいというのもじつくりとおはなししなければならぬのよ、だって響ちゃんは普通ではないからこそ響ちゃんであって究極の」

「……あ、の……も、もう、そのくらい、で」

「美というものであらさよちゃんなにかしら私今とてもおはなしをしたくってだからしなればならないのよ、悪いけれど後にしてちょうだいね、それでなのだけれども顔つきからするにどうもりさちゃんもゆりかちゃんもあまり分かつていないようだから何度でも言うのよ響ちゃんは」

僕は顔を背けた。

右手の、かがりとさよのいる方向から。

なんとなくの直感。

僕はそれをいつも頼りにしているんだ。

それは偶にはずれるけれどもだいたいには正しい。

どっかの本で読んだ覚えがあるけども、それは無意識っていう僕の頭の中の意識に上つてこないもののため込であるような知識とか経験則とかを一瞬で引つ張り出してくれるもの……らしい。

それにしがつた僕。

まさかとも思つたけども、ぱつと振り向いてゆりかと目が合つたりしたつて思つたら、聞き慣れているようで聞き慣れていない声が斜め後ろから飛んできた。

「——下条さん。止めてくださいと、言いましたよ?」

「……え。さ、さよちゃん?」



怖い。

声が低い。

普段と違って淀みが少ない。

そして怖い。

さよが変貌した。

「……ようやくに止まってくれたんですね下条さん、もつと言わなければならぬかと思っていました、聞いてくださってよかったです」

「あ、あの」

さよがつつかえつつかえで話したり小さい声で話すのは……彼女が普段は遠慮しすぎるから。

だから、それが無くなれば当然に。

「下条さん、先ほどから明らかに響さんのことについて言及しすぎです、理解していますか?」

「え、えつと、さよちゃ」

「いえ、していなかったからこそずっと話し続けていたんですよね、ですけども響さんのお顔をよく見ていましたか? 響さんはその話題でとても困っていたんですよ?」

おお、ばつさり……けど僕は大人だから平気寄りの困ったただただだけだね。

「と言いますか下条さんもみなさんも知っていますよね、響さんはそのような話は好きではないというそもそもの前提を」

メガネのレンズの奥の瞳がいつものように長い髪の毛で半分ずつくらい隠れちゃっているのに、光っているように見える。

その口元はいつもみたいに動かしても半分以上は声にできないものなのに、きちんと低く通る、女性特有な、怒っているときの声を発している。

一切言い間違いもつつかえもせず。

静かな怒りがテーブルを支配している。

「ご存じですよね？ 響さん自身が嫌だと言っていましたよね？ 思わずで舞い上がってしまったのと止められなかった私も同罪ですが、あるとき病室で、響さんご自身が嫌だと言っていました。覚えていないんですか？ 響さんが嫌だけれども友人だから仕方ない、とでも言いたそうな表情で優しそうに微笑んでいたのを見てはいなかったんですかみなさん」

冷や汗がにじむ。

怖い。

別に大声でもなくって、怒っている顔つきでもないのに……怖い。

うん、やっぱり目は背けておこう。

「あの一、さよちん?」

「大体なんですかロリとかシヨタって馬鹿なんですか人に向かつて堂々とそのようなことを言うのだからおかしいじゃないですかそうは思いませんかそうではないですか関澤さん杉若さんそして下条さん。友人でも限度というものはありますしやデリケートな話題なんですよ本当に理解しているんですか? 忘れていたのでしたらもういちど思い出してください、響さんがそれをあの年越しのときに打ち明けてくれたというのは裏を返せば私たちと出会ってから半年以上も言えないようなほんとうに重い事柄なんですよ思い出しましたね?」

すごい。

なにがすごいって、さっきのかがりと同じくらいのスピードでよどみなく話しているってというのが。

ものすつごくメルヘンにすつ飛んで行ってていたかがりのは違って、とんでもなく重くて意味の込められているさよの言葉。

……この子、僕と何か似てるところがあるから何かにかちんって来ちやつたんだろうね。

普段怒らない人が怒ると怖いって言うのはそういうこと。

「えっと、さよさん、私たちは」

「それに私たち調べましたよね、時間をかけてよく。そして確認しましたよね、4人全員で響さんの心と体の性別の不一致について。響さんのお体は私よりもずっと重い病気を背負っているんです、その上に心までつい去年までは心の性同一性障害というものについてご家族へさえ思うように伝えられなかったと聞きます。これは忘れてはいませんよね？ そのようにして響さんはとても心身共にお辛いんです、それなのに闘病を頑張られていて手術を受けるために外国に行く決意をされて、心の方も私たちのように会って半年しか経っていない、しかも心の性別として異性の私たちに向かつてそれを両方とも打ち明けてくださったんですよ？ それなのにみなさんはいったい何を考えているんですか響さんこんなにも嫌がっているじゃないですか、人のことを過剰にはやし立てて楽しいんですか」

ふう、と、息継ぎのためかは分からないけども大きめのため息をついた隙を狙って、僕も、ふう、と落ち着くための呼吸をする。

だつて怖いもん……ひとまわりもしたの女の子の張り上げたりもしていない声でも。「……あ、あのね？ 私、ちゃんと聞いたよ？ 響に。平気そうだし、そう呼んだりしたつて別にいいんだつて。だからだいじょう」

「それは響さんと私たちが友人だから我慢してくれているのであるというのを考えたことではないんですか関澤さん、これは本来ならば軽々しく話していいようなものではありません」

ませんし、許されない行為なんですよそれを本当に分かってるんですか、響さん自身がそれを口にしてるならまだしも他人が言うだなんて」

さよ。

すっかり忘れていたけれど、この話し方はあのかのときの、僕が倒れていたときに耳からかすかに聞こえていたような鋭い感じのもの。

なんだけど、あのかのときよりもずっとずっと長く速く話している。

「そして杉若さんも調子に乗りやすい関澤さんだというに、それを止めないで一緒にあって、いえやはり響さんが本当に嫌ではないかをきちんと聞きませずにまくし立てていた下条さんも同罪なんですよみなさん、響さんを傷つけて楽しいんですか？ 私はそれに気がついてあのかの写真のときのことを思い出したりもして今とてもものすごい罪悪感に追われていますよ？ 本当に何を考えているんですか少しは頭を使って考えてくださいよ」

「ええと……さよちゃん、ごめんなさい」

怖い。

起こってくれてる内容はもうどうでも良くなって、ただただ怖い

あの、おとなしくて……他にもいろいろあるけれど、でも僕に一番近い性格をしているんだと思っていたさよが、この子が本性を表している、この瞬間が。

……とりあえず、じつとしておこう。

◇

「……あ、響さん？」

「……何？」

ひととおりに言いたかったものを言い終えたのか、静かになったさよが話しかけて来る。

顔を上げるついでに3人をちらつと視界に入れてみるけれど、みんな死屍累々という様子。

とくにかがりのしよげ方が著しい。

くるんがへによんになっている。

「私は響さんのことを。すごく素敵な男性だと思つていますよ？ ……あ、あう、えつと……つまり、知的で、いつも冷静で、達観していて、頼りになつて……その……え、えつと、つまり……」

さつきまでの威勢がどつかへ消えちやつたのか、急に話すのがゆつくりになつていつて声が小さくなっていつて、顔と目がうつむき加減になるさよ。

「……おおつとお? これは思わぬ伏兵みたいだぜい?」

「ゆりか。茶化さないの」

「あい」

「……さよちゃんが落ち着いてくれて、よかったわあ……」

「ずず、とストローに口をつけて吸う。」

「……ジュースはすっかり生温くなっている。」

「どれだけのあいだ、僕は動けないでいたんだろうか。」

「……………」

「だけでも、分からない。」

「やっぱり、分からない。」

「この子、さよでさえ一瞬で豹変するっていう女性、「女」の「性」っていうものが……」

「僕には、あいかわらずに分からない。」

「少女たちのそれでさえ、未だに分からないんだ。」

「……けれど、さよちゃん素敵だったわっ! お友だちを想ってそこまで叱れるだなん

て!! 私は怒られていたけれども、すばらしいことだと思っわっ!」

「……あ、わ、私ったら……ごめんさい、その、言い過ぎて……」

「見たかいいさりん。 ああして怒られても瞬時で忘れられるかがりんという存在を。」

いやマジで、ほんつとに忘れてないかあとで確かめないと、まーたおんなじ展開になっちゃうからりさりりん協力して？」

「……私もまだ……お母さんに怒られたときみたいな感じになつてるのに、あれはすごいわねえ……あんなに一瞬で立ち直れるものなのね、人って……」

……………。

ひとまずは。

とりあえずは。

ここのところは。

僕が、男と女、半々くらいで見られただけましだったと。

そう、思っておこう。

うん。

だって……その、僕の事情っていうものを少しでも知っているこの子たち全員から「ロリ」……女の子だって言われていたら。

僕はどんな気分になっていたのか、分かったもんじやないから。



# 46. X9話 怒りと女性／ 女子 その1

さよの怒りが収まって少し。

ついでに僕について何か言いかけたことについて、からかわれて少し。

「ほーい、んじや話戻してっ」と

「無理に戻さなくてもいいんじゃないの？ だつてさっきのせいで」

こうして休みの日に外で集まる時点で仲の良い子たちだ、「さっきのはあれでおしま  
いね！」つて言う感じで普通に戻っている。

うんうん、良いよねこういうの。

かがりの好きな少女漫画とか恋愛もののドラマみたいに、いつまでもどろどろしな  
くつてさ。

……しないよね？

信じて良いよね？

「えつとさ、さっきのアレがさよちゃんの本性つてやつだつて思うと、こー、すごいなーつ  
て」

「あうう……」

「いや、偉いつて思うのよ？ 私もこうだから言われなきや分かんないしきー。でもさっきの……りさりんのなんてメジヤないくらいかも。や、ガチですごかつたし。うちのお母さんよりも迫力満点。将来旦那とかを徹底的にこき使うタイプと見た」

「……ちよつと、私は違うでしょ？」

「え、だつてりさりんいつも怒つてるじゃん。怒りんぼじゃん」

「それはっ！ あんたが変なことばっか言つてくるからでっ！」

「えー?? ヘンなコトつてどんなコトー？ 具体的にはー??」

「うぐ、コイツ……」

「ううう……は、恥ずかしい、です……」

少女つていう話し好きな生きものに囚われている僕。

どうしてか、ほんとどうしてかお誕生日席な僕。

早くしんとした空間に帰りたくてしようがないんだけど、それを言い出せないんだ……年下の子たちにできえ。

僕は一応最年長なのにどうしてこうなんだろうね。

「でもまあ声を上げるほどのことじゃないし……」つて思っている僕がどこかにいるからこそなんだろうけども。

けど、あのさよが……この、目の前でもう元に戻つておどおどした感じになっている

この子が、なあ。

あれを目の前で聞いていなければ信じられないくらい。

そっか、この子は怒るときにはあんな感じになるのか。

まるで別人みたいだった。

別人、……そう、別人みたいに変貌する感じ。

一瞬魔法さんのこと思い浮かべちゃうけど、これはきつと普通の人の気持ちの範囲内のこと。

さよつていう一番静かそうな子がこんなに怖いつて知った。

そのおかげで、女性相手じゃ必要がない限りにはなるべく、可能な限りに気をつけて女性を怒らせちゃダメなんだって気持ち新たにできたのが収穫。

よっぽどのことがない限りは僕が譲歩した方が、いろいろと……本当にいろいろと楽しそうだっていうもの。

だって怖いもん。

それに、うん……この見た目、ひとまず僕から怒らせない限りにはそうなりはしないだろうけれども、元に戻ることができたり、あるいは痼癩に巻き込まれたりすることだってあるだろうし……気をつけないとね。

その前にまずは社会復帰だけでも。

「あの、響ちゃん」

「ん、どうした……かがり、さすがにそれ以上は止めておいた方が良いと思うよ？ 君の小遣いのにも、カロリーのにも。飲み食いというものは習慣だから、普段から気をつけないと、量は増える一方なんだから」

なんかデジャヴなやり取り。

「え？ いえ、まだまだ平気よ？ お腹もお小遣いも。出かける前に『お友だちとお昼におやつを楽しんでくるから』ってもらってきたのだし」

「……あの、そんなに甘いものばかり、は……」

好きだね、スイーツ。

それでよく胸焼けしないね。

僕ならとつくになつているだろうに。

……あと、やっぱり食べるから育つんだね……前後に。

それなのに横幅はすらつとしていいるからすごい気がする。  
かがりの体内はどんな仕組みなんだろうか。

特に運動もしていない食つちや寝の生活なのに。

……妄想で消費してでもいるのか？

「そうねえ、次は……あ、ええと違うのよ、響ちゃん。私、聞きたいことがあつて。」

今の……えっと、さよちゃんに叱られちゃったので思い出したのだけれど」

あれを「叱られちゃった☆」で済ませて立ち直るのがすごい。

「響ちゃんの叱り方……怒り方って、今のさよちゃんのそれと似ているわよねって思っ  
て」

え？

僕？

「うえ!!? ちよ、ちよつと待ってかがりさんががりさん! 響さんって怒ることあるんですか!? いつもこれだけ落ち着いていて優しい人なのに!」

「りさちゃん、そんなに驚かなくても」

「だって!!」

1番に反応が大きいりさと、やっぱりどこかずれているかがり。

「けれども本当よ? 夏休みに何回も叱られたのだから」

「ウソ!? 想像できないわ、いったいどんなことをしでかしたの!」

……その横で固まっているさと、いつもどおりな顔つきのゆりか。

そんなにびっくりすること?

誰だって怒ることくらいあるでしょ?

ちようどさつきのみたいに。

「あー、それをすつごく得意げに言い出す、しかもさっきのさつきでーなかがりんマジかがりんって感じ」

「??」

「すげえ……んでどーだったのさ? ま、原因は……そだねえ、かがりんが嫌がる響を気にも留めずに延々と執拗に何十着も着替えさせたとかそんなものだと思うけど」

それくらいなら怒らない……:というか怒るっていう気持ちか湧かないけどね。

だって、かがりはこういう子だって知っているからっていうのと、そもそも僕がかがりという子の習性に対していちいち腹を立てるっていう反応をする気が失せているからっていうのがあるし。

だけでも……りさも、何もそこまで驚かなくたっていいと思う。

「……誰だって怒ることはあるよ? ゆりか」

「や、そーなんだけどさ? いくら響だつては言っても人間だもんね。で、でで! なんだなんで? 響だから、さすがに虫の居所つてのがーとかじゃあなかつたはずでしょ?」

「ええ、私が……宿題を、ほんの少しだけ」

む、今この子はさらにと捏造をしようとしている気がする。

「ほとんどだったよね? 嘘はいけないよ、かがり」

「え？ 響ちゃん？ え、えっと」

片手を挙げて彼女を制しながらさっさと事実を述べる。

こういうのは邪魔されずに言わないとダメなんだ。

そうじゃないと「だって響ちゃんが良いつて言ったからー」ってなるから。

「夏休みの宿題を遅くまで、ほとんど手をつけていなかったからだったじゃないか。

それも、何をどれだけいつまでにしたらいいのか、それすら分からない状態だったよね？  
 そしてなにより、それをなかつたことにして遊び呆けていたから叱ったんじゃないか。  
 思わず、君の将来を想つて。 忘れたことにして地獄を見るのは夏休み明けの君  
 だっただんだよ？」

嘘と捏造はいけないこと。

僕自身がしてるからよく分かる。

……でも、「あら？」とか「くるんっ？」ってしているのを見るところ、どうやら本気で記憶がねじ曲がっていたらしい。

……あのときの僕の苦勞は。

「……響ちゃん？ そうだった、かしら……？ あら？ あらあら？」

「そうだよ？ 叱られたっていう記憶だけじゃなく、その理由もきちんとセットで覚えておかないとね。 これから先何度となく同じ理由で先生たちに叱られることになる

と思うよ。怒られるのはイヤだよな？ それにあれば……怒る、叱る以前に感情すら込めていないものなんだよ」

そう言いながらかがりを見上げながら問いただす。

……くるんカールが著しい。

この子の面倒を、誰か見てあげて。

本当に、切実に。

大丈夫、やればできる子なんだ。

ただやる気が明後日の方を見てるだけなんだから。

「でも怖かったわ!」

「……事実を並べただけだよ。叱るってほどでもないし、叱るっていうのはさっきの

さよのようなものだと思うよ?」

「えうっ!? あ、あの……響、さん……」

「先ほどみたいに、僕のことを……人を、他人を心から想って本気で怒るような、そういうもの。あのときはそうじゃなかったんだよ? あくまで『そろそろやる気を出さないと後が大変だよ』って言っただけ。ああいや、半分は君の未来のことも想ってだからね? もちろん」

「響ちゃんって厳しいわあ」



「……あう、う……」

なぜかさよが、かがりの肩に抱きつくようにしてうつむいている。

前髪で顔が隠れているから分らないけども……とりあえず怒っていないからいいや。

「……え、えつと、響さん？」

「そだねー、響、あんまさよちんを褒めて差し上げない方が。すつごく恥ずかしそーだし」

「うん？」

さよを見してみる。

……確かに顔が少し赤い？

耳たぶは真っ赤。

「……ごめん、さよ。けど君の……人のために怒る、人を思いやつて叱るっていうのは大切なことだと思うよ？それができない、それをしない、見なかつたことにする人間の方がずっと多いんだから。君の今のものも、僕が倒れたときのものも。人として真つ当な感情を持つているからこそできるものであつて、人間として立派な心を持つているからこそできるものなんだ。そんなに恥ずかしがることじゃないよ」

「ひ、ひびき、さ……、これ以上はっ……あ、う、う……」

ん、ちよつとだけ年上ぶっちゃった……肉体的には年下なのにね。

けどいつも僕が子供扱いされてるんだ、たまには良いよね。

けど、ひとつ思いついた。

なんでか分からない理由でかがりと仲が良くなって、かがりが話をきちんと聞く相手  
で、つまりこれからは僕に代わってかがりを助けてくれるだろう貴重な存在……それが、さよ。

そんな貴重な友達が中学でできてよかったねって。

ゆりかに対するりさりんも然り、この子たちは良いペア同士なのかもね。

僕もこの子たちくらい頃……そういう友達がほしかったな。

今になってちよつとだけ思う、後悔。

でもこの後悔だつてこの子たちを知ったからこそ生まれたもの。

……大変だったけども幼女になってこの子たちと知り合つて良かったのかな、つて。

## 46. X9話 怒りと女性／ 女子 その2

なんだか僕が、かがりのためのさよについて話していたら妙な空気。  
滅多に僕自身の意見つてのを言わないからかな。

「おお——……」

「ゆりか？」

「はい」

「ほんとうに、分かっているわね？」

「はい」

「こういうときに冗談とかは」

「いやいやさすがにこの空気は読むさ、りさりん。それよか、あのがりんを警戒すべ

きだと思おう所存で」

「……はうう……」

かがり相手には強く言うつてのがどうしようもなく必要。

だから必要だつて思つたら好く必要ありそうだけでも……他の子の前でするとここ  
まで見られるんだつたら黙っていようかな。

注目されるのとか苦手だし……。

「あらゆるかちゃん、私がどうかしたかしら？」

いつものごとく一瞬でも自分の世界に飛んでいたらしいかがりがここで復活。

「いんや？ なんでもないさ、かがりんや。とゆうかそつちに戻したらいけないぞい」

「？ そつち……？」

「んでんで、響の叱り方つてヤツはこーんな感じのローテンションでおとなしいヤツだったんかい？」

「え？ ええ、そうね、特に声が大きくなったりはしないわ。やたらと声を出して怒る人つて怖いもの。だから響ちゃんの怒り方は……優しいわね？」

……この子がろくに僕の話の聞いてくれなかったのつて、もしかして声が小さかったから……？

「そうねえ……さよちゃんの怒り方と似ているけれど」

「怒つてはいなかったよ」

「あら、そうだったかしら」

「ああいうのは注意するつて言うものなんだ」

大切なことだから何回でも教え込む。

いくらこの子でも100回くらいで覚えてくれるつて信じて。

「で、響ちゃんのそれはもつと落ち着いていて、こう……ゆっくり静かに、諭すようにっていうのかしら？ 私のお父さんみたいに。そう、小さいころにはよくおいたをしてお父さんにも怒られたのだけれど、あのとときのような印象だったかしら」

「お、おう……昔の自分をさりげなく言うのがすげえ」

「あのとときも確かに、響ちゃんなりに怖い顔をしていてね？」

え、「僕なりに」って？

「少しだけそんな雰囲気もあつただのだけれど。でも今響ちゃんの言っていたように、私のことを、宿題を忘れていた私のことを想つてのことだつて考えてみると」

「はーい、かがりんそこまでよん」

「そうね、今度は響さんが困っちゃうわよー」

「あら？ そうなの？ さよちゃん」

「あの……なんで、私に……」

……あのとときどんな顔をしていたのか、今さらながらに気になってきた。

僕のことなのね。

「……とつ、とにかく！ さよさんと響さんは怒るにしても……なんていうか、こう……その！ 感情じゃなくなつてきちんと意志を伝えるタイプつとこね！ 良いわよね、感情任せじゃないって！」

「りさりん強引ー。 なにもムリヤリ話いい感じにまとめようとしなくたって」  
「そこ、うるさい！」

「なるほど。 りさちゃんは怒りんぼ、と。 そういうことよね？ ゆりかちゃん」  
「そゆこと」

「『そゆこと』じゃないわよ！ あとかがりさんも違うからっ！ これはゆりかだけになんだからね！」 普段は別に私怒ったりなんか

「ふーん、へー、ほー?? ほんとーかなあー？ だってこの前もクラスで」  
「だからゆりかうるさいってば!!」

……りさはゆりかを止められる唯一の子なのに、こうして乗せられて怒りやすいのが……それで誘導されやすいのが課題か。

沸点が低い……いや、ゆりかだけになのかな。

それだけ仲がいいゆえのってやつかなあ。

そういうのってちよつと羨ましいかも。

「……まー？ りさりん自身のそーゆー考え方で言いますと？ りさりんはあ、れいせーちんちやくな響たちとは違つてえ？ 正反対でえ？ すーぐに怒るわ怒鳴つてくるわ、あ、これおんなじだわ、んでもつてすーぐに手は出してくるゴリラ系女子だわ、おんなじことをずーつと根に持つわ。 まー私は知ってたけどね？ りさりんってい

うオンナノココと♥」

「……………」

あつ。

またゆりかが調子に乗って。

「まーさーにー典型的なジョシってヤツよねー？ ね——?? やっぱ間違つてないじゃん、いつも私が言ってるよーに、りさりんはツンデ——あいたあ!? ぶった!! ほらぶった!!! ほーらぶったよ!!!」

く。 くん、つて……すぐ近くで痛そうな音がしたと思つたらゆりかの一段と大きい声が響く。

そつと彼女を見てみると……ああ、実に痛そうに頭をさすつている。

そしていまだこぶしを握りしめているりさかというと、顔が真っ赤だ。

……ああ、かわいそうに。

なにかかわいそうかって……りさが、この先ずつと同じような形でゆりかに煽られては手を出してつていうのをみんなに見せつけさせられて「ああツツコミなんだ……」つて理解され続けるだろうことが。

ふたりがセットで扱われることとか、困つたら呼ばれることとか、げんこつし過ぎて手が痛くなるだろうこととか、いじられていつも人前で顔を真っ赤にさせられるだろう

こととかも。

でも嫌なら距離置くだらうし、それが良いって思ってるのかもね。

恥ずかしいから絶対言わないだらうけども。

「ほーれ！ やっぱ一昔前の暴力系ヒロインりさりんじゃん!!! 見てみい、すぐに手え出すでしよりさりんって!!!」

「あんたが！ ヘンなこと!! 言うからでしょ!!!」

「ヘンなコトってなにかにや——……あごめんなさいこれ以上はなんも言いませんユルシテ」

「……もうっ」

「りさちゃん？ 暴力はダメよ？ そう響ちゃんが前にも言っていたわ？」

「……………」

「……………」

「……………」

いつもの2人のじゃれあいにかがりのヘンな止め方が合わさって静かになる僕たち。

「……………?」

「……あ、あー、かがりんの無意識で無差別な煽りがりさりんを……ちよい待ち今のはノーカンだって!!! てなわけでさ、響やさよちんみたいな性格ならさたつたのひとこと



で済ませてくれるだろうって」

「たったの？ ひとこと？」

「あ、振り上げないで！ そこそこ！ そこそこでゲンコツなんて絶対しないからーって思ったのよほんと！ あー、痛かった、まったくりさりんは」

「……もういつかい、いつとく？」

あの方たり、放っておくとあのままループしそう……実際するし。

普段の休み時間なんかもあんな感じなんだろうな。

けども……ん。

「……ついでに聞いておきたいことが」

「あ、ちよい待ち待ってくださいいりささま、響さまの発言ですぞー！」

「あなた、そういうところ……」

「あら、なにかしら響ちゃん。 あ、ゆりかちゃん、たんこぶ」

「できているかもしれないけども……人の話は聞こうね、かがり」

「え？ ええ、響ちゃんのこととはちやあんと聞いているわ？ だけれどもゆりかちゃん

の」

「こつちを見てね、かがり」

僕の声が発せられているときにはこつち見てくれるけど、ワンフレーズが終わるたび

にゆりかのたんこぶの有無が気になってあっち見ちやうかがり。

「……響さんも、大変だったんですね」

「……ありがたいよ、りさ」

ちよつと疲れた系女子のりさがため息。

それに合わせてため息をひとつ。

「む、りさりんがなんだかひびきんと……まさか泥棒……」

こういう、話がごちゃごちゃになる感じっていうのは嫌いじゃない。

最初は困ってたけども、慣れてくればこういうものなんだって分かるし。

さすがは女子中学生、一瞬でも油断するとすぐに脱線してあさつての方向へぐにやぐにやと飛んでいっちゃうんだよね……。

「で、かがり」

「あ、たんこぶがちよつと」

「かがり」

「ええ！」

「……たいしたことではないんだけど、ついだから。かがり。君は、怒るときに……怒る……だろうけれど、そういうときにはどうなるのかって思つて。僕の予想としては……りさのように、ついつい熱が入ってしまう形のそれなんだけど」

だって僕のために2回も怒ってくれたさよとか、ゆりかの煽りで反応するりさって続いたんだ。

気になるじゃん？

ゆりかのそれはまだなんとなく想像できるからいいとして、かがりはなあ……。服のこと？

この子は怒りはしない、ただ修正しようとして迫ってくるだけってのは知ってるし。胸のこと？

……ゆりかに言われたりしても恥ずかし混じりの文句だけだし。つまりは彼女が怒る、イラツとするだろう原因を想像できないんだ。

だっってくるんだし。

「私が怒るとき……」

いつになく真剣な表情で考え込む。

真剣も考え込むも似つかわしくない表現。

「……………怒る、とき……………」

……雲行きが怪しくなってきた。

……いつの間にかりさたちも、じゃれ合うのを止めてかがりに注目している。

さよも見上げるようにして横から見ているし、僕だって横顔を見ている。

みんなが……初めて見るくらいには珍しい表情をしたかがりを、見ている。いつにない静寂。

いつもこうだったら楽なのについて思っちゃうくらいの、心地いい空間。

ここがファミレスの一角で、私服の女子中学生4人と……見た目小学生な、けどもストールで髪の毛を隠しているものの近くじゃ顔が見えるからって誰かが通りがかるたびにじつと見られる僕がいて。

そんなすみっこだって、つい忘れていたくらいに静かだ。

「……………あの。怒るのって……………ほんとうには……………ええと、ない……………かも、しれない、わ？　そうでしょ？　響ちゃん」

どうやら本気で心当たりがないらしく、かがりとは思えなくおろおろした声が返ってきた

かがりがそう言うのを聞いてみんなの気が抜ける雰囲気とともに、僕は思い出した。ああ……………この子はこういう子だったなって。

良くも悪くも空想の世界に浸る子なんだよね。

常識もあるし普通に会話もできてぱつと見は高校生か大学生。

……………でも中身は結構不思議系なんだって。

## 46. X9話 怒りと女性／女子 その3

「怒る……怒る。 怒るわよねえ、みんな」

僕が最初に会って最初に大変な思いをさせられたのは、かがり。

だからこの子のことはよく知っているんだ。

僕とは違う世界の、どこかずれた子だって。

「私が遊びすぎたときにはお母さんからうんと怒られるけれど、私がそうなることって……ええと、小さいころも『かがりさんはいつもお友だちとにこにこ楽しそうにしていていいですね』という評価ばかりだったから、たぶんそこまでケンカとかはしたことがなくて……私自身もそこまでは覚えていない……のかしら」

思考がただ漏れだ。

学校でこうじゃないってのはかなりの衝撃だよね。

「そうなのかしらね？ 響ちゃん」

「いや、僕に聞かれても……」

場が静まっている。

いや、鎮まっている。

みんながあっけにとられているんだ。  
そりやそうだ。

「……あ、あー。分かる、分かるよそれかがりん」  
そこでひとり再起動。

「ゆりかちゃん本当!?!」

「お、おう……まー、そんなところかなー」

「よかったわ、私ひとりではなくって!」

とても嬉しくなった反動で手を繋ごうとしたらしく、立ち上がろうとして腰のあたりがテーブルの角にぶつかり、コップをそのおなかで倒しそうになり。

「危ないですよ」ってさよに指摘されて一気にしよぼんとしながら腰を下ろすかがり。  
くるんもしよげている。

いつもの光景だ。

そんなかがりの反対側に顔を向けてみると……ゆりかとはつちり、目が合って。

……なんとなくて、本当は違うけれどかがりのために話を合わせているんだなって印象を受けた。

だってなんだかゆりかの表情、微妙だし。

となりに座っているりさりんが「やれやれ」って感じの優しい顔しているのを見るに、

「こういうことは割とあるらしい。

あのりさりんが。

ついさつきまでけっこうに怒っていた彼女が、いい顔しているからね。

うん。

この子、はしやぎすぎはするけれど空気っていうものには敏感なんだよね。

かがりとは正反対で。

「私もあんまムカつてくることないかなーって。あ、ひとつだけあった、最近のムカつ

ての。フレッシユなの」

「へー、ゆりかにねえ。どんなのよ?」

「あのね? ……私たち同志のこと煽るようにデカメロンとか抜かすヤツがいるとき

!!」

「……心配して損した」

デカメロン……うん、学生らしいメロンさんの呼び方だ。

「あー! りさりん優しい!! 愛してる!!! ついでにそのムネちよっと」

「うっさい」

「ひどい!」

抱きつこうとしてぺちつとはたかれたゆりかがさつきまでの元氣に戻っている。

「まー、そんなときつてさ？ 私はさっきのりさりんみたくはなんないけど、軽ーくイラつてしたらするのつて……枕ポカポカするくらいかな、私なら。や、アレすつごくいいんだよ、聞いて試して分かったけど。30秒もしないうちに叩き疲れるし、疲れてすつきりするし。んですつきりしたらデカメロンでムカついてた私バカみたいーとかなくておしまいだし。枕だから壊れるもんなんもないし？ あ、部屋中にホコリ飛ぶのだけが困るかなー、換気しなきゃね、くしゃみ止まなくなるし」

ふむ……確かにそういう発散の仕方は良いかも。

僕もそういうことがあったら……あ、あれ？

僕もイラつてする程度以上にはならない……？

「……ゆりかさん。その、デカメロン……ですか……？」

「あ、いんや。分からのならそれでいーのさ、純粹でいてくれいさよちんよ」

「?? あ……ゆりかさんはなぜ古典で怒っているのでしょうか……？ ゆりかさん、読まれて中の内容に……とかでしようか……？ ……すみません、私、概要も知らなくて。

今度読んでみて」

「あー、コイツバカだからいいのよ、さよさん」

マジメに反応しちやつたさよは、良くも悪くも純粹かつ素直らしい。

僕とは違って本当に病院な生活だったからまだあんまり分かんないのかもね。



「いえ……でも、知的体験をした上で強い感情を抱くのには興味が……」

「さ、さよちんステイ。 あ、マジで。 私も読んだことないから。 てゆるかなんかごめんよ？ 軽いジョークなのよ」

せつかくボケたのにボケが通じなくて逆に突っ込まれるっていう、なかなか珍しい光景。

ちなみにさつきからかがりはひとりつぶつぶ考えてる。

優しいみんなは聞こえないことにしてあげてる。

「……私、学校でも良く……せつかく話しかけてくれた人にこうしてズレた反応しか出なくて迷惑を……」

「さよちん。 ね、さよちん？ ……あ、そんな落ち込まないで、マジごめんホントごめん、今度お詫びにさよちんオススメの本とか読んで語り合おう？ ね??」

さよがいつになく悲しいっていう感情を全身で表していて、ゆりかが慌ててなだめてる。

りさはそれを見てなんか嬉しそうにして……そんなことはまったく意識に入らず、なんだか上を見上げながらぶつぶつ言っているかがりがその辺に居る。

「あ、そだ、りさりんさんやりさりんさんや？ さつき私のことバカって言ってたけどさ？ けどさあ?? そーんな、バ・カ♥に成績でいっつも負けてるの、どこの誰かにやー

ん?? ねえー???

「う、ぐっ……このっ！ 無駄に頭いいんだからっ！」

「ふふん、なんとも言うがよい。 うむうむ、次の試験がんばりましょーねー？ 教え  
たげるよー??！」

「あんた、それ以上調子乗るともういつかい」

「あだっ!? ……ひびきー、りさりんがぶったー！」

「ちよ、軽くじゃない!？」

「んむ」

ゆりかがいつもみたいに抱きついてきて僕の体は彼女の体重で傾く。

「怒る……イラツとする……ムカつく……あの、調べても似たような表現ばかり。 そ  
れって、どうしたら生まれるのかしら? ねえさよちゃん、私、不安になってきてしまっ  
たわ? どうしましょう……」

「……え、ええと……それは、いいんです。 その方がいいって、きつと……お母さんた  
ちも……なので、私だって別に、滅多には……」

「でも、響ちゃんのことと怒っていたじゃない、さよちゃん。 ねえ、どのような感じで  
怒りというのが湧いてくるのかしら?」

「……む、難しい、です……こう、おなかや胸から抑えようのない嫌な感情がと言う……」

？」

ゆりかのぼつつんが顔に当たるのを感じながら珍しく哲学的な話をしていっているか  
を見る僕。

この子たち……さつきまで静かになっていたのにもう騒がしくなっているし。  
けれども、この状態。

騒がしくてまとまりがなくなつて、姦しく周りで話しているのをすぐそばで聞いてい  
るつていうこの状態に慣れている僕を、改めて感じる。

つい去年まで、こういうのはいちばんに嫌っていたはずなのに……気がついたら静か  
すぎてもつまらないって感じるようになった、この空間。

この子たちと、いつかまた付き合うとしたら。

「……………」

僕はどうしても距離を置いて人を観察して決めつける習性があるけど、もうちよつと  
だけがんばろう。

そうしたらいつか、男に戻ってもこういう関係の友達とかが……できたらいいなつ  
て。

戻れなかったら相手は女の子になるんだから余計にがんばらないと。

うん。

あ、それに女の子だからっていちいち考えるクセも。

女の子に慣れてきた……む、なんだかいかがわしい……男の僕が男相手じゃなくて女の子相手に話すのに慣れてきたから、そろそろ性別でどうこうじゃなくて、その子のことを見ないとな。

この子たちだつてこんな僕のことを「僕」だつて見てくれたんだし。

「あーん、ひびきい、いつも通り黙りこくつてるうー」

「ちよ、ゆりか!? 響さんクツションから落ちちやうからあー!」

「あら見てさよちゃん、響ちゃんとゆりかちゃんが仲良しよ?」

「え、ええ……あ、響さんが」

傾いた視界。

どうやら僕はゆりかに押し潰されたらしい。

……やっぱり女の子つて、あいかわらずに僕とは随分と違うものを持つている。

だからきつとこれからも戸惑うことはあるし、これからも女性に囲まれるだろう未来には苦勞するんだらうけれども。

完全に溶け込むつていうのは結局に無理なんだろうとは薄々感じてはいるけども。

でも、どんな感じになるんだらうね。

ね。

未来の僕。

## 46・X10話 さよと本と感傷と その1—1

僕が外に出るって言ったら食材や日用品を買いか気晴らしの散歩。

それ以外には、ひとりで外に出るとしたら行き先は本屋くらいしかない。

悲しいけどもこれが僕。

幼女になろうとも変わらなかつた日常だ。

ざわざわがやがやとうるさい駅前。

僕よりもずっと背が高くなった人たちの……いや、僕が小さくなったからこそみんなが大きく見えて、余計に居心地の悪くなった繁華街。

けれども僕の家からこの体で歩ける範囲で行けるのはここくらいしかないんだからしょうがない。

……今日の僕は、フードで隠れていない。

ここ最近魔法さんのおかげで、いざとなったら都合よく切り抜けられるって知ってるから、もう隠れる必要もないし。

この1年……厳密には半年だけでも……いろいろと耐性がついたおかげか、いつの間にか人の視線がとつても気になるっていう状態じゃなくなっていて。

「前の僕じゃなくて今の僕が僕なんだ」って僕の意識や無意識の中で思うようになって  
いる……のかは分からないけれども、もう目立つ髪の毛と顔を隠す必要がないって思う  
ようになっていた。

本当に。

気がつかないうちに。

これが慣れなのか順応なのか、それとも諦めなのかは分からない。

だけでも僕はどうかやら、「銀髪幼女」としての今にそこそこ満足している。

お酒も呑めるし。

お酒も。

とつても大切なこと。

……あ、スカートと短パンとワンピースだけは未だにダメ。

ふとももや脚のつけ根がすーすー寒いし、いちいちこすれるから。

そのせいで性別が変わっているんだって、僕は女の子になつて……普段は  
結構忘れられるくらいなのにはつきり自覚させられるから。

それに比べて、20年以上慣れ親しんできたズボンの安心感はこの上ない。

女の子、女性はどうしてあんなお股の防御力が低くて風とか階段とかで危ないのが好  
きなんだろうね。



「……つかれた」

慣れているとは言っても、この体の体力の無さには困るもの。

たかが徒歩十数分だった距離……たしか1キロくらいだっけ……それを、なるべく疲れないように歩くと30分くらいはかかるようになってるし、駅前へ出るだけでへとへとになるんだから。

そうしてあちらこちらのベンチやソファのお世話になる。

男なとき考えられなかった、座って休むための設備。

旅行先で歩き疲れたときくらいしか縁が無かったそれが、今の僕は無意識にマツピングしているほどにはお世話になっている。

駅との往復だけでも2、3回は休むし。

悲しいことに。

だから雨の日は出歩かない。

出歩けない。

せいぜいが近所の散歩程度だ。



けども、今の僕は絶賛身辺整理中ってことで、もうすることもほとんどないし、1日中家の中で肉体労働という名の片付けの終盤の作業とか暇つぶしするくらいしかないし。

つまりはヒマしてるんだ。

僕がそうなるっての、この数年どころか10年以上でもなかなかない気がする。

……この数日はみんなも忙しいようだから話すのもほとんどない。

飛んでくるメッセージの量が減っているあたり、学生としての本分が試される期間に入っているんだろう。

定期試験。

大変だよね、学生って。

何かにつけて何かしら何でも良いから成績を付けたがられるんだもん。

卒業した僕は解放されてるけども、それだつて悪夢とかで試験直前に勉強してないとかなるし。

……トラウマになってるんだね、これ。

けどあの子たちだつてどうせ、試験の前日あたりからは現実逃避のためにばんばんチャット飛ばしてくるんだろうけども。

けども残念、今の僕は早寝なんだ。

だから飛んでくるピークの時間帯には僕はぐっすりなわけで、そこまでの負担じゃない。

ニートな僕は気楽だ。

これだからニートは止められないね……つと。

「ん」

いつものようにいちばん大きいビルのロビーの1階、上へ吹き抜けのその空間にたくさんあるふかふかのソファのうち、お気に入りなすみつのひとりだけが脚をぶらぶらさせつつのんびりしていたら、目に入ってくる見慣れた人の影。

あれは……さよ？

「くっくっ……」

……間違いない、私服だけでもあの前髪の長さっていうものはなかなかお目にかかれないものだし。

けれどもなんであの子がここに？

いや、居ちやいけないってわけじゃないんだけども。

他の子だってあんまり出歩かないだろうこの時期に、試験期間の前っていうびりびりした学生特有のあれなはずなのに、どうして？

あの子ならかがりみたいに試験ほっぴり出して買い物とかはしないだろうし。

それなら、あのかがりからの「お買い物に行きましよう!!」っていうお誘いすらないこの時期に……本当なんでだろ。

気になる。

何となく気になる。

と。

やっぱりあの子も入り口近くのイスに腰掛けてひと息ついている。

体、弱いはずだし……本当に大丈夫？

いや、あの子の成績には心配していないけども、それを得るための準備期間に支障がないかっていう意味で心配。

けど……ふむ。

今日の僕は珍しいことに暇。

そしてここにはさよしかいない。

あの子なら立ち話になっても短い立ち話で終わるから安心できる。

他の子みたいに「ちよつと甘いもの食べながら話さない?」「お話ししましょう響ちやん!!」ってならない子だし。

あの子が用事を終えるまで待って、それとなく声をかけて軽く……なんならここで座りながらちよつと話して帰ろ。

うん。

定期的に人恋しくなる季節が来る僕的にも、ちょうど人恋しくなる時期だし。ちよつと見てたけどさよがまだ動き出さない。

暇な僕は吹き抜けの真上を見上げる。

吹き抜けの高い天井までのそここにある装飾と広告が目に入る。

……いつから僕、たかが1週間とか程度話さないでいるだけで、こんなにもやつてするようになったんだろうね。

前なんて、いや、その前だつてそんなことはなかったのに。

この数年なんて月単位で誰とも話さないなんてのはザラだったのに。

口をきくのが1年で10分にも届かないなんてのは当たり前だったのに。

……慣れ。

良くも悪くもすごいんだな。



ふらふらと吸い込まれていったのは本屋。

まずは本屋に行くらしい。

さよのことだ、きつとそうだとは思っていたけども。

……あ、参考書とか？

それともお気に入りの作者の新刊とか？

電子書籍に慣れてはいるけど紙の本が好きって前に言ってた気がするし。

そんな僕はなんとなくでさよのあとを追ってみている。

けれど、これが意外と大変だ。

何が大変かって、バレないようにすることじゃない。

いや、彼女の用事が終わるまではそうしているつもりなのは確かなんだけど、それに加えてこんなにも背が低いもんだから、気をつけないとすぐにどこにいったのか分からなくなっちゃうっていうこと。

小さいもんね……しようがないよね、幼女だし。

小学生あたりまでの子供が親とはぐれて迷子になるあれがしみじみと分かる。

だってほんの少しでも彼女から目を離すと、もうどっちへ行つたのかが分からなくなるとも。

本棚が視界の仕切りになっていて物理的に見渡すつていうものがない。

見えなくなるたびに「次はここへ来るんだろうな」つていう当たりをつけていなければ見失っていたはず。

世の中はもつと少女に優しくなるべきだ。

なんとなく隠れながら追いかけるのが楽しくなってきた僕だけでも、さよは違うらしい。

お目当ての本棚の前でばらばらと本をめくり始めて……動かない。

下を向いているおかげで前髪が顔から少しだけ離れて、彼女の顔が見える。

いつもの、メガネがトレードマークで顔が白い……青ざめてる感じな彼女の顔が。

今の僕と同じように体が強くないってやつ。

りさりんみたいに健康的にほっぺが赤いわけでもなく、ゆりかみたいに子供みたいだから顔か赤いわけでもなく……かがりみたいにいつも感情MAXだから赤いわけでもなく、だ。

だから、こういうところでもこの子は僕に似ている。

あとメガネ属性も。

今の僕はメガネ必要ないけどね。

そのメガネもきつと、前髪と同じようになるべく人からの視線を避けたいっていう意識してか無意識でかの選択。

中学高校つてば、みんなちよつとでもかっこいい、かわいいって見られたいお年頃。だからがんばってコンタクトとかする子が多いって記憶してるし。

僕が中学の頃からは10年くらい経ってるけども、思春期の男女のああいうのはそう  
変わらないはず。

そんな彼女は……少しだけ笑顔。  
うん。

本が好きなんだね。

その気持ち、よく分かる。

インクの匂いのする空間の中。

人の歩く音がまばらにしかなくってほとんど会話が発生することのないこの空間で。

誰にも邪魔されずに、ただただ数え切れない本たちの表紙や背表紙を見て回ってどれ  
にしようかって考える時間。

おもしろそうなものがあつたら開いてみてから閉じて、あとで読むかどうか決めて  
……それを何十回も繰り返して。

そのうちに持ちきれなくなりそうになったら諦めてレジへ受け取りに行くんだ。

大切なもの、宝物を見つける楽しさっていうものが、僕にもよく分かる。

「……むう」

だけど、だからこそつまらない。

さよがひとりだけ楽しいことをしているのを見ているっていうのは。

……さよもすぐには終わらないだろうし、僕も何かを探そつと。

せつかく外に出たんだから何かしないと損した気分になるし。

あんまり離れちゃわないように、けれども僕に気がつかれないようにっていう距離感を保ちつつ僕は動き出した。

まだ家を離れるまでは少しだけあるんだ、ここで何冊か買ってもいいよね？

うん。

「……む」

今の僕は背が低いから、平積みされている本しか手に入れられないんだつたつてのを今思い出す。

それも買えるのは……腕の力的に多くて4冊。

それ以上は無理だ。

無理だった。

……子供の腕力って悲しいね。



## 46. X10話 さよと本と感傷と その1—2

さよに続いて本屋に入ってから少し。

「こそそと尾いていくついでに、いろいろと物色していく。」

「ふむ」

少し見ない内に品ぞろえがすっかり入れ替わっている。

「……そういえば、こうして本屋に来たのも半年ぶりくらい？」

だつて9月の始めて寝ちやつて、起きたら真冬で、そんなもつてあの年越しからの入院つてわけで……とつても忙しくつて。

だから、こうしてひとりで出かけること自体がほとんどなかつたんだし。

思えば相当に僕の主観では忙しい時間を過ごしてきたんだ、そりやあ当然にこうなる。

この数年間の平穩が嘘みたいな幼女生活。

そうしている内に良い感じの本が見つかる。

よし、積んでおいたあんまり目立たないここにさりげなく置いておいて、あとで戻つ

てこよう。

今の貧弱な僕の腕じゃ持てて3、4冊だもん。

力がなさ過ぎて小脇に抱えるつてのすらできないのが悲しい。

腕自体が短いつていうのもあるのかな？

どうなんだろう。

けど、本屋つて楽しい……あ。

そもそもさよをストーキングもとい観察していたんだつた。

あわてて彼女をちらつと見に行くけども、数歩移動してただけだつた……危なかつた。

けど、さよも相当な本好きなんだね。

ずっと本を見て回っているし、かなりの数をカゴに入れて歩いている。

女の子の腕力であればそろそろ厳しいんじゃないかつて感じ。

僕たちが本屋に入つてから結構経つ。

僕はすぐに疲れる体だから、本屋の正面にあるベンチで休んでは戻つてを繰り返しているけども、あの子はずつと立ちっぱなしで吟味しているんだもん。

これだけ眺めていられるつていうのは、下手すると前の僕よりも体力があるんじゃないかつて感じ。

いや、さすがにないか。

ないはず……たぶん。

……いや、年中ごろごろしてるニートとがんばって学校行ってる学生とじゃ、体力的に負けていた可能性すら……。

なんか落ち込んできた。

どうしよう。

落ち込んできたけども「僕もそれなりにいいものを見つけたし」って元気になる。

帰ったら……ん、もうお昼が近い。

朝ぶらつと出て来て、見つけたさよを観察しつつ本を巡って回って。

とっても有意義な時間だったけども、そろそろ頃合い。

目的がいつの間にか変わって本屋の中でうろうろしてただけで満足しちゃったし。

かなり疲れたし、軽く声でもかけて軽く話して帰る。

見つけた本を見せ合うくらいなら、さよも楽しんでくれるだろう。

そうして気分を紛らわせてから帰って本を読むんだ。

うん。

なら、まずは僕が見つけた本たちを……いい具合のところに積み上げておいた本たちを買っていこう。

……そうだ、手が小さいんだからカゴに入れなきやね。  
入り口だっかな。

◇

「?」

僕は目の前の光景が理解できない。

「??」

僕は固まる。

「……え?」

この棚のすみっこ、ちょうど凸凹しているところに今日の収穫を忍ばせておいたはずなのに。

ない。

ない?

何かがおかしい。

……積んでいた本たちが、僕が目立たないようにして積んでおいた、重くて持ち歩けないからって僕用に置いておいた、ここに、ない。

「あれ……」

結構雑に平積みされていたこのエリア。

さつき置きに来たときとは変わっちゃっていて、どの本もほとんど均等になっている。

さつきまではもつと凸凹していたのに。

……その凹なところに隠しておいたのに。

それが、ない。

ない。

ない。

なくなっちゃっている。

僕が置いておいた、見つけたはずの何冊もの本が、ない。

……店員さんに片づけられちゃった？

脚の力が抜ける感覚。

体力が少ないからこそ分かる絶望感。

……いや、僕が悪いんだ。

そもそも買うつもりがあるんだったらカゴに入れて歩き回ればよかっただけの話。なのに横着をしていい感じのところを見つけて置きっぱなしだったんだから。

横着せず取ってきたカゴに入れておけば「お客さんのなんだね」って、「買うつもりあるんだね」って思ってもらえたはずなんだ。

それに本って、普通の人は買っても1、2冊。

さらに、元々置いてあつた場所から離れておいてある本は……たとえ誰かがまとめて置いたって分かるようなものでも「きつと買わずに帰つたんだ……戻しに行かなきゃ行けないこつちの苦労考えてよ」って判断されるのが常識なんだろうから。

だから、僕が悪いんだ。

しょうがないんだ。

だって、本を置き去りにしたんだから。

子供と本は置き去りにしちゃ行けないんだ。

さよの様子を窺うのと本を選ぶのとで忙しくして、うろろうろして……置きっぱなしのままだったんだから、ここへ来るのを忘れていたんだから。

がつくりときた。

久しぶりの脱力感。

失敗したっていう、やるせなさ。

喪失感。

「はあ……」

僕はもうだめだ。

自然にため息が出る。

「……………」

……冷静に考えてみると大したことじゃないんだけども、なんだかすつごく落ち込むのが僕。

なんでこんなにもやもやするのは分からないけど、もしかしたらこれが女の子の体になつたから感情が出やすくなっている証なのかもしれないけど、それはもうどうでもいい感じ。

……集めていた本の大半は、大体どこにあつたか覚えてるし。

うん、そうだ。

悲しんでいる場合じゃない。

早く済ませないと、さよが帰っちゃうかも。

そうだ、最初の目的は彼女と軽く話すつていうことだったんだから。

うん、それならさっさともういちど回つて1冊でも多く救出してから買って、それから早くレジへ行つて、それで彼女と軽く話をするつて言う普通の人みたいな爽やかさで帰るんだ。

「……………あ……………あの……………」

そうだ、最初の1冊はここにあったからなんとなくてここに集め出したんだった。だつたらまずはこれをカゴに。

この調子で他の本も探しに行こう。

「あの、…………えつと…………ひ、響さん…………？」

「ん？」

記念すべき1冊目を手に取つたまま、僕は横からの気配を感じて振り向いて顔を上げる。

僕からするとほどよい距離…………1メートルくらい離れたところ。

顔が前髪とメガネで包まれていて、横へ垂らした髪の毛はおさげになっていて、ワンピースにカーディガンっていうこの時期としてはちよつと寒そうな格好をしている少女。

友池さよが両手でカバンのヒモを握りつつ…………よく見慣れたように、おどおどと立つっていた。

あれ？

なんでこの子がここに？

…………あ。

僕、けつこう長い時間ここでしょげていた？



そんなに？

それで、気がつかないうちに気がつかれちゃっていて？

さつきまでは逆だったのに。

え？

僕ってそこまでほんこつだったっけ？

「……やっぱり、響さん……でした……」

「あ、うん」

こういうとき、どうやって反応すれば良いか分からないのが僕。

「み、見間違いかって思った……んですけど、でも、響さん……みたいだったので……」

ゆつくりと近づいてきて、50センチくらいのところで止まってくれる。

そう、僕にとってもさよにとっても心地よい距離まで。

だって彼女と僕は、在り方がとっても似ているから。

だからなんか落ち着いてくる。

「おはようございませす……あ、ち、違いますね、もう……」

挨拶を間違えて落ち込んでるさよ。

うん、分かる。

僕たちみたいなのは会話の数が少ないもんだから間違えやすくて、で、帰ったらの

たうち回るんだよね……。

「……ここで会うだなんて、初めて、ですけど……響さんも本が、読むのが、好き、でした……なら、そう不思議なことでは。いつもこの駅で……お昼とかお茶とか、していますし、お休みの日に、響さんが……この本屋さんに来るのは、当たり前、ですよね……」  
全然用意していないタイミングで話しかけられると頭が動かない。

けどこの子はすつごくゆつくりしてるからだんだん気持ちが悪く落ちていく。

うん、こういう間が大切なんだ。

かがりとかゆりかとかりきとかみたいにいきなりテンションMAXで話しかけてこないありがたい。

彼女は軽く屈んできて、視線が近づくと前髪が少し開く感じになって、しかもメガネのフレームの上から見つめられる形になって、めったに見たことがないさよの裸眼が1対、僕の目と合う。

なんとなくそれが輝いている感じがする。

不思議な気持ち。

普段は髪の毛とメガネと距離とで隔てられているはずなのに、だけでも普段からよく顔を合わせているのね。

……でも僕、偶然とはいえこの子を見つけたからこそ観察しようと思ってここまで尾

けて来たのに。

キリのいいところで「偶然会ったね！」って爽やかな感じでさよに声をかけようとしていたのに。

……いつの間にか僕の方が本に夢中になっちゃっていて、立場が逆転している。

ああ、僕は何をやってるんだろ。

いつもいつも失敗ばかりして。

……それもこれも、このひ弱な体が悪いんだ……きつと。

うん、なんかこの体だと集中力が持たないって言うか周りがあんまり見えないっていうか……うん、背が低いし、しょうがない。

## 46. X11話 さよと本と感傷と その2—1

「あ……その。 外で声をかけたら迷惑……」

「……ううん、そんなことはないよ」

フリーズしてた僕のことを勘違いしたのか慌て出すさよ。

うん。

この子以外でこういう反応してくれる子って居ないからなんか斬新。

「あの……その、そちらの本は買ったかったものなので……あ、私がです……けれど、おこづかいとの兼ね合いで……本棚に戻したもので……なので」

気をつけないと聞き逃しちゃうくらい小さい声も、ちゃんと離れてくれているのも安心して幸せ。

ただ僕とこうして1対1で話すのはあんまりないからか、なんかもじもじしてるのを見るのもまた安心できる。

「とても興味深い内容、でしたけど……その、お値段が。 私には、その、金額が……良いなあ……」

ひっくり返して裏表紙を見る。

お値段、2千数百円。

確かに2千円を超える本っていうのは中高生には厳しいもの。

普通の本でも1500円を超えるとなんか一瞬手が止まるよね。

しかも彼女は鞆にぎっちり入るくらい買ってるから……1冊千円だとしても1万円は行っているはずだもん。

それだけでも、さよにとってはかなりの奮発っていうものだったんだろう。

けど電子でもなくわざわざ紙でそのくらい買うって相当に好きなんだね。

「……あつ、あのっ！……あう」

普段あんまり会話をしない、声を出さないからちよつとでも勢いが出るとおつきい声になっちゃうの、僕たちみたいな人間あるある。

「……もし……もし響さんがよろしければ……響さんのお買い物が終わったあとで……その、時間もいいですし、お、お昼、一緒に食べたたりしながら……あの、いえ、でもやっぱり……」

……やっぱりこそこそするのは僕には合わなかったみたい。

僕は嘘をつくのが致命的にダメなんだ。

そもそもいろいろあつて、いや、なくなつて元から嫌いっていうのと、これまでもこれからもさんさんにイヤな気持ちになつて、なり続けているっていうのと。

あとはそれを取り繕うとしようとするときらなる嘘で塗り固めないといけないうつていうのも……この1年で改めて分かったし。

別に今の、こつそりストリーキングしてたのは……む、なんか事案な言い回しだけど今の肉体的性別は同性だからセーフだよな。

つまりこんなことしないで、この子みたいに話しかけてたら楽だったんだろうなつて。

なんかゆりかみたいな悪戯心を覚えちゃったばかりに微妙に大変だったもん。



結局。

さよに話しかけられるままに、隠してもしようがないしつてことで。

僕が積んでおいた本を戻されたことを白状……自白……誘導……話す流れになって、それを探して回つて、そのあいだ選んだそれを持つてもらつちやつていて、それで本を買つて。

あんまりうるさくないところをふたりでうろろと探していて、僕たちがいても居心地が悪くなさそうなところに入つて……お昼のメニューを広げて見ていた。

その流れがかがりと違つて自然で、ゆりかやりさみたいにたくさん話しかけられるのか——って思わなくて、なんにも考えなかつた学生時代みたいにお店を選んで入つていた。

なんにも考えずにお互いになんとなくで話をしたり黙つたりしながら、ゆつくりとろうろとして。

……ちよつと懐かしい。

「……それにしても偶然、ですね。最近みなさん……試験の勉強で忙しくて、あの、なので……学校でしか、会わないので。響さんとも、何日も顔を合わせて……いないので、お久しぶり、に、なりますね」

「うん、さよも元気そうでなりよりだよ」

「はい、私も特に倒れることなく……大過なく、です。お互いに良い傾向、ですね」

「そうだね、試験で無理しないようにね……けど君たちは今、試験期間中だよな？ こうして出歩いていても平気なの？ ……あ、体のこともあるけども、勉強のこととかも」

試験期間。

解放されて長いけれど、悪い夢を見るときには直前なのに勉強していないだとか、点数が悪くて死んだはずの母さんに叱られている場面だとか……そういう何かとイヤな理由で僕の記憶の奥底からたびたび引つ張り出されてくる存在。

それに、この子たちはあと数年は苦しめられることになる。

僕と同じように、学生の……数年分かけることの数回分っていうその存在が。

さらに言えば受験とか。

嫌なことは過ぎれば忘れるってことで普段はこの通りに完璧に忘れてるけど、この子たちにとってはいつものこと。

「……勉強の方、は……試験期間に入る前に終わっているんで……あ、あとは復習だけ、なんです。私、無理をすると体調を崩して試験に出られない……ことが、あつたりもしたので、平均点を取れば良いって、お母さんたちも」

「試験期間前に……さすがだね、さよは」

「いつ、いえっ！」

すごいね。

僕の現役の頃だってひーひー言ってた気がするのに。

けどクラスでも女子は全体的にそつなくしてた印象だし、やっぱりその辺も男女で変わるのかな。

あ、でもかがりとか居るし関係ないか。

うん、関係ない。

だからきつと学校では……かがりに、相変わらずここまで違って本当にどうして仲が



いいのかっていうのが想像もできない、あのくるんくるんかがりに、学校でも放課後でも休日でも「勉強教えて」とか「試験範囲教えて」とか「プリント送って」とか言われているんだろうね。

友だちなんて理屈でなるもんじゃないっていうのは、この子たちに友だちと思ってもらって思い出したものなんだけど……不思議なものは不思議。

でも、元から仲が良い友達なんだつたら……勉強に対する姿勢だけでいいから、意識だけでいいから……自力で勉強できるようになれだなんて無茶なこととは言わないから、せめてこの子を見習って欲しいところ。

本場にそういう意識だけ……一ミリでもいいから、切に願う。

ほら、手のかかる子はかわいいって言うし。

……けども、どうしたって土壇場にならないとやる気が出ないってしか思えない僕が居る。

「……の。あ、あの、響、さん……？」

見上げると、さよが髪の毛のあいだから僕を見つめて来ていた。

「ん……ごめん、少し考えごとを。いつもの悪い癖だね」

「いえ、気にされなく、ても……私もよく、おはなしとかについていけなくて……なので」

さよもきつと、僕みたいに頭の中だけになって、外のことがなんにも入って来なくなるっていうのが多いんだろうな。

もちろん考えごととかで。

かがりのように妄想でもなく、ゆりかのようにテンションに支配されるわけでもなく。

りさは……そういうことがない気がする。

ああいうのを……リア充っていうんだっけ。

ギヤル？

いや、今どきは陽キャって言うんだっけ？

こういうちよつとした言葉で世代が分かっちゃうよね。

「……………」

会話してるはずなのにお互いに黙ってる時間の方が長い僕たち。

静寂。

こういう時間、女の子と一緒に居て存在するだなんて思わなかったけど、いざなってみると結構気が楽。

女の子がみんなこうだったら男も自然体で過ごせるのにね。

みんな、どうしていつもあれだけ口がくるくるくる回るんだろうね。

こうして頭の中でぐるぐる考えるのと話すのは、体力の浪費具合が全然違うのにな。

……さよってという生粋の女子とか僕みたいな偽物だけど肉体的には女の子でも、口が重いつてのはやっぱり性格……なんだろうなあ。

## 46. X11話 さよと本と感傷と その2—2

「悪かったね、さよ。 僕に分まで……取り分けておいた分を食べてくれて。 無理して食べ過ぎたりは」

「い、いえ……平気、です。 私、少食というわけでもないのです……」

「でもかがりに強奪されたりはしない？」

「い、いえ……あ、でもお弁当とか学食も、一口欲しいって……」

僕たちがようやくよくに頼んでお昼が来て、いつもかがりやゆりかにしているみたいにお皿を余分にもらつて、僕の分を半分くらいを取り分けてから食べ始めて。

いつもみたいに何も考えないで、すすつとさよに渡したらがんばつて食べてくれちゃった。

けども苦しそうにしているところを見るに、実は食べようと思えば食べられるタイプなのかもね。

「あつ、あの……今のは、無理をしてではなくて、その、本当ですつ。 響さんの頼んだお料理も……私の、も……少なめの量でした、し」

現役JCに気を遣われる現役JCを名乗る僕。

いつものだね。

「そうか、ならよかった。君は体の状態がいい方では無いんだし無理をさせたのかと思っただけでも」

「はい、腹……9分目、くらい、ですのぞ」

「……それはけっこう食べたということじゃないか？」

「あ、は、はい……でも食べ過ぎ……ではない、ですから」

「そうか。ならいいんだ」

見た感じ苦しそうってわけでもないし……もしかしたら9分目ってのはこの子なり  
の冗談なのかもしれない。

意外とお茶目なところあったりする？

ほら、僕みたいに圧力皆無な相手なら話しやすくって素が出るとか。

「あの……やっぱり、まだご飯の量……取るのが難しい、ですか……？」

「ううん。僕は、この見た目通りの体だからね。食べる必要がもともと少ないんだ

よ。元気……だったときからずっと、ね」

男のときだって男にしては少食だったし、普通の量食べると食後眠くなったりするから受け付けなかったし。

そういう意味ではこの体もある程度前の感覚で居られる気がする。

まあさすがにお子様ランチでちょうど良いお腹って考えると凹むけど。

「そうですね、背も低くて……あ、ごめんなさいっ」

「いや、別に気にはしてないよ」

「で、でも、私、つい……」

む、この感じちよつとネガってる？

僕が良く「今の答え方で傷つけちゃったんじゃないかな……」ってなるから分かる感じの表情してるし。

「……僕たちは病気と病院に縁のある仲だよね」

「え、ええ……」

「じゃあ僕たち、他の人たちとは違ってあんまり気を遣いすぎても疲れるんじゃないかな。だからむしろ、どれだけ悪いのかって自慢するくらいでいいよ。病人同士なんてそんなものだし」

聞きかじったけれども実際にそうらしい話で押し切っておく。

「入院している人同士ってそうなんだ」ってマリアさんも言っていたし。

僕は個室って言う贅沢してたから知らないけども。

あ、でも中庭でぼーっとしていると話しかけて来る人たちとの最初の話題ってお互いの病気についてだったりしたっけ。

「……そう、ですな。私、いつも言われる、のに……こうやってネガティブになるというのは、体にもよくない……って」

そんなことを考えていたら、なんだか暗い話へと転がっていつている気がする。

これはよくない。

ご飯を食べているときには、とにかく楽しくなくちやいけないんだ。

そうじゃないとご飯がまずくなっちゃう。

こういうのって感情で左右されるものだから。

別の話題……楽しい話題、どっかにないかな。

……そう言えば、普段は話すことってみんなから振られる。

かがりは気がつかずに頭の中から浮かんできたあれこれを場の流れや僕たちの意志に関係なく叩きつけてくるし、ゆりかやりさもとめどなく話しかけて来はするけども話題を気ままずくならないようにさりげなく動かすのが上手だし。

考えてみたら僕からっていうのはほとんど……無い……？

僕の方が年上なのにな？

……相手が女の子っていうのを抜きにしても、僕がいかに対人関係に弱いのが分かる。

うつむいちゃっているさよ。

その手前のテーブルにはお皿が下げられちゃって飲みものしかなくて、他にはお互いの荷物くらいしか無いし。

む、荷物……ああそうだ、そもそも僕たちはそのためだったんじゃないか。

「……そういえば君の鞆は重そうだけれども、それは先ほどの本屋で手に入れた本だけで？」

「は……はい、そうなんです。少し買いすぎて……」

ここに来るまでもときどきふらふらしていたのを見逃してない。

重いと体の制御が難しくなるよね、分かるー。

この体になって皆さんの経験済みだもん。

「し、試験までまだ数日ありますけれど、もう復習以外にすることがなにもないですし。

み、みなさんは忙しいみたいで放課後のお誘いとかもなくなって……時間が余って、

ですの……奮発して、買えるだけ買ってしまいました」

「タイトルとか、教えてもらっても？」

「もちろんですっ」

急に元気な声になって……心なしか話し方もつつかえるのが減りつつ、引き寄せた鞆をもどかしそうに開けている。

……本当に好きなんだね、本が。



その気持ちはよく分かる。

無意識だろうけども少しだけ口が嬉しそうに曲がっていて、すき間から見える目も輝いている様子。

これでさっきの微妙な空気が飛んでくれて良かった。

僕もやればできるんだね。

「えつと……ちよつと待っていてください、今すぐに……」

「うん。……あ、カバーとは言っても新品の本が汚れるのは嫌だろうし、手に持って見せてくれるだけで……」

……うん。

さよの動きが普段になくきびきびとしている。

まるでいつもの、かがりの後ろで遠慮がちにしているっていう方が別人って思えるくらいに。

やっぱり好きなことって元気になるよね。

「はいっ、ありがとうございますっ……それでですね響さん、今日買ったのは文庫と実用書の……ちよつと5冊ずつですね」

声も元気になってるし、なんならメガネと前髪越しの目も輝いてるかもしれない。

そして話すスピードが上がり始めている。

「それと雑誌などと、少しジャンル分けの難しいものをいくつかと……それも今日は欲しいだけ買うと決めていたので……少し高かったですけど、それでも満足したので、帰ってからじっくり読みたいって……」

この子も。

この子もこの先、あの子たちと一緒に学校で学生生活っていうものを送っていく内に自信もついてきて、普段からこうして話せるようになって。

で、いずれは……体育以外は優等生になるんだらうから委員長とか、そういうものにさえなったりも……他の子の推薦とかでなりそう。

委員長つぼい見た目だし。

「響さんっ」

僕の方に身を乗り出すようにして本を突き出してよく見えるようにしてくれながら、その本のどこに惹かれたのかを教えてくれるさよ。

その髪の毛のあいだからは眉も上がって見開いて光っている瞳と笑顔になっている口元が……楽しいものを話しているときの女の子というものになっているのがうかがえる。

いつもこんな感じになって……恥ずかしがり薄れて前髪を短くしたら、きつと男女問わずに好かれる子になる。

「……なるほどね。 僕も以前それを読んだけどおもしろい内容だったよ」

「やっぱりっ……私、これをいちばんに読みたいなって……」

……僕がその姿を見ることはできないかもしれないっていうのが残念ではあるけども。

でも、いいんだ。

この子たちが……僕の友だちになってくれた子たちが、そうして楽しく過ごしてくれさえすれば。

## 46. X12話 さよと本と感傷と その3

「んぐ……あ、ところでさよ」

ふたりで黙々と……これもまた他人と、この子たちと食べる中ではものすごく珍しい……つていうか多分初めてだろう、静かに味わって食べるというものをして僕は満足した。

だから勢い余って彼女が頼むのに合わせ、僕らしくもなくビター系のデザートを頼んでほおばっていたんだ。

「どうかしましたか……？ ……あ、あの、それは確かデザートの」

「うん、それは知っているけれども、聞きたいことがあったのを思いだしたんだ」

それをさよにじーつと観察されていたのはこれまでの経験で慣れきっているからいいんだけれど、食べていたら思い出したんだ。

……こうして食べているのを見られてるだけで食べ残しを催促されているって感じなのって、すっごく貴重な気がする……。

「聞きたい……こと？ ……はいっ、いいです……なんでもっ。準備はできています

から……っ」

何でこの子こんなに食い気味なの？

なんか本でひととおり盛り上がってからの子のテンションがおかしい。

と言うか準備とかじゃなくて、ただ聞きたいだけだけどね？

けども何でこの子はここまで僕のことを凝視してくるのか。

軽く顔が赤くなる程度に気合いを入れているらしい。

今でもいまいちこの子の反応が分からないけれど……ま、いいか、いつものことだし。

それよりも僕の口が、甘さ控えめなこれを……数口でもう受け付けなくなってきたのが残念。

コーヒーと合わせても……やっぱり甘さっていうものは僕の味覚には合わないらしい。

……いつになく食べちゃったし、これが夕飯になりそうだな。

実にエコな体だ。

夜はお酒だけで充分なんだしな。

「……それじゃ、遠慮なく。 さよ、君は朝からずっと本屋にいた……らしいけども」

尾けていたけども。

見ていたけども。

この目で、ばつちりと。

「聞けば、体がまだまだ本調子ではないから学校では欠席や早退、保健室の多いというけども……試験前の大事な時期に出歩いてもいいの？ それも、ずつと立ちっぱなし……だったって聞いたけど」

さつきの会話でこの子から聞き出したから嘘じゃない。

「……あ。 え、つと……そつちのこと、でした、か……」

「？ そつち？ ……他になにかあったか？」

「い、いいえっ、なんでもないんですっ」

なんだか慌てだしてそつぽを向いてメガネを外してふきふきしているさよ。

動揺しているみたいけども……心当たりがない。

けど、そういうのは他人と接していればよくあることだもんな。

かがりの反応とかかがりの思いつきとかかがりののしかかりとか。

「それで……その。 実は、こうして……私が、すっ——……すき、なことをする日にはですね。 ……お家を出る前に、多めにお薬、飲んで……ですね。 なので、ふだんよりも楽に……学校よりも、ですの、それで大丈夫、です」

……それってば無理してるんじゃないの？

薬って、そう簡単に増やしていいものじゃないはずだけど？

「君の医師や家族の人は怒ったりはしないのか？」

「はい……その。多めのお薬は、いつもはダメ、あ、辛いときは良いって……ですけれど、副作用、とかもあるんですけど。こうして楽しいこと……私なら、本屋さんを見て回るというもので……楽しむだけ楽しんで、免疫を活性化、して。そういう、精神的な満足の方が、大切……だと言われている、ので」

「……なるほど、ね」

確かに病は気からって言うし、医学的に証明されてるらしいね。

あれだ、つまりはお医者さんがとりあえずで「ストレスを減らしましょう」って言うあれのこと。

だから僕にとってお酒を呑まないって言うストレスを減らすためにお酒を呑むのはセーフなんだ。

「また……入院することになり、なっても。それまでに、たくさんのしたいことをして……楽しんでおけば。希望……もっとしたいって、持てます、し。……なによりもお外に出るだけで体力もつくからって……」

「……君は、偉いね」

何も不自由なく生きてきた僕みたいなのは違って大変なはずなのに。

「え、……そつ、そんなことはありませんっ。それよりも、響さんの方が余程頑張って

……」

こういうときにも僕の嘘がちくちく刺さってくる。

僕が病気だつていう嘘。

けども今さら変えることはできないし、白状したところで僕だけが楽になつてみんなを混乱させるだけだ。

だから僕はみんなには、必要なことしか言わないつて決めたんじやないか。

僕が勝手に、僕のやらかしたことのせいで感じて感じて痛みを覚えているだけなんだから。

これが、きつと罰。

懺悔つてのは本人にじやなくつて、全く関係ないどこかにすべきなんだ。

「……本屋での物色を朝からにでもして、お昼も外で食べたりして。というのが、君が楽しめる、君がひとりでも過ごすときの休日つてこと？」

「あ……はい。そう、なります……ね」

なんか僕がぶらつて外に出る日と似てるね。

「……でも、まだ体が大丈夫そうとき……こうしてレストランやカフェに寄つて、飲みものを片手に買つてきたばかりの本を読み、ます。……それでも平気なときには、さらに、下条さ……かがりさん、のを見せてくれた雑誌に載っている服を見たり……します。



いつか、それを着て……たくさん出歩けますように、つて」  
似てなかった。

あ、いや、幼女になってからはたまーにそういう日もあるけども。

「……けども……服については、かがりと出かけたらず買わされるんじゃないか？

ほら、君は放課後とか少しだけなら彼女とつて聞いたし。……少なくとも僕が彼女に

呼び出されるときはそうなんだけど……いつも」

「え。……いえ。そんなことは、ない、です。 おすすめと試着は、させられますけ

ど……」

「……そう……どっちにしても」

「は、はい……嫌では、無いんですけど……」

「……………」

「……………」

沈黙が答え。

……なまじ本気で嫌じゃなくって、ただただあの子がうるさくてめんどくさいってだけなののが的確。

「……でつ、でもつ。でも、本、だけでなくて、ひとりで服も……見て回る、というのもですつ。かがりさん、とお知り合いになる前には考えもしなかった、ので……新鮮

で、楽しいんですつ」

「……そういうものか」

うん……まあね。

あの子に頼まなかったら、多分通販で必要な分しか買わなかっただろうし。

「はいっ。……響さん、は、どう、なんですか……う？」

「僕か？ ……そうだね」

あの子に絡まれたせいで、家の中は幼女な服まみれになった。

けども、それを着て家の中で過ごしているとなんとなく楽しいのも事実。

「……生活用品以外に興味らしいものはないし、大半のものは……家が用意するんだ。

だから僕は、せいぜいが本屋に寄って新刊などを見て回って。僕も君と同じように

かがりの影響か、最近は服も見たりすることもあつて。けども君とは違ってこのとお

りに食欲がないものだから、食べたりはしないでそのまま帰る方が多いね。カフェ

だつて……ほら、この通りの見た目で、何かと不都合だからね。うん、親を探される

から」

「あつ……ま、まだまだ成長期のはず、ですから……つ」

服だつてマネキン一式から流行りまでを意識して、お店の人に尋ねたりして……ひとりのときにはワンシーズンまとめてじゃなくて、ちよこちよこ買うようにはなった。

この見た目に合うようなものを。

……女物を。

もちろんズボンやシャツっていういつものも揃えるけども、でも。

……うん、しようがないことなんだ。

だってかがりの前で、彼女基準で「ダサイ」ものを着ているとずるずると服のフロアへと連れ込まれるっていう苦い経験を幾度となく味わったからなんだ。

確かにおしゃれな服は楽しいけども、それは男だつて同じはず。

決して女装趣味が華開いたとかじゃない。

よし。

「私と、同じ……あ、いえ、なんでも、ない……です」

「?」 そうか」

なんだか少し顔を伏せていた彼女は、おもむろに視線を合わせてきて。

「……ところで、あの、響さん。 響さんさえよろしければ……私はまだ大丈夫、ですけ

ど、響さんのお体も良いの、でしたら。 ……買った本、一緒に読みません、か……?」

少しだけでも……ええと、お家の中でひとりとは……また、違いますから……」

一緒に、か。

そうだね。

お互いに今日はヒマなんだ。

「うん。たまにはそういうものもいいよね。お互いに疲れないし、なによりもお宝を手に入れてきたばかりなんだ。1、2時間程度なら……楽しむう」

「本当ですかっ」

「うん。……君はどれを読むつもり？ 僕は——」

彼女なら読んでいる途中で遮ったりはしてこないだろうし、別の話題を唐突に振ってきたりもしない。

きつと……例えるなら学校の図書室で同じテーブルで向き合つて本を読む、そんな感じになる。

……こうして外に出てきたのも、ちよつとだけだけど人恋しかったからなんだし。

うん。

——こういう午後も、悪くはないよね。

## 46. X13話(終) 苦手と好きと

僕は、気がついたら周りを囲まれていた。

……人波に。

人の大波に。

つまり僕は逃げ遅れたということだ。

せつかく早くに買い物に出てきたっていうのに、つつい本とか小物を見ちゃつていたからだな、きつと。

いや、そもそも少しだけ出るのが遅れたせいかな。

どっちか分からないけども……だからお昼の食材を買いに来たスーパーが、こんなにも人の波になっているんだ。

……子供が多い空間は嫌だ。

彼らには、身長的に顔を見られやすいからかじーつと見られることが多いし、話しかけて来る子も多め。

「ねー、何でこの子髪の毛白いのー？」とかわざわざ大声でいろいろと……いろいろと親

に尋ねたりする始末だし。

白じやない、銀なんだ。

あ、いや、別に白髪つてのも綺麗らしいけども。

さらにはお年寄りにも話しかけられやすくて、つまりはとつても嫌な時間帯。

それに加えていつものようにみんなの背丈で視界が限定されちゃうもんだから、先が

見通せない。

だから。

僕はレジのある方向を……ダメだ、もう列ができちやつているから見えない。

これだから小さい体は……つて今、そんなこと言つてもしょうがない。

なら賭けになるんだけれども……しょうがない。

嫌だけど、運に任せるしかないんだ。

今日の、この時間帯のシフトならある程度覚えているからこそだったのになあ。

……家を出る時間、もつと早めに……アラームでもセットしておいた方がいいかもなあ。

◇

「……まあまあ、今日もおひとりでおつかいなね？ えらいわねー、いつもいつも！ 今日学校はどうだったの？ 楽しかったのかしら？」

「……ええ、まあ、そこそこに……」

このくらいの子供と見たら、まず学校の話題。  
知ってる。

「けどお駄賃におかしくらい買ったらいいのにねえ。えらいわねー、ムダ遣いしなくって！ うちの子なんか、買い物頼むだけでもイヤな顔して……」

僕が買ったものを、買いたいものを手に持ったまま話しかけて来るおばちゃん店員さん。

僕はそれを早く「びっ」てしてほしただけなのに。

僕は、ハズレの中のハズレの人を引いちやっただ。

列の前のほうに来た時点で知っていたけれど、もういちど長い列を並び直す気力がなかったから諦めちやっただ僕も悪い。

けども……話が。

話が全然に終わらないんだよなあ、こういう人は。

「それにしてもねえ、週の半分以上は買い物に来ているんですって？ 食材の！ まあ

！ ほんとうにお母さん想いで……」

終わらない。

どうでもいい……っていうか前にもしていたようなことを繰り返して語りかけてくる。

こういう、子供相手に店員の人がちよつと話しているっていう光景はたいして珍しくもないから、後ろで待っている人もただぼーつとして待っているだけ。

こういうときにこそ「早くしてくれよ」ってオーラで撃退してほしいのに、後ろからは僕の髪の毛を見下ろしている第六感だけ。

……魔法さんに頼れば普通の男として扱ってくれるはずではあるけども……あれは、正しい意味で洗脳っていうものでもないな。

必要がないんだったら使わない方がいいと思う。

少なくとも僕はそういうのはあんまり好きじゃないし。

それにどうせ、世の中の大半の女性は今の僕を見るや否やこうなるんだから。

うん、諦めているから平気。

平気なんだ。





さて。

時刻はこの前よりも大分早い。

家も早く出たし、寄り道も道草もしなかったからお店の中はガラガラだ。

この前の反省を活かしたな。

よし。

これなら普通に買い物をして混みはしない。

だからレジの人の顔が分かる。

人の背中で遮られないから、きつと大丈夫。

◇

「……………」

「……………」

カゴの中からひとつひとつをがさがさと取り出して「ぴつ」てやって、別のカゴへと入れていく作業を眺める。

もちろん見上げて。

首が痛い。

髪の毛の重力が後頭部に集中する。

「……………」

特に値段とかを言うわけでもなく淡々とバーコードで読み取っていただくだけ。

見上げる僕もレジの女の人も、お互いに無言。

最初の「お願いします」「はい」だけ。

うん。

快適。

やっぱりいいものだよね、こういう声のしない静寂って。

女性だからとひとくくりにするっていうのは間違いなんだって、ここでも改めてこういう性格の人たちが証明してくれているんだ。

子供に見えるからって言ってもくだけた口調で話しかけてきたりなんかしなくって。

歳や学校や今日のことを聞いてきたりもしなくて、顔をのぞき込んできて感想をいちいち大げさに言ってきたりもしない。

大人と同じように普通の対応、普通の言葉遣いでごく普通の「人」として扱ってくれるんだ。

ああ、なんてうれしいんだ。

たったのそれだけのことが、こんなにも。

……体感だけでも男、男性の多く……お年寄りとは別だけでも……と女性の2、3割くらいは、こういう人たち。

僕にとつて安心できるような人たち。

子供だからと言つて明らかに周りとは違う見た目だからと言つて、過度に反応してきたりしない人たちだ。

……残りはいつと、良くて普通の子供扱い……もちろん小学生の。

顔をのぞき込んできて性別とか出身とかまでを聞いてきたりするからなあ……初対面、それもお店の人なのに。

まあ、さすがにこういうスーパーとかせいぜいカジュアルなお店止まりだろうけども。

うん、そうだ。

やつぱり僕は、どうしたつて中身がごく普通で特に注目もされない男のままなんだ。

男つていう意識が抜けないままなんだ。

あの人たちだつて、何も悪気があるわけじゃない。

ただただ普通に子供を相手にして盛り上がっちゃうだけなんだ。

だから僕がそれに対応しちゃうえば、楽に過ごせるはず。

……もし。

僕にとつてありがたいような、今みたいなのが、もし。

……かがりにコーデイナートされた格好の僕、しかもこれまたかがりから押し付けられたリボンなんかをつけた状態で来たとしたら、どうなるんだろう。

そう、悪魔のささやきが降ってきた。

「お会計は……」

「……………」

……なるべく男っぽい格好をしておきたいっていう本能と、知的好奇心っていう本能とがせめぎ合う。



僕は負けた。

負けたんだ。

だからいかにもな、かわいい服に興味がある感じの母娘……の内の「娘」が来ていそうな格好で出て来ちゃった。

やっぱりいちばんの人気はワンピースらしく、それは特に女性の方が好きらしくつ

て。

その上に軽く羽織って首に巻いたり帽子をつけたりして、なるべくリボンが多くつて白と赤かピンクが多めの服装を作り上げるのが理想らしい。

あとは小物をたくさん。

以上、かがり情報より。

そして、そんな格好の僕。

当然に、いつもみたい髪に髪の毛も顔も隠していないから、歩いていてふとガラスに映った僕自身を見てびくつてなるくらいの見え目になっている。

慣れてもやっぱりびくびくするものはびくびくする。

……やっぱり恥ずかしい。

想像はついていた。

こうなるって分かっていた。

だけでもやめられなかったんだ。

だつて気になったから。

それに恥ずかしいって言ったって、人に注目されるからっていう理由だし。

だからこうしてそんなに頻繁には来ないスーパールに出向いてきて……僕に過剰に反応しない店員の人の顔を知っているとこころに来ているんだ。

……ここまで来ちゃった以上には、さっさと確かめて帰ろう。

大丈夫、ここはそこまで来ないんだ。

だから失敗して貴重な「いい人」を失ったとしても、大丈夫なんだ。

「はい、お次の方どう……ぞ……」

いつも手元しか見ないはずのレジの……大学生くらいの女の子。

表情筋の動かなさがお気に入りの彼女は、びつくりした顔で僕を見ている。

……普段の僕のこととは覚えていないだろうし、そもそもとしてこんなに派手な格好をした子供なんてスーパードンカには来ないだろうからびつくりするのは想定済み。

服装も見た目も派手派手だもんね。

……その人はしばらく僕を見たあと、はつとしたように……気がついたら汗もかいていて、慌ててレジの作業を始めた。

「……………」

「……………」

お互いに無言。

これはいつもどおりだ。

よし、まずはいい、と。

じゃあ。

「……よ、410円、です」

「ん、と。 お金。 この中の、どれです……?」

ここで、存分に練習してきた演技をお披露目。

わざと幼い声を出しながら、心持ち舌つ足らずにして他人にお披露目。

微妙にイントネーション変えて外国の子っぽい感じにしてみる。

「……………」

「……………」

「……え、あ、はいっ! ……し、失礼します……こちらを4枚とこちらを1枚、です……」

何かのキャラクターがプリントされているがま口……今日のために用意した、お値段100円のやつだ……それから小銭を出して両方の手のひらの上に載せて持ち上げるようにして見せる僕。

それを、おそろおそろって感じにすくい上げてくれている。

……手が震えている。

顔が赤くなっている。

その子が。

僕と目が合うと、女性は顔が赤くなるらしい。

よく分からないけども、あのかがりできえ最初はそうだったんだ、そういうものだって思っておこう。

と、終わりそうだ。

なら、さらに追い打ちを。

「……分かり、ました。ありがとうございます、ました」

そんな感じの外国人風。

これはマリアさんに聞いておいた感じに。

「……!! ……いい、いいえつ、ありがとうございます……」

◇

なるほど。

あの人の反応を見て、さらにあの後に二言三言交わしたときにさらに幼い感じに、ほんの軽い会話を試みたけれど。

このリボンは「お姉ちゃん」につけてもらったんだとか。

でも結局は僕が苦手な感じの対応っていうのはしてこなくて、ごく普通の、店員の人とお客さんの世間話っていう程度。



そこから深入りとか子供扱いもしてこなかった。

快適だった。

なんか勝った気がする。

何にだろうね。

でも、女性の過半数が……いくら僕のことを徹底的に外国から来た小さな女の子扱いしてくるからといって、みんながみんな、あのかがりみたいなものだとは考えちゃいけないんだよな。

うん。

そんなことを思いながらいつも通りにベンチで座って足を休めていたら、通る人のほとんどみんなと視線が合っていたのに気がついて、足元に視線を落とす。

……だけでもこうして女の子な格好で出歩いて、さつきみたいな演技をしたりしても、もはや……最初の頃に比べたら、ほとんどつて言ってもいいくらいに恥ずかしくもなんともなくなっているって僕自身。

……僕はもう、この。

——「銀髪幼女」っていう見た目に、順応しちやっただらうか。

いや。

きつと、とつくにだったんだらうな。

だつて僕はこれから数日後のお別れの日には電話をして、僕のことをきちんと人に伝え  
て、「未来」へ向かうんだから――。